Koji ruien

BINDING INSTRUCTIONS FROM

CATALOGUE DEPT.

Bind	front cover in	
	back cover in	
	both covers in	

Mend ✓

神宮司廳藏版

古事類苑

宗教部四

古事類苑刊行會

古事類苑

宗教部第四册目錄

宗教部五十五

佛教五十五

宗教部五十六

佛教五十六

宗教部五十七

佛教五十七

宗教部五十八
佛教五十八

寶相寺
妙蓮寺
光長寺
大興寺 三神寺併入 以下伊豆國
修禪寺
國淸寺
妙法華寺
實成寺
善光寺 以下甲斐國
慧林寺
向嶽寺
萬福寺
萬福寺
大泉寺

宗教部六十

佛教六十

宗教部六十二

佛教六十二

那古寺 以下安房國

妙本寺

清澄寺

誕生寺

神野寺 以下上總國

妙光寺

鷲山寺

正法寺

東漸寺 以下下總國

總寧寺

法華經寺

弘法寺

佛教六十四

宗教部六十七

佛教六十七

宗敎部六十八

佛敎六十八

耶蘇教下

古事類苑

宗教部五十五

佛教五十五

宗教部五十六

佛教五十六

宗教部五十七

佛教五十七

宗教部五十八

佛教五十八

宗教部五十九

佛教五十九

宗教部六十一

佛教六十一

宗教部六十三

佛教六十三

宗教部六十四

佛教六十四

宗教部六十五

佛教六十五

宗教部六十六

佛教六十六

宗教部六十七

佛教六十七

宗教部六十八

佛教六十八

最御崎寺　一〇四四

宗教部六十九

佛教六十九

宗教部七十

耶蘇教上

宗教部七十一

耶蘇教中

宗教部七十二

耶蘇教下

古事類苑

宗教部五十五

佛教五十五

金剛寺

名勝所在

金剛寺ハ、河内國錦部郡天野山ニ在リ、承安中、僧阿觀ノ開基ニシテ、鳥羽天皇ノ皇女暲子内親王ノ祈願所タリ、後、後村上天皇ノ皇居ト爲リ、寺中今尙ホ其遺蹟ヲ存ス、宗派ハ眞言宗ニ屬セリ、

〔國花萬葉記河内四〕天野山金剛寺　寺領三百七石　開基行基菩薩其後弘法大師經行の靈場、禪定仙院〇鳥羽勅願の所也、本尊は丈六の大日如來、脇士は不動降三世の靈尊、みな檀作也、

〔河内名所圖會錦部郡一〕天野山金剛寺三寶院天野にあり、眞言宗、

創建沿革

〔金剛寺文書二〕金剛寺本願阿觀上人門跡寺務相論大概事

六條局法名覺阿云、夫當寺者、承安之暦、阿觀上人草創也、而源右馬允貞弘、爲八條院〇鳥羽皇女二條御母暲子内親王御祈禱料、去治承四年八月日、撰寺邊四至、限永代寄進當寺三寶畢、爾然、輙致國衙妨之間、依故大貳局法名淨覺秘計、去建久二年甲戌、宣旨院宣國司廳宣、八條院廳御下文等、而令停止國衙之妨畢、以其由緒、故阿觀上人、去建久八年七月一日、譲當寺於淨覺事之子細、載于上人自筆之譲狀、〇中略去承元元年十一月十四日、本願入滅之刻、覺阿禪尼爲致寺務、企奸謀、同二年八月八日、相語於源右馬允貞弘之末葉源三眞實、補任天野谷下司職、偸取出安置御影堂之宣旨院宣國司廳宣、八條院廳御下文、御室廳御下文以下數通證文之條、希代未曾有惡行也、仍一寺衆徒蜂起、一味同心訴申本所御室廳之處、

○以下闕文

〔金剛寺文書二〕阿觀上人事

和泉國大鳥郡大和氏貞平之息、保延二年丙辰誕生、幼稚登高野山、後依別願移住當寺、承安二年辛卯、高倉院始行御影供、治承二年戊戌、建立金堂、安德天皇養和元年辛丑、始行傳法會、承元元年十一月十四日、七十二歲、

〔金剛寺文書二〕左辨官下河内國

應任院廳下文國司廳宣狀、免除當國金剛寺四至内田畠山野等所當官物幷臨時雜事、兼禁斷殺生、令大法師阿觀門跡相傳領掌事、

右得彼寺住僧等去七月八日奏狀偁、謹檢案内、當寺者、建立以後、年曆久移、靈効遙被遐邇、歸依昔及尊卑、況乎去治承年中、寄進八條院御祈願所、鎭勤不退之御願、奉祈無窮之仙算、行業不退、薰修彌積、而立錐地非寺領之間、佛聖燈油僧以無其用途之上、寄事於左右、國衙使動亂入、仍止住侶歎而渉年、適勤事狀言上、院廳相觸國宰之處、任申請成賜御下文幷國司廳宣、○中略　兼又以僧阿觀門跡、可令相傳領掌之由、欲被下宣、望請鴻恩、任申請被宣下者、奉祈增長寶壽之御願、彌廻興隆佛法之勝計者、權中納言藤原朝臣兼光宣、奉勅依請者、國宜承知、依宣行之、

左大史小槻宿禰（隆職）在判

建久二年十月十六日

右少辨藤原朝臣在判

〔金剛寺文書二〕當寺事、頃年以來、覺阿房濫妨之間、寺僧不安堵、修學共及廢絕云々、仍度々被仰大泰禰厄、被停止彼口入了、於今者、院主職已下事、觸申廳底、可令進止之由、所被成遣御下文也、子略又被仰含御使都維那兼快畢、以此等之趣宜被進行寺家者、依御氣色執達如件、

十月　日　　法眼（花押）

堂塔

金剛寺法佛房

〔河内名所圖會 一 錦部郡〕天野山金剛寺三寶院（天野にあり、眞言宗、僧舍七十餘所、）

金堂　大日如來（弘法大師の作、長八尺、脇士、左不動明王、右降三世明王、同作、長各五尺五寸、）　食堂　文殊菩薩（運慶の作、長二尺五寸、寶頭盧尊者作、堂内に安す、同作、長貮尺五寸、此堂内、延元年中、後村上帝行宮としたまふ、）　多寶塔　大日如來（春日佛師の作、塔中四面の鐵板雲龍の畫は、狩野大炊助全信の筆なり、）　藥師堂（上段の地にあり、本尊藥師佛は、行基菩薩の作、長五尺、日光、月光、十二將神を安す、）　求聞持堂（西の方上段の地にあり、本尊虚空菩薩は、弘法大師の作なり、此堂内女人結界所、）　五佛堂（藥師堂の北にあり、三寶院と號す、五智如來を安す、春日の作なり、堂内に東照大神君の尊影を安置し奉る、）　閼伽井（五佛堂の奥にあり、弘法大師加持水なり、靈泉甘美、）

觀月亭（五佛堂の北にあり、後村上院、月見の御殿なり、今に廣敬風の御殿遺り也、又五佛堂より廊下あり、弘法大師の影を安す、眞如法親王の筆なり、脇士不動尊、愛染明王は、運慶の作、俗に御影堂といふ、西堂金輪佛頂尊の像は、眞享年中、桂昌院殿の御寄附なり、）　護摩堂（御影堂の北にあり、本尊不動尊、脇士大日、藥師共に行基の作、灌頂堂の本尊とす、）　開山塔（阿觀僧正覺心法印の廟塔なり、）　持明院法皇塔（開山塔の上にあり、人王九十六代の帝光嚴院諡し奉る、）

寺格

〔金剛寺文書 四〕當寺爲勅願寺、宜專佛法之紹隆、奉新皇統之長久之由、所被仰下也、悉之以狀、

延元二年十月一日　權中納言 花押

金剛寺衆徒中

寺領

〔金剛寺文書 七〕當寺領參百七石事、申付候上者、全寺納不可有相違狀如件、

天正十一　九月朔日　秀吉 花押

金剛寺三綱

寺制

〔金剛寺文書 二〕定金剛寺條々置文事、

一不可專本宗交他宗事

右眞言秘敎、卽身成佛之徑路、諸敎最頂之秘術、故偏仰高祖遺記、不可違失者也、

一可禁制入峯修行事

右修驗行者、專斗藪行、輕住山緣、故不和合之事定出來歟、仍制止之者也、

一不ㇾ可ㇾ非寺僧ㇾ住ㇾ持坊舍ㇾ事

右非寺僧ㇾ領坊室ㇾ者、定寺家衰微、異類繁昌者歟、尤任ㇾ東寺例ㇾ堅可ㇾ守ㇾ此旨ㇾ者也、

一不ㇾ可ㇾ若衆無理打ㇾ諸坊ㇾ事

右金剛寺之內、自今以後、不ㇾ可ㇾ大衆發向ㇾ但於ㇾ兒女沙汰ㇾ者、衆ㇾ上仰ㇾ可ㇾ發向ㇾ也、

一可ㇾ令ㇾ兒童安ㇾ置諸坊ㇾ事

右兒童者、佛家之柱石僧徒之壽命也、尊守ㇾ東寺先蹤ㇾ可ㇾ致ㇾ其沙汰ㇾ者也、

右所ㇾ定ㇾ置之狀如ㇾ件

建久二年六月一日　　金剛資阿觀花押

雜載

〔太平記三十四〕和田楠軍評定事附諸卿分散事

此頃吉野ノ新帝ハ、河內天野ト云處ヲ皇居ニテ、御座有ケレバ、楠左馬頭正儀、和田和泉守正武二人、天野殿ニ參ジテ奏聞シケルハ、畠山入道道誓、東八箇國ノ勢ヲ卒シテ、二十萬騎、已ニ京都ニ著テ候ナル、〇中略 但今ノ皇居ハ、餘リニアサマナル處ニテ候ヘバ、金剛山ノ奧、觀心寺ト申候處ヘ、御座ヲ移シ進セ候テ、正儀、正武等ハ、和泉河內ノ勢ヲ相伴ヒ、千劒屋金剛山ニ引籠リ、龍山、石川ノ邊ニ、懸出々々日々夜々ニ相戰ヒ、〇中略 御運ヲ一時ニ可ㇾ開、是庶幾スル處ノ合戰也ト、事モナゲニゾ申シケル、

〔南山巡狩錄九〕後村上院河內國錦織郡天野山金剛寺を皇居とす、諸史より推考するに、去年今年の間行幸と見ゆれど、其證詳ならず、姑く疑を存す、

正平九年甲午　北朝文和三年

觀心寺

名稱所在

觀心寺ハ、河內國錦部郡檜尾山ニ在リ、原ト雲心寺ト云フ、僧空海修練ノ舊跡ニシテ、其弟子實惠之ヲ繼ギシ所ナリ、背後ノ山上ニ後村上天皇ノ陵アリ、域內ニ楠正成ノ首塚アリ、二重ノ塔ト共ニ世ニ著名ナリ、眞言宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會 七十五河內〕觀心寺　號檜尾山（○中略）開基役行者、造營弘法大師、（○中略）坊舍四十六坊、護摩堂鬭伽井等不悉記、

〔河內名所圖會 一錦部郡〕檜尾山觀心寺（觀心寺村にあり、眞言宗、）

創建

〔觀心寺緣起實錄帳〕寺壹院　在河內國錦部石川兩郡南山中

合山地千五百町、錦部郡以□山中一千町、（地名仁深野）

四至（東限横峯、南限小月見谷、西限紀伊道川井公田、北限龍泉北井石川郡界、）

石川郡以南山中五百町（地名東坂野）

四至（東限國見峰、南限上瀧、西限□岑、北限石川家弁堺、）

承和三年閏三月十三日　官符

右當寺者、先師和尙（○空海）經行之伽藍、北斗七星降臨之靈山也、峯聳八葉、自表華藏蓮刹、谷行四方、更摸月國達池、遙阻都下腥羶之堺地、獨爲寰中神異之山嶽、僅入厥堺、三密觀念易成、暫住斯地、一印頓證云朗、改雲心寺、號觀心寺、良以有所以哉、勝地絕妙、蓋以如斯、然則弘仁天長聖主、貴吾寺神秀、定御願道場、暨承和時、始被下山地勅施之官符、以爲當寺之永格、寔是皇道濳衞之伽藍、上乘秘密之精舍也、後世末資等宜承知此旨、抽朝家安全之精祈、專佛法紹隆之計略者、仍勘錄緣起如件、

一本尊事、先師和尙大阿闍梨耶、爲一刻三禮之美功、並勇猛懇丹之至精所造作之尊容也、（○中略）

右勘錄大槪如件

承和四年三月三日　眞雅

實惠

〔元亨釋書慧解三〕釋實慧、姓佐伯氏、讃州人、初事大安寺泰基、學唯識、後從弘法大師、稟兩部密法、法稱告曰、我法之興、汝之力也、付以東寺、天長四年建河內州觀心寺、〇下略

〔觀心寺勘錄緣起資財帳〕觀心寺勘錄緣起資財帳事

合　寺壹院、在河內國錦部郡以南山中、

一　敷地拾伍町許　四至　東限大尾瀧　西限小口口谷　南限□□　北限龍泉寺山

承和三年閏三月十三日官符

右寺起首、自去天長二年、歲次丙午故少僧都法眼和尙位眞紹、居住件山、所建立也、卽去承和三年四月三日、民部省下河內國符偁、太政官同年三月十三日符偁、得傳燈住位僧眞紹解偁、已居住件地、歷十餘年、聊建道場、號觀心寺、望請殊賜件地、永爲寺地、謹請處分者、被權中納言從三位兼行左兵衛督藤原朝臣良房宣偁、奉勅依請者、省宜承知、依宜行之者、國宜承知、依件行之、符到奉行者、加之去貞觀十一年歲次己丑六月十三日、治部省符偁、被太政官去五月廿五日符偁、少僧都法眼和尙位眞紹奏狀偁、故少僧都傳燈大法師位實惠、奉爲國家所建立也、太政官去承和十年十一月十四日、下河內國符偁、被大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣偁、以當國守充件寺別當、若遷授以斤充之、立爲恒例者、今件伽藍、僧徒寔繁、轉經之音、少間未絕、眞紹守先師之遺跡、念興隆之久遠、望請爲定額寺、傳之万代、上獻陰功於聖朝、下遂本願於先師、長口秘密之燈遠爲國家之鎭、但不經僧綱講師管領、師資相承、門徒相存、謹奏聞、中納言兼左近衛大將從三位行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依宜者、省宜承知、依宜行之者、國宜承知、依件行之、符到奉行者、仍註錄緣起如件、〇中略以前資財帳實錄勘造如件、

元慶七年歲次癸卯九月十五日

都維那傳燈住位僧觀智〇中略

寺主傳燈住位僧慶晟

俗別當國守從五位上藤原朝臣
勸造財帳使傳燈大法師位智嚴
權職相共勸造傳燈大法師位鑒叡
判叡僧正宗叡

〔觀心寺文書二〕金剛佛子一品儀同三司覺空、敬白河州觀心精舍住持三寶、北斗七星、訶梨帝母等、護法善神、殊高祖大師、檜尾和尙大阿闍梨耶靈而言、佛子倩思當寺之因起、寔爲我道之甲區、本尊護法靈異之驗、歷世未衰、大師先德經行之迹、依舊以存、就中檜尾和尙留墳墓於此地、巡禮之處、渴仰銘肝、昔大師附屬曰、吾道興然、此大德信力也、以眞言爲本宗、以顯敎爲遠敎、他有毀靑、自存融通、人師國寶之本、豈企此大德哉者、然乃高祖門徒誰直歸敬、方今當寺之爲體、伽藍寂寥、人法蕭索、若夫天下靜謐、御願圓滿、與法之計、得時成就者、須奏聞公家、專紹隆寺之爲寺、依有法門也、苟無法門者、人法隨滅、自然之道理、不可成疑也、紹隆之本意、偏可先修學並、所盈廟之安全、可資祖師之報恩、其會式及年料等配當、且勒別紙、擇吉日啓白如玆、伏願三寶護法大師先德感應道交成大願、敬白

正平三年八月廿二日　　金剛佛子一品儀同三司覺空

○按ズルニ、覺空ハ、北畠親房ノ法號ナリ、

堂塔

〔河內名所圖會一錦部郡〕檜尾山觀心寺觀心寺村にあり、眞言宗、本尊七星如意輪觀世音弘法大師作、長一尺八寸許、脇士不動尊、愛染明王倶に同作、二層塔大日、阿閦、寶生、彌陀、釋迦の五佛を安す、初は楠正成の建立なり、鎌倉勢高越後守師泰が、石川河原に陣を取て、楠を攻て圍みし時、軍勢共塔の九輪を下して、銚子に鑄させ佛像を打碎きて薪とせし事、太平記に見えたり、それより今に於て假塔の藁葺層樣なり、○中略、實惠上人廟金堂の東上方にあり、諡道興大師、俗姓は佐伯氏、讃州の人なり、空海に隨ひ、兩部密法を稟て、天長四年觀心寺を建營す、後山を檜尾といふ、故に檜尾僧都とも號す、承和十四年十一月十三日寂す、年六十三、元亨釋書に見えたり、○中略、楠正成首塚實惠廟の東にあり、延元元年五月廿五日、攝州湊川に於て戰死す、賊將其忠義を賞して、首を楠家に送る、因てこゝに葬る、土俗首塚と呼ぶ、

〔集古文集二綸旨〕後村上院綸旨河內國錦部郡觀心寺藏

寺領用途

當寺社壇回祿事奏聞之處、槍靈場既壞、及炎上、社壇神體、猶令存火中之條、威驗之至、叡感殊甚、早勵土木之功、宜專締草之叢者、天氣如此、悉之以狀、

興國五年六月三日　大藏卿花押

觀心寺々僧等中

〔觀心寺文書一〕廳宣　留守所

早可令停止觀心寺所領山内并東坂庄檢田功物臨時雜役等事

右如傳聞者、件御寺者、弘法高祖建立、實惠住持之道場、於所領庄園者限四至等、被申請官省符之處也、全國司不可領知之上、宜依春宮大夫殿〇待賢門院父藤原公實仰、永令停止檢田功物臨時雜事等、舉國宜承知、依件行之、敢不可違失之狀、所宣如件、以宣、

長治二年十月　日

守津守宿禰御判

〔觀心寺文書一〕下　留守所

可令早免除觀心寺領雜事等事

右件寺、本官省符之上、可爲一院〇鳥羽美福門院〇藤原得子御祈願所由、去天養元年被成下廳御下文畢、野宮役可免除之由、所被宣下也者、件役非一事、自今以後、可被停止万雜事等之狀、所仰如件、留守所宜承知、依件行之、以下、

仁平二年八月十七日

散位高橋朝臣御判

〔觀心寺文書一〕河内國觀心寺地頭職所被付寺家也、可存其旨者、天氣如此、悉之以狀、

元弘三年六月二十九日　式部少輔花押〇岡崎範國

觀心寺々僧中

〔觀心寺文書一〕寄進

河內國觀心寺々用護摩供料事

右當寺者、高野大師練行之道場、檜尾僧正止住之靈地、相思往事、仰信不少、仍每年寄附三千疋之用途、雖爲輕微之供料、所表祈請之志願也、爲後證勤狀如件、

興國四年四月十五日　中務少輔藤原朝臣昌胤（花押）

〔集古文書三給旨〕後村上天皇綸旨（河內國錦部郡觀心寺藏）

觀心寺內陣常燈、爲永代不朽勅願所被始置也、以紀伊國正稅、無懈怠可致沙汰之由、被仰國司了、早可令下知寺家給者、依天氣言上如件、時長頓首誠恐謹言、

正平十五年四月八日　修理亮菅時長（奉）

進上東寺長者僧正御房

〔和漢三才圖會七十五河內〕錦部郡（神社佛閣名所）

觀心寺（○中略）寺領二十五石、

參詣

〔後宇多院御幸記〕正和二年七月上旬之頃、急速催仙蹕於上卿、不日遣勅使於南山、其時院宣云、取意、來月六日御進發、同八日御登山、一七箇日可有御參籠云々、（○中略）翌十七日（○八月）河內國觀心寺御幸、御一宿ト云々、此寺者一條院御願也、故任先例成御幸云々、觀心寺、龍禪寺、高貴寺、等壹寺、御巡禮畢、

創設

〔三代實錄七淸和〕貞觀五年九月六日乙未、以山城國愛宕郡道場一院預於定額、賜名禪林寺、先是、律師傳燈大法師位眞紹申牒偁、（○中略）至心發願、奉爲聖皇、（○仁明）奉造毘盧遮那佛及四方佛像、奉報聖恩、護持國家、而每事闕短、資具未備、唯採材木、未始鏤刻、爰逮于齊衡元年、於河內國觀心山寺、謹奉造、三年之間、其功旣畢、竊慮山中寂寞、住持難久、至于後代、恐有頹毀、事須近移京華之邊埀、令易後代之修治、

名稱
所在
用途

爰買故從五位下藤原朝臣園雄東山家、卽使爲寺家、造立一堂、安置五佛、

石凝寺
山崎院

石凝寺及ビ山崎院ハ僧行基ノ嘗テ修行セシ所ナルヲ以テ、光仁天皇寶龜四年、寺田ヲ施入シ給ヒシ事アリ、今並ニ廢寺ニシテ、石凝寺ハ河內國錦部郡錦部村ニ、山崎院ハ同國茨田郡三矢村ニ、其舊地ヲ存セリ、

〔河內志二錦部郡〕古蹟　廢石凝寺在錦部村、

〔河內志十茨田郡〕古蹟　山崎院址在三矢村、僧正行基建、寶龜四年十一月、施入當郡田二町、天皇元年秋七月、將軍吹負已定倭地、自三道至于山前屯河南、卽此、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年十一月辛卯、勅、故大僧正行基法師、戒行具足、智德兼備、先代之所推仰、後生以爲耳目、其修行之院、總卌餘處、或先朝之日、有施入田、或本有田園、供養得濟、但其六院未預施例、由茲法藏湮廢、無復住持之徒、精舍荒涼、空餘坐禪之跡、弘道由人、實合獎勵、宜大和國菩提、登美、生馬、河內國石凝、和泉國高渚五院、各捨當郡田三町、河內國山埼院二町、所冀眞筌秘典、永洽東流、金輪寶位、恒齊北極、風雨順時、年穀豐稔、

叡福寺

叡福寺ハ、俗ニ上太子ト云フ、河內國石川郡太子村ニ在リ、聖德太子ト其母后及ビ妃トヲ葬リシ所ニシテ、世ニ御廟山ト云ヒ、又三骨一廟ノ靈墓トモ云フ、當寺ハ卽チ其追薦ノ爲ニ建

立セシ所ナリ、古義眞言宗ニ屬ス、

名所所在

〔國花萬葉記河内四〕上之太子　科長山叡福寺、御墓山と稱す、太子の御母后と、太子と御后と、三骨一廟なり、

〔河内名所圖會石川郡二〕磯長山叡福寺聖靈院太子村にあり、眞言宗古義、一名石川寺、轉法輪寺、磯長寺、御廟寺、或は上の太子と稱す、

〔河内志石川郡三〕叡福寺山號ニ科長、又呼ニ御墓山、因有ニ厩戸皇子墓也、墓上建ニ小堂、遶以石欄、又有ニ殿堂三宇、及寶塔鐘樓伽藍神祖師堂力士門僧舍七宇、

創建沿革

〔河内名所圖會石川郡二〕磯長山叡福寺聖靈院、中略　夫當山の草創は、中略　此御墓山を建させ給ふ時、詔して、守戸の僧坊十宇、方六町の境地を宛たまふ、其後七堂伽藍を建營し、若干の寺產を寄たまふ、寺を叡福寺と號し、推古帝より後宇多院まで、四十代の帝、代々臨幸の車駕をめぐらし、役優婆塞も、普門石を立て、行法練修し、弘法大師も一百日の參籠ありて、結界石を建らる、奇石の碑銘、瑪瑙の靈文、賴朝塔、政子墳、良觀、願蓮二師の墓、不動石、閼伽井等、其外名蹟多し、

〔延喜式諸陵二十一〕磯長墓、橘豐日天皇之皇太子、名云ニ聖德、在ニ河內國石川郡、兆域東西三町、南北二町、守戶三烟、

〔日本書紀推古二十二〕二十九年二月、癸巳、半夜厩戶豐聰耳皇子命薨ニ于斑鳩宮、中略　是月、葬ニ上宮太子於磯長陵、下略

堂塔

〔河内名所圖會石川郡二〕磯長山叡福寺聖靈院、中略

御墓山上段の地にあり、中央皇太子の御母穴穗部の間人皇后、東の方皇太子、西の方太子の妃膳臣の女、三石棺を藏む、中略

結界石御墓山の廻りにあり、弘法大師觀音のせ字を鐫じ、凡て四百九十體建て給ふ、年歲累りて朽缺しぬれば、近年享保年中、四方より寄附して、同じく石刻に淨土三部を鐫し、又圍りの外側に、界石を建る、因云、此御墓山に、三の不思議あり、いにしへより大雨の節も、土少しも壞れず、又松杉竹の類生ぜず、諸鳥此林に棲ず、是權者の驗ならんか、

金堂本尊如意輪觀世音、鳥佛師作、長三尺、脇士愛染不動、四天王を安ず、俱に弘法大師作、

多寶堂金堂の西南にあり、東面釋迦三尊佛、西面金剛界大日如來、四柱に四天王の像を安す、

聖靈院（金堂の西北にあり、聖徳太子十六歳植髪等身の尊像、長五尺一寸、御父用明天皇御悩の時、太子赤衣の上に、御袈裟をかけ、柄香爐を携へ、神明佛陀に御不豫平安を御祈誓ましますの尊像なり、これを孝養の御影と號す、）

上御殿（廟上段の地にあり、太子三十五歳の尊影、これは太子御在世の時、大和國橘宮に於て、勝鬘經講讚し給ふ御相なり、此堂の再興は、元祿元年、高木主水といふ人、寄附せられし也、其外聖靈殿、二天門、鐘樓等も倶に再興に逢ふ、）

淨土堂（廟所にあり、本尊は彌陀三尊を安す、弘法大師神下山高貴寺に於て、一夏安居し、一百日來聞持の法を修し、日々に當山へ一歩一禮して拜參し給ふ、第九十九夜に當つて、御廟に音樂聞え、阿彌陀佛の三尊來迎し給ふ、これを拜寫して作らせ給ふ尊像なり、太子の御母公と、皇太子と、御妃と、三聖の御本地佛なり、）

〔園太曆〕貞和四年二月三日、傳聞、○中略太子御廟、又師泰率軍兵欲追捕、太子御體破損歟、廟中砂金已下有之、悉捜取、言語道斷事云々、

〔本朝高僧傳〕六十三淨律紀州高野山沙門良永傳

釋良永、字賢俊、姓宗氏、對州刺史之子、○中略永見河州叡福寺佛塔毀廢、爲之修治、植信勇進、不日而成、是又依戒德也、正保四年遘病而逝、壽六十三、臘三十六、

寺領

〔集古文書〕二十九下知狀建德二年下知狀河内國石川郡上太子藏

太子御廟領保六町、并飛鳥庄以下人夫等事、如元々被停止催足候也、可令存知其旨之由所候也、仍執達如件、

建德二

四月十四日　　代昭花押

太子僧坊所御中

參詣

〔後宇多院御幸記〕正和二年七月上旬之頃、忽速催仙蹕於上都、不日遣勅使於南山、其時院宣云、取意、來月六日御進發、同八日御登山、一七箇日可有御參籠云々、○中略十八日、○八月磯長御廟御幸、諸衆裏頭義也、凡構山水飾御所、於此所奉御膳云々、子細略之、則拜三骨一廟之靈墓、以催十善數遍之感

懷御、自其夕日御膳以後、四天王寺御幸、

妙見寺

妙見寺ハ、河内國石川郡春日村ニ在リ、光仁天皇ノ寶龜年間、寺封二百三十戸ヲ施入セシガ、平城天皇ノ大同三年、勅シテ百戸ヲ減ジ、之ヲ穀倉院ニ納メシメ給フ、爾來漸ク退轉シテ、德川幕府時代ニハ、僅ニ一字ヲ存スルニ過ギザリキ、

名稱 所在

〔和漢三才圖會 七十五河内〕石川郡 神社佛閣名所

天白山妙見寺 在春日村、木像與長谷寺觀音同木、背有御璽、今唯一字有、

〔河内志 三石川郡〕佛刹

妙見寺 在春日村、有石碑、勅曰、飛鳥淨御原朝廷(天武)己丑年十二月廿五日、其餘磨滅不完、又有古瓦一片、銘曰、延曆三年歲次甲子朔癸酉、參議從四位下陸奧國按察使鎭守副將軍勳四等紀氏諱廣純之女吉繼墓誌、佐備村亦有此寺、

寺領

〔續日本紀 三十四光仁〕寶龜八年八月癸巳、上野國群馬郡戸五十烟、美作國勝田郡五十烟、捨妙見寺、

〔新抄格勅符抄 寺封〕妙現寺二百卅戸 百戸返納、依大同三年九月十六日勅府、寶龜十一年施常陸五十戸、近江卅戸、讚岐五十戸、上野五十戸、美作五十戸、

〔日本後紀 十七平城〕大同三年九月乙未、勅、權入食封、限立令條、比年所行、甚違先典、其招提寺封五十戸、覚陵寺五十戸、妙見寺一百戸、神通寺廿戸、宜且納穀倉院、

雜載

〔古京遺文〕紀吉繼墓志

維延曆三年歲次甲子朔癸酉丁酉、參議從四位下陸奧國按察使兼守鎭守副將軍勳四等紀氏諱廣純之女吉繼墓志、

河内國石川郡妙見寺、有一丘陵、土人呼爲茶臼山、往年出此墓志、志瓦造、堅緻如唐製澄泥古硏、上下二片、片各厚三寸餘、一片刻志、一片爲蓋、今藏在本寺、按延曆三年正月癸酉朔丁酉廿五日也、然

不₂言₁正月、直₂書朔癸酉₁、別₂爲₁一例、廣純卿官銜、皆與₂史₁合、

龍泉寺

龍泉寺ハ、河内國石川郡龍泉寺村ニ在リ、傳ヘテ蘇我馬子ノ創建ニシテ、僧空海ノ再造スル所ナリト云フ、今古義眞言宗ノ一本山タリ、

名勝所在

〔河内名所記一〕龍泉寺　ふもとより上たばこ出る

蘇我大臣の本願、古へより此所龍池あり、惡龍住て災をなせしにより、大臣池のそこを見る事七日七夜、其時龍王人のかたちをげんじ、大臣の誓願たつとし、我佛法にかつべきやと、則もとのかたちになり飛びさりぬ、それより水渇してから池と成、其かたはらに寺院建立有、其後大師加持したまふ時、本の龍法味をかんじ、此池に歸り、清水を出し、其流れ今にたえず、本堂南むき藥師如來、牛頭天王の宮有、又池大小四ツ有、此内大の池中に島三ツ有、中は辨才天、右は聖天、左はだてん也、小三ツの内にそこのしれぬ龍池有、又東龍穴一ツ有、石のふたして有、大ひでりの折、此所而雨をいのりて、石のいたをのけぬれば、俄に雨ふるとぞ、坊數廿五軒、二王門在、二王有、弘法御作、龍泉寺と書たる額は、東寺の長者大覺寺の筆也、三番あり　龍泉寺の内、中山寺馬頭觀音座像、御長九寸五分、

咲花に歌も吟ずや龍泉寺　則武

夕立の雲や吟ずる龍泉寺　惟貞

〔全國各宗本山明細帳〕眞言宗　本山

龍泉寺　河内國石川郡龍泉寺

創建沿革

〔河内名所圖會二石川郡〕牛頭山龍泉寺醫王院　龍泉寺村にあり、古義眞言宗、

本尊藥師佛（聖德太子御作、長壹尺五寸、日光月光十二神將を安す、）　毘沙門天（本堂に安す、龍泉寺城守護の尊天なり、）　鎭守成古神社（今牛頭天王と稱す、本堂の後にあり、延喜式内、例祭九月九日、當村と甘南備村との生土神也、）　不動尊（本堂に安す、弘法大師の作、長壹尺五寸許、）　韋駄天祠（本堂の後四方にあり、）

辨財天祠（西の方池中に鎭座す、祈雨の時感驗あり、）

それ此寺は、推古天皇二年蘇我馬子大臣、勅を受て、こゝに佛宇を營んとす、然るに惡龍池中に接んで人民を惱す、馬子神呪を誦じける事一七ヶ日、惡龍威驗に恐れて此地を飛去る、此時水涸る、事十餘町、帝こゝに梵刹を建て、十二願主を架して、群類を利せんとす、厥後次第に水脈乏しく、護する人なく、空く荒廢す、弘仁十四年正月八日、弘法大師こゝに來り、伽藍の荒蕪を嘆き、善女龍王を祭又辨財天を勸請し、龍池を埋めて精舍を再營し給ふ於玆淳和帝勅して、正三位中納言冬緒卿を奉行とし、勅願寺となりぬ、自爾密風域内に潤ふて、再び宗儀繁榮す、善女辨天の橋の邊には龍燈かゞやき、寶算萬歲を祈り、日々に六種の供をまし、甲乙を二塔に告て、月々に兩部の法を修す、水は肥て甘露の味をまし、鳥は馴て密呪を誦す堂塔山門鎭守神祠寶庫には、大師書造の經疏佛像多し、子院廿五宇に逮べり、今に大師の古蹟を御住坊といふ影堂あり、眞如法親王此室ををとづれ給ひしかば、

かくばかり達磨をしれる君なれば陀多謁堂まではいたる也けり　弘法大師

一盤石あり、靈水常に其上に涌上る、其下に八角の井筒あり、大師八龍に標して、手づからこれを作り給ふ、旱天に雨を禱るに驗あり、ある時當山の本尊に、黃門定家卿立願ありし時、

十あまり二ツのちかひきよくしてみがける玉のひかりをぞしる　定家卿

右當山の寺記は、むかしより傳りて、眞筆は正三位貴顯卿、畫は中務權大輔康珍朝臣とぞ云傳へ侍る、

○按ズルニ、前文所載ノ弘法大師ノ歌、袋草紙四ニ在リテ、陀多謁堂ヲたゝきやたニ作レリ、

名勝所在

[illegible]

西琳寺

西琳寺ハ、原ト向原寺、又ハ古市寺ト云フ、蘇我稻目ノ建立セシ所ナリ、初メ欽明天皇十三年、百濟ヨリ佛像ヲ獻ズルヤ、天皇之ヲ稻目ニ賜フ、稻目乃チ向原ノ宅ヲ捨テ、寺ト爲ス、卽チ本寺ニシテ、實ニ本朝寺院ノ權輿タリ、本尊ハ不動明王、降三世明王ノ像ニシテ、僧空海ノ作ナリト云フ、又安阿彌ノ作、十一面觀音像、菅原道眞ノ作、地藏菩薩像、百濟王ノ獻ゼシ閻浮檀金ノ十一面觀音像等アリ、今慶寺ニシテ、舊地ハ河內國古市郡古市村ニ在リ、

〔伊呂波字類抄 左 諸寺〕西琳寺 在河內國古市郡、字古○市○寺○、

〔同 不 諸寺〕古市寺 在河內國大島郡、等定住、此寺之由載日本紀在之、

〔河內志 四 古市郡〕西琳寺 在古市村、有弘安四年太政官符、云、欽明[illegible]之御願、[illegible]陀靈[illegible]之仁銅也、又藏興國年中國宣數章、弘安應永年間將軍家願文、文永中建記等、界內有龍泉及明星水、倶清泉、

〔古京遺文〕船首王後墓版

右銅版墓志、藏在河內國古市郡古市村西琳寺、

〔河內名所記 二〕西琳寺

向原寺、改號西琳寺、百濟國之聖明王赤栴檀之釋迦像 毘首羯磨作 閻浮檀金十一面觀音 并 經卷佛舍利等、初日本渡之、獻欽明帝、天皇勅蘇我稻目令守護之、稻目造向原宅安置之、卽改爲寺、號向原寺、是日本佛寺最初也、元亨釋書云、先天王寺廿九年、造佛立寺之權輿也云々、三國佛法傳通緣起等委記之、境內四方齋等、後宇多院官符宣在之、寶塔眞柱石礎底、刹一字雕付在之、刹柱義歟、所謂佛閣崇重國保故歟、

一釋尊脇士 不動明王 降三世明王　弘法大師作

一座像十一面觀音　安阿彌作、世號孫六觀音云、

一地藏菩薩　天神御作、ツマトリノ地藏ト云、

一閻浮檀金十一面觀音　ヘサキノ觀音ト云

其外靈寶數多あり、略ス、

狂歌 雙六のさいりんじにや朱四重五の十八日はくわんをんまいり　直朗

入方の月見どころか西琳寺　可清

〔御靈開基記二河内〕西琳寺第三十代欽明帝十三年創、至元祿二年一千一百三十九年矣、

此寺、初號向原寺、在河州古市郡、本朝三十代欽明天皇十三年十月十三日、因百濟國聖明王、貢獻釋尊像及閻浮金所造十一面大士經論、佛舍利等、帝乃賜與蘇稻目、蘇氏大喜、特捨向原宅爲寺、以奉尊像、是日本寺院像設之始也、厥後革之、號西琳寺、昔遺址甚多、今僅有本殿及不動堂、於山上有藏王堂、又本殿之西、有安閑天皇靈廟、本殿左右、置不動明王降三世明王像、乃弘法大師之手造也、又有安阿彌所造十一面觀音、幷菅天神所造地藏等、又有百濟王所獻閻浮檀金十一面大悲像、其餘寶物若干、咸在焉、

〔西琳寺文永註記〕河内國古市郡西林寺

條々

一緣起事

天平十五年十二月晦日記云、〇註略

西林寺古市寺〇〇

右寺緣起、奉爲志貴島大宮御宇、天恐羽廣庭天皇、己卯年九月七日、始大山上文首阿志高、時將諸親屬等、仕奉此寺幷阿彌陀丈六佛像、

私曰、廣庭者欽明天皇也、己卯者卽位二十年也、文首者氏也、阿志高者名也、仕奉者造佛立寺之

詞也、

寶藏安二置金銅彌陀一、長一尺六寸居光銘云、

蓋聞、○中略阿斯高君子支彌高首、修二行佛法一、草二創西林寺一、復以二子梅檀高首、土師長兄商連、羊古首、韓會古首、敬二奉塔寺一、寛元五年己未正月、二種智誠敬造二彌陀佛像一并二菩薩、願此功德現世親族福延万世、七世父母隨レ意往、含靈之類、同二斯福力一、

天曆六年九月廿三日、寺牒云、○註略

右此寺奉下爲二志貴島天皇一建二立堂塔一、相傳柏原天皇奉レ願毘盧遮那丈六佛、○中略

一寺號事

古市寺、至二延曆延喜之頃一、多云二古市寺一、

西林寺、和銅二年已下帳見之、建久二年長者宣如此、

西琳寺、延喜十年已下帳見之、

一寺官事

大鎭神護景雲二年記云、大鎭僧等定、　少鎭延曆八年帳二、少鎭僧勝寛、

座主康平五年記云、座主權少都、　別當承和七年帳云、別當人法師無行、

權別當見二于天曆三年帳一、○中略

一堂舍事

金堂天平十五年帳云、金堂一基、瓦葺、延喜十九年帳云、大破、　今全　寶塔天平十五年帳云、塔一基、五重、延喜十九年帳云、中破、[illegible]銅像少損、

講堂天平十五年帳云、講堂一基、[illegible]　歩廊天平十五年帳云、歩廊一院、[illegible]延喜十六年帳云、大破、已東角新造、餘無、

中門延喜十六年帳云、中破、同十九年帳云、過中破、文永元年三月十九日、移二于南大門之跡一、　岡田堂延喜十九年帳云、中破、長元五年帳云、猶在、今不レ知レ跡、

五間四面堂延喜十九年帳云、大破、不用、今只殘礎石、古老相傳、[illegible]　三昧堂長久五年帳云、在之、已前不見、先年有レ議、移二于茅原堂跡一、

鐘堂（延喜十六年帳云、朽損、同十九年帳云、無、）今無○中略

別當明昭讓養尊狀

讓與西琳寺事

右件寺者、爲鼻祖建立伽藍、年紀既久、代々別當職氏人之中所撰任也、而明昭陪氏族之末流、當一氏撰、從少年常住興福寺、苟列修學者之數也、是以所帶寺家寄進於興福之末寺、久蒙本寺御勢、頻禦横煩、而間身病重侵、餘喘難知何日、爰養尊既爲一族之末胤、常住修學、又爲多年之弟子、之心操相調也、計其才幹尤可爲寺家別當、仍永所讓與如件、

承暦四年二月十日　法印（在判）

私曰、依此寺狀、別當明昭以當寺寄進一乘院、以後既及二百餘年、依之延久、永保、康和元年、大治、天承、康治、永暦之比、當寺牢籠之時、一乘院政所御下文、寺家靜謐正文、皆在寺庫、加之永保二年正月御下文、正權別當忝載御判、被停廢皇太后宮御築使非理雜役、是實末代之規模焉、侍從都維那範祐別當、弘長三年十月、以別當職沽却于當寺氏人薩摩守源憲俊、兵部源憲經兩人之後、二人別當、五人官一味同心、寄進名字、於住持三寶停止、管領於置未來際永連爲戒律弘通之栖、永爲衆僧正任之砌矣、（其狀在判）

右謹披舊記、粗注肝要之狀如件、

文永八年三月廿六日　比丘總持

此縁起者、當寺開山總持大德自筆草本之寫也、舊記數多之中、肝要證文抄一卷出之者也、

金剛輪寺

名勝所在

金剛輪寺ハ、河內國古市郡駒谷村ニ在リ、傳ヘテ推古天皇ノ朝、聖德太子ノ創建スル所ナリト云フ、今眞言宗ニ屬ス、

〔河內志古市郡四〕佛刹　金剛輪寺（在駒谷村、有南朝書捨文）

〔金剛輪寺文書〕須改安養寫額、號金剛輪之由被聞食□□□致顯密常住行業、宜奉祈寶祚長遠之理運者、天氣□□悉之以狀、

正平四年十一月十二日　右中辨花押

金剛輪寺□侶等中

堂塔

〔河內國名所鑑三〕駒が谷、太子富士山より磯長の山へ御越の時分、此谷に駒をのりすへ給ふ、其石に駒の足形あり、杉に駒御つなぎ有しとかや、さるによつて此所の杉は葉さきにはりなしと申傳ふる、推古天皇の御祈願寺、山號は十六山金剛輪寺安養院といふ、釋迦堂あり、坐像にて御長四尺五寸、太子の御作、十一面觀音、是も太子の御作なり、御長一尺一寸、藥師如來、辨財天在、三所權現の社まします、

〔河內名所圖會古市郡三〕十六山金剛輪寺（駒ヶ谷山中にあり、安養院と號す、眞言宗、）本尊釋迦佛（長四尺五寸、藥師佛、辨財天女、俱に聖德王の御作、堂内に安置す、）十一面觀音（楠正成の念持佛にして、赤坂籠城の時、靈驗を蒙り給ひ、戰死の後、息正行所持の經卷、并に未來記の寫しを副て、當院に收む、年歷て天正の兵火に罹りて、神社佛閣ことごとく煙となる、寺僧等木尊靈佛什寶を負て他境へ遁趨る、此觀世音一體見へ給はで久しく星霜をおくる、眞享の頃、住僧春盛阿闍梨、村老と俱に靈夢を蒙る、吾久しく大和國神南の三室にあり、早く舊地に遷ふべしと告給ふ、因之遂に還寺なしけり、○中略）夫此山寺は古刹にして、中頃兵燹の災の後は、僅の丈室維摩が居に比して、十笏を得たり、常に幽鳥雲を帶て禪龕をめぐり、山水月に和して、僧厨に入、寂莫たる鐘磬の聲、塵埃を避て三乘を貫き顯密の日かげ長閑にして、十住心の花の匂ひ鮮也、むかし太子厩戸驪の駒に御して、四海をめぐり見給ふに、此地瑞雲漠々として立昇る、是靈域也とて、詔を蒙りて梵閣を創し、號て十六山安養

寺領

院といふ、蓋此はとりに、前王后妃の陵墓纍々として四々を雙べり、因是山號とす、時の人は近つ飛鳥の御寺とも賞すとかや、年歳つもりて、後醍醐帝の御宇、世上穩ならざれば、天下淸平御禱のため、宸筆の御製を藏め給ふ、南朝後村上院より金剛輪寺と勅し給ひ、攝津國、葺屋庄を寄らる、綸旨國宣も傳り、二條爲明卿の歌書もあり、あるは西行上人の肖像、餘外什寶奇物數々傳ふ、寺前には藤永手墓、淸少納言の古墳、楠正成塔あり、○下略

〔金剛輪寺文書〕攝津國葺屋莊下司跡、任先房綸旨國宣可被沙汰金剛輪寺雜掌於下地之狀如件、

正平十七年九月二日　　左馬頭正儀○楠花押

橋本宮內少輔殿

寺職

〔金剛輪寺文書〕正平廿四年十月三日宣旨　上卿權中納言

金剛輪寺

宜寄置權律師二口、

藏人頭右大辨兼左近權中將藤原實興奉

祈禱

〔金剛輪寺文書〕爲天下靜謐可致御祈禱之忠者、天氣如此、悉之、

延元二年二月十八日　　右少將花押

安養院寺僧等中

知識寺

智識寺ハ、一ニ太平寺ト云フ、本尊ハ昔時三大佛ノ一ニシテ、聖武天皇東大寺大佛造立ノ事ノ如キ、實ニ此寺ニ禮佛シテ、發願シ給ヒシ所ナリト云フ、今廢寺ニジテ、河內國大縣郡安堂

名稱所在

太平寺二村ニ跨リテ、其舊地ヲ存セリ、

〔伊呂波字類抄　知〕智識寺在河内國之由、見扶桑略記、孝謙天皇天平勝寶元年十月、行幸此寺、高野姬天皇七年二月十日、此寺本尊觀音像、長六丈、造畢之由、見于國史、

〔拾芥抄　下末〕太○平○寺○河内知識寺云々

〔河内志　大縣郡　六〕古蹟　智識廢寺　故界互安堂太平寺二村、子院太平寺址在大平寺村、大日堂今僅存安堂村、

本尊

〔二中歷　三大佛〕古佛　和太　河二　江三

說云、和太謂東大寺大佛、在添上郡、　河二謂河内國智識寺、在大縣郡太平寺、　江三近江國世喜寺、在志賀郡、

堂塔

〔扶桑略記　三十白河〕應德三年六月、河内國智識寺顚倒、捻像大佛碎如微塵云々、長六丈觀音立像也、

寺領

〔續日本紀　二十六稱德〕天平神護元年閏十月己丑朔、捨弓削寺食封二百戶、智識寺五十戶、

奴婢

〔續日本紀　三十稱德〕神護景雲三年十月癸亥、是日賜配智識寺今良二人、四天王寺奴婢十二人、爵人三級、

參詣

〔續日本紀　十七孝謙〕天平勝寶元年十月庚午、行幸河内國智識寺、以外從五位下茨田宿禰弓東女之宅爲行宮、　十二月丁亥、大神禰宜尼大神朝臣社女其輿紫色、一同乘輿、拜東大寺、天皇、太上天皇、聖武○太后同亦行幸、光明子○中略左大臣橘宿禰諸兄奉詔白神、八幡大神○曰、天皇我御命爾坐申賜止申久、去辰年天平十二年河内國大縣郡乃智識寺爾坐盧○舍○那○佛○遠禮奉天、則朕毛欲奉造止思毛、得不爲之間○下略

〔續日本紀　十九孝謙〕天平勝寶八歲二月戊申、行幸難波、是日至河内國、御智識寺南行宮、　己酉、天皇幸智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂等七寺○六七誤、禮佛、　庚戌、遣內舍人於六寺誦經、䞋施有差、

雜載

〔三代實錄　十二淸和〕貞觀八年閏三月廿二日丁卯、以河内守從五位下菅野朝臣豐持、爲修理智識寺佛像別當、

鳥坂寺

鳥坂寺ハ、一ニ井上寺ト云ヒ、又普光寺トモ云フ、今廢寺ニシテ、舊地ハ河內國大縣郡高井田村ニ在リ、

〔河內志六大縣郡〕古蹟 普光廢寺在高井田村（中略）一名井上寺、又名鳥坂寺、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歲二月己酉、天皇幸智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂等七〇七恐六誤寺、禮佛、庚戌、遣內舍人於六寺誦經、襯施有差、

〔本朝無題詩九山寺〕遊普光寺、寺在河州府東山、 大江佐國

秋日適尋古寺登、暮林蓊索嶺泉澄、梯危路遠幽溪入、山隔雲從斷峽興、如過舊遊丹頂鶴、擬談往事白屋僧、此時促膝沈吟苦、彼引鳳流去未能、

〔政事要略二十二年中行事〕八月四日北野天神會事

余〇惟宗允亮 寬弘四年、出爲河內守、五年九月五日、住大縣郡普光寺僧稱慶語云、〇下略

順興寺

順興寺ハ、河內國茨田郡牧方ニ在リ、本願寺ノ勅許院家十箇寺ノ一ニシテ、僧蓮如ノ子實從ノ開基スル所ナリ、天正年中、兵燹ニ罹リシガ、後、教如之ヲ再建シタリ、

〔河內名所圖會六茨田郡〕東本願寺御坊同所(牧方)にあり、東本願寺に屬す、自庵を願生坊といふ、

本尊阿彌陀佛鳥佛師の作、長三尺五寸許、

當寺は蓮如上人八十一歲の時、出產の季子法印權大僧都實從の開基なり、順興寺と號す、坊名を九九丸といふ、天正年中、兵火の後、敎如上人の再建ましまします、舊地靈町南也、境內に實從上人の古墳あり、順興寺は京師にあり、西派なり、

寺格

〔一向宗源賑〕第十一、顯如上人（諱光佐、信樂院大僧正、文祿元年十一月廿四日化、壽五十、）證如之子、〇中略　同祿〇永三年十月、本願寺僧徒十箇寺、勅許院家號、蓋院家則非平民之旨、（故天下云、本願寺十箇寺勅許院家寺、處々有之、今東西院家數不定也、十箇寺者、顯（中略）河州牧方願興寺、（中略）是也、）

名稱　所在　創立

寺格

來迎寺

來迎寺ハ、河內國茨田郡梶村ニ在リ、僧西願ノ創建ニシテ、融通念佛宗ノ一本寺タリ、

〔河內名所記六茨田郡〕梶村宗雲山來迎寺靈乘院ハ、大念佛宗の本尊方也、西願上人の草創也、本尊繪像三尊天より降り玉ふ佛也、佛舍利あり、良忍上人之繪緣起あり、南都一乘院殿之序、畫繪ハ土佐將監筆也、其外ハ略之、

〔和漢三才圖會七十五河內〕宗雲山來迎寺　在梶村　大念佛宗本寺

號靈乘院、開基誠阿上人、本尊世稱天筆三尊像、寺傳云、清和帝（貞觀元己卯年）行敎（南都大安寺僧）詣豐前宇佐宮、一夏九旬、大乘經讀誦不怠、且願拜神體、同七月望夜、夢想曰、汝若歸去、則我亦往到、宜護皇祚也、覺視枕頭、有彌陀三尊畫像、行敎感歎戴之、還洛之道、至山城山崎、示有瑞告、因奏旨、帝叡感令營宮殿祭之、山崎離宮是也、（後復有神託、遷雄德山、）又光明帝時、攝州深江村有沙門、名法明、嘗修念佛三昧、（康永元壬午年）四月望夜、有八幡神勅曰、汝信心有神感、故可授我本形畫像、以宜弘大念佛也、同七月十六日、法明將詣八幡山、於是社人値于途、（河州交野）曰、我則八幡社人也、任神告今行汝許、乃授本尊一軸、法明掛之松枝、獻喜踊躍念佛、（踊念佛、其遊風也、）既而歸庵、（六年以後）貞和三（丁亥）年、弟子西願授之、建當寺、後號誠阿上人、（自門四別所之俗、取圓而僧薙髮爲後住、以爲念佛易行之寺法乎、近頃定職僧住持、而許紫衣焉、攝州平野大念佛寺亦如斯、）

〔寺鑑上〕無本寺　河州佐太　大念佛宗本寺　來迎寺

右住職、弟子讓リ、繼目御禮無之

紫衣勅許之御禮、御白書院、獨禮御目見之外御暇柳之間、御老中、年頭御無之、獻上一束一卷拜領時服三、

名稱 所在 用途

百濟寺

百濟寺ハ、蓋シ百濟氏ノ氏寺ニシテ、桓武天皇延暦年間、錢三十萬、稻四千束ヲ施入セシ事アリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ河内國交野郡中宮村ニ在リ、

〔伊呂波字類抄波諸寺〕百濟寺在河内國、推古天皇廿四年秋七月、以妙法師爲百濟寺寺主、天皇以前建立寺也、見國史、

〔河内志十一交野郡〕古蹟 百濟廢寺在中宮村、百濟王廟城内礎石尙存、

〔類聚國史百八十二施入物〕延暦十二年五月戊子、錢三十万、及長門阿波兩國稻各一千束、特施入河内國交野郡百濟寺、 十七年正月壬辰、河内國稻二千束、施入百濟寺、

名稱 所在 寺領 參詣

弓削寺

弓削寺ハ、蓋シ弓削氏ノ氏寺ニシテ、稱德天皇ノ朝、寺封二百戸ヲ施入シ、尋デ行幸シ給ヒシ事アリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ河内國若江郡東弓削村ニ在リ、

〔河内志十二若江郡〕古蹟 廢弓削寺東弓削村

〔河内名所圖會四若江郡〕弓削寺址東弓削八尾木の間にあり、天平神護元年十月捨食封二百戸、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年閏十月己丑朔、捨弓削寺食封二百戸、智識寺五十戸、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十月戊子、幸弓削寺禮佛、奏唐高麗樂於庭、刑部卿從三位百濟王敬

名所
所在

祠等亦奏ニ本國僧一、

顯證寺

顯證寺ハ、河內國澀川郡久寶寺村ニ在リ、本願寺ノ勅許院家十箇寺ノ一ナリ、蓮如ノ建立ニシテ、蓮淳ヲ以テ開基トス、

〔和漢三才圖會河內七十五〕澀川郡神社佛閣名所

顯證寺　在二久寶寺村一顯或作證字　西派院家

開基　蓮如上人第十二之子　蓮淳法印住持

親鸞上人眞向御影　大津近松寺有二自作本像一、有二所以而蓮淳圖一レ得レ之、爲二當寺靈像一、蓋開山眞向御影之始是也、永祿三年、勅。許。院。家。十。箇。寺。之。一。也、

〔河內名所圖會四澀川郡〕近松山顯證寺　久寶寺村にあり、淨土眞宗門徒、久寶寺御坊と唱す、京師西。本。願。寺。御。跡。連。枝、代々寺職し給ふ、

本尊阿彌陀佛春日佛師作、長一尺八寸餘、開山聖德太子、井に七高僧の影を安置す、

宗祖親鸞聖人等身眞向御影蓮如上人眞筆、眞向の御影の初、天下第一と稱す、

蓮如松對面所の庭中にあり、蓮如上人植給ふとぞ、含月亭本願寺眞如上人好の茶亭にて、當寺へうつす、

夫當寺は本願寺第八代蓮如上人の建立にして、息第八男法印蓮淳上人に附屬し給ふ、母は石山寺觀世音の化現たる事、蓮如傳記に顯然たり、宗祖親鸞上人の御影は、大津近松寺に於て、骨肉の眞影を摸したるゆへ、等身の號ありて、宗派眞向尊影の初也、當寺御堂、四足門、書院等、近年再營にて莊嚴美麗也、毎時晨鐘の響より、老若の門俗、袖をつらねて詣し、渴仰燒に、佛恩の稱名、日々新なれば、去此不遠の安養淨土ともいふなるべし、元祿年中、故大和川開發の地を、今顯證寺新田といふ、

寺格

〔一向宗源脈〕第十一顯如上人諱光佐、信樂院大僧正、文祿元年十一月廿四日化、壽五十、證如之子、(中略)同(永祿)三年十月、本願寺僧徒十箇寺、勅二許院家號一、蓋院家則非二平民一之旨、故來下云、本願寺十箇寺勅許院家寺、處々有之、今東四院家數不定也、十箇寺者、謂(中略)河州顯照寺(中略)是也、

龍華寺

龍華寺ハ、稱德天皇、由義宮ニ行幸ノ時、市廛ヲ寺邊ニ權置シ、車駕之ニ臨ミテ綿鹽ヲ此寺ニ喜捨シ給フ、尋デ桓武天皇ノ延曆十九年、寺田ヲ施入シ給ヒシコトアリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ河內國澁川郡植松村ニ在リ、

名稱所在

〔河內志十三澁川郡〕古蹟　龍華廢寺在二植松村一、(中略)今稱二市場一、又有二龍華城壘、龍華堤、龍華陂、龍華島之名一、俗說傳曰二橘莊一、

寺領

〔類聚國史百八十二寺田地〕桓武天皇延曆十九年二月辛巳、河內國若江郡田一町六段施二入龍華寺一、爲二燈分一、

用途

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年十月辛亥、進二幸由義宮一、　乙卯、權建二肆廛於龍華寺以西川上一、而駈二河內市人一以居之、陪從五位已上、以二私玩好一交二關其間一、車駕臨之、以爲二遊覽一、難波宮綿二万屯、鹽卅石、施二入龍華寺一、

井上寺

井上寺ハ、河內國志紀郡ニ在リ、推古天皇ノ朝、僧惠灌ノ創建スル所ナリ、今廢寺ニシテ、其舊地ヲ詳ニセズ、

名稱

〔伊呂波字類抄爲諸寺〕井上寺扶桑略云、推古天皇御宇建立、在二河內國志紀郡一、本願僧正惠灌、

創建　雜載　名勝所在　參詣

〔扶桑略記 四推古〕卅三年、天下旱魃、以高麗僧惠灌、令著青衣講讀三論、甘雨已降、仍賞任僧正、住元興寺、流布三論法門、建井上寺、

〔日本靈異記 下〕妙見菩薩變化示異形顯盜人緣第五

帝姫阿倍天皇 明〇元 代、知識緣依例、於燃燈菩薩並室主施於錢財物、其布施錢之中五貫、師之弟子竊盜而隱、後爲取錢、往見之無錢、但鹿負箭仆死也、仍馬荷鹿返、于河内市邊井上寺之里、〇下略

家原寺

三宅寺

家原寺、及ビ三宅寺ハ、並ニ孝謙天皇六寺巡拜ノ時、此ニ行幸シテ、禮佛シ給ヒシヲ以テ著ハル、家原寺ハ後世廢寺トナリテ其舊地ヲ志紀郡老原村ニ存シ、三宅寺ハ丹北郡三宅村ニ在リテ、今僅ニ觀音堂一字ヲ存セリ、

〔河内志 十四志紀郡〕古蹟　家原廢寺 在老原村、

〔河内志 十六丹北郡〕古蹟　三宅廢寺 三宅村、今有觀音堂一字、

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶八歲二月己酉、天皇幸智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂等七 〇七恐六誤 寺、禮佛、庚戌、遣内舍人於六寺、諷經、襯施有差、

道明寺

道明寺ハ、一ニ土師寺ト云フ、河内國志紀郡土師村ニ在リ、原ト土師氏ノ氏寺ニシテ、推古天

名稱	所在	創建	沿革

皇ノ御願、聖德太子ノ開基ト稱ス、今眞言律宗ニ屬シ、尼寺ナリ、

〔伊呂波字類抄 波 諸寺〕土師寺ハレテラ 讀ニ道明寺、土師氏寺也、俗爲ニ菅原本姓、菅原氏寺也、

〔河內名所圖會 四 志紀郡〕道明尼寺 土師里にあり、土俗道明寺村といふ、眞言律宗、女僧寺職す、

〔國花萬葉記 四 河內〕道明寺　寺領百七拾石　今濟家比丘尼寺

推古天皇の御願寺、聖德太子の開基なり、土師連八島承りて、佛塔をたつ、此所を土師の里と云り、五部の大乘經を埋め給ひし上に、木槵樹生侍り、この實をたふとみて人々數珠につなぐ也、此連は我朝にはじめて今様をうたひ出しける人也、其聲たへにして鬼神を感し、星天に通せしとかや、

此寺に菅丞相の伯母御覺壽と申おはしましける、菅丞相左遷の御時、御暇乞に立よらせ給ひ、夜もすがらの御物がたりつきなくに、東雲の雞かしましく思し召、

鳴ば社別をいそげ鳥の音の聞えぬ里の曉もがな、と詠じ給ひしとぞ、それより此里には雞をかはずと申傳ふる也、菅公配所にて薨じ給へり、村上天皇天曆元年に、菅靈を都北野にうつし御祠を立て祭らせ給へり、同年に當所道明寺にも、三丁の森の內に御社をたて、左右に松梅を植て天滿大自在天神とあがめ給へり、

本堂十一面觀音 御長三尺 天神の御作　藥師堂有　坊數八坊 ほしいひ名物、びくにのわざ也、　奥の天神宮は天穗日命と云、但し此所神秘これ有と云々、

權現様御制札、並代々將軍御朱印有、　當寺傳來の靈寶靈軸數品あり、　ことごとく記するに不遑、今これを略ス、

〔伽藍開基記 二 河內〕道明寺

河州志紀郡土師里、有精舍號道明寺、神武三十四代、推古天皇本願、以聖德太子爲開創之祖、至今一

千餘載、而靈跡猶存、本殿安菅天神一刀三禮所造十一面大悲像、其長三尺許、又有天神祠、此神乃村上天皇天暦元年、始垂跡於京兆北野、其時設祠於當寺、蓋天神之姨娘、居于此地、因以建之、又有天照太神宮、其旁有木槵樹、相傳、此寺初開之時、菅寫五大部經瘞之、其上生此樹云、又有藥師堂、鐘樓、及僧坊八所、尼寺

〔河州志紀郡土師村道明尼律寺記中〕菅叁議是善卿のいもうと覺壽比丘尼、いとけなきより出塵のこゝろざしふかくましまして、御氏寺なればとて、當寺においてつひにかざりをおろし、戒行たゞしく、道心堅固におこなひすまし給ふ、このゆゑに菅丞相いとゞ檀信あつうして、おほやけのいとまあるごとに、より〳〵當寺に來りて坐禪誦經など、すべて佛門の事執おこなひ給へり、陽成院元慶四年、菅丞相三十六歳此寺において、一夏九旬の間、一刀三禮して十一面觀音の尊像御たけ三尺ばかりなるを彫刻し、あらたに一堂を作りて安置し給ふ、今の本堂の本尊これなり、この時丞相作り給へる詩にいはく、

一夏山中驚耳根、　鄴公高嚮入禪門、　適逢知己相憐處、　恨有清談無酒罇、

同八年、菅丞相四十歳ふたゝび當寺において、四月中旬より七月十二日にいたりて、五部の大乘經を書寫し給ふ、

〔河州志紀郡土師村道明尼律寺記下〕後嵯峨院寛元四年、興正菩薩當寺において、文殊供養を修し給へるとき、僧尼二百三十六人、おなじく菩薩戒をうけ奉る、是より當寺の尼衆いよ〳〵菩薩の高徳に歸して、比丘尼の大戒をうけ、また眞言の法流をつたふ、これよりしてあらたに供護摩堂傳法堂、および供御所を建立せり、

伏見院永仁六年四月、忍性律師の公にこふによりて、西大寺をはじめ、三十四箇寺の僧尼寺において、守護人等の闖入を禁斷すべきのよし、鎌倉の沙汰として下文を給ふ、忍性律師そのむねを

堂塔

玄るして當寺におくる、また光明院曆應二年には、永仁の例にまかせて、右の三十四ヶ寺について、いのりを修すべきのよし下文を給ふ、二たびの下文また忍性律師の書簡、いまなを寺にあり、

花園院延慶三年、和州寶生山において、傳法灌頂堂上の法則ありしとき、當國古市村西琳寺の僧叡阿誦經導師となる、そのあしたかの表白をとりあげよまんとす、たちまち菅神影向ましく〳〵て、道明寺八葉の鏡はわが神體なり、みだりに人の手にふれじ、これを尾領せよと告給ひしかば、叡阿つげのおもむきを記し、また八葉の鏡を木をもてかたどり奏聞しければ、もとの鏡は勅封となりて給はりぬ、それよりこのかたかの鏡をひらくことなし、その記文今につたはれり、叡阿はこの時當時の直歳をつとめし故なればなり、

元龜三年、當國高屋城兵亂の火災にかゝり、殿堂悉く燒失せし後、星霜を經て、堂社僧坊等造營しければ、まことにそのかみのはかりにぞ侍る、玄かはあれども、五篇の戒香餘薰をとゞめ、三密の法燈殘光をかゝげ、國家の安全を祈り、君臣の和樂を祝す、是なん富の小川の流れたえず、天の川神の惠みつきせぬものならし、

〔河内名所圖會 四志紀郡〕道明尼寺 ○註略

天滿宮 御自作現存の神影を祭る、一夜に御製作、世に木の天神と稱す、後に覺壽尼公補作す、○中略

十一面觀世音 本堂に安置す、菅神御自作、長三尺許、○中略

試觀音 長貳尺許、丞相右の大悲の像彫刻し給ふ以前、御試に作り給ふ尊形也、○中略

釋迦佛 本堂中央に安置す、立像、長三尺許、脇士文殊普賢、

覺壽尼像 本堂に安す、菅原是善卿御娘、菅神御伯母君なり、○中略

本堂額 横額、道明寺と書す、寶鏡寺宮理豐比丘尼御筆、

藥師堂 本堂の東側にあり、藥師佛は豐太閤政所の御念持佛、當寺へ御寄附、

太子堂 聖德太子二歲の影、又十六歲の像を安す、俱に佛工定朝の作、

妙善堂 本堂の西傍にあり、延命尊なり、安す、

天穗日命社 本堂の西にあり、菅家の祖神なり、牛頭天王、婆利寶女を併せ祭る、○中略

鎭守 紅梅殿 老松祠 白山 善女龍王 辨財天 愛宕權現 多聞稻荷等を祭る

三社神祠 本社より壹町餘坤にあり、天照太神、八幡宮、春日明神を祭る、○中略

木槵靈樹 ○註略

二本杉 ○註略

硯水 ○註略

土師八島祠 石彫の祠なり、本社の東南にあり、○中略

土師竈跡 中門の西、客殿の前栽にあり、○中略

龍池 ○註略

塔古礎 ○註

雜載

略　土師八島家（四武町鉢にあり、石碑を建、元文五年六月、五條南黄門の命によつて源述忠國建碑、文略す、）

〔諸寺略記〕道明寺者、垂仁天皇御宇、野見宿禰住屋也、後爲レ寺、堂舍五宇、藏八宇、僧房雜舍等相具十字也、本尊十一面觀音

〔鹽尻三十六〕河内國道明寺は、尼寺也、（菅神の伯母尼公開基云々）千飯を道明寺といふは、此寺より製し出せし者、精白にして美成し故に名とす、今も糗糒を大家に參らせ、亦寺尼賣侍る、寺領三百石あり、

葛井寺

名稱
所在
堂塔

葛井寺ハ、フヂキデラト云ヒ、一に剛琳寺ト稱ス、河内國丹南郡葛井寺村ニ在リ、傳ヘテ聖武天皇ノ勅願ニシテ、阿保親王ノ再建スル所ト稱ス、應仁ノ亂、兵燹ニ罹リ、尋デ永正七年、地震ノ爲ニ一寺滅亡セシガ、後舊ニ復ス、本尊ハ千手觀音ニシテ、西國順禮三十三ケ所ノ一タリ、

〔拾芥抄下本諸寺〕三十三所觀音（略）中　藤井寺（河内丹南郡、號二剛林寺一、三位藤井給子、等身千手、）

〔和漢三才圖會七十五河内〕丹南郡（神社佛閣名所）

葛井寺　一名剛琳寺

本尊　千手觀音（長五尺二寸座像）　西國巡禮第五番

稽文、稽主二人法師、（天照太神春日明神）二大神變身、一刀三禮彫二作之一、

聖武天皇建立、行基菩薩開眼供養、其後平城天皇勅願、阿保親王再興之精舍也、

奥院　業平朝臣造營、（阿保親王之子）此奥院今但舊跡耳、

〔河内志十五丹南郡〕佛刹　葛井寺（葛井寺村、一名剛琳寺、葛井給子建、三十三所道場其一、有二南朝國宣及楠氏書簡一、）

〔河内名所圖會四丹南郡〕紫雲山葛井寺三寶院（葛井寺村にあり、いにしへは古子山といふ、一名剛琳寺、眞言宗、）

本尊千手觀音　稽文會、稽主勳の作、長四尺八寸、一千四十二臂、脇士地藏尊、正觀音を安す、倶に行基菩薩作、長五尺五寸、和州長谷寺本尊の御衣木と同木なり、西國巡禮三十三所の中第五番の札所なり、

葛井　野中森にあり、今藤森といふ、此地當寺の舊跡にして伽藍の字多し、

大威德影向石　本堂の前にあり　不動堂　本堂の西にあり　菩薩堂　本堂の前西側にあり、廿五菩薩を安す、　鐘樓　本堂の東側にあり　鎭守　牛頭天皇荒神祠辨財天を祭る　樓門　持國増長の二天を安す　紫雲石燈爐　聖武帝御寄附也、方丈の庭中にあり、石の色紫にして石目の細密也、　業平屋敷　方丈戌亥の庭をいふ、業平朝臣造立の奥院舊跡なり、

〔剛琳寺文書〕勸進沙門敬白

請特蒙十方檀那恩助再興河州剛琳寺根本伽藍狀

右當寺者、聖武皇帝叡願建立之伽藍、行基菩薩開眼供養之梵場也、加之爲平城天皇之御願阿保親王再造之精舍、大政威德天王影向不斷之靈跡、金峯金剛兩山之肝心也、葛木緣起曰、葛井寺葛木之西門也云々、誠以四神相應、一天無比之勝地哉、本尊者稽文會、稽主勳之聖作、千手千眼觀世音菩薩、御衣木者、和州長谷寺十一面之同木、妙相端嚴而感應無雙之尊像、三十三所巡禮之地、六十六部奉納之所、諸佛轉法輪菩薩利生之砌也、于茲去明應第二癸丑夏、依一國亂罹兵火者、樓門、中門、三重大塔、六十六部奉納所、鎭守幷業平朝臣造立奥院等悉燒失訖、雖然本堂一宇、塔一基、巍然而有之、仍衆等之願望、相殘蹤跡、懸諸檀那之合力、所欲興梵刹之舊基、永正七年八月八日曉、依大地震一寺滅亡、萬民之愁嘆不能言詞、雖然本尊無恙、前蹤未聞希代之神變也、一刹伽藍之退轉者、衆生攝化之方便也、誠歎之中悅也、伏願、人々宜勵伽藍再營之志、不耻一紙半錢之少財、所賴無餘、夫以千手觀音者、四八端嚴之慈容、三千正覺之導師也、供養者、福等河沙、壽算久長、凡持念輩罪消、塵劫災禍除、經曰、有人貧窮下賤、多受病苦、愚癡暗鈍、不辨善惡、若能稱念我名、一切所求、必定成就、富貴自在、無病安樂、虛空有盡、讃嘆無窮、一見一禮者、永離三惡趣、速滿二世之願望者也、仍勸進之旨趣如件、敬白、

寺制

勸進沙門敬白

永正七年十一月日

〔西國三十三所略緣起上〕第五葛井寺

河内國丹南郡紫雲山葛井寺は剛林寺と名づく、○中略春鶯がいはく、應仁のころより、諸國大にみだれて、神社佛閣もことごとく兵火にかゝり、秘書れい佛、あまた燒失せり、剛林寺も明應二年に、樓門、中門、三重の塔、業平朝臣建立の奥院等まで、みな一時に燒失すといへども、本堂と塔一基とは、ふしぎにのこれるを、諸人大に感喜せり、そののち永正七年八月八日の大地震に、のこれる伽藍みなたふれぬ、されども本堂○本堂西國三十三所靈場記作二本尊一はすこしも損ずることなし、諸人きどくのおもひをなして信かうをまし、終に十方の有信をすゝめて、今の伽藍を再興せりといへり、此山の緣起にいはく、花山法皇西國三十三所順拜したまひ、已に當山にまうでたまひて、まゐるよりたのみをかくるふぢ井寺、と上句を詠せさせたまへば、本尊ふかく感じたまひしにや、堂前の石燈籠へ、紫雲たなびきしを御覽せられて、花のうてなにむらさきのくも、とあそばしそへたまひしとなり、その燈籠は、聖武天皇伽藍御建立の時御奉納ありし中の一なりとぞ、

〔剛琳寺文書〕禁制　藤井寺

一爲下剪二採竹木一事付臨時課役事

一理不盡催促之事

一請取沙汰付二公事等一之事、

右條々堅令二停止一訖、若違犯之輩在レ之者、速可レ處二嚴科一者也、仍下知如レ件、

天正八年卯月口

甚九郎花押

右衞門尉花押

雜載

〔太平記二十五〕藤井寺合戰事

將軍〔○足利尊氏〕是ヲ聞給テ、楠ガ勢ノ分際、思フニサコソ有ラメ、是ニ邊境ヲ侵奪レテ、洛中驚キ騷グコト、天下嘲哢、武將ノ耻辱也、急ギ馳向テ退治セヨトテ、細川陸奥守顯氏ヲ大將ニテ、〔○中略〕都合三千餘騎、河内國ヘ差下サル、此勢八月十四日ノ午尅ニ、藤井寺ニゾ著タリケル、〔○下略〕

野中寺

名稱 所在 創建

野中寺ハ、河内國丹南郡野々上村ニ在リ、聖德太子ノ開基ニシテ、蘇我馬子ノ創建ト稱ス、中世兵火ニ燒燼シ、久シク荒廢セシガ、寬文年中、僧覺英之ヲ再興ス、今眞言律宗ニ屬シ、一本寺タリ、

〔河内志 十五 丹南郡〕佛刹 野中寺〔在野上村〕

〔河内名所記 二〕野中寺、山號は靑龍山、院號は德蓮院、聖德太子の開基、蘇家大臣の草創也、昔は七堂伽藍の靈場也、いづれの兵亂の時にかありけん、燒滅し侍るとなん、あとふりて久敷石ずへ計殘りけるを、爰に寬文の比、阿闍梨覺英と云有て、かやうの靈場の絕なん事をかなしみ、諸方にくわんじんし、貴賤の助力によりて、先本堂の藥師堂建立なる、藥師座像御長二尺七寸、太子の御作也、追付子安のくわんをん堂建立あるべしとなり、子やすのくわんをん、御長一尺五寸五分、金佛也、南無佛の太子の御影あり、毘沙門あり、大黑有、辨才天の社有、善女龍王のやしろあり、太子の閼伽井奇瑞有行基菩薩楊枝をもつて堀給ふ井あり、鎭守八幡の社有、此所を今は野々上と申と也、別院に寶泉寺と云堂塔伽藍の舊跡有、大坂軍の時、眞田左衞門佐、此あたりはびき野ばけか山陣を取、一合戰して、大坂へひき取由、有老人の物語し侍る、

咲花はつりがね草か野中寺　則武

堂塔

〔全國各宗本山明細帳〕眞言宗　本山

野中寺　同國內○河丹南郡野々上村

〔河内名所圖會四丹南郡〕靑龍山野中寺德蓮院（野々上村にあり、眞言律宗、）本尊藥師佛（聖德太子御作、長貳尺七寸、又釋迦如來長貳尺五寸、慈覺大師の作、方丈に安置す、）觀音堂（本尊正觀音は聖德太子御作、長四尺五寸、惟喬親王の御歸依佛なり、）地藏堂（本尊地藏尊は惠佛師作、長三尺、）經藏（惠心作の阿彌陀佛、長三尺、又彌勒佛金像を安置す、これは聖德太子悲母追福の爲に、鑄させられし靈像也、）太子閼伽井（方丈の北にあり、）楊枝井（鎭守の後にあり、行基大士、楊枝にて穿ち給ふ井なり、）鎭守（八幡宮を祭る、）瑪瑙三石（一つは當山方丈の庭にあり、一は本堂の前辨天の座石なり、一は野村の池中にあり、昔盜賊取てこゝに捨しとぞ、）伽藍古礎（境内に多し、）

夫當寺は厩戸皇子の開基にて、四十六院の中、蘇我大臣の草創なり、往昔は七堂伽藍の靈場也、中頃の兵火に燒滅し、荒廢して久しく礎のみありしを、寛文の頃、阿闍梨覺英の本願によつて、慈忍惠猛和上中興して戒律の道場となる、今律宗一派の本山輪番所也、此慈忍律師は秦氏にして、當國讃良郡の村の人なり、（別院に寶泉寺といふ古刹あり、近年再興して、禪宗黄檗山僧これを守る、）

名勝所在　堂塔

家原寺

家原寺ハ、和泉國大鳥郡家原村ニ在リ、舊ト僧行基ノ其生誕ノ家ヲ捨テ、蘭若ト爲シ、所ニシテ、後叡尊之ヲ中興セリ、

〔和泉志二大鳥郡〕佛刹　家原寺（家原村、僧正行基建、○下略）

〔和漢三才圖會七十六和泉〕大鳥郡　神社佛閣名所

一乘山家原寺　在ニ蜂田鄕家原村ニ

行基菩薩開基　本尊文殊大士（自ニ婆羅門僧正ニ所ニ授、眞金佛、卽納ニ白毫中ニ）鎭守四座　金峯　熊野　白山　八幡

赤龍淵　在山上岩穴　徑不充歩、可指究焉、而大旱不枯渇、洪水無汎溢、就此祈雨、無不有驗焉、

白龍淵　在赤龍淵傍小坳也　連雨不亦溜也

放生池　在門側

所以放生也菩薩嘗行化反時、里人捕魚而宴池邊、戲以膾薦菩薩、乃喫之須臾臨池吐出、皆爲小魚而游泳、于今此池有片目之魚者、其吐出之證也、

〔和泉名所圖會二大鳥郡〕一乘山家原寺家原村にあり、開基行基菩薩、中興興正菩薩、

本尊文殊佛左釋迦、右普賢、共に行基の作也、本尊の壺中に壹寸八分の黄金佛を安す、天竺波羅門尊者、天平十八年、南都東大寺建立の時來朝し將來の靈佛なり、　多寶塔大日如來を安置す、香燈木院と稱す、　不動堂本堂の右にあり　祖師堂本堂の北にあり、中央行基菩薩、左弘法大師、右興敎菩薩、　藥師堂本堂の巽にあり　清涼院本堂の後にあり、行基戒壇の地なり、　鎭守社金峯、熊野、白山、八幡、丹生、高野等の神社を祭る、　誕生木行基出生の時、胞衣を此木に掛し也、　龍穴西門の南にあり　經塚本堂の南にあり　閼伽井壇の下にあり　放生池西門の内にあり、此池に片目の魚あり、　樓門趾本堂の前下段にあり　辨財天社、聖天尊社、倶に池中にあり　善光寺塚池中にあり、或人善光寺如來の靈告を得て、生極樂の印を授り、此池中に安置し、善光寺塚といふ、　二王門金剛力士を安す　三反田門前にあり、行基田畔の畝割を敎へ給ふ所也、

夫家原寺と申は、大僧正行基出誕の家地にして、後あらためて精舍となす、行基は天智帝七年に生れ給ひ、父は高志氏、名は貞知、幼名を法貴丸と號す、百濟王の裔王仁の後也、母は蜂田首虎身の女、藥師姫といふ、今の蜂田の華林寺は、此藥師女の家地也、行基自記して曰、山海兩邊の中間に一乘菩提峯といふあり、慈尊成道の勝地にして、靈山會場に異ならず、西北は蒼海浪上洋々として遙にこゝろを億國に念じ觀法を九品に澄しむ、其山の狀は獅子に似たり、北面に臥して首を左に回して南顧す、池を穿て口とし、橋は則舌也、額は丘、尾は崎、耳は道、眼は窟、睢は砌、毛は草、髭は蘿、其狀宛然たり、三國の土を聚て壇を築き、一字を建て、釋迦文殊、普賢を安ず、傍に禪室を造り、前に高門を建て、二金剛を寘、左に鐘樓、右に鼓樓、三層塔中には四智佛を畫て安じ、西に藥師堂を作り、東に鎭守の神を祀

る、艮に食堂、坤に開基平居の禪室、山上には龍穴あり、又赤龍淵といふ所には、濱高の靈を祠る、これは行基の系脈百濟王の遠祖也、西門の傍に放生池あり、行基曾て歸路のとき、里の年少、魚を捕て池邊に宴す、戯れに膾を行基に薦む、卽これを喫て池に臨み吐出し給へば、小魚となつて水上に游ぶ、片目魚今にあり、里人奇異の思ひをなす、墳の上に榎あり、初生の時胞を掛る所なり、これを今に誕生木といふ、方田三段あり、これ天下田畔の歩數を撿る法則也、山嶺を一乘菩提峯といふ、故に一乘山と號し、其本生の家地なれば家原寺と呼ぶ、行基の室を淸涼院といひ、神野の南の崎を神崎院となづく、外門には則行基誕生地と榜し、佛塔を香燈木院と號す、都て此寺に名勝十區に遶り、天平丙子年、波羅門僧正、眞金の文殊を、本堂文殊の臺中に藏む、同じく將來の五色の佛舍利は、寶藏に收め、法貴丸(行基幼名)の產髮手遊の辨財天等、每歳六月廿三日、虫拂に拜なさしむ、

參詣

〔親長卿記〕文明十一年三月十四日、詣二家原寺文殊一、見二殘花一詠歌、

山風のさそはぬさきにとはざりし身を恨てや花はちりけり

雜載

〔元亨釋書十三明戒〕釋叡尊(中略)○寬元三年、於二泉州家原寺一、又行二別受法一、(中略)○永仁中、賜二諡興正菩薩一、

高渚寺

名勝　所在　用途

高渚寺ハ、僧行基ノ修行シタル四十九院ノ一ナリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ和泉國大島郡堺南莊ニ在リ、

〔和泉志二大島郡〕古蹟　高渚廢寺(在二南莊一、故址有二乳守小祠一、)

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年十一月辛卯、勅、故大僧正行基法師、戒行具足、智德兼備、先代之所二推仰一、後生以爲二耳目一、其修行之院、總卌餘處、或先朝之日、有二施入田一、或本有二田園一、供養得レ濟、但其六院未レ預二施例一、

由茲法藏湮廢、無復住持之徒、精舍荒凉、空餘坐禪之跡、弘道由人、實合獎勵、宜大和國菩提、登美、生馬、河内國石凝、和泉國高渚五院、各捨當郡田三町、河内國山埼院二町、所冀眞筌秘典、永洽東流、金輪寶位、恒齊北極、風雨順時、年穀豐稔、

名稱　所在　創建　堂塔

南宗寺

南宗寺ハ、和泉國大鳥郡堺南莊旅籠町ノ東ニ在リ、弘治二年、三好長慶、其父元長ノ追福ノ爲メニ、建立スル所ニシテ、僧大林ヲ開基トシ、澤庵ヲ中興トス、臨濟宗ニ屬セリ、

〔國花萬葉記 和泉五〕龍興山南宗寺　寺領百拾石

〔堺鑑 中寺觀〕南宗寺龍興山

開山ハ正覺普通國師大林和尚也、弘治二年丙辰ニ、創建ノ檀那三好修理大夫長慶也、爲先考筑前太守元長入道海雲齋善室慶公建立也、郎南宗寺殿ト云リ、當津顯本寺ニ於テ自害ス、澤庵和尚中興ス、本寺洛陽大德寺也、佛殿ト法堂ト象タル堂一宇有、山門ハ甘露門ト號ス、開山ノ影堂ハ曹溪庵ト號ス、

〔和泉名所圖會 一大鳥郡〕龍興山南宗寺（りようこうさんなんしうじ） 南莊旅籠町の東にあり、禪宗京都紫野大德寺に屬す、開基 正覺普通國師大林和尚、中興澤庵和尚、佛殿 額大雄寶殿清拙和尚筆 本尊中央釋迦佛 左文殊、右普賢、左脇檀達磨大師、右脇檀梵天王、毘沙門天、摩利支天、 昭堂 額曹溪、澤庵和尚の筆、左檀將軍家自國初御代々神牌を安ず、中央普通國師、右檀澤庵和尚、 鐘樓 額座雲亭、天室和尚筆、 山門 額甘露門玉堂和尚筆 方丈 額唐筆、庭古田織部の好 浴室 額澤庵和尚筆 客殿 額作入澤庵の筆、襖畫狩野秀信の筆、 影堂 花林居士の石碑あり、銘澤庵和尚書す、花林居士は堺の先刺史喜多見若狹守忠勝なり、 總門 額龍興山、江寧和尚の筆 牡丹花肖柏塔 當寺にあり 一閑齋紹鷗塔 當寺にあり、此石塔に耳を當れば濤の松音聞ゆる也、 千利休塔 歷代の假墓也 小出吉英影 客殿にあり、岸和田先城主なり、 石河土佐守影 客殿にあり、堺津先刺史也、 塔頭 天慶院、在中庵、四南庵、長慶寺、寶光院、集雲庵、此庵は一休岐紫共に開基し給ふ、晦江庵、德泉庵、此二庵は淸嚴和尚の開基也、移春庵、本源院、厚德庵、瞎春院、

鎮守八幡宮（境内にあり）鏡池（に集雲庵あり）乳守明神社（臨江庵の中にあり、當庵の鎮守なり、俗說曰、應神天皇に乳を奉りし神なり、勸請すとなん、今婦人乳のなきを念て祈るに、靈驗ありとて、詣人群集する也、一說には、道守氏の祖を祀ると也、姓氏錄云、和泉國道守朝臣は八多八代の宿禰の後也、日本紀にも見へたり、又一說には此所の地主神を祭りて、津守明神といひしを乳守と聞て乳汁の靈る願をかけしに靈驗新にして、其奇特ありとぞ、）

抑當寺は、初め舳松の傍にあり、普通國師大林和尙と共に庵を結んで屛居す、三好修理大夫長慶、國師に謁して傾心敬仰シ、則弘治二年寺地を宿院の南に移し、故考三好筑前守元長の功德場として、こゝに建營し、龍興山南宗寺と號す、（元長を贈右大將正二位南宗院殿と稱す、）此時長慶は河州飯森城にあつて、弘治二年、長慶自撿挍して當寺に諸材を運し手斧始をなさしめ、同三年五月朔日、三万貫の領地を寄附す、佛殿、法堂、禪堂、七層塔、鐘樓、經藏、山門、總門、九十二間の回廊、百八軒の塔頭衆寮、寶藏、方丈、小方丈、庫裏浴室、大書院、小書院、對面所、知客寮、施藥所、渡御門、花月亭等まで、堂々巍々として創建ある、同年十一月十五日には、南宗寺の供養とて、導師は普通國師、其外諸山の大德、大檀那は三好長慶御臺簾中、花洛より大臣公卿も來與し給ひて、花月殿に安居し給ふ、遠近の貴賤も竹葦の如く群參して、莊嚴無二の靈場とぞ拜しける、神廟には祖先三好長輝の靈を祀り、神像には長輝の甲胄に弓箭を持たる馬上の像を、長八寸に黃金を以て鑄させ、本社に安置す、（舊地南宗寺の南にあり）其外社頭に十二間の寶藏　建て、長輝の兵器を藏む、社領には貳千貫を附與せられ每歲五月十二日の例祭いと嚴重なり、（已上三好家舊記大意）厥後天正元年、當寺禪院十刹の位に準じられける、當津の大廈にして壯麗たる所、桑田變じて海となるの習ひ、同二年、松永久秀が凶賊堺津に亂入し當寺の黃金像を兼て知けん、これを奪取て社頭へ火をかけ逃去ける、此時堂舍過半回祿の災に及ぶ、又元和元年四月廿七日、兵燹に罹て一字も殘らず燒失す、（此日開山普通國師示寂の日也、人成恠けり、）厥後世上謐りて澤庵和尙再建す、喜多見忠勝、（堺の吏官）小出吉英、（岸和田城主）但陰山名全高等、力を勠て營繕を助く、故に澤庵を奉じて中祖とす、其時將軍家よりも稅田を賜ふて、永く不朽の梵刹となる、元和九年七月十日台德大

相國秀忠〇徳川の台輿當山に入御し給ふ、同年八月十八日、大猷大將軍家光〇徳川の台輿當山に入御し給ふ、爾將軍當山の坐雲亭に渡御ましく〳〵て、遠く西南の海面に連なる紀の海、阿波淡路の島山、北には須磨赤石の佳景を眺望し給ひて、逍遥時を移し給ふ、爾來淨域光輝を増こととむかしにかはらす、以上寺記

寺領

〔和泉名所圖會一大鳥郡〕龍興山南宗寺〇中略
長慶〇三好、中略、同〇弘治三年五月朔日、三万貫の領地を寄附す、

〔堺鑑中寺觀〕南宗寺龍興山〇中略
中比秀吉公ノ御時、封田一百十石下シ玉ハル、當御代ニ至迄、相違ナク御朱印頂戴シ奉ル、

〔寛文四年御朱印帳禪宗大德寺派〕百十石　和泉元和元年八月廿八日　南宗寺

寺職

〔本朝高僧傳四十四淨禪〕武州東海寺沙門宗彭傳
釋宗彭、號澤菴、〇中略往泉之大安、侍眞如文西仁、是時一凍和尚居陽春及南宗、慶藏密室、遂作跨竈、分座大德、前後住洛之德禪、大仙、泉之南宗、慶長己酉、出世大德、住山三日擲鼓退席、〇下略

〔東武實錄〕寛永六年七月十四日
古相國樣御下知、大德寺諸法度五箇條、〇中略
右所中無餘儀思召候者、三百餘年仕來候、如前々入院開堂執行申樣、御分別所仰候也、
芳春院玉室　南宗寺澤庵　龍光院江月

大威德寺

大威德寺ハ、和泉國和泉郡牛瀧山ニ在リ、役行者ノ開基ニシテ、僧空海、惠亮等ノ修練スル所

ト稱ス、因テ一山二宗ニ分レ、眞言宗ニ屬スルヲ本坊方ト云ヒ、天台宗ニ屬スルヲ穀屋方ト云ヘリ、

名勝所在

〔和漢三才圖會 七十五 和泉〕和泉郡 神社佛閣名所

牛瀧山大威德寺　在牛瀧庄　四十坊 本坊方眞言、穀屋方天台、

役行者草創、弘法大師、惠亮和尚所經歷也、峰有高座石、行者來于此修練、於第二瀧上彫刻不動尊、今明王堂是也、有巖窟甚深幽多烈風、號風穴、每年六月十五日轉讀大般若、以祈五穀、山有求聞持堂及寶塔、弘法大師所建也、叡山大乘坊惠亮和尚來于此山、修大威德法、時大威德尊出現於第三瀧、其所乘牛、潭心臥石是也、其石長四丈、

創建

〔泉州志 三〕牛瀧山

牛瀧山大威德寺者、先佛之所游化、靈神之所窟宅、役行者草創之、弘法大師、惠亮和尚所經歷也、古者山名石藏五山、有轉法輪峯、斯處昔釋迦如來轉法輪處、峯有高坐石、是佛之猊座也云、役行者來于此修練、於第二瀧上彫刻不動尊安置之、今明王堂也、行者納七寶于巖窟爲山鎭、窟中杳冥多烈風、號風穴、深可二十町、往昔天下大旱、帝使占之、曰、鳳城之坤隅有瀑布、雲霧彌漫其上、禱雨于彼地、則必獲之、於是差勅使禱雨、須臾若有應、沛然雨下、帝大悅、重遣使者、於瀧上奏樂以賽之、樂原其地也云、六十六州亦分入田圖于此山、號六十六段田、自茲尊瀑布名嚴重瀧、從爾以來、每歲六月十五日、轉讀大般若、以祈五穀、救旱魃、山有求聞持堂及兩層寶塔、弘法大師之所起也、叡山大乘坊惠亮和尚、曾來于此山、修大威德法、爾時大威德尊從第三瀧涌出、其所騎牛、潭心臥石是也、其石長四丈、瀑布挾之、飛流恰似齊牛濯出水、惠亮感喜瞻仰、乃坐於大日岩淵石牀、一刀三禮造大威德尊像、以爲持尊、至此呼嚴重瀧曰牛瀧、第一瀧高二丈、第二瀧高十丈、第三瀧高四丈、此三瀑布水源、有四十八瀧、曲折奔流、古老相傳、瀧之高低四十八、故得斯名、山中異迹甚多矣、續也

山有二宗四十坊、本坊方爲眞言、穀屋方爲天台、將軍家賜證印、免除樵采地租稅、近來楓樹擁一山、最奇絕壯觀也、騷人墨客、不可不到、山林十八町十六町、

〔敎令類纂初集九十一〕寬文八戊申年四月十二日、

泉州牛瀧山本坊と穀屋方勸進帳文言ニ付而、開基諍論之事、令糺明申渡之覺、

牛瀧山者、元和元年以來、眞言再致相續、弘法大師之流不絕、開山者役行者、本尊作者惠亮和尙之由、勸進帳文言可載之旨、本坊申之、穀屋者、惠亮開基無紛之間、役行者開闢、幷弘法之法流之儀、可除之由申立、雙方遂穿鑿之處、當山之緣起、幷享保年中勸進帳之面、惠亮修法、又者造立大威德像之趣有之而、開基之文言無之、又役行者開闢之儀、證文不慥、然間、惠亮之儀者、緣起享錄勸進帳之文言之趣用之、弘法之儀ハ、寬文元年裁許書出之節、本坊者眞言、穀屋者天台相極、其上於當山堂塔影堂有之條、眞言法流之趣用之、勸進帳可載之、但本坊方爲衆徒之旨、勸進帳認之、勸進之儀者、先年雙方江取替書物之通、彌不可有相違者也、

寬文八戊申年四月十二日

甲斐守判　山城守判

內膳正判　但馬守判

大和守判　美濃守判

本坊

別紙穀屋方

福德寺

福德寺ハ、初メ安樂寺ト稱ス、和泉國和泉郡國分村ニ在リ、聖武天皇ノ皇后、藤原光明子ノ建

立スル所ト稱ス、仁明天皇承和六年、勅シテ國分寺ト爲セリ、

〔和漢三才圖會 七十六 和泉〕和泉郡 神社佛閣名所

國分寺　在國分寺村

今號福德寺、昔伽藍也、礎尙存矣、初名安樂寺、承和六年、勅爲國分寺、日本後紀

緣起云、中古有一沙門、號智海上人、宮郡浦田村之產住當郡宮里庄瀧山、勤修佛乘、一時庶來、而舐上人之溺、懷胎、覺生一女、上人不忍視之、使隣嫗慈育、小女七歲、時嬉戲于路傍、大臣不比等、爲勅願使詣槇尾寺、歸程見一瑞氣、是乃從少女全身放光也、大臣下乘見之、體貌殆殊麗矣、卽稱光明子、請于嫗同與歸也、毎侍君主傍、得恩寵、天平元年八月立爲后宮、酷好佛法、營許多寺院、當寺后宮之家鄉也、故構伽藍號安樂寺、後勅爲國分寺、瀧山藥師堂、當寺之奥院也、

〔和泉志 三 和泉郡〕佛刹　國分寺 國分村、今稱福德寺、承和六年五月、以和泉郡安樂寺、爲國分寺、○下略

〔續日本後紀 八 仁明〕承和六年五月癸未、和泉國言、以在和泉郡安樂寺、爲國分寺、置講師一員、僧十口、但不置讀師、依請許之、

〔延喜式 二十一 玄蕃〕凡和泉國安樂寺、○中略能登國大興寺、並各爲國分寺、置僧十口、

〔延喜式 二十六 主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻○中略和泉國○中略國分寺料五千束

名稱　所在　沿革

寺格

用途

施福寺

施福寺ハ、舊ト槇尾寺ト云フ和泉國和泉郡槇尾寺村ニ在リ、欽明天皇ノ勅願ニシテ、僧行滿ノ建立スル所ナリト稱ス、始メ眞言宗ナリシガ、後天台宗ニ改ム、西國順禮三十三所ノ一タ

リ、

〔拾芥抄下本諸寺〕三十三所觀音〇中略眞木尾和泉、等身千手、弘法大師、

〔書言字考節用集一乾坤〕槇尾寺マキノヲデラ泉州和泉郡、號施福寺、

〔塵嚢抄十二〕三十三所トハ何々ゾ〇中略

施福寺、槇尾寺ト云千手和泉國和泉郡ニアリ、欽明天皇御願、行滿上人建立、三間四面堂也、〇下略

〔和泉志三和泉郡〕佛刹　施福寺在卷尾山、因呼卷尾寺仙藥院、

〔和漢三才圖會七十六和泉〕和泉郡神社佛閣名所

卷尾山施福寺　在槇尾寺村、號仙藥院、

本尊　彌勒丈六　左右觀音文殊各五尺、又有四天王像、

當山、元卷尾大明神鎭座之靈區也、

開山　行滿上人、未詳何時人也、役小角納法華不輕品、行基僧正起立秘法卒都婆、勤操僧正嘗在和州石淵寺、始營法華八講、後再營于當山、弘法大師落髮於當山、老後再來修求聞持法、捨身嶽隱水等、皆弘法之遺蹟也、〇中略

當山水乏、空海誦神呪、清水忽涌出、號之智惠水、當山有四十八瀧、三十六窟、八峯、四嶽名區、

千手觀音　法海上人作之　西國巡禮第四番

法海上人、行基之弟子也、在于當寺、時有客僧事上人、一夏九旬摘菜汲水、將去則乞其傭賃、上人客惜不與、僧忽然去到海上、顧曰、汝不知乎、我此普陀洛山本主也、乃化千手觀音去焉、上人驚感還山、作千手像安之、自此後每十月十六日至十八日、修佛名經會及法華、

〔和泉名所圖會三和泉郡〕卷尾山仙藥院施福寺槇尾山にあり、已前は眞言宗、近年寬文年中より天台宗と成、西國巡禮所第四番なり、

本尊彌勒佛丈六文殊左の脇に安す、長五尺、千手觀音右の脇に安す、長五尺、法海上人の彫刻する所也、又側に四天王を安す、阿彌陀堂本堂の南

にあり　不動堂本堂の戌亥にあり　大師堂弘法大師を安す、本堂の北にあり、　巻尾神社本堂の南上壇の地にあり、當山は巻尾明神初て鎮座したまふ霊地也、貞観六年秋七月従五位上を授く、　開基行満上人時代詳ならず

如法嶽役小角法華二十八品を分て、葛城の峯に置、當山には不軽品を収む、故に如法嶽といふ、　卒都婆峯本堂の西四町許にあり、大僧正行基懺悔滅法の本尊塔を立、此ゆへに名とす、　捨身嶽懸水俱に本堂の南にあり、弘法大師石淵の勤操を師として當山にて落髪し、延暦年中、満願寺を建て、手自彫刻の千手観音を安置し、求聞持の法を修す、此捨身嶽懸水等は、弘法大師の遺蹟也、　清水瀧本堂の西廿町許にあり　兜率嶽本堂の北にあり　柴手水不動堂の前にあり、當山に水乏しければ、弘法大師の神呪を誦して祈り給へば、清水忽涌出る、これを智慧水といふ、又檜の枝を檜の上に挿て誓て曰、我願ひ空しからずんば、此木榮ゆべしと宣ふ、果して繁茂す、今檜の木に檜葉生じたる木、此山に多し、　覺超塔兜率嶽にあり、叡嶽の覺超は、當國業生の地なり、遺言によりて骨を當山に納む、　吉祥院舊蹟當山にあり、縁曰、むかし吉祥天女像を本尊とす、又愛染堂あり、俱に遺蹟今なを存せり、後世天女の像を、日根郡近義郷吉祥園寺に遷す、　名産松茸槇尾松尾の二山より出る味佳也、又茸の名物なり、多く父鬼村より出す、

夫當山は四岳八峯層巒蒼翠として、宛蓮花の如し山中に四十八瀑、三十六洞あり、むかし弘法大師沙門勤操に逢て落髪し、虚空藏求聞持の法を受、沙彌の十戒を授り、三論を究め、槇尾山寺に在て、初の名を教海、又如空と改む、延暦十四年東大寺の壇に登て具足戒を受、又空海と改む、其薙染の黒髪、當寺の什寶にあり、又空海渡唐の時、青龍寺の惠果阿闍梨より傳來し給ふ眞言秘密の論書、又歸朝の時平城帝へ奉りし將來上表あり、又後鳥羽院の院宣、後堀川院の宣旨、これみな寺田免除の證也、四條院延應年中には、横山の郷を以て、灌頂の用途として、仁治元年に灌頂堂を建給ふ、後深草院は建長二年に、別當前大僧正行遍をして、結縁の灌頂を修し給ふ、同三年には、宣陽門院の御願によつて万花万燈會を行れ、其用途として吉見の免田を配せらる、同門院巻尾寺の見十一人を伏見御所にめして、五雙の童番を勤せしむ、御見聞衆には、鷹司女院、近衛殿下兼經公也、正嘉の頃には、後深草院御寄附の法華經、これは後白河院常に御讀誦の經書也、金銅の阿字、同愛染明王、幷に種子千體、同普賢像、不動尊、佛舍利三粒、寶塔に籠られ、當山に收給ふ、今寺庫にあり、又法大師より傳教大師へ贈らる書草一通當寺にあり、なを靈佛什寶擧るに遑あらず、今坊舍七十

宇ありて、免除の租税纔六石なり、然れども山林若干廣ふして樵夫を業とし、近郷の農家にこれを交易す、春は櫻の糸縁にして、初花匂ふ頃より、諸國の巡禮連り詣して、堂前に向ひて詠歌を唱へ、あるは坊中に宿かりて、一山の賑ひ也、抑此山は當國の高山にして、路遠にして雲封じ、日の出る事遲し、和泉の方より登るには溪川を右にし左にして道狹からず、後山より河内路へ下るには、山路細にして嶮難、石を車に歩行を惱み煩ふ、これを巡禮道とて、難行の一なるべし、これより瀧ヶ畑といふ所へ出て、天野光の瀧、高野山の街道也、山嶺は劉阮が藥を采し天台山に比して、雲霧山に滿て鳥雀なく、水聲澗に添ふて笙簧あるの靈地にして、眞に殊勝の寶閣なるべし、

寺領

〔寛文四年御朱印帳 天台宗〕五石　元和三年九月三日　和泉 槇尾寺

用途

〔延喜式 二十六 主税〕諸國出擧正税公廨雜稻 ○中略 和泉國 ○中略 卷尾寺觀音堂料五百束

寺制

〔施福寺文書〕禁制　泉州 槇尾寺

一當手軍勢甲乙人等、濫妨狼藉之事

一放火之事

一山屋敷免許之地候間、竹木伐取事、堅令停止了、

右於違犯之輩者、速可處嚴科候、萬大閤如御朱印、執沙汰尤候也、

慶長十九十月廿二日　花押

雜載

〔元亨釋書 一 傳智〕釋空海 ○中略 甫冠歲就操 ○操勤 落髮受沙彌十戒、研究三論、時操在泉州槇尾山寺、○下略

〔和田文書 二〕和泉國岸和田侍從房快智申軍忠次第

一延元二年四月十六日、楯籠當國卷尾寺、構要害、令警固御所尾、同廿六日、令下向横山、燒拂凶徒住屋畢、○中略

以前條々、軍忠之次第、當國守護代大塚播部助惟正、并八木彌太郞入道法達、土生彥次郞義綱已下、同所合戰之間、所令存知也、所詮且爲後日龜鏡、且爲成弓箭之勇、欲賜御證判、仍粗言上如件、

延元二年八月日

松尾寺

松尾寺ハ、和泉國和泉郡松尾寺村ニ在リ、役小角ノ草創スル所ト稱ス、此寺舊ト勅願寺ナリシガ、後織田信長ノ兵燹ニ罹ル、豐臣秀頼之ヲ再建スト雖モ、其規模甚ダ狹少ニシテ、復タ往古ノ比ニアラズ、今天台宗ニ屬ス、

名稱所在

〔伊呂波字類抄〕諸寺　松尾寺　在和泉國、沙彌尋祐往生於此處、件夜忽有火光、是何光哉、若失火歟、村人見驚、後聞尋祐入滅之瑞、皆致隨喜、

〔和漢三才圖會〕七十六和泉　和泉郡神社佛閣名所

阿彌陀山松尾寺　在松尾庄　寺領十七石三斗餘、役行者草創、後泰澄和尙建立、累世勅願寺、境內五町、八町、官稅免除、本尊如意輪觀音、

〔和泉志〕三和泉郡　佛刹

松尾寺　松尾山、又號阿彌陀寺、承和六年、勅爲定額寺、寺有元曆、延元、貞和、觀應、明德、應永、正平年間勅書、國宣數章、寺中記曰、松尾寺、昔日修法驗者、僧居于此、又以當寺僧、爲和泉國講師讀師、見穴師寺古記、

〔日本地誌提要〕六和泉　佛寺

松尾（マツノヲ）寺　和泉郡松尾寺村、天台宗、役小角開基、僧泰澄創建、慶長七年壬寅、豐臣秀頼再建、寺域三萬四百五拾坪、

〔和泉名所圖會〕三和泉郡　阿彌陀山松尾寺　松尾山にあり、山中の林木蒼翠たり、天台宗、

堂塔

本尊如意輪觀世音　役行者の作、長貳尺許、　開基役優婆塞　本願は用明天皇、中興は越の泰澄、累世の天子綸旨を賜ふて勅願寺とし、數代の將軍命令を賜て祈願所となし、官役免除あるなり、いにしへは堂塔、伽藍、巍々として聳たり、後世根來の一亂に、佛閣坊舍回祿の災に遘ぶ、慶長七年豐臣秀頼公再興あるといへども、往古の礎石より見れば十が一也、精きは佛國寺の長老百拙の撰書ある松尾寺の記に見へたり、左に抄記す、

三所權現社（本堂の上壇にあり、祭神熊野、白山、吉野藏王權現也、勅額正一位三所權現、越の泰澄勸請す、）

春日四所明神社（三所社の側にあり、神護景雲二年、常陸國より大和の三笠山に遷座の時、暫くこゝに息給ふ地也、出合觜といふ、）山王社（本堂の左）不動堂（本堂の右）善女龍王社（本堂の北）經堂（本堂の南）首堂（樓門の側にあり、相傳源平戰死の時、髑髏を當寺に納む、白骨累々として今尚存せり、）樓門（石壇の上にあり、西向、）

泉州松尾寺記

泉之松尾敎寺、號山曰彌陀、層巒沓嶂、彷彿乎外郭、中岳蜿々、其勢若老龍之偃、松尾之稱蓋顯之耳、曩者僧在用明之帝心、權輿於役小角、中興越泰澄、世唱台衡道、隸于北嶺、北嶺先德多辨道於此、蓋自尊意始、意者圓珍之高弟道譽冰青、所謂役君、澄公、咸善慧寶誌之流亞、神異難測、原夫天武帝白鳳元年、小角躡屐而始至、精修三天合行法、至第三夜、感得三天降臨星斗焜熠林巒、乃摹天像以稱敎聚三天、自謂吾於過去、嘗瘞五穀於此崗、故今因緣契遇也、至第七日、墜石自空而燭、角探光果獲靈材、遂刻如意輪像、至今安本殿、尋而澄公戾止棲影、寶構鼎立、且建護法祠、褒崇三所權現、而後鎭四所山王、水旱、疵癘禱禳響應、坊舍次第皆輪奐、添奉聖勅、嚴設兩季梵筵、五日三十座論擊々林嶽、壯規宏模、洛陽以南鮮儷、元曆初、平氏族、據攝之一谷、源賴朝使弟範賴義經、犄角以攻城、經有信艾之智、車旗鼓涉險阻、肉薄擊其不備、城陷死者如亂麻、乃載首級三大艦、送葬宇其上、噫噫二將亦知周澤所以及朽骨邪、俗曰首堂、後醍醐帝爲平高時所襲、狩隱岐島、事平、帝重祚、特勅賜大寶寺美、賜額於四所祠、自爾南朝頒綸綍寄負郭、不啻南廷、而自尊氏至義持、世降帖而不絕、天正中、平信長盟主群雄、三年、帖又效足利氏、五年、立牓以禁愚民入寺芻牧及兵卒暴掠、其崇敬差倍蓰於舊、九年三月、遣命寺田松浦兩將、縱兵逐僧放火佛閣亡有子遺、唯其首堂者嶷乎兵燹中耳、時有日輪院長瑜也者、爲衆領袖、携一漆匣、突然冒矢石遯去、若宗祖法器、歷朝宸翰等尙存者、蓋瑜之功也、微瑜玉石俱焚、瑜時八十一、又略紀其始末、嘆過剋濁、其慷慨志氣、令人想象以寒慄、嗟乎瑜實疾風之勁草與、如信長先敬之深、而毀之何劇也、長

塵淺井氏、後侵略延曆寺、焚蕩殆盡、寺隷于延曆、抑殃及池魚也與、無何長見弑、豐臣秀吉立、文祿中、令発租稅、慶長七年、秀賴再造、瓦礫發光、粗復舊觀、而較之往昔地圖千礎萬楹、猶如文軒與敝輿也、遂乎東照神君、綏撫海內、准文祿、而後遞代恩令、繩々書一、不亦韙哉、是玆闔山衆商議、使紹介齎璩之諸器、抵洛訪藤泰通曰、吾寺阨於天正變、舊誌散佚、唯此靑甄閱人如傳舍、是眞乎、如卞璧之泥石、是贋乎、似周朴之於璞、伏承陽明准后殿下、閔覽見徹而分清濁、洵當代龍門也、冀君爲之地、倘使殿下垂慈鑑、是天所以幸於吾門矣、通因稟殿下曰、於穆南帝之御茂哉、足利之令敬之哉、其佗贋夫識之者也、門衆皆稽首、又謂通曰、今日之遇、百代之一時也、今復不紀、他日湮然、將甚於今日、爾爲之何如、通謀之余、余曰、吁與之與廢數焉耳、堂々祇洹由鼠嚙灶、七層都盡唯於大圓覺爲伽藍、刦火不能燒、毘嵐不能撼、何區々文字之有而認筌得魚、假筏到岸則文亦何廢、嘗聞千羊之皮、不如一狐腋、百斤之鐵、不如一金具、苟數竟唐詐譎之說而眩俗眼夸里閈、君子乃不取、或雖蠹簡斷墨及芻蕘之言、擇其可采、攫其可舉、庶幾乎足傳於後、文之不煒、余何媿焉、通曰可、闔衆亦同力請焉、通者陽明家舊臣、老於洛之柳巷、稱夕翁、與余契於方外久矣、於是直筆爲記、○中略

享保十六年龍集辛亥小春　前佛國沙門百拙元養撰并書

寺格

〔松尾寺文書〕和泉國松尾寺爲御祈願所、宜奉祈天下太平者、天氣如此、悉之、

延元元年八月十一日　左中辨花押

衆徒等中

爲先朝御菩提、每年修結緣灌頂之由、被聞食了、尤以神妙者、天氣如此、悉之以狀、

正平六年九月九日　右兵衞督花押

松尾寺々僧等中

寺領

〔松尾寺文書〕和泉國大泉莊領家職可令知行者、天氣如此、悉之以狀、

延元三年十月廿日　左少辨花押

松尾寺々僧等中

和泉國春木莊唐國方刀禰職、并岡太郎資房跡、爲祈禱料所、所被寄附當寺也、殊可抽精誠者、天氣如此、悉之以狀、

興國二年八月七日　右中將花押

松尾寺々僧中

〔松尾寺文書〕花押〇足利義政

和泉國松尾寺并寺領同國所々散在田畠等段錢以下臨時課役事、任去永享十一年七月廿六日御判之旨、所令免除也、早爲守護使不入地、寺家彌可令領知之狀、如件、

寬正二年五月十八日

〔寬文四年御朱印帳天台宗〕十七石三斗餘　和泉松尾寺 元和三年九月三日

〔松尾寺文書〕當寺境內殺生事、任往古之例、固可加禁遏者、天氣如此、悉之以狀、

正平十八年二月十九日　左少辨花押

松尾寺々僧中

禁制　泉州松尾寺

一軍勢甲乙人等、亂妨狼藉事、

一伐採山林竹木事

一放火事

右條々堅被停止訖、右於違背之輩者、忽可被處嚴科者也、仍下知如件、

天正五年三月日　朱印〇織田信長

雜載

〔松尾寺文書〕祈禱事、任關東代々之例、於當寺殊可被抽精誠之狀、如件、

貞和三年五月十九日　花押○足利直義

松尾寺々僧中

（付箋）吉祥院殿

泉州松尾寺事、爲祈願所可致精誠之狀如件、

永享元年十二月二日　花押

當寺々僧中

〔白石紳書八〕一谷長右衛門云、和泉國丹波谷松尾寺と云を、土俗かう。べ。堂。と云也、和州法隆寺の大工など來りて見る、其時は昔の儘にて有が故也、傳に平家の一谷破れの首共を埋めし堂也と云、三間四面計りなるが、恰好よりは椽の高き也、椽の下は悉く髑髏也、昔は板屋なるを、後に銅瓦にしたりと見えたり、外と椽後に拵へしと見ゆ、何物のいたづら事にや、石を置て其上に骨の有をば、大將の首なりなど云也、但昔よりのまゝなるも知らず、粉の如くに碎け有、其中に昔のまゝなるも有、又すぐれて大きく厚き骨なるも有、めづらしき事也と云々、

名稱　所在　創建

久米田寺

久米田寺ハ、又隆池院ト云フ、和泉國泉南郡久米田寺村ニ在リ、僧行基ノ開基四十九院ノ一ニシテ、今眞言宗古義派ニ屬ス、

〔和泉名所圖會三泉南郡〕龍臥山久米田寺　久米田寺村にあり、眞言宗古義、又隆。池。院。と稱す、行基開基四十九院の中也、

〔泉州志四〕隆池院久米田寺

堂堰

行基自記緣起云、當池院者、一國命珠、万民依怙也、堅牢地神、現黄牛而曳埦、日月星辰、示白人而固堤、所以大聖老人、運鷲峯海會之土築之、善哉童子、荷清涼山堀之壤加之、況國中神祇乎、何況州內寮元乎、一天聖主、降勅詔而遂行幸、万乘文武、捧官符臨命池、內大臣某殊致功、光明皇后勝加力、遂以去神龜二年乙丑二月五日、始堀寶池、以天平十年戊寅孟秋成功、滿願畢、五間四面堂一宇、奉安置釋迦如來、普賢、文殊像各一體、塔婆一基、鐘樓經藏僧房二宇、餘房二十宇、常住僧之坊也、爰親父高志定知與貧道、經奏聞達州吏、定敷兆限四至、所謂東限角河流春木峯幷上津川東峯七層峯、南限葛木横峯、西限松村登路幷延年峯又坂切上、北限熊野詣大道、募件四至內田畠地利、須爲佛聖燈油住僧依怙云云、綸言如汗、王旨無返、末世後生弟子、堅守此等誓禁、勿違佛法王法遺戒、抑池底遊魚、幷鱗戲叢、池表好鳥、幷翅遊波、遙開圍圃、移曼陀池之種、樹列青青、編圃生樹之春、加之見美花而不念本尊者、是不修之甚也、聞冷風而不觀肉身者、又觀行之闕也、天長地久之御願、誦諸行無常偈、鎭護國家之祈禱、致佛名懺悔禮、將來末世弟子、見荷葉之株、識人身值佛法生死最後之生也、再勿改無窮流轉、修佛法利迷生、證大菩提之善根也、忽息歸源之淨業、所以水田三百町、山林千町、以斯寶池加修理、預斯法水利益之民、懸斯池流餘水羞、必仰法力驗、又欲命固及龍葩之曉、遠爲停止將來末代違亂、所記錄如件、天平年戊寅十二月十八日、

〔和漢三才圖會 七十六和泉〕泉南郡 神社佛閣名所

隆池院久米田寺 在八木鄉〇中略

本尊釋迦 普賢、文殊、 鐘樓、經藏、坊舍、二十餘房、

〔久米田寺文書 一〕中興勸進牒

和泉國隆池院住侶等敬白

請特蒙一寺氏人當國庶民都鄙遠近貴賤道俗廣恩修復堂舍狀

寺格

右當寺者、釋迦善逝安置之仁祠、行基菩薩建立之精舍也、〇中略然間顯轍移以五百廻、鐘磬未絕、雁宇廢以幾多歲、棟閣共傾、所殘者釋迦三尊、塔婆一基、山中書生之靈像、寺內本願之眞影而已、斯外鐘樓經藏各以一字、僧坊禪室二十餘宇、纔有礎石、空欠梵舍、會龍像有燥濕口口之愁、龍象無經行止住之安、於是支壞補缺之情尤懇篤、豈陵覆濟之思雖庶幾、貧道之力難覃、修營之功爭成、因茲專蒙十方四衆之供慈、將遂舊製新巧之大願、偏是奉爲朝廷艾寧、天長地久、尊卑檀那增壽與樂也、抑有買取寺領之葭、令廻施寺家之後、數年雅落之程、草木埋地、斯時恭敬之際、蓮花發池、紹隆迎期之趣、緇素喜而感激、蓋隨蓮之開否、有寺之興廢之故也、且又本願聖靈殊開願門、被築菩提誓願、而日爲護持王法也、爲利益衆生也、若身、若手足、觸此水、至于微細有情、可成无上菩提之良因云々、甚深之旨、獻喜銘肝、我聞、一掬之施、一葉之供、終不壞滅、則於加土木於伽藍之大厦乎、又聞、一滴之力、一撮之志、終不怨虛、則於容治露於三寶之巨海乎、有小因者有大果、有陰德者有陽報、於戲元和居士之修善山寺、便是文殊師利之權化也、行基菩薩之闢隆池院、豈非文殊師利之後身哉、內證雖同、外現於勝者乎、仍勸進如件、敬白、

弘安三年四月　日　　　　隆池院住侶等敬白

中興開山顯尊律師染筆　泉州龍臥山久米多寺隆池院什物

〔久米田寺文書　一〕太政官牒狀

太政官牒和泉國隆池院

應以當院爲御祈願所事

右太政官今日下治部省符偁、得彼院住侶等去月廿一日奏狀偁、謹考案內、以諸嫩若爲御願寺者、皇家之流例、佛閣之先規也、爰當寺者、行基菩薩之祐寂場也、四序運轉之徂景雖年舊、釋迦如來之安靈像、衆生濟度之方便猶日新、當致其草創之期、堅牢地神現黃牛而曳塊、爲結彼華界之刻、日月星辰示

白人而固堤、或大聖老人運黒鷲嶺之土築之、或善哉童子荷青冷山之壤加之、況亦聖武皇帝降紫泥以促臨幸、光明皇后凝丹府以致歸依、神龜二年之春、堀池水兮表驗、天平十載之秋、感土地兮成功、加之春日神之爲鎭守也、冥感掲焉、秋篠子之企勤修也、止住相勵、倩憶權者化現之奇瑞、未聞異域本朝之先蹤、然間星霜多推移、寺院悉傾危、所殘者釋迦三尊、塔婆一基、地神所現黃牛像、本願異彩此外鐘樓經藏各一宇、僧坊禪室二十餘宇皆欠、堂閣徒殘礎石、寺領之田疇多謝、僧衆之依怙尙乏、且興絕之敎跡、將勤廢之行法、於戯四海太平之代也、壹垂聖日之恩輝、三寶紹隆之期也、彌仰梵風之感應、望請、天恩因准先例、以件隆池院可爲御願寺之由被下綸旨者、奉祝寶祚於九重之雲、永傳白葉於三會之月者、正二位行權中納言源朝臣具房宣、奉勅依請者、省宜承知、依宜行之者、院宜承知、牒到准狀、故牒、

弘安五年五月三日修理東大寺大佛長官正五位下行左大史兼備前權介小槻宿禰牒

從四位下行左少辨平朝臣

〔久米田寺文書一〕寺領留記坪付

隆池院字久米多寺　住僧貳口

和泉國行基菩薩肆拾玖院內寺領流記坪付事

右院緣記、久米多池院、漑水之田有千餘町、好農業天、精勤耕作、各乏水事、歷服苗之苦、以天平十年二月二日、其堤上加修理、臨時所起之院、泉南郡上池田村所在是也、

院內地漆段田貳町伍段　伍段在島池尻　林壹所　寺院西北在

總合寺領田伍拾陸町參佰步○中略

右院領流記坪付、勘錄如件、

天平勝寶元年十一月十三日　進主大法師首勇

修行師位法師玄基

修行師位法師法義
修行師位法師淸淨
修行師位法師近豊
修行師位法師光信
持經師位僧福
都維那師平慶

爲證驗佛緣起加本寺署印之、
別當　撿挍　權撿挍進眷　專當　大鎭　小鎭　上座仁高　寺主奉忠
行基薩埵十大弟子僧八人　實名各御自筆
泉州龍臥山久米多寺隆池院什物

寺職

〔久米田寺文書三〕安東氏寄進狀

興福寺學侶衆徒群議偁

泉州久米多寺別當職事、安東入道蓮聖買得之令寄附律院之由、僧衆申之云々、太不得其意、凡彼寺者、自草創之初、爲當寺之末寺、送數百歲、子細異于他條、度々勅裁長者宣等、其旨炳焉也、於別當職者、一乘院家數代相承、則以別當得分、被相宛春日社長日大般若、幷南圓堂每日不空羂索經轉讀要脚者也、於彼寺所捧證文者、實玄阿闍梨沽却狀歟、非當寺住侶之間、寺門實不知其由來、誰則當寺本末之稱號、忽奪寺社嚴重之要脚、可致沽却收公之亂吹哉、不帶門跡幷寺門許可證文者、爭可立申相傳之道理哉、實不足信用者也、於當寺者、行基菩薩眞筆之證文、流記、手繼等、代々證驗皆以令周備、正文進覽之、爲實玄由緒之身者、何不相傳彼證文等哉、就中泉州於亂國之時分者、閣是非之沙汰、大內入部以來、連々歎申入、數通被成下嚴重之御敎書乎、彼寺捧未盡之支證、支申入之條、實非御許容之限、

早任度々勅裁、御教書等、被棄捐彼亂吹、被打渡下地於南都雜掌者、再興嚴重御願、殊可抽御祈禱之精誠之旨、群議如件、

應永七年十二月　日

〔泉州志四〕隆池院久米田寺〇中略

當寺古證文目錄

一大塔宮令旨一通幷楠正成添書　一後高倉院院宣一通　一南朝正平年中綸旨四通　一沙門禪爾勸進帳一卷　一新田義貞贈當寺書一通　一足利尊氏同直義贈當寺書各一通　一鎌倉條目同留主所國宣各一通　一大佛陸奥守高師直師泰贈當寺書各二通　一仁木細川贈當寺書各一通　一楠正儀贈當寺書五通　一鹿園院文書一通鹿園院者、將軍義滿也、　尙未考姓名時代證文數百通

後太平記云、嘉慶二年八月、將軍義滿、遊于紀州和歌浦、歸程宿久米田寺、此日山名之黨、河州平尾合戰得勝利、注進之、

古事類苑

宗教部五十六

佛教五十六

大念佛寺

名稱所在

創建沿革

大念佛寺ハ、攝津國住吉郡平野ニ在リ、融通念佛宗ノ總本山ニシテ、崇德天皇ノ大治中、大原ノ僧良忍ノ開基スル所ナリ、後世屢、衰頽セシヲ、德川幕府ノ中葉ニ至リ、寺僧大通之ヲ興復シタリト云フ、

〔攝陽群談〕十三寺院 大念佛寺 同郡〇住吉郡 平野庄ニアリ、山號大源山、院名諸佛護念院ト稱ス、

〔和漢三才圖會〕七十四攝津 住吉郡 神社佛閣名所

融通大念佛寺 在平野庄 名大源山諸佛護念院

良忍上人 山城北山大原來迎院之開基 天治〇天治恐大治誤 二年四月四日、依鞍馬毘沙門瑞告、弘融通念佛於畿內、徐信服之、而門弟在嵯峨清涼寺、立自己之法、以不合法意稍中絕焉、元亨元年十一月十六日、深江村法明上人因八幡神託再興融通眞法、是中興之祖也、法明之傳、見河州佐太來迎院寺之下、舊因法例、若住持遷化、則當村住人有其系緣者中任鬮選人、俄薙髮爲上人、勤寺役、蓋可融通易行法業、元祿年中四十六世之大通上人以來、勅許紫衣法服、定適傳嗣法弟子、寺門立戒壇石、以爲當寺中興、

〔攝陽群談〕十三寺院 大念佛寺 崇德院御宇、大治二年、大原良忍上人、融通大念佛功德稱名ヲ始テ、宗派ノ本寺ト成リ、和州吉野ノ華供養、每年二月ニ執行ノ時、當國西成郡濱村本山源光寺ヨリ、鏡嚢ヲ、當寺ノ本尊ニ供ス、當寺ヨリ亦末廣ノ扇子一本、苧二束、鏡嚢ニ添テ、吉野山子守、勝手明神、並ニ藏

王堂ニ、手向終テ後天台ノ一箇受之配一山之例也、亦三月子守、勝手ノ神事、當寺ヨリ役仕アリ、彼岸中日、春秋共ニ、毎歳於四天王寺融通大念佛會執行ノ時、吉野山ヨリ、上人ニ供奉ノ役仕、號平太郎是皆融通念佛ノ祖ヨリ傳ルノ古例也ト云リ、海中ノ龍頂キ浮ム鐘鼓アリ、當寺代々傳來、中興祖法明上人附屬ノ寶物也、世號龍鐘、亦鐘方ノ本寺ト稱ス、當寺畫像ノ本尊ハ、八幡神ニ、了忍上人納メ玉フ法明上人授與ノ神託アリ、社家ト法明、互ニ河州交野郡茄子作村ニ於テ傳之、因テ毎年霜月十六日、茄子作ニ佛幸供養アリ、

〔總本山大念佛寺誌下文書〕勅書

勅、良忍上人者、以利益衆生爲己任、以正法久住爲我願、一世歸于道化、皆崇融通之得益、萬民服于德行、誠彰無碍之感應、是以衆罪之霜露、懸佛日忽消、業障之江海、逢船師自渡、實無明晤夜之大明燈、賢劫千佛之一化身也、苟嘉其名德、宜崇飾、因諡曰聖應大師、

安永二年十月六日

勅許檀林永宣旨

攝州住吉郡平野莊大念佛寺者、融通念佛中興道場也、都鄙末寺之僧、學臘成滿之輩、以本山之選、可令申香衣者、依天氣執達如件、

元祿九年九月十六日　右中辨在判

住持大通上人御房〇中略

四天王寺到來祈禱狀

貴寺元祖良忍上人者、彌陀所傳融通念佛之行者也、悉回日本六十餘州、緇素男女、普名帳勸進、於當寺西大門之前、而到春秋二季之時、正從往古、于今無斷絶、修大念佛踊躍歡喜之法、依此因緣、元和年中已來、御當家征夷大將軍、爲壽命長遠、天下安全、依貴寺代々之所願無怠、毎歳從九月始到臘月終、

當寺於金堂、令修行十二座舍利供養、右爲供養物、累年青銅壹萬三千六百十二、被寄附者也、仍如件、

護世四天王寺

自鏡院宣順印

元祿二己巳年十二月二十八日　松玄院珍順印

自性院最順印

攝州平野融通念佛宗本山

大念佛寺上人

同時正會狀

當彼岸融通大念佛之法事、如往古可有執行之由、法寶再興之時節令感悅候、七箇條願望之趣、可任實情、且又如教示、貴寺爲同法故、不可有隔情之義、最成親切之思、興法之助緣可相守候、以上、

攝州四天王寺

元祿二己巳稔正穐旬二日　年頭　穐野印

修禪院印

堂塔

〔攝津名所圖會 住吉郡一〕大源山諸佛護念院大念佛寺 ○中略 住

本尊天得如來 永久五年丁酉五月十五日、大原良忍上人感得の十一尊曼陀羅なり、○中略

不退場 本堂の巽にあり、阿彌陀佛を安す、 齋堂 文殊を安す、 觀音堂 本堂の艮にあり、額圓通殿、 轉輪藏 本堂の左にあり、一切經を藏む、

〔天保集成絲綸錄 五十五〕寛政元酉年二月

大目付江

攝州平野融通總本山　大念佛寺兼帶

勝安院前大僧正

宗派寺格

右攝州平野融通本山大念佛寺、諸堂社修復、幷開山堂再興之儀相願候處、攝州、和州、河州三箇國、去ル午年九月ゟ、去申十二月迄、三箇年之間、巡行勸化御免被成下候內、去ル午九月、公儀御障ニ付相愼不致巡行、去々未年、一統困窮之年柄故、寄進物も有之間敷旨、延引いたし、去春京都大火ニ付、近國迄も勸化等之相對も相調兼候趣ニ付、是迄不致巡行、同年限ニ相成候、依之當酉年一個年延引被成御免、大坂堺計住持直勸化いたし候間、去午年相觸候通相心得、志之輩は物之多少によらず、可致寄進候、

酉二月

右之通可被相觸候、

〔和州舊跡幽考 四添上郡〕大念佛宗大和國之本寺

大念佛宗は、大和攝津河內などにのみさかりにして、外の國にはなし、それ故、大和國の本寺七ヶ寺をあらはす、南都の德融寺、郡山の圓融寺、櫻井村の來迎寺、宇多の光明寺、はいばら村の宗祐寺、白石村の興善寺、東谷村の（二階堂より一里許）大念佛寺也、

總本寺は攝津國がけの郡にありて、大原山諸佛護念院大念佛寺といふ、開基は良忍上人、それより後六代中絕せり、中興開山は、攝津國深江村の法明上人なり、

〔寺鑑 上上無本寺〕 攝州平野郷融通念佛宗總本寺

大念佛寺

右住職、弟子讓り、

總目御禮、御白書院獨禮、（御國之內二疊目）

御暇、柳之間、御老中、　紫衣勅許之御禮、御白書院獨禮、（同斷）

御暇、柳之間、御老中・中、　年頭御禮、代僧、御白書院、御次一同、獻上一束一本、

御暇、檜之間、寺社御奉行、一代僧、時服一拜領、

但正德六年ヨリ寛保元年迄住持二代、繼目、年頭御禮共中絕、

獻上一東一卷　拜領時服三

百濟寺　大別王寺 併入

百濟寺ハ、齊明天皇ノ朝、百濟ノ僧義覺ノ、攝津國難波ニ創建スル所ナリ、今廢寺トナリテ、其舊地ヲ詳ニセズ、或ハ云フ、東生郡天王寺村ニ在リト、

大別王寺ハ、敏達天皇ノ朝、大別王ノ攝津國難波ニ建立スル所ナリ、今廢寺ニシテ、其所在ヲ失ス、

〔攝津志 三 東生郡〕古蹟　廢百濟寺 在天王寺東舊百濟郡

〔攝津名所圖會 三 東生郡〕百濟寺 百濟野の中にあり、今字を堂が芝といふ、或は云、船場久太郎町は、百濟町の訛也とぞ、未詳、

〔日本靈異記 上〕僧憶持心經得現報示奇事緣第十四

尺義覺者、本百濟人也、其國破時、當後岡本宮御宇天皇 ○齊明 之代、入我聖朝、住難波百濟寺矣、○下略

○

〔日本書紀 二十 敏達〕六年十一月庚午朔、百濟國王付還使大別王等、獻經論若干卷、幷律師、禪師、比丘尼、呪禁師、造佛工、造寺工六人、遂安置難波大別王寺、

〔日本書紀通證 二十五 敏達〕大別王寺 所在未詳、

一心寺

一心寺ハ、攝津國東生郡茶臼山ノ北ニ在リ、後鳥羽天皇文治元年、宗祖源空、四天王寺ノ主務慈圓ニ招ルヽヤ、草庵ヲ結ビテ新別處トス、後白河天皇此ニ臨幸シテ、源空ト共ニ、日想觀ヲ修シ給フ、後世衰頽ヲ極メタリシガ、慶長年中、僧上譽之ヲ再興シテ今ノ名ニ改ム、淨土宗ニ屬シ、宗祖舊蹟二十五所ノ一タリ、

名勝所在

〔國花萬葉記攝津六之三〕東成郡神社佛閣名所

一心寺　天王寺西門筋のにしなり、坂松山高岳院一心寺と號す、洛東智恩院の末寺也、

〔攝津志東生郡三十〕佛刹○中略　一心寺〈號曰二坂松山高岳院一、相傳釋源空所レ創、空自筆彌陀像號一鐘、號以二和歌一、世稱二之難波名號一、倶在二天王寺村一〉

堂塔

〔攝陽群談寺院十二〕一心寺　同郡〈○東生〉天王寺村荒陵〈今俗曰二茶磨山一〉ノ麓ニアリ、山號坂松山、院名高岳院ト號ス、開山圓光大師、日想觀ヲ修シ玉フノ來由ハ、文治元年ノ春、四天王寺ノ主務慈圓僧正ニ招レテ草庵ヲ結ビ、新別處トシ勤修年アリ、後白河法皇四天王寺ノ院內ニ於テ、五智光院〈或灌堂、今云灌頂堂・世俗御靈屋トモ云、〉ヲ草創シテ、于是臨幸シ玉ヒ、暫ク新別處ニ御車ヲ留メ、上人相共日想觀ヲ修シ玉ヘリ、誠ニ勝タル靈場也、星霜年ヲ積デ零落ス、慶長ノ始、然蓮社本譽存岸上人〈三州ノ人ナリ〉中興開祖ト成テ、元祖ノ遺風ヲ慕ヒ、千日禁足、晝夜不臥ノ念佛ヲ修シ、一心稱名ヲ以テ寺號ト成リ、同五年ノ秋、東照神君當院ニ入御シ玉ヒ、本譽上人勤修堅固ナル事ヲ賛玉ヒテ、造寺資緣ノ望ヲ尋仰ラルト云ドモ、境內不殺ノ外、更ニ所望ナシト也、因テ殺生禁斷ノ御書ヲ賜フ、山內ノ古樹〈今俗駒繫松ト云、松ノ部ニ分テリ〉ニ御馬ヲ繫セ、千歲ト祝セラレ、御手カラ翰墨ヲ染玉ヒテ、坂松山ト寶額ヲ賜ハル、同年二月七日、神君ノ御幼息仙千代君逝去シ玉ヒ、本譽上人燒香ノ導師タリ、幼君法諱高岳院殿花嶌林陽大童子ト贈號シ奉ル、此院名ヲ則寶額ニ添賜フ、元和四年ニ至リ、領主大敎所高臺院殿當寺ニ入、神君ノ御書ヲ拜シ、墨印ヲ添、後亦木下宮內少輔添之折紙並ニ幼君ノ尊牌各今ニ巍然タリ、

什物

本堂　同寺本尊彌陀、（世曰二釘拔如來一）毘首羯摩ノ彫刻、靈驗新ナル尊像也、善光寺如來ノ寫像一光三尊ノ金佛ハ、方丈ニ安置ス、

御影堂　同所院中ニアリ、元祖直作御影（世曰二積取御影一）ヲ安置シ、不斷念佛ノ道場也、每歲御忌ノ法事、洛東知恩院ト同之、

三千佛堂　同所院中ニアリ、本尊五刧思惟彌陀ヲ安置ス、

二階堂　同所ニアリ、彌陀、釋迦二尊、並廿五菩薩ヲ安置ス、世俗菩薩堂ト稱ス、

觀音堂　同所ニアリ、本尊十一面觀世音菩薩（立像五尺三寸）ハ鳥佛工ノ所造也、

中門　同所ノ中門也、立像丈餘ノ廻向佛ヲ安置ス、凡當寺ノ境內ハ、東西八十間、南北百三十間、歷世除地タルノ處ナリ、

〔攝津名所圖會（東生郡二）〕坂松山一心寺高岳院（茶臼山の北にあり、淨土宗鎮西派、知恩院に屬す、圓光大師廿五靈の靈場其一なり、）

本尊阿彌陀佛（毘首羯摩天の作、立像三尺、又方丈に善光寺の如來を模し、一光三尊の金像佛を安置す）二階堂（本堂の南にあり、彌陀釋迦の二尊廿五菩薩を安す、世人菩薩堂といふ、）三千佛堂（二階堂の奥にあり、五劫思惟の彌陀及び三千佛を安置す、）彌勒堂（三千堂の南にあり）御影堂（彌勒堂の西門內にあり、宗祖圓光大師の影像を安す、世に横取御影と稱す、毎歲正月上旬御忌法事あり、）大師廟所（御影堂の西にあり、祖師法然上人の廟なり、）駒繋松（當寺書院の庭にあり、大將軍圖前、の御時茶臼山の御陣營に御座あらせられ、其時こゝに御駒を繋せらる、株の太さ壹尋半、高さ貳丈計、年歲重ぬるといへども、君子の操をあらはし、霜雪を厭ず、蒼々として千代の色を見せ、御代と共に万歲の壽をたへず、）黒門（當寺の表門也、御城玉造御門拝領、其時より黒色なり、）中門（本堂の東にあり、立像丈餘彌陀の尊廻向佛を安す、）鎮守（愛宕權現祠には將軍地藏を安す、一社天照太神、春日明神、八幡宮を祀る、）古墳（本多出雲守忠朝元和元年五月七日天王寺表に於て戰死、法諱三光院殿岸譽良玄居士と號す、是本多平八郎の舍弟也、次下に双ぶは忠朝家臣塔九基、何れも戰死也、小野勘解由塔、青山五左衞門塔、加藤忠左衞門塔、大屋作左衞門塔、山崎中右衞門塔、中根權兵衞塔、石川中彌塔、臼杵七兵衞塔、大原長五郎塔、○下略）

〔攝陽群談（十二寺院）〕一心寺（中略）○當院第一ノ寶物ハ、後白河法皇圓光大師同席、日想觀修事ノ御製歌、並ニ大師自筆ノ和歌、

阿彌陀佛ト云ヨリ外ハ津ノ國ノ難波ノ事モアシカリヌベシ（是號二波名號一）ト也、此歌夫木集第三十

寺制

四ニ出タリ、亦或時大師眞草行ノ彌陀名號、手ノ左右口ニ筆勢ヲ合シテ三行一時ニ書玉リ、如モ紺紙金泥ニシテ、左ノ方ハ左字也、和國不二ノ重寶、同筆日丸名號、同彌陀ノ三尊佛、聖德太子自畫自影、同六字名號、惠心僧都自畫ノ鈴振如來、同作香合勢至菩薩、張子彌陀、親鸞聖人靈夢如來、元祖要集講談ノ御影、太夫隆信畫之、同大原問答ノ御影ハ、勝法坊ノ所畫、寄合書ノ彌陀經、諸宗高僧ノ書寫、是則東照神君寄附シ玉フノ御經也、日想觀ノ圖ハ、土佐刑部光茂所畫之、此外元祖傳來ノ寶器什物、不遑毛擧、因テ略之、

〔一心寺文書〕一一心寺屋しき、大相國〇德川家康御きしんの外、さういあるまじき事、

一寺中におひて、せつしやうならびに竹木きりとる事あるべからざる事、

一寺はうそむく事あるべからざる事、

以上

元和四年十一月十日　高臺院　判

一心寺本よ上人

一心寺境内之事、高臺院殿御狀被遣候上者、相違有間敷候、爲其狀如件、

元和四年十一月十一日　下間内少輔　利房花押

一心寺本譽上人

四天王寺

四天王寺ハ、又荒陵寺ト云ヒ、又敬田院、三津寺、難波大寺等ノ號アリ、攝津國東生郡天王寺村ニ在リ、聖德太子ノ物部守屋ト戰ヒシ時、提ヲ持國增長、廣目、多聞ノ四天王ニ祈リシニ、終ニ

名稱

所在

之ニ勝ツコトヲ得シカバ、玉造ノ岸上ニ當寺ヲ草創シテ、四王ノ像ヲ安置シ、物部氏ノ貲財ヲ沒收シテ寺財トナス、尋デ推古天皇元年、難波荒陵ノ東ニ移ス、卽チ今ノ地ナリ、當寺ノ緣起ハ、古來傳ヘテ聖德太子ノ作リシモノト云ヒテ、其手印ヲ捺セリ、又太子ノ未來記ト云フモノアリテ、共ニ寺ニ藏セリ、寶塔ニハ佛舍利ヲ藏シテ、舍利會ヲ行ヒ、西門ハ極樂ノ中心ニ當ルト稱シテ、參詣ノ輩皆此ニテ念佛ヲ唱フ、又龜井水、聖靈院、繪堂等モ世ニ著ハル、

〔伊呂波字類抄 志諸寺〕四天王寺 本朝文集云、法號荒○陵○寺○、荒陵郡荒陵東建立、故以成村字寺名、數顧四天大王、故名曰四天王寺、

〔拾芥抄 下本諸寺〕四天王寺 聖德太子、救世觀音、

〔攝津志 三東生郡〕四天王寺、天王寺村、山號荒○陵○、一名三○津○寺○、又名難○波○大○寺○、又稱法○華○園○、又名敬○田○院○、

○按ズルニ、四天王寺ヲ又敬田院、敬田寺ナド稱スル事ハ、下文所引ノ荒陵寺緣起、壒囊抄等ニ詳ナリ、

〔諸乘法數 四法華文句〕四天華梵

東方提頭賴吒　持國　南方毘盧勒叉　增長
西方毘樓博叉　廣目　北方毘沙門　多聞

〔攝津志 三東生郡〕四天王寺 天王寺村、山號荒陵、一名三津寺、又名難波大寺、(中略)推古天皇元年春正月、始造寺於難波荒陵、中央則建金堂六時堂等、殿堂十餘宇、園鐘々樓、五層浮圖、高麗門、伽藍、則石神、荒神、十五社等、十餘殿閣、僧居、則十寶、列諸堂北、鐘樓、則懸黃鐘調之鐘、繪堂、則畫聖德太子爲主者、四聖圖、九品淨土、羅人林羅者、聖靈院、則安太子眞像、所云、

〔和漢三才圖會 七十四攝津〕東生郡 成字用成 神社佛閣名所

荒陵山四天王寺 在天王寺庄、寺領千百七十七石

　秋野坊 名盛順、小野妹子臣、四十二代、權大僧都法印、宰相、

　天台十二坊 一舍利法印、二舍利法印、其外僧侶數多、○中略

寺域

天王寺、初建於玉造岸上、海波壞岸、惡禽來聚、啄損佛閣、是乃守屋大臣怨念乎、其禽啄木鳥也、于今名寺啄(テラツヽキ)、五年後、至推古帝元年、移于荒陵山東、(今之天王寺是也、)東西八町、南北六町、東界百濟郡、(今百濟郡無知者、東門之東、有百濟寺之書跡、)南堀川、西荒陵岸、北三條中小道、

〔壒嚢抄 十三〕次用明天皇二年(丁未)上宮太子、自向澀河館、守屋討テ後、四天王寺ヲ立給、是誠ニ勅願寺ノ最初也、サレバ世ニ流布シテ、佛法最初ノ天王寺ト申ケリ、サレ共、初攝州玉造ノ岸上ニ立給シガ、經六年後、推古天皇元年(癸巳)難波ノ荒陵ノ東ニ移サル、此故ニ荒陵寺共云、又此ニ移サルヽ時、悲田敬田ノ二院ヲ、此內ニ立ラルヽ故ニ、敬田寺共云也、

〔荒陵寺御手印緣起〕四天王寺　法號荒陵寺

荒陵鄕荒陵東建立、故以處村字號寺名、發願四大天王、故曰四天王寺、

敬田院

東西捌町　南北陸町

東百濟郡界　南堀河

西荒陵岸　北三條中小道

乾角建施藥院　艮角建悲田院

北中間建療病院　是參院在寺垣外、

創建本願

〔日本書紀 崇峻 二十一〕二年(○用明)七月、蘇我馬子宿禰大臣、勸諸皇子與群臣、謀滅物部守屋大連、(○中略)大連親率子弟與奴軍、築稻城而戰、於是大連昇衣摺朴枝間、臨射如雨、其軍强盛、塡家溢野、皇子等軍與群臣衆、怯弱恐怖、三廻却還、是時廐戶皇子、束髮於額、(○註略)而隨軍後、自忖度曰、將無見敗、非願難成、乃斮取白膠木、疾作四天王像、置於頂髮、而發誓言、(白膠木、此云農利泥、)今若使我勝敵、必當奉為護世四天王、起立寺塔、蘇我馬子大臣、又發誓言、凡諸天王大神王等、助衞於我、使獲利益、願當奉為諸天王與大神王、起立

寺塔、流通三寶、誓已、嚴種種兵、而進討伐、爰有迹見首赤檮、射墮大連於枝下、而誅大連幷其子等、由是大連之軍、忽然自敗、○中略平亂之後、於攝津國造四天王寺、分大連奴半與宅、爲大寺奴田庄、

〔日本書紀二十二推古〕元年、是歲、始造四天王寺於難波荒陵、○又見扶桑略記

〔帝王編年記八推古〕元年、是歲太子、攝津國西生郡、玉造岸上、草創四天王寺、依守屋追討之時願也、守屋資財田宅皆爲寺領、寶塔、金堂者、相當于極樂淨土東門中心云々、

〔上宮聖德法王帝說〕丁未年六七月、蘇我馬子宿禰大臣、伐物部守屋大連時、大臣軍士不克而退、故則上宮王擧四王像、建軍士前誓云、若得亡此大連、奉爲四王造寺、尊重供養者、卽軍士得勝、取大連訖、依此卽造難波四天王寺也、聖王生十四年也、

〔荒陵寺御手印緣起〕敬田院、斯地內在池、號荒陵池、其底深、青龍恒居處也、以丁未歲始建玉造岸上、故點此地鎭祭青龍、癸丑歲壞移荒陵東、斯處、昔釋迦如來轉法輪所、爾時生長者身、供養如來、助護佛法、以是因緣、起立寺塔此地、敷七寶、故青龍恒守護、麗水東流、號白石玉出水、以慈悲心飮之、爲法藥矣、寶塔、金堂相當極樂土東門中心、以髻髮六毛相加佛舍利六粒、籠納塔心柱中、表利六道之相、寶塔第一露盤、誓手鏤金、表遺法興滅之相、金堂內安置金銅救世觀音像、百濟國王、吾入滅後、戀慕渴仰、仗造顯之像也、在百濟國之時、佛像經律論法眼尼等渡越、是朝相當欽明天皇治天下壬申歲也、復律師禪師比丘比丘尼呪師造佛工寺工等相重渡送、相當敏達天皇治天下丁酉歲也、假生王家、下詔諸國、以諸氏々人々、初令起立寺塔、造寫佛經等、爾時物部弓削守屋臣深含邪心、燒亡寺塔、滅亡佛經、當于斯時、佛法將滅、悲泣懊惱、奏聞陛下、發起軍兵、討伐彼守屋臣、定弓和順惠箭遠逸中逆臣胸、遂以落地、聖攝守屋子孫從類二百七十三人、爲寺永奴婢、沒官所領田園拾捌萬陸仟捌佰玖拾代、定永財、畢、河內國弓削鞍作祖父間衣摺蛇草足代御立、萁原等捌箇所地、都集拾貳萬捌仟陸佰肆拾代、攝津國於勢、橫江鵄田熊凝等散地、都集伍萬捌仟貳佰伍拾代居宅叄箇所、並資財等、悉計納寺分畢、守屋臣、是生々

堂塔

世々相傳破賊、震旦漢土現男女身、弘興佛法、敎化有情之時、從順吾身、如影不離、是身終後歷五百生、發起大小寺塔佛像、崇豎六宗之敎法、今身建立八箇所寺院佛菩薩像、所製法華勝鬘經疏義、每寺施入封戶田園、在其員、荒陵寺施入功封參佰戶、在六國、墾田拾貳萬漆仟伍佰代在播磨國飾磨郡朝來郡鄕墾部等、左右兩條內、逆臣惡禽屢現、搖動人心、迷亂橫狹、凶情掠取田地、滅破寺塔、是亦守屋變現而已、吾與守屋如影與響、寺塔滅亡、國家壞失矣、

〔元亨釋書 二十八寺像〕四天王寺者、用明二年、八耳皇子、率官師討物守屋、官師三却、皇子斬白膠木刻四天王像、安髮中、發大誓曰、官兵得勝、當建護世四天王寺、守屋亡、乃於玉造岸上營寺、安四王像、分物氏貲產納寺、推古元年、移難波荒陵東、故曰荒陵寺、又曰敬田寺、南北一里、東西里餘、有池曰荒陵池、靑龍沕焉、昔釋迦文佛因地轉法輪於此、爾時皇子爲長者、護受供養、故遷此地、寶塔大殿、對極樂界東門、皇子拔髻髮六莖、加佛舍利六粒、藏塔中柱、表救濟六趣也、

〔荒陵寺御手印緣起〕寶塔壹基 五重瓦葺　心柱中籠佛舍利髻毛

四大天王像四體

金堂壹宇 二重瓦葺

金銅救世觀音像一體　四大天王像四體

金塗六重寶塔壹基　金銅舍利塔形壹基

納入舍利拾參粒 僧婆羅門六形

講法堂壹宇 瓦葺八間

夏堂四間、金色阿彌陀佛像一軀、丈六、　冬堂四間、塞觀音像一體、丈六、

步廊壹廻 瓦葺八十間

二重中門壹宇 瓦葺五間

金剛像　力士像

寶幢肆基

二本廊東西　一本廊乾角　一本廊艮角

南大門一宇瓦葺重層五間　東大門一宇瓦葺三間

西大門一宇瓦葺三間　北大門一宇瓦葺三間

食堂一宇瓦葺七間二面庇　文殊菩薩像

毗頭盧比丘像

僧坊貳條

東坊二十四間　西坊二十四間已上瓦葺

甲藏一宇瓦葺

政所町○中略

乙卯歲○推古天皇三年正月八日

皇太子佛子勝鬘

是緣起文、納置金堂內、濫不可披見手跡顯也、

○按ズルニ、此緣起又扶桑略記ニ引ケリ、

(四天王寺年中法事記)諸堂間數

金堂 桁行京間八間六尺二寸 梁行京間七間五尺七寸　寶塔 京間三間五尺四面

二王門 桁行九間四尺五寸 梁行三間四尺　西重門 桁行五間二尺五寸 梁行三間二尺三寸

廻廊 桁行百三十間一尺 梁行二間　講堂 桁行十三間一尺二寸 梁行九間三寸

鐘樓 桁行三間三尺六寸五分 梁行三間二尺五寸　鼓樓同

樂屋桁行五間一尺五寸梁行二間五寸
六時堂桁行十三間五尺五寸梁行九間二尺七寸
湯屋桁行七間一尺四寸梁行五間一尺
西僧坊同
寶藏桁行十二間一尺二寸梁行四間四寸〇中略
同寶殿四間五尺九寸四方
南大門桁行八間五尺梁行四間一尺〇中略
引聲堂桁行五間三尺五寸梁行三間二尺一寸

舞臺六間二尺六寸四間二尺二寸
食堂桁行十間二尺二寸梁行五間一尺一寸
東僧坊桁行二十五間四尺二寸梁行六間二尺五寸
東大門桁行六間八寸梁行三間五尺四寸
太子堂桁行七間二尺四寸梁行五間一尺七寸
繪堂桁行八間二尺七寸梁行二間一尺四寸
短聲堂桁行七間三尺五寸梁行六間

〔和漢三才圖會七十四攝津〕東生郡或用成字神社佛閣名所

荒陵山四天王寺〇中略

堂社數多難悉記省略

金堂如意輪觀音、參詣人每日拜佛舍利
講堂彌陀三尊、及虛空藏、講諸經堂也、
六時堂前有蓮池舞臺面、每度奏伶人舞樂、
食堂文殊大士
五重塔雲水造也、有釋迦塑像四天王木像、
聖靈院太子十六歲像、後有四十九歲像、
三昧堂二歲眞像、稱南無佛太子、
三座社俗曰守屋社非也
經供養堂十一面、始納藏經時供養之堂、
龜井水金堂內有靈井流出、名白石玉出水、
寶藏十一面觀音、數寶物、
萬燈院本尊觀音、在公方家靈堂之南門、
鐘樓鼓樓六時常鳴鐘聲、能應黃鐘調子、
六社宮祭欽明、敏達、用明、崇峻、推古、間人后、〇中略
石。鳥。居。在額小野道風筆題曰釋迦如來、轉法輪所、當極樂土、東門中心、
忍性法師爲當寺長吏時、永仁二年、改木鳥居爲石、〇註略

勝鬘院　郭外在乾方、往昔施藥院之舊地
本尊　愛染明王　多寶塔大日如來

土塔塚社　在南門外〈每年四月十五日、土塔會祭禮甚賑易也、○中略〉近

悲田院　在天王寺之坤乞丐所居也、其魁呼曰長吏、蓋彼等傳云、聖德太子始所立置悲田院也、而都〈聖武〉平安城〈桓武〉所立亦于今有之、以當處爲最初云々、

〔二都巡見記〈攝津徵書十七所載　五〉〕天王寺筋巡見　往來二里〈○中略〉

攝津四天王寺〈○中略〉

五重塔　三間五尺四方、高二十四間三尺、

本尊　釋迦、幷四天王名畫像、

近年、笘屋宇兵衞といふ町人修復いたし候由、

右寶塔、雲水作りと云、飛驒の工の造りし儘なり、各重每に垂木を不用、此堂、むかしの儘にて、兵火に燒殘れりと、五重彫物、其一麟、其二龍、其三獏、其四犀、其五獅子、此五重の塔は、元大和國額田郡眞言宗額安寺に有之を、一代の舍利恩性上人、此所へ引玉ふよし也、右五重の塔、後醍醐帝の御宇當寺へ移す、

〔太子傳玉林抄〈七〉〕傳云、龍水東流號白石玉出水文、龜井水事也、後云、白石玉出水者、出水ハ泉也、白石ヨリ玉ノ如クニ涌出タル水也、東山記云、掬飮龜井水者、遂往大悲施所云々、保胤修行記云、法水東流移龜井泉云々、

〔圓光大師行狀畫圖翼贊〈寺院　五十一〉〕龜井水〈法事記云、堂ノ内ニ影向ノ井アリ、太子此井ニ御影ヲウツサセ給ヒ、楊枝ヲモテ御形ヲカヽセ給フ、今寶藏ニ藏ラル、楊枝ノ御影是也、〉

〔二都巡見記〈攝津徵書十七所載　五〉〕攝州四天王寺〈○中略〉

龜井堂　桁六間一尺、梁三間五寸、　此内に龜井水あり

金堂の下に井戸あり、夫より轉法輪石の下へ流來、此所、二間四方ほど中に、四尺四方程板敷を切

拔、廻り欄干圍有之、四方切石也、此石に、法名等切付有之、龜の形の石口より、清水流、一年此水涌出ることなく、一向流水來らざるゆへ、當寺一舍利、二舍利は、自の不德にて、清水涌出ざるやと、不思議におもひ、さるにても、地中をほり、水道を試しに、本堂金堂の下より流來る所の樋、檜の一尺二寸角二本合たる樋なり、しかるにその水道に、數年の檜の粉溜り、水道を塞し故に、水來らざる也、仍て其水道を能浚ければ、本のごとく水來るよし、二舍利物語也、此水、龜橋の下を流れ、大坂の清水へ流出るよし、誠に名水也

〔菩提心集中〕問、天王寺の西門の念佛は、尤すべき事か何にぞや、　答、尤すべき事なり、　問、たゞ閑かならん處にて、西に向て念佛せば、何れの所なり共さてありぬべし、あながちに、えりくり參りたりとて、何事かは有べき、貴き寺、止ごとなき聖の跡其數あり、天王寺の西門ならんからに、かならず念佛の處にてあるべきかは、若太子の御跡をいはゞ、法隆寺、橘寺も同じ事にはあらずや、答、太子の御跡いづくよりも芳ばし、わが家は西方にありと宣へる、救世觀音出おはしまして、佛を始め行ひ給へり、爾る聖の御跡をだにも尋ずしては、いづこにか求むべきや、太子の御跡の中にも、天王寺これ異なる處也、御手の璽し給へる緣起の文に、寶塔金堂は極樂の東門の最中にあたれりと記されたり、しかれば、東門に向はんとて、西門へ參ることはりなり、

〔日本紀略村上四〕天德四年三月十七日丙辰、難波天王寺燒亡、

〔玉海〕建久二年九月十八日甲子、戌剋、經家卿使天王寺告送云、今日辰剋、念佛三昧院、幷念佛堂等、皆燒失了、仍不及寺中云々、件念佛堂在西門外南腋也、近日熒惑示變、諸社恠異、御占多申火災之由、今果而有此災、尤可恐慎歟、忽召宗頼朝臣、明曉爲御使可參寺門之由仰之、　廿日丙寅、及深更、宗頼朝臣歸來、傳法皇〈○後白河〉御報、火起自二品局云々、餘焰不及寺中、猶珍重事歟、　廿二日戊辰、上皇〈○後白河〉昨日御歸洛、仍巳剋參院、以棟範朝臣入見參、依供花之間、取亂事不謁之由被仰出、余〈○藤原兼實〉申天王寺念佛

堂事等、有服膺之天氣云々、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年八月十三日辛卯、六波羅飛脚參申云、去五日、四天王寺執行一族上座覺順、引‐率二百餘人、欲保天王寺之間、渡部黨相戰之間、覺順已下九十三人被討取訖、餘兵於所々被虜、金堂已下雖放火、皆打消云云、

〔太平記三十六〕天王寺造營事附京都御祈禱事

南方ニハ、此大地震ニ、諸國七道ノ大伽藍共ノ破タル體ヲ聞ニ、天王寺ノ金堂程崩レタル堂舍ハナク、紀州ノ山々程裂タル地モナケレバ、是外ノ表事ニハ非ジト御愼有テ樣々ノ御祈共ヲ始メラル、則般若寺圓海上人、勅ヲ承テ、天王寺ノ金堂ヲ作ラレケルニ、希代ノ奇特共多カリケリ、先大廈高堂ノ構ナレバ、安藝、周防、紀伊國ノ杣山ヨリ、大木ヲ取ンズル事、一二年ノ間ニハ難道行覺ヘケルニ、二人シテ抱キ廻ス程ナル檜木ノ柱、六七丈ナルカブキ三百本、何クヨリ來ル共不知、難波ノ浦ニ流寄テ、鹽ノ干潟ニゾ留リケル、暫クハ主アル材木ニテゾ在ラント、尋クル人ヲ待ケレ共、求クル人モ無リケレバ、サテハ天龍八部ノ人力ヲ助給フニテゾ有ラントテ、虹ノ梁鳳ノ甍、品々ニ是ヲゾ用ヒケル、又柱立已ニ訖、棟木ヲ揚ントシケルニ、招(クルヽ)捲ノ綱ニ信濃皮ムキ千束入ベシト、番匠俄色ヲ出セリ、輙ク可尋出物ナラネバ、上人信濃國ヘ下テ、便宜ノ人ニ勸進セント企給ヒケル處ニ、難波堀江ノ汀ニ、死蛇ノ如クナル物流寄タリ、何ヤラント近付見レバ、信濃皮ムキニテ打タル大綱、太サ二尺、長サ三十丈ナルガ、十六筋マデ水泡ニ連テゾ寄タリケル、上人不斜悅テ、軈テクルマキノ綱ニ用ヒラル、是第一ノ奇特也トテ、所用ノ後ハ、此綱ヲ寶藏ニゾ收メ給ヒケル、又三百餘人有ケル番匠ノ中ニ、肉食ヲ止メ酒ヲ飮ヌ番匠アマタアリ、上人怪ク思給ヒテ、是ガスル業ヲ見給フニ、一人ノスル業、餘ノ番匠十人ニモ過タリ、サレバコソ直人ニテハ無リケレト、彌怪ク覺シテ、日暮テ歸ルヲ見送リ給ヘバ、何クヘ行共不見、カキ消ス樣ニ失ニケリ、其數二十八人有ツ

ルハ何樣千手觀音ノ御眷屬、二十八部衆ニテゾ御座スラント、皆人信仰ノ手ヲ合ス、サレバ造營日新ニシテ、奇麗金銀ヲ鏤タリ靈佛ノ威光、上人ノ隱德、兩蓋共ニ相應ジテ、奇特ナリシ事共也、

（看聞日記）嘉吉三年正月廿三日、抑去正月十二日、天王寺炎上云々、其子細使者ニ相尋、上方と中方有確執事、中方諸堂ニ楯籠、自燒太子堂、御影堂、鎭守、十五社、廻廊、三昧堂等灰燼、自餘堂々無爲也、太子も炎上、但御腹ニ金小太子奉籠、其ハ不燒、奇得之事也、萬人群集、奉加之物出來、兒一人五百貫奉加云々、河内ニ太子堂あり、其所兒也云々、委細事猶未聞、九百年以來不燒云々、爲天下怪異歟、驚入者也、

（攝陽群談十二寺院）四天王寺

當院、天正四丙子五月三日寇火、慶長年中、大將軍秀忠公再興、至于庚子已ニ成レリ、寬文四庚子年、大將軍家光公加賜修造、歷世御朱印地也、

（義演准后日記）慶長五年三月廿二日、來廿七日、天王寺御供養、導師大覺寺宮、空性呪願竹内宮、證誠無之歟尤不審、職衆百五十口、眞言八十口、此内本寺衆四十口、末寺輩廿口、高野衆廿口出仕云々、天台宗七十口出仕云々、兩宗ノ外、餘宗無出仕、從大覺寺宮庭蓋皆具、荷輿丁裝束以下借用進之了、彼宮天王寺別當也、仍御導師歟、理性院堯助大僧正引頭、上乘院大僧正引頭云々、　廿七日、天王寺御供養無事、遠近緇素群集云々、

（四天王寺由緒沿革記）今を距ること九十二年前、享和元年十二月五日曉、當寺の金堂、講堂、五重塔、廻廊を始め、其他四十二個の殿堂廊門は、雷火の災に罹り、悉く燒失する處と爲れり、此時、大阪白銀町住民、紙屑屋渡世の、淡路屋太郎兵衞なる人、一身を挺して諸衆勸進に、盡力し、諸般提撕に勵精し孜孜汲汲刻苦艱難の末、遂に堂塔殿廊を再建し、文化九年工事全く竣る、今の伽藍堂塔即ち是なり、諺に曰く、一心巖を洞ると、微微たる屑屋の籠裏より、此巍巍雲を凌げる、高塔

寺領

大堂を出だす、豈に一心の致たす處にあらずして何ぞや、誰れか此事を聞て、驚歎感稱せざらん、

〔有德院殿御實紀附錄十五〕またそのころ、攝州天王寺破壞せしかば、修理し玉はらむ事をこひ申せしに、天王寺は、佛法最初の地なれば、諸國の寺院にて、おろそかに思ふべきにあらず、いづこの寺院よりも、各金帛を寄附し、それをもて修理を加へなば、佛祖の意にもかなふべしとて、國々の諸寺院より、あまねく寄附すべしとふれられける、また東叡山の事も、いさゝかなる修理は加へらるべけれど、新にこちたき經營はあるべからずと仰出さる、これ中古以來、浮屠等多く奢侈にながれ、佛意へいたづらになり行をなげかせ玉ひ、かく矯正せられしこととなるべし、

〔天明集成絲綸錄二十九〕安永二巳年七月

攝州天王寺　總代　二舍利

武藏　美濃　山城　攝津　播磨　備前　安藝　周防　長門　阿波
讃岐　伊豫　土佐　筑前　筑後　豐前　豐後　肥前　肥後　薩摩

右天王寺總伽藍就大破修復爲助力、右二十箇國勸化御免被成下候、御料、私領、寺社領、在町共、志之輩は、物の多少によらず、可致寄進候、御料は御代官、私領は領主地頭、幷支配有之分は、其支配江、寺社領は本寺觸頭、町方は支配之奉行所江取集、差出候樣、二舍利相願候間、被存其旨、來午八月迄之内取集、江戶は東叡山黑門前町、京都者八坂庚申堂金剛寺、大坂は天王寺右三箇所之勸化所江、向向ゟ可差越者也、

七月

〔扶桑略記三用明〕二年、於攝津國玉造岸上、草創四天王寺、守屋資財田宅、皆爲寺分、殊破邪見凶黨、遂顯佛法威德矣、

〔扶桑略記舒明四〕十二年十月、遷于百濟宮、封二百五十戸、施入四天王寺、

〔續日本紀聖武十一〕天平六年三月丙子、施入四天王寺、食封二百戸、限以三年、幷施僧等絁布、

〔續日本紀聖武十七〕天平勝寶元年閏五月癸丑、詔捨、○中略弘福四天王二寺、各絁三百疋、綿一千屯、布六百端、稻一十萬束、墾田地一百町、○弘福以下原无、今依古本補、

〔續日本紀孝謙十七〕天平勝寶元年七月乙巳、定諸寺墾田地限、○中略四天王○中略寺、寺別五百町、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年十一月壬寅、○月日有誤四天王寺墾田二百五十町、在播磨國飾磨郡、去戊申年收、班給百姓口分田、而未入其代、至是以大和、山背、攝津、越中、播磨、美作等國乘田、及沒官田捨入、

〔續日本紀稱德三十〕神護景雲三年七月丁亥、周防國戸五十烟、入四天王寺、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜四年二月己未、先是播磨國言、飾磨郡草上驛、驛戸便田、今依官符、捨四天王寺、以比郡田遙授驛戸、由是不能耕佃、受弊彌甚、至是勅班給驛戸、

〔續日本紀桓武三十九〕延曆五年四月乙亥、播磨國言、四天王寺飾磨郡水田八十町、元是百姓口分也、而依太政官符、入寺訖、因茲百姓口分、多授比郡、營種之勞、爲弊實深、其印南郡戸口稀少、田數巨多、今營班田請、遷飾磨郡、置印南郡、許之、

〔類聚國史百八十二佛道〕延曆十二年二月戊午、播磨國言、故左大臣從一位藤原朝臣永手、位田□□町、神護景雲三年、有勅入四天王寺、夫賜位田者、以身爲限、永入寺家、事乖國憲、勅、先朝既行、宜莫收還、

〔日本後紀十七平城〕大同三年九月乙未、勅、權入食封、限立令條、比年所行、甚違先典、其○中略荒陵寺五十戸○中略宜且納穀倉院、

〔百練抄二十七後〕永萬元年五月四日、諸卿定申天王寺與住吉社相論安倍野堺事、

〔天王寺記攝津徵書十二所載〕天王寺寺領帳

推古帝三年勅納封戸
近江國淺井郡岡本郷五拾烟　遠江國長下郡幡多郷五拾烟
信濃國筑摩郡苑田郷五拾烟　相模國足上郡大伴郷五拾烟
上總國埴生郡山田郷五拾烟　常陸國行方郡當麻郷五拾烟
以上
食封三百烟
按、烟竈一軒也、租税賦役次第曰、毎戸以稻四十束爲租云々、但一束得米五升、三百烟、凡當六百石乎、
用明帝二年、守屋子孫從類田園居宅等皆納寺、○中略
居宅三箇所　田園拾捌萬陸阡捌佰玖拾代
內　河內國　弓削　鞍作　祖父間　衣摺　蛇草　足代　御立　葦原
右捌箇所、拾貳萬捌仟陸陌肆拾代、
攝津國　於勢　模○模榎誤江　鵄田　熊凝
右散地、伍萬捌阡貳佰伍拾代、
推古帝六年施入、修多羅供料地、
墾田參阡代
推古帝十年、施入之地、
墾田拾貳萬漆阡伍佰陸拾代
播磨國飾磨郡朝來郷左右兩條
以上、太子御建立之時田園等代合、

三十一萬七千三百九十代

按令義解曰、五十代一段也、租稅賦役次第曰、上田十段、稻五百束爲租、但一束得米五升云々、以之計之、三十一萬七千三百九十代、凡六百三十四町七段八畝、此高一萬五千八百六十九石五斗歟、

太子之時、食封墾田田園合、

總高一萬六千四百六十石餘

聖武帝天平六年納食封

烟二百戸　此高四百石歟

天平勝寶元年七月定墾田　五百町　此高一萬二千五百石歟

稱德帝神護景雲三年納食封

周防國五十烟　此高百石歟

冷泉帝勅納三昧院領

攝津國　新開莊

後白河帝勅納五智光院領

土佐國　高岡莊七箇鄉

後醍醐帝建武二年、勅納太子諸料、

土佐國　高岡莊三箇鄉

同勅納寺用

攝津國有馬郡內　阿野理　山口　甕生　青海野上庄下庄

以上、往昔之寺領、所見史書舊錄、此外雖有所見、不載、其不正矣、

天正六年、織田信長公賜地子高六十二石、
文祿三年、從大政所金堂領賜百石、
慶長六年、從秀頼公寺領賜千石、
同十四年、從秀頼公今宮社領十五石、
從天正六年至慶長十四年、通合千百七十七石餘之舊領、元和五年、
台德君秀忠公賜御朱印、
寛文四年天王寺村撿地打出高四百二十石餘、從大猷君御寄附、
以上、古今寺領員數、

什物

〔續日本後紀 六 仁明〕承和四年十二月丁酉、勅令造轆轤木壺一合、銅壺御鐶者一合、備于奉納天王寺聖靈御髮、事由未詳、但口傳曰、聖德太子御髮四把、深藏于四天王寺、塔心底下、去年冬、盜發彼寺塔心、時遣使監察、而其使私偸盜髮、與之己畢、由是後日成祟、因更搜索、還藏本處云々、
〔三代實錄 四 清和〕貞觀二年六月十四日癸巳、攝津國四天王寺上言、毘沙門像手持刀及塔形等、擲擲墮下、遣使者看修法謝佐異也、
〔吾妻鏡 十九〕承元四年十月十五日庚午、聖德太子十七箇條憲法、并守屋逆臣跡收公田員數在所、及所被納置于天王寺法隆寺之重寶等記、將軍家日來有御尋、廣元朝臣相尋之、今日進覽云云、

奴婢

〔天王寺記 攝津徵書 十二所載〕天王寺寺領帳〇中略
用明帝二年、守屋子孫從類田園居宅等皆納、
子孫從類二百七十二人男百六十人、女百十二人、皆爲奴婢、
〔續日本紀 二十 稱德 八〕神護景雲元年十月辛丑、賜四天王寺家人奴婢三十二人爵有差、

寺職

〔海人藻芥〕四天王寺別當者、世一僧拜任云々、但近代御室無拜任、自寺家中子細有之云々、
〔僧官補任〕天王寺別當次第

圓行和尚（最初灌頂、治三十五年、承和四入唐、六年歸朝、）仲曉（貞觀十二八七不着座、）安雲（貞觀十三九十四補、治四年、十禪師、○中略）

寺、圓源泉僧都（永承元十一三十任、天台座主、○中略）山、梶、明雲法印（治承四六廿一任、入道相國申任了、養和二十二廿六辭、同三年正月還任、壽永二十二十九横死、）

寺、圓定惠（壽永三二十九任、建久七四十薨、）永付平等院門跡可相承之由、被下院廳御下文、

寺、幸、實慶（建久七七任、定惠親王付屬、相違之同、圓城寺衆徒切實慶僧正不見、）山、青、慈圓大僧正（承元元十一三十任、實慶死闕替、大衆依此事致嗷訴了、○中略）慈源僧正（仁治三三十二任、同五十二辭、其後更被付寺家執行法眼增順寺務、依圓城寺訴訟、同五月被止寺務、○中略）

青尊助親王（弘安九十廿六任、天台座主、）

〔四天王寺別當次第〕

圓行和上

承和四年、初補四天王寺別當、蓋和上者、果隣法師之門徒、入唐從青龍寺義眞和上受南都密敎云、

仲曉和上

貞觀十三年補別當、○中略

南光坊天海大僧正

元和元年、以東照大權現之命主務、從是已降、日光御門跡主務相續不絕、

〔今昔物語十二〕天王寺別當道命阿闍梨語第卅六

今昔、道命阿闍梨ト云フ人有ケリ、此レ下姓ノ人ニ非ズ、傅ノ大納言道綱ト申ケル人ノ子也、天台座主慈惠大僧正ノ弟子ニナム有ケル、○中略語テ云ク、我レ生レタリシ時、三業ヲ不調ズ、五戒ヲ不持ズシテ、心ニ任セテ罪ヲ造リキ、就中ニ天王寺ノ別當ト有シ間ニ、自然ラ寺ノ物ヲ犯用ヒキ、

〔玉海〕治承四年六月廿二日壬寅、無品圓惠法親王、宜令停止所帶天王寺撿校職云々、又去廿一日、被行僧事、○中略座主明雲補天王寺別當、山僧補此寺別當、往古雖有例、近代多被付園城寺、而今遇絕被寺抽賞叡山之間、有此恩歟、

參考

〔榮花物語殿上花見三十一〕かくて長元四年九月廿五日、女院〇上東門院藤原彰子住よし、石淸水にまうでさせ給、〇中略廿八日のつとめて、すみよしにつかせ給、〇中略これよりやがて、天王寺に參らせ給、人々のすがたありさま、みやこはなれて、人めもつゝまぬたびのすがたなれば、いとゞえもいはずみゆ、うまのけしきども、波のみぎはうちふむもことにみゆ、國の人々あつまり、ところもなく見る、おりおりかゝるもの見るみやこの人だに、ところなかりしに、ましてことはりにみゆる程に、うちまじりてきけば、としおひたる人、なみだうちのごひて、みちのくにとほちのさとなどにすまひせましかば、かゝるみゆきにあはましや、この年ごろは、なにはのうらのなにともおぼえず、ながらの橋のながらへても、何にかはと思ひしに、けふこそ、さはとし頃をくりしあしのやどり、志ばのとびらもげにすみよしにつくりてけりとうれし、つなでのめでたきことのためしには、さはこれをこそひかめと、おもひいふをきくもおかしげにとおぼゆ、きしのまにまになみたてるまつも、ちとせまでかゝる事を、なみ風志づかに吹つたへ奉らなむとおぼゆ、とりのときばかりに、天王寺の西の大門に御くるまとゞめて、なみのきはなきにし日のいりゆくおりしも、おがませ給、なにの契りにか殘りてとめでたくこそ、つぎに御經供養せさせたまふ、敎圓僧都講師つかうまつりけり、この程に、東宮の御つかひに、大進たかすけまいりたり、廿九日にかへらせ給つゐでに、かめ井の水のもとによらせ給て、御覽ずる程に、おぼしめしける、

にごりなきかめ井のみづをむすびあげてこゝろのちりをすゝぎつるかな、とおほせられたりけんも、げにいとおかしくこそ、

〇按ズルニ、上東門院龜井ノ歌、亦新古今和歌集ニ見ユ、

〔中右記〕大治二年二月三日癸亥、裏書云三院〇白河、鳥羽、待賢門院、御進發、夕宿二御大渡一、次日卯剋、參二御天王寺一、御休息之後、渡二御金堂一、令レ拜二見佛舍利一給、有二御誦經一、御導師大僧正行尊、

有勸賞、本寺平等院阿闍梨三人、被寄加由仰下、大僧正被進御引出物、

善无畏三藏三衣、入錦袋居銀筥、本白河院○

靜觀僧正念誦、入金筥居銀臺、新院鳥羽○

法全阿闍梨五古三古獨古、金筥居銀臺、女院○藤原璋子

大僧正行尊、爲天王寺別當、年來如新造修理天王寺、今度爲三院御熊野先達、蒙勸賞、誠遂過之秋歟、

〔長秋記〕長承三年三月十七日丁卯、女院○鳥羽后待賢門院藤原璋子、中宮、又五月欲詣天王寺、前例如此之參否可注者、　十八日戊辰、女院、天王寺詣事、上東門院○一條后藤原彰子陽明門院○後朱雀后藤原禎子共令參給、仍申其旨、

〔台記〕久安三年九月十二日癸酉、幸○鳥羽天王寺、御車余○藤原賴長依仰、乘手輿候後陣、供奉侍臣騎馬、予前駈步行、匡御輿於西鳥居外、西面御念佛後下輿參御金堂、別當權僧正行慶豫候之、先禮舍利、有御誦經、御明、次被行舍利會、轉供後渡御御所、予退下休廬、飡食後歸參依召候簾中、語曰、奏舞日、最初令奏無面形之舞、見舞人容貌之後、令奏有面形之舞、是古說也、又仰曰、此寺舞人之中、有容貌壯麗者、今日有其人乎、法皇(鳥羽)爲人好美人、被有此言、　對曰所候也、名公方　事訖、法皇改御裝束、本著葛布椎鈍衣平絹指貫、今改鈍染布衣袴、幸金堂被行萬燈會、次幸出雲聖人念佛之所、聖人奏曰、行法之間可無言、先之、法皇仰曰、去年無言、而不知此事多言、聖人不然之、法皇諾之、予同無言、事了還御、余歸休廬、差以長奉燈明於金堂塔、聖靈院、講堂、六時堂、但金堂、塔、加修誦經、　十三日甲戌、巳剋許、賚賢朝臣來宿所曰、明日還御延引、十六日可還御、次午一剋參上、依召參御前、召尼於御前賜米、先廳官於聖靈院召計可賜之、尼則賜短冊後、列居御前、賜了取返短冊、次又召尼給小袖、如先、歸米者、不賜小袖、　仰曰、無短冊同人數度給物、又不可給之人參入、因之給短冊、是朕之謀也、此中無短冊之尼參入、被取返物了、法皇詔曰、朕在位時、有女房名尾張、件人宇治入道相國○藤原忠實所被通也、今爲尼在此中給物、希有事也、余問曰、依道心乎、仰曰、依淸貧也、件尼使左少辨光賴奏曰、吾是君之所知也、請自料之外、賜小袖一領、延者詣熊野、爲令著徒尼也、勅許之、良久而下宿所、卽參上、法皇御西門、覽聖人迎講、浮涙於御眼、及暗

幸念佛所、(自西門直幸)無音聞、法皇忘語予、咲不對、法皇大咲、事訖還御、　十六日丁丑、卯剋參上、辰剋幸金堂、有御諷經御明之事、(今曉予差以長舉燈明於金堂、不挿他所、)別當權僧正參會、奉出舍利、法皇以葬様裏之物奉之、(不知何物、)次幸極樂堂、(近年聖人所作也)次還御、予候御舟、

〔中内記〕久安四年五月廿三日、自早旦至于巳時、祗候御前、(鳥羽○中略)被仰雜事之次被仰云、今度天王寺詣、勞發道心、先見鳥居銘、當極樂東門中心、參進之後に、世外全不思出現世事、志之至令然也、

〔台記〕久安四年九月十日乙未、辰剋參北殿、巳剋法皇(鳥羽○中略)出御、(中略)御輿幸天王寺、　廿日乙巳、巳四剋參行在所、依講說未始詣聖靈院、午四剋聞講說始歸參、時信傳詔如昨日、仍直入侍簾中、賜故江中納言匡房所作之續往生傳、即讀之、及過半、詔曰、退下早歸來、今日參聖靈院、欲令說繪、先即還往生傳於御前退下、(予時未四剋、先之例時訖、)須臾歸參、申二剋幸聖靈院、先禮靈像、次御繪堂、令僧說繪、于時余(藤原賴長)與信西(藤原通憲)侍左右、僧有謬誤改正、僧有闕漏補綴、說訖賜祿、次覽黑駒影、次幸念佛所、(于時酉一剋)時俊讀過去現在念佛者、(每日終有此事云々)訖法皇以下復禮拜二十一遍、(時同有禮拜、故曰復、)次還御、　廿二日丁未、巳二剋幸金堂、修諷誦、奉燈明、禮舍利、(余同禮之、)訖還御、侍船者、余及家明朝臣、信西法師等也、余與信西依勅侍屋形內、家明朝臣侍外、上問我朝故事、信西對之無所停滯、余不加一言、中心爲恥、　廿三日戊申、未三剋入御鳥羽、

〔本朝世紀〕久安五年十一月十二日庚寅、今日法皇(鳥羽○)令供養天王寺念佛堂給、以權僧正行慶爲御導師、請衆廿口也、有執蓋、衆僧前依無散花、不備堂童子、院別當公教卿、一向奉行此事、件堂依圓聖上人奏請、去年以來、殊所令營造御也、祗候仙院之輩、及公卿侍臣、各進大小材木一支、源親方募左衞門尉功造進之、供養以前被任舉、爲令勵不日之功也、　十五日癸巳、今日法皇於天王寺令供養舍利給、別當權僧正行慶調童舞備叡覽、入夜亦有萬燈會事、　十八日丙申、今日法皇自天王寺還御鳥羽北殿、　六年九月十日癸未、一院(鳥羽○)幷美福門院、令參天王寺、

〔台記〕久安六年九月九日壬午、依仰詣天王寺、巳時乘船、亥時至大渡、乘手輿著寺、先參金堂、奉燈明、修諷誦、次參聖靈院、　十日癸未、入夜、法皇(鳥羽)(用輿)美福門院(用車)臨幸、　十四日丁亥、午以後降雨、今日、女院舍利會、巳時參上、講說了、兩院參金堂、卽始行舍利會、于時降雨、有勅、於塔北搆上奏舞、法親王及余候御前、酉時事訖還御、余還宿所、戌時參上、兩院渡御念佛所、夜深還御、是夜、於念佛所、上賜御扇、余扇卽獻之、上曰、女院既入念佛衆、　十六日己丑、顯遠告可有舍利會之由、(院舍利會)巳時參上、講後、兩院參御金堂、余侍上前、法親王後至同侍、法會數禮、有勅、弘貞奏採桑老、乘燭禮畢、兩院還御、卽從廬、顯之參上、女院參金堂、行萬燈會、上直移御堂念佛所、余及公卿從行、(公敎卿、及侍臣陪從女院、)法親王參上、侍御前、女院追渡御、是夜、長講聖人、法音短於常、上曰、今日舍利會、上下疲倦、恐忤衆心、短其音歟、求媚衆庶、於法失常、聖人之所爲、豈可然乎、事訖還御、今日自行在所賜果、　廿一日甲午、辰時詣聖靈院、奉燈明、讀誦觀音品三遍、其言三千遍、巳時參御所、午時兩院詣金堂、奉燈明、修諷誦、禮舍利、余及三卿依仰同禮、次兩院詣聖靈院、奉燈明、修諷誦、次法皇御西門念佛、余從之、女院還御所、乘車出御、法皇至鳥居外乘輿先出、余依仰不從行、歸金堂、奉燈明、修諷誦、此間、別當權僧正來談曰、豈可有賞之仰者、領之於西鳥居外乘輿、至大渡移舟、沿流至西海、眺望、更泝流至大渡之間、入夜猶不停舟、終宵移棹、傳聞、今夜、兩院宿富島、

〔玉海〕文治三年七月廿六日乙丑、此日、殷富門院(亮子内親王、〇後白河皇女)院號之後、始有御入内事、〇中略以定長奏條々事、御灌頂之間、可參天王寺之由同奏之、勅答之趣、又叶御意歟、　八月一日己巳、宗頼申宇治并天王寺詣之間事、　廿二日庚寅、此日自宇治參天王寺、依太上法皇(〇後白河)受灌頂於權僧正公顯給也、早旦小浴、可奉禮舍利之故也、(内府同之)著直衣、(烏帽)内府著狩衣直衣、先參本堂、小念誦之後、於釣殿修祓、〇中略卽乘船、〇中略宗頼朝臣進破子、終日泛遊河上、視聽之所屬、著窪津、(渡邊也)預儲車、余(〇藤原兼實)網代車也、余内府(改狩衣著例直衣、)同車、殿上人已下騎馬前驅、如昨日、但人數多減、諸大夫十人許、殿上人際三人也、於西鳥居外下車、〇中略次余竊參金堂、先於西門内洗手、(用龜井水、入錢、季經朝臣役之、内府同之、)次向西三度禮拜、(内府同之)

之、上下皆可禮、而不禮失也、次進金堂前庭、又三度禮之、(今度内府不然、)卽昇自南階、入自正面間、居同間叟、内府在其面、(隨身等敷弓箭入四門、依雜人亂入、置身等留中門、禁止雜人之亂入、)次有御燈明事、次有誦經事、導師一度勤仕之、(本寺僧也、)退下之間、於後戶邊給被物布施等、次奉出佛舍利、(三粒、白二、黄一也、)無停滯出給、爲悅不少、余奉禮了、(内府同之、共人之中、精進人兩三人奉禮之、)如本奉納之、布施金五兩、(三兩余分、二兩内府分、)次歸宿所一寢、御塔、寶靈院共獻燈明、又有誦經事、御共輩近邊占宿所、今夜御灌頂儀不見及、以兼雅卿次第可切入也、此日、法皇母女院御國忌也、然而猶被遂行此事也、　廿四日壬辰、於船中天曙、河上之興甚於先日、申剋著淀、(中略)○今日、院於天王寺有舍利會事云々、

四年九月十四日丁未、未剋、余先向九條堂、其後向南家、明曉下向天王寺之間事沙汰調了、法皇(○後白河)八條院(○暲子内親王、鳥羽皇女、)同明曉御下向云々、　十五日戊申、自夜雨小降、但不及事妨、此日、爲如法經十種供養結緣、下向天王寺、此事不可必然、身爲攝政、萬機之繁務、於一日不可空、然而撿先例、攝政遠所物詣、當寺他寺其例已多、加之此如法經事、始自殖麻解緯、至寫經、無不口入、加之願主聖入智願意趣、余深知之、余及此法印、以兩人爲此願之權越、人不知之、只任冥衆之知見、仍強忘世間機嫌、所催結緣之志也、仍先尸粗奏法皇、已有天許、其後世人多以傾之難之、仍重又奏之、猶可下向之由有仰、不顧謗難、只仰佛之知見者也、寅剋出九條、于時僕從僅兩三人也、皆悉欲待調者、更不可叶之故也、(中略)○暫時相待之處、先女院御下向、其後經一時院御乘船、其後經二時御經船到來、於草津奉乘船云々、法印被相具、(中略)○晚頭付渡部、(大渡之邊也、)卽乘車、法印下船、於此邊堂御經相具、追可著天王寺邊堂、(于時阿彌陀堂也、)云云、卽著西門外北念佛所、(去年宿所也、)卽以季長朝臣申參入之由於院、小時以成經爲御使、今夜最無便宜歟、明日可見參者、申畏承之由此夜兼光卿來、凡上下結緣之衆、不知何千萬、寺邊之人家盡數雖點、猶人多家少、空宿道路之者多々也、人々善心以之可知、可貴可貴、但是假名虛假之善心、多者是人まねのくまのまうで歟云々、且又經王之功用、上人之信力、自然已搖動國土者也、可仰之、此夜余竊於西門、暫念佛、今日依當十五日也、日次不宜之故不參堂也、　十六日己酉、此日、於四天王寺有如法經十

種供養事、法皇勸隨喜之叡念、促萬乘之觀、八條女院、依結緣御志、調十種供養、洛中之緇素、貴賤殆殘人少々云々、余又關萬機之政務、結一乘之善緣者也、

〔吾妻鏡九〕文治五年三月廿日壬戌、亥剋、右武衞〇源能保使者參著、被獻消息、去月三日狀　去九日奧州基成朝臣并泰衡等請文到來、可尋進義顯之由載之、而法皇〇後白河此間爲御佛事、御座天王寺、去月廿二日御參　件請文備叡覽之後、早可召進之由重可被仰之旨、自彼寺態以被申殿下、〇中略

自去比所令參籠天王寺御也、是依多年御願所思食立也、然而朝務全不被抛、且攝政且所聞食也、爲散不審、事次所被仰遣也、〇中略　院宣如此、仍執啓如件、

三月十日　太宰權帥藤

〔玉海〕文治五年五月四日癸亥、八專、天陰、此日、太上法皇〇後白河於四天王寺供養千部法華、千口持經者等、自去二月廿二日壬午御參籠當寺、手自轉讀千部經、令修每日三時護摩給、凡其外御行業不可勝計、今日相當結願、殊可被修此大善也、余〇藤原兼實雖不可必參入、非啻隨喜御願、又結緣之志尤深之故也、始百箇日御參籠、萬人不甘心、而一日無退轉、如思食被遂御願、今日有此作善、道俗還所奉歸依渴仰也、寅一點先小浴、著烏帽直衣、密々參金堂、先於西門以龜井水入桶洗手、西面三度禮拜之後、入自中門參金堂、先三度禮拜了、著正面疊、已千僧等少々、所三僧座也、次申上籠經御燈明等、於後戶方給布施如例、次奉出舍利、三粒、銀篋爲出給、尤爲悅、種々念誦之後、共人之中、召禪僧之輩少々、奉禮之後、奉返納了、以唐物二段爲布施、〇中略　歸間、余依所勞更發、退出下宿所、一寢睡頃定長朝臣爲御使來、被仰參入之悅、秉燭參聖靈院、奉禮御影、修諷誦了、參御前、七箇日御講結願席、範玄法印說法之間也、以定長申入、依召參簾前、佛一體後別敕、說法了退下、於西門唱念佛之後退出、

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元元年二月三日、安嘉門院〇後高倉第一女邦子、式乾門院〇後高倉第二女利子、密々御幸天王寺、北面繁俊已下四人、侍實員已下五人供奉之、公卿前內大臣家嗣、吉田中納言爲經、兩人參會天王寺、殿上人光成朝臣高經等參會鳥羽、日淺申供奉云々、

〔五代帝王物語亀山〕さて院〇後嵯峨は、文永八年八夏、第四度の御如法經行はせ給て、所々の御奉納の
うち、二部は殘されて、天王寺へ御幸ありて、まづ七日御懺法御逆修ありて御奉納、やがて太子の
御廟へ御幸あり、此御廟へ臨幸あることは、すべて先例なけれども、御敬信深によりて、さきにも
御幸ありし此度も又臨幸あり、

〔後宇多院御幸記〕正和二年七月上旬之比、忽遂催仙蹕於上卿、不日遣勅使於南山、其時院宣云、取意、
來月六日御進發、同八日御登山、一七箇日可有御參籠云々、〇中略、十八日〇中略八月、四天王寺御幸、翌日
御入堂、御膳等、寺家沙汰云々、御拜五代相傳之舍利、致一心歸命之御誠御、及日中還御、月卿雲客參
議四隣以下、警固武士如雲霞參御迎云々、

〔仁和寺御傳〕高野御室〇中略、眞行、
同〇久安四戊辰年二月廿五日、御參天王寺、造金銅五輪塔、令奉納舍利給、

〔永承三年高野御參詣記〕永承三年十月十一日丙子、〇此間有闕字、廟令參紀伊國金剛峯寺給、〇中略、十九
日甲申、曉頭令參天王寺給、〇藤原賴通、見物咸集、男女聚肩、道路爲目、入御西大門之北寺家、樂所急發
香聲、應聖靈之崩意、賀希代之先蹤也、於是召御手水、先令禮西方給、古人之所傳、當極樂之東門云々、
陪仕上下同以應也、御手水具并御座等政所儲之、次於本堂令奉御明五千燈給、寺家供御坐、以寺僧爲導師、布施絹五疋、
被行誦經、手作布百端、僧供、米肆石召圖司、次所司賜祿、次令禮聖靈院給、卽太子影堂也、佛法之趣有之棄燭還御
之次、御覽龜井水、

〔台記〕康治二年十月廿日癸卯、入道殿〇藤原忠實、及北政所、參御天王寺、 廿一日甲辰、被行舍利會、 廿
二日乙巳、巳剋參北政所御所、先是禪閤、及法親王座之、取出寶藏物御覽之、有希有之物等、〇中略、余〇藤原賴長、昇堂上、奉禮聖靈二度、用拜太子之禮、仍不三拜、祈請云、若攝籙天下之時、願任十七條憲法行之、此心無變、令
天下撥亂反正矣、次北政所、立車於西門、若御念佛歟、于時余騎馬出西濱見海、今日始見、少時還、向龜井飮之、起

慈悲心飮之、參禪閤御所、此間及昏黑、參北政所御所、還休廬、今日御覽寶藏物之時、有太子御衾衣絹、爲示女房等少分被之、禪閤法親王命予曰、此衾少可剪取、可爲護之故也、余辭曰、爲護身盜取寺物、於佛致破戒、於王法有罪、故不能取之、

〔拾玉集三〕建久三年凉秋九月、點定閑之山寺、披淸淨之道場、半行半座之勤、如說修之、無二無三之教、如法書之、則捧持二部妙典、遙往詣四天王寺、於彼靈地忽經再宿、然間或備十箇種之供養式、唱一晝一夜之念佛、翌日之朝底露之餘、即詣上宮太子之古墳、凝下化衆生之懇地、次過難波之海浦、到住吉之社壇、報賽已了、瞻望忽催、于時雲海眇花嵐日蕭索、不堪感情、聊述舊懷、短略未過一日、和言已滿百首、其詞雖區恙、置住吉之詞、其心雖淺、又顯滅罪之心、丹誠無二、玄應豈空、杇退憶古今、未聞蹤跡、仍雖恐淺思之拙、竊納靈祠之中、古松若有情、言葉定無杇者歟、

我立杣門人三部傳法阿闍梨某記之

〔吾妻鏡十五〕建久六年五月十八日壬寅、將軍家〇源賴朝可有御參天王寺、　廿日甲辰、卯剋、參天王寺給、宛御家人等、召疋夫、爲被引御船綱手也、洛中御乘車、自鳥羽被用御船、令借用丹後二品局船給、與一條二品禪室〇藤原能保可有御同道之由、依有兼御約諾、禪室用意御船、路頭庄園被宛雜事之由有其聞、是太不叶賢慮之間、爲不令請之給、所被止御同道儀也云云、日中著御渡部、自此所御乘車、御臺所御車連軒、有女房出車等、各整行列、隨兵以下供奉人皆騎馬云云、

先陣隨兵　畠山二郎重忠　千葉二郎師常〇中略

最末　和田左衛門尉義盛相具家子郎等、

午剋御參著、先入御念佛所、寺門外　次御禮佛長吏法親王〇定惠法親王豫於灌頂堂令奉待將軍御、有御謁拜、次令拜見當寺重寶等給、次法親王還御、將軍又歸旅店給、其後被奉御劍、銀作相作御劍、於太子聖靈、被引進御馬一疋、精毛、置銀鞍、上總懸、於法親王、左衛門尉朝政爲御使、於御劍者被相副法親王御使於朝政、被納寶

雜載

藏云云、此外以絹布等類被施寺中僧徒云云、　廿一日乙巳、晩鐘之程、自天王寺御歸洛云云、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年十月廿五日癸卯、大夫判官定員、自京都歸參、去二日、大殿〔〇藤原道家〕准后〔〇道家室公經女〕太政入道〔〇藤原公經〕爲御參天王寺、萬燈會供養云云、

〔太平記六〕正成天王寺未來記披見事

元弘二年八月三日、楠兵衞正成、住吉ニ參詣シ、神馬三匹獻之、翌日天王寺ニ詣テ、白鞍置タル馬、白幅輪ノ太刀、鎧一兩副テ引進ス、是ハ大般若經轉讀ノ御布施ナリ、啓白事終テ、宿老ノ寺僧卷數ヲ捧テ來レリ、楠則對面シテ申ケルハ、正成不肖ノ身トシテ、此一大事ヲ思立テ候事、涯分ヲ不計ニ似タリトイヘ共、勅命ノ不輕、禮儀ヲ存ズルニ依テ、身命ノ危ヲ忘タリ、然ニ兩度ノ合戰、聊勝ニ乘テ、諸國ノ兵、不招馳加レリ、是天ノ時ヲ與ヘ、佛神擁護ノ眸ヲ被回歟ト覺候、誠ヤラン、傳承レバ、上宮太子ノ、當初百王治天ノ安危ヲ勘テ、日本一州ノ未來記ヲ書置セ給テ候ナル、拜見若不苦候ハヾ、今ノ時ニ當リ候ハン卷計、一見仕候バヤト云ケレバ、宿老ノ寺僧答テ云、〇中略輙ク人ノ披見スル事ハ候ハネ共、以別儀密カニ見參ニ入候ベシトテ、即秘府ノ銀鑰ヲ開テ、金軸ノ書一卷ヲ取出セリ、正成悅テ、則チ是ヲ披覽スルニ、不思議ノ記文一段アリ、〇中略文ノ心ヲ明ニ勘ニ、天下ノ反覆久シカラジト、憑敷覺ケレバ、金作太刀一振、此老僧ニ與ヘテ、此書ヲバ、本ノ秘府ニ納サセケリ、

〔日本書紀二十五孝德〕四年二月己未、阿倍大臣請四衆於四天王寺、迎佛像四軀、使坐于塔內、造靈鷲山像、累積鼓爲之、

〔續日本紀三文武〕大寶三年二月癸卯、是日當太上天皇〔〇持統〕七七、遣使四大寺、及四天王、山田等三十三寺、設齋焉、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年八月己卯、初令所司、鑄僧綱及〇中略四天王〇中略等寺印、各頒本寺、

〔徒然草下〕何事も、邊土はいやしく、かたくななれども、天王寺の舞樂のみ、都に恥すといへば、天王

寺の伶人の申侍しは、當寺の樂は、よく調をしらべあはせて、もの丶音のめでたくとゝのほり侍る事、外よりもすぐれたる故は太子の御時の調、今に侍るをはかせとす、いはゆる六時堂の前の鐘なり、その聲、黄鐘調のもなかなり、寒暑にしたがひて、あがりさがりあるべきゆへに、二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす、秘癖の事也、此一調子をもちて、いつれの聲をもとゝのへ侍るなりと申き、

〔樂家錄十六〕天王寺樂人系圖之說

天王寺樂人系圖、非暇考之、故述大意矣、聞說、聖德太子之臣有太秦河勝廣隆、生八男、而名太郎二郎三郎四郎五郎六郎七郎八郎矣、(或謂孫)今世、天王寺樂工之遠祖、在所謂八男之中、因茲皆太秦氏也、至于今世、或稱二郎或四郎之家、而名爲大祖也、按舊記、家名不一定、然世多用此說、因舊記之耳、

〔樂家錄四十五〕第二天王寺樂人

太秦姓(宿禰)別爲四氏、家業各異也、上祖太秦公宿禰同祖秦始皇五世孫融通王之後也、(融通王一曰弓月王、仲哀八年來朝云々)○中略

薗氏以鳳笙及左舞爲業、名乘廣、家紋三頭也、

林氏以鳳笙及右舞爲業、名乘廣、家紋下藤、

東儀氏以篳篥及右舞爲業、(此中有左舞人、亦有笛爲業者、)名乘兼、家紋蔦、

岡氏以龍笛及左舞爲業、名乘昌、家紋齊葉、(但以大葉如鳳輩)

安倍姓東儀氏、抑安倍姓者、本京都樂工、而余家姓乃是也、○中略

已上天王寺樂人、四氏二姓也、

名稱所在

緣起

安曇寺

安曇寺ハ、孝德天皇ノ朝、僧旻ノ住セシ所ニシテ、後世廢寺トナル、今攝津國大阪安堂寺町ニ、石像ノ地藏ヲ存ス、是レ其舊址ナリト、

〔攝津志四十四西成郡〕古蹟　安曇廢寺大坂安堂寺町、地藏石像尙存、〇下略

〔攝津名所圖會四大阪〕油懸地藏安堂寺町壹町目の南に在す石佛也、祈願の者油を頭にそゝぐ故に、此名あり、攝津志曰、日本紀に見へたる安曇寺の石像也、當面に天平十一年安曇寺の銘ありとなん、今これを原るに、破滅して見へず、今の安堂寺町も、安曇寺の證なりとぞ、

〔日本書紀二十五孝德〕白雉四年五月、是月天皇幸旻法師房而問其疾、遂口勅恩命、或本、於五年七月云、僧旻法師臥病於阿曇寺、於是天皇幸而問之、仍執其手曰、若法師今日亡者、朕從明日亡、

名稱所在

創建沿革

西本願寺

西本願寺ハ、攝津國大阪津村町ニ在リ、因テ又津村御堂ト云フ、又表御堂、北御堂等ノ稱アリ、慶長年中、眞宗ノ僧准如ノ建立スル所ニシテ、京都西本願寺ノ別院タリ、

〔攝津志四十四西成郡〕本。願。寺。有二、一在津村町、俗呼表。御。堂、〇下略

〔攝津名所圖會四大阪〕津。村。御。堂。御堂筋本町の北にあり、表御堂又北御堂ともいふ、京師西本願寺の掛所なり、津村は圓の證なるべし、

〔和漢三才圖會七十四攝津〕津村御坊　西本願寺御堂在備後町淨覺寺町之間

慶長七年准如上人建立、是乃十二世門跡、西本願寺之祖也、元祿七年寂如上人再建、

〔蘆分船三〕津村御坊西本願寺末〇中略

抑津村の御坊と申は、慶長七年に、開山より十二世准如大僧正の御建立也、

〔大谷本願寺由緖通鑑三〕攝州生玉ノ庄、大坂石山ノ御堂燒亡シテ、大坂御門下ノ道俗、悲嘆限ナカ

リシガ、其後年經テ、敎如上人難波ト云所ニ御堂御建立アリ、准如上人ハ津村ト云所ニ御堂御建立アリ、佛閣南北ニ輝キ、御繁榮成ルコト古ニ超過セリ、今世人大坂南ノ御堂、北ノ御堂ト云是也、

〔攝陽群談 十二寺院〕津村御堂　大坂津村ノ地、東面ハ御堂前町、淨覺町、西南ハ北渡部町、北ハ津村、南之町ニアリ、後土御門院御宇、文明年中、西本願寺開山親鸞聖人八世ノ法孫、蓮如上人草創、始ハ東生郡玉造岸今ノ金城ノ地ヲ云ナリニアッテ、築城郭之後、今ノ市中ニ壤移ス、毎年七月十七日ヨリ、十九日ニ至リ、洛陽本寺ノ燈籠ヲ置テ佛事アリ、十月廿二日ヨリ廿八日ニ至リ、門主洛ヨリ當御坊ニ入御シ玉ヒ、宗門開祖親鸞聖人御追福ノ佛事供養、毎歳修之、老若男女貴賤都鄙ノ輩、群參鋒ヲ立ツベキ處ナシ、元祿第十丁丑年、地ヲ廣シ、礎彩飾色種々ノ華形、笠鉾等ヲ造リ、幼童數輩唐人出立、囃子等拍之、美麗ヲ盡定メ、庚辰年ニ至リ、再建既ニ成リ、壯嚴擬々タル事、要津第一ノ淨刹ナリ、

〔大谷本願寺通紀 十別院緣由〕大坂津村別院記去本山十三里

大坂別院在攝州東成郡生玉庄大坂津村、東御堂前町、西南北渡部町、北津村南之町明應五年七月下旬、蓮宗主如○蓮開創、初在東成郡玉造岸、或稱石山、略○註今城郭地是也、天文元年八月、證宗主如○證自山科移居、改爲本山、經六十九年、天正八年閏三月、顯宗主如○顯應勅出遷紀州鷺森、尋遷泉州貝塚、十三年閏八月、遷大坂樓岸、樓岸多說、一云、石山城東森以入軒屋近邊、曰樓岸、一云、仁德帝高屋御製所謂高殿周匝、岸曰樓岸、一云、大江岸、一名渡邊岸、源義經逆櫓論處、故曰論岸、一云、攝州有里寧湯、夫木集鑑題仲歎、上略曰、穿岸、一云、今土造樓哥遶、此樓岸出攝陽軍記四、又移天滿今天滿七丁目興正寺別院是也、本在川崎、慶長年中准宗主〔准如〕有元年三年、七年十二年四說、三才圖會七十四云、石山御坊、文祿年中修道町一丁目被移之、移樓岸舊跡於津村南町、興造殿、今寺基是也、寬文七年十二月記云、天正十九年八月五日、從天滿移京六條、其砌大坂門侶近處之內爲參詣立一字於口岸、慶長二年丁酉移之津邑南町、十年乙巳造本堂、其後告之家康公、公曰、當如先規相續之云、大坂兵亂時、蜂須賀阿波守陣營于此、經九十年、元祿五年八月月○月字恐衍一寂宗主如○寂議再興、六年正月中旬、遷諸尊像於假殿、七年二月十六日、始運斧式、是月買渡筋六十間安土町四十間、以廣境域、直銀五百八十貫目、於是封疆東

本堂塔像

西七十七間二尺三寸、南北七十二間五尺五寸、十一年九月十一日立柱、十一月十四日上棟、十二年十月廿日慶讃、寂宗主共嗣君修之、(其式略出宗主傳)佛殿桁行十九間、梁行十七間、棟行十六間一尺一寸、(一云、棟行十一間半餘、軒行三間五尺、)工匠水口若狭、普請職主池永主税三雅、又二尊堂、享保六年九月廿三日上棟、七年三月廿五日慶讃、(一云、九年三月廿五日慶讃、御堂未畢、而至顯證寺主赴會、廿一日火災、空歸、御書)九年三月廿三日類燒、是年寂宗主又議再興增廣寺地、閏四月買南北廿七間、(大和小路至本町)東西六十三間餘、(連枝筋至御堂前丁)舊地四千四百六十一歩、(俗言坪)新增九百五十七歩餘、兩所合五千四百八十歩餘、(此時直銀凡三十兩計)是月十五日假殿上棟、(大谷日列、列恐對誤)(西所也)六月二日慶讃、十月廿三日大坂官府(松平日向守)報增廣寺地如所請、十年二月以官船二百艘運諸方河沙、達西橫堀、以築寺基、是年始斧式、十九年十月五日卯刻上棟、廿二日慶讃、住宗主(○住如)共嗣君修之、桁梁棟軒並與前同、工匠水口志摩、明和七年三月、公府錫新寄地公役、(一云、但錫公役耳、町役以金償之、一云、三郷總課之外、公役町役共錮之、未詳)寶曆十三年三月、對面所落成、至安永七年書院大廚等輪奐盡美、爾尚連年修造、至今不息、

〔攝津名所圖會 四大阪〕津村御堂(○中略)

本尊阿彌陀佛(安阿彌作、長三尺五寸、兩脇に、開山親鸞上人影、前住上人影、聖徳太子、七高僧、九字、十字名號を安す、)

二尊堂(御堂の南にあり、開山聖人、蓮如上人の二御影を安す、倶に蓮如上人の筆なり、)

對面所(御堂の北にあり、莊嚴美にして大に廣し、御門主下向の時は、門徒こゝに於て御齋、非時に列す、是を御相伴といふ、又朝鮮人來朝の時、此所を借て止宿す、)

轉輪藏(二尊堂の北にあり、一切經を藏む、)

鐘堂(輪藏の東にあり、)鼓樓(巽の方、築地の上にあり、)茶所(本堂の前にあり、詣人こゝに憩ふ、)

東本願寺

名稱所在

東本願寺ハ、攝津國大阪上難波町ニ在リ、因テ又難波御堂ト云フ、又裏御堂南御堂等ノ稱アリ、慶長年中、眞宗ノ僧教如ノ開基ニシテ京都東本願寺ノ別院タリ、

〔攝津志四西成郡〕本。願。寺。有二(中略)一在二上難波町一、俗呼二裏。御。堂。一、

〔攝津名所圖會大阪四〕難。波。御。堂。御堂筋久太郎町にあり、京師東本願寺の掛所なり、裏御堂又南御堂とも稱す、

創建

〔攝陽群談寺院十二〕難波御堂　同所御堂〇津村南ニアリ、因テ世ニ南ノ御堂、御裏御堂ト稱ス、東面ハ南久太郎町六町目ニ向ヒ、後ハ上難波町ナリ、後陽成院御宇慶長年中ノ草創、東本願寺御堂也、宗門開山親鸞上人十一世、顯如上人ノ法孫、教如上人ノ開闢タリ、

〔蘆分船三〕難波御坊東本願寺の末

開山親鸞上人、〇中略八世蓮如上人、八十二歳明應五年七月下旬、はじめて大坂石山鑑が池の邊に御堂を建立せられ、三とせの間御止住有、證如上人の御代まで御本寺たるのよし、傳記に見えたり、其時の御堂屋敷今の城のうちと也、又石山の御坊といひし時の一字水の井戸今の大手口の邊にあり、文祿年中に道修町一町目に御堂をうつされしが、慶長のはじめまでは、渡部御坊といひしと也、其後慶長年中開山より十二世教如大僧正、今の上難波の地に御堂をうつされ、建立の功なりしより此かた、朝暮の勤行たゆることなく、參詣の老若男女所せきまで群集して、夥しく目を驚かす、

本尊堂塔

〔攝津名所圖會大阪四〕難波御堂〇中略

本尊阿彌陀佛安阿彌の作、長三尺五寸許、兩脇檀に、祖師親鸞上人、前住上人の影を安じ、聖德太子、七高僧、九字十字の名號を安す、

對面所御堂の南にあり、書院對面所の南にあり、鐘堂御堂の巽にあり、鼓樓御堂の艮にあり、

唐門御堂の前にあり、茶所唐門の內にあり、諸人こゝに憩ふ、窟門御堂の後、北の方にあり、

安岡寺

安岡寺ハ、攝津國島上郡服部村ニ在リ、光仁天皇ノ皇子僧開成ノ創建スル所ナリト稱ス、

今天台宗ニ屬ス、

〔攝津志五島上郡〕佛刹中略 安岡寺在二服部村一、正安元年、化緣疏曰、當寺乃光仁帝長子開成皇子創建、又有二三好豐前守永祿中書牘、羽柴秀勝天正中書牘一、

〔攝津名所圖會五島上郡〕南山安岡寺般若院服部村にあり、天台宗、坊舍六區、〇中略

本尊如意輪觀音開成皇子の作、長一尺五寸、脇士左不動尊、弘法大師の作、右毘沙門天、運慶の作、

阿彌陀堂本堂の南にあり 開山堂本願開成皇子の弟子開智禪師の像を安す、

般若塔本堂の上にあり、開智禪師一字一石の大般若經を書寫し、こゝに藏む、

鎭守祠八幡 天照大神 春日 住吉 山王 天滿宮 辨天 稻荷 大將軍

〔艸山集四記〕遊南山般若院記

其山雖不高、遠阻聚落、幽僻可欣、名曰南山、開成皇子之所開、所謂安岡寺也、寺歷興廢、今存者僧舍四焉、頃日新堂安如意輪大悲像、乃皇子所刻也、多聞天在其右、不動尊在其左、皆彫刻巧妙也、山上高處有石塔、僧指之曰、是皇子藏石經般若之處、其經每石一字天畫聚石、皇子親書、余脫履而進、顧謂僧曰、此許廻垣、使人無蹈、可乎、僧曰、然、山下樵子亦能知之、不敢徑蹊、但爲外客未能知者爲之苟善矣、山上一望、攝之山水如畫、只憾無一亭樹人可遊眺耳、僧延而入一坊、壁挂十六羅漢畫、燈俱新、問之、僧曰、近令畫而燈未乾而懸之耳、余窃嘆、寺之荒寒者多鬻舊物、且爲一日之活、可貴此僧之如此其勤矣、後有堂、潔淨無塵、安虛空藏菩薩、莊麗端嚴、僧曰、是菅丞相所造也、余就求靈寶及緣起、僧乃多展畫像、其中不動像最奇古也、五色雖漸落、神彩逼人、僧曰、智證大師之筆也、聖德太子像亦奇也、又有三千佛像、僧曰、每歲十二月自朔三日、依佛名經、日禮千佛、至今爲式、已而余繙緣起、使客側聽、日影已斜、余疾舌讀之、八百餘年之事、須臾經過、若夫長之與短、誰得而思量、讀了揖僧而出、

名勝所在堂塔

本山寺

本山寺ハ、攝津國島上郡原村ニ在リ、役小角ノ開基ニシテ、本尊ハ毘沙門天ナリ、後世廢頽セシガ、慶長八年豐臣秀頼之ヲ再興シ、尋デ寶永中、將軍德川綱吉ノ生母桂昌院亦之ヲ修造セリ、今天台宗ニ屬ス、

〔攝津志島上郡五〕佛刹 本山寺在神峯山上、寺有天文永祿元龜天正慶長年間告勝及諸家喜捨文數章、寺後有瀑布、名玉水、浴瀑布治眼病、

〔攝津名所圖會島上郡五〕北山本山寺靈雲院原村の上方にあり、天台宗、安岡寺の南山に對す、 本尊毘沙門天役行者の作、長五尺三寸、脇士左吉祥天女、右禪膩童子、倶に行基の作、 開山堂本堂の東にあり、役行者を安す、額役優婆塞、集安院眞教筆、 鎮守稻荷、白山、藏王を祭る、 虎石本堂の中にあり、臥虎の形に似て、大サ貳尺許、色薄黒し、 五水瀧本堂の後五町許にあり、高五丈許、飛泉瓔珠を投ずるが如く、傍に石像の不動尊を安す、むかし役行者加持修行の時、瀧水五色に見へけるより名とす、これを浴する時は、諸疾眼病を治す、毎歳春のはじめには、天下安全の護摩修行ある、 忍惠上人舊庵方丈の南にあり、此庵より南方には瀑花及び西海の遥船遙に見へて、奇勝の風景なり、 天狗岩當山の絶頂にあり 赤小豆坂當山の西の麓をいふ 神峯寺嶽當山より廿町許北にあり、山州香峯寺の行路なり、これより七城二大佛見ゆる、城攝の界也、都名所圖會にも著す、 鐘銘松花堂の筆なり 虹梁札本山寺造營、慶長八年三月日、豐臣秀頼爲御願所、 北山の額樓門に掲る、廣澤筆、 本山寺額一箇は藤田友閑筆、一箇は廣澤筆、〇下略

〔北山本山寺緣起上〕本山寺靈雲院者、在攝州島上郡之北山、乃鎮國之名藍、而遮那止觀雙弘之古刹也、原夫人皇四十二葉文武帝登極丁酉之年、役小角之草創也、初毘沙門天降靈時、小角從葛城山遙望此岑嶺、紫雲氣氳連日不散、以爲祥瑞、迺欣然來至此地、仰千仞而披蒙茸、履巉巖而攀危峯、以窺紫雲之所由起、遂感天王之爲現聖容、於茲徵香木彫刻聖像、構草堂以安置焉、厥後天平神護間、皇太伯開成阿闍梨棲隱于勝尾山彌勒寺、深欽本刹之爲靈場、遂以寶龜五年遊止於此地、鉅開基趾、改造堂

寺制

宇、以爲祝國道場、蓋鐘樓經閣鎭祠香積等之諸宇、於是乎始備矣、自爾以降、朝庭之所崇敬、衆庶之所傾嚮、靈應日新、法驗月熾、無祈而不應焉、而中古屢遭騷亂、僧徒離散、堂舍荒廢、院之常住、亦爲他有矣、洎乎崇德帝大治中、有本州刺史橘輔元者、罹天刑之疾、百藥不效、有一男子、同患斯疾、於斯父子俱籠香願、一夕感靈夢、得卽愈矣、由此輔元傾家產而起工、百爾朽廢乍有改觀、輔元父子深荷天王之德、又厭有待之軀、卒拜大原山良忍上人剃染爲僧、父曰良慧、男曰忍慧、良慧已晚年卽結廬於本刹境內、專以融通念佛爲務、恒以小豆記之、一念一粒、漸積至數斛、蓋當時民間之風俗有若斯矣、後以久安四年八月十五日安詳而逝、時天華紛墜、音樂遠聞、忍慧者後業成德立、住持于本刹、是爲第十八世住持中興第一祖也、時近衞帝寵顧太渥云、自爾已來師資繼績、法系不絕者、今已陸佰有餘載矣、天文中有松永善右衞門久秀者、本郡五百住邨人也、爲人勇强、具澄世之才、嘗歸天王、每歲除夜必詣以禱家運、暨于黎明分長明燈携而還家、移之常香、用爲淨火、弘治永祿之間、仕三好筑前守長慶、累有戰功、遂爲三好氏以和州一國見封、所謂松永彈正者是也、時自以爲天王所加、卽納良田數頃、以表謝悃、且將大施布金之功而亡、何而敗喪、今猶於五百住邨有一片地、屬于本刹常住、蓋當時之殘田幸而存耳、厥後堂舍廢壞日滋甚矣、天正中住持本西法師具本刹由緒、以申相國秀吉公、公乃錫肸田數十畝、以充天王之供、及秀賴公蓋有自感、以慶長八年命有司大加修葺焉、旣而未及百年、終復屬大破、寶永中、住持慶圓俗姓岡部氏、相國憲廟〔○德川綱吉〕生母桂昌院藤夫人之甥也、迺請夫人以本院再興、夫人賜黃金若干、命以從事匠作、京兆尹松平伯州奉憲廟內命而監護之、是以不日匠氏訖役、頹乎廢刹頓復舊觀、巍然梵宇、仰如化城、卽寶永三年丙戌二月也、凡從文武御宇創建之年、迄于今玆安永四年乙未、都經一千七十有九祀、厥間雖時有治亂、運有興廢、至于天王利生則無復有古今消長、庶幾祝國道場、秖有興日月偕老也、

〔本山寺文書〕本山寺境內剪採竹木事、如先々堅令停止訖、若於違犯之族者、速可處嚴科者也、仍狀如

名稱 所在 創建 寺格	名稱 所在 沿革

件、

元龜三年二月三日　　和田愛菊在判

悉檀寺

悉檀寺ハ、舊ト攝津國島上郡ニ在リ、僧安秘ノ創建スル所ニシテ、淸和天皇貞觀五年、天台別院ト爲シ、同十六年、改テ官寺ト爲ス、今廢寺ニシテ、其所在ヲ失セリ、

〔類聚國史百八十佛道〕貞觀十六年十二月廿五日己卯、攝津國島上郡悉檀寺預之官寺、先是傳燈大法師位圓純奏言、先師傳燈大法師位安秘、奉爲國家建此道場、貞觀五年、太政官處分、爲天台別院、望請改爲官寺、詔許之、

壽命院

壽命院ハ、攝津國島下郡忍頂寺村ニ在リ、僧三澄ノ建立スル所ニシテ、初メ神峯山寺ト稱ス、淸和天皇貞觀二年、詔シテ御願眞言一院ト爲シ、名ヲ忍頂寺ト改メ給フ、後今ノ名ニ改ム、

〔攝陽群談十三寺院〕忍頂寺　島下郡忍頂寺村ニアリ、本尊正觀音ハ、春日彫刻ノ尊像ナリ、

〔攝津志六島下郡〕佛刹　壽命院舊名忍頂寺、舊在忍頂寺山號、今在山下忍頂寺村、

〔三代實錄四淸和〕貞觀二年九月廿日丁卯、傳燈滿位僧三澄奏言、神峯山寺、在攝津國島下郡、三澄奉爲國家所建立也、春演說最勝王經、秋吼講法華妙典、請爲御願眞言一院、賜名忍頂寺、詔許之、

箕面寺

箕面寺ハ、一ニ瀧安寺ト云フ、攝津國豐島郡平尾村ニ在リ、天台宗ニ屬ス、傳ヘテ役小角ノ開基ト稱ス、戰國ノ時、兵燹ニ罹リシガ、慶長年中、之ヲ再興セリ、本尊ハ辨財天ニシテ、每年正月修正會ヲ行ヒ、滿願ノ夜、靈符ヲ授ク、之ヲ箕面ノ富札ト云フ、

〔伊呂波字類抄 諸寺見〕箕面寺
攝津國之北豐島郡之山、有一聖跡、所謂箕面寺是也、有瀧三所、最上者雄瀧也、深隩長一丈餘、落水碎礫之響、擴列如大雷發音、第二者、瓔珞瀧也、崖石洋溢、鮮羅溪徑、餘流硠磞、只貫齊苦之珠、元殊異之興、且隨千體、得於名稱也、第三者、雌瀧也、轉躁烈皴危、高十五丈餘、降水之粧、泊漻淸流爲體、似林〇林一本作體於瀑布、基淵ノ澱淵ノ沖浸形大淵論染于錦纈頂上之壺者、龍穴也、其色錦斑、長三丈餘者、動吐於黑雲、銜黑白雨、四季不定矣、
有夢想之告、不日點定瀧下之西脇、對掃荊棘、曳夷巖岡、結構草庵、奉造顯安置等身龍樹菩薩像一軀、幷辨才天女形像並花坐、以白鳳廿一年辛未十月十七日甲子、開眼供養畢、祇德善大王、十五金剛童子、爲護法神道、少寶倉置堂內艮角、是則非無略頌云、
大唐國第三仙人　日本國役優婆塞　金峯山法起菩薩　金峯大政威德天　箕面寺龍樹辨天　瀧基大聖不動尊　三世施化隨類身　哀情留跡是箕面

〔拾芥抄 下本諸寺〕箕面 攝津國、辨才天、南所權現、本地千手、龍樹、

〔攝津志 七豐島郡〕佛刹　箕面寺 及箕面山、元亨釋書曰、役小角創建、寺藏親王護頂令旨、嘉祿三年元弘二年願文、正慶、永祿、天正年間告牌、

〔元亨釋書 十五方應〕役小角者、賀茂役公氏、今之高賀茂者也、〇中略文武帝下勅召小角、〇中略便配豆州大島、〇中略大寶元年、放還、近京師、凌虛飛去、小角嘗在攝州箕面山、山有瀧、小角夢入瀧口、謁龍樹大士、覺後

本尊
堂坊

構伽藍、自此號箕面寺、爲龍樹淨刹、

〔攝陽群談十四寺院〕箕面寺　同郡〔○豐島〕平尾村ニアリ、寺記云、持統天皇御宇、役小角之開基、山ノ形容ヲ以テ箕面ノ寺號アリ、本堂本尊ハ如意輪大悲尊像也、當山ニ祭祀ノ辨財天ハ、日本第一ノ尊體、毎年正月富ノ大法會アリ、岩本坊修之、

〔攝津名所圖會六豐島郡〕箕面山瀧安寺吉祥院〔箕面山にあり、天台修驗道聖護院に屬す、○中略〕

本社大辨財天女〔役行者の作、長一尺五寸許、日本四所辨天の第一なり、近州竹生島、相州江島、藝州嚴島、當山等をいふ、〕

本地堂如意輪觀音〔智證大師の作、長四尺五寸許、〕行者堂〔役優婆塞自作、長貳尺許、〕鎭守〔五社明神、熊野三所權現、三寶荒神、毘沙門天、吉祥天女等を祀る、〕神水〔行者堂の傍にあり、加持の水なり、〕聖天尊者〔當山登り口島井の右にあり、役行者苦修練行の時出現し給ふ也、本朝最初の尊天といふ、〕行箕面瀧〔本社より十八町奧にあり、巖頭より飛瀉して、石面を走り落る事凡て十六丈、瀧壺より泡を飛す事珠をちらすがごとく、霧を噴事雲の如し、日光これを燭して瑠璃目を奪ふ、天下賞して瀧の第二とす、瀑の上に碧潭あり、これを龍穴といふ、村民旱天に遇ふ時、こゝに禱れば、忽膏雨降る也とぞ、○中略〕

三鈷松〔瀧の上にあり、三葉の松にして、如も其色四時蒼々として鮮しく、瀧水日影に映ずる時は光あり、故に一名三光の松とも、又役行者葛城の峯より三鈷を投給ふ時、此松にかゝりしより此名あり、〕龍穴〔三鈷松の側にあり、岩間方三丈許、深潭にして蒼色なり、其深き事計がたし、〕奧飛泉〔大瀧より六町許奧にあり、飛流八丈許、大瀧を雌瀧といひ、これを雄瀧といふ、〕座禪石〔奧の瀧の上にあり、行者こゝにて練行し給ふ、〕錫杖石〔同所にあり、行者こゝに錫杖を立給ふ所也、〕白龍石〔同所にあり、當山辨財天白龍に乘じ降臨し給ふ、其白龍化して石と成、神社考に見へたり、〕天上嶽〔當山の絕頂をいふ、役行者こゝより昇天し給ふと云、〕唐人戻巖〔瀧道にあり、大岩にして嶮路に遮る、むかし來朝の唐使、此瀧比類なきとて登山し、嶮路とて駕を戻されしより此名とす、詳ならず、〕

それ此一山は丹楓多くして、秋の末は三千の樹々錦繡の如く、瀧の流は紅を灑ぎ、樵夫錦著て家に還り、山僧のこゝろを染ぬ、紅の色艷しく風のかけたるしがらみは、蜀錦を布が如し、立田川の秋の色、高雄の山の夕日かげ、通天橋もこゝに疊て、京師浪花の騷人霜葉を翫で競ひ來る、長月より時雨する頃の賑ひ、楚岸もこゝにありとぞ思はれける、抑此山は、役優婆塞の開基にして、白雉年中の創建也、東西の山峯嵯々として、兩部の曼荼羅を表し、南北の翠巒峨々として、不二の尊體

を顯す、瀧水の長瀧、萬頃の田園を潤す、傳て飛泉の巖石を見るに、左右高峙て、瀧頭も亦爾也、南方遙に晴れて、流れ滔々とめぐる、其形箕の面の如し、故に名とす、いにしへは此地に諸堂巍々たり、兵亂に罹て荒蕪の後慶長年中、今の地に移す本社辨財天は、後水尾帝の御建立の勅を下し給ふ、

寺格

〔瀧安寺文書〕箕面寺者、往古御祈禱所也、當今皇帝〇後醍醐之還幸御祈禱、殊可抽忠勲之由、依大塔二品親王御氣色之狀如件、

元弘三年閏二月廿二日　　左少將定祐奉

箕面寺衆徒中

寺制

〔瀧安寺文書〕禁制　　箕面寺

一山林伐事付所々散在者盜剪事

一參詣衆於地下山內取役所事

一制之內河狩之事、

右條々、堅令停止訖、若於違犯之輩者、可被取制物、尙以及是非者、加成敗、可處罪科者也、依定所如件、

天文廿年五月日　　池田兵衛尉長正花押

〔瀧安寺文書〕條々

一當寺兩座之間、如先規可被仰付事、

一寺役等可爲同前事

一諸事寺法堅固可被仰付事

右條々、寺家任法度可被申付候、若被相背族於在之者、堅爲寺中可被仰付候、仍如件、

天正參乙亥十一月廿六日　　攝津守村重花押

箕面寺

衆徒御中

用途

〔瀧安寺文書〕下右馬寮豐島御牧、
可早下行箕面寺造營用途能米貳拾斛事
右寮頭殿御奉加如此、早可令下行之狀如件、
元仁二年三月五日　　預所右馬允源景基

〔瀧安寺文書〕依御宿願、明年三月比、可被供養箕面御堂也、請僧一口布施注文如此、可被致沙汰給之狀、依仰執達如件、
嘉禎三年四月廿六日　　左京權大夫
修理權大夫
小笠原太郎殿

雜載

〔千載和歌集雜十六〕みのおの山寺に日ごろこもりて出侍けるあかつき、月のおもしろく侍ければよめる、
仁和寺後入道法親王覺性
木のまもる在明の月のをくらずば獨や山の峯を出まし

〔攝津名所圖會六豐島郡〕箕面山瀧安寺吉祥院〇中略
箕面富　修正會とて、毎年正月朔日より七日の間、天下安全、五穀豐饒の祈禱あり、七日の滿座に富會とて、此夜四方の諸人競ひ來て、木札に己が名を記さしめ、三箇の唐櫃の内に入、觀音堂の前に居て、大に嚴々して、寺僧に玉簾をかけて、衣の袖をかゝげ、錐にて小穴より札を突出す、第一の富、第二の富、第三の富として、大聖に開れ、其札の姓名を見て、修正會に於て法の御守を授く、これを得るもの福幸來て、萬寶家に充る豐饒ありといふ、此法會に諸國より來て、自然に富に的り、神札を得るもの道中にて、宿せず、夜通しに歸る、これ顯富他へ散らざるの風俗也、又此富に的ぎるしの金銀を投じて、的りたる者の神札を買ふといふ、又二月朔日より三日まで、修二會とて官家より奉書を賜ふ例あり、抑辨財天は倉稻魂神の垂跡にして稻荷明神也、此富會は年ふるき事にて、和歌に富突山と詠じたる事あり、

〇按ズルニ、箕面寺富札ノ事ハ、倚ホ法律部下編博弈篇寺社富突條ニ在リ、

名稱所在

創建沿革

勝尾寺

勝尾寺ハ攝津國豐島郡平尾村勝尾山ニ在リ、寶龜八年、僧開成ノ創建スル所、開成ハ光仁天皇ノ皇子ナリ、此寺初メ彌勒寺ト號セシヲ、貞觀年中今ノ名ニ改ム、

〔拾芥抄諸寺下本〕勝尾攝津國、勝道上人、

〔拾芥抄諸寺下本〕三十三所觀音　勝尾寺攝津國豐島千手

〔攝陽群談寺院十四〕勝尾寺カツヲ　同郡〇豐島平尾村勝尾山ニアリ、神龜四年、善仲、善算、茅屋ヲ當山ニ結デ靜居年アリ、寶龜八年、開成皇子寺院ヲ草創シ給テ、始テ彌勒寺ト號ス、貞觀年中ノ寺務行巡上人ニ、勅額ヲ改賜テ勝尾寺ト成リ、山號應頂山ト稱ス、大伽藍ノ靈區タリト云ドモ、壽永年中ノ變天下騷動シテ、兵火六十八宇、一夕ニ灰燼ス、〇下略

〔伽藍開基記攝州二〕勝尾寺神武四十九代光仁帝、寶龜八年建、自此至元祿二年、九百十二年、本尊觀世音菩薩、開山開成、光仁帝之子也、開山、名開成、本朝四十九代光仁帝之子、桓武天皇之兄也、幼敏穎而志佛乘、帝甚鍾愛、天平神護元年正月一日、潛出宮入勝尾山、壘石爲塔、禪宴其側、二月十五日、仲算二師、經行山中、見而問曰、深山孤寂、爲何居此、皇子述其素志、二師曰、已四旬餘、以何爲食、對曰、二鳥日銜物至、我嘗之味甘、不知何物也、且雨露亦不落、二公相顧贊嘆、延歸庵中、卽日就二師剃落受戒、

〔諸寺略記〕一勝尾寺者、本名彌勒寺、水尾天皇〇淸和御時、改勝尾寺、光仁天皇御宇、開成之建立、本尊八尺千手觀音、此寺聖武天皇御宇、神龜年中、善仲善算、攀登當山、作草庵而蟄居、野獸山禽皆馴、爰有上人發願、擬奉書寫如法大般若經一部六百卷、其啓白之日、午時雷電大鼓神落、尋得其處、擬爲安置經卷之處、其後天平神護元年、柏原天皇〇桓武皇子來、以二聖爲師受戒、名曰開成、二聖幷皇子、共傾首密

諡號

語、流涙良久者也、其明日以經紙皆悉運皇子之住坊、神護景雲二年、善仲聖人六十一、乘於草座高飛冲青天、同三年善算六十二、無言之行法勤云、如向冲天失沒復畢、皇子爲二聖之付屬、執行寺家、爲寫經向天道、祈請金水、一七日夜也、滿七日曉、夢八幡大菩薩、稱爲寫經給金丸、夢覺見之、經臺之上、顯現輪三寸長七寸金丸者也、厥後重祈、是硯水一日夜之曉、復卯方南宮汲白鷺池之持參也、夢覺見閼伽器滿水一合許也、書寫之間、經六箇年之、堂々經營已成、業已共期慈尊、故號堂名曰彌勒寺、寶龜年中、所奉積納而已、相加納置佛舍利六粒、釋迦如來像、彌勒慈尊、幷諸菩薩像等、稱堂者寶龜八年建立、今此千手堂者修行僧興日、千手觀音料材、捌尺白檀一柱、送寄開成許、件香水荷上、或輕或重、万人皆試斯德、于時滿寺人等、共夢云、數千鬼神圍繞檀木、如此經數日間、修行僧妙觀出來云、此香木奉造顯觀音像如何、開成答云、可然、亦隨卽抱喜悅色去、經三日後、僧俗幷童等十八人、相具出來奉造、斧聲晝夜不休、相加四天王像等、食物每日一度、卅日皆悉造顯、旣云、件僧乍居新像御前、合掌于額死去、所從等馳求四方、不見一人、寶龜十一年八月十八日也云々、

〔法然上人行狀畫圖三十六〕勝尾寺の隱居も、すでに四箇年になりぬ、花洛の往還をゆるされざりしに、〇下略

〔皇胤紹運錄〕光明院　觀應二十二廿八、俄御落飾、三十一法緯眞常惠、〇中略文和四八八、自河州東條行宮出御伏見殿、其後御保安寺、自去年一著御黒衣、御持齋云々、其後所々御經行、康曆二六廿四、崩於勝尾寺御草庵、春秋七十、日來奉號光明院殿、不改此號、不可及別諡號、御遺勅云々、

本興寺

本興寺ハ、攝津國河邊郡尼崎町ニ在リ、應永年中、僧日隆ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本

名稱所在

堂塔子院

寺タリ、

〔攝津志八河邊郡〕佛刹○中略 本興寺寺藏二弘治三年綸旨、永祿天文以降、奕世補任、告勝等、

〔攝津名所圖會六下河邊郡〕本興寺尼崎町にあり、日蓮宗勝劣派、塔頭八院、本山とす、京師本能寺に相同じ、

〔國花萬葉記六之三攝津〕川邊郡神社佛閣名所

本興寺　法花宗關西三十三ヶ國の本寺、開山日隆上人は、淸和天皇の末孫、桃井直和の一子也、上人京都より下著の砌、此所の辰巳に居住す、折節領主芝二郎五郎入道の妻室、毎胎半産にして亡失す、又已に臨産に及ぶ時、則上人の加持、由て母子安泰にして誕生す、これを龍安寺殿と號せり、父領主大に歸依渴仰して、大檀那と成、上人の爲に寺地を寄附し、八幡宮屋敷、并に貴船宮屋敷際地迄、悉上人に賜ふて、寺院建立遂、時に應永卅年、堂殿成就す、今の城所八町四方は、昔の寺屋敷也、寺地元八幡宮地たるに由て、鎭守三十番神内に八幡宮の古影をうつし、且又八月十五日、放生會の祭儀を執行する事怠慢なし、是には本興寺舊記有之、

〔攝陽群談十四寺院〕本興寺　同郡同庄○河邊郡尼崎ノ大寺也、院名精進院、應永年中、權大僧都日隆上人開基、日蓮宗一箇ノ本寺タリ、塔頭八宇次ニ記之、

啓運坊　右境內塔頭也、應永年中、信堯院日英開闢タリ、

善應坊　右同ジ、永享年中、常恒院日迎開祖タリ、

本隆坊　右同ジ、嘉吉年中、常住院日要開祖タリ、

眞行院　右同ジ、寶德年中、堯詮院日慶開祖タリ、

重泉坊　右同ジ、寬正年中、大乘院日營開祖タリ、

惠運院　右同ジ、文明年中、正住院日護開祖タリ、

好善院　右同ジ、同年中、興明院開祖タリ、

耕雲院　右同シ、同年中、實教院日性開祖タリ、

寺記云、開山日隆上人姓源氏、父者桃井苗裔也、厥先人王五十六代淸和天皇之遠孫也、淸和第九代判官義康者、足利之元祖也、義康之子上總介義兼、其子義胤、桃井之元祖也云々、御父爲越中州射水郡之主、而卜居於其郡淺井島村、于時以本朝人皇一百一代後小松御宇、至德元年歲次甲子十月十四日、日出時逢師滅後一百二歲誕生焉、十歲出家、十八歲上僊、號慶林院日立、後日自改作隆、再興於本門八品之奧旨、而創建兩本寺、末寺流倍繁茂、而至于盡未來際耳云々、

名稱所在堂塔

古事類苑

宗教部五十七

佛教五十七

西蓮寺

西蓮寺ハ、伊賀國阿拜郡長田村ニ在リ、創建未ダ詳ナラズ、中世衰頽セシヲ、明應中、僧眞盛之ヲ再興セリ、天台宗ニ屬ス、

〔三國地志伊賀六十六〕阿拜郡 梵刹

西蓮寺(醫王山無量壽院) 按、明應年間、眞盛開祖、界内ニ觀音堂、藥師堂、子院三區アリ、後土御門院ノ石浮屠、及眞盛ノ塋表アリ、

〔伊水温故寺〕醫王山西蓮寺 長田庄(○阿拜郡)

院號は無量壽院、往昔本堂ハ傳敎大師ノ作、藥師佛也、依之稱醫王山、補處眞盛上人當寺成中興、池中准白蓮花、改西蓮寺云、

本尊彌陀座像 行基像(眞盛木像も同所にあり、順禮札所二十番、)

此尊容は往昔瑞性寺の本尊也、佛性寺天正兵亂に衰微して、草堂に座しけるを、當寺の住侶眞雅上人、承應二年ニ、移本堂脇士親勢二菩薩、天正兵亂より友生來迎寺ニ有、寳殿阿彌陀立像、安阿彌作、(運慶弟子快慶と號す)古本堂の安置佛、本堂の額は龍寳山大德寺の塔頭高相院、清巖宗渭筆、眞盛上人廟所五輪有、當國或は寺內吉凶に汗出る、其多少に依て可考知、當灯料は古來坂本より獻す、後土御門院石塔有、當帝、眞盛和尙を歸依し、戒師たる故に、此地に安置す、地藏六體有、上野町打鐵也、一男

爲追福造立、

什物數種有　眞盛傳記有

當寺は江州坂本西敎寺末刹　寮五坊

〔本朝高僧傳十八淨慧〕叡麓西敎寺沙門眞盛傳

明應元年、○中略擲西蓮寺、迎爲第一世、○中略四年正月、在賀州西蓮寺、四十八夜念佛說法、二月晦日俄病、○中略安詳而寂、○下略

〔日本行脚文集三〕伊州上野長田庄百田村醫王山西蓮寺眺望幷八景吟、一空賦所命而假物之稟所者性也、命性之中、万物之大本、而天地之間に亭々たり、其寄ある事々物々に配するに、此中道の離たる物はあらず、是一向、廣大圓滿、橫竪自在の法極なれば也、いでや台嶺圓融の金獅子は勳ずして、十界の法衢にかけり、西蓮止觀の玉鳳凰は聲なふして、十如の心園に吟ず、をのずから無二亦無三の一挺蠟、一もつて貫目掛の法燈なれば也、しかれば當山西蓮の鴻臚は、最可畏聖主、後土御門御戒師圓戒國師眞盛大上人の開基として、みづから秘修し、五方に神呪を埋、四隈に曼陀羅をしき、阿耨多羅三藐三菩提の佛たち、出離解脫の冥功あらせ給へと、物したまふて、陰洞終焉の地と掟たうびし靈驗の聖跡なり、されば御在世の講筵には、三明通月の眶鮮に、五智達道の舌香しく、妙法一味の六字名號の慈雨をふらせ、往生直入門ひらけしより、德化連綿として、時日の梵鐘とに、緇素のあだ夢をゆぶる、無窮の魂形碑銘に殘り、金閣巍々として居座がごとし、御入滅の奇相異瑞は翰にいはせがたし、只紫雲松ひとり聖衆來迎の絃管の聲をとなふ、猶形見置せ給ふ御自翰をはじめ、陸信忠が十王、思恭が釋迦、妙澤の不動、五色の仙舍利、是等は世にさうなき貴物なり、されども物みな變化の世にしなれば、發さり、歛めぐり、鴦の瓦は尾をすべて斑鳩の塒となり、鵲梁は膝あせて斲木の巢となりぬ、松區空く菓耳酢漿の葉隱に幽々乎たり、又變じあらたむる

期いたり、高祖再世の約諾や有けん、當侶權大僧都大阿闍梨眞能上人中興として、活衲の玉襷にやつし、虚地空山を平地し、斧鋸の功なり、玉宇瓊閣靡々煒々、四枯ふたたび八榮の彎を照せり、いまはた現師智行良圖の胸襟廣く、淵識拾玉の衣裏かがやきければ、八重末園眉をひらき、千軒の檀袂裾をつらね、人塵梢を染、戚涙私雨をそゝげり、ことさら欄外の風光、四顧默然として抃、元來山岫無心の雲霧に跨、天晴西湖四百里も、尾閭一吹の叢にたらず、須彌万由旬も、芥子一窖にかはゆし、〇下略

寺領

〔三國地志九十八 伊賀國公案〕伊州長田西蓮寺領之事

本高四石五斗（目錄別紙）在綾郡長田村中

右令扶助畢、小林境內全可有進退之狀如件、

寛文九酉年五月十一日　西蓮寺

西蓮寺領目錄

一（字上村）上田壹反貳畝　與助（有畝壹反貳畝貳拾歩、高壹石八斗、）

一（字ひくら）上門壹反　助作（有畝壹反四畝五歩、高壹石五斗、）

一（字と市）上田八畝　善右衛門（有畝壹段貳畝、高壹石貳斗、）

上田合三反、有畝四反、　高合四石五斗　長田村高之内

右之通村、並每年可有取納者也、

寛文九酉年五月十一日　中小路五郎右衛門

加納藤左衛門

西蓮寺

寄附伊賀國阿拜郡長田村西蓮寺領之事

本高四石五斗（在阿拜郡長田村中）　右任寛文九年五月十一日、貞享元年九月十一日、寛永元年四月朔日、寶永八年三月十五日、享保十六年十月十八日先判之旨、全收納山林境內尤可有進退者也、仍如件、

寺制

御名

元文二丁巳年八月七日御判

〔三國地志九十八伊賀國公案〕峯松庵賜長田西蓮寺制書

當寺之櫻枝をきり候者於在之者、曲事可申付候間、可得其意者也、

三月五日　和泉御判

名稱所在

財良寺

財良寺ハ伊賀國ニ在リ、天武天皇ノ御願ニ由リテ、建立スル所ニシテ、舊ト東大寺ノ末寺タリ、後世廢絶シテ其所在ヲ失ス、

〔東大寺要錄六〕末寺章○中略

伊賀國財良寺

右天武天皇御願

〔東大寺續要錄寺領〕一末寺○中略

財良寺○中略

件五箇寺、雖往古末寺、各門跡相承、本寺不能進止也、

顯證寺

顯證寺ハ、舊ト伊勢國桑名郡長島ニ在リ、釋蓮如ノ子蓮淳ヲ開基トス、元龜中、織田信長ニ抗

名稱
所在
沿革

シ、天正二年、遂ニ亡ボサル、後桑名鍋屋町ニ再建ス、初メ眞宗西派ニ屬セシガ、正德年中、高田專修寺派ニ改メタリ、

〔勢陽五鈴遺響桑名郡四〕願證寺　同處〇桑名鍋屋町ニアリ、舊ト西本願寺派、今高田專修寺ニ屬ス、本尊阿彌陀佛、安阿彌作、　開山蓮如上人ノ息、蓮淳上人ナリ、正德年中、西本願寺ヲ辭シテ、今宗トナル、永祿元戊午年中、同郡長島ニ建ル處ニシテ、其地ヨリ今ノ處ニ遷ス、寶曆年中、本堂ヲ一身田專修寺ニ遷シ、對面所トス、又舊ト本願寺派ノ時ハ、飯高郡松坂府願證寺モ掛所ナリ、

〔勢陽五鈴遺響桑名郡五〕長島府城〇中略　或云、長島府ハ、舊ト一揆ノ魁首願證寺ノ地ニシテ、門徒ニ平賀宗三、地下人ヲカタライ、其將トナスト、然レドモ願證寺ハ長島府ノ北ニ、香取庄杉江村アリ、此處ニ創立セリ、〇中略　願證寺舊跡　或云、願證寺ノ舊墟ハ、今ノ長島地ナリ、顯如上人信長ノ爲ニ襲ル上人三重郡寶山法藏寺ニ遁ル、暫ク留リ憩ヒ後願證寺ヲ建ツ、又坊間ヲ長島町ト稱ス、又近世濃州平尾村ニ、近世願證寺ヲ中興ス、本願寺五箇ノ附屬隨一ノ名ナレバ、平尾御坊ト稱ス、改テ願證寺ト名ク、又飯高郡松坂府ニ願證寺アリ、舊ト當寺ノ掛所ナリ、故ニ同名ナリ、今高田專修寺ニ屬セリ、

〔尾張志名古屋寺院〕一向宗西派　西本願寺本坊〇中略

信證院蓮如上人の時、年月詳ならず伊勢國桑名郡長島の門徒等が申乞によりて、長島のうち杉江村に一寺を創建し、願證寺と號け、上人の末男信實惠を開山として住持たらしめ、伊勢、尾張、美濃、三箇國の小本山としたりしが、元龜の頃より、長島の門徒等、信長公の命に從はず、一揆を起し、騷動四五年のうちやまず、徒黨多勢にして、退治難儀なりしかども、天正二年九月廿九日、終に信長公の軍勢に戰まけて、一揆の黨類殘りなくうち亡され、願證寺も廢頽に及びしかば、顯如上人小本山の絕たるをうれへ、内大臣信雄公に申て、その領地淸須に一寺を建、願證寺と名づけ、長島の寺の

寺格

名稱所在

如く、三ヶ國の末寺を所務したりしが、其後又長島の近邑、桑名に願證寺を再興して、三ヶ國の本寺、舊儀に復しける故、清須の寺にては、寺務を行はず、○下略

〔一向宗源脈〕第十一顯如上人諱光佐、信樂院大僧正、文祿元年十一月廿四日化、壽五十、證如之子、○中略同錄○永三年十月、本願寺僧徒十箇寺、勅許院家號、蓋院家則非平民之旨、故欠下云、本願寺十箇寺勅許院家寺、處々有之、今東西院家數不定也、十箇寺者願（中略）勢州長島願○證寺、（中略）是也、

本統寺

本統寺ハ、伊勢國桑名郡桑名寺町ニ在リ、因テ又桑名御坊ト稱ス、寛永十八年ノ創建ニシテ、僧教如ノ女壽量院ヲ開祖トス、東本願寺ノ別院ナリ、

〔三國地志伊勢十〕桑名郡　梵刹

本統寺　按寛永十八年創建

〔勢陽五鈴遺響桑名郡四〕本統寺　同府名○桑寺町ニアリ、京都東本願寺輪番所ナリ、方俗桑名御坊ト稱ス、第□世教如上人ノ息女號長薙髮シテ壽量院ト號ス、門徒等招請シテ住侶トスル處ナリ、坊中三箇寺、末寺二百餘寺尾州濃州本州三國ノ内ニ散在セリ、寛永年中ノ創建ナリ、

觀音寺

觀音寺ハ、伊勢國庵藝郡白子ニ在リ、傳ヘテ藤原不比等ノ創建スル所ナリト云フ、稱光天皇ノ御祈願所ニシテ、本尊觀世音俗ニ子安觀音ト稱ス、今眞言宗ニ屬ス、

名稱 所在 堂塔

寺格

〔三國地志 三十 伊勢〕庵藝郡 梵刹

子安觀音 ○中略 按本尊白衣觀音 聖武天皇ノ御宇、淡海公ノ建ル所ナリト云、本國ノ土俗巡禮ノ一ニシテ、或ハ子安觀音ト稱シテ尊崇ス

〔勢陽五鈴遺響 庵藝郡 二〕白子山觀音寺 同處 ○白子 ニアリ、眞言宗、本尊白衣觀世音菩薩、方俗子安觀音ト稱シテ詣人多シ、寺傳云、聖武天皇勅願、天平勝寶年中勅願藤原不比等建立、伊勢國順禮札所第十六番、

もらさじと立る佛の誓とてつゝみがうらになる浪の音

總門ハ東向ニテ、左ノ方ニ茶所アリ、右ニ鐘樓堂、方丈、庫裏、鐘樓堂ノ傍ニアリ、本堂東向正面ニアリ、秋葉權現祠幷ニ金毘羅權現ノ祠、本堂ノ右ニアリ、次ニ富士權現、天神之祠、熊野權現、神明、木立明神、則是比佐豆知神社ナリ、小鳥居ヲ建、本堂ノ右ニアリ、辨天祠茶所ノ後ニアリ、不斷櫻茶所ノ左、本堂ノ右ニアリ、御朱印高三十石、外高四石五斗、紀州領主ヨリ國印免除ナリ、

〔薩戒記〕應永三十三年十二月十五日甲戌、頭中將隆夏朝臣來臨、被示云、伊勢國白子觀音寺、可爲御祈願所之由、可遣御教書之由、以三條中納言公保卿被仰下、件書樣依不審、相尋按察大納言資家卿之處、院宣之舊案、注送之旨如此、內了簡可注給歟、

件舊草云

甲斐國法善寺宜爲御祈願所、奉祈寶祚無疆者、院宣如此、悉之以狀、

明德二年九月十日　按察使判 奉

寺僧等中

以右趣、都談被計示之旨如此

伊勢國白子觀音寺、宜爲御祈願所、奉祈寶祚無疆者、天氣如此、悉之以狀、

應永卅三年十二月十三日　　左中將判在

寺僧等御中

予〔定親〕〇藤原　案事理、稱被仰下御祈願寺之條如此、於院宣者、可相違之事也、於公家御祈禱者、若可爲綸旨歟、然而近日之儀只可被存略儀之由指南之、仍今度如右書遣了云々、

予所存

當寺宜爲御祈願所、奉祈玉體安穩者、於此旬者、可在人意、天氣如此、悉之以狀、

年月日　　左中將判奉

只可書觀音寺供僧等中也、可案

伊勢國白子觀音寺供僧等中

若如此可書之歟、爲後者慇注之、

寺領

〔寛文四年御朱印帳眞言宗古義〕三十石　伊勢元和三年九月七日　白子觀音寺

雜載

〔和漢三才圖會七十一伊勢〕白子觀音寺　在白子　寺領

出安產守札、即尊像圖畫也、信之必有驗、寺內有櫻樹、每年四時開花、稱不斷櫻名木也、

專修寺

名稱
所在

專修寺ハ、伊勢國庵藝郡一身田ニ在リ、眞宗高田派ノ大本山ニシテ、親鸞ノ開基、弟子眞佛ノ傳領スル所ナリ、舊ト下野國芳賀郡高田ニ在リシガ、後土御門天皇ノ時、住持眞慧今ノ地ニ遷シ、高田ニハ別ニ一寺ヲ建テ、其舊趾ヲ存セリ、尙ホ下野國專修寺條ヲ參看スベシ、

〔大谷本願寺通紀六勢門鳴傳〕專修寺今在伊勢奄藝郡高田

〔諸門跡傳三〕專修寺

創建沿革

此寺始在下野國芳賀郡高田、後今地移伊勢國、故號高田、一身田者所名、號無量壽院、親鸞十二代尭恵大僧正之代、依後土御門院勅賜門跡、

親鸞聖人　從三位藤原範綱卿養子　皇太后宮大進有範息、承安三年生、〇中略

眞佛　鎮守府將軍平國香後胤、下野國司春男、正嘉元年三月八日寂、五十才、

〔叢林集七下〕專修寺（正和元年已前ハ、阿彌陀寺ト云シ歟、覺如上人ノ狀ニ見ヘタリ、ソノアテドコロ上ニ記ス、）人王八十五代後堀川院嘉祿二丙戌年、聖人五十四歲、下野國芳賀郡大內ノ庄高田ニ於テ、一宇ヲ建立マシ〳〵テ、專修寺ト名ク、聖人ノ直弟常陸國眞壁ノ眞佛坊當寺ヲ住持セリ、コノ眞佛ハ、カノ平太郞入道ニアラザルベシ、カノ家ノ系圖ニハ、柏原天皇ノ末孫鎮守府將軍平國香後胤也ト云云、眞佛ノ弟子ニ遠江國鶴見ノ專信坊專海ト云フ人アリ、コノ專海ノ附法ニ顯海坊ト云フ人アリ、當寺ヲコノ顯智ニ付ス、ソレヨリ已來、次第相承スト云云、然ルニ當寺寺號ノ事、上意ヲ經テ名ケラレタル歟、顯智已後ノ寺號ニシテ、眞佛ノ時ニハアラズ、存覺記云、正和元年、存覺二十二歲、（時ニ名ヲ光顯ト改ム）夏比、爲法智發起、（顯智ノ弟子歟）被打額寺號專修寺、同人計申之、勘解由小路二位入道經尹卿（法名家尹）書之、予由錦小僧正誂之、秋比山門事到來、其旨趣、一向專修者、古所停廢也、而今專之號不可然、早可破却云云、座主裏築地僧正公什也、附弟之慈什僧正者、廳司禪尼（冬雅卿角母）曾孫之間、以彼緣令議、座主仍无爲也、然猶定不休歟、枉可改寺號、然者先可撤額之由、座主並玄智僧正相計之間、被撤其額、後日法智申下吾寺用彼寺號也ト、又云、正和三年（存覺二十四歲）春、大上（覺如）御下向尾州、乃至大上連々御所勞之間、當寺官領事、自御存日可被讓與之由、自彼秋隨命者、以聖跡可掛牛馬之蹄歟、可有意之由被仰之間、此上固辭無據歟之間奉承諾、仍十二月廿五日請取之等ト、コレラノ記文ニヨレバ、寺號ハ本願寺ヨリ授之、（但覺如歟、存覺歟、）寺務モ又覺如ヨリハカラハセタマフト見ヘタリ、加之永祿十年、顯誓記ニ云、顯智ハ常州眞壁ノ眞佛ヒジリノ附弟、親鸞聖人ノ孫弟ナリ、同國和田ノ圓善ハ、コレモ眞佛

ヒジリノ弟子、遠江國鶴見ノ專信坊專海ト申セシ人ノ門徒ナリ、イヅレモ御開山聖人ノ御在世ニアヒ奉リシ御門人ナリキ、カノ圓善ノ弟子ニ、越前國大道ノ如道ト云フ者アリ、乃至覺如上人越前御在國ノ中ニ御勸化ヲウケヲレシ法徒ナリ等ト、一期記ニ、應長元年五月ノ比、大上覺如越前國ニ御下向在テ、則チ二十餘日御居住、大町ノ如道ニ計セシ奉レ得受教行證等ト、シカレバ顯智專信ノ附弟タチ、覺如上人ニ歸依指受ノ同侶タリ、コレニヨツテ、覺如上人カノ寺號、寺務等マデ御ハカラヒナリト見タリ、サレバ當寺ノ初メハ下野ノ高田ヨリ出デ、顯智ノ孫弟子如道ノトキ、越前ノ帳坂ト云フ所ニコノ專修寺ノ建基移住セリ、ソレヨリ巳後ハ、當國氏ノ侍ヒ、代々コノ專修寺ヲ執務相續ス、文明ノ比、彼住持還俗シ、大町助四郎ト名タルアリ、ソノ後住高珍等トモニ吉崎ヘ參ラレケルガ、顯誓公、大町ノ住持ヲ續レケルコトモアリト、反古裏ニ見エタリ、後土御門ノ御時、住持眞惠上人、ユヘアリテ越前ヲ引取リ、伊勢國庵藝郡一身田ニ移住シテ、今ニ相續セルコレナリ、越前ニ殘ル寺跡、ソノ迹トテ同國風尾ニ一寺ヲ取テケルガ、ソノ寺ニ邪法秘事法門ヲヒロメケルトテ、住持眞教ヲ、寛永十二年ニ公儀ヨリ追拂ヒタマヒキ、サテ勢州ノ專修寺ハ、後土御門院ヨリ勅願所ノ宣旨ヲ蒙リ、尊牌ヲ安ジ寶祚ヲ祝シ奉ル、仍テ眞惠上人大僧都法印ニ任ゼラル、當寺官位ノ初メナリ、其次代應眞上人ハ權僧正、次ノ堯惠上人ハ飛鳥井雅綱卿ノ息、將軍源義晴公ノ猶子トシテ、大僧正ニ初任セリ、爾シヨリ代々近衛殿ノ猶子トシテ、權ト大ト僧正位ヲ不闕、聖人ノ抄物及ビ調度ノ類、多ク當寺ニ傳持ストナリ、〇中略

一昔シヨリソノ類アリトイヘドモ、殊ニ寛正ノ比、越前ヲ本トシテ、及ビ近國所々ニ於テ、聖人ノ御門下ト號スル中ニ、邪法秘事ノアヤマレル法ヲヒロムルアリ、ソノ誤ルニ又多類アリ、ソノ中ニ无导光派ト云フアリ、又專修流ト云フアリ、是レ諸神諸佛ヲステキラヒ、諸法諸行ヲ謗ル類ナリト云云、時ニ錯亂ノ義アリテ、山門ヨリ本願寺、專修寺兩寺ヘツカハサレケル憲書アリ、〇中略

下野國大内庄高田專修寺之事、爲一向專修念佛道場、三本寺自往古至于今、更於法流無錯謬之義之由、申披山上候之上、任憲法之沙汰、於彼門徒中者、混亂无导光、愚類不可有其退治者也、仍衆議之狀如件、

寛正六年七月二日　　西塔院執持代　慶純在判

專修寺

〔三國地志三十伊勢〕庵藝郡　梵刹

專修寺　按、大永年中、眞慧法印ノ建ル所ナリ、法印ハ親鸞九世ノ孫、定顯ノ眞弟ニシテ、下野國高田山ノ正統タリシガ、法義ヲ弘ムルノ志ヲ起シ、諸州經過シテ本國ニ移リ、三重郡小松村ニ暫ク居住ナリシガ、舊領主後藤氏ト其間ヨカラズ、夫ヨリ鈴鹿郡原村ニ移リ、此地モマタ心ニ滿ズ、終ニ一身田村ニ寓シテ一宗ノ基ヲ開キ、文明十年、後土御門院ノ勅ヲ奉テ祈願所トナリ、野州ノ高田ト共ニ住職ヲ兼、尤規摸トス、建治ヨリ元和年中ニ至テ數章ノ舊案アリ、

〔下野國誌七〕專修寺

眞宗五派の法系を考ふるに、第十世眞慧上人の時、寛正六年、伊勢國庵藝郡一身田に移し、文明十年、再び後土御門天皇より、勅宣ありて住職すと云、また第十一世應眞上人の時、永正十年、後柏原天皇より、可爲正統よしの綸旨を給はる、是一宗の規摸、天下の壯觀たり、祖師の遺跡、世に多しといへども、聖人自ら草創して住持し給ふ梵區は、高田山の外は、更に他にある事なし、實に眞宗根本の道場なるべし、この應眞上人より以來、代々大僧正に任ず、第十二世堯慧上人の時、正親町天皇、女房奉書を賜て、門跡に拜任す、此時より、專修寺御門跡と稱せり、第十七世圓猷上人と申すは、伏見一品式部卿貞致親王第五の宮、勝の宮と申奉りし宮なり、寶暦三年正月二日御入寂、壽六十歳、歡喜心院宮と稱し奉る、第十八世圓遵上人と申すは、有栖川職仁親王の御子、季(トシ)宮と申奉りし

寺領
寺職

宮なり、文政二年己卯十月廿二日御入寂、壽七十二歳、無上々院宮と稱し奉る、第十九世圓祥上人は有栖川織仁親王の御子、章(タカ)宮と申奉る、天保八丁酉十一月廿一日御入寂、壽五十歳、眞無量院宮と稱し奉る、第廿世當御門主は、有栖川韶(ツナ)仁親王の御子、學(サト)宮と稱し奉る、圓猷上人以來代々親王家より入室なり、さてまた第十世眞慧上人は、はじめ眞弟なし、仍て後土御門天皇第三の皇子常磐井宮と申し奉りしを、御附弟となし給ひて、眞智上人と申す、然るに其後、應眞上人出生するに因て、眞智上人は越前國熊坂へ退去し給ひ、彼所に一宇を建立して、則專修寺と號す、次を眞空上人と云しが、故ありて退轉すと云、また洛東大谷の本願寺は、聖人入滅より十一年の後に、文永九年に、高田山第三祖、顯智上人の開基する所なり、祖師の廟堂の邊に、一宇を草創して、則勅榜を賜はり、本願寺と號す、然るに建治三年聖人の息女覺信尼の懇望に依て、祖廟を彼尼に預けしとぞ、其後正安四年、覺信尼の孫、覺如の願ひに依て、高田山四世專空上人より、永く祖廟を預けしとぞ、其以前、建治元年の頃、覺信尼の願ひに依て、其壻の如信も顯智上人の弟子となしたり、翌年如信下野國高田山に參入し、受法相承す、依て覺信、覺如よりの證狀、如信受法の誓狀等、今に高田山の寶庫に現存せり、されば本願寺は、元來顯智上人の開基にして、覺信、覺如と次第すべきを、顯智上人を除て、如信、覺如、善如、綽如、巧如、存如、蓮如、實如、證如、顯如と次第したり、

〔安政三年雲上明覽大全上〕專修寺御門跡　伊勢一身田　京御坊河原町二條

御領三百五十石

御宗旨眞宗
專修寺御門跡圓禧　三十九
有栖川宮御子　前大僧正法印

御附弟　規宮　十二
同織仁親王御子

別院 智慧光院權大僧都法眼玉保院法眼慈智院法眼深解院法眼

京御坊在役院家 淨法院權少僧都

坊官 長岡宮內卿別所治部卿 國府谷式部卿長岡少進

御家司 芳川左衛門圖井相模 權大尉大淨下野介佐分利出羽齋藤司馬

御用人 駒田左馬河井兵部 島井雅樂森穗並

同所輪番 誠心寺權律師吉祥寺權律師

西來寺

西來寺ハ伊勢國安濃郡津寺町ニ在リ、延德年中、天台宗ノ僧眞盛ノ、阿漕浦ニ創建スル所ニシテ、後西來寺町ニ遷シ、尋デ又今ノ地ニ移シ建ツ、

〔三國地志伊勢三十三〕阿濃郡 梵刹

西來寺龍寶寺 眞盛別傳曰、延德二年庚戌四十八歲、弘法勢州觀音寺、緇白嚮風者數百人、各捐淨財若干、創建一精舍、名曰西來、上人使從弟盛算居之、按延德年中ノ創造ハ、鬼ガ塵屋ノ地ナリ、元龜年間ノ回祿ニ總門バカリ殘ル、慶長六年、信濃守知信、方百間ノ敷地ヲ附ス、西來寺町ノ舊地是ナリ、其後今ノ地ニウツシ建ツ、

〔勢陽五鈴遺響安濃郡四〕龍寶山西來寺 寺町上宮寺ノ北隣ニアリ、眞盛念佛宗江州坂本西敎寺末、本尊阿彌陀佛、寺傳云、延德二庚戌四月、當津ニ念佛堂ヲ建立ス、當國三箇寺ノ第一ナリ、○中略當寺舊ト上宮寺ト同ク、東ノ海瀨阿漕浦ニ存セシナリ、明應年中ノ湮滅ヨリ、趾ハ塔世川ノ下流中川原村ノ北濱ニ、西來寺屋敷ト云舊地アリ、其後今ノ城門ノ南、西來寺町ト稱スル地ヘ移シタ

名稱 所在 堂塔 寺領

ルナリ、伊勢兵亂記云、慶長五年、富田信濃守知信、當城籠居ノ時、東ノ丸ハ榊原左京、二ノ丸西來寺只分部左京亮ガ堅メタツト、所載ニシテ、城郭修補ノ時、今ノ寺町ニ遷セシナリ、故ニ舊址ヲ西來寺町ト稱ス、今城門ノ南中町ト京口町ノ間ニアリ、

四天王寺

四天王寺ハ、伊勢國安濃郡津茶屋町ニ在リ、聖德太子ノ創建ト稱ス、中古衰頽セシヲ、永享八年、曹洞宗ノ僧永穮之ヲ再興ス、此後永祿八年、兵燹ニ罹リ、僅ニ本堂ヲ存セシガ、慶長元和ノ再修ヲ經テ、以テ今日ニ至レリ、

〔三國地志〕伊勢三十三 阿濃郡 梵刹

四天王寺〇塔世山中略 按、上宮太子創建ノ俗傳アリ、大日彌陀、阿閦ノ三像ハ、百濟ノ鳥工ガ造ル處、古ハ二佛堂ト稱シ、中世藥師堂ト云、中堂藥師佛ハ、寛平二年ニ、乙部浦漁夫志州答志浦ニテウル處、夢ノ告アリテ此ニ安ズ、久安三年丁卯八月十一日、藤原朝臣景通再興ノ上梁文アリ、其修補ハ惡七兵衞景清ガナス處也ト云、景通ハ加藤景通ニシテ、景清ハ景通ガ子加藤五景清也、恐七兵衞ニ混ズルモノハ、俗傳ノ誤ナラン、ソレヨリ以降二百餘年、台密禪律更住シテ、正海禪師開祖トナリ、其後マタ破壞ス、永享八年修營セシガ、永祿八年五月十九日、兵火ニカヽリ、諸堂回祿シテ、本堂ノミ存ス、舊領主上野介織田信良、信濃守富田知信、倶一寺領ヲ寄附アリシガ、慶長五年ニ修造ナサシメ、明暦二年、大通庵寺料百石ヲ寄セ玉フ、

〔勢陽五鈴遺響〕安濃郡四 塔世山四天王寺 塔世川の北茶屋町の西側にあり、曹洞禪宗越前州永平寺末、本堂本尊大日如來、脇檀彌陀、釋迦、及四天王像を置、中門、總門、右ニ禁牌葷酒、左右ニ穴門アリ、左青龍門、右白虎門ト題ス、其右ニ領主ノ高札アリ、奉行名署ナリ、正面本堂、佛殿、右客殿、左庫裏

方丈アリ、左ニ塔頭、中門ノ右ニ小門アリ、小池右ニアリ、芭蕉文塚其南ニアリ、右ニ鳥居、祇園祠、八王子、此處ヨリ山上ニ秋葉權現、中堂、本尊藥師如來、南向、其右ニアリ、手水處中堂ノ右ニアリ、太子堂、聖德王像ヲ安ズ、祇園社ノ向ニアリ、西向ナリ、蓮池、太子堂ノ右ニアリ、池中辨財天祠、龜塚天神南向堂、辨財天ノ右ニアリ、龍灯松天神ノマヘニアリ、　寺記曰、人皇三十代用明天皇御宇、聖德太子誅罰守屋大連之時、初守屋軍兵剛盛、而家壤野溢、太子軍勢失利三敗、此太子謀不及人力之處、則剋四天王尊像而推向、背陳發誓願曰、今使我得勝利、然則爲尊像、必須奉建立寺塔也、諸卒信願一致而競起、合戰忽感應威力乎大連軍勢悉敗北、而終誅守屋、故於日域建四箇天王寺、當寺其一也、一者在攝州、其餘二者未聞在于何地、疑是後世爲別號哉、或曰、每國建立一箇寺、謂之國分寺云々、崇本尊大日如來、左右彌陀、釋迦、及四天王、鎭護之也、其外佛像不可勝計也、就中靈驗無双之藥師堂一宇而已、無變堅固也、餘皆爲天災炎上、或爲兵亂壞却、而堂舍院宇亡失矣、住侶或三論、或律相交相務矣、其後久安三年、藤原景通再興寺院、此時棟札今在藥師堂椽、其後惡七兵衞景清加修補云々、爾頃寺領五百貫附屬焉、又時移物換、堂舍僧坊將及退轉、斯永享八年、(後花園院御宇)曹洞永龍禪師、請法務於一紙半錢、卜草庵以來、繼坐禪道場、於是俗呼號山庵、偶至曹洞家住、今既十七世也、開山洞正海孝大禪師、中興開山不異龍大禪師、

永享八年勸進狀云、諸時蒙十方檀那助緣、勢州安乃郡塔世山四天王寺本堂再隆勸進狀、　夫本分之田地者、虛空爲本尊、身心爲會場、現成之佛閣、法界爲佛殿、須彌爲本尊、逆則爲凡夫、悟則爲諸佛、凡夫薄地日用不知、故佛出世而示此旨、不備有漏凶若者、難成無漏之利益焉、抑當寺者、聖德太子之御建立、靈驗無双之勝地、藥師如來醫王善逝之尊體也、加之平家侍惡七兵衞景清再興所也、付之有七種之不思議、灯明出現之御舍利者、顯瑠璃妙藥度人、天堂軒雨滴不零者、世界五大融現無相也、寶塔飛行舊蹟者、本分空理之當相也、池中蝦蟆不鳴者、表坐禪安閑之義相、半夜之龍灯參詣者、運向上結

緣之懸志、江河之滿鹽不登者、納生死之流浪水面、龍宮所出之推鐘者、覺無明長夜之睡、何本來空、有源万法、現離人工、天地同根、万物一體、人々具足、箇々圓成之妙理、目前之境界也、于爾半有相之堂舍、衰而如顏淵之備、似原憲局、爰有獨居士、蓬茅草創拂羅綺、既絕跡、貧乏令而破壞殊甚矣、依之沙門欲爲自植善苗、爲他成大朶、示有緣門戶、乞隨分奉加、一粒米雖喫、一滴水雖消、誰哀此衣鉢、不投半錢半粒、八万由旬之高山從微風起、七千餘卷之經教從半字始、所聚之功力、豈可量乎、然則信不信緇那、現世旨被富貴榮果之益、來者臻金銀瑠璃蓮臺、仍勸進旨趣如件、

永享八年九月吉日　　沙門敬白〇中略

今詮ズルニ、用明天皇朝、聖德王攝州東生郡荒陵山四天王寺敬田院ヲ草創ヨリ、洛陽六角堂、及四十六院ノ建營ハアリ、然ドモ四天王寺ノ號ハ、陵山ノ外更ニナシ、日本書紀、及太子本願緣記、太子傳等ニ所載ナシ、今古屋双紙等ニ、聖武天皇四天王護國寺ヲ建ル、帝畿ニ近ク、故ニコヽニ遠ニ建創セラルノ見解アリ、聖武帝朝ニシテ、用明ノ朝ニ非ズト謂ハ、稍ク是ナリ、然レドモ四天王護國寺ヲ此寺トスルハ非ナリ、

〔勢陽雜記三安濃郡〕一塔世山四天王寺〇中略

文祿三年正月七日、織田信長公母堂逝去、葬于當寺、廟所及位牌在、今號華。屋。寺。養榮大禪定尼、依之織田上總介信包、當城主たりし時、寄附寺領二百石と云々、此時住侶至功雪作禪師也、一山追日潤色、而僧房還于昔春かと類しかりける折節に、天災のために、伽藍、堂塔、及經卷、書物箱等、校割の器財に至るまで悉燒失す、今に殘りて貴かりけるは藥師堂內外堅固に有て、院裏には書畫の掛物少々相傳れり、其後富田信濃守當城主たりし時、寺領五十石寄附有、古に比すれば不屑といへども、上總介信包の寄進も幾程なくて事絕、剩へ火災有て後には、寺院彌滅亡せんとする節なれば、信濃守の施領微なりといへども、急を救ふ所の志し、其功尤厚篤也、慶長五、石田治部少輔逆亂の

時、信濃守知信故有て當城合戰及二數日一、其砌當山寺外院裏は、皆寄手の陣所と成て、堂頭小庵の囉齋の具に至る迄、賊兵の爲に亂失せり、嗚呼惜哉、數百年の寶物大半分散となれり、○中略元和五年に、大守高虎公、堂舍再興修造に及、一山の寺領廿人扶持寄附し給ふ、此時の住月海禪師也、其後高次公の代に至て、寛永十三年に客殿增補の具本丸ノ古殿被十一字の分也是寄附し給ふ、此時の住南龍禪師なり、明曆二年に、前代の寺領に增施し給ひて、高百石に改り、永寺領に附給ふ、當住至二晫州禪師一、是亦一山の制札、前代高虎公より奉行職に命じ給ひ、建置せ給ふにより、滿山無事たりといへども、其後雨露のために制札朽て、文字も有か無かのごとく成ぬ、依て高次公の惠命、すたれたるを興し繼述の教をなし給ふ、月海の住以來、大守の芳惠を得たる事數多有、南龍の住に至て、猶寺院繁榮の事共多し、晫州の住に至て、㭬叢林繁昌のむかしに循還するかと言のみ也、客殿、總門鐘樓、庫裏には、南龍晫州兩禪師の代に追々建立有て、今如此、客殿の本尊座像の釋迦、曾聽傳敎大師の靈作と云云、洛陽嵯峨の奥、氷室山下に一人の閑道人有、號二惠日道西禪師一、壯年より悟道徹得の聞え有と云云、此比丘寂せらるゝ時、遺傳の事有て、正保三年に、當寺に入佛し、當住晫州禪師執行入佛の供養有、寔に佛祖結緣の奇瑞、凡慮不レ斜所なり、此佛像は、近世にて、禁裏仙洞にしても、威光のたふとき鳴ナ有と云々、

〔三國地志九十二伊勢國公案〕塔世四天王寺所藏

寄附勢州阿濃郡塔世山四天王寺領之事　高百石在二下部田村中一

右任二明曆二年四月十日、寛文十年十二月十五日、寶永元年四月朔日、寶永八年三月十五日、享保十六年十月十八日先判之旨一、全收納不レ可レ有二相違一者也、仍如レ件、　御名　元文二丁巳年八月七日　御判

名所
標注

慶光院

慶光院ハ、舊ト伊勢國度會郡山田西河原ニ在リシガ、天正年中宇治ニ移ス、禪宗ノ尼寺ニシテ、守悦ヲ以テ開基トス、法嗣清順、二所大神宮ノ遷宮久シク行ハレザルヲ慨キ四方ニ勸化シテ其功ヲ遂グ、清順ノ弟子周養亦其志ヲ繼ギテ、力ヲ造營ノ事ニ盡ス、爾來住職ハ、傳奏ヲ經テ勅許セラレ、紫衣及ビ上人號ヲ許サル、ナド、朝家ノ待遇自ラ他ニ異ナルモノアリキ、堂宇ハ豐臣秀賴ノ建立ニシテ、寺中ニ佛像、及ビ鐘鼓ヲ用キズ、明治維新ノ後、本院ヲ廢シテ神宮司廳ト爲シ、尋デ又祭主ノ官舍ト爲セリ、

〔和漢三才圖會七十一伊勢〕慶光院　在宇治　禪　寺領五百石

比丘尼寺

〔慶光院由緒書〕御綸旨

清順居住室號慶光院之由、被聞食訖、殊至大神宮御裳濯橋造畢、供養成其功之由、叡感無極、而今度造替之事、應一社之請、伺可遂其沙汰旨神妙之由、天氣所候也、悉之以狀、

天文廿年八月廿日　右中辨[illegible]判

慶光院

〔神都名勝誌四〕神宮祭主官舍（本町の右側にあり）

此の官舍は、元慶光院の建物なりき、慶光院は、天正年中、豐臣秀賴、片桐且元を奉行として、創立せしめられし所なり、書院廊廡等輪奐其美を盡せり、維新の後之を神宮司廳とし、明治廿三年迄、廳務を執れり、其後修繕を加へて、祭主官舍としたり、年々祭主の宮參向の時、御宿泊に充つる所なり、

〔勢陽五鈴遺響度會郡十一〕慶光院　本坊ノ西側ニアリ、往昔ハ山田西河原ニアリ、天正中此ニ遷リ住ス、當院ハ他ノ寺堂ニ異ニシテ、佛像及梵唄鐘鼓モナシ、歴代傳奏ヲ經テ勅許アリ、賜紫衣ニシテ、宗旨ハ禪宗無本寺地ナリ、尼僧住侶ニシテ、權門ノ族ヲ乞テ寺主トス、威嚴他院ニ殊ナリ、開山清順上人尾州ノ產ナリ、中世兵革ニ據テ、二所大神宮遷宮百餘年ノ間斷絕シテ、頽廢スルニ及テ、清順尼深ク憂テ、諸州ヲ勸進シテ、造營ノ料ヲ寄ントス、僧尼ノ所勸ヲ以テ造營スルハ、神慮モ畏ルベシ、祠官等モ末世ノ瑕瑾ナルベシトテ、不許ルニ據テ、其尼ノ御師足代弘興ノ說ク處ニ託シテ、其料ヲ送リ、公許ニ及テ、永祿年中、正遷宮ヲ勸行セシナリ、禪尼自功勳ヲ弘興ニ讓ルニ據テ、足代弘興異姓タリトイヘドモ、此功ニ據テ抽賞ノ儕アリ今ニイタリ、敍爵シテ度會神主ヲ姓トス、其後徙山田西河原ニ住ス、其後兵亂連綿シテ、遷宮及宇治橋等廢スルニ及テ、其弟子周養尼ニイタリ、前例ニ准ジテ、正遷宮、假殿遷宮、宇治橋ノ造替等、各勸進シテ、其料ヲ送リ寄スルニ據リ、寺務ノ如クナリタリ、天正慶長中ノ寺主、豐臣氏ニ昵近シテ甚親シ、故ニ今庫裏客殿等修營ス、客殿善美ヲ盡セリ、上段金ノ間二十四孝圖ナリ、狩野法眼永德畫セリ、其餘什貨多シ、他邦ノ俗、今ニイタノ、伊勢上人ト稱ス、是前世ニ諸州ヲ經過シテ、勸進スルトキノ名ノ遺リタルナルベシ、〇中略

石崎文雅鄉談云、尼守悅ハ何處ノ人ナルコトヲ不詳、文明年中ニ、紀州ヨリ來テ本州一住ス、御裳濯河ノ橋ヲ造立シテ叡感アリシコト、飛鳥井雅俊卿ノ書翰アリ、守悅ノ弟子清順慶光院三世ナリ、天文十六年綸旨ニ、紀伊國清順上人トアリ、復大橋ヲ架シ內宮假殿遷宮ヲ行フ、勅シテ慶光院ノ號ヲ賜リ、四世周養元龜三年ノ綸旨ニ、伊勢國住人周養上人トアリ、元龜二年二月ヨリ、諸國ヲ勸進シテ、天正三年十六日、內宮假殿遷宮ヲ行、同十一年六月ヨリ勸進シテ十三年十月十三日內宮正遷宮、十五日外宮正遷宮アリ、後陽成院御宇寢筆ニテ院號ノ額ヲ賜フ、如此ノ功ニ據テ、代々造營ヲ執行ヒテ、嚴有院殿ノ御時僧尼ノ預ルベキコト非ズトテ、停止シ給フ云云、

（慶光院文書十一）おそれながら申あぐるおもむき

一伊勢内くう宇治のがうけい光ゐんの上人清順と申は、永祿ねん中、二代の住持にて、其ころ宇治の大はしを願主として、諸國諸旦の助力を以かけられ、供養をのべてのち、猶内くうにても、外宮にても、正遷宮をなしたてまつりたきとの大願をおこされし也、其いはれは、正せんぐうと申て、廿年に一どづゝこれ有御事に候得ども、其ころ天下しづかならずして、永享六年に正せんぐう有てより、永祿六年迄、百三十ねんのあいだ正せんぐうはなくして、たゞかりどのせんぐうばかりにて、年月をふるまゝ、上人これをかなしみ、此たび正せんぐうを思ひたち、尾張の國の法師に、寶藏庵とて、伊せ山田おかもとに有けるが、是も神忠を存するこゝろざしあるゆへに、この僧を使として外ぐうの權ぐはん久志本丹波、度會の常辰神ぬしかたへ申つかはされけるは、此ころ、内くう正せんくうの事を、内くうの神くはんへ申すゝむる所に、内長くはん、心に、今の折ふし、すこし相かなはざる子細有之よしにて延引す、しかれば、まづ外宮正せんぐうを仕りたきとのよしを、外長くはんへ一わう申いれられ給り候へとて、小袖一かさね時のしんもつとして申つかはされしかば、常ときいそぎ外長くはんへまいり、此よし申入られ候得ば、三のねぎ忠査、長官備査のまへにて、此よしひろう有しかば、正せんぐうの事は、往古より天下の御さた也、しかるに上人のとりたて、殊勝には候得共、いかゞ候はんやとて、小袖をも御かへし候へば、上人申されしは、今の折ふし、天下靜謐ならずして、正せんぐうのこと、天下よりの御とりたてかなふべきにあらず、しかれば上人大願をおこし申事なるに、加樣の子細、常辰申わけられざるにやと、上人いきどをりやまずして、かさねて別人を以、長ぐはんへ申入られしは、たゞいま本ぐう別ぐう久しくかりどのばかりにて、すでに大はにおよび候へ共、天下しづかならぬ折なれば、早速御せんぐうかなひがたかるべし、しかれば上人願主となりて、諸國

の大名小名神忠をおぼしめすかたへ、少々申いれ、正せんぐうをとりおこなひ候はゞ、神りよゑいりよともにめでたかるべきよし、達而申入られしかば、長ぐはん、もつとものよしにて、右のつかひ、久志もと常ときをもめしいだされ、相ともにちそう有べきとて、禁中さまへも、神ぐうよりさう、もんいたされ、國々を申すゝめ、中につき、近江の淺井どの、御ちさうにて、江州一國をもつばら申ふれて正せん宮の御ざうりやうあつまりて々、永祿六年九月に、正せんぐうあり、此時のさい主は、從二位大中臣伊忠、宮づかさは正四位上大中臣伊長、長ぐばんは正三位度會常眞神主なり、然るに外くう山田の年より足代七郎右衛門弘興と申は、上人年來の宿坊にて、馳走他にことなり、正せんぐう御ざうゑいのうち、弘興いよ〳〵志を同し、力を合て、上人のやうきやくをまかなひ、神慮に忠節をつくされて、正せんぐう成就せしによつて、上人此よしゑいぶんにたつせられ、上人身のうへのくん功の望はさしをき、此足代弘興、神忠をつくし、上人に力を加へ候事を、末代までも神忠を存ずるものゝため、かつは朝庭國家の御きたうのためにも候まゝ、この弘おきに、位を下され候はゞ、いよ〳〵神忠をはげまし申べきと御さうもん有しかば、ゑいりよ御かんにおぼしめし、はじめて度會の姓をくだされ、權の禰宜に補せられ、從五位下に敍せられければ、弘興拜賀のかたじけなきを、神ぐうへひろういたしければ、長ぐはん常ざね相ともによろこび、さねの字を給り、弘興をあらためて、眞興と名のらせ、正せんぐうの時、出納所代を申付られ、大床までの昇殿をゆるさる、時にさい主つかさ正權禰宜中もいさゝか異議に及ばれず、既に永祿の遷宮記にものせられ侍り、是上人執奏せしめけるゆへ、位階を下されしためし、今の代までもけい光ゐんのきぼといたしたてまつる御事なり、

〔慶光院文書四〕抑天照太神、天上より御降臨有て、崇神天皇御宇まで、きんちうにおはしましき、彼御代に神いをおそれ給て、その御かたちをうつしたてまつり、大裏にのこしをきましまし、な

寺制

いし所これなり、御正體はやまと姫の皇女のいたゞきたてまつり、伊勢の國いすゞの河上にうつしまされしより此かた、天が下のあるじにてましますなり、地上におちたまふといふ事なし、正遷宮は廿一年に御造替の先例なるを、寛正二年よりいまに御造營退轉、言語道斷次第に候歟、近年假殿と號し、御神體をしづめたてまつるなり、假殿と申は、一夜うつし申、御內の御きうそんをなをしたてまつる間の御假殿たるに、なが〳〵をきたてまつるによつて、天下みだれがはしく、せいひつ、そのきはをしらず、正遷宮とりおこないたてまつらざる間は、京都をさまるべからざる奇瑞、淸順上人可被申上候、御造營をいそがれば、一天安全、四海平定、不可有疑者哉、氏秀誠惶誠恐謹上、

〔慶光院文書十一〕まゆよう上人のれいにまかせ書おき之事

一御朱印のうへ寺領之事

一だんなさま方之事

一田はたけやしき之事

一山はやしやぶ之事

一諸だうぐ殘なく何によらず、寺ともに上人のまゝたるべく候、但上人なま心えにて候はゞ、おやこしんるいよろづいけん申、守そだて可申候事、

一おやこ共、上人を一せつむさぶるまじき事、

一いんきよの寺、代々上人いんきよにすべき事、

一まやうけい院の寺に、おやこ共すへおき申まじ事、いかにもまゆせうなるだうとうを見たて上人をおき可申候事、

一びく人共のくやう寺のたつちうたるべき事

寺職

右之條々少も相そむき候ぬやうにまをきかんやうにて候、まゆよう上人の書おきも、あいそへおき申候、此我等名我々筆にて候、

寛永拾壹年戌正月吉日　まゆせい上人けいくわういん在判

まゆほう上人御房まいる

〔年山紀聞 一〕伊勢の上人

永祿元年日記不詳記者後六月三日、中山亞相神宮傳奏被談云、去月廿三日、神宮外宮上棟無事令沙汰之由注進有之、或比丘尼號上人人號、先皇御代被下上人號、女房初例歟、名はし號慶光院、以諸國勸進之力、此上棟取立者也、內々又內宮上棟存立云云、雖不相應之事、末世如此之儀、神慮有子細歟、不測知事也、

〔慶光院文書 十二〕覺

一慶光院者、禪宗住持之儀者、山本縫之助家ゟ繼來申候、剃髮之義者、慶光院菩提所常慶院之住持ヲ賴受戒仕候、常慶院も代々禪宗、中比ゟ妙心寺派ニ而御座候、依之慶光院之住持、中比より妙心寺派之通ニ相勤申候、

一年數積り、出世仕候節者、御公儀様江御願申上、御老中様方ゟ、京都御所司代江御奉書被遣、武家之御傳奏并觀修寺様御取持を以、參內仕候、然時ハ本寺にて無御座候故、曇花院様へハ御附屆不申仕、四代以前周長上人出世被為仰付候時、御老中様方ゟ板倉周防守様へ被遣候、○中略

一慶光院住持代々江戶表様へ初而御禮ニ罷下候前ニ、先京都へ罷登り、御所々様へ御禮申上候處ニ、慶光院之弟子ハ、首座ニ成可申事と、東福門院様ニ爲思召候ニ付、其比之曇花院様、慶光院之住持、於御所々様ニ度々集會仕、御存知ニ御座候故、幸ニ奉存、曇花院様ニ而首座處主侍者ニ罷成申候、尤家來之比丘尼共準之申候、

一當慶光院周香儀、前々住持任例ニ、去ル亥之年拾七才ニ而上京仕、曇花院様ニ而首座を願、家來

之比丘尼共、首座藏主ニ御願申候處ニ、結城主計ト申仁罷出、慶光院者、曇花院御所樣之御末寺之由被仰聞候故、山本縫之助罷上候ニ付、御答申上候ハ、慶光院儀、御末寺與被仰出候ハ、何共乍憚難心得由申上候處ニ、主計被申候ハ、代々慶光院之住持、曇花院御所ニ而侍者藏主首座ニ被仰付候、左樣成事を以、末寺と思召ノ段被仰出候、縫之助申上候ハ、先以於勢州内宮之中寺共數多御座候、或ハ眞言禪宗有之候、臨々ニ淨土宗モ御座候、眞言ハ御室御所にて出世仕候、禪宗濟家妙心寺洞家ハ永平寺、淨土宗ハ智恩院ニ而出世仕候へ共、何れも無本寺にて御座候段申候へバ、左樣ニ申上候ハバ、曇花院御所ゟ慶光院公事可仕哉と被申候故、縫之助申候ハ、曇花院御所樣ト、慶光院公事など仕候儀ハ不存寄候、併達而御侘言ハ可申上候、直ニ申上御了簡無御座候時ハ、縱何方樣へ成共願上、前々之通被成置被下樣ニ御侘可申上候ト申候へバ、別條無之、願之通り慶光院當住家來之比丘尼共不殘首座藏主侍者之御許狀被下候、其節主計被申候ハ、慶光院義、覆輪衣著ニ仕候、是はいか成事哉ト被申候故、縫之助申候ハ、代々住持喝喰ゟ上人ニ成候迄之内も、覆輪ゟ著仕成候段申候へバ、主計被申候ハ、單寮ニ不成内ハ著仕候事ハ不成事にて候、此度單寮願之樣ニと被申候、縫之助申候ハ、尤首座ゟ單寮ニ昇り候段御結構成事ニ御座候へ共、近代之住持、首座迄ニ罷成、上人成之儀ハ、江戸御表樣へ御願申上候、先勢州へ罷下、所々御奉行所樣へモ申上、重テ可申上候段申候、主計被申候ハ、左候ハヾ今日ゟ覆輪衣著仕候義無用ニ而候、何時ニ而單寮ニ願被仰付候上ニ而ハ著可申候由被仰聞候、縫之助申候ハ、尤畏候と申上度候へ共、只今迄著いたし、此度罷下、覆輪衣著不申候ハヾ、外聞モ如何ニ候間、只今迄之通ニ御了簡被成可被下候、若單寮願候節ハ、慶光院自身上り候ハでハ不成事ニ候哉ト申候へバ、其段ハ我等迄被申越候へバ、名代ニ不苦樣ニ御肝煎可被成との御事之由被申候、以上、

〔慶光院文書二〕周香可爲上人事、所有勅請也、彌可奉祈天下泰平寶祚安全者、天氣如此、悉之以狀、

元祿十五年五月一日　　左中將花押

伊勢國　周香上人御房

上人號事、所有勅請也、宜奉祈天下泰平、寶祚長久者、天氣如此、悉之以狀、

寛政三年十月十一日　　右中辨花押

周恭上人御房

〔慶光院文書五〕伊勢遷宮之節、內院に而慶光院參拜致し候先格、寛文年中以來、遷宮之度々、內院ニ而致參拜來候處、去ル寛延二巳年、遷宮之節、堀伊賀守勤役之砌、伊賀守山本主殿と申者江申候者、伊勢上人遷宮之節、拜禮之儀、內證ニ而者相成間敷屆可申旨申候由ニ付、伊勢上人より、泉杢之助と申者を以、遷宮之節、伊勢上人參拜致し候ハヽ、相屆可申旨承知之旨、然ル處、伊勢上人、其砌月並之故障有之候ニ付、遷宮之節、淸ク相成候ハヽ屆之上參拜致し度旨申出候得者、伊賀守申聞候者、昨日申候儀、山本主殿聞違ニ而候、伊勢上人參拜之儀無用と申聞候趣ニ付、前々遷宮之節、內院ニ而拜禮致し候先格共申聞候ニ付、伊賀守申聞候は、願候儀者、勝手次第之旨申候得共、其砌月並之故障未淸リ不申、遷宮に日間も無之候ニ付、此度者拜禮難相成候間、重而遷宮之節相願度段、口上書を以申出候處、右口上書之趣、伊賀守承屆候趣ニ付、此度遷宮之節、內院ニ而之拜禮、并往古ゟ內院ニ而拜禮致し來候例書等、當御役所へ差出候處、寛延二巳年、堀伊賀守申達候通、此度も拜禮難相成段申聞候ニ付、慶光院難儀致し候趣ニ而、大奧女中衆江申進候由、右慶光院此度遷宮之節拜禮之儀ニ付、長官神主共江相尋候節、右神主共何樣ニ相答、此度之拜禮難相成段申達候儀ニ候哉、右之趣意并神主共答候趣、申達之趣共ニ御承知被成度旨、尤遷宮之日間も有之間敷思召候之間、早々可及御報旨、依之以御別紙被仰聞候趣致承知候、被仰聞候通之意味合共、慶光院より申出候ニ付、內宮長官神主共江相尋候處、當御治世以來、慶安遷宮之頃迄者、慶光院江遷宮之御朱印被成

下、慶光院遷宮之取計仕候儀者、神宮之記文ニ有之候得共、御内參拜之儀者、一向ニ記錄ニ無之儀ニ而、殊ニ寛文六年、兩宮共唯一々被仰出、内宮御師職も山本太夫ニ被仰付候以後者、寛文九年遷宮之節より、慶光院江遷宮之御朱印被成下候儀も相止宮中之事、慶光院相拘り候儀無之候、夫故平日之參拜も、僧尼之拜所ニ而神拜致し來候事ニ候得共、遷宮之節ニ限、内院參拜ニ而、座席等可有之儀者不存候之由、慶光院申出候通、寛文以來、享保遷宮之節迄、内院參拜致し、座席等有之候事ニ候ハヽ、遷宮之節者、前々ゟ矢來之内參入之もの江者、供廻り末々ニ至迄、神官ゟ通札相渡、出入爲致候例格ニ有之候之處、是迄慶光院江通札相渡候儀一向無之旨、神官共申之候、依之御役所引留等相調候處、右之趣相見江不申、寛延遷宮之節、堀伊賀守勤役之砌、慶光院ハ僧尼者定拜所有之、諸國僧尼之參宮人江も定拜所より矢來之内江相越間鋪候段相觸候事ニ候得者、慶光院も定拜所より内江者無用ニ致し候樣、慶光院後見共江申聞候趣引留ニ相見へ候ニ付、慶光院兩宮江對し、古來由緒有之と者申ながら、寛文六年兩宮唯一ニ被仰出候より、僧尼法體之ものは、別段ニ拜所も相定有之候處、慶光院限り、外々之者より格別之筋と申被仰出も無之、平日之參拜者、僧尼之拜所ニ而參拜致し來候而、遷宮之節ニ限り、寛文以來享保之節迄、内院ニ而參拜致し、座席等有之と申儀、是又慶光院片口而已ニ而、御役所者勿論、外々ニ明白之證據無之儀と申、當時僧尼之者、御内參拜之儀者、公儀之御條目ニ差障り、其上京都之御沙汰ニも相拘り候趣故、中々拙者一存ニ難任筋合ニ候得者、何レ窺之上御下知ならでは御取計難致儀ニ有之候を以、慶光院より押而相願候事ニ候ハヽ、相窺候積りニ有之候得共、最早遷宮崩餘日も無之儀と申、其御限之御沙汰ニ相成、万一慶光院方ニ調違等有之候而者、本人者勿論、役人後見共御咎之程も難計候故、有樣者穩便之存念ニ而、堀伊賀守申達候之通、此度も無用ニ致し候樣、當月二日名代之者呼出し申聞候之處、一通りは承知之趣ニ候得共、猶又得と相考、追而相願候儀も可有之候旨、翌三日又々名代之者を以

名勝 所在 沿革 堂塔　　雜載

申聞候ニ付、其儀者勝手次第に致し候樣申聞置候事ニ御座候、依之慶光院并後見共より差出候書付三通、神官より差出候書付貳通、并伊賀守御役所引留之、ィ一通懸御目候間、御熟覽之上、得と御承知可被下候、右爲御報如斯御座候、以上、

八月十八日　　依田肥前守

一色安藝守殿

〔慶光院文書五〕内宮正遷宮之節、慶光院内院拜禮願之一件、先達而より双方遂吟味之上、取計方之儀、此節相伺候處、尤出入不極儀候間、於江戸表評定所一座ニ而、尚又吟味有之筈ニ候條、右一件之趣を江戸江差下候樣、昨二日目御老中方被仰下候、此旨得其意、早々出府可被致候、

閏六月三日

〔慶光院文書二〕可令致國家安全寶祚之善禱者、天氣如此、悉之以狀、

天文十六年五月一日　　右中將花押

紀伊國清順上人御房

金剛證寺

金剛證寺ハ、伊勢國度會郡朝熊岳ニ在リ、釋空海ノ開基ニシテ、初メ眞言宗ニ屬セシガ、後禪宗ノ僧東岳ノ中興セシヨリ、臨濟宗五山派ニ屬ス、

〔國花萬葉記伊勢九〕朝熊山　寺領眞言金剛勝寺百石　同禪宗明王院五十石

開山弘法大師草創、寺を明王院と號す、其後正覺和尚登山して一寺を建立す、金剛勝寺と名づく、奥院本尊勝軍地藏、前立虚空藏菩薩云々、

寺社帳に、京本滿寺派と云々、可尋、

〔和漢三才圖會伊勢七十一〕勝峯山金剛證寺　在朝熊嶽（郡）　寺領百石

本尊　虛空藏菩薩　堂前有池　名蓮珠池

弘法大師開基　中興開山東岳和尙、自是爲五山派禪宗、塔頭寺院多有之、

朝熊岳（自宇治六十町）有三嶺（田橋峠、朝熊峠、一宇峠）直下有二見浦、當國海面、及遠州參州目前、而晴天則可望富士山、

〔三國地志志摩八十八〕答志郡　梵刹

金剛證寺（勝峯山）　按朝熊山ニアリ、兜率院ト號ス、載待和尙開ク處ノ古梵刹ナリ、正保年間、官庫ノ國圖、正堂アルノ地ヲ以、伊勢本國ノ界トス、故ニ今山ハ勢州ニ屬シ、寺院ハ本圖ニ隷ス、

〔勢陽五鈴遺響度會郡十五〕朝熊岳勝峯山兜率院金剛證寺　內宮館町ヨリ登山ス、是詣客ノ本路ナリ、宇治山神社ヨリ下乘ニ至リ、六十町各一町ニ標石アリ、又楠部村ヨリ登ル間道アリ、笹原嶺或一宇田嶺越ト云、下乘ニ至ル二十餘町又朝熊村ヨリ至ル坂路二十一町十九間、各一町ニ石標アリ、朝熊村ヨリ本堂ニ至ル、總行程三十五町三十九間アリ、朝熊嶺越ト云、前ノ三路ヨリ至テ險難ナリ、答嶺ニイタリ茶鄽アリ、內宮ヨリ楠部嶺茶鄽ニ至ル十六町アリ、一字田嶺茶店ノ傍ニ、方俗云弘法大師加持淸水ト云アリ、又其北ノ谷ニ天狗岩ト稱ス巨嵓アリ、又兎大黑岩ト云アリ、狀相肖リ、又岩舟辨財天堂、朝熊嶺ヨリ下乘ニイタル右傍ニアリ、祉字ノ內ニ狀船ニ似タル巨嵓アリ、長七尺、橫二尺、高三尺許、是ヲ辨財天女ニ祀ル、其設タル處ハ寺務也、○中略又下乘此次ニアリ、路ノ左傍ニ標石ヲ建ツ、下乘ノ前ヨリ長七間許石橋アリ、極樂橋ト云、溪河ニ架セリ、雜記ニ所謂板橋ナリ、今古ノ異ナリ、

文殊堂　左傍ニアリ　塔頭才屋院、右傍ニ在リ、　子安地藏堂　塔頭壽福院、左ノ傍ニアリ、　阿彌陀堂　塔頭普明院、右ノ傍ニアリ、　熊野權現祠　子安地藏ノ向ニ路ノ右傍ニ在リ　二王門

左弼金剛、弘法大師作、右弼金剛、實慧僧正作ト云、中央ニアリ、南面額云、朝熊岳、東叡山日光門主公遵法親王ノ筆、是寛政中、新ニ本堀再建ノ時所造ニシテ今掲ルモノナリ、其前ハ勝峯山云云、朝鮮梅隠書、三大字ナリ、寛政中ヨリ廢シテ亡シ、梅隠ハ寛永十三年、韓使來聘ノ時、文學館諱隷習讀文幼學金澄、號ハ梅隠ナリ、玉露叢卷十一、韓使列名ノ中ニ見タリ、灌頂曼陀羅堂、仁王門ノ乾位ニアリ、弘法大師建立ノ地ナリ、三寳院ト號ス、庫裏、長十四間四面、右傍ニアリ、方丈其地ニアリ　開山堂客殿　其北ニアリ　鐘樓方丈ノ前小門ノ左傍ニアリ　回廊、長二十間、本堂ノ右傍ヨリ此ニイタル下向ノ路ナリ、

十三佛堂　塔頭瑞泉院　左傍ニアリ、矢負地藏堂左傍ニアリ、塔頭與樂院ノ前也、本堂九間四面、東向、檜皮葺、本尊虚空藏菩薩

連珠池　方丈客殿ノ前ノ路ノ右傍ニアリ、池中ニ雨寳童子ノ祠、前ニ板橋ノ反リタルヲ架セリ、連珠ノ橋ト稱ス、長十間濶六間許ノ池沼ナリ、此池中ニ朝字石ト稱ス奇石アリト云フ、俗傳云、此池水ニ常ニ濁汚ニシテ清潔ナルトキナシ、若清ク澄ルトキハ變異アリトスト云ヘリ、　水向地藏　本堂ノ北右傍ニアリ、地藏尊石像及土人ノ石塔ヲ多建テ、詣客ノ水ヲ手向ル處ナリ、又舌海院ノ前ニモ同ク修立セリ、　明星水　水向地藏ノ左傍檀上ニアリ、三間四面ノ堂宇ヲ井泉ノ上ニ建ル也、是求聞持堂ト稱ス、　舍利堂　明星水ノ巽ノ檀下ニアリ、殿内ニ三尺四方許ノ宮殿ノ中ニ、高五寸濶七寸許、鍮石ノ寳塔ヲ安ジ、其中ニ佛牙舍利アリ、大一寸八分、長一寸三分、厚七八分許、是釋迦佛牙ナリト云、聖德太子竺土ヨリ傳來ス、聖武天皇天平中ニ此ニ安置ストト云所傳アリ、

毘沙門祠　明星水ノ後ニアリ　自陀帶王祠　熊野社　同毘沙門ノ祠ノ右ニアリ　七本杉

熊野權現社ノ右ニアリ、七株ノ古杉樹ナリ、路ノ左傍ニ並立リ、　春日明神祠　丹生明神祠

天神祠　同七本杉ノ右ニアリ、中丹生、右春日、左天神、各小祠ニ一殿ニ祀レリ、　荒神祠　其右ニ、

アリ、白山權現祠　山王祠　淸瀧權現祠　其右ニアリ　中山王、右淸瀧白山、小祠同殿ニ祀レリ、辨財天祠、其右ニアリ、塔頭　法光院　右傍ニアリ　七社明神祠　法光院ノ左傍ニアリ、每歲正月廿八日祭祀、當山鎭守トス、稻荷明神祠　同處ニアリ　琉璃殿　七社明神ノ左ニアリ、本尊藥師如來ヲ安置ス、觀音堂　塔頭觀音院右傍ニアリ、本尊觀音弘法大師作、五間四面南向國順禮第二番、

朝熊やのぼりて見れば極樂のこれぞ誠の淨土なるらん

芭蕉塚　觀音堂ノ前ニアリ、奥院ニイタル路ノ左傍ニアリ、近世建タリ、碑銘

神垣やおもひもかけずねはん像　ばせを

寺格

〔寺格帳下禪宗五山派〕高百石 御朱印　京南禪寺末 伊勢國朝熊嶽　金剛證寺

右住職、金地院ゟ申付ル、

一住職御禮、御白書院獨禮、獻上壹束一卷、御國之外三疊目、

一御暇、於柳之間老中被仰渡、時服三拜領之、取渡ス

但御札者御前江不出

一年頭以名代御禮、獻上壹束一本、氷餅壹箱、

一御暇、於檜之間寺社奉行申渡、時服壹拜領之、取渡ス

但名代故、總禮ニ出ル、

寺領

〔寬文四年御朱印帳 齋家禪宗五山派〕百石　伊勢 慶長十八年七月廿九日　朝熊金剛證寺

館入

〔華頂要略 八十九 御館入諸寺社〕金剛證寺　在伊勢國郡朝熊嶽、

天明六年七月十七日、住持叢長老被許御館入、以名代御禮言上、白銀一枚獻上、坊官連判金百疋宛、同見習南敍一片宛持參、於壼子間給吸物祝酒、於鞘間隱岐大輔尭臣令面會之後退出、

名稱 所在 創建

名稱 所在 沿革 寺格

同月十八日、依願申、獅子口瓦数 御寄附之旨、以奉書執達、御禮以名代寶光院、白銀五枚獻上、連判金三百疋宛、見習南鐐三片宛持參、於白書院御目見被仰付、於臺子間給菓子茶、

同日獅子口御寄附之事、以傳奏廻山田奉行所江通達之儀被仰遣、

常安寺

常安寺ハ志摩國答志郡鳥羽大里町ニ在リ、九鬼守隆、其父嘉隆ノ冥福ノ爲ニ建立スル所ニシテ、禪宗ノ僧寛山ヲ以テ開山トス、

〔三國地志志摩八十八〕答志郡　梵刹

常安寺大里町 王龍山　按九鬼嘉隆ノ冥福ノ爲、其男長門守守隆ノ本願ナリ、寛山ヲ附ス、延寶三年、九鬼隆季、黄檗木庵ニ請テ、塔ノ銘ヲ勒ス、九鬼家系一卷、今此ニ藏ス、

〔日本地誌提要志摩十〕佛寺　常安寺答志郡鳥羽大里町、禪宗、九鬼守隆創建、僧寛山ヲ開祖トス、年月未詳、寺域四百六拾七坪餘、

延命寺

延命寺ハ、初メ清林寺ト稱ス、尾張國海東郡坂牧村ニ在リ、淸和天皇貞觀十四年、定額寺ニ列ス、後世廢絶セシガ、後奈良天皇天文年中、曹洞宗ノ僧仙英之ヲ再與セリ、

〔類聚國史佛道八百八十〕貞觀十四年三月廿八日戊戌、尾張國海部郡淸林寺、列之定額、

〔尾張名所圖會海東郡七〕青林山延命寺坂牧村にあり、曹洞宗熱田法持寺末、もと眞言宗にして、創建の年紀詳ならずといへども往昔淸林寺といひて、十二坊ありし大伽藍也、類聚國史に、貞觀十四年三月廿八日戊戌、尾張國海部郡淸林寺列之定額と見えし古刹なりしが、物換り星移りて、十一坊は廢絶し、僅に此延命寺のみ存せるを、天正〔天正恐天文〕

寺領　名勝 所在 堂塔

謨)乙巳の年、法持寺の第四世仙英和尚中興し、清林の寺號を青林の字に改め、遂に當院の山號とし、今の宗に改めしより、寺傳に見えたり、當年久壽中、源三位賴政東下の日、當國にて病に罹り、醫療驗なかりしに、清林寺の本尊藥師佛に祈誓し、一晝夜に平復を遂げれば、報謝のため、黒牧本郷の二邑を寄附ありしが、その本堂は破壞して、藥師佛のみ僅に殘りしを、當院北の方の小堂に安置しけるが、靈驗[illegible]著く、諸人の尊崇大かたならず、俗に藥命佛と稱して、今當院よりこれなし供養す、又東の方に天滿宮山王權現等の二社ありて、同じく當院よりこれを守る。本尊延命地藏尊木佛の座像にして、惟康親王の御作、日本三體の一なり、

〔鹽尻 五〕一尾州國中寺社領證印年月之覺〇中略

延命寺

天正十一年九月七日　十九貫四百七拾八文目云々

萬德寺

萬德寺ハ、尾張國中島郡長野村ニ在リ、寺傳ニ云フ、孝謙天皇神護景雲二年、僧慈眼ノ創建スル所ナリト、中世衰頹セシヲ、後深草天皇建長六年、僧常圓之ヲ再興セリ、今眞言宗ニ屬ス、

〔張州府志 二十一 中島郡〕寺觀 萬德寺 在長野村、號長沼山、眞言宗、醍醐　恩院派、俗稱尾州眞言宗大本寺、境內四至二町一段二畝十步、寺　曰、長沼山万德教寺者、稱德天皇之勅願、神護景雲二年戊申、慈眼上人所草建也、而後罹洪水之難、[illegible]矣、往年弘法大師遊錫此地、再營殿宇、於此爲秘密道場也、其後有天曆之災、永祚之亂、伽藍爲之烏有、中世有常圓上人者、嘆靈蹟湮沒、言朝興復、爲龜山法皇叡信尤厚、再爲勅願道場、實建長甲寅六年也、上人俗姓平氏、梶原景時詮于而爲長母寺開山無住一圓之同胞、嘗來山本覺濟僧正眞秘奥、上人辭足空圓和尙興復一宮鄕地藏寺、時俗稱上人及一圓空圓、號尾陽三國　本堂安彌陀銅像、長五寸八分、弘法大師所鑄造、錢國府阿彌陀、寶塔安大日如來像、異人附與常圓上人像、稽文會所遺、鏡宮弘法大師承和元年甲寅鑄白銅鏡、祭天照大神、故名、今鏡在方丈、王今尙存、開伽井在堂後、大師所鑿、〇中略 種樹在堂後、大師於當寺修求聞持法時、手植樫樹一株、制札、東照神祖天正十二年甲申三月二十七日頒

寺境制札　塔頭 藥師院　養源院

〔尾張志 中島郡 寺院〕眞言 萬德寺

長野村にあり、長沼山と號し、山城國醍醐報恩院派、俗に尾張眞言宗本寺と稱す、末寺多く百數に

及ぶべし、境内廣く四至二町二畝十歩ありといふ、神護二戊申年、稱德天皇の勅願にて慈眼上人創建す、年經て洪水の難に遭て、殿閣廢毀したりしを、弘法大師當地に遊歷ありし時、再興して秘密の道場とす、其後天曆の火災にかゝり、永祚の風難にあひ、伽藍破滅しけるを、常圓上人靈跡の湮沒を嘆き、延長六年甲寅、朝廷に奏して興復す、龜山天皇御信仰ありて、終に勅願の道場となしたまへりといふ、

寺領

〔張州府志中島郡二十一〕寺觀　萬德寺寺產、駒井中務、德永法印、天正二十年壬辰六月十一日、寄ニ愛知郡傍示木村秋米五十三石、大閤豐臣秀吉、文祿四年乙未十二月五日、寄ニ中島郡長野村秋米五十二石、賜ニ朱章、左中將忠吉卿、慶長六年辛丑七月九日、賜ニ秋米五十三石朱章、其後歷代據ㇾ之、

〔鹽尻五〕一尾州國中寺社領證印年月之覺○中略

萬德寺、長野村貳拾四貫之內ニ而五拾石之分云々、

年號無之後正月廿七日　木下半助

五拾石愛知郡はらし村

天正二十年六月十一日　駒井中務 德永式部法印

文祿四年十二月五日　秀吉朱印

丑二月七日　伊奈備前守

但是は南方備前檢地、文祿元年に始る、但丑年は慶長六年、　當國は文祿年中

慶長六年七月六日　忠吉卿御朱印

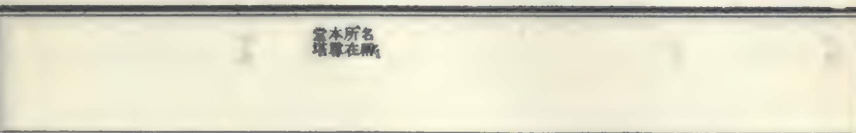
元和六年九月朔日　義直公

寬文七年二月十七日　光友公

元祿七年九月十七日　綱誠公

什物

〔尾張志中島郡寺院〕眞言　萬德寺



寺寶　弘法大師繪像一幅(眞如法親王御筆なり)　同一幅(觀賢阿闍梨筆)　同畫像一幅(後宇多天皇宸筆)　愛染明王畫像一幅(空海筆)　十三佛畫像一幅(空海筆)　牡丹繪一幅(光明皇后御筆)　十六羅漢像二幅　法華經一卷(菅公筆)　同一卷(空海筆)　辨才天女像一軀(空海の作にして、其手印あり、銘に、天長七年、江島辨才天女秘密護摩一万坐修行、以其灰作此形像云々としるしたるが、文字多く磨滅せり、)　一覺禪抄百卷(紀伊國根來寺の賴瑜が著撰にて、眞言の秘法殘る處なく書あらはし、世々朝廷にて御修法ありし例なども書のせたれば、國史を補ふにも足れる珍書也、卷每に奥書ありて、嘉曆、永德、貞治、延文などの年號あり、書體古雅能書にて見事なり、)

甚目寺

甚目寺ハ、尾張國海東郡甚目寺村ニ在リ、創建詳ナラズ、傳ヘテ推古天皇ノ朝、甚目龍麿漁獵ノ時、海中ヨリ得タル觀音ノ像ヲ、本尊ト爲スト云ヘリ、因テ龍麿ヲ以テ開祖ト爲シ、子孫三家相續シテ、寺家ト爲ル、此ヲ網ノ乘ト稱ス、

〔尾張志(海東郡寺院)〕眞言宗　甚目寺

甚目寺村にあり、鳳凰山といふ、名古屋寶生院の末寺也、推古天皇の御代五年丁巳のとし、(文永元年書寫の緣起、及當寺傳記に、六年とするは誤なり、)甚目龍麿こゝの海中より當寺の本尊觀世音紫金の形像を、網曳出し奉れる故に、其姓によりて甚目寺といふよし、緣起に見えたり、されど創建の年月は詳ならず、かゝれば此龍麿を開祖とす、天智天皇の御代、主上俄に御不豫の事ましまししに、此觀音の靈驗いちじるき事天聽に達し、遙に御祈願ありければ、新たなる夢想ありて、忽御平癒ましましゝを、叡感のあまりに、勅願寺たるべき綸旨をなし下され、左少辨兼盛を勅使として、御鏡を御奉納あり、天智天皇の御代白鳳年中に、(緣起に、十九年己卯歳と書るは誤也、白鳳は十五年に朱鳥と改元ありて、明年持統天皇の御代となれゝば、持統天皇の四年ぞ十九年にあたれる、そは庚寅なり、己卯とあるによれば、白鳳八年なり、)三間四面二蓋の堂宇一宇御建立ありて、東門に法皇寺といふ額をう

寺領

たれたり、其後文德天皇の御代、仁壽三年癸酉八月八日、甚目連僧麻呂か、〔按に此僧麿は龍麻呂が裔か、はた同族なるへし、今此寺家に甚目氏三家ありて、俗に綱の衆といふ、是は龍麻呂より子孫系統連綿と相承して今に至れるは、世に類少き舊家なり、○中略〕といふ人、精舍一字を造營し、始て同四年甲戌二月二十一日、其功終ぬ、其後堀川天皇の御代、康和五年癸未正月十七日丁酉、散位藤原連長、僧智能、大江の重房等をはじめ、寺家諸僧地下人等と、ひとしく同心加力して、修造の功を終て上棟せり、又崇德天皇御代、天治元年甲辰二月一日、地震に破壞したるを、大治元年丙午〔縁起に午を子にあやまる〕春、當庄下司散位大江朝臣爲道、並女、及長谷部の氏人と共に、是を修理す、其後鳥羽天皇の御世、建久七年丙辰二月十日より、同八年丁巳七月十一日迄に、聖觀上人勸進造營上棟せり又土御門天皇御代、正治二年庚申七月二十六日より、建仁元年辛酉十一月十八日までに造營終り、供養せしよし迄、文永元年書る縁起に見えたり、推古天皇五年、この本尊出現、今年天保十五年まで、千二百四十年に及ぶ、かばかり久遠の年序を經たる寺院は、寔に國中無双にして、四觀音と俗に呼ならへる靈場、舊地の最第一也、

本尊、〔正觀音、三國傳來、閻浮檀金の靈像秘佛也といへり、前立十一面觀音立像、聖德太子の作といふ、左右に持國天、毘沙門天二像を安置す、又堂内に行基の作と云四天王の像あり、〕釋伽堂、〔木佛立像の釋迦如來を安置す〕准泥堂〔木佛坐像の准泥觀音を安置す〕藥師堂〔木佛坐像の藥師如來を安置す〕十王堂　地藏堂〔石佛立像の地藏菩薩を安置す〕開山堂〔聖觀上人の木像を安置す〕護摩堂〔木佛立像の不動明王を安置す〕三層塔〔木佛坐像の愛染明王を安置す〕鐘樓〔大小二字あり、鐘銘に江州西念寺鑄、殷鐘響遠振十方界、梵聲廣度三有際、三寶久住、四生俱利、天下泰平、海内安全、建武二年三月廿日、大工藤原國安、大檀那道譽、住持比丘澄俊、濃州大野郡揖斐庄南方保、今坂之御社御寶前鐘、天下泰平也、文明三年辛卯八月日、願主御代官左衞門尉橘永久とあり、この大檀那道譽とあるは、佐々木佐渡判官の法名なり、西念寺は道譽が遠祖佐々木三郎兵衞尉盛綱入道西念が菩提寺也、文明三年秋、美濃今坂の社内に移し、天文中、信長公岐阜在城の時、當時の大鐘と替給へりとぞ、當寺の舊鐘は、岐阜の本誓寺に傳はれり、〕鎭守八大明神社　同山王社　白山社　茶所　仁王門〔南門なり、縱五間半、橫三間半あり、建久七年再建のまゝにて、今現存す、棟札に梶原景時奉行のよし記せり、實に古色を存す、〕東門〔縱三間、橫二間半、瓦葺、此外に法界門の遺跡は、上萱津村の北に在て、今猶地名に殘れり、〕

〔張州府志海東郡二十五〕寺觀

甚目寺〔(中略)寺產、内府平信雄、天正十一年九月十一日、賜田園三十町證狀、關白豐臣秀吉賜寺產三百石朱章、永祿十四年八月四日也、〕

子院
雜載

敬公(德川義直)元和六年九月朔日、賜二寺産三百石墨章一、其後歷代據ㇾ此、

〔寶尻五〕一尾州國中寺社領證印年月之覺○中略

甚目寺

天正八年九月三日　田中兵部大輔貳百貫

十二月廿九日　駒井八右衛門　曾我兵庫頭　矢部甚兵衛

天正十一年九月十日　松庵　三十石

天正十二年九月十三日　信雄卿

同年十一月三日　根村喜藏　伊藤新六

永祿四年八月三日　秀吉公三百石

前方の備前檢地慶長六年丑也

年號無之丑二月七日　伊奈備前檢地文

忠吉公御判札九月五日と有ㇾ之、無二年號一、源敬公(德川義直)御制札、慶長二年四月十五日、

元和六年巳後御黑印　貞享二年寺領配當

〔張州府志二十五海東郡〕寺觀　甚目寺(中略)塔頭法花院　東林坊　龍泉院　廣胤院　一蓮院　性德院　不動坊　藥師坊　寶藏坊　光明坊

〔尾張志海東郡寺院〕眞言宗　甚目寺○中略

甚目氏三家　圓成職當　秀圓職當　長海職當　この三家みな妻帶也、甚目龍麻呂が裔にて、今に系統連綿と相承す、俗にこれを綱の衆といふ、

〔寶尻六〕海部の中の庄にしるよし有て、長月廿日比行侍る道なれば、甚目寺に遊びし、いにしへより掛おける古繪馬を見しに、慶長元和の比なる多し、長尾法印吉房御願とあるは、前關白秀次の先考一位法印なり、

いかにして消やらぬ名はのこりけんわすれずしのぶ人もなきよに、折ふし若き僧の出來り

ていふ、此寺古代の繪あまた侍る中に、南の方に富士の繪書るぞ、其年代は此年中興の前なるかと、寺僧いひ侍るなどかたる儘、たづねて見はべりしに、正暦元年八月廿八日の字見え侍る、其繪は近代の貴介旅行のさまなり、さかやきとれる妻、時代ことたがひ侍る、一條院の時、か丶る容なかるべし、

圓成寺

圓成寺ハ、尾張國海東郡中一色村ニ在リ、初メ西方寺ト稱シ淨土宗鎭西派ニ屬ス、後衰替セシガ、慶安年中、僧品譽之ヲ再興シ、弟子照譽ノ高足關通ニ至リ、寺政ヲ改革シテ律院ト爲シ、寺ヲ圓成律寺ト號シ、三河崇福寺ノ僧義燈ヲ請ジテ開祖トス、

〔尾張名所圖會七海東郡〕慈興山圓成律寺、中一色村にあり、淨土宗鎭西派、京都知恩院末、當寺はもと西臺山西方寺とて、淨土鎭西派の甲刹なり、開基の年記詳ならずといへども、應安永和等の古碑あれば、其古き事しられたり、慶安年中に、品譽上人再び法燈を挑げて、殿宇資具に至るまで頗る完かりしに、其法嗣照譽上人ますく精力を盡して、先輿を修らる、又其高足に關通上人とて、淨業專修、持戒堅固、化他度衆の碩德なりしが、末法の濁世道俗ともに名利に走りて、佛願祖意に背かん事を深く患ひ終に寺政を革めて律院となせしより、四衆の信仰懈りなく、持律の淨行今に儼然たり、關通和尙の行業記に云、師一日衆に告て曰、予西方寺を改めて、如法の律場となし、有識の大僧を請じて主席とせんと欲す、汝等自ら機分をはかりて、よく堪んと思はん者は、奉律隨侍し、如法修行すべしとありければ、一僧師に問て曰、此寺今規則嚴にして、淨業業祖道を輝すに足れり、しかるを改めて律院としたまはん事、いかなる御意といふ事をしらず、又我門意は、自身を出離無緣とおもひく

だして、仰で佛願をたのむを要とするにあらずや、さる持律とて、こと〳〵しく侍りなば、意樂もまた隨て宗意にたがひやし侍らん、此事いかゞに候やと、師答て曰、それ毘尼住する所には法住し、毘尼廢する所には法廢すといへり、こゝに照譽上人臨末に、當寺を予に所屬し、淨法をして永く絕ざらしめ、益を無窮にほどこせと、ねんごろに遺屬し給ひし言の重ければ、予毘尼を當寺に起して、佛法の壽命をこゝに長久ならしめんと欲する也、又明律の比丘僧を請じて、住持せしめば、これに親近し、その風を見聞せんもの、自ら沙門の止作の事をしり、慚愧を生じて、正見實行の門に入の因緣となるべきか、もし爾からば、弊風こゝに一轉し、宗化さらに輝をますべし、又持律とてさまをかへば、意樂も隨て宗意に背かんといふ事、それは各の意に依るべきなり、その戒律に從事せん人、おもひ給ふべきやうは、善導大師のごとき、護戒至て謹密にして、南山讃して律制に越たりとす、しかれども猶自身を罪惡生死の凡夫と下して、偏に佛願を仰信し給ふ、我等いかにぞわづかに稱名正業を懈るべけんや、とかく意を用ひて、しかも戒律を堅持したまはゞ、ただその自己の意樂よく宗意に相應して、稱名勇進に便あるのみにあらず、僧寶軌範ありて法久しく住し、正化長く絕る事なからむ、予が微志こゝにありと答られけりかくて師いよ〳〵律院開創のことを、國廳に達し、且本山に力請せられぬ、凡そ國廳に以聞せらるゝ事七十二ケ度、本山に往返せらるゝ事三十六廻、享保十八年におこり、元文元年に至るまで、諸の勞苦を經てやうやく宿望をとげ、西方寺を轉じて、圓成律寺と名づけ、慈興山と改めらる、師事を武府の敬首和上に啓し、その肖像を迎へて、律院開祖の標準となす云々、　本尊阿彌陀の座像　曼陀羅堂此大曼陀羅は、往昔華洛の無塵居士靈夢によりて、岩倉山において、九色の彩土を感得ありしに、洛北報恩寺の古澗和尚、其彩具をもて四幅の大曼陀羅をゑがかれしが、今此座圖は則其隨一なり、しかるに深き因緣ありて、勢州山田の清雲院より讓りをうけられて、當寺に安置す、猶委しき事は、行業記、及義山人の述作記等にゆづりて、こゝに畧きぬ、

〔續日本高僧傳 法一本〕尾州西方寺沙門關通傳

釋關通、字無礙、俗姓横井氏、尾州海西郡大成郷人也、○中略享保十年、住持勢州長島光岳寺、歸化者夥、又移住西方寺、○中略元文中、改西方寺、爲律院、號圓成律寺、請三州崇福寺義燈比丘、崇爲開祖、燈博學明律爲衆標準、一定清規、未幾燈逝、因推可圓比丘、而繼法席、○下略

名稱
所在
創建
沿革

妙興寺

妙興寺ハ、尾張國中島郡妙興寺村ニ在リ、僧滅宗ノ創建ニシテ臨濟宗ノ寺院タリ、古ハ五山派ニ屬セシガ、後ニ關山派ニ屬シ、京都妙心寺ニ隷セリ、

〔和漢禪刹次第〕日本諸國諸山之禪院　東海道十五國

尾州妙興寺 長島山、開山滅宗和上、諱宗興、圓光大照禪師、嗣二大應一、號天祥庵雪水閑、

〔尾張名所圖會後編一中島郡〕長島山妙興報恩禪寺、妙興寺村にあり、禪宗臨濟派、京都妙心寺末、當寺は、貞和四年より草創し、貞治四年建立成就し、後光嚴帝勅願の道場とし賜ひ、久我内大臣右大將通相公、寺境三十三町六段二百八十歩を寄附し給ひぬ、圓光大照禪師宗興滅宗和尚の建立にて、師年四十二歳の時、考妣覺阿靜觀、乳哺劬勞の恩を報ぜんがために創建す、よりて妙興報恩と號す、大應國師を開創の始祖とす、國師は南浦紹明大和尚と號し、圓通大應國師と勅謚す、鎌倉建長寺の住職なり、滅宗は、嵯峨天皇の御子、左大臣源融公の裔孫、中島藏人中島郡中島村の城主なりの子息なり、延慶三年誕生ありしが、幼齡にして、聰明秀才比類なく、七歳の時、ある觀音堂に遊び、群兒と共に椽下を覗き見て、人はかゝる高堂をつくれり、我はさる事なしといひけるとぞ、かくて營構の志を起せり、父藏人その志を察し、柏庵和尚に附して出家なさしむ、柏庵は、大應國師の弟子なりければ、やがて建長寺につれ行き、國師に業を受させしむ、夫より鎌倉に在しが、年數積り、學業なりて、後本國に歸り、四十二歳にして、貞和四年當寺を創建す、其外所々に八字

の梵刹を建立し、又近江尾張駿河の三ヶ國に、接待院を開きて、雲水の僧を養へり、或時熱田に參詣し、神社の荒廢しつるをかなしみ、修治を加へ、破損を廻理ありければ、社家悅びて、熱田の社領のうち、中島郡鈴置郷（今の矢合村）を、妙興寺に寄附ありし、其時の大宮司の證狀、今に寺寶とす、又大神の託宣を蒙りて、大宮司常端より、梅樹十株を當寺に贈りしかば、境內に植置き、一宇の坊を建て、十梅院と號く、（今の開山塔をいふこれなり）かくて星霜を歷るまゝに、其梅多く枯槁して、今わづか一二株のこれり、希代の古梅なり、又むかし、弘法大師、熱田社を修復ありし時、社人に示しけるは、七百年の後、重ねて修造する僧あるべし、其名を興といふ、興は弘なり、則我再誕なりといひ置しよし、寺記にいへり、又一宮村地藏寺に、むかし觀勝といふ僧ありしが、智行正しき法師にて、常に宗祖弘法大師をしたひけるが、或時靜座觀念し居けるに、忽ち神童一人來りて告けるは、汝しらずや、今高野大師こゝを過給へり、出て拜すべしといふ、觀勝走り出て見れば、大照禪師なり、觀勝あやしみて、大師いづくにかあるといへば、神童禪師をさして、是也と答ふ、觀勝いはく、是大師にあらず、妙興寺の滅宗なりと、神童又答て、興と弘とあに二ッあらむやといひ終りて、消うせしよし、地藏寺の傳記にもいへり、されども興とは禪師の實名、宗興をいひ、弘とは大師の諡號、弘法をいへるなれば、大師存生の日、熱田の社人に、興は弘なりといはれしよしは、あるまじけれど、暫く兩寺の傳說によりて、しるすのみ、和尙、寺院興隆の功は、元來高く、京師難波有馬に遊び、又九州筑前等に周歷して、名譽をほどこし、永德二年壬戌七月十一日、年七十三にして示寂し、圓光大照禪師と諡す、（委しき傳は、享德二年、無隱德吾和尙著す所の、圓光大照禪師行狀、又本朝高僧傳、延寶傳燈錄、扶桑禪林僧寶傳等に見えたり）當寺は、世に勝れたる淨域にして、代代の綸旨、院宣、御敎書、御朱印、御黑印、諸證文等、今に數通を寺傳せり、文和二癸巳年、將軍足利尊氏公、勅を奉じて、國中無雙禪刹の額を賜ひ、永享四年壬子年、足利義敎公、富士御覽の序、當寺へ歸錫を寄られ、半日滯座ありて、妙興報恩禪寺の台筆を染させられ、舊寺領に復し、安堵の御敎書をた

まひければ、大檀那と稱し、公の肖像を畫き、京都鹿苑寺瑞溪和尙の讃を加へて、今に至るまで、供養し奉るよし、又日本名藍圖にも、尾州第一勝藍、妙興報恩禪寺としるし、續群書類從に、妙興報恩寺記をのせて、世にかゝれなく、實に國中無雙の禪刹なり、

〔張州府志二十一中島郡〕法孫惠吾和尙、著行狀○圓光大照禪師其詞曰、師諱宗興、字滅宗、尾州中島郡人○中略還至本國、貞和四年戊子、師年四十有一、創建妙興寺、無何安衆二百餘員、凡叢林所有殿堂廡、不周備矣、

〔本朝高僧傳三十三淨禪〕尾州妙興寺沙門宗興傳

釋宗興、號滅宗、世姓源氏、本州中島郡人、其先嵯峨天皇之裔也○中略十九歲投圓興寺、薙髮登具、見栢庵于福山○建長寺天源庵、一見器重、陶冶數載、一日辭庵、庵與大應○昭明頂相、以爲法信○中略與返本州、創妙興寺而居、殿堂悉備、衆盈二千指、相尋建梵刹、凡八所○中略永德二年七月十一日、趺坐而化去、停龕三日、門人遵遺命、瘞於全身、塔曰天璵、報齡七十三、勅謚圓光大照禪師、

〔半陶藁一〕文明十四年三月吉辰　幹緣比丘朝畊稽首妙興禪寺幹緣疏井序

尾州路長島山妙興報恩禪寺、乃特謚圓光大照禪師插草之地、而大應國師爲之第一祖也、安衆二千指、一派不以甲乙主之、而延十方有道衲子、以爲住持也、初貞治帝、有旨陞位于甲刹、爾來一百餘歲、殿堂門廡、鐘魚鼓板、蔚爲一方叢林也、於是應仁以來、四海鼎沸、佛氏之廬之於天下、如經楚人一炬、實濁亂壞劫之秋也、而本山巋然猶存于今日、可謂天幸也、雖然寺之恒產、時當艱虞、日往月來、風震雨凌、所謂殿堂門廡、瓴甓爲之墮矣、椽梠爲之脫矣、其如是則蕩爲荒墟者、可翹足而待焉、而弊之甚者大佛殿爲最也、昔三派院、募衆修佛殿、劉須溪作疏曰、如來與文珠普賢、非一非二、而今殿裏所安、亦此三尊也、古人已有斯擧、吾徒豈可忍袖手乎哉、因具短疏、徧扣貴官長者甲第緺戶、庶幾一針一草、各度力樂施、則轉壞劫爲成劫者、何難之哉、詞曰、

桑田變海之危言、成壞有數、蓬島補天之敏手、否泰維時、倏回頭於搖落秋、却僂指於全盛日、七間僧堂

宗派　堂塔　寺格

雨漏、十笏丈室雲深、法身寂光、應身同居、萬水一月、長男偈吉、少男妙德、右雪左霜、雖有昏鐘講筵規、奈無風颾呼、檀越功勳邊施、王髻之寶已退、八億軍波旬、過去世修佛面之金、況得九十劫華報、各各願空慳澀囊、塵塵宜雨莊嚴具、世間長者、出世長者、先植福因、色界天人、無色天人、必結善果、

〔張州府志中島郡二十一〕妙興寺在妙興寺村、號長島山、臨濟宗、古屬五山派、今爲關山派下、屬洛陽妙心寺、日本名藍圖載之、曰尾州第一勝藍妙興報恩禪寺、(中略)外門南面扁額、勅賜圓中無雙禪刹、中門南面扁額、長島山、三門南面、古者門上有閣、名無礙閣、閣上揭長島山額、今三門荒廢、存四柱及礎石而已、佛殿南面、號覺皇寶殿、揭如興報恩禪寺之額、足利將軍源義教所書、又揭祈禱牌、安釋迦夾侍文殊普賢、殿裏揭覺皇殿之額、應永中失火、諸堂爲烏有、惟釋迦堂獨存、結構甚古、開山塔南面、名十椿院、其門扁額曰山大明可慶書、欽公之時藏于御庫、堂內安大應國師、大照禪師二像、

〔妙興寺文書三〕一尾州中島郡妙興寺村長島山妙興報恩禪寺者、從天正七乙卯年以來、爲正法山妙心寺末寺者也、

一妙興寺者、請本寺開山圓通大應國師、爲開山始祖、故以妙興寺、上古者雖爲洛陽龍翔寺末寺、年代深遠、堂塔廢壞久矣、于時天正七年秋、當國守君三吉中納言卿巡國之次、一見則加堂塔修造、寄附寺領、成妙心寺末寺、請定惠圓明國師、令爲住持、爾來國師子孫相繼居住、故請圓明國師、爲中興開山者也、加旃先年從本山所賜之證狀、亦尾州中島郡妙興寺者、當山之末寺古跡靈地也、先年從公儀御穿鑿之末寺古跡帳面所持上無紛者也、依爲右之趣、爲妙心寺末寺者也、向後若違亂於有之者、急攝可申明、縱殃雖有之、不可及本山者也、恐惶敬白、

尾州中島郡妙興寺　南梁慧鐵

寬文六丙午二月十九日

妙心寺東海庵塔主禪師

〔妙興寺文書一〕長島山妙興禪寺者、先帝之御時草創之刹、被下勅額候、任甲刹之列上者、殊專抽無二之丹誠、可奉祈萬歲之寶祚者、依天氣執達如件、

三月廿一日　花押

〔妙興寺文書一〕當寺爲御祈願所、可被抽無貳之丹誠者、依天氣執達如件、

寺領

十一月九日　　左中辨時光

宗興上人御房

〔妙興寺文書〕尾張國長島山妙興禪寺事、如守護人土岐右馬權頭賴康執達雜掌宗釋解狀者、爲南浦大應國師開山、祈天下安全年尙、諸堂既造畢、國中無雙之禪刹也、早賜御願所之裁判、可備末代之龜鑑云々者、任申請之旨、可爲祈願所之狀如件、

文和二年十月廿八日　　左中將（花押）○足利義詮

當寺長老

〔妙興寺文書〕尾張國妙興寺事、爲諸山之烈、大應國門師徒管領之、宜爲十方院之狀如件、

貞治三年六月十九日　　（花押）○足利義詮

當寺長老

〔妙興寺文書〕奉寄尾張國中島郡長島山報恩妙興禪寺妙興寺保領家職事

右件保者、爲當國一宮眞淸田社領內、久我殿御管領、當知行無相違之地也、而當寺者、依令建立當保內、爲彼寺領一圓不輸、限永代被寄附者也、但當所者、雖有造宮料所之號、亥他所可被遂其節、且妙興寺御歸依依異于他、有御寄附之上者、爲彼寺可被專御家門長久御祈禱者也、爲斷未來之煩、被申副勅裁之上者、更不可有相違、雖末代不可有違約之儀、仍爲後證龜鑑、御奉寄之狀如件、

延文四年二月卅日　　久我殿家來（久以下五字加筆）前左馬權頭（花押）

〔妙興寺文書〕尾張國中島郡吉松保被寄附當寺也、於有限正稅者、無懈怠可被致沙汰者、天氣如此、仍執達如件、

貞治五年四月十一日　　右中辨（花押）

妙興寺長老

〔妙興寺文書三〕納御即位并御禊大嘗會廳官要脚尾張國段錢事、

合貳拾貫文者

右爲中島郡之內妙興寺領公田肆拾町分所納如件、

正長貳年六月十一日

眞良花押
春智花押
玄永花押

〔妙興寺文書二〕永代寄進申、須賀乘散在內、丹波垣內下地之事、

合伍段者（坪木ハ中ニ西東ヘ有道路、田四反、島島一反也、島大小七ツ在之、）

右件田地者、雖爲小河新三郎曾代相傳之持分、直錢參貫文仁宗成永代買得者也、然間爲現當二世、號佛殿之定燈領、本證文相副、內德共令寄進于常任、但此下地者、熱田宮ヘ每年色濟五百文宛可有沙汰、閏年ニハ、可爲貳百五十文也、此外萬雜公事不可有候、寺納ハ以撿見之上、可被定、萬一有違亂輩、爲盜賊、可被重過者也、依爲末代寄進狀、如件、

永正十二年乙亥十月十一日　宗成花押

妙興寺

〔妙興寺文書一〕於尾州丹羽郡之內、貳百石之地、爲寺領付置之者也、

慶長六年五月廿日　御朱印（忠吉〇德川）

妙光寺

〔妙興寺文書一〕尾州丹羽郡島宮村之內貳百石之事、如前々令寄附訖、全可有寺納者也、

元和六九月朔日　義利御黒印

妙興寺

寺制

〔妙興寺文書 一〕制札　妙興寺

一甲乙人等狼藉之事

一於寺中用脚等不可申事

一門外俗家等、無謂子細不可懸申事、

右此條々、於違犯之輩者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

文龜三年癸亥十一月日　清須城主 五郎 織田 花押 ○

名稱 所在 沿革 堂塔

眞福寺

眞福寺ハ尾張國名古屋南寺町ニ在リ、眞言宗ニ屬ス、初メ僧能信ノ同國中島郡大須莊北野村今美濃國中島郡ニ屬スニ創建セシ所ニシテ、後村上天皇ノ勅願所タリ、慶長十七年德川家康命ジテ今ノ地ニ移サシム、此寺古書ヲ藏スルヲ以テ名アリ、

〔張州府志府二城〕寺觀 眞福寺在南寺町、眞言宗、號北野山寶生院、昔年在中島郡大須莊北野村、及古菅神鎭座之地也、大須今屬濃州、有能信上人者、伊勢祠官從三位度會行家之子也、始建此寺、後村上帝爲勅願所、正平五年所賜綸旨、及東南院二品親王令旨、至今尚存、本殿所安之正觀音像、空海彫刻之、本在濃州天王寺、後村上帝文和元年、勅移此寺、二品法親王任瑜者、後村上皇子也、稱土御門宮、爲當寺第三世、附屬法脈、自後一派僧侶、受當寺裁許、故門葉寺院散在遐邇、殆乎數十寺、名籍尚存、中遭亂世、其事斷絶、慶安中敬公(德川義直)以名籍訂之、復古者過半、往昔舊七堂伽藍、其後荒廢不存、中世織田信長以北野村爲燈明田、爲洪水漂沒、慶長十七年東照神祖命成瀬正成曰、北野眞福寺者、三經藏之靈區也、其地有潦水難、宜移乎名古府下、正成令八橋大和論住持僧、僧堯遷、佛像經藏悉移府下、不幾神祖揭館、元和中敬公修理經藏、寺說云、當寺法流爲三派、相承其一者、勢州安養寺寂雲和尚法脈、兼禪密二宗、其二者、南都東大寺務聖珍法親王法脈、其三者、紀州根來寺中性院法脈、就中以安養寺爲正統、爲無本寺、相傳、安養寺開山佛通禪師、爲聖一國師弟子、任安養寺、時每日詣大神宮、有神告、不遊觸穢、後世謚宗二廟人、人來此寺喫茶改火、今呼明星茶居者、是其遺也、佛通禪師嘗受禪密二宗、遷化之日、囑弟子專修禪法、以其密教及神書授與能信上人云、時寶牛玉一顯、牛王經一卷、牛王儀軌一卷、相傳、此寺名寶生院者、因此經也、心經二卷空海筆、璫創二口空海發錢所作、開山僧伽梨一具、神書五十二函、相傳、能信上人自勢州將來、元和元年、神祖巡游尾州時、使南光坊僧正點撿藏書、偶得頗戒論三卷本之、

什物

〔尾張志名古屋寺院部〕眞言宗　眞福寺

門前町の西側に在て北野山寶生院と號す、元中島郡大須庄北野村天満宮鎭座の地なる故、北野村と呼て、今美濃國中島につけり、にありて、僧能信の伊勢國祠官從三位度會行家の子建立也、（中略）府志に、昔は七堂伽藍なりしが、荒廢せしよしに記せるは誤なるべし、遍院に、此寺南朝の勅願寺なる事はさも有べし、吉野の皇居微々にわたらせ給ひて、わづかなる料足を、南都の寺にかゝり給へる程なれば、伽藍の大營はおぼつかなき由に云り、中頃信長公北野村を燈明田に寄附せられしが、洪水にて潰地となれり、慶長十七年、家康公隼人正正成を召して、眞福寺は三經藏此寺に牛王經一卷、牛王儀軌一卷、心經二卷を藏せるゆゑ、三經藏とのたまひしなり、の靈區なるに、洪水の難ある事然るべからず、名古屋にうつすべしと仰られしかば、八橋大和に命じ、又住僧覺遍に諭して、佛像經藏、ことごとく今の處に移しゝが、ほどなく公かくれ給ひしかば、元和年中、思召をつがせ給ひ、源敬公○德川義直経藏を修理し給ひしと云々、寺記に當寺法脈相承三派ありて、其一は伊勢國多藝郡安養寺の住僧寂雲の法脈にて、禪密二宗を兼たり、其二は南都東大寺の別當法務聖珍法親王の法脈、其三は紀伊國根來山中性院の法脈也、就中安養寺を正統とす、兼本寺也、安養寺の住僧佛通禪師聖一國師の弟子也は禪密二宗を兼受なりけるによりて、遷化のとき其弟子に付屬して、專ら禪法を修せしめ、禪密及び神書等を能信へ受授ありしと云々、已上寺記、今當寺に現存する神書佛書、數百卷、世に稀なる古寫本なり、續現葉集春の部に落花を、權少僧都能信、きえがてに猶ぞふりしく春の日のひかりにあたる花のしら雪、と見ゆ、其集に南朝の人々の歌をものせたれば、そのうちに此僧のよめるも一首撰ばれ入たるべし、

本堂本尊正觀音は、弘法大師の影刻にて、もと攝津國天王寺にありしを、文和元年、勅によりて此寺に移せり、　二王門二王の像は康安元年の彫刻なり　不動堂

聖德太子堂　五層塔文政七年造立　天満天神社往古より大須庄に鎭座ありし故、其地を北野村と名づく、慶長十七年本寺とともに此處にうつせるなり、

聖天堂歡喜天金銀二體、弘法大師の作といひ傳ふ、

〔尾張志名古屋寺院部〕眞言宗　眞福寺

寺寶　牛玉一顆　牛王經一卷、儀軌一卷、（この寺を寶生院といふ事は、この經どもによれりといひ傳へたり、）心經二卷（弘法大師筆）

塩劍二口（弘法大師、覺鑁上人作、）　開山僧伽梨一具　古書籍數千卷（鎌府より持來りし神書五十二函、また十大寺記略等に、開山能信[illegible]と記したれど、佛書雜書等をあはせて二百餘籍に及べり、いづれも數百年來の古寫にして、あるひは卷軸あるひはとぢまき、其卷ごとに書寫の年號月日を記せるも多く、世に珍重せる古書共なり、其内のすぐれて珍らしきものをこゝに擧ぐ、）　玥玉集（天平十九年に寫したる[illegible]にて、處國の名高き人の筆蹟なる[illegible]にした、る物也、）　七大寺年表（永万元年のうつし也、續群書類從目錄に入たり、）　空也誄（源爲憲朝臣の作にて、天治二年の寫本なり、）　新修往生傳（藤原宗友朝臣の作にて、仁平元年の寫本也、）　高野大師傳（寛平七年の寫卷なり）　東大寺衆徒參詣伊勢大神宮記（文治二年の寫也）　弘法大師行德記（貞和二年の寫本なり）　聖德太子傳曆（觀應元年のうつし卷なり）　和名類聚抄　闕本（康安六年、東寺知足院にて、[illegible]朝のうつしたる藏本也、）　後七日御修法記（正應）（此書反故にて裏打したるうちに、白拍子玉王が注進狀といふ物あり、めづらしき古書なり、この和名抄は近年模寫して印刻し、世に大須本と稱す、）　鄉金抄（弘安元年の寫本にて、後世の師用集のごときものなり、）　覺（四年宗可の寫なり、）　權律師寬信授灌頂於兩人記（元應二年のうつしなり、）　洞院僧正入壇資記（應長元年のうつし也、）　德治元年東寺結緣汀雜記（永和二年の寫也、汀の字は灌頂の二字を略して一字につゞめたるもの也、）・栂尾上人像（文和三年の寫也）　三寶印可略日記（元亨三年のうつし也、）　將門記（承德三年正月廿九日の寫也、近世稻葉通邦模寫印刻して世に流布す、）　尾張國解文（永祚年中、尾張守藤原元命朝臣が、政務よろしからずして、解任せられし事、日本紀略、百錬抄、北山抄等に見えたる、其時の國解文にて、正中二年入月の寫也、）　口遊（源爲憲朝臣の作にて、弘長三年二月五日の寫也、近年模寫印刻して世に流布す、）　新撰朗詠集（藤原基俊朝臣の撰にて、建治元年の奧書あり、）　類聚神祇本源（應安五年の奧書あり）　古事記（奧書に、借請親忠朝臣一本、吉田大納言定房卿家本、被書之間、依家君御命書寫進擧、又一本書寫之、止之とあり、古事記傳に引用したる眞福寺本古事記、卽ちこれなり、）　扶桑略記（古寫の卷ものなり）　本朝文粹闕本三本（一本は建保五年、一本は正應元年の古寫本也、一本は鐵槌の銘ありて流布の印行本になく、めづらしき文也、）・高野山順禮記（貞治六年のうつしなり）　神道集（永享五年の寫し也、）　遊仙窟（文和二年の寫なり）　本朝詩合（文治二年の寫なり）　明文抄（正安元年のうつし也）　御産御祈禱目錄（嘉曆元年大法師賴心の寫也）　大日本國現報善惡靈異記闕本（卷本にて、群書類從に眞福寺本とある是なり）　神皇正統錄（續群書類從の目錄に入たり、其外古文書、古證文、寄進狀等いと多く、かぞへ盡しがたし、）

〔寶生院圖書目錄　一〕經藏圖書、今度夫々令修補、目錄總計廿三冊取調相渡之者也、

文政四巳
十一月廿三日　寺社奉行　判

名稱 所在 創建 堂塔

寶生院經藏圖書合總目錄

卷之一

第一合 (中略)

卷之廿三 (中略)

第百十六合

附錄

大須三流印信

建中寺

建中寺ハ、尾張國愛智郡名古屋京町ノ東ニ在リ、慶安四年、藩主德川光友、其父義直ノ追福ノ爲ニ建立スル所ニシテ、僧廓呑ヲ以テ開山トス、淨土宗ニ屬ス、

〔張州府志 三 府城〕寺觀 建中寺 (在府城東、號德興山、淨土宗無本寺、慶安四年辛卯、瑞龍公(德川光友)建之、爲薦先考敬公(德川義直)冥福、命廓呑上人住持、是爲開山、寄附寺產五百石、五年六月、勅許住僧代代著紫衣、歷代邦君陵墓在此、)

〔尾張志 名古屋寺院〕 土宗 建中寺

京町筋の東のはてにありて、德興山(正事記に、德河山と記せるは、附會して書し文字にて據がたし、)と號し、無本寺也、源敬公の御菩提所として、慶安四年(寺記に五年とあるはよろしからず、)瑞龍院君の御建立、下總國結城郡結城の弘經寺の僧廓呑を招請して、開山となし給へり、同五年二月、經營成就し、六月、廓呑上京參內して、廿二日、住僧代々紫衣着用勅許の綸旨を頂戴せり、

本堂(本尊阿彌陀如來)　鐘樓(慶安四年五月七日、林道春の銘を書し、鐘は天明五年正月廿三日に燒失して、今の鐘は天明七年五月七日、晋學細井德民銘を書り、)

寺格

〔羅山文集銘四十四〕尾州建中寺鐘銘并序

尾州愛智郡古井邑徳興山建中蘭若者、二品亞相尾陽侯源敬公之影堂也、公平生嘉儒風、向神道、不信浮屠、常考朝儀、愛國民、不忘武備、世人以爲仰望、一旦殂矣、悉皆莫不哀惜焉、失其所倚頼也、今嗣本州主三品參議源君、至孝有繼述之志、然姑習其俗、見其時、創建此蘭若、以代廟祠、於是新模鳧鐘、揭之於楼、以爲警衆之具、命予爲之銘、不耐屏營之至、遂謹作銘、銘曰、

徳興之山、建中之寺、高楼新構、鉅鐵具備、鯨音聞天、龜紐占地、仲冬始律、叔世覺睡、既告衆民、能警將帥、豊嶺霜來、長安月墜、以道善鳴、知風所自、宮商有諧、忠孝不匱、縱其小扣、惟是大器、嗚呼振旅治兵、世於鼓吹、慶安四年

〔寺格帳淨土宗上〕　紫衣　尾州　建中寺

右住職、於尾張殿被仰渡、

一入院之御禮、御白書院獨禮、獻上壹束壹卷、御闕之内貳疊目、

一御暇、於柳之間老中被仰渡、時服三拜領之、廣蓋ニ而引

一年頭御禮無之

寺領什物

〔寺社分限記五淨土宗〕一七百石　尾州名護屋　建中寺常紫衣天曉

〔寶尻五〕一尾州國中寺社領證印年月之覺(中略)

建中寺五百石

慶安五年五月七日　御墨印

〔尾張志名古屋寺院〕淨土宗　建中寺(中略)

寺領五百石、慶安五年五月七日御寄附、愛智郡古井村、　寺寶　蒙古襲來之繪卷物二軸　同ゑことば一軸彈正大弼時常主より添白公

御靈前へ御寄附　田うゑ御屏風一双眞巌院君御寄附なり、その外數多し、

〔尾張志名古屋寺院〕淨土宗 建中寺○中略

塔頭 正信院竹腰正晴建立 宗心院成瀬正成建立 全順院寺尾土佐守直龍建立 甲龍院志水甲斐忠政建立 養壽院阿部河内正致建立 光壽院間宮大隅守正綱建立 清安院渡邊飛彈守治綱建立、府志に正晴を正信、甲斐を甲斐守、河内正致を河内守正興、正綱を正照、飛彈守治綱を右馬允守綱と記せり、いづれも先代にて慶安三年より以前に卒せし人々なれば、此寺家を建立すべきよしに有べからず、今家々の家譜等に載きてあらたむ、

祐福寺

祐福寺ハ、尾張國愛智郡祐福寺村ニ在リ、後醍醐天皇嘉暦元年、僧賢了ノ創建スル所ナリト稱ス、淨土宗ニ屬ス、

〔張州府志九愛智郡〕寺觀 祐福寺在祐福寺村、號玉松山、淨土宗、屬洛陽禪林光明二寺、嘉暦元年丙寅、達智賢了上人創建、緣起略云、上人姓源、村上天皇後胤、久我通雄卿男子也、幼在南京、十二歳入圓城寺、薙染、受具、東行、到春導寺、改宗爲智通上人附法相承、其後遊歷關東、此邑有二嶽徒、曰阿願、曰空妙、捨財造寺、第四世融傳上人請北越白山神廟、予時神現形爲一老翁、卽自袖中出三軸與之、至今安置本殿、此三尊像是也、且智多郡須佐浦漁翁曾擧網得木像三枚、三尊卽懸奇異、條一字安其像、須佐浦光明寺是也、其後感夢送之此寺、今善導像是也、後奈良院勅常寺新天下安全、大永八年、賜勅書、爾後每月朔旦、一山僧徒聚會本寺、轉讀大般若經、又云、永享四年九月將軍義敎遊覽富士時、來此寺詠和歌、未知實否、寺産四十石、邦君歷代賜墨章、境内靈廟堂一宇、達智上人建之、勅使門、在石階上、中門是也、車寄在門外左、今存老松十一株、閼伽井、達智上人始登此山、結印持呪、靈泉湧出、至今不絶、臥龍松、在閼伽井上、塔頭古有二十五院、今僅存四院、曰大悟院、曰受德院、曰孝耳院、曰法性院、

〔尾張志愛知郡〕淨土宗 祐福寺

祐福寺村にあり、玉松山といふ、京都西山光明寺、東山禪林寺兩末寺也、建久二年、宇都宮賴綱入道蓮心の創建道場也、其後多年の星霜を經て、堂舍坊宇悉破壞せしかば、嘉暦年中より復古再建の志を起しかども、元弘建武の騷亂に隙られ、又年月を經たるに、傍爾本村の加藤某、法名空妙、同人の婿小野田又近藤ともいへり左近將監長安入道阿願兩人、本願主にて本堂講堂寶塔及諸坊洛室等まで

寺領

再興造營す、嘉慶二年戊辰二月造畢せり、開基は達智賢了上人なり、上人は天曆ノ朝ノ皇子具平親王十世孫、後ノ久我內大臣通基氏の御子、中院太政大臣源通雄公子也しが、幼年より母堂に隨ひ南都に住居し、十二歲にて園城寺に入て、薙髮受戒せらる、その後東國に下り、吾妻の善道寺にて淨土宗に改宗し、又美濃國稻葉山下西莊立政寺に至り、智通上人に隨て附法相承し、其後も又東國に遊歷せられたる折しも、此傍爾本村なる祐福寺再建の開祖、此賢了上人の時代頃は、祐福寺むらはいまだなかりしかば、傍爾本村の祐福寺といへり、下にのせたる愚要抄の奥書を見て知るべし、空妙阿願兩居士の招請によりて、專福寺に住居し、堂坊造畢の後祐福寺に入院せられたり、當時は蘭生山といへりしを、後に今の山號とす、かくて後明應五年丙辰十一月朔日、法住院大將軍家足利義澄公より、御敎書を給へり、是は御祈願寺によりて、甲乙人等の亂妨狼藉を停止たまへるなり、大永八年戊子五月、後奈良天皇より勅願寺の綸旨を給へり、勅使は左中將經廣卿なり、是より後一山の僧徒本寺に集會して、大般若經を轉讀す、

本堂本尊阿彌陀如來を安置せり　護摩堂　阿彌陀堂　開山堂　二重寶塔　十王堂　鐘樓　所化寮　茶所

勅使門　通用門　總門　御車寄　馬つなぎ　牛つなぎ松　鎭守　白山社　寺領四十石、元和六年九月朔源敬公より給へるによりて、御代々かくのごとし、塔頭はもと二十五院ありしが、曆れて今殘れるは、法性院、受德院、大悟院、孝耳院の四院のみ也、當寺に開基上人賢了自筆の往生禮讃、私聚抄序分、愚要抄などあり、私聚抄第十卷の奥書に、于時嘉慶二戊辰六月晦日、於蘭生山本堂一校了、賢了房生年卅才、能所卅餘人、愚要抄奥書に、上略、私云、於尾張愛智郡鳴海莊內傍爾本郷生山鐵讃了、所以松煙火光夜半許書之、予時至德三丙午十二月廿六日、沙門賢了、生年卅二才とあり、此文に至德三年にて賢了上人卅二才といへるは、年齡たがへり、不審、この外に諸名家古歌、筆蹟等甚多し、

〔鹽尻五〕一尾州國中寺社領證印年月之覺○中略

部田　祐福寺　四拾石

寬文七年二月十七日以來御代々

名勝所在堂塔

萬松寺

萬松寺ハ、尾張國愛智郡名古屋南寺町ニ在リ、天文九年、織田信秀ノ建立スル所ニシテ、僧大雲ヲ以テ開山トスト云フ、初メ名古屋村ニ在リシガ、慶長年中、名古屋築城ノ時、今ノ地ニ移セリ、曹洞宗ニ屬ス、

〔國花萬葉記尾張九〕萬松寺禪曹洞 天文年中、織田備前守建立、

〔張州府志城二〕寺觀 萬松寺在南寺町、號龜岳山、曹洞宗、屬白坂雲興寺、古在名古屋村中、織田備後守信秀居古渡城時、天文九年庚子建之、請大雲和尚爲開山、二十年辛亥三月二日、信秀薨於末森城、卽葬于此、號萬松院桃岩道見、故以爲寺號、慶長中築名古屋城時、移今地、源敬公(德川義直)正妃高原院大夫人、嘗歸法於當寺四世實覺禪師、深崇信之、故物故之日葬於此、〇中略寺寶 小町琴、相傳高原院大夫人所持也、塔頭 萬松院 万年寺 永昌院

〔尾張志名古屋寺院〕同郡〇宗曹洞派 萬松寺

南寺町にありて龜岳山と號し、能登國總持寺の末寺也、織田備後守信秀、古渡の城主たりし時、天文九年、名古屋村に建立して、大雲和尚を請じて開山とす、同廿年三月三日、信秀末森の城にて卒せしを此寺に葬り、法號萬松院桃岩道見といへるを寺號とせしを、慶長年中、御城御造營の時、今の處にうつせり、寺記には、天文七戊戌年建立とし、はじめ清須にありしを、御遷府の時、名古屋小櫻町の邊に移しゝ由にいへるは、傳へ誤れるなるべし、はじめ小櫻町の邊に建立してありしを、慶長年中、今の處に移しゝにて、清須越の寺にはあるべからず、また織田眞紀には、二十年天文辛亥春三月三日、桃岩公係疫疾薨、年四十二、營立寺號萬松寺、寺東堂還桃岩、供一國僧徒於此、施食追薦桃岩公喪、と見えて、信秀卒去の後建立ありし由に記せり、

本堂本尊觀音、脇士普賢、文殊、八才龍女、 高源院君の御墓本堂の西北にあり、此君當寺四世の住僧大宗永謙を崇信し給ひ、それが說法を聞給へり、よりて御逝去の後、この寺に葬りたてまつる、

〔日本洞上聯燈錄九〕雲興祥巖秀麟禪師法嗣
尾州龜嶽山萬松寺大雲永瑞禪師、姓平氏、織田信秀伯父也、世居尾城、師生執綺中、資性高潔、幼辭家、依雲興祥巖禪寺、剪髮受具、沈默自究、一日聞正法眼藏有省、詣室伸所悟、巖擧玄沙未徹話詰之無滯、巖笑曰、得則得矣、終居第二義、久之契合、巖特順世、命續其席、大振化風、居十三年、謝事擧春岡補處、退居大森正法寺、天文庚子、備後太守平信秀（織田氏）就城南、創萬松寺、資冥福、延師爲開山始祖、遮山日、有靈龜出現、仍號山曰龜嶽、示衆曰、龜嶽山靈德惟新、萬松鬱茁幾秋春、老禪方丈落成日、世主大檀轉法輪、信秀晨夕詣寺請益、永祿壬戌四月二十二日寂、壽八十一、出春岡榮、寬室庥、愚庵賦、大宗播四人、

寺領

〔張州府志二府城〕寺觀　萬松寺（中略）寺產初織田信秀寄附寺產五百石、其後中絶、左中將忠吉君賜尾州牧、再賜三百石、瑞龍公（德川光友）增賜二百石、歷代據此、

〔鹽尻五〕一尾州國中寺社領證印年月之覺（○中略）

萬松寺

文祿四年九月廿一日　秀吉　五百六十九石七斗七升

慶長元年五月廿日　忠吉卿　愛知郡名古屋村三百石

元和六年九月朔日

慶長五年正月廿三日、貳百石御寄附

寬文七年以來　御代々

子院

〔尾張志名古屋寺院〕同（○禪）宗曹洞派　萬松寺（○中略）

塔頭　福壽院（龍爲學の建立也）　萬年寺（永祿二年の建立にて、龍峯山と號し、慶長年中、萬松寺とともにこゝにうつせり、）　永昌院（寬永十六年の建立なり）

盛岩院（寬文十一年二月十八日、燒失の後、廢寺となる、）

名稱　所在　沿革　堂塔　寺領

西本願寺

西本願寺ハ、尾張國愛智郡名古屋門前町ニ在リ、天正年中、伊勢長島願證寺ノ滅亡スルヤ、京都本願寺ノ僧顯如、織田信雄ニ請ヒテ、當國清須ニ一寺ヲ建立シテ、其名ヲ襲ハシム、後伊勢桑名ノ願證寺再興スルニ及ビ、其通所ト爲ス、慶長年中、名古屋築城ノ後、今ノ地ニ移シ、享保年中、改メテ本山ノ掛所トス、

〔尾張名所圖會 一 愛智郡〕西本願寺掛所（同町〔名古屋門前〕西側にあり）伊勢國桑名郡長島の門徒等、信證院蓮如上人に乞ひて、長島の杉江村に一寺を建立し、上人の末子實惠を招待して住持とし、願證寺と名づけ、伊勢、尾張、美濃三箇國の小本山たりしが、天正二年甲戌九月廿九日門徒の一揆によりて亡され、廢寺となりしを、顯如上人、内大臣信雄公に申て、願證廢寺を當國清須に再興あり、其のち桑名郡本願寺村に、願證寺を再興して、清須の寺を通所となせしを、慶長御遷府の後、通所を今の所へうつし、舊號によりて願證寺と名づく、其後享保年中、本坊懸所とす、境内に櫻の大樹數株ありて、春日遊人絶えず、　本尊阿彌陀如來

〔尾張志 名古屋寺院〕一向宗西派　西本願寺本坊

門前町の西側にあり、信證院蓮如上人の時、年月詳ならず伊勢國桑名郡長島の門徒等が申乞によりて、長島のうち杉江村に一寺を創建し、願證寺と號け、上人の末男僧實惠を開山として住持たらしめ、伊勢、尾張、美濃三箇國の小本山としたりしが、元龜の頃より長島の門徒等、信長公の命に從はず、一揆を起し騷動四五年のうちやまず、徒黨多勢にして退治難儀なりしかども、天正二年九月廿九日、終に信長公の軍勢に戰まけて、一揆の黨類殘りなくうち亡され、願證寺も廢頽に及びしかば、顯如上人、小本山の絶たるをうれへ、内大臣信雄公に申て、その領地清須に一寺を建、願證寺と名づけ、長島の寺の如く、三ケ國の末寺を所務したりしが、其後又長島の近邑桑名に願證寺を

名所 所在 沿革 堂塔

再興して、三ヶ國の本寺舊儀に復しける故、清須の寺にては寺務を行はず、只桑名の寺の通所となり來りしを、慶長御遷府の後、今の地にうつし、享保年中、本坊となりしより、佛堂殿宇日を追て造營加はり、嚴麗繁榮の道場となる、

本堂（本尊阿彌陀の立像は、源信僧都の作といひ傳ふ、） 梅昌院尼公墓（本堂の西北に在、宮府の官女樺小路法名梅昌院は、泰心院君の寵幸を得て、龍丸君、松之助君、綾姫御方、菊太郎君、綾姫御方、秋光院君[illegible]歌姫御方をうみ奉りて、享保十五年七月十一日卒去ありしなり、此寺に葬りしなり、） 寺寶 宮島の屏風一双（嚴島の風景祭禮修行の圖を描がけり） 歌仙の屏風一双（土佐宮内少輔光厚が畫ける三十六歌仙の六枚折なり） 春秋の畫屏風一双（春はさくら、秋はもみぢを畫く、筆者定かならず、いづれも御寄附の屏風にて、其美麗古雅なる事、世にたぐひなし、） 寺領（百三十九石餘、伊勢國桑名郡本願寺村寺領なりしが、後に丹羽郡大赤見村に替地して今に領地す、）

東本願寺

東本願寺ハ、尾張國愛智郡名古屋茶屋町ニ在リ、初メ天正九年、眞宗ノ僧祐賢、同國海東郡蟹江村ニ、泉龍寺ヲ建立シ、慶長十一年、之ヲ名古屋ノ地ニ移ス、元祿三年、京都東本願寺第十六世一如、此寺ヲ以テ掛所ト爲シ、今ノ地ニ移シテ、坊舍ヲ造營ス、未ダ成ラズシテ遷化セシカバ、其子眞如、志ヲ繼ギテ之ヲ成就シ、一如ヲ以テ開山ト爲セリ、

〔尾張名所圖會二愛智郡〕東本願寺掛所（橘町の東町にあり）二天正九年八月、僧祐賢、海東郡蟹江村に一寺を建立して、泉龍寺といひしを、慶長十一年、那古野の地（御遷府の後袋町）へ遷せり、其後東本願寺十六世の門主一如大僧正、名古屋に掛所營建の志願ありて、御國の御免許を得、元祿三年七月より袋町泉龍寺を懸所となせり、同年十二月、古渡村の内にて境地御寄附ありて、懸所を今の所へ引うつし、同五年の夏頃より、坊舍を營みはじむ、同十三年四月十二日、一如上人京都本山にて遷化せられ、其

子眞如大僧正の代、同十五年十月廿八日、經營成就し、本堂をはじめ、諸堂こと〴〵く修造畢りしかども、眞如上人の開基とせずして、本願一如上人を以開山とせり、　本尊阿彌陀如來

〔尾張志名古屋寺院〕一向宗東派　東本願寺懸所

古渡のうち、茶屋町の東にあり、府下はもとより、尾張、美濃、其外御領分中の末寺を指揮監察する本坊なれば、常に輪番の役僧を本山より下して、寺務を掌らしめらる、天正九年八月、僧祐賢、海東郡蟹江村に一字を建立して、泉龍寺と號けしを、慶長十一年、名古屋の地今の桑町のあたりに移して、微々たる小寺なりしが、本山十六世の門主一如上人、名古屋に本坊營建の志願ありて、元祿三年七月より泉龍寺を懸所とし、やゝ修覆ありしを、同年十二月、瑞龍院君○德川光友敷地一萬坪を給ひしかば、今の地に移し、同五年夏の頃より坊舍を營建ありしが、功なかばにして、元祿十三年四月十二日、上人京都にて遷化せられしゆゑ、其子眞如上人志を繼で、終に同十五年十月廿八日、本堂修造成就す、眞如上人の時、落成すといへども、本願によりて一如上人を以て、當坊の開山と仰げり、其後年々月々に修造加はり、今の本堂は文化二年十月十五日、新始ありて、文政五年十一月朔日、上棟、十八年にして成就し、つゞきて書院、對面所、庫裏、臺所、座敷向の修補、其大造結構悉く全備し、宛も城郭の如く、實に府内の勝地繁榮の道場なり、

本堂本尊は阿彌陀の木像也　鐘樓元祿年中の建立也　太鼓堂享保十一年の建立也　樓門寶曆六年の建立なり

〔二十四輩順拜圖會後編尾張五〕西派御坊　御堂十二間四面

東派御坊　御堂十四間に十二間

當御坊の結構たる、境域廣々として堂宇巍然たり、御門の大なる京都の本山に比して相讓らず、馬場前のかゝりいと渺茫たり、青松道をさしはさけて、森々として列をなし、遠く相望に甚壯觀也、

名稱
所在
沿革

勝蓮寺

勝蓮寺ハ、三河國碧海郡矢作宿ニ在リ、此寺初メ柳堂ト稱シ、天台宗ニ屬セシガ、四條天皇嘉禎元年、僧親鸞、此寺ニ於テ勸化セショリ、遂ニ眞宗ニ改メタリ、

〔三河雀一〕矢作村勝蓮寺、一向、無緣、柳の御堂とも云、德阿彌公新田より御還浪の時、初て此寺に御休足と云、昔は天台宗なりしに、親鸞聖人と法論して改宗すと也、

〔二十四輩順拜圖會後編五參河〕柳堂勝蓮寺東派、同國碧海郡岡崎驛西矢作宿にあり

高祖聖人鸞○親三七日の間、御勸化なし給ひたる芳趾なり、說法石聖人御勸化のみぎり、此石上に座し給ひしと云、往昔聖德太子當國御經歷の折から、此地に柳の大樹有しかば、世人年歷をしらざるの古柳なりこれがもとにたたずみ給ひ、今よりして五百年の後、此所必群生利益の靈場と成べし、さるによつて我此地を以て柳堂と名付んと、いとも尊き勅により、其名をつたへて呼ならはせけるが、いつの頃にや有けん、終に小堂を建て、これを柳堂藥師寺となん號しける、然るに嘉禎元年二月上旬、聖人御年六十三歲にして上洛あらせ給ふ砌、遠州桑畑より當國矢作に至りて、此柳堂にとゞまり給ひ、三七日の間御勸化ましく〵けるに、當國は言に及ばず、尾州濃州の道俗群參來集して、聖人の法義を聽聞し、歸依渇仰の族、たとへば草の風になびくがごとく、此御化益にもるゝ者更になかりしとかや、是誠に宿因合熟の地にして、衆生解脫の機とゝのふるの時至れるものか、此所卽當國御化導最初發端の靈場たり、

岡崎十王町に、柳堂山西照寺といへるは、此柳堂の別院なり、又同所の内に滿勝寺といへるは、高田流の靈場にして、聞ある寺なりとかや、

〔和漢三才圖會六十九參河〕西照寺在岡崎初在矢作宿、名柳堂、天正年中移于此、東派

中興　圓善秀　當國安城村城主、權守何某出家　有腰掛石、

親鸞貞永元年八月於柳堂三七日説法、時僧俗改宗人數多、

名稱　所在　沿革

上宮寺

上宮寺ハ、三河國碧海郡佐々木村ニ在リ、傳ヘテ聖徳太子ノ建立スル所ナリト云フ、原ト天台宗ニ屬セシガ、嘉禎元年僧親鸞ノ來テ講説スルニ及ビ、寺僧蓮行歸依シテ、眞宗ニ改ム、

寺領

〔和漢三才圖會 六十九 參河〕太子山上宮寺　在碧海郡佐々木東派院家　寺領七十石不足

聖徳太子建立　元祖導宜　中興蓮行俗名安藤權守數房

親鸞於矢作柳堂説法時、聊有宗論、而歸依僧多、蓮行亦改天台、爲法弟、依令佐佐木三郎盛綱入道法善枝住、後改名蓮順房而後如光房蓮順八代、於油淵拾得兒、以爲異人、蓮如上人時、大谷御坊破却騷動焉、如光大有勤功、

靈寶數多　聖人自筆和讚普通本有少異有銀杏大木、

〔二十四輩順拜圖會 後篇五 參河〕太子山上宮寺東派院家、同國同郡碧海佐々木村あり

聖徳皇院と號す、眞宗歸化の大德蓮行法師の開基にして、當國三箇寺の一院たり、　本堂十間四面、本尊阿彌陀如來、聖徳太子御眞作、靈寶數品あり、略之、僧坊三區あり、

當院は往古聖徳太子の開闢ありし靈地にして、天台圓宗の佛場たり、依之諸號すべて太子によつて設く　中頃武人安藤右衞門尉祐綱入道して蓮行と號し、當寺に住持し、專ら大乘實頓の法を修しけるが、不思議に了海法師とともに、聖人に柳堂におひて謁し奉り、眞性得悟の强緣を以て、竟に本宗を改め、他力念佛に歸法し、御弟子無二の信者とは成りにけり、

〔三河雀 一〕佐々木村上宮寺、一向、三河三ヶ寺、佐々木四郎高綱の寺、一里四方寺領高なし、永祿一揆

雑載

の寺也、

〔三河國二葉松二〕御朱印黒印除地寺領並諸士方御菩提所付

碧海郡

一佐々木村 除地無高、一向宗三ヶ寺内、本寺京都東本願寺、 太子山上宮寺

〔和漢三才圖會六十九參河〕當國一向宗起一揆、濫觴三州住人菅沼藤十郎爲軍用糴穀、往上宮寺奪糧米等、寺僧云、佐崎、野寺、針崎之三箇寺、我開山以來守護不入之靈地也、而甲乙人猥不可不誡而亂入、菅沼之館打伏下部輩、取反糧物、菅沼大怒訴之酒井雅樂助正親、正親遣使譴責之、不鎮、使者吐罵言、不得止斬使、因復訴家康公、公乃率軍兵欲討滅之、於是近在同門寺僧檀越輩構籠三箇寺、既合戰及數度、如吉良義照、荒川甲斐守、松平監物、酒井將監城主輩戮力、進足往生極樂、退足無間地獄十二字書札、立鑒其向、自二月十一日至翌春不暫止、互討死者多矣、公既及出馬時、如渡邊半藏普代近習中、亦宗門輩俄與於寺、仍有敕命曰、免寺僧及徒黨罪、永可賜本領也、因悉降伏、於上和田村淨珠院誓紙呈之、謝罪和解焉、

名稱
所在
沿革

本證寺

本證寺ハ、三河國碧海郡野寺村ニ在リ、小山親祐ノ出家スルヤ、其邸宅ヲ捨テヽ、精舍ト爲ス、親祐初メ天台ヲ信ゼシガ、僧親鸞ノ此國ニ來リテ勸化スルニ及ビ、歸依シテ眞宗ニ改メタリト云フ、

〔和漢三才圖會六十九參河〕本證寺 在同郡〇碧海 野寺村〇東派 寺領七十二石 開基 敎圓房

小山判官之弟親祐營善射、或時君命曰、汝能射遠矢、今宜盡力射、限其矢屆處賜領地、因射數十町得

名稱所在

寺領

賓、人皆羨、而有所以通世名敎圓、

〔三河雀一〕野寺村本證寺、一向、三河三ヶ寺也、開山小山判官舍弟親祐出家敎圓房開基也、弓勢强く、遠矢を射て落たる所まで領す、

〔二十四輩順拜圖會後篇五參河〕雲龍山本證寺東派院家、同國碧海郡志貴の莊野寺にあり、開基は眞宗歸法の大德慶圓法師にして、當國三箇寺の一院たり、　本堂十間四面高祖眞蹟名號不離の本尊を安置す、坊舍三區あり、

慶圓法師と申は、舊小山判官行重の息なり、當國矢作の流小島の龍宮といへる所に居城して、武備尤さかんなりしが、宿因の發する所にや、いつしか世の囂塵をいとひ、富貴の交りを絕し、終に剃髮染衣の身と成り、屋形を則精舍と成し、專天台圓宗を修したりしが、高祖聖人〇親鸞柳堂御勸化の砌、了海法師と同緣を以て、忽台敎を拾棄して、永く聖人の御弟子と成り、眞宗無二の碩德とぞ稱しける、委しくは勝鬘寺の條下にこれを出す、今鈴越間瀬木の姓を稱するものは、みな小山家の區下に出ると云、寺寶、聖人左上の御影、及び開基慶圓法師自作の像等あり、其外これを略す、

〔寛文四年御朱印帳一向宗〕六十九石九斗　三河　野寺道場　本證寺

稱名寺

稱名寺ハ、三河國碧海郡大濱村ニ在リ、時宗ノ僧聲阿、正平年間ニ創建スル所ナリ、

〔和漢三才圖會六十九參河〕稱名寺　在大濱村　時宗　寺領三十石

〔鹽尻二十七〕後村上院皇子尊觀法親王或は深勝、新葉集作者也、遁世の後、遊行八世の他阿に歸して、時衆となり給へり、〔中略〕尊觀は三州大濱稱名寺一代と云々〇中略

有親王、〇略後には三州稱名寺に住せたまへり、稱名寺は、正平北朝延文の頃、覺阿上人開基せられしと云々、

〔寺格帳下〕　　三州大濱　稱名寺
宗　　御朱印高三拾貳石八斗

右住職、本寺藤澤清浮光寺ゟ申付ル、
一住職御禮無之
一年頭御禮、御白書院獨禮、獻上壹束一本、御閾之外三疊目、
一御暇、於檜之間寺社奉行申渡、時服二拜領之、取次ス

〔寛文四年御朱印帳宗〕　三河　稱名寺
三十二石　　永祿二年十一月廿八日

〔三河國二葉松二〕御朱印黑印除地寺領並諸士方御菩提所付

碧海郡

一同〇大濱村　寺領三十石、時宗、親氏ノ父有親歿二長陽ノ寂ス當寺ニ、本寺相州藤澤寺　稱名寺

〔東國紀行〕十二日、〇天文十三年閏十一月暮果て、參河大濱までをしつけたり、稱名寺の住持濱までわたらせたまひをり侍る、數年亂後、ことに數城ほどなくて、毎日足輕など不慮に打よせる比なれば、たゞみさへなき不辨さなり、一會の事あまり聊爾にやなどあれど、心ざしのほども見えければ、かきくづしうづみ火つくすむかし哉、そのかみ當國〇三河に休らふ事ありけむ、當寺時衆相阿覺阿などいひて、連歌執心せし人々の物語しつゝ、爐邊懷舊なるべし、

〔紹巴富士見道記〕十六日〇永祿十年七月曉の雞にひかれて、鷲崎といふ所へ網おろさせみる、〇中略又二里計南のかた、熊野崎とて三熊野にむかへる洲崎へ漕出て、大濱稱名寺納涼せし折節、衆僧の御所望に、
三熊野の浦風凉し秋の海

名稱所在寺領

瀧山寺

瀧山寺ハ、三河國額田郡岡崎瀧村ニ在リ、開基未ダ詳ナラザレドモ、德川家康嘗テ此寺ヲ造營セシ事アリ、天台宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會六十九參河〕吉祥山瀧山寺　在岡崎　天台　寺領六百十二石

開基　有六坊學頭　青龍院

〔三河雀一〕岡崎吉祥山瀧山寺、六百十二石、天台宗、學頭青龍院、六坊あり、權現公御宮つくり奉祝、四つの海しづかに、戸ざしを忘るゝことも、神君公の御惠澤ならずや、されば四恩の第一にかぞへあげし御恩風、時いたりて吹き盡さず、身毒旃丹まで、武耀、文星かゞやき給ふ御明君なり、二王門は、むかし飛驒の工が建侍る、星霜幾代を經たりきかゝる名譽の木の道も、桁一本打違て自害せし墓あり、寺前の水の流れ、岩のけしきうつくしく、流にさつきはへ筆にも難及風景也、うしろに岩の流あり、春は昏鐘を慕み、秋は夕日のはなやか成を待なん景氣、洛陽の寺社多けれども、此絕景には及難し、岡崎近里の寺社は、京の弟とも可云風致也、

〔寛文四年御朱印帳天台宗〕六百十二石　三河正保三年十二月十七日　瀧山寺

大樹寺

大樹寺ハ、三河國額田郡大樹寺村ニ在リ、德川氏ノ祖先松平親忠ノ建立セシ所ニシテ、僧愚底ヲ以テ開山トス、永祿年中、家康ガ岡崎ニ敗績セシ時、住持登譽ガ僧兵ヲ以テ救援セシ事

アリ、是ヲ以テ、徳川幕府時代ニ至リ、待遇頗ル厚カリキ、淨土宗ニ屬ス、

名勝所在

〔千世の松根 上〕井田村、〇額田郡 是ゟ松原の杭を立 大樹寺領 大樹寺、總門 江入、三門前ゟ右へ廻、庫裏門より入、此節 御修復中、江戸ゟ掛役人衆、御作事方、御勘定方始、棟梁方、大工方始、塗方、疊方、屋根方、左官方、瓦方、塗師方、建具方等、百三十餘人來居、 大樹寺村、東は百々村、南は伊田村、西は新屋村、北は井の口村、何れも岡崎領也、當時本多中務大輔、品川ゟ七十八里半、岡崎ゟ一里、當山親忠君御建立の後、清康君御再建、天文四年也、御入國以後、寛永十五寅年二月廿二日ゟ、同十八年十二月十二日成就、夫より延寶四辰年、元祿十年、寶永五年等、

〔參州大樹寺傳記〕三州額田郡鴨田郷成道山大樹寺一字塔、開山眞蓮社愚底勢譽上人開基、檀那西忠建立之者也、中興玉譽上人代塔之大檀那

世良田次郎三郎清康

安城四代岡崎殿

右當寺大樹者、大檀那松平前京兆親忠公、法名大胤西忠與勢譽以同志所開基之一字也、

堂塔

〔千世の松根 上〕大樹寺〇中略

本堂 桁行京間十五間、梁間十間、 佛殿 桁行京間五間六尺三寸、梁間四間五尺三寸、 御宮 三間一尺二寸四方 御唐門 向七尺 扣之間 三尺 台德院殿御靈屋、右都而同斷、御瑞籬之內御同鎭、 多寶塔 京間二間一尺四寸四方、天文四乙未卯月廿九日清康公御創建、 開山堂 勢譽愚底上人木像 桁行八間、梁間一間、〇中略 三門〇中略 竪額、大樹寺、後奈良院宸筆

寺格

〔大樹寺文書 一〕參河國大樹寺爲勅願所、須開眞宗弘通之玄門、奉祈寶祚無疆之丹棘者、綸命如此、仍執達如件、

慶長十一年九月七日　　頭左中辨 花押 總光 〇

知恩院末寺
大樹寺還譽上人御房

〔大樹寺文書 一〕參河國大樹寺住持、代々令聽著紫衣、奉祈寶祚長久、不可混餘寺者、綸命如此、仍執達

如件、

慶長十一年九月七日　　頭左中辨 花押

知恩院末寺
大樹寺還誉上人御房

〔大樹寺文書 一〕貴寺紫衣出世之事、遂奏聞候處、忝勅許被成下候、則綸旨奉書調進之候、可有頂戴候、彌眞俗繁榮珍重候、恐惶謹言、

九月七日　　満誉 花押

大樹寺

御侍者中

〔大樹寺文書 一〕大谷知恩院末寺、成道山大樹寺之事、勢誉上人爲開基、松平一門令建立、至于今數代助隷、當住持玉誉上人抽修造之功、再興就、尤神妙也、今度爲本寺勅願寺幷勅額之事被執申者也、彌可被致天下安全懇祈者、天気如此、悉之以状、

十一月一日　　權左少弁 花押

大樹寺住持上人御房

〔參州大樹寺傳記〕青蓮院殿添状之寫

末寺參州大樹寺之額被染勅筆候、尤珍重候、猶奉願法橋含仰候也、

十一月朔日　　在判

知恩院僧誉上人

〔參州大樹寺傳記〕大樹寺之事

御勅願所之上者、不入之地、本末田畠直務、祠堂以下如舊規不可相違者也、右中與殿宇御修造專要候、恐惶謹言、

十一月廿九日　備中守泰能（花押）

雪齋（花押）

啓析鎮譽上人御房

○按ズルニ、右ニ引ケル四文書ハ、倶ニ慶長十一年ノ事ナラン、

寺領

〔千世の松根　上〕大樹寺〇中略

當寺領之分、三百拾九石三斗貳升、大樹寺村の內、百九拾五石五斗九升、鴨田村、百壹石五斗貳升寮舍方の分也、

右慶長七年六月二日、關原以後、此已前御代々被爲附し御祠堂田地等御取集、御朱印に改被下候計ニ而、別其後御寄、附被下しにはあらざれば、外々ゟも少々御六代の間の御寄附計ゆへ、乍恐東照宮様以後、一石も御新附不被下、其上寶曆巳後、水野氏岡崎領棹入打出の節、寺領も引替相成、今は古來高程收納無之と云、

〔寺鑑　下浄土宗〕成道山　紫衣　御菩提所　參州岡崎　大樹寺

御朱印　高六百拾六石四斗三升

寺制

〔千世の松根　上〕一總門前に禁札有之、

定

一於寺中幷門前不可殺生事、

一爲不入之地間、縱雖有罪科之輩、號奉行人不可撿斷、若於有重科族者、自寺家可有追罰事、

一於寺門幷門前、不可致喧嘩事、

一國中之諸士等、不論貴賤、於總門可有下馬事、

一寺中門前諸役、一切停止之事、

右條々、於違犯之輩者、可加成敗者也、仍如件、

永祿十二己巳年　　家康在御判

六月廿五日

大樹寺登譽上人

〔大樹寺舊記〕大樹寺法式之事

一國中之諸士至民以下迄、於公事申掛者、令糺明理非、急度可申付事、

一祠堂物借引之事、米錢三和利貳文子ニ相定故者、假天下一同之德政、同次之德政、私德政雖入來、令除之事、

一寮舍江從先規有志之族、寺領等寄附之處、其子孫令難澀、不悔還之事、

一從先規之諸末寺領、先祖寄附之處、爲其領悔還、巧出公事、私役收之事、甚以可爲曲事、付坊主於不應機者、可渡弟子、於無弟子者、可爲本寺之計事、

一諸末寺、年頭、開山忌、別時以上年中三度可有出仕、於懈怠者、堅可申付事、

一諸役課役令免許事、

一方丈幷衆中役官、於假權門之威者、寺內門前可被拂事、

右條々違背有間敷者也、仍如件、

天正七卯三月廿一日　　家康御判

大樹寺勢蓮社應譽上人

〔千世の松根上〕大樹寺○中略

一開山眞蓮社勢譽上人愚底聖憫大和尚、文安元年甲子、山城國に誕生、永正十三丙子年四月十一日遷化、七十三當山草創は文明七年二月廿二日なり、二世晩蓮社昇譽魯鈍上人、

〔三河雀 二〕岡崎大樹寺末山

常在院 十四石 大樹公御母后の御寺　芳樹院 十四石 六郎御母儀の御寺　竹用院 十石 坂平十郎の御寺　開花院 十石 松平大炊介の御寺　善揚院 十八石 石川日向守の御寺　掉井院 十二石 松平出雲守の御寺　信行院 五石 吉良右京大夫の寺　愚耕院 五石 廣忠公御建立　慈光院 五石 鎮如御隠居の御寺　易性院、足立右馬允の御寺　要達院還覺上人の開居寺、麺向院、酒井左衛門尉の御寺　大濱村淨行院 十二石 長瀬村長壽寺 七石 福釜村玉泉寺 七石 深津村三光院 貳石 青野村來迎寺 五石 小島村西方寺 四石八斗 東城村寶王寺 松平甚太郎御寺 赤澀村松條寺 七石 大濱村清淨院 六石 尾古差村西林寺 七石 戸塙村大通院 三石五斗 桑子村眞如寺 三石 細川村積名院 三石 松平左官入道祠堂米百俵

〔天明集成絲綸錄 三十一〕天明二寅年十一月

寺社奉行江

三州大樹寺、御宮御靈屋、其外共御修復、小普請方江被仰付候、且又塔頭拾ヶ院之儀者、一ヶ院江金拾五兩宛之積、金百五拾兩被下置候間、自分ニ而修復可仕旨可被申渡候、新規願之箇所之儀者、追而御沙汰可有之候、神寶御道具裝束類之義も、御修復被仰付候間、被得其意、大樹寺江も可被申渡候、

〔東照宮御實紀附錄 二十五〕佛理をも深く御歸依ありて、いまだ三河におはしませし時より、御出陣の前には、いつも大樹寺へ渡御なりて、御祖先の靈牌を拜せられ、僧共召出て、法問聞し召れ。下略

〔三河雀 一〕鴨田村、淨土山大樹寺、七百石、鎮西三河三ヶ寺也、松平右京亮親忠公御建立、世良田次郎三郎清康公御取立、永祿三年、神君公織田信長方の軍士楯籠、寺部筋の御合戰御勝利、御歸陣の節、

信長の軍兵、御跡をまたひ、大樹寺前にて取切、神君公御防戰被遊、此時登譽上人、厭離穢土、欣求淨土の經文を、御旗に押立、寺中不殘、其外鄕民を相ひきひて御加勢有、祖道と云大強力の納所房、壹丈餘の大卒都婆を引さげ出、敵を悉追なびけ、御勝利也、吉例の御旗是也、近所に平淸盛入道の墓有、宗盛のきづかれしと也、

〔國朝大業廣記 九〕永祿三年五月十九日、神君〇中略雨後ノ空悉ク晴テ、月出ルヲ待玉ヒ、本多彥八郎忠次ガ陣代本多修理ヲ以テ、大高ノ城ニ止メ、靜ニ兵ヲ班シ玉フ、〇中略神君大高ヨリノ歸路、參州碧海郡山田村ニ於テ、鄕主都筑又兵衛正晴ガ宅ニ御止宿アリ、翌日又兵衛供奉シテ、大樹寺ニ趣キ玉フ、廿日神君岡崎ニ至ラセ玉フ、然レドモ今川家ヘ禮ヲ失ヘバ、城內ヘ入玉ハズシテ、大樹寺ニ屯セラルコト三ケ日トゾ、廿二日、本多修理嚮ニ神君、大樹寺迄引取玉フコトヲ聞テ、大高ノ城ヲ退テ、今日歸參ス、

名稱 所在 沿革

勝鬘寺

勝鬘寺ハ、三河國額田郡針崎村ニ在リ、此寺初メ天台宗ニ屬セシガ、嘉禎元年、眞宗ノ僧親鸞ノ來テ說法スルヤ、住僧了海歸依シテ、遂ニ改宗シタリト云フ、

〔和漢三才圖會 六十九參河〕勝鬘寺 在同郡〇額田針崎、 東派 寺領五十石餘
初天台中興改宗 俗名庄治太郎安藤數勝之二男 父子三人共出家父敎房爲上宮寺住持、兄袈裟太郎爲淨妙寺住持、

〔三河雀 一〕春崎村勝鬘寺、一向、五石六斗五升、三河三ケ寺也、開山和田袈裟太郎入道順淸房開基、永祿一揆寺、

〔二十四輩順拜圖會 後編五參河〕寂光山勝鬘寺 東派院家、同國額田郡深溝の莊針崎にあり

當山は舊天台圓宗の精舍なりしが、中古寺務了海法師我眞宗に歸依し、中興開基として更に他力念佛を弘通あられし靈場也、當國におひて三箇の一院といふ、(當國三箇寺と稱するものは、本誓寺、上宮寺、井に當寺なり、是當同時に歸法ありし故、かくは稱すとかや、)本堂九間四面、本尊如來尊像、(聖人(親鸞)御眞作、落涙如來と稱す、高祖聖人當院の寺務了海法師へ、御記念として讓らせ給ひしに、此尊像御名殘やをしみ給ひけん、たちまち震ひ動かせ給ひ、遂眼より御落涙ありしとなん、今に其涙痕の殘れるを以て、かくは稱し奉るなり、)塔頭二坊、

高祖聖人御年六十三歲、嘉禎元年の春御歸洛あらせ給ふ折ふし、當國矢作の宿柳堂におひて、三七日の間御說法なし給ひけるに、遠近の緇素群參し、聽聞する者、恰も山のごとく、日々に歸法渴仰なす族千を以て算ふ、爰に當院の住僧了海法師これを聞、忽我慢の旌旗をなびかし、夫當國に在て、我この勝鬘寺は、天台圓頓の道場にして、代々三乘の法を尊び、闔國の衆民、貴賤となくこれを歸依し、尊重すること年久し、然に我代に當つて、渠がために覆されんこと、何ぼう無念の事ならずや、いで彼地に至て我法德を以て難詰し、一時に渠を屈伏せしめ、當地を追拂はん事、案のうちにありと、卽同臭の本證寺敎圓、上宮寺蓮行なんどいへるゑせ法師をかたらひ、竟に柳堂にこそ至りける、折から聖人御說法の最中なりしかば、三人の僧はやむことなく此座のはつるを待居けるが、聖人かくともゑらせ給はず、聽衆に對して大聲をはなち、抑釋尊御一代の敎法、その數多門なりといへども、いづれの門か佛敎にあらざる、何れの法か殊勝ならざらん、但これを修行せん事、各如說に隨つて其功德を積時は、終に利益を得ん事必然たり、然といへども、世に上代末代のたがひあり、人に厚薄の二ッあれば、法は必ず一旣に歸しがたく、元來世運に隨てうつれり、爰を以て釋尊多端に法をゑめし給へり、たとへば彼大乘實頓の法のごとき、一機一緣の益なるが故に、上代利根の衆生は其行を修し、其證を得るといへども、當今末代鈍根の衆機、在家造惡の凡夫、爭か其苦行を勤るにたえんや、されば御經にも、我末法時中億億衆生起行修道未有一人得

者とは說給へり、かるがゆへに、今我すゝむる所の彌陀本願の敎行は、如來出世の本懷なれば、万機普益の要法にして、五乘最入の大道なり、たとひ十惡の凡夫、五逆の罪人なりとても、一念に本願を信じ、專心に彌陀に歸命し奉れば、他力攝取の御利益すみやかにして、卽得往生、住不退轉と決定し、さらに其うたがひ有べからず、然らば此うへには、ひとへに報恩の稱名を、歡ぶべきものなりと、恰も懸河の流るゝがごとく、いともこまかに御敎化あらせ給ひければ、衆人隨喜の淚をながし、皆一同に稱名をこそ唱へける、かくて三僧は先より思はず聽聞してありしが、高僧無雙の見識に、忽我執の心を奪れ、我偏心の陋なるを悔み歎きつゝ、聖人に謝し奉り、ともに回心懺悔して、竟に本宗をひるがへし、眞宗念佛にぞ歸せられける、

當國はそのかみ聖德太子勝鬘經御講讚の靈地なるによつて、寺號をかくは稱すとかや、又當國保母といへる地に、勝鬘皇寺といふ寺院あり、是又聖德太子御靈跡にて、眞宗無本寺たり、日光御門跡に屬する院家なり、

鳳來寺

名稱
所在

創建
沿革

鳳來寺ハ、三河國設樂郡門谷村ニ在リ、文武天皇ノ朝、利修仙人ノ創建スル所ニシテ、德川廣忠夫妻、嘗テ此ニ參籠シテ誕育ヲ祈リ、家康因テ生ルト云フ、是ヲ以テ家康大ニ當寺ヲ再興シテ壯麗ノ伽藍ト爲セリ、眞言、天台ノ二宗ヲ兼學シ、眞言ノ學頭ヲ醫王院ト云ヒ、天台ノ學頭ヲ松高院ト云フ、

〔和漢三才圖會 六十九 參河〕煙巖山鳳來寺　在門谷村　天台　社領千五百石

本尊　藥師如來　開山　利修仙人　十四坊　醫王院

〔三河雀 一〕門谷村煙巖山鳳來寺、千五百石、顯密兩學頭、十四坊有、昔開山利修仙人、七本杉を伐て、手

宗派

堂塔

づから藥師の尊像を刻、○中略人王四十二代文武帝御惱の時、御修法の勅使として、公宣卿煙巖山に攀て、仙人に勅を遞、利修勅を不請、黎しの杖頭にのぼりて立、公宣の云、普天の下何國か王土の外ならん、杖も王土に立りと、仙答事あたはず、鳳に駕して參內し、御修法あれば、則御惱御平愈有、叡感不斜、鳳閣御建立、鳳來寺と勅號を下されしとなり、○中略爰に源亞相廣忠公御奉行の御祈念として、御簾姬共に、天文十一年寅初春、鳳嶺に御通夜有、御簾姬の錦床下に藥師の尊像有、御房小宰相御簾姬に奉りしに、則御瑞夢に相叶ひ、御喜悅不斜、同十二月、玉をのべたる御若君、御誕有、竹千代公是也、星移物換りて、東照大權現大宮修造ましまし、玉樓金殿、美盡善盡せり、奥の院は、仙人水定の瀧、藥師の御衣木有、十月八日より同十七日まで、延年の御祭禮有、

權現宮御代官、庄田與總兵衞、新田二十石、

〔東照宮御實紀 一〕清康君後の北方、華陽院殿の御事なりいまだ水野忠政がもとにおはしける頃、設たまへる御女あり、傳通院殿の御事なり定吉、はじめ酒井石川等のおとなどもの計ひにて、この御女をむかへとり、廣忠卿の北方となし奉る、天文十一年十二月二十六日、此御腹に若君安らかにあれましける、これぞ天下無疆の大統を開かせたまふ、當家の烈祖東照宮にぞまし〳〵ける、そのほどの奇瑞さま〳〵世につたふる所多し、北方、鳳來寺の藥師に、御祈願ありて、七日滿願の夜、藥師十二神將の寶神を授けたまふと見たまひしより、身重くならせたまふなど、日光山の御緣起にも記されし事多し、

〔三河國二葉の松 二 設樂郡〕煙巖山鳳來寺　門谷村、寺領千三百五十石、顯密兩宗、號勝岳院、無本寺、兩學頭二院、衆徒十二坊、醫王院、眞言學頭 松高院、天台學頭 等學院、天台 圓林院、眞言 日輪院、眞言 藤本院、眞言 岩本院、天台 一乘院、眞言 法花院、眞言 月藏院、眞言 不動院、天台 增通院、天台 寶泉院、天台 般若院、天台

〔雲遊文蔚 一〕鳳來寺記

貧道其詎辨吾之貧、貧復匪眞之貧、曠年懷烟霞癖、甚於茂陵之渴耳、偶被一唱導化、發西遊之行、遂秋

寺領

嶺鳳之來勝、實寰中之餘算哉、攀躋自東北平、既登山椒、正面豎瑠璃光殿、諸宇羅列其際、地屬設樂郡、山曰煙巖、鳳來其寺號也、昔依鎌倉武衞所願、修建三層塔、豐太閤遠遊東道于此、辱令名、岡山諸殿悉落成、神祖尙不改舊觀、附佛食若干田、再營森如大備矣、

〔天保集成絲綸錄五十六〕寛政五丑年八月

寺社奉行江

三州鳳來寺之儀、先達而段々相願候趣、無餘儀筋ニ相聞候間、諸堂社之內、重立候五個所御修復被成下、其餘之分は追々修復可仕旨申渡、御手當も被下候上は、御修理料を差加へ、如何樣にも自分ニ而修復可仕處、諸堂社一時ニ修復出來之上、開帳有之、先例ニ候など申立、此度御修復之五箇所、彩色銅物迄も修復之樣、大造之入用積致、猶又被下金、幷拜借之儀相願候得共、山中散在之小祠迄、一時ニ御修復無之候とて、差支可申樣無之、外見一通り之銅物彩色等は猶更如何樣にても可相濟候、一體御儉約中之儀、萬事御省略有之事候得共、御由緒之處を以、懇訴之趣難被默止ニ付、重立候箇所御修復被成下候儀ニ候處、其勘辨も無之、再三彼是申立、其上御修理料之儀も、先達而は餘金拂底之趣をも申、此度は拜借金御修理料を以返納可致など、前後不都合之申立ニ相聞候、多分之拜借金、御修理料にて返納相成候程之餘分有之候はゞ、右を以追々修復も可行屆事候、依之旁願之趣は難聞屆候間、心得違之儀不申立、先達而申渡候通、相心得候樣、兩學頭江可被申渡候、

三州鳳來寺學頭　醫王院

三州鳳來寺御宮御別當　松高院

〔寺鑑上古義眞言宗〕學侶方

御判物高千三百五十石之內高百石配當

〔寺鑑七天台宗〕煙巖山

御朱印高千三百五十石之內、高百五拾石御別當領、

名稱　所在　創建

堂塔

方廣寺

方廣寺ハ、遠江國引佐郡奥山村ニ在リ、奥山朝藤ノ建立ニシテ、禪宗ノ僧無文ヲ以テ開山トス、

〔遠江國風土記傳引佐郡三〕方廣寺　在奥山、朱符之寺田高四拾九石五斗、開山後醍醐天皇御子、諱元選、號無文禪師、臨濟宗一派祖師也、　寺記曰、應安四年入御于茲、又曰、至德元年甲子春、自三河國廣澤庵移于奥山、奥山六郎次郎藤原朝藤、建寺以爲御子之御在所、地景形像於唐土天台之方廣寺、嘉慶元年二月、朝藤卒去、康應二年庚午閏三月廿二日、後醍醐帝之御子無文禪師薨去、春秋六十一、葬方廣寺境內懷山也、法嗣四弟子、住于門前十一町之內、外九弟子住他鄉、而更代住番於方廣寺、延寶年、衆僧斷絶、而黄檗宗之僧侶住、故濁堪師之遺跡存于茲焉、

〔深奥山方廣開基無文選禪師行業〕師諱元選、號無文、京城人也、族後醍醐天皇、母昭慶門院也、元亨三年癸亥生、〇中略　暨三之廣澤、衆又追尋至、幾及乎三千指、有遠江奥山是桑居士者、行而參謁、扣問己事次、師〇此間有脫字　居士云、吾求寂安樂、欲遠離闠闠、居士應諾云、我本鄉地、深山幽涯、自柴乾水、便信和尙之本意歟、師偃之、居士又如有夙契、越三歲、應接不暇、有煩厭之意、一日憶著疇昔居士語、至德甲子〇元年春、入遠江奥山、乃抑標橫眉不顧人、直入千峯萬峯去者也、林岳幽邃湖堧霧、眞適終焉之意、作弗茨曰方廣、地似南岳、以名之、

〔梅花無盡藏六雜文〕遠州方廣禪寺山門化緣疏并序

娑婆世界南瞻部洲大日本國東海道遠江州伊那佐郡井伊保奥山鄉深奥山方廣禪寺山門修造化緣疏并序

住持比丘某敬白

夫以本寺開山祖無文大和尚、適醍醐天王庶子也、爲求法遂駕商舶、遂嗣古梅、古梅嗣絕學、絕學嗣鐵牛、鐵牛嗣雲岩、雲岩嗣無準、正續師、雖佛有殿有堂、未及山門之經營、唯插一莖草、安寶陁大士之像而已、諸徒努力、今就海內遠近之數十州、扣相度求多少之資、所希福海壽山、民安國泰、披沓洒三十六之雨則茁不肥、而萬卉各茂長、土工木工石工、山門之樓閣必見不日之輪奐、人々發無上菩提心、而結等妙之果、其辭曰、

規梅岑安水月道場之主、王氏盡心、需木盆償山門經營之資、趙家蒙福、菩薩萬行、如澍甘露、相度一新、請回春風、佛法在求、開山祖皷南遊楫、宗乘相受、正續師奪西華機、月斧星鎚、起廢於是時、碧瓦朱甍、待功於不日、聲盤析、郛所聞也、使遠近投徵音、楚有材、晉實用之、要棟桴、湿輪奐、

遠州奥山村　方廣寺

寺格

〔寺格帳下禪宗五山派〕御朱印高四拾九石餘

右住職輪番持

一住職御禮無之

一年頭御禮、御白書院御次一同、獻上壹束一本、御暇無之、

寺領

〔方廣寺文書〕遠江國井伊谷奥山方廣寺領、合四拾九石五斗事、令寄附畢、全令寺納、如有來諸役令免除者也、

天正十八
十二月廿六日　朱印　豐臣秀吉

方廣寺

〔寺社分限記四禪宗〕中峯派

一五拾石　遠州　方廣寺

寺制

〔方廣寺文書〕伊井谷奥山方廣寺之事

一山四方境用木雜木等、濫不可切取事、

但有用要之時を以、朱印可申付事、

一同室物停政令免除事付門徒中輪番出仕等、不可有無沙汰事、

一為無緣所々可如別々志、次第勤進可仕之、同諸職人如別々志、次第細工可仕事、付門前屋敷四間之事、

右為祈願所之間、諸事可為如近年、守此旨國家安全勤行等、不可有怠慢者也、仍如件、

天正八
九月三日　　家康花押

方廣寺

〔方廣寺文書〕深奥山方廣寺住持職出世之事、所有永勅請也、殊專佛法紹隆、宜事祈寶祚長久者、依天氣執達如件、

天正十五年六月廿六日　　左中將藤原慶親花押○庭田

古例和尚禪室

深奥山方廣寺出世勅請之事、被開山無文和尚者、後醍醐之為皇子云々、然者於此山可有出世之綸旨、依懇望令勅許候、門派上室、永不可有異論候也、

六月廿六日　　花押

二位法印

頭陀寺

頭陀寺ハ、遠江國長上郡頭陀寺村ニ在リ、初メ、敷智郡中馬䑺村ニ在リシヲ、天正年間、今ノ地ニ移ス、創建詳ナラズ、清和天皇貞觀五年、定額寺ト為ル、今眞言宗古義派ニ屬ス、

名勝所在堂塔

〔遠江國風土記傳長上郡五〕頭陀寺　在頭陀寺村、朱符之寺田高貳百石、眞言宗、此寺昔在濱松城西富塚郷中馬鞍村、天正年間、移于市場、今號頭陀寺村也、安置藥師佛、比丘曰、毘首羯磨之所作也、

〔東海道名所圖會三〕青林山頭陀寺　濱松馬込橋より南八町にあり、古義眞言宗、高野山法性院の末派也、

本尊藥師佛　行基菩薩の作、一說毘首羯摩天の作ともいふ、文武天皇大寶三年草創、　阿彌陀堂　丈六阿彌陀を安す、春日佛師作、　三層塔　大日尊を安す

二王門　運慶作、　執金剛神、　勅額頭陀寺　此二王門に掲る、三代實錄云、貞觀五年八月二日壬戌、以遠州頭陀寺預於定額、　護摩堂　本尊不動明王、永祿兵火の後、本堂に安す、僧院は、千手院、實相院、圓成院、安養院、東光院、成就院、往古坊舍數多也、今六坊存す、

寺格

〔三代實錄七清和〕貞觀五年八月二日壬戌、以遠江國頭陀寺預於定額、

〔寺格帳上古義眞言宗〕高貳百石　御朱印　遠州河匂庄　頭陀寺

右住職、本寺高野門主寶性院ゟ申付ル、

一住職御禮無之

一年頭御禮、御白書院御次一同、獻上卷數幷壹束壹本、御暇無之、

寺領

〔頭陀寺文書〕河匂庄平間之內、敷地料田之事、從就于往古頭陀寺領之由、爲廣綱新寄進所令寄附實也、然者於自今已後不可有相違、仍前々勤行等無怠慢可有勤仕者也、仍如件、

大永八戊子年八月三日　廣綱花押

頭陀寺　千手院長閑坊

〔頭陀寺文書〕遠州頭陀寺寺領之事

一從前々之本尊領七箇名之內、增分七貫文、彼地之百姓七郎兵衛付爲訴人申出之條、爲始眞瑜其外僧侶、任其儀連判書、愈明鏡之上者、彼增分寺務、永不可有相違、相殘百姓等、若於及異儀者、任七郎兵衛一人本增共可有寺務事、

一本尊領、幷坊領等、相物之百姓等年貢、於令無沙汰者、縱雖爲他之被官人、堅申付、可有寺務、一切令

停止權門猥藉事、

一寺領坊領之內、自今以後、其境等令混雜他領、拔置百姓等於有之者、開立次第令寺務、至彼百姓者、寺領分內可有追却事、

右條々不可有相違、然者僧衆立合、本尊堂舍無怠廢樣可申付、若於及異儀者、爲眞瑜異見、各可有議定、猶於違犯之輩者、可加下知者也、仍如件、

永祿三庚申
十月廿四日　　氏眞花押

頭陀寺幷眞瑜僧都

〔頭陀寺文書〕遠江國頭陀寺領事

一貳百石　河勾庄恩地門前廻市場

此內

貳拾石　院主領　貳拾石　東光坊　貳拾石　寶生坊　貳拾石　寶想坊　九石　寶藏坊　九石　永東坊　九石　安養坊　九石　蓮光坊　九石　成就坊　九石　中坊　九石　圓成坊　九石　千手院　參拾九石　本尊修理領

已上

右任當知行之員數令寄附之訖、但以撿地上高頭請取之、全可令寺納、然上者如有來門前諸役、山林竹木等令免除候也、

天正十八年十二月廿八日　　朱印○豐臣秀吉

頭陀寺

〔寬文四年御朱印帳〕眞言宗古義 二百石　遠江慶長八年九月十五日　頭陀寺

〔頭陀寺文書〕定

子院

一任先例修造勤行等不可有退轉事、
一不可背出家之法度衆儀事
一寺領坊職如前々不可有相違事
一國并地頭不入可爲如前々事
一寺中門前棟別可爲如先規事
一號檀那不可綺坊職事
一雖讓與坊職於不遂出家者可爲寺家計事、
右條々於末代至違背輩者堅可加成敗者也仍如件、

天文八年己亥二月八日　　治部大輔 花押

頭陀寺

禁制

一軍勢甲乙人等亂妨狼藉事
一放火事
一對地下人百姓非分之儀申懸事、
右條々若於違犯之輩者忽可被處罪科者也、

天正十八年正月　日　朱印○豐臣秀吉

〔頭陀寺文書〕遠江國頭陀寺之事

一十二坊一亂之剋悉令回祿之間以運々可有建立并堂舍等就亂入及大破之條是又漸々可有修理事、
一先年寺領撿地之上百六拾餘貫文[illegible]相定之云々雖然若向後於有餘分者永可令新寄進次假尾

逆心之砌、先衆徒等敵地江離、令退散、日瑜事者、頭陀寺城〈罒〉相移之間、爲其忠節、頭陀寺領幷欠落之跡職等一圓補任之上者、爲一院雖被相計、前々爲十二坊之間、一ヶ坊仁五貫文宛令配分、十二坊可有再興之由尤神妙也、然者十一ヶ坊五拾五貫文、幷本堂藥師、其外諸堂修理領五拾貫文、千手院領五拾餘貫文、都合百六拾餘貫文相定之事、

一先衆徒等、幷院主其外横妨之輩寄事、於左右雖企競望、爲日瑜先忠之條、不準自餘、一切不可許容、兼又右之十一ヶ坊僧侶、或爲戒行不律歟、或對千手院存疎略、於構無沙汰者令改易、自餘之僧侶可被申付事、

右條々領掌畢、守此旨彌國家安全之可被抽懇祈之状如件、

永祿拾丁卯年三月廿二日　上總介〈花押〇今川氏眞〉

千手院

〔親元日記〈別錄〉〕政所賦銘引付

〈同前〇政左衞門一本鄕僧〉同日〇天明八年九月十六日

遠州河曲庄頭陀寺之土倉ニ預置拾貫文事、無沙汰之間可被成下御下知云々、

被成奉書畢

〔紹巴富士見道記〕掛川にても寺に明して、まだくれぬ程に、引間近き頭陀寺に趣けり、

西樂寺

西樂寺ハ、遠江國周智郡市場村ニ在リ、聖武天皇ノ勅願所ニシテ、僧行基ノ開基ナリト稱ス、今眞言宗ニ屬ス、

名所所在堂塔

〔遠江國風土記傳〕（九周智郡）西樂寺　在市場、號安養山、眞言宗一派之官寺也、朱符之寺、田高百七拾石、

阿彌陀堂（五間四面）　神社一、攝社三、

寺記曰、聖武天皇勅願所、行基菩薩之開基也、而後奏寬治帝（堀河）右僕射源顯房公營造焉、永正三年、源義澄公賜寺田六町、永祿八年三月、源義輝公賜田如先例也、今川義元、同氏眞、寄附寺田八町、朱符歟通存焉、于時武田信玄行軍而放兵火、梵閣殿宇悉燒失矣、太閤秀吉公賜田高百七拾石、而朱印之古書七通存焉、東照神君依舊例、慶長八年賜朱符、（今如）任台命而宥僊僧都自駿河國建穗寺來住、賜黃金三千兩、復興於諸堂、神君御陣之時、駐賜御馬櫻於樹、今稱馬繫之櫻、年々花葉盛也、

〔掛川誌稿〕（八周智郡）西樂寺（眞言宗、京都智積院末、）村（下村〇）ノ北ニ在リ、御朱印百七十石、本堂六間、本尊釋迦堂（本堂ノ右）鐘樓（本堂ノ右）十社權現（本堂ノ左）祠方二間、寺ノ鎭守ナリ、庚申堂（門前）藥師堂（同上）藥師ハ行基作ト云、此寺聖武天皇ノ御時、行基ノ草創、勅願所ニシテ、其後寬治元年、六條右大臣源顯房公再建シ、眞言宗トナル、永正三年、足利將軍義澄公、田六町ノ寄附狀、永祿八年、同義輝公ノ文書、今川義元ノ寄附狀、豐臣秀吉公ノ朱印等アリ、天正中、武田ノ爲ニ寺ヲ燒ル、其後東照宮御祈禱所ニ仰セ付ラル、弁明山ニテ樽木二萬本拜領スト云、子院德林寺、願成寺、三澤ニアリ、多寶寺馬谷ニアリ、御朱印ノ寺田ハ下村ニ五十四石九升四合、市場ニ六十三石五斗七升九合、馬谷ニ五石、三澤ニ三十石九斗二升七合、中村ニ十三石アリ、此寺御朱印地ニシテ、掛川領ニアブカラザレドモ、同村ノ内ニアル、故ニ大略ヲノス、

林光寺、三澤境ニアリ、西樂寺ノ子院ナリ、

寺領

〔西樂寺文書〕遠江國宇苅西樂寺領

八町七段者（諸佛供、鎭守田、諸行事、諸役者免、學頭領、十二坊領、燈明畠錢、壹貫貳百文、共目錄見二別紙一、）

右依證文紛失、當寺領員數、雖有其疑、當知行之由、百姓等任吹嘘之旨、所令領掌也者、抽國家安全、精（但百姓増分相加米錢者、知近年可被出之等之事、）誠修造勤行等、不可有怠慢、狀如件、

天文十二癸卯年五月廿日　治部大輔義元（花押）

西樂寺

〔西樂寺文書〕遠江國西樂寺領事

一九拾石　周知郡下宇苅郷　一八拾石　同上宇苅郷　合百七拾石

此内

參拾石　本尊修理領　貳拾石　鎮守領　貳拾六石　覺頭坊　拾六石　大坊

參石六斗　松本坊　參石六斗　福知坊　參石六斗　梅本坊　參石六斗　岸坊

五拾石　末寺　願成寺　七石六斗　同　林德寺　六石　同　多法寺　已上

右任當知行之員數、令寄附之訖、但以檢地上高頭請取之、全可令寺納、然上者、如有來門前諸役山林竹木等、令免除候也、

天正十八年十二月廿八日　朱印（豐臣秀吉）

西樂寺

〔寛文四年御朱印帳〕（眞言宗新義）百七十石　遠江（慶長八年九月十一日）　西樂寺

〔西樂寺文書〕定　花押（今川義元）

一伽藍修造、長日勤行、不可有怠慢事、

一坊跡拘置輩、不加修理、不勤寺役、以俗縁恣亂僧行之徒者、連以衆議可擯事、

一山林竹木、不可伐取事、

名稱所在

創建

寺格寺職

一借權威、不可致狼藉事、

一門前諸役、如前々令停止畢、次守護代使、或號公人、不可入催促之使事、

右於違背輩者、依注進可加下知者、可抽國家安全精誠也、仍如件、

天文十二年六月五日

西樂寺

可睡齋

可睡齋ハ、遠江國周智郡上久野村ニ在リ、久野宗隆ノ開基ニシテ、曹洞宗ニ屬シ、德川幕府時代ニハ、駿河遠河三河ノ三國ニ於ケル、曹洞派ノ總錄タリキ、

〔和漢三才圖會遠江六十九〕可睡齋　在久野村　禪宗　寺領三十五石

駿遠參之三州、曹洞派之總錄也、

〔遠江國風土記傳周智郡九〕可睡齋　在上久野、號万松山、曹洞宗大洞院末、開山眞巖派、稱門首開基久野佐渡守宗隆大永永正中之人也、位牌曰、万松院殿一溪淸閑庵主、傳記不存　朱符之寺田高三拾五石、末寺八拾九寺、慶長以來、爲遠江、三河、駿河、及伊豆國乘善寺等、曹洞宗之官寺、

〔寺格帳下禪宗洞家〕　遠州可睡齋

右住職、於御白書院御椽頰、老中列座被仰渡之、

一住職御禮、御白書院獨禮、獻上一束一卷、御國之外貳疊目、

一御暇、於柳之間老中被仰渡、時服三拜領之、廣蓋ニ而引

一年頭御禮、御白書院獨禮、獻上壹束一本、御國之外貳疊目、

一御暇、於柳之間老中被仰渡、時服三拜領之、廣蓋ニ而引

〔寺社刑集 寺社〕可睡齋配下出奔跡者、可睡齋ゟ申付候事、

寶暦九卯八月廿九日、右京大夫殿江直渡、同十月三日御同人御承知之趣被差出、

遠州可睡齋と、甲州南明寺錄役相障候出入一件之內、出奔寺之後住申付方之儀ニ付、奉伺候書付

書面伺之通、可申達旨被仰聞、承知仕候、

卯十月三日

鳥居伊賀守

寺社奉行

遠州可睡齋と、甲州小林村南明寺錄役相障候出入吟味一件之內、南明寺末遠州小杉村則心寺、去ル亥年十一月出奔仕候處、可睡齋配下、駿遠三三ヶ國、幷豆州修善寺門派之儀者、前々ゟ奉行所谷出奔等ニ而無住ニ成候寺之分者、上リ寺ニ申付、錄所ゟ後住申付來候ニ付、右則心寺後住錄所ゟ不申付候而者、配下之仕來相立不申段、可睡齋申之候處、關三ヶ寺配下ニ而者、奉行所谷ニ而無住ニ成候寺者、錄所ゟ後住申付候得共、出奔跡者、本寺ゟ後住申付候間、則心寺後住者、本寺職を以、南明寺ゟ申付度旨申之候ニ付、仕來之儀、吟味仕候處、出奔寺跡住職申付方之儀、關三ヶ寺相尋候處、三ヶ寺配下ニ而者、出奔跡之後住、通例本寺ゟ申付來候由ニ而、例書差出候得共、本寺末寺とも三ヶ寺配下限り之例ニ而、可睡齋配下ニ本寺有之寺三ヶ寺配下ニ而、出奔之節、可睡齋配下之本寺ゟ後住申付候例者、今小野可睡齋配下ニ本寺有之寺三ヶ寺配下ニ而出奔之節、其本寺江不相違、後住相極候例も有之、寺例等ニ而ハ本寺申付ニ不限、關基存寄門檀納得之上、本寺江不相違、後住極候儀も有之、出奔跡限り、本寺江後住申付候定例ニも無御座候間、可睡齋配下之儀者、如何樣ニ相成候とも、三ヶ寺ニおゐて差障の筋無御座候段申之候、

可睡齋配下ニ而出奔跡、錄所ゟ後住申付候例書差出候得共、本寺末寺とも配下限り之例ニ而、關三ヶ寺配下ニ本寺有之寺出奔之節、可睡齋ゟ後住申付候例ハ相知不申、可睡齋配下ニ而出奔之寺を關三ヶ寺配下之本寺ゟ後住申付候例も無御座、關三ヶ寺配下ニ而も、出奔跡、通例本寺ゟ後

住申付來候迄ニ而、寺例等ニ而ハ區々いたし來、可睡齋配下ハ上り寺ニ申付、錄所ゟ後住申付來候得共、右則心寺出奔跡、可睡齋方より後住申付候而も、南明寺本寺職ニ相障候筋ハ無御座候、曹洞宗一派之內、關三ヶ寺配下之可睡齋配下と、一事兩樣之仕來御座候得共、雙方錄役致來之儀ニ而、出奔跡之後住關三ヶ寺配下ハ、本寺ゟ申付、可睡齋配下者、錄所ゟ申付來候儀、相障候筋無御座候間、右則心寺後住者、可睡齋配下仕來之通、錄所ゟ申付候樣可申渡哉、此度之裁件ニ而、以後錄役之取計之格ニも罷成候儀ニ付、此段奉伺候、

八月

名勝所在堂塔

秋葉寺

秋葉寺ハ、遠江國周智郡秋葉山ニ在リ、創建詳ナラズ、宗派ハ曹洞宗ニシテ、可睡齋ニ隷屬ス、

〔和漢三才圖會 六十九 遠江〕秋葉寺　在秋葉山　禪宗　寺領二十石餘

本尊　觀音　鎭守　三尺坊大天狗

麓有人家、名乾村、有末寺、號瑞雲院、自此登五十町、山風景最佳、每群集、特八九月晝夜數千人不絕、就中鎭守之靈驗異他、

〔掛川誌稿 九 周智郡〕大登山秋葉寺、曹洞、可睡齋末、久野村 秋葉山ノ嶺ニアリ、御朱印二十六石、外ニ十九石一斗二合ノ除地アリ、古ハ法相宗也、後曹洞宗トナリ、士峯宗山和尙ヲ開山トシテ、可睡齋ニ隷ス、七世中興任宗和尙ノ時、安永七年八月、勅願所トナリ、任宗ノ後、任讓紫衣ヲ許サル、正五九月、御祈禱ヲ勤メ、京都ヘ御撫物ヲ獻ズ、又江戶、及九條殿ヘモ御札ヲ獻ズ、

銅鳥居、從麓ヨリ、二町目、正德四年甲午、六月朔辛未日、江州彥根城主建、額金明嶺、裏額金光明大法輪、三十町目、額最勝、面山筆、四十六町目、寬政十年、

寺格

自甲州一街道、額護國嶺、任環筆、奥院口額萬歲峯、筆者同上、裏口嶺ヨリ二十町下ニアリ、額金樹林、同上、○中略

觀音銅像長一丈餘、二王門ノ外ニアリ、

一切經藏、同所ニアリ、

二王門額大登山、裏額秋葉寺、月舟筆、

方丈、觀音堂ノ左ニアリテ續ク、此寺大刹ナレドモ、方丈ノ外子院無シ、○中略

文化七年正月十日、夜出火シテ、本社、本堂、方丈、庫裏、不殘燒失ス、同十一年、觀音堂新建、九月入佛、文政二年、本社造畢、九月二十四日遷宮也、

什物

一東照宮御判物

遠州犬居秋葉寺之事、右別當職並諸勸進等、如前々令領掌畢、但此判形者、天野宮内右衞門尉任納德出置上、諸事永不可有相違者也、仍如件、

永祿拾貳己巳年八月七日、秋葉寺別當光播、御名、

〔寺鑑下宗洞家〕大登山　遠州秋葉寺

右住職、可睦齋々申付ル、　入院御禮、御白書院、御次一同名披露、　御暇無之　年頭御禮無之、獻上

一一京
一一本

御朱印　高貳拾石

〔秋葉寺書上〕後桃園帝御綸旨寫

秋葉權現者、當山出現所、無比類也、因以御崇信異于他、永爲勅願所、宜奉祈天下安全寶祚悠久者、天氣如此、悉之以狀、

安永七年戊戌八月廿九日　右中辨篤

秋葉寺住持任梁和尚禪室

〔秋葉寺書上〕遠州秋葉寺

勅願所之事、他家執奏可爲是迄之通旨被仰出、然上者、勅願一式參內等之儀、永々當家執奏、彌不可有相違之狀、可被存其旨者也、

安永十年丑二月廿六日　油小路殿家

秋葉寺任梁御房

寺領

〔秋葉寺書上〕大猷院樣〇德川家光御朱印寫

當寺領遠江國周智郡犬居村之內貳拾六石事、任先規令寄附之訖、全可收納並寺中山林竹木等如有來、彌不可有相違者也、仍如件、

寛永十九年六月十八日　朱印

寺制

〔秋葉寺書上〕制札

霜月廿一日ヨリ同廿八日迄、秋葉御遷供法事之內、參詣甲乙人喧嘩口論並押狼藉之儀、堅可令停止、若於有違背之族者、交名次第可申付者也、仍如件、

慶長十四酉年十一月十三日　伊奈備前守忠次花押

秋葉寺

雜載

〔秋葉寺書上〕遠州秋葉山大權現之儀者、有栖川宮多年御信仰被爲在候付、今般濱松宿遙拜所鳥居、幷御染筆御額面御寄附被成候、就テ者、風雨破損之憂モ有之候間、秋葉寺ニ有之古銅ヲ以、薄覆ニ致、永久相保候樣被成度思召候、依而領主井上河內守殿江御達被成置度候、此段武邊エ宜敷御通達御座候樣被成度候、以上、

安政五午年十月　有栖川宮御內　藤木近江守

兩傳奏

廣橋前大納言殿

万里小路前大納言殿

雜掌御中

名稱所在　堂塔　寺格

古事類苑

宗教部五十八

佛教五十八

本覺寺

本覺寺ハ、駿河國有渡郡池田ニ在リ、僧日蓮ノ弟子日位ノ創建スル所ナリ、

〔和漢三才圖會 駿河 六十九〕青龍山本覺寺 在池田 同〇法華 寺領

開基 日位上人 中老僧、文保二年四月廿三日寂、

〔駿河志料 有渡郡 二十二〕青龍山本覺寺 日蓮宗一本本寺

御朱印地 高前ニ記ス

開山日位上人 文保二年戊午四月廿三日寂

當寺ハ日蓮ノ弟子、中老僧ノ内ナル日位ノ創建ニシテ、一本々寺ナレド、舊記古書モナク、古ヘノ事ハ更ニ知ラレズ、中頃廢セシナラント、寺僧云ヘリ、

本堂 位牌堂 祖師堂 本佛堂 此本尊ハ、古ヘ高松ノ海中ヨリ引上シト云、 番神堂 鐘樓 總門

坊中 四字

金毘羅社 近世祭レルナラン 辨財天社

岡部丹波守孕石主水古墳 本堂ノ後山ニアリ

〔寺社分限記 日蓮宗 五〕開山治部房日位 清涼山 駿州池田 本覺寺 色。衣。

聖人寺、中老十八人之内、

寺領　名勝所在　沿革堂塔

（駿河志料二十二有渡郡）池田〇中略

御朱印高六石三斗八升八合　本覺寺領

蓮永寺

蓮永寺ハ駿河國有渡郡杳谷村ニ在リ、日蓮宗身延派ニ屬ス初メ弘安年中、同國庵原郡松野ノ邑主、堂宇ヲ創建シ、僧日蓮ノ弟子日持ヲ以テ開山トス、後世松野ノ地、屢〻戰亂ヲ經テ堂塔亦荒涼ヲ極ム、元和年間、德川賴宣ノ母、其地狹隘ナルヲ以テ、寺ヲ現今ノ地ニ移シ、日乾ヲ以テ中興ノ祖ト爲ス、

（和漢三才圖會六十九駿河）貞松山蓮永寺　在松野　法華　寺領

開基　日持上人　六老僧中

（本化別頭佛祖統紀十世家）貞松蓮永寺開山日持尊者世家

尊者諱日持、呼蓮華阿闍梨、駿州庵原郡松野邑人也、未詳姓氏、〇中略弘安五年壬午、高祖唱般涅槃、命師滅後唱導師第六位、六尊輪次直于身延、師之所構子院、扁呼本應院、（土人呼庵之所）松野邑主依止于高祖、稱薙髮弟子、六年癸未、構一梵宇、莊嚴報地、請師爲開山祖、〇中略師之門人、有日數、日皿、日達、日信上足、繼闡克家云、松野之地也、中古屢爲戰場、梵宇亦就荒涼、元和四年戊午、大檀越紀陽侯萱堂養珠夫人、大振恢復之力、易地於有度郡杳谷、爲大雄刹、今之貞松山蓮永寺是也、

（艸山集六傳）蓮永寺日乾傳

初元和三年春、師之能勢、相攸卜居、郡主深欽師德、爲捨基址、師誅茅而居、扁曰覺樹庵、六年、紀陽侯母氏養珠院、移駿州松野精舍、而營于有度郡杳谷、此寺日持上人之舊院也、厥地狹隘不足、改爲、由是有

斯擧焉、於是大作營構、廣附山林、而招師爲中興祖、謂之蓮永寺、繼令日遠補處、九年、師辭松山、遁能勢、寛永四年、師於洛北鷹峯自構一庵、名常照寺、後成講聚之、(常照寺記云、元和中、開基在先、至此寺方成耳、)十二年冬十月十四、示微恙、二十七日、寂于本滿寺、年七十六、坐夏未詳、師儀貌巍然如巖山臨乎海、視者不覺而伏、演說座久、身首不傾、音聲不變、詞去卑俗、語無重複、君子以爲唱導之標式、

〔駿國雜志〕(佛四十七)有渡郡

蓮永寺　有渡郡沓谷村に有り、貞松山と號す、法花、境内十町四方程、中興開山日乾上人、(日蓮弟子日持上人)(開基)傳云、台德院殿(○德川秀忠)大樹より御朱印寺領十五石、寛永十一年、安藤彌兵衛某門前制札一枚、本尊釋迦如來、當寺は舊庵原郡南松野村永精寺を、紀州御母公於万の方の願に依て、元和四年、清水御濱御殿、幷御門拜領して爰に移建られ則養珠院殿於万の方の位牌を安置せらる、件の殿門、安永三午年正月廿日燒失す、駿河國志云、當寺往古は當所より九里北松野と云所に有り、紀伊賴宣卿御母堂於滿の方、後に養珠院と云し人、此寺を此所へ引遷し玉ふ、寺領百石寄附せられ繁昌せしかども、紀州へ御國替の後、寺領もなく山林計りにて本寺とは云ながら幽なる體也、東照宮御他界後、御座の間を其儘引移したり、七間八間にて、張付泥引墨繪にして、御上段をばさけて十疊敷なり、御床違棚など昔の儘にて、御位牌を建置、御枕屏風表裏金彩色小屏風有り、其外雪舟押繪の屏風、縫人の金屏風、直に此寺へ下されたり、方丈は大久保相模守忠隣、三枚橋の城の御殿を引れたりとて、茅葺の大なる堂也、番神堂も有りしが、近頃の回祿に堂塔什物悉く燒失せりと云々、當寺由緒書云、當寺は元來同國庵原郡松野村に有之候、日蓮上人身延山に引入候砌草創仕、則上足六人の內、日持上人と申開基にて、宗門六かの本寺に御座候、然る處元和元年東照宮樣駿府に被爲成、御座候節紀州樣御母堂御万の方樣後に御法號は養珠院樣と奉稱候、則東照宮樣へ御願被遊、只今の地所へ御引被下置、同國清水に有之御殿、幷御門拜領被爲仰付候、其後元和二年東照宮

樣被ㇾ爲ㇾ遊ㇾ御他界ㇾ御間の鋪御殿と奉ㇾ稱候御殿を、元和四年、御三回御忌の節、爲ㇾ御菩提、依ㇾ台德院樣尊命、拜領被ㇾ爲ㇾ仰付、御上段に御枕屛風を以、御圍御尊牌御安置被ㇾ下置候、右御殿は安永三年、隣寺失火の時類燒仕候、其後御願奉ㇾ申上候、金子拜領被ㇾ仰付、御靈屋補理、御尊牌奉ㇾ安置候、凡境內は拾町四方と申傳候、多分山にて田畑拾五石の國役相勤候、門前百姓貳十五軒御坐候、右境內は、台德院樣御代より御朱印頂戴仕候云々、

〔天明集成絲綸錄三十〕安永六酉年九月

御勘定奉行江

駿州貞松　蓮永寺

右權現樣御位牌御安置之御間、其外共、去ル午年類燒ニ付、御位牌御安置之御場所御建立之儀相願候得共、是迄御修復所(異)申にも無ㇾ之ニ付、不ㇾ被ㇾ及ㇾ御沙汰ㇾ候、併再建難ㇾ及ㇾ自力、此度は類燒ニ而、當時御位牌奉ㇾ移候御假屋(廣)至而麁末之由ニ付、格別之譯を以、銀三十枚被ㇾ下候、御位牌御安置之場所、如何樣にも手輕取繕可ㇾ申候、以後御修復等之儀は、御構無ㇾ之候、其段可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、尤御勘定奉行可ㇾ被ㇾ談候、

右之通、寺社奉行江申渡候間、可ㇾ被ㇾ談候、

九月

〔寺格帳下日蓮宗身延派〕御朱印境內

駿州貞松　蓮永寺

右貳ヶ寺〇妙光、蓮永、住職、寺中并末頭評議之上相定ル、

一住職御禮無ㇾ之

一年頭御禮、御白書院御次一同、獻上壹束壹本宛、御暇無ㇾ之、

〔寺社分限記五日蓮宗〕開山日持　直末寺　貞松山

駿州貞松　蓮永寺　色〇日　衣〇開

寺格

寺領

代々聖人寺

〔寛文四年御朱印帳日蓮宗受不施〕境内竹木諸役等免除　駿河寛永二年九月六日　吉谷　蓮永寺

名稱所在

創建沿革

清見寺

清見寺ハ、駿河國庵原郡興津ニ在リ、創建詳ナラズ、臨濟宗ニ屬シ、關東十刹ノ一タリ、

〔攝壤集上寺院〕十刹京師井諸國及甲刹〇中略　駿河　清見寺

〔國花萬葉記八駿河〕清見寺　禪宗　沖津ニ立　巨鰲山ト號ス

〔駿國雜志四十七佛閣〕清見寺　庵原郡興津驛に有り、巨鰲山興國禪寺と號す、濟家鎌倉十刹の内、大猷院大樹御朱印、寺領二百二石五斗餘、本尊寶冠釋迦如來、傳教大師作、傳云、准開山太原禪師也、當寺天正年中兵火に燒失、後東照宮黄金井材木を給り再建す云云、駿河巡云、開山關智云云、亦云山の麓に羅漢堂有り、清見寺の末也、近頃境内に石像の五百羅漢迄造立せり云云、寺記云、巨鰲山清見興國禪寺　創建不識何世何年矣、上古有長者淨建者、擲此爲淨建寺云、蓋長者居横沙此山之間乎、門廡堂奥之名、往々存田疇籬也、口堂山家奥、皆民間傳云爾、其事蓋多屬觀音傳之、其觀音大士、于今在茂畑者是也、

當寺開山初祖關聖和尚、從古無記傳、其宗派嗣承、口寂年號杳而無考焉、但有世々相傳之話而已、而後改清見、不識何年代何宗派、

清見　地名也、以關稱之、蓋天武皇帝、始都於大和州清見原、故稱清見原天皇、時將有巡狩、構關此海堧斷、以名清見關也、武具、茶器、板扉等存之、

清建　雲谷禪師、入二明國一在二天童一寫二富士清光三穗之景一、鐵冠道人、作レ詩讃レ之、有二名刹雲連清建古、虛堂座遠老禪棲之一聯一、又有二圓覺開山佛光國師、過二清見寺一之偈一、五百年前已爾、其以前不レ識二幾百年一、

十刹　征夷大將軍尊氏公、中二興此山一、而處二關東十刹之一一、同門之疏存二于今一也、

國初以來、屬二京師妙心寺一、

駿州　清見寺

寺格　寺領

〔寺格帳 下 濟家關山派〕御朱印高貳百貳石五斗餘

右四ヶ寺、○清見寺、三河天恩寺、駿河臨濟寺、遠江平田寺、住職弟子讓リ、

一入院御禮無レ之

一年頭御禮、御白書院御次一同、獻二上一束一本宛一、御暇無レ之、

〔和漢禪刹次第〕十刹位次　此位次者、康曆至二永享年中一也、太方五山位也、○中略

清見寺　巨鼇山開山關聖上人○下略

〔清見寺文書〕所付之覺

持地分

一高三拾四石八斗貳升七合　門前

一高百九石三斗六升九合　年源寺

合百四拾四石壹斗九升六合

右之分、可レ有二寺納一之旨、被二仰出一候、以上、

慶長四己亥年九月拾六日　横田內膳正　村詮花押

清見寺

寺制

〔清見寺文書〕禁制　清見寺

一當年軍勢甲乙人等、亂妨狼藉事、

一寺中門前放火之事

一山林竹木伐採事
右條々、堅令停止訖、若此旨於違犯之輩者、速可處嚴科者也、仍如件、
天正十年三月三日　本多庄左衞門尉

〔淸見寺文書〕定寺家法度
一山林者、一切許容被成間敷事、
一門前寺領之內、奉公人壹人茂被置間敷候、殊門前寺領之者、兄弟雖爲子共、奉公與號し被出、又ハ他所へ移居之儀、堅令停止候事、
一寺領所務諸役等之儀、諸事可爲總國次事、
右條々、於違背之族者、急度自此方可申付候者也、
慶長貳酉　正月廿三日　横田內膳正　村詮花押
淸見寺納所禪師

〔宗長手記〕此淸見寺寺中に山ノ上瀧アリ瑞雲庵、塔より上に有、杖にて腰をかゝへさせ、まかりあがりて、日暮し輿に乘す、○中略此寺回祿の後は、高氏將軍等持院殿御影堂開山也關國さへ、塵のかたはらに御座ますを拜して、深く悲涙して、
淸見潟關のあらがきよる浪を昔にかへす國ぞさかへん

法照寺

法照寺ハ駿河國富士郡ニ在リ、淸和天皇貞觀五年、定額寺ト爲ル、今廢寺ニシテ其所在ヲ失ス、

名稱所在　〔駿河國新風土記提要四〕此國ノ定額ノ寺ハ、富士郡法照寺ト、三代實錄ニ出タレド、今ハイヅコトモ知レガタシ、

寺格　〔三代實錄清和七〕貞觀五年六月二日癸巳、以駿河國富士郡法照寺、預之定額、

大石寺

大石寺ハ、駿河國富士郡上條村ニ在リ、僧日興ノ開基ニシテ、日蓮宗本成寺派ノ一本寺ナリシガ、今ハ同宗富士派ノ總本山タリ、

名稱所在　〔和漢三才圖會駿河六十九〕大石寺　在富士麓上野法華寺領六十六石

開基　日興上人六老僧中、元弘二年二月七日入寂、　高祖日蓮什物多有之

寺格寺領　〔駿國雜志佛閣四十七〕大石寺　富士郡上野村に有り、富士山と號す、法花、御朱印寺領六十石、

〔寺鑑日蓮宗本成寺派下〕　一本寺　駿州上條村　大石寺

御朱印　高六拾六石八斗五升餘〇中略

獻上一東一本　右貳ヶ寺〇大石寺、西山本門寺、住職、學功宜僧、衆評之上相定ル、　住職御禮無之

年頭御禮御白書院御次一同、御暇無之、

寺制　〔大石寺文書〕駿河國富士郡うへ野の鄉之内大石寺門前ゑよやくならびにむねべちとうの事、

右先年當山めんきよのはんぎようをなしをかるゝところに、他所にあづけゑつきやくと云々、ゑさい長池九郎左衞門尉親能ゑよ狀まぎれなきゆへ、御きめとして申つけらるゝ間、せんれいにまかせて、もんせんむねべち、かこふゑんざいもくとうをもたする人足、諸てんやく、めんきよをはんぬ、竹木をきりとり、或はせつ生、或はらうぜきいらんのやからあらば、はやくちうしんの

雜載

うへ、きうめいあるべき者也、仍如件、

享祿貳年三月十九日　　氏輝 條○北

大石寺

〔大石寺文書〕駿河國富士郡上野郷大石寺諸役免許之事

一門前之內、棟別拾壹間、雖然於他所役仕來者引越事可停止之、并四分一押立等、號當座屋事、縱自餘之不入者、雖有一色屋之儀、彼寺之事者、爲無緣所之間、永免除之事、

一於諸給主山、薪秣并萱葺等、如前々篠顯敷、津料停止諸役、可苅取事、

一寺家坊中屋敷事、任先例不可有地頭代官綺事、

一號竹木所望、濫栽取事、縱雖爲急用、爲新寄進之上者、一切不可代取事、

一諸勸進者、不可入之事、

右條々、任林際寺殿、天澤寺殿判形之旨、領掌之間、永不可有相違、若於有違背之輩者、糺明之上、重而可加下知、爲無緣所之間、所々停止諸役也、守此旨不可有修勤怠慢之狀如件、

永祿參庚申年八月十七日　　氏眞花押

〔大石寺文書〕定

寺中之規矩并法度以下、如今河義元同氏眞時、自今已後聊不可有相違候、畢竟寺家修造、佛法之興隆、不可有怠慢者也、仍如件、

天正二甲戌年九月十二日　　勝賴花押

大石寺

〔妙本寺文書三〕(端書)到慶安二六十二

富士上方上野郷內大石寺事、御書之趣、與津美作入道中候處、無子細渡村中納言阿闍梨實○日候、以

此旨可有御披露候、恐惶謹言、

五月廿八日　　宮内少輔泰範花押

進上　齋藤入道殿

（端書）妙本寺○安房國ヨリ大石寺ヲ掛持致シ候證文

中納言律師日賢申候、富士上方上野郷内大石寺東御堂次坊敷事、先立度々進狀仕候處、不事行之由歎申候、所詮達々令申候へども、無承引候間、如此候、雖無面目次第候、重令申候、理運候上者、早々被渡付日賢候て、別儀可爲御志候、尙々無子細者、可令悅喜候、諸事期後信候、恐々謹言、

十二月十四日　　泰範花押

奥津美作守殿

〔妙法寺記上〕永正八年此年十月廿四日、未刻ニ當テ、富士大石寺ノ御堂、自火ニテ皆燒失、前三日ノ間、天井ヨリ血ナガレテ燒ト云々、不思義ノ奇瑞也、

本門寺

本門寺ハ、駿河國富士郡西山村ニ在リ、僧日興ノ開基ニシテ、日代ノ門下ヲ以テ住持トス、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔和漢三才圖會六十九駿河〕本門寺　在同○富士郡西山　同○法華　寺領二十石

開基　日代上人、明德五年四月十八日入寂、

〔寺鑑下日蓮宗本成寺派〕御朱印　高貳拾壹石六斗餘　一本寺　同州（駿河）西山　本門寺

右貳ケ寺○大石寺、本門寺住職、學功宜僧、衆評之上相定ル、　住職御禮無之、

名勝所在　寺格寺領

年頭御禮、御白書院御次一同、御暇無之、　獻上一本東一

〔社寺取調類纂百九十六〕日蓮法華宗勝劣派

一本山　同藩(靜岡藩)管轄所　同國(駿河國)同郡(富士郡)西山　本門寺

同斷○一、緋色衣着用、寺格其外共、別段無御座候、

〔本門寺文書〕定

一駿州富士郡之内本門寺之儀、任于開山日興之血脈、自今以後、彌日代門下ニ佛法不可有怠慢之事、

一門前之家拾間之分、諸役令免許之事、

付除總國一統之城普請共、

一於于寺中殺生禁制之事

一寺家修造之時、鍛冶番匠等之大工職、一切不可被相定之事、

一於山林切剪取竹木儀、堅可被相禁之事、

以上

右條々、向後聊不可有相違者也、仍如件、

天正元年癸酉十二月廿六日　勝頼花押

富士郡本門寺

〔本門寺文書〕定

門前家拾間之分、以御直判、郷並之諸役、除總國一統之御城普請、御免許之處、毎度加催促之由沙汰之限候、向後一切被成御赦免之趣、被仰出者也、仍如件、

天正四年丙子七月朔日　秋山總九郎奉之

富士郡
本門寺

〔諸寺文書纂十〕富士山　西山本門寺由緒

一本門寺額　大日本國富士山本門寺根源　日蓮在判　日興授與之

一內證外用二ヶ相承　其ノ文ニ云

日蓮一期弘法、白蓮阿闍梨日興付囑之、可爲本門弘通大導師也、國主被立此法者、富士山本門寺戒壇可被建立也、可待時而已、事戒法謂是也、就中我門弟等可守此狀也、

弘安五年壬午九月日　日蓮在判

血脈次第　日蓮日興

釋尊五十年說法相承、白蓮阿闍梨日興可爲身延山久遠寺別當、背此旨在家出家共輩者、可爲非法衆也、

弘安五年壬午十月十三日　日蓮在判

武州池上

〔本門寺文書〕補任駿河國富士重須法花堂幷坊地等事　日代上人所

右於彼法花堂幷坊地等者、任日興上人遺跡、日代所令補任也、有限御祈禱、至于寺役者守先例可令勤行之狀如件、

應安元年十一月十三日　兵部大輔花押

本門寺

名稱所在

本門寺ハ、駿河國富士郡北山村ニ在リ、僧日興ノ隱居寺ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔和漢三才圖會駿河六十九〕本門寺　在同所○富士麓北山　同○法華　寺領五十石　日興上人隱居之寺

〔駿國雜志佛閣四十七〕本門寺　富士郡北山村に有り、富士山と號す、法花、御朱印寺領五十石、

〔社寺取調類纂百九十六〕日蓮法華宗勝劣派

一本山　靜岡藩管轄所　駿河國富士郡北山　本門寺

一紫衣相除、其外之色衣著用寺格等、別段無御座候、

寺格寺領

〔寺格帳日蓮宗本成寺派下〕御朱印高五拾石　一本寺　駿州北山村　本門寺

右住職、弟子之內、地中末寺相談之上相定、

一住職御禮無之、御暇無之、

一年頭御禮、御白書院御次一同、獻上壹束壹本、

久遠寺

名稱所在

久遠寺ハ、駿河國富士郡上小泉村ニ在リ、日毫ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔和漢三才圖會駿河六十九〕久遠寺　在同所○富士麓西山　同○法華　寺領五十石

開基　日毫上人、以上○大石寺、西山本門寺、北山本門寺、妙蓮寺、久遠寺、稱富士五箇寺、

〔駿國雜志佛閣四十七〕久遠寺　富士郡小泉村に有り、富士山と號す、法花、御朱印寺領四十石餘、

〔社寺取調類纂百九十六〕日蓮法華宗勝劣派

一本山　同藩(靜岡藩)管轄所　同國同郡(駿河國富士郡)上小泉村　久遠寺

同斷○一緋色衣著用寺格其外共、別段無御座候、

寺領

〔久遠寺文書〕駿河國富士上方小泉久遠寺之事、及十ヶ年大破候就可有再興寺内門前共、守護不入被申達候間、陣僧飛脚令停止畢、於自今以後、地子三十疋者任前々可有辨濟候、其外者一切諸役并竹木以下臨時之課役等、不可有之處也、仍後代之證狀如件、

天文十五丙午年九月廿五日　富士九良次郎　判アリ

久遠寺　日我上人

〔久遠寺文書〕駿河國富士上方小泉郷久遠寺之事

右寺内門前共、諸役并地頭代官、陣僧飛脚以下停止之、但地子参拾疋者如先規可令沙汰、竹木見切臨時之課役等、令免除者也、仍如件、

天文十五丙午年九月廿九日　治部大輔　在判

久遠寺　日我上人

寺職

〔妙本寺文書〕二富士門家嫡流之遺跡久遠妙本兩寺之事

右日侃住山行學三十三箇年之内、在位四箇年世出成効畢、然病氣逐日倍增之間、所令隱遁也、然則伺上代以來之規範、守日要上人之御掟、於法學兩頭之中、選信心志之仁、相續血脈、可被仰法燈職者也、仍所任衆評、證狀如件、

永祿十三庚午年十一月十五日　日侃花押

總門中　一通妙本寺置之、一通學頭坊置之、

實相寺

實相寺ハ、駿河國富士郡岩本村ニ在リ、寺傳ニ云フ、久安年間、鳥羽法皇ノ御願ニ依リテ、建立

名稱
所在
沿革

スル所ニシテ、天台ノ僧智印ヲ以テ開基トス、後、日蓮ノ弘法スルヤ、當寺ノ僧日源、歸依改宗ス、因テ日源ヲ以テ中興ノ祖トス、永祿年間、兵燹ニ罹リシガ、後之ヲ再興セリト、

〔和漢三才圖會 六十九 駿河〕岩松山實相寺　在賀島　同○法華　寺領

開基　日源上人　中老僧中

〔法華靈場緣起集 六〕駿州岩本實相寺

當寺の祖師大士○日蓮の尊像は、弘安五年十月十三日、池上にて滅に入り給ふ後、日法聖人祖影を刻み、二軀出來せり、誠に生身尊影のごとし、人々生御影とも、鏡の御影とも言傳り、高弟六老僧妙經を寫して證判をすえ、又御眞骨を此兩像の體中におさめて尊敬す、一體は身延山へ納む、一體は樋澤坊此坊は日向二祖日進安置す、一木二體といふは此謂れなり、是を當寺に移す由來は、久安年中、人王七十四代鳥羽法皇、比叡山横川智印法印に命して勅願寺として建立したまふ、此山絕頂に登れば、北は富士山、八海天子嶽、東はあたかやま、西は富士川、岩淵山、南は浮しま、伊豆の海まん〳〵として、日本不雙の山海を境内とす、岩本山の精舍を營給ふ、四拾九院五百坊御建立、境内一里四方カ時々高祖遊學の頃、當山の經藏に入給ふ子細は、三井寺智證法師入唐の刻、唐本の一切經二部渡る、一部は三井寺に納、後燒失す、一部は岩本山に納む、高祖○日蓮此經藏に入り周覽ありて宗旨建立、後鎌倉松葉谷にて弘め給ふ、正嘉年中以來、天變地妖飢饉疫病等盛んなれば、是を憐みたまひて、又又經藏へ入り、四經の文を引て、金光明經、藥師經、仁王經、大集經、立正安國論一卷錄して北條家を諫めたまふ、其時四十九院の學頭、日興、日持、日源等は改宗し御弟子となり、正嘉二年、日朗當山にて剃髮し直弟なり、四十九院餘僧等は學頭日源を惜事松野殿抄のごとく、高祖入滅の後、四十九院權徒は、日興、日源の折伏の弘通をにくめども、學力の及ぶ所はおらず、四十九院執權の僧、鎌倉に讒訴して、則ち日興日源を召て對決に及ぶ所、四十九院の僧閉口して追院のばつをかふむる、依て蒲原宿の

山中に隠たり、今此所四十九院村といふ、當山本尊藥師を產神とする、(山城國興城記)爰を以て高祖安國論記錄の靈地、日朗劇はつの靈場なり、高祖二祖は日源なり、權宗の初めより岩本山實相寺と名付る事自然の理なり、人王百七代正親町帝の御宇、永祿十一年、甲斐の信玄公子細有て深く當山を恨み、燒うしなふ、僧二十五人首を刎たり、我祖四ヶ年御在山の靈場、かつ大檀那波木井、四條、內房、松野、南條、三澤、西山、石川家、甲駿の大守、高祖の大檀那となる事は、安國論御著述の間御敎化に預り、凡人ならざるゆへなり、しかるに我山中興日恒上人(延山樋澤房第十五世)再營の大願を起し、高祖に受護を祈る、ある夜の夢に、高祖告て曰、汝じ岩本山を再興せんと欲せば、我眞影を岩本山に移すべしと、日恒大願滿足と歡び、樋澤坊は弟子日筌にゆずりて、尊像を荷負して實相寺に來り居率り、晝夜誦經の聲に、貴賤男女參詣群集し、感應日々にあらたなれば、佛閣房舍年を經ずして成就す、四十九百五院房一時に營がたく、日興日持の舊跡二院を作り、五百房の跡として五房を建、(今坊)(跡追年成就)此尊像を本堂に安置して、靈應を感ずる人、かぞふるにいとまあらず、

寺格

〔寺社分限記(五日蓮宗)〕開山日源　駿州岩本　實相寺(色衣)

聖人寺、中老十八人之內、是は富士根方之用人寺、身延之末寺也、近年本寺(興)違背也、

寺領

〔實相寺文書〕定

如前々寺家可有建立候、然者寺產參百緡之所、不可有御相違候者也、仍如件、

元龜三年壬申 四月晦日　朱印○(武田信玄)　原隼人佑(奉之)

追而右之寺領、他へ至于御棄約者、被渡替地之上、參貫五百文之分、可有所務候也、

岩本之 實相寺

〔寛文四年御朱印帳(日蓮宗受不施)〕六石一斗餘　(駿河)寛永十八年六月廿八日　實相寺

寺制	寺職	名稱所在	寺領寺制寺職

（實相寺文書）高札　實相寺

甲州之軍勢、於于當寺家、不可亂妨狼藉、若背此制止者、可被行罪科者也、仍如件、

永祿十一年戊辰十二月十日　土屋奉之

（實相寺文書）駿河國岩本鄕內實相寺々務職事

右法東侍者禪師、爲□職、任先例可令管領之狀、國宜如件、

建□五年六月廿七日　花押

妙蓮寺

妙蓮寺ハ、駿河國富士郡下條村ニ在リ、日華ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺ナリ、

（駿國雜志四十七佛閣）妙蓮寺　富士郡西山村下條に有り、富士山と號す、法花、御朱印寺領五十石、

（和漢三才圖會六十九駿河）妙蓮寺　在同所（○富士西山）　同（○法華）　寺領三十石

開基　日華上人

（社寺取調類纂百九十六）日蓮法華宗勝劣派

一本山　同藩（靜岡藩）管轄所　同國同郡（駿河國富士郡）上野下條村　妙蓮寺

同斷（○一、緋色衣着用、寺格外共、別段無御座候、）

（妙蓮寺文書）上野鄕堀內妙蓮寺住持職之事

右任先判之旨、領掌畢、但彼地本年貢、幷兩度之增分、合八貫參百七十六文之所也、此內壹貫六百文者、永代令寄進候、其外者可有納所候、寺役等之事者、如先規可被勤之者也、仍而如件、

永祿參年四月十九日　淸房花押

妙蓮寺

猿千代丸殿

高札　朱印○武田信玄　上野鄉

當手甲乙軍勢於于彼鄉中不可致亂妨狼藉、若背此御制止者、可被行罪科者也、仍如件、

永祿十二年七月五日

定

一寺家并門前之家拾間棟別錢、御普請役御免許之事

一於于寺内山林、切截執竹木、濫妨狼藉御禁制之事、

一縱自舊規雖令寺中之大工職勤仕、寺家造營之細工令疎略者、以自餘之番匠可被修造之事、

右之條々被任先例之旨、自今以後も聊不可有御相違候、畢竟寺中之修補、朝暮之勤行、不可有怠慢之由被仰出者也、仍如件、

天正四年丙子卯月十二日　朱印○武田信玄　跡部大炊助奉之

妙蓮寺

定

上野之内、累年御拘之田畠羅六貫四百文新增分之事、向後縱雖鄉中へ申付、爲新寺產令寄附之上者、聊不可及違亂者也、仍如件、

天正七己卯年二月十七日　勝資花押

妙蓮寺

〔妙蓮寺文書〕從舊規御抱之各職、如先判形御朱印之儀申請進上者、自今以後之儀も、壹貫八百六拾五文新增之事者、任先判形御免許候、爲其我等手形指添進者也、仍如件、

天正拾二甲申年三月二日　井出甚助正次花押

寺格 寺領	名稱 所在

妙蓮寺　身延山

〔妙蓮寺文書〕

一不ㇾ帶二本山之許狀一弘通者、談義停止事、

一於ㇾ有二弘通說法之志一者、請二本山一可ㇾ申二請許文一事、

一依二時代一隨二依處一折伏之法門、可ㇾ有二用捨通風一偏謹愼肝心事、

一縱雖二折伏一唯專二經釋之文義一不ㇾ可ㇾ致二惡口雜言一事、

一欲ㇾ請二談義許一之時、不ㇾ撰二其人之器量行儀一志而、不ㇾ可ㇾ被二卒爾申一達本山一事、

右條目於二違背之輩一者、可ㇾ追二放門流一者也、

慶長十五庚戌黃鐘吉辰　印

江尻 妙蓮寺

光長寺

光長寺ハ、駿河國駿東郡岡宮村ニ在リ、僧日法ノ開基ニシテ、日蓮宗八品派ノ總本山タリ、

〔和漢三才圖會 六十九 駿河〕光長寺 在二岡宮一 同○法華 寺領二十五石

開基　日法上人、中老僧之中、曆應四年正月五日寂、

〔全國各宗本山明細帳〕日蓮宗　大本山本寺

光長寺　駿河國駿東郡岡之宮村

〔寺格帳 日蓮宗本成寺派 下〕御朱印 高貳拾五石　駿州岡宮村 光長寺

右住職、學功宜僧、衆評之上相定ル、

一住職御禮無之
一年頭御禮、御白書院、御次一同、獻上壹束一本、御暇無之、
〔光長寺文書〕新光院之時、合力被申分、於上石田五貫文、長久保之內寺家地子錢之外千疋進之內、於小田原家中積之時、有半濟五貫文ニ定之、然而於一所有御所務度之由承候、於長久保千疋進置之畢、每年自百姓前直ニ可有御請取、地子を加、拾貳貫文也、百姓前別紙ニ書立之、以印判渡進之、地下役之儀者、可爲代官百姓之間、條不可有御存知者也、仍如件、

天文十一壬寅七月十日　　氏元今川花押○

光長寺參

名稱
所在
御建
寺格

三神寺

大興寺

三神寺　併入

大興寺ハ、伊豆國ニ在リ、丈部富賀滿ノ建立スル所ニシテ、文德天皇齊衡二年、定額寺ト爲ス、三神寺モ亦伊豆國ニ在リ、延喜ノ制、出擧稻二千束ヲ給ス、今並ニ廢寺ニシテ其所在ヲ失ス、

〔類聚國史佛道百八十〕齊衡二年九月甲戌、以伊豆國大興寺、預於定額、爲海印寺別院、大興寺者、孝子丈部富賀滿、爲國家所建也、

○

〔延喜式主稅二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻○中略
伊豆國○中略　三神寺料二千束

名稱
所在

創建
沿革

修禪寺

修禪寺ハ、伊豆國田方郡修禪寺村ニ在リ、僧空海ノ創建ト稱ス、曹洞宗に屬シ、遠江國可睡齋ニ隷セリ、

〔和漢三才圖會 六十七伊豆〕桂谷山修善寺　在修善寺村　洞家　寺領三十石

高隣法師建立、弘法大師之弟子 中古爲禪宗、

〔增訂豆州志稿 十上〕肖廬山修禪寺 修善寺村　增、曹洞宗、遠州榛原郡坂口石雲院末、本尊聖觀世音、

增、或ハ修善寺ニ作ル、元福地山修禪萬安禪寺ト號ス、弘法大師創建ス、本朝高僧傳ニ曰、釋果隣不審何所人、聞弘法大師道鳴海內、時往隨仕、々往豆州走湯縣、建修禪寺、爲第一代、國內士庶信嚮如歸、接、走湯縣、當作田方縣或走湯山、州無走湯縣、增、和漢三才圖會曰、弘法大師弟子高隣建立ト、伊豆鏡等同之、元亨釋書曰、空海在豆州桂谷山寺、以指向空、寫大般若經ト、寺ヲ創ムル事ヲ言ハズ、亦疎也、瓜生野大城氏ニ、金剛力士腹內ノ小像二軀ヲ藏ム、修善寺ノ故物也、其背記ニ曰、修善寺者、是弘法大師建立之地、大師自下手、以楠彫刻丈六金剛力士、施靈威佛如生身云々、于時院主法眼和尙位快廉、花押 天福二年正月云々ト、請遠江法橋運覺賜伊口慶覺、以彼二王朽像木、造五寸二王畢ト、此記文多ク漫滅シテ、屬讀シ難シ、大意弘法ノ造レル二王ハ、既ニ朽腐スルヲ以テ、新ニ兩像ヲ作リ、二子ノ刻スル五寸ノ小像ヲ、其腹內ニ藏メシ也、丈六二王ノ像ハ首ノミ遺リテ、寺ニ存ス、是記ニ據レバ、修善寺ハ、弘法ノ開山タル可證知也、增、寺記曰、弘法大師十八歲ノ時、來リテ惡魔降伏ノ法ヲ修ス、後大同二年再來リテ佛像數軀及自像ヲ刻ミ安置スト、其後建長中、僧蘭溪 卽鎌倉建長寺開山大覺禪師也 來住シ、臨濟宗ニ改ム、建治中、鎌倉建長寺ノ派下トナル、蘭溪宋國ノ人也、此地揚洲廬山ニ髣髴スルヲ以テ、更ニ肖廬山ト號ス、當時宋理宗額ヲ贈テ曰ク、大宗勅賜大東福地肖廬山修禪寺ト、槃涉餘錄、其他ニ見ユ、此古額、文久三年燒失ス、尋テ正安中、僧寧一山來住ス、一山ハ元ノ人、平貞時當國ニ放流スル所也、濟北集曰、一寧在修禪寺ト、一山ノ事、船田歸一寺ノ條、井法寓ノ部ニ記ス、小田原北條氏隆溪禪師 增、禪師當國北條ノ人、遠州石雲院宗芝ノ法

嗣也、其傳燈錄ニ在リ、俗英ノ部參觀、ト俗縁アルヲ以テ、修禪寺ヲ重修シ、禪師ヲ住セシム、此時ヨリ、曹洞宗トナリ、遠州可睡齋ニ隷ス、增、時ニ延德中也、爾來北條氏歷世寺領ヲ附ス、德川家康先例ニ從ヒ、三十石ノ朱印ヲ賜ヒ、世襲セシム、昔ハ巨刹ニシテ、八塔司アリキ、正覺院、增、次ニ記ス、東陽院、增、今廢ス、信功院、增、今廢ス、其趾日枝神社ノ下ニ在リ、傳云、源範賴茲ニ幽セラルト、今尙存ス、松竹院、日窟寺、梅林院、半經寺、放光院皆廢ス、古ハ修善寺佛殿バカリニテ、東陽院其事ヲ執行フ、總門ハ十町許東横瀨ニ、大門ノ地名存ス、今佛殿、香積厨、開山堂、僧堂、寮舍、鐘樓門、大門等アリ、增、文久三年二月、阿祿ノ災ニ罹リ、以上ノ堂宇、皆灰燼ニ歸ス、明治廿年再建ノ印ヲ竣ル、　一切經藏、增、源賴家追福ノ爲ニ、二位尼建立ス、ハ、在源賴家墓傍、牓曰指月殿、增、傳云、寧一山ノ書也ト、經乃二位尼所納、天正十八年ノ亂ニ、山中ニ隱シ置ナ、多ク腐敗セリ、宋板ノ善本ナル故、往年芝增上寺ヘ三十卷贈リ、今僅ニ存ス、放光般若波羅密多經第廿二卷ノ跋ニ云、爲征夷大將軍左金吾督源賴家菩提、尼置之ト、尼公ノ手書ト見ユ、又爪起ノ名號、日蓮自筆ノ法華經、增、縁起曰、日蓮眞筆ノ法華經八卷、遠州蘆井ノ邊池新池村上人伯父新左衞門ヨリ納ムト、假面象爐、北條氏ノ文書、十餘章ヲ藏ム、略○山門牓曰廬山ノ三字ハ、東皐心越書ス、此鐘ノ形勝、靈山ニ肖タルヲ以テナリ、增、箱根山緣起曰、比叡山惠空、延喜五年頃、修善寺別當ト、元亨釋書ニ曰、釋永助、甲州人也、移豆州修善寺、書年限一朞、修念佛、期終積薪焚身、其煙遙騰成紫雲、邑人哀感敬嘆ト、北條盛衰記曰、早雲庵宗瑞、永正十六年八月十五日、韮山城ニテ歿ス、卽修善寺ニ於テ一片ノ煙トナシテ、遺命ニ隨テ相州湯本ニ圓丘ヲ築キ、骸骨ヲ納ムト、此事名跡志其他ニ見ユ、增、北條役高帳ニ、修善寺領五拾貫文、修善寺分并ニ十五貫三百文加古增分ヲ載ス、御朱印寺領三十石、君澤郡ノ内ニテ、寺領ノミ仍ホ田方郡ト稱ス、增、明治ノ初年上地ナリ、君澤郡ニ屬ス、增、千〇六十九坪、官四、

正覺院　增、奧之院ト云、修善寺ニ屬ス、修善寺ヨリ三十町許山中ニ在リ、弘法行狀記、伊豆國桂谷ト云山寺ニ下リテ、佛法修行シ玉ヒケルニ、此寺固ヨリ魔緣多キ所ニテ、イカニモ障難アリケレバ、大師虛空ニ向ヒ、魔事品ヲ書セ玉ヒケリ、其後天魔モ境ヲ去リ、佛法モ廣マリケリ、大師大日ノ

寺格　寺領

像ヲ造リテ安置シ玉ヘリ、今修善寺ト申ス是也ト、今修善寺ト申ス是也ト云ハ誤也案ズルニ、元亨釋書ニ所謂桂谷山寺增、修善寺本條參觀、トハ、卽此院也ト云傳フ、大日像及驪龍窟皆此ニ在リ、中比衰廢セシヲ、弘治丁巳ニ、山キト云夫人、北條氏康ニ託テ、堀越六郎略註追福ノ爲ニ寺領ヲ寄附シ、修善寺隱居明山ヲシテ興廢セシム、增、ナホ享保五年修善寺十六世從山再建ス、今又僅ノ茅堂トナレリ、增、三百五十三坪、民一

〔寺鑑下禪宗洞家〕高三拾石御朱印　豆州　修禪寺

右住職、可睡齋ゟ申付ル、

一入院御禮無之、

一年頭御禮、御白書院、御次一同、獻上一束一本御暇無之、

寺制

〔修善寺文書〕爲堀越六郎殿入牌領、三島之内賀子岩崎拾五貫文之所、永代令寄進候狀如件

永祿元年六月朔日　氏康

修禪寺衣鉢閣下

〔修善寺文書〕正覺院領加子岩崎之事、修禪寺先住明山與奪之任證文之旨、正覺院付置候、然者末寺儀候間、向後可有指引事尤候、若正覺院相違之扱有之者、可被遂披露旨被仰出候、仍狀如件、

天正十七年己丑六月廿八日　評定衆　上野介康定

修禪寺

〔修善寺文書〕當寺事、早々令修造、門前百姓等、如先々被還住之樣、可被申付候也、

天正十八五月朔日　秀吉朱印

伊豆國修禪寺

名稱　所在　創建　沿革

國清寺

國清寺ハ、伊豆國田方郡奈古谷村ニ在リ、康安年中畠山國清ノ創建ニ係リ、應安年中、上杉憲顯大ニ修築シテ巨刹トナシ、僧妙謙ヲ以テ開祖トス、臨濟宗ニ屬シ、關東十刹ノ一タリ、

〔増訂豆州志稿十下〕天長山國清寺 奈古谷村　増、臨濟宗圓覺寺派、（相州鎌倉圓覺寺末、本尊觀世音、）

寺記ニ曰ク、康安元年、畠山國清（入道々誓）鎌倉ヨリ本州ニ遁レ、修善寺城ヲ保シ、其翌春此地ニ一小寺ヲ創セリ、俗呼デ國清寺ト云ト、應安元年上杉憲顯（民部大輔）大ニ修築シテ巨刹トナシ、僧妙謙ヲ始祖トス、即勅諡佛眞禪師ナリ、（増、本朝高僧傳ニ曰ク、妙謙、字無礙、吏部侍郎藤憲顯、建二國清寺於豆州奈古谷一、請謙爲二開山祖一、應安二年七月十三日寂ト、鎌倉大草紙ニ曰ク、國清寺ハ上杉憲房（兵庫頭）ノ爲ニ子息憲顯建立スト、空華集ニ曰ク、國清寺ハ昔律院ニテ、高尾ノ文覺上人ノ舊宅ナリ、上杉憲顯律ヲ改テ禪トナシ、佛國禪師ノ弟子無礙謙公ヲ開山トスト、文中文覺ノ舊宅トアルハ誤リナリ、文覺ハ寺ヲ距ルコト十餘町山中授福寺址ニ寓居シタリ、増、新編相模風土記ニ曰ク、鎌倉ノ國清寺ハ上杉憲顯創立ニシテ、僧文覺ノ宅址ナリ、空華集ニ載ル者是ナリ、鎌倉志ニ空華集ヲ引テ、國清寺ノ上ニ伊豆ノ二字ヲ冒セシハ誤レリ、豆州ニ在ルト、開山開基全ク同シト、當否ヲ知ラズ、）増、二世ヲ存囘ト云、勅諡佛果禪師是ナリ、（鎌倉大草紙ニハ、佛果禪師ヲ四世トアリ、）三世ヲ法一ト云、其ニ名僧ナリ、往昔ハ殿堂壯麗ニシテ、子院七十八宇ヲ有シタリ、足利義滿ノ時、關東十刹ノ一ニ加フ、鎌倉大草紙ニ、勅賜天長山國清萬年禪寺ト號ストアリ、延德三年、伊勢長氏堀越御所ヲ陷レシ時ヨリ、漸ク衰替ニ屬ス、其後鎌倉圓覺寺ノ附庸トナル、子院ノ現存スル者、高巖院（増、本尊藥師ヲ安ズ、僧龜州ノ創立ナリ、龜州ハ明德四年寂ス、）鳳林庵（増、本尊地藏ヲ安ズ、僧萬用ノ創立ナリ、萬用ハ大永元年寂ス、以上二字境內ニ在リ、）德隣院、松月院、龍泉庵（増、以上三字、境外ニ在リ、次ニ記ス、）要津庵（増、今廢ス、）等ナリ、（廢絶セル者今尙知ル可キハ、眞月院、高月院、六西堂、坐禪堂、[illegible]如意庵、[illegible]白泉庵、保春庵[illegible]等ナリ、）總門ノ古額天長山ノ三字ハ、明ノ周伯溫書スル所ナリ、（佛果禪師詩ヲ以テ伯溫ニ謝シテ曰ク、伯溫堅頎重二扶桑一、遠寄二其鳳一墨二大方一、鯨濕吹雲三萬里、天長山上墨痕香ト、増、此古額今亡失ス、）増、又勅賜佛眞禪師ノ六字ノ扁額ヲ藏ス、寺領二十石、及境內七千六百步寄附ノ朱印書ヲ有ス、増、舊末寺三百餘院アリキト云、今五十八寺ヲ有シ、中本寺格ナリ、

増、證羊集ニ曰ク、關東副帥上杉天樹居士者、弱齡而在國清寺無礙室中、爲沙彌ト、又曰ク、上杉大全

居士遷豆州之國清寺、鼎建湘江佐谷ト、天樹ハ憲方、大全ハ憲定ノ法名ナリ、重憲定ノ時、此寺ヲ鎌倉ニ移シタルナラム、鎌倉大草紙、應永廿三年十月、上杉禪秀等謀反ノ條ニ曰ク、足利持氏叶ハズシテ落チラレケリ、人々其行方ヲ知ラズ、唯伊豆名古谷ノ國清寺ニ御座ノ由披露アリケレバ、木部將監以下宗徒ノ人々、皆國清寺ニ集ル、敵モ奈古谷ニ御座トヤ思ヒケム、狩野介幷ニ伊豆奥ノ兵共、走湯山ノ大衆ヲ語ヒ、大勢ニテ國清寺ニ押寄セケル、寺中ニハ御奉公ノ面々百餘人ニ過ギズ、敵ハ武士ト大衆ト入リ代リツヽ、火ヲカケテ攻メシカバ、上杉憲基ハ、夜ニ紛レ落チ行キヌ、將監等二十一人ハ、高櫓ニ上リ、自害シテ失セニクリト、同書ニ又曰ク、永享十一年上杉憲實安房守伊豆名越ノ國清寺ニテ子息二人ト共ニ出家トナルト、又曰ク、國清寺鎮守ノ祠ハ、清瀧權現、文珠明神、來宮明神、杉崎明神、祇園天王、藏王權現、鷲頭明神、四阿山權現等ナリ、又上杉氏代々武藏ノ守護ナルガ故ニ、同國府中六所明神ヲモ寺內ニ勸請シテ社壇アリト、北條盛衰記ニ曰ク、北條早雲ハ堀越御所ヲ討取リテ、威勢彌盛リナレバ、近邊皆其下知ニ從フ、ソレヨリ狩野介ヲ攻ム、狩野介打負ケ、名越ノ國清寺ニ入リテ自害シケリト、當寺ノコト尙數書ニ見ユ、境內ニ高山國清、上杉憲顯ノ墓アリ、國清法名天岱道曾、憲顯法名桂山道昌ト云、境、二千九百四十九坪、官四、毘沙門堂、增國清寺ニ隷屬シ、寺ヲ距ルコト十餘町ノ山中ニ在リ、傳云、僧文覺源賴朝ニ請テ營築スト、宮根山緣起ニ曰ク、壽永中、源賴朝有瑞夢、仍令文覺於豆州奈古谷建多聞堂一字ト、蓋是ナラム、毘沙門像ハ古作ナリ、傳云、慈覺大師刻スト、新編相模風土記、宮根金剛王院ノ條ニ、毘沙門像ハ往古豆州奈古谷村多聞堂ニ安セシヲ、天文ノ頃當院ニ移スト云トアリ、

〔新編相模國風土記稿鎌倉郡八十七〕國清寺蹟　是モ佐介ケ谷ニ在テ、字寺ノ內ト云フ、當寺ハ、高雄ノ文覺居住ノ舊地ニテ、律刹ナリシヲ、上杉民部大輔憲顯、禪宗ニ改テ、無礙抄謙ヲ、開山始祖トシ、ツイデ其法弟源叟ヲ二世タラシム、〇註略　應永二十三年、上杉禪秀亂ノ時、十月六日、岩松治部大輔、澀川左馬助ノ軍兵、當寺ニ放火シテ戰フ、此時堂宇悉燒亡セシナリ、

〔鎌倉大草紙下〕かくて京都より御下知ありて、今度成氏へ不義の輩令優免、〇中略憲實をも、鎌倉へ

師參可ㇾ有由、〇中略成氏も再三御使ありけれとも、終に不ㇾ參、伊豆國名越國清寺にて、出家となりかくれ居ける、〇中略憲顯此寺を開基旦徒となり、七堂を建立し、朱樓紺殿雲にそばだて、雨杉風檜甍をならべ、四時の坐禪、四三時の勤、不退勤修の砌也、總而五百人の僧徒を置、此開山佛直〇直恐眞誤禪師、應安三年七月十三日入滅あり、憲顯は、應安元年九月十九日於ニ足利御陣所ニ六十三歲にて逝去、號國清寺桂山道昌、さて又此寺第二祖は、源叟妙本和尚と申佛國の御弟子なり、〇中略かゝる有德高行の禪侶止住の勝地の寺なれば、當來値遇の結緣も空しからじと覺ければ、其後勅特賜天長山國清萬年寺と號す、〇中略上杉代々武州の守護にてありしゆへにや、武藏府中六所大明神をも、此寺の内に勸請して社壇あり、

寺格寺領

〔寺鑑〕禪宗五山派下　御朱印高武拾石　圓覺寺附庸　十刹　豆州奈古屋　國清寺

右三ヶ寺〇禪興寺、瑞泉寺、國清寺、住職、本寺建長寺、圓覺寺ゟ申付ル、

一住職御禮無ㇾ之、

一年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、獻上、扇子一箱御暇無ㇾ之、

妙法華寺

妙法華寺ハ、伊豆國田方郡玉澤村ニ在リ、日蓮ノ高足日昭ノ開基ニシテ、日蓮宗身延派ノ一本寺タリ、此寺舊ト相州鎌倉ニ在リシガ、元和年中、住持日亮ノ時今ノ地ニ移セリト云フ、

名稱所在

〔和漢三才圖會〕六十七伊豆　妙法華寺　在ニ玉澤ニ法華宗一本寺、自ニ三島社ニ一里南東

開基　日昭上人、日蓮弟子六老僧之一　境內凡方二里許

〔全國各宗本山明細帳〕日蓮宗　大本山本寺

創建沿革

妙法華寺伊豆國田方郡玉澤

〔增訂豆州志稿十上〕經王山妙法華寺玉澤村　增、日蓮宗本山、本尊十界曼荼羅

僧日蓮ノ徒弟日昭、建長五年鎌倉ニ草創ス、增、寺記ニ曰ク、弘安七年鎌倉玉澤ノ地ニ創立スト、日昭ハ元亨三年一百四歳ニテ寂ス、後漸ク巨刹ト爲ル、天文中鎌倉亂ル、ヲ以テ、寺僧日弘日南日弘ハ上杉憲實ノ孫、日南ハ憲政ノ子ナリト云、增、日弘ハ日昭ヨリ十一世、日南ハ十二世ナリ、等越後ニ避ケ、末寺妙法寺ニ寄寓ス、增、文祿三年十三世日荷、寺ヲ本州加殿ニ遷ス、慶長八年十四世日產箱根山中大木澤ノ地ヲトシ、近傍十三村々長ニ商リ、寺域ト定ム、卽現地是ナリ、十五世日達ノ時、官ニ啓シ、大木澤ヲ玉澤ト改稱ス、元和七年十六世日亮ニ至リ移轉ス、寬永二年十七世日遵ノ時、德川秀忠ヨリ境域反別百八十町歩餘寄附ノ朱印書ヲ賜ル、寺ニ日蓮日昭ノ筆蹟數通ヲ藏ス、此地亂山幽邃ノ門ニ在テ、伽藍ノ規模頗廣大ナリ、目下末寺五十二寺ヲ有ス、佛殿、香積廚、寶庫轉輪藏、祖師堂、三光堂、千佛堂、上方、浴室、番神堂、七面祠、鐘樓、金剛門、總門等アリ、又子院覺林、覺源ノ二院、敎順、實相、鷲山、寶藏、圓入、妙久、正行、唯本、唯圓ノ九坊アリ、增、今覺林院、唯圓坊存在スルノミ、次ニ記ス、門前民戸十一アリ、增、今二十餘戸ニ及ベリ、增、華族大田氏ノ香華寺ニシテ、奕世ノ墓アリ、增、一萬〇七三坪、官〇四、

〔本化別頭佛祖統紀九世家〕玉澤妙法華寺開山日昭尊者世家

師諱日昭、字大成辨、○中略文保元年丁巳、師召門人日成曰、老僧今春八旬加二、偶因檀請卜是福地、既十二年、色力老衰、起居不易、囑累于子、勉、諸濱者、吾積功累德之地、倘不能忘、再葺草堂、欲期終焉成讓而拜命、以告于信昭、信昭亦不敢睽、卽日遷于濱、深信好漢、勠力寄材、濱亦一新、有佛殿、有僧房、足稱一方雄刹、師大喜、調開堂式、扁呼弘延山妙法華寺、○中略正慶建武之間、鎌倉大亂、濱亦爲戰場、是時庫中法寶多燒亡矣、惜乎哉、僅高祖手書註經、法華三部要文、本理大綱集、高祖肉牙、昭尊手書遺誡等、祐上躬自懸頸避災池上、辛苦萬千、時豆州檀越雲金村造東金山妙本寺、少頃合濱於雲金而遷、然昭尊遺物寺之寶物、未及移之而祐上化矣、高祖肉牙等迄今存池上藏是謂也、文祿中第十三代日荷、得勝地

於田方郡賀殿村、再建妙法華寺、元和中第十六代日亮忝承官命、開今之玉澤、是時更經王山、第二十一代一乘院日養者、俗姓蔭山氏、紀常兩侯萱堂養珠夫人骨肉之姪、於是夫人垂命、鼎建巍巍然、崇山浚溪、殿高樓聳、鐃吼鼓轟、龍象奔湊、兩序穆穆、末山磊磊、位六山之首矣、越之村田妙法寺亦派流就榮、不減風間氏護法、吁昭尊者餘烈偉哉矣、賀殿舊地亦爲寺、牓呼嚴淨山妙國寺、推第三代日運爲開山祖、運者祐上上足也、瀬拈筆唱曰、

南無威德力菩薩、玉澤開山日昭尊者、三聖本結大緣寂光爲土、

寺格	名稱 所在 創建

〔寺格帳下 日蓮宗身延派〕境内御朱印　豆州玉澤　妙法華寺

右住職、寺中幷末頭評議之上相定ル、

一住職御禮無之、

一年頭御禮、御白書院、御次一同、獻上壹束壹本、御暇無之、

實成寺

實成寺ハ、伊豆國加茂郡柳瀬村ニ在リ、僧日尊ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔增訂豆州志稿十一上〕東光山實成寺 柳瀬村　增、日蓮宗興門派本山、本尊十界曼荼羅、日蓮、

正安三年、僧日尊建立ス、增、本州屈指ノ名刹ニシテ、堂宇頗完美ナリ、本尊ハ、日尊弘教中囑身スル所ナルヲ以テ、笈ノ御影ト稱ス、寺域豪族大見氏ノ邸墟ナリト傳フレドモ詳ナラズ、子院淨蓮、見立、二坊增、ナホ本廣坊、富仙坊アリキ、皆明治六年廢ス、及祖師堂垂跡堂等アリ、增、一千一百三十五坪、官四、

〔社寺取調類纂百九十六〕日蓮法華宗勝劣派

一本山　韮山縣管轄所　伊豆國加茂郡柳瀬村　實成寺

名稱
所在
創建

同斷〇一黑色衣著用寺格、其外共、別段無二御座一候、

善光寺

善光寺ハ、甲斐國山梨郡板垣村ニ在リ、永祿元年、武田信玄、信濃國善光寺ノ彌陀如來ヲ遷セテ、建立スル所ニシテ、智淨尼ヲ以テ開山トス、慶長二年、本尊ノ京都大佛殿ニ移リ、更ニ信濃國善光寺ニ歸座スルニ及ビ、僧定尊ノ新作阿彌陀佛ヲ以テ、其本尊ト爲セリ、淨土宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會 六十九 甲斐〕新。善。光。寺。 在府中 寺領百石

本尊 信州如來同 坊舍六十軒 寢釋迦堂 三重塔 閻魔堂 三門 此外堂數多

〔甲斐國志 七十四 佛寺〕山梨郡萬力筋

一定額山善。光。寺。板垣村 智恩院末、本州淨土一派ノ觸頭ナリ、淨智院ト號ス、四門ノ額字、東ハ定額山善光寺、西ハ不捨山極樂寺、南ハ南明山無量寺、北ハ北空山雲上寺、御朱印寺領三拾石四斗九升餘、域內壹萬千八百七拾七坪、三門外坊舍地千百六拾四坪、供僧敷地七所千六百七拾貳坪、山林方五町 寺領ノ東ニアリ 永祿元戊午年、信州善光寺彌陀如來諸佛ヲ遷シ來リ、信玄ノ新ニ建立セル所ナリ、

〔甲斐叢記 八〕定額山淨智院善光寺 板垣村 淨土宗、京都智恩院の末寺、本州の觸頭なり、寺領三十石餘、四門の額字、東は定額山善光寺、西は不捨山極樂寺、南は南明山無量寺、北は北空山雲上寺とあり、

永祿元年戊午、機山公 〇武田信玄 信州善光寺の諸佛を遷して、新に此處に擬て置られしなり、寺記に、永祿元年十月三日、於二板垣村一起二土功一、普請奉行山本勘助也、同七年三月廿二日、上棟、八年三月廿七日、入佛供養とあり、甲州記追加に、永祿元年八月十八日、信州より彌陀如來の像寺實、悉く甲州古上條村に引移し、翌年二月十五日、板垣村の假屋に移すと見ゆ、古傳に、永祿元年九月二十五日、善光寺如來甲府に着き、後屋村に假屋を架て移し置、二年、板垣に新。善。光。寺。建つ、二月十六日、入佛とあり、後屋には古時上條と一村なり、古の諸說區區にして定めがたし、猶後考を俟つ、

本尊

〔和漢三才圖會甲斐六十九〕新善光寺〇中略

昔當國城主武田信玄(傳詳于參河國)與上杉景虎(傳詳于越後國)屢合戰時有靈瑞、以建伽藍、移信州善光寺如來、稱新善光寺、於是有一旅僧、寺前勸貴賤鑄四尺有餘金像彌陀、而二回未成、夢中化僧來曰、我亦加力、切衣袂授之、用此袖中於佛胸可鑄佛也、卽枕頭有一袂、取以如言果成就也、傍建新佛堂安焉、後慶長二年七月十八日、秀吉公移本佛於洛大佛殿、然夢想曰、須還本國、蓋甲州既有新佛、宜歸信州也、因任佛勅、同八月、奉送于信濃國、

〔甲斐叢記八〕定額山淨智院善光寺、〇中略開山は信州善光寺三十七世鏡空上人智淨比丘尼にて、本尊は三國傳來せる閻浮檀金の彌陀如來なり、此本尊慶長二年、豐臣大閤京師の大佛殿に遷され、後に信州に歸座ありければ、今當寺の本尊は、建久六年に、釋定尊(尾州熱田の人)が威得せる一體分身の彌陀如來にて、世に、新佛と稱る靈像なり、

〔家忠日記〕天正十一年六月五日乙卯、甲州善光寺如來、去年三州甲信、上樣(〇織田信長)御うち入候時、上之介殿、美濃へ御移候を、上樣御父子御生涯候間、又甲斐國へ御かへり候とて、岡崎迄御越候、　十日庚申、善光寺吉田迄御越候、

〔善光寺文書〕善光寺如來之儀、御靈夢之子細在之而、大佛殿江還座事被仰出候、然者從甲斐國大佛殿迄路次中、人足五百人、傳馬貳百卅六疋宛、可申付次第事、

一甲州より駿河堺迄　　淺野彈正少弼
一駿河堺より遠江迄　　中村式部少輔
一駿河堺より濱松迄　　山田對馬守　有馬玄蕃頭　松下右兵衛尉
一濱松より吉田迄　　堀尾帶刀
一吉田より岡崎迄　　羽柴吉田侍從

一岡崎より熱田淸須迄　田中兵部大輔

一熱田より船にて渡海勢州四日市場迄船之事　福島左衛門大夫

一熱田より陸路に候者人足馬桑名迄　福島左衛門大夫

一桑名か四日市より龜山迄　氏家内膳正

北伊勢小給人衆則氏家内膳申觸可送事、

一龜山より江州土山迄　岡本下野守　羽柴下總守

一土山より石部迄　長束大藏大輔

一石部より草津迄　江戸内大臣殿

一草津より大津迄　新莊東玉　駒井中務少輔

栗本郡御藏入、給人方爲兩人申觸可送事、

一大津より大佛殿迄　大津宰相

以上

右之通、淺野彈正少弼一左右次第、日限を極相待、人足傳馬不相滯樣ニ申付、可送屆候也、

慶長貳年六月十五日　朱印（○豐臣秀吉）

〔甲斐國志七十四佛寺〕山梨郡萬力筋

堂塔

一定額山善光寺（○板垣村中嶋）寺記云、同年（○永祿元年）十月二日、板垣村ニ於テ土工ヲ起ス、普請奉行山本勘介也、同六年四月四日、柱立、七年三月廿二日上梁、八年三月廿七日、入佛供養、（一本ニ于年七月入佛ト云）本堂南面（拾三間廿八間）二重屋根三棟造リ（檜皮葺）須彌壇脇ニ戒壇アリ、三重塔、三門、鐘樓、諸堂等莊嚴宏大ナリ、本尊三國傳來閻浮檀金彌陀如來、開山大本願鏡空上人智淨比丘尼ハ、信州善光寺三十七世住持ナリ、（永祿七年八月十六日寂ス）

〔善光寺文書〕善光寺金堂之材木不足之所、於二于八幡之天神宮一可レ剪之趣、嚴重之御下知候者也、仍如レ件

〇戊辰永祿十一年
十一月十日　朱印〇武田信玄　跡部大炊助奉レ之

大本願御房

〔寶曆集成綸錄〕十九　寶曆四戌年五月

宮村孫左衛門御代官所
甲州山梨郡板垣村
善光寺

右諸堂燒失ニ付、御材木拜借仕度旨相願候、願之通御林之松材木三百本被レ下候間、可レ被レ得二其意一候、

寺領

〔善光寺文書〕甲斐國善光寺領松本內拾貳貫文、穴山內七貫五百文、國衙內五貫五百文等事、

右本寺領、不レ可レ有二相違一之狀如レ件

天正十一年
四月十九日　御朱印

善光寺

〔甲斐國志〕七十四佛寺　山梨郡萬力筋

一定額山善光寺〇板垣村中略　御朱印寺領三拾石四斗九升餘

〔家忠日記〕天正十年三月十四日壬申、甲府、同善光寺見物ニ越候、

雜載

〔徂徠集〕十五紀行　峽中紀行中

吾往二新善光寺一、試二其所レ謂燈臺佛者一、無三復有二輕重一、皆謂佛菩薩、似レ不レ爲二書生地一也、復遣二僕人一試レ之亦爾、則見以爲二書生所一レ畜奴邪、

〔甲斐叢記〕八　定額山淨智院善光寺〇板垣村中略　燈籠佛と云るは、內陣西の間に安置す、聖德太子感得持念の靈像にて、長一寸八分、一光三尊なりと云て、智恩院宮世々秘封せらるゝ佛なり、世人若し思ひ惑ひて、

名稱
所在
創建

決定し難き事あれば、佛前に詣り祈念して籤を擧げ、その輕重に依りて、事の可否を決るに、應答示驗あらざるなしと云へり、峽中紀行に、暮往新善光寺、試其所謂燈臺佛者、無復有輕重、皆謂佛菩薩、似不爲書生地也、復遣僕人試之亦爾、則見以爲書生所畜奴邪と云るは、老先生が例の戯謔なるべし、

慧林寺

慧林寺ハ、甲斐國山梨郡小屋敷村ニ在リ、元德二年、二階堂道蘊ノ本願ニ由リ、天龍寺疎石夢窓國師ノ開基セシ所ニシテ、後ニ武田氏ノ菩提所トナル、故ニ織田信長ノ武田氏ヲ滅スルヤ、亦當寺ヲモ燒失セシガ、德川家康之ヲ再興セリ、寺ニ信玄ノ像アリ、世ニ著名ナリ、

〔和漢禪刹次第〕日本諸國諸山之禪院　東海道十五國

甲斐　慧林寺乾德山開山夢窓國師二世滿翁和尚

〔甲斐國志佛寺七十五〕山梨郡栗原筋

一乾德山慧林寺　藤木小屋敷、三日市場三村〇山梨郡ノ界ニ在リ、古時牧庄ノ内ナリ、〇中略此邊二階堂入道道蘊ノ封邑ナリ、〇中略元德二年、創立當寺、請夢窓國師、爲開山第一祖、師始入、德和乾德山、一夏面壁セシコトアリ、因以乾德爲山號ト云、

〔慧林寺路由緒〕覺

山梨郡栗原筋小屋鋪村
濟家宗乾德山慧林寺〇中略

一當山者、元德貳庚午年秋九月、二階堂出羽入道道蘊居士〇貞藤甲州牧庄領掌之節、請夢窓國師草創之、元德貳年草創ゟ、今年寶永二乙酉年迄、三百七拾六年に罷成候、開山以來寺地終に他所江移替り不申候、古よりの什物等、天正拾年、信長公放火之節、伽藍與共悉燒失、今信玄公御寄進之牧溪筆

沿革

十六羅漢繪內二幅可翁筆觀音之繪壹幅同筆達磨之繪壹幅相殘候而已、

〔東歸集〕賀慧林新寺呈夢窻和尚

揮戈佛日回三舍、大用現前雷發音、插草鐵如契符合、布金設幻實坊森、展降龍盃搏香積、開選佛場投芥針、啓廸人天無第二、慧林名甲去來今、

〔甲斐國志七十五佛寺〕山梨郡栗原筋

乾德山惠林寺（○中略）元龜四年、信玄卒スルヤ、此ニ葬ル、快川國師導師タリ、法盤惠林寺殿機山信玄大居士、（但前ニ除髮ノ時、長禪寺岐秀ノ所名ナリ、）壬午ノ時、（○天正十年）江州ノ浪客佐々木承禎（或云承禎子次郎義弼）及室町家ノ士大和淡路守上福院等、嘗テ寄食シテ本州ニ在リ、織田右府素ヨリ承禎ヲ惡テ欲捕之、三人ノ者走テ惠林寺ニ匿ル、告ル者アリ、遣兵搜索メシム、津田、長谷川、關、赤座以上、近境ヲ亂妨シテ至ル、寺內ノ人出ルコトヲ不聽、皆山門上ニ保シム、快川、並大綱、睦庵、高山、（長禪寺住僧）藍田、（東光寺住僧）以上、紫衣東堂五人、（按ニ皆信玄所敬老宿也、蓋遭亂至此ナラン、）黑衣ノ長老九人、僧侶兒喝食、凡七十餘人、縱火ヲ放テ悉ク燒殺之、殿堂什物所殘ナク、拂地烏有トナル、

〔信長公記十五〕天正十年壬午四月三日、去程に、今度於惠林寺、佐々木次郎隱置に付て、其過怠として、三位中將信忠卿より被仰付惠林寺寺僧衆御成敗之御奉行人、織田九郎治郎、長谷川與次、關十郎右衞門、赤座七郎右衞門、以上、右奉行衆罷越、寺中不殘老若山門へ呼上せ、廊門より山門へ籠草をつませ、火を被付候、初は黑煙立て見えわかず、次第々々に煙納り燒上、人之形見ゆる處に、快川長老はちともさはがず、座に直りたる儘不動、其外老若兒若衆、踊上飛上、互抱付、喉焦（コガレ）、焦熱大焦熱之焰に咽び、血刃之苦を悲しむ有樣目も當られず、長老分十一人被果候、其中存知分、寶泉寺之雪岑長老、東光寺の藍田長老、高山之長禪寺の長老、大覺和尚長老、長圓寺長老、快川長老、中にも快川長老、是者無隱覺之僧也、依之去年內裏ニ而、忝も圓常國師と御補任頂戴申され、近代國師號を賜

本尊

事規摸也、都鄙之面目不可過之、

四月三日、惠林寺破滅、老若上下、百五十餘人被燒殺訖、

(徂徠集十五紀行)峽中紀行下

十五日、〇寶永三年九月五更發、取道板垣、當過惠林寺、〇中略壬午之亂、〇天正十年兵燹燼殿閣、它佛像什物、皆所掠盡、〇中略僧末宗者負謁神祖、〇家康寺廼復舊觀、

(東照宮御實記附錄三)武田代々の香火院惠林寺は、右府〇織田信長が爲に燒れしを形のごとく再建せしめ、歷世の靈牌どもをする證とて費用の金を下され、〇中略かくとり〴〵邮典を施されしかば、國人〇甲斐なべて御仁政をかしこみしたひ、心をよせ奉らさるものはなかりしとぞ、岩淵夜話

(惠林寺舊記)赤甲東白鹽北、山曰乾德、寺曰慧林、擬于七朝師、刱基于二階堂、〇中略百年前諸堂欽爲廣利王所奪、于玆吾大府君侍從源公〇柳澤吉里政化新敷、宏嚴甲陽中興之元基、證智夙發、不忘鷲嶺外護之付囑、〇中略加旃賜巨棒、與貲錢若干、令就拈華之舊趾成寶殿、寺中衲侶、門外信男等、拽石搬土、材美工精、土木成具、虔涓令辰、惠山一味茶、澆之柱礎、德嶠一瓣香、供之祖佛、〇中略

前妙心現惠林賜紫沙門季東法護誌

國主從四位下侍從源吉里公榮建

都監　寶樹軒主愚溪禪僧

同　情神庵主快岳善活

都料匠　浦野次兵衞藤原國久

小工　小島木工藤原家雄

甲斐國山梨郡牧庄

乾德山慧林禪寺拈華寶殿

享保四己亥八月　日

(惠林寺略由緖)覺　山梨郡栗原筋小屋舖村　濟家宗乾德山惠林寺〇中略

一本尊拈花釋迦

宗派寺領

慈覺大師之作、古惠林寺七堂之節は、佛殿ニ安置之、唯今は方丈ニ安置仕候、

一開山夢窻正覺心宗普濟圓融佛統大國國師、觀應(辛卯)九月晦日示寂、○中略則肖像今安置于牌堂也、

〔甲斐國志(佛寺七十五)〕山梨郡栗原筋

一乾德山慧林寺○中略臨濟宗關山派妙心寺末、御朱印寺領五拾九石五斗餘、(貳拾九石貳斗四升八合、慶長四年行證文所載、寛永十九年六月十八日御朱印アリ、三拾石三斗餘、寛文十一年六月十七日、新御寄附、共ニ在小屋敷村內、)寺內三万六千四百坪、山林方壹里、外ニ除地七石九升六合、(樹木屬數ト云)此邊二階堂入道道蘊ノ封邑ナリ、(出羽守藤原貞藤、元應二年薙髮、當寺ノ牌ニ貞空院殿林道蘊居士トアリ、)

〔甲斐國志(佛寺七十五)〕山梨郡栗原筋

乾德山慧林寺○中略至天桂玄長三十一世ナリ、永祿七年、信玄寄寺領三百貫文、定爲壽藏所、遂改古規關山派トナシ、請快川紹嘉(時在濃州崇福寺)住セシム、勅特賜大通智勝國師號、是ヨリ妙心寺ニ隷ス、信玄殊ニ崇禪法、故名匠ノ來集者多シ、快川春國等常立テ爲師家、

〔寺鑑(下臨宗濟家關山派)〕

甲州　惠林寺

右住職、弟子讓リ、

御朱印　高五拾九石五斗餘

〔集古文書(四十六寄附狀)〕武田信玄寄附狀(甲斐國惠林寺藏)

惠林寺領之事

一年貢　貳百貫貳百文　一石米大豆粟　百貳拾七俵(壹斗四升)　一入米幷湯米　五百九拾貳

駄壹把　此外瑣碎之納物、數多在之、　已上

此外　一修補領　九貫五百六拾文　一僕鍛冶番匠行堂之恩(七拾五貫參百九拾文)

右改惠林叢林之風度、爲信玄牌所、一圓(仁)令進獻之者、被執行關山一派之規模、佛法御興隆專用也、於于然者、被撰師子相承器量之仁、御住山之事、至于万々世不可有相違候、恐惶敬白、

永祿七年甲子十二月朔日　信玄花押

拜進快川和尙侍衆閣下

山梨郡栗原筋小屋舗村
濟家宗乾德山惠林寺

〔惠林寺略由緒〕覺

一御朱印高　五拾九石五斗餘　一寺中封疆　三万六千四百坪　一山林　壹里四方

大猷院樣〇德川秀忠御朱印寫

當寺領甲斐國山梨郡小屋舗村之內、貳拾九石貳斗餘事、任先規令寄附之訖、全可收納幷寺中山林竹木等如有來彌不可有相違者也、仍如件、

寬永十九年六月十八日　御朱印

惠林寺

山梨郡栗原筋小屋舗村
濟家宗乾德山惠林寺〇中略

子院

〔惠林寺略由緒〕覺

一寮舍

東隱軒　望月庵　岩松院　法喩院　祥風軒　栖松軒　眞空院　法明院

寶樹軒　普同庵　繼統院　繼統院者、武田刑部太夫信成公牌所、號雪窻光公大禪定門、

長興院　長興院者、武田信繩公牌所、號孚山邦公大禪定門、　獅子吼庵　精神庵　右精神庵、獅子吼庵兩院之儀者、三日市場村ニ御座候へ共、古より寮舍分に而、塔頭役相勤申候、

行者寮　合拾五軒〇中略　常住塔頭僧侶合五拾四人　常住塔頭下人合四拾壹人　外行者壹人

雜載

〔徂徠集十八〕後慧林寺殿機山覇主影堂上梁文

乾德之山、慧林之寺、夙奉覇主尊像、久欽英靈樂棲、肇構幽宮、敬存明祀、俾知雄藩之有本、將庇蘘畜乎無窮、仰惟機山先生、孫吳謀猷、桓文事業、耀威三道、韜略自玆以流傳、布澤五州、士民至今而利賴、寫生

良匠、肖貌明王、萬世其臨、百年如在、今國主、恭膺榮爵、新績大邦、忠施藩府維新之功、孝述椿臺未竟之緒、遂戒官吏、茲運斧斤、神何無歆、臣皆有禱、架棟梁以揆吉、做善頌而慶成、○銘略

向嶽寺

向嶽寺ハ、甲斐國山梨郡鹽村ニ在リ、武田信成ノ創建ニシテ、僧得勝ヲ以テ開山トス、臨濟宗ノ一本寺タリ、

〔甲斐國志佛寺七十五〕山梨郡栗原筋

鹽山向岳寺　此寺千野、於曾、鹽後、井尻、三日市場五村中間在リ、天正十一年河野駿太夫御朱印ニモ、甲州五ヶ村ノ内云云トアリ、是ナリ、山號鹽山自古名區ナリ、古迹部ニ委シ、御朱印寺領三拾七石三斗七升、三拾石壹斗七升在上於曾、七石貳斗在上鹽後、境內方八町、山林周廻壹里餘、開基武田刑部太輔信成、法諡繼統院殿雪窓法光大禪定門、繼統院在千野村、廢、遷惠林寺塔頭、存寺號、臨濟宗法燈派一本寺ナリ、開山拔隊得勝和尚勅賜惠光大圓禪師、拔隊語錄、敕諡下状、傳略云、師諱得勝、號拔隊、相州中村縣人、姓藤原氏、嘉曆二年丁卯十月六日生ル、歲二十九而落髮、未習教編、有得瓊侍者人、爲友、中略因鎌倉骨山和尚更衣爲僧、三十二歲之二月也、往雲州雲樹寺、參禪于孤峯和尚、諡三光國濟國師、永和四年、自武州到甲州、云云、師先到高森、今云竹森村、樹庵三年、僧尼悉來問道、輻湊如雲、有一老宿昌秀庵主、寶珠寺住持也、寶珠寺在松平村、松嶽昌秀云、最初來爲弟子、一日語師云、此地險僻、學徒每勞乎往來、南方有福地、曰鹽山、移居焉可矣也、師從之、於是昌秀、請山于太守信成、開地樹庵、實康曆二年正月廿日也、翌年營佛殿及僧堂、信成乃納坐像之釋迦佛、以爲本尊、運慶作、西北隅築長牆、栽木成林、學侶雙屋、追隨者千餘輩、安禪靜慮如無人境、而未著寺號、師前在江州、有夢、對富士山問法、因此瑞想、號曰向岳庵、師住于此八年、至德四年二月廿日逝也、壽六十一、法臘三十一、塔名眞身臺、上足十一人、各於駿豆相武之間、開諸刹、大興宗風、云云、所著

和泥合水三卷、拔隊語錄六卷、假名法語一卷、已鏤梓、一說、阿保肥前守忠實者、好修禪學、觀應二年、與秋山新藏人光政、力戰於四條河原之後、落髮爲僧、拔隊和尚者、即忠實也、按ニ非ナリ、阿保氏ハ武州七黨之一丹治姓也、忠實采邑於本州、事記ニ士鹿部、太平記、忠實後入道名ニ信禪、延文康安頃、但馬播磨邊ニ於テ戰爭ノ事ヲ載タリ、拔隊モ延文ノ初爲僧、同時代ノ人ナレド、語錄ニ所記、行狀ニ隨テ爲ニ別人ヲ是トスベシ、忠實本州ニ采邑、且那タリシ故ニ誤ルニヤ、棲雲記、元中二年三月、勅甲州鹽山、爲勅願寺トアリ、北京至德二年也、此時南朝ノ勅願所タリ、和漢合運等、至德元年甲州鹽山建立ト記セルハ誤ナリ、外門額、禪林法窟二世峻翁書也、左右ニ禁榜下馬札ヲ揭タリ、中門額、鹽山二字、拔隊書也、門左右ニ土屏、爲ニ外郭、門內盆池アリ、架ニ橋橋ニ覆屋、右ハ經藏、左ハ浴室、三門額、寺號三字、左右ニ鼓樓、鐘樓古鐘也、無ニ銘文、佛殿、扁云ニ詳寶雲閣、本尊釋迦、夾侍文珠、普賢、運慶作有ニ大圓禪師像、前ニ置ニ袈裟一副、柱杖一本、杖繫ニ扇子拂子各一、但塵モ脫落、存ニ一柄ノミ、皆舊時ノ物ナリ、東ニ峻翁像、西ニ侍者ノ像アリ、三像共ニ帽子ヲ戴ケリ、堂後大士閣、即禪師ノ塔ナリ、又開基ノ塔アリ、其西ニ牌堂諸檀ノ神主ヲ置ケリ、峻翁ノ塔ハ云ニ慈氏室、五司寮在ニ佛殿西、僧堂ナリ、禪室在ニ僧堂南、以ニ三光國濟國師、爲ニ本尊、諸堂皆擧地磚ヲ布キ、長連床ヲ不ニ施、頗雅也、方丈室在ニ佛殿北、安心殿ト云、食堂、都寺寮等ナリ、炎上シテ諸堂ノ修造未ニ全、〇中略朱印五、印中ニ信虎ノ字アリ、一ハ花押ノ上ニ印セリ、四ハ畫圖ノ四隅ニアリ、天文十八年己酉十二月廿八日、晴信花押文書、曾靈圖ノ裏ニ記セリ、其文ニ鹽山畫圖事、既先祖有ニ繼統院自判之上、於ニ子孫ニ不ニ可ニ有ニ異儀ニ云云、元龜四癸酉年十月十四日、勝賴花押文書、其文ニ先祖繼統院已來、准ニ代代證判ニ令ニ加判ニ云云トアリ、天正廿辰年二月十日、光泰加藤遠江守花押添書アリ、表ニ朱印アルハ、神祖所ニ記給ト云、武田晴信、以ニ世々祈願所、天文年中奏請シテ、賜ニ拔隊之禪師號幷住僧色衣著用免許綸旨、四辻大納言承焉、又大內記雜掌國敎添書アリ、改ニ庵字、爲ニ向岳寺、文龜元年丁酉十一月十五日、刑部大輔信昌花押都留郡田原鄕云云、貳拾七貫文ノ寄進狀一章、住持永光トアリ、七十三世輪住昭岩光和尚歟、二月廿八日、年號ナシ信昌、信繩連署花押狀一章、文中ニ繼統院、成就院ノ掟云云トアレドモ、今信成、信重ノ文書ハ傳ハラズ、大永五年乙酉八月二日、信虎朱印禁制六箇條、印中信虎字アリ同六年丙戌九月十日同花押朱印文書一章、靈圖ニ所押ノ花押朱印同ジ十月廿八日年號ナシ同花押文書一章、按ニ、花押天文中所用ナリ、文中ニ如口山字山御掟トアリ、指ニ信昌信繩ナリ、〇中略寺記云、天正中、神祖御巡視ノ時、東陽軒ニ二夜御滯座アリ、住僧蓮峯倍東堂本寺百四十世網代乘輿ヲ賜ハリヌ、又信玄ノ鞍一口、金覆輪達海參內ノ時所賜ノ大法衣一帖、竹布外傳法衣、共

寺制

獨江錦ナリ、

〔全國各宗本山明細帳〕禪臨濟宗

大本山本寺　向嶽寺　甲斐國山梨郡鹽村

〔向岳寺文書坤〕甲州鹽山向嶽寺者、法燈第三世之孫拔隊和尙開山之地、曹溪之正脈也、門庭孤峻、戒律嚴肅也、故不放他門之住、爲分賢愚也、今上皇帝〇後奈良深慕其風、勅諡慧光大圓禪師號、幷賜綸旨掌於住持職者、唯除紫衣而已、到首座以下、應準興國寺之位、粗記焉、副爲後證、

天文十六年六月十日　大内記鐘掌　國敦花押

向嶽寺

〔向岳寺文書坤〕壁書　花押

一雖背開山御遺戒、學文不捨晝夜、

一勵心地修行、不可入作毛、

一於寮舍敷地、不可放賣買、

一門外之燒香、可爲時一剋、

一入院擇其仁、可加閱月、

右雖憚多、依當庵負累加壁書、於若背斯旨輩、大衆同心可擯之、

天文拾六年丁未五月吉日

〔向岳寺文書坤〕禁制　鹽山

一於當山剪採竹木、放牛馬事、

一寺中殺生狼藉事

一門裏諸沙汰出門外事

一寺家之儀、俗徒綺之事、

一門前普請以下諸役、可ㇾ爲ㇾ如前々事、

一風呂堰難澀事

一不ㇾ上表ㇾ寺產、末派令ㇾ爲他派事、

一自今以後、極ㇾ算勘ㇾ造營建立事、

一寄宿之事、若爲ㇾ公儀用所ㇾ雖ㇾ指越、於ㇾ寺內ㇾ猥入ㇾ酒肉ㇾ之事、

右條々、於ㇾ違犯之輩ㇾ者、可ㇾ處ㇾ嚴科ㇾ者也、仍如ㇾ件、

天正十九
八月十三日　光壽在判

萬福寺

名稱	所在	創建

萬福寺ハ、甲斐國山梨郡等力村ニ在リ、延暦年中、僧道忠ノ創建スル所ナリト云フ、此寺始メ法相宗ニ屬セシガ、住持源誓ノ時、僧親鸞ニ歸依シテ、改メテ眞宗ト爲ル、今京都西本願寺ノ末寺タリ

〔和漢三才圖會 六十九 甲斐〕萬福寺　在ㇾ山梨郡䓁村ㇾ　西本願寺下

〔二十四輩巡拜圖會 後編五 甲斐〕等力山萬福寺 西派 院家　同國（甲斐）山梨郡等力（とゞろき）村にあり

杉の御坊と稱す、東國七箇大寺の其一なり、六老僧第四眞宗歸依釋源誓法師の開基たり、　本尊　阿彌陀如來 聖德太子御作

夫當山の濫觴たるや、其靈異尤他に超たるもの歟、今竊にこれを考るに、佛法最初興立豐聰王 聖德 太子の御名也 御遊戯の勝地にして、御愛馬甲斐驪を出せるの名區なり、されば往昔聖德太子、彼甲斐の

驪駒に駁され、神通を以て空中を飛行し、三日が間に諸國を遊歷なし給ひしに、此地におひて鑣をとゞめ、空中より降らせ給へば、黑駒卽ち當山の巖上に立てり、(今に、寺内に馬蹄石あり、)時に皇子、侍從調子丸に謂て曰く、今より五百歲の後、我後身此土に來つて、彌陀の本願を弘通すべし、誠に是化益因緣合成の地なりと勅おわつて、ふたゝび飛行し去給ふゑかりしより此かた、星霜積て、延曆の頃、道忠法師皇子降臨の地なる事を傳へきゝ、始めて此地に一字を造立して、萬福寺と號し、法宗の宗風を仰ぎしが、元久の頃に及んで、源誓法師(遺跡錄には、源誓は覺如上人の御弟子にして、三世なり、此時聖人の御弟子と成りたるは、覺眞法師也と云、是非不分明、)寺務として、天台圓融の道場と成せり、爰に建曆二年、高祖親鸞上人、勅免を蒙らせ給ひ、御歸洛の折から、上野小倉山におひて、智明房聖人に謁し奉り、法然上人御遷化のよしを告まいらせしかば、聖人悲歎にくれさせ給ひ、今はいそがぬ旅なれとて、卽御歸洛を止り給ひ、更に東國化益の事を思召立れける、然るに因緣の引所にや、はからずも當國に來らせ給ひ、往々所緣に隨つて、化益を施し、經歷し給ふに、一日この等力鄕に行くれ、彼方此方と宿りを求めさせ給ひしが、但有叢林の中に、一字の梵刹(萬福寺是なり)見へ、しかば、卽彼所に至つて投宿し給ひけるに、住僧源誓、元より困學苦行のゑせものなれば、自法愛染の我情を逞ふし、一時に聖人を挫んと、圓頓三乘の奥旨をふるひ、卒爾に難問を發せしかば、聖人これに對して、本願一實、絕對特妙の法を以て、臨機應變恰も環の端なきが如く說ふせ給へば、さしもの源誓終に廣大無邊の高德をはかる事能はず、夢路をたどるこゝちして、忽ち我慢の幢調み、歸法屈伏し、竟に御弟子の列にぞ加はりけり、爰におひて、高祖當寺に數日御淹留まし〱、諸方に敎化なし給ふに、源誓日々に隨從し、聞法利益數度なりしかば、頓に異宗の淵源をきはめ、歡喜踊躍して、誠に念佛の信者とぞなりにけり、既にして聖人更に他邦に移らんとて、其催をなし給へば、源誓やがて淨菜を調へ、御出立の御膳をすゝめまいらするに、聖人卽喫しおはらせ給ひ、二條の杉箸を取て、堂の傍なる地に植て、誓てのたま

はく、我きく、如來大悲の加する所は、枯たる木にも花咲くとかや、されば凡夫の往生とても、又々かくのごとくなるべしと、終に別れを告てぞ去給ふ、さるにても、權者の奇特いちじるくいまだ幾日を經ざるに、彼箸漸に根芽を生じ、いつしか大木と成りけるは、不思議なんどもおろかなり、かゝりし程に、源誓此二木を守る事、尙聖人を敬するごとく、日夜心を盡されしが、法齡かぎりあるにや、源誓既に入寂有て、其後はるかの春秋を重ね、承應二年の事なりしに、民屋より出火して、此二株の杉の樹にうつり、上なる鳥の巢につたひて、靈木忽ち燒失んとす、此時源誓自作の肖像、佛室より飛出やにはに彼木に攀のぼり、兩手をあげて悉く是をうち消し給ひしとなん、爰を以て、世に當院を、杉の御坊とは稱しける、

靈佛聖德太子御自作尊像○中略　馬蹄石　御箸杉○註略　源誓房自作の肖像○註略

寺領

(萬福寺文書)禁制　甲斐國等力鄉內万福寺

右於當寺領者、將軍家御祈禱所也、軍勢幷甲乙人等不可有亂妨狼藉、若至違犯之輩者、可被處罪科之狀如件、

正平七年閏二月三日　安藝守判

寺制

(萬福寺文書)定

一寺中家参間棟別之事

一同宿拾人普請役之事

右二箇條之分、長令免許者也、仍如件、

永祿五年壬戌十月十日　朱印○武田信玄

萬福寺

雜載

(萬福寺文書)甲斐國萬福寺別當源誓、可抽祈禱懇志之由、天氣如此、悉之以狀、

建武元年三月九日　式部卿判

名勝　所在

創建

萬福寺

萬福寺ハ、甲斐國山梨郡栗原村ニ在リ、萬治年中、等力村萬福寺ノ後見僧存秀、東本願寺派ニ歸依シ、分離シテ別ニ一寺ヲ創ス、卽チ當寺ナリ、今東本願寺ノ末寺タリ、

〔和漢三才圖會　甲斐六十九〕萬福寺　在山梨郡栗原村東派

轟村萬福寺、萬治年中歸參東派、而爭論不果、以鈞命爲二個寺、故東西兩派有同寺號、

〔甲斐國志　佛寺七十五〕山梨郡栗原筋

一等力山萬福寺　〇同下栗原村　淨土眞宗、東本願寺末、除地貳段八畝步、萬治元年等力村萬福寺ノ後見存秀、此ニ遷リ、新ニ當寺ヲ創セリト云、初存秀轉派ノ時、東西本願寺爭論ニ及ビ、公裁ヲ蒙リ、萬福寺ハ西ヨリ相續シ、存秀ハ東派一寺建立スベキ趣ニテ、於富士根方賜三千三百九十八坪地、然レドモ遼濶曠土ニシテ、造寺ナシ難ク、本村稅地ノ內ニ一寺ヲ建テ、今ノ寺山號トセリ、正德五未年、依打量除之、本堂方九間　貳尺　本尊太子ノ刻ト云ハ太子馬上像、同御爪髮、南無佛分身舍利、阿彌陀善導大師影像、各古畫ナリ、法然名號、親鸞色袈繪像、並法然親鸞連座影像、日蓮書寫法華經紺紙金泥　二河白導曼茶羅賴源律師書　和讃三帖卷末本願寺釋顯如在判、元龜三年壬申十二月六日トアリ、親鸞遺骨、實悟添狀アリ、

此開山親鸞聖人御骨は、去ぬる享祿元年秋望、信濃國に下向し、ながぬまの淨興寺所持候を所望し候中、少わけて七月十八日にとり候內まいらせ候、御信仰肝要也、

元龜三年七月廿五日　願得寺　實悟判

按ニ、淨興寺ハ靜寺、今越後高田ニ在リ、願得寺ハ在ニ川內古橋、東派遠支ノ寺也、實悟ハ實如ノ弟ナリ、脇寮四箇、西林寺、慶仙寺、西敎寺、正林寺、

名稱　所在　創建　沿革　寺領　寺職

大泉寺

大泉寺ハ、甲斐國山梨郡古府中ニ在リ、大永年中、武田信虎ノ創建スル所ニシテ、宗派ハ曹洞宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會 甲斐 六十九〕大泉寺 在府中 曹洞宗 寺領三十石
當國曹洞派僧錄寺

〔甲斐國志 佛寺 七十三〕府中
一萬年山大泉寺 古府中 曹洞宗、下總國府臺總寧寺末、御朱印寺領三拾壹石六斗餘、境內山林諸役免許、本州曹洞一派、八百餘寺僧錄司也、中山廣嚴院隔年勤之 常法幢七寺ノ一ナリ、武田左京大夫信虎、大永中創建シテ、招天桂禪長、爲開山第一祖、〇中略 註分國中ノ僧錄所トシ、且爲菩提寺、同二年、同四甲申、兩年夏結制會修行アリ、二世吸江英心ハ、信虎ノ弟ニテ、信玄ニハ叔父ナリ、相紹テ、天文中甲信二州ノ僧錄タリ、五年甲天總寅ノ時ニ迫テ、永祿壬子三月三日、火災ニ罹リテ、以前ノ典籍等盡ク失之、於是甲天奔テ信州高遠ニ至ル、信玄安東ヲ遣シテ迎之、同十卯年、殿堂再造成テ、賜絹三拾匹、錢五百貫、天正二甲戌年三月五日、信虎入道卒於高遠、舁柩來テ當寺ニ葬ル、〇中略 佛殿 九間半七間半、本尊拈華釋迦、〇中略 法堂 十一間八間、同、本尊正觀音 慧覺大師ノ作

〔寺格帳 下曹洞宗〕高三拾壹石六斗餘 御朱印　同州(甲斐古府中 大泉寺
右二ケ寺〇大泉寺、中山廣嚴院、住職、本寺國府臺總寧寺ゟ申付ル、

名稱
所在
沿革
堂塔

立正寺

立正寺ハ、甲斐國山梨郡休息村ニ在リ、日蓮宗身延山派ニ屬ス、此寺初メ眞言宗ニ屬シ、胎藏寺ト稱セシガ、文永十一年、僧日蓮ノ來テ安國論ヲ講ジ、次デ建治二年、日蓮ノ弟子日法ノ來テ、再ビ同書ヲ講ズルヤ、寺僧宥範信伏シテ、遂ニ日蓮ノ弟子ト爲リ、日乘ト稱シ、寺號ヲ改メテ、立正寺ト云フ、乃チ日法ヲ開山ト爲シ、日乘ヲ二世ト爲セリ、

〔甲斐國志 七十五 佛寺〕山梨郡栗原筋

一休息山立正寺 休息村　日蓮宗身延山客末、一本寺格式稱ス、御朱印拾八石六斗餘、境内四千百五拾坪、此地本云北原、日蓮年譜云、文永六年、如甲州吉田、中略遊化勝沼北原田波黑川、ト、卽是ナリ、寺記云、當寺ハ眞言宗、云金剛山胎藏寺、本尊子安地藏、別當辻之坊、宥範阿闍梨住焉、年譜攷異云、日乘稱式部阿闍梨、號眞妙、俗姓鮎澤氏、甲州北原人、初修驗、號宥範法師、住辻之坊、又曰東大坊、爲千坊之魁、宥範作宥範、蓋記者之失、文永甲戌、一〇十年日蓮來講立正安國論於寺傍之盤石上、宥範在會、建治二年、日法來敎化、再講安國論、於是宥範信伏、遂與日法登于延山拜日蓮爲師、賜名日乘、乃改舊規、年譜攷異云、扁曰安國山立正寺、里民亦改地名休足村、蓋因山號之改乎、推尊日蓮爲第一祖、日法爲二世、日乘自居三世、至今三十三世矣、日法所彫刻日蓮四十五歲之影像、而折伏之容也、今安于本堂、堂前有一古松、稱祖師掛袈裟松、日乘延慶三戌年十二月十九日寂、年八十九、住職三十五年ト云、初隸駿州岡宮光長寺、八品勝劣ノ法流タリ、年譜攷異云、岡宮日春、字空存、稱蓮明阿闍梨、姓鮎澤氏、甲州山梨郡人、初寓枝之巽、住光長寺、日乘同族也、亦請日法、改宗立以爲初祖、日乘爲二世、天正十九年正月、十三世實修院日定ニ至テ身延山ニ屬ス、本堂釋迦大黑天、鬼子母神、日法作庫裏、諸堂ノ營作頗ル宏麗ナリ、番神堂、境内ニ在リ、村中稱爲座神、番神畫像日蓮開眼也、稻荷堂、嘗テ都留郡谷村城中所祭有、由遷來于此ト云、塔頭十八坊、南之坊、東之坊、西之坊、北之坊、上之坊、正覺坊以上六坊役院也大乘坊、大圓坊存ス辻之坊、本妙坊、泉之坊、中之坊、下之坊、本迹坊、性善坊、海善坊、蓮心坊、安立坊、十箇ハ廢セリ末寺七箇アリ、寺寶所藏佛安四大戈、辛巳九月日、日蓮曼荼羅、俗日常授與之トアリ同年同日、青蓮華本尊ト稱スル一幅、同筆ナリ大黑畫讚云、大去垢

者、表三諦也、袋者空諦也、打出者假諦也、心正中道也、中道者實相妙法蓮華經是也、御經云、受持法華名者、福不可量々々、三大事可秘々々、日蓮（在判）沙門日興授與之、（日興ハ富士派ノ祖）正和元壬子年十月十二日、日法曼荼羅一幅、（授與伊藤龜松）正安元己亥年七月十一日、日乘曼荼羅一幅、（授與今井住人）其外古傳ノ書畫經文類、略シテ不枚擧、辛卯二月二日、（天正十九）羽柴少將家人入江左近手代入江金七正家印書、大坊、并十二坊、坪錢諸役免許云々、六坊ノ事ハ、身延歸依ニ付令免許トアリ、同二十年九月、加藤光泰ノ印書、慶長八年四奉行證文一通、北原家書一通、（是ハ當寺ノ事ニハ與カラズ）慶安二年八月十七日、御朱印以來、御代々如他例、

〔本化別頭佛祖統紀（十一列傳）〕甲州安國山立正寺開山日法上人傳

師諱日法、呼和泉阿闍梨、父名芝田右近、師智行兼美、威儀嚴密、高祖（○日蓮）身延隱棲之間、温席暖床、具竭孝思矣、初高祖遊山梨郡等力鄕北原村、有眞言精舍金剛山胎藏寺、地藏堂傍有一敧石、（此石今尚存、呼法輪石、）高祖倚之講立正安國論、師重而往化、時之寺主延而相見、道話累日、師之法針痛透骨髓、主僧如夢醒、始知舊業非、偕至身延師崇高祖、高祖賜名日乘、寺之檀越相議不際、終共乘請師、更肪呼安國山立正寺、其地後呼日蓮休息村、慈澤追日而洽于時、駿州岡宮天台宗僧空存歸高祖化、改宗更衣執弟子禮、兼欽師德、慇懃請之、師往、今之光長寺是也、曆應四年辛巳正月五日、無疾泊然而化、九十歲也、師性得彫刻之巧、而以廢道行、誓不取刀、身延澗畔偶見異光、夜々以爾、師就視之、檜樹百尺、直幹凌雲、師以爲靈材也、吾師百年之後、必遺似像、其柔和有威、卑謙具相、弗于庸工之所及、吾絕刀再起、爲萬世福田、可乎、乃告高祖、高祖聽許之、師誦陀羅尼、加之呪之、伐而造材、成等身像三軀、慈眼威容傳神儼然、高祖自修點眼、命措于身延長與長榮三山、師復取殘木刻之、自珍、高祖見之當傍、剃髮之次、手植鬢髮於後、常在院日朝請之、新築妙光寺崇之、今總之下州多胡靈像是也、高祖滅後、因法眷之需、刻之數多、中山法華經寺、小湊誕生寺、那瀨妙法寺、濱之法華寺、洛之妙顯寺、休息立正寺等之影堂、皆師之所作、其餘

小像尤多、靈驗著云、

〔本化別頭佛祖統紀列傳十二〕甲州休息立正寺第二代日乘上人傳

師諱日乘、號眞妙院、俗姓者鮎澤氏、元眞言宗、呼式部阿闍梨、有智行兼美之譽、主于山梨郡等力郷北原村金剛山胎藏寺也、吾高祖〇日蓮嘗遊于斯地、地藏堂傍有石而麗、掛杖休息、因唱四箇公言、講立正安國論一七日、四衆預聽、是時師亦間坐竊聞、宿善所勵、心田得霑、皮裏發陽、視他毀辱、爲之矯險、崇師傳故、心不淨者、亦甚不遠、建治二年丙子、和泉阿闍梨日法、又弘化此地、師出迎而篤、私稱安國論、扣其奥旨、日法滞留數日、觀其機熟、示以本化別付之大事、師感涙之無已、合爪九拜、直隨法上、詣于身延、更衣受戒、重請法上、以奉寺院、法上遷于方丈、師掃床洗盂、執驅烏役、衆見不愜、檀越亦和、是以法上爲開山祖、師居二代位、更牓呼安國山立正寺、取立正安國論之字、村民亦改北原村、呼休息村、大菩薩休息之地故也、法上應空存請、往駿之岡宮、手自剡高祖似像、遺之、師延慶三年庚戌十二月十九日、疾而示寂、

寺格

〔寺社分限記日蓮宗五〕開山日法　安國山　甲州休息村　立正寺日儀色衣

聖人寺、中老十八人之内、身延山之末寺也、

名稱　所在　創建

一蓮寺

一蓮寺ハ、甲斐國山梨郡甲府ニ在リ、正和年中、一條時信ノ創建スル所ニシテ、其弟僧朔日ヲ以テ開基トス、宗派ハ時宗ニ屬シ、相模國藤澤清淨光寺ニ隸ス、

〔甲斐國志佛寺七十三〕府中

一稻久山一蓮寺　時宗相州藤澤清淨光寺ノ末ナリ、稱一條道場稱願院、地方屬二蓮庄、御朱印寺領百八

拾石、（在二光寺村内一）城内七万坪、本堂南向、前立本尊阿彌陀坐像、（長七尺、慈覺大師作ト云）奥院三尊ノ阿彌陀立像、（善光寺如來、火災試ノ像ト稱セリ、）南ニ二王門、置金剛神、二階ノ上ニ七觀音ヲ安ズ、南西東三方ノ門外ニ、下馬札禁制札ヲ揭タリ、寺號ノ額ハ、後醍醐天皇ノ勅書、稻久山一條道場ノ額ハ、東山院ノ御筆也、中門ヨリ庫裏、方丈、書院ノ方ニ至ル所、舊觀宏麗ナリシニ、文化ノ始、延燒シテ烏有トナリ、修造未成、當寺ハ舊一條次郎忠頼ノ館跡ニテ、今ノ御城地ニ在リ、壽永三年忠頼於鎌倉被誅、時ニ婦人某氏落飾爲尼、侍婢亦斷髮者多シ、後遂ニ女僧ノ寺トナリキ、武田六郎信長一條氏ヲ承襲シテ、其孫一條源八時信爲甲斐守護職、其頃遊行二祖他阿眞敎上人本州ニ來化セシニ、時信歸依之、彼尼寺ヲ修飾シテ住持セシム、實ニ正和元年ナリ、時信ノ弟某ヲ他阿ノ弟子トシ、後ニ法阿朔日上人ト稱シ、爲之開山第一祖、（貞和五年丑十二月六日寂）是ヨリ世々法阿彌陀佛ヲ住持ノ諡號トス、開基時信ハ元亨元年酉正月廿七日卒ス、法名一蓮寺佛阿利安元貞居士ト云、舊記ヲ按ズルニ、一條甲斐守信方ヲ始トシ、一族門葉所寄寺領拾七町七反、屋敷二所アリ、（大抵今ノ高ニ可相當ニヤ）第五世尊觀法親王（南朝後村上帝ノ皇子ナリト云、遊行八世ノ弟子トナリ、至德二年ヨリ住當寺、二年ニシテ遊行ノ法水ヲ繼ギ、爲十二世他阿上人、修行中、應永七年於長州赤間關專念寺入寂ス、壽五十三、副住法阿ハ明德五年八月七日寂）第七世法阿上人ハ武田信春ノ庶男ナリ、文安五年八月朔日寂ス、同三年二月日、武田信重ノ文書、一條一蓮寺ノ客殿造營ノ事、去年既雖被仰、巧匠之暇、大儀之間未事行者歟、然當寺者、先祖代々氏寺、於其門徒異他在所也、旁難打置之間、已前雖及合力、猶以不成就、然者國中貴賤眞俗同心有助成者、且爲國、且爲結緣也、仍執達如件、沙彌花押アリ、其頃ニ客殿ノ造營ナリヌ、又過去帳ニ明應六年五月、大井ヨリ道場ノ材木ヲ運ブ由見タリ、天文永祿ノ際ニ至リ、福田ノ富、古ニ超過シテ、寺門ニ市ヲ爲シ、商買多集マル、因テ一條町一蓮寺小路ノ名アリ、軍鑑傳解ニ、御家中音信之定、同心足輕衆ノ寄親ヘ音物ハ、竹火繩三筋、或一條ノ大團扇一本ト見タリ、又白布ヲ織出シ、本州ノ佳品トス、號シテ曰柳下、（一說、其布ハ、昔時女僧ノ多ク聚居テ所織、是ナ始トス、凡縞布極白而帶淡青者爲美、故ニ名柳下、或ハ云、柳小路ノ下ニ織ケヌル町ナリシト故ニ名ケリトモ云）天正壬午ノ後、

寺格　寺領　寺職

平岩七之助城代ノ頃、市河平鹽寺ノ藥師堂ヲ、金子一枚ニ買タル由、法阿ノ手簡ニ見タリ、(此手簡市河ノ寶聚院ニ藏シ、當寺ニモ其案文ヲ留メリ、)十七八世ノ際ニ相當ルナルベシ、二代共ニ有德僧ニテ、十七世法阿ハ早ク退隱シテ、藤澤山ニ遷リ、彼寺破壞ヲ修理セリ、十八世ハ當寺ノ中興ト稱セリ、(元和三巳年三月二日寂)此代ニ府城ノ新築ニ因テ今ノ地ニ遷レリ、加藤光泰領國ノ時ナリト、寺記又過去帳ニモ見タリ、然ドモ贈₂平鹽₁書簡ノ中ニ、當寺屋敷替地之事、大方可₂相濟₁分ニ可₃有₂御心易₁候トアリ、州人ノ口スル所モ、神祖ノ御繩張ト云傳ヘタレバ、以前ニ版築ノ御沙汰ハ相定マリ、當寺幷長延寺、住吉神社等ノ替地賜ヒシハ、同十七年伊奈熊藏檢地ノ時ニアリテ、加藤ノ領國ニ及ビ、遷寺造營セシナルベシ、四壁ノ溝涯積ミタル石マデモ、城壘同様ノ石ヲ用タル趣今ニ現然タレバ、殊ナル公役ト覺タリ、

〔寺格帳 下 時宗〕一高百八拾石 (御朱印)　甲州府中　一蓮寺

右住職、本寺藤澤清淨光寺ゟ申付ル、

一住職御禮無₂之、御暇無₂之、

一年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上壹束一本、

〔國花萬葉記 八甲斐〕一蓮寺　時宗　寺領(八十石、或云百八十石)

〔諸宗階級 下〕時宗門法服並法臈階級之次第(○中略)

一藤澤上人

右者、遊行上人諸國修行仕候以後ニ、藤澤山(○相模國藤澤清淨光寺)へ引籠候而、藤澤上人(與)申候、廻國遊行上無₂之中、万一藤澤上人遷化仕候得者、甲州府中一蓮寺ゟ藤澤山へ入山仕、清淨光寺住職仕、藤澤上人ニ罷成候、依₂之甲府一蓮寺儀ハ、本山補處之寺ト相定、一蓮寺入院之砌、熊野權現ゟ、神勅之遊行上人唯授₂壹人₁之傳法、相傳仕候、

享和元酉年十一月　淺草　日輪寺

名稱
所在
創建

景德院

景德院ハ、甲斐國八代郡田野村ニ在リ、天正年中、德川家康、武田氏追福ノ爲ニ、其沒落ノ地ニ建ツル所ニシテ、寺内ノ靈舍ニハ、武田勝賴以下數十人ノ牌子ヲ安ゼリ曹洞宗ニ屬ス、

〔甲斐國志佛寺七十六〕八代郡大石和筋

一天童山景德院田野村　曹洞宗、下總州國府臺總寧寺末、御朱印高七拾五石餘、

一稱田野寺、當寺ハ武田勝賴落命ノ地タルニ因テ、天正十年午七月、神祖御入國ノ刻、新規建立被仰出、田野鄕一圓ニ御寄附、爲菩提所給ヘリ山林凡七里程、寺領百姓七拾五俵定受、故ニ七拾五石ト唱ヘタリ、同十七丑年、伊奈熊藏繩入リ用捨ノ文書有之、同廿年二月六日、兒玉太郎右衛門氏豐、同月八日、加藤光泰、文祿二年六月十七日、加藤平兵衛附光政、同三年二月五日、淺野右近太輔忠吉、以上印書所藏皆寺家門前屋敷山林守護不入、諸役免許ノ旨ヲ載セタリ、無高ナリ、殉死士土屋惣三ヲ始メ殘リナク立位牌、茶湯燒香可爲嚴密、仍之初鹿野村分内ニテ一所御寄附ナリ、今云之茶湯山中山廣嚴院後ノ七世拈橋倶因、俗姓小宮山、丹後守ノ男、住持職ヲ命ゼラレ、同十六年造立落成、拈橋寂シテ後無住ナリ、中山ヨリ兼帶スルコト、殆ド五拾餘年、及寬永中、武田舊臣、當時奉仕幕府者數人云云ノ事アリテ、中山ヲ離末シ、總寧寺ニ隸シム、右ノ文書三通、今藏之、一寬永八年未二月十五日、廣嚴院玄利、中山十二世住川窪與左衛門殿、同主膳正殿、眞田隱岐守殿、同長兵衛殿、駒井右京進殿、跡部民部少輔殿、向井將監殿、橫田甚右衛門殿同次郎兵衛殿、一江戶三箇ノ役寺ヨリ、爲託言中山證文ニ添タル趣、以來田野寺ノ儀、從中山少モ構申間敷トアリ、寬永十酉年卯月廿四日、總寧寺良尊、大中寺韓鶯、龍穩寺春道各ヨリ川窪與左衛門殿、同越前守殿、秋山修理殿、眞田長兵衛殿、高室金兵衛殿、向井將監殿、橫田甚右衛門殿、同次郎兵衛殿、跡部民部殿、土屋民部殿トアリ、一右三寺ヨリ尾畑勘兵衛樣トアル書牘、是モ離末ノ事ヲ載セタリ、又三通ハ尾畑勘兵衛景憲ガ田

名稱
所在

野寺住持本策ヘ贈ル書、（全文皆附錄ニ記セリ）保秀本策ハ當寺ニ住シテ、越前實慶寺ニ移轉スト云、事迹不詳、今前住ト稱セリ、總享十七世骨山恕徹ヲ推テ爲開山一祖、勝國良尊ヲ二世トス、莊嚴頗ル備レリ、本堂（拾間六間）本尊釋迦、文殊、普賢、靈屋（三間四間、額甲將殿、勅賜紫臣僧空子書）、勝頼、夫人、信勝影像三軀、及殉死萱僧貳人、士三拾三人、侍婢拾六人ノ牌子ヲ列セリ、（姓名法諱ハ附錄ニ記セリ）開山堂（三間四間）永平道元古開山、拈橋當開山木像、世次ノ位牌、東照宮及御代々ノ尊牌、幷ニ機山信玄ノ牌ヲ安ジ、又珠光院無角道牛居士トアルハ、尾畑景憲ノ牌ナリ、總門（額ハ山號）三門（額ハ寺號）衆寮（入門四門）庫裏鐘樓等アリ、塔司慈眼院、本尊ハ觀音、鄕中鎭守不動堂攝之、地藏庵ハ總門前ニ在リ、旗立松偃蓋（九間六間）庭前ニアリ、生害石靈屋前ニ在ル巨石ヲ云、寺領民戸五拾四、口貳百六（男百壹、女百五）、末寺壹、壬午ノ事跡ハ古跡部ニ記セリ、併セ看ルベシ、

久遠寺

久遠寺ハ、甲斐國巨摩郡身延山ニ在リ、文永中、日蓮宗ノ開祖日蓮ノ隱遁セシ古跡ニシテ、其武藏國池上ニ沒スルヤ、弟子日朗等、其遺骨ヲ奉ジテ遠ク玆ニ葬ル、卽チ同宗一致派ノ總本山タリ、

〔甲斐國志（八十七佛寺）〕巨摩郡西河内領

一身延山久遠寺　稱妙法華院、日蓮宗總本寺ナリ、從府中南九里貳拾町、（自鰍澤宿五里拾三町、自下山宿壹里、）東海道與津驛ヨリ、北方拾三里ニ當レリ、（自岩淵宿拾壹里八町、自南部宿三里、）此地古昔南部御牧ニ屬セリ、日蓮書ニ、甲州南部御牧波木井鄕身延嶺トアル是也、身延字舊作蓑夫、蓋瀑流ニ因テ得名カ、古歌わすれては雨かとぞ思ふ瀧の音にみのぶの山の名をやからまし、トアル意ナルベシ、西行歌ニモ、雨しのぐみのぶの里ト詠リ、日蓮住シテ改字ト云傳タリ、（天正頃文書ニ、美濃部又身部山九恩寺トモ見エタルハ、蓋時変ニ所記ナリ、）古蹟部ニ詳

創建沿革

ニセリ、今ノ寺域ハ東限塩澤波木井村ナリ、西小縄(高住赤澤)村ト云、追分山ニ堺シ、南鷹取山ニ接シ、大城村小田舟原等アリ、北奥院身延山ト唱フ、下山村ノ山界ナリ、方凡七拾八町ト云、其山間ニ、堂塔僧坊ノ碁置セル所七谷アリ、鷲谷、西谷、東谷、醍醐谷、蓮華谷、金剛谷、中谷ト名ク、身延鏡、加南谷為八谷、身延町ハ三門前ニ續キ、外ニ塩澤新宿ト云所ニモ人戸アリ、溪流ハ鷹取山下ニ發スルヲ田代川ト呼ビ、追分山、身延山ノ際ヨリ起ルヲ樋澤川ト云、三門ノ下ニ合シテ身延川ト名ク、注浪木川富士川ニ入ル、寺域内ニハ播種ノ地稀ナリ、

〔別當扶宗明文志〕身延山伽藍記(附臺上夢說)

文永十一年甲戌、吾祖嘉遯、應波木井氏請到于甲地、僅結小茅、淨界百餘弓、鷹取嶽麓、猿鹿為伍、去俗數里、讀誦唱題、快得安穩矣、桃李成蹊、終為一會、別開方六丈佛殿、扁呼身延山久遠寺、祝釐拈香、為宗門祖山、六萬恒沙、相次而出也、世不乏人、滅後如今、二百餘年、濫觴一水、滔為法海也、檀越實長、又內秘之人、預識後興隆、竊廻遠鑑、四至增地、於峯於阜、于谿于河、周匝不測、殆甲天下矣、吾師朝公、來主于茲、是地隘狹、衆每苦之、師振鼎建之力、移今之地、躬自鋤山塞谷、拽木搬石、殿堂樓廡、迄于子院孫舍、各抱地勢、各得其處、達巷交衢、俗民亦得其便也、於後偶見古經外帙、烟煤敗墨之間、微見字形、掃塵細閱、第五代鏡圓臺上之識文也、其文曰、貞和二年丙戌九月二十日之夜夢、山僧偶遊隣村梅平、回顧山巔、有塔之九輪下之一等、平地如砥、宏基鉅構、殿堂樓閣、欝乎盛矣、村居處處、傍崖抱流、農夫取役、夢裏思念、他日吾山、嘉運有時、輪奐至是歟、夢醒矣、刀就其九輪之地、築八幡社、以誌之云、吾師能畢見之、敢不語人、余竊稟命拜之、奇哉、八幡舊社今猶存也、謹惟、高祖遺訓往往言、身延山者、眞之靈山事之常寂光土也、然則三災不燒、四劫不遷、久遠却來、靈山一會、儼然未散、實本國土妙者也、凡夫不識、悲夫、臺上者託夢而說理、朝公者卽理而跡事相、聖者之域、足俯而可信者乎哉、文明十年戊戌正月八日、

〔日蓮註畫讚五〕入身延山第二十七

三諫不納、奉身以退、見可諫而不諫、謂之尸位、見可退而不退、謂之懷寵、因茲當理事迹無戯、是古文也、今諫及三、國主不肯、欲入山林、同年（文永十一年）五月十二日、出鎌倉宿酒匂、十三日竹下、十四日車返、十五日大宮、十六日南部、十七日入于甲斐國波木井鄕（飯野御牧三箇鄕内也、身延山、自波木井鄕當乾、彼山地頭者、南部六郎入道實長、法名日圓、是人師檀那也、先祖者、新羅三郎義淸光、義、淸光、光行、實長、貞觀皇帝十二代胤鈇、）六月十七日、初結庵於身延山、（中略）山棲九年、齡六十一、晝夜讀誦妙法華經、（中略）

示寂第三十

弘安五年壬午九月十八日、入于武藏國荏原郡千束鄕池上村右衞門大夫宗仲屋、（中略）臨終焉近時、歷告朗公等長弟曰、我死全身納瓶、送置身延山、日朗云、一日半日道、應任尊命、道既及三四日、謗法充滿國、御存日往覆路、尙不容易、只如法奉荼毗、不殘御遺骨、奉納延山、聖人然可、准此遺告、葬于池上、御身骨納于身延也、

收取遺骨第三十一

然以火而賦、火滅已後、收取遺骨、如如來滅後迦葉等尊者等耶、旬舍利、蹈遺命送延山、同二十一日、出地上宿飯田、二十二日湯本、二十三日車返、二十四日上野南條七郎家、二十五日入身延山、同二十九日日法剃眞影、四十九日遷影堂、一百箇日起廟納骨、弘安六年癸未正月、於久遠寺定年中番帳、長幼諸弟精勤給仕、（番帳如彼）

〔甲斐國志（八十七佛寺）〕巨摩郡西河内領

一身延山久遠寺　文永十一年甲戌五月、日蓮上人應南部六郎實長請此山ニ入ル、（實長ハ南部三郎光行ノ庶男、卽波木井三鄕領主ナリ、）今ノ西谷ト云處ニ草庵ヲ構ヘ居之、弘安四年又別ニ構一堂、縱横六丈、號曰身延山久遠寺、（日蓮當ニ、坊ハ十間四面ニ廟サシテ遺リアゲテト云々、宗徒斥ニ此書、名ニ地引書、）同五年九月日蓮住武州池上、十月十三日、於彼處化ス、年六十一、遺戒シテ收骨身延澤築塔ト云、在本門九年ナリ、正應元年ニ至リ、守塔輪次七年而殆將

堂塔

就荒涼、於是止輪、次定住持、今ニ及テ五十三世ナリ、(住持名具下)文明中、行學院日朝令ノ地ニ遷寺經營セリ、(圖敎院日意所著身延鑑記一篇、見于圖經、)日朝住持スルコト四十年、此時宗門ノ規範大ニ具ハル、因後世稱日朝爲中興、日意、日傳相續テ、宗風廣布修飾益加ハル、日鏡、日叙、日整、日新相承テ天正ノ末ニ至ル、武田信虎起信、領主梅雪齋不白、寄地爲外護、(顯淨土之島、寺平等附事、古蹟部ニ委シ、)信玄寄書、國中諸末寺ノ進退ヲ許容ス、諸士ニハ、秋山氏、原氏、小幡黨旦越タリ、壬午ノ後、穴山勝千代ノ印書ニ准ジ、山林並寺家門前諸役免許、神祖御判物御朱印ヲ併賜ハリヌ、又豐臣殿下ノ姊瑞龍院殿日秀宗旨ニ歸依シ、堂塔ヲ增修ス、以故殿下ノ書牘等當寺ニ存セリ、豐臣少將(○秀秋)加藤(○光政)淺野(○長晟)ノ封國タリシ時モ、寺產如前々、今皆印書ヲ藏セリ、慶長元和以來、蓮華院殿、(後改養珠院殿、おまんの方也、)廿二世日遠ニ歸依アリシニ因テ、紀伊殿、水戶殿ノ被執コト斜ナラズ、甲府綱重卿ノ御母順性院殿ニモ歸依シテ、靈祠ヲ建ラル、文昭廟(○德川家宣)ノ御祖母ナリ、元祿六年五月六日住持日脫、同十四年五月十九日住持日省、寶永三年四月五日住持日享等、紫衣參內免許セラレ、正德元年五月七日、御祈禱所ニ被仰付、口宣御內書等數通、今皆藏之、右ノ趣ニヨリ、貴賤香火ノ徒競集シテ、莊嚴頗宏大ヲ就セリトナン、是故當寺ニ所藏古公文書ノ類ハ、有コト無シト云、日遠ノ歌トテ、口碑傳フルアリ、

うつぶさにさのみは人のねられねば月をみのぶにおきかへるなり

〔身延道之記〕母のねがひにて、身延にまうでし比、近江の國よりせうそこせし人のもとへ、

せめて世をのがれしかひの身延山すむらん月をたづねてや見む、

廿五日(○萬治二年八月)南部と云村にやすみて、午のさがりにそこをいづ、むらをはなるれば、はや身延の高根も見ゆ、いま三里なんありと云、(○中略)申のさがりに身延につく、その山のさま、たとへばひえの山をひんがし坂本よりのぼる心地すべし、過にし春の比、夢にこの山にまうでしに、おもかげや、たがはず、此たびまうづべき瑞夢にやと、今ぞおもひあはせらる、淸水坊と云に著て、まづ燒火せさせて、けふの寒

かゝりしもわすれたり、　廿六日、よべより雨ふりて、ひるのほどすこしはれ間ありける、此ひまに諸堂おがまんとて、西谷より橋わたりてのぼる、山水の奇秀はさらにもいはず、伽藍の莊嚴奇麗又いはんかたなし、ひとつ〳〵しるさまほしけれど、みじかき筆のおよぶべきならねば中々やみぬ、書圖などには似るものなるを、あはれ繪かく人もがなともとむれどもかひなし、老僧二三人、祖師堂の開帳す、御影おがみ、しづかにねんずして、○中略それよりこなたかなためぐりて、御骨堂にまいり、おがみ奉る玉の寶塔の中にいとあざやかなり、

なにゆへにくだきし骨のなごりぞとおもへば袖に玉ぞ散ける　廿七日、奥院へまいる、母はこしなれどなほくるし、二十町ばかりのぼりて、水飲と云所より道ことにけはしくて、たび〳〵やすみてからうじて著ぬ、八間四面の堂に、爰にも御影ありて、いとたうとくおがみ奉る、うしろに大なる木あり、そのもとをほりて、父の遺骨をおさめ、おのがそりかみをもうづみぬ、あへてそこなひやぶらずといへるもおもひ出で、つゝみ紙に書つけたる歌、

いたづらに身をばやぶらで法のため我くろかみをすてし嬉しさ、高祖上人の九年のあいだ、日ごとに此峯にのぼりて房州のかたをのぞみ、父母の御墓をこひしのび給ひし事、良にかたじけなし、○中略時の間に雲うづみて、ゆく人の迹見へず、たどる〳〵くだりて、きのふ殘りじ所々おがみめぐる、丈六の佛は中正院僧都の作なり、石のきざはしわする計おりて、山門にのぼり羅漢おがみ、しばし高欄によりて眺望す、前に川瀨、そのめぐり皆山なり、　廿八日、身延を出る、

〔身延鑑六〕是より身延町と申侍り、總門よりは五町あり、軒數五百餘もあり、下町、中町、上町、裏町、車坂町と申也、町内に池上宗長、波木井實長、熊王丸が子孫有、町の中、右へ行道は甲府への道なり、片阿澤と申侍り、總門より三門までは十二町、制札下馬のふだあり、三門は南むき七間に十三間、左右のろうもんは、三間半に五間、上の閣には、十六らかんまします、○中略すぎ檜松柏のなみ木しげ

り合たる道を、壹町半あまり行て、石だんの階あり、老僧のいわく、此石段の高さ五十八間、二百八十七段あり、その内に三所にやすみ所あり、右の方の谷をばうぐひす谷といふなり、西行法師の歌に、

あめしのぐ賤夫のさとの垣柴しすだちぞ初るうぐひすのこゑ、今この谷にて、うぐひすはつ香を出し諸方の谷にてなくとなり、左に見へたるは浴室なり、毎月六度たきて、滿山の大衆、誦經して入る也、京極拾遺高國の再興なり、いしのだんのうへに見へたるは、持國毗沙門の二天門なり、三間に七間也、○中略 左に三間四めんの多寶塔あり、六浦平次郎入道さいこうなり、本尊は正中口第三代日祐聖人の造立なり、右に三間半四面のしゆろう堂有、本堂までは五拾間、堂はみなみむき、十三間四方なり、額は近衞三藐院殿のふで也、再興は太閤秀吉公也とおしゆる人あり、おがみ申せば、靈山會上の儀式をうつし、兩尊四ばさつ、もんじゆ、ふげん、いらかをならべ立給ふ、本堂より廊下ありて、祖師影堂にいたれば、七寶しやうごんをかざり、金のまきばしら、輪燈、幡蓋數百ながれ、千百あしの經机、常燈の數かゞやきて、六時の勤行おこたりなし、老僧申され侍るは、此祖師の御影は、中老日法聖人の御作にて、四季に御小袖をめしかへさせ給ふ、堂は貳拾壹間四面なり、四箇の大會とて、嚴重の法事あり、ことに十月大會には、駿河、甲斐、信濃の三箇國の諸まつ寺あつまりて、梵唄伽陀の法用、十一日は兩高座の論義、十二日は壹部眞讀の法花經、黄昏に貫首の御説法すぎて七番の大師まひ、十二ばんの兒のまひ、十三日の朝、ちごの祭文よみおわり、ほんおん、對揚、受持、佛名等のしやうみやうありて、演説あり、其外、大會の儀式しな〳〵なり、祖師堂より廊下をつたひ位牌堂にいたる、いく千万の日月牌のいはゐあり老僧申され侍るは、此堂は十一間に十三間也、うしろに見へたるはたいこだう、三間四めんあり、堂まへの壹丈貳尺ある八ッの金どうろう、毎夜の燈明なり、祖師堂の御前に、三間四面のはたふしかゝり、三間七間のがく屋の見

へて侍るは、兒のまひのぶたいなり、あれに見へたる古木のさくらは、妙法ざくらと申、又は立正會ざくらとも申なり、此花のさかりに、立正會と申大論義あり、宗要文要、算題一句詰二句詰、初重、二重の問講、精義、精難とりどりの執行なり、貫首をば手ごしにのせ申、中老わか大衆は、そけんのうへに太刀をはき、五でうの袈裟にてかしらをつゝみ、本院より大堂まで、出仕のていは法花折伏破權明理の表示とかや、三間六間の佛供所回廊は九尺に廿八間なり、よくよくおがみ給へとおしへ給ふ、〇中略左の方の唐門玄關は方丈と申也、十一間に十三間、くわんばく秀次公の大母、瑞龍院殿の再興なり、歌あり、

五ッ三ッ障の雲もはれぬべし身延の山の嶺のあらしに、上段の畫は、ていかんの圖、次の間は西湖十雪のけいなり、はしの向なるは會合所と申也、貳拾間に廿一間、たんけい、あんあみの作のほとけあり、中の間は羅漢の繪、左右のゑやうじのゑはとうゑんめいがきく、周茂叔が蓮、林和靖が梅に鶴、商山の四皓、竹の林の七賢等の、けんゑんをかきたり、對面所は七間に八間、金のざしき、梅にうぐひす、椿に山鳥、岩に雉子を畫たり、小書院は六間に七間、古法眼の繪たり、上段は花清宮の圖、次の間は四季耕作の所、緣の間は蘆に雁、芙蓉にゑやかうを畫たり、大書院は九間に十一間、よし野の櫻、山家の春を畫きたり、老僧のいわく、この寶殿にこそ大聖人の御眞骨納りたまへり、おがみたてまつれば、八角の玉塔に、御れい骨のあざやかに見へさせ給へり、〇中略この寶殿は三間四面、元祖御造營の、十間四面の御堂のはしら道具なり、內の畫は狩野光信祖師一代を書たる也、中央の塗しきの四間四方、拜殿まで三間に貳十八間のらうかなり、定朝のさくの、四夜叉神立給ふ、拜殿は十三間四面、左右には公方將軍諸大名家の御位牌、歌仙の歌は、近衛基房公の筆なり、禮盤前机、火舍、花皿は、武田信玄軍中にて護摩修し給ふ道具なり、是なる二間四面のゑゆろう堂は、元祖在住山の時の鐘なり、學問所三間に七間、常の間は六間に七間、次の間五間に七間、大庫裏

什物

は十三間に拾五間、小庫裏は六間に七間、供膳所は七間に拾壹間、兒部屋、とゞまの長屋、本院のむねかず、總じて三拾六所なり、

〔天保集成絲綸錄 六十一〕天保五巳年四月

大目付江

甲州身延　久遠寺

備前　安藝　長門　筑前　筑後　肥前　肥後

右諸堂再建修復爲助成、右七箇國、幷御府內武家方、在町共、勸化御免、寺社奉行連印之勸化狀持參役僧ども、當午七月より來る丑六月迄、七箇年之間、御料、私領、在町可致巡行候間、信仰之輩者、物の多少によらず可致寄進旨、御料者御代官、私領者領主、地頭より可被申渡候、

午四月

〔續史愚抄 後桃園〕安永六年十一月十三日乙亥、此日、甲斐身延山七面堂、及堂舍火、(最純年代略記、)

〔甲斐國志 八十七 佛寺〕巨摩郡西河內領

一身延山久遠寺　立正安國論、(年譜ニ、延山日要聖人書曰、諸山所藏、凡有四本、一在洛本國寺、是爲廣本、一在身延山、是略本也、又在總州正中山、與眞間山、四本皆宗祖親書也ト云々、)

大曼多羅一幅、(左傍註云、文永八年辛未九月十二日、蒙□□□、流佐渡國、同十年癸酉七月八日圖之トアリ、絹地ナリ、是十界勸請、本尊構興カ、書法草卒ニ筆ヲ走ラス、後ニ所參具ニ記題者、)日弘安三年(大歲庚辰)六月日、同四年(大歲辛巳)四月五日ノ曼多羅等アリ、(旗曼多羅一幅、長五尺、横四尺五寸、內ニ貳尺九寸五分、圓形アリ、文字剝落シテ見ガタシ、)寺記云、曼荼羅二十五幅、消息十六幅、祖師書百三十卷、(其外代々曼荼羅雜書類、不可勝舉、)

書寫法華經　上宮太子筆、(藥草喩品第五、)傳敎大師筆、(全部、)智相丞筆、(紺紙金泥一部、)光明皇后、(五卷、)唐本全部七卷、(天文十九庚戌年十一月念四日、寄進甲州身延山久遠寺、從四位下武田大膳大夫兼信濃守源晴信判、每卷書之、又天文二十辛亥正月十一日、敬納此經ト、十四廿日識ノ副書アリ、)

後陽成皇帝御宸翰(南無妙法蓮華經七字)

寺制

靈元太上法皇御辰翰、(日蓮大菩薩五字)享保十五子年五月廿一日、都護前亞相(花押)(城後清○坊)添書一章、天台大師像(絹地、兆典司筆)、外佛畫、佛像、和漢筆蹟掛物、屛風、障子ノ張付等其品多シ、古法眼元信畫(三十六幅)、補之梅(二幅)、敬甫花鳥ノ類、今一々不枚擧、

(身延山久遠寺文書)甲州身延山之事

一久遠寺中同門前、殺生禁斷、幷竹木免許事、

一寺中幷門前諸役等、任舊規例免除之上、法度以下如前々從大坊可被申付事、

一大坊幷僧坊之被官人之外、令徘徊寺家町中、不可借俗家之權威事、

一分國中、久遠寺末寺等、如前々可爲住寺上人事、若寺僧末寺對本寺、於相企不儀之覺悟者、則從大坊可有追放、其上分國中不可許容事、

一□□寺內諸役免許事

右條々、永領掌不可有相違、以此旨彌佛法興隆無怠慢、修行肝要也、仍如件、

天正十六年十一月十日　御直判

甲斐國身延山

寺格寺職

(寺格帳下日蓮宗身延派)(御朱印)境內　本寺　(甲州身延)久遠寺

右住職山內評議之上相極ル、

(附札久遠寺住持代之節者、向後奉行所擴を以可申付之旨、伺之上、延享二丑年五月廿五日申渡之、)

一入院之御禮、御白書院獨禮、獻上貳束一卷、御閾之內貳疊目、

一御暇、於柳之間老中被仰渡、時服四拜領之、(廣蓋ニ而引)

一年頭御禮、御白書院獨禮、獻上貳束一卷、御閾之內貳疊目、

但卷數者、十六日上ル、

子院

一御暇、於二柳之間一老中被二仰渡一、時服四拜二領之一、廣畫ニ面引

〔甲斐國志八十七佛寺〕巨摩郡西河內領

一身延山久遠寺〇中略

山內房院百貳拾內貳拾六坊今廢

南之房不輕院　玉澤日昭ノ開基、中谷ニ在リ、　竹之房正法院　池上日朗ノ開基、西谷ニ在リ、

林藏房常在院　富士日興ノ開基、南谷ニ在リ、　樋澤房安立院　蓮原日向ノ開基、西谷ニ在リ、

山本房本國院　眞間日頂ノ開基、東谷ニ在リ、　寙之坊本應院　松野日持ノ開基、醍醐谷ニ在リ、

右六房跡、又六院家トモ唱フ、六老僧ノ房迹ナリ

智寂坊　端場坊四條金吾房跡　松井坊　清水坊　蘢坊　北之坊　大林坊

杉之坊　武井坊武田家建立　志摩坊　岸之坊　覺林坊日朗ノ坊迹　定林坊

法雲坊穗坂常陸宿坊　西之坊　圓臺坊　下之坊栗冠緒ノ舊迹　大乘坊　福泉坊

南延坊　積善坊　眞淨坊　慶林坊　大善坊　華之坊　東之坊　山之坊

佐倉坊　南向坊　戒善坊　蓮心坊　本行坊

右三拾貳坊、併二六坊一三拾八坊ヲ行事坊ト唱フ、山內ノ事ヲ與知ル役僧ナリ、九院家中老拾八坊ト云畠目アリ

〇中略

山內僧百六十七人、西谷檀林所化除之下男本院八拾貳人、坊舍百貳拾人、

門前民戶三百拾貳、身延町貳百五拾八、新宿貳拾壹、鹽澤三拾三、口千貳百拾七、男五百貳拾七、女六百九拾、

雜載

〔甲斐國志八十七佛寺〕巨摩郡西河內領

一身延山久遠寺〇中略　年中行事ノ次第

正月自元日至四日祈禱　五日廣宣流布祈禱、貫首法則滿座祝句、　六日記錄始
八日番神祭　十三日御頭會貫首說法過ギテ、三方膳七獻、　二月彼岸會說法讀誦
十五日涅槃會法事　十六日祖師誕生會　三月十八日立正會大論義
自二十日不易千部讀經　二十八日宗旨建會法事　四月八日佛生會和讃花摘說法
灌頂　五月十二日御難法事　六月四日傳敎大師講論義
七月七日靈寶蟲干　十五日施餓鬼盂蘭盆會ノ說法　十六日同前
八月十五日番神祭論義、月見、　九月十九日七面明神祭論義　十二日御難法事
十月十一日兩高座論義　十二日一部眞讀法華經、貫首說法、兒子舞樂十四組云、振鉾、甘洲、安
摩、二舞、千秋樂、還城樂、羅陵王、地久、拔頭、倍臚、蘇合香、獅子、延喜樂、　大衆舞七組云、開口、二人舞、移、松
請、烟送、柴燈、四人舞、　十三日兒祭文、貫首說法、法事、號之大會式、日蓮正忌日也、自十日至十三日、參詣男女、開闢免許御朱印ア
リ、
　十一月十一日御難法事　廿四日天台大師講、大論義算題
精義勤此役身延入結衆　十二月歲暮祈禱　每月八度堂參緣行道、貫首、滿山
出仕シテ、年中法華經一万部、天下御祈禱ナリ、

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕一元龜三壬申年初の正月廿一日に、信玄公、法花宗身延山へ御使をつかはされ候子細は、去年庚未に、織田信長、叡山をやくにより、身延を叡山になさるべく候間、身延山を御所望あり、其代にはなが野に寺を立、今の身延より大きに御普請仰付られ可相渡と被仰、身延山の各出家衆御返事に、日蓮聖人御影の前にて鬮をとり、其後尤と可申上とて、鬮を三度五度七度までとれども、合點の鬮おりず、其上山のかはらざる祈念とて、壹万部の法花經をよむ、不思議なり、日蓮聖人の御告多くありたりとのさたなり、それをば信玄公御存知なくて、以來は是非身延を東の叡山になさるべきと御内存定候つる、出家に惡しくあらぬ物とは、次の年酉の四月十二日

に思わたりて候なり、

妙法寺

妙法寺ハ、甲斐國巨摩郡小室村ニ在リ、僧日傳ノ開基ニシテ、日蓮宗本國寺派ノ一本山タリ、

〔和漢三才圖會 六十九 甲斐〕德永山妙法寺 在小室

開基 日傳上人、中老僧之內、

〔甲斐國志 八十五 佛寺〕巨摩郡西郡筋

一德榮山妙法寺 小室村 日蓮宗、御朱印寺領七石貳斗、寺中七百八拾坪、山林廣遠ニシテ小室山ト稱ス、日蓮年譜云、文永十一年五月、師將隱棲身延山、中略 小室有修驗、名曰善智、以法術鳴、是月大士從朗興二子、往而議論、善智箝口、且角法力、亦不能勝、乃毆距其居數百步、大士趺巨石說法、此地多蛭、農夫蠶女常殺之、大士戒其罪、皆曰、蛭噬人血、不可以不殺、大士呪詛之、自後雖有蛭、而不為人害、其蛭首有一黑子云、又曰、小室善智、陽降服、陰衘恚之、乃欲毒殺大士、自來供餅、大士詐為喫之而投庭、一狗食之忽斃、於是善智慚愧懺悔、丹誠受戒、移居朝夕敬事、是為日傳、然大士為狗造浮圖、孜異云、小室善智傳、統紀、身延鑑、小室寺記、各有小異、本文撰其正者而記、日傳字惠長、稱肥前阿闍梨、中老之一、初稱善智、文永中與大士抗論法義、又較法力、皆受屈、詳於小室記、建治中圖毒殺大士、而不成、乃悔罪受戒、因賜名授手書本尊、公乃營圍廬于延山、以奉晨昏、今醍醐谷志摩坊、其遺跡也、小室一村改宗、創精舍、號德榮山妙法寺、公開堂矣、乾元二年二月十二日寂、浮圖在延山、小室寺記、建武二乙亥二月十二日寂、年七十九、ニ作レリ、文永十一年ニ十八歲トアル時ハ、建武チ是トスベシ、乾元ノ字誤ナリ、トアリ、日傳自ラ祖師ノ像ヲ刻シテ安置セリ、即祖師ノ所開眼ナリ、寺記ニ、往古眞言宗ニテ、肥前上人ト申ハ、東三十三國山伏ノ司ナリ、按ニ、修驗本山派天台寺、當山派ハ眞言宗也、文永

寺格　寺領　名稱　所在　創建

中、日傳ヨリ開法ス、寺境山ニ倚テ高ク、東ヲ表トセリ、總門ヲ入テ門前人戶アリ、三門上十六羅漢、下二王ヲ安ゼリ、本堂（三室諸尊）右祖師堂（日蓮像、日法作、）左不退堂（位牌堂ナリ）鐘樓堂、万燈御供所攝待所アリ、右出仕門、客殿、方丈、寶藏、祈禱堂、常唱堂（肥前上人、改宗已前讀誦堂古址ナリト云、）行法水ト云井アリ、本願所等備レリ、西峯トテ後山ニ七面明神ノ宮アリ、山上拾町許ニ閼伽池（里人峯ノ瀧トモ呼ベリ）瀧關ノ淸水ト云ハ山內ヨリ出ヅ、思河ト名ク、瀧トナリテ流下ル、山內ニ三十番神、正八幡宮、七尾明神、熊野宮、妙見宮、稻荷宮、日惠大善神（里人御佛ト云）木開山日傳ノ石塔、妙法比丘尼ノ社ニ木像ヲ安ゼリ、肥前上人在俗ノ婦人壽姬ト云、後ニ爲尼トナリ、凡境內宏麗ナリ、萬卷陀羅尼會（開山正忌二月十二日ヨリ、祖師降誕日、同十六日マテ五日修行、此時武田家ノ禁札ニ曰、法花讀誦ノ內、門町諸商賣役之事、押買狼藉之事、喧嘩口論之事云云、天正九年二月十二日トアリ、）四箇ノ大會、八箇ノ法會ト云アリ、千部會（自二六月丑日一至二戌日十日一）塔頭十三字、山內ニ散在セリ、此餘寺記不差出、故不詳、

〔寺格帳 下 日蓮宗本圀寺派〕 御朱印 一高七石貳斗　無本寺　甲州小室　妙法寺

右住職、地中相談之上相定、

一住職御禮無之、御暇無之、

一年頭御禮、御白書院、御次一同、獻上壹束壹本、

本遠寺

本遠寺ハ、甲斐國巨摩郡大野村ニ在リ、慶長年中、日遠ノ創建スル所ニシテ、日蓮宗身延派ノ一本寺ナリ、

〔和漢三才圖會 甲斐 六十九〕本遠寺　在大野　法華　領三百六十石

〔甲斐國志 佛寺 八十七〕巨摩郡西河內領

一大野山本遠寺（大野村）　日蓮宗、御朱印寺領貳百六十石壹斗餘、（貳百拾石八斗七升、榛平村ノ内、四十九石貳斗貳合、大野村ノ一圓、）境内（百拾三間、貳百貳拾六間、）身延山二十二世日遠、慶長十四（己酉）年、此地ニ退隱セリ、是ヲ開山第一祖トス、紀伊頼宣卿ノ御母堂養珠院殿、殊日遠ニ歸依シ玉フ、因テ後修飾スル所ナリ、（日遠元和元年再住ニ身延、翌年復歸山、寛永七午年住ニ武州池上本門寺、同十九年三月五日於ニ彼地ニ寂、年七十一、）正保三年丙戌十月十三日、三世日性ノ時、御朱印ヲ賜ヒ、慶安三庚寅年、紀伊殿ヨリ諸堂造營アリ、四世日近ノ代ナリ、承應二巳年八月廿一日養珠院殿逝ス、同月廿九日、當寺ニ送葬、紀伊殿親ラ臨デ二夜三日ノ弔祭ヲ修セラルト云、今ニ至テ毎八月專使ヲ遣シ、追福ヲ修シ、常ニ堂塔寺境ノ修理等至懇ナリ、同三午年八月廿一日、紀伊殿（花押）書二通ヲ藏セリ、一當山以爲養珠院葬地、佛閣僧舍等、從前年悉建立之、其上又申大猷院殿、寺領高貳百六拾石餘、自官府充行訖矣、祭祀供役等不可令有闕略云々、一本遠寺者、以爲養珠院之菩提所、建立之、送葬遺骸地也、可爲紀州妹脊山養珠寺之上云々、又一章八月十七日（無年號）ノ書翰ニ、日遠上人從開基之節、被相定一箇之本寺之段、讓狀雖明白、內々從日延爲末寺之由依申掛、今度與彼地住僧日境、於寺社奉行所被遂對辨、（○中略）本寺無紛旨、松平出雲守被申渡云々、此時ヨリ一本寺ニ相極ル、日近ハ大僧都昇進ストナリ、御年賀ハ御白書院獨禮席被仰付、六年目正月廿八日ナリ、獻上一束一本、拜領物ナシ、有德廟ノ御時ヨリ御本丸西御丸御三卿方ヘ、正五九月御祈禱卷數ヲ獻上ト云、此時祖師ノ畫像ヲ本尊トス、大藏卿ノ筆養珠院殿ノ寄附ト云、毎度紀州ヨリ御使アリ、本堂（九間、拾壹間、）祖師ノ像ヲ置ケリ、（中老日法ノ作）書院（九間、拾壹間、）養珠院殿ノ御殿ナリ、身後ニ江戶ヨリ寄進セラル、祈禱堂、（四間、三間、）寛永三寅年養珠院殿建立ノ堂ナリ、後ニ祈禱堂トス、本尊五番善神、（頼宣卿寄附）釋迦像（日護ノ作）庫裏、（九間、拾壹間、）位牌堂、（四間、六間、）開山ノ像ヲ安ゼリ、（弟子日通ノ作）七面堂、鐘樓堂、二王門等頗宏麗ナリ、鬼子母神一軀、（日遠新禱本尊）日遠小像、（日遠作）三十番神畫像、（土佐畫）法華經、（不輕品日蓮書）日蓮一枚、本尊三幅、鬼子母神、十羅刹女像、（日蓮畫）日蓮書牘八通、日重、日乾、日遠本尊三幅、（乾遠ノ二幅ハ、養珠院殿ニ授與スル所ナリ、）日遠大本尊一幅、（金紙金泥、紀伊頼宣卿ノ靈中ニ授與スル所ナリ、）慈眼大師書

翰、日遠ニ身延山再住ヲ命セラルル演達ナリ、日遠ノ袈裟、念珠五色幡、白練袴各二箇、養珠院殿自所製ト云、養珠院殿杖寛永十七庚辰四月十有五日、七面山登山ノ杖也、同假名文數通、先師ノ書古器、古書畫等數多アリ、今枚擧セズ、

〔寺鑑下日蓮宗身延派〕　甲州大野　本遠寺

寺格　献上一束一本　右住職本寺ゟ申付ル、　住職御禮、御白書院、獨禮御目見之外三疊目　御暇無之

寺領　御朱印　高三百拾四石餘　内五拾四石　御預所

宗教部五十九

佛教五十九

最明寺

最明寺ハ、舊ト西明寺ト稱ス、相模國足柄上郡金子村ニ在リ、北條時頼ノ創建ニ係リ、僧源延ヲ以テ開山トス、宗派ハ古義眞言宗ニ屬ス、

〔新編相模國風土記稿十三足柄上郡〕金子村○中略 最明寺 如意山蓮華王院ト號ス、古義眞言宗、京都東寺寶菩提院末、本尊三尊彌陀長一尺五寸、脇士各長一尺、共ニ銅佛、越前法橋海縄作、ヲ安ジ、出山釋迦長一尺餘、宋人陳和卿作、往昔經藏ノ本尊ナリシト云、十一面觀音鎮守吾妻權現ノ本地佛ヲ安ジ、客殿ニ佛舍利三粒右府實朝ガ鎌倉圓覺寺ニ納シ、佛牙舍利ノ分身ナルヲ、北條時頼請得テ當寺ニ納シナリト云、藥師、請雨藥師ト稱ス、長一尺餘、聖德太子作、北條時頼ノ持念佛ト號ス、近來江戸下谷黑門町ノ商家ガ寄納セシ物也、其先ハ佐野源左衞門常世ガ、排行第六ノ弟ニテ、北條時頼ニ仕ヘシ、源六郎常重入道知光坊ヨリ、彼家ニ傳來セシト云、實否詳ナラズ、不動長二尺七寸餘、運慶作、毘沙門長一尺餘、弘法作、地藏長一尺、惠心作、辨財天、二臂琵琶ヲ抱、長一尺餘、湛慶作、及北條時頼ノ像ヲ置ク、寺傳ニ據ルニ、開山源延淨蓮坊ト號ス、東鑑建暦二年三月廿三日ノ記ニ、淨蓮坊等御營ニ參上シ、法華淨土兩宗ノ奧旨ヲ談話セシ由見エタリ、寛喜三年十一月廿二日寂ス、幼稚ヨリ顯密二教ヲ學テ、其法義ニ長ゼリ、常ニ世塵ヲ厭ヒ、松田ノ山中ニ一字ヲ建テト居ス、今松田庶子ノ山中ニ、其舊跡アリ、彼村ノ條併セ見ルベシ、特ニ彌陀ヲ信敬スル事淺カラズ、信州善光寺ニ詣ズル事數度ナリ、○註略 承久三年二月、靈夢ヲ感得シ、善光寺三尊ノ彌陀像ヲ摸シテ本尊トス、○註略 建長年中、北條相模守時頼、其佛德ヲ崇信シ、更ニ堂宇ヲ造立シ、莊園ヲ寄附アリ、此時山ヲ如意ト號シ、寺ヲ蓮華王院西明寺ト名ヅク、所藏ノ古文書皆西ニ作ル、慶長二年ノ物ニ始テ最ノ字ヲ書ス、應永已後、屢擾亂ヲ歷テ、殆頽廢セントセシヲ、僧賢昌深ク愁ヒ、遂ニ再興ノ念ヲ發スト雖、松田ノ地ハ、山路險隘ニシテ、

寺領

僻遠ナルニヨリ、常ニ靈地ヲ擇ケルニ、當所オノヅカラ松田ノ舊場ニ似タレバ、文明元年、爰移轉シテ、再興ノ志願ヲ遂グ、故ニ賢昌ヲ中興ノ祖トスト云、○下略

〔新編相模國風土記稿 足柄上郡十三〕金子村 ○中略 最明寺 ○中略 北條役帳ニ據レバ、永祿ノ始、村内ニテ寺領ノ地ヲ所務セシト識ラル、○中略 九年二月、北條左衛門大夫綱成、更ニ寺領寄付ノ證狀ヲ寄ス、○中略 天正三年正月、寺邊ノ竹木猥リニ伐取モノアリ、依テ禁制ノ證狀ヲ寄ス、○中略 八年三月、寺地ノ經界ヲ定テ寄附アリ、○中略 其後道感寺領ノ判書ヲ北條氏ニ請ヒシ事アリ、○中略 十二年二月安藤豐前入道良整ヨリ、村内東福院ヘ寄附ノ田畠ヲ更ニ當寺ニ寄附ス、○中略 慶長二年六月、領主大久保相模守忠隣、境内山林ノ法制ヲ定メ、家臣等連署ノ掟書ヲ授與ス、○中略 其後領主稻葉美濃守正則ニ就テ、寺領ノ御朱印ヲ望申スト雖果サズ、故ニ慶安二年十月、正則ヨリ一町七段餘ノ田地所務ノ事、幷ニ山内竹木ノ法制、先規ノ如クタルベキ旨證狀ヲ寄ス、

名稱
所在
創建
沿革

最乘寺

最乘寺ハ、相模國足柄上郡關本村ニ在リ、僧了庵ノ創建スル所ニシテ、曹洞宗ニ屬ス、

〔新編相模國風土記稿 足柄上郡二十〕關本村 ○中略 最乘寺 大雄山ト號ス、曹洞宗、能州櫛比村總持寺末、庵ハ總持五院ノ一ナリ、應永元年起立ス、開山了庵ハ、當國大住郡糟屋庄ノ人ナリ、○中略 或時鷲來リテ、庵ガ袈裟ヲ攫去リ、當山ノ松樹ニ掛ク、袈裟掛松ト唱ヘ、今ニ存セリ、庵跡ヲ追テ山中ニ入、松樹ノ下ニ到リテ座禪ス、時ニ彼袈裟、自然ニ落下テ、庵ガ肩ニ掛レリ、遂ニ寺基ヲ創ス、狩野村極樂寺所藏寄記曰、最乘開山了庵、安ニ居相州竺土寺、或時鷲忽飛來、攫取掛ニ在慧明肩上ニ僧伽黎、而掛ニ雄峯之松樹、明奇異而仰ニ慕其僧伽黎、決々中天、登ニ雄峯、而到ニ彼松樹邊、且座禪、感ニ其定力、彼袈裟零落、而自然掛ニ在慧明肩上ニ矣、或ハ一偉人ノ指導ニ任セ、當山ヲ開キシト云、諸祖傳曰、又到ニ相州ニ謀レ闢ニ一寺ニ、擇レ山未レ決、忽有ニ一丈夫ニ、其形魁岸、出來引レ師入レ深、指ニ大雄山ニ云、此山最吉、師怪レ之、丈夫云、莫レ怪、我是此州大山明王也、言訖求レ之無レ力、遂

就其地創最乘寺、時ニ異人二人來リテ、勞ヲ助ケ、地ヲ穿テ鐵印ヲ得タリ、今金印ト唱フ、寶ノ傳ニ載ス、其蹟ヨリ、清泉湧出ス、今ニ至テ、金剛水ト唱フ、彼異人ハ、矢倉飯澤二神ノ化身ト云、緣起云、二人ノ樵夫來而告云、此境是觀世音ノ地也、云々、和尚觀音ニ誓而可開闢給、二人ノ樵夫與和尚登此境、擬立給、然處ニ、從地下鐵印判掘出、而和尚云、是卽閻王之印形也、鐵印出處、卽是今之金剛水也、二人之山人、一人者矢倉明神、一人者飯澤明神也、故春屋和尚已來、續住之諸禪師、到今社參之、禮有之云々、サレバ、速ニ功畢リテ、一寺起立ナレリ、諸祖傳曰、遐邇貴賤、皆奔走、助土木之功、大殿法堂山門、凡伽藍所宜有者、盡成於指顧之間、爾來士庶信歸、財施如積、師皆歸之常住、不少自用焉、其法制、越ノ永平寺ニ倣ヘリトゾ、高僧傳曰、建最乘寺、延之、雲水大會衆成鉅刹、其法規一取則永平、此頃ニヤ、矢倉飯澤ノ二神、夜陰興庵ニ參禪セシト云、諸祖傳曰、時有二異人、夜間入室者數回、侍僧疑之問師、師不語、侍僧竊認其蹤、則直到山下、一入飯澤廟、一入矢倉澤廟、依之議、二神入室參問、開基ハ、高僧傳ニ太田氏ト云、曰、太田氏尊信、相攸於狩野、建最乘寺、延之、小田原記ニハ、大森寄栖庵ト記ス、曰、關本ノ最乘寺開山了庵和尚、此山ニ山居アリシヲ、大森寄栖庵、常ニ信シ、此寺ヲ建立シケル云々、サレド、皆寺傳ニ載ザル所ナリ、是年冬、箱根權現老翁ト化シテ、庵ニ血脈ヲ受ク、時ニ每朝干梅ヲ食シ、茶ヲ飲事ヲ敎ヘ、且庵ガ望ム所ヲ問、庵答テ、山中水ナキヲ憂フト云、翁諾シテ去、遂ニ水路ヲ通ズル事ヲ得タリ、是箱根湖水ノ水脈ナリト云、緣起曰、應永元年之冬、箱根權現、變作老者、而開一句、後受血脈、同云、別有望在歟、和尚答云、無山中水而已、老翁諾々、故山水、卽是箱根權現之水海之水脈也、同十八年三月廿七日寂ス、高僧傳云、明以應永十八年三月廿七日、化於所住、春秋七十五、有代語錄二卷、宏智小參鈔二卷、今江左以東、郡縣園巷、洞上禪刹、叢布櫛比、皆自了庵而分云々、示寂ノ年月、當寺傳フル處、高僧傳ト同ク、又日域洞上諸祖傳ニハ、十四年三月十七日ニ作ル、法ヲ嗣グモノ五人、諸祖傳曰、嗣法五人、曰韶陽、曰大陽、曰大綱、曰無極、曰尼慧春、ノ內、大綱ハ、脇寮大慈院ノ始祖、尼慧春ハ格庵ノ初祖ナリ、本尊華嚴釋迦及ビ十六羅漢ヲ安ズ、羅漢像ノ事ハ、梅花無盡藏ニモ見ユ、略○註 境內最廣ク、大門ヨリ本堂マデ二十八町餘、町每ニ石標ヲ立、山中松樹繁茂シテ、日影ヲ洩サズ、僧萬里ノ詩ニモ、最乘古刹樹參天ノ句アリ、是開山ノ遺囑ニシテ、伐木ヲ堅ク禁ズルガ故ナリ、寶德三年五月、僧春屋ガ定メシ嚴禁アリ、略○註 永祿三年八月、北條氏康、當寺ニ詣シ、當宇ノ修理ヲ加フ、小田原記曰、八月、氏康關本最乘寺へ御參詣アリ、當時七堂伽藍ノ建立ナリ、○中略 慶安元年八月、稻葉美濃守正則、書翰ヲモテ、寺社奉行安藤右京進重長、松平出雲守勝隆ヘ、境內山林竹木免除ノ御朱印ヲ賜ハラン事ヲ執ス、其文書今ニ藏ス、此月卽チ御朱印ヲ賜ハレリ、又正則境內ノ制札ヲ調ベ、書翰ヲ添テ授與ス、

略○註當寺往古ヨリ、輪番持ナリ、是ハ僧春屋(康正二年三月十九日寂ス)ガ時ヲ始トス、文明中、總世寺(足柄下郡久野村ノ)居ノ開山、宗椚ヨリ、住僧在仲ニ書ヲ寄、輪番ノ事ヲ評議ス、略○註小田原記ニモ、輪番ノ事見ユ、曰、(當寺開山、了庵和尚ナリ、サレバ關東奧州マデ、此和尚ノ法孫トシテ、諸寺悉ク當寺ノ住ヲ勤、一年替ニ輪番也、)今モ開山ノ末派、二十五寺ノ住職、年別ニ一人輪番ス、(中ニ就テ、武州越生龍穩寺ト、上總國眞如寺ノミ、七年或ハ九年ニテモ、其順年トス、)年々七月二十五日、交代ノ定期タリ、又下總國府臺總寧寺ト越生龍穩寺ヲ當寺ノ後見トス、サレド遠路タルニヨリ、竹松村大松寺、塚原村天王院、兩寺ノ目代トシテ、其寺務ヲ掌ドル、

寺格

〔寺格帳(下曹洞宗)〕御朱印境內山林　相模國關本　最乘寺

一右住職輪番、住職御禮無之、

一年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上一束一本、御暇無之、

雜載

〔武江年表(八)〕文政二年二月十一日、深谷長谷寺ニテ相州關本道了權現開帳、

早雲寺

名稱　所在　創建　沿革

早雲寺ハ、相模國足柄下郡湯本村ニ在リ、大永元年、北條氏綱、其父長氏ノ爲ニ建立セシ所ナリ、長氏號ヲ早雲ト云フ、因テ寺號トス、天文十一年、勅願寺ニ列シ、京都ノ大德寺ニ準ゼラル、

臨濟宗ニ屬ス、

〔新編相模國風土記稿(二十七足柄下郡)〕湯本村略○中早雲寺　金湯山ト號ス、臨濟宗、(紫野大德寺末)本尊釋迦、(一長尺三寸、運慶作、)兩脇文殊普賢、(長九寸五分、同作、)當寺ハ北條左京大夫氏綱、先考早雲庵宗瑞ノ遺言ニ任セ建立スル所ニテ、大永元年落成ス、故ニ今早雲ヲ以テ開基ト稱ス、略○註則紫野ノ宗清以天和尚ヲ請テ、開山第一世トナス、後勅シテ、正宗大隆禪師ト號セリ、略○註天文十一年六月、勅願寺トセラル、

〔北條五代實記 三〕早雲寺建立幷勅願所事

去程ニ北條新九郎氏綱ハ、考早雲ノ遺言ニ任セ、相州ノ湯本ニ一寺ヲ建立シ、金湯山早雲寺ト號ス、佛殿法堂山門鐘樓食堂以下、悉ク大德寺ヲ移シ、金銀珠玉ヲ鏤メタリ、則チ大德寺ノ以天和尙ヲ請ジテ住寺トス、近國他國ノ出家等朝參暮詣ニ隙モナシ、氏綱ヲ始メテ、一族家老ノ人々、皆悉尊敬有、早雲寺建立以後良年ヲ經テ、天文十一年六月廿四日、カケマクモ忝モ、禁裏ノ御沙汰トシ、綸旨ヲ被成下、勅願寺ト號シ、關東第一ノ名寺也、下萬民ニ至迄、渇仰ノ首ヲ傾ヌト云事ナシ、

〔早雲寺記錄〕覺

一相州西郡湯本村禪宗金湯山早雲禪寺、先古者、鎌倉五山中峯派、號春關寺、但年代不詳、〇中略

一明應元壬子年、北條氏茂公、小田原打入、卽明應二癸丑年修補春關寺、爲零落、爲菩提所參詣之、永正十六己卯年、北條早雲氏茂逝去以後、改變春關寺、號早雲寺、從永正十六己卯年、而今至寬文十二壬子年、得百五十三年者歟、

〔羅山詩集 二紀行〕相模國早川莊湯本、早雲寺者、北條早雲所建也、早雲者伊勢國人也、遊駿河仕今川氏、後來於伊豆稍盛大也、人多從之者、一旦率兵入相州、拔小田原城而滅上杉氏、遂領關八州、於是而乃自稱曰北條早雲、早雲有子曰氏綱、其嗣曰氏康、其嗣曰氏政、其嗣曰氏直、共五世居小田原、關白秀吉公攻滅氏直、而後北條氏滅矣、此寺今隸大德寺云、

近時直指市鄽奔、自買檀那賣世尊、野麥芃芃法堂草、道中應有神沙門、寺門內有鎭守故、

林忠

本尊

〔早雲寺記錄〕覺

一當寺本尊者、釋迦如來、御長壹尺三寸五分、兩脇文殊普賢、御長八寸、兩尊共、但三尊運慶之作、

寺格

〔早雲寺記錄〕一當寺ヲ勅願所ニ被成義ハ、後奈良院御卽位之節、氏綱公ゟ、金子等御獻上、依之叡感ニテ、官位加階勅許可在之由之處、氏綱公御辭退ニテ、當寺勅願所之綸旨御願被成故、勅願ノ綸旨

寺領

并早雲寺ノ勅額賜之、于今勅願ノ綸旨在之、勅額ハ兵火ニ燒失、當寺依爲勅願所、被准大德寺、關東派ノ僧ヘ、大德寺ヘノボラズ、直ニ當寺乞僧官僧位ノ儀式相勤之、於于今末寺ノ僧徒ハ、當寺ニテ知客、侍者、藏主、首座、單寮等之判紙授與之、禪宗ノ勅願所ハ關東ニテ當寺之外無之由、下馬之札氏綱公ゟ被下畢、氏綱公御室ハ、近衞關白殿御息女之由、此內緣在之故、御即位之節、御忠勤在之歟、其上勅願之綸旨勅額等被下之歟、

〔相州文書十九足柄下郡〕當寺爲勅願之淨刹、致佛法之紹隆、宜奉祈皇家之再興者、天氣如此、仍執達如件、

天文十一年六月廿四日　左大辨花押

早雲寺大隆禪師禪室

〔早雲寺記錄〕覺

一當寺先年寺領之事

豆州大場、同北條、二箇所、相州西郡、千津島七名、大友、長塚、栢山、飯泉五箇所、下中村上町、中郡土屋

湯本村者、先年當寺門前、總高、合永樂三千七百貫、

〔新編相模國風土記稿二十七足柄下郡〕湯本村〇中略早雲寺〇中略當時〇天文十一年六月ハ永樂百七十六貫九百二十文ノ寺領ヲ寄附アリ、北條役帳曰、早雲寺百三十八貫二百文、中郡土屋總領分三十八貫七百二十文、西郡長塚村、以上百七十六貫九百二十文、按ズルニ、土屋ハ大住郡、永塚村ハ足柄下郡ノ屬、天正十八年四月朔日、豐太閤小田原城ヲ攻ル時、寺內ニ本陣ヲ居ヘラル、〇註略二日、秀吉當寺ニテ、東照宮ヲ饗待シ、又諸將ニモ酒ヲ賜ヒシ事アリ、〇註略九日、秀吉石垣山ノ陣營ニ移レリ、〇註略時ノ住僧明叟、此亂ヲ避テ城內ニ入シガ、數代ノ檀越滅亡ヲ傷ミ、飮食ヲ斷テ、同月十五日卒セリ、〇註略此後衰替シテ、僅ニ寺名ヲ存スルノミナリ、〇註略然ルニ、慶安元年八月境內山林不入ノ御朱印ヲ賜ハリ、漸ク舊觀ニ復セリ、〇寺域東西二十八町、南北二十町餘、中興ノ僧菊徑存和尚ト云、〇註略本堂〇註略ノ襖ニ、龍虎ノ墨畫アリ、古法眼元信ノ筆ナリ、

寺職

相州湯本　早雲寺

名勝　所在　開山　堂塔

〔寺格帳下禪宗〕御朱印境内山林竹木諸役免許

右住職、弟子讓、

無量光寺

無量光寺ハ、又當麻道場ト云フ、相模國高座郡當麻村ニ在リ、弘長元年、時宗ノ開祖一遍ノ巡錫シテ、此地ニ來ルヤ、里人金光院ヲ造リテ、之レニ居ラシム、嘉元元年、一遍ノ弟子眞教、新ニ堂宇ヲ造營シテ今ノ名ニ改ム、

〔新編相模國風土記稿六十八高座郡〕當麻村○中略　無量光寺　當麻山金光院ト號シ、當麻道場トモ呼ベリ、天正中御朱印ノ文ニ、當麻道場トアリ、時宗舊ハ淨土宗時宗派ト號ス無本寺ニテ、十一ケ寺ノ末寺ヲ統、開山一遍上人、來由記略曰、一遍ハ、豫州越智ノ城主、河野七郎通廣ノ子、同源次通眞ノ息ニテ、松壽丸ト稱ス、延應元年二月十五日誕生、寛元三年正月、七歳薙髮、隨緣ト號ス、十八歳、康元元年八月、叡山ニ登リ、慈源僧正ヲ師トシ、顯密二教ヲ學ビ、出離ノ難キヲ知、遁世シテ一向專修ノ行者ト成、彌陀念佛シテ國國ス、弘長元年、此地ニ遊化ス、里人一宇ヲ造テ金光院ト號ス、二十三歳、弘長元年、愛甲郡上依智村藥師堂ニ至リ、終夜念佛セシ時、東北ノ方ニ靈光現ズルヲ拜シ、杖笠ヲ捨テ尋行、按ズルニ藥師堂ハ、今瑠璃光寺ト號シ、末寺ニ屬ス、杖ハ椰樹ニシテ、根生芽出、今モ境内ニアリ、相模川ヲ渉リ當村ニ至ル、丘上大木繁茂ノ中ニ、妙見ノ小社アリ、果シテ靈地ナルコトヲ知、飲食ヲ斷テ念佛ス、里人渇仰シ、一宇ヲ造テ金光院ト號ス、此時本國河野ノ一族、開山某並白井等、上人ヲ尊來リト居シテ擁護ス、隨山氏子孫當村内ニ在、白井氏ハ隣村田名村ニ在、留錫四年、京師ニ至リ、文永七年歸院ス、上人此庵ニ留錫スルコト四年、故ニ當寺ヲ上人初開ノ地ト號ス、二十六歳、文永元年二月、[illegible]ヲ鬼テ洛陽四谷觀智上人ノ許ニ至リ、三眛ヲ相承ス、改テ智心房ト號ス、同七年秋、三十二歳、相州金光院ニ歸ル、明年地方ニ遊行シ、建治二年、紀州熊野ニ參籠シ、權現ノ神勅ヲ蒙リ、名ヲ一遍ト改ム、同八年鎌倉ニ至テ、大覺禪師ニ謁ス、同九年、豫州ニ赴ク、同十一年、攝西ノ眞嚴上人ニ謁ス、建治元年春、宇佐八幡宮ニ三七日參籠ス、國擅結緣ノ大願靈夢アリ、始テ名號ノ札ヲ作テ諸民ヲ勸化ス、同年秋、京ニ至ル、又宇佐ノ靈夢ヲ蒙リ、男山ニ參籠ス、神託有テ紀州熊野ニ詣テ、十二月ヨリ百日ヲ期シテ證誠殿ニ籠ル、翌年三月五日寅刻權現シテ神勅アリ、頌文ニ、六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華、此神勅並口傳ハ、當麻山歷代住持相傳シテ他ニ漏サズ、是ヨリ改テ一遍ト名ヅク、以來賦算名號ノ下ニモ、決定往生六十万人ト記ス、同三年秋、九州ニ至、念佛弘通盛ニシテ、化他利益

眞大ナリ、弘安四年、金光院ニ歸リ、明年發杖ノ時、衆ノ願ニ任セ、自ラ影像ヲ寫シ與フ、高足智得ヲ院内ニ止メ、眞教ト共ニ遊化シ、正應二年八月二十三日、攝州兵庫ノ津ニ遷化ス、弘安四年春金光院ニ歸リ、鎌倉ニ到ニ眞道上人、歸依淺カラズ、二字ヲ賜リ、量阿智得ト名ヅク、同五年、同國發杖ノ時、道俗時衆ノ願ニ任セ、自ラ鏡ヲ取、頭面ヲ照見テ影像ヲ寫シ與フ、此時眞教、智得、國山民部、同又六郎等力ヲ合、其畫ヲ揮シテ上人ノ像ヲ影刻ス、頭ハ上人自ラ作ル、依テ直作ノ像ト號ス、長五尺三寸、當寺山林ノ中ニ安ヲテ上人自ラ開眼ス、依テ當山ヲ鏡ノ御影數揚トモ云、智得ハ金光院ニ止リ、上人像ニ眞教圖國修行ニ赴キ、正應二年七月、淡州ヨリ播州兵庫ニ至リ、觀音ノ靈像ヲ禮シ館トス、上人小膝アリ、他阿彌陀佛眞教ニ言テ曰、我化緣已ニ盡メト、テ僧衆聚テ傳ヘ、且遺誡ノ法問ヲ自書シテ付屬シ、又遺俗時衆ニ遺誡ヲ示シ、八月二十三日卯刻、衆ト共ニ晨朝禮讃ヲ誦ジ、同彌陀經作禮而去ノ文ニ至テ儼然トシテ定ニ入テ座化ス、時年五十一、臘三十七、遺儀ヲ觀音堂地中ニ斂ム、此時開山ノ遺言ヲ拔論五枚、當山ニ藏スル內三枚ハ像背ニ收メ、二枚ハ石碑中ニ收ム、按ズルニ一遍上人緣以前ノ由來記ト題スル所、往々アレド、古クヨリ當山ニ傳フル所ナレバ、大略ヲ撮要ス、二世他阿眞教、先師ノ遺言ニ任セ、諸國遊化シ、嘉元元年二月、當院ニ留錫シ、新ニ堂宇ヲ造テ當麻山金光院無量光寺ト號シ、自其第二世タリ、久明親王、寺領及守護不入ノ朱印ヲ賜フ、嘉元二年、法弟智得ニ他阿ノ號ヲ授テ遊行セシム、眞教元應元年ニ卒ス、來由記曰、建治三年、一遍九州ニ至リ、念佛弘通ノ時、鎮西ノ錚阿上人ノ嗣法鎮西上人ノ上足、眞教勝連阿ト云、還光寺ニ住ス、上人ニ歸依シテ二字ヲ賜リ、遂阿ヲ改テ他阿彌陀佛眞教ト名ケ、隨從、國々遊行ス、上人年三十九、眞教年四十一、一遍遷化ノ後、眞教上人師ノ遺言ニ任セ、諸國遊行ス、正安三年八月、攝州兵庫ニ至リ、師ノ十三回忌ヲ脩シ、別行念佛一七日畢テ、又遊行ス、嘉元元年二月、相州ニ至リ、堂宇ヲ造營シテ當麻山金光院無量光寺ト號ス、時ノ將軍歸依淺カラズ、一遍上人ヲ以テ開山トシ、眞教上人ニ二代ノ職ヲ讓シメ、寺領三十石、境內守護不入ノ朱印ヲ賜リ、道俗群ヲナシ、寮舍二十軒追々達營ス、在住十七年、故上人ノ上足量阿智得上人、嘉元二年他阿彌陀佛ノ號ヲ授リテ、回國ス、是ヨリ以來、他阿ヲ住職ノ號トス、元應元年正月廿七日、二世眞教上人入寂、八十三、高僧傳曰、釋他阿字眞教也、姓源氏、平安城人、傳然同久、後歸一遍、眞公還歷天下、歸化念佛、時號遊行、於洛之七條南錦貨亜山金光寺、淨來千推、修四方集一日、結界地生白芙蓮、誠修之感、都人報嘵捨偶、師眞者日登多、後住相州、開當麻山無量寺、勸旋東關、府士雜沓、下馬塞塞、元應初年正月得微疾、二十八日整衣斂座、唱彌陀佛、終於正寢、壽齡八十有三、法臘若干歲、遷遷閣眞拍陶眞悼陀書參大覺禪師于建長寺、陀是阿誰之因緣、久之有省、卿眞印可云、按ズルニ僧傳等ニ據ニ實ハ眞教當寺ヲ開基シテ、先師一遍ヲ淸淨光開山トセシナリ、先ニ金光院ト云ルハ、一遍智眞居ノ草庵ニシテ、一寺ニハアラザルナリ、同年、智得歸山シ、第三世ニ居レリ、時ニ執權平貞顯ノ內命ニヨリ、智得病ト稱シ、遊行ヲ辭セシカバ、弟子呑海ニ其事ヲ命ゼラル、內命ノ意趣、出家ノ正義ヲ背ヲモテ、遂ニ呑海ヲ勸氣ス、是ヨリ當山ノ住僧遊行セズト云、元應二年、智得入寂ノ後、附弟眞光四世ノ職ニ當レリ、時ニ呑海一寺ヲ藤澤ニ造立シテ、淸淨光寺ト號シ、相續

テ遊行ス、然リシヨリ藤澤ト確執ニ及ベリ、來由記曰、同年遊行他阿智得歸山、時ニ執權平貞時ヨリ三世ノ職ヲ蒙リ、又遊行ノ命アリト雖モ、其命內密ノ意趣アルヲ以テ病ト號リ堅ク辭ス、依テ弟子呑海ヲ呼テ眞顯內密ノ事ヲ遂シ、上下往還ノ人馬朱印ヲ賜リ、遊行ノ事ヲ命ズ、暫得謂ラク、今度ノ遊行、外ニハ開山以來ノ化益ヲ示シ、內ニハ傳法ノ正意ヲ背キ、出家ノ業ニ非ズ、然ドモ公命默止シ難ク、依テ生々世々勸氣ストテ、藤下ヲ隔テテ呑海ヲ外庭ニ座セシメ十念ヲ授ケ離別シ、呑海諸國ヲ遊行ス、間二年七月朔日、智得入寂、依テ附弟眞光四世ノ職ニ居ル、同年九月、呑海平塚迄歸杖セシニ、眞光四世住職ノ事ヲ譲、將軍家ニ請テ、正中元年、同國藤澤ニ淸淨光寺ヲ建、夫ヨリ代々相續テ遊行ス、然レドモ正意ノ遊行ニ非ズ、呑海勸氣ヲ受シ例ニヨリ、今モ淸淨光寺遊行發杖ノ時、遊行ヲ外庭ニ座セシメ、藤澤ノ當住却テ嚴中ニ居リ、行者ニ十念ヲ授クト、今モカノ淸淨光寺及門徒ニ至ル迄、當山ニ出入スルコトヲ許サズ、

當時一遍駐錫ノ舊寺タル間、小田原北條氏分國ノ頃モ、歸依淺カラズ、當時ノ文書朱印等今ニ藏ス、

〔日本地誌提要十七相模〕佛寺　無量光寺高座郡當麻村、當麻寺ト稱ス、時宗、僧知眞開基、弘長元年辛酉創建、寺域七千七百拾八坪、

〔新編相模國風土記稿六十八高座郡〕當麻村○中略　無量光寺○中略　寺傳ニ、往昔長阿彌君、世良田左京亮有親君、德阿彌君、松平太郎左衛門親氏君、御薙髮ノ御舊跡ナルガ故ニ、下ノ御本尊、及御墓塚ノ條ニ詳ナリ、御打入後、內藤修理亮淸成ヲ

寺領　寺制

以テ御由緒上聞ニ達シ、天正十九年十一月、先規ノ如ク境內不入、並寺領三十石ヲ寄附アリ、其後寺中ノ制札ヲ出サレ、定、於當寺內地頭代官非分之事、於寺中假初ニモ狼藉之事、竹木剪取田畑、拔取之事、古之條々於違犯之輩者、可有披露、可處嚴科者也、三月日、奉行、又殊ナル寺格ヲ賜ヒシトナリ、是ヨリ先北條氏ノ頃近村ノ原野ニテ草木萱等ヲ苅事ヲ許サル、所藏北條氏文書曰、當麻山寺中へ可苅取草木並萱之事、溝原淵邊原矢部原田名野、右於原中、爲先寶樹院、知光院手判、可爲苅取、不可有相違者也、云々、申十二月廿日、當麻衆中、

雜載

〔一遍流義十二派略記〕當麻流義

二祖眞敎上人弟子內阿、住相州當麻無量光寺、建當麻流、

建長寺

名稱所在

建長寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉山之內村ニ在リ、建長五年、北條時賴、時宗父子ノ本願ニ由リテ建立セシ所ニシテ、唐僧道隆ヲ以テ開山ト爲ス、鎌倉五山ノ第一ニ位シ、兼ネテ定額寺タリシガ、今ハ臨濟宗建長寺派ノ大本山タリ、

〔拾芥抄 下本 諸寺〕建長寺 在鎌倉、道隆禪師、

〔新編鎌倉志 三〕巨福路坂

巨福路 或作小袋路、或作禮、又作呂、○中略 古老云、此邊ヨリ市場村ノ邊マデヲ、巨福呂谷ト云、故ニ建長寺ヲ巨福山ト云也ト、○中略

建長寺

建長寺ハ、巨福山ト號ス、五山ノ第一ナリ、

創建

〔吾妻鏡 四十三〕建長五年十一月廿五日庚子、建長寺供養也、以丈六地藏菩薩、爲中尊、又安置同像千體、相州 ○北條時賴 殊令凝精誠給、去建長三年十一月八日有事始、已造畢之間、今日展梵席、願文草、前大內記茂範朝臣、淸書相州、○北條義時 導師宋朝僧道隆禪師、

〔元亨釋書 六 淨禪〕釋道隆、宋國西蜀涪江人也、○中略 嘗聽東僧之盛、稱國光、及禪門之草昧、常志遊化、遂以淳祐六年、乘商舶、著宰府、本朝寬元四年丙子也、乃入都城、寓泉涌寺之來迎院、又杖錫赴相陽、時了心踞龜谷山、隆掛錫於席下、副元帥平時賴、聞隆之來化、延居常樂寺、軍務之暇、命駕問道、平帥乃啓巨福之基址、構大禪苑、請隆開山說法、東關學徒、奔湊佇聽、○下略

〔新編相模國風土記稿 十八 鎌倉郡〕山之內村 ○中略 建長寺 ○中略

堂塔

佛殿 新麟ノ牌ヲ揭グ、宸筆ト傳ヘテ、時世詳ナラズ、建長五年十一月、造營、○中略 今ノ佛殿ハ、久能山御宮拜殿、更ニ再造セラレシ時、其舊殿ヲ賜フト云、或ハ崇源院殿 ○德川家光母 御靈屋ノ拜殿ヲ賜ハリシナリト云、其製尋常ノ寺院ニ異ナリ、唐戸彫物ノ彩色、今ハ皆剝落セリ、殿內土地堂、中央ニ太常元、左ニ掌簿判官、右ニ感應使者ヲ安ズ、其餘章

駄天、聖德太子ノ像アリ、祖師堂ニ達磨、百丈、開山開基ノ像ヲ置ク、　方丈　龍王殿ト號ス、書院ヲ憩松軒ト名ヅク、其庭ニ池アリ、瀟碧池ト稱ス、〇中略　法塔　山門ト佛殿ノ間ニアリ、常ニ法式ヲ修スル所ナリト云フ、是ハ近ク文化年中、雖テ造立アリシナリ、　僧堂　大徹堂ノ額ヲ揭グ、（宋子曇筆）　浴室　總門內、東ノ方ニアリ、〇中略　鐘樓　山門東ニアリ、建長七年二月、北條時賴、巨鐘ヲ鑄造シテ掛ク、開山道隆、是ガ銘ヲ作ル、〇中略　山門　樓上ニ十六羅漢ヲ安ズ、〇註略　建長興國禪寺ノ額ヲ揭グ、〇中略　昭堂　開山自作ノ像ヲ置ク、（舊ハ達磨ノ像ヲモ置シトイヘドモ今ハナシ）側ニ柱杖アリ、開山渡來ノ時、持用セシ物ナリ、故ニ渡海ノ柱杖ト云ヘリ、圓鑑ノ額ヲ揭グ、（開山筆）　堂內ニ、開山所持ノ鏡一面（厨子ニ收ム、高三寸五分、橫三寸、）ヲ收ム、是ヲ圓鑑ト號ス、其形鼎ノ如シ、面ニ觀音ノ像ヲ顯ス

〔新編相模國風土記稿四纂文〕湘中紀行　太宰純〇中略

下坂、過建長寺、在道右、此建長中、平時賴所爲宋僧蘭溪建之、亦關東五山之一也、外門二所、東者南向、署曰海東法窟、西者西向、署曰天下禪林、並朝鮮人竹西書也、東門內少西建大門、署曰巨福山、相傳、元僧一山書、或謂趙子昂書、俱未詳、大門北爲樓門、署曰建長興國禪寺、宋僧子曇書、額扁甚長闊、今門不能挂、諸重屋間、覆而懸之樓下、仰而視之、若屋宇然、殆乎覚門、觀此乃知門故高大、他可例知、樓門北爲佛殿、立地藏菩薩丈六木像、佛殿西北爲方丈、有時賴木像焉、東爲西來庵、是大覺禪師祠堂也、他殿堂不足道、蓋已衰矣、要之、山木岑蔚蕭條、使人起懷古之念、實名藍也、

〔寒松稿〕福鹿懷古

時賴時宗父子間、蘭溪無學到東關、飛樓湧殿畫圖物、福法金山鹿徑山、

自注曰、副元帥北條相模守平朝臣時賴、法名道崇、稱最明寺殿、其嗣子相模守朝臣平時宗、法名道果、稱法光寺殿、巨福山建長寺開山大覺禪師道隆、號蘭溪、金山無明和尙之法嗣也、寬元四年丙午來于本朝、故大檀越時賴、遣工匠於大宋國、令學金山寺諸堂之規模、工匠歸于本朝、以造立建長寺、

實建長五年癸丑造畢也、○中略凡建長弘安以來、盡扶桑國裏之諸禪刹、皆以法于福鹿兩山七堂之規摸、而謂之唐樣、不逢兩檀越之再生、豈得吾山復舊時容乎、今茲慶長壬午冬之孟、寒松秃翁、熟視吾山之凋零、記得前朝之盛事、作此詩、爲使其不知者知之也、

〔和漢禪刹次第〕相陽巨福山建長興國禪寺○中略

佛殿虹梁銘

上間上新今、上皇帝、千佛垂手扶持、諸天至心擁護、同二胡越於一家、通二書於万國、正五位行下平朝臣時頼敬書

下間伏願、三品親王征夷大將軍、千戈偃息、海門晏清、五穀豐登、万民康樂、法輪常轉、佛日増輝、建長五年癸丑十一月廿五日、住持傳法沙門宋道隆謹立、

〔本朝高僧傳淨禪三十一〕相州建長寺沙門慈永傳

釋慈永、字青山、姓紀氏、紀州玉津人、○中略居○建仁寺三載、受二樞府鈞帖一、住二相之建長一、自レ寺罹二回祿一、丈室未レ建、廢頽相次、永以二擅嚫一捨充二修補一、成レ之不レ日、得レ復二舊觀一、

〔續史愚抄花園〕正和四年七月九日乙卯、此日、相模鎌倉建長寺燒亡、或作二八日一、歷代最要、本書王代年代記、

〔鎌倉管領九代記四上〕建長寺炎上附蘭溪來朝并影向の松

同じ○應永十一年二十二月廿八日の酉の刻に、建長寺門前の在家より、俄に失火出來しか共、やがて燒しづまりけるが、僅なる細煙ひとつ、はるかに七八町を隔て、、飛去、建長寺の塔の五重の上に落かゝる、はじめの程は燈籠の火のごとくにて、消もせず燃もせで見えけるが、塔頭の僧達、身をもみ手をあがきて、周章迷ひけれども、上るべきかけはしもなく、打消べき便もなければ、たゞいたづらに、足を翹だて、目を鰔きて空をのみ見てぞ立たりける、此細煙漸々大に燃はびこり、黑煙天を掠めて燒上る、猛火雲を卷てひるがへる色は、四方刹利の上までものぼり、九輪地にひゞきて落る音は、金剛輪際の底にも聞えやすらむと夥し、折ふし青嵐はしたなく吹渡りて、餘煙四方に覆ひければ、本堂、祖師堂、方丈、衣鉢閣、鐘樓、輪藏、寮舍、浴室、鎭主、土地堂、山門、脇門、廊下、總門にいたる

まで同時にもえ立て、一字も殘らず灰燼となる、佛具、經論、資財、雜物は運びのぐべきいとまもなし、僧、喝食、維那、侍者等、我身をだにのがれかねて、垣をくゞり壁をつたひ、辛じて逃出たり、左馬頭殿〇足利持氏は、人數五百ばかりにて、門前に御馬を立られ、下知を加へて消せらるれ共、回祿のときいたりけるにや、水をかくればいよ／＼もえ、打消ばます／＼燒、あるひはくづるゝ、軒の板に頭を打損じ、或は倒るゝ、柱にあたり手足を打をられ、又は燒爛れ疵つきて、半死半生に成者數をしらず、抑此寺は、後深草院の御宇、建長三年に、最明寺の時頼の草創、蘭溪道隆禪師の開基なり、禪師は本是宋の西蜀涪江といふ所の人也、

〔鎌倉九代後記〕應永二十一年十二月廿八日、建長寺炎上、

〔義演准后日記〕慶長十五年四月十八日、神奈川ヲ立、カタビラト云所ヨリ、鎌倉ヘ行、路次マデ、莊嚴院相承院迎トシテ出了、先圓覺寺一見古跡也、建長寺、同鐘アリ、貞時鑄云々、古松老檜如形、伽藍度度一亂ニ燒失云々、只跡計也、草堂少々アリ、

寺格

〔相州文書十鎌倉郡〕西洞院御書(端書)

建長圓覺兩寺、可爲定額寺事、即被宣下候畢、官符二通被召遣候由、可被申關東之旨、院御氣色所候也、仍言上如件、經親誠恐頓首謹言、

十二月廿二日〇延慶元年　經親上

參　伊豆守殿

〔寺鑑下禪宗五山派〕巨福山　黄衣地　〇鎌倉五山第一　相州鎌倉　建長寺

寺領

〔相州文書九鎌倉郡〕寺領事、任當知行之旨、被仰付訖、如本張面、全可令寺納候、縱並檢地之上出分共、可有領地候、幷門前屋敷等可致進退候、國役之儀令免除候也、

天正十八
八月廿二日　朱印〇豐臣秀吉

〔寛文四年御朱印帳濟家禪宗五山派〕九十五貫八百文　相模天正十九年十一月日　鎌倉建長寺并末寺

什物

〔元亨釋書六淨禪〕釋道隆、宋國西蜀涪江人也、○中略隆有所持鏡、沒後其徒收之、或夢、其鏡留隆像貌、告徒乞見、勞鏡似觀自在像、諸徒傳看異之、平帥時宗○北條聞之、請入府、疑其晻曖、令工磨治、其鏡初幽隱、經一磨鮮明殿好、大悲之相皆悉備足、平帥悔謝作禮、後尊一山爲記、今在鹿阜、○鹿阜、即圓覺寺也、

〔空華日工集〕應安七年十一月廿三日、或人告建長守嚴首座稱有夢告知二十三夜入圓覺山門閣破觀音像、取其胸藏寶鏡、歸建長方丈、諸人競觀爲希有、是蓋因事之變僞索去也、不亦犯罪哉、上杉刑部○憲春來、慰問圓覺之災、又話曰、竊承圓覺靈鏡移于建長、是爲希有乎、余曰、吾宗初不說如是怪事、是巫覡邪法之所衒、非吾門所尙也、古人云、打破鏡來與汝相見、又云、府鏡亦非臺、是謂心鏡也、而尙打破之、亦非云、況乎幻藥所鑄之世鏡乎、

寺制

〔相州文書九鎌倉郡〕掟

一寺中ニ兵糧致指置儀、可被停止候、玉繩へ成共、小田原へ成共、如舊並來、廿五日を限而可被入置候、併未當意之堪忍分計者無相違事、

一對寺中寄事於左右狼藉非分於申懸族者、記交名可有披露、可處嚴科事、

右定所如件

庚寅十八年○天正　正月廿一日　朱印○北條氏政

建長寺

〔相州文書九鎌倉郡〕禁制　　鎌倉建長寺幷諸末寺中

一軍勢甲乙人亂妨狼藉事

一放火事

寺職　子院　名所所在

一對寺家門前非分儀申懸事

右條々、堅令停止之訖、若違犯輩於有之者、速可被處嚴科者也、

天正十八年卯月　日　朱印(○豐臣秀吉)

〔集古文書〕二十一補任　弘安二年(相模國鎌倉建長寺藏)

建長寺事、爲住持可被興行大法之状、依仰執達如件、

弘安二年八月廿日　相模守(花押)

無學和尚

〔和漢禪刹次第〕相陽巨福山建長興國禪寺(○中略)諸塔

大覺派

西來院(開山塔曰圓鑑、外門曰嵩山、)

〔東路の津登〕建長寺天源庵は、横山嶽の開山大應國師(○紹明)遷化の舊跡也、いぬる五とせばかりのさきのとし(○永正二年)回祿す、庵領なども久しく知行して、およそなきが如くなり、紫野大徳寺衆中、たび〳〵申くださるといへども、とかくことゆかず、(○中略)すなはち、天源庵領二箇所かへしつけらるべきよし嚴重の事也、

圓覺寺

圓覺寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉山之内村ニ在リ、弘安年中、北條時宗ノ建立ニシテ、元ノ僧祖元ヲ以テ開山ト爲ス、往時鎌倉五山ノ第二位ニシテ、兼ネテ又定額寺タリシガ、今ハ臨濟宗圓覺寺派ノ大本山タリ、

〔拾芥抄〕下本諸寺　圓覺寺(關東)

〔新編鎌倉志三〕圓覺寺

圓覺寺ハ瑞鹿山ト號ス、五山ノ第二ナリ、〇中略　山門跡　山門ハ、今亡ビテ礎石ノミアリ、額、圓覺興聖禪寺トアリ、花園帝ノ宸筆也、

創建

〔鎌倉管領九代記三〕鎌倉御所回祿附圓覺寺炎上〇中略

往昔北條相模守時宗建立して、佛光禪師祖元をもつて開山とせられ、興法弘道の砌り、佛心眼藏の場、まことに殊勝の靈地なり、

〔元亨釋書八淨禪〕釋祖元、〇中略　己卯之年二年〇弘安　吾建長虛席、副元帥平時宗、具疏幣航海聘名宿、明牧以元充選招、環溪授佛鑑法衣、元拈起曰、師兄世尊、傳金襴外、別傳何物、咄過在汝、殃及我、乃披衣、五月離太白、六月著太宰府、乃弘安二年也、八月到相陽、平帥執弟子禮、邀入福山、待遇日渥、五年冬圓覺寺成、命元爲開山第一祖、開堂之日、群鹿臨筵、元爲吉徵、即名山以瑞鹿、

本尊

〔空華日工集〕永德二年五月七日、君、〇中略　又曰、圓覺佛像如何、曰中尊寶冠釋迦、先代時造、世謂圓覺釋迦、目上千貫、謂金玉之飾也、左右十二大士、依圓覺經說、曰其說如何、曰蓋十二菩薩、文殊、普賢等各章疑難問答也、

堂塔

〔新編相模國風土記稿七十九鎌倉郡〕山之內村〇中略　圓覺寺〇中略　佛殿　大光明寶殿（後光嚴帝ノ宸筆）ノ額ヲ揭グ、其下ニ又額アリ、表面ニ祈禱、裏面ニ修正（共ニ夢窓筆）ノ文字ヲ記セリ、尋常ハ表面ヲ顯シ、每歲正月五箇日ノ間ハ裏面ヲ顯スト云フ、永和二年再興アリテ、十月二十九日、肇テ柱ヲ建ル時、見住此ノ山梁ニ銘ヲ記ス、（曰、皇圖鞏固、猶遍億萬斯年、民士清平、廣統三千利海、本寺大檀那、左中將征夷大將軍源朝臣義滿敬立、佛域新開、繼靈山法鐙日、道庭深密、參少林華木春、永和二年丙辰十月念九日庚辰、當代住持闡提沙門此山妙在謹題、）永祿中回祿ノ後、荒廢ニ及ビシヲ、寛永二年再建スト云フ、本尊寶冠釋迦、（金坐像、長八尺許、佛首ハ西土ノ佛工顯殿作ト云、〇中略）回祿ノ爲ニ佛體ハ燒亡シ、佛首ノミ存在セシヲ、養儼院ノ方（德川家康侍女、黑田信濃守直相姉、）卒去ノ後、〇中略　其遺財ヲ頒チ賜フニヨリ、修補スル所ナリ、〇中略　方丈　正觀音

ノ木像ヲ安ズ、舊ハ明鏡堂ノ本尊タリシヲ、彼堂破壞ノ後、コヽニ移スト云、毎月十八日、大衆懺法アリ、額ヲ掲グ、(後醍醐筆跡)之是ハ東福寺ノ額ヲ、摸寫セシモノト云フ、書院ヲ平等軒ト號ス、○中略　經堂　僧堂ヲ兼ヌ、元祿中、松平佐渡守□□新ニ造立ス、法輪寶藏ト號ス、大藏經ヲ納ム、選佛場(無準筆跡)ノ額アリ、是禪堂ノ額ナリ、○中略　鐘樓　佛殿ノ左、山上ニアリ、北條貞時、正安三年八月、巨鐘ヲ鑄造シテ掛ル所ナリ、○註略見住西澗、是ガ銘ヲ作ル、○中略　總門　瑞鹿山(後光嚴帝宸筆)ノ額ヲ掲グ、山門　圓覺興聖禪寺(大字三行、花園帝宸筆)ノ額ヲ掲グ、閣ヲ圓通閣ト云フ、十一面觀音ヲ安ズ、中古廢亡セシヲ、寛政已前再造セシト云フ、

〔峯松稿〕福鹿懷古

自注曰、○中略瑞鹿山圓覺寺開山佛光禪師祖元、號無學、徑山無準和尚之法嗣也、弘安二己卯來于本朝、故大檀越時宗、渡工匠於大宋國、令摹徑山寺諸堂之規摸、工匠歸于本朝、以造立圓覺寺、實弘安五年壬午造畢也、其美麗可觀矣、

〔相州文書十鎌倉郡〕(證菩)舍利殿綸旨

以圓覺寺舍利殿、可爲開山塔頭之旨、天氣所候也、仍執達如件、

七月十一日(○年代未詳)　　左中將具光

夢窻和尚

○按ズルニ、職事補任ニ、左近中將源具光(建武元、五、廿補、藤原具光)ト見エタリ、

〔鎌倉管領九代記三〕鎌倉御所回祿附圓覺寺炎上

同じき(○應永十四年)十一月六日巳の刻ばかりに圓覺寺の塔中より火もえ出て、魔風しきりに吹まよひ、車輪のごとくなるほのほ、黑煙の中より四方に飛ちりて、佛殿、鐘樓、經藏、すべて同時に燒あがり、山門拜堂にいたるまで、一時のほどに灰燼となり、猛火地に滿て、餘煙雲を犯す、左兵衛佐殿は

門前に馬をひかへられて、回祿の災に世をあやぶみ給ひ、寺院の僧衆は、法滅の煙に胸をこがす、老若足を剱で、これをかなしみ貴賤手を握りて是を歎く、○中略本所靈寺の回祿する、いかさまにも國家の大變をしらする成べしと、諸人唇を翻し、あやしみ思はぬ者はなし

〔鎌倉九代後記〕應永十四年十一月六日、圓覺寺炎上、

〔相州文書十一鎌倉郡〕圓覺寺造營用木事、不除武藏、相模兩國寺社領、可然材木、任先例可被採用、○以下缺

應永十五年九月二日

〔圓覺寺文書新編相模國風土記稿所載〕鎌倉中酒壺別錢二十匹之事

任官符宣并御□□□旨、牢分勘落之、至他在所者、一圓充取之□圓覺寺造營要脚、一ヶ年所寄附也、嚴密收納之、可被修修造功之狀如件、

應永二十一年五月二十五日

〔鎌倉九代後記〕應永二十八年十一月十二日、圓覺寺炎上、

〔花營三代記〕應安七年十一月廿三日戊剋、圓覺寺廻祿、炎火自上副寺寮出之、仍副寺帶衣鉢、飛入火中死、同契庵塔頭象外僧正續院僧六人、續燈之僧十三人、已下寺中上下、燒死人數不可勝計云々、

〔空華日工集〕應安七年十一月廿三日、時白雲庵方丈二首座來、拉余欲追住持、余非之曰、薄福所感、再住無益也、二公必欲余同住、余尙不肯、二公左右捉余手、引過寶積、與大法相見、懇言再住之意、時預來者、東谷大圓等也、大法固不欲再住、東谷等泣曰、和上爲一身、則徑歸隱好、若爲山門、火後片時無住持之人、群衆四散、何人計再興哉、言未畢、諸衲推住持上堂而歸寺矣、假以大瑞寮爲方丈、蓋寄其災之起處、則上副寺其日與鬻柴者論價、罵辱柴主男、臨夜柴主潛入寺、投炬於柴屋而遁去、副寺知之、悔不及矣、急過大仙庵、告上事云、仍與諸耆訣別、直入佛殿、禮佛三拜而投烈焰堆中矣、時人聞之有感泣者、余曰、凡人與賣買者相爭、是覆轍也、可戒矣、伽藍興廢雖有定數、而又由人事不戒、自微至者、皆是也、○中略

廿四日、參府、府君出迎茶活余白曰、先年天龍煨燼之後、尊氏將軍打歸于田地、以助修造、圓覺回祿、今府君參其例則可也、府君肯之、二十八日、府君入圓覺而見燼迹、就于假方丈、慰問住持大法、次正續黄梅、因約當捨田地也、廿九日、圓覺大法、管領兵部同來、任余以都幹緣之事、余堅拒之、尙欲余必領、余以病固辭、且謂、此者天龍遭鬱攸之後、春屋爲雲居庵主、而領斯職、龍湫還常在光院、爲南禪營興、亦領斯職、皆大尊宿之所任也、顧余病且弱、誓不受焉、願且越莫切逼、余必赴京師矣、圓覺長老又來、余引之於病床、而談及寺門再興之事、乃客囑之曰、凡寺院興廢皆跡也、惟其規矩不隨跡而變、則寺之再興、可指日而成也、

〔相州文書十一鎌倉郡〕圓覺寺造營材木等運送事、河海陸關渡、無煩可勘過、若有違亂之在所者、就寺家注進狀、可有罪科沙汰之狀、依仰執達如件、

應安八年元年〇永和七月五日　　沙彌華押

當寺長老

〔空華日工集〕永和二年八月五日、辨齋、邀請圓覺造營奉行官人上杉刑部等諸公、因議寺門營功、余曰、凡今時化緣最難、又官家命國中大名助緣、亦恐難成、來十月佛殿立柱、而一兩年不終功、則柱爲風雨殘朽、不如不立柱也、若夫官家創法、限三年、以十州管內關稅棟別、及鎌倉中諸課役等充之、暫停它寺社土木事、則雖不十成、其功略畢、不然則必難成矣、諸奉行僉曰、可矣、又曰、寺家田地分爲二、曰常住、曰造營、各別施行、則內無互用之辜、免嫌疑之誚云々、　廿二日、早冒泥步履入刑部宅、會議圓覺造興幷棟別之事、次入管領兵部第、面議同前、次入府與君相見、面稟圓覺再興棟別、關稅、鎌倉中課役等事、府君諾之、是日、圓覺命工初試佛殿材木、　廿三日就于圓覺方丈、評議造興之事、畢、歸孤芳寮、都聞來謂、評定衆議、常住每月、當爲都勸緣、給與奉賫、既訂定之矣、余固辭不受、且云、余尋常誓、雖一錢一粒、不犯常住、況今土木事賓、如何坐消常住哉、　晦日、圓覺奉行壹岐彈正至矣、出棟別七州公文、余乃謁府致

謝、徑往圓覺方丈、集評定衆者、告公文事、衆皆合爪而謝曰、是和尙之力也、　十月廿八日、是日、奉行依田、出造營料所公文、廼常州小河鄕也、余往圓覺、會評定衆於都聞寮、而示公文、衆咸喜曰、寺其再興矣、　廿九日、圓覺佛殿立柱、府君管領奉行入山、證明立柱儀畢、本寺及諸山見住長老、就于方丈而點心、幷打齋、余辭不赴、蓋以領勸緣事、已後誓不受外請也、

〔相州文書十一鎌倉郡〕上野國棟別錢貨拾文事、所被付圓覺寺造營要脚也、早相副守護使於大勸進雜掌、不論寺社本所領、不除地頭堀內、平均可被致其沙汰、且寄緯於左右、不可致猶豫之狀、依仰執達如件、

永和二年九月二十四日　　沙彌（花押）〇上杉能憲

刑部大輔入道殿

〔相州文書十一鎌倉郡〕圓覺寺造營要脚關所事、爲大森葛山關務半分替所寄附也、早於箱根山葦河宿邊、構在所、限年紀三ヶ年、嚴密可被致其沙汰之狀如件、

康曆二年六月日　　左兵衛督（花押）〇足利氏滿

當寺長老

〔新編相模國風土記稿藝文四〕湘中紀行　　大宰純〇中略

出則得圓覺寺、在道石、與東慶寺對、是弘安中、平時宗所爲宋僧子元建之、亦爲五山之一、外門今廢、大門署曰瑞鹿山、天皇彌仁書也、大門東有小門、以當外門、山門亦廢、余先尋歸源庵、在小門內少東、過訪所舊識佁西堂者、問本寺故事焉、師乃使良藏主者導、庵北山上有鐘樓、懸大鐘、是正安中所鑄、子曇作銘、鎌倉諸名刹、唯此鐘爲最大、鐘樓西北爲方丈、頹敗可慨、方丈西北里餘、抵山足、爲正續院、是佛光禪師祠堂也、寘木像焉、開龕謁之、儼然見華僧容儀、所藏圓硯、斑石徑尺餘、禪師行李中物也、方丈西南爲佛殿、署曰大光明寶殿、亦天皇彌仁書也、寘釋伽木像、及其餘諸像焉、佛殿側爲僧堂、餘多廢者、大低地域不及建長、山淺也、而衰廢過之、雖然歷覽遺跡、想見當時宏麗、關中梵字、唯此與建長、可以爲稱首矣、

寺格

宜乎、游子必探レ之、

〔鹿山路記 新編相模國風土記稿所載〕應永八年二月晦日、羅二鬱攸一、當時諸老或勸二府君一、或募レ衆、諸伽藍復レ舊、

〔新編相模國風土記稿 五藝文〕湘遊紀事　安藤煥圖

鎌倉諸遊第三

抵二圓覺寺一、山最爽豁、肩二差建長一、太宰舊識二其僧一、茶果慰勞甚至、命二一雛僧一導謁二開山祖佛光禪師像一、師宋人、平時宗所二招以建一レ寺、其像精工殊絕、顏面如レ生、掛二金字榜一曰二慈照一、時宗手書、渾雅可レ愛、入レ山觀レ鐘、厚尺許、銘後書曰、正安年製、敲レ之聲最淸越、僧曰、其所レ掛鐵環、劍工正宗所レ鑄云、

〔天明集成絲綸錄 三十一〕天明二寅年十二月

相州鎌倉　圓覺寺

伊豆　甲斐　信濃　陸奥　越後　上總　下總

右大殿山門就二大破一、修復爲二成力一、勸化御免、寺社奉行連印之勸化狀持參役僧共、來卯三月ゟ未三月迄、御料、私領、寺社領、在町可レ致二巡行一候間、志之輩者、物之多少ニよらず、可レ致二寄進一旨、御料者御代官、私領者領主地頭ゟ可レ被二申渡一候、

十二月

右之通可レ被二相觸一候、

〔集古文書 四勅宣〕延慶元年太政官符 相模國鎌倉圓覺寺藏

太政官符相模國司

應下以二當國大圓覺禪寺一爲中定額寺上事

右太政官、今日下二治部省一符偁、得二沙門崇演今月日奏狀一偁、玆伽藍者、先父正五位下行相模守平朝臣時宗、弘安聖曆大淵獻歲、殊凝二棣信一、專所二草創一也、鏤檻文梲々鮮姸也、宛然香花閣之奇麗、金姿玉相之

照耀也、孰與白毫水之嚴飾、於是不朽不退、修四禪三昧之妙行、于晨于夕、致天長地久之祈禱、料知王法繇佛法而口盛、佛法藉王法而紹興者乎、早以私寺專爲定額、傚厥先蹤、不可彈論、且牽由願成就寺之往蹤、所寄進大圓覺寺之仁祠也、任彼貞應之佳謨、將賜官符、勤勅願而已、何況忝振宸毫、幸下題額、誠是希代之嘉謨也、豈非萬葉之美談哉、昔陳室高祖帝之操翰也、垂字點於大莊嚴寺之扁、今本朝太上皇之染天筆也、耀神躍於大圓覺寺之月、在今思古、彼既錄焉、抑崇演倩願至愚之庸材、早謝朱紫之繁榮、遂歸佛陀之眞乘、猶幸社稷之安全、奉君之道、報國爲其之謂也、凡當國者、奉進將軍家所爲御願寺也、然而高達鶴唳於九霄、宜飛鳳詔於千里、望請天恩因准先例、被賜官符、以件寺爲定額寺、將奮護國家、令興隆敎法、然則金輪運遙、永仰栗陸之日、寶算德久、鎭伴華封之年者、右大臣宜奉勅依請者、省宜承知依宣行之者、國宜承知、符到奉行、

延慶元年十二月廿二日　修理宮城使從四位上行右中辨藤原朝臣花押

修理東大寺大佛長官正五位下行左大史小槻宿禰花押

〔相州文書十鎌倉郡〕（端書）後小松院勅額綸旨

圓覺寺所被下勅額也、宜專佛法之紹隆、奉祈寶祚之安寧者、天氣如此、仍執達如件、

三月二十二日　右中辨兼顯

當寺住持

〔相州文書十二鎌倉郡〕以圓覺禪寺、申成將軍家御祈禱所候、仍御敎書進之、食輪已轉、法輪常轉、必及龍華之期、感悅之至、不知所謝、委細期面拜、恐惶謹言、

七月〇弘安六年十八日　時宗

圓覺禪寺方丈侍者

〔寺鑑下禪宗五山選〕瑞鹿山　〇鎌倉五山第二〇相州鎌倉　圓覺寺

寺領用途

（相州文書十二鎌倉郡）〔端裏〕最初寺領寄附狀

請被以圓覺寺爲御願寄附尾張國富田庄、幷富吉、加納、上總國畔蒜南庄內龜山鄕供給寺用狀、

右玆寺者、爲鎭護國家、紹隆佛法、究華麗所草創也、地是神仙辟域、水石饒奇、隣亦建長仁祠、鐘梵和調、飛閣透逸、擧山叢以碁布矣、層軒延袤出雲霓以綺錯焉、丈六盧舍那、金容赫奕乎中央、十二菩薩衆、白毫照耀乎左右、孰與西天之莊嚴、宛然震旦之儀度、爰龍象鱗集、香花羅列、宣揚南宗之玄機、依弘東漸之法水、晝夜四時之坐禪、朝暮兩般之諷經、送寒送暑、不怠不忘、凡厥日月所照、車書所通、丹新周遍、莚叅耶重、而雲嶺春徵、霜林秋莫、縱支山資、豈全石鉢、不若遐長久之淵、量遮斷當無數之塵劫、庶防先例、分捨私物、宛給功德、古今之間、蹤蹟居多、就中近在建長之前修、直達欺誠於上聞、請施恩恤、必垂允容、以件精舍、爲御願寺、禪寄田園、永備寺領、稔如雲之租、助食養之供、然則善苗不秕、普灑法雨於九州、禪枝成林、鎭傳梵風於億載、寰宇艾安、幕府耆臣時宗、誠恐頓首謹言、

弘安六年七月日　　相模守平朝臣時宗狀

（相州文書十二鎌倉郡）圓覺寺事、爲將軍家御祈禱所、任相模國司申請所被寄進尾張國富田庄、幷富吉、加納、上總國畔蒜南庄內龜山鄕也者、依仰下知如件、

弘安六年七月十六日　　駿河守平朝臣業時判

（相州文書十二鎌倉郡）圓覺寺齋寺、潤月米百石、可沙汰進之由、被仰下候也、仍執達如件、

弘安七年三月廿六日　　頼綱判

得重公文所

（相州文書十二鎌倉郡）元弘以來被收公當寺領幷當知行地事、如元不可有相違之狀如件、

建武三年九月十五日　　尊氏判

圓覺寺長老

（相州文書十二鎌倉郡）當寺領尾張國篠木庄、富田庄、國分、溝口兩村、越前國山本庄、泉、船津兩郷、武藏國江戸郷内前島、上總國畔蒜南庄内龜山郷、下總國大須賀保内毛成、草毛兩村、上野國玉村御厨内北玉村郷、出羽國北寒河江庄五箇郷、（吉田、堀口、三曹司、西所、窪目、）地頭職事、任去々年十一月八日官符、關東安堵等、可令知行給之状如件、

建武四年七月十日　　左馬頭（足利直義）（花押）

謹上　圓覺寺長老

（相州文書十鎌倉郡）左辨官下　圓覺寺

應因准傍例、免除造伊勢大神宮役夫工米、日食米、御禊、大嘗會、御卽位以下勅役、院役、幷郡郷寺社所役、國中段米、棟別、津々關々賃料、官家、俗家臨時公役等、永爲當寺領、尾張國篠木庄、富田庄、國分、溝口兩村、駿河國淺服庄内東郷、幷瀨奈春吉、鎌田春吉、高松春吉、下島郷、佐野郷、武藏國江戸郷内前島村、丸子保内平間郷半分、上總國畔蒜南庄内龜山郷、下總國大須賀保内毛成、草毛兩村、常陸國小河郷、上野國玉村御厨内北玉村郷、出羽國北寒河江庄内五箇郷、吉田、堀口、三曹司、西所、窪目、越前國山本庄兩郷、泉、船津、越後國加地庄等、地頭職幷門前屋地事

右、得彼寺住持沙門契充去八月日奏狀偁、當寺者、佛光禪師之開基、名德繼踵、聖朝護持之巨刹、勤修積功、頻揭飛龍宸翰、恭降從天上、山號瑞鹿、法場自秀于相陽、佛法之繁榮、眞宗之口盛、精藍功著、嘉會運亭、諸寺諸山之紹隆、宛同如來在世之昔日、禪院教院之興復、專在君臣合體之今時、因茲當寺常住之資貯、彌爲成大福田、元來管領之庄園、悉要作勤施入、永停止伊勢太神宮役夫工米、幷勅事國役、諸社神人、國司、守護使、入勘官使、撿非違使、院宮諸司、甲乙人亂入、關東鎭西早打役等、先蹤、爰依有所相濫、動非無其煩、望請時襃天恩、因准先例、永被免除上件所役等之由、下賜不易之宣旨、將備萬代之證鏡、然者梵衆珍慶自倍增金輪之威光、緇徒歡呼更奉祝寶祚之長久者、權大納言藤原朝臣忠光宣、奉

勅依請者、同下知彼國々既畢、寺宜承知、依宜行之、

永和三年十二月十一日　　大史小槻宿禰在判

中辨藤原朝臣在判

〔相州文書十一鎌倉郡〕圓覺寺領所々、外宮、内宮役夫工米以下役等之事、已前就捕落、兼被成佰貫文、寺家造營最中之上者、如元可為陸拾貫文分由、所被仰出也、仍執達如件、

正長元年十二月二十九日　　前備中守満康在判 ○

當寺雜掌

〔相州文書十二鎌倉郡〕寄進圓覺寺、

相模國小坂郡鎌倉内、百拾三貫二百十文山内、三十壹貫六百廿文極樂寺内、

右如先規、令寄附訖、彌守此旨、佛法相續不可有怠慢之狀如件、

天正十九年辛卯十一月日　　正二位源朝臣在判

圓覺寺

〔寛文四年御朱印帳濟家觸宗五山派〕百四十四貫八百三十文　相模 天正十九年十一月日

〔圓覺寺文書新編相模國風土記所載〕圓覺寺制符條々

僧衆事、不可過二百人、粥飯事、臨時打給一向可停止之、寺中點心事、不可過一種、寺參時扈從輩儲事、可停止之、小僧喝食入寺事、自今以後、一向可停止之、但檀那免許非禁制之限、○中略帶刀事、固可禁制之、若有犯者、可追出之、右所定如件、

乾元二年二月十二日　　沙彌在判

〔相州文書十二鎌倉郡〕圓覺寺制符

一佛法修行事、任本願之素意、方丈可被執行之、於世事者、可有談合于寺家行事、是則先人之遺命也、

後昆宜服膺焉、　一寺官事、於兩班頭維那者、行事伺案內可請定、其外者、方丈僧侶行事相共加談議、以厥器用可撰補也、　一僧侶掛搭事、談合寺家行事可入法器之仁也、　一大小耆舊事、請定之後、一回未滿者、不可載名字於床曆也、　一僧衆事、不可過二佰伍拾人、　一小僧喝食事、不可過五人、　一諸堂幷職者布施事、佛殿、僧堂、舍利殿、輪藏、御影堂、司庫子、此外可停止之、　一粥飯事、大耆舊之外、止請物可著僧堂、將又臨時打給一向可停止也、　一寺中點心事、不可過一種、〇中略

右依定如件

嘉曆二年十月一日　　沙彌崇鑒押〇北條高時

〔相州文書十二鎌倉郡〕圓覺寺規式條々

一可令停止主賓不和之儀事、近來或號一揆、或稱門徒、成黨結徒、及寺家違亂之由有其聞、甚不可然、俗家猶戒之、況於釋門哉、向後云住持、云大衆、若有所存者、先於寺中可令和睦、鬱陶不休者、觸訴官方、可仰裁斷、無左右有嗷々之儀者、糺決張本、嚴密可被處其科也焉、　一僧衆事、不顧本願之素意、不量寺領之多少、連々加增之條無其謂、於當寺者可為三百人也、但當時見住分雖用捨、自然減少之期、一向可令停止、掛搭定數治定之後、赴軍以下闕分非制之限、　一職人事、以公儀可令撰補之、一遍未滿之仁、不可載名字於床曆、將又暖寮已下經營堅可令停止之、若有違犯之儀者、須令出院也焉、　一寺領庄務事、住持寺管加談議、撰補秉直之器用、無指過失者、住持雖遷替輙不可令改補之、若亦有非法之儀者、且經寺家裁斷、且守官家成敗、不可許諸寺之共住矣、　一塔頭事、所望出來者、帶關東注進、可令參訴京都、不帶御教書者、兼不可及土木之沙汰、凡諸塔頭為本寺及違亂之由有其聞、專背物儀歟、每事可致合體、若無其儀者、可處科條焉、　一不可入武具於寺中事、近日隱置皮具足於寮舍之由、普以風聞、若然者、縱雖為巷說、先差遣官方使者加點撿、其實露顯者、子細同前矣、　一行者人等猥稱事、寄事於寺中警固、猥帶弓箭兵仗、縱寺家權勢、張行非法、惱諸衆僧之由有其聞、儘可加嚴制、若違犯者、

爲處罪科、宜召渡官方焉、右所定如件、

左兵衛督源朝臣（事押○足利直義）

曆應三年二月日

〔相州文書（十二鎌倉郡）〕圓覺寺規式條々（追加分）

一新命長老、參隨僧衆（付行者下部等事）事、彼是不可過貳拾人、於之分者、不謂僧衆之多少、先可免許掛搭、但相加件人數之後者、至有限僧員、可相待減少期之子細、相同先事書焉、　一沙彌喝食事、衆僧之外、一寺分不可過廿人、子細同前、　一西堂大耆舊事、不論人數之增減、可免參暇之條同前、次座位事、於西堂者、見諸山之施行、宜守彼狀、其外五山耆舊會合之時者、首座者可爲都寺座上、書記者可爲監寺座上、是則爲紹隆佛法、所重頭首勞功也焉、　一僧衆行儀事、近年諸寺之法則、彼庭之上、或號緣者之在所、構居宅於寺外、致晝夜之經典、或於寺中企利錢借上之計略、由有其聞、佛法衰微之基、不可不誡、縱雖爲風聞之說、住持大衆相共可被禁遏、若猶有違犯之聞者、直仰官家、可加嚴制也矣、　一寺領庄務事、巨細載本事書、宜守其法、但雲水僧侶、累年之所務不可然、仍可爲一任參箇年、凡於延促者、須依其仁之廉否、將又見任都聞都官不可知行寺領、爲糺決諸給主之濟否也焉、次寺家沙汰事、不論大小事、於方丈可加談議、無住持之承諾者、敢不可令施行、且於評定人數者、宜爲住持之精撰也矣、右守度々制法、不可有違犯儀狀如件、

曆應五年三月日

左兵衛督源朝臣（事押○足利直義）

子院

〔和漢禪刹次第〕相陽瑞鹿山圓覺興聖禪寺（○中略）諸塔（○中略）

佛光
。正。續。院（万年山開山無學和上、諱祖元、號子元、諡佛光常照圓滿國師、嗣無準和上、明州鄞縣人、俗姓許氏、宋寶慶二年丙戌受生、□日本弘安二年己卯來朝、同九年丙戌九月三日示寂、凡本朝行化八年也、壽六十一、院曰正續、山曰万年、塔曰常照、頌曰、來也不前、去也不後、百億毛頭師子現、百億毛頭師子吼、）

〔空華日工集〕應安七年十月八日、圓覺正續院、本名祥勝院、以安佛牙舍利也、取入吉祥六殊勝之義、

〔相州文書（十鎌倉郡）〕太政官牒正續院

應因准傍例、免除造伊勢大神宮役夫工米、日食米、造內裏御禊、大嘗會以下勅役、院役、幷都鄙寺社所役、及國中段米、關々渡々貫料、凡恆例臨時公役等、永爲當院領、伊豆國多留鄕相模國厚木鄕半分、幷同國秋葉村、上總國庄吉鄕等事、

右得彼院住持比丘存圓、去五月日奏狀偁、謹啓案內、當院者、佛光圓滿常照國師塔頭也、白足靑眼之淨侶開正法藏、洞雲海月之禪心、了眞如理、祝延皇圖億載、禱爾武運無疆、然間爲挑佛龕之惠燈、爲轉僧寶之食輪、庄園寄附寺院資緣也、宜賜諸役勅免之鳳綸、而備萬代證據之龜鑑、望請洪恩、枉垂允容、然則率新寶祚延長彌增金輪威輝、不耐懇欵屛營之至者、口二位行權大納言藤原朝臣嗣房宣、奉勅依請者、同下知國々旣畢、院宜承知、依宜行之、牒到准狀、故牒、

至德元年七月五日　修理東大寺大佛長官從四位下行左大史兼播磨介小槻華押

從四位下行權右中辨藤原朝臣

〔鹿山略記 新編相模國風土記稿所載〕按正續院、古在建長寺中、開山侍眞寮也、從來移于此、合舍利殿矣、移于此之後、改祥勝以正續、爲稱呼也、

〔空華日工集〕應安四年正月廿一日、正續院主歸山、因門徒不順之事、告退歸武州矣、　廿二日、四更、禪罷、余忽思量、令圓覺事旣如此、吾佛光開基之場、化成魔窟、子孫結黨與住持矛盾、自顧無力、救他不如退宿鳳之居、遂點灯作偈曰、竊食山中十二年、獨行獨坐獨安眠、鳳凰不變梧桐宿、一任春風每夜顚、圓覺長老梅林和尙、兩班交代鳴退鼓、因事也、心岩摸來堂啓、退宿鳳作什麼、且緣而住好矣、余曰、三界隨夢幻之居、何處不空華室、但由他幻而居耳、圓覺歸法都聞、來說長老退事云、開山門徒無罪過、余曰、有罪無罪且置、總有是非、乃是吾宗恥也、古云、兄弟鬩墻、外禦其侮、今天下嫉吾宗者如蝟、吾徒恬然不悔、恣作鬪爭、以墮他計中、痛可惜矣、　七年十二月十三日、黃梅院上大亭、幷閣首座、以使告兄弟鬩墻之變、不發瑞泉香山冒早而來、和會黃梅事、遂與曇芳二人、同住圓覺方丈、與住持大法評議、卽呼中快周

恬二首座、昌道書記、異口同音告論曰、凡今本寺罹回祿之災、冷灰堆裏僧俗悲歎、當此時也、同門有鬩墻之事、況復黃梅門下事、苟非宿老前達、以後生脫進之徒、公然作禍、擯出院主、豈是人倫之道乎、門徒恥辱何事如之、公等苟爲先師直傳、而逐年少惡比丘之跡、甚不可也、三兄陳謝而退、卽請大亭、相送再歸黃梅、魔事遂止矣、

〔和漢禪刹次第〕相陽瑞鹿山圓覺興聖禪寺略〇中諸塔略〇中

○佛光 ○佛日 ○庵 檀那塔也、兄弟國也、得之失之、楚人弓耳、況復舍利、有碎身、有法身、法身舍利者、初無所得、今示不失、吾佛光祖滅、有僧問曰、和尚滅後有舍利否、祖留一偈、其尾曰、老僧舍利包天地、莫向空山撥冷灰、火浴後不遺一骨節、公案頒祖風、何如執一塊臭骨、蕭耶、法身碎

〔鹿山略記新編相模國風土記稿所載〕本寺大檀那、北條相模守平時宗、同相模守平貞時、同相模守平高時、祠堂之地也、其始者、時宗而已之靈屋、而佛日庵者、卽時宗靈室之名也、而餘之貞時、高時之靈屋者、分處而在黃梅續燈之二院、而靈屋之名、貞時曰無畏殿、高時曰同光堂、至于中古、合安于當院、爲檀那塔、近年穿續燈庵客殿之下、得一石櫃、是則移置于當院之跡也、

〔新編相模國風土記稿鎌倉郡八十〕山之内村略〇中圓覺寺略〇中

黃梅院 傳衣山ト號ス、徑山傳來ノ法衣、當院ノ什寶ニアリ、傳衣ト號ス、事ハ什寶ノ條ニ詳ニ載ス故ニ山號トストト云、夢窻疎石、元德中本坊住職ノ際、當所侍眞寮タリ、今ノ客殿是ナリト云フ後石ノ塔所トス、故ニ石ヲ以テ開祖ト稱セリ、夢窻ハ、觀應二年九月晦日寂ス、開基ハ、尊氏ノ近臣挾庭命鶴丸ナリ、尊氏ノ命ヲ持シテ剏シ、略〇註僧宏遠、塔主トシテ修造ス、

〔相州文書鎌倉郡十四〕夢窻正覺國師塔頭圓覺寺黃梅院事此狀三會院檀方各一本有之

將軍家御在鎌倉之時、可令興行之由、檀那命鶴殿、被申成御教書之間、宏遠首座爲塔主所修造也、隨而命鶴殿、被申寄常陸國結城村、色好村、椿村三箇所了、彼三箇村土貢內半分者、充當院支緣、半分者爲檀那受用分、永代塔主無怠慢、可被沙汰遣之、凡當院興行、依彼願力、令成就之間、爭無報謝之儀乎、

若背此旨者、爲門徒計可改易塔主者也、爲後證門徒之議如斯、

文和三年甲午三月日

天龍廿代 妙葩 華押

宏遠 華押

志玄 華押

〔黄梅院文書〕對當院、毎年米百石可令進獻之候、其御心得尤候、委細以使僧申達候、恐惶謹言、

三月十日

幻庵 宗瑞 花押

松平長門守 秀就 花押

黄梅院 侍主禪師

〔相州文書十鎌倉郡〕〔端書〕西國寺殿御書

圓覺寺領事、申入持明院殿之處、即被染宸筆之由、被仰下候也、謹言、

九月廿九日（○延慶元年）

華押（○西園寺公衡）

〔圓覺寺文書 新編相模國風土記稿所載〕圓覺寺領事、任被仰下之旨、可令申入仙洞給由、内々任申西園寺殿候處、忝被下宸筆候、子細定長崎三郎左衛門入道令言上候歟、以此旨可有洩御披露候、恐惶謹言、

十一月七日

越後守貞顯 華押

進上 尾藤左衛門尉殿

雜載

壽福寺

壽福寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉扇ケ谷村ニ在リテ、鎌倉五山ノ第三ナリ、源頼朝ノ室北條政子、僧榮西ヲシテ開基セシメシ所ニシテ、此地ハ原ト土屋義清ノ領地ナルヲ以テ、義清ヲ本願

主ト稱セリ、往時ハ賴義以下源氏累世ノ宅地ナリシト云フ、臨濟宗ニ屬ス、

名稱 所在

〔新編相模國風土記稿八十九鎌倉郡〕扇ケ谷村○中略　壽福寺　龜谷山金剛壽福禪寺ト號ス、五山ノ第三ニシテ、開山榮西ナリ、○註略　抑當寺ハ、モト左馬頭義朝ノ第蹟ナリ、義朝死後、岡崎四郎義實報恩ノタメ、此地ニ梵字ヲ創建ス、

〔新編鎌倉志四〕壽福寺附龜谷(カメガヤツ)　源氏代々屋敷

壽福寺ハ、龜谷(キコク)山金剛壽福禪寺ト號ス、五山ノ第三ナリ、

創建

〔吾妻鏡十六〕正治二年閏二月十二日戊戌、爲尼御臺所○源頼朝室北條政子御願、爲建立伽藍、被點出土屋次郎義清龜谷之地、是下野國司○源義朝御舊蹟也、爲報其恩、岡崎義實爰建草堂者也、今日民部丞行光、大夫屬入道善信、巡撿件地云云、　十三日己亥、龜谷地、被寄附葉上房律師榮西○後昇僧正、可爲清淨結界地之由被仰下、午剋、結衆等行道其地、施主監臨給所、右衞門尉朝光供奉御輿、義清構假屋儲珍膳云云、未剋、堂舍○壽福寺也、營作事始也、善信、行光等奉行之、　七月六日庚申、尼御臺所、於京都被圖十六羅漢像、佐々木左衞門尉定綱調進之、今日到來、御拜見之後、令奉送葉上房之寺給云云、　十五日己巳、於金剛壽福寺、新圖十六羅漢被遂開眼供養、導師當寺長老葉上房律師榮西也、尼御臺所、爲御聽聞有參堂云云、

〔吾妻鏡十七〕建仁二年二月廿九日甲辰、壞渡故大僕卿義朝沼濱御舊宅、於鎌倉被寄附于榮西律師龜谷寺、行光奉行之、此事、當寺建立最初、雖有其沙汰、依爲彼御記念、幕下將軍殊被修復、其破壞暫不可有顚倒儀之由被定之處、僕卿入于尼御臺所夢中被示云、吾常在沼濱亭、而海邊極漁壞之、令建立于寺中、欲得六樂云云、御夢覺之後、令善信記之給、被遣榮西云云、大官令○大江廣元云、六樂者六根樂歟云云、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年○建保元年五月三日癸卯、卽以公氏被御願書被奉於鶴岡、當斯時、大學助義清、

堂塔
本尊

自甘繩入龜谷、經窟堂前路、次欲參旅御所之處、於若宮赤橋之砌、爲流矢之所犯、義清亡命、件箭自北方飛來、是神鏑之由謳歌、僮僕取彼首、葬于壽福寺、義清依爲當寺本願主也、是岡崎四郎義實二男、母中村庄司宗平女也、建暦二年十二月卅日、任大學權助、法勝寺九重塔造營功云云、

〔東福紀年錄〕正嘉元年丁巳

平元帥〇北條時賴偉聖一居壽福寺、講叢林禮、蓋榮西開基以來、禪規未全、住持朗譽建頭房且居偏室、

〔新編相模國風土記稿〕八十九鎌倉郡扇ケ谷村〇中略　壽福寺〇中略　佛殿　本尊釋迦、文珠、普賢ノ像ヲ安ズ、釋迦ハ陳和卿ノ作ナリ、是ヲ籠釋迦ト云フ、籠ニテ作リ、上ヲ張リタルモノナリ、祖師堂ニ、達磨、臨濟、百丈、開山像等ヲ置キ、土地堂ニ、伽藍神、并前住ノ牌、將軍家ノ尊牌アリ、〇中略　開山塔　逍遙庵ト號ス、今庵ハ廢シテ、塔ハ積翠庵ニテ進退ス、開山榮西ノ木像ヲ置キ、法雨塔ノ額ヲ掲グ、〇中略　總門　龜谷山ノ額ヲ掲グ、黃檗僧即非ノ書ナリ、〇註略　山門　持氏ノ筆ニテ、扶桑與禪閣ノ額ヲ掲グ、

〔吾妻鏡〕三十八寛元五年十一月七日丙辰、丑剋依失火、金剛壽福寺佛殿以下至總門、悉以災、

〔吾妻鏡〕四十八正嘉二年正月十七日丁卯、丑剋、秋田城介泰盛、甘繩宅失火、南風頻扇、越藥師堂後山、到壽福寺總門、佛殿庫裏方丈已下郭內不殘一字、餘炎新清水寺窟堂、并其邊民屋、若宮寶藏、同別當坊等燒火、

〔鎌倉管領九代記〕二龜谷山壽福寺炎上、附開基

同じき〇應永二年十二月二十日の夜、壽福寺炎上す、

〔新編相模國風土記稿〕四藝文湘中紀行　大宰純〇中略

英勝寺北隣爲壽福寺、是故義朝宅、自源賴義其子義家征戎時、留于此、義朝亦家焉、及賴朝時、岡崎義實爲義朝建寺焉、其後平太夫人修之、寘僧榮西焉、遂爲五山之一、而最古矣、殿堂皆廢、唯有佛殿、安竹

龍釋迦像、佛殿西南山麓、爲千光國師祠堂、其後巖穴有石塔、傳道實朝墓、蓋非也、凡鎌倉所謂五山者、衰替已久、而尙可以觀當時規模者、莫如建長寺、次則圓覺寺、壽福之衰又甚焉、淨妙又過之、至於淨智、幸其不亡而已、其序則建長爲上、圓覺次之、壽福又次之、淨智又次之、淨妙爲下、義滿之命也、

寺格

〔空華日工集〕永德二年五月五日、君（○足利義滿）問東西五山之起、余曰、昔曆應年間、先君（○足利義詮）秉鈞、創設五山、第一建長南禪、（○中略）第三壽福、（○下略）

寺領

〔新編相模國風土記稿〕八十九（鎌倉郡）扇ケ谷村（○中略）壽福寺（○中略）天正十九年十一月、寺領五貫二百文ノ御朱印ヲ賜ハル、其後境內九段餘ノ地ヲ裂テ、隣寺英勝寺ニ御寄附アリシ時、其替地トシテ、慶安二年十月、三貫三百八十七文ノ地ヲ加へ賜ヒ、都テ八貫五百八拾文餘ノ御朱印ヲ賜へリ、

子院

〔和漢禪刹次第〕相陽龜谷山金剛壽福禪寺（○中略）諸塔
黃龍派 逍遙庵（開山葉上僧正、諱榮西、號明庵、千光祖師、）

淨智寺

名勝所在

淨智寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉山之內村ニ在リ、鎌倉五山ノ第四ニ位ス、北條師時ノ建立ニシテ、宋僧普寧ヲ以テ開山トス、或ハ普寧ノ弟子正念、若シクハ宏海ヲ以テ開山トストモ云ヘリ、寺號ハ師時ノ法名ニ因リシナリ、嘉曆年中、天龍寺疎石、北條高時ノ請ニ由リテ、此ニ留錫シ、其弟子妙葩モ亦此ニ來リ住セリ、臨濟宗ニ屬ス、

〔和漢禪刹次第〕金寶山淨智禪寺
開山大休念禪師、又佛源禪師、

〔新編鎌倉志〕三淨智寺

創建沿革

淨智寺ハ、明月院ノ向ナリ、金峯山ト號ス、五山ノ第四ナリ、

〔新編鎌倉志三〕淨智寺、

淨智寺ハ、〇中略平師時建立、師時ヲ淨智寺ト號ス、法名ハ道覺ト云、寺ニ牌アリ、開山ハ宋ノ佛源禪師諱正念大休ト號ス、〇中略當寺ハ宋ノ兀庵禪師〇普寧ノ開基ナレドモ、後宋ニ歸ル時、附法ノ弟子眞應禪師〇宏海壯年ナリ、故ニ佛源ニ請ヲ遺ス、因テ眞應佛源兩師ヲ開山トモ云ナリ、

〔新編相模國風土記稿八十一鎌倉郡〕山之内村　淨智寺　金峯山ト號ス、臨濟宗、鎌倉五山ノ一ニシテ、第四位タリ、〇中略註　請待開山ハ正念、〇中略註　準開山ハ宏海、〇中略註　開基ハ、北條武藏守宗政、同相模守師時父子ナリト云、〇中略註　鎌倉志ニハ、念ヲ開山トシ、實ハ寧ガ開基ナレドモ、後宋ニ歸ル時、附法ノ弟子海、壯年ナルガ故、念ニ言ヲ遺スト記シ、師時ヲモテ開基トス、其年序ニ於テ甚懸隔セリ、寺傳ニ云ッ處モ又委シカラズ、抑當寺創建ノ年代ヲ傳ヘザレバ詳ナラザレド、寧ガ宋ニ歸リシハ文永二年ニシテ、是年宗政僅ニ十三歲、師時未生以前タレバ、事實ニ適ハズ、今推考スルニ、宗政ガ死後是ガ爲ニ、其室ナドカ親族ヲカタラヒ、弘安ノ末當寺ヲ起立シ、亡夫宗政幼子師時ヲ合テ開基ト唱ヘ、海ヲ延テ第一祖トス、然ルニ海壯年其任ニ中ラズトシ、念ヲ請ジテ入佛供養等ノ禮式ヲ行ハシメ、且亡師寧ヲタテヽ開山祖ト稱シ、其身ハ二世ト稱セシナルベシ、古クハ此等ノ例マヽ見聞アリ、

堂塔

〔新編相模國風土記稿八十一鎌倉郡〕山之内村〇中略　淨智寺〇中略　佛殿　曇華殿ノ額ヲ掲ク、釋迦、彌陀、彌勒ノ三像ヲ本尊トス、古クハ法堂一名普光堂ト號ス、日本筆ノ額ヲ掲シト云、僧堂雲澤堂ト號ス、行堂妙澤堂ト號ス、維那寮紀綱ト名ヅク、等アリシガ、今ハ悉ク廢ス、　方丈　朝宗ト號ス、扁額ナシ、下同ジ、　玄關ヲ向上關ト云ヒ、書院ヲ常安ト名ヅク、又宇碧トモ號ス、管領氏滿ガ書セシ額アリシガ、盡ク失セシト云フ、

〔天保集成絲綸錄五十七〕寬政八辰年二月

大目付江

下總　越後　信濃

右諸堂修復、并寺相續爲助成、右三箇國勸化御免寺社奉行連印之勸化狀持參、役僧共、當辰三月より來る未二月迄、御料、私領、寺社領、在町可致巡行候間、志之輩は、もの、多少によらす、可致寄進候、御料は御代官、私領は領主地頭より可被申渡候、

辰三月

右之通、可被相觸候、

寺格

〔圓覺寺文書 新編相模國風土記稿所載〕五山座位次第事

至德三七十、五山之上南禪寺、○中略第四淨智寺、東福寺、○下略

寺職

〔本朝高僧傳 二十八 淨禪〕京兆雲龜山天龍寺沙門疎石傳

釋疎石、○中略嘉曆元年、辭南禪之印、○中略平帥○北條高時延住淨智、

〔鎌倉大草紙 下〕同書○太平記批判記に曰、京村雲大休寺の開基妙喆侍者は、夢想國師の法眷にて、錦小路殿○足利直義の師なり、高武藏守にくまれ、關東へ下り、鎌倉五山淨智寺に住、大同妙喆大和尚と號す、

〔太平記 二十六〕妙吉侍者事附秦始皇帝事

近來、左兵衛督直義朝臣、將軍ニ代テ天下ノ權ヲ取給シ後、專ラ禪ノ宗旨ニ傾テ、夢窻國師ノ御弟子ト成リ、天龍寺ヲ建立シテ、陞座拈香ノ招請無隙、供佛施僧ノ財產不盡日云事無リケリ、爰ニ夢窻國師ノ法眷ニ、妙吉侍者ト云ケル僧、是ヲ見テ、浦山敷事ニ思ヒケレバ、仁和寺ニ志一房トテ、外法成就ノ人ノ有ケルニ、咤祇尼天ノ法ヲ習テ、三七日行ヒケルニ、頓法立ニ成就シテ、心ニ願フ事ノ聊モ不叶云事ナシ、是ヨリ夢窻和尙モ此僧ヲ以テ、一大事ニ思フ心著給ヒニケレ

寺領 子院

バ、左兵衛督ノ被參タリケル時、和尙宜ケルハ、日夜ノ參禪學道ノ御爲ニ候ヘバ、如何ニモ解ル處ヲコソ勸メ申ベク候ヘ共、行路程遠シテ、往還ノ御煩其恐候ヘバ、今ヨリ後ハ、是ニ妙吉侍者ト申法眷ノ僧ノ候ヲ參ラセ候ベシ、語錄ナンドヲモ、カヒ〴〵敷沙汰シ、祖師ノ心印ヲモ直ニ承當シ候ハンズル事、恐ラクハ可恥人モ候ハネバ、我ニ不替、常ニ御相看候テ、御法談候ベシトテ、則妙吉侍者ヲ左兵衛督ノ方ヘゾ被遣ケル、直義朝臣、一度此僧ヲ見奉リシヨリ、信心肝ニ銘ジ、渴仰無類ケレバ、只西天祖達磨大師、二度我國ニ西來シテ、直指人心ノ正宗ヲ被示カトゾ思ハレケル、軈一條堀川村雲ノ反橋ト云所ニ、寺ヲ立テ、宗風ヲ開基スルニ、左兵衛督、日夜ノ參學、朝夕ノ法談、無隙ケレバ、其趣ニ隨ハン爲ニ、山門、寺門ノ貫首、宗ヲ改メテ衣鉢ヲ持チ、五山、十刹ノ長老モ、風ヲ顧テ吹擧ヲ臨ム、況乎卿相雲客ノ交リ近ヅキ給フ有様、奉行、頭人ノ媚タル體、語ルニ言モ不可及、車馬門前ニ立列、僧俗堂上ニ群集ス、其一日ノ布施物、一座ノ引手物ナンド集メバ、如山可積、只釋尊出世ノ其古、王舍城ヨリ、毎日五百ノ車ニ、色々ノ寶ヲ積テ、佛ニ奉リ給ヒケルモ、是ニハ過ジトゾ見エタリケル、加様ニ萬人崇敬類ヒ無リケレ共、師直、師泰兄弟ハ、何條其僧ノ智慧才學、サゾアルラント欺テ、一度モ更ニ不相看、剩ヘ門前ヲ乘打ニシテ、路次ニ行逢時モ、大衣ヲ沓ノ鼻ニ蹴サスル體ニゾ振舞ケル、吉侍者是ヲ見テ、安カラヌ事ニ思ケレバ、物語ノ端、事ノ次ニハ、只執事兄弟ノ擧動、穩便ナラヌ者哉ト云沙汰セラレケルヲ聞テ、上杉伊豆守、畠山大藏少輔、スハヤ究竟ノ事コソ有ケレ、師直、師泰ヲ讒シ失ハンズル事ハ、此僧ニマサル人非ジト被思ケレバ、軈テ交ヲ深シ、媚ヲ厚シテ、様々讒ヲゾ構ヘケル、

〔相州文書一鎌倉郡〕淨智寺□進之事

一被敷地之事、前々御寄進三貫文、今度鐘就一儀、新御寄進二貫七百餘、首尾五貫七百四拾餘之所、寺中不被結寺庵□□當所務之儀、努々不可有之旨、以御下知申定候、

一鐘代物廿貫文、此內十貫文□自院御預リ、是又十貫文者、聽好軒有御預、佛殿□□所、從兩所公物取出合、拙者奉行一人相添、嚴密使□候成共、非分無之樣ニ、御調可被成之事、

一新御寄進二貫七百餘之□□自院幷聽好軒、年貢目取沙汰、半分宛有御預、寺中小庵をも可被取立事、是又肝要候

一先御寄進三貫文之內、□□所此度買主可爲損物之由被仰出候、此儀者、縣別□□中法度、改被仰付事、御屋形新御寄進二貫□□餘之御判形、寺中開山塔、藏雲庵之可爲什物、不可被納他寺事、

右條々、兼日得御內□如斯直談申定候、於向後此筋目毛頭□相違□□畢、山內小代官後藤右近尉爲證人、毎年可被仰改之旨、申合候所如件、

庚戌十九年（〇天文）閏五月廿一日　　大道寺盛昌（華押）〇

藏雲庵

〔相州文書一鎌倉郡〕先年撿地之時、參貫文指置候、重而二貫文、爲寺家修理令寄進畢、此上衆僧文字之嗜肝要候、能僧出來付者、猶可令加合力候狀如件、

天文廿二癸巳十二月十五日

淨智寺

〔和漢三才圖會六十七相模〕金峯山淨智寺　在明月院之向　寺領六貫百文〇中略　塔頭十院、今則皆廢亡、

淨妙寺

淨妙寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉淨妙寺村ニ在リ、原ト極樂寺ト稱ス、文治四年、足利義兼ノ建立

シテ、僧行勇ヲ以テ開山トス、初メ眞言宗ニ屬セシガ、建仁元年、禪宗ニ改メ、至德年中、鎌倉五山ノ第五位ニ列セリ、

名稱所在

〔新編相模國風土記稿鎌倉郡九十四〕淨妙寺村略○中　淨妙寺　稲荷山ト號ス、臨濟宗、五山ノ第五ナリ、註○略　文治四年、足利上總介義兼、玆ニ草創シテ、極樂寺ト號ス、略○註　律師行勇ヲ請ジテ第一世トス、註○略　正治元年三月八日、義兼卒ス、荼毘シテ當寺ノ後山ニ塔ヲ建ツ、略○註　當時ハ密宗タリシガ、義兼ノ男左馬頭義氏、禪風ニ歸依シ、遂ニ當時密場ヲ改メテ禪刹トス、略○註　時ニ建仁元年ナリ、

〔新編鎌倉志二〕淨妙寺附稲荷明神社

淨妙寺ハ、稲荷山ト號ス、五山ノ第五也、

創建沿革堂塔

〔寺傳略記新編相模國風土記稿所載〕爰有八幡太郎四代曾孫、足利源朝臣義兼、文治四年、創寺號極樂、同五年五月廿九日斷手、略○中　特奉源公頼朝命、恭請永福之護衛律師行勇、爲第一世、略○中　義氏繼踵、官暇參師、問訊禪要、歸崇於師、最超先考、轉極樂密場、革爲禪窟、請師提綱演法、緇素雲集、

〔寺傳略記新編相模國風土記稿所載〕建暦二年、左大臣實朝、一夜夢老翁徐々來謁曰、知是大倉明神、告曰、我有僧坊、有神祠、此地者藤祖謹惜之靈跡、文室應瑞之舊趾、請宜建佛堂、則我永鎭三寶、呵禁不祥、府君謁焉、受敎義氏、專沙汰經營事、不闕庫藏賦、剏二層堂、華梁映日、輪奐聳雲、略○中　建暦三年四月十五日、斷工、即安、置二品禪尼之白檀彌陀、與朝公新鑄釋迦如來、上下層、慶讃供養、導師大阿闍梨公顯、諸僧數口、緇白滿堂、

〔本朝高僧傳淨禪十九〕相州淨妙寺沙門行勇傳

釋行勇、號退耕、不詳姓氏、相州酒匂人、或曰、生于洛陽四條藤氏、童稺薙髮、錯綜密乘、有聲講肆、略○中　副元帥平泰時、建淨妙東勝二刹、請勇爲開山初祖、所住之寺、海衆滿堂、仁治二年七月五日、寂於東勝正寢、壽七十九、有神足大歇心公、余聞○中師抵於淨妙寺、覩開山入滅牌曰、永仁二年十月二十日寂、壽八十、若然朋庵禪

寺格

寺領子院

師之寂年、與勇公之誕歲同年、其爲謬也明矣、今據野峯名德傳定年月日焉、

〔新編鎌倉志 二〕淨妙寺

按ズルニ、源尊氏ノ父、讃岐守貞氏ヲ、淨妙寺殿貞山道觀ト號ス、元弘元年九月五日逝去、當寺ノ檀那ニテ、當寺ヲ修復ノ後、淨妙寺ト改タルト見ヘタリ、

〔元亨釋書 六 淨禪〕釋德儉、○中略 永仁三年、府帖領本郡長勝寺、乳香報于覺也、次移東勝、淨妙、禪興、建仁、建長、

〔寺傳略記 新編相模國風土記稿所載〕足利尊氏、元應元年、爲報罔極恩義、革當山舊蹟、扮七字、伽藍一新、雄圖改觀、稱山稻荷、以賽神德、元亨二年、奏京師、改寺淨妙、禪流輻湊、暮鐘朝鼓、叢林禮樂、始盛于此、

○按ズルニ、淨妙ハ、尊氏ノ父貞氏ノ法名ナリ、

〔鎌倉九代後記〕應永三十一年正月廿五日、淨妙寺炎

永享元年正月卅日、淨妙寺炎上、

〔北國紀行〕淨妙寺ニ入テ見ルニ、臺荒テ春ノ草ニ傾キ、檜皮朽テ苔ノ緣ニ等シ、今ハ少室一苑開五葉ノ遺薰モ、ツキヌルカト覺ユルニ、○下略

○按ズルニ、北國紀行ハ文明長享比ノ作ナリ、

〔寺傳略記 新編相模國風土記稿所載〕足利義滿、奏後圓融上皇、賜勅書及御教書、列淨妙于五山之位、至于至德三年、後小松帝勅昇當山於第五之階、令關西關左之五岳、交爲賓主、

〔寺傳略記 新編相模國風土記稿所載〕官符、淨妙寺領事、萬壽官符、永曆仁安廳下文、分明之上、停止左馬寮之濫妨、可全管領之由、可有御下知寺家旨、綸旨如此、以此旨可申入聖護院宮□□仍執達如件、

元亨二年後五月廿六日　大藏判

〔和漢三才圖會 六十七 相模〕稻荷山淨妙寺　在大倉　寺領四貫三百文、○中略　塔頭九院、今則亡、

瑞泉寺

名稱所在

瑞泉寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉二階堂村ニ在リ、僧疎石ヲ以テ開山トシ、足利基氏ヲ以テ中興開基トス、臨濟宗ニ屬シ、關東十刹ノ一タリ、

〔和漢禪刹次第〕關東十刹 相州瑞泉寺錦屏山開山夢窓國師

〔新編鎌倉志二〕瑞泉寺

瑞泉寺ハ、理智光寺ノ東北ニアリ、錦屏山ト號ス、關東十刹ノ内ナリ、源基氏ノ建立ナリ、基氏ヲ瑞泉寺玉岩昕公ト號ス、

創建沿革

〔新編相模國風土記稿九十鎌倉郡〕二階堂村○中略 瑞泉寺 錦屏山ト號ス、臨濟宗、圓覺寺塔頭ニ屬ス、關東十刹ノ内第二ナリ、嘉暦二年起立ス、開山ハ疎石、○註略 中興開基ハ、足利基氏ナリ、法名瑞泉院玉巖昕公、貞治六年四月二十六日逝、歲二十八、基氏當寺再建アリ、故ニ開基トス、○中略 應永五年十一月四日、氏滿逝去ス、當寺ニ埋葬シテ、佛事ヲ修セリ、曰、應永五年十一月四日、氏滿四十六歲ニテ御逝去ナリ、去年夏ヨリ精進潔齋ニテ、御讀經アリ、逆修ノ御中陰勤有ケル、永安寺殿ト號ス、瑞泉寺ニ於テ御葬ノ次第、剃髮正續院周應和尚、授衣圓覺寺周滿和尚、鎖龕西來庵增海和尚、奠湯、淨智寺業文和尚、點茶、壽福寺文昱和尚、起龕、正續院周應和尚、奠湯、瑞泉寺中澤和尚、サテ又小佛事ニハ、奥州ノ滿貞公ヨリ執行セラル、拈香ハ建長寺等金等ナリ云々、カクテ域内ニ埋葬シ、一寺ヲ建テ、永安寺ト號シ、當寺塔頭ニ列ス、今ハ廢セリ、○中略 永享十年、持氏亂ノ時、十一月、永壽王成氏幼名逃テ小八幡ニ在シヲ、當寺住僧昌在抱取テ甲州ニ隱ル、曰、鎌倉ノ成氏ハ、持氏一亂ノ時、永享十年十一月朔日、永壽王ト申、五歲ニテ、鎌倉小八幡社迄落シケル、瑞泉寺昌在西堂懷テ、鍼波別當大夫耶等二人御伴申、甲州ヘ忍テ、鐵冶ノ家ニカクル、後永壽王元服アリテ成氏ト稱シ、鎌倉管領トナルニ及テハ、毎年二月、必當寺ニ詣スルヲモテ例格トス、鎌倉年中行事曰、淨妙寺、長壽寺、大休寺、延福寺、瑞泉寺、興禪院、永安寺、靜光院、太平寺、天壽院、冷光院、保壽院、以上十二ヶ所也云々、寺領三十八貫文ハ、天正十九年以來、圓覺寺領ノ内ヲ配當アリ、當寺住持職ハ圓覺寺西堂ノ僧ヲモテ補セラル、是私ノ補任ニアラズ、公帖ヲ下サレテ補セラ

寺格

レシナリ、卽慶長八年八月、圓覺寺西堂雲如梵意（佛日庵二世）公帖ヲ賜ハリテ住持職トナル、（御文曰、瑞泉寺住持職事、任先例可被執務之狀如件、慶長八年八月二十六日、梵意西堂、右大臣御判、）寺後ノ樹陰ニ、基氏ノ墳墓アリ、五輪塔ナリ、本堂本尊釋迦ヲ安ズ、（座像、長七寸許、）本尊ノ前ニ、普濟ノ二字ヲ扁ス、勅額ト傳フルノミ、其時代筆者ノ傳ヲ失フ、古傳ニ據レバ、當寺祖塔祥雲庵ノ額ナリ、彼庵廢セシ後、爰ニ移セシナルベシ、本堂ニハ當時氏滿筆、大雄寶殿ノ四字ヲ扁セシト云フ、今ハ亡セリ、

〔新編相模國風土記稿（四藝文）〕湘中紀行　太宰純

山下田畝者、故東光寺墟也、其東山足有地牢、是源直義、囚兵部王護良、尋殺之所也、披荊棘而視之、巖穴約深丈半、廣亦如之、口窄內寬、可坐二十人、穴口崩頽不可輒入、稍稍窺之卽出、其東南爲理智光寺、山上有王墓云、未之探也、從是東行、可二里所、度嶺抵瑞泉寺、是貞治中、基氏所營、夢窻師之兎裘也、殿宇荒廢、僅存十一、東北山椒爲徧界一覽亭之墟、石磴羊腸甚峻、左右折者凡十八而抵絶頂、其平者可坐數十人、亭今廢、唯有基址、岡樹重疊、下臨深谿、西南望見滄海連天、遠之富嶽函嶺、近之湘中諸山、悉來爲吾阿堵中物、使人應接不暇、實此都勝槪、是寺之所以以亭聞也、余唯恨不得酒耳、躑躅久之乃下、過寺僧、餔席命茶、勞我輩如舊識、余因問亭所以作焉、對曰、國師避亂於平安、而來關東、基氏爲建此寺、山號錦屛、多紅樹也、師遂老焉、迺剏亭於山顚、以爲游觀之所、後人繼而修之、不止一再、輓近水府義公重修之、張宴于中焉、近復爲風所拔而廢、三年于玆矣、未之有再造也、不亦痛乎、我三人聞之、莫不顰顣、僧又延我輩、入國師祠堂、謁師及基氏氏滿木像、

〔扶桑五山記一之三〕關東十刹　瑞泉寺（相州、錦屛山、開山夢窻國師、檀那源基氏、法名玉岩昕公、）

〔寺鑑下禪宗五山派〕錦屛山　圓覺寺附庸十刹、相州鎌倉、瑞泉寺

御朱印　圓覺寺領之內配當（○中略）

獻上（扇子一箱）ヅヽ、右三ヶ寺（○禪興寺、瑞泉寺、圓淸寺、）住職、本寺建長寺、圓覺寺ゟ申付ル、　住職御禮無之　年頭

御禮、大廣間、獨禮座一同、　御暇無之、

禪興寺　最明寺(併入)

禪興寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉山之內村ニ在リ、初メ北條時頼此地ニ退隱シテ最明寺ヲ建立ス、時頼歿後一旦廢寺タリシガ、其子時宗之ヲ再興シテ、僧道隆ヲ延テ開山トス、禪興寺卽チ是ナリ、臨濟宗ニ屬シテ、關東十刹ノ一タリ、

〔和漢禪刹次第〕關東十刹　相州禪興寺(福源山、開山大覺禪師)

〔新編鎌倉志　三〕禪興寺(附最明寺舊跡)

禪興寺ハ、福源山ト號ス、淨智寺ノ向、明月院ノ門ヲ入テ左ナリ、關東十刹ノ第一也、明月院ノ持分ナリ、寺僧云、上杉道合ハ、當寺ノ檀那ナリ、明月院ハ、道合ノ菩提所ナルユヘニ、當寺ヲ領スルトナリ、

〔新編相模國風土記稿　八十一鎌倉郡〕山之內村(○中略)　禪興寺　福源山ト號ス、關東十刹ノ第一タリ、其始北條時頼幽栖ノ地ヲトシ、遁世ノ素懷ヲ遂ントナリ、遂ニ爰ニ一宇ヲ造立シ、最明寺ト名ヅケ、堂ノ傍ニ一亭ヲ構ヘ、是ヲ閑居トス、康元元年七月、始テ將軍宗尊親王御參アリ、(○註略)十一月二十三日、當寺ニ於テ時頼落飾アリ、建長ノ道隆ヲ請テ戒師トス、(○註略)正嘉二年二月十三日、故武藏守經時十三回忌ニ當ルヲ以テ五種行ヲ行フ、時頼法主タリ、(○註略)弘長三年十一月十九日、時頼病痾危急ニ及ブノ時、當寺ノ北亭ニ移ル、(○註略)二十二日、法衣ヲ著シ、坐禪シテ卒ス、翌日葬禮ノ式ヲ行フ、(○註略)是ヨリ後ハ、時頼ガ廟所タルノミ、元ヨリ住持僧ナキガ故、自然廢寺トナリシニヤ、翌ル文永元年、或人爰ノ梅花ヲ折テ、宗尊親王ニ參ラセシ時、往時ヲ感慨シテ詠ゼラレシ歌、瓊玉集ニアリ、其

詞書ニ、最明寺舊跡トアルヲモテ識ルベシ、〇註略二年十月、故時頼ガ三周ノ佛事、爰ニテ修行アリ、〇註略其後相模守時宗、故基再興シテ更ニ一寺トシ、名ヅケテ今ノ山寺號ヲ負セ、道隆ヲ延テ常住タラシム、〇註略康曆元年十二月、管領氏滿堂塔建立アリテ、梁牌ノ銘ヲ記ス、〇註略其頃ノ堂宇等、頗ル廣大ニシテ、〇註略明月院モ當時塔頭タリシトゾ、應永二十八年六月、千葉兼胤伐木禁制ノ制書ヲ出セリ、〇註略其後漸々衰微セシニヤ、永正六年九月、管領政氏ヨリ當寺再興ノ事ニ因、建長前寺住玉隱ニ書ヲ送リシ事アリ、〇註略天文十六年十月、當寺總門內、田園及ビ山野竹木等ヲ、北條氏ヨリ明月院ニ寄附セラル、〇註略某年三月、里見義弘ヨリ制札ヲ出セリ、〇註略其後荒廢シテ、今ハ佛殿ノミヲ存シ、明月院ノ持トナレリ、佛殿、釋迦ヲ本尊トス、(首ハ惠心作)

寺格

〔扶桑五山記　一之三〕十刹(康曆二年重沙汰)

第二禪興寺(相州)

〔寺鑑　下禪宗五山派〕

建長寺附庸十刹、相州鎌倉、禪興寺

御朱印　建長寺領之內配當

〇

最明寺

〔吾妻鏡　四十六〕建長八年七月十七日乙巳、將軍家(〇宗尊親王)御參山內最明寺、此精舍建立之後、始御禮佛也、相州(〇北條時頼)可被遂御素懷之由、內々有其沙汰、依思食彼餘波歟、殊被刷今日御出行列、先隨兵十二人、(騎馬)

康元元年十一月廿三日庚戌、寅剋、於最明寺、相州令落飾給、(年卅)依日來素懷也、御法名覺了房道崇云云、御戒師宋朝道隆禪師也、

東勝寺

名稱
所在
創建

沿革

東勝寺ハ、北條泰時ノ建立ニシテ、僧行勇ヲ以テ開山トス、關東十刹ノ一タリ、元弘三年、北條高時、一族ト共ニ、當寺ニ自殺スルヤ、火ヲ放チテ之ヲ燒キ、遂ニ廢滅ニ歸セリ、舊地ハ相模國鎌倉郡鎌倉小町村字葛西谷ニ在リ、

〔新編鎌倉志七〕葛西谷附東勝寺舊跡　彈琴松

葛西谷ハ寶戒寺ノ境内川ヲ越テ、東南ノ谷ナリ、山ノ下ニ古ヘノ青龍山東勝寺ノ舊跡アリ、東勝寺ハ關東十刹ノ内ナリ、開山ハ西勇和尙、退耕行勇ノ法嗣也ト云フ、今ハ寺亡タリ、

〔本朝高僧傳十九淨禪〕相州淨妙寺沙門行勇傳

副元帥平泰時建淨妙東勝二刹、請勇爲開山初祖、所住之寺衲衆滿堂、仁治二年七月五日寂於東勝正寢、壽七十九、

〔新編相模國風土記稿八十八鎌倉郡〕小町村○中略　東勝寺廢蹟　葛西谷ニアリ、此寺青龍山ト號シ、○注略關東十刹ノ一ナリ、北條泰時ノ草創ニシテ、行勇ヲ開山ノ始祖トス、○中略　元弘三年五月、鎌倉兵火ニ依テ、相模入道崇鑑、千餘騎ニテ館ヲ出、當寺ニ引籠リケレバ、諸將ノ軍兵寺內ニ充滿ス、當寺ハ北條氏代々ノ墳墓地ナレバ、爰ニテ自害センガ爲ナリ、○中略　此時長崎次郎高重山內ニテ、最後ノ一戰ヲ遂、歸來テ自害ヲ勸ケレバ、相模入道崇鑑ヲ始メ、一族門葉二百八十三人皆自殺シ、堂宇ニ火ヲ懸燒拂フ、○中略　其後足利尊氏平氏ノ亡靈ヲ弔ハンガ爲、奏聞シテ當寺ヲ入道崇鑑ガ宅趾ニ遷シテ造立シ、寶戒寺ト號セリ、

〔太平記十〕長崎次郎高重最後合戰事

長崎次郎高重ハ、○中略　角テ相模入道高時北條ノ御坐、葛西谷ヘ歸リ參テ、中門ニ畏リ泪ヲ流シ申ケルハ、○中略　高重歸參テ、勸申サン程ハ、無左右御自害候ナ、上ノ御存命ノ間ニ、今一度快ク敵ノ中ヘ懸入、思程ノ合戰シテ、冥途ノ御伴申サン時ノ物語ニ仕候ハントテ、又東勝寺ヲ打出ツ、○中略　山內

寺格	名稱所在	創建堂塔

ヨリ葛西ノ谷口マデ、十七度マデ返シ合セテ、五百餘騎ヲ追退ケ、又閑々トゾ打テ行ケル、○中略

高時幷一門以下於東勝寺自害事

去程ニ高重走廻テ、早々御自害候へ、高重先ヲ仕テ手本ニ見セ進セ候ハント云儘ニ、○中略左ノ小脇ニ刀ヲ突立テ、右ノ傍腹マデ、切目長ク掻破テ、中ナル腸手繰出シテ、道準ガ前ニゾ伏タリケル、○中略相模入道モ腹切給ヘバ、城入道續テ腹ヲゾ切タリケル、○中略總ジテ其門葉タル人二百八十三人、我先ニト腹切テ、屋形ニ火ヲ懸タレバ、猛炎昌ニ燃上リ、黑煙天ヲ掠タリ、○下略

〔和漢禪刹次第〕關東十刹 東勝寺同○相州 青龍山、開山西勇和上、

寶戒寺

寶戒寺ハ、相模國鎌倉郡小町ノ北、若宮小路ノ東ニ在リ、後醍醐天皇建武元年、足利尊氏勅ヲ奉ジテ、北條高時ノ第址ニ建立スル所ニシテ、僧慧鎮ヲ以テ開山ト爲ス、天台宗ニ屬ス、

〔新編鎌倉志七〕寶戒寺 寶戒寺ハ、小町ノ北、若宮小路ノ東ナリ、金龍山ト號ス、圓頓寶戒寺ト額アリ、筆者不知、此地ハ相模入道崇鑑平高時ガ舊宅ナリ、故ニ源尊氏、後醍醐天皇ヘ奏シテ、高時ガ爲ニ、葛西谷ノ東勝寺ヲ遷シテ、北條ノ一族ノ骸骨ヲ改メ葬リ、此寺ヲ建立セリ、

〔新編相模國風土記稿八十八鎌倉郡〕小町村○中略 寶戒寺 金龍山釋滿院ト號ス、天台宗、東叡山末、古ハ四宗兼學ナリシト云フ、當寺ハ建武二年、勅ニ依テ、相模守高時入道崇鑑以下、亡靈ノ怨念ヲ度センガ爲、崇鑑ガ宅趾ニ草創シ、三月、足利尊氏、當國金目郷大住郡ヲ寺領ニ寄附ス、○下略

〔寶戒寺緣起〕相模國鎌倉郡金龍山圓頓寶戒寺、源朝臣尊氏公、奉勅艸創之招提也、○中略元弘終、建武始、雖四海一統、動多恠異、寰中不穩、是知近年亡平家輩、在死靈怨恚、因玆、建武元年冬、勅尊氏、於高時

舊跡、結構梵宇、可救遺骸事、尊氏奉勅、命執權左馬頭直義(在鎌倉)、令中沙汰、同霜月二十二日、斧始、監營總司須賀左衛門公能、明年春、梵閣已成、奏乞開祖、則勅法勝寺(白河法皇御願所、四宗兼學律院)圓觀、爲第一祖、山名金龍、寺號圓頓寶戒、爲其經營耶、佛殿(本尊釋迦、脇士阿難、迦葉)、庫裏、方丈、僧堂、浴室、鐘樓、山門、總門、又建一宇社、高時亡靈祠、德崇權現、(北條五代記曰、依爲平家亡魂恨、高時屋敷跡建立寶戒寺、弔多平家亡靈、高時號德崇權現、此時觀鎭守云々、)圓觀上人休錫之地、必建平戒場、無貴賤男女、令授三聚淨戒、以是結架一堂、爲戒場、未有本尊、然異國買船、著岸金澤、毎度點檢、以記錄言上鎌倉、有船中梵天帝釋、地藏大士、召水主問之、答云、異國出船日、海岸有一沙門、有和國渡海船可運送物、及難澀再三、僧云、有此三尊靈像、毎夜高聲讀經、昨夜夢、明日出船、可渡和國、彼土化緣時到、應此靈夢不獲已云々、任斯佛勅、運載由言上、奇哉來朝、厚緣利物、豈不虛損、則安置戒場、尊氏有莊園寄附書、(中略)

末寺四十三箇寺、門徒百二十軒、衆徒三院、(在寺境內)

〔北條五代記 一〕伊豆早雲平氏茂由來之事

かまくらのかさいが谷は、北條時政のやしき、代々北條家居住とす、高時時行ほつらく以後、源尊氏公かまくらにおはしまして、御いくわういみじかりき、然所に御當家に樣々の恠異出來す、ただ事ならずとて、占方に尋給へば、いにしへほろびし平家の亡魂共、恨みをなすよし申によりて、高時がやしきの跡に、寶戒寺といふ寺を建立し、おほくの平家の亡靈をとぶらひ、高時を德崇權現と號し、此寺の鎭守にいはひ給ひければ、扨こそさとしもしづまりぬ、

寺領

〔相州文書 二鎌倉郡〕奉寄圓頓寶戒寺

相模國金目鄕

右相模守高時、(法名崇鑑)天命已盡、秋刑忽臻、是以當今皇帝(○後醍醐)被施仁慈之哀愍、爲度怨念之幽靈、於高時法師之舊居、被建圓頓寶戒之梵宇、爰尊氏奉武將之鳳詔、誅逆徒之梟惡、征伐得時、雄勇遂功、然間

滅亡之輩、貴賤老幼、男女僧俗、不可勝計、依之割分金目鄕、所寄寶戒寺也、是偏宥亡魂之恨、爲救遺骸之事也、然則皇帝久施般周之化、愚臣且同伊呂之功、仍奉寄如件、

建武二年三月廿八日　參議源朝臣（在御判○足利尊氏）

圓頂寶戒寺上人（○惠鎭）

〔相州文書二鎌倉郡〕圓頓寶戒寺住持職幷寺領、相模國金目鄕半分事、早如元可被致沙汰之狀如件、

建武四年十月十二日　左馬頭（在御判○足利直義）

圓觀上人（○惠鎭）

大慶寺

大慶寺ハ、關東十刹ノ一ニシテ天正ノ頃仍ホ存在セシガ如シ、今廢寺ニシテ、舊地ハ相模國鎌倉郡寺分村字雪ノ澤ニ在リ、

〔新編相模國風土記稿百五鎌倉郡〕寺分村○中略　大慶寺蹟　字雪ノ澤ニアリ、此寺靈照山ト號シ、鎌倉十刹ノ一ナリ、寺產モ若干アリシニ、小田原北條氏ノ頃兵火ニ罹リテ烏有ストナリ、（按ズルニ、既ニ前ニ記ス）ガ如ク、天文、永祿、元龜、天正等ノ物ニ、往々洲崎大慶寺分ト見エタレバ、當時現存セシコト識ルベシ、今現存セル方外庵ハ、則寮舍ノ一ニテ、其餘指月軒、（今村内ニヒケツノ字殘レリ、卽指月ノ遺名ト云フ、）覺華庵、天台庵、大堂庵ト號スル寮アリシトナリ、今ハ其蹟ヲダニ傳ヘズ、開山ハ佛源禪師ナリ、元亨釋書、高僧傳等ニ、源ガ當寺ニ住セシコトハ漏セリ、○中略　應永ノ頃ハ、石橋殷賢ノ二禪師住セリ、（鹿山略記曰、大慶石橋禪師、應永十年十一月六日、大慶殷賢禪師云々、）其後廢セシ年代ヲ傳ヘズ、

〔和漢禪刹次第〕關東十刹　大慶寺　靈松山

〔本朝高僧傳二十一淨禪〕相州淨智寺沙門靜照傳

建治三年、應衆請董筑之聖福寺、居二年、遷相之大慶寺、所到諸刹衆徒影附焉、

〔本朝高僧傳 淨禪三十三〕常州楞嚴寺沙門祖能傳

十七、依雙峯源公於東福、歸侍大川和尙於大慶、○中略 曆應二年、大川訃至、奔喪寓止圓覺藏六庵、侍香天外高輪下、○中略

相州圓覺寺沙門是英傳

貞和觀應間、創長谷寶福二刹、遷住羽之資福、相之大慶、淨智、圓覺、

名稱　所在　創建　沿革

東慶寺

東慶寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉山之內村字松岡ニ在リ、禪宗ノ尼寺ニシテ、弘安八年、北條時宗ノ妻覺山尼ノ創建スル所ナリ、當時此尼、其子執權貞時ニ由リテ朝廷ニ請ヒ、凡ソ婦女ノ人ノ妻ト爲リテ虐遇ニ罹ルモノ、當寺ニ入ル時ハ、之ヲ保庇シテ官ノ威力モ加フル所勿ラシム、爾來其制益堅クシテ、德川幕府時代ニ至リテモ、猶ホ且ツ之ヲ遵守セリ、

〔新編鎌倉志 三〕松岡

松岡ハ、圓覺寺ノ南向ナリ、東慶寺ト號ス、比丘尼寺ニテ禪宗也、

〔新編相模國風土記稿 八十一 鎌倉郡〕山之內村○中略 東慶寺○中略 弘安八年、北條相模守時宗ノ後室覺山尼ガ創建ナリ、法名潮音院覺山志道、秋田城介義景ガ女ニテ、貞時ノ母ナリ、弘安七年四月四日、時宗卒去、明年落飾シテ當寺ヲ創セリト云、每年十月九日ヲ開山忌トス、又傳ニ、當寺ハ賴朝ノ叔母美濃局ノ草創ナルヲ、時宗ノ室中興アリシト云ヘリ、

〔松岡東慶寺考〕本寺緣起

松ケ岡東慶寺は、圓覺寺のむかひがはにて東なり、中の門より內に、比丘尼寺七ケ寺程あり、脇坊

たいまうあん、いんしやう寺、ゑい福寺、妙喜寺、せいまうゐん、鎌倉物語本寺山門に、東慶總持禪寺と額あり、本尊は釋迦、文珠、普賢、金銅にてこれを鑄る。鎌倉記、鎌倉日記、公此寺右大將○源頼朝の御時には、道心寺にて有し也、頼朝公の叔母尼に成給て、比丘尼寺とし住持にすわり給ふ。庫事分限を按に、頼朝之叔母は、鳥羽院に仕へし美濃局といへる、只一人なり、しかれば、此本文に見へしは、此美濃局なるべし、されども分限に尼となることを載せず、他に考る所なし、それより打續き、寺はんせうせしなり、其後相摸守時宗之御臺所中興の開山になり給ふ、それより一門の後室住寺にすわり給ふ、北條家つぎて、尊氏家の御臺十四代つぎ給ひし也、總じて此寺に入る人は、人をうらみて身をかこち、あるはうとましきおつとをすて、しのびがたき宮づかいをのがれ、ふかきうれへにしづみて、後世をねがへるが、しづかなるすみ所をもとめて、心をすます人か、あてやかに若くて、あまならぬ人もおゝかりし。鎌倉物語

〔德川禁令考四十一尼寺〕明和五子年書出

鎌倉松岡山東慶寺寺法○中略

松岡山之儀者、北條相模守時宗之室薙髮染衣ニ而寺草創、離緣之寺法相立、其後後醍醐帝之姫宮用堂和尚御住職有之、其後豐臣秀頼公之姫君天秀泰和尚、權現樣依仰御住職有之、甚慈愛ニ而望之儀も有之候得バ、御願可被成由被仰出候得共、尼之身ニ而何之望も無之、舊例之寺法無斷絶相立候得バ、過之候儀無之旨被爲及御挨拶候由、其後駿州大納言樣之御殿御寄附、御修復金等被遊御附、只今者其餘力を以致修復來候客殿方丈等、右御殿を以御建立被遊、于今有之候、別而御威光ニ而、其節致中興候天秀和尚御在位之内ハ、御役方樣御承ニ之御文通、于今數多有之候、尤御遷化以後御年回之節、寺社御奉行樣御承ニ而、御法事料被下候御書面も相見申候、右住職之儀者、前々より足利鎌倉古河公方家住職致來候、至今ニ而ハ喜連川之家之息女を、代々相續致し候。○中略

十月　東慶寺役人 大村與惣左衛門

堂塔

〔新編相模國風土記稿八十一鎌倉郡〕山之內村〇中略東慶寺〇中略佛殿　祈禱ノ額ヲ掛リ、釋迦、文殊、普賢ノ三像ヲ本尊トス、共ニ金銅ナリ開山ノ像ヲモ置ク、駿河亞相忠長卿ノ舊館ヲ移シ賜ヒ、寛永十一年十月御建立アリ、其時ノ棟札ヲ藏セリ、　方丈　是モ同時、忠長卿ノ舊館ヲ以テ造ラセ給ヒシナリ、〇中略　山門　東慶總持禪寺ノ額ヲ掛ク

寺制

〔新編相模國風土記稿八十一鎌倉郡〕山之內村〇中略東慶寺〇中略弘安八年、北條相模守時宗ノ後室覺山尼ガ創建ナリ、〇註略此時凡婦人一旦不法ノ夫ニ配シ、容易ク休離シ難キ故アリテ、寃屈ニ堪ズ、躬ヅカラ身ヲ過ツ者アリ、其類奔テ當寺ニ入時ハ、三ケ年ノ際抱置、其身ノ望ヲ果サシムルヲ以テ、寺法タランコトヲ申乞ケレバ、貞時天聽ヲ經テ其事成リヌ、〇註略五世用堂ハ、後醍醐帝ノ皇女ナリ、此時ヨリ倚來ノ婦人、三ケ年ノ寺務ヲ經ンコト不便ナリトテ、更ニ二十四ケ月ヲ定期トス、〇註略二十世天秀ハ、右府秀賴ノ一女ニシテ、東照宮ノ御外孫タル故、上意ヲモテ、十九世瓊山ノ附弟ナサル、此時望申ス事アリヤトノ上意ニヨリ、開山ヨリノ寺法、永ク斷絶ナカランコトヲ申サレシカバ、ヤガテ其乞ニ任セラル、

〔武將感狀記十〕加藤左馬助嘉明ノ兒扈從多賀主水、十六歲ノ時、大坂冬陣ニ、加藤式部少輔明成ニ從テ、於隍際敵ト引組、隍中ニ墮タリシガ、終ニ其ノ首ヲ獲タリ、嘉明其功ヲ賞シテ氏ヲ堀ト改ラル、祿四千石ヲ受テ、榮貴寵恩同ク語ルベキ者ナシ、嘉明卒シテ明成嗣家督、主永驕奢ヲ以テ明成ノ心ニ忤ヒ、折辱セラルヽ事アリ、憤之白晝ニ會津ヲ去ル、〇中略此レヨリ江戸ニ住テ、明成野心アル由ヲ書テ、公儀ニ訴牒ヲ捧、〇中略明成ハ豐臣家舊臣タルガ故ニ、若事ノ變アラバ、其ノ本ヲ不忘シテ、謀叛ニモ可與ヤト、人ニ腸ヲ捜グラレ、不慮ノ禍ニ罹ン事ヲ前知シテ、御肩入ノオリヲ得テ、後ノ證據ニ嘉明ノナシ置レタル者ナラン、寔ニ遠圖アリト謂ツベシ、主水訴牒ヲ捧テ後、其ノ身ハ高野ニ入、妻子ハ鎌倉ノ比丘尼所ニ遣ス、公儀ヨリ、主水ヲ搦捕テ、明成ニ下サレタリ、〇中略鎌倉

ニ逃レ居タル主水ガ妻子ヲ、明成人ヲ遣ハシテ、縛之テ引ヨセントス、比丘尼ノ住持、大ニ怒テ、頼朝ヨリ以來、此ノ寺ニ來ル者、何ナル罪人モ出ス事ナシ、然ルヲ理不盡ノ族、無道至極セリ、明成ヲ滅却サスルカ、此ノ寺ヲ頽顚セシムルカ、二ツニ一ツゾトテ、此ノ儀ヲ、天樹院殿〇徳川秀忠女、豐臣秀賴妻ニ訴テ、事ノ勢解ベカラザルニ至ル、於此明成迫テ、領地會津四十餘万石サシ上、衣食ノ料一萬石ヲ賜テ、石見ノ山田ニ蟄居セラル、

〔社寺取計留〕東慶寺江駈込女之事

牧野備前守殿

山村信濃守

相州松ヶ岡
尼寺

右尼寺江夫有之女、離縁受度存意ニ而、駈込候ヘバ、其儘差置、緣を爲切候由、右被仰渡ニも有之候而之寺法ニ候哉、尤夫引戻度旨申立候得バ渡遣候哉、右寺法等之譯、委細被仰聞候樣仕度候、以上、

丑十月

御書面、尼寺江駈込女之儀、明和五子年、下總國西寶珠花村吉五郎妻てうを、安藤彈正殿尋儀有之、御呼出之儀申渡候處、古來より、駈込女差出候儀無之旨、別紙之通寺例書差出、呼出赦免之儀相願候ニ付、土岐美濃守寺社奉行勤役中、阿部伊豫守殿江伺之上、別紙之通申渡候、則松ヶ岡東慶寺役人差出候寺例書申渡書寫差進申候、

丑十月

牧野豐前守

右寺例書ハ、發印乘燭ニ有之故略之、

土岐美濃守殿申渡書付

申渡

相州鎌倉松ヶ岡
東慶寺

東慶寺江駈込女呼出伺

明和五子十月廿九日、伊豫守殿江相達、同十二月九日承付いたし候様、御下ゲ承付いたし、

鎌倉松ヶ岡東慶寺江駈込候女、呼出之儀ニ付、申上候書付、

書面伺之通可仕旨、被仰聞、承知仕候、

子十二月九日　　土岐美濃守

相州鎌倉松ヶ岡　東慶寺

右東慶寺江駈入候下總國葛飾郡西寶珠花村吉五郎妻てふ江尋儀有之候旨、御勘定奉行安藤彈正少弼申聞候ニ付、呼出之節申渡候處、古來より、駈入候女差出候儀無之由ニ而、寺例書差出、前々呼出有之候與も、先格申來、相濟來寺法相破候義、甚難義仕候間、先格之通、呼出之儀赦免、寺法相定候様仕度旨、東慶寺役人申出ル、

右之通申出候ニ付、相糺候處、寺例書之内、公儀御法式背候ものは相抱不申、萬一無據譯ニ而、相抱候節者、伺候而申渡寺法之趣有之候處、駈入女不差出與申儀者、於奉行所取用候寺法之書物者一向無御座候、駈入女者、夫或ハ親類等より引戻候節者、寺法相定可申義ニ御座候得共、奉行所より呼出候節寺法を申立、奉行所之差圖相背候儀者、難立筋ニ奉存候、寛保三亥年、寶暦四戌年、御勘定奉行より尋書相渡、駈入女より答書爲差出、相濟候趣ニ申立候處、其砌ハ不及呼出相濟候筋ニ而右之通取計候哉、其節之儀難相知御座候得共、駈入女無吟味夫親類等江引渡候儀者、奉行所差圖ニ而も、品ニ寄難澀仕候義も可有之儀吟味ニ付、東慶寺より奉行所江差出候儀者、寺法相破候筋ニハ無之、重キ吟味有之もの抔呼出候節、不差出候而者、吟味之差支ニも罷成候間、此度之駈入女、彈正少弼方江爲差出、以來與も、奉行所呼出之節者、差出候様可申渡候哉、是迄確與仕候例も無御座、寺法相破候儀難儀之由申立、呼出赦免相願候ニ付、東慶寺役人差出候寺例書寫幷例書相添此

段奉伺候、

十月　土岐豊前守

前條東慶寺江之申渡

右先達而駈入候下總國葛飾郡西寶珠花村吉五郎妻てう江、御勘定奉行安藤彈正少弼尋儀有之、同人宅江可被差出旨申渡候處、古來より駈入女呼出有之候而も、差出候儀無之旨、寺例書幷例書差出、赦免相願候ニ付、遂吟味候處、呼出之節者不差出儀、奉行所においても取用候寺例も無之上者駈入女、夫或者親類より引戻候節者、寺法相立、奉行所差圖ニ而も、身寄江引渡候類之儀者、品ニ寄吟味可相願者格別、東慶寺より奉行所江差出候儀者、寺法ニ拘り候筋ニ無之候間、右駈入女、彈正少弼宅江早々可差出候、寺法相破難儀之趣申出候ニ付、今般伺之上令沙汰候、以來共も、駈入もの、奉行より呼出候節者、無遲滯可差出者也、

子十一月

〔寺社法則下〕同年十二〇寛政申八月　御勘定奉行ゟ

一御書面、東慶寺ハ、夫有之女欠込、離縁之儀相願候節、何方より申聞候とも、離緣狀不差出内ハ、下山不申付寺法ニ候、併吟味有之、奉行所より呼出候得ば、東慶寺役人附添罷出候積、先年伺濟も有之候間、前書之趣、利害申聞候而も淸吉不承受、まつをも打合吟味不致候而難相決義も候ハバ、菅沼藤十郎役所へ召連候樣、東慶寺江拙者共方より可申渡候間、尙又御申聞候樣存候、

東慶寺ゟ夫淸吉江之書面有之、離緣之事也、

〔寺社法則上〕文化十酉閏十一ノ廿八　根岸肥前ヨリ　内藤豊前樣へ

小石川金杉水道町
傳右衛門店喜助方居候
惣五郎妻
きよ

寺領

右夫惣五郎より伊奈助右衛門元御代官所、武州多摩郡中野村百姓万右衛門外壹人相手取、右きよ取戻候義、當九月中願出、當時吟味中ニ御座候處、きよ儀、同月中欠落いたし、東慶寺江欠込候段申立候、右きよ不能在候而者、吟味難相決候間、きよ義、私御役所江早々差出候樣、東慶寺へ被仰渡候樣仕度候也、

御書面きよ義、相州鎌倉東慶寺役人召連出候得共、病氣之由ニ付、右役人山下又右衛門江預申付、其樣御役所江召連可能出旨申渡候、

〔新編相模國風土記稿藝文四〕湘中紀行　太宰純

浄智寺西北曰松岡、有東慶尼寺焉、平時宗妻、貞時母、藤氏爲尼號覺山、造此而居之、後多度貴家女、逐爲女僧叢林也、建重門、雖何出入、禁男子也、寺法、世之女子欲爲尼、而父兄不見許者入是寺、則父兄不得不棄、卒至有婦人惡其良人而不得去、及有淫行而懼發覺、有貳心而欲改嫁者、斷髮而入是寺、則丈夫不得制之、居兩閱歲、養髮復故、則復出適人、官無明法、前夫亦無如之何、此其所以嚴禁男子也、夫尼寺禁男、以防淫也、今乃禁男、以助世之婦人淫行、孰謂松岡非淫婦之叢林乎、

〔相州文書一鎌倉郡〕依松岡殿御料前岡郷事、諸公事令免許之者也、但陳夫之事、如先々參人者可出之者也、仍如件、

大永七年丁亥八月十二日　華押○氏綱

前岡郷百姓中

〔新編相模國風土記稿八十一鎌倉郡〕山之内村○中略東慶寺○中略天正○中略十八年四月、豐太閤ヨリ制札ヲ出ス、十九年十一月、寺領百十二貫三百八十文ノ御判物ヲ賜ハレリ、

〔德川禁令考四十一尼寺〕明和五子年書出

鎌倉松岡山東慶寺寺法

名稱
所在

寺例書

口上覺

御朱印
永百拾貫三百八拾文

但臨濟宗本末寺共無御座候〇中略

十月

鎌倉松ヶ岡山　東慶寺

東慶寺役人
大村與惣左衛門

法華堂

法華堂ハ、相模國鎌倉郡西御門村ニ在リ、元ト源頼朝ノ持佛堂ナリシヲ以テ、俗ニ頼朝持佛堂トモ稱ス、寶治元年、三浦泰村以下一族五百餘人、此堂内ニ自殺セリ、

〔圓光大師行狀畫圖翼贊 五十一 寺院之餘〕鎌倉法華堂 鎌倉ハ相模國ノ郡名ナリ、(中略)法華堂ハ、西御門ノ東ノ岡ナリ、相傳、頼朝卿ノ持佛堂ノ名ナリ、東鑑ニ、文治四年四月二十三日、御持佛堂ニ於テ、法華經講讀始行セラルトアリ、此所ノ本尊如意輪ナリ、奥州征罰ノ時ノ祈禱ノ尊像ヲ安ズト、又東鑑ニ、右大將家、二位家、前右京兆等ノ法華堂トアリ、佐竹系圖ニモ、佐竹上總入道、比企谷ノ法華堂ニテ自害ストアリ、其頃法華ヲ信ズル人多キ故ニ、持佛堂ヲ皆法華堂ト名クル歟、東鑑ニ、寛喜三年十月二十五日、右大將家並右京兆ノ法華堂、同本尊等灰燼トナル、同二十七日ニ、相州以下ノ人々、遣警ノ事ニ同ジ、評定ヲ經ラル、愚ニ、攝津守師員、隱岐入道行西、玄蕃允康連ガ如キ、墳墓堂炎上ノ時、再興ノ例ナキ由、コレヲ申ニ依テ、御助成アツテ、寺家ニ仰ベキノ旨、議定ストアリ、又寶治元年五月十四日、御臺所ヲ、佐々目谷ノ故武州禪室經時ノ墳墓ノ傍ニ遂リ、本人々素服ヲ著シ供奉ストアテ、此以後ノ日次ニ、右京兆ノ墳墓堂ト記スル、此往々ナリ、又去三月五日、三浦若狹前司泰村叛逆シテ、舍弟光村以下ノ族、故右大將家ノ法華堂ニ聚テ自害ス、時ニ光村ミヅカラ刀ヲ取テ、吾顔ヲ削ル、其血流テ御影ヲ穢シ奉ルナドアリ、サレバ平生ノ持佛堂ヲ、墳墓ニナシテ、遺骨影像及佛像ナド安ジテ、時ノ習法華ヲ貴ミテ、追福ニモ其法ヲ此ニテ行ヒケレバ、カクハ名ヅクルニヤ、

〔新編相模國風土記稿 九十二 鎌倉郡〕西御門村〇中略

法華堂　村北ノ丘上ニアリ、頼朝ノ墳墓堂ニシテ、元ハ持佛堂ナリ、故ニ土俗ハ頼朝持佛堂トモ稱ス、按ズルニ、東鑑ニ、法華堂ト記スルモノ一ナラズ、右大臣家實朝、二位家政子、前右京兆義時等ノ法華堂アリ、故ニ此堂ヲ、右大將家法華堂ト稱ス、鎌倉志ヲ閲スルニ、當時人多ク法華ヲ信ズ、故ニ持佛堂皆法華堂ト稱スト載ス、此說恐ラクハ是ニアラズ、東鑑ヲ考究スルニ、法華堂ト稱ス

堂塔

ルハ、皆墳墓ノ堂名ナリ、實朝、政子、義時、共ニ其卒後葬地ノ堂ヲ稱シテ、法華堂ト云フ、生前未此堂アルコトヲ拔セズ、〇中略三尊彌陀(定朝作)ヲ本尊トセシガ、佛體損ゼシ故、今ハ傍ニ移シ、如意輪觀音ヲ本尊トス、(毘首羯摩作、モト村內如意輪堂ニ在リシガ、堂破壞ノ後此ニ安ズト云フ、鎌倉志ニハ、此肚中ニ、石山寺ヨリ、佛舍利五粒ヲ納ムル由ノ紙片アリ、舍利ハ今分身シテ三合許有トイフト記セリ、)

〔吾妻鏡十五〕建久六年十月廿一日癸酉、御持佛堂造營有事始、而左近將監能直、左京進仲業等奉行之、將軍家(〇源賴朝)令監臨給云云、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年十月廿五日、及晚大風吹、戌刻相州公文所燒亡、南風頻扇、東及勝長壽院橋邊、西迄于永福寺總門之內門、烟炎如飛、右大將家(〇源賴朝)幷右京兆法華堂、同御本尊等爲灰燼、凡人畜燒死、不知其員、是盜人放火之由、有其聞云云、　廿七日、相州武州參評定所給、攝津守師員、駿河前司義村、隱岐入道行西、出羽前司家長、民部大夫入道行然、加賀守康俊、玄蕃允康連等出仕、式部大夫入道光西、相模大丞業時、執申法華堂幷本尊災事、縱雖爲理運火災、於關東尤可怖畏思食之由、各進意見、同造營事、被經評定處、如師員、行西、康連、墳墓堂等、炎上之時、無再興例之由依申之、有御助成可仰寺家之旨議定云云、又爲御願寺新造事、依此火災延引、爲第一德政之由、世以謳謌云云、　十一月十八日、將軍家御願、五大尊像、被奉造始之、師員、光西、康連等、爲奉行云云、今日右大將家法華堂上棟也、此事被付寺家云云、

寺領

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年(〇寶治元年)六月廿三日甲辰、今日神社佛事等、有新加御領、鶴岡八幡宮、右大將家法華堂等也、

〔鶴岡相承院文書(新編相模國風土記稿九十二所載)〕右大將家法華堂禪衆淸卑申、相模國林鄉大多和村內田在家事、爲寺領之處、有違亂之仁等、甚無謂、所詮關東靜謐之上者、如元可被知行、若於不拘制止輩者、就註申交名可被處罪科狀如件、

正慶四年八月十二日　宏元(奉押)

貞宇 華押

高泰 華押

〔鶴岡相承院文書 新編相模國風土記稿九十二所載〕相模國三浦大多和村當年領家分年貢□□□□□□□□□□□□□□□錢事、爲右大將家法華堂去年歲末御籃供、并今年三五七三ヶ月分御節供、及□科之定所被仰下也、任切符之旨、可被沙汰之狀、依仰執達如件、

貞治二年七月廿五日　　沙彌 華押

地頭

〔鶴岡相承院文書 新編相模國風土記稿九十二所載〕法華堂領中郡庄之内犬田鄉事、支證等明鏡之上、承事候間、可去進之由、代官申付候、委細之段可申入候、恐々謹言、

應永十七年十月四日　　伊勢守貞經 華押

謹上二階堂信濃守殿

〔吾妻鏡十六〕正治二年正月十三日庚子、垸飯、土肥彌太郎沙汰也、迎故幕下將軍〇源賴朝周闋御忌景、於彼法華堂、被修佛事、北條殿以下諸大名群參成市、佛繪像釋迦三尊一鋪、阿字一鋪、以御臺所御除髪、被奉縫之、經金字法華經六部、摺寫五部大乘經、

導師葉上房律師榮西、請僧十二口、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年九月十三日戊寅、法華堂御佛事訖、乘燭程、盗人入別當大學坊、盗取先考御遺物重寶等、即馳申之間、仰當番衆等、雖被明尋犯人、晦跡不知行方云云、　十一月十七日乙亥、法華堂重寶等、去九月紛失之間、可尋求之由被觸仰所々之處、於武藏國洲河地頭搦取件犯人、今日將來于和田左衛門尉之宅、重寶悉尋取之、令隨身云云、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年正月廿七日壬子、今朝於法華堂、修故右大臣〇源實朝第三年追善、二品沙汰也、

名勝　所在　創立

導師莊嚴房律師行勇、百僧供、布施口別上絹一疋、被物一重、準布十端、導師分上絹百疋、被物卅重色色砂金五十兩、鞍馬三疋、加布施太刀一腰、先公御太刀、後伊豫中將實雅取之、右京兆、相州以下人群集、次有施行、乞食千人、人別十疋、亦犯科者三十許輩、厚免之、秋田城介景盛入道隱岐守行村入道等今日奉行、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年仁治元年十二月廿一日庚辰、今朝前武州相具評定衆等、令參右大將家法華堂、被修佛事、聖嚴房僧都行勇爲導師、是依爲故隱岐次郎左衛門入道行阿初七日忌景也、凡向後於評定以下携公事輩之沒後者、必可勵追善之由、及衆談云云、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年〇寶治元年六月五日丙戌、午剋、參御所、被申將軍御前、重被廻奇謀、折節北風變南之間、放火於泰村南隣之人屋、風頻扇、煙覆彼館、泰村幷伴黨咽烟遁出館、參籠于故右大將軍法華堂、舍弟能登守光村者、在永福寺總門內、從兵八十餘騎張陣、遣使者於兄泰村之許云、當寺爲殊勝城郭、於此一所相共可被待討手云云、泰村答云、縱雖有鐵壁城郭、定令不得遁歟、同者於故將軍御影御前、欲取終、早可來會此處云云、專使互雖爲一兩度、緈火急之間、光村出寺門向法華堂、於其途中一時合戰、〇中略殆經三剋也、敵陣箭窮力盡、而泰村以下爲宗之輩、二百七十六人、都合五百餘人自殺此中、

勝長壽院

勝長壽院ハ、南御堂、又大御堂ト稱ス、源賴朝ノ建立ナリ、本尊ハ丈六ノ阿彌陀佛ニシテ、佛師成朝ノ作トス、今廢寺ニシテ、舊地ハ相模國鎌倉郡鎌倉阿彌陀山ニ在リ、

〔新編鎌倉志二〕大御堂谷附御堂御所舊跡

大御堂谷ハ、文覺屋敷ノ東隣、歌橋ノ南向ナリ、阿彌陀山トモ云フ、賴朝卿最初ノ建立、勝長壽院ノ

舊跡ナリ、勝長壽院ヲ南御堂トモ、大御堂トモ稱スル也、

〔吾妻鏡五〕元曆二年(○文治元年)十月三日壬子、南御堂供養間、導師請僧等布施、諸方進物、且覽之、其間事令談合左馬頭給、又爲御分并布施取等、裝束廿餘具、自京都被召下、義勝房相具之、去夜參著、仍今日被支配所役人々云云、因播前司、筑後權守等奉行之、　廿二日庚午、南御堂奉渡本佛、(文六、皆金色阿彌陀佛、佛師成朝也、)大夫屬入道、大和守、主計允等奉行之云云、　廿四日癸酉、今日南御堂(號勝長壽院)被遂供養、寅剋御家人等中差殊健士、警固辻々、宮內大輔重頼奉行會場以下、堂左右構假屋、左方二品御座、右方御臺所并左典廐室家等御聽聞所也、

〔吾妻鏡六〕文治二年八月九日癸未、勝長壽院總門、依風破損、今日加修理、仍二品監臨給、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年(○承久元年)正月二十八日、今曉加藤判官次郎爲使節上洛、是依被申將軍家薨逝之由也、行程被定五箇日云云、辰剋御臺所令落飾御、莊嚴房律師行勇爲御戒師、又武藏守親廣、左衞門大夫時廣、前駿河國季時、秋田城介景盛、隱岐守行村、大夫尉景廉以下、御家人百餘輩不堪薨御之哀傷、遂出家也、戌剋將軍家奉葬于勝長壽院之傍、去夜不知御首在所、五體不具、依可有其憚、以昨日所給公氏之御鬢用御頭、奉入棺云云、

淨光明寺

淨光明寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉扇ケ谷村ニ在リ、建長三年北條長時ノ創建ニシテ、僧眞阿ヲ以テ開山トス、京都泉涌寺ノ末寺ニシテ眞言、天台、禪、律ノ四宗ヲ兼學ス、

〔新編相模國風土記稿八十九鎌倉郡〕扇ケ谷村(○中略)　淨光明寺　泉谷山ト號ス、(泉谷ハ、所在ノ地名ナリ)眞言、天台、禪、律ノ四宗兼學ナリ、(京泉涌寺ノ末ニ屬ス)建長三年、北條武藏守長時ガ艸造ニシテ、(長時文永九年八月死ス、年三十五法名ヲ專阿ト)

云フ、僧眞阿ヲ延テ開祖トス、

寺格

〔相州文書鎌倉郡三〕相模國淨光明寺、爲御祈願所、可被致御祈禱□□依御氣色、執達如件、

元弘三年十二月廿日　散位花押

如仙上人御房

寺領

〔相州文書鎌倉郡三〕當寺領、上總國山邊北郡內堺鄕幷鹿見堺、相模國波多野庄內平澤村一分等、知行不可有相違候旨天氣所候也、依執達如件、

元弘三年十月五日　右兵衞□□□□花押

淨光明寺長老如仙上人御房

淨光明寺雜掌申、上總國北山邊郡內由井鄕事、

早任寄附之旨、沙汰付下地於雜掌、可被執達請取之狀如件、

觀應三年十月十五日、　花押○足利尊氏

千葉介殿

淨光明寺雜掌賢秀申、上總國北山邊郡渦井鄕內、越田深段大、幷給分方、田地壹町參段小、及政所屋敷免事、

早止千葉介家人等押領、任觀應三年十月十五日御寄進狀旨、可被沙汰付下地於寺家之狀如件、

貞治三年四月十六日　花押○基氏

伊豫守殿

淨光明寺雜掌賢秀申、相模國金目鄕北方事、

守護代背先例、放入使者於當所、宛仰種々課役、就致譴責、土民等及牢籠云々、所行之企、甚難遁其咎、所詮爲斷向後違亂、嚴密所有其沙汰也、不日可被注進實否狀如件、

貞治五年九月十六日　華押〇基氏

三浦介殿〇中略

淨光明寺慈光院領、伊豆國三津庄內、平澤、立保、草保、久料、四箇村事、任去延文二年正月八日等持院殿御書、道本上人置文等、領掌不可有相違之狀如件、

應安七年十一月十四日　華押〇足利義滿

當院主

淨光明寺領、相模國金目鄉北方、同國波多野庄內平澤村、四宮庄內長沼今里、武藏國男衾郡和田鄉、伊豆國三津庄內四ケ村、上總國北山邊郡堺鄉、湯井鄉、華嚴院領、同國郡名鄉內十文字、荒野村、相模國苅野庄內奴田鄉、同國波多野庄內大槻村、同國淨業寺領矢田岡鄉、上總國周西郡最勝福寺領所、同國栗宇鄉眞珠寺領等、役夫工米、國衙般若會以下諸公事課役、幷守護使郡使催促入部事、假雖有官符宣地勘落之儀、任以前度々御敎書嚴重之旨、所令免除之也、可被存其旨之狀如件、

享德二年十二月十五日　華押〇足利成氏

當寺長老

〔新編相模國風土記稿〕八十九鎌倉郡扇ケ谷〇中略　淨光明寺村〇中略　今寺領四貫八百文ノ地ハ、天正十九年十一月御朱印ヲ賜フ、

極樂寺

極樂寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉極樂寺村ニ在リ、北條重時ノ草創ニシテ、僧良觀ノ開基ナリ、後北條長時之ヲ再興シテ、律宗ノ僧忍性ヲ聘ス、是ヨリ寺名東關ニ高シ、

名稱
所在
創建
沿革

〔新編相模國風土記稿鎌倉郡九十七〕極樂寺村略〇中　極樂寺　靈鷲山感應院ト號ス、眞言律宗、南都西大寺末　北條陸奥守重時ガ草創ナリ、略〇中　今ハ佛殿一宇、塔頭一院ノミ殘レリ、略〇註　天正十九年十一月、寺領九貫五百文ノ御朱印ヲ賜フ、本尊釋迦、略〇註　十大弟子ノ像ヲ置ク、略〇註　脇ニ興正菩薩、略〇註　及ビ聖德太子ノ像略〇註　又文殊ノ像アリ、古昔城内別堂ニ安ゼシ本尊ナリト云フ、

〔新編鎌倉志六〕極樂寺 附切通　辨慶ガ腰懸松

極樂寺ハ、靈鷲山ト號ス、眞言律ニテ、南都西大寺ノ末寺ナリ、

〔極樂寺縁起〕正元元年、請常州清涼院良觀上人、而居士重時問彼上人曰、爰連年有一老僧、曾梵字、號極樂寺、然彼境內甚狹小也、相攸卜地、欲移彼字、爲律門、何處可然乎、上人答曰、自是當西南而曰地獄谷有龍池、可定此地乎、上人到于彼谷念誦、暫時有感應、創建七堂伽藍、今極樂寺地景是也、略〇中　始于正元元年、成就于文應元年、其餘七々四十九院建立、

〔元亨釋書十三明戒〕釋忍性、姓伴氏、和州磯城島人也、歲十一、投信貴山、十三誓不食肉、十七登東大寺戒壇、延應之間有四律匠于南京、圓淨、誘賢、覺盛、叡尊、性就尊受雜聚之學、兼聽盛之持犯、建長四年謂同學曰、正今南畿毘尼屬我尊丈也、東州未有人矣、我輩未得頓欲先度耳、是我輩之志也、乃如常州宅清涼院、闡律學、弘長之始入相陽、止清涼寺、平副帥時頼、嚮道最、創光泉寺居焉、武州刺史平長時、欽性律行、新極樂寺延之、性移焉、變唱開遮、東方之民靡然偃風、初正嘉中、有沙門營一宇、安丈六彌陀像、名曰極樂寺、未落而亡、武州之父重時、遷其字于今地、爲齋場、至此武州與其弟業時、戮力修營成巨刹、

〔日蓮註畫讚三〕新雨勝負第十四

相陽極樂寺忍性、常高座、歎曰、欲令本朝僧俗持戒止酤土之酒、被障日蓮謗法難協、聖人聞曰、云何可倒彼誑惑大僧、救無間重苦、于時弟子等特頗甚諫曰、彼律師者、君臣上下歸敬如佛、輙發言訝然、文永八年仲夏至孟秋大旱、忍性欲顯法効、競望法雲、聖人曰、因祈雨小事決佛法之大義、金光明最

勝王經云、由愛敬惡人治罰善人、故星宿及風雨皆不以時行云々、天下世上王臣士庶愛敬誹謗正法之諸僧、治罰弘通法華之日蓮、故諸天龍神依生忿怒、所致亢旱、良觀暗此文理、不知病起癡還死、不辨災由、祈還增、招周防公與入澤入道〈法名道淨〉曰、汝二人良觀徒衆、念佛行者、于今無用、日蓮法門、持二百五十禁戒、可成良觀弟子、若不雨者、止八齋戒與念佛、持法華經、可成日蓮弟子、往古就祈雨決雌雄、所謂護命與最澄、守敏將弘法焉、二人往告忍性、悅諾、集百二十餘輩高德、六月十八日至二十四日、雖祈不雨、遣使責約束、性公猶一七日請祈、〈○中略〉聖人遣使責曰、和泉式部好色女、能因法師破戒者、今良觀戒門所制詠綺語和歌、忽降雨、然性公者持戒清淨自讃顯密究理誇耀、慈悲第一風聞、雖然以祈雨比知、不足信用、

堂塔

〔忍性菩薩行狀略頌〕建治元陽春三月二十三日、當寺〈○極樂寺〉炎上、堂舍滅、塔婆建立、同二年、文殊告夢成合力、舞樂供養、

〔鎌倉管領九代記〈四中〉〕鎌倉所々失火附武田信長降參

同〈○應永〉卅三年二月二十九日、極樂寺炎上す、同九月八日の夜、鎌倉の御所回祿す、去年正月二十五日には、淨妙寺炎上あり、此ごろ鎌倉の谷々、毎日失火ありて、人の心更にをだやかならず、水を汲貴財を取のけ、晝夜用心に暇なし、是たゞ事に非ずとて、鎮火の御祈禱あり、後に聞えしは、諸方の盜賊あつまりて、所々に火をかけ、物をとりたりとかや、

〔鎌倉九代後記〕應永三十二年二月二十九日、極樂寺炎上、

寺領

〔相州文書〈四鎌倉郡〉〕極樂寺雜掌玄充申、當寺地藏院奥院領、上總國二宮庄內小林鄉半分事、早守寄附狀等、沙汰付下地於雜掌、可令向後所務、更不可有緩怠候狀如件、

御判〈○足利義詮〉

貞治三年九月十六日

新田遠江彥四郞殿

名稱
所在

創建
沿革
堂塔
大佛

淸淨泉寺

淸淨泉寺ハ、一ニ深澤ノ大佛ト云フ、相模國鎌倉郡鎌倉長谷村字深澤ニ在リ、嘉禎四年、僧淨光ノ創建スル所ナリ、本尊大佛ハ釋迦如來ニシテ、原ト木造ナリシガ、建長四年、金銅ヲ以テ之ヲ造ル、現存スルモノ卽チ是ナリ、其堂舍ノ如キハ、屢〻廢レ屢〻興リシカド、後終ニ修造スルコト能ハズシテ、大佛ハ長ク露坐ニ坐セリ、

〔新編相模國風土記稿　九十六鎌倉郡〕長谷村〈○中略〉　大佛獅子吼山、〈寺ハ大異山ト號ス、〉淸淨泉寺ト號ス、金銅ノ盧遮那佛ナリ、〈銅高五丈、趺坐ヨリ趺座ニ至ルマデ、高サ四丈二尺、周圍十六間二尺、石座高四尺五寸、面長八尺五寸、横一丈八尺、白毫周一尺五寸、眼大四尺、眉大四尺二寸、耳長六尺六寸、鼻縱三尺八寸、横二尺三寸、口徑三尺二寸强、肉髻高八尺、徑一尺四寸、螺髮各高八寸、徑一尺、其數八百三十二顆、膝徑六間餘、大指周三尺餘、〉彌陀〈木像長一尺二寸、天竺傳來ト云フ、〉ヲ腹籠トス、抑當佛殿ハ、沙門淨光、普ク募緣シテ營作ヲ企テ、曆仁元年三月、遂ニ此地ニ新造ノ事始マリ、

〔新編鎌倉志　五〕大佛〈附切通〉

大佛ハ、大異山淨泉寺ト號ス、此ノ所ヲ深澤ト云、

〔吾妻鏡　三十二〕嘉禎四年〈○曆仁元年〉三月二十三日戊戌、雨降、未三點大風、人屋皆破損、庭樹悉吹折、申剋屬晴、西風又烈、偏八講結願、頗魔障也、今日相模國深澤里大佛堂事始也、僧淨光令勸進尊卑緇素、企此營作云々、　五月十八日壬辰、相模國深澤里大佛殿御頭擧之、周八丈也、

〔吾妻鏡　三十四〕仁治二年四月二十九日丁未、因人違電事、預人罪科不輕、召過怠料、可被寄進新大佛殿造營之由、爲淸左衞門尉滿定奉行、今日有議定、新田太郎政義分三千疋、毛呂五郎入道蓮光〈預召人犯〉伊國三上庄預僧〈人政所二郎高氏、〉分五千疋、各來八月中、可令辨償云云、是爲孫子深利五郎爲經咎之由、蓮光雖訴申、被尋下之、蓮光猶不遁之云云、

〔東關紀行〕由比浦といふ所に、阿彌陀佛の大佛を奉造由語人あり、頃て誘て參たれば、尊く有難し、事の起りを尋ぬるに、本は遠江の國の人、定光上人といふ者あり、過にし延應の頃より、關東の貴賤を勸めて、佛像を造り、堂舍を建てたり、其功既に三が二に及ぶ、烏瑟高く顯れて半天の雲に入、白毫新に瑩て滿月の光を輝す、佛は即兩三年の功運に成り、堂は又十二樓の構望に高し、彼東大寺の本尊は、聖武天皇の製作、金銅十丈餘の盧遮那佛なり、天竺震旦にも類なき佛像とこそ聞ゆれ、此阿彌陀は、八丈の御長なれば、彼大佛の半よりも進めり、金銅木像のかはりめこそあれども、末代に取ては、是も不思議といひつべし、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〈〇寬元元年〉六月十六日辛酉、深澤村建立一宇精舍、安八丈餘阿彌陀佛像、今日展供養、導師卿僧正良信、讚衆十人、勸進聖人淨光房、此六年之間、勸進都鄙、卑尊莫不奉加、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年八月十七日己巳、今日當彼岸第七日、深澤里奉鑄始金銅八丈釋迦如來像、

〔鎌倉九代後記〕應安二年九月三日、大風、鎌倉大佛殿顛倒、

〔梅花無盡藏三〕見長谷觀音之古道場、相去數百步、而兩山間、逢銅大佛、佛長七八丈、腹中空洞、應容數百人、背後有穴、脫鞋入腹、衆云、此中往々博奕者、白晝呼五白之處也、無堂宇而露坐突兀、〈〇中略〉
兄在南都、弟東福、可憐佛亦去年貧、寶趺底仆無堂宇、腹裏幾容數百人、　銅大佛〈洛之諺云、南都之中佛雲孤、雲孤之中佛東雲、〉

〔鎌倉大日記〕明應四年八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比濱海水到千度檀、水勢大佛殿破堂舍屋、溺死人二百餘、

〔義演准后日記〕慶長十五年四月十九日、未明、ユイノ濱長谷寺大佛等見物、大佛ハ如形也、鑄佛也、堂ハ無シ、七間方ノ礎殘了、大石也、一見了、

〔祐天大僧正傳〕師諱愚心、字祐天、號明蓮社顯譽、奧州岩城人也、〈〇中略〉又嘗拜鎌倉大佛像、頹敗不忍視

名稱所在

之、及住傳通院、寄五百金脩佛像甃石牀、後蒙增上寺命、都淺草野島某者、齎千金來、共其費用、師不受、野島氏曰、吾久歸師德、微志無已、以至于此、今不肯受、令吾虛落功德、請其圖之、師從容曰、無已有一於此、吾嘗脩鎌倉大佛像、而志願未遂、今以與我、不若起念佛道場於彼像前、於是野島氏愈益感其高德無私、遂捨數千金、就大像側、剏起高德院、創不斷念佛會、及野島氏寢、淨財不給、師亦寄五百金、充結衆之資、至今不退轉云、

〔新編相模國風土記稿 四藝文〕湘中紀行　太宰純

自光則寺前北折、詣大佛、比建長時所鑄遮那佛銅像、趺坐高四丈有奇、蓋半南都〇東大寺及平安〇方廣寺者、而尙東都〇寬永寺者、殿廢露坐中野、不知幾年、瞻仰久之、

〔新編鎌倉志 五〕大佛〇附切通中略

建長寺ノ持分ナリ

光明寺

光明寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉材木座村ニ在リ、仁治年中、北條經時一寺ヲ佐介谷ニ創シテ、蓮華寺ト名ヅケ、僧良忠ヲ以テ開祖ト爲ス、寬元年中、今ノ地ニ移シ、寺號ヲ光明寺ト改ム、永享八年、後花園天皇ノ勅願寺ト爲ル、淨土宗鎭西派ニ屬シ、關東ノ總本山タリ、

〔新編相模國風土記稿 九十五鎌倉郡〕材木座村〇中略　光明寺　天照山蓮華院ト號ス〇中略　仁治元年、北條武藏守經時、佐介谷ニ於テ、淨刹ヲ創立シ、蓮華寺ト名ヅク、時ニ僧良忠〇中略註　悟眞寺ニ在リ、經時延テ開山初祖トシ、武州足立郡箕田ノ地ヲ寄附シテ寺領トス、仁治元年、居住相之鎌倉、住住吉谷悟眞寺、勸唱念佛、副元帥平經時、請忠館内、受戒聽法、崇信日勸、於佐介谷、建蓮華寺、延爲開山、割附武州箕田地、備三寶供、暇日相從問法、寬元元年、今ノ地ニ移轉シテ堂宇ヲ修復ス、斯テ

創建

經時夢兆ニ感ジテ、光明寺ト改ム、(寺傳曰、後嵯峨帝ノ御宇、寛元元年、此地ニ轉地シ、同年五月三日、光明寺ト改ムト云フ、○中略)四年閏四月、經時卒シ、(東鑑曰、寛元四年閏四月一日、入道正五位下行武藏守平朝臣經時卒、二日禪室卒、葬佐々目山麓、ト見ユ、法名ハ蓮華寺安樂禪定門ト號ス、)嗣子相模守時頼、相承テ崇信ス、

〔新編鎌倉志七〕光明寺

光明寺ハ、補陀落寺ノ南隣ナリ、天照山ト號ス、本ハ佐介谷ニ在シヲ、後ニ此ノ地ニ移ス、

〔本朝高僧傳十五淨土〕相州光明寺沙門良忠傳

釋良忠、字然阿、石州三隅縣人、相國道長藤公八世之孫、課議平章賴定子、○中略貞永初年、住石州多陀寺、修不斷念佛、四方同志、來集入社、有生佛者、謂忠曰、聖光者法然高弟、今在鎭西、大弘淨教、何不往受記莂乎、光時在筑後天福寺、忠謁見問曰、天台善導報土、爲同爲異、光曰、入門雖異、到奧則同、自爾日陪講席、問難往復、光喜得人、乃以善導所述論註宗要安樂集、一乘戒儀等九卷、自撰徹選擇集授與、謂曰、先師門生、離居異說、冒瀆先師、我徒亦爾、苟非智德難得此法、汝能任器、宜以此度未來際矣、○中略仁治元年、囘相之鎌倉、住住吉谷悟眞寺、勸唱念佛、副元帥平經時、請忠館內、受戒聽法、崇信日勤、於佐介谷、建蓮華寺、延爲開山祖、割附武州箕田地、備三寶供、假日相從聞法、平帥夢、光明一道、從寺起而照日本國、寤而益信、遂革寺額以光明寺、嗣子時頼、相續崇信、寶治二年、復在洛之尼院、日講三部淨教、後嵯峨上皇、召忠離宮、問淨土教、稟菩薩大戒、賜香衣并上人號、建長元年歸鎌倉、副帥時頼、割由良地寄光明寺、○中略建治二年、應道舊之招、又上京師、後深草上皇、召忠仙院、問淨業旨、受大乘佛戒、賜以紫袍法器、○中略弘安九年、歸光明寺、○中略明年季夏、罹痾不愈、初秋○中略六日中夜、○中略氣絕、享齡八十九、○中略永仁元年、賜諡記主上人、

宗派

〔新編相模國風土記稿九十五鎌倉郡〕材木座村○中略光明寺○中略淨土宗、關東總本山ト稱シ、十八檀林ノ第一位ニシテ、六派ノ本寺ナリ、

〔和漢三才圖會 六十七 相模〕天照山光明寺　在補陀落寺南隣、淨土寺領百石 略〇中

開山記主禪師 略〇中 諱良忠 略〇中 弟子六人、分爲六派、京都有三箇寺、一條禮阿、三條道光、小幡慈心、關東有三箇寺、白旗寂慧、是乃光明寺之第二世也、名越尊觀、是乃大澤流義之祖、藤田持阿是乃藤田流義之祖、當寺爲六派之本寺、而白旗大澤二流今尚盛、四派今斷絕焉、十七箇寺檀林者白旗也、

堂塔

〔新編相模國風土記稿 九十五 鎌倉郡〕材木座村 略〇中 光明寺 略〇中 本堂　開山ノ像ヲ置ク　客殿　三尊ノ彌陀ヲ安ズ、中尊ハ運慶作、餘ハ作人知レズ、　方丈　彌陀ヲ安ズ 運慶ノ作ニテ、肚裏ニ運慶ガ骨ヲ收ムト云フ、

寺格

〔檀林譯書〕　鎌倉光明寺 略〇中

一山門額字天照山ハ、永享八年丙辰年十二月十五日、後花園帝賜御宸筆、

一祈禱堂の額字、延德三年辛亥年九月、後土御門帝賜御宸筆、

一勅願所綸旨、明應四年乙卯年四月廿一日、後土御門院賜、

一常紫衣の綸旨、同年五月二日、後土御門院賜、御尊從御當家檀林被仰付候譯、

一當寺者從往古淨土宗檀林、關東本山ニ御座候處、東照宮樣御治世の砌、天下安全の爲御祈禱關東十八檀林御定に付、其隨一に被仰付候、

〔集古文書 三 綸旨〕後土御門院綸旨 相模國鎌倉光明寺藏

當寺爲御祈願所、須開眞宗弘通之玄門、奉祈寶祚無疆之丹棘者、綸命如此、仍執達如件、

明應四年四月廿一日　　右中辨守光

光明寺觀譽上人御房

〔相州文書 四 鎌倉郡〕三浦郡南北一向衆之檀那、悉鎌倉光明寺之可參檀那者也、仍如件、

享祿五壬辰七月廿三日　　朱印 〇寺應、足利義晴、

光明寺

寺領

〔新編相模國風土記稿〕九十五鎌倉郡材木座村○中略光明寺○中略建武二年九月、當寺造營ノ爲、修理田一町ヲ寄附アリ、證狀曰、光明寺修理田壹町、可被付寺家候、相構遂營之沙汰、可申候也、仍如件、建武二年九月廿日、南方政所殿、□□□華押、此文書、今小町村實戒寺ニアリ、○中略天正十九年、當所門前、永十貫文ノ地ヲ賜ヒ、延寶三年六月、三浦郡柏原ニテ、寺領百石ノ御朱印ヲ賜フ、

〔相州文書〕四鎌倉郡上總國湯井鄉事、沼田藤七入道妙覺、應申子細、於妙覺者、可宛給其替於當鄉者、任觀應三年十月十五日御寄進狀旨、領掌不可有相違之狀如件、

貞治二年二月廿七日　基氏華押

光明寺長老

〔寛文四年御朱印帳〕淨土宗鎭西派西山派十貫文

相模天正十九年十一月日　光明寺

雜載

〔本朝高僧傳〕淨十八相州光明寺沙門祐崇傳

釋祐崇、字觀譽、巡歷東關、習學精勤、住相之光明寺、講經多衆、明應四年、唱導都下、遂入禁宮、講彌陀經、奏說協旨、勅令諷慈覺大師傳來聲明、乃率眞如堂之衆僧、就于內殿、諷唱彌陀經及念佛、賜香衣上人號、崇奏以殿修式、永世移行于光明寺、重賜紫袍於光明寺、方今專念之寺、初冬唱十夜念佛者、自崇而始、

妙本寺

名稱所在

妙本寺ハ、相模國鎌倉郡鎌倉大町村字比企谷ニ在リ、比企能員ノ男能本ノ建立ニシテ、日蓮宗ノ僧日朗ヲ以テ開山トス、日蓮宗勝劣派ノ一本山タリ、

〔新編鎌倉志〕七妙本寺附比企谷竹御所跡比企能員屋敷跡

創建堂塔

妙本寺ハ長興山ト號ス、日蓮說法始ノ寺ナリ、相傳フ、日蓮ノ俗弟子比企大學三郎ト云シ人建立ス、日蓮在世ノ時、日朗ニ附屬スル故ニ、日朗ヲ開山トス、正月二十一日、開山忌アリ、此寺ノ住持池上本門寺ヲ兼帶スルナリ、塔頭十六坊、院家二個院アリ、一貫五百文ノ御朱印アリ、此地ヲ比企谷ト云、比企判官能員ガ舊跡ナリ、〇中略

本堂　此堂ニハ元阿彌陀ノ像ヲ安ズ、其像ハ大學三郎ガ持佛堂ノ佛ナリシヲ、近年盜ミ去レテ、今ハ立像ノ釋迦、鬼子母神、四菩薩ヲ安ズ、釋迦ハ陳和卿ガ作ト云フ、日蓮伊豆ヘ配流ノ時、立像ノ釋迦ヲ隨身ス、後ニ日朗ニ付屬、其像今ハ本國寺ニ有、故ニ此ニモ又立像ノ釋迦ヲ安ズト也、

御影堂　本堂ノ北ニアリ、祖師一尊ヲ安置ス、日蓮在世ノ間、弟子日法隨身シテ詳ニ容貌ヲ寫ストナリ、列祖ノ牌アリ、又大學三郎ガ牌モアリ、上ニ法華ノ題目ヲ書、下ニ開基檀那日學位、同麗中理芳位トアリ、日學ハ比企大學三郎ガ法名也、毎年二月十五日、大學三郎ガ爲ニ勤行アリ、寺僧ノ云、大學三郎ハ比企判官能員ガ末子ナリ、父能員誅セラレシ時、伯父伯耆法師ト云人、山內證菩提寺ノ住持ニテ、其時京東寺ニ在シガ、大學三郎ヲ出家セシメ、京ニ隱置、後ニ文士トナリ、順德帝ニ奉仕、佐渡國ヘ御供申、賴經將軍ノ御臺所ハ、能員ガ外孫ナルユヘニ、大學三郎老後ニ御免ヲ蒙リ鎌倉ヘ下リ、竹御所ノ御爲ニ、比企谷ニテ法華堂ヲ建立シ、僧ヲ集メ持經シテ、法名ヲ日學ト云、妙本ト號ス、故ニ當寺ニモ名クトナリ、

〔新編相模國風土記稿〕八十七鎌倉郡大町村〇中略　妙本寺　比企谷ニアリ、長興山ト號ス、故ハ、比企能員ノ法名ニ據レリ、日蓮宗、山寺一本寺　此地ハ元比企判官能員ノ第蹟ナリ、其後、宗祖說法始ノ靈場トシ、後法嗣日朗ニ寺域ヲ附屬ス、故ニ朗ヲ開山祖トシテ、文永十一年三月、本行院日學開基ス、寺傳ニ據ルニ、日學ハ比企能員ノ末男ニテ、大學三郎能本ト號シ、日蓮ノ俗弟子ナリ、其先父能員、建仁三年、北條時政ノ爲ニ誅セラレシ時、伯父伯耆法印圓顯、同村證菩提寺供僧、上之村阿彌陀堂、京都東寺ニ在シニ養ハレ、剃髮シ

テ京ニ隱レ住リ、後文士トナリテ、順德帝ニ奉仕シ、按ズルニ、當寺ニアル能本ガ墓ノ碑面ニ、比企法橋能本堂トアレバ、當時カク呼名セシナルベシ、承久三年、佐渡國ノ遷幸ニ供奉ス、其後老後ニ至リ、將軍賴經ノ夫人ハ、能員ノ外孫ナル故、其所緣ヲ以テ赦免セラレ、鎌倉ニ歸リテ、竹御所ノ爲ニ、當寺ヲ建立セシトナリ、鎌倉志ニモ、此寺傳ヲ載ス、サレド東鑑建仁三年九月三日ノ條ニ、被レ捜二求能員餘黨等一、或流刑、或死罪、多以被二糺斷一、妻妾幷二歳男子等者、依レ有レ好、預二和田左衛門尉義盛一、配二安房國一トアリ、此二歳ノ男子ト云フ、卽能本ナリ、サテハ後配所ヲ遁レ去リ、潜ニ上京セシモノカ、寺傳ニ云フ所ト事實符合セズ、應永廿九年十月或ハ閏十月トス佐竹上總入道常元家督ノ事ニテ、持氏ノ不審ヲ蒙リ、當寺ニ在シ時、討手トシテ、上杉淡路守憲直ヲ向ラル、防戰シテ、常元終ニ此所ニテ自害シ、男一人、家人十三人討死ス、鎌倉大草紙ニ見ユ、○中略茲年○天正十八年關東ニ移ラセ給フ迄ハ、世々ノ住職、當寺ニ在テ池上ヲ兼管セシガ、明ル十九年、時ノ貫首日惺、本門寺ニ移住セシヨリ、歷世池上ニ住シテ兩寺ヲ兼帶ス、文祿元年正月、除地寺庵ノ僧侶、本寺ニ出仕ナキハ、其地ノ年貢收公アルベキ旨、全阿彌其事ヲ令ス、今度被レ除二御繩打一、寺庵諸宗共、不レ論二多少一、到二于本寺一、於レ不レ致二出仕會合一僧侶者、其所之地頭代官申付、年貢等嚴密令二催促一、可レ令レ請二取之一者也、仍如レ件、天正廿年正月日、全阿彌花押二年、東照宮肥前國名護屋御在陣ノ時、使僧シテ物ヲ獻ジ、御起居ヲ訊問シ奉ル、時ニ御書ヲ給ヘリ曰、當表在陣、爲レ届使僧殊隔遠到來、祝着候、猶全阿彌可レ申候、謹言、三月十日妙本寺、本門寺、東照宮御花押アリ、此御書ハ、今池上本門寺ニ藏ス、慶長三年二月、兩寺領トシテ、先規ノ如ク、一貫二百文ノ地ヲ宛ラル、旨御判物ヲ賜フ、其後、台德院殿ニ、使僧ヲモテ一種ヲ獻ズ、其時モ御書ヲ給フ、是濃州關ケ原御陣ノ後、慶長六年御在京ノ時ナルベシ、曰、態二見遥一遠路預二御使僧一候、幷一種如二御札一令二到來一祝着存候、所勞爲本服候之間、可二御心安一候、尙大久保治部少輔可レ申候、恐々謹言、妙本寺、台德院殿御諱、御花押アリ、是モ今本門寺ニ藏ス、

新釋迦堂　文永十一年起立ス、是ヲ本堂ト云フ、本尊ハ座像ナリ、背ニ、大日本國相州鎌倉長興山妙本寺常住、延寶五丁巳孟夏佛師日再二興之一、再興願主中川佐渡守久恒、北方法號長壽院妙慶日慶、朔家門永昌皆成佛堂ト記ス、古ハ陳和卿作ノ立像ヲ安セシトゾ、今客殿ノ本尊是ナリ、傍ニ四菩薩背ニ造立願主京大阪商賈三人ノ姓名、及寛文十二壬子仲夏日ト記ス、ヲ安ズ、古ハ供僧ヲ置レシナリ、卽元和元年十二月、將軍尊氏此堂ノ供僧職、永敎僧都ノ蹟ヲ、大進律師ニ命ゼシ事アリ、所藏文書曰、比企谷新釋迦堂、供僧職事、爲二永敎僧都蹟一、可レ致二領掌一之狀如レ件、文和元年十一月十五日、大進律師御坊、尊氏花押アリ、應永廿二年十二月、管領持氏、又供僧職法印快守蹟ヲ助大僧都ニ補任ス、比企谷新釋迦

堂供僧職、刑部卿法印快守跡事、所補任之狀如件、應永廿二年十二月廿日、勝大僧都御坊、持氏華押アリ、

寺格

〔寺社分限記日蓮宗五〕開山日輪　長興山　相州鎌倉比企谷　妙本寺日豐色衣

直本寺、代々聖人寺也、自池上兼帶之地也、

寺領

〔相州文書鎌倉郡二〕相州比企谷妙本寺敷地、幷寺領不可有相違候、寺務職等、任先御落居間、可停其綺候、恐々謹言、

八月十六日　政氏華押

妙本寺

〔相州文書鎌倉郡二〕今度被除御繩打、寺庵諸宗共、爾不論多少、到于本寺、於不致出仕會合僧侶者、其所之地頭代官申付、年貢等嚴密令催促、可令請取之者也、仍如件、

天正廿年正月日　全阿彌華押

雜載

〔鎌倉大草紙〕一應永廿九年十月三日、佐竹上總入道家督の事に付て御不審を蒙り、比企谷有けるを、上杉淡路守憲直に被仰付、發向しければ、佐竹も打て出、防戰けるが終に不叶、法華堂にて自害して失ぬ、

〔新編相模國風土記稿鎌倉郡八十六〕妙本寺〔中略〕文中ニ法華堂ト載タルハ、當寺ヲ云フナリ、

〔相州文書鎌倉郡二〕比企谷池上兩寺、御拘附而預芳札候、殊三種到來珍重候、相應之儀不可有疎略候、猶大道寺駿河守可申候、恐々謹言、

閏五月廿一日　氏康華押

妙本寺御報

〔相州文書鎌倉郡二〕掟

一妙本寺、本門寺當住之儀、如先聖人之時、不可有相違事

一法會之砌、横合狼藉等令停止事、
一兩寺山屋舖竹木剪取儀、堅制禁所要之事、
右於違犯之輩者、可有披露、可處嚴科者也、仍如件、
天正十五年丁亥七月六日　　氏直華押
妙本寺
本門寺

龍口寺

龍口寺ハ、相模國鎌倉郡腰越村ニ在リ、日蓮宗ニ屬ス、此地ハ文永年中、日蓮ノ將ニ斬罪ニ處セラレントセシ處ニシテ、當寺ハ即チ日蓮ノ死後、門弟等、其遺跡ニ建ツル所ナリ、

〔新編鎌倉志六〕龍口寺
龍口寺ハ、腰越村ノ内ナリ、寂光山ト號ス、日蓮遷化ノ後、弟子六老僧、力ヲ合テ建立ス、因テ日蓮ヲ開山トス、此寺ハ、八箇寺、輪番ニ住持ス、妙典寺、比企谷末寺也、本成寺、身延ノ末寺也、本立寺、比企谷末寺也、法源寺、中山ノ末寺也、本蓮寺、本國寺末寺也、觀行寺、玉澤ノ末寺也、東漸寺、中山ノ末寺也、淨立寺、科文谷末寺也、是ヲ固瀬(カタセ)ノ八箇寺ト云、龍口寺ノ近邊ニアリ、
本堂　日蓮ノ像ヲ安ズ、堂内ニ、日蓮首ノ座ノ石トテアリ、注畫讚ニ、文永八年九月十二日、日蓮難ニ遭フトアリ、

〔日蓮註畫讚三〕龍口頸座難第十六
文永八年辛未九月十二日、遣平左衞門尉頼綱、狀略云、日蓮忝開鷲嶺鶴林之文、僻鵜王烏瑟之志、剃

勘將來、粗得符合、雖不及先哲、定可希後人者也、知法思國之志、尤可被賞之處、邪法邪敎之輩、讒奏讒言之間、久懷大忠、未達微望矣、其日爲副元帥平時宗之使者、頼綱已下數百人武士等來名越小庵、搦取聖人、○中略然漸至龍口之海邊、兵士打圍軒詢、于時頼基見之悲慟、聖人切諫、是吾喜、何汝憂、然則頼基者聖人刎頭卽座可自殺申定、然子刻終坐于敷皮、向南方合掌思惟言、時及澆季、善神去國、聖人辭處、宿實聖頂、止正直頭、然日蓮正法行者也、天神地祇本朝諸神等何違靈山約束、不加擁護、當時江島巽、大光物形如滿月、飛乾現于刎頭座上、如鷹隼飛、移後山大木、有松二本見卽時雲霧立爲昏闇、例如金光明最勝王經、說薩埵王子爲餓虎捨身、時上高山投身于地、以竿竹頰頸出血、漸近虎邊、大地震動、日無精明、如羅睺障諸方晤蔽、無復光暉、此光物者、月天子所現也、或云、八幡大菩薩所變也、亏重連郎等越智三郎左衛門尉直重、既欲刎頭、其刀折落地、手足不動、警固武士等、鎖魂覺地、或馳去、或落馬、或馬上踞、又殿中大星流、大地動、雷電光、空中有聲、告曰、失正法行者、滅子孫、亡國土、相模守大驚、日蓮房宥赦、遣使與龍口使者、於金洗澤(カナアラヒサハ)濱往向、師曰、既爲被刎頭、雖然諸天地神、未被捨日蓮、爲令諫國主、守正法行者、地神以天天出帷、諸天以天變彰徵、龍神以不當時、雷電驚之矣、竊以、未聞見靈應、不思議神驗也、若人欲加惡刀杖及瓦石、卽遣變化人、爲之作衞護刀杖不加等之妙文、現證既朗、後生孰疑、勝不輕菩薩、杖木瓦石之難、超覺德比丘刀杖厄害之逼、開士之赴化、遇武夫之臨敵者遠矣、所以仁者必有勇、殺身以成仁矣、龍口斬頸之源起、古武藏相摸境鎌倉海月間有長湖、其廻四十餘里、是云深澤、爰有龍王住、○中略龍又立誓向南成山、龍口山是也、曰子亥方明神、元正天皇御宇養老七年春三月、泰澄大師住島、師大乘經、又每日乘船、詣龍口山法樂、明神對大師曰、我受菩薩法施、既除三熱苦惱、得宿命智、知舊德先、登生惡心、若有背國者時、斬頭懸我前、是非昔日凶執、捨其累賊、四海內平云々、泰澄受神勅、昔傳人、爾來逆人出來、斬頭懸山前、始於是矣、

〔出定笑語附錄二〕カノ龍口デ、首ヲ斬ラレヤウトシタル時、太刀ガ折レタナドト云フヤウナ僞リ

ハ、トントナク、アノ類ヒハ、ミナ後世ノ僧ドモガ、赤縣、ヤマト、天竺ノ古事ヲ集メテ、僞リ作リタルコトデム、ソレハ云ハズト知レタコトダガ、又其證據モアルヂヤ、其證ハ、此時日蓮ガ、鎌倉ノ建長寺ヘ贈タル書ガアル、其オモムキハ、

昨日拙僧於濱邊可爲斷罪之處、以大禪士之御慈愛、減死罪一等可被處遠流候、誠禪師之大恩、生生世々難忘、昨日御慈悲之無賢使者、日蓮幷門徒之滅亡無疑、後日有露命者、何世不奉報其恩也、右之通、侍者中宜敷請上達、

文永三年九月十四日　　　　日蓮百拜　在判

建長寺方丈大和尚

此書ハ先年、近江人鵜永知心寃應ガ、寫シ來タノデム、以前ハ毎年、土用干ノ時ニ見セタルガ、其時ニ、日蓮宗ノ羅シ者ガ來テ盜マウトシタル故ニ、ソノ後ハ容易ク、ハ見セヌト云コトヂヤ、ト

アルデム、然レバ建長寺ノ和尚ノ蔭デ、免サレタノヂヤ、夫ニ相違ナイ、太刀モ折レタデナク、不思議ナコトハ少シモナイデム、

清浄光寺

清淨光寺ハ、相模國鎌倉郡藤澤ニ在リ、時宗ノ總本山ニシテ、開基ハ智眞ナリト云ヒ、又吞海ナリトモ云フ、南北朝ノ比ヨリ寺運漸ク興リ、且ツ十二世ノ住持尊觀法親王ハ、龜山天皇ノ孫ヲ以テ後村上天皇ノ猶子タリ、諸國遊行ノ際京都ニ出デ、勅命ヲ以テ遊行諸國夫馬ノ許可ヲ與ヘラル、是ニ於テ此事永ク定例ト爲レリ、遊行ハ開祖智眞ノ遺風ニシテ、當時決定往生ノ札ヲ配布セシヨリ、代々ノ住持皆一回諸國ヲ巡回シテ化導ヲ爲シ、且ツ新藤ノ札ヲ賦スルヲ以テ例トス、此寺ノ住持ハ、遊行上人ヲ以テ補スルモノニテ、廻國終リシ後ニ、前住ヨ

名稱 所在 創建 沿革

リ之ヲ定ムルナリ、又寺中ノ座次ニ六寮、六留守居等、種々ノ階級アリ、

〔新編相模國風土記稿(百三鎌倉郡)〕清淨光寺　藤澤山無量光院ト號ス、時宗ノ總本山ニテ、藤澤道場ト唱フ、此地東西四町、南北六町許ノ際、藤澤山(登字太久左卒)ト閣稱シテ、自然別區ノ如シ、

〔豫章記〕相州藤澤ノ道場ハ、一遍上人ノ御建立ノ地也、一遍ト申ハ、先祖通信ノ孫、別府七郎左衛門通廣ノ子、智眞坊ト云也、

〔碧山日錄〕寛正三年三月十八日癸丑、清岩來、語及修淨法之徒、岩曰、往時有號一遍上人者、七條道社相州藤澤道場之祖也、

〔所歴日記一〕抑此寺(○清淨光寺)は、開山四代上人(○呑海)東に修行の時、道場一所建立有べしと、所願を發し給ひ、勝地を求給ふに、此地に蓮花生出て、潔き由、靈夢の事などあれば思ひ合てもとより在し、極樂寺と云ふ一字を改て、清淨光院と云ふ、人王九十五代後醍醐天皇の御宇、正中年中のことゝかや、

〔新編相模國風土記稿(百三鎌倉郡)〕清淨光寺(○中略)　遊行歷代譜ニ據ルニ、開山呑海ハ、遊行四世ノ僧ナリ、(○註略)正中二年、(○註略)極樂廢寺蹟ニ就テ當寺ヲ創ス、(○註略)開基ハ、俣野五郎景平入道明阿ナリ(○註略)或ハ當寺宗祖一遍ノ掘立ト云フ說アレドアタラズ、(○註略)當國ニテ、一遍駐錫ノ地ハ、高座郡當麻無量光寺ナリ、一遍ハ全ク遊行ノ始祖ニテ、當寺開山呑海ハ、遊行ヲ相承シテ、其四世ノ法嗣タリ、當山ノ四世ニハアラズ、(○註略)當山三世一鎭(○註略)ガ時、延文中、將軍尊氏堂宇ヲ再造シ、寺領六萬貫ヲ寄附アリ、此頃迄ハ、清淨光院ト號セシガ、(○註略)是ヨリ寺號ニ改メ院ヲ無量光院ト號ス、時ニ、後光嚴帝宸筆ノ扁額ヲ賜フ、(○註略)當山六世自空(○註略)ガ時、回祿ニ罹リ、後當宇再興成テ、客殿ハ上杉中務少輔朝宗、財ヲ捨テ再造セシトゾ是應永中ノ事ナリ、(○註略)遊行十二世尊觀法親王ト申セシハ、(○註略)龜山帝第七ノ皇子、一品式部卿恒明親王第三ノ御子ニテ、(○註略)後村上帝ノ御猶子タリ

○中略嘉慶元年二月、自空ガ讓與ヲ承ケ、遊行スル事十年ニシテ、應永三年ノ秋、京ニ入シ序、參內アリシニ、巡國化益ノ事、肇テ後小松帝ノ叡聞ニ達セシカバ、巡行ノ國々ニテ、止宿夫馬等ノ事ナク計フベキ旨、京都將軍ニ勅命ヲ下サル、卽斯波義將奉ハリテ、各國ノ守護ニ下知ス、是遊行僧夫馬ノ印狀ヲ賜ハル濫觴ナリ、○註略當山八世大空○註略遊行ノ時、應永廿三年四月、義持ノ命ニヨリ、管領細川滿元入道道觀奉ハリテ、國々ヘ下知ヲ傳フ、○中略當山十三世普光○註略ガ時、山內悉ク火災ニ罹リ、天正十五年再建ノ企アリシニ、孰ノ領地タリトモ、良材アランニハ、恣ニ伐木アルベキ旨、北條左京大夫氏直免許狀ヲ寄ス、○註略普光遊行六年ニシテ、同十七年八月、越後國北條村專稱寺ニテ、僧滿悟ニ遊行三十三世ノ統ヲ授ケ、當山ニ歸錫ノ時、九月直江山城守兼續、路次ノ印狀ヲ授與アリ、○註略同十九年十一月、寺領百石ノ御朱印ヲ賜ヘリ、○註略慶長八年六月、境內制禁ノ掟ヲ示サル、○註略同十七年、當山十四世燈外○註略巡國ノ時路次ノ御朱印ヲ下シ賜フ、是ヨリ後、遊行ノ統ヲ襲グモノ、皆巡國ノ御朱印ヲ賜ハレリ、○註略當山二十世信碩○註略住職ノ際、元祿七年十一月、金魚ヲ當寺城內ニ放ツベキ旨仰アリ、○註略

〔新編相模國風土記稿 百三 鎌倉郡〕淸淨光寺○中略本堂　慈覺作ノ彌陀ヲ本尊トス、淸淨光寺ノ扁額ハ、後光嚴帝ノ宸翰ナリ、

〔鎌倉九代後記〕應永三十三年二月十四日、藤澤山炎上、

〔鎌倉年中行事〕藤澤炎上ノ時、公方樣洲崎マデ御出、ソレヨリ御使ヲ被遣也、

〔遊行歷代譜〕二十二代意樂○中略藤澤本燒ハ、永正十癸酉正月廿九日、伊勢早雲亂、

〔遊行歷代譜〕六祖一鎭○中略文和四未年十二月廿二日、於相州藤澤山入寂、○中略當代藤澤轉敷地而再興、八十一坪之堂也、

延文年中、院號ヲ寺號トス、是迄ハ淸淨光寺ト云、尊氏ノ建立、後光嚴院異筆額、○中略

十一代自空〇中略　應永十九壬辰年三月十一日、於₂相州藤澤山₁入滅、〇中略　當代藤澤回祿、再興、一百坪之堂也、應永年中、同寺上杉中書〇宗朝客殿造、〇中略

十四代大空〇中略　永享十一年己未十一月十四日、於₂相州藤澤山₁入滅、〇中略　當代又藤澤回祿、再興、一百廿坪之堂也、但一丈二尺間、〇中略

二十一代知蓮〇中略　永正十癸酉五月八日、於₂駿州府中長善寺₁入滅、〇中略

私考、當代永正十年春、此回祿アリト見タリ、一處正月三日トハ非ナリ、藤澤本寮、長善寺江移牽ル事、永正十癸酉年ト、廿四代上人外〇不之記錄見タリ、〇中略

三十二代普光〇中略　寬永三丙寅五月廿二日、於₂相州藤澤山₁八十四入滅、〇中略　此時一字不ㇾ殘炎上〇中略

三十四代燈外〇中略　正保元甲申四月廿日、於₂相州藤澤山₁入滅、〇中略　慶長年中再造、三十四代上人、客殿庫裏被₂造改₁、寬永年中也、

寺格

〔相州文書鎌倉郡五〕(端書)百二代稱光院綸旨　遊行十五代

宜ㇾ被ㇾ奉ㇾ祈₂國家安全、寶祚長久₁者、天氣如ㇾ此、仍執達如ㇾ件、

應永廿四年七月十七日　右少辨經興

他阿上人御房

〔武家雲箋〕清淨光寺藤澤道場　遊行金光明寺七條道場　時衆上人與以下、諸國上下、關々渡海、以₂印判形₁、無₂其煩₁可₂勘過₁之旨、所ㇾ被ㇾ仰₂付國々守護人₁也、若於₂違犯有₁之所者、可ㇾ被ㇾ處₂罪科₁之由所ㇾ仰₂下₁也、仍執達如ㇾ件、

永享八年十二月五日　右京大夫持之印

寺領

〔集古文書四十六寄附状〕武田信玄寄進狀相模國高座郡藤澤山淨光寺藏

定

一相模國藤澤　貳百貫　一同州俣野之內　百貫
右如此令寄附候、猶關東靜謐之上、御本願之內、重而一所可進置候之趣、可得尊意候、恐惶敬白、
元龜二年辛未七月十六日　信玄花押
清淨光寺玉床下

〔藤澤道場記〕一權現樣御朱印之寫
寄進　藤澤寺
相模國東郡藤澤之內百石之事
右如先規令寄附畢、殊寺中可爲不入、彌守此旨、佛法相續不可有怠慢者也、仍如件、
天正十九年辛卯十一月日　大納言源朝臣御判

一當寺者、遊行四代上人建立ニ而、遊行廿代上人之時迄、寺領六千貫餘御座候つる由申傳候、廿代之比、亂國ニ付、當寺退轉寺領沒落致、遊行代々當所へ被罷移候も難叶、弁分持ニ而御座候、權現樣御先祖、遊行へ由緒之事、被思召合候哉、關東八州御存知之時、寺領三百石御寄進之由被仰出候、然れ共、遊行卅二代上人、佐竹殿を賴、當寺へ不罷移、看主に留花院と申僧、被指置候ニ付、代官小刑部分別ニ而、看主之堪忍分ニハ、百石御寄進茂不苦由言上候而、百石ニ罷成候事、

〔和漢三才圖會六十七相模〕藤澤寺　在藤澤時宗　寺領百石
號清淨光院　時宗本寺後宇多帝建治元年開山遊行一遍上人

什物

〔鹽尻四〕遊行上人　今の遊行唯稱上人、寶永三丙戌の年、京師に在り、內へも時々被召ける、一遍上人の繪傳記侍り、古へよりあれども、言葉俗にてかなも違ひ有ける、此度勅して、畫をば鷲尾隆長圖し、詞書は諸家の能書三十七人に命じて筆せしめ給ひし、七月の初成功せしかば、卽唯稱に賜ひける、八月廿三日〇廿三日、一本作二十三日、祖忌を修して、廿四日京師を立、西國へ下向と云々、

寺職

〔遠碧軒記 下二 僧侶〕遊行三代目の上人、緣起をも作る、道場の制文、又器朴集と云書を述作して、一宗の趣を顯す、

〔諸宗階級 下〕時宗門法服幷法臈階級之次事

一遊行上人。。。

右者、一宗末寺中、行解相備り候僧を、三人撰出し熊野權現於神前ニ、御鬮を取り、神慮次第ニ、右三階之中より遊行法水相續仕候、右之通神慮次第之儀ニ御座候得者、何れの寺ゟ遊行相續仕候と申定無御座候、大寺小寺ニよらず、遊行上人に罷成候、

一藤澤上人。。。。

右者、遊行上人諸國修行仕候以後ニ、藤澤山へ引籠候而、藤澤上人與申候、回國遊行上無之中、万一藤澤上人遷化仕候得者、甲州府中一蓮寺ゟ、藤澤山江入山仕、清淨光寺住職仕藤澤上人ニ罷成候、依之甲府一蓮寺儀ハ、本山補處之寺ト相定、一蓮寺入院之砌、熊野權現より、神勅之遊行上人唯授壹人之傳法相傳仕候、○中略

享和元酉年十一月

淺草 日輪寺

相州藤澤 清淨光寺

相州藤澤 遊行上人

〔寺鑑 下 時宗〕藤澤山

右住職、先住隱居藤澤上人ゟ申付ル、

御朱印　高百石

右住職、先住清淨先寺ゟ申付ル、

御朱印　道中御傳馬

〔鹽尻 七十〕一相州藤澤清淨光寺座次列座の次第 俗ニ遊行寺ト云

六寮　一寮　二ノ寮　三ノ寮　一留守居　二ノ留守居　三ノ留守居

六留守居　引手屋　箸屋　楊枝屋　編手屋　軸屋　筒屋

如此其名雅ならず、四十二世尊任上人、正其座次號改む

四院　興德院　潤雲院　東陽院

二庵　常住庵　等覺庵

五軒　文峯軒　臥龍軒　万生軒　慈照軒　修嶺軒

十室　行室　岩室　學室　丁室　傳室　達室　閑室　安室　溪室　純室

〔藤澤道場記〕一藤澤道場、寺號淸淨光寺、山號藤澤山と申候事、

一長阿彌陀佛由來之事、親季御子有親御事ニ而候、親季法名ハ德阿彌陀佛、有親ハ長阿彌陀佛と申候、此長阿、三州にて松平之家を新田德阿殿より御繼候元祖にて候、德阿殿御子、遊行十六代上人之弟子ニ被為成候子細ハ、京都之公方より、御勘氣ニ付、遊行を御賴候、十六代上人藤澤におゐて相續有之而、京都修行に被記立候時分、親季をば、戒名德阿彌陀佛と名付奉り、有親ハ幼稚の御時にて、十六代上人弟子に御成、長阿彌陀佛と申喝食ニ而、三州まで御隨逐の比、三州にて、松平殿、遊行御崇敬之上に、予ニ男子無之故、家を可相續者なし、若遊行徒衆之内ニ、可然由緖之人有之バ、遺跡ニ可相定由御懇望之間、喝食長阿彌陀佛を、遊行より松平殿へ被進候、長阿を後有親と申候、其御子松平太郎親氏、法名順阿と申候、時宗ニ而御坐候、王代ハ後花園院、鎌倉ハ持氏、遊行三州修行ハ永享年中之事、

一德川殿遊行十六代を御賴候も、宗旨へ由緖有之而之事、新田義貞者、大塔宮方にて、自害之時も、時宗門下越前稱念寺末寺往生院にて御葬禮致候由緖如此之故、大塔宮御子〔尊〕遊行八代上人弟子ニ被為成、其上遊行十二代上人に御成候、是後醍醐院御孫にて候、新田御先祖へ由緖有之

付、德川殿も、新田と御先祖おなじき故、親季の御子を、遊行十六代上人へ弟子に被遣、上人を御賴、三州迄御登候事、

〔諸家系圖纂五御當家〕政義○註略

　　親季（中略）三代流浪、數居所々○中略

　　　有親從五位下、右京亮、法名長阿彌

　親氏（中略）永享元年、贅二于三河國松平郷一、爲二郷主太郎左衞門尉在原信重、配二其女一爲レ婿、郎稱二親氏一、又松平太郎左衞門尉、應仁元丁亥四月廿日卒、芳樹院法名俊山德翁、

〔遂碧軒記下二僧侶〕遊行の元祖は、伊豫國の河野四郎なり、四百年程になる、緣起をみれば、一家のうちに、矛盾の事出來て、發心すとありき、遊行の内が當住にて、藤澤は隱居の地なり、今の住まで四十二世なり、佐渡國の大願寺の僧なり、今の遊行なり、本寺は淸淨光寺と云、卽後光嚴院の勅額あり、權現樣の御元祖の内が遊行の弟子なり、其とき德川家夭亡にてあとたゆるを、この弟子をよびかへして、をこしてあとをつがす、それゆへに德川家も、この宗よりつとむと云、宗旨の内にて、一おはりに出來る事なれども、右の德川の家へ緣有るにより、御崇仰にて、回國にも、傳馬等を被下、けつかふの事に成なり、一遍の元祖、始は天台、後に淨土宗に成れり、それから今の宗旨をとりたつるなり、

藤澤

〔廻國雜記〕藤澤の道場、聞えたる所なれば一見し侍き、ある寮にて茶を所望し侍り、しばらくやすみけるに、池にもみぢのちりけるを見て、

　澤水もかげは千いろの木のはかな、道場のまへにふりたる松に、藤のかゝりければ、

　紫の色のゆかりの藤澤にむかへの雲をまつぞ木たかき

〔新編相模國風土記稿藝文十一〕藤澤道場　木下貞幹

征鞍暫憩驛亭傍、枉レ道來尋一遍房、苔蝕門標古跡、竹篭抱閣護靈場、松枝西指僧留室、澗溜東來客億郷、法派流傳藤澤水、分吾小許洗塵腸、

古事類苑

宗教部六十

佛教六十

寬永寺

名稱所在

寬永寺ハ、東京上野ニ在リ、寬永二年、將軍德川秀忠ガ忍ガ岡ノ地ヲ天海ニ賜ヒテ草創スル所ニシテ、其地江戸城ノ鬼門ニ當ルコト、猶ホ比叡山ノ皇城ニ於ケルガ如シ、故ニ山號ヲ東叡山ト稱ス、元祿十一年、新ニ根本中堂ヲ建テ、堂舍ノ結構、其他一ニ皆延曆寺ニ倣ヒ、以テ江戸城ノ鎭護ト爲セリ、然ルニ明治元年、彰義隊ノ此ニ據リシニ由リ、遂ニ兵火ノ爲ニ、一山焦土ト爲リ、僅ニ數宇ノ堂舍ヲ存スルノミ、境内ノ東照宮ト、德川將軍一家ノ廟トハ、當寺ノ尤モ重要ナルモノニシテ、寺領一萬三千石ノ内、一萬餘石ハ皆其領地ニ係レリ、子院ノ如キモ、初メハ祈禱所トシテ建立セシガ、諸大名ノ參廟ニ際シテ、皆之ヲ其休息所ニ充テ、是ヲ某侯ノ宿坊ト稱セリ、日光門跡輪王寺宮ハ、常ニ當寺ノ本坊ニ住シ、學頭、執當等ノ職ハ、子院ノ僧之ニ補シ、坊官以下ノ諸役守皆當寺ニ在リキ、尙ホ輪王寺條ヲ參看スベシ、

〔書言字考節用集 乾坤 一〕東叡山(トウエイザン) 武州豐島郡、號圓頓院寬永寺、開基慈眼大師、本尊千手、鎭守山王、

〔寬明日記〕寬永三年十二月晦日、今年武州上野ニ、東照大權現御廟有御建立、其外摸比叡山、被建社堂、堂前有池水、不忍ノ池ナリ、准湖水、築一島、建立辨財天之社、是准竹生島、號東叡山、自御城當艮方、開山ハ慈眼大師、大僧正南光坊天海上人也、寺號ハ寬永寺、院號ハ圓頓院、

〔御府内備考 二十四 下谷〕上野町壹丁目貳丁目

一町名起立之儀、年古キ儀ニ而、書留等致燒失、相分兼候得共、東叡山御開闢已前ハ、葭萱生茂リ候小高キ岡山ニ而、一圓上野村與申候由及承申候、當所之儀ハ、元上野之内西之方、今忍ヶ岡與申候邊ニ有之候由、其節之村小名等も不相分、凡寛永之頃、當時之場所江引地ニ相成候而、右之通上野より引候故、上野町と唱候由申傳候儀ニ御座候、

創建 〔大猷院殿御實紀五〕寛永二年十一月、この月、大僧正天海が願により、忍岡の地を給はりて、伽藍を創建せしめらる、その旨趣は、むかし桓武天皇、平安城に定鼎のとき、傳教大師、皇城の鬼門、叡山の靈地をいとなみ、帝都の鎭護として、千有餘年、皇祚長久を祈り奉る事、いまにおゐて怠らず、いまこれに準擬するに、忍岡は江城の鬼門たり、その地の靈勝、かの叡山に減せざれば、爰に七堂伽藍を經營し、國家安全、武運繁榮を祈らんとぞ聞えける、よつて其請にまかせられ、大御所の御座所を賜はり、本院を經營し、別に費用銀五萬兩下さる、尾邸は常行堂、紀邸は法華堂、水邸は輪藏をいとなまれ、藤堂和泉守高虎は、神祖の御宮回廊供所護摩堂、酒井雅樂頭忠世は石鳥居、土井大炊頭利勝は、五重塔、鐘樓、酒井讃岐守忠勝は本地堂、堀丹後守直寄は祇園堂、永井信濃守尙政は二王門を創建し、釋迦堂、多寶塔、三十番神社、淸水觀音堂、求聞持堂、辨財天堂、食堂、慈惠大師堂は、天海みづから經營す、子院は、上乘院を尾邸にてつくられ、眞如院は紀邸、寒松院は和泉守高虎、常照院は加賀宰相利常、凌雲院は丹後守直寄、明靜院は越前伊豫守忠昌、一乘院は鍋島信濃守勝茂、靑龍院は松平但馬守長晟、現龍院は稻葉丹後守正勝(今は松平土佐守忠義再興せしところなり)東漸院は水谷伊勢守勝隆、東圓院は松平越中守定綱、津梁院は津輕越中守信牧、元光院は神尾備前守元勝、松林院は松平周防守康重、普門院は松平阿波守忠英、吉祥院は中山備前守信吉いとなみ、山王社、幷に別當本覺院は、鎭護國家の祈禱所たる故に、天海みづからいとなみ、有馬左衞門佐直純、細川越中守忠利これを助け、涼泉、護國、修禪、無量、寶勝、覺成、泉龍、普廣、明王、滾樹、常德等の子院は、みな私に營みしとぞ、(東武實錄、寛永

系圖、紀年錄、慈眼大師行狀、慈眼大師傳、天海が別傳によれば、慶安年中にいたりて、東叡山寛永寺圓頓院の勅號を給はり、永く比叡日光にならびて、三山の目定りしとそ

本尊

〔慈眼大師傳〕寛永二年二月、承台命、卜靈地於江城之鬼門、摸王城叡岳舊規、創東叡山、幕府賜舊殿幷工粮、白銀五萬兩構本院神祠堂塔、院院幕府之家族家臣、或領國大名、各營建之、皆附食邑矣、慶安年中勅賜額號東叡山寛永寺圓頓院、忽爲常恒法談之巷、緇侶還沓、其後大猷院免官租二千百石、永充學供、後家綱公加三千五百石、合爲五千六百石也、於是日光東叡準擬山門、爲三山鵬次之席也、

〔東叡山中堂御建立幷供養記〕武州豐島郡東叡山寛永寺寛永元年、台德大相國秀忠○德川給地、慈眼大師擬延暦寺而所開創也、○中略元祿十年丁丑五月二十三日下命、○中略明年戊寅正月初五、偶有白鶴一隻、自東北飛來、至坂本六間町車坂町、飲啄自如、曾不猜人、經池端谷中、至三崎而飛去、後其地或屬本山子院地、或附中堂料田、人以爲興隆之兆、二月六日立柱、六月十九日奉江州石津寺藥師佛像到、予向以叡山中堂安置傳敎大師所刻像、因命大僧都等運、遍詣江州諸寺、安置大師所刻像者求之、將以奉安新堂、等運言、矢橋石津寺所奉最爲殊勝、仍復遣等運到石津寺請之、住持敎音言、此寺系本多隱岐守管內、難擅應命、等運亦傳予旨於隱岐守、隱岐守乃發吏人護送、致之於東叡山、敎音言、寺記相傳、昔傳敎大師刻藥師佛像二軀、一置之根本中堂、欲安置其一、未定處所、乃取三石塊、將就其所隕安置之、試投三石、三石隕于矢橋浦、因就其處作堂奉安、故號石津寺云、

堂塔

〔江戸名所圖會十四〕東叡山寛永寺○中略

中堂　本尊藥師如來、傳敎大師の作にして、江州矢橋村石津寺より移させらるゝといへり、正五九月十二日には、一山の僧徒出仕ありて、大般若經轉讀あり、此堂中天井の中央に畫ける龍、ならびにうしろの方の壁上に圖せる所の十六羅漢等の像は、ともに狩野永叔の筆なり、又同じ天井の左右に圖せる天人は、狩野探信探雪の兩筆なり、

脇士　日月二大士、十二神將、慈覺大師の作にして、羽州立石寺よりうつさるといへり、○中略

竹臺　廊門のうち左右にあり、昔慈覺大師入唐の時、五臺山の竹を根こじに携へて歸朝ありし後、叡山根本中堂にうへちる、よつて東叡山にも其根をわけ移し植て、法流の絕ざるしるしとするよし、鹽尻といへる書に見えたり、世にこの竹を、山王權現をよび八百萬神の影向所なりともいへり、又同じ左右に小き塚あり、石欄を植たり、諸夜叉夜叉女の影向所なりとぞ、

廊

門　天井に迦陵頻伽を畫けるは、狩野探信探雪の兩筆なり、○中略

轉輪藏　中堂の前左の方にあり、一切經を收む、前に傳大士をよび普賢普城の像を置、この堂は水府公の御建立な

り、

法華堂中堂の前右の方にあり○中略　常行堂おなじく左の方にあり○中略　東照大權現宮文殊樓の後左の方にあり　大石燈籠同所構の外にあり、高サ二丈あまり、笠石の徑り一丈二尺、棹石三圍、京師南禪寺尾州熱田社と當山とをあわせて日本に三ッの大石燈籠なり、いづれもおなじ人の造立する所にして比類なし、銘に寛永八年孟冬十七日佐久間大膳亮勝之とあり、　大佛殿同所にあり、唐銅をもつて二丈二尺餘に作れる釋迦如來の座像を本尊とす、萬治年間木食淨雲といへる沙門、是を造立ありしといへり、堂内に地藏尊を安ず、慈濟庵空無上人の建立にして、江府六地藏の一なり、又彌勒佛の像を安ず、すべてこの三尊をもつて現世過去未來の三世を表せり、往昔大明院宮この銅像をみそなはし、其頃堂宇もなかりしかば、雨露の侵さむ事を患へ給ひ、佛殿を營建ありしとぞ、今は公より修理をくはへらる、　鯨鐘同所にあり、二六時にこれを撞り、○中略　文殊樓樓上に文殊菩薩を安置す、此靈像は、奥州會津の法藏寺より移させらるゝとぞ、○中略　勸學寮俗に百軒長屋といふ、當の[illegible]の元祖了翁僧都、天和二年に建立す、四方に列るところの寮舍、おの〳〵五十餘間づゝ、其數あわせて二百戸とす、勸學の僧徒常にこゝに居る、則當山の檀所なり、　講堂勸學講院と號す、貞享元年に修營す、釋迦如來の像を安じて、日々に三教の書を講ずる事怠慢なし、今は觀音を本尊とす、　經藏天和四年に建立す、中に一代藏經を收め、崎陽[illegible]禪師の開山知足禪師徑山寺より齎來ありし三聖人の古銅像を安す、屋上より柱庇に至るまで、悉く鋼葉をもつて包裹す、其四方は石を疊てこれを繞らす、又經藏の後左の方に、其戒師悲光不昧禪師、授業師前龍泉禪寺法石大和尚、および二親養父母ならびに自得居士の石塔婆を造立す、傍に僧都の石像あり、同所石壁の外に道行の碑を建たり、文は黄檗高泉和尚これを撰す、○中略　常念佛堂護國院にあり、本堂には釋迦文殊普賢を安す、何れも佛工春日の作なり、寛永の初、慈眼大師公へ白て、開基生顯に命じ、常念佛興行し給ふ、御祈願所に、常念佛を置給ふこと、深き所以有由、殊勝の地也、　宗廟當家御代々の御靈屋なり、當山の院中より御別當を務む、　坊舍凡三十五字各領國の大諸侯是を營建し、食邑を附す、

〔大猷院殿御實紀四十一〕寛永十六年三月廿日、東叡山藥師堂より火おこり、御宮の廻廊、五重の塔等炎上す、田記、水戸記、

〔公卿補任靈元〕延寶九年○天和元年三月十三日、東叡山佛殿造立立柱上棟、影像開眼、遷座日時定、

〔松蔭日記一法の燈火〕根本中堂を、あづまにたてさせ給ふべきよしにて、元祿十一年二月九日、東叡山に柱たてあり、いまの、あづまの、むかし寛永の頃、忍のびの岡といふ所は、うしとらにあたれりければ、ひえの山になぞらへて、寛永寺といふ、たてさせ給ふになんありける、それに根本中堂をうつすなりけり、こなた○柳澤吉保、即松蔭日記著者之主人、にも、わきてうけ給はらせ給ふ、御いそぎども御いとまなし、○中略ことし中堂つくらせ給ふ事、春よりはじめて、さばかりのひゞきなれば、大かた天の

下ひしめきあへり、こゝにはすべて奉行せさせ玉へれば、山におはして御らんず、さつまの中將綱貴朝臣は、人夫の事うけ給り玉ふて、さま〴〵と人多く奉りたまへり、○中略かくて八月二日にぞ、中堂つくりはてける、さる世の大事なりけるを、いちはやくたちおはりて、いみじうみがゝれ出たり、御所にも、うれしうおぼす事、いふにやはをよぶ、やがて正宗といふがうちたる、御はかしなど給はらせ給ふ、ありつる人々、ほどにつけて皆よろこびしつゝ、さはぐ、上棟は十一日の卯の刻なり、○中略同じき二十三日には、安鎮地鎮の法をこなはせ給ふ、八すみと、中央にかりやをまうけて、公辨親王、八鎮のあざりをゐて、とりおこなはせ給ふほど、めづらかにたぐひなし、○中略その日鷹司の左のおとゞ下らせ給ひぬ、又の日は、勅使初て殿上人あまたまいり給へり、中堂勅會せさせ給ふべきためなりけり、やがて御所にも、たいめんせさせ給ふ、二十八日になりて、中堂に藥師如來うつし奉る、その日のぎしき、又いかめしき事、いへばさらなりや、○中略かくて中堂供養は九月三日とさだめさせ給ふに、○中略ほどなく、勅使參り給ふ、中山大納言篤親卿と聞ゆ、堂の左のかたに、大臣の御座しつらひたり、鷹司殿おはす、右のかたには中納言基勝卿、殿上人などあまたつき給ふ、此時亂聲したり、上官座につく、次に出居の次將は、石山左中將基董朝臣と聞ゆ、次に式部のぞう康政、彈正少忠弘光、けゞしなど次第して出くる、かくて威儀師先にたちて、僧達集會の所をたちぬ、治部玄蕃など引つれて、ひらはりの前につらなりたてり、さて雅樂寮の官人、けはひよそほしうつくろひて、左右にわかれて、舞人をいざなひつゝ、南門のかたはらより入、蝶鳥ばさつの舞人、めなれぬさまにかざりたてゝ、いとおもしろきものゝ音、吹たてうちあはせて、まいるほど、そゞろさむきまでおもしろう、うき世の事とはみえず、うるはしういみじ、左右ともにすすみ立て、音聲をたてたるほど、又かぎりなういみじうおぼゆ、樂人は本道をへてがくやにいたる、なほ物の音ひゞきあひたり、さて省れうの官人、僧衆引つれつゝ、左みぎにわかれ、標の下にた

てり、此時ものゝ音とゞめて、をの〳〵座につきたり、威儀師標をたて、省官はかへりまいる、又前のごと、物の音ひゞかし出つゝ、がくやにいたる、又省官先だちて、こと〳〵しうはらびたてゝ來るをみれば導師呪願師いたり給へるなりけり、導師は公辨親王、呪願師は曼殊院良應親王せさせ給ふ、舞臺のもとにて、御こしとゞめておりさせ給ひぬ、扨舞臺をへて、禮盤につき、左右に禮佛し給ふほど、また心ことに有がたうこゝらの中にすぐれて、あなめでたと見ゆるばかりやんごとなきさましたまへり、○中略事どもはつるに、導師より初て、ろくどもあまたをこなはる、大臣以下これをとり給ふ、さばかりひろき所に、大かたあたりもまばゆきまで、ろくどもかづきつれたり、いまはかうこそと見るほどに、又まんざいらくたい平樂陵王、なそりなど、さま〳〵にめでたく、なまめかしき物の音ども吹あはせたる、またさしかへりて、いみじうおもしろし、かくて導師よりはじめて、みなかへりおはす、猶よそほしう官人などはじめのごとくみちびきたり、こゝら僧正僧都數多、色々のけさころもきつれて、皆時の丞うとくとみえたるが引つゞきたるさま、いみじう見物なり、かくてかんだちめなど、各あかれ給ひぬ、御所には事はつるきわに、宮の御かたに入せおはしまして、見なまかではて、ゝぞ、御堂へまいり給ふて拜し奉り給ける、その有さま、又いかめしう行列したり、さるべきかた〳〵御供にて、まいりつゞく、會津少將は御さきにたゝせ給ふ也、こゝには後從し給へり、かくてかへりおはしまして、又の日、勅使はじめて、かた〳〵にいみじうもてなし聞え給ふ、さるがくなどもありけり、おとゞをはじめて、宮だち、かんだちめ、殿上人、諸卿大夫、三十人ばかりぞありける、とり〳〵に御をくり物など、いみじうせさせ給ふまことやこたみ、中堂つくらせ給ふに、そのあたりいみじうかゞやきたるさまおはかりけり、仁王門、文殊樓、常行堂、法華堂など、つき〳〵しうてたちならびたり、しゆろう、りんざう、ふもとの山王なども、いみじうみがゝれ出たり、山のうち、松原なども、さき〳〵ありしよりはひろ〳〵と打つゞ

きて、あらしはるかに吹すさびて、行かふ人のけしきも、ちいさう、物ともあらずみわたさる樣など、こと更におほくうへそへられたれば、春まちどをに、思ひやらるゝさまぞしたる、もとよりありつる堂なども、あらためてつくりそへみがきと、のへなどしたりければ、まことの山〇延暦寺のわりにも、をさ〳〵たちこえて、それもなどかばかりはなど、世の中みあつめたるものは、いひあへるとなん、

〔常憲院殿御實紀三十八〕元祿十一年九月三日、すべて叡山の供養も、永正十三年の後は、絶て久しくなりぬれば、その作法もさだかならざりしを、左府〇藤原兼輝ことさら、古今を斟酌して、門主〇公辨にはからはれ、作進せらるゝ所とぞ、又表白は、門主のみづからえらばれ、御願文は、東坊城亞相恒長卿、呪願文は、高辻亞相豐長卿作進し、近衞右府家煕公淸書して進らせられ、奉行の職事は、日野右中辨輝光つかふまつりしとぞきこへし、かくて本坊にて饗宴あり、中堂料三百石寄附し給ひ、導師に銀壹萬兩、時服二十、呪願師に、銀壹萬兩、僧に五千兩布施せらる、けふ山中諸門は百人組の頭持筒頭先手頭十隊して警衞せしめられ、公卿館伴の大名もまかりむかへり、日記、中堂供養記、憲廟實錄、松陰日記、　四日、公卿饗應の申樂あり、翁三番叟、白髭、八島、江口、張良、祝言、狂言二番、末廣がり、土筆なり、奏者番松平彈正忠正久、饗頭の役す、けふ市中に令せられしは、こたび東叡山根本中堂に參詣せんと思ふものは、男女ともに、明五日いさゝかもはゞからず詣べしとなり、日記、大成令、　六日、臨時朝會あり、日光門主公辨法親王、中堂御創建を謝せられ、金馬代紗綾三十卷獻せられ、凌雲院大僧正義道は、一山總代とて、三束二卷獻じ拜謁す、〇中略鷹司右府はじめ、公卿東叡山參詣により、酒井靭負佐忠囿、松平中務少輔信通して、文殊樓屏風坂車坂を警衞し、諸有司まかる輩例のごとし、こたび中堂に、瑠璃殿といふ額かゝげられんとて、當今宸翰をそめられしが、けふ勅額參著すとて、これを見る貴賤男女、道路に群集し、さはぎ立ける程に、數寄屋橋の邊、南鍋町の商家より火おこり、お

ふし南風はげしく、たちまち四町ばかりひろがりて、大名小路にうつり、諸大名の邸宅、甍をつらねて燒たち、北をさして、殿上人の旅館もやけ、柳澤出羽守保明が邸に及びしかば、かしこの行殿並に傳奏旅館、上野淺草寺等を防げとて、大久保隱岐守忠増はじめ、あまたの藩に命せられ、人數ひきつれ防しかば、行殿はのこりしが、その他みな火うつり、横ざまに二三十町燒ゆき、戌の時ばかり東叡山に及び嚴有院殿靈廟、法親王本坊はじめ、僧院あまたやけしが、中堂のあたりは、やうやうふせぎとめて、千住にいたり、子の時ばかりに、暴雨ふり出て燒やみたり、殿上人は高倉元昌兩屋敷にうつるにより、大田原和泉守純清に守らしめらる〔日記、松蔭日記、年錄、〕廿二日、勅額御謝儀とて、主上へ御太刀、綿三百把、馬代銀五百枚、院へ御太刀、綿百把、馬代銀二百枚、女院雅后女御へ、綿百把、銀百枚づゝ、近衞關白基熙公に、御太刀、馬代銀五十枚つかはさる、

〔月堂見聞集　三〕東叡山本堂供養〔元祿十一寅九月三日〕

大導師　輪王寺宮一品公辨親王、　呪願師　竹内曼殊院宮二品良應親王　著座　鷹司左大臣兼熙公

勅額師〔中山大納言篤親卿、園中納言基勝卿、〕　奉行職事　日野右中辨輝光卿　樂行事〔葉川左少將基章、押小路右少辨隆寺、〕

出居次將　石山左少將基董朝臣　愛宕右中將通晴朝臣　交野左兵衞權佐時香朝臣　町尻左中將兼量朝臣　清岡中務大輔保元朝臣　高木右中將長時朝臣　竹内彈正大弼種永朝臣

入江極﨟藤原相尙　猪熊書次藏人卜部兼光

供養次第

左大臣兼熙公

御願文　東坊城前大納言菅原經長卿　呪願文　高辻前大納言菅原共長卿

地下役人　四十人餘　樂人　六十人餘

今上皇帝御宸翰　瑠璃殿　本堂　後水尾院御宸筆　寛永寺　唐門

上野公辨親王御筆　吉祥閣　文殊樓　同　御筆　東叡山　二王門

御堂　喜王院　淨女院　伴僧十人　御堂番　高橋大兵衛　服部平左衛門

已上

〔三王外記憲王〕初獻王用僧天海之言、建寛永寺於忍陵、以擬平安比叡山、故號曰東叡山、先建法華常行二堂、欲建根本中堂及文殊樓、而未果、獻王殂、莊王幼冲、且多病、未及繼先志而殂、憲王立、有志於奉先、元祿十年、遂詔有司修造寛永寺、命薩侯綱貴助工役、新建根本中堂及文殊樓、宏麗無比、越明年成、山城天皇遣使賀之、且內賜扁額、八月、皇使先來、九月甲戌落之、王與皇使臨焉、萬舞九奏如室町王道義落相國寺塔儀、明日、諸侯群卿大夫士、咸朝而賀之、丁丑、天皇所賜之額乃至、未到寛永寺、都下姫門外街上失火、時南風烈、火及寛永寺、莊王園寢、親王釋公辨房並罹災、中堂及文殊樓幸而免、是災也、火起於巳時、止於翌日雞鳴、凡延燒方二十里、時人謂之中堂之火、有識曰、昔室町王道義造相國寺於平安、建塔焉、既成而落以盛禮、上皇親臨、天皇遣使賀之、無何相國寺火、時人以爲天災、今中堂之火、豈亦其類邪、於是王詔有司、再造莊王園寢、命藝侯綱長助工役、

〔續史愚抄中御門〕寶永六年七月廿四日癸巳、被定造東叡山贈太政大臣綱吉佛殿立柱上棟等日時、上卿西園寺大納言致季、奉行藏人頭左中辨尙長朝臣、次被定同堂及廟塔供養遷座開眼供養等日時、上卿中宮大夫經晉、奉行藏人右中辨益光、堂廟塔供養十一月廿七日、影遷座十一月十六日、影開眼供養十一月廿六日、

〔有德院殿御實紀附錄十五〕東叡山慈眼堂修理のこと、門主より申し請れしに、さるべき闕室に、影像を安置すべしとの事のみにて、何とも仰下されざりしかば、さらに乞申つるべきにやと、とりどり相議しける頃、大猷院殿〇德川家光靈廟、火災にかゝりしに、これも再造せらるまじ、靈位をば、嚴

有院殿〔○德川家繼〕靈廟に配し祭らるべしとありければ、門主よりも、ふたゝび申しこはるべき便なし、しかゝに門主の本坊を破壞せしかば、修理をこはれしに、さらば今までの制度を減じ、狹く造らるべしとなり、門主、これを快からず思はれ、今は退職して、京にかへらむとて家司をまづ京につかはして、御父上皇の御旨をうかゞはれける、公〔○德川吉宗〕には、此時、小納戶、浦上彌五左衞門直方をもて、うちうちに門主に仰進らせられしは、當時、國用とぼしく、下民の飢渴をすくふにたらざれば、不次の儀令を下し、浮費を減せん事をむねとする時にあたり、寺社などを修治せむ事かなひがたし、さりながら寬永寺は、自餘の寺院になぞらふべきにあらねば、いかにも修理加へて進らすべしといへども、近年のならはしにて、神社佛宇ごとに華麗をかざり、奢侈をきはめ、無益のことに有益を害するつひえあるにより、かく世の難儀をも引出せり、この惡習をあらためむには、先門主の邸宅を質素になして、世上に示す事こそあらまほしけれ、さらば國々の寺社の規範ともなるべし、ねがはくは、こたび本坊の制度をもあらため玉へかしと、仰つかはされしに、門主も、其御誠心に感せられ、いかで盛慮にそむく事の侍るべきと許諾し玉ひ、重ねて、門主より、寺社の奉行に請れ、本坊の制度を、いかにも質素につくり玉はるべしとありしかば、ことごとく浮華の壯嚴を改られ、そのかみに比すれば、甚質素になりしとなり、これ元祿のころ、常憲院殿〔○德川綱吉〕しばしば臨駕ましましけるより、次第にたてそへられ、享保のはじめまでは、本城に少し事たらぬほどにありしとなむ、

〔上野戰爭碑記〕戊辰〔慶應四年即明治元〕正月、伏見之變、前大將軍德川公〔○慶喜〕歸江戶待罪上野、當是時、城中紛擾、議論沸騰、老成者曰、既得罪皇室、今又出兵拒戰、是重其罪也、不若恭順以待詔命、少年者皆曰、今日所謂詔命、非出於宸衷、乃二三藩臣所爲、豈爲主家諸事寃立後、苟不獲命、有死而已、悲憤激烈、言言動人、余亦贊之、與同志諸士、會于四谷圓應寺謀議、既而移于淺草本願寺、遂屯于上野東叡

山、將有所請、衆令余撰隊名、余曰彰明大義、在此一擧、欲爲彰義、皆曰善、於是四方來會者日多、一日、得十二隊、○中略立首領、申約束、分屯山中寺坊、當是時、西軍既在江戶城、傳命解散、使者三反、覺弗聽、前大將軍移于水戶、因更奉輪王寺法親王、○公現、還俗稱北白川宮能久親王、益欲達素志、西軍知其屈强不可服也、遂決攻擊之議、初寬永中、德川氏建根本中堂於上野、稱寬永寺、輪王寺宮世管之、金碧炎煥、窮極觀美、吉祥閣乾立其前、環以三十六坊、擬比叡山、因稱東叡山、地勢爽塏、西臨不忍池、東南接下谷、西北連根岸三河島諸村、而無埤堞可以守、乃急募市民、運木石、築壘植柵、市民爭來就役、置巨砲於山王臺、以備東南、山門凡八、南曰黑門、控廣小路、我隊率步兵、萬字二隊守焉、東曰新黑門、曰車坂門、曰屛風坂門、曰坂本門、此間一帶負丘面市、我隊與純忠、猶興、遊擊諸隊守焉、別派一隊、分陣啓運養玉二寺、西曰穴稻荷門、神木、浩氣二隊守焉、曰淸水門、曰谷中門、我隊與步兵、臥龍、旭、松石諸隊守焉、部署已定、乃命市民避去、五月十五日昧爽、西軍來襲、初我兵在山中者三千餘人、以事出於倉卒、在外者途梗不能入、又有怯恇遁逃者、其留拒者僅可千人、急傳令諸隊、各守其處、○中略新黑門始失守、諸門遂破、於是敵兵三面齊入、奔山放火、余初在南門拒戰、及敗與隊士百人、退至中堂前、殊死而戰、會火及堂宇、吉祥閣亦在黑煙猛火中、天地爲震、山河爲動、而敵兵充塞、不可復拒、乃走欲謁法親王、親王既遁、跡之到三河島、遂追及、王將衣草鞋、唯一僧從焉、余等伏謁、生死相從、侍僧曰、王將赴會津、卿等且去爲後圖、衆皆揮淚而散、後一二年、海內已定、諸獲罪者、被赦歸鄕里、余亦出萬死得一生、而執義死事者、今猶爲不祀之鬼、悲哉、頃日追錄其所親睹者、欲以慰其靈、且雪冤於天下後世耳、明治七年

甲戌五月、幕府遺臣阿部弘臧撰、

〔續史愚抄後光明〕慶安四年三月八日乙酉、頃日東叡山拜殿、三十六歌仙和歌、仰諸門跡被書、自本院、○後水尾賜關東云、宣順卿記、萬治四年記追、

〔東叡山緣起〕大佛、寬永八稔歲次辛未、堀丹後守直時、黏泥如石、以造丈六釋迦像、至正保地大震、而石

像顚倒碎破矣、後明暦萬治中、有木食浮雲、勸進十方檀那作、今銅佛也、

〔東叡山志料 坤〕黑門時鐘　寛文六年丙午、柏木源兵衛法名好石建ル所ナリ、(爲諸法會井武家出仕刻限、井上河内守、加々爪甲斐守願而建之、)元祿年中マデ、五度鑄替ル鐘ノ由緒柏木大助、願書、年預文庫ニ在リ、(東叡山記)

〔江戸名所圖會 十四〕東叡山寛永寺〇中略

武州東叡山勸學講院了翁　僧都道行碑記

自古法中大沙門、播名布德於天下者、豈苟然哉、莫不皆是菩薩乘夙願輪而生於世、故示行菩薩六度萬行、以利天下、使天下人咸躋於無上無等、至眞至誠之域、此之妙行實未易以言論也、若今東都勸學講院了翁僧都者、豈其人歟、自其脱白爲沙門、便發大乘心、行菩薩行、精持戒律、不失威儀、到處參方、嘗親近黃檗開山隱老人、及吾唐諸知識、飡風宿露、不以己憂、唯憂佛法不大興於世、而世之僧俗而不能盡諳佛祖之大法、乃乞武陵東叡山、剙勸學講院正中、築經藏以貯三藏聖敎、其外裏以銅葉、以防火患、内奉三聖像、乃明僧知定公得自雙徑、蓋古銅像也、藏後之左右立其戒師祝髮師及二親養父自得居士之塔塚、其孝忱如此、藏前之西偏有僧都石像、乃本院僧衆九百八十人、並都料董成其功績浩大、以示不朽云、東西有文庫、藏儒老二敎、及本邦書籍、又別設一講堂中奉釋迦如來像、日講三敎之書、俾國人總者知三聖設敎雖少異、而利人善世則一矣、其前有方丈、院之四周百寮舍、凡二百間、以栖諸方學子、其餘庖湢之屬悉備焉、僧都年老、慮後堂宇朽壞、預備白金一千二百兩、爲遐年脩葺之需、是則院既不壞、而衆可安身學道、無風雨之逼、無饑凍之憂、身安學成、則足以爲世福田也、於乎今之爲僧也則由我已、脱塵出俗、圓頂方袍、作三界大師之子、一鉢一茗、飄然自在、天子莫得而臣、王侯莫得而友、高則高矣、是則未是、豈不聞佛事門中不捨一法乎、若捨一法、則不成濡足菩提、若僧都者、可謂知本矣、以敬王公大人與夫四衆、莫不知其名重其德、嘗於二三十載間、以苦行所積淨貲、盡贖大藏之經、散施諸名山大刹、凡二十一藏矣、年來又爲虎關國師重建濟北院、今年春因

予奉旨住黄檗、又願遲年施貲、爲脩飾伽藍、以及合山子院、但有所益之事、靡不勤行之、然奉已至篤、每坐臥一小樓、未嘗嫌棄、食則麥黍粟飯、行則竹策藁鞋、以致老病交侵、予常勤其少加受用、以保道躬、僧都終不諾、予嘆曰、垂老而頭陀不息、非佛世之迦葉波乎、予與僧都法契已久、然未及至其講院、今春因詣東都謝恩、遂到院相訪、觀其措意之妙、立法之嚴、世所罕有、僧都需爲記、因述其大心大行、以勸後賢云、

時元祿壬申五年四月穀旦

黄檗山萬福禪寺第五代住持高泉敦敬撰

勸學坊了翁僧都　其俗姓は鈴木氏、羽州尾勝郡八幡村の產なり、寛永七年庚午三月十八日に生る、宿業にやありけん二歲にして悉く親族をうしなひ、おなじく十八年辛巳（二十歳）同國龍泉禪寺に入て奴僕となり、つゐに齋藤自得居士のすゝめによりて薙染し僧となりぬ、こゝにおいて、因緣の不可思議なる事を發明せり、おなじく廿年（四十歳）みづから思惟すらく、それ一切藏經は、如來の肝膽にして、人天の眼目なり、我心肝を碎、誓て一代藏經を建立せんといつて、正保元年甲申（十五歳）筑守八幡宮に詣し、至心に志願の成就を祈りたてまつり、夫より諸國を經歷し、あまねく高德の師に謁して、こゝかしこに掛錫す、承應四年肥前州與福禪剎の開山如定禪師の示現によりて、錦袋圓の靈方を製し、市店をひらきてこれを鬻ぎ、六年を經て、其價の餘計黄金三千兩を得たり、こゝにおいて、寛文十年庚戌（四十一歳）忍ばずの池の中島にして地を賜ひ、あらたに一島を築き、一字を建はじめて藏經全部安置する事を得たり、よつて其頃報恩のため、錦袋圓を四十二萬人に施す天和二年（五十三歳）又東叡山の中にして、四方五十餘間の地を賜ひ、勸學寮を建立す、院宇三葉、四方二百戶の寮舍を設く、又二字の文庫を建、儒老二教をよび倭漢の群籍を收藏する事、すべて三萬餘卷なりすなはち忍ばずの中島より、藏經をうつして、經藏を建て、これを收む、こゝにいたりて、志願圓滿す、日光御門主、其功の大なるを御感ありて、學頭凌雲院をして、般若心經を講說開白せ

寺領

しめたまふ、又貞享二年、高野山光臺院に一藏庫を置、仁和御門主御感賞ありて、勸學坊權大僧都法印に任せらる、以上了翁傳の要をつむでこゝに擧

〔御府内備考二十四下谷〕池之端仲町〇中略　勸學屋大助

右大助方錦袋圓藥店之儀は、山城國宇治黃檗山天眞院了翁、諸山江一切藏經奉納志願有之、寛文五年相開、其以餘情、志願相立、一切經ヲ相求メ、寛文十年不忍池辨天之北之方ニ島ヲ築、經藏相立奉納仕、又貞享元年、東叡山今之學寮ヲ建立いたし、右辨天江奉納之一切經ヲ移シ替、元祖了翁、台、密、禪、三宗之靈場七ケ所宛江、二十一全藏經ヲ奉納仕候、右ニ付、貞享二年、從日光御門主樣、了翁江、勸覺講院權大僧都法印之號ヲ賜リ、又勸學寮と申名被下置、勸學屋と相名付、開基了翁代より所所寺院江唯今迄ニ金四百兩餘奉納仕候、寶永五年本多彈正少弼樣寺社御奉行之節、無故障藥店永續仕候樣被仰渡候、猶又町內江茂、館略不仕候樣被仰渡候、依而當藥店、天眞院召仕地主代大助と申名目ニ而、町內人別ニ相加り申候、尤天眞院代として、役僧一人相詰罷在候、

〔東叡山志料乾〕寺領六千石村高

武州豐島郡　二百廿石壹斗六升坂本村、　五百十四石壹斗二升五合、金杉村、　二百八十壹石二斗七升壹合、新堀村、　七十六石二升、赤羽根村、　千百八十七石二斗八升三合、十條村、　二百四石四斗六升五合、堀內村、　九百八十八石五斗八升二合、鹿沼村、　六百九十八石八斗六升三合、沼田村、　二百五十二石四斗五升二合、高野村、　二百九十二石九斗三升七合、下尾久村、　百七石六升三合、町屋村

東照宮　千三百三十五石　大猷院殿〇德川家光　千三百七十石　寶樹院殿〇德川家綱生母　八百石

本坊　千石　准后　五百石、　山中配分　九百九十五石加賀美氏江戸砂子書入

御宮御靈屋御領總高

寺制

東照宮御神領千三百三十五石　大猷院殿御領千三百七十石　嚴有院殿〇徳川家綱御領同　常憲院殿〇徳川綱吉御領同　有徳院殿〇徳川吉宗御領七百石　寶樹院殿御領八百石　淨光院殿〇徳川綱吉妻鷹司信子御領七百石　長昌院殿〇徳川家宣實母御領五百石　高巖院殿〇徳川家綱室伏見宮貞子女王御領五百五拾俵御藏米　淨圓院殿〇徳川吉宗生母御領五百石　證明院殿〇徳川家重室伏見宮増子女王御領三百五拾俵　至心院殿〇徳川家治生母御領三百俵　深徳院殿〇徳川家重生母御領百五〇俗書云五下恐脱十字俵　御本坊入二千五百石內中堂領三百石、綱重公御寄附、淨名院領二百石、寶樹院殿御寄附、　山王領五石　慈眼堂領五拾石　衆徒領五百石　執當領四十石　右何れも田村權右衛門預り、　御目代田村權右衛門　百石　東照宮社家兩人金子大學、渡邊伊織、　百石ツヽ、御神領之內、　此外、御宮表別當御掃除頭、則町屋敷をば、御宮御靈屋御領等の內壹人三十石ツヽ、此外中間等あり、

〔御當家令條六〕東叡山領目錄

一五百四十一石二斗　武藏國豐島郡之內田畑村之內
一三百四石六斗七升餘　同　新堀村
一五百三十石六斗　同　金杉村
一百五十三石八斗餘　同　坂本村
一百七十八石五斗　同　中里村
一三百二十石三斗五升餘　同　稻付村
一七十石五斗四升餘　同　赤羽根村

右合二千百石、所有御寄附也、依而如件、

正保三年十二月十七日　阿部對馬守重次〇以下五人署名略

〔吹塵錄社寺三十二〕常憲院樣(徳川綱吉)東叡山下知狀

東叡山下知條々

一於當山御神領御佛供領中、當領幷坊舍領等、都合八千百七十石被寄進之訖、然上は、年中行事配當目錄之旨、堅守之、勤役不可懈怠事、

一中堂被建置之上は、御門跡出仕無御懈怠、且又御門主被定之通、山中之坊舍三十四院、代々每日出仕可勤行、執事幷供僧、別而火之元念ヲ入、致所之儀、淸淨可相守、常燈無斷絕樣可仕候、萬事比叡山准之、御門跡より被申渡儀、一山下々迄、堅可相守事、

一被相定坊中不可兼帶事

一爲私不可建立新坊舍事

一爲下而掠公儀之名、寺社堂塔建立修補之勸進、可爲停止事、

一背國法輩、不可抱置之、於有其屆者無異儀早速可退之、縱親類知音之好雖有之、不可難澁事、

一於寺中諸浪人幷不審成者、不可置之、但無據浪人者、其趣御門跡へ申屆、其上寺社奉行江達可任差圖事、

一衣食幷屋作不致華美、不可過其分限事、

一群飮亂舞、停止之事、

附　無益之器物等、不可集蓄事、

一寺中表向出入道路之外、諸坊舍脇道裏道不可開之事、

一坊中女人寄宿堅可停止事、

一於山中境內、堅殺生禁斷之事、

附　魚鳥可爲不入事、

右條々、今度定之訖、堅可被相守之、永不可違失、若於有違背之族、速可被處嚴科之旨、依仰執達如件、

子院

元祿十三年二月十四日　小笠原佐渡守長重書判

土屋相模守政直書判

阿部豐後守政武書判

〔東叡山志料 坤〕古人物語云、當山は三十六坊ありといへども、常時不定なり、年功は、學司を以て、夫夫院司に任ず、大僧正壹人、權僧正壹人、執當二人なり、信解院、護法院、功德院、明王院、楞伽院、靜盧院なり、たとへば、寒松院は住心院の室を預り、眞性院は顯王院の室を預る、院主一代は院室を以て呼ぶ、遷化しては、舊の院號を用うるなり、御裏方御別當は、院室に至りがたし、寒松院は藤堂家先祖の法號なり、本覺院は有馬左兵衞佐先祖の法號なり、津梁院は津輕家先祖の法號なり、凌雲院は堀家の先祖法號なり、皆在所に同院ありと語りき、江戸圖解集覽

〔東叡山圓頓院寬永寺圖〕坊舍三十六宇、兩執當幷院家は折々替る、仍て寺附の院號を記し、執當幷院家は其傍に記し畢ぬ、

〔落穗集追加 六〕東叡山寬永寺之事

一問云、東叡山寬永寺御建立と申すは、何頃のいづれの御代と被聞及候哉、答云、我等の承及候は、元和九年、家光將軍樣御代、御建立の思召立に有之候得共、翌年寬永元年より、御普請被始候、開山は、日光山の御別當天海大僧正、總奉行は、土井大炊頭の由、關東御入國之節、江戸府內には、天台宗門の寺院とては、外に無之、淺草寺の儀は、古跡の儀たるを以、御祈願所に被仰付候得共、今度新に御祈禱所にと有之、寬永寺御建立之上は、向後御城內平日之御祈禱共に、東叡山に於て執行可被仰付との儀に御座候と也、さるに依て、上野一山坊數之儀も、淺草寺に准じ三十六坊に可被遊と有之處に、淺草寺の儀は、其節迄無緣地とは乍申、千年に餘りたる古跡たるを以、山伏同然の妻帶坊主交りに、三十六坊立來り申候、東叡山は、新地之事に候得ば、いかに公儀よりの御建立と有之

候ても、三十六坊の寺院ども、旦那無しにて、相立可ㇾ申樣は無ㇾ之に付、其節の總奉行土井大炊頭殿御申候は、東叡山の儀は、天下安全之御祈禱之爲と有ㇾ之思召を以、公儀より、今度御建立之儀にも有ㇾ之候得ば、御當家御恩澤を蒙り被ㇾ申たる國主郡主方に於ては、誰にても、天下御安全の御祈禱に、御疎意可ㇾ被ㇾ申樣は無ㇾ之旨、御申候也と有ㇾ之儀、世上にても聞及び、是は大炊殿御申之通り尤に候、慶長五年庚子の年より以來、御連枝の御家門方を始め、御譜代大名衆の儀は不ㇾ及ㇾ申、其外國郡の主たる外樣大名衆とても、東照宮の御餘光を以、御當家御代々之御恩澤を蒙り、家門繁榮之儀なれば、全天下御安全之御祈禱に於ては各致し上られ候の義也、と有ㇾ之就ㇾ中御三家方松平伊豫守殿儀は、格別と有ㇾ之、上野の寺內に於て、最初に院地之割渡など有ㇾ之、早速寺も建、權現樣の御影をも御安置せられ、天下御安全の御祈禱、并家運長久之祈願をも御修行有ㇾ之候儀尤なりとて、夫より事起り、外々の國主方にも、一院づゝ建立にて、寺領等をも寄附せられ候と也、其後台德院樣御他界、增上寺ェ被ㇾ爲ㇾ入候に付、諸大名方は供奉豫參之時之爲とて、各增上寺に於ても、宿坊と申儀は初り申候、其以後迄も、東叡山中之院々をば、祈願所とばかりとなへ候處に、慶安年中、大猷院樣、御他界遊され、御尊骸の儀は、日光ェ被ㇾ爲ㇾ入候得共、御當地東叡山にも、御佛殿御建立被ㇾ仰付、諸大名衆參拜も有ㇾ之、御成等之節、供奉豫參之儀も始り候に付、幸右之祈禱所を裝束の着替所と致候より事起りて、今程は其院主を始、願主方の家々に於ても、宿坊と計となへ申候、天下御安全の御祈禱所と有ㇾ之沙汰は、脇へ成申候也、

上野學頭凌雲院大僧正沆昇述

〔寺鑑上天台宗〕東叡山寛永寺

御朱印壹萬千七百九拾石之內　學頭料高三百石

紅葉山　御宮料高二百石　兼越後國安禪寺

右二ケ院〇修學院凌雲院住職、從二御門主一被二仰立一、於二御白書院御緣頰一、御老中御列座被二仰渡一之、〇中略

右執當職并院室之儀、御伺之上、從御門主被仰渡之、○中略

東叡山　執當　圓覺院兼目黒瀧泉寺

右同斷　龍王院兼同斷

御宮料千三百三拾五石之內　高百五拾石　御別當領

東叡山　御宮御別當　寒松院

御靈屋料千三百七拾石之內　高百五拾石　御別當領

大猷院樣御別當　東漸院

御靈屋料千三百七拾石之內　高百五拾石　御別當領

嚴有院樣御別當　津梁院

御靈屋料千三百七拾五石之內　高百五拾石　御別當領

常憲院樣御別當　大慈院

御靈屋料八百石之內　高百石　御別當領

寳樹院樣御別當　勸善院

高巖院樣御料五百石之內　高五拾石　御別當領

證明院樣御料三百五拾俵之內　高三拾石　御別當領

高巖院樣
證明院樣　御別當　春性院

御靈屋料七百石之內　高百石　御別當領

淨光院樣御別當　觀成院

御靈屋料五百五拾石之內　高六拾石　御別當領

長昌院樣御別當　林光院

御靈屋料五百五拾石之內　高六拾石　御別當領　　淨圓院様御別當　福聚院

右九ヶ院〔○寒松院以下〕御別當職御伺之上、從御門主被仰渡之、〔○中略〕

御朱印高六百拾貳石之內　高百七拾二石四斗餘　御別當領　　〔三州瀧山寺 東叡山〕御宮御別當兼帯　青龍院

右御別當職、御伺之上、從御門主被仰渡、〔○中略〕　　東叡山　護國院〔○中略〕

御朱印高貳百石　　東叡山　養壽院

右十二ヶ之寺院〔○護國院以下〕住職、從御門主被仰渡之、〔○下略〕

〔東叡山志料　坤〕律院

淨明院〔闡書曰、開基淨圓院主洋、增山彈正弟なり、始日蓮宗也、〕

東叡山記曰、淨名院、享保八卯年、律院被仰付、

〔東叡山志料　坤〕御靈屋

大猷院殿〔家光公、御年四十八、〕慶安四年辛卯四月廿日薨去、同五年靈殿成ル、附官田千三百石、充供料、　勅額後水尾院宸翰也、享保五庚子三月廿七日燒失、同年八月、嚴有院殿御相殿ト成ル、

嚴有院殿〔家綱公、御年四十、〕延寶八年庚申五月八日薨去、元光院津梁院圓珠院三寺地本院東北、　地モ切ヲ、靈殿ノ地トナル、同九年、靈殿落慶、附官田千三百石、充供料、　勅額　靈元院宸翰、貞享二年乙丑二月、石寶塔ヲ唐金ニ改、元祿十一戊寅年九月六日靈殿燒失、御廟殘ル、尊體御位牌別當所へ移シ奉ル、元祿十二己卯年三月靈殿成ル、御寶塔本尊如意輪觀音、

名稱 所在 創建 沿革

寶樹院殿、(綱吉君ノ御母、於樂殿ト號ス、護國院ヘ被爲入候、譯不知、)承應元年壬辰十二月二日卒ス、寶樹院華城天榮大姉ト號ス、翌年假殿建リ、寛文三癸卯年靈殿造替、翌年十月成、御寶塔本尊釋迦如來、附八百石、充供料、

常憲院殿(綱吉公、御年六十四、)寶永六己丑年正月十日薨去、同年靈殿成ル、附官田千三百石、充供料、御寶塔本尊正觀音、勅額 東山院宸筆

高巖院殿、(綱吉君御臺所、號安宮、)延寶四丙辰八月、東叡山記、

天王寺

天王寺ハ、舊ト感應寺ト云フ、東京谷中ニ在リ、日蓮宗ノ徒、關某ノ開基ニシテ、日長ヲ中興ノ祖トス、元祿十二年、寛永寺ノ末寺ト爲リ、天保中、寺號ヲ今ノ名ニ改ム、

〔府内寺院鑑集 天〕谷中天台集

天台宗 (天保四年十二月改天王寺、移感應寺於鼠山、同十三年廢、) 谷中 長耀山 感應寺

〔谷中感應寺書上〕武州豐島郡谷中長耀山感應寺ハ、日蓮上人之在世ニ草創之寺庵也、昔、谷中村ニ、關氏某云地下之武士有リ、日蓮宗旨建立以後、相陽鎌倉ヨリ、本邦房州、或ハ鹽原湯治之往還ニ、屢關氏之家ニ寄留し給ひ、其時、關氏、日蓮之非凡を見而、信仰致事宛生身之如來如敬、平日所思掛る聖僧を、不淨之俗家ニ奉信宿事、雖暫時可恐云云、果而屋敷之内ニ、別ニ草庵一字を結置而、日蓮を待事日久し、爾後祖師入來時ニハ、檀家之深信を感じ、逗留し給ふ事、五日、七日、乃至三十日、村民聞法談悉ク歸伏し、祖師之檀家と成り、老若男女數百人、無晝夜草庵ニ參詣し、異口同音ニ首題を唱ふ、或時、祖師檀家ニ告而云ク、從今後寢化入山んと欲す、此地ニ來る事希有成べし、多年之芳心不可忘之云云、時ニ、關氏夫婦落涙千行して、師ニ云ク、戀慕雖限なしと、無由欲止、爾は御形見之ため、

堂塔

御手作之御影を、此草庵ニ殘し可置、心服の諸人不斷生身の想可生といへり、檀家之懇望無是非答歟、則自影一軀を刻ミ、庵室ニ殘置給ふ、今本堂安置し尊像是也、則願命衆云ク、生身想生し首題を可唱、此處大伽藍佛法流布之靈地と成るべしと云云、關氏今之關一流是也、其後は、祖師無御入來、身延山ニ隱居、池上ニ遷化し給ふ、然則當山は、元日蓮草創之靈地、自影安置之道場也、祖師入寂之以後、關氏を始め、信仰之諸檀那、地を寄せ寺を建而、諸尊を造立し、住持を居置き、晨昏之勤行無怠、

〔江戸名所圖會十四〕長耀山感應寺　上野谷中門の外にあり、天台宗にして、本尊は傳敎大師の作の毘沙門天を安置す、當寺始は日蓮宗にして、宗祖上人を開山とし、日長上人中興ありて、由々鋪一宗の寺院たりしが元祿年中、故ありて台宗に改められ、爾しより後、東叡山に屬す、

〔御府内備考二十八谷中〕感應寺表門前新茶屋町

一右町名之起、元感應寺境内ニ有之候處、同寺住職佛頂院、元祿十五午年、新門前町屋、寺社御奉行本多彈正少弼様江御願申上候砌、表門前は茶屋町ニ御願申上、同十六未年願濟ニ相成候節、下谷廣小路御木具屋勝井吉左衛門と申者、日蓮宗感應寺檀那ニ付、佛頂院、同人江相談被致候者、天台宗ニ被仰付候以後は、檀方不殘離檀ニ相成、寺相續難成ニ付、此度、門内三拾間切込表門前は茶屋町ニ願濟ニ相成候間、京都も有之いろは茶屋より名付、茶屋町ニ取立可申旨被申付、則同人名主役相勤、表門前新茶屋町と唱、いのじや庄兵衛と申者、初而貢賈料理茶屋渡世仕來申候、但右吉左衛門、庄兵衛義は、享保年中死去仕、名跡退轉仕候、〇中略　以上丙戌〇明和三年書上

〔東叡山子院歷代諸僧記二編上〕眞如院〇中略第九世、大僧都靈如、享保四年己亥十二月、自修禪院轉位當院、〇中略十四年己酉三月、轉住谷中感應寺、賜莊嚴院室、任大僧都、延享五年戊辰三月火災、燒亡正殿及寺院、但餘五層塔耳、不幾再建、正殿寺

字復舊觀、

〔江戸名所圖會十四〕長耀山感應寺〇中略 五層塔 始當寺中興日長上人、建立ありしが、明和九年の火災に、焦土となれり、仍て寛政の今、再建して、むかしに復せり、

〔江戸砂子三上野〕東叡山寛永寺圓頓院〇中略 日長原 中堂西手のまつ原をいふ

谷中感應寺の中興日長上人、五重の塔を建立す、銅をもつて瓦にせん事をねがふに、格式あつて免許なし、日長上人此事を、宮樣へ歎申て云、塔の修復はむつかしきものにして、土瓦にては後世修覆のわづらひあり、よつて銅瓦にせん事を期して、宗祖日蓮への散錢の內、古錢の分數千貫のけおき、がはらの價あり、ねがはくは此儀をゆるさしめたまへと願ふ、そのこゝろざしをかんじさせられ、御ことばそひしかば、御免ありけり、日長、此御厚恩を報せんに、金銀器財は恐れなりと、そのころ當山開闢ほど近ければ、茂りうすし、よつて境內の樹木、手づから堀、手づから植て、恩を謝ス、今はふかき木立となれり、

〔谷中感應寺書上〕當院富興行由緒

一谷中感應寺者、元祿十二年、常憲院樣〇德川綱吉御代、天台宗ニ御改メ被仰出、東叡山之枝院ニ被仰付候、其節、大明院宮被爲在、御深惠候者、東叡山者、元自都之比叡山ニ被擬候、比叡山乾之方ニ鞍馬山有之候而、毘沙門天安置之靈場也、禁庭を奉始、總而世世之公家、靈福祈願之地也、東叡山之西北之方ニ、感應寺相當候得者、毘沙門天致安置、公儀之御武運、武家之洪福、天下安全之祈禱爲致可然思召、比叡山横川ニ、傳教大師直作之尊像有之候を、御迎被成候而、則感應寺之本尊ニ被爲成候、毘沙門堂建立之上、東叡山僧衆、供養之法筵ニ相列リ、大明院宮ニ茂御參詣被成候段、舊記ニ相見候、然ル處、改宗之寺院故、無檀家、其上三拾八石餘之御朱印之外、寺領一向無御座候故、至而之貧寺ニ御座候、寺中十三ケ寺義、同樣之無檀家之儀故、相續可仕手段無御座、依之本堂并ニ寺院修復等ニ

難儀仕候ニ付、富突之義奉願上候處、正五九月、年年三度宛之富突興行御免被成下候由に候へども、年久敷儀ニ御座候而、相始候年月書無御座、相知れ不申候、

一享保十三申年、富突停止被仰出、御府内新規富有之寺院、遠慮逼塞等被仰付候處、感應寺之儀者、數年富突來り候由緒有之候ニ付、只今迄之通、富突御免被成下候段、申ノ正月廿七日、寺社御奉行太田備中守御列座ニ而、執番江被仰渡、則東叡山本坊江被召出、信解院惠忍院被申渡之候由申傳、其後願上候而、年年六度之富突興行致來り、延享五辰年五月十八日、毎月富突奉願候處、願之通御免被仰付候由、延享四卯年、同五辰年、兩度出火之節類燒仕、本堂庫裏者不及申、門前町屋不殘燒失仕候ニ付、不得止事、只今迄富突年限年延ニ相願候而、修復仕、本堂之經卷、佛具類、其外、客殿向諸道具等不殘取揃候由ニ御座候、然ル處、安永元辰年之大火之節、五重之塔燒失、尤是者、日蓮宗時代より名代之塔ニ而、都鄙共ニ能存罷在候間、再建不仕候而者、不本意與奉存候間、再建ニ取掛候處、漸出來仕候、然ル處富突之儀御差留被仰出、猶又有德院樣〇吉宗御代格別ニ富興行御免被仰付候由申傳候、且又去ル亥年以前、壹ヶ年ニ三度之富御免之段、一旦被仰渡候處、其後一向御差留被仰付候ニ付、又候何分御憐愍を以、當院之儀者格別之儀ニ御座候間、只今迄之通、十ヶ年之間、毎月富突御免被仰付候樣奉願候、以上、

寛政七卯年十一月　感應寺住職　光明院

寺社御奉行所

〇按ズルニ、天保九年發行ノ東都歲時記、當寺富ノ條ニ、天王寺トアリ、倘ホ法律部下編博弈篇ヲ參看スベシ、

名稱
所在
創建

淺草寺

淺草寺ハ、東京淺草ニ在リ、往時此地ノ未ダ開ケザリシ比、漁夫某、海中ヨリ觀音ノ靈像ヲ得テ安置ス、之ヲ當寺ノ草創ト爲ス、其後幾多ノ星霜ヲ經テ、北條氏綱ノ再興ニ由リテ、始テ一大伽藍トナレリ、德川幕府ノ初、又堂宇ノ再建ヲ助ケ、寺領ヲ付シ、尋デ東照宮ヲ境內ニ祀リ、後又寬永寺ノ末寺ト爲ス、

淺草　淺草寺

〔寺鑑上天台宗〕金龍山傳法院

〔鎌倉管領九代記七〕淺草觀音堂草創

大永二年の秋九月、北條左京大夫氏綱の所より富永三郎左衞門尉を使者として、古河の公方左馬頭高基へ、重陽の祝儀を申入らる、富永路次の便に、武州淺草の觀音堂に參詣す、其日、こと更御緣日とて、諸人羣集せり、此頭辨才天堂の邊より、錢の湧出るとて、老若男女あつまり、其錢を拾ひとる、寺僧等制すれども用ひず、富永下向して此事を言上す、氏綱をはじめまいらせ、奇異の思ひをいたす所に、蓮乘院の長老參られたり、氏綱此事を語られしに、長老申されけるは、淺草寺と申すは、人王卅四代、推古天皇の御宇に草創あり、本尊は聖觀音、關東最初の伽藍、靈驗無雙の勝境也、古昔武州豐島郡宮戶川は、今の淺草河の本名也、漁舟の泊り殺生の所として、浦々つゞき、巨口細鱗しなぐ〳〵雜はる、土師氏の支胤、漁家に落て、此川邊に棲けり、檜熊、濱成、竹成とて兄弟三人あみを携へ、七浦を遶りけるに、生身の觀音薩埵、あみに罹りて、水中よりあがらせ給ふ、家擧て大に驚き、小宮を立て安置す、家富さかえて、漁をとゞめ、新に觀音堂を立、子孫すでに、三所の護法を勸請す、それより此かた、頭をかくる輩は、二世の悉地を滿足し、步をはこぶ族は、三等の業障を消滅し給ふ、冥感は新月のまなこに滿るよりもすみやかに、玄應は疾風の身に觸るよりも掲焉るし、又辨財天と申すは、本地法身の大士、深位の應化なり、八臂具足の尊容は、八大觀世音の總體、八正道

分の現形たり、三光天子とあらはれては、威光を萬邦にかゝやかし、八大龍王と成ては、恩波を四海にそゝぎ給ふ、福德才智の妙理をほどこし、武勇敬愛の加護を布て、利生あまねくおはします、しかるに今の世は、國家亂逆の最中にて、人民窮困の時節なれば、大慈大悲の御ちかひ、福聚海無量にして、富祐の澤をもつて、利益を顯はす所成べし、既に大辨才天は、觀音の變作、三十二將の隨一なれば、當家擁護の本尊也、ことに更に御信仰有べしとぞ申されける、これによつて、城北の堤の內へ榎島の辨才天を勸請し、當城の鎭守とあがめ、武運の長久をぞ祈られける、今辨才天の宮これ也、

〔淺草志 二〕金龍山淺草寺傳法院 寺領五百石　天台上野末

本尊

本尊正觀世音　海中出現尊像　坂東順禮十三番札所也〇中略

本尊海中出現より、安永六丁酉年迄、凡千百五十年に及べり、故に開帳ありしなり、

堂塔

〔淺草志 二〕金龍山淺草寺傳法院〇中略

風雷神門　南總門 明和四丁亥年四月九日回祿、或五子年とも、　額　金龍山 三國筆海雲筆　寛政七卯年再建　名豐抄に、前天台座主良尙親王御筆と云、　本坊　傳法院　大榎　往古より門前に有、當山第一の古木ならんと云、　山門　文殊樓 每年正七月十六日、彼岸初中後、樓に登る事をゆるす、　額　淺草寺　筆者不知　名豐抄に、前天台座主良尙親王御筆、　本堂　南向　四方高欄　三。手先。作り。　額　觀音堂　大明福州澤郡龍邑除紹勳立と有　天井龍、狩野永眞安信畫、　施無畏の額、深見玄岱書、　本堂後廿八部衆像は、狩野內膳重信筆、　金燈籠　本堂前左右、今は山門の外に有、作州津山森伯耆守寄進、　狩野の繪馬　本堂に在、古法眼筆也と云傳ふ、〇中略　五重塔　山門東、　卍塔輪藏は、平公雅建立と云、　輪藏　同所、　經藏也、傅大士の像あり、此經藏、天和中、商人の荷物入置所より出火して燒亡、其後再興あり、〇中略

東照宮　靈社　御建立也、寛永十九年二月十九日、門前町より失火、南風強く、本堂の外、今の淡島祠の後の方に御宮有、此時燒失、夫より御宮は、紅葉山に遷座有、今の本堂は、慶安三年庚寅三月三日、稻葉美濃守殿御用懸被仰付、爲奉行、今日手斧初せしと、前撰集に見へたり、江戸志に記す、寛政元修復有之、

貞雄〇瀬名云、淺草觀音堂は、寛永十九年壬午二月十九日燒失す、御宮殿も御類燒也、其節、御宮護摩堂燒殘りしを、其儘觀音堂後戌亥の角へ引て、不動を安置して今にあり、此故に、皆葵御紋柱、其外にも附たり、御宮舊地は、今の淡島社の後ろにて、垣結ひ廻して人に踏さす、〇中略

三社權現　本堂東の方　土師中知、濱成、武成、三人を祭て、護法神とす、　祭禮三月十八日、隔年也、俗是を觀音祭りといふ、　專堂坊　齊頭坊　常音坊三人は、此末葉にして、祭禮之節、神轝を守護す、　或は、一説に檜熊、濱成、武成、三人の兄弟を祭ると云、　三社大權現石華表の額　准三后公遵親王御筆也、　社のかたはら、碑銘法眼伊蒿誌、　飯山齋藤氏建立〇中略　右祭禮之節、三坊、神輿を守護すと緣起に出す、その專堂坊は、檜熊の末葉と云、　東仲町雷神門廣小路齊頭坊は、濱成末葉也、　但住宅は竹門邊也、常音坊は武成末葉也、　此二坊、竹門傍ら東側、此三坊むかしより妻帶にて、常精進也、節分暮に及び、觀音堂大豆蒔は、堂の內大柱中段に棚をつりその上に登りて、火防の札をまく事也、又專堂坊より、觀音緣起を出す、銅印なり齊頭坊よりは、牛王の印、毎年正月六日、本堂に於て出す、常音坊より、牛王はさみ柳をいだす、

〔御府內備考十六淺草〕田原町壹丁目、貳丁目、參丁目、〇中略

一習合神道神事舞太夫家道之儀ハ、往古より相定、頼朝公御治世、始而支配頭相立、乍恐御當家ニ至而ハ、御入國之砌、參州より御供仕、習合神道神事舞太夫頭被仰付、京都神家之不請差圖、御公儀御威光を以、一派御極メ被下置、支配下之神主、宮持、幷社役之者ニハ、頼朝公、幷北條家之御

墨附被所持候もの、又ハ御府內御免勸化被仰付候者有之候、且支配下江、風折烏帽子裝束之許狀差圖申候、尤右免許之儀ハ、私代替家督被仰付候後、奉行所於御內寄合ニ、先格之通被仰渡候、且呼名等も差免し候事、〇中略

一御當地淺草三社大權現、私代代神主役相勤、每年正月五日流鏑馬神事奉幣、國堅鈿女神子猿田神樂以上三座社役人之もの共相勤申候、三月十七日、隔年御祭禮、供奉裝束立烏帽子、紗狩衣著仕候、其外社役人之者共、烏帽子狩衣ニ而神輿供奉仕候、同六月十五日神事鈿女神樂、翁三社神樂、支配之社役人、烏帽子裝束ニ而、古來より相勤申候、

〔淺草志二〕金龍山淺草寺傳法院寺領五百石上野末〇中略　天台

人皇六十一代朱雀帝天慶五年、安房守平公雅、武州宮戶川の邊、米子林の下に至、淺草寺詣、當國大守たらん事を祈、後武藏守と成て下向し、觀音堂を再建す、其外堂宇を建立し、輪藏を造、五層塔を建新たに梟鐘を鑄て、田園を寄附す、爰に於て、諸堂ことく〳〵そなはれり、人皇六十九代後朱雀帝長久二巳年十二月廿八日、大地震動て、佛閣悉倒る、永承六年、寂圓阿闍梨堂を建、七十二代白河帝承曆三未年十二月四日、神火にて佛堂悉燒亡、時に觀音榎木に飛うつると、〇中略百六代後奈良帝天文四未年八月十八日、炎燒、相州小田原城主北條氏綱、悉再建、大音上人を以て別當とす、大伽藍と成、先師忠海上人は伊丹三河守子也、三河守宿願の事有て、末子を沙門にして、當寺別當とす、夫より伊丹遠山兩家を以相續す、其頃北條江戶在城百九代後水尾帝、元和の頃、堂宇破壞によつて御再興あり、棟札に、大道寺駿河守と有とぞ、是北條家の臣、川越主也、同御宇寬永十九壬午年二月十九日、諸堂悉回祿、其後大伽藍御建立有て今に至る、誠に無雙の靈場也、今の堂は慶安三庚寅六月二日、稻葉美濃守御用掛り被仰付、爲奉行、今日手斧始せしと、知撰集にみゆとぞ、寬政元酉本堂修復あり、同三亥春開帳有、

〔明良洪範 一〕武州江戸淺草寺ハ、昔左馬守義朝、當國鎭護タリシ時、鎌田政淸奉行シテ再興有シトカヤ、其後、御當家御草創ノ折、神君亦御再興遊バサレシ堂ハ、寛永年中ニ燒失シテ、後三年ノ間ニ成就セシガ今ノ堂也、

〔江戸名所圖會 十六〕金龍山淺草寺〇中略 鯨鐘同所(山門前)にあり、二六時是を撞り、

寛永丙子歳〇十三年大猷院家光公、詣當山觀音堂、見佛龕破壞、卽命改作之、凡二十餘所、又於堂後林中、創建東照宮、後僅數歳、民屋火起、神宮佛閣悉煨燼、公復命老臣某等、營造如初、自爾以遠、日往年來超四十、風雨所侵、寖至敗毀、今大樹幕下、承先公之事、起土木之功、命山城守戸田忠昌、使十郎左衞門尉建部昌孝、五郎左衞門尉三浦義成、八郎右衞門尉國領重淸、董匠事、嗚呼結構之崇、彩飾之美、仰而可望、俯而可欽、功德之大豈可量哉、其樓上所掛之鐘亦破裂、因改鑄之、備後守牧野成貞喜捨黃金二百兩、爲常報十二時之資糧、鐘旣成、作銘并序、刻之、〇中略

元祿五年歳次壬申八月日　武州豐島郡金龍山淺草寺別當　權僧正宣存拜撰

鑄師　武州深川　大田近江大掾藤原正次

〔落穗集追加 一〕御城内鎭守之事

一問曰、其元御申聞候通ニ候得ば、權現樣御在世の節、御差圖被成置候御宮之儀ニも有之候得ば、永々共に、淺草寺内ニこそ可有御座義ニ候處、今程の外御宮と申候は、上野の寺内ニ御建立被遊候にも、何ぞ子細有之事ニ候や、答曰、其儀を我等承傳へ候は、元和年中迄の觀音堂の義ハ、北條家よりの建立にて、武州河越の城主大道寺駿河守是を奉行すといへり、棟札などにも書付けて有之と也、然バ數年の事ゆへ、悉く破損に及び、諸堂共にかたぶき苦むし候中に、東照宮の御社ハ、近年の御普請故、光りかゞやき候て、古來よりの觀音堂の太破別而目に立、見苦しく候との義、公儀江も相達し、或時、千住邊御鷹野に被為成候刻、觀音堂の近所を御通り被遊、諸堂大破の樣子を御

覽被遊候と也、其以後、觀音堂御建立之儀を被仰出候、諸堂共に悉く御普請出來いたし候と也、其節の別當觀音院と、內藤右近殿と心易候を以、山門の近所、東南の方に當り、只今の火除の空地となりて矢張有之候所を借地に致され、右近殿より、家作など申付候處に、其家より出火いたし、折節南風はげしく、直に山門へ吹付、夫より段段燒廣まり、本堂を始め、諸堂不殘燒失いたし、剩へ權現樣の御宮迄も御類燒遊し候と也、右の次第に候へば、別當より重而御建立之儀、御願申上候義とては不罷成候ニ付御內々にて、諸堂之儀をば差置られ、觀音を安置仕、本堂計の義をば、如何樣ニも輕く御建立被成下樣ニとの儀に候得共、御取上も無御座處に、或時、別當を御城へ被召呼、阿部豐後守殿を以て被仰渡候ハ、元來淺草寺の儀は、公儀よりの、御建立地と申にては無之候得共、思召有之ニ付、御建立被仰付候處に、自火も同前の門前より出火致し、諸堂悉く燒失に及び、剩へ御宮迄も御類燒有之段、不調法之至りニ被思召候、然上ハ、御再與可被仰付義ニハ無之候へ共、又候御建立被仰出候間、別當義ハ不申及、一山の僧侶共に、難有仕合可奉存候、但東照宮の御事は、御神體も、先達而紅葉山へ被爲入、今程の義ハ、御拜殿迄の義に候へば、當分御建立の儀は、御延引可被遊候旨被仰付候と也、其節御建立の諸堂ハ、只今の觀音堂なり、我等十二三歲の時の義と有之候間、今年迄七十六年計にも罷成可申候と也、

〔大猷院殿御實紀四十九〕寬永十九年二月十九日、淺草寺觀音堂火あり、

〔淺草志二〕金龍山淺草寺傳法院〇中略

雷神門は、㴱後に建しといふ、其年來は不知、元は山門より壹町餘前右の方往還にてありしとぞ、また東北はづれ竹門といへるものなしといへば、是も後の事ならん、いつ比にてありしや、今竹門といへるも名のみなり、今の並木町わたり、寬永まで松並木にて、其間々に家居少しありと、古き事を志るせし中に有る故に、こゝに記す、又延享三寅年三月朔日、雷神門坊舍より出火して、寺

院類燒に及び、其時、名木時に多く燒亡せしといふ、

〔天明集成絲綸錄 三十 二〕天明六午年十二月

寺社奉行江

淺草寺境內、井今戶橋ゟ、諏訪町迄之河岸地家作地代金增方、此度御差止被仰出候に付、淺草寺本堂、其外末社共、修復料手當無之、且隨宜樂院宮御助力金、井臨時入用不足償方等無之、御迷惑被思召候間、一旦被差止候儀には候へ共、右河岸地御徒水稽古等之場所は相除、其餘之分、又々家作地御願被仰立度、地代金之儀も、元來畑年貢取にて、上中下に相分、坪當り少分之儀に付、町人ども江中間、增方被申付、相應に繁昌之事に付、過分之取箇にも有之間敷哉に付、右增方之內、二分通も用捨被申付、地代金取立不足金償、井修復料手當之方江も差加度候に付、猶又御願被仰立之哉之儀、內々被申聞候得共、一旦被仰出候儀に付、河岸地家作增地代取立等は、難被及御沙汰筋に付、淺草寺本堂、其外末社等修復之儀は、前々之通、散錢奉納物、地代金諸運上等之收納を以、追々修復被致候積に被相心得、臨時入用等御差支之趣は、無御據相聞候間、格別之御沙汰を以、隨宜樂院宮御助力、一箇年金千兩、米五百俵宛、年々御手當可被進旨被仰出候間、得其意、右之趣可申上候、最當午年分は、金五百兩被進候積候間、請取方等之儀は、御勘定奉行可被談候、

右之通上野執當江相達候間、可被得其意候、

十二月

〔天明集成絲綸錄 三十 一〕安永八亥年十二月

御勘定奉行江

淺草淺草寺雷神門、類燒に付、御再建之儀相願候處、御再建難相成候は丶、御材木檜木等被下候樣仕度旨相願候御再建之儀も難相成候、銀五拾枚被下候間、自分にて再建仕候樣、淺草寺別當代江

寺領

寺職

可レ被二申渡一候、最御勘定奉行可レ被レ談候、

右之通、寺社奉行江申渡候間、可レ被レ得二其意一候、

十二月

〔武江年表十一〕慶應三年十一月二日、淺草寺觀音堂修復成て、今夜遷佛供養あり、信心の男女、夜中迄群集す、

〔江戸砂子二〕金龍山淺草寺傳法院　寺領五百石　上野末

〔淺草志二〕金龍山淺草寺傳法院寺領五百石〇中略當御治世の初め、五百石寄附せらる、元祿中、大樹常憲公〇德川綱吉御參詣、御母堂桂昌院尼公御參詣有て、彌尊敬前代に增れり、〇中略

慶長十九年二月十八日　家忠日記　寺領の印を淺草寺に賜る　當寺五百石此内二百五十石、別當分、寺修理料とも、

〔明良洪範一〕武州江戸淺草寺〇中略別當智樂院僧正ハ、姓伊丹氏也、祖父ハ伊丹權頭トカヤ言テ、攝津國伊丹ノ鄕ヲ領セシト言、一說ニ、伊丹豐後守ト言シ共云、豐後守ガ嫡子權六、其子今ノ智樂院也、權六ハ、宗光公御幼年ノ時ヨリ御小性也、

〔老談一言記一〕一淺草寺は、一本寺にて、住職御譜代の俗緣もの住寺せし事なり、寺中十八坊ありて、紅葉山勤番をするなり、夫ゆへ寺僧武藝をならひ、馬にのる故に、馬場もありて、御城御門晝夜御斷すみて、出入自由にて、御軍法のある事なりしに、常憲院樣〇德川綱吉御代、東叡山末寺となりて、山より寺僧を持ことになり、むかしの故實知れる人もなく、目出度御代にてぞありける、

〔淺草志二〕金龍山淺草寺傳法院寺領五百石上野末〇中略　天台

貞享年中、御別當知樂院、鎌倉へ退去して、東叡山に屬し、傳法院と號す、

〔江戸志二〕金龍山淺草寺傳法院〇中略

同年〇貞享二年十二月十七日、觀音地中、共に、日光御門跡兼帶、紅葉山御宮は凌雲院に被仰付候也、

〔柳營禁令式 一〕武州淺草寺〇中略

一衆徒之跡濫凡僧不可居住、同寺院明屋敷不可相抱事、

附諸式法度以下、可隨寺務之下知、幷公役修造之節、有令怠慢違者、忽坊領可召放事、〇中略

右任慶長十八年三月十三日先判之旨、永不可有相違もの也、

慶長十九年二月十八日　　淺草寺

〔吾妻鏡 十二〕建久三年五月八日己卯、法皇〇後白河四十九日御佛事、於南御堂被修之、有百僧供、早旦各群集、布施口別白布三段袋米一也、主計允行政、前右京進仲業奉行之云云、

僧衆〇中略淺草寺三口、

〔吾妻鏡 四十一〕建長三年三月六日丙寅、武藏國淺草寺、如牛者忽然出現、奔走于寺、于時寺僧五十口計、食堂之間集會也、見件之恠異、廿四人立所受病痾、起居進退不成、居風云云、七人即座死云云、

〔七十冊物類集 四十九〕口上覺

淺草觀世音、來申年三月十五日より、日數六十日之間、願之通開帳被仰付候ニ付、此段御屆申上候、且開帳中、御心添可被下候、尤開帳札、所々江差出候間、是又御屆申上候、以上、

未〇安政六年十月　　淺草寺別當代 惠命院

町御奉行所

〔瀨田問答〕一淺草寺ノ繪馬、草ヲハミ候由申傳へ候畫ニテ、俗ニ古法眼ト申候ハイカヾ、

答、古法眼ガ筆ニテハ無御座候、狩野主馬尙信ガ筆ニ相違無御座候、草ヲハミ候ト申說モ據有之候、尙信、數年ノ懇望ニテ、黑川氏ヨリ、馬ノ骨相ノ祕說ヲ請、其後馬ヲ畫クト云、始テイキタル馬ヲ畫キ候トテ悅ビ奉納セシ繪馬ノ馬ナレバ、謎ニハ、彼馬イキテ居ルナド丶申セショリ、草ヲハミ

候說モ起リ候半哉ニ候、

靈雲寺

名稱所在

靈雲寺ハ、東京湯島新花町ニ在リ、元祿四年、德川綱吉、律僧覺彥ニ命ジテ開カシムル所ニシテ、關東眞言律宗ノ總本山タリ、

〔江戸砂子三湯島〕寶林山大悲心院靈雲寺　眞言律　關東總本寺　寺領百石　同所〇湯島　開山淨嚴和尚本諱雲農覺彥比丘、元祿十五六月寂、

寺號

〔湯島寺院書上〕　關東眞言律宗總本寺　江戸湯島靈雲寺〇中略

一山號　寶林山　一寺號　靈雲寺　一院號　佛日院

〔江戸名所圖會十四〕寶林山靈雲寺　大悲心院と號す、圓滿寺の北の方にあり、

創建

〔湯島寺院書上〕　關東眞言律宗總本寺　江戸湯島靈雲寺〇中略

一境內拜領地　但表門口、東西六拾間、裏行南北五拾八間貳尺、總坪數三千五百坪

右者、元祿四年辛未八月廿二日、開基淨嚴和尚、新規寺地ニ拜領仕候、當亥年〇文政十年迄百三十七年ニ相成候、

〔常憲院殿御實紀二十四〕元祿四年七月二十二日、此ころ、眞言僧覺彥は、有驗の聞えありしかば、これより先、柳澤出羽守保明が薦擧にて見參し、府に駐錫の地を給はるべしとて、本鄉湯島の閑地三千五百坪を給ひ、新寺を建立せしめらる、又保明が邸にめし、金三百兩たまひ、構造の費にあてられ、今より永く天下泰平の御所、丹誠を抽べき旨を命ず、日記、寺譜、

〔江戸名所圖會十四〕寶林山靈雲寺〇中略　鐘樓本堂の右にあり、開山覺彥和尚自銘を作る、

堂塔

寶林山靈雲寺鑄鐘銘並序

武都北郊有一勝地、四野廓落、四方之衆易來而投、一岳嶄起、一天之星可座而算、菅祠艮峩、神鬼常作擁衛、士峯坤峙、靈祇遥爲鎭護、東叙天澤後聯、鐘梵互和、都城壟堂前眩旭曉相映、實武野之甲區者也、從四位下柳羽州源保明者、幕府之侍臣也、天性篤愨、忠孝是務、在公之暇、歸志眞乘、常歎世季俗澆、奉佛之徒、不拘戒撿、以故衆教徒設無益、因啓幕府、堅請伽藍之地、以賜貧道、○序略遂使今茲仲秋之二十二、大將軍下旨賜許斯攸、予乃夷榛莽、卒翔營構、遐邇競趍、縉白佐助、自閏八初二始斧、以至孟冬之半、土木之績倏示告成、從四位下牧野備後刺史源成貞者、時之股肱也、寬而有威、喜捨家貲、命于皃氏、鎔成鉅鐘、復令工匠絲造其樓、今月初四、樓鐘偕就、以惟斯寺之興起也者、本是大將軍之賜、而二公醇信之所致也、予欲使後生有感于茲、欽遵佛制刀荷教法、上以鞏台運無疆、下以增士民壽福也、乃爲銘曰、

○銘略

元祿四年辛未年孟冬

〔續日本高僧傳一法本〕江戸靈雲寺沙門淨嚴傳

釋淨嚴、字覺彥、俗姓上田氏、河州錦部郡鬼住村人也、○中略元祿四年秋八月、蒙幕府命、開創靈雲寺、冬十月、殿堂落成、入院開法、法雷倍震、十年春二月、授結緣灌頂、入壇者九萬人、水府儒者森尙謙賀法筵藹然賦詩云、南天鐵塔覺皇城、芥子開扉此道明、惆悵會昌沙汰濁、讃歎日域法流清、尸羅具足證無漏、灌頂結緣救有情、頂照金剛今何有、那伽定裏見形聲、翌年春三月、講楞嚴經、列衆一千人、嚴此年正月勤修大元帥明王法、鎭護國家、公侯妃嬪崇敬欽服、十五年夏六月染微疾、廿七日頭北面西右脇而臥、結印寂然逝矣、閱世六十四、座夏若干、剃度弟子四百三十六人、授灌頂者百六十七人、授菩薩戒者一萬五千餘人

〔湯島寺院書上〕

關東眞言律宗總本寺　江戸湯島　靈雲寺○中略

一本堂　但南向、東西九間、南北七間、總體赤塗、貳重垂木、家根瓦葺、

本尊兩部大日如來　貳軀　但木ニ而座像、御丈ケ各三尺七分、御座之高サ四尺四寸、　法橋運長作　水引并佛具類等葵御紋附

右不動明王　壹體　但木ニ而立像、御丈ケ壹尺五寸九分、御座之高サ壹尺五寸、厨子入、　安阿彌作

左愛染明王　壹體　但木ニ而座像御丈ケ七寸八分、新座之高サ壹尺五寸、　法橋運長作

四天王　四體　同立像、御丈ケ各貳尺九寸、〇中略

一御祈禱殿　但南向、東西五間、南北五間半、貳重垂木、白木造、家根瓦葺、

本尊大元帥明王畫像　壹軸

右者元祿八年亥五月十一日、開山淨嚴被為召候ニ付、登城いたし候所、御祈禱本尊大元帥明王之畫像、常憲院樣御自畫ニ被為遊、御名御印迄義被遊被下置、其上永々鎮護國家之御祈禱可抽丹誠之旨、奉上意候、〇中略

右之通御座候

寺格

〔湯島寺院書上〕　關東眞言律宗總本寺　江戸湯島靈雲寺〇中略

右者、同年八月、常憲院樣御建立ニ而、天下之御祈禱ニ被仰付、同六年癸酉十一月、於當國多摩郡寺領百石之御朱印頂戴仕、同七年甲戌六月、關東眞言律宗之總本山ニ被仰付候、

寺領

〔寺鑑上〕眞言律宗　寶林山大悲心院　湯島大根畑　靈雲寺

御朱印　高百石

名稱
所在

護持院

護持院ハ、東京小石川音羽町ニ在リ、初メ德川家康、長谷寺ノ僧光譽ヲ信ジ、召シテ護持僧ト爲シ、常州筑波山知足院ノ宿寺ヲ賜ヒ、亦知足院ト號ス、時ニ寺ハ銀町ニアリシガ、元祿年中、德川綱吉之ヲ神田橋ノ邊ニ移シ、始テ護持院ト稱シ、大ニ規模ヲ擴メ、寺格ヲ昇セテ、關東眞言新義派ノ總錄ト爲シ、隆光ヲ以テ住持ト爲ス、享保中、祝融ノ災ニ罹リシヲ、幕府命ジテ護國寺ノ城内ニ移ス、卽チ今ノ地ナリ、

〔江戸名所圖會十二〕筑波山護持院　音羽町の北にあり、眞言宗にして、和州長谷の一派なり、寺領千有五百石を附せらる、　本堂、本尊不動明王(作不詳、往古は本尊に釋迦佛を安ぜしと云、)　歡喜天(同右に並ぶ)　蟹が池(庭前の池をいへり、當寺建立なき以前は、此地の名をせりせりとも、又せれせれとも唱へしと、昔此所より、藥師如來の像出現ありしとなり、)權現山(後園小高き岳を云ふ、東照大神君、御正躰の御尊像を安置し奉る、自から御影を植させ給ふといふ、)

〔江戸名所圖會一〕護持院舊地。　神田橋と一橋との間、御溝の外の芝生を云、此所は、大塚護持院の舊址なり、(元祿年間、柳原の南にありし知足院を引て、護持院と號られ、殿堂御建立ありしが、享保回祿の後、大塚の地へ移され、後明地となる、)林泉の形殘りて、頗る佳景なり、夏秋の間は、是を開かせられ、都下の人こゝに遊ぶ事をゆるさる、冬春の間は、時として大將軍家、こゝに御遊獵あり、故に此所を新駒が原とも唱ふるとなり、世俗は護持院の原と呼べり、

〔三王外記憲王〕都下、斜橋門外有佛寺、號知足院、住持釋隆光、自憲王在藩時、爲其祈禱、王登極、以爲隆光有力焉、遂寵之、元祿初、詔遷院於神門外、規地方一里、堂宇寬廠、奢麗罕比、更號護持院、内賜扁額、王親移仗焉、後以隆光爲大僧正、令城郭諸門、隆光出入、監門吏卒、拜下稽首、如參政以上出入、寶永中、隆光告老、王命有司、造院於駿臺里、使隆光老焉、賜號成滿院、

〔新編江戸志十〕筑波山護持院　常州筑波知足院の宿寺、寺領千五百石、

創建沿革

〔江戶名所圖會十二〕筑波山護持院○中略　當寺開祖、權僧正光譽は、和州初瀨寺の西藏院に住職ありしに、御歸依淺からず、江府に召れ、常州筑波山の宿寺を下し給ふ、則知足院と號す　其始知足院宥俊は、下野國筑波山中善寺を兼帶し、眞言新義四箇寺の支配たり、慶長の始、大神宮の嚴命を蒙り、江城の護持所と定させられ、同庚戌の年、江戶銀町に寺院を給ふ、其地未考、九軒町の事歟、依光譽知足院を遷し營建す、同癸亥年、大坂御陣の頃も、光譽命を受て、御陣中に於て祈禱す、其後寬永三年丙寅大猷公、諸伽藍御建立あり、延寶二甲寅年、有廟御再修ありしが、天和五年壬戌十二月、火災に罹る、よつて貞享元年甲子、湯島切通に移し給ふ、今の根生院の地なり　憲廟御歸依淺からず、元祿改元の年神田橋外、武士屋敷の地に移され、松平若狹守、仙石越前守に命せられ、護摩堂、祖師堂、觀音堂、經堂、灌頂堂、鐘樓堂、二天門、坊舍に至迄、金銀をちりばめ給ひ、隆光を開山とし、權僧正に任せらる、又護持堂御建立あつて釋迦佛を安せらる、同四年八月、寺領千五百石を附し給ひ、院家に列し、關東新義總錄とせられ、色衣免許の事、當院より沙汰すべしと命じ給ふ、同五年壬申十二月十二日、覺鍐上人贈官の時に及び、隆光改任し、大僧正に昇進す、同九年、元祿山護持院の號を賜はり、護摩堂の額、護持院の三大字を大樹自灑筆なし給ふ、弘法大師自作の眞像は、濃州大野郡實相院と云眞言寺にありしを取寄られ、祖師堂に安置せしむ、觀音堂の本尊は、有廟御信敬の御守護佛なり、大僧正隆光の願により、寶永四年丁亥二月廿五日、退隱して駿河臺に遷り、成滿院と號す、依護國寺住持快意僧正を後住とし、御成ありて、繁昌先の如し、寶永六年己丑八月六日、隆光願により、大和國に至る、故に成滿院の跡快意に賜ふ、仍て爰に隱居す、後住は、知積院小池房住職たるべき命ありて入院す、然に、享保二年丁酉正月廿二日、火災ありて、堂塔一字も不殘燒失しければ、其頃住持退隱の願により、夫より後、寺號及び食祿とも護國寺に給ひ、大塚護國寺の內に遷し、江城護持の御祈禱所となさしめられ、筑波山兼帶す、坊舍日輪院、月輪院と云あり、　山開毎年三月廿一日、弘法大師の御影供修行あり、此日諸人に庭中の林泉をな

見する、

〔有德院殿御實紀附錄十五〕郭内の護持院も燒亡せしより、再建せられず、大塚の護國寺のうちにうつされしとか、この護持院といへるは、常憲院殿の御時、寵遇蒙りし、僧隆光すゝめ進らせて、本城の丑寅にあたりし地をえらび、營造ありしとなり、しかるに盛慮には、江城の鎭護日光、東叡の兩山あれば、別に營築には及ばずとて、かく郊甸の地にうつされしとぞ、

寺格

〔護持院古記錄寫〕一智山、豐山兩本山と稱之事、公儀より御尋有之節、敎相本山ヲ兩山と稱之、總本山を醍醐と稱之候、權現樣、京都ニ被爲在候節、醍醐三寶院義演大僧正、右之御朱印被下置候也、智山、豐山へは、醍醐より御朱印之寫計持參候也、然ニ當護持院者、醍醐報恩院末寺之處、常憲院樣御代、報恩院へ寺領百石被下置、元祿四未六月、離末被仰付、其以後至今、宗門御改帳ニ(眞言)無本寺也と相記申候、其後誤傳ヲ、兩山之末派之樣謂之なりし、公儀(眞言)末派之樣ニ而も被思召候處、宥雅大僧正ト、師資附法之約ナレバ、醍醐之法脈斷絕之節者、當院より遂相續、當寺法脈斷絕之節者醍醐より相續之約有之、然上者、事相之本山共可謂、當山、何レニモ、兩山之支配ヲ不請來、偏ニ學問之ために、住山仕候故を、本山と申迄ニ御座候、以上、

月日　　　　　　　　　　護持院役者
　　　　　　　　　　　　　日輪院
御奉行所
　御役人中　　　　　　　　月輪院

寺領

〔寺鑑上 新義眞言宗〕御朱印　高千五百石　　筑波山　音羽　護持院

寺職

〔敎令類纂初集九十二〕寶永六己丑年八月四日

覺

護持院後住之儀、十二代小池坊派より住職仕候ニ付、今度小池坊事、後住相願候、最前之知足院之時之儀、護持院ニ成候ても、一兩代小池坊派ニて、住職仕候得共、護持院ハ、兩山之僧錄ニ被仰付候、

雜載

然バ智積院、小池坊、兩山牛角之事ニ候間、向後護持院之後住、替々可被仰付候、尤其時住職之方可爲僧錄候、依之相互ニ競望有之間敷候、以上、

八月四日

〔天明集成絲綸錄二十六〕寶曆十一巳年八月

寺社奉行江

御誕生以後御祈禱、山王神田明神、護持院ニ而、被仰付候間、其段可被申渡候、御祈禱料〇中略護持院江白銀三十枚被下候、右御祈禱料、御納戸ニ而請取候樣可被致候、

八月

〔天明集成絲綸錄二十六〕寶曆十三未年二月

御勘定奉行江

護持院本坊幷諸堂社、去ル卯年拜借金五千兩を以致修覆、筑波山之儀、本堂ハ致修覆、諸堂社伽藍之修覆迄難行屆由、依之拜借增金相願候付、此度金二千兩拜借被仰付、返納之儀ハ、去ル卯年之拜借返納相濟候上、來ル丑ゟ辰迄、四箇年、護國寺領千二百石之物成を以是迄之通、伊奈半左衛門方ニ而取立之、上納可致候、

右之趣、護持院江可被申渡候、尤御勘定奉行可被談候

二月

〔教令類纂二集百十四〕明和元甲申年九月

寺社奉行江

護持院權僧正

右地面拜借仕、隱居所建、院號成滿院と唱度旨相願ひ候、其身一代拜借地被仰付、成滿院と唱へ候

儀、願之通可ㇾ爲旨可ㇾ被ㇾ申渡候、

九月

護國寺

名稱所在　創建

護國寺ハ東京小石川音羽町ニ在リ、天和元年ノ創建ニシテ、亮賢ヲ以テ開祖トス、亮賢ハ修驗僧ニシテ、上野國碓氷八幡宮ノ別當ナリシガ、德川綱吉ノ安產ヲ祈リテ驗アリ、是ヲ以テ綱吉ノ母桂昌院ノ尊信ヲ得、其本願ニ由リテ當寺ヲ建立スル所ナリ、新義眞言宗ニ屬ス、

〔江戸名所圖會十二〕神齡山護國寺　悉地院と號す、音羽町の北にあり、新義の眞言宗にして、和州長谷小池坊に屬す開山を亮賢僧正と號す公より寺領千二百石を附せられ、盛大の地なり、古鹿子に云、寺領三百石、大猷公(德川家光)守御本尊馬腦石觀音像開基とあり、本堂、本尊如意輪觀世音、瑪瑙石にして、天然のものなり、元祿中の頃、前川三左衛門入道道慈といへる人、異邦に渡り、持し來りしを、黄檗隱元老師の弟子、黑瀧の潮音、前川氏と師弟の緣あるに、潮音に授與す、其後故あつて、桂昌一位尼公崇敬し給ひし由、事跡合考に見えたり、本堂の柱を、猿柱と云て、木理猿の面に等し、〇下略

〔常憲院殿御實紀附錄下〕また、護持、護國の兩刹を剏建したまひ、淨宗の開祖法然上人に、大師の號を追贈せしめ、金地院普濟に、禪師號を下し賜ひしたぐひさま〴〵其道の事どももてはやさせ玉ひしなり、殊に護國寺を御造營ありしは、そのはじめ、公いまだ、母公の胎内におはしませし時、上野國碓氷八幡宮別當亮賢といひし修驗、かねて御平產の御祈つかふまつりしが、生れさせたまひし御時、參りあひて、尊容を拜し奉り、この御子、きはめて至貴の相おはしますよし聞え上しかば、桂昌院殿も、殊に喜ばせ玉ひ、是より常に護持にめされしが、大統をつがせ玉ひしに至り、いよいよ優待大方ならず、彼寺を府下にうつされ、高田藥園の地をたまひて、今の巨刹をば建立あ

りしなり、寺傳、日記、

〔江戸名所圖會十二〕神齡山護國寺〇中略 當寺は、延寶九年〇天和元年二月七日、上野國八幡別當大聖護國寺の住持法印亮賢に、高田御藥園の地を給ひて寺とす、依て大聖護國寺と號、亮賢初御在胎の時より、御祈禱を奉りし故也、天和元年に、憲廟將軍の宣下蒙り給て、同年五月廿八日、御下新建の大聖護國寺を、仁和寺に錄して、院家とす、依て寺領三百石を附し給ふ、貞享二年十二月廿八日に大聖護國寺住持法印賢廣、黃衣を許る、其後元祿年中、桂昌院殿一位尼公の御志願によつて、御藥園の地を轉じ、其頃御建立ありし江戸密乘最大の梵宇にして、結構備れり、

〔新編江戸志十〕音羽町　元祿比、護國寺御建立は、京淸水をうつさるゆゑに、町を音羽と名付、

寺領

〔寺鑑上新義眞言宗〕神齡山悉地院　御室直院家音羽　護國寺

御朱印高千二百石

眞福寺

名稱　所在　創建

眞福寺ハ、東京芝愛宕下ニ在リ、釋空海ノ開基ニシテ、照海ノ中興スル所ト稱ス、宗派ハ、新義眞言宗ニ屬シ、江戸四箇寺ノ一タリ、

〔和漢三才圖會六十七武藏〕眞福寺　在愛宕下〇中略　弘法大師草創、本尊藥師如來、大師作

〔江戸名所圖會三〕摩尼珠山眞福寺　櫻川の西岸に傍ひてあり、新義の眞言宗にして、江戸四箇寺の一員、知積院の觸頭なり、當寺本尊藥師如來の靈像は、弘法大師の作なり、慶長の頃、甲州の領主淺野長政、當寺中興照海上人をして、自らの等身に藥師佛の像を手刻せしめ、件の靈佛をば其胎中に籠奉るといへり、毎月八日十二日は、緣日にして、參詣多し、

寺格　寺領

〔寺鑑 上 新義眞言宗〕摩尼珠山　右同斷〇嵯峨直院家　愛宕下 眞福寺

御朱印　高百石

獻上年頭（一束一卷、一束一本、）宛

右四個寺（〇根生院、彌勒寺、圓福寺、眞福寺、）住職、於御白書院御緣頰、御老中御列座被仰渡、　住職御禮御白書院獨禮、（御閾之外二疊目、）　香衣之御禮、御白書院、獨禮同斷、　年頭御禮、大廣間獨禮座一同、

名稱　所在　創建

圓福寺

圓福寺ハ、東京芝愛宕山ニ在リ、僧神證ノ開基ト稱ス、宗派ハ新義眞言宗ニ屬シ、江戸四箇寺ノ一タリ、

〔江戸名所圖會　三〕愛宕山權現社　同（〇眞福寺）南に並ぶ、世俗、城州愛宕山に同じといへ共、自ら別なり、本地佛は勝軍地藏尊にして、行基大士の作なり、永く火災を退け給ふの守護神なり、樓門の金剛力士は、運慶の作、同二階の軒に揭し、愛宕山の三字は、智積院權大僧正の筆なり、別當圓福敎寺は石階の下にあり、新義の眞言宗、江戸の觸頭、四箇寺の隨一なり、開山を神證上人と號す、二世俊賀上人といふ、（四箇寺とは、湯島根生院、本所彌勒寺、當所眞福寺、並に當寺をいふ、）

寺領

〔寺鑑 上 新義眞言宗〕愛宕山遍照院　右同斷〇嵯峨直院家　愛宕圓福寺

御朱印　高百石

〇按ズルニ、此寺ノ寺格ハ、上文眞福寺ノ條ニ出ヅ、參看スベシ、

名稱所在	寺領	名稱所在	寺領

根生院

根生院ハ、金剛寶山延壽寺ト號シ、東京湯島切通ニ在リ、僧榮譽ノ開基ニシテ、寛永ノ始メ祈願所トナル、宗派ハ新義眞言宗ニ屬シ、江戸四箇寺ノ一タリ、

〔江戸砂子 三〕金剛寶山延壽寺根生院　眞言　江戸四箇寺の内　寺領二百石　湯島

〔江戸名所圖會 五〕金剛寶山根生密院　延壽寺と號す、同〇麟祥院東の方にあり、眞言新義江戸四箇寺の一にして、寛永の始、御祈願所に命せらる、本尊藥師如來は、佛工春日作、脇檀に十二神將の像を置、榮譽法印春日局の猶子なりをもつて開山とす、

〔寺鑑 上 新義眞言宗〕金剛寶山延壽寺　御室直院家 湯島切通 根生院

御朱印　高二百石

〇按ズルニ、此寺ノ寺格ハ、上文眞福寺ノ條ニ出ヅ、參看スベシ、

彌勒寺

彌勒寺ハ、東京本所森下町ニ在リ、創建詳ナラズ、新義眞言宗ニ屬シ、江戸四箇寺ノ一タリ、

〔江戸名所圖會 十八〕萬德山彌勒寺　同所〇深川森下町二町あまりを隔て、彌勒寺橋の北詰にあり、眞言新義の觸頭、江戸四箇寺の一室なり、本尊は藥師如來、世に河上藥師と稱せり、傳記失たりとて、其來由を知ず、中興開山を宥鉉上人と號す、總門の額に、彌勒寺と書せしは、朝鮮國雪月堂の筆跡なり、當寺舊柳原の地にありしを天和二年回祿の後、此地へ移されたり、毎月八日十二日を緣日として、參詣多し、

〔寺鑑 上 新義眞言宗〕萬德山聖寶院　嵯峨直院家 本所二ツ目林町 彌勒寺

御朱印　高百石

○按ズルニ、此寺ノ寺格ハ、上文眞福寺ノ條ニ出ヅ、參看スベシ、

增上寺

增上寺ハ、東京芝ニ在リ、舊ト光明寺ト稱シ、貝塚ニ在リテ、古義眞言宗ニ屬セシガ、足利幕府ノ季、住持酉譽、淨土宗ニ改ム、德川氏ノ江戸ニ移ルニ及ビテ、其菩提所ト爲リ、寺地ヲ今ノ所ニ移シ、十八檀林ノ首班ニ居リ、關東ノ一大伽藍ト爲レリ、

〔三緣山志〕一茲に武藏國三緣山增上寺廣度院といへるは、○中略鎭西流の正嫡、白旗派の傳場にして、一宗の大叢林たり、慶元御開國の後は御當家○德川氏御菩提所とし、檀林御建立に及びては、總錄官制の魁首たり、舊史淸記にのする處にして、由緣既に遠く、聚成亦長し、惜往世の來由を考按するに、二の說あり、一には、山庫記云、其來由不詳、第三十四世は酉譽上人也、此時迄は眞言古義を學びて、一本寺なり、子院數多ありて、論議怠りなし、故今猶論議の淸逸なるも、往世の高風なりとかや、寺貝塚今廣遠紀伊家、彥根侯のあたりを合せ、寺境なりと云々、にありて、四百年餘、其後日比谷の邊今の地なりに御造營被成下しと云々、二には、或云、當山はもと貝塚にあり、開祖は宗叡大僧都なり、僧都白山をはじめ、北國東國に立こへ、諸方に梵閣を建、遊行弘敎ありし事、釋書に出、當山も其一にして、年古甚遠し、七堂伽藍雙備の靈場たりしかど、代々の戰爭に、或は陣所とし、或は破却せられ、數代幽蔽たり、去かれども、敎燈は消ずして、建武貞治までも、數十代佛場たりしを、酉譽上人是を改め興し、淨土の談所とせられ、又數代の後、觀智國師、大神君と宿契深因にして、是をはかり、中興として、御菩提所となれり、然れば、當山は、關東の古跡、大神君の御再興も實に故あるかなと云々、始の庫書に、三十四代とあるによれば、此說も又據あるに似たり、後哲是を校考せば、補功多かるべし、此時まで、光明寺

創建

と名づけし事は、山庫記、歷代譜、大業廣記、江戸名所記、江戸砂子、其外の書に出たれば、光明寺はもと眞言宗にして、改宗開山は酉譽上人なる事明らかなり、

〔消閑雜記〕三縁山增上寺は、大蓮社酉譽聖聰上人の開基也、了譽上人の弟子也、淨土經の文に、親縁近縁、增上縁といふ事あり、それより名付けたる山號、寺號也、

〔三縁山志〕一增上叢基

人皇百一代後小松院御宇、至德二丑年、南朝後龜山院元中二年なり酉譽上人、淨家に宗を改め、年廿八歲にして、明德四酉年十二月、當山を興隆し、般舟蓮社の談法論場とし、四方の雲水をあつめ、輪下に講演し、自他宗の碩德を招請し、不斷法問の伽藍とす、千葉佐竹の一族、或は喜で法器を寄附し、或は田園材樹を捨入す、○中略又此ころ、江戸但馬守、齋藤大膳亮、太田道眞などども、歸依助造せしとぞ、

〔落穗集追加二〕增上寺淺草寺の事

問曰、江戸表に於て、三縁山增上寺をば御菩提所、金龍山淺草寺をば御祈願所と被仰出とあるは、御入國以後の儀に有之候と申は、其通りに候哉、答曰、此儀に付ては、色々の說を申觸るゝと相聞へ候、我等承及候趣は、權現樣御入國遊ばし候節は、天正十八年八月上旬と申すに相違無之候、然ども、北條家を御攻絕やし、其跡を御拜領と有之義は前方より相定りたる儀にても有之候哉、權現樣小田原表へ御著陣遊ばす以後、江戸表に於て、祈願所にも可被遊樣成る天台宗の寺一ヶ寺と、御菩提所にも可罷成樣なる淨土宗の寺一ヶ寺、見立候樣にとの御吟味被仰出候節、淨土宗に可然寺と申ては、增上寺、傳通院と申て、二ヶ寺有之、其內傳通院義は、古跡には有之候へ共、其所柄、一向の在所にて御座候、增上寺は、前は海、後は山を抱、殊外景地にも有之、其上江戸の城へも程近く有之、扨御祈禱所の儀は、淺草寺觀音堂より外に宜敷天台宗の寺と申は無之由、御聞に達し、然らばと有之、增上寺方丈と淺草寺觀音院を、小田原の御陣所へ被召、御目見仰付られ、兩寺於境內

亂妨禁制の御書付を被下、

〔東照宮御實紀附錄六〕はじめて江戸城に入せられし時、御行裝を拜せんとて、老若男女、所せきまで、御道の側になみ居たり、そのころ增上寺稱名院とて、今の龍の口の邊にありけるが、住持存應和尙も、衆人と同じく、寺門に出て拜み居たり、君御覽じ、近臣して、かの僧は何といふと御尋あり、存應つゝしんで、寺は淨土宗にて、增上寺といひ、貧道は存應と申候由申す、それは感應の大樹寺の住持弟子の存應にてあるかとのたまへば、さん候と申よて御馬を下り、寺に入せ玉ひ御茶などきこしめし、明日また參らんとのたまひて、明朝渡御あり、存應は思ひよらざる事にて、寺の內はせめぐりて御もてなし、齋飯進め奉る、君御けしきよく、當家の宗門は代々淨土にして、三河にては大樹寺をもて香火院としつれど、當地にはいまだ定れる寺なし、幸ひ此寺同宗の事なれば、當寺をもて、菩提所とせんと思ふ、よろづ供養の事、和尙をたのむなりと仰ければ、存應も、世にかしこき事に思ひ、感淚袖をうるほしける、さて師檀の御契約はこのときに定まり、のちに寺を今の芝浦に引移され、慶長十年、はじめて堂塔搆建ありて、一宗の本山として、代々大道場となされしなり、容遷錄、事蹟合考、

〔三緣山志二〕第三堂閣建緣○中略

本堂東向、箱棟金御紋、表裏五ツ宛左右貳ツ四方欄干、三方上段、向牌金御紋、唐破風彫物龍首、象鼻、○中略 本尊阿彌陀如來山記云、元和二辰年、伊勢國桑名城主、本多美濃守忠政朝臣寄附座像惠心僧都作、御長四尺○中略 廻廊の跡、又衆寮とも云、桁行三十間、梁間三間、外ニ一間通庇、享保年中、有故取疊、今ハ腰板塀、三門東向、拾間四尺五寸、横五間中ハ帝王、左ハ將軍、右ハ平人出入の爲也とぞ、是法界次第注廿五、涅槃城に在三三門一といへるに、又三解脫門として、空門、無相門、無願門の深意歟、慶長十巳年御建立 寛永元子年御改造正譽上人代 元祿九子年御修復 其後度々有之、寛政度の節棟銅と成○中略

方丈向 慶長十年御造營

事蹟合考云、嚴有院殿のころ、廣譽和尚の時、出火してこと〴〵く燼滅したり、其後御再興ありしかども、方丈も唯一所にて、御藍雪隱も造くられざるものなり、

延寶紀云三年九月廿日、増上寺出火、大方丈、小方丈、御裝束所、鐘の間、玄關取付、大庫裏、小庫裏、新茶屋、黑書院、居間、并常燈の間、納所寮、土藏十二間、部屋七間、寮、湯屋也、殘る所は本堂、三門、表門、裏門、御靈屋、奥の土藏、新藏五、輪番藏、風呂屋、米藏、中間部屋、所化寮、持僧寮等なりと、この時の事なるべし、

山廟記云、延寶四年九月廿一日夜炎上、極月廿二日、普請成就、(此二書相違、並而可考、山廟記を證とすべき歟、)

又云、門周上人代、寶永二(酉)年閏四月朔日夜、自火にて炎上、(○中略)同年霜月廿七日、普請成就移徙、(此時、御手傳戸田采女正、普請奉行間宮播磨守、)

又云、文昭院殿御靈屋御造營に及び、今の地に移る、(○註略)

天明三(卯)年十二月廿二日夜炎上(此時、御裝束所大方丈、小方丈、(中略)庫裏に至迄、のこらず灰燼となる、)

御裝束所　大方丈(此所に於て、五百部以下の御法會勤修之、)　阿彌陀如來　座像、もと生實大巖寺より奉移安置、(○中略)

方丈八境　浮月池、招魚亭、蒼苔岸、芳草園、蟠松樹、垂絲櫻、怪石磯、間僻室、

鐘樓　(桁行四間壹尺五寸、梁間三間貳尺五寸、柱拾貳本)　寛永十三(子)年十月御建立、(○中略)

開山堂　(御經藏の東の方にあり、西向、)初の安國殿なり、寛永十(酉)年御改造の時賜はりしかば、列祖を安置す、故に六拾六疊敷、(今はぬく板の間也、)欄干金物に、元和三(巳)年正月吉日、椎名吉次とあり、享保十(巳)年夏、寛延四(未)年十月、總御修復、(其後數度有之)　開山酉譽上人の像を中央(○中略)安置、(○中略)

護國殿　疊六拾六疊敷、左右表裏共欄工鏤玉、文彩極丹青、　永祿七(子)年三月、桑子明眼寺より、(緑山末に出づ)御引移、しばし大樹寺に安置、五月に至り岡崎へ御請待、(今現岡崎城内に持佛堂曲輪の處、右の跡なり、)天正十五(亥)年駿城へ御引移、其後當御城内に御安置、後當山へ御移、(土屋忠兵衞告來)享保十四(酉)年、學譽大僧正、自營

に而、護念堂と稱せらる、庫記云、享保十六亥年三月十五日、黑田豐前守へ伺の上、三門之外、南松原空地へ堂建立、寶暦二申年六月四日、御供養のため、新に佛供料百石御寄附、

〔三緣山志十一〕第十一境内地理

五層塔　台德院殿○德川秀忠御廟所圓山の南にあり、酒井雅樂頭奉られしより、今もかの家にて修理を加へらる、文化火災に燒失せし時、又かの家より再建あり、本尊彌陀佛三尊、外略、

〔本朝高僧傳十八淨慧〕武州増上寺沙門聖聰傳

釋聖聰、字酉譽、下總人、千葉氏、貞胤之第四子、○中略一日遘病念佛坐寂、永享十二年七月十八日也、春秋七十五、夏臘六十一、火浴遺骸、塔於本山、○中略

賛曰、○中略増上、插艸之日、墓爾一方、暨東照源君、撤舊一新、涌殿、飛樓、金碧煥輝、江海房寮編町、衆恒萬指、皋以爲十八談林之首、不因昔時栽八福田、安得今日仰三菩提之如斯也耶、

〔三緣山志一〕勅願所綸旨

武藏國豐島郡増上寺、爲勅願所、須開眞宗玄門、奉祈寶祚無疆丹棘者、綸命如此、仍執達如件、

慶長十三年十一月十一日　　左少辨

増上寺源譽上人御坊

〔寺鑑下淨土宗〕三緣山　　芝　増上寺大僧正

御判物　高九千四拾石　御靈屋料　内貳百石　御藏米

同　高千五百石　方丈領

同　高貳百石　隱居領

右住職幷任官、御黑書院三疊目、於御前被仰付之、

住職幷任官之御禮、御白書院獨禮、御閾之内三疊目右御禮畢而御閾之内、壹疊目著座之時、上意有之、

但大僧正御禮之獻上物者、御前ニ不ㇾ出、

年頭御禮、御白書院獨禮、同斷右畢而御閾之內、壹疊目着座、一宗御內禮之寺院御禮相濟、上意有ㇾ之、

獻上何レも三束二卷宛

寺領

〔御當家令條 十〕增上寺領目錄

一三百石、武州橘樹郡池鳥村、　一貳百石、同國同郡師岡村、　一百貳拾七石七合、同斷新師岡村、　一七百四石、同斷荏田村、　一百四拾八石、同斷東方村、　一百五拾六石、同斷茅崎村、　一三百七拾六石四斗、同斷川和村、　一五百石、同斷石川村、　一百九拾石、同斷王禪寺村、　一三百八拾八石、同國荏原郡駒込村、　一百貳石四斗壹升三合、同斷中延村、　一三百五拾壹石貳斗三升八合、同斷堤方村、　一百八拾七石、同斷中目黑村、　一貳百貳拾九石九斗四升九合、同斷蓮沼村、　一拾三石、同斷碑文谷村、　一三百四石、同斷倉衣〇倉衣恐鋪誤村、　一百拾七石、同斷等々力村、　一百三拾石、同斷巣鴨村、　一百三拾三石四斗、同國橘樹郡野川村、　一百壹石五斗六升壹合、同斷新作村、

都合五千石

此外　一六拾八石壹斗壹升五合、武藏國橘樹郡新作村、　一百三拾壹石八斗八升五合同國荏原郡久河原村

合貳百石者、爲隱居領、慶安三年御寄附所ㇾ有ㇾ之也、

右都合五千貳百石事、慶安十七年五月三日、同年六月六日、寬永十一年五月十六日、先御判所ㇾ被ㇾ載也、今月今日御判也、全御收納如ㇾ御定可ㇾ有ㇾ配當之狀如ㇾ件、

寬文五年八月廿四日　大和守　美濃守　豐後守　雅樂頭

什物

〔緣山三大藏目錄 上〕緣山三大藏緣起〇中略

吾緣山三大藏者、第一宋本、第二元本、第三高麗本、其宋本者、湖州路思溪法寶寺彫刻、南宋理宋嘉熙三年版也、蓋是二十餘副隨一者、日本後宇多院建治元年、近州菅山寺僧傳曉入宋將來、藏ㇾ于其寺、元

本、杭州路南山大普寧寺藏也、自彼至元十四年至二十七年而版成矣、元第五主世宗時、以思溪、福州二本校正、故名元本、亦是二十餘副隨一也、此藏末詳何人將來、何寺所藏、或云、豆州走湯縣修禪寺藏也、高麗本、後土御門院文明中和州忍辱山圓成寺僧榮弘將來、藏其寺矣、恭以、緣山國家祖宗廟庭、蘋蘩如在秘閣、神祖孝思之厚也、下命管山圓成之寺、致其所藏宋、元高麗全本於東都、各報賜食邑若干地、完聚三大藏、以賜緣山、爲永藏焉、嗟湯々神祖之口也、該異域而有之、並古今而存之、雖大東富有、而非神祖聖恩、何以得值斯盛與哉、昔者、世尊以法囑累國王者、蓋在於此乎、佛門進學之徒、依此以學、依此以行、則值過於世、亦何異之有、然此大藏、往々一經異題、異譯同經不少、或所盛函號各殊、卒見難分、故今選述總目錄三卷、題曰緣山三大藏目錄、對辨三藏異同、以便於通校者云、

延享戊辰佛圓寂日、　緣山知藏〔顯天〕謹書、

〔三緣山志　二〕第三堂閣建緣〔○中略〕

一本　宋本五千七百十四卷　折本輪藏入

此經、本近江國伊香郡菅山寺の藏本なり、慶長十八年、依台命以兩使〔安藤帶刀重信、本多上野介正純〕并御代官〔彥坂九兵衛〕を被仰出、御當山へ御置納、右爲代五拾石并山林境内を賜ふ、〔本光國師日記云、江州伊香の郡菅山寺密嚴院來、一切經の目錄持參、經數五千四百三十六卷、箱數貳百八十三、目錄十六卷、書義廿卷、以上五千四百七十貳卷、彥坂九兵衛披露、而九月五日、目錄貳卷掛御目と云々、按するに、此經へ餘經を加補し納めたまふ歟、〕

二本　元本五千三百九拾七卷　折本

此經、本伊豆國修禪寺〔濟家〕の藏本也、慶長十五〔戌〕年、依台命納當山、右爲代四拾石寺領を賜ふ、

三本　高麗本、六千四百六拾七卷　綴本

此經、本大和國忍辱山圓成寺什本なり、慶長十四〔酉〕年三月十四日、依台命南都一乘院宮の指麾を以、蓮花院遍照院を總代僧として、當山に納む、其代として、百五拾石御朱印を賜へり、〔此朝鮮本は、京

子院

建仁寺の本と、當本計にて、他國佛寺に類なし、○中略

〔三緣山志〕四 惠照律院

桂昌院殿〇德川綱吉母本庄氏 御平存の節、常に宜く、われ平生に心地を緣山にかけ歸依す、我百歳の後は靈屋を緣山に造立し、其かたはらに、念佛殿律院を造立し、その院務の清範も、又律法の威儀を修する規定をたて不斷念佛の聲、鉦の音をして、天下泰平邦壽永算の祈願を勵ましめ、かつ御代々尊靈樣の御追善、幷に我增道の資糧にもなさば、いと目出度事ならずや、扨またわれ百年の後は靈屋の彩色も金玉をちりばめ、美を盡す事、更に望む所にあらず、此故に、其いとなみを貶して、唯願くは御靈屋の傍に、御念佛殿律院を造營あらせ賜はゞ、是從來の夙願也、此趣を公聽に達し、わが夙願を遂げよと、又宜く、若造營成就しなば、我平生佛壇に安置し奉りて、恒に天下安穩邦壽永算を祈願し奉る、二品の本尊、幷に御舍利を、御念佛殿に安置し奉り、不斷念佛の法音をして、永く宣流せしむる、雅額萬歲の後迄も、君が御代と共に榮へよと云々、元祿七戌年十月廿五日、台德院殿御廟へ御參詣の時、御寶前にて、和歌を詠じたまふ、

德川將軍廟

〔三緣山志〕三 第六守廟清務

神祖御開國の前より、深く佛乘を信敬し給ひ、諸宗を興隆し賜ふ事、史にみち記にあまりける中に、我宗は鼻祖親氏君より不變の御宗門たるを以て、秀康卿、譜家は結城の下炬宗たるを以、譜臣ひそかに葬し奉りしかど、台命正化の御憲令によりて是を改む、大猷院殿は、神祖に奉未隨侍の御願により、別に台德院殿に告使ありて、天台へ御隨葬有しにより、嚴有院殿、常憲院殿も、同く其儀にまかせられしかど、萬部御法會ハ、御新葬御法事ともに、東叡と同く、御當山へ仰付られ、御尊牌御安置あり、文照院殿、有章院殿は、往世東照宮の御遺志に依て御葬送あり、其後有德院殿の御代、はじめて新制仰出され、舊範願る御校規と相見しかど、猶舊制にもどり給はず、爰に御當山七

ケ所の靈界、もと方丈の一手に御供養あるべきの所、御崇敬御供養、もし猥雜の因もいかゞと、そのかみ台德院殿の御時より、別當の一職を定め、儀規清制これに與りし後、七ケ所を八院にて守護し奉るべきに定まり、御幼君の御方々、又は尾紀へ御入輿ありしは、別に三社をひらきて、列格准守の名あり、八ケ院は各何れも、封戸の配證はわかちありといへども、座列の高下はなし、

〔護持院古記錄寫〕寶曆六丙子十一月、青山因幡守殿役者役僧之譯相尋候處、左之四ケ院同樣、

増上寺、金地院、護持院、東海寺、

右四ケ院之義は、役者と唱候、其外は御內禮之寺ニ而も、役僧と唱、役者とは唱不レ申候、役者と唱候事者、寺格拔群之事ニ候得者、役者と唱候分は、獨禮相勤申候、假令御內禮之寺ニ而も、役僧は獨禮不二相成一、依レ之、格別ニ心得有レ之樣被二申聞一候事、

古事類苑

宗教部六十一

佛教六十一

傳通院

傳通院ハ、壽經寺ト號ス、東京小石川ニ在リ、足利幕府ノ初メ、僧了譽ノ開基セシ所ニシテ、家康ノ母氏ヲ此ニ葬ルニ至リ、寺號ヲ以テ其法名ト爲シ德川氏ノ菩提所ト爲リシカバ、寺運ノ肥盛ナルコト增上寺ニ亞グリ、淨土宗關東十八檀林ノ一タリ、

〔和漢三才圖會 六十七 武藏〕無量山壽經寺 在小石川 淨土 寺領六百石 號傳通院 了譽上人開基 關東十八箇寺談林內 東照神君母公菩提所 水野右衞門大夫忠政之女、慶長七年八月廿九日逝去、 坊舍三箇寺 所化寮百軒 末寺十箇寺

〔傳通院記〕傳通院緣起聞書

一御太母樣 ○德川家康母水野氏 御他界者、慶長十七年八月廿九日也、御院號、御在世之間者、智香院樣申候、御他界已後、當生得之寺號取而、御院號、國師御付替被成奉、號傳通院殿蓉譽光岳智香大禪定尼、

一相國樣爲上意寺地打開、小高處見立候樣にと被仰付、從見御老中國師御出、只今之傳通院屋敷御見立被成候、

一自本爲傳通院寺號事、其證據者、增上寺第二代聽譽傳書云、傳通院相承門人等云々、年號者、天安四年乙卯三月十八日、先師酉譽上人相傳弟子聽譽在判、又淨家私抄物閱口具云、傳通院聖敎目錄之事、開山了譽、前聖敎酉譽奉寄進之、先三重負之內、上段分、中段分、下段分、各聖敎目錄在之等、

創建沿革

〔檀林譯書〕御尋　起立の年號開山の名前の譯　小石川　傳通院

一元來傳通院は、應永廿二未年酉譽聖冏上人世に三日月上人といふの開基にして、今の地より四五町乾の方、極樂水又吉水といふといふ所に有之候處、今の地に引移させられ候、其所謂者、權現樣御太母智光院樣、淨土宗御歸依不淺、然るに京都御一覽の御所望によつて、御上洛あり、五畿內御歷覽、伏見城において不圖御病惱、無程御逝去、任御遺言、依鈞命、御遺骸を當院に奉移、增上寺中興觀智國師に被仰付、御弔有之、則御法號を改奉、號傳通院殿蓉譽光岳智香大禪定尼、御法事嚴重に被仰出候、然る處、當山の舊地甚狹隘たるによつて、觀智國師の願に任せ、境內可相定旨上意にて、則本多上野介殿、土井大炊頭殿、成瀨隼人正殿、右三士新地境內御見分の上、御普請奉行被仰付、御廟所、本堂、方丈、庫裏、經藏、鎭守社、開山堂、鐘樓、中門、總門、下馬札、其外塔頭、學寮、外園等に至迄御建立、且御佛具御莊嚴等不淺全備にて、本堂を御靈屋に被仰付、傳通院樣尊影、尊牌御安置被遊候、則增上寺觀智國師の弟子、正譽廓山上人を中興開山として、住職被仰付、且爲御佛供料、於小石川鄉三百石御寄附、其後常紫衣の上意を蒙り、參內の節、道中人馬の御朱印被下置候、且又權現樣廓山江御契約上意之事、

〔本朝高僧傳〕淨十七　武州無量山傳通沙門聖冏傳

釋聖冏、字了譽、本貫常州、父志摩守源某、佐竹義光之裔也、中略　應永二十二年、相攸於小石川、結茅專修、檀眼如宴、遂成梵刹、號傳通院、冏居六年、老病時至、中略　合掌念佛唱化、應永二十七年九月二十七日也、世壽如偈、臘六十五、壙封全身於寺裏焉、

堂塔

〔江戶名所圖會〕十三　無量山傳通院　壽經寺と號す、小石川牛天神乾の方二町ばかりにあり、淨家十八檀林の一員なり、本尊阿彌陀如來は、惠心僧都の作にして、當寺は明德年間、了譽上人開創せられし梵刹たり、寮舍百餘宇あり

御靈屋　傳通院殿の御遺屋なり、遺言に依て、御廟を建られ、御法號をとりて、寺の號に呼せらる、御尊骸は、同所宗慶寺に納め奉

ゑる、和漢三才圖會に、慶長七年八月二十九日逝去とあり、壬開山堂本堂の右にあり八幡宮同所にあり、天正年間、一老翁、夢想に依て、八幡宮の文字ある石の額を得たり、別當は縣久院と號す、辨財天祠當社は、もと白山御殿の地にありて、白山氷川と共に、ならびてありしが女體權現の宮は、此地にうつして、辨天に勸請なし奉つるといへり、多久藏主稻荷社境内裏門の方にあり、往古狐僧に化し、自ら多久藏主と稱して、夜な〳〵寮に來り、法を論ずといへり、爰に稻荷に勸請して、當寺の護法神とせり、學常念佛堂塔中眞珠院の持なり新念佛堂同じく瑞雲院の持なり大黑天寺中福聚院にあり、葉閒沿涼云く、初井を掘とて、其土中より此尊像を得たる故に、其井を御福の井と號く、むかしは傳通院の境内なりしが、今は其井松平播磨侯の構の内となれりといふ、按に、極樂水に混ぜしならん、彼井も又同じ屋數の中にあり、わつかの所に井泉ふたつあるも、恐くは其一ツならん、緣起に云く、當寺に安置の大黑天は、三國傳來の靈像にして、大黑、多門、辨天等の三神一體の尊影あり、孝德天皇の御宇、高麗國の大臣餘來の土古といへる人、本邦に携へ來りて、近江國蒲生郡にありしを、明和年間、豐譽權然上人感得して、こゝに安置せらる、甲子日參詣群集せり、堂の額は福聚殿とあり、當山第二十三世知空師の筆なり、經堂正面に聖教寶の額をかけ、内に明本の一代藏經全部を收む、故ありて當山の法寶とあふぎ貴ぶとあり、○中略當寺は淨土宗流の一派にして、所化學寮の談林なり、學業を勵むる輩、聚螢映雪の功を積て、眼を經論の面にさらし、五重相傳の窻の前には、五念修行の悉地を求め、三心具足の床のうへには、住不退轉の法義を期す、

〔有德院殿御實紀附錄十五〕小石川傳通院火災にかゝりしころ、寺僧より再建の事ねぎ申ければ、其時、靈雲寺、凌雲院に問せ玉ふ樣、凡堂塔伽藍莫大の營造をなす事は、天下太平のもとゐともなり、祖先追福のためともなり、佛祖の眞意にも應ずべきやとありしに、二僧答へて、寺院に莊嚴をかざること何の益ある事も候はず、たゞむかしより、長者などいへる富貴の徒、佛道尊信のあまり、佛の居る所を莊飾し、金銀財寶ををしまず建立する事にて、佛祖の本意とする事にはあらずと申ける、さらばこたび傳通院經營あらむには、衆僧會集して、法務を行ふとき事かゝざるほどにいとなむべし、莊麗をなすべからずと仰出されて、舊に比すれば、大に制度を減せられたり、

〔天明集成絲綸錄二十九〕安永三午年六月

寺社奉行江

小石川傳通院

寺領

右御靈屋殿、本堂并方丈向、其外及大破候ニ付、御修復之儀相願候、先達而被仰出候趣も有之、難相成願ニ候得共、御靈牌殿大破之趣無餘儀ニ付、別段之譯を以、銀貳百枚被下候間、輕御修復いたし、其餘者貸附利金之内を以、如何樣にも取繕候樣、去巳五月申渡候處、所々至而大破ニ付、難及自力付而、何分御修復被成下候樣、再應相願候、元文年中御金被下、其節申渡之趣を以、小破之節、無由斷取繕候はゞ、至而大破ニ及候儀者有之間敷事ニ候、畢竟御修復所之樣ニ存、大破之節者御修復被成下候儀と相心得、平日之取繕等閑故之儀と相聞候、併此度之儀者、至而及大破、先達而被下置候銀子ニ而ハ、難行屆由付、格別の譯を以、手輕御修復被成下候、以來之儀者、縱及大破候共、容易ニ御修復者被成下間敷候間、其趣相心得、常々無油斷、小破之内取繕、不及大破樣可致候、尤先達而被下置候銀子者、可有返納候、

右之通、可被申渡候、

六月

〔寺鑑〕下淨土宗　無量山　紫衣檀林　小石川　傳通院

御朱印　高百三拾石

〔檀林譯書〕御尊　御朱印高并國郡村名の譯　小石川　傳通院〇中略

傳通院樣〇徳川家康母　御供料三百石　右者武藏國豐島郡小石川鄕、雜司ヶ谷村、駒込村、牛込村、袋村、下村、染井村、　月溪院樣〇徳川家光男　御供料三百石　右者同國同郡赤羽根村　都合六百石にて御座候

外に　隆崇院樣〇徳川綱重妻　御供料三拾俵　智幻院樣〇徳川家宣男　御供料百俵　理岸院樣〇徳川家宣男　御供料百俵　正雲院樣〇徳川吉宗女　御供料貳拾俵　都合貳百五拾俵

右御藏米にて御寄附

寺職

以上

傳通院

(增上寺方丈隱居後住一件)覺

此度傳通院後住、紫衣檀林後住、香衣檀林後住之儀、御當山方丈書上、○中略 傳通院之儀ハ、御菩提所之儀ニ御座候得者、暫之內迚も、無住ニ有之候而者、尊靈樣方御供養式等、其外万一近火等非常之節、甚不安心之儀ニ方丈被奉存候、此段も爲念申上候、以上、

閏二月○寬政四年

增上寺役者

右之通申出候ニ付、傳通院以下、紫衣、香衣檀林之內、暫無住ニ而も、差支之儀ハ無之哉之段、相尋候處、猶又別紙之通申出候、○中略

覺

紫衣檀林、香衣檀林之內、暫く無住ニ有之候而も、差支之儀者無之哉之旨、御尋ニ御座候、此段紫衣檀林之內、御菩提所者、格別之儀ニ御座候得者、正しく無住之節ニ無之候而者、申上兼候得共、其餘紫衣檀林、香衣檀林之內、暫く無住ニ有之候而も、右無住中者、其寺役僧、并末寺之內ニ而、万事守護仕候儀、勿論御當山ゟも、無住中火之元、其外万事入念致守護候樣、申達候儀ニ御座候得者、無住ニ有之候而も、暫之內ニ候得者、差支之儀も無御座候、○中略

右依御尋申上候、以上、

閏二月○寬政四年

增上寺役者

用途

(天明集成絲綸錄二十九)安永二巳年五月

御勘定奉行江

金百兩

小石川 傳通院

右者本院○傳通院樣爲御供料、被遊御寄附候間、貸附ニいたし置、右利金を以、永々無怠轉取計候樣可

名所 所在 創建

致候、

右之趣可被申渡候、金子之儀者、御勘定奉行可被談候、

右之通、寺社奉行江申渡候間、可被得其意候、

五月

幡隨院

幡隨院ハ、新知恩寺ト號ス、東京淺草ニ在リ、舊ト神田駿河臺ニ在リシガ、後湯島ニ遷リ、更ニ今ノ地ニ移ル、僧知譽ノ開基スル所ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

〔檀林誌 中〕御朱印五拾石　十八檀林所　神田山新知恩寺幡隨院

山門清闢

慶長十五年、駿河臺にて創開す、開山は知譽幡隨意上人也、

案るに、今の昌平橋内土手通りより東南は、山田宗悅より西北、松永市右衛門屋敷までを寺境とす、寛永九年江戸繪圖に昌平橋なし、今の山田宗悅屋敷に寺二軒あり、是幡隨院なり、本堂跡は松永氏と見えたり、今も猶時々骨を堀出す事あり、妙龍水も同氏屋敷の内にありて、此邊は何の井戸も用にたゝず、唯此水のみ清涼なり、又いかなる旱魃にも乾事なし、

其後、湯島天神男坂下板倉越中守(二万石、備中庭瀬城主)の邸の隅の方にうつれり、今も其所に井あり、かの妙龍水の名ごりにて名水あり、

元寛日記云、二年丙辰、大御所樣薨、駿府より江戸に移りしかば、屋敷狹かりぬべしとて、神田明神其外万隨寺等は先へおくり、明神は神田の臺へうつし、万隨寺は下谷へ移すと、(下略)按るに、

寺格　寺領

文字もたがひ、院號寺號の相違もあれど、當山なるべし、〇中略始は新知恩寺とのみ呼びしを、いつの比よりか、今の號を常とす、新知恩寺は、洛陽の本山開山師一旦住職の地、賜紫にて再び下向し、當山を開創せられしかば、彼號を用られしかど、後代いつとなく院號のみを稱號とせり、〇中略元より開祖の道德、宗門は殊更、他宗にも時にとりて對すべき法匠なかりしかば、大樹を始め、尊卑上下一同歸依敬信のたなごゝろを合せ、德を歎嘉し、行化を稱讃せざる者なし、されば西國の新法、對治の命數、千万の中より、撰擧にあづかり、老年をいとひなく國のため法のため、万里の山川を渉渡せられし事、護法扶宗の厚心、末代の今も、誰か其功勳に及ぶものあるべき、全く法王哀愍、衆生の無盡におはしませしかば、開所の梵刹數十に及ぶ、然りといへども、當山其中第一と稱すべし、一々の淨刹、佛祖の報恩に擬し、下化所生弘通宗門の爲ならずと云ふ事なし、〇中略

梵閣本末

本堂　元和五年建立の時は、十八間四面、四方欄干、向碑八檀と云、明曆火災、轉地巳後、元祿の始再興、十六間に十五間と云、寂仙上人代也、其のち又明和中再建、今の本堂是也、京間十五間に十三間、向碑唐破風作り、此時願通上人大に助勢し、黃金六百兩餘の寄附あり本尊の左右に諸檀家の位牌、各檀に一間宛を分ち安置す、　本尊彌陀佛三尊、五具足莊嚴、其外有之、

香衣檀林淺草幡隨院〇中略

〔寺鑑下淨土宗〕神田山

御朱印　高五拾石

右拾貳ヶ寺〇幡隨院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御緣頰、御老中御列座被仰渡之、　住職御禮御白書院、獨禮、御閾之外二疊目　年頭御禮大廣間、獨禮座一同、　御暇無之、　獻上一東一本

名稱 所在 創建 沿革

靈山寺

靈山寺ハ、東京本所ニ在リ、僧大潮ノ開基スル所ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

〔和漢三才圖會 六十七 武藏〕常在山靈山寺　在本庄 淨土 同○寺領五十石　號二尊教院、大潮和尚開基、

〔檀林誌 本〕靈山寺

大潮開本

開山念蓮社專譽大潮上人、又作超 近江國人にて、志學の丶ち、山城國八幡志水の正法寺に 寺領五百石 住職の時、東照宮、伏見城に御座の御時は、より〳〵めさせられ、常に佛法御雜談などをも問はせ給へり、されば靈岩上人を南都より召出されし時も、御使を奉はりけり、其後江戸に下向し、慶長六年辛丑三月、駿河臺にて一字起立のむね仰出され、境內二万坪を賜へり、翌年より十八檀林御造營の御沙汰初りし時、學寮創立のため、白銀七十貫目を賜り、土木の費用となし給ひ、其員一に定められければ、同十一年大御臺所より寺領五拾石を御寄附、

此大御臺所とは、崇源院殿の御事なり、後御朱印に成し下さる、

此時本田氏女民部卿の局、とりわき師檀の約深かりければ、大奥の女中をも勸諭せられ、叢林の助勢あられ、學寮も三十餘字も造り、子院八字に及ぶといふ、是より先、大超上人、山城國伏見土橋に新正法寺を草立し、八幡を移されし心にて、寺號を同せられ、後新の字を除 下總國船橋に至り、淨勝寺を中興し、江戸にうつりても、初淺草壽松院に二世の住持とす、元より親智國師と蓮馨寺にての同學にて、法交深かりければ、修德及ばずといへども、道俗の信伏、惡淨の論學は、互に讓與の程なりしとぞ、されば國師登營の度ごとに同伴し、御前の法問には、必列衆の一員なれば、大奥女中方

にも、檀家多く、八幡在住も國師の吹擧なれば、五百石の御朱印も彼寺へ賜へり、凡そ行狀の年譜兩三の書に出るといへども、審詳に及ばず、一期の德光再び傳ふる事希なりといへども、所開の數寺の中、當山檀林の員一に及べる事、行實篤學のまからしむる所にして、淨門の英傑釋林の義佛たりし事推知すべし、

山門隆夷

二世了學上人（行實緣山の中に述）の代に至り、東都年々繁榮し、武家第宅により、當山の地、旗下の士に賜はり、湯島にうつる、猶學徒四方より雲集し、法問論議怠る事なかりしかど、再興堂宇にいとまなくして、自然と好學の徒は他山に走りしなり、

三世天嶺和尚は、民部局の類族なれば、學臘未滿なれども、公命により住職しけれども、土木に精神を勵さるゝにぞ、御朱印をも賜り、又中門をも御造營に及びける、されど修學いとまなかりければ、學徒自然と離散するにぞ、何となく檀林の規則中絶す、第五世存守和尚の時、又淺草に轉地す、此時大衆も減無により、境內漸く四千五百坪を賜ふ、是檀林廢絕に及びければなり、六世俊應上人、貞享元年、開祖二世の功業の地に落しをなげき、又十八員の減少を愁へ、檀林を再建せんとす、然れども檀林職の再興は、行解雙備の高德ならでは、他方より德行を慕ひ來るまじければ、法幢再び建がたしと謙遜し、自ら願により寺を辭し、武州熊谷寺に移り、上件の儀を執政、寺社司、幷に緣山に達せらる、俊應の願達其理ありと官許こゝに免由により、貞享三年二月、三緣山の學頭鑑了和尚を乞て住せしめけるに、いくばくならずして遷化あり、俊應時至らずやと愁つゝ、又增上寺二臘明譽廓瑩上人を請じて住職たらしむ、此時瑩公寺院狹隘にして大衆を入がたき旨官に訴へ、加倍の地を乞れしかば、往年の二万坪にも復しがたく、當今東都繁榮にて、錐寸の地もあらざれば、寺院の境內、諸宗ともに年々に減除の時なれば、倍增いかゞと評決也、いかゞと思ふ

寺格
寺領

者ども多かりしかど、瑩公の希願、神佛の冥鑑にも通じ、官人も道理をや感じ給ひけむ、公命ありて、元祿二年二月、今の地に移され、七千坪の境内と定めらる、此時二千六百坪餘を增給へり、是瑩公の智行雙備、平常公上にも聞し召れ、當時の博達、檀林再興の職に堪べき淨器の碩德なるをしろしめしければなり、

〔寺鑑下淨土宗〕常在山　香衣檀林　右同斷　本所　靈山寺

御朱印　高五拾石〇中略

右拾貳ケ寺〇幡隨院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御緣頬、御老中御列座被仰渡之、　住職御禮、御白書院、獨禮御國之外二疊目　年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、　御暇無之、　獻上一束一本、

〔靈山寺文書〕りやうせん寺へ、まいねんうちまきつかわし候事、

五十石

むま慶長十一年十月十五日　黑印

つぼね
まいる

覺

一高五拾石　　武州　せんだがや村之内

〔靈山寺文書〕武藏國葛飾郡本所　　京知恩院末増上寺觸下淨土宗　靈山寺

高五十石

大猷院樣〇德川家光御朱印　寛永十三年十一月九日〇下略

名稱 所在 創建

靈巖寺

靈巖寺ハ、東京深川ニ在リ、僧靈巖ノ開基スル所ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

〔和漢三才圖會 六十七 武藏〕道本山靈巖寺 在深川 淨土寺領五十石 雄譽松風靈巖上人開基 有勢至堂、地藏堂、念佛堂、 坊舍八箇寺 所化寮七十五軒

〔檀林誌 未〕御朱印五拾石 十八檀林隨一 境內 古跡拜領 三万千五百六拾七坪餘

道本山東海院靈巖寺

剏開靈林

開祖靈巖上人、慶長八年、安房國にありて、眞宗の要義を說法せられしかば、里見安房守忠義、師に歸依せられしにより、藩老東條民部左衛門、金藤九郎右衛門、是又同じく隨喜し、大綱村にて一宇を建立し、佛法山大綱寺大巖院と名く、東西七丁南北十丁を寺境とし、專ら所化を集會し、法問論義の談所と定め、規條清差を新たに定め、生實飯沼緣山鎌倉に鼎約して、宗門の大檀林とす、〇中略生實に住職の間隨從ありし所化、又は遠近の國郡より師の德風をしたひ、雲水の輩集會し、常に法問講釋間斷ある事なかりしかば、寺門日々に繁榮し、眞俗の輿隆、東關に最頂たり、

師の行狀は、予文政四年度濟傳三卷を述す、故に玆に略、

天正十八年御入國の時、上總國佐貫城二万石を內藤彌次右衛門家長に賜れり、慶長五年八月、家長伏見城にて討死ありければ、子息左馬介政長父封を繼、入部の時、菩提所を開基し、花香谷村慶相山佐貫院善昌寺と名く、

善昌寺の號は、始三河國加茂郡龜井戶にありて、開山光蓮社演譽上人は、內藤甚五右衛門淸政が子也、伯父淸長、天正十八年、佐貫城に移封の時隨ひ來り、小寺を營み、內藤家の香花の地とせしかど、慶長八卯年七月十四日歸寂せしかば、此時無住なり、〇中略

此時師の高德遠近に振ひしかば、內藤氏より使者を以懇に請待し、大衆法向結夏の料を寄附し、宗門弘通心のまゝにせらるべし、外護檀越となりまゐらせむとありしかば、利樂有情は沙門の本意と是を承諾し、內藤家に對話の上、善昌寺を檀林所と改ため定めらる、是より大網より善昌寺に住持せられしかば、大巖院には弟子を住持せしめられければ、かの寺に殘りし雲水も、又生實にて師の舊友たりし僧、歸國の上、長育せし弟子など、遠近の國々より集り來りければ、いつしか飯沼鎌倉瓜蓮生實などの檀林にも、おさ〳〵劣らぬ程の衆徒あり、此比江戶にては、東照宮御在城にて、時々營中にて法問論議聽聞遊ばされしかば、其度ごとに師を其員に召れ、御前にて御賞感を蒙り奉られけるに、慶長八年、諸國の寺院、私に法問論議し、檀林の規條をとゞめられ、〇中略公上より命ありて、東關十八の外は、是を嚴制させられしかば、師の德風、且集會大衆の員數等により、當山其隨一に定り、日旗傳灯の大法師位に仰付らる、これより師いよ〳〵大衆の敎誡宗門弘通に丹精を抽でらる、

當山創建

師房總止錫の間、檀家の請により、時々出府あられしかど、宿所は法緣の寺院、又は在家の寄寓なり、是本意にあらず、又隨伴の中自然心得違ありては、佛祖への慚愧おそるべき事なり、いかにも小寺を一字起立し、宿院となさばやと、寬永元年、此旨を檀家堀庄兵衞に談じ、われ地境を愛するにはあらざれど、宗門興隆、眞俗繁榮利益有情のためなれば、いかにもして江戶にうつり、一字建立せんとありし時、堀氏いかにも承りぬ、出府のせつ地所を見立んと、方々尋求けるに、日本橋より十丁ほど下に廣き蘆原あり潮さし引沼にて、向井將監忠勝の下屋鋪なり、是を向井氏に乞けるに、望にまかすべしとありしかば、師欣然として東西一丁餘南北二丁程乞うけ、茶船をあまた集め、土を運び、地の高き所にても五六尺づゝ堤を築き、低所は七八尺又は一丈餘宛築けるに、四

寺格
寺領

方の男女高貴の方々は、紙扇袖袋などにてまで土を運び、石を持よせらる、師それ〴〵わかちなく十念血脈をさづけられけるに、半年餘にして地成しかば、先假に九間に八間の本堂、七八間づつの庫裏方丈、その外雜部屋、下部屋、客寮まで、棟數六七を作りて、自ら道本山靈巖寺と名けらる、〇中略

所建諸堂

本堂　中門內二十間餘、南向、　今無〇中略　講法堂　中門の內左にあり、六間四方、塗屋なり、寬政の火災に殘りける、講法堂の三字を扁し、又天龍擁護の四字を題す、是一切經庫なり、〇中略

大方丈　度々燒失、寬政中回祿、文化中再建のところ、文政元年正月二日夜、又自火により、一圓類燒、追々立坪減少、本堂より東にあり、當時本尊幷に觀音勢至を始、こと〴〵く安置玄關內、玄關より內表座敷等悉く此所に具す、始貞嚴上人代の建坪ことに多かりし、

〔寺鑑〕淨土宗下 道本山　右同斷〇青衣檀林　深川　靈巖寺

御朱印　高五拾石〇中略

右拾貳ヶ寺〇播隨院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御緣頰、御老中御列座被仰渡之、　住職御禮、御白書院、獨禮御閾之外二疊目、　年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、　御暇無之　獻上

一東
一本

天德寺

天德寺ハ、東京芝西久保ニ在リ、僧稱念ノ開基スル所ニシテ、淨土宗ニ屬シ、江戸四箇寺ノ一タリ、

名所　所在　創建　寺格　寺領

〔江戸名所圖會　三〕光明山天德寺　和合院と號す、西久保神谷町にあり、花洛智恩院に属す、淨家江戸四箇の一にして、紫衣の地たり、支院十七宇あり、本尊阿彌陀如來は行基大士の作、開山は三蓮社緣譽稱念上人なり、師諱は吟翁、武州品川の邑に生る、（父を藤田左衞門尉道昭と云、母は富永氏、或は富田氏、）九歲にして甫て増上寺第七世觀譽上人に從つて薙染す、聰明絶倫なり、師の遷化に及びて、北總飯沼の弘經寺に至り、鎭譽和尙に謁して、淨土一乘の大戒を受、十六歲、岩附の淨國寺に住し、大に法輪を轉す、志猶世塵を厭ふが故に、後古鄕に歸りて天智庵（知或は又地に作る）を草創す、今の天德寺是なり、（天文二年の草創といふ、先師觀譽を以て開山祖とし、自二世に居る、舊地は西丸御城の邊なりしといへり、）師彌遁世の志深く、一包破笠を携へ、錫を荷ひて、洛の知恩院に至り、傍に一精舍を建て住す、是を一心院と號、（一心院は、念佛三昧の一本寺也、）晝夜不退に常行念佛を修し、新に念佛三昧の法則を製し、永世の標準とす、今諸國厭欣の道場、此法式を以て定矩とす、（花洛市原野の寂稱庵、上嵯峨の稱念寺、下嵯峨の正定院、桂の極樂寺、田井の會念寺、淀の念佛寺等を草創する事少からず、いづれも不斷念佛の道場とす、）天文廿三年の秋一心院に寂す、實に七月十九日なり、化壽四十一と聞えし、（今世間用ゆる所の二連數珠も、師の製する所にして、是を寶輪といふ、佛號を唱ふる徒、此念珠を用ひざるになし、）

〔寺鑑　下　淨土宗〕光明山　右同斷○紫衣御書提所　西久保　天德寺

御朱印　高百石

右貳ヶ寺（○增上寺天德寺）住職、御白書院御緣頰、御老中御列座被仰渡之、住職御禮、御白書院、獨禮、（御國之內）（二疊目）年頭御禮、御白書院、同所　獻上（一束一卷）

吉祥寺

吉祥寺ハ、東京駒込淺嘉町ニ在リ、長祿中江戸ノ城主太田持資ノ建立セシ所ニシテ、天正年

中、德川氏ノ來テ此城ヲ改築スルヤ、寺ヲ神田駿河臺ニ移シ、明暦三年更ニ今ノ地ニ遷ス、曹洞宗關東ノ大刹ニシテ、其學寮モ亦世ニ名高ク、所化ノ幅輳常ニ數百ニ及ビシト云フ、

名稱 所在 〔和漢三才圖會六十七武藏〕諏訪山吉祥寺　在駒込　禪宗　寺領五十石

創建 沿革 太田道灌建立、而後遠山丹波守再興、○中略 地衆僧七百餘人　衆寮三十二軒

〔駒込寺院書上三〕地誌調帳　駒込　吉祥寺

吉祥寺御由緒

一長祿年中、太田左衞門大夫殿、江戸御城被築候時分井戸之内ゟ吉祥之文字すわり候金印出候ニ付、當寺建立有之候、其節之寺ハ、今之和田倉之内ニ而、諏訪明神之鎭地たるによりて、山を諏訪山と號し、井中ゟ出候金印之文字を以て、寺を吉祥寺と被名付候、

一權現樣、元龜二辛未年十二月、遠州濱松江、吉祥寺看柴被爲召、御懇之奉蒙上意、天正二年迄濱府仕罷在候、天正十壬午年十一月、來未年、御壽四拾貳歲ニ被爲成ニ付、御除厄之御懐中御守、看柴加持仕、御直ニ奉差上候、天正十二年十二月、權現樣御幼少ゟ御所持被爲遊候由ニ而、興聖菩薩御作毘沙門天王尊像、御奉納被爲遊、則毘沙門堂御建立被下置候、天正十九年辛卯年三月六日、紋紗之紫衣拜領仕、以後代々着用可仕旨被仰渡候、同年六月六日於御前、吉祥寺儀者、御府内一宗第一之寺格と奉蒙上意候、

一其後當寺五代之住持元照と申僧ハ、御歸依被爲遊、毎度登城被爲仰付、御聞法被爲遊候、慶長十二丁未年六月三日任上意、法門結緣之御血脈奉授與候、其時分ゟ、當寺代々上意を以住職仕、天下國家之御祈禱、始終無怠慢相勤申候、○中略

一其後六代之住持泉龍、○中略 元和七辛酉年十月、山門御建立被下置、御臺樣御守本尊觀世音之像、右山門之本尊御納被爲遊、權現樣爲御菩提御茶湯料金八百兩御寄進被爲遊候、○中略

右之通ニ御座候、以上、

文政九戌年十二月　　　駒込吉祥寺印

〔江戸名所圖會十五〕諏訪山吉祥寺　同所(○駒込浅嘉町)壹町ばかり北の方にあり、曹洞の禪宗にして、江戸檀林の一なり、因て旃檀林と號す、(諏訪明神の鎮地なる故に、山と號す、今猶境内に鎮座す、)本尊は釋迦如來、開山は青巖周陽禪師なり、當寺は長祿年中、太田持資江戸城を營し頃、かしこに井を堀しに、土中より吉祥増上の文字ある銅印を得たり、依吉瑞なりとて、一宇を建、直に吉祥庵と號く、(今御城中和田倉、其舊地なりとぞ、)其後北條幕下、遠山丹波守中興す、天正年中、御城御造營の時、(五代目用山和尚、現住の頃なり、)神田の臺に地を賜ひ、寺領等を附せられ、遂に明暦三年、今の地にうつさる、(水道橋は、當寺神田の臺にありし頃の、表門の地なりとぞ、故に寛文年中、江戸繪圖にも、水道橋を吉祥寺橋と記せり、)

堂塔

〔駒込寺院書上三〕地誌調帳　　駒込吉祥寺

一宗旨者、禪宗曹洞宗ニ御座候、　一本寺者、上州御嶽永源寺ニ候、(○中略)　一本堂　間口拾間、奥行八間　一本尊釋迦尊、木ニ而坐像、(但シ丈ケ八寸、横五寸五分、兩様文殊、普賢なり、坐像長ケ七寸四分宛、)　一當寺開山青巖周陽大和尚　(天文十一壬寅年七月十八日ニ寂○中略)　一中門　但し三間四方　一表門(但し軒高サ壹丈四尺、門之明を壹丈壹尺、奥行貳間也、)　一廻廊　但し横貳拾五間　一衆寮　但し間口九間　一僧堂(但し間口拾壹間三尺、奥行九間三尺、)　一經藏(但し四方三間三尺、高サ四丈三尺、)　一學寮拾貳軒(間口三間半、奥行八間、)

右ハ明暦頃ハ、貳拾七軒ニ候處、其後度々類燒ニ付減少仕候、

寺領

〔寺鑑下曹洞宗〕諏訪山　　駒込吉祥寺

右住職、於寺社御奉行所被仰渡、

御朱印　高五拾石

〔駒込寺院書上三〕地誌調帳　　駒込吉祥寺

一當寺拜領地總坪數壹万七千三百五十五坪餘

名稱所在

創建

泉岳寺

泉岳寺ハ、東京芝高輪ニ在リ、德川家康ノ命ニ由リ、僧宗關ノ開基スル所ニシテ、曹洞宗ニ屬シ、同宗江戸三箇寺ノ一タリ、

本寺ハ、播州赤穗ノ城主、淺野長矩ヲ葬レル處ニシテ、元祿十五年、長矩ノ遺臣大石良雄等四十餘人、其主ノ爲ニ讐ヲ報ジ、擧リテ屠腹スルヤ、亦皆此ニ葬ル、故ニ其墓碑幷ニ遺物等、今猶ホ寺中ニ存セリ、

〔江戸名所圖會 三〕萬松山泉岳寺　海道の右にあり、野州富田の大中寺に屬す、曹洞宗江戸三箇寺の一員たり、(橋場總泉寺、芝青松寺、當寺等也、)坊舍三宇、學寮九字あり、當寺は往古慶長年間、台命を奉じて、門庵宗關和尚、外櫻田の地に創建する所の禪刹なり、後寛永十八年辛巳、再命ありて、寺を今の地に移したりと云ふ、

〔江戸砂子 五 三田〕萬松山泉岳寺　大中寺末　曹洞宗江戸三ケ寺の内　高輪

開山門庵宗關和尚　むかしはあざ布の臺にあり、正保年中此處にうつる、

〔芝寺社書上 四〕地誌調帳　芝 泉岳寺

一泉岳寺起立 幷 由緒

野州富田大中寺十一代建寶宗寅和尚者、今川治部大輔義元舍弟、神君樣御同甲也、殊ニ有道譽、御歸依尤渥、右宗寅和尚得法之弟子、宗關和尚、俗姓今川氏、道譽秀逸、宗寅和尚と同、神君樣、台德院樣御歸依、每度江城江被召出、於殿中預齋會、法問商量數回、厥禪話御參得被爲遊候、無程大中

寺住職被仰付、乃大中寺十二代也、雖然住所依爲遠境、兩御所樣御相談之上、慶長十七年壬子、於外櫻田寺地拜領、伽藍造營、開山と記成、山號萬松、寺名泉岳者、專奉祝松平之孫枝榮于萬歲、德川之源泉溢于海岳之儀之旨、宗關和尚達上聞、兩御所樣有御滿悅、而蒙台許、號萬松山泉岳寺云々、

堂塔

〔芝寺社書上 四〕地誌調帳　本寺野州富田大中寺末　禪曹洞宗　芝　萬松山泉岳寺

一本堂　梁間三間、桁行拾間半　九尺ニ拾間半シコロ　向拜三間二間　貳間ニ拾間半　下屋一間ニ五間之葺下シ、

右寶暦三癸酉年四月廿六日再建、○中略

一本尊釋迦如來　木座像　丈ヶ壹尺四寸

一左脇文殊菩薩　木座像　丈ヶ七寸

一右脇普賢菩薩　木座像　丈ヶ七寸

寺格

〔寺格帳 下 曹洞宗〕同○江戸三ヶ寺　芝泉岳寺

右三ヶ寺○總寧寺、青松寺、泉岳寺、住職、寺社奉行江伺之上、本寺より申付ル、

一住職御禮無之

一年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上壹束一本、

〔芝寺社書上 四〕地誌調帳　本寺野州富田大中寺末　禪曹洞宗　芝　萬松山泉岳寺○中略

一延寶五年巳十一月、御府内曹洞一派、江戸三箇寺觸頭等御定蒙仰、關三箇寺ニ相代リ、遠國之諸寺院迄諸般取計仕候、

寺領

〔寺鑑 下 曹洞宗〕萬松山　江戸三ヶ寺 總寧寺 青松寺　芝　泉岳寺

〔芝寺社書上 四〕地誌調帳　本寺野州富田大中寺末　禪曹洞宗　芝　萬松山泉岳寺

一境内拜領地貳万八拾五坪内門前地千百七拾七坪

〔芝寺社書上 四〕地誌調帳

本寺 野州富田大中寺末 禪曹洞宗 芝 萬松山泉岳寺 略○中

一當寺之儀、關東之大會ニ而、諸國參學之僧侶數百餘員、山中之學寮ニ留錫仕、學道修業仕候、

〔江戸名所圖會 三〕萬松山泉岳寺 略○中 當寺は、淺野家の香花院にして、其家累代の兆域あり、又淺野内匠頭長矩、及び義士四十七人の石塔あり、方丈より南の丘の半腹にあり、傍に當寺住僧建る所の石碑あり、其旨趣を注す、二月三月の四日、及び正月七月の十六日等には、英名を追慕して、ここに集ふ人少からず、又當寺に義士等の遺物を收藏する事多し、

〔芝寺社書上 四〕地誌調帳

本寺 野州富田大中寺末 禪曹洞宗 芝 泉岳寺

寶物 略○中

一祭文 右者、冷光院殿 長矩○淺野 牌前江、四十七人、一同ニ獻、大石良雄之筆、左之通、

祭文

元祿十五年十二月十五日、只今、面々名謁申通、大石内藏助始而、御足輕寺坂吉衛門迄、都合四十七人進死、臣等謹而奉レ告亡君之尊靈、去年三月十四日、尊君刃傷口事、吉良上野介殿ノ御事ヲ、私共不レ奉レ存、其子細、然所、尊君者御生害、上野介殿者御存命、御公裁之上ハ、私共如レ斯之企、非尊君ノ御心ニ而、却而御怒リ奉レ恐入候ヘドモ、我等共ニ君之食祿申、共ニ不レ戴天之儀難レ默止、共ニ不可レ踏地文、無レ恥不可レ申候得共於泉下可レ申上、詞モ無之候、因レ茲可レ奉レ繼御意趣奉レ存候ヨリ以來、今日ヲ相待申候、一日三秋ノ思御座候、四十七人ノ輩、起雨踏雪一日二日漸一食仕候、老衰ノ者、病身ノモノ、數々進死申候得共、蟷螂頰臂笑相招、彌尊君之御恥辱相遺可レ申カト奉レ存候得共、不レ得レ止事、昨夜半申合、上野介殿御宅江推參仕、則上野介殿御供申、是迄參上仕候、此小脇指ハ、先年、尊君ノ御秘藏、我等ニ被レ下置候處、唯今反獻仕候、御墓ノ下ニ、御尊靈於レ有之者、再ビ御手被レ下、遂レ玉ヘ御憤鬱ヲ、右之段、四十七人者共、一同ニ謹而申上候、敬白、

名稱　所在　創建　沿革　寺格　寺領

青松寺

青松寺ハ、東京芝愛宕町ニ在リ、太田持資ノ創建ニシテ、僧俊德ヲ以テ開山トス、曹洞宗ニ屬シ、同宗江戸三箇寺ノ一タリ、

〔和漢三才圖會 六十七 武藏〕萬年山青松寺　在愛宕下　禪宗
後柏原院永正年中、太田道灌建立、曹洞宗江戸三箇寺之內、　坊舍五箇寺　末寺十箇寺

〔江戸名所圖會 三〕萬年山青松寺　同〇愛宕下南に隣る、曹洞派の禪刹にして、江戸三箇寺の一員たり、本尊は釋迦如來、開山を雲岡俊德大和尙といふ、文明年間、太田左衞門佐持資草創す、初は貝塚の地にありしを、後或云天正、又慶長共、此地に遷さる、故に今も俗に貝塚青松寺と稱せり、一に青松寺の舊地は、今の平川馬場の南の方なりと云々、南向亭云く、青松甲斐と云人草創す、其舊跡は、糀町の貝塚、當時玉虫八左衞門といへる屋鋪にありて、彼墓を甲斐塚と云と、菊岡沾涼は、青松宮內と云人の建立なりといへり、又當寺に、太田道灌の塚ありといへ共、詳ならず、當寺の後の山を、含海山と號く、眺望愛宕山に等しく、美景の地なり、總門の額、萬年山の三大字は閩沙門道霈の筆なり、

〔太田家記〕穎玫ヨリ九代　太田備中守資淸公 源六郎道眞 左衞門大夫自得軒 〇中略
愛宕下青松寺、元は貝塚ニ有之處、慶長十九年櫻田へ引、又其後只今の地へ引れし由、此寺も道眞公〇太田資淸御開基と申傳へ、道眞公の御影も有之處、是も寺回祿之時及燒失、其頃之住職面目なくして、御出入止之由、此寺は龍隱寺末寺にして、江都三ケ寺の中也、

〔寺格帳 曹洞宗 下〕高貳拾貳石 御朱印　同〇江戸三箇寺　貝塚　青松寺〇中略
右三ケ寺〇總泉寺、青松寺、泉岳寺、住職、寺社奉行所江伺之上、本寺より申付ル、
一住職御禮無之

雜載

一年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上壹束壹本、

〔天保集成絲綸錄五十九〕文政二卯年五月

大目付江

貝塚　青松寺

武藏　信濃

右本堂其外燒失ニ付、再建爲助成、右二ヶ國、幷御府內武家方、在町、勸化御免、寺社奉行連印之勸化狀持參、役僧とも、當卯八月ゟ來ル午七月迄、御料、私領、寺社領、在町、可致巡行候間、信仰之輩者、物の多少によらす、可致寄進旨、御料者御代官、私領者領主地頭より、可被申渡候、

卯五月

右之通、可被相觸候、

名稱　所在　創建

總泉寺

總泉寺ハ、東京淺草橋場ニ在リ、僧宗俊ノ開基ニシテ、曹洞宗ニ屬シ、同宗江戶三箇寺ノ一タリ、

〔和漢三才圖會武藏六十七〕宗泉寺　在淺草未石濱村　禪宗

佐竹家菩提所、擧宗和尚開基、曹洞宗江戶三箇寺內、

〔江戶名所圖會十七〕妙龜山總泉寺　曹洞派の禪林にして、江戶三箇寺の一員たり、開山は匾叟宗俊和尚と號す、當寺は千葉家の香花院なり、永祿二年小田原北條家の分限帳に、武州石濱の會下寺とあるは、當寺の事を云なるべし、

千葉氏墓○註略　宇津宮彌三郞入道墓○註略

寺格　寺領

名稱　所在　創建

抑當寺は正法眼藏の妙理をきわめし、實相無相の心印をひらく、向上の一路には、著相實有の草を拂ひ、言下の一喝には、異學執解の塵を飛す、公案の床の前には、一千七百の則を重て、公心傳心を傳へ、坐禪の衾のもとには、朝三暮四の助を得て、文字言句の話頭を離たり、

江戸三ヶ寺　僧錄　總泉寺〇中略

〔寺格帳下曹洞宗〕一高貳拾石　御朱印

右三ヶ寺〇總泉寺、青松寺、泉岳寺、住職、寺社奉行所江伺之上、本寺ゟ申付ル、

一住職御禮無之

一年頭御禮大廣間、獨禮座一同、獻上壹束壹本、

麟祥院

麟祥院ハ、東京湯島ニ在リ、寛永年中、德川家光ノ乳母春日局ノ創立スル所ニシテ、僧渭川ヲ以テ開山トス、寺內ニ局ノ影堂有リ、臨濟宗ニ屬シ、同宗江戸四箇寺ノ一タリ、

〔江戸名所圖會十四〕天澤山麟祥院　同所〇湯島神社北の方にあり、臨濟宗江戸四箇寺の一なり、[illegible]天澤寺と稱せしが、春日局の法號を取て麟祥院とあらたむ、本尊は釋迦如來、開山は渭川劉和尚、京師花園妙心寺より招かせらる本願は春日局なり、三代將軍の御乳母人、齋藤利三の女にして、稻葉侯正成の室なり、寛永十八年九月十四日、六十五歳にして沒す、麟祥院殿從二位了義大姉と號す、寺傳曰、寛永元年甲子、二代大將軍〇德川秀忠の命によつて、當寺を春日局の菩提所とし、且其殿閣をこゝに移す、天和二年回祿す、其以前の襖、十八枚を存す、梅之間、柳之間、寒山拾得等皆雪谷の筆なり、同五年、三代大將軍〇家光不豫にあらせられしとき、局自ら、東照大權現の神前に詣で、禱て曰、妾が身不淨なりといへども、苟も乳味を奉りて、乳母の稱を汚し、歲月祠奉れり、且將軍は萬民の父母也、若今大故あるときは、國家の安危にかかれり、因て願はくは、妾が身を以、是に替り奉らむ、若快復あらしめば、忽に身に病苦を受嘗て醫

寺格 寺領

藥を用ずして死せむと云々、其衷誠正に感應ありて、實を經ず常にならせたまふ、仍て身を終ふまで、針灸藥餌を用ひずとぞ、同六年、洛に上り參內す、西三條大納言日條卿兄弟に準せられ、春日局の號を賜ふ、遂に天顏後水尾帝を拜し、天盃を頂戴す、此時良尙親王、ならびに實條卿光廣卿より和歌を贈らる、○中略 影堂本堂の左にあり、二位局の親影を置、此像は台命によつて、狩野探幽、局の生前装束を著せし姿を、目のあたりに寫せし像なり、表装も大將軍命ぜらるゝ所にして、唐草の綸子に、卍萬の字を織入たり、毎年九月十四日、忌日たるに因て、扉を開き、參詣を許す、

〔湯島寺院書上〕湯島麟祥院

一境内拜領地　東西間口九拾間同裏巾百五間　同半　南北東之方八拾間西之方七十九間　坪數七千七百六拾三坪餘

一臨濟宗　一京花園妙心寺　一天澤山麟祥院

一當院起立之儀者、寛永元甲子年秋、春日局願に付、台德院樣○德川秀忠台命を以、當地所、并御明キ御殿拜領仕、殿堂造立いたし、則局之猶子神龍和尙生國來由等、相分不申候、住職いたし候、然處、神龍和尙義、依病ニ退院いたし、同七年庚午六月、野州大梯村太白山龍興寺之住潤川和尙、高德之由、春日局被聞傳、當寺住職に請待被致、則開山と仰ギ被申候、其節、依爲春日局菩提所、寛永十一甲戌年十二月十二日、從大猷院樣○德川家光武州豐島郡柏木村之內ニ於て、寺領百石御寄附被遊候、同年局法號を潤川和尙に需被申候ニ付、麟祥院殿仁淵了義大姉と授與被致、則開基檀越之義ニ付、大猷院樣、台命に依て、局法號を以、天澤と改め、天澤山と唱へ、麟祥院と改號致候、○中略

右之通御座候、以上、

文政十丁亥年二月十日　麟祥院印

井上彥右衛門樣

水野丈之助樣　湯島麟祥院

〔寺格帳下禪宗濟家關山派〕一高三百石御朱印

右住職、開基旦那稻葉家ヵ申付ル、

一入院御禮、御白書院、獨禮、獻上壹束壹卷、御闕之外三疊目、

一年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、獻上壹束壹本、

瑞聖寺

瑞聖寺ハ、東京芝三田白銀町ニ在リ、寬文年中、僧木庵ノ開基ニシテ、黃檗宗ニ屬ス、

〔江戸名所圖會 七〕紫雲山瑞聖寺　白銀臺町にあり、黃檗派の禪林にして、寬文年間木庵和尙開基す、鐵牛和尙も當寺に住り佛殿には釋迦如來、脇士は迦葉阿難等の像を置り、每歲七月十五日大施餓鬼あり、

前銘幷引

武藏州荏原郡三田庄白金村、新開紫雲山瑞聖禪寺、去城二里餘、其地廣莫、前朝東海、後據目黑、然其所唱始者、青木甲斐守端山居士之竭力矣、至於山門大殿方丈、及左右大小寮舍、皆端之誠緣而所建立也、然非夙植大根、安能捨身財之若是哉、茲長松院、捐金鑄洪鐘、以鎭山門、託此勝因、追薦嚴父空印老居士、慈母心光院夫人、以助冥福、而超妙樂、幷及幽靈村野等魄、特請爲銘、知斯功德不可思議、卽不辭才拙、謾爲其銘、

銘曰

須彌作炭、大地爲爐、鑄出洪鐘、內外空虛、圓音普徧、扣擊聲舒、聞之發省、妙悟丸珠、幽冥超脫、眞性還初、十方法界、同證無餘、若是功德、至大寘如、存者往者、福寧永於、

寬文十一年歲次辛亥孟春穀旦

開山黃檗沙門木庵瑫謹銘〇中略

當寺は寬文十一年辛亥、青木甲斐守と號す端山居士旨を奉じて、此地に就て一精舍を營む、當寺是なり黃檗本師を請じて開山とす、開堂の日、鐵牛和尙をして首座とし、秉拂提唱せしむ、甲寅秋黃檗和尙再び瑞聖に住し、師に命じて分座說法、人天悅服す、乙卯三月、和尙旨を奉じ、師を以て紫雲の繼席とす、遠近の道俗來て戒を求むる者、指を屈するにたへず、丁巳春、大淸主左都督揚、大紳師の道化を慕ひ、三章を贈る、其一に曰、瑞淸正宗三十三世、其二曰、開法長興、其三曰、鐵牛株印、僧明溪が五百大阿羅漢の像五十餘幅、ならびに師の肖像を畫く、今猶鎭守の寶とす、當寺は本山の光景を模擬する所にして、其經營頗る他に異な

り、江戸黃檗宗最初創建の伽藍なり、

〔江戸名所圖會 七〕紫雲山瑞聖寺 〇中略 佛殿額 二字、靈樹の軒に掲ぐ、釋迦佛を安す、臨濟正傳三十三世黃檗木庵瑠山僧書とあり、 大雄寶殿 延寶辛酉吉旦、開山木庵瑠書とあり、 瑞聖寺 山門に掲たり、寛文辛亥正月吉日立、開山嗣祖沙門木庵書とあり、〇中略 經藏 佛殿の左に並ぶ、内に栴檀の釋迦如來の像を安す、瑞聖寺の昔の本尊なり、傳大士の像もあり、この經藏には、延寶八年下谷池端錦袋圓の元祖了翁僧都の建立なり、唐本の一切經を收む、 勸學寮 經藏の傍にあり 二間に五間、其中五局に儲けて、一字を建、拔萃學稻葉美濃守正則取寄らるゝところなりといふ、其餘書籍すべて五千餘卷を集め置く、者の爲に是を置となり、 遷佛場 同所に並ぶ、内に開山隱元禪師の像を置り、左右の柱に聯を掲ぐ、 木犀 佛殿の前、左右にあり、〇中略

〔寶曆集成綵綸錄 十九〕寛延三午年三月

黃檗宗觸頭　江戸白銀　瑞聖寺

右瑞聖寺戒檀堂、六年以前就類燒、此度再建立爲助成、御府内武家方、寺社、町方、幷武藏一國勸化御免被成下候、武家方、寺社、町中江者、當午五月ゟ同十二月迄相廻り、可致勸化候、其外在方江者、當午十月ゟ來未十月迄之内、役僧共、寺社奉行連印之勸化狀持參、御料、私領、寺社領、在町、可致巡行候間、志之輩ハ、物之多少ニ寄す、可致寄進旨、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭ゟ可致申渡候、以上、

三月

右之通、可被相觸候、

〔天保集成綵綸錄 六十一〕天保六未年四月

大目付江

黃檗派觸頭　白銀　瑞聖寺

武藏　相模　上野

右戒檀堂、其外諸堂大破ニ付、修復爲助成、右三ケ國、幷御武家方、寺社、在町、勸化御免被成下、御府内武家方、町中者、當未七月より、同十二月迄相廻り、可致勸化候、武藏外貳ケ國者、當未五月ゟ、來酉十

迄、寺社奉行連印之勸化狀持參、役僧共、御料、私領、寺社領、在町共可ㇾ致ニ通行一候間、信仰之輩者、物之多少によらず、可ㇾ致ニ寄進一旨、御領者御代官、私領者領主地頭より、可ㇾ被ニ申渡一候、

未四月

右之通、可ㇾ被ニ相觸一候、

寺格

〔寺格帳下〕禪宗黃檗派　觸頭　白金瑞聖寺〇中略

右貳ヶ寺〇海福寺瑞聖寺住職、於ニ寺社奉行所一申渡、

一住職御禮、御白書院、獨禮、獻上壹束壹卷宛、御閾之外三疊目、

一年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、獻上壹束壹卷宛、

海福寺

海福寺ハ、東京深川寺町ニ在リ、僧隱元ヲ以テ開山トス黃檗宗ノ禪刹タリ、

名勝所在

〔和漢三才圖會六十七武藏〕永壽山海福寺　在ニ深川一　同〇黃檗派

獨本師開基隱元禪師之弟子　本尊釋迦文殊普賢

創建

〔江戶名所圖會十八〕永壽山海福寺　同所〇深川　寺町通リ中程の右側にあり、黃檗派の禪林にして、江戶觸頭二箇寺の一員たり、萬治元年戊戌の創建、開山は隱元師師、中興は獨本和尙なり、本尊釋迦如來、左右に迦葉阿難十六阿羅漢等の像を安ず、開山隱元禪師の肖像もあり、〇中略

鐘樓　花鯨の銘文は、隱元禪師撰する所なり　其文左のごとし

富山洪鐘者、寬文壬子年、石川政勝本住居士、捐ニ己貲一大鐘田一、因請ニ鑄乎開山隱老(老恐元誤)和尙、永今ニ垂ニ不朽一也、時天和二年壬戌之冬、卸大假鋤、典嫁殿宇巨器等、盡者歸氏、思ニ夫先亡之本願一、忻然鳩金重新造焉、及ニ乎竣工一、知事來乞ニ銘、遂再銘ニ此、以鎸ニ其上一、銘曰、〇銘略

右 天和三年癸亥小陽吉日、臨濟正宗三十三世、永壽山海福禪寺住持沙門獨本源和南謹識

檀主 石川氏正之 正實

冶工武州江戸居住、中村喜兵衛藤原正次、

九層塔寺境のかたはらにあり、高一丈ばかりの石の塔なり、相傳ふ、武田信玄のものなりと、むかし土屋氏某、これを持傳へしが、當寺へうつし建るといへり、

〔天明集成絲綸錄三十〕安永五申年五月

黄檗宗觸頭 深川 海福寺

右本堂修復、并方丈庫裏、其外再建爲助力、御府內武家方、寺社町方、并武藏一國勸化御免被成下候、御府內武家方、寺社町中江者、當申年六月より同年十一月迄相廻り可致勸化候、其外在方江者、同年十二月より、來ル戌年正月迄之內、役僧共寺社奉行連印之勸化狀持參、御料、私領、寺社領、在町可致巡行候間、志之輩は物之多少によらず、可致寄進旨、御料者御代官、私領者領主地頭より可被申渡候、

五月

右之通、可被相觸候、

〔天保集成絲綸錄六十一〕天保五午年四月

大目付江

黄檗派觸頭 深川 海福寺

武藏 山城 攝津 美濃 尾張

右本堂、其外大破ニ付、再建修復爲助成、右五ケ國、并御府內、武家方、寺社、在町、三ケ年之間、勸化御免、寺社奉行連印之勸化狀持參、役僧共、當午四月より、來ル酉三月迄、御料、私領、寺社領、在町可致巡行候間、信仰之輩者、物之多少によらず、可致寄進、御料者御代官、私領者領主地頭より可被申渡候、

午三月

右之通、可レ被二相觸一候、

寺格

〔寺鑑 下 禪宗黃檗派〕

右二ケ寺○瑞聖寺、海福寺住職、於二寺社御奉行所一被二仰渡一、住職、御禮、御白書院獨禮、御關之外三疊目年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上一束一卷、

同○觸頭　海福寺

羅漢寺

名稱所在

羅漢寺ハ、東京本所ニ在リ、僧鐵眼ノ開基スル所ニシテ、僧象先ノ中興ニ係レリ、黃檗宗ニ屬ス、

創建沿革

〔江戸名所圖會十八〕天恩山五百大阿羅漢禪寺　本所五目堅川より南にあり、黃檗派の禪林にして、河東第一の名藍たり、開山は鐵眼禪師、中興は象先和尚、又松雲禪師を以、開山の大祖と稱す、

〔新編武藏風土記稿葛飾郡二十四〕龜戸村

羅漢寺　黃檗宗、山城國宇治萬福寺末、天恩山ト號ス、當寺ハ、沙門松雲ノ草創ニシテ、象先和尚中興ス、本尊釋迦文殊普賢ハ、長一丈六尺、五百羅漢ハ、長二尺五寸バカリ、共ニ松雲ノ手彫スル處ト云、寺傳ニ云、松雲ハ、京都ノ人ニテ、二十三ノ時、攝州瑞龍寺鐵眼ノ弟子トナリ、嘗テ豐前ノ國羅漢精舍ヘ詣シヨリ、コノ像造立ノ志アリテ、貞享年中、江戸ニ來リ、先一二軀ノ像ヲ彫テ、建立ノ志願ヲ唱ヘシニ、其事小ナラザレバ、タヤスク成ベクモアラズ、元祿六年ニ及テ、漸ク五十軀ヲ成セシニ、此事タマ〳〵桂昌院殿ノ御聽ニ達シ、十軀ヲ御寄附アリテ、勸化ノ御免ヲ蒙リシカバ、諸大名以下各寄進セシニ、不日ニ本尊以下五百羅漢悉ク成就アリ、是元祿八年ノコトナリ、其年七月、寺社奉行永井伊賀守、令ヲ傳ヘテ、本所五ノ橋ノ南ニ於テ、千五百坪ノ地ヲ賜ヒ、假ノ堂舍ヲ創立シテ、天恩山羅漢寺ト號シ、先師鐵眼ヲ請テ開山トナシ、同キ八月、黃檗山萬福寺ノ末トナレリ、夫ヨリ本堂以下ノ營立モ企シガ、寶永七年七月十一日、松雲示寂シ、其後僧月舟等看守タリシガ、イサヽカ障コトアリテ、建立ナラズ、漸假堂マテ、殆零落ニ及ビシヲ、正德三年、木山ノ指揮ニテ、象先住職トナリ、享保二年願ヒ上テ、日々市中ノ勸化ヲ始メ、風雪ヲ憚ズシテ、行乞スルコト十有餘年、終ニ萬人ノ他力ヲ以テ、本堂樓門以下悉ク落成ス、依テ象先ヲ開山ト稱ス、同九年十二月十二日、有德院殿御遊覽ノトキ、當寺ヘ渡ラセラレ、白銀若干ヲ賜ヒ、其後モシバ〳〵御立寄アリ、同十

（十九年、住持淨勝ノ時、寺社奉行仙石信濃守伺ヲ經ヘテ、寺ノ北隣ナル御用地ノ内、三千坪ヲ割テ増賜ハリ、又別ニ、寺ノ東南ニ添ヘル、民田千五百坪ヲ讓テ、境内ニ屬シ、イク程モナク、御小休ノ御茶屋ヲ建ラレ、御遊覽ノ時ノ御休所ニ定メラル、又象先曾テ、三匝堂ヲ建立ノ志願アリシニ、其コト成ズシテ、退隱セシユヘ、淨勝其志ヲ繼テ、四衆ヲ勸化シ、是モ數年ナラズシテ功ヲ竣リ、今ノ如ク、壯觀ノ靈地トナレリト云々、象先ハ寬延二年六月五日寂シ、淨勝ハ天明六年九月十七日示寂ス、當寺ハ寺領モナク、又無檀家ノ新寺ニシテ、後年修理ノ便ナケレバ、有德院殿ノ御ニ依テ、米五百俵ヲ賜ハリ、則其米ヲ、藏宿町人ニ貸與ヘテ、年々利米ヲ以テ、修理料ニ充サセラレシニ、時ノ寺僧ノ願ニテ、内百俵ハ、メマチニ其頃寺ノ費用トナシ、四百俵ノミ、内命ノゴトク、永ク修理料ニ貸與フト云フ、）

寶物、花鳥畫二枚、（有德院殿ノ御寄附ト云、阿彌陀人ノ筆ナリ、地ハ厚キ麻ノ如キ布ニテ、四方六尺許、極彩色ト見ユレド、所々剝落セシユヘ、サダカナラズ、）蠣石

觀音一軀、蠣石十六羅漢十六軀、（以上十七軀共ニ、舶來ノモノナリ、）八十華嚴經一部、（象先坐禪觀法ノ時、指血ヲシボリ、書寫ストイフ、）舍利、（象先茶毘ノ時出ヅルモノナリ、）表門、御成門、中門、（天王殿ト號ス、四天王、布袋、關羽ノ像ヲ安置セリ、）觀音堂、（右境三匝堂ト號ス、西國坂東秩父百番ノ觀音ヲ安セリ、北堂ハ象先工夫ノ圖ニシテ、登ニ從ヒ、右ヘメグリ三周シテ樓上ニ至ル、從テ右繞三匝ノ名アリ、又螺ノ形ニ似タレバトテ、俗ニサヾイ堂ト呼ブ、）鐘樓、（樓閣作リニシテ、太鼓樓ヲ兼タリ、額ハ安永三年ノ鑄造ニテ、銘ニ寺起立ノ大略ヲ錄ス、）稻荷社、（境内ノ鎭守ナリ、）開山堂、（象先ノ木像ヲ安ズ、）接待所、（毎年七月大施餓鬼ト稱シテ、當寺ニ於テ、大法會アリシトキ、諸衆參詣ノ者ニ、齋時ヲ與フル所ナリ、）御腰掛石、（本堂ノ前ニアリ、大サ四尺許ノ角石ナリ、有德院殿御腰ヲカケサセラレシモノト云、）開基松雲墓、（境内ノ墓所ニアリ、碑石ノ表ニ松雲元慶禪師ト記シ、碑陰ニ銘アリ、其文左ノゴトシ、）

雲公者、京兆人、賦性寬雄、少具正信、歲二十三而投攝之瑞龍眼和尙披緇、偶有游方之懷、拜辭飄歷海西、徑抵于豐前州羅漢精舍、瞻禮五百聖者之像、恭敬日厚、居之有年、迺有欲手彫之意、歸省之日、眼和尙果有其命、遂合素志、不堪忻然、於此貞享之間、持來武城、而始就淺草寺之枝院、勸發衆人、彫木羅漢、弘福牛和尙、垂靑而捨資助剩一尊、卽憍陳如也、然時未至乎、施者少而荏苒閱數載、元祿壬申五春、御藏之前有十六員之道俗、同富家也、結盟輔佐矣、自爾緣化響應、施利日多、竟本尊丈六釋迦文佛等、五百餘軀、縹緲現出也、前後總歷一十餘霜完成、其梵容之微妙、坐立之威儀、儼然如生、其妙手非常人所及、凡瞻禮者、爲靈山一會未散之嘆、黃檗高和尙、偶有東行、迎請點眼、而安座之場、以未獲其所、垂念特厚、幸哉、元祿乙亥八年夏五月、事達公聽、便於永井伊賀太守僧官之第、賜本境一千五百畝、雲公頒受不堪忻抃、權架屋宇、安奉之便、卽樹天恩山羅漢寺之號、勸請先師眼和尙、爲開

山祖、遂以貴其本者也、同八月、泉于黃檗山、爲末寺堂頭、高和尚賜泉置于寺、次年丕開圓滿供養之會、請諸山宗匠拈香、弘福牛和尚其一也、香語載于本錄、然後雖有屋宇撤舊圖新之意、不果、一旦罹疾、越月不起、實在於寶永庚寅七年秋七月十一日、奄然而化、時歲六十有三也、

〔續史愚抄中御門〕享保十年二月、今月、有武藏江戶本庄五百羅漢堂入佛供養云、

名所　所在　創建　沿革　堂塔

西本願寺

西本願寺ハ、東京築地ニ在リ、僧准如ノ開基ニシテ、舊ト兩國橫山町ニ在リシガ、明曆大火ノ後、今ノ地ニ移レリ、眞宗ニ屬シ、京都西本願寺ノ別院タリ、

〔和漢三才圖會武藏六十七〕西本願寺堂　在木挽町築地

〔江戶砂子一御外曲輪河南〕西本願寺　築地　京都より輪番

元祖上人より顯如上人までは一本寺なりしが、天正の頃、故あつて東西の二派にわかる、當寺を表門跡と云、御入國のみぎり、淺草ばしの內に寺地をくだし賜ふ、明曆以後此所にうつさる、はじめは干潟の海なりしが、築たて、寺地となる、

〔二十四輩順拜圖會後篇武藏一〕築地御坊　江戶築地御坊は、西本願寺御門跡御坊所たり、通じて築地御門跡と唱ふ、

本堂二十五間四面、皇太子堂、右の方にあり、總門の內僧坊五十八寺、當御堂の莊麗巍々堂々として東國に冠たり、京師本山より官僧を撰び、當坊の輪番たらしめ、關東の末派を提轄し、すべて門徒の輩をして宗法を守らしむ、

〔江戶名所圖會二〕西本願寺　同所〇築地川を隔て、北の方にあり、俗に築地の門跡とよべり、或人云、此地は明曆四年に仰の事ありて築所なりといへり、一向派にして、京都西六條よりの輪番所なり、宗派のもの、是を表方といふ、塔頭五十

七字あり、始横山町二丁目の南側裏通りにありしを、明暦大火の後、此地に移さる、准如上人を、當寺の開祖とす、(江戸名所記に、神祖御在世の時より、京都西本願寺の末寺を立られ、宗派を汲輩を勸めらるゝと云々、白石先生云く、善養寺といふ一向僧、東本願寺の建立を見て、公へ願ひて立る所なりとぞ、和漢年契に、延寶八年庚申、西本願寺立とあり、)本尊阿彌陀如來は、聖德太子の影像にして、泉州堺の信證院よりうつす、毎年七月七日立花會、十一月廿八日開山忌にて、七晝夜の法會修行あり、是を報恩講と云、又俗間御講と稱す、

東本願寺

東本願寺ハ、東京淺草ニ在リ、僧敎如ノ開基ニシテ、舊ト神田ニ在リシガ、明暦年中、今ノ地ニ移ル、眞宗ニ屬シ、京都東本願寺ノ別院タリ、

〔和漢三才圖會六十七武藏〕東本願寺堂　在淺草　坊舍二十四箇寺

〔江戸砂子二淺草〕東本願寺　御裏　京都輪番

開基敎如上人　此上人は、豐臣太閤のはからひとして、御舍弟順如上人を本寺の門跡にし給ひ敎如上人は、裏やしきに隱居ありしを、御召出あそばさせ給ひ、六條室町の末に御堂御建立ありしより、西東の本願寺と成、御裏といふも、裏屋敷におわせしゆへなり、

御當地は神田に御堂造りあり、明暦年中、當所にうつる、その舊地は、神田明神の下、今加賀屋敷といふ所なり、門跡の井とて、河岸よりに名水の井今にあり、

〔二十四輩順拜圖會後篇一武藏〕淺草御坊(江戸淺草にあり、通じて淺草御門跡と稱す、)東本願寺御門跡御坊所なり、本山より輪番加番の僧衆を來らしめ、高貴の旁に旨を伺ひ事を辨じ、兼ては關東の門末を敎示せしめ給ふ、堂宇巍々として京師の本山に次り、

本堂二十五間四面、左に鼓樓、右釣鐘堂、正面唐門、總門の内坊舍三十六ケ寺有、御門主參府あらせ給ふ時は、先當御坊に御着到あつて、御登城成し給ふ、其御格式最他に超勝せり、

〔江戸名所圖會十六〕東本願寺　新堀端大通にあり、開山敎如上人、其先本山の住職たりしを、豐臣家のはからひとして、順如上人〈敎如上人の舍弟也〉を本寺の門跡に定められ、敎如上人をば故なく退隱せしめ、裏屋鋪に置れしを、〈此故に東門跡を裏方とはいへり〉神祖覺に召出され、開祖上人の眞影を御寄附ありて、六條室町の末にて、新に御堂屋鋪を下し賜る、夫より後東西とわかる、〈其後江戸に末寺建立あり度由訴へ、則神田にて寺地を拜領す、一字を建て、京都よりの輪番所となり、江戸中の門徒を勸化す、其地今昌平橋の外加賀屋敷と唱る所也、明曆の後今の地に移されたり、〉當寺は朝鮮人來聘の砌旅館となる、

報恩寺

報恩寺ハ、東京淺草ニ在リ、親鸞ノ高足性信ノ開基ニシテ、眞宗、東本願寺派ニ屬シ、二十四輩ノ第一タリ、

名稱所在

〔和漢三才圖會六十七武藏〕法恩寺　在淺草〈東派二十餘輩之第一寺領三十石〉開基性信房

號高龍山謝德院、靈寶三十餘品之中、有敎信行證、〈六卷〉佛舍利、親鸞聖人眞像自作、飯沼天神影、性信房先世骨、〇註略

創建

〔二十四輩巡拜圖會後篇武藏一〕高龍山報恩寺〈東派院家〉　同所〈江戸淺草〉にあり

謝德院と稱す、本堂十二間四面、塔中十三坊、太子堂〈左の方にあり〉開山は性信上人なり、抑當院は高祖聖人上足の御弟子二十四輩第一飯沼性信上人の造建也、性信上人、俗姓は大中臣、常州鹿島郡の

人なり、幼名は惡五郎と呼べり、（後、與四郎と改む、）大力無雙勇猛强勢にして、心性狠戾也、曾て禮法に不拘、順讓の心なき荒者なりけるが、元久二年の春、年十八歳にして、諸國武者修行と志し、國々を巡行せしが、ゆき〳〵て紀州熊野權現に詣ふでけるに、其かへるさ都に至り、適東山吉水に參詣す、其頃法然上人、吉水の禪坊に於て、本願他力の妙要を說せられ、彌陀超世の悲願といふは、十惡の凡夫五逆の罪人も捨ずして救ひ給はんとの誓ひなれば、惡逆の身をも顧ず、ひとへに如來の悲願を信じ奉り、一念稱名念佛すれば、決定して彼國に往生せん事、更に疑ひ有べからずと、いと尊くも敎化あらせ給ふ、聽聞の貴賤道俗、門前に市を成し、錐を立べき所もなし、與四郎椽端に在て、聽聞しけるが、宿習の善因今爰に顯れしにや、大師上人の敎化ひし〳〵と胸に答、そゞろに難有尊とかりければ、發露涕泣しながら、上人の御前に出、敬白て曰く、我は東國常陸の者にて、年來の所爲には、たゞ物の命を殺し、人を惱し、惡逆のみ業とし、佛法聽聞は今日が始めなり、然るにかゝる罪深き我等なりとも、彌陀の大悲にて救はせ給ふとの御敎化、類母敢難有こそ侍らへ、あはれ願くは御弟子と成して、かゝる惡人をも化導なし給はれかしと、其儘髻を伐て、堅固の信者と成りにけり、法然上人、與四郎が實ある志を感じ給ひ、扨も世に殊勝なる若者かな、いかに善信坊、渠を御坊の弟子になし、能々敎化をなし給へかし、老年の源空に相從ふとも、いくばくの年か隨身せん、御坊はいまだ年若し、ゆくすへ弘法の力にも成るべきものならんとのたまひて、聖人の御弟子に賜りける、（大師上人、此與四郎を高祖聖人に附屬し給ふは、深き御こゝろの有けるにや、果して後年聖人無二の御弟子と成り、常隨給仕して、關東に殘り、念佛弘道のたすけと成り給ふとなん、此時聖人御年三十四歳、與四郎年十八歳也、）高祖善信聖人、與四郎に對し、重て他力往生の旨趣をねんごろに示し給ひ、則法名を性信と號け給ひぬ、是よりして性信坊聖人に常隨して、暫くも御側を放れたてまつらず、配所へ趣き給ふ時も、坂東へ立越、稻田に居を占め給ふに、常に御身に附添ひ申されけるが、其以前建保二年、聖人下總國へ行て、御化益まし〳〵ける時、當國豐田の庄横曾根郷中に、

大寺あり、年久敷無住と成り、朽敗の古院にして、誰も修造を加へる事なく、葎生ひかさなり、狐梟の栖とはなりぬ、聖人此荒たる伽藍の空殿を乞得たまひ、性信を爰に住院させしめ、十字名號を書して與へ給ひ、是を本尊とし、敎化なさしめ給ふ、されば性信此寺を修補し住院とし、專ら異宗を弘通せり、後年同國大高山に一宇を起立す、報恩寺是也、建保二年より星霜十九年を經て、聖人御年六十歲、貞永元年御歸洛あらせ給はんとて、東國御發足の折から、性信坊も御供申登られけるが、既に相州箱根山にて、聖人關東の方を詠めやり給ひ、御泪を浮べ仰けるは、予久敷關東に有て、衆生を化益せしほどに、偏執邪見の族も念佛を信じ、今は他力往生の敎法專ら壯ん也、併予歸洛の後はいかなる妨げありて、安心を亂し、門葉を迷しぬらんと、是のみ悲しく思ふなり、いかに性信、汝若年の昔より我に隨身し、化益を受る事、既に三十年、頗る異宗念佛の旨趣に通せり、願くは我に代り、關東に留り、門葉の徒に彌他力信心の旨を弘通せば、我に隨從給仕したらんより、百倍の功なるべしと、與々仰聞られしかば性信とかうの言なく、泪にくれて有けるが、性信如者を御弟子と思召され、かゝる重任を命じ給ふ事、生前後世の本望にこそ侍らへ、さはいへど、只々是より御別れ申さん事の何ぼう悲しく候とて、衣の袖を顏に押あて、さめ〴〵と歎かれけるが、師の命は其重き事泰山のごとし、强て辭せんも恐多し、御名殘をしくは侍らへども、仰に隨ひ、東國にとゞまり、化益を施し候べしと、御受申上られければ、聖人殆ど歎びたまひ、性信東國に留り候ものならば、親鸞が自敎導成すに異事なし、關東門葉一圓に御坊に預けさむらふなりとて、數々の什物、御製作の抄敎など附屬あらせ給ひしかば、性信謹で是を拜受し、泪と倶に聖人に引別れ、東國へ歸りけり、偖も性信坊は下總國横曾根にかへり、專修念佛を弘通有ければ、道俗歸參參集し、門前に市をなす、爰において性信佛閣を建立し、いよ〳〵宗風を壯んにせんとて、其地を求むるに、幸なる哉、飯沼といふ廣き江有て、四方の景色尤勝れたりとて、性信此江沼を埋む事數十町、其中に佛閣を營立し、都の

名稱 所在　寺格 寺領

聖人へも其趣き仰上られければ、聖人御喜悦あつて、則寺號を報恩寺と下し給ふ、性信此佛閣におひて、弘願眞實の教法、專念稱名の行業を說弘め給ふに、貴賤道俗參詣群集し、歸依信仰する事、聖人の此地に座して教導あらせ給ふに異ならず、眞宗の繁榮日にまし壯ん也と見えたり、寺記に曰、建保二年下總國横曾根に造立し、高龍山報恩寺と號すと云々、○中略爰に證智比丘尼とて、信心堅固の禪尼あり、性信上人の息女也とぞ、高祖聖人の御弟子たりしが、正元の頃、性信上人自像を造り、是を證智尼に附屬し、報恩寺の住侶を讓り、夫より十有餘年を過て、建治元年乙亥年、性信上人行年八十九歲、七月十七日念佛三昧に住して、大往生を示し給ふ、　報恩寺數百年相續し、二千餘石の領田ありしに多賀谷大夫といふ者、此所領地を押領せんと、樣々妨害を爲しほどに、寺を此江府淺草へ引うつして、靈跡を相續し、横曾根の舊地を開光寺と號くる事は、委く前にみへたり、此故に今横曾根の古跡を報恩寺村と號く、二千石の領地は多賀谷に奪れ、今は武家の所領と成れり、

東本願寺末　淺草　報恩寺

〔寺格帳 下一向宗〕御朱印一高三拾石壹斗餘

右住職、從東本願寺被申渡、

一住職御禮無之

一年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、獻上靑銅壹貫文、

善福寺

善福寺ハ、東京麻布ニ在リ、親鸞ノ高足了海ノ開基ニシテ、眞宗西本願寺派ニ屬シ、關東七箇寺ノ第一タリ、

〔江戶砂子 五 麻布〕一向宗佛閣

麻布山善福寺　西派　寺領十石　雜色町○中略　當寺世俗あ。ざ。ぶ。殿と云

〔和漢三才圖會六十七武藏〕鑑子山善福寺　在麻生四派關東七箇寺ノ内六老僧之第六也　開基了海房

當寺初天台宗也、親鸞來住說法焉、住持亦歸依爲弟子、改法名號了海、門前有銀杏大木、乃祖師所植也、有八字名號、即祖師自筆也、有了海自作木像、每年十一月三日入新水盤、令浴湯而安本座、寺僧讀彌陀經、參詣人饗酒飯、於庭令相撲、

創建

〔二十四輩巡拜圖會後篇一武藏〕鑑子山善福寺西派院家　江戸麻布にあり

鑑子山善福寺は、關東七靈場の隨一にして、聖人眞弟六老僧の第六了海願德の遺跡也、本堂本尊阿彌陀如來惠心僧都の御作也開基堂了海上人の像を安置す坊舍十三區、廣庭に大なる銀杏樹あり、當院の境內廣大にして、殊さら繁花第一の地なれば、豪家高商數百軒甍を並べ建連れり、此邊すべて當寺の領地なりともいへり、　夫當山の開祖了海上人といへる、其俗性凡ならず、鳥羽院の苗裔左大臣信實公の息男なり、信實公東海に放たれ、民間に下りて、武藏の幽邃にありて、年を經給へり、一子なき事を憂て、藏王權現に祈誓、一七日の丹誠を抽するに、其妻室夢に白布を呑むと看て、即ち懷孕せり、竟に延曆元年六月十五日一男子を產り、名けて松君と稱せり、七歲の時夢の告によつて、實相寺範賢律師の許に至りて、出家たらん事を願ふ、範賢此兒を敎示修學せしめて、名を了海と呼べり、此了海博識多才にして、三密瑜伽の行法に通達せり、又叡山に登り、靜榮僧都を師とし、四敎圓融の理を究め、中道實相の觀に明かなり、其後故鄕に歸り、父母の年齡ようやくおとろへ、了海に値事をよろこび、爰にとゞまらしめんとす、これによつて了海弘興の基趾を求めんがために、藏王權現の社祠に詣してこれを祈るに、不思議や天より白幡降下り木の梢に掛れり、了海其ところに至り見るに、一宇の古院あり、今の善福寺是なり于時一人の老翁忽然と顯はれ告て曰く、如何了海、汝を待事年久しく、此精舍は弘法大師開闢ある所にして、眞言密乘の勝區也、今幸に住持する者な

し、備此院に止り、有緣の法を求めて末代を弘度せよ、必濁世濟度の知識に値ふ事ゆらん、予は是牟尼の變作藏王菩薩なりとて、立去給ひぬ、了海大に悦び、卽此寺に住職し、朝夕說法怠る事なかりけるが、藏王菩薩の御示し、末代の要法を弘通有べき知識は、何人にやあらんと思ひ煩ひ日を送りけるが、爰に高祖聖人の敎化都鄙に普く、濁世末代の善知識なる事を聞て、扨此聖人に謁し、弘法の樣を試んと、既に聖人に謁し奉り、卽高祖聖人に向ひ、三密加持六卽止觀の法を以て問難するに、聖人答へ給ふ事、嚮の音に應ずるがごとし、漸深理の說に及で曰く、備がいふ所誠に尊とし、心蓮心月、一念三千高き事は高けれども、濁世末代の衆生、これを行ずる事能はず、無戒無道の僧俗、是を觀ずるの機有事なし、しかるに今彌陀超世の本願他力念佛の眞宗は、末世相應の要法にして、凡夫直入の眞敎也、是則釋迦出世の本懷、彌陀弘願の密意なれば、汝よく思惟せよと、嚴に說せ給ひければ、了海忽に一念發起し、卽聖人を拜し奉り、尊重偈仰なし、師弟を約して、日夜聞法の益を蒙り、信心領納せしめ申されき、されば了海身を終るまで、此靈場（善福寺也）にして眞宗を弘法する事怠りなし、　佛光寺實錄に曰、了海上人は、元應二年庚申正月廿八日、八十二歲にして寂す、武藏國阿佐布善福寺と號す、延應元年誕生、二十四歲の時、祖師圓寂云云、高祖滅後十六年、弘安元年四十歲の頃、興正寺に入、第四世の寺務と成り、永仁五年、願念晉海に寺務を讓、武州麻布に下る、（此時五十八歲）元應二年の春正月、化緣の薪つきて、廿八日卽生後念の素懷を遂給ひけり、（以上、大谷遺跡錄に、是を正し識す、）　了海自作の像を開基堂に安置す、毎年十一月三日に、新敷盤に、此像を入、湯を以て洗ひ、再び本座に居へ置、彌陀經を讀誦し、參詣の諸人に赤飯濁酒を與へ、廣庭にて相撲をとらしむ、是了海上人の遺言也と云云、（都て麻布七鄕の町民ども、此了海堂を修補し、氏神のごとく信敬す、故に堂前に鰐口繪馬など掛りたり、）　享保の記には、高祖聖人當國行化のとき、當寺に入給ふ、了海坊、聖人に歸依して、御弟子と成り、聖人又了海の扶を得て、爰にとゞまり、弘法あらせ給ひ、御杖の木を地にさし給ひけるに、（此杖銀杏の樹にて）逆に生じ、枝葉四方

に布茂り、老木と成り、今に存在す、了海、永仁二甲午年中冬上旬第六日寂せりと(建仁元年辛酉林鐘十五日出生ス)筆記せり、遺跡錄に是を正して、享保記誤多しとて、佛光寺の記錄を以て證となせり、私におもへらく、當院寺說のごとく、開基堂の廣庭に銀杏樹あり、是聖人のさし給ふ御杖の生じたる事世に瞭し、人こぞつて是を稱讃す、然る時は享保の記にいふごとく、聖人此院に入御し給ふ事、强ち誤記とも云べからず、しかれども了海上人の年齡、入寂の年曆、佛光寺の記錄と大に異なり、いづれか是なりとせん、後學これを糺せ、　什寶聖德皇の御木像御自作、八字の名號等を安す、

寺格 寺領

〔寺鑑一向宗下〕龜子山　後麻布山　西本願寺末　麻布　善福寺

獻上 青銅壹貫文　右住職、西本願寺ゟ申渡有之、　住職御禮無之年頭御禮大廣間、獨禮座一同、

御朱印　高拾石

雜載

〔武州文書御府內下〕麻布善福寺所藏

掟

一去今兩年、一向宗對他宗、度々宗師問答出來、自今以後被停止了、既一向宗之絕以來及六十年由候處、以古之筋目、至于探題他宗者、公事不可有際限、造意基也、一人成共就招入他宗者、可爲罪科事、

一庚申歲、長尾景虎出張、依之大坂度々如緩入者、越國へ加賀衆就亂入者、分國中、一向宗改先規可建立旨申屆處、彼行一圓無之候、誠無曲次第候、雖然申合上者、當國對一向宗、不可有異儀事

右門徒中へ此趣爲申聞、可被存其旨狀如件、

永祿九年丙寅十月二日　阿佐布

○按ズル、ニ阿佐布ハ、豐島郡麻布ニシテ、江戸砂子五ニハ麻布又阿左布ト書セリ、故ニ又善福寺ヲ古クハ阿佐布ト云ヒシ如シ、卽チ前ニ引ク、江戸砂子ノ文ノ如シ、又此令狀ハ北條氏康ナ

名稱　所在　創建　沿革

ラン、

日輪寺

日輪寺ハ、東京淺草ニ在リ、舊ト芝崎村今神田橋邊ニ在リテ、芝崎道場ト稱ス、僧了圓ノ開基ニシテ、天台宗ニ屬セシガ、住持某ノ時、遊行僧他阿ノ徒弟トナリ、時宗ニ改メタリト云フ、慶長八年今ノ地ニ移セリ、

〔和漢三才圖會 六十七武藏〕日輪寺　在淺草、寺中四坊アリ　開基遊行上人、本尊阿彌陀、

〔淺草時宗神田山日輪寺其阿上人話〕當寺は開山了圓、天台宗にて、芝崎村に在り、芝崎道場と號、神田橋内、今榊原式部大輔、鳥居丹波守、酒井左衞門尉屋敷舊跡也、平親王將門を葬し神田大明神を崇、堺内の鎭守とす、今榊原家の庭の泉水は、此社の御手洗水なり、芝崎村の鎭守とす、于時天慶三年其後將門靈倚祟ありしを、遊行他阿上人此寺に來り、將門に戒名蓮阿彌陀佛と附、其靈を弔ひ、是より祟りなし、其時の日輪寺の住持、他阿の弟子と成、改時宗となる、當時マデ五百年　天正十八年、芝崎村より今ノ本町四丁目○此間字虫損ニ移さる、今舊跡道場橋の號あり、慶長八年、此邊町家と成て、淺草の沈土地四千六百九十二坪被下移之、其比此邊に寺社人家共一軒も無之、此時神田大明神は今の地に移され、日輪寺はめつざいの穢ありとて、神主の持となれり、日輪寺は淺草今の寺町に唯一寺有之處、明暦火災後、本願寺、誓願寺等、此邊に移され、今は裏通となり門前町家も地代一坪拾八錢ヅツにて、漸一ケ年金三拾兩計收納云々、時宗開山一遍上人より、藤澤遊行上人三十三代の手跡日輪寺に有之、古筆代々極出し來ル處、日輪寺二十九世其阿上人代、明和九年壬辰二月二十九日火災、寶物櫃持出シ、六鄕伊賀守屋敷前田甫にて不殘燒失、附置僧幷持人とも燒死云々、

右天明戊申年五月二日の話也

稱名寺

名稱　所在　創建　堂塔

稱名寺ハ、武藏國久良岐郡金澤村ニ在リ、北條實時ノ建立ナリ、故ニ又實時ヲモ稱名寺ト稱ス、眞言律宗ニ屬シ、奈良西大寺ニ隷セリ、域內ノ文庫ハ、實時、顯時、貞顯ノ三世、廣ク內外ノ書籍ヲ蒐集セシ所ニシテ、世ニ謂ユル金澤文庫是ナリ、尙ホ金澤文庫ノ事ハ、文學部書籍篇文庫條ニ在レバ、宜シク就テ見ルベシ、

〔和漢三才圖會〕六十七相模 金澤山稱名寺 在金澤 眞言律

〔新編武藏風土記稿〕七十五久良岐郡 寺前村

稱名寺(境內六万八千四百四十六坪餘)金澤山彌勒院ト號ス、古義眞言律宗ニシテ南都西大寺ノ末ナリ、當寺草創縁起ニ云、金澤稱名寺ハ、人皇八十九代龜山帝御宇、北條時政四代ノ末孫、北條越前守平朝臣實時本願ニテ、其子入道正五位下行前越後守平顯時、文永中ニ力ヲ戮セテ、七堂伽藍ノ大梵刹ヲ創建云々、開山審海上人、妙性律師ト號ス、師ノ行德、律家ニハ棟梁トナリ、密家ニハ名匠トナリ、朝暮ノ勤業怠コトナク、若干ノ靈驗アリシカバ、龜山帝叡慮淺カラズ、寶祚萬歲ノ勅願所トナレリ、唐將三藏齎將セシ時持來リシ、今ノ本尊一切經、及ビ佛繪、佛道具等、勅命ニヨリ悉クコノ靈場ニ納リシト云々、本願主實時ハ、建治二年十月二十三日卒シ、稱名寺殿正慧大禪門ト稱ス、其子顯時、家號ヲ金澤ト改メ、正安三年三月二十八日卒ス、法名慧日大禪定門、開山審海ハ、正安ノ頃六月三日ノ寂トノミ傳フ、當寺所藏文書ノ內、元弘三年寺領免許ノ狀ニモ、當寺自元爲勅願寺之上、當殿殊可被抽祈禱之誠精、就中寺領等、爲知行地領掌、不可有相違者、云々ト見エタリ、サレバ寺領モ古クヨリ數多アリシナルベケレド、ソノ寄附セラレシ始ヲ、悉クニハ詳ニセズ、今姑ク文書ニ出デタルモノヲイハヾ、正和四年二月一日、實時ノ後家慧性尼、下總國埴生庄內山口鄕、幷ニ南スドテノ村ヲ寄附シ、元亨三年六月二十日、相模守高時、修理權大夫貞顯奉ヲ多田平二郎氏家ニ所領ヲ附セラレ、正慶元年二月十六日、武藏守貞將、下總國下河邊庄內赤岩鄕(永亨十一年寄進狀ニハ、赤岩十四ケ村トアリ)信濃國石村鄕、武藏國六浦庄富田鄕(今者郡稱里谷)ヲ附シ、正平二十六年二月二十七日、右馬頭某、六浦庄內釜里谷(載ノ富田鄕ノ事ナルベシ)金澤用鄕ヲ寄附ス、トアリ、此餘建武二年四月ノ文書ニ、下總國東庄上代鄕內田八段中云々、去正和三年九月十八日東六郎盛義沽却、同十一月二日安堵下知狀、同四年十月十五日沽券狀、同五年七月二十三日下知狀、無相違之間、送知行年序之狀云々ト載セ、及永德元年八月三日ノ狀ニ、金澤稱名寺領加賀國輕海鄕、與刑部少輔長康所領上總國金田保內高柳鄕、同國佐貫鄕內百貫文下地相博事、互證文分明

寺領

ノ上者、領掌不レ可レ有二相違一云々トアリ、殊ニ經澤鄕ハ、別ニ貞和四年御年貢結解ト云モノ傳ヘタレバ、是等皆往古ヨリノ寺領ナル事明ケシ、小田原役帳ニハ、金澤稱名寺領七十七貫文、久良岐郡金澤ニ伏ス、其餘幻庵御新造知行分百三十六貫九百五十文、久良岐郡金澤稱名寺分壬寅檢地辻ト載タリ、コレニヨレバ、當時寺領ノ外幻庵內室ノ知行ヲモ拋持セシコト知ラル、天正十九年御朱印寺領百石ヲ賜ハリシハ、全ク七十七貫文ノ地ヲ、石高ニ改テ賜ヒシナリ、元亨三年癸亥二月二十四日、御三世律師湛睿、結界ノ作法ヲ行フ時記セシ圖アリ、圓融門ヲ入リテ向ヒニ池アリ、池中ニ島アリ、橋ヲ二所ニ架ス、ソノ向ヒニ金堂ヲ建リ、此金堂ハ、文保元年五月十五日木作始セシ由末ニ載ル文書ニ見エタリ、金堂ノ向ニ講堂アリ、右ニ方丈、左ニ兩界堂ト云モノ見エ、池ノ左ノ方ニ本堂アリ、本堂ノ右ニ五重ノ塔聳ヘ、左ニ新宮アリ、其傍ニ別當坊建ツ、五重塔ノ後ノ方ニ、顯時貞時ノ石塔アリ、其後ノ山閣ニ文庫アリ、又講堂ノ左ニスコシキ流ヲ帶テ、僧房並ビ立リ、又其左ニ普光寺殿御廟トアリ、○中略

本堂六間四面、南向、本尊彌勒菩薩、運慶ノ作、立像、長五尺三寸、草創綠起ニ、大檀那執權職、北條武藏大守修理大夫平朝臣貞顯、後ニ彌勒堂ヲ構ヘテ、後本尊當來慈氏尊ヲ安置シ奉ルト、是ナリ、本堂ノ艮ノ山ニ、本願塔ト云フアリ、ソコヲリンノ谷ト云、又同ク遂ニ、谷殿ト云塔アリ、寺僧ハ龜ケ谷殿ノ塔ト云、元亨ノ圖ニハ、コノ脇ニ塔一ツアリ、コノ外今ハ本願塔ノ右ニ二基、左ニ一基見ユ、前ノ一基ヲ合セ、四基ハ何人ノ塔ナルヲ傳ヘザレド、トニカク金澤支族ニテ、コノ餘ハ、茶毘セシモノニヤ、サレバ、近キ頃、金澤大藏少輔千秋ガ母ノ願ニヨリ、埋リシ碑ヲ直セシ時、スセキノ骨ノ類ヲ堀出セシコトアリ、骨ヲ入シモノナルベシトイヒツタフ、

〔尊卑分脈平氏四〕義時
- 泰時
- 實泰金澤五郎
  - 實時掃部助、越後守、號二稱名寺一、
    - 顯時五郎、越後守、始時方、
      - 貞顯修理大夫、號二金澤一、
        - 貞時
      - 顯實駿河、伊豫守、甘繩、左近、父同自害、號二甘繩一、貞時高時同時自害、

〔集古文書三十三打渡〕康安三年打渡武藏國金澤稱名寺藏

稱名寺雜掌光信申、當寺內阿彌陀堂敷地、幷靈場事、任去月廿九日御施行之旨、古尾谷刑部大輔入道代官相共沙汰付下地於寺家候了、依渡狀如件、

康安二年卯月二十日　　兵部大輔代左衛門尉信斗花押

〔集古文書〕二十九 下知狀　應安七年下知狀 武藏國金澤稱名寺藏

金澤稱名寺雜掌賴惠申、武藏國金澤郷內當地敷地等事、帶御寄進狀所歎申也、先立依申請被成吹擧村上河內入道正貞畢、所詮任理運可有其沙汰之狀、依仰執達如件、

應安七年九月二日　　武藏 判

上杉兵部少輔入道殿

〔集古文書〕四十二 寄附狀　北條貞將寄附狀 武藏國金澤稱名寺藏

下總國下河邊庄內赤岩郷、信濃國石村郷、武藏國六浦庄富田郷今者稱釜里谷、此所々者、爲不輸之地、永代奉寄附當寺候、此外、祖父二代之間寄附之所々者、如本知行御管領不可有相違候、天下泰平之御祈念可被致精誠候、恐々謹言、

正慶元年二月十六日　　武藏守貞將花押

稱名寺長老

〔稱名寺文書〕註進　稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永享結解狀事

合八十貫文內

六十九貫六百文　寺納　八貫文　代官給　一貫文　德妙衣料　八百文　夫領路錢兩度四人分年貢運上時

三百文　今津間方酒直　三百文　六浦六郎方禮儀普○請錢之時　已上八十貫文

右所勘定狀如件

永享十一年三月三日　　政所憲意花押

註進　稱名寺領上總國佐貫郷御年貢米嘉吉元結解狀事

合五十七石六斗八升內

三十九石四斗一升六合　寺納（此内一石三斗七升六合分ニ付、代一貫三百七十六文納之、）　六石　損口

國下行

二斗　斗口頭　六斗　井料　八斗　百姓稅　八斗　屋敷立替　二斗　口雜用　二石八斗

國雜用　一石　唯道給分　五石一斗六升　代官給　七斗四合　國未進、此内（六斗定使立狀、斗四合竹內方、）一

已上五十七石六斗八升

二石五斗　大豆　寺納

右所勘定狀如件

嘉吉元年辛酉十月一日　　政所文聖（花押）

〔和漢三才圖會相模六十七〕金澤山稱名寺（○中略）寺領百石

〔集古文書下知狀二十九〕應永廿九年下知狀（武藏國金澤稱名寺藏）

用途

金澤稱名寺造營用脚勸進事

右於六浦庄內當寺門前、人別二文、馱別三文宛取之、可被修其功之狀如件、

應永廿九年七月十七日　　沙彌（花押）

〔新編武藏風土記稿久良岐郡七十五〕寺前村

寺制

稱名寺（○中略）開山自筆定規一

定當寺條々規式之事

一每月不闕四分說戒廣誦ノ事、隨現住ノ地（○地恐比誤）丘之數、當其臘次之位可誦比丘戒本、（但白月八日、十四日也、黑月ニハ未必シモ定、）若在比丘ノ位不暗誦戒本人ハ不許共住、（夏中每日可有同誦、）

一現住之沙彌、今夏以前暗誦沙彌經、安居九旬之間、每日可同誦、若今夏以前、不暗誦畢沙彌、不餝舊住新住、不可許住寺、

參酌

一每月八日諸比丘集一處、可誦比丘戒本、沙彌衆同集別堂、可被誦沙彌經、
一僧徒他行時、必可用如法同伴、行者淨人爲伴、不許遊行、
一除寺中公役、輙召行者淨人、或遣他處、若爲出行之所徒、不可妨庫裏雜務也、
右五ヶ條、規式所定置如此、所以然者、第一二三式目者、爲順戒律之意、備自行增進、第四制意者爲除在家之譏嫌、通犯戒之惡緣、第五禁制者、爲且止知事之憂、且成僧家之作務、所備憲章也、仍二科條除不可違失、

弘安七年二月日　　住持比丘審海

〔廻國雜記〕金澤にて、時宗の庵の侍りけるに、立よりて、茶を所望しけるに、庭に殘菊の黃なるを見てよめる、

誰愛にほりうつしけん金澤や黃なる花さく菊の一本

この在所に、稱名寺といへる律院侍り、ことのほかなる古所にて、伽藍などもさりぬべきさまなる所々順禮し侍けり、三重の塔婆にまうでけるに、老僧に行あひぬ、この塔の由來などたづねければ、それにこそ、楊貴妃の玉のすだれ二かけを安置し侍れ、我はからひにて侍ましかば、一見させ侍るべき物をとて、懇切なる芳志に見え侍りき、既に下向せんとしけるに、この僧、いろ〳〵に思案して申やう、しばらくあひまち侍れ、住寺に申こゝろみんとて、僧立入ぬ、やゝありて立歸りていふ樣、此玉すだれ、當寺の重寶として、每年三月十五日に、取出すよりほかには、かたく禁制し侍ども、拙老經廻の義、前後其例有がたく侍れば、衆僧談合して侍りて、一見をゆるし侍るべきよし申す、まことにふしぎなる機緣なり、簾の長さ三尺四寸、ひろさは四尺ばかりにて、水精のほそさ、世のつねの簾よりも猶ほそく、かたちは見え侍らず、玉妃のそのいにしへに、九花帳に掛侍りけんことなど、思ひやり侍れば、千古の感情、今更肝に銘じて、昔人袖を濕し侍き、

違き世のかたみを殘す玉籬思ひもかけぬ袖の露哉・

大善寺

大善寺ハ、武藏國多摩郡八王子ニ在リ、僧牛秀ノ開基ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

名稱
所在
創建

〔和漢三才圖會武藏六十七〕大善寺　在瀧山　同〔淨土宗〕寺領五十石　談林十八箇寺内

〔檀林誌戊〕御朱印拾石　代境内壹万五千坪　武州多摩郡八王子　觀池山往生院大善寺

發開正因

開山讃譽牛秀上人は、同國立川村領主立川能登守清房法名清房院淨安居士と號す男、母鈴木佐渡守重親女法名法信院妙西禪尼川越蓮馨寺感譽上人の室に剃度し、稟性柔順、信行雙修の高匠なり、法門論議怠りなく、宗傳皆稟の、ち、自ら思念すらく、凡法門の弘通は人にありて、末代の化益は其人を得るにあり、われ先檀林をひらき、傳戒傳法の正業を傳ふるに於ては、四方の宗徒、遠近輻湊すべし、その中には必す弘通宗法の大導師を得べしと、これより有緣に募りて、伽藍を起立せんと、當國瀧山は舊邑に近しと、天正十三年、當山を開基す、此時城主北條陸奥守氏照、歸依助勢し、堂宇速に成就す、蓋臣ことく〱檀家と成しかば、又慈根寺村にうつす、此時氏照本宗氏直の許にても、師の高德をのべられしかば、末々は小田原へも請せられ、一字起立あるべしとなり、先其のち北條家一族、甘繩左衛門大夫平氏繁の請により、相模國矢部村に大善寺をひらき、又同國平塚宿にも大善寺を開創有しとぞ、

當山舊記に云、此三ヶ寺内、一ヶ寺は、必檀林所となさんと心願ありと云々、然るに矢部大善寺

寺格
寺領

の記を閲るに、彼開山は辨蓮社長譽上人にて、慶長十九年九月十五日寂とあり、しかる時は別人なるべし、今當山の記何によりて志るされ、古來より傳來せしにや、不審、又長譽は牛秀の法類にて、ひそかに讓られしかば、後人開山と思へるにや、

天正十八年六月廿三日、慈根寺城（元八王子と云）落ちぬ、これにより先城主氏照は、小田原に籠陣、七月十一日自殺、落城の日、檀越の審士二百八十三人なり、（法名列下）依て寺門も前田上杉等がために燒亡せし上、再建の檀那滅家に便りなく、終に寺を二里東なる八王子宿に引移建堂、慶長七年秋同郡日野に大昌寺をひらき、隱栖念佛す、同十巳年六月十二日、大昌寺にて入寂、八十二才、

道場勝區

本堂（十二間四方、梁十一間半、）寬文七未年、廣譽上人再建、向牌正面に、葵御紋三付有之、

方丈（七間半 三間半）　同佛間（二間半 二間）　六世船譽上人、寬永中建、其後生譽上人修復、又元祿十一寅年修復、

○中略

像畫瑞靈

本尊阿彌陀佛　座像三尺、中尊ハ延寶三卯年、豎玄上人、江戸佛師法橋玄慶順入道に造らしむ、觀勢二尊は、十三世宏譽上人代、何れも施主有之、

位牌所本尊　古本尊也、（一尺六寸）惠心僧都作、

方丈佛中尊立像彌陀三尺、此外厨子入傳授佛（三尺）、

〔寺鑑（下 浄土宗）〕御朱印　高拾石　外境内一万五千坪　右同斷○香衣檀林　瀧山　大善寺

右拾貳ヶ寺（○傳通院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、浄國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、）之住職、御白書院御緣頰、御老中御列座被仰渡之、　住職御禮、御白書院、獨禮（御閾之外 二疊目）、　年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、　御暇無之　獻上（一束一本）

名稱 所在

妙法寺

妙法寺ハ、武藏國多摩郡堀之内村ニ在リ、日蓮宗一致派ニ屬ス、寺寶日蓮ノ像ハ、日朗ノ作ニシテ、世ニ厄除御影ト稱シ、著名ナリ、

〔江戸名所圖會十一〕日圓山妙法寺　堀の內村にあり、日蓮宗一致派にして、頗る壯大の寺院たり、宗祖日蓮大士の靈像は、世に除厄の御影と稱す、日朗上人の作にして、其先は碑文谷の妙法華寺にありしを、元祿の頃故ありて、法華寺を天台宗に改られし頃、此靈像をば當寺に移しまゐらすといへり、當寺住侶日性師の代なり　相傳ふ、弘長元年辛酉、日蓮上人四十歲伊豆の伊東へ配流せらる、日朗師隨身して其地に至らんとすれど、此事協はず、依其時上人の命により、日朗師は鎌倉由井の濱に止り、日夜師の赦免を祈請す、或夕同じ海上にして、一箇の靈木を感得し、日蓮上人の眞像を手刻し、常に仕へて怠らず、此御影は、宗祖大師の御像を造るの權輿なり、諸天感應の時至りてや、弘長三年癸亥五月赦免ありて、日蓮上人鎌倉に還り給ふ、其頃此尊像を見て感悅ましく、我心神今より此木像にうつれり、永く來際に至る迄、救護衆生の利益無窮ならん、我既に四十二歲にして敎を得しかば、此木像に除厄の號を稱ふべしとて、自ら點眼なし給ふとなり、

加持符有信の輩、三七日の間、此符に對し、正念に唱題誦經すれば、寄願成就するとて、諸人これを受る、病を患ふるものは、其病床のあたり、壁上或は家の柱などへ貼す、故に世俗蝦御符といへり、相傳ふ、日蓮上人、伊豆の伊東なりける配所に在せし頃、八郞左衛門といへるもの、離病を患ふ、依て此妙符を授與し給ひ靈應あり、後日朗師是を傳はりしより已降、世々に相承するといへり、

當寺は遙に都下を離れたりといへども、靈驗著き故に、諸人遠きを厭はずして步行を運び渴仰す、每年七月法華千部、十月十三日御影供を修行す、其間群參稻麻の如し、

〔堀之内妙法寺記〕武州多摩郡堀之内日圓山妙法寺之記

厄除日蓮大菩薩は、往昔人皇八十九代、龜山院の御宇、弘長元辛酉年夏、高祖御弘通の時、大難四ヶ度の最初、豆州伊東の浦へ御流罪の砌、御弟子日朗、至孝萬人に勝れ、配所まで御供せんとて、由井の濱にて共に御船に乘らんとし給ふ所に、警固の武士大に怒て、鎌倉より御下知なれば、流人の外隨從叶ふまじとて、はや纜をときければ、日朗力なく砂場にふしまろび歎き給へば、高祖も日朗の至孝なるを御感有て、ともに名殘をおしみ給ひ、慰喩し給ひて、月西山に入るを見ては、日蓮伊東に在とをもへ日の東方に出るをみては、日朗かまくらにありと思はんと仰有ければ、漸々高祖の御詞を力に鎌倉へ歸りてより、日夜赦免の御祈禱のみ、月日を送り、夜ごとに由井の濱へ出て、伊東の方にむかひ御祈念有しが、ある時日もはや西山に入、浦風の音のみ烈しく、心も絶々とする折しも、海上にあやしき光り有ければ、日朗あやしむ所に、波風はげしく、忽打上たるに、一の靈木なり、日朗いよ〳〵ふしぎのおもひをなし、我此濱にありて師に別れ奉りてより、幼兒の母を失ふがごとし、忙然として正法を弘むるに力なし、傳きく、周の武王は父の像を刻て、萬民のうれひを救ひし例によりて、師の像を造立し奉り、開運の誓ひ、また遠く末代の一切衆生に大緣を結ばしめんとおもふ志願有といへども、たゞ尊像に刻の靈木なきによりて、空しく年を越たり、今幸に此靈木を得て、宿願既に滿りとて、則携へ歸り、誦經のいとまに、一刀三禮にて彫刻し奉り、成就の日より生身の高祖に仕ふがごとく、尊敬し奉り御祈念有しかば、程なく弘長三癸亥年、御赦免ありて、鎌倉へ御入有て、一度此尊像を御覽じて感悅まし〳〵、天汝が至孝をおもふて、魂魄此像にうつれり、是誠に丁蘭が母の像を刻仕へしかば、魂木像に入がごとし、我在世は限あり、此像は末法萬年外、未來際に至るまで、利益無窮ならんと宣へり、先に伊東八郎左衞門尉難病を受し時、授與したる妙守有、今汝に授くべし、我歲既に四十二なり、今より此像を厄除と名づけ、此妙

守をあたへ、末代の衆生の求願を成就せしめんと仰有ければ、日朗いよ〳〵尊敬有しと也、よりて爰に碑文谷日源上人天台宗を改め、我宗祖に歸伏し、中老の列衆に成て、日朗に對面ありて、此尊像を碑文谷へ移さんと乞給へば、日朗も尊像の御利益無窮ならん事をおもひ、八難除の守を添て授與し給ふ、其後碑文谷の住人安藤何某難病を患ひ、深く尊像に祈願しければ、一夜日源上人に御靈夢有て、守を授く、これに依て安藤氏の病患忽に平愈せり、中古當寺圓法自得院日性御靈夢を蒙り、此寺に移し奉てより、御利益廣大なる事、遠近男女の志る所なり、尤當寺に傳來し、住職の外は堅く秘して傳へず、病患をまぬがれ、又は諸國津々浦々におゐて、廻船難風にあひ、百日又は一代、改宗の誓をたてゝ、其難をのがれ、息災安樂の利益を蒙るもの、あげてかぞふべからず、されば一所の御名判にも、日蓮が慈悲廣大にして、南無妙法蓮華經は、萬年の外、未來際までも流布すべしと遊ばされ、現世の御利益のみならず、未來までも、諸願滿足の大悲を蒙らん事疑なし、誠に尊像の靈驗といひ、御張守の御利益廣大なる事、萬民の知る所なり、

名稱 所在 堂塔

平間寺

平間寺ハ、武藏國橘樹郡川中島村ニ在リ、眞言宗ニ屬ス、本堂ニ弘法大師ノ像ヲ安置ス、寺傳ニ云フ、崇德天皇大治年間、平間某ノ創建スル所ナリト、僧尊賢ヲ以テ開山ト爲ス、

〔新編武藏風土記稿 七十一 橘樹郡〕川中島村 ○中略

弘法大師堂 村ノ艮ノ方、稻荷新田ノ境ニアリ、御朱印六石ノ地ヲ附セラル、大師ハ木ノ坐像ニシテ、長二尺二寸、大師ノ自カラ作ル所ノ像ナリト云、緣起ニ、此像ハ大治年中、平間某ト云モノ、常ニスナドルコトヲ業トシテ此浦ニ住リ、モト尾張國ノ生レニテ、彼國ニテモ年ゴロ漁獵ヲ業トセシニ、アル夜不思議ノ夢ヲミシ後、大師ノ像ヲカノ海濱ニ得タリ、故ニ自ラ負ヒテ我家ニ歸リ、ソノマヽ一宇ヲ建立シ、寺ヲ平間寺ト號セリト、寺傳ニ云、サレド同郡下平間村ノ稱名寺、古ハ眞言宗ナリシガ、僧知信ノ代ニ至リ、改宗シテ親鸞ノ徒トナリ、カノ弟子ニ從ヒ、夫ヨリ一

向宗ノ寺トナレリ、先代ヨリ持傳フル所ノ大師ノ像ハ、改宗ノ後多磨川ヘ流セシヲ、幸ニ漁人拾ヒアゲテ、今ノ地ヘ草堂ヲタテ、カノアリシトコロノ村名ヲ取テ、平間寺ト唱ヘシト、稱名寺ニ云傳ヘリ、二說カク齟齬シテ定メガタク、コトニ寺僧ノ言所浮タルコトノミナレバ、暫ク記シテ證ノミ、本堂三間ニ七間、門南向ナリ、

權現神明合社（本堂ノ後背ニアリ）　太子堂（本堂ニ向テ左ニアリ○中略）　鐘樓（本堂ニ向テ左ニアリ）　稻荷青龍

別當平間寺（大師堂ニ向テ右ニアリ、金剛山金乘院ト號ス、當寺ハ在原郡高畑村寶幢院ノ末寺ナリシガ、文化二年願ニヨリ醍醐三寶院ノ直末ニナレリ、開山ハ尊賢ト云、康治二年四月二十一日寂ス、古キ御朱印モアリシニヤ、今ハ傳ヘズ、タヾ慶安元年十月二十四日、大猷院殿（德川家光）ヨリ御寄附ノ御朱印ヲ藏セリ、其文ニ、弘法大師堂領稻荷明神領トシテ、當村ノ内六石ノ地、先規ノ如ク御寄附ノコト、及寺中諸役免除セラル、由ヲ載ス、當御代ニ至リ、寛政八年十月二十七日、始テ當寺ヘ成セラレシ、其後文化十年九月二十七日成セラレシトキハ、御膳所ナリ、）

〔東海道名所記〕一河崎の入口、左のかたへ一里ほどゆけば、大師河原といふ在所あり、むかし弘法大師入唐して、わが御影を、みづからつくり給ひ、流沙川にながし給ふ所に、年へて後に、此浦にながれより給ふを、獵師引あげ奉りてあがめしより、大師川原と名づく、其木像には、牡蠣がらひしととり付て今にあり、

雜載

〔東都歲事記〕一上 正月廿一日　每月弘法大師參詣　河崎（大師河原）平間寺（正五九月はことに賑し、他に厄除大師と稱して、都鄙の男女、厄年に當る時は、必當寺に詣して、除厄を祈る、江戸より行程五里半あり、）

瀧泉寺

名稱所在

瀧泉寺ハ、武藏國荏原郡目黒村ニ在リ、俗ニ目黒不動ト云フ、僧圓仁ノ開基ニシテ、慈海ノ中興ト稱ス天台宗ニ屬シ、寛永寺ニ隷セリ、

〔江戸名所圖會〕七 目黒不動堂　同所（○夕日岡蛸藥師如來）の西百歩あまりにあり、泰叡山瀧泉寺と號す、天台宗にして、東叡山に屬せり、開山は慈覺大師、（○圓仁）中興は慈海僧正なり、

創建 堂塔 本尊

〔新編武藏風土記稿〕〈四十七 荏原郡〉下目黑村

不動堂〈境內除地四千五百坪、年貢地千五百坪、字入家ニアリ、堂ノ大サ七間半ニ五間半、山上ニアリ、相傳フ、本尊ハ慈覺大師年十三ノ時、靈夢ニ感ジテ彫刻セラレシト、立像ニシテ長一尺七寸、當所勸請ノコトハ、來由ヲ詳ニセズ、或ハ云、當山ハ古日本武尊ヲ祀レリ、其頃ハ土人荒人神ト號シケル、然ルニ慈覺大師本國下野國ヨリ叡山ニ登ラントシテ此地ニヤドリシトキ、農民等申ケルハ、當山荒人神ハモト日本武尊ヲ祭マツレリ、願クハ神體ヲ彫刻シ給ヒ、神殿ヘ移シメマハレト、大師ヤガテ不動尊ノ像ヲ彫刻シテ內陣ヘ納メシトゾ、モト日本武尊ヲ祀リシユヘ、不動勸請ノ後モ鳥居ヲメテ證ト云、近キ頃マデモ五月十五日ヲ祭禮ト定メ、村民戶ゴトニ供物ナドヲ設テ供ヘシトゾ、一說ニ元和元年ノ春側ノ在家ヨリ火出デ堂塔殘ラズ燒亡ス、靈像ハ瀧水ノ上ニ飛去テ災ヲ免レシト、コレモ信仰ノ餘カヽル說ヲナセシニヤ、ソノ實ハ人ノモチサリケンモシルベカラズ、(中略)本尊ノ側ニ青龍權現ヲ安ズ、此門外ニテ餅花ト稱シ、木ノ小枝ナドニ五色ノ餅ヲ附テ賣レリ、當所ノ名產ニテ、是ヲ製スルモノハ下目黑町ニ住ス、故ニ其町ノ條ニ詳ナリ、〉

寶物寶劍一振〈天國作、不動尊厨子中ニ納ム、長一尺バカリ、年々十二月煤拂トテ開扉アリ、或ハ云、元來荒人神鎮座ノ時、此寶劍ヲ神體トセリ、不動尊ノ像ハ、實錫杖頭ヲ鑄テ作リシモノナリト、未其是非ヲシラズ、〉　護摩檀五檀〈寬永十一年、大獻院殿御寄附ナリ、下同ジ、〉　圓鏡一面　五大尊繪像五幅　十二天繪像十二幅　花籠三十荷　前机一脚　唐銅大香爐一箇　野太刀一振〈是ハ台德院殿ノ御寄附ナリ、銘紋散シナリ、長五尺餘、〉　表門〈巽ニ向フ、市中ニアリ、〉　鳥居〈銅ニテ作ル、兩柱ノ間二間、〉　樓門〈左右ニ力士ノ像ヲ安ズ〉　石階〈櫻門ノ內ニアリ、八十餘級、〉　地藏堂〈九尺四方、木佛ノ立像、長二尺五寸、本堂ノ側ニ在、以下ノ諸堂、皆本堂ノ左右及ビ後背ニアリ、〉　稻荷社〈神體木像、長三寸許、掌上ニ寶珠ヲ捧グ、〉　石不動〈長二尺許〉　大行事權現堂〈六尺四方、木ニテ作レル立像、長二尺許、手ニ槍ヲ持、寬永年中御修造アリシ堂ナリ、トイヘバフルキ勸請ナルコト知ラル、〉　釋迦堂〈三間半ニ四間半、木佛立像、長二尺五寸、經藏ノ二字ヲ扁ス、〉　八幡宮〈神體ハ坐像ニシテ長一尺五寸、背山某寄附ナリト云、小祠、〉　遮軍神社〈神體ハ木像、長四寸餘、形不動尊ニ似タリ、脇士ニ甲冑シテ劍ヲ按ジタル木像ヲ安ズ、〉　早尾權現社〈神體坐像、長二尺許、是モ寬永年中御修造アリシ祠ナリ、〉　虛空藏堂〈六尺四方ノ堂ナリ、虛空藏ノ木像、長一尺五寸、〉　鬼子母神堂〈六尺四方、鬼子母神ノ木像、長一尺五寸ナリ、〉　天神堂〈神體ハ木像ニシテ長一尺二寸餘、小祠ナリ、〉　吉祥天女社　大日堂〈銅佛ノ坐像、長三尺許、〉　太神宮〈二間ニ二間半、神體木像、長二尺バカリ、〉　太子堂〈六尺四方、本尊ハ立像ニテ、長三尺許、〉　開山堂〈六尺四方、慈覺大師ノ坐像ヲ安ズ、長一尺七寸餘、〉　觀音堂〈九尺四方、本尊ハ木像ニテ、長五尺七寸餘、是モ寬永年中御修造アリシ堂ナリ、〉

〔東武實錄〕寬永元甲子、是年、武州荏原郡目黑庄泰叡山瀧泉寺ノ不動、將軍家御建立有、本堂早尾權現、大行事權現堂、御供所、鐘樓、觀音堂、二王門、開山堂修造セラル、〈時ニ住持實榮〉本堂ヨリ東ノ方ニ御殿經營有、御放鷹ノ時、每度此御殿ニ台駕ヲ寄セラル、〈同十一年、不動堂御再興、奉行寬三郎左衞門、三宅太兵衞、大工鈴木與次郎是ヲ勤ム、此時護摩壇五

名稱　所在　沿革

瓔、香具、圓鏡一面、五大尊ノ繪像五幅、十二天ノ繪像十二幅、花籠三十筒、前机一脚、唐金木香爐一筒、寄附セラル、

品川寺

品川寺ハ、武藏國荏原郡品川ニ在リ、初メ大圓寺ト號ス、創建未ダ詳ナラズ、承應中、僧弘尊ノ中興スル所ナリ、世ニ傳フ、弘尊長壽ニシテ百四十歲ヲ得タリ、故ニ此寺ノ本尊ヲ壽命觀音ト稱スト、眞言宗ニ屬ス、

〔新編武藏風土記稿　五十五荏原郡〕南品川宿

品川寺　拜領地四千八百坪餘、妙國寺ノ南隣ニアリ、初ハ金華山大圓寺、後改テ海照山普門院ト號ス、新(新恐古誤)義眞言宗、醍醐三寶院ノ末、中興開山弘尊、承應元年再興シ、寛文十一年正月十一日寂ス、貞享三年七月、太田攝津守資直、私ニ寺領百石ヲ寄附ス、本尊正觀音ハ深秘シ、側ニ水月觀音像ヲ安ズ、緣起云、聖觀音ハ弘法大師ノ作、大田道灌持佛ノ木尊ナリ、長祿年中品川館ヨリ江戸城ニ移リシ頃、武運ノ悠久、城戸及江府鎭護ノ爲、被本尊ヲ此堂ニ安ジテ、御監テ建立スト云、又水月觀音ハ龍宮出現ノ像ニテ、尤モ靈驗アリ、或說ニ水月觀音ハ弘法大師ノ持佛、閻浮檀金モテ造ル所、海中出現之像ナリ、大師還國ノ時、郡ノ押領使品川某ニ附屬シ、其家世々傳ヘテ品川左京ニ至ル、應永年中、上杉禪秀亂ノ氏、品川ノ一族皆討死ス、當時本尊ヲ草堂ニ匿置タルヲモテ世ニ傳フト云、又一說ニ、太田道灌品川ヲ領セシ頃、コノ水月觀音ノ像ヲ得テ、深ク信ジ、一宇ノ堂ヲ草創シテ安置セリト、今按ズルニ、妙國寺所藏永享十年某氏憲泰ガ寄附狀ニ、寺ノ南ニ觀音アリシ由ヲ載ス、地域ヲ以テ考フルニ、此堂ナルコト明ケシ、緣起又云、亂世兵火ノ爲ニ、佛燈悉ク燒亡シ、本尊ハ甲州ニ移ヒ去テ、或村里ニ安セシニ、一兒童口バシリテ、我ハ是武州品川金華山ノ觀音ナリ、暫クモ此所ニ留置スルコトナカレ、早ク品川ニ歸シ送ルベシト、村民恐怖シテ歸シ奉ラント欲レドモ亂世ナレバ、諸國タヤスク通ル事ヲ得ズ、先隣里ニ送リケレバ、其所ノ者亦發狂スルコト前ノ如シ、武田信玄聞テ奇異ノ思ヲナシ、恭敬禮シテ、品川ニ送リ返セシトナリ、然レドモ佛殿回祿ノ後、住僧モアラザリケレバ、土人僅ニ[illegible]堂ヲ立テ安置セリト、小田原記等ノ書ニコノ事ヲ載テ云、永祿十二年九月上旬、小田原ノ北條氏康、甲州武田信玄ト戰ヒシ時、信玄武州ニ討テ出、江戸品川ヲ追捕シ、ソノ邊ニ立ル大圓寺ノ本尊、水月觀音堂ヲ初メ、神社佛閣ノコラズ燒拂、住僧法印ヲモコトゴトク害セリ、其時フシギニ、此本尊ハ免テ、武田家ニワタレリ、彼家ノ人、竹森花村ノ二人、此像ヲトリテ甲州ニ行シニ、俄ニ大然狂亂シテ云、我ハ武藏國品川ノ大圓寺ノモノナリ、速ニ元ノ地ヘ返ベシト責レリ、然レドモカノ地ハ敵國ナレバ、返スベキ便モナカリシニ、其頃一人ノ乞食、甲州ニサマヨヒ來レリ、本國ヲ聞バ武藏ナリト云、カノ者ニシカジカノ事ヲ云含メテ、元ノ地ニ返サシメシカバ、カノ乞食モチカヘリテ、當ノ堂ノ礎ノ上ニ、アラ屋ヲ作リテ、安置シケリト、云々、其後阿闍梨法印弘尊ト云人アリ、僧羽州上ノ山某寺ノ住僧ニシテ、若年ヨリ觀音ヲ信仰ス、

寺格　名稱　所在　創建　堂塔

成時、夢ニ老人來リテ、汝觀音ノ住持ト成ベシト云、彼僧盛夢ニ感シ、此品川ニ來テ、當寺ノ住持トナル、當時此觀音ノ舊記ノ說、台聽ニ達シケレバ、承應元年五月、境內拜領ノ地トナル、ヨツテ堂宇ヲ再興シテ、本尊ヲ遂、壽命百四十餘ヲ得タリ、今中興開山トス、俗ニ壽命觀音ト號スルモ、弘尊ガ故ナリ、又此觀音堂造立ノコト、太田備中守資宗入道道願、先祖ノ由緒ヲ思ヒ、財ヲ捨テ、資成セシトナリ、又金花山ヲ改テ、海照山ト號スルコトハ、當海上颶風起テ、數百艘ノ船危カリシニ、船中ノ貴賤皆此觀音ニ祈誓シテ、萬死ノ難ヲ遁レシユヘ、海照山ト名ヅケシト云、本堂ハ五間ニ四間東ニ向ヘリ、　稻荷社本堂ノ南ニアリ、境內ノ鎮守ナリ、本社二間ニ一間、拜殿二間ニ九尺ナリ、　天神辨天稻荷合社本堂ノ北ニアリ、小祠、　鐘樓稻荷社ノ東ニアリ、鐘徑三尺許、東照宮、台德院殿、大猷院殿ノ御證號ヲ、獻文ニ出シ、下ノメグリニ、六觀音ノ像アリ、刻シテ云、明曆三丁酉年九月十八日、海照山品川寺普門院中興開山、傳燈師大阿闍梨法印權大僧都弘尊大和尙位納之藤筆矣ト、其下ニ、六觀音像ハ、京七條大佛師康齋模セシヨシ勒セリ、ソノ像イカニモ精密ニシテ、尋常冶工ノ及所ニアラズ、其腹ニ普門品ヲ鑄刻ス、　石本堂ノ前ニアリ、高六尺許、天然石ナリ、庚申供養ニ立ツ、光明ヲ放チシコトアリ、人コレヲ奇トシテ、カク名ヅクトイヘリト、　地藏銅像門外ニアリ、露座、長九尺、江戸六地藏ノ一、地藏坊正元ノ立ル所ナリ、　門前町屋東海道ノ兩側ニアリ、東側ハ、間口五十一間半、西側五十間四尺、又横町ニ三十間四尺、步數合テ千五百二十五坪餘、元祿十一年、寺社奉行坂本內記正次ニ願ヒテ、町屋ヲ立、延享二年ヨリ町方ノ支配ニ屬ス、

〔續史愚抄東山〕寶永五年九月廿九日壬寅、今日江戸品川、建立金銅丈六地藏尊、號品川寺、

〔寺鑑上古義眞言宗〕海照山普門院　武州品川　品川寺

右住職、醍醐三寶院御門跡ゟ申渡有之、

住職御禮無之、年頭御禮御白書院御次一同、獻上一本一束

祐天寺

祐天寺ハ、武藏國荏原郡目黒村ニ在リ、享保年中、僧祐天ノ遺命ニ依リテ、其俗弟僧祐海ノ創建スル所ナリ、乃チ祐天ヲ以テ開山トス、浄土宗ニ屬シ、芝増上寺ノ末寺タリ、

〔江戸名所圖會八〕明顯山祐天寺　同所〇中目黒西の方五丁計を隔つ、善久院と號す、享保年間、二世祐海和尚、祐天大僧正の遺跡の地を奉じて當寺を草創し、則祐天大僧正を開祖とす、常行念佛の道

場にして、鉦鼓の聲は山林に谺せり、此稱名は開山祐天大僧正臨終の期、開闢ありしより、連綿として絶えずとなり、毎年七月十六日より同廿五日に至る迄の間、阿彌陀經千部讀誦修行、道俗群參す、

本堂　本尊阿彌陀如來御長一尺五寸計惠心僧都の作にして、開山生涯持念の尊像なり、　開山祐天大僧正眞像木尊の龕前に安置す、等身佛にして、八十二歳の影像、三輪利鑑の作なり、

〔新編武藏風土記稿 四十七 荏原郡〕中目黒村

祐天寺 境内八千五百三十坪、内拜領地二千坪、年貢地六千五百三十坪、村ノ西ノ方字原ニアリ、當寺ノ拜領地ハ中下目黒兩村ニテ千坪ヅヽ、タマヒタレドモ、草創以來當村ニ屬スレバ、コヽニ出セリ、淨土宗芝增上寺末明顯山善久院ト號ス、當所ハ增上寺第三十六世祐天大僧正隱居ノ地ナリ、僧正末期ニ俗弟祐海ニ屬シテ當寺ヲ起立セシム、享保四年祐海遺命ヲ奉ジテ起立ノ功ヲ遂ゲ、僧正ヲ開山トシテ、其身ハ第二世ニオル、門 冠木門ナリ、閣柱ノ間二間、 下馬札 門外ニアリ、明和三年七月八日、土岐美濃守命ヲ傳ヘテ建テシム、 二王門 表門ノ正面ニアリ、五間ニ二間、明顯山ノ三字ヲ額ス、左右ニ力士ノ像ヲ安ズ、 鐘樓 二王門ヲ入テ右ニアリ、二間半四方、鐘徑二尺八寸、高サ五尺、鐘末ニ享保十三年ト刻ス、 本堂 二王門ノ正面ニアリ、ソノ間ヲ數ニス、堂ハ六間ニ七間、祐天寺ノ三字ヲ額ス、木尊ハ祐天大僧正ノ木像ナリ、坐像ニシテ長二尺八寸バカリ、手ニ念珠ヲカケテ合掌ノ容ナリ、三輪利鑑ノ作ナリ、眞立ノ像アリ、銳長ケ共ニ同ク、僧正ハ明蓮社顯譽上人ト號ス、陸奥國岩城ノ農新要小左衛門ト云モノヽ子ナリ、幼名ヲ三之助ト稱ス、三輪山ノ謂化休波和尚ハ俗緣ノ伯父タルニヨリ、休波ヲ緣介トシテ、關所鎌谷檀通和尚ニ投ジテ薙染ス、時ニ正保四年、僧正十一歳ノ時ナリ、長ズルニ及テ、學業怠ラズ、降穆過ニ隨テ諸國ヲ遊行シ、道德日々ニ盛ナリ、後三緣山ニ庵ヲ結ビ、及葛飾郡牛島ト云所ヘ籠隱ス、道化大ニ行ハレテ、僧俗福湊ス、又勢州山田ニ赴キテ金佛ヲ廣ム、ソノ後桂昌院殿ノ召ニヨリテ、大城ニ登レリ、元祿二年常憲院殿ノ命ヲ蒙リ、下總國千葉郡生實大巖寺ニ住セシメラル、明ル庚辰ノ年、同國飯沼弘經寺ニ轉ク、寶永甲申、傳通院ニ住シ、正德元年、增上寺ニ住シ、大僧正トナリ、文昭院殿ノ御導師ヲ勤ム、程ナク隱居シテ、享保三年七月十五日、麻布ノ別業ニシテ寂ス、荼毘ノ中ニ殘リシ古形ハ今モ當寺ニ持傳ヘリ、本堂ノ後背ニ續キ、九尺四方ノ堂中ニ鐘ヲカク、勤鐘ノ二字ヲ額ス、鐘ノ徑二尺、高四尺、安永七戊戌十一月、六世祐全ト彫ル、 客殿 本堂ニ向テ右ノ方ニアリ、廊下ヲ設テ往來ヲ通ズ、コノ客殿ハモト桂昌院殿ノ御殿ナリシヲ賜リテ遣リシト云、 阿彌陀堂 門ヲ入テ右ニアリ、實ノ方ニ向フ、四間ニ六間、松平大膳大夫法名瑞蓉院建立、本尊ハ座像ニテ長二尺五寸、堂外ニ圓光大師御遺跡ノ七字ヲ標出セリ、 地藏堂 阿彌陀堂ノ向ニアリ、三間ニ五間半、申ノ方ニ向ウ、開山本地地藏尊ノ七字ヲ標ス、扁額開山本地堂ノ五字ハ、紙明居士普山拜書ト落款アリ、堂中ニモ前無地藏舊隱ノ六字ヲ扁シ、稍久院當寺六世祐全書ト落款アリ、 阿彌陀堂 地藏堂ノ側ニ有、三間中四方、阿彌陀堂ノ四字ヲ扁ス、當寺二世祐海ノ落款アリ、本尊木佛坐像ニテ長三尺、 經藏 同邊ニアリ、二間半四方、經藏ノ二字ヲ扁ス、本尊阿彌陀如來坐像ニテ長二尺五寸、 熊野稻荷合社 九尺ニ一間、同邊ニアリ、 裏門 堂後ニアリ、内ニ下馬札ヲタツ、

東海寺

東海寺ハ、武藏國荏原郡品川ニ在リ、寛永年中、徳川家光ノ、僧宗彭澤庵ノ爲ニ建立セシ所ナリ、常ニ住持ヲ置カズ、大德寺ノ僧輪番シテ之ヲ主ル、

〔新編武藏風土記稿 五十六荏原郡〕北品川宿

東海寺 拜領地四萬七千二百四十坪七合、境地五十八坪、當宿ノ西南品川ノ地ニ跨レリ、萬松山ト號ス、臨濟宗京都大德寺末、寺領五百石ノ御朱印ヲ賜ハリ、郡内小林安方不入斗三村ノ内ニテ領ス、境内ノ地以前ハ長德寺以下數ケ寺アリシヲ、長德寺ノ外ハ皆南品川ノ内ニ移サレ、其跡ヲ僧宗彭ニ賜ヒ、當寺ヲ創立ス、寛永十四年ノ事也、明年落成ノ後、十一月大猷院殿ノ仰ヲ受テ、澤庵入院ノ式ヲ行フ、是ヲ開山始祖トス、紀行附歌ニ東海寺草創ノ時澤庵ノ讀ル歌アリ、臺セウナ寺ハニイハリツタハ山海トナルマテ君カ代ナレハ(中略)其後元祿七年三月廿七日回祿ニ罹リシニ、其冬澤庵五十回ノ法會アリ、遠忌落成ノ譲キコトヲ慮リ、淨德院殿[illegible]天和三年、御早世ノ故ニ、殿ヲ賜リテ本坊トナシ、御再建ノ事畢ケル、今モ堂宇以下損壞スル時ハ、官ヨリ修理セラル、境内南方ヲ目黒川流ル、中門ノ前ニ、長八間ノ橋ヲ架ス、要津橋ト號セリ、

〔輪池叢書 二十二〕東海寺御建立之來由

武州品川萬松山東海淨寺、寛永十五戊寅年御建立被仰付之、大猷相君、御直ニ境地御見分被遊、古キ混柏有之處御見立、其所に東海寺御草創被遊候、翌年造營出來、以澤庵爲開山第一祖、總ジテ澤庵御崇仰之薀蓄者、其比大猷相君、劍術之御稽古被遊、柳生但馬守御指南被申上、以誓紙一流之奥儀、不殘御相傳被申上候、然所劍術之上、御自由之御働、但馬守同前無之段御不審被爲思召候、流儀之上、相殘所も有之樣被爲思召、但馬守江御尋被遊候處、但馬守被申上候ハ、上樣之儀、以誓紙御相傳申上候上、一流之奥儀可相殘所無之候得共、愚意ニも、最初未熟之所有之、澤庵と申僧ニ、禪法之儀相尋候處、觀音通身耳眼の道理ヲ被示、其後寤寐恒一之工夫ニ意ヲ盡、自是以後自由ヲ得テ、只今劒刃之身ニ當ル事會而無之、寢テモ寤テモ恒一之道理ニ相叶候、此儀偏參禪之功ニ候と、言上

被致候、依之上樣ニも澤庵御慕之思召有之、無程澤庵ヲ羽州上之山配所ゟ被返江戸、安堵蒙御免、駒込堀丹後守屋敷へ止宿被致、其間ニ以御直書御不審之事御尋有之、但馬守御書持參被致候、一一御答相稱上意、及數十度候、其後蒙御免、本寺ニ歸山被致候也、無程但馬之入作山之舊庵江退去被致、又蒙上意江府江參向、柳生但馬守麻布之別埜江寄宿被致處、翌年上意ニて、但馬守同道、始而登城、御對面有之、其以後每度登城、法義之上御尋之由申傳也、於神田休息所被仰付、登城繁多及深更ニ候節ハ、右之旅館止宿被致候、澤庵在事之內、御天守ニ不祥之氣立候ニ付、中根壹岐守爲上使、右之段澤庵江御不審有之、御返答ニと申上候通、相違これなく、御感心之餘、澤庵ハ、天下之寶ト上意有之、子細ハ文繁故略之也、

澤庵遷化之翌年春、品川江御成之節、澤庵墓□□御參詣被遊、其翌日堀田加賀守殿江被仰付、塔所御營建可被遊之旨被仰出候得共、澤庵遺命之趣達上聞、石垣樹木計被仰付也、

〔泰平年表大猷公〕寛永十五年、是年品川東海寺御建立、萬松山東海寺開基ハ、澤庵宗彭也、寺領五百石、

〔大猷院殿御實紀三十八〕寛永十五年四月廿七日、僧澤庵がために、品川に一寺を剏建せらる、八木勘十郎守直、構造の奉行命せらる、今の東海寺是なり、

〔大猷院殿御實紀四十〕寛永十六年五月朔日、澤庵和尚は品川新寺、剏建入院を謝す、

〔新編武藏風土記稿五十六荏原郡〕北品川宿

東海寺略○中 總門海道ノ西側、歩行新宿一町目ノ町屋並ニアリ、兩側ノ間二間、物ハ南門ノ方ノミ往來セシガ、大猷院殿御駐駕ニヨリ、儀ニ從テ、東方ニ今ノ總門中門等ヲ建ラル 中門總門ヲ入、北ニ向ヘル冠木門ナリ、經テ中門ニ至ル、南ノ注ノ間二間、東向、東海寺林ノ額ヲ掲ス、故ニ額門ト唱フ、門外ニ古松アリ、光リ松トモ云ベシト大猷院殿ノ上意アリシ故、松ノ名トナレリトイフ、 山門中門ノ內ニアリ、六間ニ四間、東向、濶晉閣ノ三字ヲ扁ス、東叡山大明院宮ノ筆ナリ、中央ニ觀音ヲ安ズ、立像長二尺餘、弘法大師ノ作、左右ニ十六羅漢及韋提觀音ノ像ヲ列ス、羅漢ハ運慶ノ作、觀音ハ慧覺大師作、立像長各一尺七八寸許、 南門南ノ方、目黑川ノ側ニアリ、是門ト佛殿トノ中程ニ冠木門アリ、中門ト呼ベリ、 佛殿六間四面、東向、或ハ新端殿トモ云、本尊釋迦坐像、長二尺餘、脇士文殊普賢、各長二尺許、印吉ノ作、世尊殿ノ三字ヲ扁ス、是モ大明院宮ノ筆ナリ、 客殿佛殿ノ西北ニアリ、七間半ニ十間、隆殿室ノ額ヲ掲ゲ、當寺二十一世天倫筆、中

間ニ淨庵筆ノ一間相ヲ掲ゲ、其前ニ後水尾院宸筆寂然ノ二字ヲ扁ス、北ノ間、御代々ノ御位牌ヲ安ズ、東福祠ノ三字ヲ掲ゲ、是モ大明院ノ筆、御成書院五間ニ十間、延寶堂ノ額アリ、天倫筆、

〔輪池叢書二十二〕東海寺御建立之由來〇中略

一元祿七年三月、從品川町屋出火ニ而、東海寺類燒、早速御再興之儀、秋元但馬守殿江被仰付、山門佛殿方丈等結構被仰付、御再興以後火消之儀、伊奈半左衛門へ被仰付、

寺格

〔寺鑑下禪宗濟家大德寺派〕萬松山　品川　東海寺

右住職、輪番持、輪番代之御禮御白書院獨禮御闕之内二疊目

寺領

〔寺格帳上禪宗〕御朱印高五百石　品川　東海寺

寺職

〔輪池叢書二十二〕東海寺御建立之由來

品川東海寺御輪番之義、被仰出五人之僧、被爲召、正月中可致參府之旨、御奉書之趣畏入候、正月中參府可仕候、恐惶謹言、

正月二日　高桐院清巖宗渭　孤蓬庵紅雲宗龍　廣德寺琢玄宗璋　總見院紅雪宗立　龍泉院隨倫宗宜

板倉周防守殿
人々御中

海晏寺

海晏寺ハ、武藏國荏原郡品川ニ在リ、北條時頼ノ創建ニシテ、宋僧道隆ヲ開基トス、曹洞宗ニ屬ス、

名稱所在

〔江戸名所圖會四〕補陀山海晏寺　同所〇品川一町ばかり南、海道の右にあり、曹洞派の禪宗にして、

創建沿革

三田の功運寺に屬す、北條相模守平時頼朝臣の開基として、大覺禪師を開山と稱し、古山和尚を第二世とす、

〔新編武藏風土記稿 五十五荏原郡〕南品川宿

海晏寺 除地二段九畝二十六歩、年貢地五段四畝二歩、海雲寺ノ南隣ナリ、補陀落山ト號ス、禪宗曹洞派、三田功運寺末寺、(中略)功運寺傳ニ、慶長元年[illegible]開ナリ、今本多佐渡守正信、永井右近大夫直勝、命ヲ奉シ、慶存ヲシテ海晏寺ノ住職タラシム、屢登營セルニ、路遠ヲ以テ、同六年、櫻田ニテ、新ニ地ヲ賜ヒ、功運寺ヲ建テ移住セリト云、本堂七間ニ五間中、本尊鮫洲正觀音、唐佛ニテ、厨子ニ入、脇ニ葵ノ御紋ヲ付、昔東照宮、及大猷院殿、屢渡御アリシトイフ、○中略

鐘銘 當山記曰、考ニ武州品川補陀落山海晏寺之志、後深草帝建長三年、品川海有大鮫魚、斃在洲上、漁者割腹、得觀音大士之瑞像一軀、相好奇古、最爲殊勝、其洲至于今名鮫洲者、不忘其本也、彼時平氏時頼在鎌倉、聞其事甚爲希有、乃點南北二十餘町、爲伽藍界、建精舍其中、奉安其像、以爲國家祈願所、靈區、號山補陀落、表大士所出之本、名寺海晏、取海宇晏清之儀、喜捨莊田一百貫之地、充供養料、結造瑞林、瑞應、廣正、東觀之四院、海月、明月之二庵、及松影、水月之二堂、蓬萊、龍淵之二亭、擬靈鷲于竺土之靈讃、淨奇秀於本朝之高野、可謂海洲之靈苑、區中之勝、蓋建長六年、請道隆和上爲開山始祖、次招古山和尚爲二世住持、濟上宗風、日夜鼎沸、重寄八十貫之地、充四院二庵齋供、弘安五年、平氏時宗感得靈夢、營一堂於寺中、奉安平生持念之彌陀靈像、更寄二十貫之地、充供養也、時頼時宗歸崇之日、寺僧之外、出卜居、散食於武州相州上下總州之岡者甚多矣、其以院而名者三十二所、以庵而名者四十所、以軒名者七所、併前之四院二庵、爲八十五所、且於境内立白山權現、伊勢大神、春日八幡、稻荷、辨天等社、爲寺鎭守、然陀神明之威曜赫赫、以可炙手、而時移物換、鎌倉已亂、兵火及寺、龜山後醍醐之二帝所賜之綸旨、并時頼時宗所捧之寺券契、及種々什物、乃至殿堂院宇、一時掃地、化爲烏有、但應永年中、尊氏之三代、義滿所用之寶板、寶德年中、義滿之五代、義政之時、極本出雲守法名道琳所懇鴻鍾、住持存紹代、虎溪所銘之者、今現存、爲火後之鐘、不及前之萬一、殘僧數輩、僅奉觀音之香花而已矣、天正十八年、天叟存和上、應從東照神君來于江戸、文祿二年、神君降命、存公賜海晏寺、於是乎寺始屬、澗宗、稀存公爲中興開山、存公父松平五郎康元、母某氏、幼生神君之大夫人傳通院殿養之、爲僧、是以神君寵遇不同小々、而其性朴素、視富貴如浮雲、家風孤高、不飾邊幅、尊寵登城時、以紙布爲被服、神君見而感焉、嘗來東方之澗僧、往々以紙布爲領者、至今猶在矣、從品川等登城、以途路之遠、必止息於本多佐渡守之第中、慶長十三年、神君賜制札於寺、門禁剪採竹木、禁喧嘩狼藉之事、且有違寺者、賜莊田露(?)、備餘司之所念、而存公因備遇時、未賞示寂焉、由是寺之不成官寺、雖後代之不幸、稱存公之無世念亦可貴也、存公之後、自山悅公、玖岩悅公、備山悅公、分外辯之、公其圖靈公灯、徽公、親叢二十一年、而移住若州空印寺、海舍禪公住山之年、轉蓄功運寺則寺也、耕公一往魏起寺殿、造修之勸甚多、願寂之後、立碑之勒中興之名者、不藏其功也、今又序寺之勝蹟、則寺後有時頼及二階堂羽州等之石塔、足見昔年歸崇之志、百卉苑中、有千貫牡丹、姚黃耶、魏紫耶、今也則亡矣、萬株松中、有千貫松、又名之龍燈松、相傳、海龍曾點灯火於此松上、千樹楓中、有千貫楓、蚩尤之械之所化耶、杜牧之車之所停耶、騰之入地爲寶、瑞露之殺(?)靈歎、紅珠吐奇香、精靈老人、此一株之奇、不可測、而年々楓林、秋後霜後、映空欲燒、霞籠如錦、鶴紅於二月花、麗於四色蓮、可謂佛地莊嚴、塵外淸賞、寺衆有八景、擬瀟湘名景、無邊不暇枚擧、巨海之滲花、萬船之往來、遠山之叢雲、近市之浮烟、隨時變幻、入眼悅心、縱使百王廢詩、臺中有叢畫詩、詩中有大有聖畫、可以攬筆、可以結舌、況於知予筆頭之花、舌本之強者乎、先是譯公住山之日、予一到寺拜數應大

名稱　所在　創建　沿革

士一、既偈稱讃、以二此緣一、故今山主門公持二古來之寺志一、來請レ從二事於東里子庵一者、非二常再三一、因就二原文一、少加二潤色一、用以爲二略記一、又不レ廢レ已也、時元祿十四年龍次辛巳中秋之後三日、南贍武州大日本國東道武藏州荏原郡品川縣補陀落山海晏禪寺、愛十方施主、賑捨二淨財一、聚二銅金一、募二會巧工一、鑄二成佛器一、高掛二層樓一、美哉、堂堂大器、落落洪音、斯逈見レ色明レ心、聞レ聲悟レ道之因、

本門寺

本門寺ハ、武藏國荏原郡池上村ニ在リ、僧日蓮ノ開基スル所ニシテ、而シテ其入滅ノ地ナリ、日蓮宗身延山派ノ一本寺ニシテ、同宗三頭ノ一ト稱シ、又日朗流三寺ノ一タリ、堂舍ハ、中比、加藤清正ノ經營セシモノナリシガ、今ハ燒失ス、寺職ハ古ハ鎌倉妙本寺ヨリ兼帶セシガ、天正年中、日惺ノ時ヨリ、歷代ノ住持、此寺ニ在リテ、彼寺ヲ兼攝セリ、

〔江戸名所圖會四〕長榮山本門寺　大國院と號す、池上邑にあり、日蓮大士弘法の一本寺にして、三頭と稱するの一員たり、甲州身延山、總州正中山、當山、以上三頭といふ、○中略坊舍三十六宇あり、大坊は九老僧日澄上人へ附屬、南坊には六老僧日昭上人住せらる、照榮院は六老僧日朗上人の室となし、學藏坊には九老僧日像上人在せり、是をあはせて當寺古跡の四院といふ、

〔日蓮註畫讚五〕示寂第三十

弘安五年壬午九月八日、午剋出二身延澤一、宿二下山一、九日大井、十日曾禰、十一日黑駒、十二日河口、十三日與地、十四日竹下、十五日關本、十六日平塚、十七日瀨谷、十八日入二于武藏國荏原郡千束鄕池上村右衞門大夫宗仲屋一、同二十五日鎌倉弟子檀那來集、讀二安國論一、聖人曰、三七日內、我當レ死、其時地神悲啼可レ震レ身、以レ是知二我死相一、墓所可レ立二身延山一矣、臨終焉近時、歷二告朗公等長弟一曰、我死全身納レ瓶、送二置身延山一、日朗云、一日半日道、應レ任二尊名一、道既及二三四日一、謗法充滿國、御存日往覆路、尙不二容易一、只如レ法奉二茶毘一、不レ殘二御遺骨一、奉レ納二延山一、聖人然可、准二此遺告一、葬二于池上一、御身骨納二于身延一也、所二遺付一者、註法華經一部十卷、撰二弘集最要文一、日昭金色立像釋迦佛一軀、安國論一卷、御免狀二通、豆州、佐州、日朗自餘略レ之、夫立像釋迦佛者、是佛

實、莊法華經者、是法寶、大聖人者、是僧寶、是本地久成三寶也、十月八日、上足定于六人、所謂辨阿闍梨日昭、大國阿闍梨日朗、白蓮阿闍梨日興、佐渡阿闍梨日向、伊豫阿闍梨日頂、蓮華阿闍梨日持矣、自十二日酉刻、向未曾有大漫荼羅北面、十三日辰刻、誦方便品、大衆同音誦之、至入佛知見道故、句、（或云二壽量品中）向頭北面西右脇而化、御年六十有一、大地震動、日昭誦經、衆又同誦、各設最後供養、入棺十四日戌刻、日昭、日朗勤之、茶毘子刻、闍維次第、與之前陳日朗、後陳日昭、前後各八人相從、（具、如[illegible]）

〔新編武藏風土記稿〈四十五荏原郡〉〕池上村

本門寺（境内六萬七千六百坪、下池上村ノ南ニアリ、法華宗本化一宗正統ノ靈場ナリ、長榮山大國院ト號ス、宗祖日蓮上人ノ開闢ニシテ、鎌倉番匠ノ檀越池上右衛門大夫宗仲ノ建立スル所ナリ、其由來ヲ尋ヌルニ、建長年中、日蓮安房國ヨリ鎌倉ニ赴カントシテ、舟ヲ浮ベテ當郡品川ニ著ス、時ニコノ池上ノ地ヲ見テ、傳ヘ聞竺土跋提河ノ景色ニ似タルヲヨミシ、アラカジメ入滅ノ地ト慕ヒケルトゾ、其後鎌倉ニアリシ頃、康元年中、宗仲始メテ日蓮ニ見ヘテ深ク歸信シ、頓テ檀越トナレリ、文應元年上人鎌倉ヨリ當所宗仲ガ宅ヲ訪セ、此所ヲ以テ入滅ノ地トセンコトヲ約セリ、文永十一年十一月、宗仲自ラ本化ノ道場ヲ建立セシコトヲ欲シテ、其志ヲ告シカバ、日蓮コレヲヨミシテ、長榮山本門寺ノ號ヲ與ヘ、且大曼荼羅ヲ一枚顯シテ附與セリ、此曼荼羅ハ當山第五世日親上人、身延山住職ノ時、カノ山ヘ移セシヨリ、今ニアリト云、其後宗仲當寺ヲ造立セシハ、弘安四年ノ事ナリ、明ル五年、日蓮ミヅカラ入滅ノ期近キニアルコトヲ知リ、九月八日身延ヲ發シテ、同十八日池上ニ來リ、宗仲ガ家ニ入、アラカジメ其ハカリゴトヲ告、設於テ鎌倉中ヲ始トシテ、遠近ノ弟子檀那等皆悉ク本門寺ニ來集ス、此時安國論及種々ノ法門ヲ講說ス、室ニハ本門ノ本尊久遠實成ノ釋迦佛及ビ上行以下ノ四菩薩ヲ安ズ、コノ頃高足ノ弟子日法盛材ヲ得テ、上人ノ座前ニレテ、有像ヲ彫刻シ、賦上ノ徒衆ニ至ルマデ、イサヽカモタガヘズ寫シケレバ、上人自カラ曼荼羅ヲ寫シテ、ソノ胎中ニ納メ賜、堅ヲ燒テ彩飾ヲ加ヘ、是我生身ノ形ナリト、自ラ開眼シテ開ク、堂上ニ安置セリ、又弟子檀那等ニ告ゲ云、三七日ヲ過ゲ、我マサニ入滅スベシ、其時地紳讃驗スルヲ以テ、ワガ死相ナトスベシト、十月三日讓狀ヲ書シテ、遺身佛一軀、井ニ安國論、免狀二道ヲ日朗上人ニ附屬シ、又當寺ト鎌倉比企谷妙本寺トヲ合セテ、日朗ニ讓リ、コレニヨリ兩寺ヲ兼職シ、後數世ノ間ハ比企ガ谷ニ住セリ、又カノ遺身佛等ノ三種ノ寶物ハ、日朗入滅ノ後、一タビ紛失セシカド、後イカナル故ニカ、京都本國寺ニ傳ヘテ、今ニアリト云、又日像上人ニハ帝都ノ弘經ヲ附屬セリ、サレバ上人京都妙顯寺ヲ開山セリ、同十二日酉ノ刻、今ノ大坊ノ地、宗仲ガ宅ニアリテ、北向端座シ、明ル十三日辰ノ刻入滅ス、ソノ後遺言ニ依テ、骨ヲ身延山ヘ送ル、明ル六年十月ニ六老僧此地ニ來會シテ、日蓮ノ遺文ヲアツム、ソノ頃ノコトニヤ、宗仲宅ヲステ、本門寺ト號シ、イロイロ信心怠ラザリシカ、是モ正應六年九月十三日卒セリ、コレヨリシテ本門寺ノ修造ハ、ミナ二祖日朗ノ功ニヨレリ、日朗カクテ諸弟ヲヒキヒ、殿堂伽藍ヲ備ミ、文保元年ニ至テ、土木ノ功全ク終リ、輪奐顯ル美ヲナセリ、日朗ハソノ閏正慶四年九月遁メ付弟ヲ定ム、三世日輪是ナリ、初日朗師ノ命ニ依テ兩山ヲ經營セシヨリ、コヽニ至テ三十七年ニ及ベリ、コレヨリ日朗ハ寺寵ト云地ニ庵室ヲ結ビ、誦經勤業シテアリシガ、元應二年正月二十一日、溘然トシテ遷化セリ、付

弟日輪師ノ遺言ニヨツテ、鎌倉松葉ケ谷ニテ茶毘シ、猿島山ニ塔ヲ立ケリ、終リシヨリコノカタ、現住ニ至ルマデ四十三世ナリ、法燈タヘズ、日蓮ノ遺狀ニ云、釋尊一代之深理、日蓮一期之功德、無レ所レ殘、付二屬日朗一云云、日朗マタ日輪ニ付法ス、且九老僧ノ連署ニ云、本門寺日朗上人御遷化之後、爲二其門弟一法門弘通、眞繼二守本處一違跡、可レ爲二一味同心一云々、先ニモ云ル如ク、開山以來第十二世日慎ノトキマテモ妙本寺ニアリテ、當寺ヲ兼職セリ、小田原記ニ、永祿十二年武田信玄當國へ亂入ノトキ、輝ノ構ヲ燒落サレテ濟ルコトアタハズ、當所へカヽリ當寺ヲモ燒カントセシガ、ソノ時ノ住僧ハ、身延ヨリ來リシモノニテ、カネテ信玄ヘモマミヘシモノナレバ、寺ヲバ燒カズ、平間渡ヘカヽリシト云ヘルハ、未ダ住職ノ妙本寺ニアルトキナレバ、住僧トイフモノモ所化ノ內ニテ、寺ヲアヅカリ守リシモノナルベシ、コレヨリ天正十八年御打入リノノチ、當國御居城ノ時トナリシタメ、明クル十九年、日惺比企谷ヨリ當寺ニ移リシ以來、歷代ノ僧當寺ニ住シテ、妙本寺ヲ兼職セリトゾ、マタ同住職ノコロ、慶長三年二月二十四日、東照宮ヨリ寺領百石ヲ賜ハレリ、ソノノチ享保十年十二月、二十四世日等住職ノ頃、勅アリテ、ナガク紫衣ヲ著スルコトヲ免サルヽノ綸旨ヲ賜ヘリ、云々、

〔新編武藏風土記稿〕四十五荏原郡池上村

本門寺 ○中略

總門 山下ニアリ、高サ二丈一尺ナリ、兩柱ノアヒダ一丈五尺、元祿年中始メテツクル、本門寺ノ三字ヲ扁セリ、本阿彌大虛庵光悅ノ筆ナリ、

下馬札 總門ニ向ヒテ左ニアリ、寛德院殿、深德院殿ノ御廟、山內ニアルヲ以テ、下馬札ヲ建ルコトヲ免サルヽノヨシ、享保十五年七月二十四日、黑田豐前守直邦命ヲ傳ヘシニヨリ立リト云、

石階 總門ノ內ニアリ、九十六級、第二十二世日室上人ノ時造レリ、

山門 石階ノ上ニアリ、八間ニ三間、天文年中第九世日純造ル、左右ニ密跡金剛ノ像ヲ安ズ、コノ像ハ和銅三年行基菩薩ノ作ナリト相傳フ、昔大坊日現、古川村眞言宗藥師堂別當ト諍論セシトキ、互ニ寺資ヲ賭トシテ勝負ヲ決セリ、時ニ近鄕ノ地頭行方彈正、コノ事ヲ聞テ、家人ヲ遣ハシテ日現ヲ請ハシム、別當終ニ宗論ニ負ケタリ、彈正ガ家人約ノ如ク、コノ二王ノ像ヲトリテ、コノ地ヘ移セリト、長榮山ノ三字ヲ扁ス、コレモ光悅ノフデナリ、

本堂 山門ノ正面ニアリ、十間半ニ十一間、元祿十五年三月二十五世日顯建、時ニ有德院殿ヨリ黃金ヲ賜ヒ、惇信院殿ヨリモ若干ノ銀子ヲ御寄附アリシト云リ、○中略

影堂 本堂ノ東ニアリ、十二間四方ナリ、享保七年廿四世日等建、其時有德院殿ヨリ材木ヲ賜ハレリ、古ノ堂ハ本堂ト同ク廣回祿ニ罹レリ、天正年中大坊日假建立ノ堂ハ、サマデ大ナラザル故ニヤ、日樹住職ノ頃、寬永三年ヨリ經營ノアラマシヲ企テ、同五年二月十七日ヨリ功ヲ起シテ、明ル六年十一月功ヲ畢レリ、梁間廿五間、桁行廿三間ナリ、之ヲ大堂ト號ス、相傳フ、加藤肥後守淸正ノ建立ナリト、然ルニ淸正ハ慶長年中已ニ沒シヌレバ、傳聞ノ誤アルベシ、天正年中造立セシ堂ヲ、卽淸正ノ建立ト云ハヾイハン歟、此後寶永七年回祿ニ逢テ、一時ニ灰燼トナリヌ、此後再興セシハ、卽今ノ堂ナリ、正面ニハ日蓮ノ像ヲ安ズ、是前ニ云ル日蓮在世ノ時中老日法ノ彫刻セシ肖像ナリ、初メ日法此像ヲ作ラントシテ、竊ニ謀リ、工ヲ起シ、障子ヲ隔テ、窺セシニ、日蓮是ヲ知テ、吾像ヲ作ラバ、日前ニテ刻ムベシト云リシカバ、鏡ニテ其寸尺ヲ計リ、顏上ノ小疵ニ至ルマデモ殘サズ眞ヲ寫セシ所ナリ、其彩色ハ香色ノ法服ニ靑色ヲ以慈草ヲ畫ケリ、祖師自鬚髮ヲ燒菓ベ、又曼茶羅ヲ書シテ胎中ニ納メ、自ラ點眼セリ、日蓮入滅ノ後、頂骨ヲ二分シテ、一分ハ此像ノ內ニ納メ、一分ハ身延ヘ送リシト云、抑祖師ノ肖像ハ天下ニ三軀アリ、其所在ハ身延、比企谷ト當山ナリ、コレハ一木三體ノ像ト云ヘドモ、身延ノ像ハ日蓮滅後廿九日ニシテ作リ、

四十九日ニ當リテ、影堂ニ移セリ、比企谷ノハ、在世ノ時ニ作リシ像ナレドモ、富山ノ如ク、尺寸モ違ヘズ寫シメルニハアラズ、サレバ此像ハ類ハナク眞ヲ寫セシ肖像ナリト云リ、又宮殿須彌壇等モノ如キハ、二十五世日顯ノ建立ナリ、御紋ノヲキシ水引戸帳ハ、公ヨリ賜ヒシ所ナリ、將軍家ノ常所へ渡ラセ給フ時ハ、必此堂へモ御立寄アリト云リ、宮殿ノ左右ニハ、御當家ノ御位牌ヲ安ジ、堂ノ東西ノ隅ニハ、日朝、日輪ノ像アリ、コノ像モ各其骨ヲ胎中ニ納ムトイヘリ、

鐘樓本堂ノ南ニアリ、三間四方、昔ノ鐘ハ第十七世日東ノ作ル所ニシテ、十六世日達ノ銘アリシト云、ソノ後正德四年二十三世日調、再ビ作レルモノ、今ノ鐘ナリ、徑五尺五寸二分、厚サ七寸八分アリ、銘文モアレドモ、者鍵ニエキナタレバ略セリ、

五重塔本堂ノ東ニアリ、三間四方、高サ十五間許、慶長十三年第十四世日詔ノ時、台德院殿ノ御乳母正心院日壽尼ノ願ニヨリテ御建立アリ、其來由ヲ尋ルニ、台德院殿御年十五歳ニナラセ給ヒシトキ、日壽尼當山ノ檀越ヘ御武運長久ノ新願ナメケルニ、志願ノ驗アリテ、御年二十七歳ニテ、將軍ニ任セサセ給ヒケレバ、夫ヨリ四年ヲヘテ、台德院殿ノ御年三十歳ニナラセ給ヒシ時、カノ日壽尼コノ塔建立ノ願ヲ立ケルトイヘリ、此棟札今ニ存セリ(中略)コノ後イクホドナク、慶長十九年ノ大地震ニ傾キシヲ、台德院殿御遊獵ノ時御覽アリテ、御修造ノコトヲ命セラレシトゾ、コノ頃マデモ塔ノ在所ハ、今ノ祖師影堂ノ前ニアリシト云リ、ソノ後元祿十五年二月、第二十二世日玄住職ノ頃、常憲院殿ヨリ、材木二千挺、白銀百枚ヲ賜ハリ、モトノ地ヨリ五十八間ヲ移シテ、今ノ地へ再建ス、コレ明ル十六年ノコトナリ、中略○

出仕門中門ノナラビニアリ、九尺ニ一間、第二十六代日芳建ル、

客殿十六間ニ十一間、向拜三間半ニ二間、御位牌所四間半ニ十間、正德二年第二十三世日調再建セリ、昔ノ客殿ハ、第十二世日惺上人、始テ作レリ、後元和五年、回祿ニアヒケルニヨリ、寛永年中、加賀利家卿ノ後室壽福院寧徹日乾大姉再建セルモノ、梁間十一間、桁行十三間ナリ、ソノ後又再建シセモノ、今ノ客殿ナリ、

寶藏客殿ノ西ニアリ、三間半ニ三間、拜殿五間ニ三間、享保十九年第二十五世日願再建セシ寶藏ナリ、元ノ藏ハ慶長年中第十三世日敬ノ建ル所ナリシガ、元和五年回祿ニカヽレリ、コヽニ於テ承應年中第十八世日領再建セリ、コノ時ノ施主ハ相模院室應日妙トイヘリシトゾ、今ノ寶藏ハコノ後ノ再建ナリ、日蓮ノ像アリ、中老日法ノ作ナリト相傳フ、日蓮身延ヨリ當山へ旅行ノ姿ヲ寫セシナリト、俗ニコレヲ旅立日蓮ノ像ト號ス、其餘寺寶皆コノ庫内ニアリ、

〔明良洪範續篇十五〕寛永七年十月十日ノ夜、池上本門寺燒失セリ、此堂ハ昔シ日蓮ヲ葬リタル所也、元ハ大工右衛門ガ家成シ、此家ニテ、日蓮ハ遷化セラレシ故、後其家ヲ以テ寺トナシケルト也、今迄ノ堂ハ慶長ノ頃、肥後ノ國主加藤清正ノ建立也、石ヲバ領國ヨリ船ニテ運送セラル、客殿ノ續キニ自分ノ書院ヲ引テ建ラル、長サ十六間、幅十二間、外ニ椽頬アリ、梅ノ繪座敷也、初メハ千疊敷ノ積リニテ、二十四間三尺四方ニ作リタルガ、ナゲシ、疊敷居等ヲ考ヘズシテ建ケル故ニ、八百疊ナラデハ敷レザリシ、椽ノ下ハ二間或ハ九尺、地形ニ依テ高下アリ、是ハ地面山ナル故也、板敷ヨリ天井ノ高サ七間アリ、柱ハ檜柱也、世俗ニ增上寺ハ材木ノ勝、本門寺ハ石勝タリト云、清正老

母ノ追福トシテ建立セラレケル、西海ヨリ遙々運送有シ事ナレバ左モ有ベキ、木像ハ座像ニテ六尺計リ、厨子ハ六間四方也、阿部豐後守忠秋ノ弟トカヤ云ル人住持也シ、此上人德行勝レタリ迚、歸スル人多シ、寺院ヲ再興セラレシ時、家光公ヨリ百石御寄附有ケル、

〔續史愚抄中御門〕寶永七年十月十三日甲戌、此日、武藏池上本門寺火、年代略記

〔草山續集文二十九〕修池上本門寺知識文代

蓋聞、時運長久、佛刹隨興、世界荒凉、僧藍共廢、斯以眞諦、由俗諦顯、佛法藉世法成矣、世尊以佛法付囑國王大臣、及有力之人、良有以也、池上本門寺者、高祖大薩埵、草創之名藍、而涅槃之靈地也、星霜交遷、興廢屢變、方今祇園七重之華構、寖就衰微、鶴林雙樹之風烟、旣屬寥落、而今幸遭長久之時、佛刹僧藍、輪奐四海、不曾修故、亦能擲新、唯有此時、猶如遇春花木、寂寞獨不花、是豈非培養不足灌漑有怠乎、蓋夫法依人興、人依處住、是人法處、雖如鼎足、而其所依獨在住處、況乎我之爲宗也、法乃靈山別付之法、人則本地久成之人、所謂法玅、故人貴、人貴故處尊、豈可一日付諸荒蕪哉、且吾法之爲玅也、人々個々、即身成佛、其居則常寂光土、直觀此土、是處即是、若人修一寺、自莊嚴我報地也耳、佛言、造新不如修故福最勝也、諸經之中、往々稱之、昔神僧杯渡、當凶年、教人言、宜修故寺以禳災禍也、又范文正公、遇荒歲論諸寺造伽藍、意欲發有餘之財以惠貧者、故云、荒政之施、莫此爲大、夫修故寺造伽藍、其福非唯禳災禍、亦爲荒政之施、然則凶年饑歲、亦宜修造以救斯民、況是長久之世、昇平之時乎、因玆乃今普叩檀門、廣募樂地、正欲報佛祖之德、酬國家之恩、諸人傾誠、萬方致志、一振鶴樹寥落、重興祇林衰微、人々入此本門、同樂於長遠之壽、箇々到彼池上、共遊乎淸凉之日者也、

〔本門寺文書〕(棟札裏)南閻浮提乾竺之丑寅、日域武藏國荏原郡池上邑長榮山本門寺五。級。之。寶。塔。者、後陽成院御宇、慶長十有三年戊申大將軍家台德院殿贈正一位秀忠尊君之御建立也、是則御乳母渭信女嫗御方法號正心院日幸大姉誓我元祖大士、爲祈大君治平之盛業、奉勸勵之故也、自然已來經九十六之春秋、玉

寺領
寺職

蔓沈薺苔、朱欄傾霜葉也、時嗣法日玄深歎沒其勝功、以訟之官廳、〇中略於是元祿十五年壬午仲春上澣、以阿部朝臣藤正喬、承上命拜戴材金、裝而營修補之功、速告其成、其間亦無有遮障也、此載實元祿十六歲季夏仲旬也、自同月二十四日亘二十六日、集於門下淨侶、敬誦以大乘經王、謹修以十種供養、〇中略

元祿十六歲在癸未六月如意吉祥日　長興長榮兩山主　妙悟院日玄謹誌之

〔棟札裏〕閻浮提內大日本國武州荏原郡池上長榮山本門寺五層之寶塔者、往昔慶長十三年戊申大將軍台德院大相國秀忠〇徳川公之御建立也、〇中略其後訟官依上命拜戴材金修補之三次、凡自御建立已來、距嘉永六年經曆二百四十六星霜、瓦桁頹落、梁棟欲傾、一山之衆徒議而兼訟官、有故不得上命、一山一派悲歎之不息矣、于茲東都芽場街之住永岡姓、發大志願棄捨淨財修補之、且彩宿三寶諸尊像、癸丑仲冬、莊飾盡美、全終其功、今孟夏二日集會滿山大衆、誦總持品一千卷、修音樂十種供養、法會備于佛天三寶法樂云爾、〇中略

嘉永七甲寅孟夏初二　興榮兩山五十五世　日操謹誌之

〔新編相模國風土記稿八十七鎌倉郡〕大町村〇中略妙本寺〇中略同寺所藏〇妙本文書曰、長榮山本門寺〇池上大衆一同之連署之事、抑兩山之御貫首之事廿餘年斷絕之處、以兩山一同之衆議、當住御入院候之處、無程本行院御不和、漸及兩年候、自他門之覺不可然候之間、大坊御刷數度、雖然時過未落着、此上之事者、當山口口中者、如先師之御仕置可奉勵馳走旨、一同存定候、此儀不可存疎意候之條、以誓詞如此大聖朗師之御罰、可蒙偏身、仍連署、天正十二年甲申七月晦日、照榮院日濃、北之院日定、西林坊日生、花藏坊日利、常照坊日漢、法樹坊日休、大乘坊日仙、中之坊日周、成就坊日洞、各華押アリ、

〔寺鑑下日蓮宗池上派〕長榮山　本寺　池上本門寺

右住職、御白書院御緣頰御老中御列座被仰渡之、

御朱印　高百石

〔寺社分限記日蓮宗五〕日朗門流之三ヶ寺者、第一長興山妙本寺、第二長谷山本土寺、第三長榮山本門寺也、右自古謂傳之三長三本也、雖三寺一寺、有日蓮自筆之曼陀羅本尊、日朗亦依加判彼本尊、而此加判之本尊、於一宗最賞翫之、此本尊于今平賀本土寺有之、

〔以貴小傳〕有德院〇德川吉宗御所の御配は、伏見貞致親王の姫宮にて、御諱は理子、眞の宮と申す、いまだ紀伊殿にておはしませしとき、むかへさせたまひしが、寶永七年の六月四日にうせたまふ、池上の本門寺におさめまゐらせて、寛德院どのと申す、御所かくれさせ給ひしのちにおよびて、寶暦元年の十一月に、御供料米百俵を本門寺に賜はりぬ、〇中略

惇信院〇德川家重御所の御母うへは、大久保八郎五郎忠直が女なり、御諱は須末子とまうす、有德院御所に、紀伊殿にて、つかへまいらせ、第一の御子長福君を生まいらす、正德元年十二月廿一日なり、同き三年の十月廿四日にうせ給ふ、池上本門寺にをくりまいらせて、深德院殿といふ、長福君のちに儲副にたゝせたまひ、西の御所にうつらせ給ひしかば深德院殿のみあらかを東叡山にたてらる、此比にや、本門寺に御供料米五百俵をよせらる、

〔本門寺誌〕加藤清正碑銘曰

夫偸波者實相之境、法身所依之處、妙經之體秘要之藏、是肆經曰、佛三種身、從此經生、諸佛於此而得道場諸佛、於此而轉法輪、諸佛於此而般涅槃、只法華卽是三世諸佛生處、得道、轉法輪、入滅之四種支徵、緣玆、今塔先多寶佛已居、今釋迦佛並座、當來亦然、將旌巨表、妙經是三世諸佛所住之處、卽事而眞實相、寶塔、其在乎斯焉、然生佛一如、迷悟體一、以不二事、通不二理、其功豈庸指哉、焉之、藤原朝臣加藤肥後太守淨池院日乘精神之息女、紀州太守源大納言卿賴宣公之北之方瑤林院淨秀日芳大姉、營建玆塔、以贈亡父日乘精靈、增進菩提、追薦資粮、償爾幽神、佛智彌增、佛界彌進、宛如觀掌焉、乃至一見

一禮、永離惡道、六趣四生、齊稟巨益、御兜前物、立、御鏡、御所持軍配團扇、中廟石函藏之、

時慶安二歳龍集己丑林鐘中澣之四

圓是院日輝誌之

名稱　所在　創建　沿革

妙國寺

妙國寺ハ、武藏國荏原郡品川ニ在リ、僧天目ノ創建ニシテ、日蓮宗勝劣派ニ屬シ、同派江戸觸頭三箇寺ノ一タリ、

〔和漢三才圖會 六十七 武藏〕妙國 在品川 法華妙滿寺下 寺領十石

〔新編武藏風土記稿 五十五 荏原郡〕南品川宿

妙國寺 拜領地二萬二千百七十七坪半、長德寺ノ南隣ナリ、鳳凰山ト號ス、法華宗京都妙滿寺末、江戸觸頭三ヶ寺ノ一ナリ、日蓮弟子、中老僧天目弘安八年草創ス、目ハ美濃阿闍梨ト稱シ、又上法房トモ云、俗姓ハ三浦氏、相州鎌倉ノ人ナリ、日蓮滅後、圓極實義抄ヲ著シ、初テ本迹勝劣ノ義ヲ唱フ、乾元元年、藻原ノ日向ト本迹ノ義ヲ論ズ、後ニ常陸國小勝ニ長久山本門寺ヲ創テ居、延元二年四月二十六日寂ス、年八十一、此餘新ニ精舍ヲ建シハ、鎌倉妙國寺、佐野妙顯寺等ナリ、遠ノ後、永享六年五月、當所ノ人品川八郎三郎國友、當寺ニ歸依シ、其領內南品川ノ邊芝原若干ヲ寄附、同八年四月、前上總介定乘、亦雙親菩提ノ爲、畠地ヲ寄附、同十年七月、同十一年十一月ノ二度ニ、某氏憲泰モ寺地ヲ寄ス、コヽニ於テ寺領モ頗廣ク、法燈彌盛ナリ、是僧日叡當寺ニ住セシ頃ナリト云、文安元年ニ至テ、領主紀州熊野人ノ後胤沙彌道胤、及鈴木光純ト云モノ大檀那トナリ、七堂伽藍ヲ建立セシ事テ、全十七年ヲ歷テ、長祿三年ニ落成ス、故ニ日叡ヲ中興開山ト稱ス、此僧ハ文明八年四月十四日寂ス、今按ズルニ、文安三年ノ古鐘銘ニ、大檀那沙彌道胤ト彫リ、寶德二年ノ文書ニ、品川ノ住民道胤ト記ス、又諏訪社ノ傳記ニ、當時檀那鈴木高純道印ト號セ、文明八年ノ文書ニ鈴木入道ト見ユ、見聞集ニ品川ノ鈴ノ話ヲ載テ、昔鈴木道印ト云有德ナル人アリ、幸順ト云息有テ、父子連歌ノ道ヲ好ミ、心敬僧都ト交深キ由ヲ載、又道印父子七堂伽藍ヲ建立セ、福德ノ驗見エタリナンド記セリ、是レ當寺ノ事ナルベシ、總テ考フルニ、道印ハ則道胤ナリ、光純高純幸順代實ハ一人ニテ、道純光純全ク父子二人ナリ、當萬里梅花無盡藏ニ、當所境內五重塔ヲ建セシ時アリ、其詩後ニ載ス、此後永正十四年十月、彈正忠某寺中ニ軍勢濫妨狼藉ノ制札ヲ出ス、同十六年十月、左京亮元最、畠三段ヲ永ク寄附シ、大永四年、北條氏綱高輪原合戰ノ時、制札ヲ出シテ、軍兵狼藉ヲ戒メ、其後天文永祿ノ頃、數度北條氏等ヨリ制札文書ヲ賜フ、天正中年代記ニ、永祿元年四月二日、左馬頭義氏鎌倉八幡宮ヘ參詣アリシ時、品川妙顯寺ニ逗留アリシト識、國同通用セシナルベシ、御當代ニ至リテモ、天正十九年十一月、南品川ノ內ニテ寺領十石ノ御朱印ヲ賜ハリ、後大猷院殿御放鷹ノ時、シハ〳〵御立寄アリ、寬永十一年十一月、五重塔修造ヲ命セラレ、又新ニ本堂及二王門大門

（石垣、石塔礎、小書院等ヲ造立セラレシト云、客殿七間ニ六間、東向、本尊宗風ノ猪尊テナケリ、○中略）

五重塔趾（書院ノ西北ニアリ、高サ十三間、横カ一丈六尺、上一重銅瓦、下四重ハ土瓦ナリシト云、今ハ礎バカリ存セリ、中興二世日珖ノ時、功ヲ興シ、三世日教繼テ造華ス、是皆文明中ノ人ナリ、僧萬里ガ梅花無盡藏ニ詳アリ（中略）是塔ナリ、又羅山集此塔ノ作アリ、最澄妙法眼藏背東漸相分捷入寶只導紙上開眼不輝中如是經、雙塔高低仍舊號、多寶釋迦同座床、草木有情世作々、一所如鑄一層重、此塔慶長十九年八月二十八日、大風ノ爲ニ顚崩セシカバ、大猷院殿御遊歷ノ時、御覽アリテ、寛永十一年十一月八日、松平伊豆守信綱、佐久間將監眞勝命ヲ蒙リ、伊奈半十郎忠常奉行トシテ、御再建アリシト云、）

〔江戸名所圖會 四〕鳳凰山天妙國寺　常行寺の南、海道の右にあり、日蓮大士の弘法にして、京師妙滿寺の觸頭、江戸三箇寺の隨一なり、○中略　相傳ふ、當寺は弘安八年乙酉天目上人（中老僧の一員也）の草創ありし佛場にして、至德二年乙丑、寺主日叡師東國の亂を避んが爲、且は弘法化導の志を達せんと、寺院を廢し京に赴かれし頃、或夜の夢に洛中いづくとなけれど、路傍柳の大樹に鳳凰の栖るをみる、覺て後自思らく、此瑞や正に我道場を開くべき前兆ならんと、直に夜の明るを待て急ぎ洛中を廻り、西洞院三條の邊に至るに、果して大樹の柳の茂れるあり、則夢の應なりとて、其地を闢き一字を營み、鳳凰山青柳寺と號し、日蓮大士より天目上人へ附屬の大曼荼羅を安置し、廣く妙經の法を弘む、（其舊跡は花洛西洞院三條の南にあり、今都七名井の中、柳の水といふは、則其舊跡なり、）嘉慶元年丁卯、天下疫疾流行す、後小松帝詔あり、師をして此災を除かしむ、依奇驗の料として、康應元年南北四丁東西二丁の地を賜はる、然といへども其寺院は明德の大亂に廢せらる、故に寺を妙滿寺に倂す、（後大曼陀羅一幅、井に蓮師親筆の一部一卷の妙經等、妙滿寺に寄す、）其後舊里を慕ひ、又武州に至り、天目上人の靈蹟を興起し、舊貫に復さんとす、其頃熊野鈴木の後係沙彌道印（[illegible]鈴道胤に作る、）品川領主鈴木光純等、叡師の誦演に信伏して、七堂建立の財主となり、叡師に力をあはせ、文安年間彼舊地を象り、則鳳凰山妙國寺と號け當寺を開創す、（此文安永享の年號前後せり、永享六年既に妙國寺へ地境寄附ありしよしの、上杉憲泰の證狀ありて、文安に先立事凡十有餘年、不審とす、）永享六年前の將軍義教公の執事上杉憲泰、先境の由緒を尋、此地の四至を定めらる、其外數通の判形の書あり、其後天正十八年、當國御打入の時、大神君當寺に入らせられ、御止宿ありしにより、後寺領を賜りて朱章を添らる、（江戸

寺格 寺領

寺社領を寄し給ふ、朱章の始なりといへり、又寛永十一年、伊奈半左衛門を奉行として、諸堂を營建なさしめ給ひ、院主日延をして中興開山たるべき旨命せられ、此時より紫衣を免さる、以て永規とす

上杉憲實宛行武州荏原郡南品川之嶋芝原地之事

右依佛地之所望、永代八郎三郎ニ所補任也、仍四至境東南ハ大道堺、西ハ田堺、北ハ荒居道チ關堀堺、以之竹木可栽植者也、仍宛狀如件、

永享六年甲寅五月十三日　憲實在判

妙國寺別當御坊

同

寄進武州荏原郡南品川妙國寺地之事

右彼地、(此間七八字不分明)南者四箇堀界、西者大々道界、北者塔中界、彼内島圍勢岡羅作島一段、同東者海界、南者觀音堂垣界、西者大井四郎之寄進地之事、寺家之内在之、此外常金可作島一段、大道堺北者大堀堺、爲金澤智光院殿御菩提、并爲南小路靈光御菩提、永代被寄江今寄進處也、然間至子々孫々、於此寄進所者、不可有異儀、仍寄附之狀如件、

永享十年戊午七月十八日　憲實在判

品川

妙國寺

〔寺格帳 下日蓮宗勝劣派〕一高拾石　御朱印

右住職、觸下寺院評議之上相定、

一住職御禮無之、年頭御禮大廣間獨禮座一同、獻上壹束壹本、

〔諸宗階級 下〕妙滿寺派階級住職衣體之次第○中略

右之通少も相違無御座、御尋ニ付、衣體奉申上候以上、

享和元酉年十二月　京都妙滿寺派觸頭

品川　妙國寺

同所　本光寺

（梅花無盡藏二）品河（同日（文明十七年十二月二日）隔五十町有江戶城、多法華宗、號妙國寺、有五重塔、）
雙塔五層衆一層、問宗旨答法華僧、蓮紅二十八差別、子細看來滿口冰、

淺草　慶印寺

本光寺

本光寺ハ、武藏國荏原郡品川ニ在リ、僧日什ノ創建ニシテ、日饒ノ中興スル所ナリ、日蓮宗勝劣派ニ屬シ、江戶觸頭三箇寺ノ一タリ、

（江戶名所圖會四）經王山本光寺　南番場にあり、日蓮の宗流にして、京師妙滿寺派の觸頭、江戶三箇寺の一室たり、永德二年壬戌二位權僧都日什上人草創の佛刹にして、則上人を以て開山祖と稱す、中興は日饒上人なり、本尊釋迦如來、宗祖日蓮大士の像は作者詳ならず、又境內鬼子母神の像は、日蓮大士の作なりといへり、　開山日什上人墓（註略）　當寺往古は眞言の古刹なりしが、日什上人の時、蓮師の弘法を慕ひ、今の宗風に轉じて、法華道場とし、則上人創建の體用六箇寺の一員にして、當寺を用の長と稱する是なり、（六箇寺とは、所謂奥州會津の妙法寺、遠州見付の玄妙寺、同國吉美の妙立寺、相州鎌倉の本興寺、京師の妙滿寺、及び當寺等也、）慶安の頃、大樹此地御遊獵の頃、當寺に憩はせ給ひ、松の寺と上意ありしとなり、境內昔は古松多かりし故に、かく名づけ給ひしとなり、

○按ズルニ、寺格妙國寺ニ同ジ、

勝願寺

勝願寺ハ、武藏國足立郡鴻巣ニ在リ、僧良忠ノ開基スル所ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

名勝　所在　創建

〔和漢三才圖會 六十七 武藏〕勝願寺　在鴻巣、　淨〇土宗　寺領五十石　談林十八箇寺内

〔檀林誌 中〕御朱印三十石　武藏國足立郡鴻巣　天照山良忠院勝願寺

開叡略錄

開山勤譽記主禪師〇良忠は、(傳委出二光明寺下一、故略、)後嵯峨院、後深草院の御受戒の師となり、宗門三代の碩祖六派の本宗にて、鎌倉執權左近將監武藏守經時の歸依師なり、經時かつて佐介谷に蓮花寺を建立、自ら法諱を安樂と名け、蓮花寺殿と稱せらる、佐介の淨刹創建の、ち、當所箕田郷等を以て、光明寺に附せられしかば、領知たるを以て、經時に乞もて、禪師此地に至りて、當山を開き、その剃度の始め、法相宗たりし時の本師勝願院良遍僧都の恩義報謝のため、かの名をうつさせられし心にて、寺號とし、勝願寺と名けらる、凡禪師一世の間、四十八ヶ所寺院開基ありし其中にて、第二と定め、暫く住持あり、この時高弟寂惠上人をはじめ、數多門下同道隨從ありしなり、門下數百人の中より、六派に立わかれし時、近郷立帳郷の白旗郷にて、寂惠公法義を弘められしかば、其流を白旗派といふ、又秩父藤田の郷にて、持阿上人弘通有しかば、是を藤田派と云、惠公の高弟定惠上人は、箕田郷にうつられ、勸論あり、又寂惠公は、其のち上州に移り、館林にて弘宗あり、(春部寺の下に出す、故に略す、)今に當驛の西隣箕田に定惠塚あり、是定惠上人入滅の地なり、但し當山其時は、當所より二里餘、松岡村に建立あり、其のち關東こと〴〵く新義眞言宗に成行しかば、松岡もいつとなく眞言宗の僧に奪れぬ、

今猶松岡勝願寺眞言宗にて、當山方丈入院の時、必彼寺へ至られ、開山の像を拜さる、事、常例なり、〇中略

寺格寺領

其のち稱譽清巖上人、慶長四亥年、松岡勝願寺他宗となれる事を歎息し、かの地に別に宗門の勝願寺を開創あられしかど、其所水急流なりしかば、かの地より當所に移され、宗門の昔をしたひ、當村に再建せらる、此時岩村城主太田十郎氏房、上人を歸依渇仰し、はるかに請せられしにより、かの地に移り、一寺開基あられしかば、跡を高弟圓譽不殘上人に讓與あり、殘公道德比隣なく、神祖も深く歸依ましく〳〵けれは、いよ〳〵寺門を再興し、紫衣を著し參內せらる、元和の始、吹上村に勝然寺をたて、その寺に隱栖し、其のち又諸寺を開起あり、別記中略○

散在堂宇

本堂　十一間九間　寬永十五寅年、日譽上人代造、東向、瓦葺、三紋あり、　本尊阿彌陀佛、座像二尺五寸五分、惠公僧都作、日譽上人安置、　三門　二間ニ三間　結城城第二の樓也　上に釋迦佛、普賢、文珠の二大士安置、下の左右に密迹、金剛の二王を安置、上に啓運閣の額を掛、

〔一宮巡詣記拔萃下〕元祿九年六月十二日、鴻巢村天正山正。願。寺。へよる、鎌倉光明寺と同じ開基にて、大門の內に一牧野內匠頭廟有、

〔寺鑑下淨土宗〕御朱印　高三拾石○中略　香衣檀林　鴻巢　勝願寺

右拾貳ケ寺○傳通院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御緣頰、御老中御列座被仰渡之、　住職御禮、御白書院、獨禮御國之外二疊目　年頭御禮大廣間、獨禮座一同、　御暇無之　獻上

一東一本

〔檀林誌中〕御朱印三十石　武藏國足立郡鴻巢　天照山良忠院勝願寺

高貴靈輪

武藏國足立郡鴻巢村之內參拾石所寄附也、幷寺還竹木諸役令免許訖者、佛事勤行修造等、不可懈怠之狀如件、

名稱
所在
創建

慶長九年十一月七日　御朱印

勝願寺

後陽成院御製御宸筆一幅

紫衣綸旨

知恩院末寺勝願寺住持著紫衣令參內宜奉祈寶祚延長者依天氣執達如件

慶長十一年八月廿三日　頭右中辨花押

聽蓮社圓譽上人御房

著紫衣令參內宜奉祈寶祚延長者依天氣執達如件

寬永十八年十一月十五日　左大辨

知恩院末寺
勝願寺住持日譽上人御房

平林寺

平林寺ハ、武藏國新座郡野火留ニ在リ、僧石室ヲ開山トス、此寺元ト同國埼玉郡岩槻ニ在リシガ、寬文年中、今ノ地ニ移ス、宗派ハ臨濟宗ニ屬シ、京都妙心寺ニ隸セリ、

〔新編武藏風土記稿〕百三十一新座郡　野火止宿

平林寺境內六萬坪餘、金鳳山ト號シ、臨濟宗ニテ、京師妙心寺ノ末山ナリ、寺領五十石ヲ賜ヘリ、境內ノメグリ、多摩川分水ヲ引テ限レリトイヘリ、寺ノ後ノ方ハ、喬木ヲヒシゲリテ山野ノ如シ、是ヲ上山ト唱フ、當寺ハモト、埼玉郡平林寺村ニ在テ、コトニ古刹ナリシガ、寬文ノ頃、此地へ移レリ、寺傳云、永和元年春、桂庵主此寺ヲ岩槻ニ草建シ、石室和尚(善玖)ヲコフテ開山トスト、○中略

明獨立易禪師碑銘并序略○註

師明之戴笠荷鉏人、曇公先生也、杭州仁和縣人、其先出晉戴安道、世家山陰會稽、及祖父始出徙焉、父銓部敬橋有善行、母陳氏、姚江陳龍江女、身六產而乳七子、末產雙男、師卽其一〇時中 萬治元年戊戌九月、侍國師元〇隱 東朝武城宰官長者、莫不嘆師才之德之美、出於時輩之右、執政源君信綱、暨有司源正重、欲師住錫、事阻不果、萬治二年己亥、病假遠崎、庚子還關幻寄山、三載出關、亡幾罹災、發時寬文三年癸卯三月八日也、嗣後居不擇地、無礙其緣、術同道廣、治不視方、活潑施藥、闔關稱神、普濟人及物、善薩本行、應機施用、祖老活路、至如書法、正鋒遒古、神氣含光、獲其片紙隻字、珍襲猶如鍾王墨蹟、蓋亦絕品也、乙巳春、雪峯卽非和尙、聞山豊之廣善、東師遨獵、虛半座以待師、飄翩然而往、不憚餘喘、出力備至、豊主感師老而精勤、特就山中起靜室、爲憩息之所、自扁曰白雲室、厥後省覲國師、途次疾作而回、遣侍徒祖命代焉、平時健啖猶壯年、至此稍減、衆勸服藥、不聽曰、報身非病何事藥爲、側臥匡牀、吟哦自娛、忽朝起坐索筆書曰、鑿鑿塵塵傍海鄞、不忘殘夢繞空軒、咄任他凍折梅花影、接却江南白玉魂、書罷遽焉而逝、容貌如生、玉柱一隻尺餘、衆皆驚異、悲悼不已、春秋七十七、夏臘一十九年、實寬文十二年壬子冬十一月初六日也、示寂前一日、請千果和尙廣善庵、托末後事曰、卽今甚麼時候、答云、日午打三更、師呵呵而笑、和尙便起、移爲下火闍維於聖壽山、侍徒慧明護送靈骨、窆於黃檗山、有天外老人集若干卷、嗟哉吾師、棄世業已四十七年於茲、空抱素懷、負恩極矣、積愧忸怩、莫可與計、詎謂己丑臘月、遙奉鶴書、夙夜戒途、越庚寅二月、直抵武城、三月朔日賜殿見、命入翰林、顧謂身已老、還其先師無安像之區、願言歉椽之構、獨有源爲政聞而善之、以爲可圖也、距都西五十里外、武州地有鉅剎焉、山曰金鳳、寺曰平林、前伊豆守源君信綱之重建也、墾闢曠野、樹之松杉、導水玉川、控之紆廻、分支析脈、委給庖湢、亢旱不竭、人各便之、其子院聯芳軒西北之隅有曠地、卽可就而起焉、住持靈峯禪師、其老師默雲和尙、合議可之、乃庄工甃木、梱載以至、卜吉架梁、翼然儼東、僅三楹間方之、葺以覆蓋、堊以蓮壁、匪日而告竣、時正德丙申三月初七日也、扁曰鐵溪堂、中位供範金大士導師歸崇也、左奉師像以奠之、扁題梅花關主、乃普照國

寺領

師書贈者、旌其三年坐關也、○中略

享保二年歲次戊戌四月穀旦　　弟子高松本季江直美等拜建

學寮略○註　鐘樓佛殿ニ向ヒ右ニアリ、近水齋ノ三字ヲ扁ス、鐘ノ徑リ二尺九寸、高サ三尺五寸、今ノ鐘ハ寛延中鑄タリ、其時ノ銘、及ヒ元和天和等ノ銘ヲ勒セリ、其文左ノ如シ、

大日本國武藏州埼西之郡岩附庄、金鳳山平林禪寺、干戈後無僮、粥華鯨、玆吾檀越參州藩頓郡吉良之健產、源家之氏族、大河內法林宗無爲祥庵壽參、同雄嶽宗英居士、有孝心所感、命治工鑄売鐘、寄與鳳山、其功德也、其孝心也、積岳餘慶、猶以至家門之榮者、幾萬年矣、祝祝、銘云、

耳根清淨鮮　百八提諸民　鳴吼則轟地、　擊鐘則動天、　曙光樓閣外　明月寺門前　檀越不孤僮　兒孫億兆年、

于時元和九年癸亥九月十三日　　住山比丘雲峯宗怡誌

寺舊在同州岩築城西、寛文初移地於此攸、事具載寺記、延寶甲寅之夏、東司院事、四年丙辰堂外徽火鐘樓尋燼、聲隨扣擊、其響若有厲、予旦暮病諸、天和壬戌之冬、遂命治工再鑄、範圍尺寸、全該舊制、及其銘辭、不易壹字、重斯鑄、無所庶幾者、切乘檀越初度之願輪、永保寺門中興之基業、祝云、刻石有消日、洪音無盡時、遠也、大也、

維時天和二年壬戌之冬十二月十六日

武州新倉郡野火留莊金鳳山平林禪寺

現比丘默雲禪宜書○寛延三年銘略

武州野火留　平林寺

〔寺鑑下禪宗〕御朱印　高五十石

喜多院

名稱 所在 創建 沿革

喜多院ハ、無量壽寺ト號ス、武藏國入間郡仙波ニ在リ、其創建ヲ詳ニセズ、慶長年中、德川家康、其子秀忠之ヲ再建シ、天台ノ僧天海ヲ以テ開基トス、

〔喜多院文書 一〕武州入東郡仙波鄉星野山無量壽寺喜多院緣起

星野山無量壽寺者、江城之西北十里、其地接武野、倚河越、竹樹泉石、實壯觀之地也、古老相傳云、昔日有異人名仙芳者、不知何許人、曾來于茲而逍遙言曰、過去毘婆尸佛說法之遺跡者、直此地也、當寺眼界數里、滄海漫々而非舟航不可進步矣、時有一老夫卒爾來、仙曰、汝爲孰乎、對曰、吾神龍之所化而且此海之主也、仙曰、請汝令我得一小地乎、老夫曰、諾、仙曰、我掌中有袈裟、所得之地與此大齊、於是乃布袈裟于波上、則延及數十里、老夫大驚曰、令爲神術故、潭底無地居、爲是如何、仙乃留小池而復神龍之居、郭之東南九町餘有小池、祠辨天者是也、又作土佛而投波底、則海水忽乾、而赤脚猶可步、覺營伽藍、仙波之名據焉、至桓武平城之朝、堂宇傾側、而荒廢日久、淳和帝天長七年庚戌、勅慈覺大師再營寺且賜無量壽寺之號、本尊安彌陀、左不動尊、右多聞天、又將一切經埋于堂後之叢中、而上築一小丘、造二層塔、中安釋迦多寶二佛、御塔之山者是也、云左祠山王、右置白山之社、白山者卽地主神也、其傍有法華三昧堂矣、傳布台乘、闡揚妙法、白黑之徒附而化者甚衆、土御門帝元久甲子、爲兵火亡而緇錫騈散、而降無能起舊業者、減跡廢名者、殆九十餘歲、伏見帝永仁四年丙申、勅僧正尊海令再營焉、〇中略後奈良帝天文六丁酉歲七月十五日、北條氏綱攻河越城、而與上杉朝定戰、大克拔城、當此時堂宇經籍、悉爲兵燹滅、而後地鳳爲蕪者五十二年、〇中略後陽成帝天正十六戊子歲、慈眼大師〇天海初管此、自患靈區之荒蕪、而心要再振宗風也、時源君大權現〇德川家康奮起于東州、素與師相好、一日源君問師曰、東八州之中、爲台家之雄者爲孰乎、對曰、無如無量壽寺者矣、源君乃有復營之志、慶長十七年壬子、源君獵遊于河越之日、偶過茲、自採準繩而爲營地、令源忠利監事、河越城主酒井備後守堂宇悉換天長之舊、後陽成帝自書星野山之三大字而賜焉、乃額屋頭、改本尊安藥師佛、新造慈惠堂、經藏、鐘樓、僧舍若干間、不日而成矣、修造至今、因官家之功也、終附俸田

五百石、〇中略大權現薨後、慈眼大師新營東照神君之靈廟於此處矣、寬永十五戊寅歲、左大臣源家光公復改造之、令堀田加賀守正盛知其事、金殿玉樓巍々焉、煥々焉、惟清惟靜、洋々乎如在矣、大師嘗營茲五十六年而化、法印倫海繼之、未幾寂、僧正周海次之、明曆二丙申歲、右大臣家綱公命伊豆守源信綱修營靈廟堂宇、寬文元年辛丑、周海就信綱乞靈廟之祭田、〇中略信綱以聞、覺加附官田二百石、而供東照宮之粢盛矣、寬文十一辛亥、復悉修造、令甲斐守源輝綱奉事、〇中略

延寶六戊午歲春三月　江村悰達謹書于東叡寓居

〔喜多院文書一〕仙波者是三祖之起立、惠心一流之嫡家也、於寺院者天下無雙之靈地也、雖然近年爲荒廢之地、一宗悲歎焉、雖憂無力、然處今般柳營可有再興之旨、嘉會時至、是永在此地、隨力演說、佛法弘通可相勵之間、此旨言上所仰候、恐惶謹言

慶長十六年辛亥七月廿日　天海判

進上本田佐渡守殿

慈眼大師弟子東叡學頭兼羽黑山別當僧正胤海寫之印

〔仙波建立記〕仙波御建立記錄

一慶長十七壬子曆八月、北院大寢所、家康將軍、征夷將軍秀忠公被仰御建立、京間十二間半、八間半、檜柱八寸角、屋根椽葺、上段二間三間金座敷、違棚天井者組入、唐戶彫物者獅子象鳳凰孔雀、御拜迄結構出來、御奉行者酒井備後守、井野半十郎、小奉行者半兵衞、吉兵衞、大工棟梁者鈴木近江守、十一月家康將軍御成、

一同十八癸丑年八月、慈惠堂京間十間七間半、佛前須彌壇、慈惠宮殿二階垂木極彩色、堂作組物三重、天井者組入、唐戶彫物孔雀鳳凰、柱者檜八寸角、御拜迄結構出來、椽葺次庫裏者九間七間、京間、柱者七寸角、大黑柱一尺角、椽葺、慈惠堂庫裏之間十間三間、廊下、所化部屋九、

大僧正御居間九間五間、廊下五間三間、五間二間二、右三家、同將軍秀忠公御建立、十一月家康將軍御成、其時大堂建立被仰出、三箇院屋敷御自身御割被成、寢所、慈惠堂、庫裏、御居間、都合金八千兩入目、

一慶長十九甲寅歲八月、大堂、征夷將軍家康公御建立、檉圓柱五尺廻、四十八本、田舍間九間四面、大間七間四面割立、礎者從日本大名衆一宛寄進、或一間四方、或五尺四尺、三尺四方、已上數百三十石

一價直金百五十兩爲上、七十兩五十兩爲下、價直一万六千兩、此石從老袋六月七月之間車載、瀧山五百人衆引申候、組物者五重、天井者合子、御拜屋禰者瓦葺（大板小檜葺）結搆、大奉行酒井備後半十郎、鈴木近江守、右寺之奉行衆也、是入目金八千兩、本尊者阿釋藥十二神大方京佛、

一寬永九壬申年十一月、北院御門、大僧正御建立、材木者高麗郡平井鄉檉木、先尊能大將中院門檀山根衆一同而取、殘分酒井讚岐守足輕衆千人手間而取舉、番匠者比叡山坂本若狹守、奉行者平井作左衞門、屋禰者橡葺、柱六尺廻、內明九尺、竪三間、

〔寺鑑上天台宗〕御朱印　御神領院領共　高七百石〇中略　武州仙波　喜多院（僧正官迄昇進）

右三ヶ院〇觀理院、喜多院、長樂寺、住職并僧正官共、御伺之上、從御門主被仰渡之、住職并任官御禮、御白書院獨禮、年頭同所（御閾之內二疊目）但觀理院御禮正月十六日上ル、獻上何れも一束一卷宛、

〔駿府記〕慶長十六年十一月朔日、御放鷹、〇川越、秉燭以後、山門南光坊仙波北院等出御前、爲仙波所化堪忍料、而寺領可有御寄附之旨被仰出云々、十七年四月十九日、山門南光坊僧正天海參府、則出御前、赴武州仙波之由申之、依之銀參十枚被物等賜之、則於仙波爲寺領三百石、永代有御寄附、此僧正以爲天台之學匠、關東天台之所化可就之由上意云々、

〔仙波川越由來其外見聞集〕武州入間郡仙波

一喜多院都合七百五拾石

寺制

内

小仙波村五拾石ハ舊知　小仙波村五百石ハ倖田、慶長十七年被下、大仙波村貳百石ハ祭田、

寛文元丑年被下、

〔喜多院文書〕一定

一毎月十七日、東照大權現〔○徳川家康〕爲御法樂、法花懺法并論義、寺家衆、所化衆堅可有執行事、

一毎年四月十七日、中院始、寺家衆、所化衆并山根庄内、足立其外末寺總門徒、不殘出仕、御祭禮法事可相勤事、

一三季講演、右如斷可相勤事、

右條々、不可有怠慢者也、

寛永十九年卯月七日　朱印〔○天海〕

規式

〔喜多院文書〕一貞享二年乙丑七月十日、本書御本房江指上、取次傳法院

喜多院

關東天台宗諸法度

一不伺本寺、恣不可住持事、

一非器之輩、不可付所化、但於向々法談所者、用否可隨時宜事、

一爲末寺、不可違背本寺之下知事、

一不請關東本寺之儀、從山門直不可取證文事、

一於關東追放之仁、不可介抱、若又於山門押而有許容者、於關東不可請山門之下知事、

一所化衆構公事不可爲事、

一所化衆法談所之經歷、不可闕二季事、

一山之學頭別當井衆徒、至レ有レ依怙者、於二本寺一可レ有二其沙汰一事、

右堅可レ守二此旨一者也

慶長十八年二月廿八日　御直判

喜多院

〔喜多院文書 一〕仙波東叡山無量壽寺喜多院寺號職之事

以二常林房一　宜レ轉二醫王寺一

右所レ令レ被レ任、宜下承知、就中乘存法印依二所望一令二免許一、彌以二眞光寺一可レ相二守顯密法流一者也、

元和元年卯終冬十二日

山門探題正僧正天海

〔天明集成絲綸錄 二十七〕寶暦十四申年三月

寺社奉行江

武州仙波御宮別當喜多院一切經、及大破ニ候ニ付、御修復料相願候、依之御宮小破御修復料貸附利金、去未年分ゟ來ル酉年分迄、都合金百五拾六兩貳分餘、當年ゟ三ケ年被下候間、追々修復仕候樣可レ被二申渡一候、尤御勘定奉行可レ被二談候、

三月

蓮馨寺

蓮馨寺ハ、武藏國入間郡川越ニ在リ、僧存貞ノ開基スル所ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

名稱
所在
創建

〔和漢三才圖會 六十七 武藏〕孤峯山蓮馨寺 在川越 ○同淨土宗 寺領五十石 談林十八箇寺內

武藏國入間郡川越 孤峯山寶池院蓮馨寺

〔檀林誌 〕御朱印貳拾石

寺緣槩運

天正年末北條家落老當城主大道寺駿河守政繁（政繁とも）母、平生淨土の要法を信敬し、蜴山角氏の二子剃度し、感譽存貞上人と名付しを、座右に請見し令法久住、有情利益のため、即ち自らの略粧の知行所、平方村に造營し、地名により孤峯山（今は孤峯山を、御詠と稱す、）と名け、寺名法名ともに寶池院と號せらる、是當村に池あり、七寶池に標題し、自ら名けられ（今丸池と云）人五會法事讚の文に、西方便有一蓮生の意を以て、蓮馨大姉と稱せらる、は、池蓮に嘉譽の儀有るが故なるべし、さて又永祿元年八月、駿河守在城のとき、城下に又寺を立、これを建立寺と名け、又見立寺と改め、佛殿方丈學寮日を追て立らる、此とき四方の學徒、淨宗の傳法に志あるものは、東國に來集せしは、下總國生實、同國小金、同國横曾根、同國鏑木、武藏國川越、同國貝塚の緣山、同國小机、相模國鎌倉などに輻湊し、夏冬の法輪に多少の僧俗群會有ければ、駿河守是近國の敎の有さまをしるべき善緣なりとて、見立寺へ學資若干を（五十貫の地と云ふ）附せらる、且雲集結夏の度ごとに、糧米百石づゝを寄捨あり、感譽上人は、（一說并に當寺近來の記に、北條氏康の二男小田原傳譽寺に入て剃度とあり、按るに、北條家譜にのせず、山角氏の譜に載せてあり、後世の記錄歟、寺記なりといへども、北條氏には有べからず、されど今寺紋にも三鱗を用ゆ、）永祿六年、武州緣山に轉住し、第十世の祖にのぼり、傳法の規繩法問の則儀を定めらる、故に一流の祖と稱せられ、今檀林の正風と成る、師緣山の八世果譽上人并飯沼弘經寺鎭譽祖洞公に隨行ありしのち、諸方に寺院を建開ある事廿餘寺なり、同九年又當山に歸り、再住の上、平方に先に建る所の蓮馨寺を移し、（是城主の命なり）見立寺と兼帶し、かの跡には馬踏寺を創め、又當所高津町大蓮寺、同國多麻郡清戸長命寺、信濃國水鎌村善導寺、同國綱島安養寺、相模國岩瀨大長寺、同國深谷惠念寺等を開創あり、

小田原家濟當寺檀那

大道寺左馬介、松田下總入道、太田下野守、齋藤右兵衛佐、笠原十郎、入田出羽介、萩原喜左衛門、白子又右衛門、齋藤孝次郎、山田民部丞、山角上野介、山角藤五郎、山角紀伊守、笹山仁右衛門、福島美濃入道等、檀家として、各米帛を送りて學糧とす、此時は蓮馨見立の二寺に住持とし兼帶あり、天正十八年、當山廓無上人時、上方より下向の軍勢、當城を攻戰の時、寺宇放火の事いかゞならんと、上人書狀に寺緣をのべ、小田原御陣所に至り、軍勢の亂妨を制止のため、禁札を願ひしかば、豐公可なりとして、禁札を賜へり、

禁制　　武州川越 蓮馨寺
　　　　同門前 見立寺

一軍勢甲乙人等、濫妨狼藉事、
一放火事
一對地下人百姓、非分之儀申懸事、
右之條々、堅令停止訖、若於違犯之輩者、忽可被處嚴科者也、
天正十八年五月　印

是は北條家の軍へ和伏の爲となり、〇中略

伽藍大小

本堂　十一間に九間、廿二世龍譽上人代再建、是迄度々燒失　開山堂　三間に二間半、覺譽上人再建　今は疊置　鐘堂　銘　稱譽上人建

〔寺鑑下淨土宗〕御朱印　高貳拾石　右同斷〇晉玄檀林　川越　蓮馨寺

右拾貳ヶ寺○幡随院、大善寺、大巌寺、勝願寺、大念寺、霊巌寺、蓮馨寺、浄国寺、霊山寺、弘経寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御縁頬御老中御列座
被仰渡之　住職御禮、御白書院獨禮、御閾之外二疊目　年頭御禮、大廣間獨禮座一同、　御暇無之　獻上
一東一本

〔檀林誌戊〕御朱印廿石　武藏國入間郡川越　孤峯山寶池院蓮馨寺
所賜朱章
蓮馨寺領武藏國入間郡川越領之内、貳拾石事、天正十九年十一月日、寛永十三年十一月九日、兩先
判之旨、全收納永不可有相違者也、仍如件、
寛文五年七月十一日　御朱印

名稱所在
創建沿革

龍穏寺

龍穏寺ハ、武藏國入間郡越生ニ在リ、永享年中、足利義教ノ命ニ由リ、上杉持朝ノ創建スル所ニシテ、僧無極ヲ以テ開山トス、後幾モ無クシテ兵燹ニ罹リ、一旦廢寺トナリシガ、文明年中、太田持資父子之ヲ再興ス、曹洞宗ニ屬シ、關東僧錄司三箇寺ノ一タリ、

〔和漢三才圖會六十七武藏〕龍穏寺　在越生　○洞宗　寺領百石
太田道灌開基、曹洞宗關東僧錄、

〔新編武藏風土記稿百七十五入間郡〕龍ケ谷村
龍穏寺　曹洞派ノ大僧録ニシテ、開東三ケ寺ノ其一ナリ、長昌山ト號ス、島寺、古ヘ今ノ門外ノ小名堂浮ト云所ニアリテ、其頃ハ山號モ瑞雲山ト云リ、今ノ寺地古クハ深キ淵ニテ蛟龍ノスミカトナリ、人ノ進ヒモナカリシニ、第五世ノ僧雲崗和尚、山神ニ祈誓シケレバ、俄ニ風アラク雷ナリ、カノ龍騰天シ、深淵忽チ平地ノ如クナリシ故ナガヲ其所ヘ引移セシト云、背ガヒガタキ説ナレド、村ナ龍ケ谷トイヘルモ、是ヨリ起リシトイヘバ、其アラマシヲ記シテキヌ、當寺ノ開闢ナ草ルニ、永享ノ頃ニヤ、足利將軍義教、龍先條氏以來代々ノ道灌ナ修シ、且多年當國ノ取寺ニ、丸ナ果

セシ、アマタノ人ノ寃魂ヲナダメン為、一ノ大伽藍ヲ建立セント思ヒ給フ折カラ、無極慧徹トイヘルシ高徳ノ僧アリ、其先ハ當國兒玉ノ黨ニテ、父ハ將軍義詮ニ仕ヘシモノナリ、世ノ爭亂ヲ遁テ、肥州ニ至テ、應永年中、又當國多摩郡小山田ニ來リ、卓庵和尚ヲ師トシテ、大泉寺ヲ開キ、暫ク住セシガ、後又父母ノ遺跡ヲ慕ヒ、且ハ當郡ノ内瀧ノ入村桂水山ニ兼テ信ズル觀音ノ靈場アルニヨリ、コヽニ來テ、暫ク錫ヲ停メケリ、義教元ヨリ此僧ヲ歸依セシカバ、迎取テ開山タラシメントス、然ルニ當國ハ扇ケ谷上杉修理大夫持朝ガ分國ナルニヨリ、カノ人ニ命ジテ七堂伽藍ヲ新造セシメ、若干ノ寺領ヲ寄附シ、懇ニ請シ入レテ開山トス、其後無極檀越ノ進メニヨリ、月江正文和尚ニ當寺ヲ讓リ、己ハ濃州補陀寺ニ趣キ、永享二年十二月二十八日寂ヲ示ス、月江在職ノ間ハ世ノ爭亂止時ナク、此邊シバ〳〵戰爭ノ巷トナリシユヘ、途ニ兵火ニカヽリ、堂宇スベテ一擧ノ煙塵トナリケルニ、カヽル爭戰ノ間ナレバ、賞賛ヲソフル者モナク、月江一己ノ力ニテハ再建ニ及ビガタキユヘ、空ク[illegible]寺ヲ出テ、暫ク小杉村ニ退隱ス、今ノ開通寺是ナリ、其後月江亦師ノ迹ヲシタヒ、濃州ニイタリ補陀寺ニ住職セシカバ、當所ハ再建ノ沙汰ニ及バズ、タレ法幢ヲ立ベキ者モナキユヘ、[illegible]寺ノ如クニテ、年ヲヘダリ、コヽニ又泰叟トイヒシ僧アリ、二師ノ迹ヲ恢復セントス、時ニ太田道眞道灌父子モ亦先祖ノ冥福ヲ修センコトヲ願ヒ、且ハ又ノ年ゴロ廢チ[illegible]場ニ勝セシ人人ノ亡靈ヲ弔ンガ為、去ルベキ寺院ヲ經營セント思ヒシニ、タマ〳〵普光院義教三十三年ノ祭期モ近ク明年ニアタレルヲ以テ、前ニ無極ガ當寺ヲ草創セシ先蹤ニ習ヒ、諸堂ヲ再建シ、泰叟ヲ請フテ蒞席セシメ、曹洞一派ノ事ヲ總司ラシム、是文明四年ノコトナリ、依テ此僧ヲ中興開山ト稱シ、道眞ヲモテ中興開基トシ、堂中ニ太田家代々ノ靈牌ヲ置ク、道眞明應二年二月朔日卒ス、一ニ七月二十五日トアリ、鑑シテ自得院實慶道眞庵主ト號ス、泰叟後足立郡大成村普門院ニ移職シ、明應六年十一月四日示寂ス、第五世靈巖和尚ノトキ、法力ヲ以テ龍怪ヲナダメ、永正元年當寺ヲ今ノ地ニ移シ、山號ヲモ長昌ト改ムト云、事ハ前ニ辨セリ、又第七世節庵和尚ガ、天文十二年ニ記ス所ノ寺傳アリ、首尾總テ漢文ニテ、或ハ佛語ヲ交ヘ、事長ケレバ、全文ヲバトラズ、其要ヲ摘ミ及ビ今住僧ノ傳フル所ヲ述ルコト此ノ如シ、寺ノ起立ノコトニ至リテハ疑フベキコトアリ、小山田ノ大泉寺ト當寺ノコトヽ相混ジテ書セシサマニテ、ワカチガタク、其上泰叟ヨリ以前ハ、シバラク他派ノ僧住セシナド云コトモ見エレバ、無極ノ開闢スト云ハ、大泉寺ノコトニテ、當寺ハ泰叟始メテ開キ、無極ヲ勸請シテ開山トセシモシルベカラズ、サレド舊刹ナルコトハ疑フベカラズ、相國寺ノ僧萬里ガ梅花無盡藏ニ、文明十八年季是十一日、越生ノ道眞ガ自得軒ニ就テ、郭公稀ナリトイフ題ニテ七絶一首ヲ吟ズ、縱有千聲倚合稀、況今一度隔生枝、飛難知殘夏似初夏絹兩山中聽未歸、又長享二年八月十六日、龍穩精舍ニ入テ一絶ヲ賦ス、越生古寺鉀梅時、斜顯吹鵠欲宿枝、鬣入上古參藥石、愧非忘箸老禪師、是等ニテモ當寺ノ舊迹タルコト知ルベシ、又第十四世眞加和尚ノ時、天正十八年、太閤秀吉ヨリ、小田原征伐ノトキ、朱印ヲ押セシ制札ヲ與フ、其文ヲ寫テ門外ニタツ、又同キ年百石ノ朱印ヲ與フ、ソノ文今ハ失ヘリト云、東照宮駿府ニアラセラレシ頃、第十七世洞谷和尚ノトキ、慶長十七年、先規ニ任セテ寺領百石ノ御朱印ヲ賜ヒ、僧錄司三ケ寺ノコト、是マテノゴトク御ユルシアリ、又全阿彌ヲ以テ宗法ノ掟ヲ仰セ下サレシ文書モアリ、其文下ニノス、三ケ寺ト云ハ、當寺及下總國國府臺總寧寺、下野國富田大中寺是ナリ、此三寺ニテ、國中ヲ三分レ、其一ヲツカサドル、當寺ノアヅカル所ハ二十三ケ國、所謂武藏、上野、紀伊、備後、美作、伊豫、土佐、兩渡、讃岐、安房、周防、長門、信濃、越後、佐渡、豐前、豐後、筑前、筑後、肥前、肥後、淡路、備中等ナリ、御打入ノ前ヨリモ此三寺ハ僧錄司ナレド、總寧寺ハ始メ乘安寺トイヒ、大中寺ハモト乘國寺ト云、寺號ノ昔ヨリカハラザルハ、タヾ當寺ノミナリ、又秩父郡高山ノ不動ハ、當寺ノ奥院ト稱ス、今モ住僧入院ノ後、必高山ヘ參詣ス、又云、古ヘハ住僧常ニ當所ニ居リテ、江戸ノ公務ハ芝青松寺ヘ役僧ヲ出シオ

キテ勤メシメシガ、次第ニ公用多端ナレバ、二十六世普春和尚ノトキ、延寶六年、江戸麻布本村ニテ、六百坪ノ寺地ニ買ヒ、宿寺ヲ造立シテ、コヽニ常在ス、後此所賜地トナレリ、シカリシヨリ後ハ、住職ノ後、一日ノ御暇賜ハリテ當所ニ來リ、夫ヨリハ、始終江戸ノ宿寺ノ方ニ居リ、當所ニハ、隱司ヲオキテ、諸事ヲ調理セシム、是ハ正德年中ヨリ定メラレシコトニテ、カノ普春ハ、元祿二年十月二十日ノ示寂ト云、

〔太田家記〕賴政ヨリ九代　太田備中守資清公（源六郎、道眞、左衞門大夫、自得軒○中略）道眞公（資清○太田）晩年に及び給ひて、武州越生と云處へ御移り、閑居ましましける故、自得軒と號し申候由、又越生に精舍を御建立、龍隱寺と稱し、當寺昔は道眞公の御影有之候處、寺炎燒之時、燒失せしとぞ、

山口但馬守殿御浪人之時、此龍隱寺に御座有りて、右之御影御覽之由、道願公へ御物語候とぞ、

此寺は曹洞宗にて、關東三ヶ寺の中也、

堂塔

〔新編武藏風土記稿入間郡百七十五〕龍ヶ谷村

龍穩寺○中略　表門（近年大風ニヤブレテ、未ダ再建セズ、假ノ門ヲ立、）　樓門　冠木門　本堂（本尊釋迦、脇士迦葉、阿難ノ像ヲ安ズ、コノ堂ノ左右ニ、廻廊ヲ設ケ、冠木門ノ左右ニ續ケリ、中庭ニ小池アリ、池中ニ辨天ノ小社アリ、）　庫裏　鐘樓（寬文十二年、當寺第二十五世太了和尚ノトキ、鑄造セシモノナリ、銘文アレド、考證ニ益ナケレバ、トラズ、）　僧堂　衆寮

寺格 寺領

〔寺格帳下 曹洞宗〕高百石（御朱印）　同○關三ヶ寺　武州越生　龍穩寺

右三ヶ寺（○總寧寺、龍穩寺、大中寺、）住職、於御白書院椽頰、老中列座被仰渡之、

一住職御禮御白書院、獨禮、獻上壹束壹卷宛、御關之外貳疊目、御暇無之、

一年頭御禮大廣間、獨禮座一同、獻上壹束壹本宛、御暇無之、

右關三ヶ寺、延享三寅十二月中願出候者、年始御禮正月、十五日申上、御暇并拜領物仕度、且入院之御禮申上候節も御暇被下之、拜領物之儀相願候處、伺之上年始御禮者、唯今迄之通り正月六日獨禮座ニ而申上、御暇拜領物者願之通被仰付候、依之翌卯正月十九日於柳之間御暇拜領物、時服四

宛被下之候、向後每年正月御暇被下、入院御禮申上候節も、右之通相定、尤時服廣蓋ニ而引、

慈恩寺

名稱所在

慈恩寺ハ、武藏國埼玉郡慈恩寺村ニ在リ、僧圓仁ヲ以テ開山ト稱ス、天台宗ノ一本寺タリ、

〔新編武藏風土記稿 埼玉郡 二百二〕慈恩寺村

慈恩寺村ハ江戸ヨリ行程十里、太田庄ニ屬ス、此邊箕輪郷ノ唱アリ、村內慈恩寺ハ古蹟ニシテ、シカモ大刹ナリシカバ、ソノ境內山林田畠ノカヽレル所ハ、イツトナク慈恩寺村ト呼ナラハセリ、戰爭ノ世ヲ歷テ、シバ〳〵兵火ニ罹リ、寺產モオノヅカラ衰微セシカバ、田畠モ昔ニ似ズ、御入國ノ時、百石ノ御朱印ヲ賜ヒ、餘ノ地ハ御料所トナリシニ、寬永年中、其地ヲ阿部備中守ニ賜ハリ、下總國古河城附ノ村トナリ、天和二年ニ至リテ、寺領ノ內ノミヲ別テ、舊ニ從テ慈恩寺村ト號シ、其餘備中守領內ニ屬スル地モ二ツニ分チテ、カノ寺領ニハアラザレド、表慈恩寺裏慈恩寺ト唱ヘ來レリ、○中略凡東ハ小溝村、西ハ古ケ場村ニテ、南ハ表慈恩寺、上野ノ二村ニ接シ、北ハマタ表慈恩寺村ナリ、四方ノ丁數モ大概八町程、モトヨリ慈恩寺ノ領ニシテ、今モシカリ、

〔全國各宗本山明細帳〕天台宗 本山 慈恩寺 武藏國埼玉郡慈恩寺村

創建堂塔

〔新編武藏風土記稿 埼玉郡 二百二〕慈恩寺村

慈恩寺 天台宗東叡山ノ末、華林山最上院ト號ス、當寺古ハ坊舍塔頭モ多ク、天文年中、太田源五郎資正ヨリ與ヘシ寄附狀ニ、慈恩寺ハ本坊四十二坊、新坊二十四坊云云トアルニテモ、大寺タリシコト知ラル、今モ境內廣ク、塔頭九坊アリ、開山慈覺大師(圓仁)貞觀六年正月十四日示寂、寺領百石ノ御朱印ハ、天正十九年賜ヘリ、據ニ寺傳ニ、當寺ハ天長年中ノ草創ニシテ、開山慈覺大師、日光山ニ登リシ時、一ノ李實ヲモテ佛法弘通ノ地ニ至テ生ズベシ、予其處ニテ法ヲ弘メント云テ、彼李實ヲ投セシカバ、虛空ヲ飛行シ、當所ニ落テ芽ヲ生ジ繁茂セリト、コノ事ハ例ノ佛者ノ說ニシテ信ズベカラザレド、此地ハ昔ヨリ李樹多クシテ、今モ繁茂セリ、故ニ華林山ト號ス、又大師日光山ヨリ當所ニ來レル時、一人ノ老翁アリ、被簑云、予師ヲ待コト久シ、新ニ靑龍ノスメル地

アリ、人民コレガタメニ苦ム、大師此患ヲ救ヒ賜ヘト云シ所ヲ、逢山ノ原ト唱フト、此事蹟モイカガハアランヤ、傳フルマヽヲ記セリ、當寺ニ東照宮御位牌アリ、寛文十年、御供料トシテ二十八石四斗九升餘ヲ御寄進アリシヨリ、今モ替ラズ、又太田氏ヨリノ文書一通ヲ藏ス、其文左ニ出ス、

武州太田庄慈恩寺者、本坊四十二坊、新坊廿四坊也、此內十八ケ坊、或者破戒之徒、或者澁江家風之仁拘來、彼十八坊之事、至于資正代改之六十六坊、皆以當寺江奉寄附實也、於子孫不可有違亂候、祭禮勤行等不可有怠慢、仍寄進狀如件、

天文十八己酉年九月三日　　源資正花押

慈恩寺衆徒中

客殿(彌陀ヲ本尊トス、外ニ不動ヲ安ズ、)　開山堂(開山慈覺大師ノ像ヲ安置ス)　鐘樓(寶曆四年鑄造ノ鐘ヲ掛)　經堂　念佛堂　如法經堂

觀音堂(坂東札所三十三番ノ內、第十二番ニシテ、昔ノ本尊千手觀音ハ、慈覺大師ノ作ニテ、立像ナリシガ、寛永ノ比燒失セシ時、天海僧正比叡山ヨリ持來ヲ安置ス、則今ノ觀音ニシテ坐像ナリ、此堂元ハ塔頭櫻木坊ノ持ナリシガ、今ハ本坊ノ持トナレリ、堂前ニ燈籠アリ、南蠻鐵ニテ、礎石ト臺石トハ後ニ造リシモノナリ、左ノ銘ヲ彫レリ、)

燈籠銘

扶桑國關以東武州路、埼玉西郡岩村、爰慈恩敎寺者、光世口之口古道場也、爰關東國元帥令弟北條氏房、爲岩付城主、其股肱臣伊達與兵衞尉房實者、慈恩雜掌也、令金工鑄燈籠一簡、建彼堂前、加旃拋錢焉燈明萬代不滅計、伏願國家安寧、唱太平之歌、風雨調順、得萬民之樂、君臣道合、子孫日多、文武山高、福壽海深、遂一得十德、作一偈代其銘曰、

進善鑄之又施錢、煙煙日夜在堂前、節令者之然燈佛、一段光明世界千、

伊達與兵衞尉房實施焉

天正十七己丑五月如意日

地藏堂　閻魔堂　毘沙門堂(本尊千手觀音ヲ安ズ)　十二天社(本坊ノ北ニアリ、慈恩寺三村ノ鎭守ナリ、)　上院權現社(觀音堂ノ東方)

(沼ノ端ニヨリテアリ、一二三社權現ト云、神司三浦修理ハ當寺ノ支配ナリ、)　神明社　八幡社　山王社　愛宕社　辨財天社　宇賀

神社　二王門　塔頭　遍照院　幡崎坊　閼伽井坊　寶光坊　櫻本坊　松井坊　東榮坊　池

名稱
所在
創建

之坊　本願庵　　觀音院天台宗慈恩寺ノ末、本寺不詳、

淨國寺

淨國寺ハ、武藏國埼玉郡岩槻ニ在リ、僧淸巖ノ開基スル所ナリ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

〔和漢三才圖會六十七武藏〕佛眼山淨國寺　在岩村　同〇淨土宗　寺領百石〇下略

〔檀林誌岩〕御朱印五拾石　　武藏國埼玉郡岩槻　佛眼山英隆院淨國寺

轉住弘道

開祖總譽淸巖上人は、智行兼備によりて、所住の談林鴻巣勝願寺を再建し、諸方より遊化の雲水を敎諭あられしの時、同國岩槻城主太田十郎平氏房、

氏房は小田原北條氏一族、東國戰記、北條五代記等に出、天正十八年落城す、

遙に德風を仰ぎ、山林を寄附せられ、當山を開きて請待し、開祖とせんと、使節再三に及ばれしかば、天正十五年、かの山をば、堂宇什器所化檀家とゝもに不殘上人に讓與し、自らは常隨の學徒を召れ、岩槻に移職あり、

此時〔天正十五年〕つひに寺門建立、〇中略翌年法幢をたてらる、此時朱印を添一紙を被送、

於當寺所化之法談執行、依之聽衆見物已下之族、總別橫合狼藉不可有之、若違犯之輩有之者記交名可被遂披露、卽可處嚴科旨、依仰狀如件、

天正十六年戊子九月十三日　在朱印　宮城四郎兵衛

淨國寺〇中略

寺格 寺領

態以折紙申入候、淨土之所化衆廿年不遂學文僧衆へ、向後血脈印可之儀、堅可有御停止候、其上所化衆背法度、則之談議所へ付候者、最前之自談議所頭被申付者、互被相抱間敷候、於何方も徒僧は學文無之樣可被申付候、但所化衆無相違者、能化より理不盡之御執沙汰候者、於何方も被相抱不苦候、右之仰出被相背於住持者、御分國中、御役僧可被成由被仰出候、此禁法以後、墨印肆、可被仰出候、先某方より內證可申入由御意候間如此候、恐惶敬白、

十二月九日　全阿彌判

淨國寺略○中

諸堂院宇

本堂十三間十一間 箱棟、金御紋、但銅葺葺、元祿十一年十一月再建、 庫裏十二間ニ六間 物置六間ニ三間 方丈八間ニ三間 小屋六間ニ二間 英隆院殿位牌所三間二間四方 右者元祿十二年五月再建

中門、四足表八尺一寸、裏五尺七寸五分、 經藏、一切經安置、 表門、六足九尺五寸ニ八尺五寸、此門は、神祖より傳譽上人へ所賜、

〔寺鑑 下 淨土宗〕御朱印 高五拾石略○中 右同斷○書衣檀林 岩付 淨國寺、

右拾貳ヶ寺○幡隨院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御緣頰御老中御列座被仰渡之、 住職御禮御白書院、獨禮御顏之外二季目、 年頭御禮大廣間、獨禮座一同 御暇無之 獻上

一本
一東

〔檀林誌 氏〕御朱印五拾石 武藏國崎玉郡岩槻 佛眼山英隆院淨國寺

一 朱蠟正寶

御朱印

當寺領武藏國騎西內五拾石事、任天正十九年十一月先判之旨、彌不可有相違者也、仍如件、

寛永十三年十一月九日　御朱印

〔檀林誌展〕朱璽正寶

淨國寺領武藏國埼玉郡岩付庄之内五拾石事、任天正十九年十一月日、寛永十三年十一月九日兩先判之旨、全收納、永不可有相違者也、仍如件、

寛文五年七月十一日

御朱印

古事類苑 宗教部六十二

佛教六十二

那古寺

那古寺ハ、安房國平群郡那古村ニ在リ、眞言宗新義派ニ屬ス、寺傳ニ云フ、養老元年、僧行基ノ創建スル所ナリト、原ト那古山腹ニ在リシガ元祿十六年、震災ノ爲ニ今ノ地ニ移ス、本尊ハ千手觀音ニシテ、坂東三十三所ノ一タリ、

〔和漢三才圖會六十六安房〕那古寺 在那古村 同〇眞言 寺領三百石 本尊千手觀音、坂東順禮三十三番目、

〔安房志三〕那古寺

那古街寺町に在り、補陀落山普門坊千手院と號す、當國五大寺の一にして、那古山の半腹に在り、宗旨は新義眞言に屬し、境内千七百坪、寺記に曰、人皇四十四代元正天皇養老元年丁巳、天皇病あり、僧行基に命じて之を祈らしむ、時に行基夢兆あり、事由を奏しければ、勅許ありしを以て當地に來る、偶異品の木材を海中に得て、千手觀世音の像一軀を彫刻して奉禱しければ、忽ち感應ありて、天皇病即ち癒ゆ、仍て本尊を山腹の石窟中に安置し、貲財を賜ひて伽藍を建て、永く勅願所たるべきの命あり、後仁明天皇承和十四年、再び其荒廢せるを興し、慈覺大師此に棲住せり、已後幾多隆替を經歷し、治承年間、源頼朝石橋山の戰利あらず、當國に遁れ來り、武運長久を此に祈る、義經記に所謂佐殿大湊の渡りして、湊〔な云〕―那古の觀音を伏し拜むとあるは、即

ち是なり、頼朝觀音の化益を受け、屢々戰捷を得しかば、所願成就の恩を報いんため、山上に本堂、三重塔、閻羅堂、鐘樓、地藏堂、二王門、阿彌陀堂の七基を建立す、此七數は、頼朝相州眞名鶴岬より當國に渡るとき、少勢七人、而るに觀音の祥瑞を蒙り、大望を遂ぐるを以て、此の七基を建てしと云ふ、且つ八幡神社を勸請して、別當を當寺に充て、八幡村鶴ケ谷八幡宮の社領百七十一石餘を管理せしめらる、實に建久年間の事なり、今の本堂は卽ち當時建營のものにして、明和年中、大に修補を加へたりと、以て昔時の壯盛なりしを類知す可し、○中略幕府の時、置地百九石二斗を有す、蓋し正治年間、沙門圓秀、土御門天皇の命に因て、當山に住し、眞言の教法を弘めし以來、永く靈場となり、本尊千手觀音は、世に那古觀音と稱へ、開基は行基に係り、爲眼視衆福聚無量の靈驗あり、毎歲六月十八日、設齋す、參者四方より麕至し、香花片時も絕ゆることなし、惜哉元祿十六年十一月二十二日、關東大地震の時、堂宇は破壞し、寺寶は地底に埋沒す、故に今の地に移せるものなり、寺の背北に小邱あり、俗に呼て那古山と云ふ、卽ち補陀落山なり、寺元と其半腹に在りしと云、

附記○中略

觀音堂の眺望、奇勝絕佳、花灣脚下に開き、富岳眼中に落つ、白帆の點綴、漁艇の來往碧波翠嶂と相映じ、悉く此寺の爲に粧點する者の如く、人をして羽化登仙の想あらしむ、

〔東遊記後編五〕地氣

天下太平の氣は北よりして南すといふ、余○橘南谿が友、堪甫、安房國那古寺に參詣して、觀音の舞臺に出て眺望せしに、前には房總の海廣く、西は伊豆の岬まで目近く見渡し、景色面白かりければ、暫く座してながめ居たりしに、所の老人傍に來りて、四方山の物語せしに、其老人いふやう、扨も天地は不思議なるものなり、某幼き時より毎日此舞臺に來り遊びしに、其頃は此舞臺の下まで

海にて波打寄せ、釣する小舟など行かいて面白かりしが、いつしか此如に陸地に成りて濱となり、松ども生ひ出て大に景色變せり、見給へ海までは十丁計も隔りぬといふ、誠に舞臺の造り様はかけ作りにして、海にも臨みたるやうすなれど、下の方は砂濱にて松生ひ、海まで遙に隔れりと、いと怪しと語れり、

〔廻國雜記〕那古の觀音にまうで、ぬかづきをはりて、夕の海づらをながめやるに、寺僧のいで來て、あれ見給へ、入日をあらふ沖津白浪とよめるは此景也といへり、されどそれは津の國住吉郡なごの浦をよめるとかや、そのなごの浦に難波津をまもれる人の住しによりて、其浦を津守の浦といひ、又其子孫の氏によびて、津守氏有とかや、今はなごの浦の所に、さだかにしれる人なしとなむ、此歌いづちにしてよめるもしりがたけれど、寺僧のいふにまかせてしるすもの也、

妙本寺

妙本寺ハ、安房國平群郡吉濱村ニ在リ、康永ノ頃、僧日郷〈郷一ニ作ルニ鄕〉此國長狹郡磯村上行寺ニ於テ説法セシ時、吉濱ノ地頭、笹生重信歸依シテ、此寺ヲ建立ス、乃チ日郷ヲ以テ開山トス、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔和漢三才圖會〕〈六十六安房〉妙本寺　在吉濱　〈法華〉寺領五十石　富士門徒、當寺有万年求護大曼陀羅等、什物多、

〔安房志〕〈三〉妙本寺

吉濱村中谷に在り、境内千八百五十坪、中谷山と號す、康永年〈或作曆應二年〉間、駿河富士野大福寺の住僧日號、本州長狹郡磯村上行寺に於て説法せしに、信者麕集す、時に吉濱の地頭笹生左衞門尉

重信深く日蓮の宗旨を渇仰し、常に名僧を迎へて、一寺を創建せんと欲す、重信直に上行寺に往き、數日其法話を聞き大に感服す、仍て日號を招待し、所有地堀內を寄附して淨域とし、一寺を建立し、日號を以て開山第一祖とす、實に日蓮宗興門派の本山たり、相傳ふ薩摩阿闍梨日位なる者、曾て日號と西國に於いて同船せし時、各宗旨の論議に及び、終に決せずして相別る、後日位再び駿河に下り、前年の論議を決せんとして、大禰寺を訪ひけるに、日號既已に退隱して、磯村に住すと聞き、直に航して磯村に至り、重ねて議論に及びけれども、終に相敵するを得ず、日號の才德に感服せり、此より阿闍梨は修驗の道を棄て、日號の弟子となり、名を日位と改め、法華の道に心を潜む、日位國に歸るの後、五十三寺を開創す、因て薩摩國に於ける日宗の寺は、多くは當寺の末院なりといふ、

寺格

〔妙本寺文書 四〕乍恐令言上候、當國北郡吉濱村妙本寺之事、

右當寺ハ法華宗六門跡之隨一、日蓮上人嫡々正統之總跡讓狀手續證文分明ニ候、去建武年中、尊氏將軍之御代、當寺之敷地を申請、從筑紫中國之門徒中所立置之伽藍にて候、譬ハ如眞言宗之高野山候、然間先師數代被遂參內奏聞、從內裏之御書出御座候、鎌倉將軍家五六代之御敎書、于今頂戴中、天下不入不私寺家ニ候、以此等之御筋目、東陽院殿御掟ニ、當家里見も爲一家、于時義堯國主ニ生合、爲武運爲冥加不可見除と被仰候て、被寄田代五十餘年以御恩、日我日侃二代、上樣ハ三四代過來候、〇中略

六月十四日　妙本寺　日侃花押

本名肥後守殿

寺領

〔寛文四年御朱印帳 日蓮宗勝劣〕五十石六斗餘　安房　寛永十三年十一月九日　妙本寺

〔安房志 三〕妙本寺〇中略

足利將軍尊氏の時、寺領五十餘石を賜はり、里見氏五十石餘の地を寄附せられ、幕府も之に仍る、寺に古文書多し、北郡大帷村之內十一石、同郡本寺領吉濱村之內二十石、並佐久間村之內小繩之辻十九石六斗六升四合、合五十石六斗六升四合、令寄附之狀仍如件、慶長十一年七月三日印、里見氏、妙本寺、

什物

〔妙本寺文書一〕安房國北郡吉濱村內中谷奉籠置本尊聖敎事

一日蓮聖人御自筆本尊一鋪 文永十一年甲戌十二月日

一日蓮聖人御所釋等

一天台六十卷一部

右法藏所奉籠也、師資相承之族、代々受學之輩、被致怠之義、可令守護申、若存猛惡之義、若成偸盜之思者、配中一門之列、可留衆中之交之狀如件、

文和二年癸巳卯月八日　　日鄕花押

寺制

〔妙本寺文書一〕定　住山間制誡

一事、酒宴歌舞、不可怠恒例之勤行、

一事、遊行交衆、不可越寺門之閾、右○閾下闕字

一事、親疎貴賤昵近、不可怠自身之作務、

右雖意趣巨多、委悉不進、然則不改現世之迷情、將期未來之朗然耳、

至德二年大歲乙酉正月八日　　日傳法師

〔妙本寺文書二〕代々之御置文之事 取意

一開山上人仰云、於日興之遺跡等、法門時者、雖論是非、以世事不可挿遺恨偏執云々、

一日鄕上人之御誓云、不可近族姓親類、違佛種之弟子事云々、

寺職

一日傳之御置文云、於當寺門葉者、可爲檀那抑留大謗法云々、所謂抑留者、此上分者、衆僧不可爲秋供養施物之事、

一日要私云、守此代々等御置文、敢不可爲信心中絕者也、衆徒旦方共覽、名聞利養、於我慢偏執輩者、可處佛法中怨之謗罪也

右此條々向背族者、早追却門中、而可爲謗法與同罪者也、以弟子分爲存知、注記如件、

房州妙本寺

文龜二年壬戌十一月七日　日要在御判

〔妙本寺文書五〕禁制

右安房國吉濱村妙本寺事、甲乙人等不可致濫妨狼藉、若有違犯之輩者、可被處罪科之由、依仰下知之狀如件、

享德三年七月一日　上座花押

〔妙本寺文書二〕條々

預御狀具披見仕候、凡當寺之事者、尊氏將軍之時代、建武二年草創、日鄉上人在住也、磯村上行寺、山中顯德寺、谷山妙顯寺等弘通所也、加樣佛法繁昌なる上、時刻到來して、文和貳年四月廿五日御圓寂有也、日鄉上人御遺言云、富士大石寺、房州妙本寺之兩寺、牛王丸(日傳)讓之、中納言律師妙本寺を爲番代、末々者牛王丸可相渡與云々、(中略)

一先師之置文云、久遠寺之事、從日鄉上人已來、及代々ニ而、本血脈之上人者、妙本寺仁居住有之、仍日傳上人、牛王丸童體之時、有上人職頂戴而、御老體之後、本血脈者、侍從阿闍梨日周仁御相續、富士之代官職者、日宜日崇及兩代而被仰付、加之後代者、可隨時宜與置狀有之、是則妙本寺之上人之御筆蹟也、於末代從妙本寺可被申付事治定也、出世之日者、妙本寺之上人職、各存知之處也、然於近代構已儀、兎角之子細雖有之、遠者日要日鑑之御代、近者日我代仁任上代以來之例證、富士久遠寺者、

名稱 所在 堂塔

可爲代官分之旨、所定實正也、於後代若引近代之非例、違亂之輩有之者、可爲大謗法、東西之門徒等僉議而、可有追却門家者也、加樣之書置也、如此有而從日鄕上人日前迄、及正保五年、右之沙汰無隱、今更富士之代官可勤人無之間、於其地、相應之人を相尋、上人となし、本尊の判形、其元之衆檀へは免除之、其外三時之勤行、御影供等者、住持之役也、香花者中古ゟ其時之番役持之者也、

一當寺ゟ其元へ參詣之衆、西國ゟ參詣之衆、如先規不可有別儀、其元ゟ當寺へ參詣之衆も同前也、日文字之御布施如前々、仍如先規之化義、少も私義不可有候、爰元門中衆旦之表義一同之處、爲後仍如件、

正保五年

二月廿二日　　妙本寺 日前華押○以下署名略

久遠寺并衆旦中

淸澄寺

淸澄寺ハ、安房國長狹郡淸澄村妙見山中ニ在リ、寺傳ニ光仁天皇寶龜二年草創ナリト云ヘリ、眞言宗新義派ニ屬ス、

〔房總志料二安房〕一長狹郡千光山淸澄寺は寺領二百石、神武帝の時、天富尊を祟し靈場也と、彼寺の縁起に見ゆ、古語拾遺を考に、○中略天富尊を祭れるにてはなく、天富尊安房の地に太玉尊を祭れる也、○中略

一淸澄山の縁起を見るに、光仁帝寶龜二年草創とあり、想に此比よりして、虛空藏を置しと見ゆ、

一淸澄山の寺寶數多、今姑一二を擧、

涅槃像毘首羯磨作　法華經一卷頌菅丞相筆　四會曼荼羅華筆　不動畫門淨筆　法華經八軸紺紙金泥日蓮筆

安房の國長狹郡千光山清澄寺は、人王第一神武帝の御時に、天富の命と崇め奉る神の靈區にして、本邦日本書事ニハ雖土菩トアリ光仁帝の御宇寶龜二年、不思儀の法師の草創なり、本尊は能滿諸願虛空菩薩三虛空藏の随一なり法師此山に來りたまひ、しば〳〵靈瑞をかんじ、奇異の事あまた有けり、誠に山中に昔より龍池あり、紫雲より〳〵たなびき又その池の邊りに古き柏樹あり、よな〳〵光りをはなつ、此兩事見るものあやしますといふことなし、法師も又其ゆへをしらず、或時老翁現じて法師に語りていはく、抑此山は、過去久遠、劫然燈佛の因地にして、驗日々にあらたにして、貴賤道俗近里遠境、發歸せすといふことなし、法師精舍の側らにあか水を得んとて加持したまふに、呪劫むなしからず、清泉忽ちに涌出す、是にちなんで清澄寺といふ、ある時井の中に明星來影す、ゆへに明星水と名付たまふ、また法師寶珠三顆をもつて三所に納む、其所を寶珠山、摩尼山、如意山と號す、そののち仁明天皇の御宇承和三年、慈覺大師此山に登り、露地を封して檀をむすび、本尊求聞持の法を修したまふ、其地を露地山と號す、其檀中に明星天子の影向、および虛空藏の眞容をはいしたまふ、大師疑ひをおこしたまふに、虛空藏尊飛て空にさりたまふ、慈覺おどろいて獨股杵を投給ふ、幸ひに尊容にあたり、杵とともに地に落、其山を獨股山といふ、この尊を秘佛して世々餘人見ざる所の什寶とす、南嶺に鬼類あつて人をなやます、慈覺呪を誦して是を驅に、懸に應じて忽ちぼつす、其嶺を鷄非山と號す、また辟除結界の爲に、不動尊の像を安置す、これを金剛山といふ、特異獲福のために、淺間菩薩を勸請し、其嶺を富士山と號す、前にふしぎ法師三山を名付、後に慈覺の事緣によりて五山と名付前後あはせて八山あり、堀川院嘉保三年、雷火のために佛閣僧房灰燼となんぬ、其比源の親元國主たり、本尊の威靈をしんじ、元のごとく再營す、此事元亨釋書十七の卷に見へたり承久年中、鎌くら二位禪尼、千日講御願ひの事あつて、寶塔および輪藏を建立有て、處には大

〔法華靈場緣起集〕清澄寺

藏四千餘卷を納め、塔には如來右眼の舍利、ならびに毘首羯摩所造の涅槃像を安置し給ふ、(千日講御頭の事、東鑑二十四卷にみえたり、)天正年中、上總の國大多喜の城主正木大膳亮、如來右眼の眞僞をうたがひ、城内に迎入して、冶工をして打しむるに、舍利壞する事なし、感心のあまり、清澄のふもと二十八石の水田を寄附す、日蓮上人十二才にて登山、道善房の許にて修學し、十六歲にて出家得度す、はじめて是生房蓮長といふ、後に日蓮とあらたむ、本尊の靈驗を祈求して一宗を弘む、上人著述の書に見へたり、諸人しる處なり、上總國眞里谷眞如寺開山密山禪師、ふかく靈應を祈求して、悉地成就豁然發明したまふ、後に彼寺代々の住持入院年、かならず參詣のこと、(諸人のしる所なり、)近頃增上寺三十三世前大僧正貞譽了也上人、壯年より本尊の加護に依て、次第に昇進し、僧位の極官まで任ず、現に今彼會下よりたえず參籠の僧有なり、其外種々の靈驗等是ありといへども、爰に略すものなり、

〔安房志 四〕清澄寺

清澄村妙見山の頂上に在り、千光山と號す、新義派眞言宗、境内一萬八千百三十九坪、(○中略)其の境域たるや、群山深嶺の間に位し、清流潺湲深淵に注ぎ、老杉矗々天を刺し、幽邃森寂の境、筆紙の能く盡す處に非ず、(○中略)庭上の巨杉は周圍約四丈八尺、老樟の大なるもの其周り二十尺、寛政年中、住持明範なる者夙に山林繁殖の道を講じ、人をして力を種藝に盡さしむ、此に依て寺頭門前到る處杉檜蓊鬱、白日猶は暝きに至る、此地に住する者凡百戶許、民業樵にあらざれば、或は戶障子板戶の製造にして、且旅舍を兼ぬる者あり、之を販賣して以て米鹽の資に供す、是亦明範の賜ものと云ふ可し、本堂は銅瓦を以て之を葺き、其大さ十五間四面に亘り、摩尼殿の三字を掲ぐ、(○中略)本堂に接して八尋石あり、稍登て觀音堂あり、鐘樓、青銅寶篋塔、方丈等あり、又波切不動堂、朝日堂あり、蓋山巓華表の建ちし所より、大殿に至る迄は、殆ど一里ありと云、每年

九月十三日を以て祭日と爲す、房總の二州、東西を分て角觝の技を演す、觀る者堵の如し、○下略

〔艮齋文路　下〕南遊雜記

清澄山爲房州靈境、神武帝之世、祀天富尊處、而寺係光仁帝寶龜二年創建、自天津十五里、始達山麓、旋曲而登、下臨深溪、流水響響有聲、再登十里、旅館負山成構、又登數百歩、仁王門丹碧煥耀、扁曰清澄寺、清輸林編修傳王露書、王露字良木、號玉筒、康熙乙未進士、館選後、退居鄕里、年踰八旬、尙能揮翰、有鶯花日課三春句、風月天生一種人之句、大爲袁子才所賞、亦一時名士、摩尼殿尤精麗、此行所創觀、扁榜不署名、而筆力秀潤、不減玉筒、殿後巨刹、爲眞言宗、日蓮十二歲、於此祝髮受戒、故山中多遺迹、從殿後又登里餘、絕頂有小堂、予題其扉曰、天保三年正月旣望、東奧村田精齋、安積艮齋朝山、堂外南觀外洋、烟濤渺瀰與天爲一、北望內洋、波光晃漾、僅如盃盎、但雲烟明滅不得盡其技、可惜甚矣、

寺格寺領

〔寺格帳　上新義眞言宗〕御朱印高百七拾七石九斗餘　房州清澄寺○中略

右貳ヶ寺○清澄寺、神野寺　住職、觸頭圓福寺ゟ申付ル、

一住職御禮無之

一年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上壹束壹本、御暇無之、○下略

〔安房志　四〕清澄寺

弘治三年、里見安房守より岡田小浦の二村を以て寺領となす、○中略慶長十五年庚戌九月二十一日、里見忠義百六十六石餘の地を寄進す、德川氏に至て、百七十七石餘を給す、

雜載

〔日蓮註畫讃　一〕建立宗旨第四

三十二歲、八十八代後深草院諱久仁、號新院御字、自建長五年癸丑三四作月二十二日夜一七日、入室內不出、同二十八日、向朝日合掌可十遍、始自唱南無妙法蓮華經七字、午剋於清澄寺諸佛房持佛堂南面、集於道善房、淨圓房等大衆、幷當地頭東條左金吾景信等、念佛無間、禪天魔等之法門、具校合經論文、

名稱 所在 創建

折伏、始各躋對揖、終皆杜口卷舌退座矣、是卽宗旨建立之發軔、經王流布之濫觴也、始自西傳、猶月之生、今復東返、猶日之昇、爲湛巨瀛波瀾、欲爲高岳礎一簣者乎、然爲報恩計、當夜潛出寺中、遁離於塔寺之難是也、

〔廻國雜記〕安房國淸澄山にまうで、通夜し侍るあかつき、

　曉のたれときほしもきよすみの海原遠くのぼる山かな

誕生寺

誕生寺ハ、安房國長狹郡小湊ニ在リ、日蓮誕生ノ地ナルヲ以テ寺號トス、僧日家ノ開基ニシテ、日蓮宗身延派ニ屬ス、

〔和漢三才圖會六十六安房〕誕生寺　在同郡〇長狹郡小湊　〇屬法華　寺領七十石　號高光山、日蓮上人出生地建寺、〇中略　當寺開基日家上人、中老僧

〔房總志料二安房〕一長狹郡東條小湊浦に、高光山誕生寺と云、日蓮派の大刹あり、寺領七十石、日蓮誕生の地なり、寺の側に誕生水と云有、日蓮の事記せしものに、日蓮、姓は三國、父は遠江主貫名重忠といふ人、母は淸原氏、此地に配せらるゝの後、堀川帝貞應年に一子を設く、小名藥王麻呂、十二歲にして、淸澄山道谷坊の弟子となり、名を日蓮と改と、按に今誕生寺の建し地は、流人重忠が居宅の地なるべし、

〔日蓮註畫讃一〕誕生第一

蓮師、姓三國氏、父遠州刺史貫名重實次子重忠也、師其第四子、其先、聖武帝之裔、父自遠州寘安房州長狹郡東條鄕片海市河村小湊浦、成漁叟、母淸原氏、恒仰朝曦、念誦、夢日光映胸而娠、以本朝八十五

代帝後堀河院仁諱茂御宇貞應元年歲次壬午二月十六日午剋誕焉、當如來滅後二千一百七十一或年、面貌嚴毅、容儀挺持、如來二月十五日示滅、元祖二月十六日現生、死生次恐有以、此汀有小水、旱涼不乾溢、是產育浴湯、

〔本化別頭佛祖統紀十一列傳〕甲州安國山立正寺開山日法上人傳

師諱日法、○中略師性得彫刻之巧、○中略高祖○日蓮滅後因法眷之需刻之數多、中山法華經寺、小湊誕生寺、那瀨妙法寺、濱之法華寺、洛之妙顯寺、休息立正寺等之影堂、皆師之所作、

宗派寺領

〔寺鑑日蓮宗身延派下〕　房州小湊誕生寺

右住職、身延久遠寺ゟ申付ル、　住職御禮無之　年頭御禮、大廣間獨禮座一同、　御暇無之　獻上

一東本

御朱印　高七拾石

〔享保集成絲綸錄二十一〕元祿四未年四月

口上之覺

日蓮宗之內、不受不施之儀者、從兼而御制禁ニ候、然處小湊誕生寺、碑文谷法華寺、谷中感應寺、悲田宗と號、不受不施之邪儀を相立候付而、今度悲田宗堅停止之旨被仰付之、宗旨相改候、向後悲田宗之不受不施ニ成共、又者他宗ニ成共、心次第改可申候口

右之通、諸大名、御番頭、諸物頭、諸役人、其外支配有之面々迄、此旨可相守由、大目付御目付ゟ告知之者也、

雜載

〔艮齋文略下〕南遊雜記

出誕高寺、卽小湊、房州第一馬頭、人屋稠密、海錯與土同價、相與痛飲就寢、夜半夢覺、雨聲與濤聲相雜、不能復交睫、起坐剔燈賦詩、幽絕不可言、

小湊誕生寺、係日蓮師降誕之地、堂廡閎壯、有松曰胞松、有井曰誕生水、奉香火者相屬、師聰明絕倫、海貫竺墳、超然悟入、神光獨照、遂開法華壇宇、豈山水靈淑之氣、所鍾而生歟、

神野寺

神野寺ハ、上總國周淮郡鹿野山ニ在リ、傳ヘテ推古天皇ノ朝、聖德太子ノ開基ニシテ、僧源瑜ノ中興スル所ナリト云ヘリ、今眞言宗新義派ニ屬ス、

〔房總志料一上總〕一同郡〇周淮鹿野山は豐毅派新義眞言地也、寺領五十石、塔頭九院、堂内軍荼利夜叉明王を置、堂宇壯麗、房州二總に甲たり、山中巨杉樹多し、大敷國、香火新福之徒、堂にたえず、

〔日本地誌提要二十上總〕佛寺　神野寺周淮郡鹿野山村、眞言宗、承和二年乙卯創建、僧源瑜中興、寺域六萬三千四百八拾八坪、

〔上總國誌四周淮郡村〕〇中略　鹿野山在本郡、地脈大起者、於房總中居最高、其所矚目之地、坎則爲木更津、及東京、乾則人見山、兌則爲浦賀、三崎、猿島、走水等隔海之地、坤則鋸山、及伊豆諸山、離則天神山、及安房諸山、巽則清澄山、而眺望尤得宜者、陸南阪有華表之地、而其傍有一碑、文曰、當山神野寺者、日本武尊、橘姫、兩神之所鎭座也矣、蓋尊東征之時、當山之夷徒出戰於駿州、敗走、而復寘乎此地、尊直自相州走水、航海、征伐不日、而夷賊咸亡、於之東方靜謐、萬世神之德遠矣乎、其後人王三十四代推古天皇之御宇、聖德太子之開基、而以軍荼利明王藥師二尊垂跡、長爲東海之鎭護焉、事詳于當山之舊記、略之、〇中略　蓋神野寺者、新義眞言宗、而僧院九戶、寺祿五十石、幕府所賜、山頭老杉鬱立、皆滿合抱、地尤宜藺茶木云、接寺有上下二街、客樓酒店專便行旅、

〔廻國雜記〕神野山といへる道場にまうでゝ、

なく鹿の野にも山にも聞ゆなり妻こひわぶる秋の夕暮

寺格寺領	名所舊所在堂塔
上總國神野寺	

〔寺格帳上總新義眞言宗〕御朱印高五拾石

右貳ケ寺〔神野寺、清澄寺、〕住職、觸頭圓福寺ゟ申付ル、

一住職御禮無之

一年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上壹本、一本、御暇無之、神野寺者獻上卷數、

〔寛文四年御朱印帳眞言宗新義〕五十石　上總天正十九年十一月日　鹿野院

妙光寺

妙光寺ハ、一ニ藻原寺ト云フ、上總國長柄郡藻原町ニ在リ、初メ僧日蓮ノ此國笠森ニ來ルヤ、藻原ノ領主齋藤兼綱、草庵ヲ結ビテ之ヲ請ジ、一族ト共ニ之ニ歸依ス、後草庵ヲ改メテ精舍ト爲シ、妙光寺ト名ヅケ、日蓮ヲ以テ開山トス、弟子日向第二祖ト爲リ、甲斐ノ久遠寺ヲ兼帶セリ、

〔法華靈場緣起集五〕上總國藻原常在山妙光寺

上總國妙光寺宗門弘通、最初身延山兩山一寺の靈場なり、我祖〇日蓮、中略、上總の笠森の觀音にまふで、竟夜妙經を誦して、歌に、

夏に降る涙の雨に濡じとてけふ笠森をみにきけるかな

こゝに藻原の領主齋藤遠江守兼綱、次田の住人高橋五郎時光兩人ともに、其夜觀音の靈夢を蒙り、時光御迎に參り、宗祖を馬にのせ、藻原に至る、兼綱は俗家に請ずる恐れありとて、城内松原に庵を結び請じ奉る、觀音のつげ、日本大一の客僧とあれば、信仰常ならず、其時宗祖は末法成佛の法は妙法にありと、經釋の文證を引て說法したまふこと一七日、兼綱幷一族權を捨て實に歸す、

是受法の初めなり、一族ながく外護の檀越となりしは、師教化の初にあらずや、依て最初法花堂と號す、夫より鎌倉に趣きたまふ時、兼綱此草あんを精舍にせんと、寺號を乞ければ、卽常在山妙光寺と名づけたまふ、其後文永元甲子年、再び當山へ來臨在寺、此時日向聖人拾壹才にて供奉したまふ、兼綱曰、日向御房後當寺住職たるべしと所望これある、宗祖も御計ひたるべしとなり、後建治二丙子七月、向師淸澄寺へ御使僧務め、當山へ來り、第二祖に列りたまふ、御とし二十二才なり、高祖入滅の後、身延當山兼職、三十年、留主居は中老僧出羽公日秀、延山留主居山城公日進なり、後當山を日秀にゆづり、延山を日進にゆづり、當山近村坂本法花が谷へ御隱きよ、正和三甲寅年九月三日、六十二才にて入寂なり、右に付延山當山法義一致なり、正月十三日、御馬引の儀式あり、波木井殿御書に曰、又栗毛の御馬はあまりに面白く覺へ候程に、いつまでも失ふまじく候、常陸の湯へ引かせ候はんと存候へども、湯より歸り候はんまで、上總の藻原の殿の元に預け奉るべく候云々、御入滅の後、向師この馬にのり、身延藻原三十年往復したまふ、延山にて十月十三日、會式御勤のときは、十一月十三日、藻原へ來り勤、藻原にて十月の時は、身延へ十一日至り勤めたまふ、抑當山宗祖靈像は、御在世延山にて日法に命じて、二體彫刻したまふ、一體はみのぶ山、一體は藻原殿へおくりたまふ尊像なり、

〔上總國誌 六村〕長柄郡 ○中略 常在山藻原寺（法華宗）在同村、○藻原驛 文永四丁未年、僧日蓮開山、按寺境者、遠江守兼綱配處之館趾乎、

〔本化別頭佛祖統紀 十世家〕藻原妙光寺開山日向尊者世家

尊者諱日向、呼佐渡阿闍梨也、○中略 弘安五年壬午、高祖武之池上唱般涅槃、塔身延山、守塔者六尊輪次、六尊各造子院、師所構呼安立院（土人呼樋澤房）也、藻原氏兼綱構梵宇、以擬高祖滅後酬恩、請師爲開山祖、今之常在山（初呼常楽山）妙光寺是也、○下略

寺格 寺領

〔寺格帳下日蓮宗身延派〕御朱印高三拾石　上總國藻原妙光寺〇中略

右貳ケ寺州〇妙光寺上蓮永寺駿住職、寺中幷末頭評議之上相定ル、

一住職御禮無之

一年頭御禮、御白書院御次一同、獻上壹束壹本宛、御暇無之、

〔寛文四年御朱印帳日蓮宗受不施〕三十石　上總天正十九年十一月日　藻源〇源恐原誤寺

鷲山寺

名勝 所在 堂塔

鷲山寺ハ、上總國長柄郡鷲巢村ニ在リ、僧日辨ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔和漢三才圖會上總六十六〕鷲山寺　在鷲巢　法華 日辨上人開基中老僧

〔本化別頭佛祖統紀十一列傳〕北總正峯山妙典寺開山日辨上人傳

高祖〇日蓮滅後弘化總之上州、手創鷲山寺、〇中略慶長元年辛亥之夏、感微恙、石少納言日源、授鷲山寺、

〔上總國誌村六〕長柄郡〇中略　長國山鷲山寺法華在鷲巢村、文永年間、僧日蓮開基、又曰、鷲巢城主小早川左近大夫草創、建治三丁丑年、僧日辨分派開山、元文元年辰六月、正親町三條中將永鶴子爲御新願所、

〔房總志料續篇五上總國長柄郡〕長國山鷲山寺　鷲巢にあり

中老僧日辨上人開基　一派の本寺

本堂、祖師堂、客殿の額、寂而常場と有、山門の額、長國山、頭齋、石階七十九級、

寺格

〔寺社分限記日蓮宗六〕開山日辨　長國山　上總鷲巢鷲山寺

直本寺、惡人寺、

寺領

〔寛文四年御朱印帳 日蓮宗勝劣〕七石二斗　上總 慶安二年十月十七日　鷲山寺

名勝
所在
創建

正法寺

正法寺ハ、上總國山邊郡小西村ニ在リ、後花園天皇長祿二年、日蓮宗ノ僧日意ノ開基スル所ナリ、天正十八年、七世日悟、寺内ニ談林ヲ構ヘ、日裕ヲ請ジテ其開山ト爲ス、

〔和漢三才圖會 六十六 上總〕正法寺　在小西　法華談所　寺領三十石　正親町院朝、日裕上人開基、號妙高山、

〔上總國誌 六村〕山邊郡 ○中略 小西村有巨刹、號妙高山正法寺、傳曰、後花園天皇長祿二年戊寅正月、僧日意爲開基、蓋當時鄕主肥前入道行朝者、深崇信日意之宗敎、遂撤其居館、作佛舍、稱正法寺、後天正十八年庚寅十一月、至七世法嗣妙道院日悟之時、以幕允、設立檀林、寛文四年甲辰十一月、僧日堯謁幕府、說宗法、賞賜同郡東金町所在假館 稱御殿 之假館、記東金町館下 今之大講堂是也、先是天正九年辛卯十一月、自德川氏賜寺田二十石之朱鈐、寺什有後圓融帝御筆倭歌 一軸 後西院帝皇女理寶宮御書妙高山匾額、一面 定家卿和歌、有楚俊和尚加筆 寒山十德畫軸、探幽筆 梵鐘一口、銘曰、寛文元年辛丑九月十三日、南紀太守從二位行權大納言源賴宣、中門、從四位在少將源賴純寄附

〔本化別頭佛祖統紀 十九列傳〕南總小西檀林開山日裕上人傳
師諱日裕、字慧澤、號通王院、師事于敎藏生公、隨侍飯塚、親炙飯高、一家敎觀具窺閫奥矣、天正中、平賀日悟構小西談林、以謀于師、師往而垂範、學徒丕會、神祖謂之、飯高中村小西同時頒封賜護法之印也、慶長七年壬寅、洛之立本雄刹、裁疏敬待、師招飯高無間日詔、以繼講職、與价上都進山闢規、家風揚揚、居之五年、十一年丙午十月六日、感疾而化、未詳世壽、小西正法寺者、長祿二年戊寅、原氏能登守平胤

寺格

繼、肥前入道行朝、廢阿彌陀堂、爲法華堂、請平賀日意上人、謂開堂之式、意上房呼妙高山正法寺、日將者小西第七代平賀第十五代主也、

〔寺格帳下日蓮宗身延派〕御朱印高貳拾石　上總國小西正法寺

右貳ヶ寺〇正法寺、法輪寺、住職、檀林故、玄義能化相仕廻候上、滿山一同招請住職相定ル、

一住職御禮無之

一年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上壹束一本宛、御暇無之、

寺領

〔寺社分限記五日蓮宗〕一二拾石　妙高山　上總小西正法寺

開山日意、談林、能化聖人、平賀之末、右三ヶ寺〇法輪寺、日本寺、正法寺、關東之三談所、

東漸寺

名稱所在

東漸寺ハ、下總國葛飾郡小金町ニ在リ、淨土宗ニ屬シ、關東十八檀林ノ一タリ、

〔和漢三才圖會六十六下總〕東漸寺　在小金　淨土談林

〔日本地誌提要二十一下總〕佛寺　東漸寺　國郡（葛飾）小金町、淨上宗、檀林、開基、文明十三年辛丑創建、寺域四千八百十坪、

創建

〔檀林誌玄〕東漸寺

創剏起原

應仁文明以後、諸國大守互に權威に募り、主從親子の差別なく、强は弱を征討し、本朝の名家數多流滅に及ぶ、長祿寬正の頃、東關の州郡、兩上杉に隸屬せざるものなし、下總國は、千葉の一族互に割據首領する事數百年、正統本家日々に威を失ひ、庶子分流月々に盛を開く、されど庶は嫡に對し從臣と稱し、別家は本家を蔑はずして其衰をたすくる事、殆ど他國民に異なり、こゝに高木修

理大夫胤忠は原が分支、原は千葉の庶流なれば、一家同族なりといへども、高木は原が家老となり、原は千葉がおとななり、

武野燭談云、千葉は主なれども五六万石、原は千葉が家老なれども二十万石、高木は原が家老なれども三四十万石を領す、これらは臣が強しと、御遺訓附錄等、此文に同じ、

高木五代小金の城主として、近里遠郷を領し、諸士を愛して、人壯に馬肥の譽れあり、當主佛門を信敬し、祖禪を崇仰し、所來の知識ことごとく米帛の寄施をよろこび、入國の僧侶君恩の廣布を希ふの比、寛正二年、經譽正蓮上人といへる淨土の學匠、眞宗の碩德、諸國遍參の折から、此地に參り、道俗を集め、勸誡せられける時、士農蟻集聽聞し、終に伽藍造立の一儀に及びければ、剌史寺境を寄施し、田園を附納あり、師檀の緣を結び、弘道の護因たり、是より師の高德遠近に振ひ、自他宗の雲水まねかざるに來る、依て本宗叢林の一員に稱せられて、多度の法門年々に榮昌あり、相つぎて貫主此任に譽ありしかば、慶長定員のとき、早く擢擧の淸譽によりて、十八大山の隨入を蒙れり、

現存堂宇

本堂十二間四面　茅葺東面、向牌、○中略

緣山添末

新附末寺の節、緣山よりの書翰寫、并奉行所仰出寫、

貞享二丑年仰出之內、田舍檀林拾三ヶ寺、近邊に有之、知恩院增上寺兩末寺之分、其檀所之或末寺或支配ニ相附可申、但無據由緒之寺院所有之者、遂穿鑿、於無其謂者、急度可被申付由有之ニ付、此度檀林へ支配寺幷末寺附屬之次第、寺社奉行所江從增上寺依相談、其檀所之五里餘六里之內ニ有之、右兩寺之末寺、向後檀林江末寺、或ハ支配ニ可被相附候、但拾石以上之御朱印之分者、其檀林

寺格 寺領

之支配寺ニ被相定、自分之弟子者不及申、又末々弟子迄、其檀林江令入寺、可被爲致修學、勿論爲支配寺上者、對能化不可有無禮候、且又支配之寺院、或隱居、或無住之節、後住之儀、直弟於爲其檀林之所化者、増上寺へ從檀林相達之吟味之上、年數於相應者、如先規可被許容歟、拾石以下之御朱印寺、其外小寺者、各檀林末寺ニ可被附之、然ル上者、一向任其檀林之差圖、本末之規式、急度可相守者也、

有來十三ヶ寺　此度新附分十ヶ寺　安樂寺　慶圓寺　法門寺　實性寺
大經寺　西蓮寺　源光寺等

貞享四卯年正月　寺社奉行所

右公儀御書出之通、寫之遣候、尤此度知恩院へ申達、就無相違、彌支配末寺ニ相定候間、聊不可令違背、自今以後、初入寺ニ僧者、其檀林へ指出、修學可相勤、勿論餘檀林中、支配末寺ゟ新來之僧於有之者、急度被遂吟味、入寺可被致遠慮者也、

卯三月日　増上寺役者列名　貞松院　源興院　圓量　淳甫略○

開山略傳

開山經譽上人始藤田流時、號一心蓮社、因感改安譽、後値白旗流移、名行蓮社經譽慶底運公、實名正運信州筑摩郡洗馬郷人、姓長瀬氏、末裔爲土民、童名長壽丸、文但馬守、其五代祖長瀬判官代爲所領主、當永元曆間、屬木曾爲信州五騎隨一、武威雄俊、而群衆成讎、伏戰功起拔、而向處莫不潰敗、考存日、曾於洗馬郷建一精藍、而爲祈願所、榜曰至寶山西光寺、是則三密道場也、然木曾滅亡後、經四十九年、判官卒、寺亦爲兵燹所燒而失、自爾以來、無復本堂、殘寺跡、

天福元年三月十四日判官卒、號大寶寺信岩通儀大居士、墳墓今在洗馬東漸寺側五六丁、

〔寺鑑下淨土宗〕御朱印　高五拾石○中略　小金　東漸寺

右拾貳ヶ寺○傳通院、大善寺、大巖寺、弘經寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御緣頰、御老中御列座

被仰渡之、 住職御禮、御白書院、獨禮（御閾之外二疊目） 年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、 御暇無之 獻上

一本 一束

總寧寺

總寧寺ハ、下總國葛飾郡國府臺村ニ在リ、永德中、僧通幻、一寺ヲ近江國新庄樫原郷ニ建立ス、後屢、地ヲ轉ジテ、寛文年中、遂ニ今ノ地ニ移ルト云フ、曹洞宗ニ屬シ、同宗關東ノ僧錄司三箇寺ノ一タリ、

名稱

〔新編武藏風土記稿 百七十五 入間郡〕龍ケ谷村

龍穩寺（中略）總寧寺ハ、始メ乘安寺トイヒ、○下略

所在

〔江戸名所圖會 二十〕安國山總寧寺 市河の驛より北の方の丘、利根川の流に傍てあり、曹洞派の禪林にして、關東の僧錄司、三箇寺の一員たり、（所謂常陸富田大中寺、武藏生龍穩寺、當寺は是なり、）本尊は釋迦如來、開山は通幻和尚といふ、當寺往古は近江國にあり、天正三年乙亥、北條氏政當國關宿の地に移す、されど屢洪水の患あるにより、寛文中、竟に此地に引となり、總門の内、右に鹽竈六社明神の社あり、陸奥の模なりといふ、太田道灌手植槇と稱するは、大門の通、列樹の中、下馬の石碑に相對して、右の傍にあり、又客殿の脇に、梅の老樹あり、最も道灌親栽る所とぞ、（當寺より、京師道正庵の解毒丸を出せり、）

創建沿革

〔成田參詣記 一〕安國山總寧寺 國府臺村にあり、寺領百廿八石五斗餘、（天正十九年辛卯十一月、地は國府臺村と八幡村とにあり、○中略）

大日本國東海路總之下州葛飾郡風早庄、市川鄕國府臺村、安國山總寧禪寺者、永平元禪寺六世孫通幻和尚、開闢陳迹四所之中第三道場也、原其濫觴、永德三癸亥之歲、佐々木六角判官氏頼、創建精

舍於江州新庄㯃原鄕、而屈請我通幻和尙住焉、百爾器備、僧寶競集矣、物換星移、至八世越翁時、佐々木氏族滅矣、惟時諸國爭國、列國蜂起、因玆享祿三庚寅、駿州今川氏之家臣朝比奈備中守敎翁、住于遠州縣川乘安寺、昝年于玆、是蓋避兵之謂歟、至十一世養翁、天正三乙亥、北條氏政仰翁之道德於本州國宿、寄附梵地、趁聚材命工、殿堂玉成再盛、通玄道化大振、新豐玄鳳、至十七世骨山、元和三丁巳初夏中旬、洪水逆流、陸沈梵刹也、達之台聞、台德院殿大相國、別賜梵地、賑以米俵千、於玆重建梵宇、而倍前規也、然其境猶狹于二州之間也、洪水漲則動罹馮夷之災、滿堂衲侶、迨亥懃之、顚沛苦之、衆中議云、前事覆轍夫豈鑑邪、自非易地、我果魚乎、予喟、夫推己之心、晉匪我佛、仲尼亦好之、請移地而令後之住者無懃、便相攸於本州國府臺、訴之征夷大將軍源朝臣家綱公、於玆寬文三癸卯仲秋下浣、台恩乘下、賜地者方二里程、爲此境也、釋士峯於櫓間、臨東海於階下、杜翁所謂窻含西嶺千秋雪、門繫東呉萬里船者也、實一方勝槪也、又境內有法王坂、傳云、往昔葬法王於此地、到于今石棺猶存也、吁何世邪、雖無傳記、口碑所傳夫豈空邪、我室從來傳有法王三昧秘訣、値天機後熟者乎、柔輿歎抃而移席矣、夫以先佛所盧皆設法器、鐘爲之先、拘留石鐘、祇園金鐘、寔足龜鑑者也、故予欲建立一字、而預鑄梵鐘、雖然單力以難辨、普叩眞俗、以成其功、叨綴俚語、以充其銘云爾、(銘文略)

寬文三龍集昭陽單閼黃鐘吉旦

前永平現總寧二十二世知堂叟(光陽)謹誌

冶工御釜屋堀山城守淸光

關三ヶ寺　下總國國府臺總寧寺

寺領

〔寺鑑下曹洞宗〕安國山

御朱印　高百二十八石五斗餘

○按ズルニ、當寺ノ寺格ハ、武藏國越生ノ龍穩寺ト同ジ、參照スベシ、

名勝所在

創建堂塔

法華經寺

法華經寺ハ下總國葛飾郡中山村ニ在リ、僧日常ノ開基ニシテ、日蓮最初ノ說法場ノ遺跡ナリ、世ニ久遠寺、本門寺ト相並ベテ三頭ト稱セリ、

〔成田名所圖會 二〕正中山本妙法華經寺（應永二十七年、千葉介兼胤文書云、下總國八幡庄本妙寺法華經寺、弘法寺、三ヶ所、寺務職云云、今は兩寺の號を合せて本妙法華經寺といふ、）中山村にあり、寺領五十石一斗餘、（天正十九年辛卯十一月）日蓮上人最初轉法輪の道場なり、開基土岐播磨守は、もと因幡國富城（とき）の產なり、（富城は因幡國巨濃郡の郷名なり、和名類聚抄には、冨城に作る、或云、冨は富にて草體の誤なるべし、）此地に移住して、後鎌倉に仕へしが、弘安の昔し、日蓮上人に歸依し、薙染して日常と號す、（正安元年己亥三月二十日示寂、年八十、墓碑奧の院の地にあり、）忽ち己が居宅の地を喜捨し、（或書に云、太田五郎左衛門乘明、日常の敎をうけ、自ら宅地を轉じて佛宇とし、正中山本妙寺と號すと云ゑ、乘明は中山民部少輔康運の子なり、今の本堂の地は、此乘明が宅地にて、本妙寺の址なり、法華堂の元地は、東の方三町程にあり、土手形猶存す、富城の宅地なり、今奧の院と稱せり、此處地にありし法華堂を、俗に四貫堂と云、今は本堂の後に移せり、）法流廣宣の大道場となしぬ、二祖を日高上人（正和三年四月二十六日示寂、年五十六、）三祖を日祐上人と云、（大輪阿闍梨と稱す、應安七年五月十九日示寂、年七十八、今の本堂より西南の方二町程に、祐師山と云あり、其墳墓なり、此處に二十世、日高上人の碑もあ）り、其後十二世日珖上人のとき、今の朱章は賜りしと云、（日珖ハ慶長三年戊戌八月二十七日示寂〇中略）支院二十四あり、（淨光院、法宣院、本行院、安世院、智泉院、遠壽院、玄授院、久城房、勝雲房、福壽房、本光房、正善房、山本房、氏本房、蓮經房、本妙房、善心房、玉樹房、林藏房、玄養房、延壽房、高覺房、清水房、常經房なり、）

〔日本地誌提要 二十一 下總〕法華經寺（葛飾郡中山村、（中略）寺域壹萬四千百七十四坪、）

〔日蓮上人御傳記 一〕第二十四、下總の國富木常忍、初て聖人の檀那と成事、附 常忍堂を作り、聖人を置奉る事 并 一尊四菩薩の事、

下總の國中山の住人、當城の常忍は、本は因幡のくに富城の人なりしが、後に中山に住し富木殿とぞ申ける、しかるに常忍、鎌倉へ參勤の時來り、すでに船に乘、今や漕ぎいでぬらんとおもふ所

に、聖人もかまくらへ渡り給ふに、常忍が船に打むかひ、なふ便船とぞ仰せける、下部の侍安からずは思ひしかども、此よし富木殿へ申入ければ、出家のこと苦しかるまじきと、ゆるしたまひ、船のしりべにのせ奉る、もとより法花弘通の聖人にましませば、龍神も加護有けるにや、逆風忽順風に變じ、船はほどなく鎌倉に著きしかば、皆々舟よりぞ上りける、聖人もつゞいて上らせ給ひ、此ほどの御いたはり、かたじけなく侍ると、互によそほひ引つくろひ、わかれ〳〵に成たまふ、しかるに常忍は、かまくらをつとめちれ、御いとま下し給へば本國中山にぞ歸らる丶、兼て用意の船なれば、すぐにも綱をとき出しけるに、聖人以前の舟ともしろしめさず、疾き足してはせ向ひ、便船を仰せありければ、常忍これを見奉り、あれこそは、いつぞや舟かしたりし客僧なり、まことによの常ならぬえにしとて、又おなじ舟にのせ參らせ、席ちかく招き奉り、折にふれたる藻士の舟、をのが友々あざりして、浮世を渡る釣の糸、淺ましさよと打物語り、常忍また聖人にとひ參らする事あり、御僧は、此頃かまくらに渡らせたまふとかや、しからば日蓮と云ふ法師出、かまくらの諸宗をさま〳〵にいひちらし、法華經を說きし事、しろしめさん、さあらばすこし其趣を語らせたまへ、我はしゆつしいとまなく、とくと事をもしらぬで侍ると有りければ、聖人聞し召し、しからばきゝ覺えし物語、申入べしと仰せられ居たけだかに座をくみたまひ、諸經に法華經のすぐれたること、十界皆成佛のむね、經をひき、論を引、まことにふるなのべんせつをもつて、こまやかに此趣也と申のべたまへば、常忍つく〳〵と御物語を聞わけ、さてさてしゆせうなるをしへかな、其日蓮はたゞ人にてはましまさじ、先は御僧もよく聞おぼえられし物かなと、しばらくかんじけるが、いかゞおもはれけん、其日蓮はいかなる人とおもひしに、正しく御僧こそ、日蓮聖人にて御坐有らめ、此世ののりのえんくちずば我もまた彼岸へ御渡したまへと、ふかく御契を結びそめ、舟よりあがり、それよりも、聖人をいざなひ奉り、中山にうつし置き參らせ、いとねんご

ろに仕へける、其後聖人は、たよりにつけ、常忍が宅にいらせ給へば、有がたしと隨喜し、常の屋形のうしろに、まはり百間ばかり堤を築き、其中にすこしたかく土をかさね、堂をしつらひ、聖人の御まうけにぞ立られける、其時聖人みづから一尊四菩薩を御きざみなされ、此所に安置し、法華堂と名付、百日の御法談なされしなり、しかるに常忍ハ、聖人入滅の後出家し、中山の開山富木日常と申なり、

寺格

〔鎌倉大草紙 下〕宗胤○千葉介は三井寺にて討死し、貞胤ハ北國落までは宮方にて、新田義貞の御供にてありしかども、心ならずして尊氏の味方になりけるが、宗胤の子息胤貞は宮方にて千葉に殘りたまふ、此人の子息日祐上人、法華宗學匠にて、下總國中山の法華經寺の中興開山なり、是により胤貞より中山の七堂建立あり、五重の塔婆を建らる、其後胤貞上洛して吉野へ參り、征西將軍の宮御下向の時、御供して九州へ下り、大隅守に補任し、肥前國をも知行しけり、日祐上人も九州に下向し、肥前國松王山を建立して、總州の中山を引て末の世まで、此所を中山と兩山一寺と號す、

〔本化別頭佛祖統紀 十一列傳〕甲州安國山立正寺開山日法上人傳

師諱日法、○中略師性得彫刻之巧、○中略高祖○日蓮滅後因法眷之需刻之數多中山法華經寺、○中略休息立正寺等之影堂、皆師之所作、

〔中山法華經寺古文書 下〕一宗之元祖上行菩薩之再誕、任日蓮聖人付屬之旨、下總國八幡庄谷中郷中山村妙蓮山法華經寺、無邊行菩薩再誕、富城日常門家之事、諸法華宗之頂上、可爲本寺之狀如件、

天文十四年太歲乙巳正月廿日　晴氏花押

法華經寺

寺領寺職

〔寺鑑 下日蓮宗中山派〕正中山　一本寺　下總國中山　法華經寺

右住職、泉州堺妙國寺輪番ニ付、衆徒、

御朱印　高五拾石壹斗餘

〔諸宗階級下〕中山派檀林階級住職之次第

日蓮宗之僧侶、從得度檀林滿功迄之階級昇進之次第、隨而本山中山法華經寺、并附庸本寺、且又諸末寺等、都而一派寺院住職之軌則、著用之衣體、具ニ申上候樣被仰付、承知仕、左ニ相認申候、○中略

一本山中山法華經寺

御朱印五十石壹斗餘、例年御年禮申上、尤乘輿仕、獨禮席御座候、往古ハ永任仕候得共、權現公樣奉蒙公命、泉州堺妙國寺日院僧正より已來、堺妙國寺、同弟子京都二條頂妙寺、同小川頭本法寺、右三個寺輪番ニ住職仕候樣蒙嚴命、三個年宛輪番ニ而住職仕候、衣體之儀ハ、三個寺時々住僧准官位上下、有無之差異有之、紫衣著用仕候義も有之、多分ニハ緋紋白紋之袈裟除紫香衣等ニ、五色之衣を著用仕候、尤飯高檀林、中村檀林之玄義能化、文句能化、兩能化ニ而住職仕候義ニ御座候、○中略

享和二壬年戌正月

〔中山法華經寺古文書上〕并法印日尊謹言上

欲早下總國八幡庄內本妙寺、號中山寺、同寺領千田庄岩部鄕內田參町、畠陸段、在家壹宇者、爲法花道場免、去元德三年九月四日、千葉大隅守胤貞令讓與先師大輔法印日祐畢、同月五日外題安堵、并當御代應安四年十二月一日、京都安堵狀等炳焉也、加之當寺領在々所々不殘、永德二年十二月卄日、重下給御寄附安堵之御判、奉祈長久御願所、建長寺雜掌混當御寄進地、被押彼岩部鄕內當寺免田等條、難堪至極也、所詮寺領各別當知行段經五十餘ヶ年訖、隨而代々各別安堵御下知明鏡上者、早被

寺獻

止建長寺雜掌新儀違亂、蒙御成敗、下總國千田庄岩部鄕內田參町、畠陸段在家堂宇間事、

副進　一卷　元德、應安、永德代々各別安堵御下知狀等、

右子細粗載于先段訖、然早被止建長寺雜掌之違亂、任代々安堵幷永德二年御寄附狀等、蒙御成敗、爲奉祈天長地久、恐々言上如件、

至德元年九月　日

〔中山法華經寺古文書 上〕定置條々事

一法華寺本尊、聖敎、幷中山釋迦佛聖敎者、中村大輔公候、弘法寺本尊聖敎者、中村弁公候、北方堂中山本尊者、中村鄕公候、柏井奉免者、中村筑前公治部公兩人候、於法華寺、弘法寺者、可守富木殿置文也、於中山者、雖爲日高他界之後、成如日高存生之思、僧徒講衆等無異儀、講會以下勤如先々無緩怠可取行之、但於所申村寺之者、各何成一寺之思、不存隔心、出來佛法邪儀之時者、相互加隨會之難破、令住正儀、可被助法命也、若依世事聊中惡、遺恨事不可有之、但雖爲世事、有難治事時者、各衆會相互可敎訓之、

一僧徒俗衆講衆等互可思相事、可守富木殿置文之狀也、

一中山本尊聖敎御殿居事、如日高存生之時、僧俗共無懈怠可令勤仕之者也、但可除寺職人等也

一於門徒僧侶中、不調亂行仁可加禁制事、日高存生之時、稍其聞有之、況於滅後者、定不調輩可多歟、若如此人等出來之時、門徒衆會、經衆議評定、永可拂門徒者也、

右所定、信受正法、不輕日高人々者、固守此置文、不可違犯、若至違犯之輩者、依背富木殿幷日高命、永不可爲此一門、又不可知行日高跡云々、雖被書置此置文、僧友鶴林不能御判形之間、胤貞加判畢、仍置文狀如件、

正和參年四月廿六日　平胤貞（花押）千葉

雜載

〔中山法華經寺古文書下〕當寺之事、甲之臺一戰之砌、成陣所上、異他被馳走之間、其以來入魂候、然而就成當國之仕置、任承意寺內不入以下之儀、先年之改證文、重而進之候、將二三種喜悅候、恐々謹言、

十一月廿四日　氏政北條花押

法華經寺

〔開帳差免牒〕寅春○文化三年

日蓮宗　下總國中山　法華經寺

右諸堂及大破、修復難叶自力、爲助成奧之院安置之日蓮之像、幷靈寶等、來寅四月朔日ゟ日數六十日之間、於淺草妙音寺開帳いたし度段、丑八月中、大久保安藝守方江願出、天明四辰年、祖師堂日蓮之像、於牛込圓福寺境內開帳いたし、開帳佛者違候得共、年限未滿之開帳ニ相準候付、御老中江伺之上、同閏八月十八日、水野出羽守宅於內寄合、願之通差免之、

名稱　所在　創建

弘法寺

弘法寺ハ、下總國葛飾郡眞間村ニ在リ、僧日頂ノ開基ニシテ、日蓮宗身延派ノ一本寺タリ、

〔和漢三才圖會下總六十六〕弘法寺　在眞間　同○法華寺領三十石　開基　六老僧日頂上人

〔江戶名所圖會二十〕眞間山弘法寺　國分寺の南にあり市河村に屬す　日達大士弘法の地にして、六門家と稱する所の其一員たり、日頂上人を以て開祖とす、本國院日頂尊師は、六老僧の中にして、伊豫阿闍梨と稱す、富木常忍の子なり、文永四年丁卯、日蓮上人に就て得度す、弘安五年壬午上足の第五となる、日蓮上人の滅後、守塔居を營[illegible]し、て、本國院と號す、土人は山本坊と稱す、正安元年己亥父常忍寂すの後、哀をつくして、八月十二日こゝを出去り、終にかへらずとなり、依示寂の年月、其終焉の地をしらず、はじめ寺院をいづる日をもて忌日とすといへり、本堂には釋尊の像を安ず、富木常忍嘗釋尊の木像を造り、當寺に奉安す、日蓮上人日頂師をして點眼せしめ、賀の書を賜ふ、祖師堂は其右に並ぶ、內に宗祖上人の像を置、此像は日

法上人の作なり、支院十餘宇、各碑道の下に列す、大門は松の列樹にして六丁程あり、楓樹釋迦堂の前にあり、今は枯株となりて、其形を存するのみ、むかしはわたり四五丈にあまりし株となり、所謂眞間の楓と稱するもの是なり、遍覽亭方丈の樓のうちにあり、額に遍覽亭と題す、黄檗千呆和尚の筆跡なり、此所は山崖に臨むが故に、西南を眺れば葛飾の村落眼下にあり、江戸の大城、甲相の群山、雲にそびへ霞に横たはる、又こなたには房總の海水遠く開け、實に千里の風光を貯へたり、樓門石壁の上に鎮ゆ、左右の金剛力士は、佛工運慶の作なりといへり、全體黒色にして他に異なり、樓上に揭る額に眞間山と題す、弘法大師の親筆なりといへり、當寺往古は眞言瑜伽の古刹なりしが、日蓮大士此地に遊化の頃、寺僧大に宗意を論じ、竟に、大士の化導に歸依し、宗風を改轉するといへり、或人云、西新井邑總持寺に安置する所の弘法大師の靈像は、當寺眞言宗の頃かしこに遷しまゐらせしと云、日統抄曰、了性眞間の弘法寺に住す、或日日常と問答す、屈を請て遂たり、日常來徒を化す、寺因て本化の道場とす云々、又先德記を考ふるに、關東河田谷天台宗の中に了性と云あり、本文に宗祖上人と問答せし住侶の名を注さず、おそらくは此了性が事なるべし、當寺什寶多きが中にも、宗祖上人及び諸徒の眞筆の曼荼羅消息の類ひ數通あり、悉く擧に不遑、毎歲九月九日より十八日迄、法華經千部讀誦、十月十三日は宗祖上人の忌日たるにより、御影供を修行せり、近在の道俗群參す、

〔成田名所圖繪 一〕眞間山弘法寺　眞間にあり、寺領三十石、天正十九年辛卯十一月日蓮宗池上本門寺に屬す、六門家の一なり、本尊釋迦如來富城常忍の作なり、樓門の金剛力士は、運慶の作也、全體黒色にして、他に異なり、開基富城常忍、開山は日頂上人、伊豫阿闍梨山本坊と號す、父は橘伊豫守定時、母は駿州富士郡四郎國重女、懷胎の內、定時死去し、宮城五郎胤繼に嫁す、正安元年、養父常忍歸入示寂す、日頂哀に堪ずして、八月十二日こゝを出さり、終にかへらず、其終る所をしらず、一說に、三月八日、弘通の爲に出て遯らずと、孰か是なるや、墓は富士北山本門寺より西北二三丁計、正林寺にあり、弘法寺過去帳に、日頂上人、嘉曆三戊辰八月十二日寂、年八十六と見ゆ、此寺元は富家にて、空海の舊跡なり、故に弘法寺と號す、弘法大師の像、西新井總持寺にあり、改宗の頃うつせしなるべし、眞間の地も、元は市川村の內とみえて、文明十一年、道山某の文書に、市河の內眞間とあり、

寺格
寺領

〔寺格帳 下 日蓮宗身延派〕一御朱印高三拾石　下總國眞間　弘法寺

右住職、寺中并末頭評議之上相定、

一年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、獻上卷數、御暇無之、住職御禮無之、

雜載

〔中山法華經寺古文書 下〕中山本妙寺弁法印日尊申、下總國八幡庄眞間弘法寺本尊聖敎御堂井敷

名勝　所在　開山

地等事、附諸末寺

右日滿背代々先師置文引分門徒、向背師匠之條希代所行也、所詮任去永德二年十二月晦日御教書之旨、可沙汰付所持物所帶等於本妙寺之狀如件、

明德五年六月廿九日　　平滿胤（花押）千葉

本土寺

本土寺ハ、下總國葛飾郡平賀村ニ在リ、寺號ハ日蓮ノ命ズル所ニシテ、弟子日朗ヲ以テ開山ト爲シ、法嗣日傳ヲ以テ第二世トス、

〔下總國舊事考十三寺院〕本土寺、在平賀村、地平賀忠晴母千葉氏妙朗尼所喜捨、僧日傳〇日朗弟子所開也、寺記云、當日像創之、據文明中鐘銘、爲日傳、是爲一派本寺、域中有日像誕生水、續千葉古志稿有武田萬千代公母秋山夫人之墓、續千葉志稿鐘樓懸建治四年鐘、續千葉金石志稿所藏有寬正以來過去帳、三冊文治中幸若笙、今爲水戸家所藏日蓮大菩薩袈裟念珠等、隷京師本國寺、寺領十石、天正十九年辛卯十一月付〇中略　以上八寺、日蓮宗、

〔本化別頭佛祖統紀九世家〕平賀本土寺開山日朗尊者世家

尊者諱日朗、寬元三年乙巳四月八日、產於總之下州猿島郡能天郷、〇中略總之下州有太田氏乘明、曾谷氏教信、秋元氏某、文武兼美、一時名士、見師如見高祖、〇日蓮審問懇至也、三年丁丑、〇建治曾谷氏教信剏度呼日禮上人、俾造鼻和地藏堂、爲開權道場、請師爲開山祖、師差法子日傳告曰、山僧叨承師命、併管長與長榮二大刹、左之右之、法務幹事、無一日閑、雖檀信是重、而無由移徙、弊徒日傳、代吾差之、宜夫宥恕、於是禮上推師爲開山祖、日傳爲第二代、同寺號師以告高祖、高祖賜本土寺之號、爲六門第二雄刹也、

寺格

〔寺格帳 日蓮宗身延派 下〕高拾石 御朱印　下總國平賀 本土寺

右住職、寺中幷末頭評議之上相定ル、

一住職御禮無之

一年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上壹束壹本、御暇無之、

寺領

〔寬文四年御朱印帳 日蓮宗不受不施〕十石　下總 天正十九年十一月日　本土寺

名稱所在堂塔

千葉寺

千葉寺ハ、下總國千葉郡千葉寺村ニ在リ、傳ヘテ聖武天皇ノ朝、僧行基ノ建立ニシテ、建久三年、千葉常胤ノ再造スル所ナリト云フ、今新義眞言宗ニ屬ス、

〔佐倉風土記 佛寺〕千葉寺 在千葉村、和銅二年、行基來、此慈瑞蓮、自刻阿彌陀、十一面觀世音、奏於聖武帝建寺、亦安唐四明寺宗鑑大師所作觀音焉、永曆元年、嘗火燬寺、十一面像自移在櫻樹上、樹距寺可一里也、治承中、源賴朝寄納其白旗、建久三年、命平常胤再造殿堂、安運慶刻愛染、弘法作不動二像、亦寄錦帳一具云、東照神君、寄百石地焉、

〔下總國舊事考 十三 寺院〕千葉寺、在千葉寺村、建長三年、千葉氏創建、不詳何僧所開也、本尊觀世音、舊趾在東方、巡禮三十三所中爲第廿九、藏胤富文書一葉、載于古文書志、隷紀伊高野山寶性院、寺領二百石、天正十九年辛卯十一月付○中略　右二寺新義眞言宗

寺領

〔寬文四年御朱印帳 眞言宗新義〕百石　下總 天正十九年十一月日　千葉寺

雜載

〔鹽尻 十五〕東關千葉寺にて、每歲大晦日の夜、所民集りて人の事をそしり、大に笑ふ事あり、是を千葉笑といふ、京師祇園の社、除夜諸人互に惡言を吐て笑ひ訇しり侍るも、是に似たり、我熱田の社、五月四日、會影堂とて、神人集り、くらがりにて大に笑ふ事侍り、所々風俗か、る事多かるべし、

大巖寺

大巖寺ハ、下總國千葉郡生實ニ在リ、信貞把ノ開基ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

下總國生實　龍澤山玄忠院大巖寺

〔檀林誌 四〕御朱印百石

創立正傳

開祖道譽貞把上人は、大谷氏、和泉國日根郡波宇手村人、同郡寶福寺貞也上人の室に剃度し、飯沼弘經寺に掛錫し、鎭譽祖洞魯耕上人に隨ひ、兩脈を稟得し、一旦本國に立かへり、說法するに、突辨魯鈍にして、道俗大に笑ひしかば、夜中ひそかに再關し、恥辱の謗を願雪せんと、先智德增進、解行雙修の志願を發起し、下總國成田山不動明王の堂に參籠し、蠶穀を斷絕し、香水に浴し、懇祈精修する事二七日、一夕明王示現し、利鈍の二劍を惠みて試登の時、長劍をのみしかば、鈍血忽ち涌出し、衣にそゝぐ、〇中略是より惠解天縱にして、論辨他に超越せしかば、諸國をめぐり、道俗を勸諭するに、信受をせずといふ事なし、再び歸國の上、說法勸誡の時、道俗つどひ集り、前蹤にもどり、又笑ふべしと、遠近あつまれる時、師の無礙辨に驚歎し、信伏歸仰するもの甚多し、師早く立ちさり、花洛に至り、香衣上人號の綸旨を受戴し、逗留の間に、四條に稱名寺を開基あり、夫より再び關東に下り、千葉生實、寒川の邊に道俗を敎化せらる、しかるに此近隣、日蓮の派多くして、念佛の弘通をさまたげ、又眞言宗數多にて念佛は淺近の法なりとあらそふ、師無礙の辨才を以て、是等をくちき、淨土深妙の要法末代相應、他宗の及ばざるを示諭ありしかば遠近其名聲をつたへ、說法の會座群開ありこゝに生實城主原式部少輔平胤榮は、千葉家の一族、數万貫を領知し、諸老の第一に居し、威風遠近に振へり、〇中略永祿二年三月、城中に入て、念佛の法要をとき、懺悔をそしへ、念佛を勸諭あり、夫人一見し、師の凡ならざるに歸せられ、胤榮又宗風を仰ぎて、逢見の遲き事をうらむ

寺格　寺領

に至れり、こゝに於て、横須賀の地藏堂をしつらびて、師の休息の閑處とし、程なく寺院開基の沙汰初れり、その中間朝晚入城し、佛門の鑒砭をさとされしかば、崇信日々に濃く、起行頗る倍し、病患頓に愈ゆ、故に夫人胤𣳾に乞て、速に開寺の議に及び、同年秋工棟の初あらむと、地を選ばるゝの時、夫人之城外乾隅の園林は、これ妾が粉粧の釆地なり、伽園此地に造るべしと、翌永祿三年落慶あり、此時鎮守として東の山林に愛宕、西の藪に鷲明神、北の方に富士、客殿の前に天照皇大神等を勸請し、本堂方丈庫裏山門鐘樓等、并學寮四十餘宇を建並べ、寺領七十貫を附せらる、境內林中に大澤ありて、古より龍澤と名く、故に堂寺を龍澤道場と名け、終に山號とせり、〇中略

道場造建

本堂　東西十三間、南北十一間、　和春上人代燒失ニ付、慶安四卯年二月、門譽上人代再建、　本尊阿彌陀佛座像、慈覺大師作、　二尺九寸　大方丈　西東七間半　南北六間　客殿へ廊下、二間ニ三間、　小方丈　西向、東西二間半、南北四間、廊下一間四方、　茶間　西向、南北十間半、東西四間、

〔寺鑑浄土宗下〕御朱印　高百石〇中略　右同斷〇香衣檀林　生實大巖寺

右拾貳ヶ寺〇增上寺、傳通院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御緣頰、御老中御列座被仰渡之、　住職御禮、御白書院、獨禮御間之外二疊目　年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、　御暇無之　獻上

一東本

〔檀林誌西〕御入國の御規式は、同年〇天正十八年八月朔日なりしかば、安譽又賀慶の爲登營し奉る、是より下總國東金邊などへ御放鷹の時は、必す入御ましく〳〵けるとぞ、同十九年又一書を賜り、前代原氏寄附の貫を御朱印に御改替え成下さる、

寄進　下總國千葉郡　大巖寺

右如先規令寄附之訖、彌守此旨、武運長久之精誠、殊佛法相續不可有怠慢之狀如件、

名稱　所在　創建

天正十九年辛卯十一月日　大納言源朝臣御書判

〔大巖寺文書〕生實大巖寺領事

一七貫五百五文　生實之内　一四貫百文　千葉之内　一壹貫百九拾五文　丸之内　一五百文　同所かやば　一五貫文　森之内屋敷分

右前々御所務之由候間、仍證文書出申上候也、

ヲ十一月四日　大十兵衞花押

原さ左衞門花押

生實之内
大巖寺

日本寺

日本寺ハ、下總國匝嵯郡中村ニ在リ、日蓮宗ニ屬ス、天正年中、北條氏政ノ創建ニシテ、僧日圓ノ開基スル所ナリ、

〔下總國舊事考十三寺院〕日本寺、在中村、天正中、北條氏政創建、僧日圓所開也、先是文和中、僧日祐、日朗、日貞、日完等、於玉造村、構堂説經、號東福寺、今蓮華寺、其址也、天正十五年、移今地云、日蓮宗本國寺派檀林也、隔歲自六月五日至七日、新度僧有講説、凡自五十人至一百人云、闔山衆徒凡一千名、留學僧凡二百許人、其敎主稱能化、毎年二月八月交代住持、寺領十八石、天正十九年辛卯十一月付　右日蓮宗、四寺、

〔本化別頭佛祖統紀十九列傳〕北總中村談林開山日圓上人傳

師諱日圓、字慧雲、後以字爲院號、總之下州香取郡飯高村人、俗姓椎名氏、妙見社地妙福精舍而出家也、○中略慶長三年戊戌之冬、化主尊公、視家池上、法雲道公、成新命主、道公不覺雄、飛身延山、後主不決、

一者言、洛有二一如重公大獅子一、一者言、我慧雲上座、器宇相應、道卲德高、屢煩求二于遠方一之爲乎、會上交爭至レ開二隙間一、師聞レ之而謂、爲レ法甚以不レ宜、矧乎重公者宗門先哲、道價殊高、弗レ應二吾敵一哉、應レ以責レ之、乗レ尚不レ可、遂結二朋黨一、師大駭而謂、蔵レ師願レ躬、道者所レ耻、吾不レ爲レ之、間行逃去、竊赴二中村淨妙寺一、朋黨聞レ之、慕驅而至、面拆不レ去、師亦未レ奈二之何一也耳、開二講淨妙寺一、飯高亦重公不レ預、代崇二遠公一、飯高鯨吼、中村螺呼、是所下以兩檀因而相分上也、神祖賜レ封、別榜呼二正東山日本講寺一焉、

〔寺格帳下日蓮宗池上派〕御朱印高拾五石　下總國中村　日本寺

右貳ヶ寺〇妙法寺、日本寺、住職、本寺法華經寺ゟ申付ル、

一住職御禮無之

一年頭御禮、大廣間獨禮座一同、獻上一束一本宛、

〔寛文四年御朱印帳日蓮宗受不施〕十五石　下總　天正十九年十一月日　日本寺

〔寺社分限記五日蓮宗〕一拾五石　正東山　下總中村日本寺一代色衣

談林中山之末、〇中略右三ヶ寺、關東之三談所、

新勝寺

新勝寺ハ、下總國埴生郡成田村ニ在リ、僧寛朝ノ創建スル所ナリ、本尊不動ハ、空海ノ作ト稱シ、賽者常ニ群集セリ、新義眞言宗ニ屬ス、

〔成田參詣記五〕成田山明王院神護新勝寺は、埴生郡成田村にあり、新義眞言宗、京師上嵯峨大覺寺御門跡末なり、開山を寛朝大僧正と云ふ、本尊大聖不動尊は、弘法大師の開眼にて、高雄神護寺の護摩堂の靈像なりしを、朱雀天皇の御世、天慶中、廣澤遍照寺寛朝、詔を奉りて、叛賊平將門を調伏

のをり、其靈驗の現なるを以て、僧正下總まで供奉し給ひ、修法せしが、幾程なく、貞盛秀鄕が爲に、將門は誅せられけり、是偏に、明王の盛德なりとて、猶東國の鎭護の爲に、尊像を長くこの地に留められたり、矜迦羅、制多迦二童子は、元より此地にありしにや、今井戸のある邊を童子と云り、海保氏記に、永祿九年六月廿八日、公津原より入佛なりと見ゆ、論田より、古境內の地に移りしなるにや、爾後靈驗日に新にして、道俗群集すること市の如し、こゝに天文中、小弓大巖寺開山道譽上人、法器の不滿を歎かれ、尊像に祈請すること殆ど一百日、滿願の夜、不動明王の利劍を呑、血流れて淋漓たりと夢む、覺て後、智識大に進み、道德益顯れ、世に名譽の高僧となれり、今其法衣大巖寺に存し、當山開扉のをり、拜せしむるもの是なり、其境たる、松杉鬱茂として、青苔路なめらかなり、護摩修法の烟たゆることなく、鈴鐸の音鏘々として、國家の昇平を祈り、信心肝に銘じ、渇仰胸に溢る、堂宇の結構、伽藍の莊嚴、實に本州無比の大道場なり、毎月二十八日は、參詣の緇素肩を摩し、袖を連ね、寶前に絡繹たり、中にも正五九月の繁昌ハ、喜捨の淨財堆をなし、樂施の淸泉漲るがごとし、銅瓦雲に聳え、金鈴風に吟じ、其至盛なること、普く世の知る所にして、筆紙に盡し難し、他邦の人、ひとたび此靈區に詣ては、其溢美に非るを知るべし、以上、緣起の要を摘む、大緣起の末に、元祿十三歲在庚辰仲夏念八日、武城豐島圓福寺覺眼書とあり、

〔利根川圖志 四〕成田山新勝寺　埴生郡成田村に在り、不動明王二童子を祀る、弘法大師の御作にして、始は山城國高雄山神護國祚寺護摩堂の本尊なり、故に靈驗甚多く、世に知る所なり、昔朱雀天皇天慶二年、相馬將門亂を起しゝ時、廣澤遍照寺の寬朝僧正に命じ、調伏の法を修せしむ、乃この尊像を奉持し、難波津より海に浮び、將門が新都に程近きこの處に在て、調伏の護摩を修せしかば、感應忽に顯れて、明る三年の二月、將門終に伏誅せり、此後僧正尊像を奉じて歸洛せむとするに、忽重くして舉ぐること能はず、且靈夢の告あるを以て、永くこの地に留む、乃勅して伽藍を建て、高雄山の寺號に准じて、神護新勝寺と號す、猶緣起に詳なり、

堂塔

佐倉風土記云、不動堂在成田、曰神護新勝寺、不動明王坐像長六尺、弘法大師所刻、本爲山城國高雄護摩堂之本尊、(以下の文意縁起に同じ、故にこれを略す、)

〔成田參詣記五〕二王門　本堂　經藏　三重塔　御供水所　鐘樓　御手洗井　寳廣　本坊　遍照院　南光坊　正福院　延命院(本尊地藏なり、元產にありて、藥師の別當を勤め、日蔭山と稱せり、)　奧院(不動の本地大日なり、元は本堂の後の方にありしを、今の地に移し、金剛胎藏兩界の鋼像を勸請せり、毎年六月八日には、戶を開て參詣を許す、)　額堂　石鳥居　光明堂　大師堂　觀音堂(又院とも稱す、今の飯田屋、駿河屋、蓑屋等の居地、其舊址也といふ、)　阿彌陀堂(堂內に古き十王あり、今新に繪なほしたれば、古色みるよしなし、今も十王畑と云字の地あれば、古きこと見ゆ、)　藥師堂　地主妙見社　白山社　秋葉社　金毘羅社　疱瘡神社　清瀧權現社(相殿妙見社)　辨財天社　聖天社　天神社　淺間社　稻荷社　三宮(成田村と、郷部村との間にあり、祭禮毎歲六月十七日、)

弘經寺

名稱　所在　創建

弘經寺ハ、下總國結城郡飯沼ニ在リ、僧良肇ノ開基ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

〔和漢三才圖會六十六下總〕弘經寺　在飯沼　(同前○淨土談林○)寺領二百三十石(或云百石)　號壽龜山

〔下總國舊事考十三寺院〕弘經寺在羽生村飯沼地(○結城郡)□□中、羽生氏創建、僧嘆譽良肇所開也、(永享十一年五月十二日寂、年八十七、)中興照譽了學、(自慶長五年至寛永五年、在住廿九年、)始賜紫衣、爲關東十八檀林之第八、域中有天樹院殿墓、(台德公御息女、豐臣秀賴室、就于墳墓志稿、)寺領百石(慶安二年己丑八月付)

寺格　寺領

〔寺鑑下淨土宗〕御朱印　高百石　紫衣檀林　飯沼　弘經寺

右住職、御白書院、御緣頰、御老中御列座被仰渡之、　住職御禮、御白書院獨禮(御閾之內三疊目)　年頭御禮、御白書院獨禮、(同斷)　御暇無之　獻上(一束一卷)

〔檀林誌戊〕本寺添狀

關東下總國〇飯沼弘經寺出世事

明應四年乙卯十一月廿八日、從當院以長橋之御局被申上者也、然間被待使僧有奏聞處、於邊鄙遠國之儀者、立所之由緒、其仁之堪否、雖不被及御尊慮、爲當院申達上者、御免之由則被仰下訖、翌日晦日有頂戴口宣綸旨、被著香衣者也、隨而十二月二日、致同道參內申所、例式之御對面者、雖爲朝御膳以後、先被指置、御膳早朝之御對面也、上件之次第、依爲先代未聞之儀記之者也、是併元祖上人前參詣爲冥感者歟、

明應四年十二月十二日　東山大谷知恩院廿一代 棟達社周譽在判

〔檀林誌 巳〕賞賜紫綸旨

下總國飯沼弘經寺住持、代々令聽著紫衣、奉祈寶祚長久、不可混餘寺者、綸命如此、仍執達如件、

寬永十一年五月十九日　左少辨判

知恩院末寺

弘經寺住持南譽上人御房

〔飯沼弘經寺記〕院御所ニ而、雪念上人法談の節、本山靈岩大和尙書翰、

寬永十一年五月三日、下總飯沼弘經寺住持南譽雪念常紫衣、依將軍樣御詔令上洛、被爲參內、爲其御案內遂登殿、并院參仕候、俄我等江六波羅蜜之法談應有高聞由、爲高倉新三位中將御勅使被仰下候、固弘經寺仁茂法談可見仕由勅使ニ候、依之予六波羅蜜荒增令宣暢、其次雪念三經之大意、觀經接取不捨、釋三緣ニ而言上畢、法關事終、御殿作禮而去、我等退座之後、知恩院御門跡二品親王八宮、院參、則院御所、法談御感不淺由被爲仰聞候、東域參內之諸耆知識、院御所ニ而法演未聞、希有次第、名荷至極、無比類與覺候、因茲洛中宗門知識連、淨土一宗歸蹟不過之與被開喜悅之眉候、彌々大衆之講釋、晨昏不可有退慢候、爲末代之龜鑑、一翰如斯、仍如件、

寛永十一年六月十五日　　知恩院廿二代 雄譽松風（花押）

弘經寺南譽雪念上人

名稱 所在 創立

弘經寺

弘經寺ハ、下總國結城郡結城ニ在リ、文祿年中、飯沼ノ弘經寺兵燹ニ罹リテ、一時廢絶セシカバ、住持存把ノ新ニ建立セシ所ナリ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

〔和漢三才圖會 六十六下總〕弘經寺　在結城　同前○淨土談林　寺領五十石本堂屬常陸、方丈屬下總、蓋跨下野、常陸、下總之三國、

〔下總國舊事考 十三寺院〕弘經寺在結城西町、○結城郡 結城氏所創建、淨土宗十八檀林第一也、宣蓮社壇譽存把和尚所開、辨蓮社業譽逕無和尚中興、鐘樓並樓、名匠左甚五郎所彫、藏古文書、載于古文書志稿有結城秀康女某墓、謚曰松樹院、載于墳墓志稿寺領五十石、慶安二年己丑八月付　右一寺、淨土宗、寺領五十石、

〔檀林誌 四〕御朱印五十石　下總國結城郡結城 壽龜山栘嚴院弘經寺

當山起原

飯沼第九世存把上人、彼山在住の日、小田原城主北條氏、下妻城主多賀谷氏と合戰の時、大衆一同多賀谷氏の誘顋に催され、及戰時二東國戰記委詳 爲兵火被燒拂れしかば、出飯沼下 師井開山亲笈負逃去、下妻鄕に至れり、元より城主多賀谷修理大夫は師の檀越と云、殊に此たび爲陣所より數代の堂閣一山燒亡の事につき、終に於此地一宇建立し、かの飯沼弘經寺に擬し、今下妻大町圓福寺、金輪寺は、弘經寺の舊跡なり、師を安住せしめられしかば、徒伴座下にありて、法問論義あり、藩中の諸士も又會に列れるもの多し、○中略 文祿三年甲午十一月、宰相秀康卿御息女松姫君早逝あり、卿の云、結城家は代々禪曹洞

寺格
寺領

の家なれば、予に於てはともかくも、今小女は源大君の御長孫、若男子にあらば、家督たるべきなり、ゑからば實家の宗門、三州以來の同宗に葬禮廻向あらば、先祖へ追孝、子孫へ例鑑たるべし、近隣に德名の高僧やあると尋ねられし時、多賀谷氏進出、中島村の存把、德重愍重の者なり、彼、我ために伽藍を燒れ、我城下に來住の時、濱名が命乞あり、皆義を守れるの甚しきなり、我が濱名を誅せしは、政事のいたす所、かれ、我城下を去りしは淸潔のなす所、凡近隣諸宗の僧中に、かゝる淸操の德匠は有べからずと委しく語られける(中略)則飯田加賀守を使者とし、師をまねかれ、息女の下炬道師を命せらる、師、松樹院梅心芳薫大童女と諡つけ、いとねもごろに法會をひらき、中陰の弔薦あり、宰相猶師の道德絶倫、淸修梵行をよみせられ、同四年集春、香火の地に擬し、一字を造立せられん事を師に請問あり、師云、佛閣建立、功德無量なり、殊に淨門は末代相應の妙要、諸宗不共の玄術なり、もし君卿一寺を建たまはゞ、昔日予飯沼に在住の弘經寺を、北條氏の爲に焚燒せられしかば、若新建の命あらば、かの寺號を用ひ、勅願所の舊業を移立すべきは、貧道が所希也とありしにぞ、宰相許可し、佛閣落成の時、山林竹木形勢無雙の伽藍と成、師を開山とせられしかど、師謙遜の上、舊地の事どもを申立、飯沼の開山嘆譽良肇上人を開祖と定め、自ら中興と稱せらる、是より次第に遠近より學徒輻湊し、門流玆に熾にして、常に法幢をたて、盛に眞宗を弘通あり、當郡もと淨家なし、天言禪日時の五宗のみなりしに、今創て國主の開創として、念佛の淸實を道俗に聞しむる事、是全く師の鴻業にて、釋中碩德のいたす所也、

堂閣縱橫

本堂　九間半に九間、高サ檐下迄一丈四尺、十四世實譽上人再建、

本尊　彌陀座像四尺三寸、惠心僧都作、脇二菩薩共ニ一尺二寸、同作、

〔寺鑑(下淨土宗)〕御朱印　高五拾石(中略)　右同斷○普玄檀林　結城　弘經寺

名稱所在

右拾貳ヶ寺〇播隨院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御縁頰、御老中御列座被仰渡之、住職御禮、御白書院獨禮、御圖之外二疊目年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、御暇無之　獻上
一束一本

〔椎林誌巳〕綸旨公書
知恩院末寺壽龜山弘經寺之事
爲歎譽上人開山精舍之由被聞食訖、然從本寺勅願之儀被執申之間、宜奉祈寶祚長久國家安全者、天氣如此、悉之以狀、
天文七年三月廿五日　左中辨判
弘經寺上人御坊

〔椎林誌辰〕御朱印五拾石　下總國結城郡結城　壽龜山椚嚴院弘經寺
大猷院樣〇德川家光御代御朱印之記錄拔
當寺領下野國結城郡本鄉之內、五拾石事、如先規令寄附之訖、全寺納不可有相違之狀如件、
寬永十三年十一月九日　御朱印
弘經寺

稱名寺

稱名寺ハ、下總國結城郡結城ニ在リ、僧眞佛ノ開基ニシテ、眞宗西本願寺派ニ屬シ、同派關東七箇寺ノ一タリ、

〔和漢三才圖會六十六下總〕稱名寺　在結城常陸、下野、下總之界、　西派　開基　信證房　本願寺關東七箇寺之内　寺領十

創建

五石

(二十四輩巡拜圖會 後篇下總 二)新居山稱名寺 西派 同國(下總)結城郡結城の城下にあり

當寺は關東七箇の大寺の隨一にして、六老僧の其一也、二十四輩第二聖人の御直弟、眞佛御房の開基草創の舊跡也、○中略 註 本堂本尊阿彌陀如來 御長三尺餘、春日の作、 太子堂 聖德太子御自作の尊像、御長二尺九寸餘、額は仁和寺覺助親王の筆、僧舍四區あり、 什寶には玉日宮御像 此尊像は高祖聖人、常陸國鹿島郡鳥栖といへる所にて、彫刻なし給ふ所也とぞ、 抑玉日宮と申し奉るは、もと六角精舍の本尊救世觀音薩埵にておわします、然に末世女人成佛の結緣を導き給はんがため、大慈大悲機見機應の善巧を以て、月輪入道兼實公の御女玉日の御方と示現し給ひ、假令に高祖聖人に隨從し給ひしが、聖人配流の御時は、洛東幽邃の地に世を忍びおわしけるが、聖人建曆の頃勅免を蒙り給ひ、越後より常陸に渡り、稻田に住し給ふ折から、眞佛御房の檀越結城七郎朝光、玉日の御方の便なき御有さまを深く歎き、上洛の砌これを具し奉りて、結城の東なる玉岡といへる所に新殿をしつらひ、勞り傅き參らせしが、聖人に御對面まし〳〵、ともに宏弘の救濟をはかり給ひけるに、聖人には貞永の頃歸洛し給ふといへども、玉日の御方には、尙も吾妻にとゞまり、更に利生の光明をかゞやかし、終に御歲六十四にて、建長六年九月廿五日、彼玉岡において大往生を示し給ふ、靈告の文にまかせ、法名を能莊嚴院女身禪尼と號す、誠に女人得脫の先達と成り給へる事、仰ぐもおろかなるべし、其後下野國沖村といへる所に、眞佛御房の門徒有て、女身堂を營み、彼壽像を安置せしが、或時夢の御告ありて、結城の當坊へはうつし奉りけり、又其後寬永の頃、准如上人關東御下向の折から、此靈像を拜し給ひ、自ら玉日宮といふ三字の御染筆ありて、御厨子の額に掲しめ給ふ、○中略

眞佛上人像 高田專修寺に安置するを、厨證眞佛といひ、當山に安置するを、御當流眞佛といへり、緣起委くは專修寺の條下に出ス、

結城七郎源朝光の石塔あり、其外靈寶略之、

千妙寺

名稱所在

千妙寺ハ、常陸國河內郡黑子村ニ在リ、觀應二年、僧亮守ノ開基スル所ナリ、天台宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會六十六常陸〕千妙寺　在黑子、同〇天台　寺領百石

〔新編常陸國誌二十四佛寺〕千妙寺　西河內郡黑子鄕東叡山寬永寺末　御朱印百石

東叡山金剛壽院ト號ス、寺中八ヶ寺アリ、安樂院、心性院、定林院、積善院、コノ外四ヶ寺ハ退轉ナリ、

末寺五十三ヶ寺、寺門徒五十四ヶ寺、門徒內七ヶ寺廢寺

千妙寺

創建

〔華頂要略八十四附屬諸寺社〕常陸國　千妙寺　號東叡山　在眞壁郡下妻莊黑子村、

觀應二年辛卯草創、本願主、大內刑部大輔入道、開祖、椎尾寺別當贈僧正亮守、妙香院慈慶弟子　本尊、

洛西嵯峨第二轉、昔育然法橋作、　額字、尊道親王御筆、〇中略　同年十二月〇天正十二年十一月二日、依門跡奏聞、

綸旨於當寺、

常州東叡山千妙寺金剛壽院

崇光天皇御宇觀應二年草創、爲青蓮院之末葉、繼三昧之正脈、密雲廣被于東關、法水遠傳于陸奥、

既永劫不朽之御願、末代弘通之師跡也、彌可抽天長地久懇祈、勵令法久住之勤行之由、天氣所候

也、仍執達如件、

天正十二年十一月二日　左中辨充房判

千妙寺權僧正御房

寺領

〔寬永四年御朱印帳天台宗〕百石　常陸慶長九年六月二日　千妙寺

寺領

〔華頂要略附錄諸寺社八十四〕寺院明細書

常陸國眞壁郡黑子村東叡山千妙寺所藏之內、御綸旨等之寫、

一家康公法度大鷹檀紙

常陸國河內郡下妻莊黑子鄕

千妙寺法度

一諸末寺、不ㇾ可ㇾ違ㇾ背本寺之法度ㇾ事、

一法流以下寺中之僧侶、可ㇾ隨ㇾ學頭下知ㇾ事、

一山林竹木寺內門前、如ㇾ先規ㇾ令ㇾ免許ㇾ事、

右堅可ㇾ守ㇾ此旨ㇾ者也

慶長十八年二月廿八日朱印中略○

一慈眼大師條目

常陸國河內郡下妻莊黑子鄕

千妙寺金剛壽院

一二時勤行無ㇾ怠慢ㇾ可ㇾ致ㇾ天下安全之御所禱ㇾ事、

一每月十七日、可ㇾ致ㇾ東照大權現御法樂ㇾ事、

一背ㇾ於國司之制法、不ㇾ可ㇾ致ㇾ私檢斷ㇾ事

一專ㇾ於戒法、總而不ㇾ可ㇾ背ㇾ本寺之下知ㇾ事

一山林竹木猥不ㇾ可ㇾ伐ㇾ採事

一企ㇾ徒黨ㇾ不ㇾ可ㇾ致ㇾ公事沙汰ㇾ事、

一不ㇾ可ㇾ闕ㇾ三季月次之講演門徒講出仕、若令ㇾ煩之時者、可ㇾ遂ㇾ其理ㇾ無ㇾ左右ㇾ於ㇾ令ㇾ闕ㇾ之者、或追放、或三衣可ㇾ取ㇾ上事、

一末門逝去之時、縱雖ㇾ爲ㇾ直弟、不ㇾ窺ㇾ本寺ㇾ不ㇾ可ㇾ致ㇾ移住ㇾ事、

一不遂大阿闍梨者、不可引導事、

一加行護摩寺之儀者不及申、九字護身法迄悉不可授事、

一假令雖爲出世器量之人、於佩行僧者、早可令追放事、

一寺中走入之者不及申、雖爲緣類知人、牢人不可抱置事、

一背於師命者、縱雖爲所化、不可令介抱、又雖爲我弟子、於不孝之輩者、早可追放事、

右條々、寺中末門堅可相守者也、

寛永二十年三月四日　　山門三院執行探題大僧正天海判

一亮信僧正（當時十四世）多賀谷重經（大掾家末）連判永續式

千妙寺式目之事

一□□□法具幷寺領、不預置藏方事、

附以本領之分、齊調中居之世務、依世間之法力、可有堂舍之修造也、

一前代之住物、當代之新調、別紙目錄之上、不可紛失事、

付或號住持遺物、或名役人給分、於寺中門前、令我物之僕在之者、則可令追放也、

一古來之寺領山野、當代之諸寄進物、後々末代全不可有相違之事、

付下館所帶之由、向後除之、

右條々、當寺爲相續之掟、檀那令加判形、所定如件、

天正九年辛巳正月日　　法印亮信花押

重經花押

名稱
所在
創建

光明寺

光明寺ハ、常陸國河内郡下間ニ在リ、僧明空ノ開基ニシテ、眞宗東本願寺派ニ屬シ、同派關東七箇寺ノ一ナリ、

〔和漢三才圖會常陸六十六〕光明寺　在二同處一○河内郡下間　東派關東七箇寺内　開基　明空法師

〔一向宗源脈〕本願寺流關東七箇寺

一光明寺在二常州同處一(河内郡下間)東流開基明空法師、明空者、三浦大介義明四代孫、三浦十郎義忠長男義次也、永久二年發二離塵志一薙髮改名了忍、欲レ値二知識一諸國行脚、暫寓二當國瀬上原一依二夢想一赴二小島一謁二親鸞師一○親鸞爲二弟子一改名爲二明空一乃建寺弘二念佛宗一永仁五年二月十三日寂、壽六十三、

〔二十四輩巡拜圖會後編常陸二〕西木山光明寺　東派　常陸國眞壁郡下間にあり

高月院と號く、高祖聖人直弟、關東六老僧の内、明空御房の開基にして、聖人法筵を設け給ひし所の靈場なり、本堂九間四面、本尊阿彌陀如來安阿彌の作　開基堂明空法師の像を安置す　坊舍二區あり、

名稱
所在
創建

三月寺

三月寺ハ、常陸國河内郡下間ニ在リ、僧善可ヲ以テ開基トス、親鸞留錫ノ遺跡ニシテ、眞宗東本願寺派ニ屬シ、同派關東七箇寺ノ一タリ、

〔和漢三才圖會常陸六十六〕三月寺　在二河内郡下間一　東派關東七箇寺内　開基小島丹後守入道善可房

〔一向宗源脈〕本願寺流關東七箇寺

一三月寺在二常州河内郡下間一東流、開基小島丹後守入道善可房、鸞師、止二留於小島一凡三年、領主丹後守、殊歸二依之一、

終剃髪號善可、而祖師建二一宇、使下遂位房住持、後遂位上京時、讓二于善可、門前板樹、乃祖師所レ植也、遂位房、是源賴政之曾孫、（仲綱之孫、宗綱之子、）宗重也、兩本願寺家老稱二下間一者、其子孫也、

〔二十四輩順拜圖會後篇二常陸〕小島三月寺（東流光明寺境内ニあり）

當院は、往昔建保二年仲春の頃、宗祖聖人（○親鸞）小島郡司武弘が請に應じ、此地に下向し給ひ、濟度利生の基趾を開き、禪房を設けて轉法輪所と成し給ひ、同五年正月まで、本願念佛を弘め給ひし靈地なり、然るに聖人常隨の御直弟釋遂位、（註略）師命によつて此三月寺に住し、純ら敎導ありけるが、其後遂位上洛の砌、小島丹後入道善下に附屬ありしより、法信房善下の子孫、世々相續して寺務たりしに、中古衰弊に及び、遂に光明寺の境内に移すと云ふ、

三月寺舊地（光明寺より三四丁、新地村へ行道ばたにあり、）

往昔聖人三月寺を建立有し舊地なり、方三十間許、四面に土堤を築、中に聖人手づから植置給ふ板二本あり、（各三圍餘の大樹なり、この地、草創の舊趾なるを以て、今に三月寺の持なり、）

大念寺

大念寺ハ、常陸國信太郡江戸崎ニ在リ、僧慶岩ノ開基ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

名稱	常陸國河内郡江戸崎 正定山知光院大念寺
所在	
創建	

〔檀林誌己〕御朱印五拾石

寺緣本由

天正十八年、開山慶岩上人創二建之一、抑岩公は、肥前國鹽田城主惟任修理亮藤原知光の三男なり、（田總は、當家西國にての代々名家にして、而かも武勇の譽隱れなかりしを、また右大臣信長公、西國にて當家の絕名を歎息せられ、明智光秀をして惟任日向守と名乘せ給へるは、西國を手に入らる）

せ給はんためとなり、惟任は其先祖結城の胤系にして、上野入道が子、征西將軍に隨ひ、菊地を頼み、西國に下りて、菊地が持城の一つを預りしより、つひに其子孫、かの幕下に屬し、家門榮え、一族ひろごりて、地名により名字を改めける、（文字部宮の系圖とも寺記にあり○中略）かくて、それが末、永祿四酉年三月、菊地左兵衛尉（大友幕下）武邑軍兵を起し、知光を攻、（此ころ時うつりて互に虎狼の心を起し、家ごとに戰ひければ、惟任は薩摩國の島津氏に屬しける故、大友氏の軍士攻けるなり。）折節籠城の兵士の中に、裏切の事ありて、城に火を掛ければ、譜代恩顧の一族郎等四十七人、家婦老少三十九人、不殘討死、城は奪はれ、郎等はみな落失せける時、三男仙千代丸八才なりしを、めのとの兄蒲原兵庫ひそかに隱し遁れ出て、同國佐賀の正定寺に忍置、再び歸城の謀慮をめぐらし、おり／＼家士の隱家をもとめ、密談有て、既に仙千代丸十三才の時、同九寅年、旗上げなして、舊城を攻べき事を島津家にも折々通じける時、龍造寺肥前守隆信、數万の軍を率ひ、同年春、かの菊地の者どもを攻落しければ、仙千代丸今は世に敵もなく、頼むかひなければとて、既に自害とありしを、寺主證譽押留め、娑婆の定めなき事、生者必滅のことわりをのべ、先祖父母の菩提の因を植べき事、ねんごろに勸諭ありしかば、つひに剃度し、證譽の弟子となり、家の重代小鍛冶宗近の刀を、是まで守刀とせしを、初て證譽に讓り、學問出精ありしかば、もとより聰明絶倫、內外の典に渉獵ありしのち、十八才の時、遂に傳法の旨要を求探らんがため、元龜三年申春、川越蓮馨寺へ初入寺、感譽上人の座下に法問論議し、又諸山を經廻し、天正八年增上寺へ入寺し、法席につらなり、感譽上人遷化のゝちは、觀智國師の嗣法上足となりて、一時の法將たり、天正十八年寅十月、常陸國江戶崎にいたり、說法勸化の時、城主蘆名修理大夫に對面し、（東國戰記を案るに、江戶崎城主は此ころ土岐美濃守なり、寺記又同じ、蘆名は會津より浪落したるなり、）後藩臣に、此僧は內府公御目に掛らるゝ、出家なり、殊に又長學豐文なり、歸依崇敬すべしとありければ、家臣百姓こと／＼く歸依し、當寺草創に至り、數多人夫地形を平げ、古山を穿時、誕生釋迦を掘出故に、翌年普請未成就なりしかど、四月八日の入佛と定む、（此事棟札ニ有之）天

寺格　寺領

正十九年、增上寺存應上人より、條目一通、算題一法句の則をわたし、所化五十人を遣はされ、一夏法論を執行あり、此法問中、神祖の命によりて、緣山より了的廓山の兩上人、當山へ入來あり、神祖天正十八年御入國後、關左に十八城を定させらるべき尊慮あらせければ、御宗門の中、大小の寺院に拘りなく、時の知識の德學雙備を知聞させられ、學徒輻湊の師の會下を十八檀林と定させ給ふべき、密々の御高慮ましましければ、それそれ地理山形林樹の形勢など、此廓山了的の二子を遣はされ、何となく法義に事をよせられ給ひしと也、此事誰も心付ものもなかりしかど、後慶長七年、十八檀林を仰出されしに及びて知りける也、是全く是まで關八州は、寇讎の徒のみ住ければ、御入國有といへども、城主の心中幷に民の心、いかゞなど內々御含にて、僧を以、御內々の寄目鑑に比せられしなるべし、〇中略

大小伽藍、

本堂十二間奥九間　十二世慶譽上人代再建　本尊御長五尺三寸、脇二大菩薩二尺五寸ヅヽ、中尊、聖德太子作と云、　佛天蓋　本理院殿御寄附　岩宕上人代　大方丈六間二五間　初勝譽上人立、後譽上人再新建之、　本尊彌陀、厨子入、二尺七寸五分、惠心僧都作、

〔全國各宗本山明細帳〕淨土宗　中本寺　大念寺　同國(常陸)信太郡江戸崎村

〔寺鑑下淨土宗〕御朱印　高五拾石〇中略　右同斷〇香衣檀林　江戸崎　大念寺

右拾貳ヶ寺〇幡隨院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、鎮西寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、之住職、御白書院御緣頰、御老中御列座被仰渡之、　住職御禮、御白書院、獨禮、御閾之外二疊目　年頭御禮、大廣間、獨禮座一同、　御暇無之　獻上

一束一本

名稱
所在
創建
沿革

願入寺

願入寺ハ、常陸國茨城郡水戸巖船ニ在リ、僧親鸞ノ孫如信（本願寺二世）ノ開基ニ係リ、眞宗東本願寺派ニ屬セリ、此寺始メ磐城國白河郡大網ニ在リシヲ、後常陸國久慈郡久米村ニ移シ延寶元年更ニ今ノ地ニ移セリ、

〔和漢三才圖會（六十六常陸）〕願入寺　在水戸巖船（東本願寺連枝）　開基如信上人　寺領三百石

〔一向宗源脈〕常州水戸巖船願入寺（東派連枝寺、寺領三百石）、此開基如信上人、然鸞師雖子女多、末女覺信尼公安心特慨法義、故讓法於尼公也、如信（尼公之子、鸞師之孫也）、進到奧州大網、弘一向專修法、門徒日日盛也、尼公亦雖有子、問如信信心、召之讓山城大谷本寺、以如信為本願寺第二祖、暫在住復下向奧州、既後如信有四男二女（如四、有宗、淨如、女子、女子、東昭）、以第三淨如、讓大網之寺、讓本寺於尼公之孫覺如、凡知識之意所以不依於利宜哉、又常州金澤有信士、名乘專房、正安元年臘月、招請于金澤、如信應請、行談法意、翌正月四日、俄爾寂于金澤（時年六十二）、大網願入寺（二世）淨如（三世）空如（四世）如善（五世）空圓（六世）純如（七世）源如（八世）如慶連續焉、至第八世如慶時、罹兵火、而坊舍悉燒失、故退常州、十二世如正營寺於常州久慈郡久米村、至第十五世如高、延寶元年國主水戸黄門光國卿、移巖船、寄附寺領、爾已來為連枝寺務、

〔叢林集十之五〕願入寺（已下、七之卷之奧也、）
山科記云、聖人觀音ノ靈示ニ依テ、關東ニ在國シ玉ヒテ、門葉繁昌マシマス、是ニヨリテ如信上人祖師ノ行化ヲ慕ヒ、亦タ東遠ニ下向ナリト云云、時奧州ニ東山トイフ所アリ、其名ユカシヽトテ、此所ニ跡ヲトメテ、一字ヲタテ玉フ、如信上人ノ御子六人マシマスナカニ、第三子淨如公ヲ奧ノ坊ト名ヅケテ、大網ノ御坊ヲ相續シタマフ、時ニ御坊ヲ願入寺ト名ヅク、奧坊淨如ヨリ嫡々相承アリテ六代ヲヘ、第七代如慶公ノトキ、錯亂ノ事出來テ、奧州ヨリ常州ヘ越テ、大根田ト云所ニ願入寺ヲ移シ居玉フ、遂如上人御在世ノトキナリ、如慶ハ明應九年三月五日ニ入滅、嫡女如賢ノ相

傳ナリ、コノトキ如了ハ四才ナリ、其後如了大坂ノ御坊證如上人ニ參テ、東國信鎧ノ御下知ヲ蒙リ、當寺ノ委曲一卷ノ傳アリ、兼俊ノ別記ナリ、

〔二十四輩巡拜圖會後篇常陸三〕巖船山願入寺　東派　同國(常陸)宮田巖船にあり

當院は高祖親鸞聖人の御孫、如信大和尙の遺跡にして、當國第一の大佛場なり、代々御連枝御住職有て、寺格最彌高、　本堂十五間四面、本尊阿彌陀佛(春日の作、或は御作ともいふ、)幷に當時國君の御作の如信上人の木像を安置す、坊舍六ヶ寺あり、傳に云く、如信上人曾て奥州大網の東山に居を占給ひしに、(是即願入寺の濫觴なり)御勸化に隨ふ者、郡國を傾け、德行を仰ぐ輩、遠近の隔なし、爰に彼禪室をさる事三十里、(坂東道六丁一里を以ていふ)西にあたつて金澤といへる所に、乘善といふものあり、就中本願の旨趣を信受し、知恩報德の思ひ淺からず、終に正安元年己亥の窮冬廿日あまりの頃、信上人を己が草庵に屈請し、晝夜聞法の化益を蒙り、且は朝夕の給仕をぞなしけるに、豈はからんや、上人翌子の正月二日より御心地例ならず、打伏給ひ、偏に世の囂塵を拋却し、長時の稱名專らなりしが、忽ち異香室中に薰じ、音樂窓外に聞ゆる事二日二夜、人の二根を穿ちて間斷なし、かくて上人同四日正知正念にして稱名の聲もろとも大往生を示し給ふ、(御年六十二歲)此におひて、第一回、第三回の御法事を京師にて執行ひ、第十三回は正和元年にあたらせ給ふに、其前年慶長元辛亥年冬の頃、覺如上人御舊跡をたわせ給ふ事ときりにして、終に關山幾重の雲を凌ぎ、江湖万里の氷をわたり、遠くかの金澤の草庵に玉趾を寄られ、諸方の門徒を催、乘善と共に追福の佛事を營給ひ、それよりして又大網の基趾に詣給ひ、即遺敎の徒のために、一座の梵筵を設け給ふ、誠に懇懃鄭重なりし事とかや、(以上、最須敬重繪に載る所なり、)然るに中古彼大網の民屋、同國白川郡竹貫といへる所へうつりしかば、大網は即荒蕪の地と成りて、今は古宿と唱へり、扨又信上人の遺跡願入寺は、上人金澤へ趣き給ふ後、代々相續恙なかりしに、第八世如慶師の時、國中爭亂の事發りて、堂舍悉く兵火の爲に燒亡

すこれによつて大網を退き、當國へ移りしが、同十二世如正師の時、更に同國久慈郡久米村へ移轉す、爰に十五世如高師の時にあたつて、延寶元年の頃、當國の大守かゝる靈場の日々に衰微に趣ん事を傷み思し召、喜捨の大功德を興し給ひ、即久米より今の宮田村にうつし、寺院佛閣に至る迄、巍々然として再興あらせ給ひ、京師より御連枝惠明院如晴僧正を請じて御住職と成し給ひ、寺領三百石、外に毎年黄金二百兩、香華の資として御寄附あらせ給ひしかば、信上人の御法德日の再び中するがごとく、更に東國に曜きけるは、誠に尊とかりける次第也、以上、遺跡錄をもつて記す。靈寶には宗祖聖人御自作雛形の御影、聖人御添状、釋女母公へ之あり、二十四輩牒釋空如御筆也、是は御本願寺三世覺如上人、大網御坊へ御下向の折から、高祖の御門弟二十四輩、正統相承の人々を選署し給ひし記也、奥に正慶元壬申年正月五日執筆釋空如とあり。

〔歸願寺文書〕奥州白河庄石川郡竹貫郷東山大網願入寺御開基、號奥御坊、〇中略如親御房象榮內陳出仕〇中略明暦二申年正月八日ニ回祿、寶物等燒失、雖然本尊御影ノ儀ハ、門徒一兩輩參詣ノ砌ニテ奉守出、廿四輩ノ連署一卷空如御房執筆當寺記錄ノ寫一卷、親鸞聖人御作所服佛太子、蓮如上人御消息一通隱居如明所持ノ故ニ不思議ニ相殘、同酉戌兩年ニ御影本尊ノ修覆井御堂建立ス、翌年亥ノ十二月ヨリ上京輪番相勤ム、　寛文六丙午二月五日於久米往生、齡四十六歲、

〔願入寺再造記〕一元祿十一年寅之正月晦より、二月四日まで、如信上人四百年忌之法事依有之、御本寺より、嗢慶御使僧として、繁船に參著、法會過、御門主より黄門樣御安否御尋之御使として、西山江參上、二月十日、西山御殿ニ而御目見被仰付、御料理茶菓、過終而黄門樣多年之御念願遂一嗢慶へ御語被爲遊、上京之節、御門主へ曲ニ申上、御念願成就被成被遣候樣ニ、嗢慶へ賴思召候由、

右之御意ハ

一繁船願入寺事者、御宗門無類之御名跡、如信上人より、不關相承之血脈之段者、嗢慶存知之前ニ

候、然共國亂ニ度々被障、奥州常州彼方此方と寺跡安住無之、次第ニ及衰微候所、幸ニ黄門様御覽被成、罷出御取立被成度思召候得共、累世廿四輩と混同之様ニ順入寺致衰微ニ付、急々御取立難叶候故、兎角御本寺之御威勢を御かり被成度思召候而、惠明院殿まで、御招請被遊、御膝中者六歳ゟ御養取候而、唯今良丸殿迄御出生、人も順入寺と存候様ニ成申候、然者高田、佛光寺等と、高田者聖人之御弟子筋、佛光寺者興正寺之亡跡にて、順入寺に對すれば比論もなき同日之談にも不及、二ヶ寺に候得共、御門跡と號し、僧正に被任候、依之彌順入寺事、唯今迄沈没之段、殘念不少思召候、然者良丸殿は、黄門様御孫之事に御座候間、御得度より御取立被成、僧正昇進有之候様ニ願思召候、高田者比年御門跡號、僧正昇進之事に候、是者領主藤堂と所緣ニ付、藤堂取立候事、御存知被遊候、申ても彼は御家來筋之藤堂方へ力ニ及候事を、寺と申せば、順入寺絶倫之如信上人之嫡流、良丸殿と申せば御孫之事に候へば、此御念願御成就無之事無念に思召候、御先代ゟ御互ニ御本寺と御念比に被仰合、殊に近衛家之御舊緣も御座候故、彌御代々御入魂被遊成候間、此御願、御本寺ニ而被聞召分、御取立願思召候、世ニ希なると申候御齡にも御餘り候、黄門様御座候故、少も早く此御返事ニ宜御沙汰被聞召度候、若又是非不相叶事ニ候者、一向ニ順入寺御潰シ被遊、良丸殿俗ニ被遊、御孫之事ニ候間、御公儀へ被願上、御奉公ニ御指出し被成、相應ニ祿も拜領候様ニ可被遊候、如此迄思召被詰候段、御本寺ニ而も、御賢察被成、御得度之式も惠明院殿通りニ被仰付、官位も僧正迄御昇進候様ニ、御同心候者、七十有餘之御老後之御本望、御一生之御滿足、不可過之と難有可被思召候、左候得者彌御本寺と永々不相背、御懇意ニ可被仰通と御本懷ニ思召し、御年老之御事ニ候へ者、急不定難合期候間、御本寺ゟ宜御答候ハバ、宰相様へも委被仰置候半間、此等之趣、噯度上京之節、具ニ御門主へ御中上、宜取成願思召候由、

右之御意、唯慶恭承仕候而、一々御意之趣承知仕候、上京之節、由ニ御門主へ可申達由御答申上候

〔水戸義公行實〕萬治六年丙午年三十九歳、○中略 謫本願寺琢如子琢[illegible]於岩舟願入寺、

寺號　名稱　所在　創建　沿革

西念寺

西念寺ハ、常陸國茨城郡稻田ニ在リ、眞宗ノ開祖親鸞ノ、十年止住ノ遺跡ニシテ、同宗立教ノ本典ト稱スル敎行信證文類六卷ハ、實ニ此地ニ於テ撰スル所ナリ、眞宗東本願寺派ニ屬シ、關東二十四輩ノ一タリ、

〔和漢三才圖會六十六常陸〕西念寺　在茨城郡稻田村　東派

〔二十四輩巡拜圖會後編二常陸〕稻田山西念寺　東派　同國(常陸國)茨木郡稻田郷にあり

東御門跡の御懸所にて稻葵院と號す、往昔高祖聖人二十九歳の御時、六角堂救世菩薩の靈告を蒙り給ひしに、其後符合あらせ給ふ所の勝地にして、十餘年の間御居住ましまし、興法利生ありける芳趾也、本堂本尊阿彌陀佛恵心僧都の作 僧舍三區あり、當院は建保五年の春、高祖聖人予時御年四十五歳 當國小島郷より此地に移りて、閑靜の地に一宇を建立なし給ひ、幽栖を占給ふに、迷蒙道を埋み、桃李言すといへども、貴賤道俗御跡をしたひ、緇素老弱法味に引され、いつの間にかは所せきまで群集をなし、聖人を歸依し、尊敬する事、恰も世尊在世のごとし、爰において聖人思ひめぐらし給ふやう、佛法弘通の本懐既に成就し、衆生利益の宿念忽に滿足す、是全く當初救世菩薩の告命、今におひて符合せりとて、大に歡ばせ給ひ、卽精舍を命じて、歡喜踊躍山淨興寺と稱し給ふ、其後聖人予時御年六十歳 御弟子善性御房に附屬し、御歸洛あらせ給ひしかば善性御房卽當院を受持し給

ふ事數年なりしに、惜いかな兵火のために靈場悉く灰燼と成りける程に、夫よりして總州磯部、信州長沼等へ次第に移轉し、今既に越の後州高田に安在すと云、今越後高田御坊に、聖人御眞筆にて稲田御坊なる善性上人へ讓り給ふ二十一ヶ條の掟書と云物あり、かくて淨興寺他邦に移轉せしかば、笠間慶養房俗姓は常陸國の住人、源家の子族稲田九郎賴重とて、晉に隣へし武略の達人なり、然に宿因其時を得て、聖人に値し奉り、本願圓頓一乘の要法を聞しより、五濁にし埋れたる璞玉たちまち六根通を得て、連城の璧の光りを發し、直に剃髮染衣の姿と成り、聖人無二の御弟子と成りしかば、俗姓をそのまゝ賴重房慶善とぞ法號を賜ひけり、聖人御歸洛の後は、笠間にあつて、專ら弘法教化をなしたりけり、の子孫、深く是を歎き即稲田の靈蹟を再興し、これを西念寺と稱して、聖人十餘ヶ年安住教化ましませし布金の芳趾を傳持せる事、誠に宗祖の忠臣と謂つべし、上來は大谷遺跡錄を以て筆記せり、然るに享保の記には、稲田御坊は、聖人御歸洛の後、賴重房に讓り與へ給ふといへり、又享保の記、及び諸錄人口に傳ふる所は、聖人稲田の寓住は、十ヶ年の間なりといへるに、遺跡錄には、十六ヶ年の御淹留なりと記せり、姑らく異說をあげて、後來の識者を待のみ、

什寶、鹿島大明神御寄附の御戸帳、高祖聖人御眞筆十字名號、是すなはち鹿島大明神、聖人と御對坐の御影なり、聖人御直作の聖德太子の木像、以上三品傳記、鹿島明神の條下に出すれば、此に略す、鹿島井、本堂の前廣庭にあり、當年聖人常院に御淹留の折から、境內の井水何れも濁りにて、大に患へさせ給ひしかば、即鹿島明神七ッ井の內一ッを寄附し給ひたる所の靈水なり、其時の御誓ひとて、今に每年六月十四日には、井水かはきて鹿島へかへるといふ、委くは明神の傳記ニ出す、御杖杉聖人杉の木の杖を自らさし置給ひしに、忽根芽を生じ、枝葉繁茂して、竟に巨木と成れり、惜いかな、近年枯はてゝ、わづかに遺株を存せり、かたはらに若生へと稱す杉の大木あり、先年一如上人東國御下向のみぎり、植置給ふところ也、三度栗寺より三丁許南櫻川のむかふにみゆる栗の林これなり、聖人越後にましませし時、上野か原にうへ置給ふ種を、此所にうつし給ふといふ、又笠間の庶民小栗二百ばかり聖人に獻ぜしに、其內四五顆植置給ひしが、三度栗の種にて有けり、是聖人の常に栗子を嗜み給ふゆへなりと、順信房が草記に見へたり、稲田宮金銀橋を越て、大道より西の方にあり、素盞鳴尊の妃稲田姫をまつるといふ、毎年九月十八日祭禮あり、朝姫の墓又稲田姫の墓ともいふ、宮にいはひて道より東へ入、農家のうらにあり、寺說に云く、是即玉日の宮の御墓所にて、彼姫の傳母北田少將某眞、土民に身をやつし此地に住して、御墓なく、爰にうつすとなん、毎年九月十八日稲田姫の宮と同じく、玉日の宮の御祭禮とて、一所にこれを行ふとかや、朝姫玉日の宮の御事、其說まちまちなりといへども、既に下總國結城稱名寺の條下に、委しく論ずれば略之、

〔新編常陸國誌三十三佛寺〕西念寺 茨城郡稲田村、東本願寺掛所、 朱印地三十石

稲田山ト稱ス、本尊彌陀、惠心ノ作ト云、親鸞遺跡記云、當寺ハ鸞聖人、十年ノ間、栖遲ノ地ナリ、コノ地ノ士人稲田九郎賴重ト云モノ、聖人ニ歸依シテ、剃頭染衣ノ人トナリ、俗名ヲ更メズ、賴重房ト

稱ス、聖人歸洛ノ後、禪房ヲ彼ニ與フ、コレヨリ嗣子相續シ、享保ニ至テ、二十七世ヲ經タリト云、親鸞傳繪云、聖人越後國ヨリ常陸國ニ赴テ、笠間郡稻田鄕ト云處ニ隱居シタマフ、幽栖ヲ占トイヘドモ、道俗跡ヲタヅネ蓬戶ヲ閉トイヘドモ、貴賤衢ニ溢レ、佛法弘通ノ本懷コヽニ成就シ、衆生利益ノ宿念タチマチニ滿足ス、コノ時聖人オホセラレテ曰ク、救世菩薩ノ告命ヲウケシ古ノ夢、已ニ今ト符合セリト云々、境內ニ一ツノ靈井アリ、水淸冷ナリ、傳稱ス、鹿島大明神、聖人ノ德ニ歸依シタマヒ、大古ノ俗體ヲ現シテ、法號ヲ受ケ給フ、然ルニ稻田ノ區土ハ、水濁リテ聖人コレヲ患ルニ依テ、明神鹿島七井ノ一ヲ以テ寄附シタマフニ、一夜ニ庭前ニ湧出セルノ井ナリト云、明神又神殿ノ錦帳ヲ聖人ニ寄セラル、今ニ至テ當寺ノ什物ナリト云、遺跡記ニ出ヅ蓋コレ親鸞鹿島神主信親ト計テナス所、虛妄ノ說、論ニタラズ、又井ノ傍ニ御杖杉ト云アリ、寺家ノ說ニ云、コレ聖人越後ヨリ策來リ、杖ヲ地ニ樹タルニ、根芽ヲ生ジ、巨木トナルト云、又寺南三町バカリニ燒栗山ト云原アリ、三度栗ト稱シテ、年中三度實ヲ結ブ、相傳フ、聖人燒栗ヲ殖テ、弘法ノ證トナサシムル所ナリトゾ、共ニ附會ノ說、笑フベシ、境內ニ聖德太子堂アリ、親鸞ガ作ル所、南無佛太子像ヲ安ズ、其餘彌陀木像、十字名號、六字名號、大經一卷アリ、皆親鸞ノ造寫スル所ナリ、

寺格 寺領

〔寺鑑〕下一向宗　東本願寺末　常州稻田村　西念寺

右住職子孫讓リ　入院御禮無之　年頭御禮、御白書院、御次一同、　御暇無之　獻上十束一卷

御朱印　高三拾石

常福寺

常福寺ハ、常陸國那珂郡瓜連ニ在リ、僧了實ノ開基ニシテ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

名稱 所在

創建 沿革

〔和漢三才圖會常陸六十六〕常福寺　在瓜連　浄土　寺領百石　號草地山、後宇多院朝良忠上人開基、

浄土宗十八談林之中

〔檀林誌午〕瓜連常福寺略縁起

當山草創之儀者、延元中、（古記に延文三戊年と有之者、開師直筆訴状に依ルト見えたり、然開師傳記、八歳にして瓜連に投ずと云ふに、年暦齟齬す、考ふべし、）開山成阿了實上人（太田に修學の頃歟、或説に太田西今之常福寺村に在住の比歟、）曾而弘法勝縁の地を、村松の虚空藏に祈求せられしに、或夜瑞夢を蒙り、西の方春川の流を追ひ尋ね、瓜連の里に至れば、靈告の如く、草莽の陸地に、鮮白なる蓮花一莖生するあり、是ぞ勝縁地なりとて、伽藍を草創し、草地山蓮花院常福寺と號す、太田城主佐竹左馬之頭茂敦、（太田十世孫也、康安二寅年正月十一日卒、法號春山道喜、）奇瑞感歎し、寺境及び佛供料を寄附して祈願所とせらる、第二世了譽聖冏禪師の時、嘉慶二辰年、民家の失火にかゝり、殿堂僧坊殘りなく燒亡し、學徒悉く分散す、應永年中、古跡北の方數歩の中、今の地江移し、再興せられしと云ふ、

一説に云く、佐竹小田大椽等合戰之時、雙方ゟ出陣、互に攻戰、甲乙の兵火に一山の伽藍僧坊門鐘井靈寶佛具殘りなく、往世所藏之文書に至まで燒失し、學徒東西に馳走すと云、

應永十二酉年（回祿より十八年後）第二世了譽上人、佐竹の寄進狀、先年回祿之砌、燒失故、後證に備ん爲とて、訴狀を調し、佐竹氏の役司中江贈らる寫、沙彌珍常より返狀、井寺領坪付共、如先規證狀、今猶在藏中、○中略慶長七年寅十一月二十五日、第十一世寂譽文貞上人代東照宮寺領百石、山林竹木諸役免除之御朱印賜之、

但古記に、十三世檀譽存把上人代賜ふ、故に中興とすといへるは、年譜不應、歷代系譜に、慶長九年七月、十二世尖譽朱梅上人、檀譽江附屬の示書あり、但檀譽上人住職して、府君大檀那御菩提所となり、檀林輝を增す、故に中興と稱するならん、佐竹氏よりの寄附の、ち、當山も一榮一枯し、中間百年餘、寺領三百五十貫、又は五百貫ありしともいふ、されど、年を逐て減滅におよび、漸

寺格寺領

く百石をのみ領せしかば、その儘を言上し乞願ひければ、頓而神祖任先規百石の御朱印賜ふ、今年檀林を定させらるゝに及び、此御沙汰ありとなり、

〔寺鑑 下 淨土宗〕御朱印　高百石　紫衣檀林　瓜連　常福寺

右住職、御白書院、御縁頰御老中御列座被仰渡之、　住職御禮御白書院、獨禮(御二疊目)之外　年頭御禮大廣間、獨禮座一同、　御暇無之　獻上一(束一卷)

〔檀林誌 午〕了譽上人眞蹟

常陸國久慈西瓜連草地、常福寺寺領御寄進之事者、延文三戊戌十二月七日、淨喜寺(于時)左馬權頭義篤御判也、然バ去嘉慶二戊辰二月廿一日、宿中無殘所燒失之剋、依類火彼堂炎上之時、御寄進狀幷坊敷田畑坪付等悉以紛失畢、其已後於于今當知行無相違、御沙汰所判申受、爲備後證也、以此旨預御披露候者恐悅候、恐惶敬白、

三月六日　西蓮社了譽(在判)

進上(稻木殿)御奉行所

〔檀林誌 午〕瓜連常福寺略緣起

慶長七年寅十一月二十五日、第十一世寂譽文貞上人代、東照宮、寺領百石、山林竹木諸役免除之、御朱印賜之、〇中略寬永十八巳九月廿日、十七世直譽廓誾五人代、水戸公より御朱印百石の寺領へ、御繩入打出し、五拾五石八斗五升五合なり、〇中略依而當時は瓜連知行高十五町九畝二十歩、取米百五拾五石八斗五升五合也、(水戸今御證中ニ有り)

什物

〔檀林誌 午〕瓜連蓮花院什物

勅願所　綸旨　一通

名稱　所在　末寺

（後花園院御宇、寶德四年二月廿八日、第二世明譽了智上人頂二戴之一、）

勅額字本紙　一軸
（後奈良院宸翰、常福寺之三字也、（中略）後蕭公（德川綱條）之命ニ而向山佛殿引移掛レ之、）

同奉書幷本山添狀　一軸

常紫衣　綸旨　一通
（源義公（德川光圀）御代延寶四年五月三日、二十世清譽林作頂二戴之一、奉書幷本山添狀相添）

東照宮尊影　御宮殿安置　御代々御朱印　九通（○中略）　開山了實上人木像　一軀　中興了譽上人木像（安二置開山堂一）　一軀（○中略）　後小松院宸翰　一軸（○中略）　當麻曼陀羅　一軸　清海曼陀羅　一軸　智光曼陀羅　一軸（○中略）　日本書紀私鈔（了譽上人直筆）　三冊　古文書　三卷（○下略）

大高寺

大高寺ハ、常陸國多賀郡下手綱村ニ在リ、今眞言宗ノ一本山タリ

〔新編常陸國誌三十佛寺〕大高寺（多賀郡下手綱村本寺醍醐報恩寺）　御朱印二十石　万德山遍知院ト號ス

〔全國各宗本山明細帳〕眞言宗　本山　大高寺（常陸國多賀郡）

〔新編常陸國誌三十佛寺〕大高寺（○中略）末寺七ケ寺、門徒二ケ寺アリ　大高寺七ケ寺　德乘院（多賀郡島名村）　除地一石八斗　高德山開林寺ト號ス　眞福寺（同郡高萩村）　除地二石五斗　寶龍山寶藏院ト號ス　寶池院（同郡高戸村）　除地一石四斗　舊ハ高山寺花藏院ト稱ス　東林寺（同郡松井村）　源福

寺　同郡下手綱村　地藏院　同郡小妻村　除地一石餘　元ハ赤濱村ニアリ、後コヽニ移ス、

慈眼寺　同郡秋山村

古事類苑

宗教部六十三

佛教六十三

延暦寺 滋賀院 附入

名稱

延暦寺ハ、初メ比叡山寺ト稱ス、近江國滋賀郡比叡山ニ在リ、桓武天皇ノ勅願ニシテ、天台宗ノ開祖最澄ノ開基セシ所ニ係リ、天台宗ノ總本山ナリ、本堂ハ山上ニ在リテ、根本中堂又ハ一乘止觀院ト云ヒ、藥師如來ヲ本尊ト爲ス、延暦七年ノ創建ニシテ、寺額ハ、弘仁十四年、始テ賜フ所ナリト云フ、往時ハ山上山下ニ多クノ堂塔伽藍アリテ、是ヲ東、西、及ビ横川ノ三塔ニ大別シ、甚ダ繁盛ヲ極メシガ、元龜中、織田信長ニ攻メラレ、一山擧テ焦土トナリシヨリ、豐臣、德川二氏、相踵デ再興ヲ助ケシモ、遂ニ古昔ノ半ヲモ復スルコトヲ得ザリキ、山務ハ、圓融、靑蓮、妙法、曼殊等ノ諸門跡、迭ニ座主トナリテ、コレヲ總理セシガ、德川幕府時代ニ至リテハ、別ニ滋賀院門跡アリテ、輪王寺宮此ニ住シ、亦座主ニ補セリ、

滋賀院ハ、比叡ノ山麓、坂本村ニ在リ、明暦元年ノ創建ニシテ、輪王寺宮ノ別室ナリ、故ニ皇子ノ輪王寺ニ下ルベキモノハ、先ヅ此院ニ入リテ修學シ、其隱居スルヤ、亦此ニ退隱ス、尙ホ輪王寺篇ヲ參看スベシ、

〔伊呂波字類抄江諸寺〕延暦寺〇延暦十三年造立、元號比叡山〇〇〇寺、而平城御宇改延暦寺云々、

〔叡岳要記下〕嵯峨天皇、同仁〇弘十四年、義眞座主治山之時、有勅賜額、號延暦寺、〇下略

〔皇代記嵯峨〕弘仁十四年二月廿六日、給延暦寺額、宜號延暦寺、爲先皇所建立也、三月勅、置延暦寺別

當、又建二立戒壇院一、

〔神皇正統記嵯峨〕比叡山には、比叡と云こと、桓武傳教とこゝろを一つにして、興隆せられしゆへに名付と、山の業、種々これを稱す、さかれども舊事本紀に、比叡の神の御事也とみえたり、顯密ならびて紹隆す、殊に天子本命の道場をたて、御願をいのる地なり、これは書につくへしまた根本中堂を止觀院と云、法華の經文につき、天台の宗義によるに、かたく鎭護の深義ありとぞ、

所在

〔近江國輿地志略二十一志賀郡〕比叡山　當郡の西極、長等山の北にある山なり、皇都の艮岳にして、皇城の鬼門を鎭護すといへり、慈鎭の拾玉集に、我山は花の都の丑寅に鬼いる門をふたぐとぞきく、此山西の山麓は、山城國にして、西塔も亦山城國に屬すといへども、比叡山といふ時は、近江の國内たる故に、西塔の事をも書記す、此山至て高し、春に及で尤雪あり、拾芥抄に、本邦の七高山を載たり、比叡其一なり、此山麓より攀躋する時は、五十町餘あり、坂本より頂上大嶽まで、直立すれば六町餘なり、貞享中、京都御所司代、土屋相模守殿、京地より是を考撿し玉ふにも六町餘なり、自古此山を專ら都の富士と云、

寺域

〔叡岳要記上〕山門結界佛閣建立

延暦寺

在二日本國近江國志賀郡比叡山一

大界地、參拾陸町、　周山四方谷六里

傳敎大師結界內地淨刹結界

東限二比叡社幷天蹅一、　南限二登美溪一　西限二大比叡峯小比叡南峯一　北限二三津濱横川谷一

光孝天皇御時
太政官符　近江國

應三早勘二定言上延暦寺外堺一事

四至　東限江際、　南限富谷、　西限下水飲、　北限楞嚴院、

仁和元年十月十五日、下官符、

太政官牒　延暦寺

定寺家四至內、西北兩方外堺事、

西限親林寺水飲、(號下)　北限楞嚴院北溪、(橫川谷)

右彼寺幷賀茂下上社司等、各訴申、兩方堺相違之狀、仍卽差遣官使、與三綱及社司、共加實撿、弁定如件、

弘仁九年三月十八日　(示云、此ニ二義有之、一ニハ水海ノコナタハママデヲ取テ海際様、二ニハ海ヲモ結界ノ内ニ取、加様有之、)

〔九院佛閣抄〕太政官牒　延暦寺

定寺家四至內外堺事

東限江際、　南限宜(○宜恐富字誤)谷、(無動寺南在之、寺家小別當)

右彼寺、四至、卽差遣左大辨古麿、別當眞忠等、共令加撿知、辨定如件、

弘仁九年三月十八日

延暦寺　在近江國志賀郡比叡峯、

寺大界地、參拾陸町、周山四方各六里、(示云、此一里、四十丈爲一丁、以六丁爲一里也、已上王城山門、田舍三十六丈爲一丁也、)

〔女人往生聞書〕マヅ比叡山ハ、コレ傳敎大師ノ建立、桓武天皇ノ御願ナリ、大師ミヅカラ結界シテ、タニヲサカヒ、ミチヲカギリテ、女人ノカタチヲイレズ、

〔左經記〕寬仁四年九月九日丁巳、登山人々語云、狂女登山、在總持院步廊下、仍諸僧等打攘追下云々、古老僧等歎云、我山建立之後、未聞如此之事、先年迷路女登大武邊、忽雷雨殊甚、天氣不例、是山王被咎登山女也、而今日不雷雨、是山王靈滅亡歟、云不祕、咎非常之事、寺山上可滅亡歟、

〔豐臣秀吉譜下〕文祿四年、○中略初正親町上皇崩御、未過七日、秀次屢以狩獵爲樂、一日携群女登比叡山、晝夜溺于酒色、又狩于山中、獲猨鹿狐狸及諸鳥、靡可校量、衆徒愁之、依木村常陸介訴曰、此山者、桓武天皇草創以來、女人絕迹、肉食不釜、唯願、君公熟察之、秀次怒叱曰、我今遊戲於此、何難之有、亦何制禁之有、我是關白也、不可與餘人并視焉、卽於南光房、殺魚鳥、割猨鹿、偶見貧僧所總蓄之味噌、煎以魚鳥之腸骨投之、滿山大惡之、秀次甚耽于田畋、故世人稱之曰殺生關白、

〔折たく柴の記中〕六月七○寶永七年廿日、○中略又前代○德川綱吉の時、日光准后○公辨望み申されし、叡山結界の事によりて、八瀨の里人、其產業を失ふ由を以て愁訴す、其事いまだ決せずして、我代におよべり、これらの窮民、滯留の日久しからん事不便なり、まづこの事を議し申すべしと仰下されたり、廿五日の朝、まづ八瀨の事の議を奉る、やがて奉行所より、まゐらせし所の文書等を下し賜り、廿六日の朝、申すべき事共しるして奉る、廿八日に參りし時は、八瀨の里人愁訴の事、いはれなきにあらざれども、叡山の結界、今はた改廢すべがらず、されば彼結界の地に代ふるに、土田を以てしてその產業を得せしむるにはしくべからず、其さだめ文の草をまゐらすべしと仰下され、廿九日に、其草を奉る、猶又仰下さるゝ事共ありて、七月五日に至て、つひに御みづから草し給ひしものを、しめし下されたりき、此事は、むかし叡山の結界ありしを、そのゝち八瀨の里人、みだりに山中に入りて、木をきりとり、國家儀禮の淨界、婦女牛馬のために穢さる、もつともしかるべからずと、日光の准后、前代に申し給ひしかば、戊子の年十二月に、京の奉行所かしこにおもむきて、結界の事あり、こゝにおいて、里人等薪なとりて產とせし地をうしなひ、多くの古文書どもをまうけて證とし、その結界を改め廢せらるべき事を訴ふる事、年を經て今に至れる也、これによりて、彼庄にある所の私領寺領等を、餘所にうつし替られ、その地をば八瀨のものどもに下され、年貢諸役一切に見除せられぬ、此さだめぶみ、はじめ案奉りしは、宸名にてありしを、御みづからかな文字をまじへて、改めつくらせ給ひたり、されば此ものは、御自筆の所なれば、ありがたき事ぞかし、此年の冬、御使を奉りし時、叡山にのぼりて歸る時、八瀨の里をすぐるに、召供のものども、輿の休するほど、道のほとりなる家に入りて、縁に腰かけ居たり、あるじは老女にて、子なるものは、京にいでゆきしといひけり、かのうたへの事をとひしに、結界の後はこの人、世わたるべきわざをうしなひしに、今の御めぐみによりて、ふたゝびいき出し心地しぬれば、人々この御代をば、萬々歲とこそいのるなれ、されど、今のほどは、はたうち田つくる事にいまだならはぬわざなれば、いかにやあるべきなど申せど、つひにはしかるべきことなりと申事

創建

なりといひき、

〔元亨釋書 一傳智〕釋最澄、世姓三津氏、近州滋賀郡人也、○中略初延暦四年秋七月、澄上叡山、縛草舍、讀法華金光明等諸大乘經、乃發五種大願、時年十九、七年於山頂創一字、名曰一乘止觀院、今之中堂、所謂延暦寺也、自刻等身藥師佛像安之、又思山中無大藏、令諸弟子繕寫、亦告平城七大寺乞加助、大安寺聞寂、及東州化主道忠等、見義勇爲速聞其功、○中略十有四年○弘仁春二月、賜寺額、配紀元曰延暦、進先皇之崇建也、

〔叡岳要記 上〕桓武聖主、廢長岡京、遷平安城之時、雲峯爲帝都之丑寅、嵐徑成鬼門之凶害、當于時、大師自開伽藍之基跡、聖主深恃叡山護持、自爾以降、以當山爲皇帝本命道場、

〔扶桑略記抜萃 桓武〕延暦七年、最澄和尚、行年廿二、於比叡山建立根本中堂、一乘止觀院、後改號延暦寺、不倩巧手之人、自造等身藥師佛像、削一揃而墮涙、願六趣而祝恩、即獻沙門之幽栖、无營寶殿於他砌、已上

〔叡岳要記 上〕延暦寺　勸申建立當寺緣起事

在近江國滋賀郡比叡山北面大嵩

右僧綱、去年十一月廿八日轉牒、今年二月十一日到來、偁、權少外記坂上常蔭、今月廿日仰云、民部卿藤原朝臣宜、十五大寺、幷代々天皇皇后御願建立緣起、宜令僧綱勸申者、所仰如件、毎寺宜承知、件緣起儲注年紀、遠言上、不可怠者、寺謹引撿舊記、根本大師諱最澄、俗姓三津首、近江國志賀郡人也、先祖後漢孝獻帝之苗裔、登萬貴王也、輕島明宮御宇天皇○應神之世、遠慕聖明、歸于仁化、仍賜滋賀地、自此改姓、賜三津首也、去延暦四年歳次乙巳七月中旬、登渉叡峯、結草爲庵、奉爲四恩、毎日轉讀法華、維○維下恐脫摩字金光明、仁王般若等經、一心精勤、同七年歳次戊辰奉爲桓武天皇、創建根本一乘止觀院、今謂中堂是也、三部大乘長講于今不絶、同廿年歳次丙戌正月廿六日、下勅給毎年試度、毗盧遮那經、摩訶止觀兩業年分度者各與於此時、弘仁二年歳次辛卯七月、建立法華三昧、長講法華、于今不絶、六月四日、是忌日也、同十三年歳次壬寅六月十一日、更下勅給言、前件二人年分、於比叡山寺出家得度、即十二年、不聽出山、四種三昧、令得修練之詔、籠山之稱、起自於斯畢、同

十四年(歲次癸卯)二月廿六日、下詔勅、改易本名、號延暦寺、厥後寺家至仁壽三年(歲次癸酉)殊蒙官牒、始所行用之、同彼天長二年、依太上天皇(嵯峨先皇)先勅、幷當代詔勅、從近江國、賜正稅九萬束、造立戒壇院(正堂一宇、幷講堂一殿一宇也)、但未畢功之間者、根本止觀院、行受菩薩戒、幷廻心受大戒之事、同四年(歲次丁未)五月中、十禪師義眞、十禪師圓澄、上座寺主道叡、都維那承天、傳光定、興善、圓仁等、爲遂先師本願、語於別當正三位行刑部卿藤原朝臣三守、參議右大辨從四位上兼武藏守勳六等大伴宿禰國道、令正八位下赤麿、大初位上櫟井福丸、高階姥彌丸、答他乙經等、鑄作鐘一口(高八尺、口徑四尺六寸五分、口厚四寸五分)、用熟銅大六千七百斤也、承和二年(歲次乙卯)依大法師義眞奏狀、賜於判行、天台讀師各一人、

以前建立當寺緣起、勘申如件、

寫本記曰、仁平元年六月六日、恭以大師御筆、懷喜怖之心、書畢云々、

〔先德明匠記〕三。塔。者、東塔根本止觀院、西塔寶幢院、橫川楞嚴院、比叡山十六谷者、東塔五谷、(東谷、西谷、南谷、北谷、無動寺谷、)西塔五谷、(東谷、南谷、北谷、南尾谷、北尾谷、)橫川六谷、(都率谷、般若谷、香芳谷、戒心谷、解脫谷、飯室谷、)是也、

〔二中歷(四僧數)〕天台山三千人(嘉承年中計之)

今案東。塔。千八百十三人(無動寺在此中)　西。塔。七百十七人(黑谷在此中)　橫。川。四百七十人(飯室在此中)

〔碧山日錄〕寬正二年三月廿日辛酉、叡山之一衆、相聚議事、謂之三塔會合、是日有之、著甲冑執干戈、會聚者二萬餘人云、

〔驢驢嘶餘〕一比叡山三塔アリ、各出トテ、物ヲ出ス時、譬ヘバ百貫文出ル事ニハ、五十貫東塔、廿五貫西塔、又半分横川也、又物ヲ取ル時モ如此、法會ニ衆徒ヲ出スモ如此也、

〔叡岳要記上〕十。六。院。(五十二代嵯峨天皇)

根本大乘止觀院　大別當義眞　小別當眞忠　上座藥芬　寺主慈行　都維那丹信　法華三昧院(或名根本法華三昧院)(與今同)　別當延秀　知院事圓信　一行三昧院(或名根本一行三昧院)(今講堂內艮方地、移堂于法花)

（堂南頭、爲二阿彌陀堂一也、）　別當圓仁　知院事法雄　般舟三昧院（或名二法華常行三昧院一）（昔般舟師迹二六角一、在二今文殊樓地北內一、）　別當道紹　知院仁哲　覺意三昧院（或名二法花覺意三昧院一）（隨自意堂也）　別當眞忠　知院事朗然　東塔院（或名二法花千部東塔院一）（今定心院長地是、有レ夢移二建持院一、）　別當德善　上座眞順　寺主神悅　都維那嵩然　西塔院（或名二法花千部西塔院一）　大別當康遠　小別當眞忠　上座慈行　寺主道叡　都維那寂然　寶幢院（或名二法花延命寶幢院一）　別當光定　知院事證圓　菩薩戒壇院（或名二法花戒壇院一）　別當義眞　知院事光定　護國院（或名二法花護者多門院一）（若中堂北、多門堂歟、）　別當圓哲　知院事寂然　總持院（或名二法花佛頂總持院一）（今院是也、塔渡移來、）　別當眞德　上座妙堅　寺主興善　都維那孝行　根本法華院（或名二根本法花知見院一）（總持院南岸、興、平地院是也、）　大別當圓澄　小別當惠曉　上座圓證　寺主德圓　都維那等眞　淨土院（或名二法花淸淨土院一）（今院地也）　別當藥芬　知院事煖然　禪林院（或名二法花淸淨禪林院一）（虛空藏尾、今云二彼岸所一、大師御墓艮岳背、）　別當藥澄　知院事眞忠（谷水邊平地也）　脫俗院（或名二法花淸淨脫俗院一）（本尊地藏、或水飲堂、）　別當藥芬　知院事行宗　向眞院（或名二法花淸淨向眞院一）（本尊地藏）　別當康遠　知院事唯叡

以前衆院幷別當三綱等、爲レ令下興二隆佛法一、擁二護國家一、利二樂群生一、依二延曆廿四年大歲乙酉九月十六日治部省澄義寺家小別當眞忠等公驗一建立、衆院別當等如レ件、宜同法禪衆、發二精進心一、修二持諸院一、長講不レ絕、持念不レ怠、禪定不レ息、福二利國家一、成中佛群生上、

弘仁九月七月廿七日　前入唐受法沙門最澄

前入唐受法沙門義眞

九院。（五十四代仁明天皇）

止觀院　定心院　總持院　四王院　戒壇院　、八部院　山王院　西塔院　淨土院

〔九院佛閣抄〕口決云、十六院事、悉無二建立之儀一、傳敎大師御代、置二十六院之寺號一、雖レ任二別當三綱等一、護國院者、雖レ有二本尊一、不レ點二靈地一、根本法花院、幷淸淨禪林院者、雖レ點二靈地一、無二本尊一、彼護國院者、點二北方靈地一、傳

敎御作、毘沙門擬欲ロ護國院之本尊、而不ㇾ建ニ立佛閣、件毘沙門安ニ文殊堂內毘沙門堂、根本法花院地者、天元四年、慈惠大師建ニ立常行三昧堂、常行三昧堂者、虛空藏峯在ニ文殊閣前地、而元慶七年、相應和尙依ニ慈覺大師遺命、移ニ造當地ニ也、

〔近江國輿地志略〕志賀郡二十一 大凡比叡山延曆寺、三塔分、往生要集にも、三塔三院の名を載す、先德明匠記にたがふ事なし、尙詳かに圖にえるす、相傳往古者、叡山九院、十六院ありと云、○中略 臣按するに、十六院は其名のみ有て、院のなきも多しと見へたり、○中略 東塔四十六坊、無動寺谷十三坊、西塔三十一坊、橫川十四坊、飯室谷五坊、合百九坊、○下略

〔源平盛衰記〕九 山門堂塔事

抑當山ハ、是傳敎大師草創ノ砌、桓武天皇ノ御願也、天長地久ノ長講ハ、止觀院ニ置レタリ、本尊ト申ハ、大師自斧ヲ取、藥師ノ像ヲ造ツヽ、未來ノ衆生ヲ利益シ給ヘト祝申給シニ、半作ノ佛像ノウナヅキ給シモ、憑シクコソ覺レ、梵釋四天ノ像ハ、又忠仁公ノ造立也、十二神將ノ像ハ、寬仁ノ入道大相國ノ所造也、日光月光ノ二菩薩ハ、宇治關白ノ所造ナリ、効驗何モトリ〳〵ニ、利生實ニ嚴重也、法花三昧堂ハ、又傳敎大師ノ草創也、一乘轉讀ノ調體ハ、此砌ニゾ住ケル、半行半座ノ三昧、此道場ニ修ストカヤ、常行三昧院ハ、慈覺大師ノ建立、法道和尙ノ引聲、此道場ニ遷サル、戒壇院ト申モ、同大師ノ建立、圓頓無作ノ大乘戒、此靈場ニ行ル、總持院ト申ハ、文德天皇ノ御願、眞言上乘ノ秘法ハ、此伽藍ニ修セラル、如來遺身ノ御舍利多寶塔ニ納、鎭護國家ノ道場、名稱實ニ憑シヤ、深草天皇ノ定心院、朱雀天皇ノ延命院、花山法皇ノ靜慮院、承雲和尙ノ五佛院、後冷泉院ノ實相院、弘宗王ノ大講堂、文德天皇ノ四王院、皆是國家鎭守ノ道場也、西塔院ノ釋迦堂ハ、延秀菩薩ノ造立也、寂光大師施主トシテ、護命僧正導師タリ、弘法大師ハ呪願シ、別當慈覺兩大師、梵音ヲ誦シ、安惠惠亮ノ和尙達、錫杖ヲゾ勤ケル、本尊ト申ハ、傳敎大師ノ御作也、中堂ノ藥師ト印相更違ズ、醫王善逝カト思

ニ、天人香呂ノ間ニ天降給ヒテ、閼伽ノ御臺ヲ備ツヽ、敬禮天人大覺尊ノ、四句ノ文ヲ誦シケリ、九旬安居ノ供花モ、此御臺ヨリ始レリ、横川ノ中堂ト申ハ、慈覺大師歸朝ノ時、惡風ニ放タレテ、羅刹國ニ至シニ、觀音海上ニ現ジ給ヒ、不動毘沙門艫舳ニ現ジ給ヘリ、赤山明神ハ蓑笠ヲ著給ヒ、弓箭ヲ手ニ把テ、大師ヲ守護シ奉ル、彼ノ三體ヲ移テ本尊トシ給ヒ、赤山明神ヲ西坂本ニ崇ケリ、如法堂ト申モ、慈覺大師ノ御建立、六根懺悔ノ行儀ハ、此道場ヨリ始レリ、三十番神ノ守護コソ貴タハ覺ユレ、相應和尚ノ不動尊、南山ノ洞ニ座シ給ヒ、大樂大師ノ大威德、西塔院ニ御座、或ハ秘密瑜伽ノ精舍モアリ、或ハ法華讀誦ノ道場モアリ、念佛三昧ノ砌アリ、圓頓教ノ窻アリ、目出カリシ挙ナレドモ、谷々ノ講演モ皆斷絕シ、堂々ノ行法モ悉ク退轉ス、

〔吾妻鏡十八〕元久二年九月十三日丙寅、五條判官有範使者、自京都參著、申云、去二日子刻、叡山法華堂渡廊放火、講堂、四王院、延命院、法華堂、常行堂、文殊樓、五佛院、實相院、丈六堂、五大堂、御經藏、虛空藏王總社、南谷彼岸所、圓融坊、極樂坊、香集坊、以爲灰燼、餘炎欲及中堂之間、本尊十二神將像、奉渡隨自喜堂、舉前唐院聖教寶物等、奉取出法華常行堂、供養法於食堂修之、放火事、堂衆所行歟之由、有其疑云云、當山、桓武天皇御宇、延曆四年乙丑七月廿日、傳教大師經始之、草創根本中堂以降、朱雀院承平五年乙未三月十六日火災、中堂(本尊奉取出之)已下、堂舍僧坊四十餘箇所燒亡、村上天皇、康保二年乙丑十月廿八日戊子、亥剋、延曆寺講堂、文殊樓、延命院之本堂、東法華三昧、常行三昧堂、鐘樓、及僧坊等卅一宇、一時燒失、火出於故座主喜慶坊、但四王院四天像雖僅存北方像、自腰燒絕、頭足已別、見者拭悲淚云云、而今年又當于乙丑歲十月、有此災、可謂不思議歟、

〔園太曆〕康永四年五月一日

元曆二年乙丑七月九日、大地震、山上坂本堂舍塔廟、或傾危或顚倒、

根本中堂傾北方、十二神將六天聖者南廻廊等顚倒、總持院內眞言堂東西廻廊、戒壇院四面廻廊、中

門著衣堂、房舍五十餘字

〔元徳二年三月日吉社並叡山行幸記〕性算が門第等、支度相違之闕、面目を失ふあまり、咎を衆訴に讓らんがため、上總注記木算、伊豫注記嚴成、大夫注記實心等相議して、同十九日(○永仁六年九月)亥剋に、大講堂、文殊樓、五佛院三所に火を付侍ければ、火炎同時にもえあがりて、東は鐘樓、政所、定法房、淨眼房、南は五佛院、實相院、定心院、同鎭守、彼岸所、圓融坊、極樂坊、香集坊、一乘房、法性房、櫻本、西は四王院、戒壇院、北は法華堂、常行堂、一夜中に灰燼となりしかば、本尊聖教已下とり出すものはすくなく、やけうするものはおほし、中にもしのびがたきものは、山家天台山の佛像經典を、吾山にうつされし時、同わたらせける智者大師の如音、慈覺大師五臺山に詣でゝ、生身を拜し給て、みづから刻顯給へる師子奮迅の像、天滿天神法性房贈僧正に、御對面ありし時、柘榴吹かけ給ひし妻戸の扉、傳敎大師手づから鑄給へる嵯峨天皇御願の突鐘にてぞ侍ける、彼鐘銘云、此山有頽、此銘無闕、此鐘有銘此山無絶云々、されば、講堂炎上は、以前四箇度なり、而或時は樓閣は燒侍れども、鐘はわきあはず、或ときは鐘樓火のゆへにやと聲も深く侍しに、此たび、このかね沸破れて、纔に銘の文のみ殘るは聲ありとやせん、聲なしとやせん、これまさに一山の滅亡のみにあらず、天下の重事なるべし、愛先皇(○大覺寺殿後字多)同十月十三日晩頭に、忍のびて當社に御幸なる、御供には、爲通中將ばかり也、すなはち夜に入ければ、御登山わたらせ給ひて、講堂回祿の有さま叡覽し給、根本中堂轉法輪堂、首楞嚴院、及慈覺大師の御廟まで、御巡禮わたらせ給て、曉天に還御なる、是偏に山門の滅亡を歎おぼしめさるゝ故とぞ聞えし、御先達は、安居院の覺守法印なりけり、(○中略)

八月(○元亨三年)十八日、子剋に、西谷智積房の香の灰より火いできて、遙かの谷をこえ、總持院の塔につきて、護摩堂、灌頂堂、二階樓門、四面廻廊、一も不殘燒にけり、

〔太平記二〕天下怪異事

元弘元年、山門　塔ノ北谷ヨリ、兵火出來テ、四王院、延命院、大講堂、法華堂、常行堂、一時ニ灰燼ト成ヌ、

〔光嚴院御記〕元弘二年四月十三日壬子、早旦聞、叡山火起、自法花堂、常行堂、講堂、延命院、四王院、鐘樓等燒失之由、嗟歎無極、

〔信長記四〕延暦寺炎上同僧徒悉被燒殺事

辛未九月元龜二年十一日、信長卿、瀨多ノ山岡玉林齋所ニ宿陣有テ、同十三日ニ比叡山ノ堂舍佛閣、悉令燒失、上方僧徒ニ至迄、皆可燒亡ト、宗徒ノ人々ニ被仰付、聊モ哀憐ノ御心ナク、嚴急可申旨頻ニ下知シ給ヘバ、近習宗徒ノ人々、コハイカヾ有ベキト、色ヲ失ヒ、手ヲ當ル樣ニフタメキアハレケレドモ、憤甚ツヨクシテ、中々制シ難カリケレバ、各力不及シテ、御請申ケル處ニ、又諫諍イタシミントテ、信盛、武井肥後入道兩人進出申ケルハ、此山ト申事ハ、人王五十代桓武天皇、延暦年中ニ、傳敎大師ト御心ヲ合セ、御建立有シヨリ以來、王城ノ鎭守トシテ、既八百年ニ及マデ、遂ニ山門ノ嗷訴ヲダニ不用ト云事ナシ、然ニ、今世澆季トハ申乍ラ、斯ル不思議ヲ承候事、前代未聞ノ義ニテ御座候ト、強テ諫申處ニ、信長卿、諫ヲ防ニハアラズ、心ヲ閑メテ承候ヘ、此寺吾亡スニ非ズ、自業得果ノ儀アリ、抑我一日片時モ不置枕於泰山之安、輕一命盡粉骨、私欲ヲ去、士ノ勞ニ代、偏ニ四海ノ逆浪ヲ治メ、王道ノ衰タルヲ興シ、移風易俗、再政敎ヲ無窮ニ垂レント欲スル者ナリ、然ルニ去年、攝津國野田福島ヲ取詰、既ニ落城ニ及處ニ、朝倉淺井其隙ヲ窺ヒ、數萬騎ニテ當國志賀郡へ差出間、從彼地引返シ、坂本口ヲ追拂、翌日彼賊徒等、ツボ笠山へ追上、其後深雪コシヂノ路ヲフリ埋ミ、通ヒモ更ニ有マジキ折ナレバ、悉討果スベカリシヲ、山門ノ衆徒企逆意之條、汝等遣シ、種々言ヲ盡シ、理ヲ究メタリシカドモ、其儀ニ不應ノ間、重テ稻葉ヲ相添遣シテ、實振同心バ、必根本中堂山王ノ社ヲ初トシ、一宇モ不殘燒拂、僧徒悉ク可刎頭旨申シカドモ、終ニ同心ナカツシ、是信長ヲ欺ニ

非ズ、天下政道ノ護持ヲ妨者也凶徒ヲ助ルハ國賊也、其上此度亡サズンバ、又天下ノ殃タルベシ、一人モ不レ可レ助ト、理ヲ盡シテ被レ仰ケレバ、夕庵入道モ、其理ニヤ服シケン、一言ノ返答モナカリケル、斯ル處ニ、池田勝三郎申ケルハ、今日ハ漸ク午後ニ及候、夜ニ入ナバ、惡逆ノ衆徒少ハ落散ル事モ候ベシ、罔ハ明日鷄鳴ヨリ取卷攻サセ玉ハヾ、一人モ洩スマジク候ト申ケレバ、最ナリト同ジ玉ヒテ、其日ハ止リ、夜半計ヨリ、サシモニ廣キ比叡山ヲ、スキマモナク取卷、四方ノ手合タル相圖ノ螺吹立シカバ、一度ニ鬨ヲ噇ト上、攻上ル、山門ニモ、爰ヲ先途ト迫々ニ待懸防戰フト云ドモ、中々屑トモセズ、四方八方ヨリ燒立攻上リケル程ニ、根本中堂ヲ初トシテ、山王廿一社、鐘樓、經藏ニ至マデ燒亡シ其外顯宗秘法聖敎、帝都累代記錄、一時ニ灰燼トゾ成ニケル、碩學宏才ノ老僧、容顏美麗ノ兒童、或被レ刎レ首、或生虜レテ、ナウ此逆意我々ナドハ中々存寄ズ、却テ思留リ候ヘカシト、異見ヲコソ申ツレ、是扶ケテタベト、聲々ニ侘敢ルモアリ、中ニモ信心不二ノ僧徒ハ、世既ニ五々百歲ニ及デ、生ヲ末法ニ受テ、行末トテモ賴ナシ、山王大師佛菩薩ノ靈像ト共ニ、身ヲ燋サバ、是即チ成佛ノ緣トコソナラメト、懸二思於一實圓頓月一、澄二心於四明洞口水一、鑊湯爐炭淸凉界ト觀念シテ、猛火中ニ飛入々々、燒失スル者モ多カリケリ、大伽藍ドモヲ燒立タル音、老若聲ヲハカリニ、幾千萬トナク鳴カナシム、其聲天ニ響キ、地ニ滿テ、物ノ分モサダカナラズ、哀ナリシ事トモナリ、古人不レ云乎、滅二六國一者六國也、非レ秦也、族レ秦者秦也、非二天下一也ト、亡二山門一者山門也、信長ニハ非ルベシ、洛西ノ策彥叟此事ヲ被二悲嘆一テ、

法衰比叡大中堂、嘆息三災焦二上蒼一、陽溫廿四郡湖水、灰冷三千刹道場、天子廻輪懸二日月一、山王權現曆二星霜一、白髮曾斯有レ神在、七看二東海變爲一レ桑、

角テ、當國志賀郡ヲバ、明智十兵衞尉ニ給タリケレバ、坂本ニ城郭ヲコソ構ケレ、

〔本阿彌行狀記 下〕其時比叡山を取卷し寄人の內、羽柴筑前守秀吉、日吉山王に祈誓せられけるは、

何とぞ我手より破れざるように守らせ給はゞ、我出世後には、本のまゝ、叡山の堂塔不ㇾ殘再建致すべしと願はれけるよし、此事を叡山の僧徒傳へ聞、大切の寶物等を、悉く秀吉の陣所へ贈り預け候よし、山徒忍び〳〵に落候人數多にして、山にて死せし人は、わづかの事とぞ、明智日向守も秀吉と同じ趣意故に、智識高僧達、無難に下山し玉へりとぞ、

〔堯恕法親王記〕元祿二年八月十日

一今日、安井ノ僧師法印來申云、若州ノ某寺、信長檀越として建立ノ寺之故、彼寺ニ、信長公影令二造立一候、彼影像被ㇾ染二御筆一可ㇾ畏存候、則下書ノ繪持參也、　予返答、少有二所存一之間、叶間敷旨返答、則下書ノ繪返ㇾ之畢、

信長ハ、先ニ元龜ノ大亂之時滅二却山門一之惡徒也、圖二彼惡人之像一事、尤非二本懷一故、辭ㇾ不ㇾ書之也、

〔堯恕法親王記〕元祿四年七月十七日、飯室谷山本坊弟子ハ、讃州ノ武士ノ子ナリ、讃州ニテ得度シテ、去ル四月ノ始、從二讃州一のぼれり、○中略此事ヲ、山本坊ニかたりければ、某汝が先祖ハ、たれぞと問へども、其新發意も、若年なれば、ゑか〳〵ゑらず、いろ〳〵ニ、二親ノ名字など悉尋ければ、母方織田氏なり、さては織田信長の末孫ニてぞあらめとて、生國へ尋ニ遣ければ、母かた信長ノ末なりけり、さては此上は、住山は叶まじとて、于ㇾ今自先坂本ニをけり、

〔堯恕法親王記 六〕寛文八年二月晦日、從二東園中納言一書狀到來、其狀云、

先日者叡山火事驚入候、雖ㇾ然貴寺近邊ニてハ無ㇾ之候由承及、令二安堵一候、乍ㇾ然文殊樓回祿奇怪之事、諸事無二心元一存候、○中略

四月十三日、○中略　口上覺

一山門根本中堂大講堂幷日吉社、今度從二武家一修造候、就者當月中、木作始仕候、被ㇾ經二叡慮一、日時勘文申出度候由、從二山門衆徒中一、座主宮へ申入候間、日時勘文被二仰出一候樣ニ、御沙汰被二頣入一候事、

根本中堂

〔書言字考節用集 乾坤 一〕根本中堂（コンポンチウドウ）延暦七年、釋最澄構字於叡山、安置於藥師佛像、名曰一乘止觀院、

〔濫觴抄 下〕根本中堂　桓武五年乙丑（〇延暦四年）七月、傳敎大師、登叡岳、卜草庵、始建立中堂矣、

〔塵囊抄 十一〕比叡山ノ根本中堂ト云ハ、一山ノ中心ト云義歟、

彼宗旨、中道實相ヲ以テ詮トスレバ、定テ由アル歟、雖然世流布ノ義ニハ傳敎大師、初メ三字ヲ構ヘ給ヒ、北ニ多聞天ノ像ヲ安テ、毘沙門護國堂ト號シ、南ニ經律論ヲ置テ、一切經藏ト名ケ、中ニ藥師如來ヲ立テ、一乘止觀院ト云、其中間ナル故ニ、中堂ト云也、其後、三字共ニ朽損ノ時、智證大師、修造シ給ニ、三宇ヲ合、一堂ト成給也、一堂ハ一諦也、三諦ハ卽一也、豈我祖意ニ違ハン哉ト云々、仍テ今中堂ト云也、

〔山門堂舍記〕根本中堂（初號比叡山寺、後稱一乘止觀院、亦曰中堂、）

大別當義眞　小別堂眞忠　上座樂芬　寺主慈行　都維那圓信

延暦七年戊辰、傳敎大師建立者、伐虛空藏尾、自倒之木、以本切、自手彫刻藥師佛像一軀安置之、〇中略

貞觀元年九月廿五日、勘定資財帳云、葺檜皮五間、根本藥師堂一宇、（長三丈、廣一丈五尺五寸、高一丈五尺、）葺檜皮五間、文殊堂一宇、（長三丈三尺、廣一丈六尺、高一丈二尺、）葺檜皮五間、經藏一宇、（長三丈三尺、廣一丈六尺、高一丈二尺、）

〔新古今和歌集 二十 釋敎〕比叡山中堂建立の時　傳敎大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立杣に冥加あらせたまへ

〔元亨釋書 三 慧解〕釋圓珍、姓和氏、讃州那珂郡人、〇中略　初傳敎於叡山構三字、北置多門天王像、號毗舍門護世堂、南庋經律論、名一切經藏、中安藥師佛像、曰一乘止觀院、以其居中稱中堂、久稍朽壞、珍合三字爲一堂、今之中堂也、何存昔號、或曰、不乖本乎、對曰、始之三宇者三諦也、今之一堂者一諦也、三諦卽一、我豈戾祖意乎、

〔天元三年中堂供養願文〕良源敬白、根本大師之始闢此山也、擧翠嶺而結庵、踰蒼海而求法、慇勤忍世

界之多苦、願藥師如來之垂慈、不倩巧手之人、自造等身之像、削一柿而墮淚、顧六趣而祝恩、即獻沙門之幽栖、無營寶殿於他砌、於是滿月衡嶺、三有海之家仰光、慈雲出谿、十無盡之鄉蒙潤、何況天台山上、日本國中、驚厄難而祈恩者、嬰痾恙而求救者、誰無虛往實歸之悅、誰無轉憂爲樂之娛、彼先師之所刱、在後代而自叶、而去承平六年之春、大火成災、中堂作燼、遇風遇雨之構、拂玉礎而不殘、無去無來之尊、傾寶髻而纔出、昔釋尊出聲欲之門、諸子戲而俱去、今醫王避煙焰之砌、師弟集而奉扶、彼一時也、此一時也、雖係大衆、此非小緣、彼時座主贈僧正和尚、迷一心而悚戰、唱衆力而經營、土木之功適成、瑠璃之儀早復、次欲卜供養之日時、俄迷生死之露泡、其後代々座主各多他營、不遑此事、小僧恭無四海之權、猥作一山之長、不測愚臆、亦相璺蹤、仍穿巖刓岸、不憚土禁於人愼、構堂起樓、欲嚴地勢於鵝王、倩見中堂之體、恐未飽大師之心、傍無廻廊、前有狹庇、道俗會合之夕、雲集而履肩、遠近修練之時、霧重而無首、況乎山雨夜零之春、嶺雲寒亂之時、迷巖戶而亂步、隱洞門而傷懷、因之造步廊而連堂、構廣廂而增砌、鵠色之輩翔動無障、鳩集之客立留有所、又食堂燒於先年、法門分於兩處、是故造一宇二隔之經藏、起久廢不營之食堂、以侍老少滿山之僧寶於東廊之東、以全先後大師之法文於北砌之北、爰驚三秋之空闕、設一日之大會、幡影多翻、飄彩虹於晴日、香雲四起、插春柳於秋叢、巖曲飽霜之花、折以供於三十二相之境界、山阿落飄之菓、拾以施於百五十口之威儀、或衣薜荔而徂巖、秋霧繞背、或排松扃而振錫、曉雲封眉、梵唄者他時之舊音、帶寒嵐而添韻、羅綺者今日之新色、□霜葉而加粧、復有孫桐母竹之輩、代乾闥而奏調、竹馬芥雞之齡、入東扉而供花、分麈牙而施鶴勸、便是公家之恩賜、木叉而班草庵、□非松房之計、加之左右兩壁、命王府催曲、白玄二壁、滿長廊而凝誠、摠皆朝野之營、豈獨秋山之設、功德所覃、尊卑何別、上獻紫禁、下及蒼生、抑小僧齡登七旬、命期一夕、先大夢之欲至、悅宿念之頗諧、往々勸人、處々設會、近往而聞法之者少、遠來而觀樂之者多、持拄杖而度衆、蓋乃不經比丘之昔契、因音樂而結緣、事非無智貧道之新謀、勿謂事佛之莊嚴而已、半是度人之方便者也、凡厭遠而闕之、近而見之、若拘

知慮而誹謗、若運善心而讃歎、不歷三僧祇、皆居一佛界、乃至佛眼所至之境、人心所及之鄕、依今日之善根在俱時而證果、良源敬白、

天元三年九月三日　　座主僧正法印大和尚位

作者　能登權守高階眞人成忠

〔建內記〕永享十一年二月廿七日乙巳、山門根本中堂造營料被懸催棟別、一字別壹疋由、播磨國吉川上座注進到來、今度之義嚴密歟、不可依諸役免除之、先例歟、中々不可及御違守護方、可存其旨之由加下知了、

〔康富記〕寶德二年五月十一日甲寅、延曆寺根本中堂藥師像、可被擬勅作、云先例云准據、可被注進之由、藏人權右中辨綱光爲奉行被尋下兩局務、雖然無所見之由各被申之云々、後白川法皇、東大寺大佛令開眼御之由、見于文治元年記畢、其者非此類也、　十六日己未、自延曆寺、根本中堂內陣御佛內、智證大師御作藥師如來像、三尺許歟此御腹身中ニ金銅藥師三寸許七佛被作籠之、件金銅小藥師者、自北天竺智證大師被渡申之、件御佛去永享年中、中堂炎上之時燒失了、但腹藏之七佛內、纔一佛令殘給之間、其殘六佛、今度於山門、座主御坊毘沙門堂殿被鑄足、爲七佛、今度新造藥師被作藏之云々、去永享年中、中堂炎上之時令燒給、今度仰佛師令造立之、件藥師像被擬勅作、主上御自身御刀ヲ以御佛ニ被剋付者、可爲御祈禱之由、自山門就座主申請公家之處、有勅許、是日、自山門持參彼御佛像、天子有勅作之趣云々、廣橋權右中辨綱光、五位職事也、取次之、被驚禁裏御目云々、近臣公卿殿上人參集、奉拜彼藥師給云々、

〔宜胤卿記〕永正三年二月廿七日、頭辨狀到來、右大丞傳達之、二首遣之、從座主宮、勅裁事、如此御所望候、此案注給候、　三井土像何と讀候哉余返答云、井は聖教等にて候、勅裁などには不可然候、土像は土にて作候像候、

山門根本中堂三菩薩土像事、任最初形像可被造立之由、天氣所候也、以此旨可令申入座主宮給、仍執達如件、

永正三年（年號可被略歟、但所望申候者其時計、）二月廿八日　右中辨判（御名字可被書候）

謹上　大納言僧都御房

〔永正十五年中堂供養記〕延暦寺中堂供養式

永正十五年四月四日　導師　堯胤二品親王（座主）　呪願師仁和寺宮（御室）

〔宣胤卿記〕永正十五年四月四日、今日延暦寺中堂供養也、傳奏甘露寺大納言、（元長卿）奉行藏人左少辨資定、（兼行事辨）公卿右大臣（實香公）、甘露寺大納言（元長卿）、中御門中納言（宣秀卿）右宰相中將（實胤卿）辨資定、堂童子俊秦朝臣、長盛、俊永、秀久、盛可、久親、御誦經使言綱朝臣、度者使季國朝臣、御布施取殿上人範久一人、爲取次橘以緒參云々、（○中略）室町殿御出方事ハ、廣橋中納言申沙汰、（○中略）今日導師天台座主堯胤法親王、（興福寺別當、一乘院辭退、）

〔公卿補任（明正）〕寛永十一年十月十四日、山門根本中堂木作始、地曳礎地鎭日時定、（風記）上卿高倉中納言、辨奉行共綱朝臣、　十七年十二月十三日、延暦寺根本中堂本尊遷座日時定、陣座儀、上卿柳原大納言、辨顯業、奉行宣順朝臣、

〔堯恕法親王記〕寛文七年七月十日、參朝、法皇（○後水尾）御幸、則出頭、未剋計退出、

今日柳原辨へ　使者遣之（使刑部卿）

口上覺

根本中堂、爲武家沙汰被加修理候、來十七日、本尊奉還本願堂候就、其具令登山可奉解件之本尊之勅封之旨、乘中申候、有別義間敷候哉、被伺御慮可給候事、

本願堂安置之間も、座主私之封先規如此候、中堂修理造畢以後、遷座之時勅封被成候事候、以上、

講堂

柳原辨返書云

得其意候畢、但勅封候ハヾ、勅使等有之事も候哉、舊例如何候哉、重而令示給、令披露可申候由云々、

十一日、今朝昨日之世事、柳原辨ニ申遣

口上覺

勅使有無事、元龜年中者、兵火燒失、寬永年中者、大風破却故、兩度共ニ、急々事之故不及其沙汰候、但中堂造畢以後、從本願堂遷座之時者、座主勅封持參ニ而被封候、依之此度被切勅封候も、座主登山ニ而可有其沙汰候由、衆中被申候故、及勅使登山沙汰間尤候哉、但元龜以前之例、急々候故、未能勘出候、以上、

七月十一日

返書云

承屆候、今日朝參候條令披露、從是御返事可申達候也、

〔近江國輿地志略二十二志賀郡〕根本中堂 文殊樓より、岸下八間にあり、文殊樓より石段を下り、平地三十四五間西なり、樓門廻廊あり、是東塔根本中堂、一乘止觀院と號するもの是なり、寬文七年、御造立あり、桁行京間十九間二寸、梁行京間十二間三尺七寸、軒の高さ自地五間一尺五寸、

〔山門堂舍記〕講堂(在二四王院延命院中間一)

葺檜皮九間堂一宇、檐下四隅有莊嚴丹青簽候、安置胎藏大毗盧舍那木像一體(居高八尺、化佛一柱、寄傾提金箔、)

左脇士彌勒井木像一體、 右脇士十一面觀音井像一體(並立高一尺五寸、各押二金薄一、)

右正體佛像、并彌勒井、爲佛法護國、衆僧檀越等、合力所造觀音井像、弘宗王奉爲深草先帝(○仁明)發心所造、具在奏狀、

梵天帝尺四天王像各一體(綵色) 文殊師利聖僧像一體(居高三尺、肉色、)在金盞床、(長四尺、廣三尺、高一尺四寸、)天長元年、

義眞和尚所致造矣、十一月會在之、名法花會、六月會（法華會式、同十一月會、五月廿八日始之、小月者廿七日始之、）安居、夏講、安置新金色丈六大日如來像、觀音彌勒二井像、彩色文殊、六天像等畢云々、　承元元年（座主圓融房、承圓大和尚、）依宣旨鎌倉源中將實朝令造營、

〔帝王編年記　十三淳和〕天長元年九月三日、義眞和尚（傳敎大師弟子、天台座主之始也、）供養大講堂、本尊毘盧遮那如來、呪願義眞、導師護命僧正（南都）

〔朝野群載　十七佛事〕延曆寺牒　當國衙

欲被殊加衙勢、令運上材木、造建講堂一宇狀

牒、竊以吾山者、貴府之鎭護、貴府者、吾山之檀那也、譬猶鷲峯與王舍、雙擧於二諦而已、況復府中瞻山、堂閣插著於雲漢之際、山上望府、樓臺隱映於烟樹之間、豈只地形之相逢、師檀之成契矣哉、便是眼界之所通、心膽彌親而已、既而山神者、四社之其一、山僧者、千口之其一、剩三百六時行道之砌、共祈貴境之豐饒、三密觀念之窻、各禱貴境之快樂、則都鄙緇素、普所見聞也、今件講堂、建立年久、破壞日新、椙杤而暮年牢攏、梁傾而晴虹將斷、若無修造之勉、定有顚倒之傷、因之寺家廻策、山麓採材、徒委濱頭之沙、未構嶺上之用、非公家修理之色、盍施松門補綴之媒、仍以牽牒如件、乞衙察狀、上自長官、下及掌國、分彼隨目之俸、備此不日之功、然則三穗之禾、定入府君之夢、兩岐之麥、必播州民歌、以牒、

天曆四年四月十一日

〔爲房卿記〕應德二年七月十日壬寅、延曆寺講堂、今日上棟、（依傾危、座主被改造、）

〔弘安八年大講堂供養記〕大講堂供養（弘安八年七月廿一日）

先前日、勅使參堂、調諸事、堂莊嚴、衆僧座、樂器道具以下悉可具之、○中略　去文永之曆、不圖有災孽、治山之仁、奉叡旨以企土木、

〔公卿補任　明正〕寬永十三年八月十六日、山門大講堂始木作地、曳礎地鎭日時定、（風記）上卿中院大納

言、辨奉行共綱朝臣、同日山門文殊樓地曳礎立柱日時定、(風記)上卿中院大納言、辨奉行共綱、

〔近江國輿地志略(志賀郡二十二)〕大講堂　中堂の未申、中堂より十四五間許、岸七八間程上也、桁ゆき京間十七間五寸、梁行京間十間四尺、軒の高さ、自地六間三尺五寸、

鐘臺

〔山門堂舍記〕鐘臺

葺檜皮二間鐘臺一宇、鑄銅鐘一口、(高八尺、口四尺五寸、)　弘仁九年、傳敎大師鑄鐘建堂、天長四年、別當內供奉光定奉制鑄鐘、前丹波守從五位下淨野朝臣夏野作鐘銘、太上天皇振宸筆書之、

〔近江國輿地志略(志賀郡二十三)〕鐘撞堂　大講堂の前左の方にあり、梁ゆき京間二間一尺六寸、桁行京間二間五尺六寸五分、軒高自地三間一尺三寸、弘仁年中、釋最澄欲鑄鐘、文曰、弘仁十年、龍集己亥夏四月、於比叡山鑄息苦鐘於禪院云々、

戒壇院

〔叡岳要記上〕戒壇院

葺檜皮方五間戒壇堂一宇　堂上有金銅覆鉢、鉢上有寶形、　壇一基、(高六尺七寸、長二丈八尺、廣二丈、)　像壇板敷(長三丈二尺、廣三尺、)　安置金色釋迦牟尼佛坐像一體(居高三尺)　綵色比丘像文殊彌勒菩薩各一體(居高二尺五寸)〇中略　右院依太政官去天長四年五月二日下近江國符旨、所創建立也、　天長四年夏、公家詔所司、

〔元亨釋書(一傳智)〕釋最澄、世姓三津氏、近州滋賀郡人也、〇中略　弘仁十年三月、奏乞建圓宗大乘戒壇、其條四科、帝降表南京諸寺、詳定建否、沙門護命抗表斥之、東大寺景深、著迷方示正論、摘二十八失、平城諸刹、毀唇紛羅、十有一年春二月、澄述顯戒論三卷表進、博引大乘戒證、又作顯戒緣起、反詰二十八失、其詞激切著明、上又降其書於南寺、南寺諸師、無敢聞議者、

〔近江國輿地志略(志賀郡二十三)〕戒壇堂　講堂より二十間ほど岸、五六間ほど上にこれあり、

〔按ズルニ、當寺戒壇建立ノ事、亦戒律篇ニ載セタリ、

定心院

〈續日本後紀 十六仁明〉承和十三年八月丙戌、勅曰、珠宮瓊室、帝王之都、未出塵籠、紫府丹臺、神仙之窟、終营燬宅、居之鞅掌、於龍圖、栖之辛勤、於鶴背、道之因、異之俘、可以出、可以去、朕翹誠道素、住思眞玄、已因少日之久情、更從中年之篤志、聞達士口、謀傳法之由、案名山記、覓建祠之處、於是遇彼幽爽、副斯勤求、高岑東峙、晉闢山之形勝匪殊、懸途西通、王舍城之風煙相接、此則天台之上界、鍛地之道場也、松柏數步隔墻、雲霞一色連院、經行同徑、豐嗽共泉、德也不孤、歸斯降之有仁、道之將開、遇此山之無主、爰錐爰薙、乃正乃平、役人於喻高、勸之則如來之力、伐木於幽邃、運之則菩提之功、不日而成、直在茲乎、爾乃土木之細工終焉、金檀之晬容畢矣、所配之人、禪定之十仙、所行之道、般若之一乘、專息境幽、三業之言行律全、地高風動、六時之鐘梵聲遠、夫利己者、利他之根、自邇者及遠之本、近則上護國家、下覆人民、比常樂之樂那、等壽仙之壽土、遠則廟主宗靈、有識無識、三惡趣、一闡提、共始于因、同終于果、嗟呼不誣者也、實語者也、朕此心誓必不唐捐、其寺家流例、檀施色目、別有勅旨、下於所司、唯記來由、貽之于後、先是天皇建定。心。院。於延暦寺、故今日有此勅、

總持院

〈山門堂舍記〉總持院在戒壇院西道上、或名法華佛頂總持院、檜皮多寶塔一基、安置胎藏五佛、同五間堂一字、灌頂堂也、塔東、安置胎藏金剛曼茶羅一鋪、同方五間堂一字、眞言堂也、塔東、安置熾盛光大曼茶羅一鋪、同三間昇廊東西各一字、同廻廊、舞臺一基、在塔前、同五間門樓一字、有左右橋、同三間近廊左右各一字、同七間灌頂阿闍梨房一字、　文德天皇御願、始自仁壽三年、至貞觀四年、十箇年所造立也、

天台法花院總攝六大寶塔院、

安東上野寶塔院、在上野國綠野郡、安南豐前寶塔院、在同國宇佐郡、安西筑前寶塔院、在同國□郡、安北下野寶塔院、在同國□郡、

安中山城寶塔院、　安近江寶塔院、已上兩寶塔院、在比叡峯、

〈三代實錄 八清和〉貞觀六年正月十四日辛丑、延暦寺座主傳燈大法師位圓仁卒、○中略三年○嘉祥三月、天

皇（明○仁）崩、四月皇太子（德○文）即皇帝位、圓仁上奏言、除災致福、熾盛光華佛頂是爲最勝、是故唐朝内道場中、恒修此法、爲鎭國基、街西街東諸内供奉持念僧等互相爲番、奉祈寶祚、今須建立持念道場護摩壇、奉爲陛下、應修其法、唐國街東青龍寺裏、亦建立皇帝本命道場、令勤修眞言秘法、詔曰、朕特發心願、於彼峯建立總持院、興隆佛法、於是勅總寺院安置十四僧、永令修法、

四王院

〔享祿本類聚三代格二〕太政官宣（符○宣恐誤）

應令勤修御願延暦寺諸院禪師等事

右右大臣宣、定心、總持四王三箇院、是代代聖朝深發御願所建立也、安置禪師、每院備員、誦經念佛、日料有限、今聞件等禪師、或任他寺、晴送寒數、或頻稱故障、恣出山門、既乖先帝之御願、却失禪定之道心、宜仰彼寺、令勤修之、

貞觀十四年十一月一日

文殊樓

〔山門堂舍記〕文殊樓院

葺檜皮五間二重樓一基（高五丈三尺、廣五丈三寸、臈三丈八尺、）安置正體文殊座像一體（高四尺八寸）乘化現文殊師子像一頭（高八尺）脇侍文殊立像四體（高五尺三寸）侍者化現文殊童子立像一體（高五尺二寸）師子御者化現文殊丈夫像一體（高五尺二寸）

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

應以延暦寺文殊影嚮樓爲奉護聖朝處事

五間樓一基（高五丈三尺、廣五丈三尺、縱三丈八尺）

正體文殊坐像一軀（高四尺八寸）乘化現文殊師子立像一頭（高八尺）脇侍文殊立像四軀（高各五尺三寸）侍者化現文殊童子立像一軀（高五尺三寸）師子御者化現文殊丈夫（○丈夫二本作大士）立像一軀（高五尺三寸）

右、〇中略慈覺大師入唐求法之日、巡禮臺山之時、感逢文殊化現師子座燈圓光、緣此大聖之感應、遂其求法之大事、欲使彼大聖之應化感來於本朝鎭護國家、利益黎元、祈乞五臺現化之處、掘取五峯淸淨之地土、經歷一紀而載持、跋涉萬里以將來、埋置五方之壇下、構造二重之高樓、〇中略望請、件樓永進公家、特蒙官符、以爲護王之處、〇中略伏請處分者、右大臣宣、告曉寺家俾允本願、

貞觀十八年六月十五日（又見三代實錄）

〔近江國輿地志略二十二志賀郡〕文殊樓　中堂の三十四五間許東、高八間許き地にあり、石段を上る、慈覺大師の本願、文殊の像を安置す、每年四月八日、參詣の諸人、樓の上に登る事を許す、〇下略

前唐院

〔叡岳要記上〕前唐院

葺檜皮五間三面屋一宇　安置慈覺大師新從唐所渡眞言秘敎曼荼羅道具幷天台敎迹戒律坐禪諸宗章疏、傳敎大師等影、（具載道具目錄）及慈覺大師眞影座像、

右院大師平生禪房也、貞觀六年正月十四日、夜半入滅、七十一、依十三日顧命法文道具寄狀、貞觀六年正月十三日奏狀了、所求眞言道具等納總持院、付法弟子安惠大法師爲院撿挍、令撿知者、同年同月十五日宣下、納置總持院、不可疎略之由也、同十一年五月一日撿封宣下、當時座主幷遍照、慈叡、承雲、性海等五人也、

觀音院

〔扶桑略記二十七華山〕永觀三年〇寬和元年二月廿二日、皇太后昌子內親王、天台山脚建立精舍、號觀音院、此院之裏、有六箇堂、其一曰講堂、卽奉安置金色六觀音像、爲引攝六道衆生也、復有六天集、令護持佛法故也、其二曰五大堂、安置五大尊像、其三曰灌頂堂、夫灌頂者、大悲之水灌頂、妙覺之月圓光、遍十方而利生、亘三世而濟物、其四曰法華堂、新安普賢像、長轉法華經、一生有限、百齡難期、是以今構一乘堂、長勤三昧講、其五曰阿彌陀院堂、卽安尊像、專爲先慈、其六曰眞言堂、安置兩部曼陀羅、先陵〇朱雀先妣〇黑子外舅無遺體之靈、妾獨不忘報恩之心、訪泉聲兮和雲色、所延者比丘之一百餘、弄洞簫兮點嶺松、所供

者滿山之三千羂、(巳上)

實相院

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕康平六年十月廿九日丁酉、公家勅、於天台山延暦寺內、建立精舍、號實相院、三間四面、檜皮葺堂、奉安置金色半丈六藥師如來、同等身如意輪觀世音菩薩、同文殊師利菩薩像各一軀、又一間四面、三昧堂一宇、安置七寶塔婆一基、中奉納金泥妙法華經一部、便擇羅宿之日時、敬就密教而供養、始從今日、修法華三昧、難解難入之敎、長持牟尼之先言、半行半坐之勤、遙期慈尊之三會、是則爲滅罪生善也、

山王院

〔叡岳要記 上〕山王院(在總持院西方東塔西谷)

葺檜皮五間堂一宇　山王院勸請、智證大師御作之神體也、　安置千手觀音像一軀　聖觀音像一體

養老六年壬戌正月、稽首勵、造千手觀音像、即天平寶字元年丁酉十二月十八日、此像上登飛天、丑寅方高峯落雷、天皇遣勅使丑寅高峯、此佛像、木本安座、雖欲奉取此佛像、敢不動、勅使御力不及、空歸奏、此旨天皇聞食、於自今已後、不可奉取之由、被宣下畢、延暦四年、最澄阿闍梨、登叡岳、剋結草庵、安置此千手觀音像、其後宣下、號山王院、(巳上叡岳記)

〔朝野群載 十七 佛事〕山王院千手堂住僧等解謹言

請殊蒙十方施主恩改造三間四面檜皮葺堂一宇狀

右謹尋舊事、昔江州有一老嫗、常發願云、我奉造千手觀音、欲救一切群類、仰願大悲、應此深誓、示教料木之瑞、爰北山之底、有放光樹、即致其山尋得其木、蓋一老檜矣、遂伐彼孤株、擬造此靈像、老顏居士忽來云、我是造佛之匠也、是成汝願、將遂我誓、嫗歡喜踊躍、彌盡丹心、成功不日、得遂念願、居士即求勝地於叡山、構堂宇於絕頂、以彼丹青之像、安此靈巖之峯、然後居士秘却、宛如化人、是應老嫗之精誠、垂觀音之權化者也、智證大師入唐求法、歸朝之後、於此堂被修灌頂之事、自爾以始稱山王院千手堂、然則

件堂、是神仙之所草創、佛法之所流轉也、建立以後、年歲稍遷、破壞良甚、雲楣朽乎、鷄鵡之翅不驚、石梁傾今鴛鴦之瓦早落、春風吹花之朝、千手拂雪、秋霖灑葉之暮、雙眼流紅、等曜麝跡於青巖之頭、雖成三歸之觀、埋身於白雲之底、猶失一鉢之計、剏於此營作、由起千手、非蒙十方施主、何遂數年之願、夫細霤滴而穿石、輕塵積而成山、漸靡之使然、於是而可知、伏願道俗尊卑、男女老少、不輕一錢、不隨一粒、隨力隨分、捨之施之、非啻滿造一堂之願、斯乃殖作衆善之因、不勝鎮國利化之念、敢以奉唱如件、謹言、

法華三昧院

〔叡岳要記上〕法華三昧院（在止觀院西塚上、亦名半行半座三昧院堂、今云法華堂、）

葺檜皮方五間、半行半座三昧堂一字、（中略）○　堂上有銅如意珠形、堂內金銅多寶塔一基（高三尺）　安置多寶佛像一體妙法蓮華經一部、

大師（最澄）○　別願建此堂、弘仁之初、擇口其地未得勝形、每夜聞有誦法華經安樂行品音、大師竪耳聽之、此聲於止觀院西塚林中、驚怖以尋之、有聲無人、如茲數日矣、大師以爲、一宗法音自然依不退轉輪之場者、去此何求乎、卽平治此地、營造法華堂、地土之中有一髑髏、白骨赤舌、大師異之、瘞于堂傍、弘仁二年初秋七月上旬、土木之功甫就、移行法華長講、嘉祥元年春、慈覺大師傳半行半座三昧、行法華、每四季終期三七日、建普賢道場、懺悔六根罪障、永期未來際、修法華三昧、爾來數百歲、酌遺流而不絕矣、

常行三昧堂

〔叡岳要記上〕常行三昧堂（亦名般舟三昧院、在講堂北、今云常行堂也、）

葺檜皮五間堂一字（在四種庄）　堂上有金銅如意寶珠形、四方列圖九品淨土幷大師等影像、

安置金色阿彌陀佛坐像一軀、同四柱菩薩像一軀、或記云、胎藏彌陀五佛像、依相應和尙勸進、東大寺會理阿闍梨所造、本在虛空藏尾、元慶七年、相應和尙依慈覺大師遺命、移此地畢云々、

右堂、四種三昧令傳敎大師弘仁九年七月廿七日分諸弟子、配四種三昧、令慈覺大師便始常坐三昧堂、同年九月土木功畢、自入三昧、六年修行大師（圓仁）○　承和五年入唐、同十五年歸山、新建立常行三昧堂、仁壽元年移五臺山念佛三昧之法、傳授諸弟子等、永期未來際、始修彌陀念佛、貞觀六年正月十四

無動寺

日、于時慈覺大師遷化、七十七年八月十一日、相應和尚、依大師遺言、始修本願不斷念佛之軌迹矣、大哉、昔斯那國法道和尚入定、現身、往極樂國、親聞水鳥樹林念佛之聲、出定以傳彼法音、流布五臺山、大師入唐求法之時、登五臺山、一夏之間、學其音曲、又傳敎師資之所承、不可軌口置者也、

〔明匠略傳〕一天台南山無動寺建立和尚諱相應（中略）同五年（貞觀）於佛師仁算、令造等身不動像、相好圓滿、靈驗日新、同七年、造一伽藍、安置此明王、號無動寺、

〔天台南山無動寺建立和尚傳〕貞觀五年、奉造等身不動明王像、而曰、佛工未必得其人、相好頗不端嚴、欲取他材改造、夢明王告云、不可更用他材、吾賜好工、須令修造、其後不期之外、得佛工仁算、依夢想即令造修、初像相好圓滿、靈驗日新、同七年、造立佛堂、安置此明王於中臺、爲一伽藍、號無動寺、（中略）同（元慶）六年壬寅、依堀河太政大臣（藤原基經）奏、下官符、以無動寺爲天台別院、

〔帝王編年記十四清和〕貞觀九年九月三日、無動寺供養、天皇御願、檀主相應和尚、呪願圓珍和尚（智證大師）導師座主安惠和尚、（慈覺大師弟子、號金輪院座主、延）

淨土院

〔山門堂舍記〕淨土院

葺檜皮方丈廟堂一宇、（四面有孫庇）葺板三間淨土堂一宇、葺板五間禮拜堂一宇、葺板五間一面雜舍一宇、傳敎大師所定置矣、弘仁十三年六月四日辰剋、大師於中道院（東坂本生源寺）遷化之後、以其遺體埋彼廟堂、齊衡元年七月十六日、慈覺大師（于時座主）移大唐五臺山竹林寺之風、始修淨土院廟供、以寄瓜爲供具、

釋迦堂

〔叡岳要記下〕釋迦堂

奉安置半金色尺迦佛像一軀（居高三尺、根本大師木願、）蓮華座（採色）舊座依破壞、以延喜年中被改造、（第七座主猷憲）天蓋一具、（採色）在中處、鏡一面、徑一尺、懸尺迦御頂、（延喜年中、平鎌法師所造）金色普賢文殊各一體（仁和年中所造、故明琳法師願、）採色梵天帝尺各一體（五尺、延喜年中、仁意法師所造、）採色四天王各一體（七尺、延喜年中、淸和第十宮願、）木像文殊

一體（天慶年中）

四品貞頼親王家

奉施近江國蒲生郡津田庄一處

右撿案內、延曆寺西塔院四王像者、是依家願昔日奉造所安置也、年來以件庄地子稻、便宛燈分、仍今副彼券文、永年施入既訖、雖物輕於飛塵、而志重於華岳、以天王之擁護、爲地主之善緣、敬白、

延喜十二年六月五日　　從代丈部與信（○與信、一本作信與、）

扶葛井安常　別當前豐前守大神朝臣　御監蔭孫程

解狀云、傳敎大師、初建立東塔法華三昧堂、置六人之修侶、宛十二時令修三昧、卽延秀其一也、而第一三昧法常綜別、爰大師依別行令造他所、其後圓澄大法師受大師之付屬、就西塔院將建立尺迦堂、延秀誤居大師點定之中心之地、於是圓澄大法師令破其草庵、初建立釋迦堂、于時延秀移住堂於東地、今之一心房是也、而其延秀建立之主、更无所見者、伏撿案內、延秀住持之志抽衆、中心之誠勝倫、因玆大師初則任法華三昧別當、後則付西塔點地、便後構屋安佛像（今政所是也、）厥後更擇北地造立小堂、後點南庭移置佛像、（則尺迦堂是也、）歷年之後、依夢中告、忽點尺迦堂東地、更建立奇宿草庵、然則延秀本自不住中心、圓澄何爲令破壞草庵哉、

法花堂

〔叡岳要記　下〕法花堂

天長二年十一月三日、寂光大師延秀幷建立、

常行堂

〔叡岳要記　下〕常行堂

安置阿彌陀像、　寬平五年、靜觀僧正願作大威德建立、

相輪塔

〔叡岳要記　下〕相輪塔

高四丈五尺、傳敎大師建立、銘文大師撰、（委在別紙、）　山中記云、弘仁十一年九月、傳敎大師建相輪塔云々、

〔四大寺傳記延暦寺〕相輪塔　傳教大師、弘仁十一年、始建立云々、高四丈五尺

三寶住持集山家御尺云、寶幢一基、高四丈五尺、別有圖形、頂上有金銅相輪橖、　右相輪橖、高三尺三寸、有九層、形似盤、最上層徑八寸、最下層徑一尺六寸、最下層、懸十一寶鐸、毎層有十一金鐸、形如偈呂子、　毎銅納摺本無垢淨光等眞言、幢頂上輪橖下、置金銅桶一口、高一尺四寸、　桶裏打著造橖銘文、并寫經眞言等、結緣名字、

奉納諸經目錄

妙法蓮華經二部十六卷　毘盧遮那經一部七卷　密嚴經一部三卷　福德三昧經一部三卷　金光明經一部四卷　文殊所說經一部二卷　首楞嚴經一部三卷　般舟三昧經一部三卷　諸法無行經一部二卷　梵網經一部二卷　無量義經二卷　諸觀音經一卷　普賢經二卷　圓覺修多羅了義經一卷　寶篋經一卷　不必定食經一卷　無垢淨光陀羅尼經一卷　佛頂尊勝陀羅尼經一卷　梵漢兩字大佛頂眞言一卷　梵漢兩字隨求眞言一卷　大方等不增不減經一卷　大乘法界無差別經一卷　以上都合五十八卷皆長五寸、金銅軸、金字外題、紺表紙、

弘仁十一年歲次庚子九月十五日嵯峨天皇御子

沙門　最澄記私云、大師時五十四歲、〇中略

右寶幢院、亦名法華延命寶幢院、十六院之一、

有寶幢壹基、高四丈五尺、頂上有金銀相輪橖、故亦曰相輪橖、山城以西三道、并北陸諸州結緣幢、令建山城比叡峯、西塔院北邊、名曰淨菩提心、無垢光摩尼幢、相輪橖、亦曰法華延命、寶幢橖、其峯曰中道山頂、我等歸依、高峯觀示三摩耶、爲樂無相一乘、法性萬行、建六處之中、斯一處之幢、皆願報四恩德、歸同體源、大法東流以降、希有難得之福助也、彌勒出世、伽聖王建大法幢、此寶幢至彼世不壞滅文、　此橖秘決等、如口決抄、

上宮太子記云、推古天皇御宇、聖德太子、幸於帝良鄉、親見四方、中央現王氣、東岳現寶幢、今在二百餘歲、有一聖皇、開萬乘道、有一法師、弘一味敎、已上　口決云、中央王氣者、蓋雲也、東岳寶幢者、今相輪橖是也、

天子所居、必天蓋雲有之、是其表示也、諸佛說法處、必寶幢現、今寶幢檨是也、彼靈地者、釋尊三世常住轉法輪處也、故以釋迦堂號轉法輪堂、今相輪檨、釋尊成道金剛座也、金剛座上、立相輪檨、此則寶幢所現處也、口傳云々、此相輪檨、姿非堂非塔、是依無垢淨光陀羅尼經說、起立之、

〔日光雜話〕叡嶺相輪檨銘、　三鈷一叶高二間二尺、地盤より寶珠迄、

沙門最澄　撰

葦芽開廓　天主下生　短歌長歌　未防魔兵　第三十王（欽明天皇）　初開梵義　沈像燒舍　法鼓未鳴
（上宮太子）聽耳立憲　乃信三明　使歸南嶽　請經野卿　因果冷然　開悟群盲　時機未熟　淘汰五驚
天王出家　感得天平　受菩薩戒　四軍奮々　海內諸州　制底縱橫（塔之梵語）　雖敷法筵　未遣五塵
豈若先帝　憑天台評　新立圓宗　永塡火坑　年々兩度　紹隆妙行　爲悅冥道　起斯輪樸
叡嶺秀發　朝影北都　神岳嵯峨　夕臨東湖　山王一等　思存給孤　法宿爲鬼　開顯毘盧
亦塔亦幢　延壽安身　惟經惟呪　護國濟人　金剎放光　汲引迷津　寶鐸流聲　發開龍神
我等發願　渴仰文殊　十生出現　普施髻珠　信謗兩友　俱會四衢　同乘寶車　恒遊寂區
長講妙法　鎮轉妙輪　五忍恒說　永息魔障　生界未盡　此願不泯　成住壞空　不散此塵

弘仁十一年歲次庚子九月中旬

〔近江國輿地志略二十五志賀郡〕相輪檨　釋迦堂の北西にあり、寶幢一基、四丈五尺、○中略貞觀二年八月二十七日、改立幢、緣起曰、惟相輪檨、建立以來四十一年、其中間、改換男柱一度、方今輪檨朽損、基構傾斜、因茲供奉大法師惠亮、作備件檨、諮聞太政閣下、傳奏貞觀皇帝、既訖、右大臣正二位藤原朝臣良相奉勅、與太政大臣從一位藤原朝臣良房、爲莊先師之大願、賜金銅幷妙工等、巡治輪檨、新鑄造男柱頭銅相輪、無垢淨光陀羅尼八百七十一卷、佛頂尊勝陀羅尼四十二本、安置檨中、以貞觀二年歲次庚辰八月二十七日、修理建立、散位從七位高向彌高散位從五位下高向朝臣公輔、大炊頭從五位下丸子、木工權允從六位上志紀縣主貞成、嚴造妙工左兵衞小屬、○中略聖記曰、相輪檨を拜見するに、この塔婆

首楞嚴院

惠心院

は、常の塔にはかわりたり、これは天竺の靈鷲山、漢土の天台山、我朝にはこの山、三國に一基づならでは、なき塔婆なり、これ三國ともに法華一塔の、說法の砌ならではなき塔婆なり、

〔山門堂舍記〕首楞嚴院（俗曰二横川一、在二大寺北一、相去八九里、）

根本觀音堂（在二砂碓堂西一）嘉祥元年九月建立矣、

〔叡岳要記 下〕首楞嚴院（慈覺大師建立）

檜皮七間堂一字　安二置聖觀音像、毘沙門天像（左脇）、不動尊像（右脇）、（各等身）

右慈覺大師入唐求法之後、解纜浮船之間、忽遇二大風一、難レ沒二南海一、念二彼觀音力一、現二毘沙門身一、卽便圖二畫彼像一、風晴波平、須臾著二彼岸一、歸山之後建二立一字一、安二置觀音毘沙門像一、依二海上願一、所レ被二果遂一也、○中略

天延三年正月一日、慈惠大師改二造横川中堂一、奉レ造二等身不動明王像一、設二大會一奉二開眼供養一、導師增恒阿闍梨、佛師明定云々、飯室不動上堂不動同明定所レ建也、自二天長六年一至二天延三一、都一百四十六年、

横川中堂

仁安四年二月五日壬辰、戌時、今夜天台楞嚴院燒亡靈佛等取出畢、同月十四日宣旨云、社寺炎上猶驚思食、石淸水、賀茂下上、松尾、平野、祇園、住吉、廣田、梅宮、北野、尾張熱田、出雲大社、宇佐、香椎宮、栖霞寺、法輪寺、各愼二其災一致二祈請一、宜レ令二社司堂衆守護一者、依二大神宮幷當堂炎上一、被レ下二此宣旨一、同年三月十三日、大慶、嘉應元年十月十三日造畢、奉レ渡二本尊一、一向自二院廳一有二其沙汰一、嘉應二年二月十日宣旨云、可レ令二左兵衛尉藤原行貞募二左右衛門尉功一、進二納横川中堂金堂用途料一、准二絹四萬二千八百十五疋一者、

〔山槐記〕安元元年九月十二日庚寅、自二亥終剋一至二丑終剋一大風、京中舍屋無二一全一、後聞、横河根本榾、爲二大風一所二吹倒一、或山僧云、慈覺大師滿二四十年一、幽落死相相現給、仍遷二東塔一、飛二寂寞之地一、至二于此所一、件地爲レ體、向在二三尾一、彼中尾上有二龍穴一、彼穴上被レ建二立横河之中堂一、謂二之三結業一、

〔叡岳要記 下〕惠心院（在二楞嚴三昧院南一）

法興院入道太政大臣(〇藤原兼家)建立也　葺檜皮五間四面堂一宇(在南孫庇)　安置金色大日如來像一軀
永觀元年十一月廿七日戊寅供養會　導師大僧都餘慶　呪願少僧都陽主(〇中略)　冷泉院御諷誦使左近衞少將道綱、
僧侶前辨備饗膳、丞相(〇藤原頼忠)把盃勸大僧正、權中納言顯光取瓶子隨之、大僧正受之、擬權中納言(〇言下恐脫丞相二字)執之又勸權僧正、僧俗相交巡行不定、須臾大僧正又執盃勸丞相、丞相取之、起座、進擬權僧正、是又希有事也云々、

一山中抄云、天元二年、入道大相國繼先公之舊意、崇大師之德行、詣楞嚴院建惠心院云々、

〔慈慧大僧正傳〕故入道大相國尊閣、繼先公之舊意、崇和尚之德行、詣楞嚴院、草創伽藍、號曰惠心院、以爲御願所、

〔山門堂舍記〕一慈惠堂　□□□□□(立二間、四面庇、二面孫庇、)
右具如御遺言帳(具行略之)
一御廟　慈惠大師御廟也、天祿三年五月三日、御遺言、

〔近江國輿地志略二十六志賀郡〕慈惠大師堂　橫川中堂より北に當て、二町餘にあり、世に橫川の元三大師といふは是なり、〇中略この處の繪像、時ありて飯堂に下ります事あり、其時は參詣の人かならず飯室に詣す、

〔壒嚢抄十〕慈惠大師ノ影像ヲ、所々ノ民屋ニ押スハ何故ゾ、
是彼ノ僧正ノ誓也ト云々、良源ハ、日天子ノ垂跡也、或時鏡ヲ以テ容ヲ寫シテ誓テ云、我ガ影像ヲ置カン所ニハ、必ズ邪魅災難ヲ拂ハント云々、又殊ニ疫公ヲ防グ事ヲ誓給、或夜、疫神參テ申テ云ク、師將ニ其厄ニ當リ給ヘリ、乍恐尊體ヲ侵シ奉ント、僧正唯圓敎故、逆卽是順トノ給テ、試ニ左ノ小指ニ移シ給ニ、忽ニ苦痛遍身ニ滿ツ、其時圓融ノ三諦ヲ觀テ彈指シ玉ニ、鬼病速ニ去

飯室
本尊

テ苦惱忽ニ止ム、僧正ノ給ク、大苦ノ病也、一指猶如此、何ニ況ヤ全身ヲヤ、是ヨリ特ニ彼病ヲ拂ハント誓願シ給、サレバ横川ノ法華堂衆敢テ此病ヲ不病、若シ此病ヲ受ルハ、則御廟ノ御罰也、仍テ必ズ死ス、曾テ助カル者ナシト云々此等ノ故ニ、印摸ヲ成テ、爭ソヒ粘スト云々、

〔遠碧軒記　四〕叡山、元三大師の像は、勅封なり、古例にて、極月の末に、毎年上京、般舟院へ持參して、正月三ケ日は、般舟院におき、正月四日に、般舟院の僧、禁中へ持參して、勅封をあらたむる事なり、元三大師は繪像なり、

〔拾芥抄　下本諸寺〕飯室〈中納言義懷居、尋禪僧正、〉

〔榮花物語　二花山〕中納言〈○藤原義懷〉なども、御とのゐがちにつかうまつり給程に、寛和二年六月廿二日の夜、にはかにうせさせ給ひぬとの、しる、〈○中略〉なつの夜も、はかなくあけて、中納言や、惟成の辨など、花山にたづねまいりにけり、そこにめもつゞらかなる小法師にて、ついゐさせ給へるものか、あなかなしや、いみじやと、そこにふしまろびて、中納言も法師になり給ぬ、これえげの辨もなり給ぬ、〈○中略〉さても中納言も、そひたてまつり給はず、飯室といふ所に、やがてこもりゐ給ぬ、惟成入道は、ひじりよりも、げにめでたくをこなひてあり、

〔堯恕法親王記　七〕寛文九年閏十月十八日、今日、根本中堂遷座也、〈○中略〉申剋計、往青蓮院宮宿坊、〈興持〉勝也、言談云、先刻會行事〈後略〉承中云、中堂本尊藥師如來ノ像、大衆等拜見所望之事候、大衆等之中、半ハ秘佛たるの間不可拜見云々、衆議未決定候云々、予云、此儀以外之事候、根本中堂本尊、古來爲秘佛、所不拜見也、先年〈寛永十七年度〉遷座之時も、大衆拜見無之、其外舊例曾以無之ところ也、不可叶之由、急度從座主大衆へ可有下知乎云々、于時從座主以會行事大衆中へ被下知右之旨畢、仍テ大衆無力不及拜見沙汰也、酉上剋、〈○中略〉貫首下輿後、前行ノ松明〈行経ノ中、青侍所衆者也、〉布衣二人秉之、伴僧參向、〈寺家前行〉各列立階下、〈井之房〉〈但衆親最順等ハ行歩不叶之間、暫隱ニ但宜所、〉貫首及出仕、各平伏、貫首上堂著座、伴僧上堂著座、次引導二人、灑淨師〈寛屋、堅者〉參

本願院、次遷幸、第一藥師、第二多聞天、第三大師也、○中略遷幸ノ時、堂內堂外悉撤松明燒等、但常燈而已有之、次御輿入中門之時、貫首率伴僧參向、於階下有拜、伴僧平伏、次貫首先御輿入堂、伴僧從三輿御後上堂、第三之御輿進階之時、始四智讚、鐃一匝、一貫首入內陣、直ニ登寶殿、役者兩人從之、寶乘院、教王房、次藥師御輿、遶壇一匝、次昇寶殿、次若大衆、加輿丁松明等也、退散、次外陣著座、讚ヲ始、一反、鐃一匝、此間奉安置御本尊、次諸天讚、前後一返、勸請段三反、敍三段、

一多聞天、大師像ハ預雖移之、假ニ有御輿化儀、仍テ本壇ノ遷座事畢テ後、貫首ヘ於兩宮殿ノ前假遷座ノ化儀計有之、次貫首登禮盤、次云何唄、此間賦花籠、若大衆役之、次散花、藥師散花、次對揚、散花對揚畢也、次貫首法則、次供養文唱禮、次驚覺、次九方便、次發願、伴僧取次第、次五大願、次助呪、藥師呪伴僧亂聲、次護摩師夜叉供師入內陣、神供ハ於會奉行中役之、次甲四智、次後鈴、後廻向方便、次隨方廻向、次貫首下座、出外陣著座、次貫首出堂、伴僧平伏、次伴僧出堂、

宗派

〔拾芥抄 下本諸宗〕比叡山、天台爲宗、　又眞言爲宗、又律宗、受戒是也、

〔雍州府志 四寺院〕延曆寺　古凡有三千坊、而有惠心院源信、檀那院覺運之兩法流、第二世義眞、第三世慈覺此時兼學密宗、自玆後法流有數派、所謂法滿院流、利生院流、三昧院流等是也、

寺領

〔叡岳要記 上〕左辨官下　圓融院御時　近江國

應延曆寺代々御願堂塔、造作修理間、免除東坂本幷三津濱、苗鹿村住人、臨時雜役事、

天元二年八月廿八日、下宣旨、

國符　滋賀郡

可免除天台山東坂本、三津苗鹿住人臨時雜役事、

天元六年九月廿五日、國符、

〔玉海〕建久二年四月六日癸未、午剋、延曆寺所司三綱日吉社宮司等參來、家司右衞門權佐長房謁之、

三綱申云、大衆云、近江國佐々木庄者、當寺千僧供庄也、而依若干之未濟、遣宮仕法師等頗以催責、然間、自放火於宅、宮仕等打滅之、猶付之遂以燒失了、宮仕等欲退歸之處、引三方橋不使人通、一方有路僅逃去、于時數十騎軍兵出來及傷殺害、被疵之者大多、終命之者兩三、事之奇異、先代未聞、依山門之訴、及朝家之大事、先例雖多、未曾有如此之例、只引破神人之黃衣、若伐社領之樹木等之類、猶以罪及月卿、未宥霜刑、至于今度之事、已絕常篇、仍賜貞綱〇佐々木定綱井子息等於衆徒之中、於七社之寶前可聞子細、〇中略抑來十九日日吉祭也、然而依此事可延引其祭之由、同大衆所申也者、已上所司三綱申狀此上副奏狀一通、余披見之後、余答云、如聞者、貞綱濫行、不能左右、達天聽者、定有科斷歟、法皇還御以前、私不能成敗、南山關東之使者尤可然、隨又還幸在近、可相待成敗歟、

〔近江國輿地志略二十一志賀郡〕延曆寺　今寺領五千石あり、內千五百石は上坂本、七十三石は葛川、合て千五百七十三石は豐臣秀吉公の御寄附、下坂本三千四百二十七石は、東照大神君の御寄附也、東塔四十六坊無動寺谷十三坊、西塔三十一坊、橫川十四坊、飯室谷五坊、合百九坊、坊領每坊に二十五石ヅヽ、其中東塔正覺院、南光院各百石、西塔正觀院、橫川惠心院、各五十石を領す、山門執行代といふものあり、三塔各一院掌之、中座役と云者四人あり、僧にあらず、公人といふものあり、是亦僧にあらず、聚斂を掌役なり、中衆といふあり、山上の中衆は、山下の中衆より格よし、古昔辨慶も、山上の中衆なりしと云、〇中略古昔は寺領六万石とはいへども、當時五千石あり、

〔滋賀院文書〕就比叡山延曆寺再興之儀、爲三塔寺領、以三井寺分貳千石、於大津雖宛行、依望之、上坂本千五百石、葛川之內坊村七拾參石、都合千五百七拾三石事、以撿地之上、永代令寄附之訖、全可有領知、猶施藥院可申渡候也、

慶長元年〇此四字假二追書一　十二月三日　秀吉花押

山門三院執行代

用途

〔慶長記〕慶長七年九月、秀忠卿伏見より江戸へ御還り被成、春秋寺領三千石を山門へ御寄進あり、

〔御當家令條六〕比叡山延暦寺、近江國志賀郡之内所々、都合五千石別紙目録有之事、永代令寄附訖、全可被寺務之状如件、

慶長十三年七月十七日　家康公御判

山門三院執行代

〔寺格帳上天台宗〕高百石山門御朱印高五千石之内學頭料　配當　山門東塔學頭　正覺院　大僧正迄昇進

右同斷高五拾石　配當　同西塔學頭　正觀院　大僧正迄昇進

右同斷高五拾石　配當　山門横川學頭　惠心院　大僧正迄昇進

右三箇院住職、從日光御門主被仰渡之、

〔雍州府志四寺院〕延暦寺　今代被再興寺門、坊舍今有百二十五宇、寺產五千石之内、東塔學頭正覺院領百石、西塔正觀院五十石、横川惠心院五十石、其餘每一院各領二十五石、

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻　近江國〇中略　延暦寺定心院料三萬束、西塔院料一萬五千束、〇中略　美濃國〇中略　延暦寺總持院料四萬束、同寺四王堂料四萬束、

〔延喜式二十三民部〕凡延暦寺從十二月廿三日迄正月十四日、合三七箇日修法料、白米一十斛、同寺定心院正月一七箇日修法料、白米九斗二升、糯米一斛七升、大小豆各七斗七升、胡麻子三斗八升五合、並十二月十日以前、試年分度者澄師幷使、從八月廿四日迄廿七日、合四箇日料、白米四斛七斗七升六合、七月卅日以前、同寺西塔院試年分度者澄師幷使、從三月廿三日迄廿五日、合三箇日料、白米八斗八升二合八勺、二月卅日以前、幷割近江國年料進官內、官長主當送彼寺、

凡延暦寺定心院十禪師、幷釋迦堂五僧料炭者、令近江國以徭丁燒備、每年起十一月一日迄來年二月卅日、計日人別充一斗、十月廿日以前總送寺家、

〔延喜式主稅二十六〕凡延暦寺燈分油一斛八升、同寺寶幢院燈油二斛六斗四升、僧供料黑米六十九斛一斗二升、隨自意三昧堂佛燈油五斗四升、僧供料白米卅六斛、楞嚴院燈油三斗六升、僧供料白米十四斛四斗、千光院燈油四斗五升、勸修寺五大堂燈油一石八升、供料白米卅三斛六斗、並近江國以正稅交易幷舂備、每年十月以前送納寺家、

凡延暦寺灌頂料白米五石、以近江國年料進官米之內充之、

凡修理延暦寺總持院料穀七百斛、令近江國每年出擧、以其息利、舂米運送彼院、其舂功運賃用同穀內、

〔叡山大師傳〕春三月十〇弘仁四年弘仁聖皇帝、聞功德之大事、傷先師之本願、勅施造塔料穀四萬勝、又夏六月、今帝贈先師忌日料調八百構、又供延暦寺燈料、凡諸弟子等、重蒙天恩、悲喜交集、不知所言、

〔日本紀略淳和〕天長八年四月丁丑、割近江國分寺供料、永充延暦寺僧廿四口之供養、天台之宗、年分度者、受戒之後、一十二年、不聽出山、四種三昧、令得修練之故也、

〔三代實錄清和七〕貞觀五年四月十一日癸卯、人康親王家田九十四町、在近江國愛智郡、爲傳法料、常康親王家田四百三十町、在同國高島郡、爲救急料、並施入延暦寺、詔付國司、永勿徵租、

〔三代實錄陽成三十三〕元慶二年五月十五日庚戌、勅令美濃國每年春送延暦寺四王堂佛僧供料息利稻穀白米十斛、黑米十斛、

〔三代實錄陽成三十九〕元慶五年三月十一日己未、勅、淸和院大浦庄墾田二十八町五段百八十九步、在近江國淺井郡、依院牒狀、永施捨延暦寺、文殊樓、七軀大聖文殊、幷五佛燃燈修理等料、浮囚浪人、同以寄充、宜令國司專當其事、

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年五月廿一日己亥、勅以近江國米百斛、施捨延暦寺、七月五日壬午、勅宛延暦寺西塔院釋迦佛堂長明燈油每日二合、但正月十四箇日、每日一升、僧五口供料、每日白米各四

寺職

升六合、割近江國正税稲、一萬五千束出擧、用其息利、若有未納、以正税稲充其供料、其燈油以米交易、歳初總送其用途并員數、副税帳言上、長官勾當、國司遞祇濟、自今以後、立爲恒式、先是院主傳燈大法師位延最奏言、故先師贈法印大和尚位最澄、創建此寺、鎭護國家、造藥師佛像、安置東塔院、造釋迦佛像安置西塔院、並充住持之主、仰爲傳法之本、毎日長講法華、仁王金光明等經、奉誓國主、廻向率土、次師座主傳燈大法師位圓澄、受先師之付屬、掌西塔之佛事、延最謬以非器、忝繼末塵、幸從聖主龍濟之時、特辱恩慈、賜令延侍、修構佛殿、得禦風雨、自非叡願、何能如此、伏望、置僧五人、晝即轉讀御願大般若經、夜則念誦釋迦佛名眞言、五僧衣供、准定心院、被官充補、以爲永例、至是許之、

〔日本紀略一醍醐〕延喜二年四月一日、太上法皇、登天台、供佛舍利會、引近江國滋賀郡勅旨田十町、以七町充會料、以三町充法華三昧料、

〔天台座主記〕第一義眞和尚私號修禪大師、治山十年、〇中略

弘仁十三年壬寅五月十五日、依大師付屬、總攝山中雜事、六月十一日、任大師奏狀、賜可傳菩薩大戒之官符、〇中略 天長元年甲辰六月廿二日、官符爲座主、年四十六 同十年癸丑七月四日、入滅、春秋五十五

第二圓澄和尚私號寂光大師、西塔建立主、治山三年、〇中略

光定和尚私號別當大師、〇中略

太政官牒 延暦寺

應以止觀眞言兼備者爲座主事

右右大臣宣、〇中略 如聞、山上僧等、專違先師之誓、互生偏執之心、殆以不顧、扇揚餘風、興隆舊業、凡厥師資之道、闕一不可、傳弘之勤事不兼備、自今已後、宜以通達兩業之人、處座主之位、爲恒例者、寺宜承知依宣行之、牒到准狀、故牒、

正六位下守左大史菅野朝臣良松

貞觀八年六月三日

從四位下行左中辨兼皇太后宮亮藤原朝臣

〔海人藻芥〕山門三門跡者梶井、青蓮院、妙法院是也、此外ノ門跡モ、亦拜ニ任座主ニ、跡足多シ、淨土寺竹內、岡崎、東南院、桓那院、積善院、毘沙門堂等也、此外若出身ノ輩有レ之者可ニ拜任一者也、

〔和漢三才圖會〕七十一近江〕比叡山延暦寺〇中略

座主

輪王寺宮日光　青蓮院宮粟田口　圓融院宮小原

曼殊院宮竹內　妙法院宮大佛

〔叡山大師傳〕又三月三日、〇弘仁十四年勅ニ置延暦寺別當ニ、權中納言從三位兼行皇后宮大夫左兵衞督藤原朝臣三守、正五位下守右中辨勳六等大伴宿禰國道、卽同月十一日、大伴別當爲ニ試ニ天台宗年分度者一向ニ延暦寺ニ、〇又見ニ叡岳要記ニ

〔叡岳要記上〕或云、從ニ此〇叡大師傳上引後、以ニ右大臣ニ爲ニ撿校ニ、以ニ左大辨大史ニ爲ニ別當ニ、

〔平家物語一〕ぐわんだての事

かも川の水、すご六のさい、山法師、これぞ我御心にかなはぬ物と、白河の院も仰なりけるとかや、

〔源平盛衰記九〕山門堂塔事

抑堂衆ト申ハ、本學匠召仕ケル、童部ノ法師ニ成タルヤ、若ハ中間法師ナドニテ有ケルガ、金剛壽院ノ座主覺尊僧正御治山ノ時ヨリ、三塔ニ結番シテ、夏衆ト號シテ佛ニ花奉シ輩也、近來行人トテ、山門ノ威ニ募、切物寄物責ハタリ、出擧借上入チラシテ、德付公名付ナンドシテ、以外ニ過分ニ成、大衆ヲモ事共セズ、師主ノ命ヲ背、加樣ニ度々ノ合戰ニ打勝テ、イトヾ我慢ノ鋒ヲゾ研ケル、古人々ノ申ケルハ、山門ニ事出來ヌレバ、必世ノ亂アリ、一年天下ノ騷モ山門ヨリ亂初タリト聞ユ、今年又何事ノ有ベキヤラン、鬼門ノ方ノ災天也、帝都尤可ニ愼トゾ歎申ケル、

參詣

〔法然上人行狀畫圖四十四〕抑山門諸堂のつとめは、衆徒のいろひなく、堂衆の沙汰なりしに、かの堂衆等、寺用をむさぼり、獨歩のあまり、衆徒を忽緒し、あまさへ八王子の社壇を城郭として、惡行をたくみしかば、建久三年冬のころ、官兵をさしつかはされ、堂衆をそりぞけられしのちは、諸堂の安居以下、みな衆徒の沙汰にてつとめけるに、○下略

〔叡岳要記上〕延暦寺供養初度 今云、中堂延暦十三年甲戌九月三日

願主最澄禪師 御年廿八

桓武天皇行幸、止觀院北造御所、　上卿大納言正二位藤原朝臣小野麿、　奉行左大辨從三位紀朝臣佐敉　大導師善珠大法師 後任僧正 興福寺　呪願傳燈大法師如實 後任大僧都 藥師寺律宗　引頭大別當內供奉、義眞大法師、　玄賓 左方 興　堂達、勤操大法師、元興三論　修圓大法師 興　唄師明壹 東大寺法相宗　忠惠 法隆寺法相宗　散花護命禪師 元興法相　觀敏大法師 大安寺三論　讃頭聞寂 大安法相　延秀沙彌 山　梵音賢玉 元興法相　眞忠 山　錫杖藥澄 山　道紹 山○紹一本作昭　奉行僧二人　樂人六十六人 秦氏人也　威儀師圓也　從儀師賢算

大法會庭立舞臺、即堂達勤操修圓、登舞臺、取供養呪願文、授與導師云々、呪願、左方列座 如實　導師、右方列座 善珠　呪願師之末列座敷、左方請僧列座、導師之末列座敷、右方請僧列座、已上

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕御登山の行幸は、桓武、陽成等の御例あるよし、申つたへ侍れども、幸路すでにふりて、分明の日記をえざれば、輿のするにをよばず、このたび、美をとゝのへ、儀をおもくし給へるや、末代聖主の臨幸にも、佳例にひかれ給ふべき、○中略普天率土の中、いづれの所歟王土にあらざる、しかあれども、台嶺をもて叡山と號するは、君の御山なればなり、宗廟社稷の神、いづれの社か王時にあらざる、しかあれども、日吉をもてみやしろと稱することは、君の御社なればなり、○中略さることはりをしろしめしける御故にや、とりわき叡信も深くおはしますら

ん、中堂の北、禮堂三間を皇居にかまへたてまつり、上禮堂のとをり二間、かりびさしをさしつぎて、殿上等にしつらはれ、先これへならせ給ひて後、講堂へ入せ給へば、左右の樂屋亂聲して、腰輿の御まへにて一曲を奏す、御輿は正面の間へよせたてまつる、內陣の禮盤に入せ給ひて、御拜のどかにたてまつらせ給ひしかば、なにとなく涙のすゝみ侍しは、御願鄭重のいたり、感應しからしめけるにや、東禮堂三間、おまし所にしつらひて、既にいらせ給へば、上卿內大臣公公實幄に著して、右少辨經季、大外記師右をはじめて、次第のことをきてられ、階下にまいり給へば春宮大夫公宗、侍從中納言公明、別當藤原口口御子左中納言爲定、新中納言實世、左兵衛督隆資、新宰相俊氏、三條宰相實治、右兵衛督實廉、右大辨三位資明參著せらる、舞臺の東には、左權中將藤原忠冬、同源具光、權少將同康親、西には、右中將藤原伊俊、藏人權少將同宗兼、右衛門權佐同房光、各胡床に侍、また式部省彈正臺請僧の假屋のまへ東西のはしに、半帖にさぶらふ、呪願導師の出仕をそなはりければ、列を引にをよばず引頭、唄師等をはじめて、二百餘口の衆徒、直に南庭のかりやにつく、其後、呪願導師、集來の幄に立よつて、すなはちいで給へば、役にしたがふ雲客、御迎にまいりて、蓋とり、引導申、舞臺のきはにてこゝよりおり給ひあゆみつれて高座にのぼり給ふ、儀式なべてならず、伽陵頻、胡蝶の後、師子の亂聲ならしければ、狛犬は地にふし、師子は舞臺にのぼりて、まづ四維を禮し、本尊ならびに證誠を拜したてまつる、太皷三拍子になりければ、つなとり、つなを師子にうちかけ、はへはらひともに舞臺の左右のすみにさぶらふ、すべて三段の曲をはりければ、師子行繼、左衛門志になされ、笛吹戸部政躬從五位上に叙せらる、太皷住吉神主津守國夏は、當座の勸賞を辭して、後日に申べきよし申、〇中略法用をへしかば、呪願導師おり給ひて、童舞の曲になる、〇中略さて慈嚴僧正御先達にて、中堂の內陣にいらせ給ひて、御供養法わたらせ給ふ、僧正薩摩うけたまはる、此みそかばかり御精進ときこえ給ひけるは、この御料にてや侍けん、常燈をみたび御手

づからか丶げ給ひけるは、法燈ひさしくきえざれとおぼしめしいれられける、叡慮の至りこそ、身の毛もいよだちておぼゆれ、本尊の佛殿は、たかさ一丈二尺、方一丈四尺の御厨子也、此四面に、金襴の御帳をかけ給ふ、希代の御願なるべし、○中略

中堂に還御ならせ給ひて、御衣なをされ、やがて前唐院にいらせ給へば、座主二品親王、妙法院大僧都、前權僧正仲圓、法印公嚴まいりまうけて、重寶ども叡覽に備へたてまつる、○中略 三箇日の御住山は、閑中の風境、猶つくし給はざれども、御逗留久しくおはしまさは、御供の上下煩ひ侍べきによりて、廿九日、御輿をめぐらしたまふ、御次に總持院へ幸し給ひて、成風いまだをへざる樣叡覽したまふ、今日も講堂へいらせたまひて、御拜あり、

〔太平記二〕南都北嶺行幸事

同月○元德二年二月二十七日ニ、比叡山ニ行幸成テ、大講堂供養アリ、彼堂ト申ハ、深草天皇○仁明ノ御願、大日遍照ノ尊像也、中比造營ノ後、未供養ヲ遂ズシテ、星霜已ニ積リケレバ、甍破テハ霧不斷ノ香ヲ燒、扉落テハ月常住ノ燈ヲ挑グ、サレバ滿山歎テ年ヲ經ル處ニ、忽チニ修造ノ大功ヲ遂ゲラレ遠ニ供養ノ儀式ヲ調ヘ給シカバ、一山眉ヲ開キ、九院首ヲ傾ケリ、御導師ハ妙法院尊澄法親王、呪願ハ時ノ座主大塔尊雲法親王ニテゾ御座シケル、稱揚讃佛ノ砌ニハ、鷲峯ノ花薫ヲ譲、歌唄頌徳ノ所ニハ、魚山ノ嵐響ヲ添、伶倫遏雲ノ曲ヲ奏シ、舞童回雪ノ袖ヲ翻セバ、百獸モ率舞、鳳鳥モ來儀スル計也、○中略 抑元亨以後、主愁臣辱ラレテ、天下更ニ安時ナシ、折節コソ多カルニ、今南都北嶺ノ行幸、叡願何事ヤラント尋レバ、近年相模入道ガ振舞、日來ノ不義ニ超過セリ、蠻夷ノ輩ハ武命ニ順フ者ナレバ、召トモ勅ニ應ズベカラズ、只山門南都ノ大衆ヲ語テ、東夷ヲ征罰セラレン爲ノ御謀叛トゾ聞ヘシ、依之大塔ノ二品親王ハ、時ノ貫首ニテ御坐セシカ共、今ハ行學共ニ捨ハテサセ給テ、朝暮只武勇ノ御嗜ノ外ハ他事ナシ、

〔日本紀略一醍醐〕延喜二年四月一日、太上法皇〇宇多登天台山、供佛舍利會、

〔大鏡裏書上〕三條院中堂御參籠事
長和五年五月一日甲辰、太上天皇登天台山給、依御目病也、七箇日之間、被修七壇御修法、公卿以下、著布衣幷水干裝束扈從、攝政幷左大將、自西坂本歸京、同八日還御、

〔經信卿記〕寛治二年十一月廿八日庚子、上皇〇白河有御登山事云々、仍巳剋許、相具前少將、前馬助、辨子共、向朱雀邊近衞南笛師得任宅、〇中略見物、〇又見扶桑略記

〔百練抄五堀河〕寛治三年五月廿五日、上皇〇白河於延暦寺、被行千僧御讀經、去廿一日御登山、七箇日令逗留給、

〔台記〕康治元年五月十一日癸卯、法皇〇鳥羽御登山、依明日御受戒也、入道殿〇藤原忠實連車給、攝政〇忠實長子忠通被候、公卿直衣但登山人布衣雲客布衣、俱〇忠通弟頼長逢參坂下、

〔本朝世紀〕康治元年九月十一日庚子、是日法皇〇鳥羽於天台中堂、施小袖衣於諸僧等、大法師仲胤、啓白事由、諸法之詞、衆人歎伏、　十四日癸卯、是日法皇於天台前唐院、御覽寶物、其中有天台智者大師所著衲帽子、幷師子形禪鎮子、唐廬山程水、清涼山石、及傳敎大師、自宇佐所給之紫袈裟等、一々御覽之、十七日丙午、是日法皇自天台還御白河御所、

〔台記〕久安二年五月十日戊寅、巳剋參院、〇鳥羽依仰著烏帽使顯遠奏曰、先日乘車可候由奉仰、然者先可參會坂下歟、將御幸〇鳥羽以後、自閑道可參會坂下歟、仰云、所申皆非、可候後車、北面者後余示顯遠曰、見物者成市而無其用心之際、每事見苦、是招嘲、爲之如何、顯遠云、不可顧人嘲、上意必欲候御後陣、背之者定怍上旨矣、未剋出御、余乘車候北面者後、成憚不發前、不警蹕、皇后開東北門見物、余乘車渡此前於坂下邀御手輿、余又乘手輿、候北面者後、著水飮供御膳、殿上四位役之召余於御前賜膳、殿上四位役之又群臣賜膳、但不召御前次著青蓮房、余同參、次余中堂、有諷誦燈明事、法橋實陽爲導師、次向宿房、桂林房于時及晡、頃之參御所、小時駕

手輿、參御中堂、(先之被始藥師經御讀經、於中堂請十口僧、)予已下前行、入御御所、(正面南面以南、)余依召候簾中、先本寺初夜時、次御加持、(座主發願、)次御諷誦燈明、(導師權律師寬勝、)千僧供事、(導師忠胤、)已次始七佛藥師法、(座主)因渡御正面北間、(立廻屏風、)余同候、時了、御加持後還御、余已下前行、入御之後、余又參中堂、(手輿、)受加持、(中堂衆、)歸桂林房、今度華山相公(忠雅)之外、卿不參、　殿上人四位九人、(忠隆、師行、隆季、師仲、資賢、盛章、清盛、季行、家明、)五位五人、(時信、俊盛、家盛、信隆、清成、)　十八日丙戌、依昨日仰、巳刻參觀音堂、(不奉燈明、)田邑將軍建立云々、　十九日丁亥、自去夜又降雨、巳刻參中堂、小時臨幸、即被始御修法、日中時比、有御諷誦燈明事、結願後御加持、賜御馬、此間雨止、即幸法花堂、(余步行在輿前、)御懺法日中時、(先未奉被始之、)結願後、渡御常行堂、次幸講堂、(御步行、)被奉御燈明、了渡四王院、(御步行、)次還御、余駕手輿、在御後、此間雨又降、須之止、(未至水飲、)其後不降、但終日不晴、著御水飲、供御膳、賜臣下膳、次御下京、余駕車、在北面者後、(今度用新車、前駈馬不打梨、)成憚不發前、不警蹕、還御白川北殿之後退出、　三年六月十七日己酉、午四刻參一院、未二刻、法皇(鳥羽○)登天台山、上皇(崇德○)參、乘侍臣布衣供奉、予(藤原賴長○)權中納言公能、參議忠雅敎長卿候之、三卿應上皇之召、獨余蒙法皇之催、先日法皇賜乎詔曰、寬治年中、故白川院登山、右內大臣著烏帽子直衣騎馬、汝從彼例、余從此詔、聞上皇步行、余亦步行至水飲、法皇暫休、供御膳、亦賜群臣膳、詔侍臣、賜膳於余、食了供氷二折敷於法皇、以其一折敷賜余、味太美、食無餘、于時法皇召盛章朝臣、問上皇行遠近、奏曰、已近、法皇復問乘輿否、奏曰、御輿、卽法皇詔余曰、上皇已駕、汝駕輿前行、直就私廬、及初更可參、過中堂勿來朕廬焉、恩詔之旨不知所謝、卽駕輿詣中堂、修諷誦、擧燈明、供養藥師經十二卷、(三事導師皆已講忠胤、)了就休廬、(桂林房、于時秉燭、)浴飡、亦詣中堂受加持、亥一刻、兩院參御、余依召候簾中、先行寺初夜時、次中堂衆加持兩院、(共座主發願、)次兩院修諷誦、擧燈明、(燈明導師共權少僧都辨覺、諷誦導師共已講忠胤、)次上皇令轉讀師藥經、(忠胤發願、)次法皇修七佛藥師法、(座主爲阿闍梨、)因之還御正面北間、御加持了、兩院還幸、余暫留通夜、吹丑螺後、罷退私廬、　十八日庚戌、天晴、亥刻大雨、午刻詣觀音堂、依十八日也、次詣中堂、次詣青蓮房、(法皇御所、)依召參御前、次罷廬及晴時信送使曰、今聞、法皇詣法華堂、不可參、早參中堂、可奉待、令奏承由、詣中堂、

先之上皇參御、余加著卿座上、小時、法皇參御、依召候簾中、先寺初夜、次兩院受加持、次御修法、初夜了、兩院見夏衆酌水、還御、余丑螺後、歸休廬、　十九日辛亥、終日雨、午一剋詣中堂、良久而兩院移御、法皇請五十口僧、供養半丈六藥師畫像七體、本願藥師經百卷、（長門守師行朝臣奉爲法皇修之）已講忠胤爲導師、又令轉讀千卷、（一人廿卷）供養了、兩院移御前唐院、先禮慈覺大師影、（木像）次覽寶物、座主及辨覺僧都候御前、卿候寶子、予近候御前、（上長押）今日不覽一筥、（寶者謂見筥外非開筥）寶物之中有五臺山沙、法皇少分取懷之、詔群臣曰、各取之、皆從詔旨、予獨辭曰、欲從詔旨、恐難逃盜佛物之罪、法皇重詔曰、歸依三寶取之、亦君臣見者多、何爲盜乎、仍余取之、次上皇幸文殊樓、法皇自此還御宿所、予依法皇詔詣彼樓、上皇修諷誦、擧燈明、（導師忠胤）次幸實相院、修諷誦、擧燈明、（導師同人）覽故座主良眞影、（木像）如生者、次還御、余自此歸廬、初夜幸中堂、如昨日、予參、過蒙仰候簾中亦同、　廿四日丙辰、午剋詣中堂、次兩皇移御、修諷誦、（導師辨忠）擧燈明、（導師辨覺）上皇結願御讀經、（忠胤）法皇結願御修法、座主贈兩皇、（親取之奉）兩皇賜馬座主、（各一疋）法皇使藏人勘解由次官範家仰座主曰、賞追申請、法皇語余曰、雖仰可擧申其人之由、申可追申之由、不擧之也、次兩院幸講堂及四王院、修諷誦、擧燈明、（導師法橋實陽）上皇余見毗砂門足、即兩院還京、余候御後、（皆束帶）至水飲供御膳、賜臣膳、比至坂下大雷雨、群臣衣濕、就中余如入水者、權中納言、（公能）華山相公、（忠雅）不供奉、予及朱雀相公（教長）忘恥猶供奉、依上下濕、詔勿入京、自河原直還御白河、上皇即還御三條、

〔平治物語　一〕叡山物語事

去保元元年ノ春ノ頃、法皇（鳥羽）叡山ヘ御幸ナル、山門ニハ大師修禪定ノ具足共アリ、名字ヲ御尋有ケルニ、大衆ドモ、公家ノ才學ヲ量ラントヤ思ヒケン、我山ノ財ニテハ候ヘドモ、正シク名字ヲ知タル者候ハズト、一同ニ申ケレバ、法皇、先年熊野ニテ、信西不思議ノ才學ヲフルヒシカバ、若是ヲモヤ知タルラントテ、召出サレケレバ、御前ニ參テ畏ル、先一ノ箱ノ修禪定ノ具足ノ中ニ、勢手鞦計ニシテ、音有物アリ、是ハ何ニト御尋アレバ、ゼンキクト申候、止觀ノ第四卷ニ見エタリ、譬バ

大師禪定ノ時睡アレバ、是ヲ頂上ニ置、睡レバ自ヲツ、落レバ音アリ、故ニ眠覺ルナリ、又二尺四五寸計ナル木ノサキニ、勢大柑子計ニシテ、和カナル物アリ、大師修禪定ノ時、御身苦シキ事オハシマセバ、是ヲ以押ソ、押フレバ止、是ヲ禪杖ト云、二尺許有物ヲカセノ如クニ違ヘテ、サキゴトニ絹ヲ懸テ塗タル物アリ、大師座禪ニ御胸痛ム時、是ヲ以テ押フ押フレバ止、助老ト是ヲ云、又枕ニ似タル物アリ、其名ヲ頭子ト云、委クハ梵網經ニ見ヘタリ、此等ヲ四種ノ物ト云也、第十九ノ箱ハ、下野國宇都宮ノ御殿ニ納ラル、乙護法使者タリ、明神强チニ惜マセ給ヘバ、人ハ爭カ知ベキナレドモ、或宇賀神ノ法ヲ籠、或陀天ノ法ヲ籠、大師手印ヲ以テ封ゼラルト云々、不空羂索、人骨ノ念珠モ、此箱ニアリトカヤ、凡延曆寺ハ、大師最初ノ伽藍ナリ、大講堂ハ深草天皇ノ御願、延命院四王院ハ、文德朱雀ノ御願也、

〔吉記〕壽永二年七月廿五日丁亥、後聞、法皇○後白河去夜被遣御書於前內府○平宗盛許云、若及火急者何樣可被存知御乎、臨期定令周章歟、可被申其子細、其御返事云、無左右參入可候御所者、奉具法皇主上、無左右可逃退海西之由、內々有支度之旨、世以推之、又銘叡慮歟、又北面者之中祗候彼邊之輩等、令伺形勢云々、行幸成之間、偸以出御、令參新熊野新日吉等給、儲御輿、經鞍馬路、先令渡横川給、右馬頭資時朝臣、大夫尉知康等之外他人不候、於山上、權僧正俊堯、法印尊澄等、殊以早參云々、次第御巡拜了、著御東塔圓融房云々、入道關白殿、相具尊澄法印、令早參給、顯家朝臣一人在御共云々、

〔左經記〕寬仁四年十二月十三日己丑、丑剋、入道殿○藤原道長令登山給、上達部、殿上人、或御共登、或追々參會、　十四日庚寅、早旦、山座主今權少僧都實誓、奉受戒具十八種、或相傳物等云々召實誓給御裝束一襲、又座主奉仕御儲、次有所々御使、閤東宮大宮、大府宮中宮、各給被物、白褂一重不詞四位五位、次令渡戒壇給、○中略御受戒了、御座講堂、有御誦經、五百端僧乃云々次御座主房、令拜給次還御御房、此間甚雨、又始自今夜七箇日、於中堂幷食堂被行藥師法幷讀經、　十八日甲午、延曆寺千僧集於講堂、爲殿御行藥師經御經、　廿一日丁酉、

雜載

助、御修法讀經僧幷延暦寺所司中堂承仕者等布施祿等有差、及午剋令歸京給、關白殿〈○道長子頼通〉率上達部令參西坂本給、及末剋入京給、〈○又見日本紀略〉

〔定家朝臣記〕天喜六年十月三日、巳剋、大納言殿〈○關白藤原頼通子師實〉令登山給、上達部四人、殿上人十人、諸大夫九人候御共、〈○中略〉申剋著御座主梨本房、〈座主被示云、入道殿幷殿下初御此房者〉入夜有御入堂、先行初夜次御諷誦、〈手作百段〉次御明、源增爲導師、畢給被物、〈白掛一重〉次久住者廿人引率、奉仕御加持、其後有驗競事十餘雙、西塔頼昭、東塔鎭證爲最俊、〈鎭證勝〉各有相爭之詞、後夜了令下房給、

〔三塔巡禮記〕　稱名院右府〈公條公〉

天文廿三年、嵯峨二尊敎院にて、はじめて安居せり、衆僧一兩輩、物語のついで、叡山三塔秘密の順禮の望みを申あへり、然るに當院の老師〈艮純長老〉これを聞て、我先師廣明和尚その望みはありながら、つゐに心ざしを遂給はず、ほゐなき事なりし、其かはりと思ひなして、驥の尾につくべきよし有しかば、俄に廿三日巳剋ばかりに出たちて、雲母坂をのぼりぬ、〈○中略〉かくて東塔南谷榮光坊宣祐法印の坊につきにけり、〈○中略〉

今宵は、惠心院にてあかすべきよしさだめける、すべて此院は、久しく退轉せしを、三光坊といふ人再興せりとなん、莊嚴むかしにも越ぬべく覺し、こゝなる人のいふやう、此谷のみならず、東塔の講堂などまで、思ひたちて、堂塔修造、或は起立數をしらず、

〔新拾遺和歌集〕〈十七釋敎〉比叡山の中堂に、始て常燈ともしてかゝげ給ける時、　傳敎大師

あきらけく後の佛のみよまでも光つたへよのりのともし火

〔秋苑日涉〕〈三〉長明燈

劉餗隋唐嘉話曰、江寧縣寺有晉長明燈、歲久火色變、青而不熱、隋文帝平陳、已訝其古、至今猶存、按自晉迄唐凡五百許年、可謂久矣、然我邦出雲大社有地神氏時長明燈、至今幾乎三千年、天壤之間、

恐無復有乎、爾、又聞之六、如師曰叡山根本中堂長明燈、乃傳敎大師所親鑽、弟子慈覺分傳之出羽立石寺、元龜之亂、叡山之燈燼矣、爾後取之立石寺云、此燈亦巳經千年、比江寧縣寺、又古五百年矣、○中略

〔壒囊抄十一〕夜燈ハ縱ヒ油アリ共、夜明ハ必ズ可滅歟、又隨油可燃歟、○中略又六卷抄ノ批ノ十四ノ本ニ云、長明燈ハ不許滅、續明燈ハ可滅之ト侍リ、是宜キニ叶歟、

〔源平盛衰記四十五〕内大臣京上被斬附重衡向南都被切并大地震事

根本中堂ノ常燈モ、三燈ハ消ニケリ、大師手自ラ石火ヲ敲出シテ、炬シ玉ヘル一燈ハ不消ケリ、法滅ノ期ニハ非ズシテ、臨時ノ災ト覺エタリ、

〔園太暦〕康永四年○貞和元年四月十四日、抑延暦寺執當兼運僧都申送云、一昨日根本中堂常燈消滅云云、寺家注進送口不凡重事歟、○中略

根本中堂常燈事

元三燈

天祿三年壬申慈惠大師、統三箇挑一燈云々、

貞和二年二月十三日、抑中堂新常燈消滅事、執當兼運僧都送示續了、○中略

根本中堂、元德の御願の新常燈、去夜亥剋初夜の行法、鐘木にてあやまちに、承仕法師たをしかけて、うちけちて候、執行祐覺法印狀、座主宮へまいらせ候ぬる、御心えのためうち〳〵申入候、御ひろう可被下候、あなかしこ、

二月十三日　けんうむ

〔日吉社極秘密記〕奏聞委細右在之言上狀之事

天正三年乙亥年○中略自山門所々佛體燒炎故、紛失有之間、言上之事、

正學院探題豪盛法印

南光坊祐純法印奉上

天正七己卯年、右山門與當社三御門跡勸修寺殿言上、依之、　御綸旨、山門、日吉、一紙ニ被成下也、

三御門跡者、妙法院、　梶井宮　青蓮院已上御方也

大佛師方寫　御綸旨

同三門跡寫　御添狀

正親院御綸旨

山門三院、日吉社內神體、并佛像彫刻之事、

如有來、大佛師法印康正、可致存知之旨、天氣之所候也、仍言上如件、

天正十一癸未後正月十三日　左中將拜

謹上　勸修寺大納言殿

山門、日吉之儀ニ付、勸修寺大納言殿より添狀の事、

勸修寺殿內井上五郎豐家拜

山門三院、日吉社內神體、并ニ佛像彫刻之事、如有來、當家可被致存知之旨、御綸旨被成下、勸修寺大納言殿、御下知所候也、依執達如件、

天正十一年後正月十三日　豐家

大佛師法印康正御房

妙法院樣御令旨今小路行康拜　山門大佛師職之事

任御綸旨、不可有別儀之由、妙法院宮御氣色所候也、仍而執達如件、

天正十一年後正月十三日　行康

大佛師法印康正御房○中略

如此被仰付、山門三院之佛體彫刻出來、〇中略山門ハ、天正十七年創、延暦寺相濟也、

法印慈圓

〔千載和歌集雜十七〕題しらず

おほけなくうき世の民におほかふなわがたつ杣に墨染の袖

〇

〔近江國輿地志略志賀郡十六〕滋賀院　作道町〇坂本の西傍にあり、境内凡二町四方餘、親王御門跡の室なり、明暦元年御建立、寺領千石なり、常憲院殿の御判物あり、後にしるす、

近江國滋賀郡坂本滋賀院者、大猷院所致建立也、執奏以爲親王門跡之室、末代不可令退轉也、因茲同郡比叡辻村之內、東照大權現宮領二百石、慈眼大師堂領五十石、同郡雄琴村七百五十八石八斗二升餘、比叡辻村之內百九十二石七斗九升餘、穴太村之內四十八石三斗八升餘、合千石門跡領、此內二百石者、隱居領、都合千二百五十石事、任明暦元年九月十七日先判之旨、寄進之訖、永不可有相違、可爲撿斷使不入之地、但背國法輩者、非制限者、從先規守所被定置條數、幷年中行事配當目錄之旨、諸役勤行無怠慢、可被抽國家安泰武運長久之精祈之狀如件、

貞享二年六月十一日

綱吉御判

〔滋賀院方書物之寫〕滋賀院定

一日光御門跡後住之事、以執奏皇子從御幼少之時、滋賀院江入室學問修行、成長之節關東下向、先有居住于東叡山隱居所、而法流相傳以後移本院、〇東叡山住持可有與奪、雖然先門跡亦被逗留于東叡山隱居所、彌當住指南有之、而歷年序、可然時分見合之、先門跡者可被移滋賀院也、以來代々相續之儀、可被守此旨趣事、

一滋賀院新宮領高千石、此內貳百石者、可爲隱居領、若隱居兩人有之時者、當院之隱居領貳百石、後之隱居江被相渡之、先隱居者可被訖所事、

一新宮領八百石之物成、新宮入室以前者、三執行代當院留守之者、幷御供所別當相對所務之、東照宮、慈眼大師堂、修理等之料可用之、

一新宮關東下向、東叡山隱居所居住之間者、東叡山隱居領五百石可被領之、但此領於不足者、滋賀院領八百石之內、三百石相加之、都合八百石可爲部屋領、相殘滋賀院之料引之、其外者、三執行代當院留守之者、幷御供所之別當相對所務之、東照宮、慈眼大師堂、當院修理等之料可用之、新宮本院江居住有之、而先住之門跡隱居之時者、右所相加三百石者、滋賀院江被返之、東叡山之隱居領、五百石可被收納事、

一隱居在江戶中者、滋賀院隱居領貳百石者、每年三執行代當院留守之者、幷御供所別當相對所務之、東照宮慈眼大師堂、當院修理等之料可用之事、

高都合千貳百五拾石　內　貳百石者　東照宮料　五拾石者　慈眼大師領　千石者

滋賀院領（內貳百石者隱居領也）

右、山門三執行代、滋賀院留守居、幷御供所別當、年々所務之、且納次第可配當之、勘定之時者、至關東、日光御門跡之後者相對可遂結解、或滋賀院無住、或隱居無之時者、其所領米、年々以相場賣拂之、右之金子、三執行代留守居、幷御供所別當相對付之、納置之、東照宮、慈眼大師堂、當院不修理而不叶破損之所者、窺於日光御門跡而可沙汰之、此定不可有怠慢、若私曲違背於有之者、急度可被處嚴科之旨、依仰執達如件、

明曆元年九月十七日　阿部豐後守（忠秋書判）　松平伊豆守（信綱）　酒井讃岐守（忠勝）　酒井雅樂頭（忠清）

名勝

園城寺 崇福寺併入

園城寺ハ、一ニ三井寺ト云フ、近江國滋賀郡長等山ニ在リ、弘文天皇ノ皇子與多王、父帝ノ遺詔ニ由リテ創建スル所ナリ、中世延暦寺ノ僧圓珍ノ之ヲ再興スルニ及ビ、其徒叡山ニ於テ、圓仁ノ徒ト相爭ヒ遂ニ、相率ヰテ此寺ニ移リ住ス、是ヨリ寺運漸ク熾盛ナリシト雖モ、延暦寺ト相鬩グコト幾ド水火ノ如ク、天台宗中別ニ寺門ノ一派ヲ立テ、此寺乃チ其總本山トナルニ至レリ、

崇福寺ハ、又志賀寺ト云フ、天智天皇ノ御願寺ニシテ、其舊跡、今尙ホ園城寺ノ傍ニ存ス、

〔伊呂波字類抄遠諸寺〕園。城。寺。〔同見諸寺〕三。井。寺。清和御宇貞觀十七年乙未建立、本願主智證大師、委細記二園城寺之盛事一、仍略之、

〔拾芥抄下本諸寺〕園城寺彌勒大津三井寺也、王子建立、

〔近江國輿地志略十志賀郡〕長等山　俗三井寺山と云もの是なり、大津の西にあり、比叡山よりの山續にして、長く等しき意もあるにや、其峯を妹山といふ、絶頂より山城の方に至りては、如意嶽と云、洛東の山なり、○中略

園城寺　天武天皇、御即位ありて後、與多、遺命のことを奏す、天皇叡感ましく〳〵て、累朝崇重の光明全身の彌勒如來を此地の本尊として、乃額を園城と賜ふ、これ與多が莊園を寺とする所以なり、或曰、此寺志賀の都の御園に降れり、故に園城寺と號す、しかれども與多が莊園を寺とするなればの說是なるよし、三井の記錄に志るせり、又天竺の祇園精舍をうつすの說あれど、煩しければ不載、與多も亦兵器を摧折し、金銅を銷鑠し、彌勒佛を造立して、堂內に奉納す、

〔枕草子六〕あはれなる物

正月に寺にこもりたるは、いみじく寒く、雪がちに氷たることそおかしけれ、

〔枕草子春曙抄六〕寺にこもり　三井寺にや

所在

〔近江國輿地志略十志賀郡〕園城寺○中略凡吾日本、ひとり花と稱するものハ櫻花山とばかり云ものは比叡山、又寺とのみ名くるものは、只此三井寺に限れり、黄檗卽非詩、台山歴襍宿湖傍、曉起經行到上方、山色秀鍾王者氣、林花淸沃御泉香、妥禪倶是新傳戒、觸目無非古道場、勝槩宛然同我國、不知身已在他鄕、石川丈山詩、智證當年闢大乘、瑜伽密賾執傳燈、雖然地似靑龍寺、多是西川蓍宜僧、是等皆當寺の詩なり

〔東海道名所圖會一〕長等山園城寺志賀郡にあり、一名三井寺又寺門と稱す、天台宗修驗道を兼す、女人結界、○中略 御井金堂の傍にあり、(中略)三密灌頂の閼伽とし、慈尊三會の曉を期すとなれば、三井とも號く、

〔近江國輿地誌略十志賀郡〕園城寺 長等山と號す、世に三井寺といふ是なり、大津の西極、則大津の大門町は、三井寺の大門通なり、

寺域

〔園城寺傳記六〕三井寺

請國郡判、給本四至、可近約堺四至事、

東限、海棹立、　南限、南下路、金塚南邊下路、

西限、界堺峯、　北限、新羅明神現在谷山越道幷下陌、

右、寺家所領地之四至、元是建立檀越大友與多之先祖、大友太政大臣執行天下之時、此處爲彼宗地堺、其四至甚廣博也、今爲寺領之間、此寺號定額寺、講師攝領執行寺務之程、人意諂曲、寺家公驗、自恣取得替、去住之隙不返納寺庫、爰知此由、董倫請國判之處、不察寺領之由、暗被與判也、仍稱私領地、或輩無劵文、號祖財、有相論、然而逢依道理相之處、不進避文、進施入文、隨則寺請國郡判、先畢、今思情者、件本四至廣之所致也、給彼本四至、近約堺四至、以其外山野、將令爲人民依所、仍爲甲戌官符副、前國判、重請申處分、

貞觀十年三月十七日　檀越擬大領大友村主夜須良麿

都維那僧　承秘

檢校大法師圓珍　別當僧圓敏　上座僧惠稠　寺主僧知新

郡司判

擬大領從六位下神田臣永承　主帳外少初位下大友貞吉　擬大領從七位下大友村主夜須良麿

擬主帳無位金作淨繼　擬少領從八位上錦部氏首　擬少領從八位上槻木達

國判

介藤原朝臣有蔭　權大掾安倍朝臣立寅　權少掾安倍朝臣利柯、少掾上毛野朝臣　權大目惟

良宿禰

創建沿革

〔園城寺傳記〕五　園城寺（外記中原師重云、大友皇子實名、官文書中不見之、但大友實名也、義源記中有之、）

建立近江國滋賀郡

三間四面檜皮葺金堂壹宇

右當寺者、天武天皇十五年歲次丙戌、大友與多磨爲父大相國所建立道場也、即經官奏寄天武天皇之御願、申置佛性燈油之料田、遠期慈尊三會之曉、凡建立本意者、爲奉鎭國家、護持佛法、引導凶類利益衆生、捨珍寶兵具於父大相國之家地、故所崇建立也、爰與多磨存念、釋尊早入涅槃、諸佛歸本土之寂光、唯所憑在後佛之出世、依之同十五年始奉鑄彌勒、高三寸餘也、其巧匠者、件彌福麿也、佛像奉鑄之時、護法善神擁護、遂如發願奉鑄之畢、文

一園城寺建立、并本願檀那與多丸事、

大友夜須良麿記云、右當寺本願大友與多麿者、天智天皇孫大友皇子之第五男也、此人、其性淸貌、永无放逸志、繫佛法、其心正直、故有佛神助、於合戰之庭、宿善自發剃頭入道、于朝于暮讀一乘妙典、自宵至曉、念三寶悲願、任大相國發願、祈都率往生、集兵具金銅、如意奉鑄彌勒像、故大相國、於美濃國合戰

庭、密語與多麿示曰、我爲奉國起謀反之逆亂、蒙天道責、可被誅害、爲官軍被害人命二百餘人、後生之報、不知所赴、定在無間地獄底、永劫之間、可受大苦果、願以我宅造佛殿、懺悔我身無量罪云々、卽與多麿、任大相國遺言、壞運私宅、遂造立佛閣、爲天武天皇御願、文

〔古今和歌集目錄〕大友黒主〇中略

黒主者、園城寺本主歟、大伴黒主、村主等、以氏寺申智證大師、寄天台末寺、爲道國役云々、見緣起云々、皇代記云、天武天皇三年甲戌、大友太政大臣之孫大友與多大臣家地、造御井寺、今三井寺是也依父遺誡建立云々、金堂內陳柱記云、今年甲戌、右大臣大友與多等、建立此伽藍云々、過康平年中見出之、然者黒主寄進如何、黒主者、讀延喜大嘗會歌寛平頃之人歟、

〇按ズルニ、本文ニ引ク所ノ皇代記ノ說、又扶桑略記天武天皇十五年ノ條下ニ見ユ、

〔長等の山風下〕大友天皇の崩給へる地、また陵所、また其後の御事どもを、古書どもに相證して、つらつら推考ふるに、まづ崩たまへる地は壬申の年の紀に、七月廿三日壬子云々、於是大友皇子走無所入、乃還隱山前云々と見えたり、その崩所の山前といへる地は、同紀の下文に、別將軍云々、進至于山前屯河南とも見えたるところにて、其は滋賀郡長等山の山前にて、其かみの一區の名なりしなるべし、

唱は、ヤマサキなるべし、佐伎に、前字を用ひたる事、古書に例多し、此地、宇治拾遺物語には、山崎と書り、

かくて其山前を、天皇、皇子におはしましける時の家地なりけるが、御軍の敗に堪たまはで、其地に還り隱ひ坐まして、遂にゆゝしき御事のありしなり、其期に、天皇、皇子與多王に遺詔給ひけるによりて、其地を陵所として葬奉り、また後、公家に奏して、其地に園城寺を建立、また舊の家所のわたりを捨て、寺用に宛賜はり、與多王は、王號を避て、大友氏と稱て、其寺の主持となり

て供奉り、すなはち氏寺と稱て、子孫に傳へたりける間に、御寺の字を、御井寺とも呼てありけるを、

御井寺後に、智證が三井寺と書改たるなり、○中略

貞觀の頃に及びて、故ありて、大友黑主、同夜須良麻呂等、更に公家に請奏して、寺を延暦寺の別院として、僧圓珍に附屬し、永く其門徒に傳ふる事とぞ爲たりける、然るに圓珍、其寺の重き緣起に忠ならずして、あらぬ妄說を造爲出して、とかくこしらへけるによりて、實の由來は、漸に隱れゆき、はた、その大友の氏人も、遂にその御寺を離れて、衰へはてにけり、かくて、其後、園城寺、延暦寺と、爭論いできて、度々寺を燒れ、什物貲財を失ひ、亂れとみだれけるにあはせて、ますます、其傳をわすれゆきて、遂には天皇の遺詔によりて建られたる御寺なる由來をも、陵所は此地なりと云ふ事だにもたえて、しれずなりにしものとこそは思はるれ、

〔大日本史佛事五〕園城寺見前、大友村主氏祖先所建、故又名大友氏寺、（古今著聞集引智證大師緣起文、古今集目錄、伊呂波字類抄引本朝文集云、大友興多爲天武帝建之、水鏡云、葛野皇子建之、今按、本寺爲大友村主氏寺、故後人誤託名大友帝皇子興多王、又誤爲葛野皇子也、）

〔園城寺傳記五〕園城寺○中略

一園城寺供養事

良勇和尙記云（第十一代座主、號谷和尙、[illegible]尼坊座主、智證門人、）

園城寺供養、淸和天皇御宇貞觀元年（己卯）九月三日導師　座主圓仁阿闍梨　呪願　安惠阿闍梨

讀師　惠亮阿闍梨　唄師　慈叡、　散華　承雲内供　三禮（初山後寺）　安然内供　堂達　法務阿闍梨（曾山）

右當寺、故大友與多麿建立地、

天武天皇崇重之御願也、而送數百歲之星霜、及堂舍等之破壞、於是氏人等雖有興隆之志、依无修造之力、勸進鄕里貴賤、修複故基伽藍、造丈六像彌勒像、奉納本佛、貞觀元年九月三日、請天台之明匠等、

遂供養本意、此日、調音樂散造花、天花交降、空有樂音、聽聞道俗、見當會儀、疑値彌勒下生時、文○又見叡岳要記

〔本朝續文粹十一記〕園城寺龍華會緣記　實範朝臣

夫以、祖師智證大師、承和年中、爲受持佛法、渡海入唐、待便風於一葦之中、凌逆浪於萬柳之外、適依本山三寶之加護、得屆長安青龍寺、隨法詮闍梨、一々受顯密之道、入室義淳瀉瓶事畢之後、遂歸本朝、有一老翁現於船中曰、我是新羅國明神也、爲和尚護持佛法、期以慈尊出世、作是言畢、其形不見矣、和尚歸朝之日、公家令所持佛法門運納于太政官、于時前日老翁來云、此日本國有一勝地、宜建立一伽藍安置此佛法、遂到近江國滋賀郡園城寺、問寺根元於住僧也、無知者、有一老比丘、名稱敎待、出來云、敎待年百六十二、此寺建立以後、百八十餘年也、有建立檀越子孫、敎待呼氏人、出來云、先祖大友與多、爲天武天皇所建立也、本是大友太政大臣之家地也、太政大臣奉天智天皇勅、以崇福寺建立此地、造顯丈六彌勒像、安置訖、爰天皇夢中有示現、勅太政大臣更亦始建立、今崇福寺是也、因玆與多、隨父遺誡、建立此堂舍也、先是敎待常謂可付屬此寺之人遲歸來也、而今日相待人來也、以寺永奉付屬和尚矣、付屬之後、明神住寺北野、老比丘敎待語明神在所、逢以喜悅、形隱不見、和尚問明神、此老比丘忽不見、是何人哉、明神答曰、是彌勒如來、爲護佛法、住此寺耶、和尚歸寺、問敎待之所作、年來非魚不食、非酒不飲、陽取魚鼈、爲齋食之菜、今見其住房、年來于置魚類、皆是蓮花葉根莖也、誠知彌勒之化身矣、○下略

〔古今著聞集二釋敎〕知證大師御起文云、予依山王御語、渡於大唐國、受持佛法、還本朝、海中老翁現於予船而俑、我新羅國明神也、和尚受持佛法、至于慈尊出世、爲護持來向也者、如此言說之後、其形既隱、予著岸申公家、卽遣官使、所持佛像法門被運納於太政官、于時海中老翁亦來云、此日本國有一勝地、我先至彼地、早以點定、申於公家建立一伽藍、安置興隆佛法、我爲護法神鎭加持矣、所謂佛法者、是護持王法也、若佛法滅者、王法將滅矣、予出登本山千光院、從千光院至山王院、受山王託宣、早法門運此所者、明神俑、此地者末代必有喧事歟、其故奈何者各受北長下也、其內此山可盛事今二百歲哉、我見勝

地、來世衆生、可爲依所、興隆佛法、護持王法、至彼地可相定者、明神山王、別當西塔、卽到近江國志賀郡園城寺、案內於住僧等、爰僧等申不知案內者、一人之老比丘名謂敎待、出來云、敎年百六十二也、此寺建立之後、經百八十餘年也、有建立壇越子孫、去卽敎待呼彼氏人、姓名大友郡堵牟麻呂、出來云、郡堵牟麻呂、生年百四十七也、此寺先祖大友與多奉爲天武天皇所建立也、此地先祖大友太政大臣之家地也、堺其四至、被宛給、大略敎待大德年來云、可領此寺人、渡唐也、遲還來之由常語、而今日己相待人來也、可出會者、今以此寺家奉付屬、此寺之領地、四至內、專無他人領地、而時代漸移、人心諂曲、諸國之剩史稱私領之地、然而氏人无力辨定、早屬國可被糺返者、付屬之後、山王還給、明神住寺北野、無量之眷屬圍繞、他人之所不知見也、見知明住給、野乘輿之人引率百千眷屬來向、以飲食奉饗明神之處、老比丘敎待、到於彼明神之在所、遙以喜悅、卽比丘與人、形隱不見、于時問神明、偁此比丘、與人忽不見、是何人耶、明神答之、老比丘是彌勒如來、爲護持佛法住給此寺耶、與人者是三尾明神、爲訪我來也者、于還到寺、敎待有樣、問郡堵牟麻呂、專不知此老比丘案內、年來此比丘、不魚不飲食、不酒不渴飮、常到寺領海邊之江、取魚鼈爲齋食之菜、而調和備忽隱之、悲哉々々、不惜音哀泣、今大衆共見住房、年來于置魚類、皆是蓮華莖根葉也、於是知不例人之由、今敎待已隱、我院早可被興隆者也者、問之此寺之名、謂御井寺、其情者云何、氏人答云、天智、天武、持統、此三代之天皇各生給之時、最初之時、御湯行水汲此地內井奉浴之由、俗詞語來、件井水依經三皇御用、號御井者、予問此緣起、漸見地形、宛如大唐青龍寺奉受付屬畢、別當西塔、共還本山、別當共參內裏奏申由、勅急造唐坊、佛像法門遷移此寺、予改御井寺成三井寺、其由何者、件井水、三皇用給之上、此寺爲傳法灌頂之庭可汲井花水之事、令繼彌勒三會曉故成三井寺云々、

〔今昔物語十一〕智證大師初門徒立三井寺語第廿八

今昔、智證大師、比叡ノ山ノ僧トシテ、千光院ト云フ所ニナム住給ヒケル、而ルニ天台座主トシテ、

彼ノ院ニ住給ヒケル、天皇ヨリ始メ奉テ、世擧テ貴ビ合ヘル事无限シ、然ル間我ガ門徒ヲ、別ニ立テムト思フ心有テ、我ガ門徒ノ佛法ヲ、可傳置キ所カ有ルト、所々ニ求メ行キ給フニ、近江ノ國志賀ノ郡、大伴ノ皇子ノ起タリケル寺有リ、其寺ニ至テ寺ノ體ヲ見ニ、極テ貴キ事无限シ、東ハ近江ノ江ヲ隔ヘタリ、西ハ深キ山也、北ハ林、南ハ谷也、金堂ハ瓦ヲ以テ葺ケリ、二階ニシテ裳層ヲ造タリ、其内ニ丈六ノ彌勒在マス、寺ノ邊ニ僧房有リ、寺ノ下ニ石筒ヲ立タル一ノ井有リ、一人ノ僧出來レリ、此寺ノ住僧也ト名乘テ、大師ニ告テ云ク、是ノ井ハ一也ト云ヘドモ、名ハ三井ト云、大師其故ヲ問フ、僧答テ云ク、是ハ三代ノ天皇生レ給ヘル產湯水ヲ、此ノ井ニ汲ミタレバ、三井トハ申ス也ト、大師斯ク聞テ、彼ノ有ツル僧房ニ行テ見レバ、人氣モ无シ、但シ荒タル一ノ房有リ、年極テ老タル僧一人居タリ、委ク見レバ鱗腈ナドヲ食ヒ散タリ、其香穢キ事无限シ、是ヲ見テ傍ノ房ニ有ル僧ニ、大師問テ云ク、此ノ老僧ハ何ナル僧ゾト、僧答テ云ク、此ノ老僧ハ年來、此ノ江ノ鮒ヲ取リ食フヲ役トセル者也、其外ニ便ニ爲ル事无シト、大師此ノ事ヲ聞キ給フト云ヘドモ、猶僧ノ體ヲ見ルニ貴ク見ユル、定テ樣有ラムト思テ、老僧ヲ呼出テ語ヒ給フ、老僧大師ニ語テ云ク、我レ此ノ所ニ住シテ、既ニ百六十年ヲ經タリ、此寺ハ造テ後、□歲ニ成ヌ、彌勒ノ出世ニ至マデ可持キ寺也、然ルニ此寺可持キ人无カリツルニ、今日幸ニ大師來リ給ヘリ、然レバ此寺ヲ永ク大師ニ讓リ奉ル、大師ヨリ外ニ可持キ人无シ、我レ年老テ心細ク思ツル間、カク傳ヘ奉ツル事、喜バシキカナヤト云テ泣々ク歸ヌ、其時ニ見レバ唐車ニ乘タル止事无キ人出來レリ、大師ヲ見テ喜テ告テ云ク、我レハ此寺ノ佛法ヲ守ラムト誓ヘル身也、而ルニ今聖人ニ此寺ヲ傳ヘ得テ、佛法ヲ弘メ可給ケレバ、今ヨリハ深ク大師ヲ賴ムト契テ返ヌ、此人ヲ誰トモ不知ラズ、然レバ共ニ有ル□大師是ハ誰人ノ御スルゾト問フニ、是ハ三尾ノ明神ノ御マス也ト答フ、然レバコソ只人ニハ非ズト見ツル人也、此ノ老僧ノ有樣、猶ホ委ク見□思テ、其房ニ返リ至ルニ、初メハ臭カリツルニ此ノ度

ハ極テ腐シ、然レバコソト思テ入テ見レバ、鮒鮮骨ト見ツルハ、蓮華ノ萎鮮ナルヲ、鍋ニ入テ煎食ヒ散シタリ、驚テ隣ナル房ニ行テ、此ノ事ヲ問フニ、僧有テ云ク、此ノ老僧ヲバ敎代和尙トナム申ス、人ノ夢ニハ彌勒ニテナム見エ給フナルト、大師是ヲ聞テ彌ヨ敬ヒ貴テ、深キ契ヲ成シテ返ヌ、其後經論正敎ヲ相ヒ具シ、諸ノ弟子ヲ引具シテ、此寺ニ佛法ヲ弘ヌ、于今佛法盛也、今ノ三井寺ノ、智證大師ト申ス是也、彼ノ宋ニシテ傳ヘ得給ヘル所ノ、大日如來ノ寶冠ハ、于今彼寺ニ有リトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔元亨釋書四慧解〕釋慶祚、門下錄事中原〇中師元之子也、遂顯密、正曆四年、兩門相擘、祚率徒移大雲寺、不幾又遷園城寺、園城寺雖智證興建、徒衆尙寡、及祚之來、學者四方麕至、三井之道此時爲熾、徒屬益繁、

〔源平盛衰記十〕三井寺戒壇不許事

抑傳敎、智證ハ、師弟ノ契、延曆、園城ハ丁味ノ佛法也、兩寺戒壇何ノ妨カ有ベキナレ共、冥慮ヨリ起ニ依テ、三井ノ訴訟、雖及度々、代々聖主更ニ無勅許、後朱雀院御宇長曆三年ニ、園城寺ノ衆徒等頻ニ訴申ケレバ、主上モカタガタ、思召煩セ給テ、御宸筆ノ祭文ヲ遊シテ、當時ノ貫首、敎圓座主ニ登山ヲ進メ、七箇日有御祈誓、〇中略敎圓座主、祈誓七箇日ノ間、太上天皇御靈夢三箇度御覽有ケルニ依テ、御免ナカリケリ、後冷泉院御宇、天喜元年冬、又三井ノ衆徒戒壇建立ヲ可被免由、雖捧奏狀、御免ナシ、白川院御宇、承保元年ニ皇子御誕生ノ勸賞、賴豪加樣ニ奏申ケレ共、赤山ノ御託宣ニ恐テ無御免、冥ノ照覽實ニ子細アルラント覺ヘタリ、同十五日、法皇中宮ノ御產所六波羅ノ池殿ヘ御幸ナル、十二月二日ハ、宗盛卿大納言幷ニ大將辭狀ヲ返シ給ハル、去十月兩官ヲ辭申サレタリシカ共、君モ御憚有テ、臣下ニモ授給ハズ、臣モ成恐望申事ナシ、三條大納言實房、花山院中納言兼雅ナドハ、哀トハ思食ケレ共、色ニモ詞ニモ出シ給ハズ、宗盛兩官ニ成返給タリケレバ、人々サレバコソトゾ思ハレケル、十二月八日、皇子親王ノ宣旨ヲ被下、十五日、皇太子ニ立セ給フ、

堂塔

〔太平記十五〕園城寺戒壇事

抑園城寺ノ三摩耶戒壇ノ事ハ、前々已ニ、公家尊崇ノ儀ヲ以テ、勅許ヲ被成、又關東贔負ノ威ヲ添ヘテ取立シカ共、山門嗷訴ヲ恣ニシテ、猛威ヲ振フ間、干戈是ヨリ動キ、回祿度々ニ及ベリ、其ノ故ヲ如何ト尋ルニ、彼ノ寺ノ開山高祖智證大師ト申奉ルハ、最初叡山傳敎大師ノ御弟子ニテ、顯密兩宗ノ碩德、智行兼備ノ權者ニテゾ御坐シケル、而ルニ傳敎大師御入滅ノ後、智證大師ノ御弟子ト、慈覺大師ノ御弟子ト、聊法論ノ事有テ、忽ニ確執ニ及ケル間、智證大師ノ門徒修禪三百房引テ、三井寺ニ移ル、于時敎待和尙、百六十年行テ、祈出シ給シ生身ノ彌勒菩薩、ヲ智證大師ニ付屬シ給ヘリ、大師是ヲ受テ、三密瑜伽ノ道場ヲ構ヘ、一代說敎ノ法席ヲ展給ケリ、

○按ズルニ、園城寺戒壇ノ事ハ、戒律篇ニ詳ナリ、

〔園城寺略記〕龍泉院藏本曰、大凡三井寺堂宇九、社十七、塔一基、鐘樓堂二宇、二王門一宇、舞臺一字、寺中境內東西五町餘、南北六町餘、寺領四千六百十九石九斗餘、

〔近江國輿地志略十滋賀郡〕園城寺　當寺三院と號するは、中院、南院、北院なり、長吏の宮と號し奉る、三門主あり、所謂實相院宮、聖護院宮、圓滿院宮なり、坊數八百五十九院とあれども、今纔に五十坊を存す、事詳に末にしるす、考見すべし、

〔近江國輿地志略十一滋賀郡〕園城寺　金堂　是天智、天武、持統三代聖主の御願、內陣には、常恒不斷の三燈を置く、本尊彌勒長三寸二分、南岳大師造之、本是陳の南岳慧思大師禪室の本尊なり、南岳大師入寂の後、此尊傳へて百濟國に至る、我朝用明帝始てこれを百濟より得て、尊重甚欣べり、厥後傳々相承して、天智帝に至る、天武帝これを受に及て、既に九朝を歷たり、朱鳥元年に至て、件の異容を以て、當寺に移し安じて本尊とす、或記曰、太友の與多、丈六彌勒の像を造立し、被金の小像を大像の中心に納むと云々、右本尊の外、累世の君臣奉納の彌勒佛六軀、皆是靈像なり、左のごとし、

彌勒一體黃金長一尺二寸、推古天皇の御本尊　同一體黃金四寸八分、聖武天皇の御本尊、同一體黃金七寸二分、陽成天皇の御本尊、同一體黃金一尺八寸五分、大織冠鎌子本尊、同一體白銀七寸、關白道長奉納、同一體赤銅長五寸六分、大僧正行基奉納、

〔寺門傳記補錄八諸道〕法華堂　常行堂

法華堂、常行堂、並是天台立行道場也、淸和天皇貞觀十七年乙未、天皇詔興隆三井諸聖跡、是時、大師奏請、建今二堂、後朱雀院長久元年十月二十日、常行堂再興、供養願主宇治關白北政所從一位源隆姬子、寄附土佐國和食庄、○中略崇德院大治四年十月十日、權僧正增智、法務○聖護院興隆常行堂、始修不斷念佛淨業、

〔扶桑略記二十八後朱雀〕長曆四年○長久元年十月廿日、關白左大臣藤原朝臣賴通之家室、從二位源氏、供養三井寺常行堂、奉造金色丈六阿彌陀如來像一體、等身六觀音像各一體、奉書寫金泥妙法蓮華經一部、敬擇曜宿、開講供養矣、佛則十號之尊、月愛之珠燗燈、○燈恐燈誤經亦一乘之教、露點之文鮮姸、林葉代幡蓋也、空張錦繡之文、籬菊供色香也、已迷布金之地、莊嚴微妙、不能盡矣、已上

〔扶桑略記三十白河〕永保元年四月廿八日、辰剋、叡山大衆引率數千軍兵、來向於三井寺、爰三井寺大衆、且率數千隨兵、各張其陣、防征欲戰、漸及晚景、山上大衆引楯逃去、其後六月五日庚申、殊有宣旨、恒例神事不可闕怠、官使相具比叡祭使等如例、重被催之處、三井寺大衆中不得心者、年少下﨟不學之輩、背宣旨、追却官使、打止祭使等了、因玆有違勅罪、大衆長發等各注其名、共蒙追捕宣旨已了、爰武藝之徒、多皆遁隱山野、勢德之人悉以怖悚朝威、尊卑不和、合戰無力之間、九日甲子、叡山僧徒數千人、或著甲胄引率戰士、行向三井寺、燒亡寺塔僧房等、佛像經卷悉爲灰燼、免餘炎之堂舍等、七分之一也、開闢以來、世未有如此之災禍矣、　十八日癸酉、勅遣右大史江重俊、並史生等、勘錄寺塔房舍燒失、其記云、御願十五所、堂院七十九處、塔三基、鐘樓六所、經藏十五所、神社四所、僧房六百廿一所、舍宅一千四百九

十三宇也、已上官使實録記也廣考天竺震旦本朝佛法興廢、未有如此破滅、今記此災、落涙添點、智證大師門人、頻注子細、上奏狀、全无官裁、時人云、非但佛法之陵遲、兼又王法之澆薄矣、智證大師入滅以後、歷百九十一年、有此災乎、佛法渡本朝後、至于今年、歷五百卌九年矣、

〔經信卿記〕永保元年六月九日甲子、辰剋人々云、山大衆與已燒三井寺、其煙焰天云々者、此間及巳剋、驚參殿邊、〇中略御報云、然者可罷出者、罷出之路撿非違使郎等、相逢中御門堀川邊云、凡皆燒了者、王法佛法、已盡滅之剋歟、可哀々々、

〔扶桑略記三十白河〕永保元年九月十三日丙申、三井寺大衆中、不羈倫等三百人許、密々相招、夜半登山、亂逆不報一事被殘滅畢、　十四日丁酉、公家被下宣旨、遣撿非違使幷前下野守源源家等三井寺殘房、令追捕登山僧等、翌日件使等到彼寺、　十五日戊戌、未時、山僧引率數百兵衆、行向三井寺、重燒殘堂舍僧房等畢云、堂院二十處、經藏五所、神社九處、僧房一百八十三處、但舍宅不注載之、不知其數幾千而已、門人上下各皆逃隱山水、或含悲入黄泉、或懷愁仰蒼天、今年入末法、歷三十年矣、

〔古事談五神社佛寺〕西京座主〇覺尋之時、寺ヲ燒タリケルガ、僧房許ヲ燒テ、衆徒等歸山シタリケレバ、座主聞之、堂舍無數ヲ燒タラバコソ、甲斐ニテアラメ、僧房許ハ無詮事也ト被云ケレバ、翌日又發向シテ、始自金堂、堂宇、經藏皆燒拂ケルニ、賴義之舍弟ナル僧ノ有ケルガ、命ヲステヽ、數千僧ノ中ヘ分入テ、經藏ノ宗トノ聖敎ヲ取出タリケル、大師御入唐ノトキ文書等也、件文乍不具モ、末代之寶物ニテ被安置唐院也云々、

〔扶桑略記三十白河〕永保四年四月十一日庚辰、建三井寺金堂、

應德二年十二月廿二日、供養三井寺常行堂、左大臣源朝臣〇俊房引率卿相侍臣等入禮、　三年十月十日甲午、供養三井寺金堂、

〔中右記〕長承三年八月廿七日、甲辰今日大僧正行尊、供養園城寺、

〔長秋記〕長承三年八月廿七日、甲辰園城寺前年爲山惡僧等燒亡、而公家以伯耆國募功修造也、大僧正〇行尊請取二萬石、令寺僧造作云々、大僧正經營、仍自分不得布施、

〔醍醐寺雜事記七〕保延六年五月廿五日戊辰、辰時三井寺爲延暦寺法師皆悉被燒失了、合戰之間僧不及一時被落了、凡今度相具三个度被燒失了、皆每度有閏五月之年、如此被燒失云々、此日雖天晴、時々細雨降、先々皆又如此云々、同廿八日、三井寺所殘之小藏、御廟寺等、重燒遁了、

〔百練抄七二條〕長寛元年〇應保三年六月九日、延暦寺大衆、發向園城寺、燒拂本堂已下、事起覺忠僧正座主事、去三日、園城寺衆徒追捕大津東浦、斬神人首之故也、

三井寺燒亡　承保　保安　保延　應保但改長寛之後也　已上四ケ度

〔山槐記〕治承四年十二月十二日庚寅、官兵燒拂園城寺房舍、金堂并堂舍房兩三宇殘云々、雖放火金堂、盛俊令消云々、

〔平家物語四〕三井寺炎上の事

日頃は山門の大衆こそ、はつかうのみだりがはしき訴仕るに、今度はいかゞ思ひけん、をんびんを存じてをともせず、しかるを南都三井寺同心して、あるひは宮〇高倉宮うけ取參らせ、あるひは御むかひに參る條、是もつて朝てき也、然らば、ならをも寺をもせめらるべしと聞えしが、先三井寺をせめらるべしとて、同〇治承四年五月廿七日、大將軍には左兵衞のかみ知盛、副將軍にはさつまの守たゞのり、都合其勢一萬よき、をん城寺へはつかうす、寺にも大衆一千人、甲の緒をしめ、かいだてかき、さかもぎ引て、まちかけたり、卯のこくより矢合せして、一日たゝかひくらし、夜に入ければ、大衆いげ、法師原にいたるまで、三百よ人討れぬ、夜いくさになりて、くらさはくらし、くはん軍寺中にせめ入て火をはなつ、やくる所はほんがく院、しやうき院、しんによ院、くわをん院、大ほうゐん、しやうりう院、ふげん堂、けうだいくわしやうの本ぼう、ならびに本尊たう、八けん四めんの

大かうだう、ゑゆろう、經ざう、くはんでうだう、ごほう善神の社だん、いまくまの、御寶でん、すべて、だうしやだうめう六百三十七宇、大津の在家一千八百五十三う、ならびにちゑやうの渡し給へる一切經七千よくはん、佛ぞう二千よたい、たちまちにけぶりとなるこそかなしけれ、

〔後鳥羽院御記〕建保四〇四恐二誤年四月十五日己酉、丑一點許、法印尊長以使者申云、昨日十四日、日吉祭間、大津東浦長者與日吉神人於唐崎鬪諍、仍神人多以爲長者丸被刃傷、仍今日以申剋、衆徒等違本社公人令燒失長者丸住宅、然間園城寺下法師等爲取物亂入件在家間、與山門所司之下法師喧嘩出來、而自西浦三井寺方人等出來、追散山門公人等、剰於大江邊三井寺衆徒出合、散々射、仍山門宮司法師等引歸東浦、以使者告此旨於山門、卽爲祭見物下坂下衆徒等百餘人來、三井寺預西浦ヲ令燒失、於新宮邊令合戰、卽三井寺輩引退了、山門衆徒、三井寺僧房一兩宇令燒失、曰、須令燒失本寺、然而事甚以小事也云々、卽令引歸處、三井寺惡徒、燒拂山門預大津東浦在家、依是山門衆徒、自唐崎又寄責三井寺、打入北院、欲入中院處、園城寺衆徒、弃身命射之間、山門衆徒引退太江邊、三井寺惡徒顧追之、而山門衆徒重五百人許追來間、來逢此處、更荒手衆徒打入中院合戰、于時子剋許云々、且燒拂寺中房舍由申之、殊驚思、然而只今何樣可相計トモ不覺、但仰光親山門園城寺へ可遣御敎書之由被仰、卽尊長使令還了、以右衞門尉中原宣季爲使、仰遣光親許、卽光親進寛三井寺長吏僧正公胤之書狀、其趣大略不違尊長申狀、今度事、無疑三井寺過手歟、令然事也、爲朝甚大事也、何爲哉、其後連連使參、然而只今非可成敗事歟、丑三點天晴人々多以候、　十六日庚戌、神事行如例、自今日佛行可令修之、而依爲旅所不修之、書經同路之、巳剋瑠璃王前候、巳二點著狩衣、於中門邊令騎馬令出京、午一點著七條亭、先是座主事狀、同公胤申狀等參、向園城寺、皆悉以金堂以下令燒失了云々、不可思議不可思議也、中略○今朝辰剋、令燒失金堂云々、終夜至于辰寅合戰云々、惡徒等百餘人引籠金堂令合戰、其間遂以懸火了云々、事很ニ不及左右、誠以至極事歟、然而歎息事不能左右、未一點出外、人々候、

令勸先例處、今度五箇度也、所謂永保、保安、保延、應保等也、今度、建保、總保字在年號時、必三井寺令燒失云々、日來三井寺老僧歎之、然而必可然哉、而乍如此、尤如此可有用意事也、

〔吾妻鏡二十二〕建保二年四月廿三日丁亥、〇亥恐巳誤 酉剋、京都飛脚參著申云、去十五日、山門衆徒、發向于園城寺、金堂、上下佛閣增坊、不殘一字放火燒失云々、近代、叡岳殊成群動、仍飛脚馳走東西、使節往來于都鄙、公家之煩、民戸之費職而此由也、抑園城寺者、天武天皇御宇十六年、草創之後、爲山徒燒失事、已及五箇度、始白河院御宇、承保元年甲寅〇承保元年甲寅恐永保元年辛酉誤 六月九日、山僧發向彼寺、金堂山中悉燒失、鳥羽院保安二年辛丑後九月二日、崇德院、保延六年庚申後五月廿五日、二條院、長寬二年甲申〇二年甲申恐元年癸未誤 六月九日、此四度、皆燒拂金堂並三院云々、　廿五日、園城寺長吏僧正公胤、進使者、愁申當寺燒失事云々、　五月七日辛未、園城寺回祿之間、可被修造唐院幷堂舍僧坊之由、有其沙汰、以駿河前司惟義朝臣、豐前守尙友等、爲總奉行、宇都宮入道蓮生、山王社拜殿、佐々木左衛門尉廣綱、四足門源三左衛門尉親長、鐘樓 內藤左衛門尉盛家預坊 已下、所被定十八雜掌也、當寺者、源家數代崇重寺也、所謂豫州刺史禪室、賴義朝臣 以一男快譽阿闍梨、加智證大師門徒、以三男刑部丞義光、爲新羅明神氏人以降、鎭守府將軍義家朝臣 殊恃當寺之丹祈、而最愛御女盲給、錦織僧正行觀、奉加持之、忽以復本、將軍感悅之餘、拜僧正、吾子孫、永可歸和尙門徒云々、幕下將軍者、以兩箇庄園、爲一寺依怙、又鎌倉中、建立數字之伽藍、以公顯、公胤兩僧正、爲供養導師、依此等芳躅、及今儀歟、

〔勘仲記〕弘安元年五月十二日甲午、園城寺金堂供養日也、今度任長承例、每事有其沙汰、公卿圓滿院宮被相語給、殿上人、堂童子、諸大夫、主典代、門守護官人等自院被催遣之、

〔花園院御記〕文保三年〇元應元年 四月廿五日壬戌、今曉、山門衆徒、發向園城寺云々、〇中略 未剋許、資明參申云、園城寺金堂、戒壇等、皆燒拂了云々、法滅期已時〇時恐到誤 歟、悲歎之至、不能記盡耳、今夕可有改元之由有沙汰、而依園城寺事、及豫議、有勅問于人々云々、　廿七日甲子、〇裏書二、 園城寺、爲山門被燒失、

例及度々歟、然而今度、堂幷僧坊等不殘一字、拂地燒失了、此事超越先例、是併法滅之期歟、可歎息、可歎息、

〔太平記十五〕三井寺合戰幷當寺撞鐘事附俵藤太事

東國ノ勢、既坂本ニ著ケレバ、顯家卿、義貞朝臣、其外宗トノ人々、聖女ノ彼岸所ヘ會合シテ、合戰ノ評定アリ、何樣、一兩日ハ、馬ノ足ヲ休テコソ、京都ヘハ寄候ハメト、顯家卿宣ケルヲ、大館左馬助被申ケルハ、長途ニ疲レタル馬ヲ、一日モ休候ハヾ、中々血下テ、四五日ハ物ノ用ニ不可立、其上、此勢坂本ヘ著タリト、敵縱聞及共、頓可寄トハヨモ思寄候ハジ、軍ハ起不意必敵ヲ拉習也、只今夜ノ中ニ志賀、唐崎ノ邊迄打寄テ、未明ニ三井寺ヘ押寄セ、四方ヨリ時ヲ作テ責入程ナラバ、御方治定ノ勝軍トコソ存候ヘト被申ケレバ、義貞朝臣モ、楠判官正成モ、此義誠ニ可然候ト被同テ、頓テ諸大將ヘゾ被觸ケル、○中略三井寺ノ大將、細川卿律師定禪、高大和守ガ方ヨリ、京都ヘ使ヲ馳テ、東國ノ勢坂本ニ著テ、明日可寄由其聞ヘ候、急御勢ヲ被添候ヘト、三度迄被申タリケレ共、○中略新田ノ三萬餘騎ノ勢、城ノ中ヘ懸入テ、先合圖ノ火ヲゾ揚タリケル、是ヲ見テ、山門ノ大衆二萬餘人、如意越ヨリ落合テ、則院々谷々ヘ亂入リ、堂舍佛閣ニ火ヲ懸テ、呼キ叫テゾ責タリケル、猛火東西ヨリ吹懸テ、敵南北ニ充滿タレバ、今ハ叶ジトヤ思ヒケン、三井寺ノ衆徒共、或ハ金堂ニ走入テ、猛火ノ中ニ腹ヲ切テ臥、或ハ聖教ヲ抱テ、幽谷ニ倒レ轉ブ、多年止住ノ案內者ダニモ、時ニ取テハ行方ヲ失フ、況乎四國西國ノ兵共、方角モシラヌ煙ノ中ニ、目ヲモ不見上迷ヒケレバ、只此彼コノ木ノ下、岩ノ陰ニ疲レテ、自害ヲスルヨリ外ノ事ハ無リケリ、サレバ半日計ノ合戰ニ、大津、松本、三井寺內ニ被討タル敵ヲ數ルニ、七千三百餘人也、抑金堂ノ本尊ハ、生身ノ彌勒ニテ渡セ給ヘバ、角テハ如何トテ、或衆徒、御首計ヲ取テ、藪ノ中ニ隱シ置タリ、ケルガ、多被討タル兵ノ首共ノ中ニ交リテ、切目ニ血ノ付タリケルヲ見テ、山法師ヤ仕タリケン、大札ヲ立テ、一首ノ歌ニ、事書ヲ副タリケル、建武

二年ノ春ノ比、何トヤラン事ノ聽シキ樣ニ聞ヘ侍リシカバ、早三會ノ曉ニ成ヌルヤラン、イデサラバ、八相成道シテ、說法利生セント思ヒテ、金堂ノ方ヘ立出タレバ、業火盛ニ燃テ、修羅ノ鬪諍四方ニ聞ユ、コハ何事カト思ヒ分ク方モ無テ居タルニ、佛地坊ノ某トヤラン、堂内ヘ走入リ、所以モナク、鋸ヲ以テ、我ガ首ヲ切シ間、阿逸多トイヘ共不叶、堪兼タリシ悲ミノ中ニ、思ヒツヾケ侍リシ、

山ヲ我敵トハイカデ思ヒケン寺法師ニゾ首ヲ切ルヽ、前々炎上ノ時ハ、寺門ノ衆徒、是ヲ一大事ニシテ、隱シケル九乳ノ鳧鐘モ、取人ナケレバ、空ク燒テ地ニ落タリ、

(園城寺文書)注進園城寺堂社以貞和三年已後當知行料所可造營事、

一金堂造營功程三万五千二百貫文内

已造營分六千七百八十貫文（加事始、礎居、立柱料足定、但内裏料木代可除之、）

未造營分二万八千四百二十貫文

遠江國　千貫文　　淀關所　千百貫文

已上二千百貫文（但此内遠州國役可除之）

一講堂造營功程一万五千二百八十貫文

已造營分九百十貫文（加事始礎居立柱料足定）

未造營分一万四千三百七十貫文

石見國久利鄕　四十餘　　同國上出羽鄕　二百餘

同國下出羽鄕　百十餘　　伊勢國丹生庄　三百貫文

已上六百五十餘（但此内、所務得分、并石州正稅可除之、）

一唐院造功程七千貫文

伊勢國益田庄　千貫文

一新羅社造營功程一万七千八百七十貫文
已造營分百十貫文加二華始礎居主柱料足一定
未造營分一万七千七百六十貫文
安藝國久芳保　百十餘　同國下品地庄　五十餘
同國鄕戶鄕　百三十餘　同國戶野鄕　二百三十餘
已上五百二十餘　但此內所務得分可レ除レ之
一三尾社造營功程一万一千百卄貫文
近江國山賀鄕　百八十餘　越前國小畿部保　百五十餘
已上三百三十餘但此內所務得分可レ除レ之
一西方院
越前國宮成保　百六十餘
右注進如レ件
貞和三年五月　日

〔義演准后日記〕慶長六年四月廿八日、二條殿同道申、三井寺見物、金堂周備、廣大結構、奇妙々々、前ノ堂ヨリモ增了、阿伽井口柱垂木以下マデ、黑漆繪ヲ書了、施主北政所歟、大師御影堂結構也、所ハ前トハ替了、三尾拜殿以下無レ所レ殘、其外坊舍凡卅計モ建歟、前坊舍ヨリモ是モ結構也、併大師御方便アリテ改歟、再興神妙云々、照高院御馳走故也、勸學院、是モ照高院建立云々、

宗派
〔拾芥抄下本諸寺〕三井寺天台眞言爲レ宗

寺格
〔園城寺傳記五〕園城寺略○中
園城寺寄附狀云、右當寺者、天武天皇十五年丙戌先祖大友與多麿、奉レ爲天武天皇、且爲レ護佛法、且爲

利法界、爲導軍兵幷故大相國所建立也、此卽與多麿之父、太政大臣大友皇子之家地也、凡无住持僧侶守護之思、漸懈倦、燈明久不挑、獨獻開萱英之光、法音亦无聞、鷄鳥時一聲、僧徒永不住、嶺猿自數匝、相像竹林祇洹精舍之故跡焉、早以十禪師圓珍任別當、令加修治、兼演法音者、國司覆審、所陳有實、望請、長以當寺爲天台別院、以件圓珍爲主持之人者、早垂恩恤、以園城寺可爲延曆寺別院之由被下寺牒、轉慰夜須良麿幷氏人等之愁吟、爲天長地久御願、致四海八埏之安寧、仍勒解狀、謹寄進、以解、　貞觀六年十二月五日、從八位下行大友忠口丸、從八位下行大友盛主丸、從八位上大友黑主丸、從八位上大友村主丸、從七位上行大友夜須良丸、

〔天台座主記〕一第四安惠和尚

同〇貞觀八年丙戌五月十四日、被下以園城寺可爲延曆寺別院宣旨、

太政官牒　延曆寺　以園城寺爲天台別院事

右太政官、今日下近江國符偁、滋賀郡擬少領從七位上大友村主夜須良麿解狀偁、太政官貞觀四年十月十七日下國偁、彼國解偁、大領從八位上大友村主黑主等解偁、件寺停講讀師、受以十禪師傳燈大法師位圓珍任別當、令加修治、兼演法音者、國司覆審、所陳有實、謹請官裁者、右大臣宣、依請者、〇中略望請、長爲天台別院、以件圓珍爲主持之人、其別當者、无盡用圓珍血脈、若無人時、及同宗於彼此中、智行兼具少欲知足堪能者、便令寺家簡定、加國印署、進官補任、一任後无犯過者不輙替、然則莫問諸院、无妨本願、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅、依請者、國宜承知、依宜行之者、寺宜承知、牒到准狀故牒、

正六位上行左大史廣階宿禰八釣奉

貞觀八年五月十四日

從四位下行右中辨兼皇太后宮亮藤原朝臣在判

〔扶桑略記〕字多二十二仁和五年七月廿五日、勅園城寺爲定額、

〔寺門高僧記〕別記

右文永、比、自山門、度々奏聞云、以三井寺可爲末寺、自山門引移寺門故云々、而寺門亦奏之、山門還可爲我寺之末寺云々、其故者、若可依建立前後、寺門前代、山門者後代也、若可依寺務官領者山門未備寺門長吏、寺門任山門座主事已十六代也、謗云七代相傳、今既十六代相傳從者也、如何若可依佛法傍正者、吾大師者傳敎嫡流也、山門所殘留學侶皆末流也、若云自山門多移寺門故以山門可爲本處者、西天十八部中、自西山住部移北山住部、全不依居所前後、莫立本末、何況於寺門自元有根本七ケ門跡、引分寺門事者、大師御入滅後一百二年事也、若可依法流相承者、山門顯密學者誰人不受智證大師法訣、依此等云道理、山門還爲末寺之條得其理者也、爰公家勅判云、凡三會講師者、顯宗先途也、延曆、園城兩寺格年勤之、兩寺灌頂者密宗大道也、慈覺、智證門徒格年勤之、更無本末之儀、向後可止此論云々、

〔古簡雜纂 子〕園城寺散在學頭宿老等申

依山門濫吹、遭回祿災子細條○中略

一金堂供養并戒壇事

右如若豐等鬱陶者、金堂供養事、建立堂舍塔、安置佛像經論、爲勅願儀展供養席之條、諸寺諸山之流例也、當寺爲四ケ大寺之隨一、應顯密公請、祈都鄙御願、縱雖無先例、山門非可申子細、何況於當寺、多其例、就中保安回祿之後、長承造畢之時、被准御齋會、整嚴重之軌則、展供養之梵席、上卿權大納言師賴卿、其外權大納言顯雅卿以下、月卿十人、藏人頭秀成朝臣以下、雲客四十餘人、且奉行親隆卿記錄分明也、凡不限此一事、應保元年四月、檀中前大僧正行慶、當寺平等院内尊星王堂供養之日、後白河院可有臨幸之由、兼日風聞之間、山徒不堪嫉妬之思、忽及騷動之企、上皇殊有逆鱗、同三月廿五日、座主最雲法親王、并覺快法親王、快修、重瑜、昌雲、明雲等僧正等、隨見及可搦取之由、嚴密被仰下之間、終以止蜂起、無爲被遂仙蹕奇席、於事令周備之上、被加炳誡之時、下更無濫吹之

寺領

義、先蹤如此、今何不然乎、院内堂舍猶以及臨幸嚴重之儀、況於往代勅願本堂哉、何況於先規分明之芳躅哉、弘安之勅許、寺門之結構、敢非新儀、併守舊貫之處、山僧等恷依顧此等之前蹤、不及兼日之訴訟、廻紆曲之謀計、巧當日之濫妨、載神輿警帝都、率軍兵襲寺門、謀略之企、無道之至、萬事以之可足高察、〇下略

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〇元暦元年十一月廿三日戊申、園城寺專當法師下著關東、所持參衆徒牒狀也、武衛〇源頼朝則召出御前、被令因幡守廣元讀之、其狀云、

園城寺牒　右兵衛佐家衙

應被以平家領沒官地、寄進當寺、紹隆當寺佛法事、

右當伽藍者、彌勒慈尊利生之地、智證大師興隆之庭、所學者、中道上乘之敎法、所祈者、天長地久之御願、法皇之列門侶、崇吾寺、致八埏之靜謐、冢宰之輔朝政、歸此地、祈一家之繁昌、誠知、崇我佛法之聖主、寶祚延長、蔑我佛法之人臣、門族滅亡事見緣起、誰貽疑滯者乎、爰故入道太政太臣〇平清盛忽背皇憲、恣犯惡罪、幽閉射山之禪居、配流博陸之重臣、其後又追捕親王亭、兼擬伐頼政卿之間、各逃虎口之難、來此鳥瑟之影、衆徒等慈悲稟性、救護在心、隨皇子之令旨、伴源氏之謀略、廻國家鎭護之秘策、專逆臣降伏之懇祈、依之引率千萬騎之軍兵、燒失數百宇之房舍、佛像經論、化煙炎而昇天、學徒行人、溺涕淚而投地、計其天亡者、行者行學合五百人、思其離散者、老少纔千餘輩、哀哉、三百餘歲之法燈、爲平家永滅、痛哉、四十九院之佛閣、爲逆賊忽失、過唐土會昌天子、超我朝守屋大臣、而去七月廿五日、北陸道之武將、且以入洛六波羅之凶徒、永以退散、四海悅之、況於三井乎、一天感之、況於吾寺乎、然而所行之旨、已過先輩、燒落禪定法皇之仙洞、殺害天台兩門之貫首、事絕常篇、例在非常、以誰力命伏之、只仰大菩薩之冥鑒、以何人征伐之、專待當將軍之進發、〇中略仍以狀牒、到准狀故牒、

元暦元年十月日　　小寺主法師成賀

權都維那大法師慶俊
權都維那大法師仁慶

檢校權僧正法印大和尙位(在判)
別當大僧都法印大和尙位　上座法橋上人位　大學頭阿闍梨大法師　權上座傳燈大法師

十二月一日丙辰、武衞召園城寺使者、賜御下文二通、所令寄附兩村於一寺伽藍給也、其狀云、

奉寄　三井寺御領事
在若狹國玉置領壹處
右件所、依爲平家沒官之領、自院(○後白河)所給預也、而今爲崇當寺佛法、所令寄進也、但於下司職者、從鎌倉所沙汰付也、不可有相違之狀如件、
元曆元年十一月廿八日　前右兵衞佐源朝臣

奉寄寺領貳箇所事
右爲平家之逆徒、及寺院之破壞、自爾以降、未知住侶之有無、不達蓄懷之案內、期上洛之時、暫送日之處、欵狀忽到來、旨趣尤甚深也、仍寺領二箇所、(近江國橫山、若狹國玉置領、)相副寄文、所令奉遣也、爲無事之妨、撰便宜之村也、但世間落居者、此上重可計沙汰之由、存思給也、仍欵狀如件、
十二月一日　前兵衞佐

〔古簡雜纂　千〕園城寺散在學頭宿老等中
依山門濫吹、遭回祿災子細條々(○中略)
一關東殊不可被弃置當寺事
右武家與當寺、是非一代二代之芳契、殆爲累代累葉之佳例也、所謂豫州禪門(○源賴義)奉勅宜誅(書一字)朝敵之時、以三男義光奉吾寺明神氏子、號新羅三郎、征伐無違、歸洛如思、右大將家御遷座于伊豆

國之昔、律成房日胤稱參候彼所、專抽懇祈、望以平相國之衰微、祈以源將軍之繁昌、懇切之至、感歎之餘、參籠八幡宮、將讀大般若經、玄應不定、素願速成、源家遂鎮四海、將軍獨治一天之間、以伊勢國山田御厨、被宛行于其賞、就南瀧院師跡、實相院于今傳領、相承已及數代、其上當寺調伏之間平家漂沒之剋、若狹國玉置庄、近江國横山庄寄補村之關所、爲一門之寺領、衆徒等、去承久兵亂之時、諸寺諸山悉參京方、雖奉敵于關東、園城寺獨依存舊好、可向勢多賞御感之由、雖被仰下、辭嚴密勅命、致關東懸祈之間、逆鱗之餘、天下如叡慮落居之者、最前以寺門可被付山門之旨雖有議定、依關東之貴還、全寺門之法流者也、唐院靈場者被納右大將家御鬢髮之上、武州禪儀(○北條泰時)奉爲二位家御菩提、一切經論五千餘卷、毎卷軸加署判、被納經藏畢、故於此道場、論議決擇之床上、偏逃東關昌勢之啓白、轉經誦呪之壇前、專抽中府至誠之懇丹、(○下略)

〔寺門傳記補錄〕承元二年、一品親王王子建立實相院、割官領近江國黒木寄附當院、後醍醐院建武三年九月二十四日、近江國和邇庄寄附園城寺、

〔園城寺文書〕寄進　園城寺青龍院(號唐院)

上野國治田庄内(志加摩六郎右衛門尉、庄田彦太郎、)

右爲天下安全武運長久、所寄進之狀如件、

正平六年十二月十五日　正二位源朝臣(御判、顯家一時使村上天皇綸旨一族內、)

〔園城寺文書〕園城寺申條々

一建武以來御寄附永領地、可被停止合給寶坊事、　一造營料所廿二箇所、可被成永領事　一以江州便宜地、可宛賜兵粮料所事、　一山科七郷、粟津五ヶ所幷松郷住人等、相從當寺衆徒可致忠節由、可被成御教書事、　一湖上船事

○按ズルニ、此文書ハ、觀應三年四月五日、園城寺寺領安堵狀ノ裏書ナリ、

〔憲教類典四ノ十三上寺社〕慶長十四己酉年五月朔日

三井寺領之事、近代寺務之分、全不可有相違、爲守護不入之上、於山林不可伐採竹木、殺生禁斷、坊舍門前寄宿等令免除之畢、或修學懈怠之僧、或行義不律之侶者、可被除在寺、幷於境内可被禁止武士郎從以下居住者也、猶長日可被抽懇祈之精誠之狀如件、

慶長十四年五月朔日　　秀忠御判

照高院殿

〔近江國輿地志略十志賀郡〕園城寺

今按ずるに、三井の領内は、見世村より南滋賀村まで五町十八間、南滋賀村より錦織村まで八町二十五間、錦織村より山上村まで六町十五間、山上村より新別所村まで七町四十五間、新別所村より神出村まで三町、神出村より藤尾村まで十八町、小關一里塚より横木村上の橋まで二十九町四十九間、小關越の內神出村領角堂石橋より藤尾領界まで十二町、藤尾村神出村領界より四宮領界まで十二町五十四間、四宮領藤尾領十禪師石橋まで九町六間、京街道横木四宮界より六町三十七間なり、是は元祿十三辰の年八月、六尺五寸の竿をもつて改之ところなり、御朱印の寫左にしるす、

長等山園城寺領、近江國滋賀郡五別所村七百九十五石二斗餘、山上村九百五十一石三斗餘、錦織村千三十三石六斗、南志賀村九百十二石一斗餘、見世村二百六十三石四斗餘、藤尾村、六百六十五石一斗餘、都合四千六百十九石九斗餘事、任寛文五年七月十一日先判之旨、寄附之訖、如有來可配當、幷殺生禁斷、守護使不入堺內、山林竹木諸役等免除、永不可相違者、可抽國家安泰之懇祈之狀如件、

貞享二年六月十一日　　御朱印

寺職

〔海人藻芥〕園城寺長吏者、聖護院、圓滿院、南龍院、常住院、實相院等、岡崎如意寺被拜任、此外其例稀ナル者也、

〔天台座主記 一〕第五圓珍和尚

同(○寛平)三年辛亥十月廿九日入滅(春秋七十八、夏臘六十九、)

大師遺言(○中略)

一園城寺、延暦寺末寺也、於別當職者、以座主擧狀幷寺牒、先盡用予門徒、无人時、以大師門弟可為別當、若予門人與慈覺大師門徒遂背者、同犯過、本寺牒送重過之由、可停止寺務職耳、(○中略)

一奉為地主三聖、予門徒必經奏聞、宍實申加年分度者耳、(○中略)

一我沒後、門人必與慈覺大師門徒相互成水乳義、令如父母兄弟耳、(○中略)

右十二ヶ條、大師御遺言、於和倘病床之前、手自握筆記之耳、

寛平三年十月廿八日、受法面受一乘佛子增命、

老僧圓珍(○以下三人署名略)

〔寺社分限記 一〕長等山園城寺　當長吏

圓滿院　照門　實相門

右三門之內、替々三年宛被勤之云々、

一四百拾九石餘　長吏　圓滿院常尊

參詣

〔山槐記〕永曆二年(○應保元年)四月七日己酉、今朝上皇(○後白河)幸園城寺別院平等院、(○中略)是長吏前大僧正(○行慶、藤原顯季前大僧正、)建立此堂、寄進御祈願寺云々、仍御幸、此事可被遂去月廿一日也、而天台衆徒、疑申可被越戒壇、置探題蜂起、仍御幸停止、上皇令含怒給、彼時山僧、御修法皆結願壞壇、故遂令申公家給、同以結願、殿下(○藤原伊通)同前、近日諸家不請山僧云々、座主最雲親王以下、皆以閉門、御修法結願之間、太似

城内寺院

有禁忌云々、可被尋子細之處、無彼兩事者、於有臨幸、更不可申云々、仍今日有御幸也、傳聞、山僧著甲冑、皆降東坂下成陣、若戒壇事、爲一定者、欲發向云々、不恐王化、悲事也、

〔左經記〕寛仁元年十月廿八日癸巳、慈覺大師門徒所修之竪義移三井寺、今日始修之、仍大殿〇藤原道長爲結緣御坐彼寺云々、

〔和漢三才圖會近江七十一〕長等山園城寺、〇中略五別所、

常在寺　水願寺　尾藏寺　微妙寺　近松寺　正法寺

人聖護院宮　實相院宮　圓滿院宮以此三門跡爲長吏　北院坊十九　中院坊十四　南院坊十九

〔近江國輿地志略志賀郡十三〕正法寺　法泉坊の西一町許山上にあり、始聖願寺と云、後正法寺に改む、本尊高観音如意輪西國順禮十四番自此奥至寺院禁女本堂南向、本尊金色等身の如意輪觀音、長二尺五寸、智證大師の作、或は大唐傳來の靈像と云、初は堂の嶺の南にあり、文明十三年、瑞夢を蒙て、今の地にうつす、此寺は、後三條院の御願寺、延久四年の草創、觀音の靈場、三十三所の第十四番なり、俗に頂禮觀音と云は是なり、堂前に舞臺一宇あり、志賀、辛崎、比良、堅田の邊まで、まのあたりに見へ、湖水の眺望大津の町は、本より眼下にして、景色限なし、此順禮のことは、金剛頂經に見へて、花山の法皇に始れり、

不動堂　正法寺の內なり、不動明王の像長四尺九寸四分、智證大師の作、文明十三年の建立なり、

〔壒囊五〕江州三井寺正法寺觀音　江州三井寺正法寺に、觀音の像を安置す、俗高觀音といふは非也、高觀音は、園城寺別院近水寺也、

常燈

〔園城寺傳記一〕金堂　常燈三燈事

東　切火　磨火　聖朝安穩祈火也　南保

中　玉火　佛法繁昌祈請火也　中保

西燈　國土豐饒祈火也　御油

天智天皇左右切無明指、左被埋內陳、右被燒正面燈、爲滅罪生善、爲慈尊結緣云々、此火有滅者、淨妙寺常燈火可取之由、西山之松月聖人被申云々、

古記云、天王寺常燈火可取之也、其謂、後白河法皇移三井唐院、建立五智光院、汲金堂水、加靈井水、被遂灌頂之時、取金堂御火、被燒天王寺故也、

〔本朝高僧傳 感進 五十〕洛北大雲寺沙門文慶傳

慶夢跋難陀龍供閼伽水、左袂拂地、甘泉沸騰、因告曰、此水在茲、人未知之、是三井金堂水源也、晨視其處、果清泉出、冬溫夏冷不分潦旱、號跋難陀龍池、園城慶祚來臨池曰、金堂水源、則請試其實、投念珠歸、已經三日、其珠數浮在金堂水、三日遲滯以被礙總也、從此三井門流念珠無總云、

〔顯如上人雜記〕法中

一三井寺、常ハ女人ヲ不被入、登ノ十四日晝ヨリ十五日八時マデハ、女人モユルサレテ參也、サテキヨメノ勤トテアリ、

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年（〇曆仁元年）七月十一日甲申、右京兆（〇北條義時）室々參園城寺給、是去年、當于禪定二位家一十三年御忌景、爲奉報彼恩德、於鎌倉所被終書功之一切經五千餘卷、今日又迎件御月忌、依被奉納于康院靈場也、當寺者聖靈之御歸依、施主御渴仰異他所云云、每經卷之奧令加左京兆署判給云云、

〔鹽尻 二十二〕一正德三年癸巳冬、前座主一品准后の宮（〇日光公辨）御附弟の爲に、圓滿院（三井寺）の貫主（〇尊覺法親王）を請ひまいらせたまふ、十二月十一日、阿部正喬朝臣（豐後守なり）を上使として、御心に任せらるべきよし仰ありし、昔より山門、寺門、むつまじからで戰にさへ及びし世ありけるに、今日、山、寺爭ふかたなく、園城寺の長吏、延曆寺の座主の御附弟とならせたまふ事、ためしなき御事にや、慈

崇福寺

覺、智證同じく玉泉の正流を汲み、四明の法燈をかゝげましますいかで法會へだてまいらすべきを、山門、三井、谷別の事になれるも、高祖大師の冥慮にはたがひ侍りなん、此度よりぞ、山寺むつまじく、ともに一乘の宗風も靜ならんと覺へ侍る、

○

〔拾芥抄 下本 諸寺〕十大寺　崇福寺 近江國、天智天皇御願、三井寺末、

〔伊呂波字類抄 志 諸寺〕崇福寺、志賀寺是也、天智天皇七年建之、○中略 四至 東限山際井栗林寺、南限高樋川井北暑額原山、下井大河内、至于白川、西限馬背山井白川河原、北限比叡山郎羽谷寺、

〔枕草子 九〕寺は○中略しが

〔書言字考節用集 二乾坤〕志賀寺シガデラ 江州志賀郡、天智帝草創、號崇福寺、見釋書、

〔近江國輿地志略 十四 志賀郡〕志賀寺遺跡　見世村より西の方五町ばかりにあり、今礎石悉あり、相傳是志賀寺本堂の跡なりと云、堂の大さ九間四面、本尊は勢至菩薩なりと云、是より一の谷の北に彌勒堂の跡あり、是より東南に觀音堂の跡あり、亦南に鐘樓の跡あり、是より下東に石佛の釋迦存す、大さ二間ばかり、土俗是を志賀寺水向の釋迦と云、夫より下に焔摩堂の跡あり、其餘少しばかりの寺院の舊地多し、是皆志賀山寺の舊跡なり、○中略今按するに、後に崇福寺を引移して、混一して、園城寺となす、今の三井寺是なり、

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕天喜五年十一月卅日、供養崇福寺、此寺者、勝形甲於天下、靈驗洽于寰中、草創以來、星霜多積、爰去治安二年、佛閣火災、如雲之構化燼、滿月之像爲灰、方今尋基址於曩時、建堂舍於舊地、又奉造金色彌勒菩薩像一體、脇士菩薩二體、總如本願、便擇曜宿、敬以供養、

西敎寺

名稱所在

西敎寺ハ、近江國滋賀郡坂本村ニ在リ、推古天皇ノ御願ニシテ、聖德太子ノ開基ト稱ス、文明中、天台ノ僧眞盛、大ニ堂舍ヲ興シ、中興開山ト爲ル、天台宗眞盛派ノ大本山タリ、

〔近江國輿地志略二十滋賀郡〕西敎寺　上坂本にあり、大窪山智善院西敎寺と號す、天台律宗、文明十八丙午の年、眞盛上人の開基なり、本尊阿彌陀佛佛工春日が作、不退轉念佛の道場、○中略　眞盛上人墓　西敎寺の堺內にあり、上人は、伊勢國一志郡小倭庄大仰村の人なり、父は小泉左近將監藤能と云、紀貫之十七代の後胤なり、父子倶に國司具敎卿に奉仕す、上人壯年にして薙髮し、比叡山に登り、天台律宗を弘む、今の眞盛派是なり、

創建沿革

〔親長卿記〕文明十七年十一月廿日、參內、依召也、今度山門西塔南谷住侶○眞盛、隱遁黑谷講釋等有其聞、諸人歸依之由被聞食、女中達以所望之分、可申遣元應寺存知之仁體也云々、何樣可申遣、但如此不慮之仁體出現、有外法之聞者也、信仰如何之由申了、無其儀之由、梶井宮被申云々、其名字眞盛、十二月六日、自元應寺有使、眞盛大德塵爲斟酌、仰之上者可罷上、於京都旅店事、並定日事可被仰下云々、卽侍使者伺之、自來八日七箇日可爲往生要集、旅店事可賞予宿所云々、卽仰此子細了、八日、眞盛大德上洛、卽奏聞、自今日有講釋、參內、下姿、於長橋局有講釋、人人祇候聽聞、

〔西敎寺記本寺所藏〕推古天皇、卽位二十六年、高麗國貢經使、慧慈慧澄ノ爲ニ開創シ、大窪山ノ勅號ヲ賜ヒ、上宮太子ヲ開基トス、○中略　天智天皇卽位八年、阿彌陀佛ヲ安置シ、西敎寺ノ勅額ヲ賜フ、○中略　圓融天皇ノ天元年中良源僧都慈惠大師ヲシテ堂塔ヲ修營シ、常行三昧ヲ修セシム、一條天皇ノ正曆年中、慈惠大師ノ法資、天台座主暹賀僧都、先皇ノ御例ニ任セテ、御願寺ノ官符ヲ申シ下ス、後醍醐天皇ノ元亨年間ニ、帝釋寺ノ妙觀大德、傳信和尙、曾テ惠心僧都ノ本堂ニ於テ開創セシ三昧別時佛名會ヲ奏請シテ、勅會ト爲セリ、同天皇正中二年ノ春、慈威和尙ニ勅シテ、本寺ヲ再興シ、後宇

寺領

多帝ノ御國忌ヲ修セシム、後土御門天皇ノ文明年間ニ、黑谷青龍寺ノ、眞盛上人、本寺ノ虛席ヲ補ヒ、四十六箇ノ、殿堂僧舍ヲ重修シ、大ニ圓戒稱名ノ二門ヲ闡揚シ、別ニ一派ヲ立テ、西教寺派ト稱ス、仍テ上人ヲ本寺ノ中興開山ト爲ス、同天皇ノ明應元壬子年、三月十七日、上人ヲ清涼殿ニ延請シ、天皇皇后東宮倶ニ圓頓戒幷ニ十念稱名ヲ受給ヒ、圓戒國師ノ嘉號ヲ賜リ、眞盛上人ノ四大字ヲ宸書シ、東宮後柏原天皇四大字ノ上ニ、上人平素ノ持偈ヲ書シテ之ヲ賜フ、同天皇、往生淨土ノ要旨ヲ勅諮シ給フ、上人、飛鳥井大納言雅親卿ニ就テ、一遍ノ法語ヲ上ル、之ヲ奏進ノ法語ト云フ、後柏原天皇、文龜年間、沙門等龍ニ勅シテ、眞盛上人、曾テ清涼殿ニ於テ、兩帝ノ御爲ニ、戒師奉仕ノ影像ヲ畫カシメ、宸書シ給フニ、上人在世ノ持言ヲ題シ、他日影像ヲ本寺ニ賜フ、此ヲ黑衣ノ眞影ト稱シ、本山舊影殿ノ本尊ト爲ス、正親町天皇ノ元龜二辛未年、九月十二日、叡山兵燹ニ罹リシ時、本寺モ亦其餘炎ヲ受ケ、四十六箇ノ殿堂僧舍、一朝悉ク烏有ニ歸セリ、尋テ再興ノ厳命ヲ奉ジ、豐臣秀吉公ヲ大檀那トシ、更ニ十坊ニ勸進シテ、後陽成天皇ノ天正十七年ニ至リテ、漸ク舊觀十分一ノ堂舍ヲ舊境內ノ、山腹ニ再營セリ、同十八庚寅年八月二十二日、第九世眞智上人ニ勅シテ、北白川ノ法勝寺ヲ本寺ニ兼併サシメ、彼寺ノ白川帝勅作ノ本尊、幷ニ傳來ノ寶物ヲ、本山ニ附屬セシメ給フ、爾來本山代々、寺主ノ命ヲ蒙ル日ニ必ズ兼法勝寺主ト爲シ、本寺ヲシテ永ク圓戒弘通、常行三昧ノ本道場ト爲シ給フ、故ニ當寺ヲ稱シテ、兼法勝西教寺ト號ス、後水尾天皇ノ、慶長十七壬子年ニ、德川政府ヨリ、寺領高九拾石ノ朱印地ヲ寄附セラル、

〔近江國輿地志略志賀郡二十〕西教寺　上坂本にあり、○中略　寺領九十石二斗六升餘、貞享年中の御朱印、則記す、

近江國滋賀郡東坂本村之內、九十石事、任元和三年九月十一日、寬永十三年十一月九日、寬文五年七月十一日、先判之旨、西教寺全收納、永不可有相違者也、

雜載

貞享二年六月十一日　御朱印

〔近江國輿地志略〈二十志賀郡〉〕西教寺〈○中略〉　藥師佛　座像二尺四五寸ばかり、別に方丈の中に安置す、是山城國粟田法勝寺の佛なり、彼寺廢壊の後、こゝに安置すと云、大師より傳來灌頂の寳物寄、此寺に在りと云、淡海錄に、毎年正月三日、寺院に入者あれば、食を與へて飽かしむ、是を西教寺の食貰と云と記せり、〈中略〉西教寺に至り、志れる僧に此ことをきくに、嘗てなしと云、

石山寺

石山寺ハ、一ニ石山院トモ云フ、近江國滋賀郡石山ニ在リ、聖武天皇ノ勅願ニシテ、僧良辨ヲ以テ開山トス、三十三所、觀音ノ一タリ、傳ヘ云フ、紫式部ノ源氏物語ヲ著ハスヤ、當寺ニ參籠シテ其筆ヲ執レリト、坊中仍ホ源氏ノ間ヲ存ス、

名稱

〔伊呂波字類抄〈伊諸寺〉〕石山イシヤマ

〔拾芥抄〈下末諸寺〉〕三十三所觀音　近江石山寺〈丈六土佛、二臂如意輪、良辨、爲聖武御願、〉

〔續修東大寺正倉院文書〈四十三〉〕造石山寺院所解　申買給米事

○按ズルニ、本書四十四卷ニ、又石山院トモ見ユ、

〔枕草子〈九〉〕寺は〈○中略〉石山

所在

〔東大寺要錄〈六〉〕石山寺

右寺、聖武天皇、遣良辨、行基、婆羅門僧正等、所創建矣、在近江國志賀郡、

〔東海道名所圖會〈二〉〕石光山石山寺〈志賀郡石山にあり、眞言宗仁和寺御室に屬す、西國巡禮十三番札所、〉

創建

〔石山寺緣起〈一〉〕夫石山寺者、聖武皇帝の勅願、良辨僧正の草創也、本尊は二臂の如意輪六寸の金銅

の像聖德太子二生の御本尊云々、丈六の尊像を造て、其御身に彼小像をこめたてまつる、左右に脇士あり、左は金剛藏王、右は執金剛神なり、略○中古老傳云、略○中此山にあたりて、紫雲常にかゝれり、略○中彼良辨僧正(于時大法師)事のよしを奏して、天皇の御本尊を申渡て、此山に草庵をかまへ、彼いはほの上に、本尊を安置したてまつりて、秘法を修するに、春三月、陸奥國より沙金をほりいだして、官庫にたてまつる、略○中秘法はでに結願の後、本尊ををさめて、まゐらむとするに、石の上をはなれたまはず、すなはち天皇に奏して、比良の大明神に、此地をひろげたてまつりて、佛閣をたてむがために、荊棘を切拂て、砂石をけづりたひらぐるに、五尺の寶鐸をほりいだす、まことに知ぬ、古佛靈跡、伽藍の處是なりといふことを、つひに東大寺にさきだちて、當寺を建立して、累世の勅願寺として、天長地久をいのりたてまつる、略○中延曆二十三年、當寺にて常樂會をはじめおこなふ、略○中亭子の御門(宇○多)つねに當寺に臨幸あり、

〔扶桑略記 拔萃 聖武〕天平廿一年(○天平感寶元年)己丑正月四日、或記云、東大寺大佛料、爲買黃金、企遣唐使、然宇佐神宮託宣云、可出此土者、世傳云、天皇差使於金峯山、令祈黃金之時出矣、託宣云、(一云入夢)我山之金、慈尊出世時取可用、但近江國志賀郡瀨田江邊、有一老翁石座、其上作觀音像、敬致祈請、黃金自出焉、仍訪求其處、安置如意輪觀音像、(今石山寺是也)沙門良辨法師祈誓件峯、其後不歷幾日、從陸奧國獻金、件金先分百廿兩、奉宇佐神宮、

〔東大寺要錄 一〕伊勢太神宮禰宜延平日記云、天平十九年丁亥九月廿九日、始而東大寺大佛盧舍那佛被奉鑄鎔、未成畢給、而依無可塗件大佛之金、天皇御心不靜、歎念御之間、夢示現御(須)告(云)、近江國栗太郡水海岸頭山脚有勝地、件地建立伽藍、而修如意輪法者、必金寶者可出來也者、卽御夢覺之後、件栗太郡勢田村下一勝地急建立伽藍、安置如意輪觀世音、(幷)執金剛神像各一體、(石山寺是也)修行件如意輪法給之程、以同年十二月、從下野國奏聞金出來之由也云々、天平勝寶元年、太神宮禰宜外從八

堂塔

位上神主首名被叙外從五位下、是依黄金出來也、〈已上記文〉

〔元亨釋書二十八寺像志〕石山寺者、聖武帝創東大寺鑄一十有六丈遮那銅像、多聚金爲薄、此時本朝未有黄金、帝語良辨法師曰、傳聞和州金峯山、其地皆黄金也、師祈金剛藏王、得金資綱像薄、不亦宜乎、辨入金峯山持念、夢藏王告曰、此山黄金不敢自恣也、今示汝別方、近州湖西勢多縣有一山、如意輪觀自在靈應之地也、汝至彼持念必得黄金、辨便赴勢多、時老翁座大石上釣魚、辨問曰、汝何人、對曰、我是山主比良明神也、此地觀音之靈區、言已不見、辨就其石結廬安如意輪像持誦、不幾奥州始貢黄金、爾後剏丈六大悲像、藏先像於中、亦造金剛藏王及執金剛神安左右、其像各八尺、當平基趾、地中得五尺寶鐸、益爲靈地、

〔近江國輿地志略三十六滋賀郡〕石山寺〈〇中略〉 總門　二階茶やの南にあり、北向なり、此總門の內より、二王門の前まで、兩側に坊舍あり、西傍西本坊、中西坊、東傍湖月坊、多聞坊、東池坊、梅本坊、岸本坊、

二王門　總門を入て一町ばかり東向にあり、左にある像を密迹金剛と云、右にあるを那羅延といふ、是俗の所謂二王なり、倶に運慶が作なり、額あり、石山寺の三字を書す、佐理の筆跡なりといふ、あるひは行能の筆なりといふ、〈〇中略〉 祖師堂　石壇の上にあり、つまびらかに圖と考見すべし、この堂中に、弘法大師の木像、左右に良辨僧正、及內供淳祐の木像を安置す、

〔近江國輿地志略三十七滋賀郡〕本堂〈〇石山寺〉　本尊如意輪觀音長六寸、厩戸皇子の御持尊、いま丈六佛の胸間に藏む、興正菩薩の作なりといふ人みな丈六の佛像のみを知て、胸間に本尊ある事を知らず、脇士は藏王權現と、執金剛神となり、各長八尺あり、毘沙門天一軀、本尊の傍にあり、相傳、古昔武衞源頼朝、掃部頭親義といふ者をして、叛逆の者を追討せしむ、親義當寺に來て、强敵敗亡のことをいのる、然後驅卒交兵、ときにおよんで、毘沙門天、味方にあらはる、すでにして强敵悉潰、親義觀喜踊躍して、一寺を創、毘沙門天の像をあんちし、勝南院と號すと、その後寺廢亡によつて、この本堂

に安置すといふ、〇中略　源氏間　本堂の傍、東に向て、一曲の窟を開もの、紫式部源氏物語を書せしところなり、故にこの名ありといふ、眼下に湖水を見、はるかに詠れば、日枝山、比良の高峯より、韓崎のまつは霧こめて、釣たる丶小舟あり、田上山に行かふ樵夫の吟も、まのあたりにきこえ、絶景美観なるがゆゑに、八月十五夜、月明なるとき、式部、須磨明石の卷より書初て、六十帖とはなしぬ、いまこの處より見れば、湖水少く見えて、さらに絶景とも言がたし、是見通すところの樹木繁茂すれば、眼を遮がゆゑなり、

〔扶桑略記〕三十白河承曆二年正月二日丁丑、午剋、近江石山寺燒亡、如意輪觀音像已爲灰燼了、

〔百練抄〕五白河承曆二年正月二日、石山寺燒亡、觀音尊顏不損、貴賤成隨喜、

〔親長卿記〕延德二年十月十九日、早旦參詣石山寺、乘輿自辰剋雨下、午剋下著橋本坊、去年一寺亂後、諸坊以外破損、寺家冷然之體也、

〔集古文書〕五十七勸進狀石山寺勸進狀近江國志賀郡石山寺藏

勸進沙門敬白

ことに、貴賤都鄙の檀越をすゝめて、隨分同志の助成をかうぶり靈驗無雙の佛閣を修して、善願如意の法輪を轉せんとこふ狀、〇中略

享祿元年十一月日　勸進沙門敬白

〔義演准后日記〕慶長七年九月十八日、石山供養、來廿三日治定歟、否之儀尋ニ、片桐市正へ、以愚札大坂へ持遣了、　廿二日丑剋雨降、明日御供養出仕裝束幷世間之道具等、凡人者五十人歟、運之、未明前へ、大藏卿法橋、幷侍十餘人相副遣之、予ハ辰末剋出門、坊官已下召具、凡及八九十人歟、於石山寺宿坊藏坊也、彼坊、今度山上行樹院深宥再興新造也、則爲宿坊一獻深宥僧都申付了、後ニハ當門ヨリ大藏卿率行申付了、一獻了、先觀音參詣、本堂周備無殘所、鎭守、拜殿、塔婆以下、悉成修理、或新造也、

驚目了、片桐市正入寺、其外諸大名爲聽聞入寺云々、奇特云々、廿三日、丑剋ヨリ天陰、寅剋神分亂聲、驚此樂聲、供奉衆等裝束著用、暫天明ヲ相待了、夜中職衆等諸役者、早々可出仕由仰觸了、○中略去廿二日、丑剋雨降、天明以後漸晴、戌剋又天陰、月光不明、爰偏觀音祈誓、寅剋後夜念誦、奉抽懇祈了、翌日廿三日雲普覆天、日輪不現、頻雨欲降、頗觀音加被ヲ仰、大師冥助ヲ賴外無他念、予早速出仕、法會始行、終以雨不降、一會無爲、誠佛力所致、銘肝歸宿坊、暫休息、裝束等納櫃了、歸寺、○下略

〔續史愚抄後陽成〕慶長八年五月□日□□依石山寺伽藍再造、有堂供養、及本尊觀世音開眼開帳等云々、

寺領

〔近江國輿地志略三十六志賀郡〕石山寺　則石山の上にあり、石光山石山寺と號す、淸少納言が枕草紙に、、寺は石山とほめけるも、このことなり、○中略　御朱印の寫、後にしるす、

近江國滋賀郡寺邊村之內、五百七十九石餘之事、任慶長十八年七月二十九日、元和三年三月十七日、寬永十三年十一月九日、寶永五年七月十一日、先判之旨、石山寺全收納、永不可有相違者也、仍如件、

貞享二年六月十一日　御朱印

什物

〔好古小錄乾〕石山寺緣起五卷、畫第一二三隆兼、詞杲守僧正、第四畫光信、補詞實隆公、第五畫隆光、詞爲重卿、佛刹繪詞傳ノ巨擘也

參詣

〔扶桑略記二十四醍醐〕延長六年閏八月十七日、法皇○宇多參御石山寺、京極御息所并重親王等扈從、

〔百練抄四花山〕寬和二年十月三日、圓融院去月廿九日參詣石山、今日自石山以船臨幸崇德寺、御打出濱之間、右少將齊信爲勅使參入、有送物、延喜御宇亭子院臨幸紀伊國之間、引淸和例被奉送了、

〔榮花物語七烏部野〕九月○長保三年　はいしやまゝうでとて、にようばうたちあまたいそぎの、しるゝ、ゐんの御まへ○詮子　はほとけの御丁のかたびら、いしやまのそうにほうぶくかづけものなどいそ

がせ給ものから、あやしう心ぼそうのみおぼさるゝことおほかり、その御けしきをみたてまつりて候人々も、うたてゆゝしきまでおもひなげくべし、京いでさせ給て、あはだぐち、せきやまのほど、しがのやまごえ、ものこゝろぼそうきこゆ、よろづあはれにおぼしめされて、あまたゝびゆきあふさかのせきみづにいまはかぎりのかげぞかなしき、との給はすれば、御くるまにさぶらひ給ふ、せんじのきみ、
としをへてゆきあふさかのしるしありてちとせのかげをせきもとめなん、とぞ申給、さてまゐりつかせ給て、御だうにまいらせ給よりよろづあはれにおぼしめされて、としごろまいりなれつる御前に、これはかぎりのたびぞかしとおぼされて、いみじうかなしうおぼしめさる、れいのやうに、御いのりすほうなどにもあらで、めつざいしやうせんのためにとて、ごまをぞおこなはせ給、よろづにあはれなるたびの、御いのりをせさせ給へば、御てらのそうども、ゝあるまじきことに、いかにおぼえさせ給にかと、あやしうおぢまうせど、などてか、これこそまいりはてのたびいのちのかぎりと、おもひこゝろざしたるみやづかひの、かぎりなりとて、あやおりものゝみちやうのかたびら、しろかねのはちども、そうどもに、別當よりはじめて、かずをつくして、ほうぶくどもくばらせ給、おなじく僧くやうせさせ給て、みてらの封などくはへさせ給て、御誦經などこゝろことにせさせ給へり、又まんどうゑなどせさせ給て、まかでさせ給とても、いみじうなかせ給、

〔拾芥抄〕下末、諸寺 石山寛治三十二十一、御幸、近江、

〔醍醐寺雜事記〕九 一院白河〇後 御幸事

承和三年春、一院頃者醍醐上下伽藍、并石間寺可ㇾ有御參詣之由云々、〇中略三月〇中略廿四日拂曉、有御幸、〇中略次日早旦、石山寺御拜見、無御逗留、即自大津方還御法住寺殿矣、

〔國太曆〕觀應元年三月八日、依宿願、今日參石山寺、雖爲凶會日齋日、不可忌之旨存之、仍參也、

〔看聞日記〕應永廿五年十一月八日、室町殿〇足利義持石山寺今日參詣、以卅三人觀音懺法被行、又於湖上船中觀音經三百卅三卷讀誦、是禁裏去御惱之時、立願被果遂云々、

〔親元日記〕寬正六年七月十七日壬戌、上樣〇足利義政石山寺本尊自去月開帳御參詣、女中御衆悉御はり輿也、御母御供、但御先江御參也、

〔今古殘葉九〕石山詣之記　松永貞德

みづのえねの秋、石山寺の御戸ひらかれたまふとて、京ゐなかのをみなわらはべまで、みなまうで侍ると聞て、ともなふ中のわかきどちは、たえずそゝのかされければ、みづからもたへずそゝのかされて、まだ曉より出侍り、〇中略石山につきて、からうじて待いでぬ、年へてあへるやうに、たがひにうれしく、ゑかく〳〵とかたりてのぼるに、よ□ゑまのごとくにたてるを見て、さてはこれによりて、山の名はおひけらしと、みな人ゑりぬ、まづ佛ををがみ奉らんと、堂の前に行に、堂はみなゝちかきとし、秀賴公の御本堂の、此世後の世の御ねがひのため、つくられたるとみえて、あたらしく、きよらなるに、むかしおぼゆる月のみかほのひかりあひたるも、いとたふとし、うしろなる山のとをかげより海をみれば、せたの長橋も目のまへに、みかみの山もほどちかく、たゞ一所にたゆたふ、〇中略それより源氏の間といふ所ありとて、みな人こぞるをみれば、本尊のうしろに、方丈ばかりの所侍り、むらさきとも、式部とも、えもしらぬものどものをがめばをがむとことゝて、すゝすりまはるもをかし、こゝにて、たゞに過んもさすがなれども、人しげゝればかたはらなる坊にやどりて、たゞうがみとり出て、書つけゝる、〇下略

〔艸山集記五〕登石山寺記

山也、以石名也、石之奇也、不可復名也、而此之山不以石而顯、而以圓通大士之靈應而高矣、癸卯五月

雜載

余登石山、會開扉之時也、貴賤男女蟻屯、人氣如烟、山色爲此蔽矣、寶殿之前、殆不可近、遙瞻仰而去、乃出而得門下之僧共休焉、（下略）

〔石山寺緣起〔五〕〕紫式部は故右少辨藤原爲時朝臣が女、上東門院の女房にて侍けるに、一條院の御をば選子內親王よりめづらしからん物語や侍と、女院へ申されたりけるを、式部におほせられて、つくらせられければ、この事を祈申さむとて、當寺に七箇日こもり侍けるに、水うみのかたは るばると見わたされて、心すみて、さまざまの風情眼にさへぎり、心にうかみけるを、とりあへぬ程にて、大般若の料紙の內陣にありけるを、心の中に本尊に申うけて、思あへぬ風情を書つけゝる、彼罪障懺悔のために、大般若經を一部かきて奉納しける、いまに當寺にありとぞ、この物語かきけるところをば、源氏の間と名づけて、その體かはらずぞ有なる、

關寺

關寺ハ、或ハ世喜寺ニ作ル、未ダ其創建ヲ詳ニセズ、後一條天皇ノ朝、僧源信之ヲ中興ス、本尊ハ五丈ノ彌勒佛ニシテ、往古大和國東大寺、河內國智識寺ノ大佛ト並稱シテ、日本ノ三大佛ト云ヘリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ近江國志賀郡大津關寺町ニ在リト云フ

名稱所在

〔拾芥抄下末諸寺部〕關寺（關和在二志賀郡一）

〔近江國輿地志略八志賀郡〕一　關寺　あるひは世喜寺につくる、今古俗にいへるところの、關寺の事にはあらず、いま土俗の關寺といふは、往還路の傍らなる小寺なり、○一日、關寺の地を見んために、件の地に巡覽す、逢坂いまの往還路のかたはらなる小寺なり、よつて寺號をとへば關寺といふ、○寺僧に問て謂らく、拾芥抄に、關寺は、日本三大佛の其一寺にて、丈六の彌勒ありしとのせ侍

創建

り、もしや緣起などこれなきやといへば、寺僧かつて知らざるよしをいへり、ことはりかな、その地にあらざるものを、いま土俗の關寺なりといふ寺は、阿彌陀堂とて、はるかに後代の草堂なりおもふに往古の關寺は、いまの上關寺町、中關寺町、下關寺町より、西の山こと〲くこれ關でらなるべし、かるがゆへにいまこの町の名あるとみへたり、上の關明神の社より、近松寺のさかいまでは、關寺の界內と見へたり、往古はこの關寺の門前を、ひだりに見て、京より松本、及び東にゆきたると見ゆ、いま關寺町と號し、關淸水町とよぶところあるを以て、これをかんがふべし、

〔關寺緣起〕會坂關東有佛場之舊址、耆老傳言、昔時此處有關寺、未知何代何人所創、堂宇壯麗、佛像高大、世所歸仰也、荒廢之後積星霜也亦久矣、頃有僧都源信者、一見歎聖跡之永亡、敎僧延鏡爲興復之計、鏡諾、於是告事於遠近、致勸於貴賤、以始營構、當夷基址、得石像三尺藥師佛、衆俗見之、始生源信之思、鏡又異之增力焉、前當國講師康尙幸毗首手鏡先謀之、造純金五丈彌勒佛、是追舊刹也、寬仁二年閏餘四月二十四日下刀、同五月二十一日終功、佛像已成、又自治安元年七月九日創伽藍營作、二年八月十九日半終其功、爰鏡意、雖厚於興隆、然而勤在止觀、因而不堪、飛錫于聚落、拂衣于田里、勸化衆俗、唯期檀施之自至、是以佛殿梁棟已架、落慶送日、前當國宰源經賴、當宰源濟政、知鏡之有勤、興復之功難然、二人相與謀事、遠近傳聞、深厚志之族修檀施、於是營功速終、結構已成、二重高閣巍々而挺、五丈尊容堂々而安、於乎僧都一見與其絕、檀越少計復鴻基、佛陀之威力至哉、先是治安元年十一月凡日夜、近松寺僧證昭偶夢、異僧來告○中略時洛東淸水寺有僧、名曰仁胤、與昭相好、昭往語關寺興復之事、胤曰、善哉子志、我有一牛形骸太强異於庸牛、今則與子、以之爲扶、照悅牽歸、卽送關寺以運土木、若斯六年于今、萬壽元年十月七日、當寺檀越周防掾息長正則、借牛使役、其夜正則夢、一僧告曰、噫女過乎、此牛者迦葉佛再來、權現牛畜鄙劣身、扶一寺興復鴻事、是不庸牛、正則驚覺、明旦適寺懺謝、以返牛矣、翌年五月朔日、伊賀掾諷時佐亦借牛而使、其夜時佐夢如正則之事、翌朝遣其家人大中臣安武於

本戶

參看

關寺、說由送返靈牛、都鄙傳聞此事、莫不一奇焉、世又流言、(萬壽二年五月上旬)來十六日關寺靈牛入滅、往而結緣、雖有此言、至十四日、牛運土木、猶若平日、十五日氣力俄疲、喘々臥堂下、十六日早旦、入道前大相國道長、(御堂關白)並禪定准后廻轅、右相府敎通、(大二條)內相府賴通(宇治)及連枝列、親光臨關寺、問靈牛入滅、殿下親直進靈牛之所、牛採青草試入其口、既至三公枉駕、誰又得息、畿內畿外男女忩々而來、若斯靈牛有命十六箇日、至今月晦日靈牛羸々自起、繞堂三匝、還臥本處、六月二日檀家之輩相謀、使畫工圖其像、當酉刻、丹靑敎牢、靈牛寂而氣絕、即埋骸骨于精舍之傍塔、

〔寺門傳記補錄 九〕世喜寺中興緣起

世喜寺在于會坂山東麓近松寺南、背山林、東接閭里、總門在東、左右柴垣與北近松寺總門相並立、本堂二重高樓、東向、左右回廊、本尊純金五丈彌勒如來也、本堂西南山脚有牛塔、是迦葉佛應化靈廟也、又本堂回廊外東南三層塔婆、又東立阿彌陀堂、東向、前有小堂、北側築垣中間開門、門差入東鎭守社、東立拜殿、本堂正面、寺廊中央有池、世稱關淸水者是也、當寺草創及開祖等未詳之、後一條院寬仁二年戊午、僧都源信中興、左京權大夫菅師長書緣起、如向出、

補曰、(○中略)寺號、菅氏緣起題注曰、世喜寺、舊曰關寺、行成卿書額作世喜寺、法會十卷書第三曰、世喜寺龍華會、後白河院保元三年戊寅四月十八日始行、本尊、拾芥抄曰、日本三大佛者、南都東大寺大佛、河州智識寺大佛(今號太平寺大佛)、近州關寺大佛(在志賀郡)、牛塔或記曰、牛堂石塔胴五尺、方圓、笠口徑八尺云云、

〔二中歷 三大佛〕古佛　和太　河二　江三

說云、和太謂東大寺大佛、(在添上郡)河二謂河內國智識寺、(在大縣郡、號太平寺)江三(近江國世喜寺、在志賀郡)

〔日本紀略 後一條 十三〕萬壽二年五月十七日戊戌、入道大相國(○藤原道長)向關寺給、彼牛稱迦葉佛所化云々、廿三日甲辰、右大臣(○藤原實資)向關寺給、四年三月一日壬寅、關寺供養、

〔山槐記〕治承三年二月廿九日、去廿五日禮塔之間、於二靈山邊一過二南無阿彌陀佛聖人一、聖人曰、依二三井寺大衆訴一、可レ建二立關寺一、先年、爲二山大衆一被レ燒也、仍人別米一升勸レ之、家中上下勸進給者、其後予勸レ之、今日八十人分且送レ之、

〔更科日記〕霜月〇長久四年の廿よ日、いしやまにまいる、雪うち降つゝ、みちのほどさへおかしきに、あふ坂の關を見るにもむかし越しも冬ぞかしと思ひいでらるゝに、そのほどしも、いとあらうふいたり、〇中略 關寺の、いかめしうつくられたるをみるにも、その折、あらづくりの、御かほばかり、みられし折、思出られて、年月の過にけるも、いとあわれなり、

〔海道記〕貞應二年卯月の上旬、五更に都を出で、一朝に旅立、〇中略 又相坂を下に、松をともして過行ば、四宮河原のわたりは、玄のゝめに通りぬ、小關を打越て、大津のうらをさして行、關寺の門をだにかへりみれば、金剛力士、忿怒のいかる眼を難し、〇下略

梵釋寺

名所所在

梵釋寺ハ、延暦五年、桓武天皇ノ勅願ニ由リテ建立スル所ニシテ、天皇等身ノ梵天帝釋二像ヲ安置ス、今廢寺ニシテ、舊地ハ近江國志賀郡ニ在リ、

〔伊呂波字類抄保諸寺〕梵釋寺在二近江國一、天長八年辛亥、天皇行二幸崇福寺一之次、施二入水田六十二町、封五百戸一、延暦三年造レ之、國史云、延暦五年正月壬子日勅造レ之云々、或書云、延暦五年正月日、近江國志賀郡勅建二梵釋寺一云々、

〔拾芥抄下本諸寺〕梵釋寺近江國志賀郡、延暦五正建立之、同十一年近江國水田百町勅施入、

〔近江國輿地志略十四志賀郡〕梵釋寺遺跡　今其遺跡不レ詳、然れども國史實錄の紋する所を以てみれば、崇福寺の邊と見へたり、定て此あたりなるべし、往昔は崇福寺に劣らざる寺院と見へたり、〇中略 淡海錄、此梵釋寺を日野岡本にありと云へり、甚非なり、是のみに限らず、淡海錄あやまり多し、

信ずべからざるの書なり、日野の梵釋寺は同名別寺なり、

創建

〔續日本紀 桓武 三十九〕延曆五年正月壬子、於近江國滋賀郡、始造梵釋寺矣、

〔十訓抄 六〕白壁皇子、孫王の號はおはしませども、かずの外にて位に卽給べくもなかりけるに、百河の宰相たがひに心ざし深くおはしければ、此事を歎て、等身の梵天帝釋の兩像をつくり奉りて、ねんごろに祈申ければ、無相違帝位に莅て、桓武天皇と申けり、此像を安置の寺今の梵釋寺也、これら樣こそかはれども、皆臣の助によれり、すべて忠臣と云者君のため名を惜て、命をおしまぬなり、

寺領

〔續日本紀 桓武 三十九〕延曆七年六月乙酉、下總越前二國封各五十戶施梵釋寺、

〔類聚三代格 十五〕勅、眞教有屬、隆其業者人王、法相無邊、闡其要者佛子、朕位膺四大、情存億兆、導德齊禮、雖遵有國之規、妙果勝因、思弘無上之道、是以披山水之名區、草創禪地、盡土木之妙製、莊飾伽藍、名曰梵釋寺、仍置清行禪師十人、三綱者在其中、施近江國水田一百町、延曆十年所施也 下總國食封五十戶、越前國五十戶、延曆七年所施也 以前充修理供養之費、所冀運茲馳驥、永流正法、時變陵谷、恒崇仁祠、以茲良因、普爲一切、上奉七廟、臨寶界而增尊、下覃万邦、登壽域而治慶、皇基永固、卜年無窮、本枝克隆、中外載逸、綿該幽顯、傍及懷生、望慈雲而出迷途、仰慧日而趣覺路、主者施行、

延曆十四年九月十五日

用途

〔延喜式 二十六 主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻 ○中略

近江國、○中略 梵釋寺料六百七十六束、

寺職

〔延喜式 二十一 玄蕃〕凡四天王、梵釋、常住、仁和等寺三綱、各以十僧內補之、

雜載

〔日本後紀 嵯峨 二十四〕弘仁六年正月丁亥、又崇福梵釋二寺者、禪居之淨域、伽藍之勝地也、今聞道俗相集、還穢佛地、繫馬牽牛、犯汙良繁、宜令近江國嚴加禁斷、若有不從制者、五位已上錄名、六位已下留身、並

言上、

〔類聚國史 三十一 帝王〕弘仁六年四月癸亥、幸近江國滋賀韓崎、便過崇福寺、○中略 更過梵釋寺、停輿賦詩、皇太弟及群臣奉和者衆、大僧都永忠、手自煎茶奉御、施御被、即御船泛湖、國司奏風俗歌儛、五位已上并掾已上賜衣被、史生以下郡司已上、賜綿有差、

〔日本紀略 嵯峨〕弘仁十一年閏正月丁卯、先是鑄銅四王像於常住寺、至是功成、遷近江國梵釋寺、

延祥寺

名稱 所在 寺格

延祥寺ハ、舊ト近江國志賀郡ニ在リ、淸和天皇貞觀八年、定額寺ニ列シ、尋デ陽成天皇元慶六年、天台別院ト爲ル、今廢寺タリ、

〔三代實錄 十二 淸和〕貞觀八年四月七日辛巳、以近江國志賀郡延祥寺、預之定額、

〔三代實錄 四十二 陽成〕元慶六年十二月十日戊申、勅以近江國延祥寺、爲天台別院、

最勝寺
妙法寺

名稱 所在

最勝寺及ビ妙法寺ハ、僧靜安ノ建立スル所ナリ、淸和天皇貞觀九年、官寺ト爲ス、今並ニ廢寺ニシテ、最勝寺ノ舊地ハ、近江國滋賀郡比良山麓最勝寺野ニ、妙法寺ハ同國神崎郡妙法寺村ニ在リ、

〔近江國輿地志略 二十九 志賀郡〕最勝寺野 比良山間ひろき野原なり、是いにしへ最勝寺の遺跡なりと

いふ、今按ずるに、○中略、元亨釋書曰、釋靜安從西大寺常騰學法相、嘗居比良山、讀十二佛名經、禮拜修懺、其聲聞帝闕、諸州聞有聞者、因茲勅賜僧官云云、又曰、釋慧達姓秦氏、美州人、事藥師寺仲繼學法相、嘗上比良山、修練者久云云、相傳、往古每歲二月二十四日、この寺にて法華八講を修す、これを比良の八講といふ、中世寺亡、八講も亦絕と云、いまに每年二月二十四日を、土俗ひらの八講のあれはてといふ、蓋この日かならず風はげしく、寒威また强し、その年によつて、寒暖遲速あれども、多はこの日すぐれば暖氣少く催、寒威のをはりを以、あれはてといふ、比良八講の期にはあらず、時候のまからしむる處なり、此日湖上烈風して、木の葉だもをかじと、比良明神の誓なりとて、船人はなはだつゝしむ俗諺なり、

〔近江國輿地志略 七十一 神崎郡〕妙法寺村　上野村の東南にあり、古昔妙法寺ありしと見へたり、

寺格

〔三代實錄 十四 淸和〕貞觀九年六月廿一日戊子、詔以近江國滋賀郡比良山妙法、最勝兩精舍、爲官寺、故律師傳燈大法師位靜安所建也、靜安弟子傳燈大法師賢眞、從唐還此、自申牒請、預於官寺、從之、

寺職

〔源氏物語 二十六 常夏〕したの本上にこそは侍らめ、おさなく侍し時だに、こ母のつねにくるしがりをしへ侍し、妙法寺のべたう大とこの、うぶやに侍りける、あへものとなん歎侍たうびし、げにいかでこのしたとさ、やめ侍らんと、思さはぎたるも、いとけうやうのこゝろふかく哀なりとみ給、

〔源氏物語湖月抄 二十六 常夏〕註　妙法寺近江國神崎東郡高屋鄕にあり云々、

雜載

〔類聚三代格 四〕太政官符

應令得度年分度者二人事

右被大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房宣偁、奉勅、護持國家、利益群生、妙法最勝、尤居其先、因茲自去延曆年中以降、一十二人、分配五宗、使之得度、於是天台花嚴、分鑣並驅、三論法相、學翅競飛、演說者衆、諳誦者寡、宜承前十二人之外、妙法蓮花經、最勝王經、經別一人

毎年聽度、隨業各入在近江國妙法並最勝等寺、其試定者、始從序品、盡令諸誦、若一句半偈、不分明者、並爲不第、縱二業中、無及第者、闕如待後歳之能者、

承和九年十二月廿七日○又見續日本後紀

によつて、使節大伴兼平、山林境內四至傍至これを定、勅印の繪圖官符を納たまふなり、昔日歷代天子の叡信武家の崇敬あげて數べからず、中世灰燼にかゝつて烏有となる、近ころ慶長年中、東照神君、荒張村の內寺領三十石、山林境內、往古の如く寄附したまふ、同十四年、住職玉藏院精賀、駿河府中に於て官符古記等、將軍家の上覽に備、希代靈地の旨嚴命あり、近隣の百姓等、四至の內、亂入猥藉を停止、山年貢滯なく寺納すべきの旨、板倉伊賀守、米津清右衞門に仰付られ、又同十七年改て御朱印を賜れり、　本尊釋迦如來像　丈六の座像、佛工春日の作なり、寺記に、春日大明神の作と云ものは非なり、　狛坂寺觀音像　閻浮檀金の立像長一尺許、元是當國蒲生郡狛長者所感の尊容也、相續して其女これを崇然して、後嵯峨天皇の后妃檀林皇后これを傳、又此尊天皇の護持僧願安大師これを傳來す、因て當山に安置すといへども、此山女人結界の地、結緣徧からざるによつて、一寺を狛坂に建立し、此尊を安置す、故に狛坂寺の觀音と云、然れども回祿の災、堂舍退轉す、之を以て當山に安置す、尙狛坂の條下に玄るす、〇中略

勸進狀一卷　靑蓮院尊鎭親王の御筆なり

其詞曰、勸進沙門敬白、請特蒙十方檀那助緣、建立江州栗太郡金勝寺本堂狀、右當寺、辱聖武天皇御宇、朗辨僧正稟叡旨有建立以來眞俗紹隆、處類繁茂、異于他伽藍也、嵯峨天皇奉勅、屆請勤操弘法守敏等十人之碩德、及地鎭結界受菩薩戒之儀、則恐可謂隨分之勝地矣、依之奉勸請鎭座諸神、伊勢、八幡、春日、熱田等之十二所權現、東西六社之盟誓、並覺影向、由緒不容易、於拜殿者、每日不斷勤行、于今無退轉、所弘眞言天台敎法、久住薛衲衆習之、所疑者請誦、修練之行業、鎭護之精祈無懈、併奉祈聖朝安穩、武運長久者也、和光靈驗、各揭焉也、爰本尊者春日大明神彫刻釋迦如來像也、不圖龍集天文十八年孟春上旬、回祿之災起、而梵宇一時成灰燼、云々、下略、臣〇寒川辰淸按ずるに、是を以て見る時は、天文年中までは堂舍繁昌と見へたり、此勸進狀の中に、本尊を春日明神の作と云こと甚妄說なり、こゝに

のみかぎらず、處々僞說を傳、今佛像に多く春日が作と云は、春日明神の御事にはなく、稽文會稽主勳といへる佛工が作れる佛なり、河內國春日郡の者なり、それを誤て此のごとくにはいへり、此ことは詳に鎌倉志等に論せり、○中略

村上天皇官符

左辨官下　近江國金勝寺

應禁制停止亂入四至濫行輩幷撿田收納臨時雜役事

四至 限東河原水屛谷 限南蒜野南鈴鹿 限西岡本禮山 限北境山陀羅尼原

右被太政官去年三月廿三日符偁、金勝寺者是寂靜念法之地、囂塵不到之門也、而民庶之愚不知其報、四至猶致濫行、不只違佛法、兼亦乖朝章、左大臣宣、奉宣、任先符追捕科罪、兼令禁制停止亂入彼寺四至之內、成濫行、幷撿田收納雜役事、永以爲規模者、禁制如件、

天曆八年四月七日　左大史小槻宿禰書判

左少辨藤原朝臣書判○中略

後醍醐天皇綸旨

當寺御祈禱事、近日殊可抽懇祈、且任天曆之例、於彼四至之內、停止甲乙人等亂入狼藉、可專佛法紹隆者、天氣如此、仍執達如件、

建武二年十一月十日　左少將書判

金勝寺住侶中

光嚴天皇院宣

當寺御祈禱事、近日殊可抽丹誠、且停止甲乙人亂入狼藉、可專佛法、院御氣色如此、仍執達如件、

貞和三年十二月廿三日　大藏卿書判

金勝寺大僧事〇中略

後奈良天皇綸旨

金勝山大菩提寺者、聖武天皇勅願、歷代慇懃尊崇所也、然今般彼寺本堂炎上再興事、早勸諸國緇素奉加、可令遂造營功之旨、依天氣執達如件、

天文十八年二月四日　左中辨書判

金勝寺之僧中〇中略

東照神君御朱印の書

近江國栗太郡金勝荒張村之內同三拾石、如先規令寄附之、全可寺納幷境內山林竹木諸役免除上者、永不可有相違者、守此旨佛寺勤行修造等無懈怠彌可抽天下安全精祈之狀如件、

慶長十七年五月三日　御朱印

金勝寺衆徒中

〔續日本後紀二淳和〕天長十年九月辛酉、以在近江國栗太郡金勝山大菩提寺、預定額寺、

〔近江國栗本郡金勝寺官符〕太政官符

應試度金勝寺年分者二人事

一人奉爲甲賀郡飯道名神、坂田郡山津照名神、

一人奉爲野州郡三上兵主兩名神、

可試法華經一部八卷、最勝〇勝下、類聚三代格有王字、經一部十卷、並法相宗、

右得近江國解偁、甲賀野州兩郡解偁、謹尋金勝寺古跡、昔有應化聖人、號金肅菩薩、朝廷尊崇、黎民歸依、金肅尸解之後、興福寺故傳燈大法師位願安、辭禪居此山、修練無比、至弘仁年中、奉爲國家、建立伽藍、於是唱導鄰價、郡部歡躍、厚沐朝恩、開此勝地、構造精舍、安置佛像、別建八宗院、書寫一切經論幷一

寺領

千一百部〇部下、類聚三代格有三字、法華經、朝講法華、夕演最勝、號之長講、更占一堂、殊定七僧、始從明旦、至〇至下、類聚三代格有于字、晩際、轉讀法華、稱之三昧、於是承和聖帝、殊降綸旨、施入燈分、卽改金甫、賜額金勝、智行者繼踵、研學者並肩、是以二時長講、逐日無缺、終日三昧、守時匪休、今件甲賀郡飯道名神、坂田郡山津照名神、野州郡三上兵主兩名神等、國家所尊崇、人民所歸仰、或山門之精勤、爲護法之鎭主、吏民之祝、必有感驗、因玆彼寺既作國中郡內、禳禍招福之境、亦巳久矣、就中三箇郡、尤是爲近隣、常蒙擁護、故毎有災變、共仰斯寺、〇寺下、類聚三代格有欲字、使彌增威光、以加冥助、殊振神力、而添鎭護、望請、遠經言上、奉爲彼四所名神、被賜件二人度者、唯兩部〇部、類聚三代格作郡、例輸之外、毎年各加課丁一人、令有調庸之备、所試年分者、專請京戸之人、不度外土之民、其試業准諸寺例、於彼寺課試、得度後六箇年間、不出山門、便轉讀本業經、專誓願彼名神、鎭衛國家、覆護村邑者、國加覆審、事非虛妄、仍錄事狀、謹請官裁者、從三位守權大納言兼右近衛大將行民部卿菅原朝臣道眞宣、奉勅依請、

寛平九年六月廿三日

〔近江國輿地志略四十五栗太郡〕金勝莊　觀音寺村、井上村、荒張村、上山依村、東坂村、中村、以上六ヶ村を、金勝の庄と云、往古は、金勝寺の領知なるべし、金勝寺に禁制書あり、

禁制　廣慶院領近江國金勝莊

一軍勢甲乙人亂入狼藉井守護使不入事

一伐採山林竹木事

右條々堅被停止之訖、若有違犯之輩者、可被處罪科之由所被仰下也、仍下知如件、

應仁二年正月廿三日

和泉守清原眞人花押

下野守三善朝臣花押

名稱 所在 堂塔　寺格　寺領

觀音寺

觀音寺ハ、近江國栗太郡蘆浦村ニ在リ、聖德太子ノ開基ナリト稱ス、

〔淡海温故錄一栗本郡〕蘆浦　蘆浦ノ觀音寺ハ、聖德太子ノ開基ニテ、本尊モ太子ノ作也ト云、

〔近江國輿地志略四十三栗太郡〕觀音寺　同〇蘆浦村にあり、寺領五百六十六石七斗三升五合、慶長五年關ケ原陣畢て、神君〇德川家康當所におゐて、十四屋と觀音寺の住持とに、江州の御代官を命じたまひ、且又湖水の船の總司を兼さしめたまふ、常憲院殿御代〇德川綱吉初召ゆるしたまふ、それ迄は山王祭禮の時も、山の法印觀音寺と云のぼりを立、湖水に船を出す、威光莫大なりしとなり、

〔寺格帳上天台宗〕御朱印高五百六拾石餘　江州蘆浦　觀音寺

右住職、京都於奉行所申渡、

一繼目爲御禮參府之節、御白書院獨禮、獻上押懸三掛ケ、御閾之外貳疊目、

一御暇於柳之間老中被仰渡、時服貳拜領之、廣登ニ而引

一年頭之御禮無之

〔寬文四年御朱印帳日蓮宗不受不施〕五百六十六石餘　近江寬永十六年八月六日　蘆浦　觀音寺

大菩提寺

大菩提寺ハ、近江國栗太郡ニ在リ、仁明天皇天長十年、定額寺ト爲ス、今廢寺ニシテ、其舊地ヲ詳ニセズ、

名稱	所在	寺格

名稱	所在	堂塔

〔續日本後紀仁明二〕天長十年九月辛酉、以在近江國栗太郡金勝山大菩提寺、預定額寺、

善水寺

善水寺ハ、近江國甲賀郡岩根山ニ在リ、元明天皇和銅年間ノ創建ト稱ス、本堂ハ延文五年ニ燒失シ、貞治五年ニ再建スル所ナリ、今天台宗ニ屬ス、

〔東海道名所圖會二〕岩根山善水寺（横田川の北岩根山にあり天台宗）

本尊藥師佛（脇士日光、月光、十二神將、四天王、倶に傳教大師の作、）　大師堂（境内にあり、元三大師を安す、）鎭守（六所權現を祭る、）　閼伽井（本堂の西にあり○中略）

寺記云それ當山は、元明帝の勅願にして、和銅寺と號す、厥後延暦中、傳敎大師比叡山根本中堂を營給ふ時、此山の良材を伐て、横田川に筏して、叡嶽に達せんとす、其年旱魃して河に水なし、大師登山して見給ふに、百傳池に梶葉涌出たり、其葉に良藥金留の四文字あり、大師即池中を探給へば、閻浮檀金一寸八歩の藥師佛を得たり、これを本尊として、請雨の法を修し給ふ、河水滿々として、良材みな坂本當麻浦に著せり、大師こゝに梵刹を創し、勅を奉て三尺の藥師佛を作り、金像を體中に藏む、台嶺の宗風にして、醫王善逝の靈水あればとて、善水寺とは號たり、

〔近江國輿地志略五十甲賀郡〕善水寺　岩根にあり、岩根山善水寺醫王院と號す、元明天皇の御宇、和銅年中の草創、國家鎭護の道場として、和銅寺と名づく、開基は何人と云ことをしらず、延暦年中、傳敎大師當山に居住あり、時に桓武天皇御惱あり、大師則醫王善靈の法を修し、香水を獻せしに、御惱忽平愈あり、叡感のあまり、比叡山草創の時、當寺を以て、比叡最初の別院となしたまふ、善水寺と名を賜ふ、爾來世々の勅願所、鎌倉頼朝卿以來、代々將軍家の祈願所なり、元龜二年、信長の兵火にかゝつて烏有となる、本堂は幸にまぬかれたり、其後は山麓の農民これをまもり、或は諸宗の僧

徒寓居す、天和年中より、東叡山の末寺となり、日光御門主の御支配となれり、除地高二十六石餘、境内二百五十一間に百二十間、地方一町八反八畝七歩、本尊藥師如來、傳敎大師の作、本堂は延文五年庚子三月炎上、貞治五年丙午五月建立す、今の本堂是なり、　大師堂　元三大師の像、則大師の自作なり、此堂は正德三年癸巳秋建立す、是古、昔大師堂の跡に建所なり、　觀音堂　本尊丈六の正觀音、慈覺大師の作なり、堂は元祿九丙子の年建立、同十五年壬午六月十八日、晝夜常念佛を初む、　地藏堂　石像、享保五年庚子秋に堂を建、　六所大權現社　所謂天照太神、八幡太神宮、山王權現、熱田明神、鹿島明神、以上六所一〇原書所缺なり、今の社建立の時代詳ならず、延文五年、元龜二年の炎上、幸にのがる、　八所大權現社　詳ならず　稻荷明神社　元祿年中に建立、觀音堂の鎭守なり、數丈の大石あり、石上に古松樹あり、樹下に此小社あり、　仁王門　二王像は傳敎大師の作なり　鐘樓　是古昔の鐘樓跡なり、寬文年中、東愚法師鐘を鑄、樓を建、東愚法師は久我家の人にて、當寺に寓居せる者なり、

錦織寺

錦織寺ハ、近江國野洲郡木部村ニ在リ、親鸞ノ舊跡ニシテ、眞宗木邊派ノ大本山タリ、

〔和漢三才圖會七十一近江〕錦織寺　在野須郡木部村淨土、號一向、貞永元年、親鸞聖人、自北國歸京時、寓于當寺、時聖人安所持阿彌陀像於佛壇念佛、其夜異人來、暫時織成丈半許錦、爲斗帳奇之、住持甚驚嘆爲弟子、後覺如上人、令予存覺住持、至其子慈空上人改以淨土宗、爲本覺本願寺派、但每二月十四五此兩日、唱和讃爲勤、

〔淡海溫故錄一野洲郡〕木部　木部ノ錦織寺ハ、御門徒宗ノ一派一流ノ本寺也、開山ハ慈空上人也、一

創建

向宗ニ違テ、代々聖僧念佛三昧ノ教法也、末寺所々ニ多シ、此寺ハ山本源氏錦織氏ノ人々、發心シテ建立也ヤ、

〔叢林集七下〕錦織寺

當寺濫觴ノ事、覺公ノ筆記トテ、一卷ノ縁起アリ、ソノ旨趣明ラカナリ、今彼ノ大略ヲ云ハヾ、祖師聖人、東關ノ境ヲ出デ、歸洛ノ旅ニヲモムキマシ〱テ、時ハ四條院ノ御宇、嘉禎元乙未年四月下旬、聖人六十三才ノ御時、當地(江州蒲生郡賓生庄木部)ニ入御シタマフ、日暮ニ及ンデ宿ヲモトメタマフニ、一ツノ堂アリ、(天安堂ト名ク)毘沙門天ヲ安置ス、堂ノ庭ニ松ノ樹アリ、枝ニ笈ヲカケテ、堂ノ上ニ休息シタマフ、時ニ一僧來問スルアリ、行脚ノ故ヲ聞テ去ル、其夜、聖人夢ヲ感ジタマフ、汝モシコノ地ニ於テ彌陀ノ像ヲ安ジ佛法ヲ興セバ、我レヨク弘通ヲ助ント云云、又當所ニ石鼻氏民部ト云フ宰アリ、同夜ノ夢ニ、多聞天枕ノ上ニ現ジテ、勅シテ云ク、弘法ノ客僧アリ、スミヤカニ歸仰スベシト、民部早朝ニ堂ヲミルニ、一僧ノ安居セルアリ、夢ミルトコロ是ナラント思ヒテ、靈示ノ旨ヲ談テ聖人ヲ屈請シ奉ツリ、ツキニ佛像ヲ本尊トシ、天王ヲ脇壇ニ移シテ居住弘化シタマフコト數回アリ、本書、眞佛、化身ノ兩篇ハ、當寺ニテ述作ナリ、嘉禎二年丙申正月下旬ニ筆ヲ擧テ、翌年四月中旬著述ノ功滿ツ、于時聖人六十五歳ト云云、爰ニ御弟子善性ト云フ人アリ、深ク御眞影ヲ願ヘリ、ツキニ御自ラ眞向ノ像ヲ圖シテ授與シタマフ、滿足ノ御影トテ今ニ傳ハル是レナリ、翌年御歳六十六歳、(○中略)同年(○曆仁元年)八月五日、勅額ヲタマフ、天神護法錦織之寺ト、聖人自ラ言ハク、我レ七旬ニ及ブマデ、未ダ一宇ヲ不結、シカルニイマ天王、人王ノ勅ニ依テ、末法弘法ノ地ヲ成ズ、是レ利物偏增ノ徴、遐代法潤ノ表ナリト、サレバ錦織寺ノ號ハ自ラ望ニ非ズ、叡感ノ勅號ナリ、聖人六十六歳ノ御創建ト謂ツベシ、(○中略)

慈養上人ノ時、大權現家康公、大坂退陣安堵ノ後、當寺ヘ立寄セタマフコトアリ、ソノトキ御寄附

堂塔

トシテ境内二十石永代下知ノ御朱印ヲ賜フ、今ニ相續ナリ、舊記并家ノ系圖ヲ按ズルニ、慈聖人ノ嘉禎暦仁之初メヨリ建武ノ比マデ、性信坊、善性坊、願明坊、愚咄坊ト、コノ寺ヲ相續セリ、

〔二十四輩順拜圖會一近江〕天神護法院錦織寺野洲郡木部にあり、淨土眞宗の一本山也、寺格雲上達つて、別當の官僧正に任ぜられ、御朱印地なり、役寺坊舍六區、本堂十間四方、本尊阿彌陀如來、天安堂には、多聞天の像を安置す、○中略本尊の如來は、高祖聖人、常陸國に御化導在ませし時、同國霞が浦の海中、よな／＼大なる光物有て照り輝き、里人獵師等甚怪み、聖人に是を告奉る、聖人彼所に至りて看給ふに、果して金光朗然たり、これ正敷靈佛にて在まさんとて、里人等を集め、大網を入れ、彼光物を引上させて見給へば、正に是妙色端嚴なる、阿彌陀佛の尊像にておはしける、○中略元祿七年五月五日、當山の堂塔殘らず回祿せり、其時此二尊像も燒失し給ひぬと思ふ所に、七日を經て後、二尊影火爐の中に安然と在まして、さしも烈き火の中なるに、少しも傷られ給はざりけるは、最尊くぞおわしける、

〔近江國輿地志略六十九野洲郡〕錦織寺　淨土眞宗　木部村にあり、○中略錦織寺は、五門徒の其一寺にして繁昌の地なり、今の堂は常憲院殿綱吉○德川の御母堂桂昌院殿の金銀等を賜て、建立する所なり、

寺職

〔門跡傳坤〕錦織寺御門跡同(眞宗)別派在二于江州野洲郡木部村一

綱嚴權大僧都兼親

本願寺第三世宗昭法印孫、常樂臺光玄法印眞弟、康永二年十月十七日、於二隨心院門室一得度、戒師經嚴大僧正、贈左大臣兼綱公猶子、觀應二年入嗣、錦織寺爲二中興一、康應二年七月二十日遷化、但師入嗣以前住務系譜不一、仍闕、五世兼爲時辭寺而本願寺兼善法印歸風、廣橋内府兼秀公男入嗣、號二慈達一、任二權大僧都一、世々一條殿爲二猶子一、補二門跡一、

〔安政三年雲上明覽大全上〕錦織寺御門跡

御宗旨眞宗　御領二十石

錦織寺御門跡實慈　十六

一條左大將忠香卿御猶子

御家司　松木日向　丹羽大隅　吉村豐前

江州木部

御用人　京都御掛所圓町二條上ル　光淨寺

観音寺

観音寺ハ、近江國蒲生郡石寺村繖山ノ半腹ニ在リ、天台宗ニ屬ス、初メ山巓ニ在リシガ、六角氏ノ城郭ヲ構フルニ及ビ、參詣者ノ爲ニ今ノ地ニ移セリト云フ、永祿六年兵火ニ罹リシヲ、後再建セリ、本尊ハ觀世音ニシテ、三十三所ノ一タリ、

〔拾芥抄下末諸寺〕三十三所觀音　同〇近江　觀音寺神崎郡、三尺千手、繖笠山、不知願主、

〔壒嚢抄十二〕三十三所トハ何々ゾ

觀音寺三尺、千手近江國神崎郡ニアリ、聖德太子ノ御建立、三間四面ノ堂也、

〔近江國輿地志略五十九蒲生郡〕觀音寺　觀音寺山にあり、則石寺村の中なり、略緣起に曰、近江國石寺村觀音寺は、人皇三十四代推古天皇の馭宇、聖德太子の御建立、江州十二箇所伽藍の中、其隨一なり、本尊千手大悲の像、長三尺、同直作なり、最靈佛なり、西國順禮三十二番なり、世人蘆浦の觀音寺といふ、又は豐浦の石寺村にあり、蘆浦は蒲生なり、臣(寒川辰清)按するに、蘆浦觀音寺は栗本郡にあり、別寺なり、近世印行の俗書、誤て當寺を蘆浦の觀音といふ、非なり、蘆浦の觀音寺といふとなるべし、

〔淡海温故錄二蒲生郡〕觀音寺　此山ヲ繖山、又天蓋山共、足垂山共、衣笠山共云、舊跡ニ沙々貴山共アリ、此寺聖德太子ノ開基ノ由、本尊ノ觀音モ太子ノ作也、順禮卅二番ノ札所也、古ハ今ノ堂ノ上ノ嶺ニアリタルト也、舊跡今ニアリ、六角屋形代々ノ城館アル故ニ、他國ヨリノ順禮ノ者ノ爲ニ、山ノ半腹ヘ下シテ再興アリ、永祿ノ後、又取替ル、卽今ノ所也、爰ハ種村伊豆守高安屋鋪跡ノ由也、舊記ニ、此ニ瑪瑙ノ大石アリ、承禎ノ時代迄有タル由、其後兵亂ニ失テ知レズ、甲賀ノ旗頭山中丹後

守秀國、太閤秀吉公ヘ出テ立身シ、先代ノ舊時ヲ慕ヒ、當山ニ參詣シ、彼瑪瑙ヲアナタコナタ尋求ケレ共、遂ニ知レザルト也、此山ノ嶺ヲ駒跟ト云、十方ケ嶺共、三國ケ嶺共云、三ケ國眼前ニ見ユルト云ニテノ名也、三國石トテ、峯ニ大石アリ、又屋形三國ノ間ト云大殿ヲ建テ、諸頭寄集政務ヲ執行ヒ、正月ニハ代々ノ重寶二尊ノ旗ヲ飾リ、祝儀アリ、常ニモ國ノ政要評定ハ此殿也ト云、常住ノ殿ハ其下今ノ觀音堂ノ近邊ニ跡アリ、

○按ズルニ、觀音寺ハ神崎蒲生兩郡ノ境ナル繖山ニ在リ、故ニ古ハ神崎郡ト爲シ後ニハ、蒲生郡ニ屬セシナラン、

〔觀音靈場記七〕第卅二番葦浦觀音寺

略緣起曰、近江國神崎郡石寺村觀音寺者、人皇卅四代推古天皇之御宇、聖德太子之御建立、江州十二箇所伽藍之中其隨一也、本尊千手大悲之像（御長三尺）者、同直作也、最靈佛也云々、（案ルニ、蘆浦觀音寺ハ、又豐浦石寺村ニアリ、故世人ハ蘆浦ノ觀音ト號ス、蘆浦ハ蒲生也、土俗傳テ云フ、往昔八耳太子日暮ニ此所ヲ過給ハ、蘆原中ニ人聲アリ、太子見給ハ、其聲異形ニシテ人面ノ如、魚鱗ナリ、朋背テ曰、我前生殺生ヲ好ミ、漁水ノ魚鱗ヲ採テ賣、是ヲ以渡世トス、此業ニ因、變生此身ヲ受タリ、願ハ聽者（太子ヲ云）慈悲ヲ垂玉ヘ、太子哀ニ思召、何ヲ以テ汝ヲ度セン、人魚又曰、願ハ此地ニ伽藍ヲ建立アリ、大悲ノ像ヲ安置シ玉ハ、我ハ此苦道ヲ出テ、天上ニ生セント云、太子因茲今堂建、千手像ヲ刻ミ安置シ給、又七日間稱名念佛シテ、彼ガ菩提ヲ弔給ハ、其滿散日天人降リ、太子ヲ拜シテ、我生ニ天中ニ受ニ妙樂ヲ、業ト鳴テ、聖者ノ御作力ニテ今忉利天ニ生セリ、故ニ來テ謝スト云テ、飛去ト云リ、（[illegible]）案ニ太子傳曆、太子諡近江、遊ニ檢志賀栗本等郡ノ諸寺、寶ヲ駐ニ駕栗津ニ、命ニ左右ニ曰、吾死後五十年ヲ過テ、有ニ一帝王ニ、遷ニ都此處ニ、治ニ國十年矣、近江國同（上）僧寄曰、蒲生河有ニ物、其形如ニ人非ニ人、如ニ魚非ニ魚、太子謂ニ左右ニ曰、竊始ニ子此ニ、夫人魚者非ニ瑞物ニ云云、（巳上）又大成經聖五、（[illegible]）推古天皇七年、淡海蒲生河ニ物アリ、形像ニシテ人面也、天皇異トシテ皇太子ニ問、太子奏曰、天皇ニ非ニ吉事ニ、又天下ノ動因ニ非云云、當按ニ、是等ノ説ヲ以テ今緣起ヲ記メルト見ヘリ、）

〔西國三十三所略緣起下〕第卅二觀音寺

近江國蒲生郡繖山觀音正寺は、人皇三十四代推古天皇の御宇、聖德太子の御草創なり、本尊千手十一面尊（御長三尺三寸）は、太子の御自作なり、太子諸國御遊覽のみぎり、當山はことに佛法有緣の勝地なりとて、御登山ましまし／＼、則靈木を撰びて尊像をきざみ、當山に安置し、また後代のしるしにと

て、太子御自筆をもて千手の像をうつしおきたまふ、いまの閼伽井坊の御影これなり、さて七堂伽藍并僧坊三十三身に擬し給ふとなり、また岩くらの秘所と申て、太子みづから大盤石に諸佛ぼさつの尊像を彫つけたまひて、後代までのしるしのためにのこしたまふとなり、天暦年中、宇多天皇第八の皇子、一品式部卿敦實親王、この山に居城したまひてより、當寺の本尊を御鎮護と崇敬したまふとなり、

〔長享年後畿内兵亂記〕永祿六年十月一日、爲佐々木四郎殿、後藤父子三人生害、〇中略 于時觀音寺騷動、九日巳剋、御親父承禎、三雲館江御退、于時軍卒觀音寺亂妨、一字不殘燒失、觀音寺本堂迄回祿、

〔梅松論上〕七日〇元弘三年五月の夜半に、六波羅を御出〇光嚴有て、苦集滅道をへて、東に赴て勢多の橋をも渡しかば、野路邊にて天既に明ぬ、〇中略 其夜は近江國觀音寺を、一夜の皇居とす、

總見寺

總見寺ハ、近江國蒲生郡安土ニ在リ、織田信長ノ創建ニシテ、其從弟座元禪師ヲ以テ開山トス、臨濟宗ニ屬セリ、

〔和漢三才圖會七十一近江〕總見寺 在安土 禪宗 寺領二百石 織田信長建立

〔近江國輿地志略五十八蒲生郡〕總見寺 安土山にあり、百々の橋を過て山門に入、山門の左右に二王を安置す、遠見山總見寺の額を架す、建部傳内筆なり、本堂の上に閣あり圓通閣と云三字の額を架す、本尊觀世音、左右に文殊普賢の二大士を安置す、佛殿の裏に信長公の像あり、此左の方に天雲院殿贈三品羽林仙巖大居士の畫像あり、是信長の嫡子信忠なり、本堂の内に信長の謎の額あり、畫は狩野永德なり、其繪はそら飯、べら一本、角棒一本、蚊帳一つ、人が箕を捧指上る處なり、此謎解

し樣はべらをすて氣をすぐにもつてかせげば身を持あげると云ことにて、安土城の廣間にかけ置、諸大名の誠にせられしことなりと云、鎭守熱田大明神の社は、佛殿の東にあり、當寺は信長在世に草創し、開基は正仲剛下座元禪師と云僧なり、信長これを招き住持せしむ、夫より以來今に至て、代々織田家の氏族相續して住持す、座元禪師は信長の從弟なり、寺今京北妙心寺の末寺なり、

寺格寺領

〔寺格帳下臨濟宗濟家關山派〕御朱印一高貳百貳拾七石五斗　江州安土　總見寺

右住職、弟子讓、

一入院之御禮、御白書院、獨禮獻上壹束壹卷、御關之外三疊目、

一御暇、於柳之間、老中被仰渡、時服二拜領之、

一年頭御禮無之

雜載

〔總見寺文書〕總見院殿ゑやうつきとて、いさゝかそうをくやうし、こゝろざしをし侍りけるついでに、六字のみやうがうをかしらにすへて、うたをよみ、影前に廻向しけり、

龍山〇近衞前久

南　なさけゆへとしはふれどもかなしさのいやまさりぬるわがなみだかな

無　むつましき人のむかしのおもかげをゑにうつしつゝむかふあけくれ

阿　あさからずたのみし人をさきだてゝのこるかひなき身こそつらけれ

彌　みちしらばゆきてあはんとなげくかなきえにし人をゑたふあまりに

陀　たれもみなながらへはてぬうき世ぞとおもひとりてもなげくわかれぢ

佛　ふたゝびとかへらぬみちをおもひわびなみだせきあへぬ袖のうへかな

慶長五年六月二日

名稱
所在
堂塔

〔總見寺文書〕就當國在陣被立勅使候、殊御作囊物并唐墨從兩御所樣拜領被頂戴忝存候、此表之趣自是難可致言上候、一揆之類を如何と遠慮仕候、然而被仰下候條、無冥加之次第候、此旨宜被達叡聞事可爲大慶候、恐々謹言

九月十八日　信長黒印

勸修寺大納言殿

百濟寺

百濟寺ハ、近江國愛智郡百濟寺村ニ在リ、推古天皇ノ朝、聖德太子ノ創建ニシテ、初メ百濟ノ僧惠聰等ヲ以テ住持トス、因テ百濟寺ト號ス、此寺屢、火災等ノ厄ニ罹リシヲ再建セリト云フ、

〔淡海温故錄二愛智郡〕百濟寺　推古天皇ノ御宇ニ、聖德太子百濟寺ヲ開基也云、上宮太子神崎郡石馬寺ヲ草創ノトキ、東ニ向ヒ金色ノ光明立リ、往テ其所ヲ見レバ、大杉アッテ其木ノ梢ヨリ光明耀ナリ、是靈木也ト、立木ヲ其儘ニ觀音ノ像ヲ自ヲ彫刻シ、即佛閣ヲ造立アッテヨリ以來、繁昌ノ靈跡トナリ、僧徒多ク集リ、大傾ヲ寄附有テ、大伽藍地也、天智天皇四年ニ、百濟國ノ王子來朝有シヲ、當寺ニ止置テ、彼王子眷屬共ニ居住有テ、是ヨリ百濟寺ト號スト云、佛前ノ華瓶モ、百濟ヨリ來レル由、今ニ存セリ、下馬ノ石、弘法大師小野ノ道風ノ筆跡二本アリ、盛衰記ニ、木曾殿上洛ノ時、愛智ノ川原ニ長陣故、兵粮盡テ百濟寺ニ頼レケレバ、白米五百石ヲ送進ス、義仲喜悅ノ餘、押達ノ庄内五鄕永代寄附ト云々、其比迄ハ繁昌ト見ヘタリ、中比金蓮院源重僧都云住持アリ、延文年中、犬上郡小野ノ神祠一万大菩薩、來現ヲ告テ云、師願クハ吾ヲ卅番神中ニ入ベシト、僧都答云、愚僧爭

カ番神ヲ儘ニセンヤ、併神慮ニ任スベシ、汝ニ瑞相ヲ示玉ヘト、トキニ神勅ニ曰、吾ヲ稲荷大明神次ニ並ヨト、杖ヲ突立置テ、消ガ如クニ失玉ヒヌ、其杖、生付テ椋トナレリ、百濟寺ニテハ一万、大菩薩ヲ番神トシ、佛法擁護ノ守護神ト崇メ、神祠ヲ建テ敬ト也、此本尊觀音ハ、千餘歳自然木ニテ在ス所ニ、天文十一年十一月十八日、火災アリ、其七日前ヨリ毎夜別當寺務ノ夢相ニテ、吾是ヲ切テ急ギ外院ニ移シ、爰ヲ退ヨト告グ、衆僧疑惑シテ延引スル所、夢ノ告又頻也ケレバ、衆僧一決シテ、座下ヨリ切離ス、果シテ本堂炎燒シケレ共、早速本尊ハ別院ニ移シテ、今ニ存セリト云傳ヘリ、

〔近江國輿地志略七十三愛智郡〕百濟寺　百濟寺村にあり、釋迦山百濟寺と號す、緣起曰、推古天皇十五年丁卯、聖德太子御草創、百濟國僧惠聰、道欣、觀勒等、依太子命初住、因以寺號百濟、爲世之勅願所、本尊十一面觀音大士、即太子御彫刻、長八尺、以生木不裁井彫刻、相傳杉樹也、古昔七堂伽藍也、學生又謂東座内陣之座也、近世是謂衆徒三百坊、山都登職、號政所堂衆、又謂西座外陣之座也、近世是謂寺中又滿登方三百坊、此敬中御門宣秀卿明應七年之一通見、明應七年戊午八月九日、諸堂悉炎上、其時堂內有之記錄等迄燒失、因玆唯本尊奉取出、并三百坊舍、一字不殘、後土御門院明應七年八月十六日、本尊修復、伽藍再興綸旨、左中辨在判、佐々木氏綱下知、永正元年甲子閏三月二十七日、四至傍爾證文書替、伊達出羽守氏豐判物、同義實定頼兩墨判、永正十八年辛巳七月二日、傍爾八方掘、同義秀義賢兩下知、永祿四年辛酉九月二十三日、四至傍爾、目賀多相模守賢廣判物、三井豐前守定武判物、右四至之內、凡東西二里、南北一里、田畠今方高千七百五十斛餘者山林也、永祿十一年戊辰九月二十二日、如前々知行分、并山林境內免許、織田彈正忠信長公御證印物、世是紀御朱印同御下知中川八郎右衞門尉重政判物、天正元年癸酉四月十五日、有故爲信長公當寺滅亡、以上再興以前之傳來如右天正三年乙亥、當寺再興、小堂建立、雖然慶長七年壬寅迄二十八年之間、無寺領、天正年中、無寺領之間、當所地頭佐和山主堀久太郎秀政判物與、後號羽柴左衞門督、同十二年甲申、從羽柴左衞門督豐臣

寺領

秀政、本堂重建、堂間七間、棟札在于今、天正十三年乙酉十一月十八日、神崎郡御園野村住田中久兵衛吉政寄附狀并板札、久兵衛後號兵部少輔、慶長七年壬寅、當知行分、寺家內屋敷高四拾六石五斗、北俗五拾石、不動前五十石、合百四拾六石五斗、從此年可所務之旨、家康公仰米津淸右衛門親勝判物二通、右寺領并山林境內如前々執菲受、同十七壬子年五月三日、被爲出之、但此御朱印表者、右之屋敷高相除高百石之御證文也、東照神君御朱印、從是御代々都六通有之、同依仰慶長中圓光寺判物一通慶長中一通、寬永十一年甲戌八月十七日一通、慈眼大師天海御書出、明正院帝寬永十四年丁丑五月二十六日、當本堂重建綸旨、左大辨在判、右之古記本堂寶藏有之、此外佛繪經論等之類甚多、具不書記、今現坊二有之、龍華院、喜見院、龍華院者、山科象帶之、現住喜見院也、號百濟寺政所喜見院、自坊府庫故座主宮御判物、足利家御判物、佐々木淺井等判物、其外勅筆台翰、總古筆類多云々、臣按するに、以上の緣起中疑しきもの二あり、佐々木義實定賴と兩判ありといひ、亦義秀義賢兩下知といふとなり、誤なるべし、佐々木氏に義實義秀といふものなし、是澤田生が安淡江源武鑑、三十卷の諸家大系圖等に出たる僞名にて、其人はなし、臣此ことを室鳩巢先生、及水戶の安積覺翁にきけり、猶又佐々木家の嫡流たる佐々木定明に、再三これを正し、日光山東照神廟に納るところの、佐々木家系の寫を以て訂正するに、嘗て以て佐々木家に義實義秀といふものなし、僞なること明けし、佐々木定明は松平加賀宰相君の老臣にして、臣が友なり、

開基以來の本尊十一面觀音これと安置して、慶安三年庚寅造立なり、　鐘樓　仁王門　本堂　堂間五間四面、

熊野三所權現社　相殿なり　辨才天堂　御供所　倶に本堂の傍にあり

〔源平盛衰記三十〕木曾山門牒狀事

木曾ハ返狀到來ノ程、馬ノ草飼ヨシトテ、蒲生ニ陣ヲ取テ、日數ヲ經テ、兵粮米ナカリケレ、使者ヲ百濟寺ヘ遣テ乞之、住侶僉議シテ、五百石ノ兵米ヲ送ル、木曾其志ヲ感ジテ、當寺ノ御油料トシテ、

雜載

押立五郷ヲ寄進セリ、

〔寛文四年御朱印帳天台宗〕百石　近江慶長十七年五月三日　百濟寺

〔亞槐集雜九〕近江國柏木といふは知る所にて、應仁の亂世以來、おり〱下りてすみ侍し比、おなじ國百濟寺西谷の曼陀羅堂の前に、古物懸あり、二本關たるを、うへつぎたきよし、寺僧ども頻望侍し、難波一流のうへ、侍る懸なり、かの説當流の説、通用の事有て、そのやうをぞうへをき侍し、さてこのかゝりうへける人、誰かと申傳侍りけると、尋ね侍れども、時代へだゝりたる事にて、そのぬし知れる人もなきよし、申もあはれにて、妙香院といふ僧坊に、さしをかせ侍し、

庭の松けふうへそへていつの世の誰ともしらぬ跡しのぶなり

名稱所在堂塔

金剛輪寺

金剛輪寺ハ、俗ニ松尾寺ト云フ、近江國愛智郡松尾村ニ在リ、聖武天皇勅願所ニシテ、僧行基ノ開基スル所ナリト稱ス、今天台宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會近江七十一〕金剛輪寺　在松尾村　同〇天台　寺領三十石

〔近江國輿地志略愛智郡七十二〕金剛輪寺　松尾村にあり、土俗松尾寺といふもの是なり、寺記曰、近江國愛智郡松峯山金剛輪寺者、聖武天皇勅願所、天平九年丁丑、行基菩薩開基、慈覺大師登山已來、三密瑜伽道場、天下安全御祈禱所、開基後無炎燒、元和四年乙午巳來、今年迄百拾五年無開帳、本堂本尊聖觀音、行基菩薩一刀三禮御作、脇士四天王、傳敎大師御作、堂九尺間七間四面也、護摩堂、不動明王智證大師御作、三重塔、大日如來、慈覺大師御作、三間四面也、文珠堂本尊運慶作、三間四面、鎭守三所

名稱 所在　創建 堂塔

權現社、加賀白山、熊野本宮、日吉十禪師、三間四面、樓門二天運慶作、二間四間、鐘樓堂二間四間、坊數十八軒、內一軒衆徒、十七軒寺中、外滅罪所一軒、御朱印高三拾石、天台宗山城國一乘寺曼珠院御門跡御末寺也云々、

永源寺

永源寺ハ、近江國愛智郡高野村ニ在リ、臨濟宗ノ一本山ニシテ、南北朝ノ比、入唐僧元光ノ開基スル所ナリ、勅願寺ニシテ、其住持ハ、京都ノ天龍寺ト同位ナリト云フ、

〔淡海温故錄二愛智郡〕高野　此所ニ、永源寺トテ、臨濟家一派ノ本寺アリ、草創ハ、佐々貴六角判官氏賴入道、金剛寺殿崇永雪江大居士、老後ニ及テ、佛法ヲ信ジ、殊ニ禪宗鎌倉ノ大覺禪師ノ宗風ヲ歸依アツテ、分國ニ、一寺ヲ建立スベシトテ、當山ヲ開キ、崇永ノ永ト、氏ノ源ヲ取テ、永源寺ト號ス、○中略此所ヲ、高野ト云ハ、紀州ノ高野山ヲ寫サレ、開山寂室モ、正シキ弘法ノ再來也ト、○中略又山號ヲ、瑞石山ト云ハ、境內ニ龍門ノ瀧アリ、

〔近江國輿地志略七十三愛智郡〕永源寺　高野村にあり、瑞龍山永源寺と號す、臨濟一派の本寺なり、開山寂室禪師、○中略含空院と號せるは輪藏にて、經堂なり、識廬龍門の瀧、退耕庵等あり、

〔近江國輿地志略七十三愛智郡〕永源寺　當寺の緣起に曰、夫當山は、禪宗濟家一派の本寺にして、代々勅願所なり、開山は、寂室大和尙、諱を元光と申侍りぬ、後小松院御宇、圓應禪師の贈號を賜、俗姓は小野宮左大臣實賴公七世の孫なり、○中略後醍醐天皇御宇、元應二年庚申、開山三十一の年入唐、中峯古林等の諸大知識に見え、名山靈地を見めぐり、七年を經て歸朝したまふ、年久しく西國にかゝり庵して閑居せり、或時、江州へ來り給ひぬ、國の守佐々木六角判官源氏賴嚴永居士、大に信仰し、今

の寺地并に門前の熊原を寺領に寄附し、伽藍を建立せり、開山年七十一、後光嚴院御宇康安元年辛丑正月十八日、入寺したまふ、道德四方に聞え、天下の名僧も多く集り、衆僧二千人に及べり、長勝寺、天龍寺、建長寺、住持職の事、綸旨公帖をなし下したまふ、鹿苑院義滿公、寺領并に御祈願の公帖を賜、後光嚴院帝宸翰を染させたまひ、再三法要を叡問し給ふ、則法語一篇を奉り給へば、淺からず叡感したまふ、其外貴賤僧俗其德を仰こと、語錄等に詳なり、○中略開山傳法の弟子、松嶺靈仲彌天越溪といふ四人にそ、稱光院御宇、各謚號を給ふ、本寺の左右に伽藍建立あり、永安、興源、曹源、退藏、これを當寺の四派といひ侍るなり、昔は境内東西すべて三十七八町、その間寺院相連れり、寺の前の三村を高野熊原山上といひて、古來の證文等にも載ぬ、それにより山上派ともいへり貞治六年丁未九月朔日、開山七十あまり八のとし遷化したまふ、塔を大寂といひ、塔院を含空と名づけぬ四人の弟子、次第に住持せり、松嶺の時、勝定院一位義持公、つねに御崇敬淺からざるにより、都より來せ給ひ、法要を問せたまふ、其時勢州守忠莊を、寺供に增加したまふ、歸らせ賜ひて後、松嶺の壽像を書かせ、身をはなたずとこしなべに恭敬をなしたまふ、後土御門院、黃衣の永宣旨、後奈良院、紫衣の永宣旨をなし下したまふ、代々出世を執行來ること年久し、永祿六、七、二年の兵火にかゝり、寺院多く灰と成、しばらくおとろへたる處、寬永二十年秋八月、後水尾院の命によりて、佛頂禪師一絲入寺、それより法燈再びこの地を耀せり、後水尾院より、唐作の釋迦迦葉阿難の三尊、并に宸翰の釋迦の名號を御寄附したまふ、東福門院御仰ありて、伽藍ふたゝび造營あり、又馬郞婦の觀音を、金備にて御手自造らせたまひ、其外佛前の御斗帳等、當寺相續の御願として、品々御寄附したまふ、圓照寺の宮よりも、佛祖の舍利、寶塔に納め御寄附あり、後水尾院、東福門院、御歸依ことに淺からず、開山三百年忌、又ハ唐本の大藏經を納め時も數々の金をめぐみたまふ、當寺無緣所のこと、常に御心をなやましたまふ、前井伊掃部頭直澄へ御奉書をなし下し給ひて、

寺領

外護すべきよし仰ごとあり、紫衣出世の法式暫中絶しぬ、殿有院の御代、延寶三年、住持南嶺參府いたし、願ひ奉るに、古の由緒正しきを台聽したまひて、常紫衣の御奉書を賜り、御前近く見させたまふ、常よりも行末長く、勅願寺たるべき仰ありて、年毎に參內、院參等勤來れり、當寺常に衆僧百人ばかり集り居て、夏冬二時の諸制、叢林の規式おこたりなく修行をはげまし、日々に天下御安全、國家御長久を祈り奉りぬ、寔に當地の世に勝れたる、山の景、水のながれ、いづれの畫師も筆を拋ならし、靈佛靈寶伽藍等の、一々の名こゝに略して載侍らず、○中略 山名修理大夫義理入道、當寺に住す、永祿七年五月廿三日、小倉等、同士軍に放火、元龜二年十二月廿八日、信長放火に罹る、

〔翰林胡蘆集〕江州瑞石山永源禪寺幹緣疏幷序

本寺開山勅諡圓應禪師寂室大和尙、蚤入佛燈帝師室、機緣相契後遊大元、親炙中峯本公、暨扣元叟古林靈石之門、已而歸國、志在靜退、延文年中、江州刺史雪江居士、嚮其道風、獻地居焉、所謂雪溪是也、山之壁立於後者曰飾山、民家之櫛比於前者曰高野、師覩其幽邃、輙卓錫而止之、蓋雖風穴之白丁、藥山之牛欄、常公之大梅、不可以加焉、然后山下父老、子來助役、漸成梵刹、號曰永源山、曰飾高、後更名瑞石、以有石之異也、於是道望重于帝里、貞治帝親染宸翰、以問法要、下詔住持天龍、確乎不起、又東人以建長來聘、皆斥之、世壽七十八歲示滅、含空之院號塔曰大寂、實貞治丁未九月一日也、邇而數之百二十八年于茲矣、其上首某々分成四派、各建塔院、附庸于本寺、永安、曹源、興源、退藏是也、榱櫨翬飛於白雲靑嶂之間、一方勝槩也、明應壬子、官軍有事于江、而寺嬰兵燹、咸盡矣、諸徒相議曰、興復之役不容緩、欲重建方丈、僧堂、佛殿、廊廡山門、廚庫、塔院、衆寮、而所費不貲、非衆緣所募、則未易成就、謹持短疏、徧告王公貴人長者居士同道知識、伏望樂施所獲勝報、專祝邦家安全、次爲庶民祈福者、

〔永源寺文書 二〕近江國山上永源寺領、幷諸末寺等敷地散在田畠、目錄在別紙、段錢、臨時課役、守護役、人夫、諸公事以下事、所令免許也、早於有限本所年貢者致其沙汰、至下地者、正方々綺、爲守護同諸本所不

入之地、可停止使者入部之狀、如件、

延德參年八月六日　花押〇足利義植

〔永源寺文書　二〕近江國山上永源寺領、同國愛智郡池庄内名田、栗本南郡田上中庄下司公文職、牧庄内在家田、上牧中庄内名田、小掠庄岸下鄉下司總追捕使兩職、進佛彌平次名散在田地、利松得恒藤二郎名田、中別當職名田、神崎郡栗見本庄小社鄉内、所々柿御園下鄉名田、蒲生郡安吉鄉田地、日野牧上保内池尻田地、奧津野散在名田、買得散在名田、并諸末寺等之事、當知行無相違、若僞申者、任御法、可糺御罪科者也、仍請文如件、

延德參年七月十六日　永源寺雜掌清牧花押

御奉行所

〔永源寺文書　三〕當寺事、轉位當可准天龍寺者、天氣如此、仍執達如件、

享祿元年十一月廿二日　右中將花押

永源寺

當寺轉位住持職等、可令准天龍寺之事、依常桓禪門申沙汰勅許、珍重、委細之芳書爲悅、則達天聽了、蓄多可獻愚報之處、遲々爲恐候、他事期後信、不宜、敬白、

正月二〇享祿二年廿日　堯空〇三條西實隆

永源寺住持丈室

寺職雜載

〔永源寺文書　三〕旅幕下　聽雪子

抑永源寺事、則伺申入候處、是ハ過分之儀候、可爲如何哉之由、再往叡慮候、雖然被執申之子細難默止之間、勅許之由候、一段御眉目候、則仰頭中將綸旨調進候、相違事候者、重而可承候、不堪之右筆御はづかしく存候、以前綸旨案ハ留置候、寶篋院殿御判案文儘返進候也、

名稱
所在
創建
堂塔

護國寺

護國寺ハ、近江國坂田郡伊吹山ニ在リ、仁明天皇ノ建立ニシテ、陽成天皇元慶二年定額寺ニ列ス、後世織田信長ノ爲ニ破却セラレ、尋デ又兵燹ニ罹リシガ、豐臣秀吉之ヲ再興セリト云フ、

〔三代實錄 三十三 陽成〕元慶二年二月十三日己卯、詔以近江國坂田郡伊吹山護國寺、列於定額、沙門三修申牒偁、少年之時、落髮入道、脚歷名山、莫不周遊、仁壽年中、登到此山、卽是七高山之其一也、觀其形勢、四面計絕、人跡希至、昔日深草聖皇 明〇仁 令建一精舍、修藥師念佛、三修居止以降、歲月漸積、堂舍有數、誠非雲構、庶幾靈山、望請天慈、賜預定額、故從其所請、

〔本朝高僧傳 七十 淨慧〕江州伊吹山沙門三修傳

釋三修不知何許人、及年舞勺、從元興寺明詮僧都、削染受業、質唯識論、特究因明、旁通密敎、當時學者欽服博涉、納戒已後巡遊名山勝地、仁壽年中、登江州伊吹山、愛其深邃、結庵禪坐、誦千手陀羅尼、不出山者二十餘年、或旬一食、修練純眞、食齋餘者、疾病立愈、四民歸向、揭護國寺、〇中略 爾後勤修正觀、靈感復本、修於山中建長尾彌高太平三寺、莊嚴佛土、元慶二年春奏朝言、修少年出家、遍歷名山、莫不盡蹈、仁壽年中、登伊吹山、卽是本朝七高山之一也、觀其形勢、四面計絕人跡希至、昔深草聖皇令建一精舍、修藥師念佛、三修居止以降、歲月漸積、堂舍有數、誠非雲構、庶幾靈山、伏望賜預定額、朝廷聽其所請、爲國家安全之鎭、

〔近江國輿地志略 八十一 坂田郡〕觀音護國寺　伊吹山にあり、柏原驛より五十町以北なり、寶龜年中、三珠沙門安祥上人、すなはち光仁天皇の御願によつて、伊吹山に四箇の梵刹をこんりうす、所謂觀音

名稱 所在 堂塔

寺、彌勒寺、太平寺長尾寺なり、當寺本尊は千手觀音、行基の作なり、昔行基この山に登りしとき、南面の嶽に枯木あり、夜々光曜す、行基靈木なることを知て、則觀音の像を造、山洞に安置す、今の寺が嶽なり則當寺の本尊なり、

寺記に曰、伊富貴山觀音護國寺は、四箇の隨一最勝の梵字なり、陽成天皇伊富貴山觀音護國寺の勅額を賜る、後醍醐天皇僧綱職の綸旨、並當國長岡庄烏羽上郷を賜る、貞和三年丁亥、寺を今の地に移さしめ給ふ、佐々木道譽が末葉大原判官持時、持綱和田入道、同式部卿綱安、淺井三代の城主相續て崇敬あり、就中大原判官先祖追孝のために、應永十甲申の年より、每歲法華千部の讀經をなす、寄附の寺領日々倍增して、堂舍佛閣甍をならべ、七堂伽藍の靈地たり、然るに織田信長淺井を攻るのとき、當寺の伽藍を破壞し、横山に向ひ、城かまへぬ、其後兵火にかゝつてことごとく燒失し、歷代の什物悉烏有となる、然後太閤秀吉こんりうし山林境內除地となすと云々、今以本堂八間四面なり、古昔二十五院ありといふ、今わづかに十四ヶの坊あり、近江二十三所巡禮の第十二番なり、巡禮の鄙歌に、願へ人なにし近江の伊吹山佛の守る國の境を、

蓮華寺

蓮華寺ハ、近江國坂田郡蓮華寺村ニ在リ、僧憲崇ノ開基ニシテ、初メ古米山麓ニ在リ、法隆寺ト號ス、後退轉シテ、僅ニ草堂ヲ存スルノミナリシガ、弘安七年、時宗ノ僧俊聖、一向專念ノ法ヲ弘メンガ爲ニ、諸國ヲ遍歷シテ此地ニ來ルヤ、僧道日歸依シテ此ヲ再興シ、俊聖ヲ以テ開山トスト云フ、今時宗一向派ノ大本山タリ、

〔近江國輿地志略　七十八 坂田郡〕蓮華寺、蓮花寺村にあり、八葉山蓮花寺と號す、時宗の一寺なり、寺記に

曰、此寺往古米山の山下にありて法隆寺と號し、厩戸皇子の勅願として、慈崇律師の開基なり、然れども星移物換て、寺も廢れ、只一字の草堂とのみなれり、こゝに筑後國竹野庄西好田村の產子、藤原冠四郎永泰の子松童丸出家して、俊聖と號し、諸宗にわたり、一向專念の文によつて名を一向と改、一偈をつくつて曰、四大自本空、五蘊假建立、寶號當所々、名之謂一向、万德所歸之、一行何不足かあらん、經論の義學を放却して、一向專念の法をすゝめんがために、文永癸酉諸國遊行す、一首の和歌を詠す、我ひとり入て何せん西の山に傾く月はさもあらばあれ、諸國を巡歷すること十餘年、早く天顏を拜し奉る、弘安七年、此所に來り、念佛をおこなふ、此所の令長土肥入道道日ふかく歸依し、伽藍の跡を再興し、此上人を以て開山始祖とす、これより時。宗。一。向。流の基本となりぬ、此地に八の峯あり、故に八葉山と號し、寺を蓮華寺と云、弘安十年十一月十八日遷化、第二代禮智阿上人相續して、專一宗を興起す、十七代稱阿上人天照太神の靈夢を蒙り、悉これを記して天覽に備へ奉る、一條關白これを筆して賜る、後柏原院より明道上人の號を下し賜る、世尊寺行高卿の筆、二十二代來阿住山の時、正親町院より勅願所の綸旨を下し賜、永祿五年、右中辨經元の奉ずる所の綸旨一通あり、當寺開基弘安七年より、今既に四百歲に及と、天和三年十一月十八日の緣起にしるされたり、外題は妙法院堯延法親王の筆なり、當時の大檀那土肥入道道日、始は土肥三郎元頼といふ、正應元年九月十八日卒す、本堂西向本尊阿彌陀佛像、聖德太子の作、釋迦佛像は佛工春日の作、いづれも立像なり、本堂內の竪額は蓮華寺の三字、靑蓮院二品尊院親王の御筆なり、鐘樓は本堂の前にあり相傳、此鐘は土肥入道大檀那にて、弘安七年畜能法師造立する所なり、當寺御朱印頂戴は慶長年中、東照神君關ヶ原の捷ありて後、此寺に立寄りたまひ、下し置るゝところなり、

〔全國各宗本山明細帳〕時宗　大本山本寺　蓮華寺 近江國坂田郡蓮華寺村

〔近江名所圖會四江東〕八葉山蓮華寺番馬の驛中にあり、時宗、

本尊釋迦佛彌陀佛聖德太子御作長三尺許

叡願梅堂前にあり六波羅山寺より向ふにあたる山をいふ、元弘三年、六波羅四百三十餘人自害せしを、こゝにうづみし塚なり、當寺は上宮太子叡願の地にして、開基道日法師、俗姓は土肥三良元頼、即堂の左の方に墓あり、時宗三十五世同阿上人こゝに來つて今宗となる、元弘三年五月九日、當山米山の麓、一向堂の前に於て、北條の連族及び隨士四百三十餘人、京都足利勢に討負、これまで落來て自害す、當寺過去帳にあり、執筆糟谷十郎と記す、

〔蓮華寺文書〕御本寺馬場蓮花寺事、依錯亂既及退轉候、無物體無其隱御寺儀候條、御聖人樣諸國之御門徒中被相勸、御建立尤可然候、爰元於靜謐者、相應之儀不可存疎意候、障僧諸役等儀免除候樣可申調候、倘以不可有異儀候、此等趣御披露簡要候、恐々謹言、

天文八
五月四日　淺井備前守
亮政花押

泉阿彌陀佛

寺領

〔蓮華寺文書〕請取箕浦莊內蓮華寺撿注勸料事

合肆貫六百七十文者但此內貳貫文且

右所殘於貳貫陸佰漆拾文者、爲念佛堂奉加所免除如件、

嘉曆參年卯月　日　散位藤原朝臣花押

就當寺作職高頭參拾五石餘、諸役之事合免除候、不可有異儀者也、如件、

慶長四
三月十三日　石田隱岐入道
正繼印

蓮華寺衆僧中

寺制

〔蓮華寺文書〕掟條々

蓮華寺

雜載

一當寺山林并門前竹木伐採之事
一殺生禁斷之事
一陣僧末代免除之事
一正月八日之禮儀末代免許之事
一門前之者諸役免除并家中之者立入諸事非分之族不可在之事、
右條數不可有相違者也、
永祿拾參年二月　日　　治平花押

〔蓮華寺文書〕宜奉祈國家安全寶祚長久者、天氣執達如件、
永祿五年十月十五日　　右中辨花押
來阿彌聖人

〔一遍流義十二派略記〕一向流義
一遍上人弟子、一向上人、住江州番場蓮華寺、建一向派、

名稱所在

清瀧寺

清瀧寺ハ、近江國坂田郡清瀧山ニ在リ、未ダ其創建ヲ詳ニセズ、佐々木京極家ノ菩提所ニシテ、天台宗ニ屬セリ、

〔近江國輿地志略八十二坂田郡〕清瀧寺　柏原驛より六町北へ入、谷の間にあり、靈通山德源院清瀧寺と號す、千手觀音如意輪觀音大威德明王を本尊とす、鎭守清瀧權現、當寺代々京極家墳墓の地たり、永仁三年、佐々木民信墓を築しより以來、いまに至つて十八代、當寺に墓を築く、佐々木京極家の

寺制

菩提所なり、古昔寺内に十二坊ありといふ、今六坊を存す、宗旨天台宗なり、日光御門跡直末なり、

〔德源院文書〕清瀧西念兩寺々務條々

一殺生禁斷事

當寺敷地內、永可令禁斷殺生者、自上古所定置也、若於背制符之輩者、爲寺家被官仁者、不擇甲乙老少、可追出寺領之內、爲莊家族者、須加嚴密之制止、若於不叙用輩、不擇權門、可有注進交名、任法可處罪科、

一寺領山木事 付屋敷樹木

凡莊家散在之輩、雖爲一枝、輙不可切用、制法代々事舊畢、然而嚴密雖加制法、動者莊內之土民、盜切之條、希〇希恐奇假借怪之次第也、將又或號手抬折生木之枝、或以口掘穿根條、無方之至極也、所詮十五歲已後、付是非不可入山、又甲乙人屋敷內、至往古之山木、輙不可切、若違背此禁制領內輩者、懸主人、隨所犯輕重、可處罪科、

一寺僧坊中前後木事

凡山寺坊中、殊更以竹木爲總別之莊嚴、然而近年往入之若輩、號私物、或不辨當所制法、恣猥違犯本願已來代々規式、任雅意切坊中木條、不可思議之振舞也、能々可有禁制、若不叙用寺僧、不擇老少、隨交名注進、可令追出、

一諸塔頭事

右雖塔頭居住僧衆、不蒙寺務之免許者、雖一枝任雅意、其近邊之木不可切用、如此制法不可有親疎、可守其法、

一兩寺總門中、不可騎馬事、

右伽藍結界之內、爲三寶之依所、尤可敬重也、其上納一族之遺骨、莊內之道俗、爭無崇敬之儀乎、

一敷地內甲乙輩犯過狼迹出來事
爲寺務計、窮是非之淵底、可被成敗、但有難治事者、可有談合代官云々、
一寺領百姓公事課役、總莊不可有支配事、
右淸瀧寺領之百姓等事、如故谷殿之時、總莊不可有支配、若以別義人夫等事可申子細出來之時
者、寺家直其子細可申、万一代官等依無存知、不可致混亂之沙汰云々、
一栂殿村人々、可守護寺家間事、
右杉殿村人共、寺領敷地居住之上者、於寺家聊不可存員外、殊更長老出行留守等時分、爲結番專
至宿直、可警固寺家、幷殺生禁斷等事、同不憚權門、及見聞輩、可申注進、
一下僧屋敷事
右下僧管領屋敷居住之人、年々地子無沙汰由、歎申事實者、不便之次第也、於向後不擇强弱、有難
澀之輩者、任交名注進、可致其沙汰、
一於寺邊不可放牛馬、此條先年堅令停止畢、若不被拘制禁、任法可致其沙汰、
一西念寺堂塔修理事
右轉舍利會要脚、充被修造、本意偏爲補堂舍之小破也、若乍停止會式、不加修理者、更無其所詮、自
寺務可被加催促、
一坊中補任相續事
縱雖帶先坊主之讓、於非器量仁者、不可補其跡、殊他山往入之仁、一旦爲貪得分、致競望輩多之、能
能可有用捨、將又舊住之寺僧、晝夜結番時、大鼓等寺役、有緩怠之仁、任札明可有罪科、
一寺僧等大小事、可爲寺務成敗事、
先代規式委細被載上者、任先規可有興行、特御祈禱已下勤行不可有懈怠、稽古鑽仰眞言加行等

事、懈怠不法輩可レ爲二寺住無益一之由、連々可レ被二敎誡一、

一舍利會事

右以二料物一被レ成二修理一上者、舞童已下儀式可レ被二大營一歟、雖レ然每年三月六日兩寺會合、如レ形法會無二闕怠一可レ被二執行一、

一紹隆佛法顯密行學事

右長日之勤行、幷代々幽儀忌日之訪者、自二先代一被二定置一者、不レ可レ有二懈怠一、其外勵二於稽古修學一可レ相二續顯密之惠命一、衆亦相助眞俗兩輪一可レ專二大小寺要一、是則一寺建立之本意、僧衆同住之肝要也、仍狀如レ件、

應安六年　ヵ十日　沙彌花押〇佐々木高氏

〔德源院文書〕當・　山林、今度八郎兵衛苅取儀、沙汰之限無二是非一候、卽雖レ可レ處二罪科一、過錢五百疋爲レ出レ之、令二用捨一候、總別　寺之儀、道譽様〇佐々木爲二御位牌所一上、其後御內之輩、立二並坊舍一雖レ有レ之、爲二御祈願所一之條、何茂上儀之御寺候、當國四百八箇寺在レ之內、當寺幷勝樂寺を、別段之御祈願所候條、從二先規一守護不入之事、不レ可レ有二其隱一候、向後之儀、此等之趣、各存知、竹木口林並勤行等、不レ可レ有二油斷一事、肝要候也、如レ件、

慶長四　十一月十七日　石田隱岐入道　正繼在判

成菩提院

成菩提院ハ圓來寺ト號ス、近江國坂田郡柏原驛ニ在リ、天台宗ニ屬シ、海道三談林ノ一ニ居ル、僧最澄ノ開基ニシテ、堂塔最モ莊嚴ヲ極メタリシガ、嘉曆元年、越前國平泉寺ノ衆徒ノ爲

ニ破壞セラル、應永ノ初メ延暦寺ノ僧貞舜之ヲ再興セシガ、永祿ノ比火災ニ罹リ、慶長年中僧祐圓更ニ之ヲ建立セリト云フ、

〔近江國輿地志略 八十二 坂田郡〕成善提院　柏原驛にあり、天台宗寂照山圓來寺成善提院と號す、天台宗海道三箇談林の隨一にして、穴太流傳法灌頂の密室なり、土俗呼て寺談義所といふ、柏原院の勅願所、傳教大師開基、七堂伽藍の靈場なり、しかるに嘉暦元丙寅の年、越前國平泉寺の衆徒等、本堂幷三百餘箇所の堂塔を破壞す、於是七百有餘の僧徒も四方に分散し、衰故におよぶ、應永の初、比叡山西塔の住侶寶圓院貞舜法印再興す、然して後、永祿年中、織田信長當寺に止宿の節、俄に舞馬の變に遭ぬ、今の寺は慶長年中、祐圓法印こんりうす、此とき東照神君關ヶ原陳城の殘米二百石を以、當寺番匠の方費に充給ふ、本尊十一面觀音、夾侍不動、毘沙門、倶に佛工春日の作なり、靈域の本尊阿彌陀佛は、惠信僧都のさくなり、堂內に文殊藥師地藏の三像あり、往古諸堂の本尊なりといふ、就中大聖文殊の像は、天竺傳來の佛像にして、靈驗掲焉、當寺領御朱印百六十石五斗、末寺法流八十箇寺(相傳古昔三百餘寺ありと云々)當寺靈寶什物ははなはだ多し、深砂王の畫像一幅あり、相傳往古平泉寺の衆徒當寺に詣せしとき、甚奇瑞あり、曾織田信長(奥)御臺所、倶に當院に止宿す、不圖平產あり、時に護摩堂より失火、しかるに深砂王の畫像の慈惠大師の畫像飛來て、庫前の柿樹にかゝる、こゝにおゐて火鎮る、爾來諸民此畫像に安產をいのり、且柿木を截斷してかへる、當院におゐて曆代著述の書を、ゝし、其中七帖見聞(或は天台類聚ともいふ)柏原安立(或は寶要安立ともいふ)輿海十帖、眞祐十帖等、世に行る、年中の法會を、ゝし、正月十四日、曇陀羅供、二月十五日、涅槃會、四月八日、灌佛會、六月四日、傳教會、七月朔日、貞舜忌(貞舜傳は、本朝高僧傳十七卷に見へたり、これを略す、)八月十五日、祐圓忌、十一月三日、深砂王講式、十一月二十四日、天台會、其餘際限なし、

〔本朝高僧傳 十七 淨慧〕江州成善提院沙門貞舜傳

釋貞舜登叡山、親附貞濟、多歲習學、居西塔寶園院、英達之名、落落聞時、應永年中、江州柏原開成菩提院、說圓頓法、緇素會集、頓化寶所、常歎台敎之衰、有志回瀾、因艸七帖見聞、四敎條貫、五時法儀、諸宗體裁、撮要啓蒙、又於慈慧僧正九十餘算、作問答鈔、名曰寶要安立、應永二十九年正月上日化、年八十九、

寺領

〔成菩提院文書〕於江州坂田郡柏原內、合百五拾石事、宛行之訖、全可院納候也、

天正十九
四月廿三日　朱印〇豐臣秀吉

城菩提院

〔寬文四年御朱印帳天台宗〕百六十石　近江成菩提院

慶長十三年十月四日

寺制

〔近江國輿地志略八十二坂田郡〕成菩提院〇中略　織田彈正信長、永祿十一年八月の禁制札、丹羽五郞左衞門長秀、羽柴筑前守秀吉の天正十年十二月の禁制札、金吾中納言秀秋の慶長五年九月の禁制札あり、〇中略當時日光御門跡御支配なり、

〔成菩提院文書〕成菩提院法度之事

一天下安全御祈念、長日護摩、不可有油斷事、　一專敎觀二道、可被執行佛法事、　一院領之儀、其住持外不可有他競望事、　一院領之賣買質劵等、可被禁止事、　一爲顯密之名室故、以學匠可被相續事、　一任先例之旨、惡行所化、速可被追放事、　一門前之者、於成不儀者、如先規從住持可被申付事、

右條々、堅可相守者也、仍如件、

慶長十三年戊申十月四日　黑印〇德川家康

國興寺

淨福寺

國興寺、淨福寺ハ、近江國ニ在リ、延喜式ニ其名ヲ載セタレドモ、今並ニ廢寺ニシテ、其所在ヲ失ス、

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻〇中略近江國、〇中略國興寺修理料一千束、淨福寺料七千束、

菩提寺

菩提寺ハ、美濃國不破郡岩手村ニ在リ、釋空海ノ開基ト稱ス、淳和天皇天長五年、定額寺ト爲ル、眞言宗ニ屬ス、

〔新撰美濃志三不破郡十〕岩手村〇中略菩提寺は眞言宗にて、一乘山觀音院と號し、弘法大師の開基、淳和天皇の勅願寺也、類聚國史に、天長五年十月乙卯、美濃國菩提寺、伊豫國彌勒寺、肥後國淨水寺預定額寺とある官寺にて、本尊は弘法大師の作、佛壟觀音、挾侍不動、毘沙門なり、當國三十三所の十六番に配し、參詣の人多し、古殿堂字こと〳〵く廢して、今存れるものなく、又此寺號によりて、村の舊號をも菩提といひしを、岩手と改めしより傳へを失ひて、寺の境内に菩提樹のある故、寺號とすとさへいへり、其菩提樹は飜譯名義集等にものせて、ふるき木なれども、日本へ傳へしは、榮西千光國師入宋し、歸期の時はじめて其種を持來りて、筑前國香椎の神宮にうゑしよりのち、諸方へ傳はりし樹なれば、此寺の開基より數百年のちに、日本へ渡りし木なり、こゝを以其誤りを知るべし、

〔類聚國史佛道十百八〕天長五年十月乙卯、美濃國菩提寺、伊豫國彌勒寺、肥後國淨水寺、預定額寺、

華嚴寺

名勝所在

華嚴寺ハ、一ニ谷汲寺ト云フ、美濃國大野郡谷汲村ニ在リ、延曆年中、僧豐然ノ創建スル所ニシテ、三十三所觀音ノ一タリ、天台宗ニ屬ス、

〔拾芥抄下本諸寺〕三十三所觀音　谷汲美濃、號華嚴寺、

〔伊呂波字類抄世諸寺〕谷汲在美濃國、佛前ヨリ燈油涌出、于今不絶、

〔美濃名細記九寺院〕一華嚴寺大野郡谷汲邑　天台宗觀音領御朱印四拾石、谷汲山學頭地藏院、

本尊十一面觀音、長七尺五寸、堂七間四面、　延曆十七年開基、西國巡禮三十三番札納所也、學頭地藏院以下、寺中皆江州栢原成菩提院末寺也、　寺中明王院　一乘院　常照院普門院　無動法淨坊

創建沿革

〔伽藍開基記六美州〕谷汲寺本朝五十代桓武帝延曆年間建、自此至元祿二年己巳、及九百年矣、

開基豐然法師、欲營精舍安觀自在像、延曆間相攸至美州谷汲、構精藍、當平基壁、一巖忽石中油出、然生希有思、誓曰、我於此地安大悲像、若博利來世、願此油益多、言已湧如泉、然大喜、便安十一面觀音像、長七尺五寸、自是靈威溢傳、延喜帝聞其瑞應、賜額華嚴寺、

〔美濃名細記九寺院〕谷汲山緣起略記

延曆十七年戊寅、豐然上人開基也、願主奧州會津郡黑河鄉富岡住人、大口大領、於京都令作觀音尊像、歸奧州中途、尊像因靈夢留于此地、書尊像於華嚴經、故爲寺號、谷々衆徒、汲涌出油而爲常燈、故稱谷汲山、豐然大領因靈夢、自南山麓移今地、元來毘沙門堂地也、故毘沙門天爲觀音脇立、大領奧州歸時、爭僧徒觀音頂上拔取十面、奧州富岡妙福寺附新像頂、大永元年辛巳秋、谷汲ノ住僧、千葉坊承性、一乘坊貞純、又因靈夢到奧州、徑昔來由語、而望乞頂面得之、同年十一月十四日、妙德院快尊法印、著十面於尊像頂上、　一延喜十七年丁丑、華嚴寺賜勅額、　一天慶七年甲辰、爲勅願所、　一承久三年

名稱 所在 創建

亂、寺領沒收、一建武元年十一月下旬、新田足利戰ノ時、新田一族堀口美濃守貞滿、九ヶ年楯籠當山之峯、房舍燒失、本堂無恙、一永和年中、土岐賴康修造、一文明十一年己亥二月廿六日、本堂皆燒失、此時、觀音毘沙門無火災、文明十四年寅、薩摩國谷山福本慈現寺住僧道破、本堂建立也、毘沙門天者、天滿天神作、則御筆經文三十卷餘、毘沙門天腹身收之、本堂大黑道破自作也、一大口大師建立時、穿岩自石中油涌出、爲常燈明、然將軍義敎、欲見之送京、永享十三年夏、義敎生害、依騷動油石不還谷沒、

立政寺

立政寺ハ、俗ニ櫻寺ト云フ、美濃國厚見郡西莊村ニ在リ、淨土宗西山派ニ屬ス、文和三年、後光嚴天皇ノ勅願ニ由テ、僧智通ノ開基スル所ナリ、

〔和漢三才圖會七十美濃〕立政寺 在不破 淨土 寺領五十石 開基源空上人

〔美濃明細記九寺院〕一高五拾石 寺領 厚見郡西庄村 龜甲山淨土宗 立政寺

文和三年勅願所、智通和尙開基、開山有櫻指木、故稱櫻寺、東照宮御制札、幷有下馬札、依開山ノ命蛙不鳴有、

〔新撰美濃志十六厚見郡〕西庄村○中略 立政寺は龜甲山と號し、淨土宗西山派なり、文和三年の勅願にて、智通和尙の開基、境內に開山の櫻の指木あり、此ゆゑに俗に櫻の寺といふ、また小池ありて、池中の蛙の鳴事なし、是むかし開山僧の讀經のさまたげをいとひて、蛙を封じける故、今にしかりといひ傳へたり、寺領御朱印五十石、東照宮の御制札、又下馬札等を免許し給へり、織田眞紀に、永祿十一年戊辰秋七月廿五日、公使和田惟政、不破河內守光治、村井貞勝、島田秀滿、迎義昭於越州、義

昭來居于濃州西莊立正寺、公上太刀鎧馬兵具靑銭千貫於義昭、幷相從諸臣、謀使義昭歸京とあるも、此寺の事也、慶長五年九月關ヶ原の役、此寺より東照宮へ大柿を獻じたる事あり、其時大柿を盛りて出せし朱の大盆は、今猶存せり、其事實の證狀は、墨俣村明臺寺ノ段に記せり、合せ見るべし、

寺格

〔寺格帳 上 淨土宗〕御朱印 高五拾石　美濃國 立政寺

右住職、末寺塔頭吟味之上相定ル、

一入院御禮無之

一年頭御禮御白書院獨禮、獻上壹束壹本、御闕之內貳疊目、

一御暇、於柳之間老中被仰渡、服三拜領之、廣蓋ニ而引

寺領　寺職

〔寛文四年御朱印帳 淨土宗鎮西派西山派〕五十石　美濃 慶安元年二月廿四日　立政寺

〔立政寺文書〕(端書)後小松帝御綸旨

美濃國市橋莊立政寺住持之事、代々著黃衣、令弘通淨土宗、宜致御祈禱之由、天氣所候也、悉之以狀、

至德三年三月五日　右少辨 花押

智通上人御房

〔立政寺文書〕(端書)後土御門帝御綸旨

美濃國市橋莊立政寺事、令弘通淨土宗、宜致御祈禱之由、天氣所候也、悉之以狀、

延德二年十二月九日　右中將 花押

護海上人

雜載

〔信長公記 一〕永祿十一年七月廿七日、越前へ爲御迎、○足利義昭 和田伊賀守、不破河內守、村井民部、島田所之助被成進上、濃州西庄立正寺に至而、公方樣御成、末席に鳥目千貫積せられ、御太刀、御鎧、武具、御馬、色々進上申され、其外諸侯之御衆、是又御馳走不斜、此上者片時も御入洛可有御急と思食、

九月十三日、公方樣へ御堅約之爲御迎、不破河内、　十四日に、濃州西庄立正寺へさしつかはされ、廿一日、既被進御馬、柏原上菩提院御著座、

〔新撰美濃志八安八郡〕墨俣村、○中略明臺寺は清光山と號し、淨土宗西山派西莊村立政寺の末寺なり、○中略慶長五年九月十五日、關ヶ原の役、西の莊村立政寺文叔上人より、墨俣村明臺寺への書狀、
筆語相達候、兼々申談候通、岐阜御本陣へ早速罷越御窺等申上、首尾能相濟、重疊大悅存候、猶又大將君御忍の體にて御入被遊、冥加至極の御事に候、不存寄儀にて、皆々驚申候、幸柿獻上、開基已來の寺格由緒等、先々御開運有之趣共、一通致言上、御祈禱の儀も達上聞候處、御機嫌不淺、吉例の寺の由、御稱美被成下、何ヶ御尋も有之、寺領並寺法格式等も、先規之通無相違可務之旨、直に御言葉被下置、拜領物迄被仰付、難有御儀可申樣も無之仕合と存候、赤坂へも罷出、御窺申上、又々拜領物も致頂戴候、誠に愚老本懷と申、當寺永代の吉事無限大慶に候、一昨日より御祈禱も相務候關ヶ原合戰も彌之御勝利にて候、恐悅至極に候、何か之物語も申度候間、其地靜に相成候はゞ、出席待入候、右吉相申聞度如此候、以上、甲山人より、九月十五日、明臺寺、　とありて、是は墨俣明臺寺の寶物なり、甲山人とは、立政寺當時の住職、文叔上人の號なり、又立政寺には、此時大柿を朱の大盆に盛りて、家康公へ差出したれば、大垣手に入りたりとて、悅て之を近習の者に投與へられたりと云ひ傳へ、其大盆今に保存し有之なり、

○按ズルニ、此事又落穗集ニ見ユ、而シテ次下引ク岩淵夜話別集ニハ、之ヲ同國瑞雲寺ノ事ト爲セリ、未ダ孰カ是ナルヲ知ラズ、

〔岩淵夜話別集五〕一八月○慶長五年廿三日、岐阜の城を攻落候よし、御先手の諸將より注進の狀、同月晦日に到著、九月朔日、江府に御立被成、關ヶ原表へ御進發被遊、則濃州岐阜の近所、八條村瑞雲寺と申小院へ、御腰を掛させられ、住持御馳走として、大なる柿を盆に積て差上る、家康公御

覽被成、則御側衆を召呼れ、是は住持の心可ㇾ付しと被ㇾ仰、見性衆を不ㇾ殘被ㇾ召寄、是は聞ゆる美濃の大柿也、其方ども手柄次第にばひとりに爲ㇾ致と被ㇾ仰、一度に投出させ給へば、何れもばひとりに致を御覽被成、殊の外御きげんよく、聞ゆる美濃の大垣を、見性共がばひとりにして、埒明たりとの上意也、

延算寺

名稱所在

延算寺ハ、美濃國山縣郡岩井村ニ在リ、清和天皇貞觀六年、定額寺ニ列ス、舊ト天台宗ニ屬セシガ、後眞言宗ニ改ム、今衰頽シテ、僅ニ本坊ヲ存スルノミ、

〔新撰美濃志十七山縣郡〕岩井村〇中略　延算寺は美濃名蹟志に、岩屋村の山上にありて、昔しは天台宗の巨刹なりしが、こと〳〵く廢れて、僅かに本坊のみ殘れり、本尊藥師如來は、比叡山根本中堂の像、また當國大野郡横倉藥師の像と同木にて彫刻し、三ヶ寺に安置せし其一也、傍に山門等の舊跡ありて、西より山に登る事もある由記せり、是則ち當寺の事也、又三代實錄及び類聚國史に、貞觀六年五月十四日己亥、以美濃國山縣郡延算寺預之定額とあり、今は村を岩井と唱へ、延算の文字或は延賛と書し、宗旨は眞言宗なり、

寺格

〔三代實錄八清和〕貞觀六年五月十四日己亥、以美濃國山縣郡延算寺預之定額、

願興寺

願興寺ハ、美濃國可見郡御嶽村ニ在リ、弘仁年中、僧最澄ノ開基スル所ナリ、後世屢〻兵燹ニ罹

名所所在　堂塔

リシガ、天正年間、村民力ヲ合セテ、竪十四間、横十間ノ堂宇ヲ再建ス、故ニ又大寺ノ稱アリ、天台宗ニ屬ス、

〔濃陽志略 三 可兒郡〕御嶽 ○中略 寺觀 顧興寺 天台宗、號大寺山、屬尾州野田密藏院、俗稱之曰大寺、又呼御嶽藥師、縁起略曰、弘仁六年、傳教大師開基、自刻藥師琥璃光佛像、以爲本尊、其後有尼行智者、來自山城、而住此地、長曆二年二月七日、偶於池邊得一藥師小像、乘蟹浮水、鄉人驚異之、献之國府、鼎新佛閣、以其像藏古佛像腹中、四年十二月七日、土木竣功、至今以十二月七日爲佛誕日、貴賤羣集、長保元年二月、土俗始爲祭事、名曰植木祭、天仁元年、罹兵燹、伽藍爲烏有、正治元年、頼綱源五盛衰竭力造營、牛復舊觀、貞治中、寺院頹廢、土岐大膳大夫頼康再建臺閣、自寫大般若經寄附、元龜三年、又遭兵火、諸堂燒失、天正九年、驛亭長等戮力造一堂、安藥師像、其餘說多妄誕故不錄、境內 本堂安藥師像、竪十四間、横十間、大寺之名職是之由、 彌陀堂 十王堂 庚申堂 鐘樓 信玄塚(中略)此寺領村、中有瞽女三人、傳云、尼行智侍女有三瞽、故至今有三家、近邑偶有盲女來住、其家餬口逮近、官所不禁也、

〔新撰美濃志 二十六 可兒郡〕御嶽村 ○中略 顧興寺 ○中略 本堂 竪十四間、横十間あり、大寺の名、此堂によろ、本尊の藥師佛は長四尺五寸あり、 阿彌陀堂、本堂の西にあり、 十王堂、閻魔堂ともいふ、本堂の東にあり、 庚申堂、阿彌陀堂の背に並べり、 鎮守社、十王堂の北に隣れり、 護魔堂、奥の方にあり、また鐘樓信玄塚等、境內にあり、

寺領

〔濃陽志略 三 可兒郡〕御嶽 ○中略 寺觀 顧興寺(中略)寺產百石、古有土岐美濃守賴芸、齋藤持是院、武田信玄、及金山侍從忠政等寄附證狀、皆已燒失、慶長七年、東照神祖賜寺產百石、其後我公據此、

〔新撰美濃志 二十六 可兒郡〕御嶽村 ○中略 顧興寺 ○中略 寺領は往古三千六百貫文の地を、加茂郡にて領せしといふ、又土岐美濃守頼芸、齋藤持是院妙椿、武田信玄、森侍從忠政等、寺領寄附の證狀もありしが、ことごとく燒失し、領地も散亡したりしを、慶長七年、東照宮百石の寺產を寄附し給ひ、其のち我名古屋大君これに據り給へり、

愚溪寺

愚溪寺ハ、舊ト愚溪庵ト稱ス、美濃國可兒郡中村ニ在リ、應永中、細川勝元ノ創建ニシテ、僧義

天ヲ以テ開山トス、或ハ云フ、永享中、足利義政ノ建立ナリト、臨濟宗ニ屬シ、京都妙心寺ニ隸セリ、

〔濃陽志略可見郡三〕中村　寺觀　愚溪寺臨濟宗、號大智山、屬京都妙心寺、寺僧云、永享中、將軍義政創建、以義天和尙爲開山、

〔新撰美濃志可見郡二十六〕中村〇中略　愚溪寺は大智山といひて、臨濟宗、京都妙心寺の末寺也、永享年中、義政將軍創建ありて、義天和尙を開山とせられしよし寺僧いへり、濃州古蹟考には、應永年中、細川右京大夫勝元犬山瑞泉寺の義天和尙を歸敬して、此寺を創建す、此ゆゑに肥後の細川侯交替中山道通行の時は、使者をもて、白銀法衣等を贈らるゝ例なるよしいへり、寺領三十石八斗六升、尾張の國君歷代御黑印を賜ふ、塔頭、梅仙庵、寶塚庵、雲松庵、凉宵菴、德隣軒、芳春軒ありしが、今は皆廢れたり、

〔愚溪寺文書〕(端書)宗源寄進狀

きしん申おうひら山之事

にしはほうつきほらのたにおさかい、ひんがしはかさまつまで、きたはねをかぎり、みなみはたにまで、

右かのざいしよは、宗源ち行分にて候間、ぐけいあんへ、えいたいきしん申所如件、

文安參年八月一日　宗源花押

寄進申財塚事

右此塚者、南限於大路、西限於鳥居之路、北限舊渠際、東限於田際、而愚溪庵江爲案山、永代寄進申處也、仍爲子孫不可有違亂煩、申狀如件、

文安伍年戊辰卯月廿七日　押小路康盛花押

寄進

右當國平賀郷內長田名事、永代寄進愚溪庵者也、仍爲後證之狀如件、

文安五年十二月十八日　齋藤帶刀左衛門尉 利永 花押

〔濃陽志略 三 可兒郡〕中村　寺觀　愚溪寺（中略）寺產三十石八斗六升、張藩歷代賜之墨章、

〔愚溪寺文書〕禁制　濃州可兒郡愚溪庵

一甲乙人等濫妨狼藉事　一伐採山林竹木事　一於山林殺生事　一山林放牛馬事　一於寺內俗人借宿并軍勢取陣事　一爲寺僧鳴笛鼓打碁雙六一切博奕等之事　一寺外之衆不及案內入風呂事　一寺家永代之寄進并下地寄事、於左右而欠落之事、一寺家造營物并祠堂物德政之事、一於後々寺家江萬用物并要脚臨時段錢以下、無謂儀之諸公事等之事、

右條々堅令停止訖、若於違犯之輩者、可處罪科者也、仍下知如件、

永正三年八月日　美濃守 政房 花押〇土岐

照蓮寺

照蓮寺ハ、飛彈國大野郡高山ニ在リ、眞宗東本願寺派ニ屬ス、文永年中、僧善俊、同郡白川郷ニ建立ス、天正十三年、金森長近、豐臣秀吉ノ命ヲ奉ジテ、此國ヲ征スルヤ、寺僧明了與リテ功アリ、因テ優遇シテ同十六年、今ノ地ニ移シ立ツ、慶長中、火災ニ罹リシガ、尋デ之ヲ再建セリ、

〔飛州志 四 寺院〕大野郡　光曜山照蓮教寺

同所山〇高ニアリ、境內寺家眞蓮寺、專念寺、了泉寺、靈雲寺、稱讃寺、圓龍寺、映芳寺、不違寺、洛陽六條東本願寺末、寺說曰、是門主ノ本坊ニ准ゼラル、寺ニテ、懸所ト云ヒ、御坊ト稱ス、仍テ本山ノ僧徒、每歲輪番ヲ以テ守之、開基始祖同郡白川郷光曜山照蓮寺十三世釋明了、天正十六戊子年建之、寬永十九壬午九十九示寂、舊寺ハ今末寺ト成レリ、開基檀

越金森法印、猶來由照蓮寺ノ記ニ委シ、其後明了五世釋一乘ガ時、有故テ本山ノ懸所ト成ル、本尊阿彌陀如來、安阿彌作、金森法印寄附、寺領石計二百三十三石、大野郡白川鄉ニ於テ十六箇村岩瀬、中野、赤谷、海上、尾上郷、尾神、牧、福島、御母衣、平瀬、木谷、荻町、椿原、有家原、蘆倉、小白川、也、是御朱印ヲ以テ賜ル地ニハ非ズ、古來寺務ノ事蹟分明ノ故ヲ以テ、下シ賜ル處ノ免許ノ地也、凡テ本土ノ寺社古跡タルモノハ、其境內山林ヲ以テ除地ト成シ賜ル、免許ノ地務ニ於テハ當時ノ外曾テ其例無シ、

高山照蓮寺記

釐住明了一本宣明天正十六年戊子春、發出白川中野、而草創寺於高山、其所以者、內島上野介雅氏長男、兵庫頭氏理、祖父爲氏、從受將軍義政之命、世嗣而棲於飛州白河鄉歸雲、頭之金森五郎八長近入道倘書法印、隨豐臣秀吉、將步騎三千、從越州征來當國、於此氏理家臣川尻備中守氏信降來、卽爲嚮導士、天正十三年乙酉秋七月下浣、經濃飛封疆布保口、將旣征入、氏信同僚尾上備前守氏綱、支於岩瀨橋不能容焉、怏然歸、更八月初、牛丸又右衞門綱親迎法印、而請服、因卽爲先驅、涉越中長谷而從當國二ッ屋街閭、雖若干險難、逐彼橫司、飛州頗服法印、則內島六騎、而晦蹤於悠遠、然法印築城高山、定棲於飛州、八政徐行、萬民或安、照蓮寺猶未離白川中野、法印遣使召明了、以家令長屋喜三可重告曰、遯待於斯非殊旨趣、天下今物於戰鼓、四海醉於矛戟、我出馬之日、不有鎭國看守之臣、冀貴坊戍衞我城空、鎭撫民將蜂起可矣、明了不得苟免應諾、猶爲彰胸中無忘、書誓詞一通、以可重捧於法印、卽欣然報其功於明了、曰本願寺宗坊主、住於飛州國中輩、不論東西須准末寺加下知也、從是後爲定制也、○中略然後於伏見將軍秀吉問法印曰、若出戰之時、有看守良臣否、法印正襟答曰、有本願寺宗僧、嘗在遠巷、今引來於城邊名照蓮寺、有許多門徒、散在當國、他國萬民大幅湊、因以使彼看守也矣、秀吉曰、那宗僧、庶民渴仰信從者也、宜憐賞而使彼敢無向背矣、一日法印語曰、有如是上意、我於貴坊擬致寸志者也、一者、國中門下地附之定、二者、東西之坊主末寺並之定、三者、國中往來傳馬之定、致如是志之上、無可

別而實道、然佛像是寺院法物也、爲上意料贈之也、賜安阿彌刻影彌陀木像焉、今之高山御堂本尊是也、同十七年己丑春、始繼晝夜十二時太鼓、文祿五年丙申春、准如上人賜顯如上人影、明了有故藏匣箱、數年之後、興正寺下越前穴間鄕大谷門徒、來而乞彼影像於宜了、終與之畢矣、慶長三年戊戌、敎如上人於本寺、命飛驒之出仕於明了也、同五年庚子春、宜了得度受戒、師敎如大僧正也、過四日而蒙著素絹命、於是可重命家臣、使國之農民施進斛掛奉加也、明六年春、始而修一夏九旬讀經也、○中略冬十一月、○天正十六年有故明了參詣于本寺、那月高山寺回祿、而軸物佛具粗燒失矣、欲註進京都告報於明了、同宿大進亟赴於洛、至濃州岐阜、遭明了下向、大進細語明了大愕、聞各所燒失物、從是再上洛往於本寺、訴告不意之禍、而怖請賜太子七高祖、乃應望有命、同四年己亥春、下賜繪傳、次年又賜太子七高祖、是故御裏書皆修復也、○下略

〔日本地誌提要 二十五飛驒〕佛寺 照蓮寺 大野郡高山、眞宗、文永中、僧善俊同郡嶋谷村ニ創シ、天正十六年戊子、僧明了、金森長近ノ命ヲ以テ、今地ニ移ス、寺域六千七百五拾壹坪

〔飛州志 四寺院〕大野郡 光曜山照蓮敎寺 ○中略

高山照蓮寺記 ○中略

同○慶長十四年己酉秋、於三枝中切與荒城東門前兩所、總百斛寺領、從可重寄附之矣、

五十石　三枝中切　圖書分　五十石　荒木東門前　圖書分　合百石

右兩所爲寺領進候

慶長十四七月廿五日　可重在判

照蓮寺

以上高山照蓮寺來由也

寂光寺
錦織寺
安養寺
屋代寺
妙樂寺

名勝所在

寂光寺ハ信濃國伊奈郡ニ、錦織寺ハ同國筑摩郡ニ、安養寺ハ同國更級郡ニ、屋代寺ハ同國埴科郡、妙樂寺ハ同國佐久郡ニ在リ、清和天皇貞觀八年、並ニ定額寺ニ列ス、今廢寺ニシテ未ダ其舊地ヲ詳ニセズ、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年二月二日戊申、以信濃國伊奈郡寂光寺、筑摩郡錦織寺、更級郡安養寺、埴科郡屋代寺、佐久郡妙樂寺、並預之定額、

觀音寺

名勝所在寺格

觀音寺ハ、信濃國伊奈郡ニ在リ、陽成天皇元慶五年、天台別院ト爲ル、今廢寺ニシテ其所在ヲ失ス、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年十月十七日壬辰、以信濃國伊那郡觀音寺、爲天台別院、

名稱　所在　創建　沿革　堂塔

興禪寺

興禪寺ハ、信濃國筑摩郡福島ニ在リ、嘉吉年中、木曾信道ノ創建ニシテ、僧太華ヲ以テ開山ト爲ス、臨濟宗ニ屬シ、京都妙心寺ニ隷ス、

〔萬松山興禪寺傳記〕夫當寺之由來ヲ勘ルニ、○中略其ノ古ハ、小庵ニシテ、平僧ノ住職スルコト、幾世幾年ト云コトヲ不知、中比臨濟派下蘭溪五世之孫圓覺太華和尙ヲ以テ、始テ爲當寺之開山、其ヨリ以來、住持ノ次第不分明、黠山義海兩和尙之尊牌有之、住持ナル者歟叔雅和尙ヨリ以來ハ、住持之代々分明也、此叔雅和尙ト、大檀越源義元ト、師檀之緣深シテ、再建於當寺者也、這故叔雅和尙ヲ以、爲中興開山者也、○中略

一佛殿ノ本尊觀音ハ、表義仲之御影而作ル者也、其古ハ、八幡山ノ嶺上ニ安置、中比又堅凹ニ安置ス、○中略其後又何ノ時代ニカ移來テ、爲作當寺本尊者也、○中略

一中興叔雅和尙ヨリ以來、終ニ無修理故、寺宇盡及敗壞、于時寬永元年ノ比、吾師桂岳發誓願、第一ニハ請於山村氏良豐公之助成、其外諸檀越一紙半錢之功力ヲ以テ、建立庫裏畢矣、寬永十一戌年、又造營客殿、是モ亦良豐公ノ助成也、○中略寬永十八年巳ノ年四月廿日ノ夜半ニ災火出來シテ、一字モ不殘爲焦土、加之其年ノ秋ヨリ天下飢饉ニシテ、道路ニ餓死スル者大半也、這故ニ再建之企モ不成就、吾師岳結草庵、住居スル事二三箇年愚僧見師之勞苦不堪感劇、正保二申年、得良豐公之助成、其外諸檀那ヲ勸進シテ、自擔材木、手運土、建庫裏畢、使吾師安居、其後正保四戌年、良豐公又助成シテ、建立佛殿、而奉安置觀音之古尊體矣、

一慶安三寅年、良豐公爲亡父賢巖宗用居士、被建立客殿、又承應三午年、被建山門、加之明曆二申年、良豐公鑄梵鐘以寄進ス、其翌年ニ又被建立鐘樓、其外或ハ總門ノ上葺、或ハ回廊ノ修理、逐一ニ造

營畢矣、

〔木曾考續貂寺院四〕贄川村　一臨濟宗　妙心寺末　萬松山　興禪寺

開山圓覺大華和尙　開基木曾式部少輔信道　中興叔雅和尙　明應五辰〇中略

信州木曾莊福島鄕萬松山興禪寺、開山臨濟宗之末派大覺禪師五世之的孫、圓覺大華和尙也、大檀那ハ木曾朝日將軍源義仲公之裔孫、式部少輔源信道公也、法名興禪寺殿安翁持公大禪定門、〇下略

〔增補吉蘇志略〕福島

寺觀　興禪寺臨濟宗、號二万松山、屬二京都妙心寺、嘉吉年中、木曾式部少輔信道創建、大華和尙開山、境內觀音堂安二置華嚴釋迦像、土人以爲二觀音、至レ今不レ改、鐘樓稲荷大明神祠、愛宕祠、義仲墓(中略)增、木曾義康、且其妻石塔在、此妻是甲斐信玄女也、殷義昌塔、且印塔在、七月十四日義昌信之爲二齋米四斗、并火炬二百把、敷二於岩鄕村中小名鹽淵一云、且爲二墓掃除一村民五人、處々是又出二於民處一云、

〔松山用記〕一奉レ建二立當寺佛殿、明應五年丙辰仲春、本願右春叟惠芳木曾大炊介入道沙彌啓秀、

住持一山國師七世比丘叔雅良演判　大工太郞兵衛重幸太郞左衛門弘重

十貫者、源朝臣木曾義元、　十貫者、木曾大炊介入道啓秀　十貫者、當住持叔雅良演、

一佛殿再興、永祿八年乙辰三月、大旦那源朝臣宗太郞義昌、住持東巖叟、大工捷右衛門、〇中略

一四月〇享保九年五日、方山長禍、梅傳定勝、弘堂同道ニ而、一統ニ申達候處、一ヶ寺〱ニ御書付被レ下候、〇中略

覺　萬松山興禪寺

山城國平安城正法山妙心寺末寺、信州筑摩郡木曾福島鄕、

當寺之儀、木曾左馬頭義仲之裔孫式部少輔信道法名興禪寺殿安翁持公建立、寺領被レ爲二寄附一候、往昔證文有レ之候處、寛永十八巳年、火災に遭候節致二燒失一候、木曾伊豫守義昌之朱印ハ、今以致レ所レ持候、

當寺并長福寺、定勝寺之義ハ、木。曾。三。ヶ。寺と申由緒御座候ニ付、殿樣御代々御目見仕來候、

寺領

〔萬松山興禪寺傳記〕一當寺ノ庄田有七箇處、何ノ世何ノ年ニ被寄進哉、雖無記錄、施主者分明也、依之宮腰、橋爪納三石六斗二升五合之處ハ、必定義仲之茶湯米也、〇中略栗本納九石六斗二升五合、同小野尻納二斗五升之處ハ、觀世音佛ノ供米也、〇中略

一大門崎ノ河路ヨリ東ヘ青木淵迄、千八百十三坪ノ處ハ、當寺ノ領內也、明暦元年之比、大旦那良豐公家來ノ人々、屋敷處ニ所望有之付テ出置、其替リニ、上田鄕殿前ニテ納五石、毎年請取ル也、卽良豐公ノ黑印有之、〇中略

一黑川渡河末之田畑ハ、古ハ無之、其故ハ流水西ヘ付テ流ル也、近年三十箇年以來、自然々々ニ流水東ヘ付テ流行、故ニ新地出來ス、當寺ノ地付トナル、明暦元年ノ比、愚僧〇名略爲後昆開田畠者也、然間當寺古來領分ノ外也、〇中略

一門前七人之屋敷田畑、昔年ハ分限不定、或ハ大屋敷、大田畑、或ハ小屋敷、小田畑、然レ共、男女ノ使役ハ同意也、愚僧明暦元年ノ比、七人之屋敷ヲ等分ニ割リ、面口棟間共ニ五間六尺ニ相定ル者也、作去九郎右衛門分ハ、當寺ノ年寄分、又ハ百姓中ヘ革使ノ爲メニ、屋敷モ、面口棟間共ニ、七間ニ定ル也、田畑モ餘人二人半分出置者也、又明暦二年比、門前ノ屋敷共ヲ後ヘ三間程引込作ル也、是ハ怖類火之難者也、

〔木曾考續貂四寺院〕贄川村　一臨濟宗　妙心寺末萬松山　興禪寺

寺領年貢米貳拾貳石貳斗七升九合壹勺納升　內　壹石三升七合五勺　福島村之內ヲ　拾四石三斗六升六合六勺　上田村之內ヲ　三石六斗貳升五合　宮越村之內ヲ　壹石五斗　荻曾村之內ヲ　壹石五斗　玉瀧村之內ヲ　小林之麓六町

寺制

〔木曾考續貂四寺院〕贄川村　一臨濟宗　妙心寺末萬松山　興禪寺

定

一於興禪寺内理不盡不可爲殺生事、
一於寺内不可伐取草木事
一雖混寺領他分法外不可有違亂之事、
天正九年辛巳二月吉日
已上

雜載

〔東國陣道記〕廿二日、〇天正十八年七月木曾の内福島といふ所に、日たかくつきて、所々見物せしに、よしある山寺の門に入てみれば、額に萬松山とあり、寺内に行て尋るに、ぐ持とおぼしき僧の出られて、しかじか物がたり有、寺號は興禪寺となんいひける、江州黄門草津湯治の砌、南北和尚一宿、又越後直江城州やどられける時、聯句などありけるよしありて、主の句など語られける、

善光寺

名稱所在

善光寺ハ、信濃國水内郡善光寺町ニ在リ、四門各其名アリテ、善光寺トハ其東門ノ名ナリ、當寺ノ本尊ハ、百濟國ヨリ獻ズル所ノ阿彌陀如來ノ像ニシテ、推古天皇ノ朝、此ニ安置セシト云フ、當寺ニハ、天台、淨土ノ僧住居シテ、天台ノ別當ヲ大勸進ト云ヒ、淨土ノ首長ヲ本願ト稱シテ、比丘尼ナリ、此二者各其職ヲ分チテ寺務ヲ處辨ス、而シテ時宗ノ僧モ亦此ニ住セリ、

〔拾芥抄〕下本諸寺 善光寺 信濃國

〔書言字考節用集〕二乾坤 善光寺ゼンクワウジ 信州水内郡、事詳三國寶抄、

創建本尊

〔扶桑略記〕三欽明 十三年、一云、同年壬申十月、百濟明王獻阿彌陀佛像、長一尺五寸 觀音勢至像、長一尺 表云、〇中略 附使貢獻、宜信行者、已上 或記云、信乃國善光寺阿彌陀佛像、則此佛也、小治田天皇〇推古御時、壬戌

年年○十四月八日、令巨勢大夫奉請送信乃國云々、

〔日本書紀 十九 欽明〕十三年十月、百濟聖明王、○中略獻釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷、別表讃流通禮拜功德云、○中略是日、天皇聞已、歡喜踊躍、詔使者云、朕從昔來、未曾得聞如是微妙之法、然朕不自決、乃歷問群臣曰、西蕃獻佛、相貌端嚴、全未曾看、可禮以不、蘇我大臣稻目宿禰奏曰、西蕃諸國一皆禮之、豐秋日本、豈獨背也、物部大連尾輿、中臣連鎌子同奏曰、我國家之王天下者、恆以天地社稷百八十神、春夏秋冬、祭拜爲事、方今改拜蕃神、恐致國神之怒、天皇曰、宜付情願人稻目宿禰試令禮拜、大臣跪受而忻悅、安置小墾田家、懃修出世業爲因、淨捨向原家爲寺、於後國行疫氣、民致夭殘、久而愈多、不能治療、物部大連尾輿、中臣連鎌子同奏曰、昔日不須臣計、致斯病死、今不遠而復、必當有慶、宜早投棄、懃求後福、天皇曰、依奏、有司乃以佛像流棄難波堀江、復縱火於伽藍、燒燼更無餘、於是天無風雲、忽炎大殿、○下略

〔善光寺緣起 一〕抑善光寺生身如來申者、昔汝東天竺毗舍離國月蓋長者之召請、來現此土本尊御座也、奉尋其出世利物生起由來者、卽可有三國傳來之三意、三國者、天竺、百濟、日本也、

〔善光寺緣起 二〕抑生身如來、百濟國一千十二回御利益事畢、渡日本國、付攝津國難波浦、于時、吾朝仁皇三十代欽明天皇、治天下十三年、貴樂元年壬申十月十三日辛酉日也、其時、內裏大和國山部郡斯歸島宮金刺內裏也、百濟國二人勅使、內裏南面庭上奉據居如來、同捧牒狀奏達此由、

〔伊呂波字類抄 世 諸寺〕善光寺 新佛像、日本國度至、經歲積、幷貳佰拾陸歲之中、京底流轉年數五十歲、信濃國請降經年員一百六十六歲佛云云、

推古天皇十年壬戌四月八日、信濃國人若麻續東人上洛、下向日、奉傳此佛、自頂而下時、京大和國之高市郡小治田宮路次宿々數不離背、國々司々聞此感彼、每宿晃田下著本國麻續村造寺奉居四十一之禮拜供養、皇極天皇元年壬寅時、京大和國高市郡明日香川原宮長老東人水內宅庭奉渡此佛、卽作草堂、[illegible]奉居、既畢、夙奉見佛不見給、驚而還宅、猶然有庇、萬人流淚隨喜靈驗、其一致宅作寺、善光寺是也、

〔源平盛衰記 九〕善光寺炎上事

今年三〇治承三年三月廿四日、信濃國善光寺炎上アリ、是又淺猿キ事也、彼如來ト申ハ、昔天竺ノ毗舍離國ニ、五種ノ惡病發テ、人民多亡キ、毗舍離城ノ月蓋長者ト云者アリ、最愛ノ女子如是ト云者、病ノ床ニ臥テ、憑ナク見エケレバ、恩愛ノ慈悲ニ催レ、釋尊說法ノ砌ニ參テ歎申ケルハ、如來ハ大悲ヲ法界ニ覆テ、衆生ヲ一子ト孚給ヘリ、而ヲ毗舍離城ノ人民多滅亡、最愛ノ女子亡セントス、願ハ慈悲ヲ垂テ、惡病ヲ濟給ヘト、釋尊勅シテ云、我力ヲ以テ、彼鬼病ヲ助ガタシ、是ヨリ西方十萬億土ヲ過テ佛御座、其名ヲ阿彌陀佛ト云、至心ニ祈誓シ奉バ、自其病ヲ助ルベシト敎給フ、長者家ニ歸テ遙ニ西ニ向ヒ、香花ヲ備ヘ、十念ヲ唱、祈申シカバ、彌陀如來、觀世音、勢至、西方ノ虛空ヨリ飛來、一光三尊ノ御體一揲手半ノ御長ニテ、長者ノ門閫ニ現ジ給タリケルヲ、閻浮檀金ヲ以テ、奉鑄移、閻浮提第一ノ佛像也、如來滅度ノ後、天竺ニ留給フ事五百歲、佛法東漸ノ理ニテ、百濟國ニ渡御座テ、一千年ノ其後、欽明天皇ノ御宇ニ、浪ニ浮、本朝ニ來給ヒタリシヲ、推古天皇ノ御宇ニ、信濃國水內郡住人、本田善光ト云者、遙ニ負下奉テ、我家ヲ堂トシ、我名ヲ寺號ニ付ツヽ、安置シ奉リテヨリ以降、日本最初ノ佛像、本師如來ト仰テ、貴賤頭ヲ低、道俗掌ヲ合ツヽ、旣ニ六百歲ニ及リ、

〔善光寺大本願文書〕御書披見候、依善光寺本尊之儀、依爲官領領地社、對當御門主、從親王御方尊翰跪而致拜讀候、然而被差下勅使幷綸旨、尤過分至極候、叡慮之趣令存知候、樣子、日野亞相可被申入候、重而御左右次第可奉應勅諚候、聊以不存疎意候、淵底前相國御存之前心候間、可被仰越之由、宜令被露給候、恐恐謹言、

八月十二日　家康花押

岩坊

〔堯恕法親王記 三十二〕元祿七年八月三日、善光寺如來開帳、九月六日、被迎善光寺如來於靑蓮院門跡、仍テ行向彼門室拜之、不思議之像也、一本尊彌陀、長一尺三寸計歟、脇士二大士九寸許也、三

尊共ニ鑄像色黑シ、處々金色有リ、彌陀ノ印相、右手ハ舒五指立之、左ハ垂下シテ舒中頭ノ二指如刀、印相、常途ノ彌陀ノ印相トハ異也、二大士、兩手當胸、如梵篋印像、二大士共ニ印相寶冠等全同、只左ヲ觀音、右ヲ勢至ト思フ計也、全不可見分之也、二大士共ニ寶冠中有彌陀像也、後光、三尊一ツノ後光也、蓮花ハ無花葉、蕊バカリ、其狀如臼也、光座等ハ新調也、金色也、光中ノ化佛ハ古佛也、三尊ハ立像也、化佛ハ座像也、

〔實隆公記〕永正五年五月十一日戊申、入夜新大典侍來臨、〇中略又善光寺新佛叡覽事、頻望申之、可爲如何哉之由、被仰之旨趣、先目安依寫留之、

信州沙門戒順謹言上

右根本善光寺前立新佛者、弘聖菩薩、依如來靈告被造立之、其故者、過一千年之後、本尊可被移化緣於夷島、其後爲衆生濟度、可留形像云云、自爾已來、威光不異本佛、利益宛同生身、然而去文明九年六月廿四日、本堂炎上之時、斯佛燒失訖、然而七日之後自灰中立瑞雲、放光明之間、諸人成奇特思、尋求之處、此佛黃金御首灰中留給、爰戒順、發無二大願、如元可奉鑄續之由、蒙靈夢之間、測所願成否、於天王寺、一七日令參籠祈精申之處、於堺北庄、致勸進、可奉造立之由、重蒙其瑞夢之間、於彼在所新調之文龜二年卯月八日、遂其節訖、仍本佛如來、任信州御下向之例、不違其道路、大和國橘寺奉遷之、其後、南都奉入之、只今叡山坂本奉逗留之處也、欽明天皇御宇、善光寺如來、奉入禁中、有御叡覽云云、任往古例、御叡覽候之條、預啓達者、可畏入存之旨、謹言上如件、

永正五年五月

此事、愚意不能局量、但以前、當麻新曼陀羅等被入禁中之條、不能左右、然者何事在之哉、所詮、內々以女中邊儀、御結緣可然歟之由願申者也、

〔善光寺道名所圖會 三〕定額山善光寺水內郡柳原の庄芋井郷長野村の靈場なり

堂塔

天智天皇三年甲子草創也、むかしは天台宗にて、三井寺持なり、其後眞言宗と成て高野山に屬し、また寛永年中東叡山に屬して、再び天台宗に歸す、

〔信府統記三信濃國郡境記〕善光寺略○中

僧房　大勸進天台宗別當ナリ　本願淨土宗比丘尼ナリ、此所ニ佛舍利、中將姬ノ髮毛ノ名號アリ、　天台宗二十一坊　淨土宗十五坊　時宗十坊、是妻戶ノ時宗ト稱シテ、遊行派トハ異ナリトカヤ、

〔信府統記三信濃國郡境記〕善光寺略○中

本堂　南面ナリ、東西七間、南北十七間、大略如此、但シ間尺等シカラズ、一々由緒アリトナリ、本堂正中ヨリ内陣アリ、瑠璃壇ト云ヨシナリ、其東ヲ善光ノ間ト云、佛勅ニ、汝東念我、我在西護汝ト、故ニ本堂西ノ方ニ尊座アリト也、内陣ノ周リ戒壇ナリ、尊座ノ間七十餘疊、次ノ間六十餘疊ナリ、其間ノ東西ニ、阿彌陀地藏ノ木像アリ、各長丈餘、其次ハ板敷ノ間也、高座アリ、時宗ノ僧徒座之、旦暮念行スルナリ、天台宗淨土宗ハ、内陣ノ前ニテ讀經念佛ス、參詣ノ僧俗、佛前ニ於テ、過去帳ニ靈名ヲ記シ、或ハ佛前ニ供物ヲ備ヘ、或ハ十八燈廿八燈ニ油ヲ注テ、亡親緣族ノ冥福ヲ祈リ、或ハ自己二世ノ福因ヲ修ス、

緣起文曰、日本大乘界本師如來、前一步淸淨地皆往安養國、

三燈　佛前ニ在リ、昔時如來ノ白毫ノ瑞光ヲ、此三燈ニ分チウツサセ給ヒ、如來ハ閉帳アリシトナリ、其時、佛說偈曰、一度見常燈、永離三惡道、何況持香油、決定生極樂、如此佛勅有シトナリ、

年宮　本堂ノ後ニ在リ、極月中ノ日夜半ニ、毎歲遷宮アリ、背面金剛ニ化シテ、御年ヲ取セ給フトナリ、神道ノ源秘儀式アリトナリ、役者十五人之ヲ執行ス、其外ハ、三山ノ僧徒モ知ルコトナシトナリ、此夜僧俗ノ家トモニ火ヲシメシ、騷動ヲ制ストナリ、固ヨリ遷宮ノ時ハ、人出テ見ルコトナシト云ヘリ、

本前堂　本堂ノ西ニ在リ、彌陀ノ千尊アリ、中尊三體ハ古佛ナリ、如來閉帳ノムカ

シ、尊像ヲ摸シトメシ佛ナリト、古老云ヒ傳フ、　骨堂　本堂ノ後ナリ、堂前ノ古墳數ヲ知ラズ、志ノ人ハ、爰ニ記念ヲ建ルトナリ　　釋迦堂　本堂ノ東ナリ、御長ケ五尺許リノ寢釋迦ナリ、金佛ト云フ、是レナン越後ノ國コタノ濱ヨリ、獵師ノ網ニ罹リテ、揚ラセ給フトナリ、佛作人作ト分ツ人ナシトナリ、此御佛、天下ノ凶事、當山ノ不吉アラントスル前瑞ニ、必ズ遍身ニ御汗濕ホハセ給フトナリ、其證シ慥ニ見タル人多シ、去ル寬文八年戊申、東武江府大火災ノ時モ、御汗流レサセ給フヲ、正シク拜シ奉リシト、所ノ僧ノ語リシナリ、　龍燈　本堂ノ南ノ川ヨリ龍燈ヲ捧グトナリ、不思議ノ緣アリテ見シ人モアリ、

善光寺、昔時ハ七堂伽藍五百餘ノ堂塔、八百餘ノ叢祠、寺内方八町四門アリ、一曰、東門定額山善光寺、二曰、西門、不捨山淨土寺、三曰、南門、南命山無量壽寺、四曰、北門、北空山雲上寺、其後回祿度々ニテ、寺裏漸ク減少シ、今ハ昔ノ半バニモ足ラズ、

欽明天皇ノ御宇、始テ如來日本ニ渡リ給ヒテ後、皇極天皇御本願、御堂草創アリテ、後ニ高倉院治承三年三月二十四日、天災、諸堂殘ラズ燒亡セリ、修造、後深草院建長五年四月廿六日、供養平ノ實時之ヲ修シ、觀養坊ヲシテ觀進セシム、又龜山院文永五年二月十四日、類火ニテ、一宇モ殘ラズ炎上、同七年十月十九日、再興供養、花園院正和元年三月二十二日炎上、其後又光嚴院應安三年四月四日炎上、稱光院應永三十四年三月六日、一宇モ殘ラズ炎上、後土御門院文明五年六月四日炎上、後陽成院慶長二年七月十八日、如來入洛、太閤秀吉公御沙汰トシテ、大佛殿ニ入レ奉リ、本尊ト爲ス、然レドモ、佛ノ祟アルニ依テ、同八月十七日歸國、是レ年代記ニ見エタル說ナリ、其後、寬永十九年壬午五月九日、善光寺御堂炎上、又元祿十三年庚辰七月廿一日炎上同廿三日松本ヘ聞エケルニ依テ、早速飛脚ヲ以テ、江戸ヘ注進アリシナリ、

僧房〇中略　天台宗二十一坊〇〇〇淨土宗十五坊〇〇〇時宗十坊〇下略

〔二十四輩順拜圖會 信濃五〕善光寺 天台宗

坊舍四十六區、本堂（高サ十丈の二重作り、表十五間、二十九間三尺、柱數百三十六柱、）四方四門の號、東は定額山善光寺、西は不捨山淨土寺、南は南命山無量壽寺、北は北空山雲上寺とあり、正南は破風作にして、他の堂舍に異なり、內陣は眞中を限り、左の間に善光、善佐、彌生前の像を安置し、右の間の御戸帳の內、御本尊御正體鎭座なし給ふ、是又他の堂塔に、本尊を安置せる格と等しからず、往昔善光の屋造りに準じたる堂作りなりとかや、又如來善光に、佛勅して予と汝と同座せんと示し給ふ事有ける故、內陣を左右に安置せしとぞ、山川（高サ六丈六尺七分、桁行十一間一尺三寸、梁間四間二尺四寸、）二王門（高サ三丈九尺二寸、桁行六間四尺六寸、梁間四間一尺二寸、）經藏（高サ四丈六寸二分、六間三尺二分四方、）本尊、一光三尊閻浮檀金正身阿彌陀如來なり、此如來の、日本へ渡らせ給ふは、人皇三十代欽明天皇十三年壬申十月十三日、本堂建立は、人皇三十六代皇極帝の勅願也、開基は本多善光朝臣なり、

〔源平盛衰記 九〕善光寺炎上事

今年（○治承三年）三月廿四日、信濃國善光寺炎上アリ、是又淺猿キ事也、（○中略）炎上ノ例難及度々、王法亡ントテハ、必佛法先ニ亡トイヘリ、去バニヤ、加樣ニサシモ止事ナキ靈寺靈場ノ多亡失給ハ、王法ノ末ニ臨ミ、天下ノ穩シカルマジキ瑞相ニヤトゾ、貴モ卑モ歎ケル、

〔吾妻鏡 七〕文治三年七月廿七日丙寅、信濃國善光寺、去治承三年廻祿後、有再興沙汰之間、殊可加合力之由、被仰付諸人云云、其狀云、

下　信濃國庄園公領沙汰人等所

可早結緣助成善光寺造營間土木人夫事

右件寺、靈驗殊勝伽藍也、草創年舊、堂宇破壞、加之動有火災之難、礎石之外更無殘、有情之輩、何不歎、此事、早國中不云庄園公領、一味同心與力、於勸進上人土木之間、勵出人夫令終其功、若不奉加此功

之者、不可有所知領掌之儀之狀如件、以下、

文治三年七月二十七日

廿八日丁卯、善光寺造營間事、令下知信濃國御家人給之上、被仰當國目代云云、其奉書云、

善光寺造營之間、國中さうざうさいはず、人夫をいだして、力をくはふべきよし、御下ぶみたび候ぬ、もとの所知などしらせ給候て、與力せさせ給候べし、このたび不奉加の人は、所知をしらざりけりとおぼしめさん、

七月廿八日　　俊

信濃御目代殿

（吾妻鏡三十）嘉禎三年十月十六日甲午、信濃國善光寺五重塔婆供養也、淨定上人爲大勸進、令知識奉加云云、導師、寺大貳律師圖仙、呪願、齊圓、能登阿闍梨、依此事、去五日、別當勝舜自本寺下著云云、

（吾妻鏡三十七）寛元四年三月十四日壬寅、信濃國善光寺供養也、大藏卿法印良信爲導師、名越故遠江入道生西資等依受遺言、爲大檀越、成此大會云云、勸進上人親基云云、

（吾妻鏡四十三）建長五年四月廿六日癸酉、信濃國之善光寺修造、被遂供養、導師大夫堅者維眞、當寺學頭檀那奥陸守重時、令觀養坊勸進、

（濟北集七）善光寺飛柱記

正和第二歲在癸丑春三月、信州善光寺火、其明年三月、有飛柱之異焉、夏秋之間、好事者、圖畫傳于京師、予以爲誕、而每逢北客、必問之、皆曰、然、予頗疑之、冬十二月、律師圓西通謁云、吾州無量壽殿爲祝融之所有、州人寺伍、齎咨涕洟、胥共謀圖、擧土木之役、爰倉科縣有巨木、縣主捨之、穿雲蔽日、外凋內貞、滿液不齎、乃堅乃良、匠氏度睆斧、桀丁丁、萬夫負負、寸進尺行、慢趣輸組、拱手無指、其材忽擧、奮迅翔鶩、長繩巨索、纏糾交錯、飛龍在天、鯖鬐獵獵、飛過二里、蹤峯邁壑、匠人役夫、目駭心肅、○中略 茲三事皆白日也、

寺領

三所共本州也、三異一州、迭唱遞和、嘆詡嗟蹙、聯村接野、西聞語不文不傳遠、雖不乏一時之觀聽、欲貽萬世之信觸、顯師勇于義、弛于讓、予曰、○中略始我抱誕於流言、中疑於歎客、今信於予、○中略蓋信士之闕以我無量壽之靈也、佛之靈以予之州之信也、州之信以飛柱之異也、予其識諸、西云、吾佛欽明十三年貢自百濟、推古十三年戾止本州、爾來治承之三、文永之五、今之正和、三羅回祿、僉三月也、豈非數耶、蓋止之記、予曰、是記殿者之事也、我唯誌飛柱之異而已矣、西者寺之主事也、故有此請焉、嘉平中辯某記、

〔看聞日記〕應永卅二年八月十四日庚辰、抑未剋京有燒亡、○中略後聞、○中略信濃善光寺も燒失云々、但巷說不審也、

〔續史愚抄〕稱光應永卅四年三月六日甲午、信濃善光寺火、自東門火起、堂塔等不殘一字燒亡、於本尊阿彌陀者取、退橫山堂云、善光寺緣起、薩戒記、南方紀傳、六月朔

〔寺鑑〕上天台宗御朱印千石餘之內寺領　高百石　信州善光寺　靈山院

〔信濃寺社文書〕坤善光寺領信州水內郡內千石餘、永代令寄附訖、佛事勤行諸役人配當等、從前々如有來、可勤仕之狀如件、

慶長六年七月廿七日

內大臣家康○德川

善光寺御寺領之割

一貳百五拾石　信州水內郡之內　長野　一貳百七拾四石三升　同　箱淸水　一四百六石

壹斗七升四合　同　七瀨川原　一六拾九石七斗九升六合　三輪村之內　合千石

此內　三百石大勤進大本願　御造營免　百貳拾石大勤進抱　燈明免　百貳拾石同斷

佛供免　百石　大勸進　五拾石　大本願　百六拾八石　衆徒廿壹人　七拾五石

中衆拾五人　三拾壹石　妻戶拾人　三拾六石大本願抱　大工免

巳上

慶長六年辛丑九月十六日　櫻井安藝守信忠書判○以下三人署名略

大勸進

善光寺領信濃國水內郡內千石餘令寄附畢者、佛事勤行諸役人配當等、任去慶長六年七月廿七日先判之旨、彌不可有相違之狀如件、

元和四年三月十日

寺職

〔吾妻鏡十九〕承元四年八月十二日丁卯、信濃國善光寺地頭職者、故右大將軍御時、鎭狼藉可令安堵住侶之由、寺家就望申之、可被仰付便宜輩之旨、有御沙汰之時、長沼五郎宗政申請云、吾身者、先世罪人也、爲値遇結緣、欲被抽補當寺生身如來地頭者、仍依請之由、賜御下文之後、歷年記之處、寺家地頭還成煩、早可被停止之趣、本所御文到來之間、可停止彼職之由、昨日被成政所御下文、今日被申御報、廣元朝臣爲奉行云云、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年十一月廿日甲寅、信濃國善光寺事、且爲被鎭寺辻惡黨、且爲警固、被定置奉行人、所謂和田石見入道佛阿、原宮內左衞門入道西蓮、窪寺左衞門入道光阿、諏方部四郎左衞門入道定心等也、而相交員外雜務、致不調沙汰之由、訴訟出來之間、今日及評議、自今以後、可令停止彼奉行人等之旨被仰出、且此子細所被觸仰當國守護人陸奥孫四郎也、

〔善光寺大本願文書〕覺

信州善光寺本願と、大勸進かり堂立候に付而出入之事、

一本願申候は、かり堂井本堂造營之儀、先規より本願壹人して、一圓申付來候、然處今度大勸進、本願と兩人にて、かり堂可相立之由、大勸進申ニ付而、迷惑之由事、

一大勸進申候は、いにしへも堂立候刻は、堅棟は本願、横棟は大勸進申付來候處、今度一圓に、本願

寺領

方より、かり堂立べきのよし申かけ、迷惑之由事、

右兩條、穿鑿之處、權現樣御代、善光寺領千石割符之證文に、造營免三百石之內、百五拾石者本願、百五拾石者大勸進と有之上は、此度之假堂入用之儀も、雙方より同前に出し合、可修造之、但大工免三拾六石は、本願可進退候由、書面に有之上は、大工支配同小屋等之儀者、本願方より可申付之、本堂建立之時も、可爲同前事、

一萬表役之儀、本願尼之事候間、相談之上、大勸進可相勤事、

一善光寺領千石之所、町人百姓等仕置之儀、是又本願は尼之事候間、相談之上、大勸進仕置可申付之、但本願同心不仕義、大勸進一人之心得にて不可申付、若兩人談合不落着事は、奉行所へ訴之、可任其意事、

右之外之儀者、權現樣御代、大勸進宛所にて、大久保十兵衞小田切大隅、櫻井安藝、石原四郎右衞門、此四人、證文之通、可致沙汰、如此申渡之上、若相背方於有之者、急度可訴訟之由、雙方へ此覺書渡置之者也、

寬永十九年十一月十九日　　松平出雲守勝隆花押

安藤右京進重長花押

〔信府統記三信濃國郡境記〕善光寺○中略

寶永年中、善光寺へ仰出サル御條目寫、

覺

一衆徒中衆妻戶は、貞享年中、解脫院宮御掟書之趣に任せ、大勸進之支配たるべき事、

一山林竹木猥に伐採べからず、若入用之節は、大勸進本願之役人、互に案內を相通して可伐事、

附、御堂修理有之においては、立合相談之上、はからふべき事、

一御堂出仕之儀、本願之座席、如₂先例₁聽聞座に著座たるべき事、

一善光之間、佛供は、解脫院宮御掟書之ごとく、每日卯之中刻、大勸進可₂獻₁之、正月餅かざり等、從₂本願₁可₂獻₁之事、

一散錢散米等配當、可₂任₁先例₁事、

一御戶開帳之儀、如₂先例₁、施主報謝金、大勸進方へ施入すべし、本願客有₂之の節、開帳もまた是に同じかるべき事、

一御朱印、幷什物等、大勸進之封印を以て納置べし、本納金にて相調候、新古筆等も、是に同じかるべき事、

附、大勸進闕任之節、御朱印幷什物等、本願之いろひに不₂及、如₂先例₁、衆徒老僧等、大勸進之寺に於て相守るべき事

一如來堂棟札之儀、日光准后御指圖之上にて可₂打事、

附、自今已後、入佛供養等之節、可₂離之輩、其場に差出すべからざる事、

一造營入用金之儀、兩寺おの〳〵、急度勘定相立べき事、

右之外、寺中一切之法例等、聊も新儀を構て、舊例違ふべからず、萬事表役幷寺領之町人百姓等、仕置の事に於ては、寶永年中、奉行覺書の旨に任せ、本願と相談の上を以て、大勸進可₂勤₁之、爲₂後證₁如₂此記₁之、雙方へ相渡者也、

寶永七年寅九月廿七日

森出羽
本彈正
鳥伊賀
安右京

名所在寺蹟　雜載

大勸進

安樂寺

安樂寺ハ、信濃國小縣郡別所村ニ在リ、創建未ダ詳ナラズ、僧惟仙ノ再興スル所ニシテ、禪宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會 六十八 信濃〕安樂寺

開山樵谷仙禪師、名惟仙、號樵谷、未詳何許人、嘗航海入大明、得法於天童山別山智和尚、歸住信州安樂寺、爲開山第一祖、厥後不知所終、

〔日本地誌提要 二十六 信濃〕佛寺　安樂寺 小縣郡別所村、同宗、(禪宗)開基創建年月未詳、天長中、僧圓仁再興ス、寺域九千七百貳拾四坪、

〔空華集 十九〕別宗建首座住信州安樂諸山疏

圓照一派入于東海、而大者六、曰佛光氏、曰聖一氏、曰雪巖氏、曰環谿氏、曰兀庵氏、曰別山氏、是六者子孫縈爾、星布乎天下、莫之與京、惟圓別山氏者、曰樵谷僊公、在昔宋南渡、景定間、公航海南游、得法於天童別山禪師、追歸本國信陽僊府、披榛翦宇、名曰崇福山安樂護聖禪寺、而自居焉、既而樵谷出世相之萬壽、未大其施、遽爾裁化、人咸謂、樵谷之福不在其躬、而在其子孫乎、然後殆將百年、其子孫皆以道自晦、不欲炳燿于世、故罕聞焉、今別宗其所謂樵谷之福所在者歟、外如枯而內充、跡欲晦而名顯、人皆入寶山而空手、公獨衣錦綉而返鄕、別山師祖嘗有言、莫謂空來又空返、果然親到寶山歸、此非爲子孫今日預讖者邪、於是凡在城諸山、喜法社得人而作疏、胥慶曰、崇山月白丹桂飄、空外之香、樵谷春回幽蘭吐、雪中之馥、歲云莫矣、行其時哉、

〔新編相模國風土記稿 七十八 鎌倉郡〕建長寺〇中略 開山道隆、〇中略

同

隆○道墨蹟二幅一ハ鹽田安樂寺ヨリ、觀音贊ヲ請ハレシ時ノ返翰ナリ、曰、先日觀音贊、雖蒙仰候、行道々上、至今皆記候事、恐入候、又觀音聖像、左右有韋陀龍像、侍衛雖未拜其聖相、但依所示之語贊呈、慈成定慧、物々露恩、並順縱橫、塵々普應、提高有而不提於邪途、導群情而令持步正國、信韋陀護法、運其潤之洪機、龍像森嚴、進利生之大悲、世界有重、我願無窮、塞滿野愚、如大圓鏡、妙用非唯觀世音、平公日奉復、鹽田安樂寺方丈、道隆、

名稱 所在

創建 沿革

古事類苑

宗教部六十五

佛教六十五

大光院

大光院ハ、上野國新田郡太田ニ在リ、德川氏ノ祖先新田義重ノ建立ニシテ、寺名ハ卽チ其法名ナリト云フ、慶長年中、朝廷家康ヲ太政大臣ニ任ゼントス、家康之ヲ辭シテ、更ニ奏請スルニ、義重ノ贈官ヲ以テス、朝廷因テ義重ニ鎭守府將軍ヲ授ク、是ニ於テ家康、寺地ノ舊跡ヲ求メテ當寺ヲ再興シ、紫衣檀林ノ一ト爲セリ、

〔上野國志 新田郡 寺塔〕大光院

大田ニアリ、金山ノ南麓ナリ、淨土檀林ナリ、

〔檀林譯書〕 新田 大光院〇中略

一大光院舊地者、新田郡寺尾村と申所に有之、則義重公御在命の內御建立、七堂大伽藍の由、舊記に相見候、右七堂の舊跡、只今に礎の石など民間に相殘り、其村を、古來より七堂村古大光院と申傳へ候、

一唯今の大光院御建立の由來者、權現樣御幼年の比より、義重公の御宿意をふかく御知らせられ、數十年を經させ給ふに、關ヶ原御利運以後、天下一統の御治世にて、唯御自身の御本望のみ新らず、大光院樣〇新田義重始奉り、御先祖樣方への御追孝と被爲思召候由、依之大光院樣江御贈官幷寺字御建立の由來も、此御孝心より起り候趣、舊記に相見江申候、

一後陽成院帝の御宇、慶長十六年の春、權現樣江太政大臣の勅定有之候處、此御昇進を御辭退被爲遊候て、被仰上候者、先祖新田義重は、源氏の嫡流として、自立の志有といへども、果さずして歿せり、兒孫の身にとりて、遺恨止ことなく、あをぎねがはくは、義重に鎮守府將軍の宣旨を下し賜り候はゞ、亡魂冥途の恩榮、愚身生前の大幸、太政大臣の勅恩に、幾倍の超過可仕の旨被遊奏聞、候處、叡感斜ならず、慶長十六年三月廿二日、義重公江贈鎮守府將軍の綸旨を下し賜り候、右口宣幷綸旨、且義重公御自筆の御願書壹卷、當院御建立の上御寄附被遊、大光院第一の重寶と奉尊重候、

一上州新田郡者、御當家御太祖以來の御領國、且往昔御氏族御出生の地たるによつて、慶長十六年十一月、義重公爲御菩提、精舍一宇可被爲遊御建立旨、權現樣御上意を以、新田の舊地等見分の爲、土井大炊頭殿、成瀬隼人正殿江被仰付、幷增上寺觀智國師御差添被遣候、然るに義重公御城地寺尾の舊住數百年を經候事故、義重公御建立の大光院七堂、其節一宇も無之、殊に寺尾山深く、人馬往來等不宜候故、唯今の地に御建立被遊候、此前者、往昔義重公の御父義國公の御城地にて御座候由、右境地の圖記幷御兩使見分の事實上聞に達し、同十七年の春、御普請御奉行久永源兵衞殿、服部仲殿江被仰付、御取掛有之候、其節唯今の御寶塔、御石棺者、寺尾の舊地より御改葬し奉り、且又昔のごとく七堂全備の御建立の尊慮にて御座候得共、其頃公邊御用御繁多にて御普請絶間有之、漸翌十八年迄に、本堂、方丈、庫裏、出來仕候處、十九年寅年より、大坂御陣に付、御普請御奉行、諸職人等迄直に新田より可發向の由被仰付、右に付、大光院御普請半造作にて御延引、依之三門、總門、鐘樓等の諸堂相殘申候、〇中略

一大光院樣御廟者、慶長年中寺尾の御舊蹟より御改葬被仰付、御寶塔御建立被遊候、右の外御子樣方、又は御女中方抔、御遺骸被爲入候儀無御座候、

〔上野國志 新田郡 寺塔〕大光院〇中略

官家ノ御日記ニ云、慶長十六年辛亥十一月大九日、忍ノ城ヘ、觀智國師ヲ召テ、上州新田庄ニ曩祖義重公ノ菩提所ヲ建立シ玉フベキ間、勝地ヲ撰ブベキ由ニテ、土井大炊頭利勝、成瀬隼人正正成、トモニ新田ニ赴カシメ玉フ、十三日、今曉新田ヨリ、觀智國師、土井成瀬歸參シテ、大炊助義重左中將義貞朝臣ノ舊跡ヲ尋ルニ、老農敎ヘテ、世良田ノ近所金山城ノ麓ニ、古院ノ遺跡アリト云フ、利勝人夫ヲ以テ掘セ見ルニ、瓦石古佛等出ル、此趣言上ノ處大ニ喜バセ玉ヒ、其地ニ寺院ヲ造立セラルベシト云云、造畢ノ後ニ、義重山大光院ト號シ、寺領ヲ附ラレ、住侶定紫衣ヲ勅許アリ、則義重ヘ、贈官ノ綸旨、彼寺ニ存ス又關難聞記ニ曰、慶長十六年、依東照宮台命、增上寺住侶觀智國師、及土井大炊頭、成瀬隼人正、赴上野國新田庄、今年、御曩祖新田大炊助義重、因贈爵鎭守府將軍從四位下、爲造立彼廟、使彼董監檢其地理也、是今十一月九日發足、同十三日歸江戸城、然義重之墳墓所在之地理、以繪圖獻之、甚有御喜悅、卽今又命土井、成瀬、被造立梵宇於金山麓義重古墳地、號義重山大光院、令觀智國師弟子然譽呑龍上人住職、以三百石之地領、被寄附焉、新田寺ト號ス、開山呑龍上人、方丈ノ傍ニ小池アリテ、蛙多ク此池ニ住ク、其聲人耳ニ聒シク、禪觀ニ碍アルニ依テ、密呪シテ鳴カザラシム、今ニ至テ、此地ニ蛙聲ナシ、無聲蛙ト云フ、又上人一時生品社ニ詣ス、路ニ一人ノ山臥ノ如ナル異相ナル者アリテ、念佛ヲ授ランコトヲ乞求ム、上人意ニコレ雷公ナルコトヲ知リテ、名號ヲ書テ授與シ玉フニ、其兩傍ニ、震法雷爆法雷、以法音覺世間ト云ヘル文ヲ書テ與ヘタマフ、又別ニ、其如ク書玉フ名號ヲ、寺ニ遺シ置玉フヲ印シテ、除雷ノ名號トテ、當寺ヨリ出ル、人コレヲ帶ルモノ霹靂ノ災ヲ免ル、又開山ノ影像ハ、親彫刻シ玉フ、甚靈驗アリ、元和九年八月九日遷化、

(御日記)慶長十六年十二月、於江戸、土井大炊頭、成瀬隼人正、增上寺ニ被仰付、上州新田ヘ下向、御先祖爲御菩提、大光院ト云寺御建立、御廟不知御苗氏ノ地名故定ラル、

(台德院殿御實紀十五)慶長十六年三月廿二日、御追贈の宣下ありて、新田大炊助義重は、鎭守府

堂舍　寺格

將軍〇中略を贈らせ給ふ、上卿は廣橋大納言兼勝卿、

（上野國新田郡太田）義重山新田寺大光院

〔檀林誌 長〕御朱印三百石

再得光彩

本堂、東西十三間、（京間）南北十一間半、（同南向）是御佛殿なり、　大方丈、御神殿なり、南向、南北十間、（京間）東西六間、（同）　廊下、本堂より大方丈（江）至る處、一間ニ三間、　廊下、三間ニ一間、大方丈より庫裏にいたる、　廊下、八間ニ三間、本堂より庫裏にいたる、　玄關、二間ニ一間、　小方丈、北向四間、（京間）東西九間、（同）

茶間、上御供所と云、東向、（京間）南北六間、東西三門、（同）　已下悉京間也、故略、

大方丈に、五間ニ一間半の庇　浴室　茶間東角屋二間ニ六間、是學寮也、　開山堂七間ニ五間、

庫裏、南北十間、東西八間、　土藏、三間半ニ二間、南向、　穀藏、南北二間半、東西六間、　鐘樓、南北六間半、東西二間半、　右何れも悉く瓦葺、巳の所一枚每ニ葵御紋付、中門、南向四間ニ九尺、左右高塀、

御吉祥門と云、　大坂落城の日上棟　井亭、三ケ所、　厠、數ケ所、　學寮、開見錄ニ云、古凡五十一字、

今僅九軒云々、　總門、中門より八丁餘、太田上町ニ出、唯木欄のみ、（今ハ四間ニ九尺ノ川アリ〇下略）

〔靈尻 三〕關東十八檀林　淨土宗關東檀林十八所〇中略　大光院（新田）

〔檀林誌 長〕御朱印三百石　（上野國新田郡太田）義重山新田寺大光院

寶書章論

開山紫衣御奉書

一筆申入候、仍大光院之儀、紫衣可被仰付之旨、上意候間、有御上洛之御用意、盆過ニハ當地迄可有御參候、恐々謹言、

七月八日　土井大炊助利勝印

本多上野介正純印

酒井雅樂頭
忠世印

大光院
呑龍樣
侍者御中

寺領

常紫衣綸旨

上野國新田大光院住持、代々令勅著紫衣事、新寶祚長久、不可混餘寺者、綸命如此、仍執達如件、

元和八年九月十日　右中將花押

知恩院末寺
大光院住持然譽上人御房

（寺鑑下淨土宗）御朱印高三百石　紫衣檀林 新田 大光院

（檀林誌長）御朱印三百石　上野國新田郡太田 義重山新田寺大光院

寶書章輪

御朱印寫

當院領上野國新田郡太田村之內三百石事、如慶長十九年所有寄附可寺納、并山林境內進止不可有相違、彌可專修造勤行之狀如件、

寛永十三年十一月九日　御朱印

大光院

寺制

（檀林誌長）御朱印　三百石　上野國新田郡太田 義重山新田寺大光院

寶書章輪

檀林と成後、緣山ゟ書狀、

一新殿之儀、傳燈相續爲專、當夏別而佛法三昧衆僧和合之仕置可爲肝要事、

一我慢爲先、每物對他、無理言懸致族有之者、大衆同道可令追放、其上雨上樣江可爲御披露事、

一愚老病身故、機務之間、佛世之指引、悉老僧任置候事、

名稱　所在　沿革　堂塔

香龍　慶岩　存悦　丁的　廓山

右之旨、必々衆中儀更ニ不行屆之間、大細事無贔取沙汰頼入候、仍如件、

卯月十八日　　普光觀智國師　源譽印

長樂寺

長樂寺ハ、上野國新田郡世良田ニ在リ、承久三年、源義季ノ建立スル所ニシテ、僧榮朝ヲ以テ開山トス、關東十剎ノ一タリ、此寺初メ台密禪ノ三宗ヲ兼ネシガ、寛永中、僧天海之ヲ天台一宗ニ定メタリ、

〔和漢三才圖會 六十六上野〕長樂寺　在世良田〇同禪宗　寺領三百石

〔上野國志 新田郡寺塔〕長樂寺　世良田郷ニ在リ、良田山眞言院ト號ス、昔ハ臨濟宗ニテ台密ヲ兼ヌ、今ハ天台宗ニテ權僧正也、御朱印三百石、〇中略

此寺、承久三年辛巳九月廿八日落成ス、開基大檀越德川四郎源義季、法名榮勇大禪定門、コレ新〇田〇家〇ノ〇御〇氏寺ナリ、義季ノ御廟、境内ノ文殊山ニアリ、

什寶〇中略

開山塑像　コレ開山禪師〇榮朝ノ躬親造ル所ナリ、開山塔ヲ大光塔ト云、〇中略

當寺法照禪師ノ後マデハ、住持三宗兼學ナリシガ、其後ハ別ニ眞言院ヲ設テ、密教ヲ執行ハシム、灌頂道場モ、眞言院ニアリ、寛永十七年、慈眼大師ヨリ天台宗ニナリテ、灌頂モ方丈ニテ執行セシニヨリテ、別ニ眞言院ヲ不設、〇中略

當寺正和中、回祿之處、大谷入道道海ト云者、寳財ヲ拋テ建立セシコト、古記文ノ中ニ見エタリ、

末寺四百有餘、孫末ニ至テハ殆ド千ケ寺餘

長樂寺改宗ノ事ハ、胤海僧正(大師の弟子)兩大師(寛永寺開大師ノ像)ノ緣起ニ見エタリ、土人ノ傳ル所モ是ニ同ジ、故ニ其辭コヽニ載ス、且鄉人ノ說ヲ其下ニ注ス、

上野國新田庄世良山長樂寺ハ、台、密、禪、三宗弘通ノ梵刹ニテ、新田德川ノ墳塋ノ地ナリトイヘドモ、頃住僧啞羊僧ニテ、堂舍零落シ荒廢ノ地トナリ、神君(○德川家康)御先祖ノ廟塔ニモ、年々春草ノミ生テ、名姓トヲ知ラザル事ヲ嘆カセ玉ヘドモ、住僧サセル犯シモ無ケレバ、差置シ玉ヒシニ、折節邪曲ノ事訴ヘケルヲ、(此訴ナニ事ナルカ傳ルコトナシ、時代ハ蓋シ慶長ノ初年ナルベシ、)其幸ト思シ追擯シ玉フテ、海師ハ(慈眼大師ナリ)ソノカミ彼寺ノ付法ノ由、カネテ聞シメシタリ、シカノミナラズ、三宗兼學、海ノ外天下ニ誰カ有ント思食シテ、海師ニ賜ハス、(長樂寺ノ住持ハ、往古ヨリ公帖ニヨリテ入院ス、)去レド、海何事モイソガヌ本性ニテ、ソレノミニシテ過シニ、神君薨ゼサセ玉ヒヌレバ、兎角シテ年比過ヌ、(大師長樂ヲ賜ハリテモ入院シ玉ハズ、數年塔主アヅカリテ居リシニ、山林ヲ伐リ荒シ、寺モ修復セズ、コレニ依テ寛永十八年、天台ノ末寺、普門寺、永德寺、ソノ外信州武州奧州ノ末寺、連署シテ、早ク住持職ヲ仰付サセラルベキ願ヲ捧ゲヽル、其中文ノ草當寺ニアリ、村民ノ語リ傳ルコトモ爾リ、)サテ家光公ヘ此旨申給テ、寺請取ナントテ、人遣セシニ、(使僧ハ大師ノ弟子、最敎院晃海ナリ、)寺僧申シケル、(塔主万像庵辭ニ拒ミ申ケルトゾ、)ソレ長樂寺ハ、開山榮朝禪師ニテ唯禪ノ室ナレバ、海ノ住持カナハジト訴ヘシヲ、海ノ玉ヒケルハ、彼寺ハ葉上(千光國師榮西)一流ノ傳法灌頂今ニ修行シ、ソノ末寺共數多ク侍レバ、秘密灌頂ノ道場ト云コト、誰カコレヲマゲンヤ、又貪道既ニ大事禪師、(大師會津ニテ、禪法ヲ傳ヘシ人ナリ、)並ニ宣海和尙ニ(長樂寺眞言院ノ住持)榮朝一派ノ單傳密印ノ法、印可ノ血脈ヲ請タリトノ玉ヘバ、大樹聞食シワケ、何ニモアレ祖神ノ賜ハセケレバ、兎角ノ事誰カハ沙汰セント宣ヒテ、海師ニイヨ〳〵賜ハセ玉ヒテ、侍從忠秋ニ(忍城主、阿部豐後守、)仰セテ、什物ニ至ルマデ不殘渡サセケル、堂塔破壞シケレバ、法堂ヲ修復シ、東照神祠ヲ造立シ、多寶塔、方丈、厨屋、新タニ造リ玉ヒケレバ、御神供領トテ、大樹ヨリ二百石ノ地ヲソノアタリ近キ所ニテ寄サセ玉フ、(百二)

十三石、世良田村、七十六石餘、小角田村、外寺領百石ハコレヨリ先ニ賜ハル、近年頽破セシヲ、昔ニモタチマサリテ無雙ノ靈場ナリ、

〔沙石集 六上〕榮朝上人之說戒事

上野國新田ノ庄、世良田ノ本願、釋圓房ノ律師榮朝上人ハ、慈悲フカク智惠カシコクシテ、顯密トモニ學シ、說法說戒マコトニタツトカリケレバ、近國ノ道俗歸依渴仰シテ聽聞シケリ、

〔沙石集 十上〕長樂寺榮朝上人事

上野國世良田ノ長樂寺ノ長老、釋圓房ノ律師榮朝上人ハ、彼建仁寺ノ本願僧正ノ弟子也、慈悲フカク德タケテ智行ナラビナキ上人ト聞エキ、去寶治元年九月二十六日入滅、

〔和漢禪刹次第〕關東十刹　上野州長樂寺　世良田山、開山榮朝和上、

〔松陰私語 四〕當寺〇長樂寺之事者、天子之御勅願寺、日本之十刹第五番之御寺、異朝本朝無雙之靈地也、〇下略

〔新編武藏風土記稿 一百九十一 比企郡〕將軍澤村

將軍澤村ハ、江戶ヨリ十六里、玉川鄕ニテ、領名ハ前村ニ同ジ、村內ニ利仁將軍ノ靈ヲ祭リシ、大宮權現ノ社アルヲモテ、將軍澤ノ名アリト云、上野國世良田長樂寺ニ藏セル文書ニ、

武藏國比企郡南方將軍澤鄕內、爲二燈明用途一田三段任二家時申置之旨一、所レ奉レ寄二進世良田御寺一也、若於二違亂之輩一者、永可レ爲二不孝之仁一、仍寄進之狀如レ件、

正安元年八月二日　沙彌靜眞

世良田長樂寺爲二修理用途一、奉三永代寄二進武藏國比企郡南方將軍澤鄕內、二子塚入道跡在家壹宇、并田三段、每年所當八貫文一事、

右依レ爲二氏寺一、爲二末代修理一、永代奉二寄進一者也、然者及二子孫一、不レ可レ致二違亂一、背二此之旨一輩者、永可レ爲二不孝之仁一、乃自筆之狀如レ件、

元德二年八月二日　源滿義

靜眞ハ世良田三河前司ノ子二郎教氏ノ法名ナリ、滿義ハ教氏ノ孫彌次郎滿義ナリ、コレニ據レバ、古ヘ世良田氏ノ所領ニシテ、長樂寺ニ寄附セシコト知ルベシ、

〔長樂寺文書四〕世良田長樂寺領所々目錄事

合

一所　女塚鄕（在所坪付略之）寬元四年□月十□□　沙彌榮勇寄進之　一所　世良田鄕内（在家一宇、同前修正壇供田、）康元二年□□十日　前參河守源朝臣賴氏寄進之　一所　（江田）堂垣内（同前）建治三年十二月廿三日　淨院寄進之　一所　今井堀内御堂地　弘安三年（庚辰）二月十一日　源輔村寄進之

一所　上今井（堀内）内道忍跡屋敷　弘安□年十一月三日　源資村寄進　一所　鳥山鄕内在家（坪付略之）永仁五年（丁酉）二月十一日（覺圓念空）兩人在判　一所　南女塚村内（在家二宇、同前）元亨二年十一月廿日　淨院寄進之　一所　小角田村内田地（同前）元亨三年（癸亥）十月十七日　源滿義寄進　一所　小角田村（同前）嘉暦三年（戊辰）六月一日　源滿義寄進之　一所　小角鄕内畠地（同前）元德二年四月廿一日　源滿義寄進之　一所　小角鄕内（同前）元德二年十二月廿三日　源滿義寄進之　一所　那波郡内（普覺寺同前）元德三年七月十三日　買得領主紀氏寄進　一所　出塚村（寄北）觀應三年□□尼了願寄進之　一所　後閑三木村内　延久四年四月十日地頭義政寄進　買領主道行奉進也、

一所　鳥山内寺領　一所　村田（徹都寺寄進地）　一所　（武州）中條　寄進狀在之　一所　（江州）香阪　一所　平塚村　建武五年九月六日　將軍家御判　一所　那波郡飯塚鄕　嘉暦三年七月十七日　先代安堵在之　一所　八木治一方　暦應二年十一月十五日　安養寺殿追善料所　將軍家御判　一所　八木治三分一　正平七年二月十五日　將軍家御判　一所　青根鄕　貞治二年四月　鎌倉殿（武衞基氏）

寺制

右當知行之地、鄕村幷散在所々注文如件、

此外不知行所々雖在之、非當用之文書之間、不能注之哉、

貞治四年乙巳七月五日　　了宗花押

上野　世良田　長樂寺

〔寬文四年御朱印帳天台宗〕三百石（百石者慶長八年□廿四日先狀當領也、於地內依寄附東照宮爲神領、）

〔長樂寺文書七〕掟　良田山

一不闕二時勤行、可致天下安全之御祈禱事、

一每月十七日可致東照大權現御法樂事、

一每年四月十七日、東照權現講、諸末寺諸門徒致出仕、十六日之夜論義、十七日法事可勤之、若於不參者、金子壹兩可爲科料事、

一每日開山之茶湯靈供回向、不可有懈怠事、

一天下制法不及申、背本寺之下知、不可致私撿斷事、

一本寺江諸門徒不可闕三季之出仕、若令煩之時、早可有其斷、無左右於令闕之者、代物壹貫文可爲科料事、

一三季之講演、門中輪番三人宛、定役者取持可勤之事、

一如先規每年從霜月十三日、灌頂可有執行事、

一諸末寺如先規灌頂之時、可有集來事、

一諸末寺門中官位補任次第可爲座居、但一寺門中不可有混亂事、

一不逐大阿闍梨者、傳法引導幷金襴袈裟不可著事、

一於諸末寺私灌頂、不可有執行事、

寺職

一每年正月本寺江年頭之儀、末寺門徒不可致不參事、
一門中加行護摩等之儀者不及申、九字護身法迄、猥不可許事、
一末寺門徒逝去時、猥不可引導、可窺本寺事、
一於諸末寺幷門徒、不窺本寺不可居住持事、
一從古來門徒跡、新直末之衆、皆屬門徒、但勤學之輩者、論席可有列座事、
一縱雖爲世出世器量之人、於亂行僧者、早可令追放、若於弟子同宿中、亂行事令風聞者、糺實否、於爲實事者、是又早可致追放、於隱置者、師弟共可爲同罪事、
一境內竹木、猥不可伐採事、
一背師命者、縱雖爲所化、不可介抱、且雖爲我弟子、於不孝之輩者、可令追放事、
右條々、堅可相守者也、

寬永二十癸未歲九月十七日

長樂寺當住山門三院執行探題大僧正天海花押

〔長樂寺文書七〕就爲世良田長樂禪寺代々住持出世大和尚位、今度派下與聖寺法燈相續之條、和尚位所望之事、書狀之趣令披閱候、祖先例相尋候處、近代世良田山出世奏聞之沙汰無之候歟、然者前代蒙勅裁之始末、委可示給候、但寺法之子細候て出世候哉、此方不案內之間、具可承候、披露之段、隨分油斷有間敷候、猶與聖寺江申傳候、恐々謹言、

九月十七日

雅宜

經孝

南光大僧正御房

〔本朝高僧傳三十淨禪〕上州長樂寺沙門得藏傳

釋得藏、號敎外、參明極俊和尚、發明心機、出世緇之棲賢、移上之長樂、高識博辯、快若懸水、衲侶輻湊、得

實而歸、上堂靈光獨耀、逈脫根塵、上士悟之、明中不見蹤、下士迷之、暗裏施文彩、所以道、三級浪高魚化龍、癡人猶戽夜塘水、且道迷悟明暗、作麼生分、向下文長、且待來日、藏遊化諸方、在常州鹿島、革根本寺而居、貞治四年正月三日化于長樂寶光院、

子院

〔長樂寺文書五〕上野國新田莊世良田山長樂寺別院眞言院事、勅願所上者、門徒中官位事、爲住持可令下知之旨、被聞食畢、彌專佛法興隆、宜奉祈寶祚長久者、天氣如此、悉之以狀、

永正十七年後六月廿三日　右中弁花押

眞言院住持房

雜載

〔長樂寺文書七〕謹而言上、世良田諸末寺、

世良田山者、蓮華院一流之天下之本寺無其隱候、依之從每年十月十三日、大灌頂御座候處、及三十箇年令退轉、諸末寺老若皆々未灌頂故、法流斷絕、歎敷事存候、幸權現樣〇德川家康以御掟、大僧正樣〇天海被成御入院、灌具法具御改之砌、灌頂被成御執行被下候樣申上候處、御歸御急候故、於于今御延引候而、於世良田灌頂不被仰付候間、世良田之灌具にて、於東叡山成共、大灌頂被成御執行被下候者忝候、

一世良田山無主、付塔中之者共、我儘仕候而、竹木伐採商賣仕候事、

一留主居罷在候者、無行儀仕候而、見掛惡、無一宗之面目次第候事、

次第不同　一之宮 光明院花押〇中略

眼積 壽延寺花押

右申上之外、遠末寺四百八十箇寺之間、未灌頂之輩、數多雖御座候、先近末寺門中共於世良田大灌頂於仰付候樣、御申上所仰候、仍如斯、

寬永十四年霜月吉日　淨法寺

大僧正様 御披露

〔松陰私語 四〕當寺○長樂寺之事者、○中略乾享院殿○足利成氏別而愚僧御判等拜領仕、雖然當莊之御寺之事、先々自千葉別駕、二階堂信濃兩奉行也、上相長棟依被申請、兩奉行渡之以後、今山內奉行所也、然共愚僧拜領之上者、當方之執權橫瀨可相談旨申請御判處也、於當寺之儀、末代當方可申合、以大意新地三ヶ所少所不請取之候、其所詮如此、愚僧拜領仕、御使節印東方、祥雲庵以兩御使節、武州成田御陣之砌、御書拜領、併當方爲御代官、公私走廻故如斯候、當方之恩力也、當寺萬々再興繁昌者、當方繁昌之上可有之也、天下之定御祈禱之上可存此儀也、如此定置、自當方荷擔扶助之無懸志者、可屬三大伽藍幷土地神、赤城三社內證天道也、當寺者後白河法皇御勅願寺也、末也再興之大功者、當方公私之可依繁昌也、

滿德寺

名稱所在

滿德寺ハ、上野國新田郡德川ニ在リ、時宗ニ屬ス、尼淨念ノ開基スル所ニシテ、世尼ヲ以テ住持トス、德川幕府時代ニハ、欠入離緣ト稱シテ、妻女ノ離婚ヲ欲スル者、奔リテ此寺ニ入ル時ハ、三年ノ間之ヲ保護セシコト、猶ホ相模國鎌倉ノ東慶寺ニ於ケルガ如クナリシト云フ、

〔上野國志 新田郡〕滿德寺 德川ニアリ、時宗、尼寺、開山淨念比丘尼、義季公二男三河守賴氏ノ女、其後寺衰廢セシニ、天樹院殿榮譽源法山大禪定尼御取立ニテ、大一房俊長ト云比丘中興ス、大一房慶安三年五月十二日寂ス、

齋田百石

創建沿革

〔德川禁令考 四十一 尼寺〕文化五辰年書出

上州德川滿德寺寺法之儀ニ付書付

乍恐以書付奉申上候

一尼寺御所德川滿德寺之儀ハ、御當家御先祖樣重御由緒被爲在候ニ付、天正十九辛卯年十一月、東照宮樣御直筆御書判を以、德川鄕之內高百石、如先規御寄附被成下候滿德寺開山淨念尼公、淨院尼公と奉申候ハ、德川義季公御姬君義姬君と奉申候、御發心被遊候而淨念尼公と奉申候、淨院尼公ハ、義季公御子新田賴氏公御姬君義御前と奉申、御發心之後、淨院尼公と奉申候、依之中興開山前迄ハ、新田家より代々相續御座候、且尼寺欠入離緣由緒之義ハ、開山より寺法ニ御座候而中興前迄ハ欠入候女尼ニ相成候、然處乍恐台德院樣御姬君、大坂從御城滿德寺江御入院被爲遊、御離緣之御趣意相立、本多家江御再緣被爲遊候、尤御法號天樹院殿と御附被爲遊候、則御姬君樣爲御替、刑部局江御住職被仰付、中興開山俊澄上人と改名、其御由緒を以、從御城住職三代御相續ニ御座候、依之欠入之女離緣之願、爲寺役任古例今ニ至り候而も其例相濟來り候、欠入女三箇年入寺禁足相愼候上髮を切、夫方江遣し離緣狀請取候儀ハ、開山より之寺法ニ御座候、離緣之上他江嫁候儀ハ、天樹院樣之御例を以再緣致來候、寺院之儀ハ、一宇、寛永十二丙子年御建立以來、永代御修復所ニ被仰付、東之丸樣御棟札ニ而奉造立大伽藍天樹院樣爲二世安樂御也、仍源氏家光三代將軍御代、上野國勢田郡滿德寺大願成就所と御座候、大猷院樣よりも御金、御疊井御道具とも拜領仕候、其節御船手向井將監殿江被仰付候、殊更御代々樣御尊牌被遊御預、尤近代ハ御金子拜領奉造立候、住持自身朝暮御回向奉申上候、檀家決而無御座、全御回向井離緣寺役ニ勤來候、難澀之離緣ニ至り候而ハ、時々御奉行所江申立、御威驗を以爲相濟來り候、例ニ御座候、右之通御由緒略奉申上候、以上、

上州勢多郡新田庄德川鄕　御位牌所　尼寺時宗一本寺

雜載

文化五辰年十月　　　　　　　德川滿德寺

御奉行所

〔天明集成絲綸錄二十七〕明和四亥年五月　　　御勘定奉行江

德川 滿德寺

右寺坊御修復之儀相願候寺社、御修復之儀ニ付而ハ、先達而被仰出も有之、本願も被附置候上者、御修復之儀者難相成事ニ候、然共寺領川欠等ニ而收納少、大破之上、自力難行屆由付、金百兩被下候間、建坪之內、不用之所者相減候而成とも、自分ニ修復仕候樣可被申渡候、尤御勘定奉行可被談候、

五月

右之通、寺社奉行江申渡候間、相談可被渡候、

名稱　所在　創建　沿革

善導寺

善導寺ハ、上野國邑樂郡館林ニ在リ、淨土宗ニ屬シ、十八檀林ノ一タリ、

〔和漢三才圖會 六十六 上野〕善導寺　在館林　淨土宗　寺領百石　淨土宗檀林

〔檀林誌 戊〕御朱印百石　上野國□□郡館林　總南山見性院善導寺

舊開元傳

建治二年、白旗流祖寂惠良曉上人、當所東北續外加法師村に於て開創之、今彼村內に三反分餘の除地有之、當山持之處、境內末寺護念寺へ附讓、當時彼寺の境內となる、又其脇に善導寺橋、今ニ有之、

其後岩松氏、由良氏、長尾氏赤井氏等、幷北條家の頃も宗門にて、一方の檀林として、令法久住の叢林なり、故に常に法問論議怠慢なかりし故に、其時々の城主、或は領主、當山にて安居の時は、必禁札を建られしとぞ、

當山いまだ元地にありし時、幡隨上人來り、大衆を集め、流祖の古跡再建せられ度との事にて、北條陸奥守氏照へ訴じ入られ、度々法幢をたて、四方の雲水をあつめられしなり天正十二年の時の禁札、一說に此禁札は、安居の時にあらず、元地善導寺の時、上州新田由良信濃守へ乞、夫より小田原へ遣し、時の住持へ軍出の時に建られし所也とも云、何れにも幡隨上人なるべし、上人此地に來往し、熊谷寺再建、葛和田大龍寺開基前後、此所ニ大檀林開立させられたく、幸に白旗上人の創立の地、廢絕に及びしかば、其跡に結庵せられ、追々取立、再興中、上州野州の出陣ありて、此邊にては、由良長尾赤井成田永野などの輩が、亂妨あらん事を慭へ、ひそかに願はれし口口見えたり、其後榊原家入部ありて、上人に歸依し、右の再興を聞れ、寺を轉じ移して、今のごとく大伽藍に建立せられしなるべし、依て、檀林は幡隨上人開基と分つべし、〇中略

再開叢林

天正十八年御入國の時、功に依、當城十万石を榊原式部大輔康政拜領せられ、翌年入部のゝち、爲菩提所再建之、かねて德行雙備を聞、歸洛せられし幡隨意白道上人を行狀傳、江戸幡隨院の所に出、以開山第一祖と定められ、當地に引移建立あり、是露燭池の大龍濟度の因由に寄、遠近道俗德風に靡き、毀力助勢の時、康政も又是を聞、歸依渴仰し、同十九年春より慶長五年頃迄に再建落成すと云ふ、此時城より東北土橋村外加法師村の本善導寺は、檀家ともに當地の境内大道寺に讓傳之、別宇とせらる、或云、大道寺は、北條の舊老大道寺式部少輔政規の建立なり、然れども當山の記、幷地中大道寺の由緖書にて、開山頓阿見性法師二世白旗寂惠上人とのみ有之、寂惠公は、記主上人、鴻巢勝願寺へ隨從し、かの時に成建立

せられしと云、康政より東武へ言上せられ、境内貳万三千二百四十坪餘幷寺產百石を寄附、此百石を後年城替の時、依ㇾ願御朱印と改頒下されし也、(榊原家、幡隨上人の法孫、永々の檀家の約諾なりし、幡隨公の弟子進天上人、江戸靈巖寺に住職あられしかば、終に彼寺の檀家と定めらる、)

殿堂立並

本堂(十二間十一間)　吉祥辨天社　不動堂(四間三間中)　三門の南に建(南龍代)　三門(八間四間)額終南山の三字、伊傳上人筆　總門　裏門　觀音堂(二間四方)

寺格 寺領

〔寺鑑下淨土宗〕御朱印　高百石　香衣檀林　館林善導寺

右拾貳ヶ寺(○幡隨院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺、)之住職、御白書院御緣頰、御老中御列座被仰渡之、　住職御禮、御白書院、獨禮(御目見之外二疊目)　年頭御禮大廣間、獨禮、座一同、　御暇無之　獻上(一束一本)

〔靈岸三〕關東十八檀林　淨土宗關東檀林十八所(○中略)　善導寺(館林)

〔檀林誌戌〕御朱印百石　上野國□□郡館林　終南山見性院善導寺

御朱印

善導寺領上野國邑樂郡伊谷田鄉大曲村之内百石事、幷寺中山林竹木諸役等免除、任慶長元年九月十七日先判之旨、進止、永不ㇾ可ㇾ有相違者、佛法紹隆無怠慢、可ㇾ勤仕者也、仍如件、

寛文五年七月十一日　御朱印

〔檀林誌戌〕御朱印百石　上野國□□郡館林　終南山見性院善導寺

寺制

舊開元傳

禁制

右於當寺、此度出軍甲乙人濫妨狼藉令停止畢、御出馬以前爲物主被仰付之間、判形立置者也、仍如

件、

天正十二年甲申十二月廿八日　　氏照(北條)書判

善導寺

聖隆寺

聖隆寺ハ、上野國ニ在リ、文德天皇嘉祥三年、延曆寺ノ別院ト爲ル、今廢寺ニシテ其所在ヲ失ス、

〔文德實錄一〕嘉祥三年四月丙子、詔以上野國聖隆寺、爲延曆寺別院、

鑁阿寺

鑁阿寺ハ、下野國足利郡足利ニ在リ、足利義兼ノ建立スル所ニシテ、寺號ハ義兼ノ法名ニ由ル、眞言宗ニ屬ス、此寺足利學校ト關聯スル所多シ、文學部足利學校篇ヲ參看スベシ、

〔和漢三才圖會六十六下野〕鑁阿寺　在足利　眞言　寺領六十石　本尊大日如來　足利義兼建立　別當千手院

〔下野國誌八〕鑁阿寺

足利郡足利驛にあり、圭田六十石、金剛山と號す、本尊大日如來なり、眞言宗の檀林にて、七堂伽藍そなはりて、前院十二坊あり、學頭を千手院と云、其外安養院、龍福院、金剛乘院、延命院、威德院、寶珠院、淨土院、東光院、普賢院、不動院、六字院等なり、本願足利上總介義兼朝臣なり、足利系譜に、上總介

義兼、正治元年己未三月八日卒、鑁阿寺殿と號すとあり、

〔足利系圖〕義重

┗義兼（足利上総介 従四位下）（母熱田大宮司範季女、長九尺二寸、赤御堂殿是也、號鑁阿寺殿、法名義稱、正治二年三月八日卒、實鎮西八郎爲朝末子、）

〔鑁阿寺文書 八〕御判（伊與守殿家時 報國寺殿）

定

於當寺永代不可違背條々事

一供僧專恒例臨時勤事

右於勤者雖無懈怠、且守酬四恩之廣德、興三寶之妙道遺誡、且恐不祈壇那者、受虛空信施罪之文、云恒例、云臨時、致精誠、不可退轉者也、

一御影供可爲一烈（○烈列歟 僧、下同、）事

右先例雖爲東西各別、於自今以後者、就一味和合之儀、可爲一烈之交衆也、

一年中行事

右於年中行事者、先年雖有其沙汰、令陵怠之後、猥事等在之云々、自今以後、固守先年之例、東西兩堂供僧、隨其臈次、每年二人可被奉行也、且致佛法興隆之志、且住寺門繁昌之思、云修理、云御勤、隨境節可有其沙汰也、

一常燈事

右先例雖爲夜燈許、於自今以後者、東西兩堂者、可爲常燈之間、令加增燈油員數畢、於中御堂者、依爲大御堂一廊、如元可爲夜燈、凡於燈明者、如來常照之智火、衆生除暗之明光也、尤不可有間斷、仍云年來油、云新加油、付于年中行事調納之、而隨旬可被下行、是則爲永代不闕也、而承仕等、若致如

在聊令消燈火者、殊可被處重科也、且年中行事、常可被順見之、又番供僧加精好、猶致懈怠者、無偏頗被申之時、定有御計歟、能々可愼之也、

一夏中供花幷例時事

右於夏花者佛閣莊嚴之勤、自利利他之行業也、而以庭詞小童部、不背法師、厚令勤仕之由、有其聞、外見外憚、内信難遁、若爾者爭叶佛意、預冥助哉、自今以後者、偏任佛法興隆之思、各不存如泥、致貞潔可被勤仕之、

次夏中例時事、准先條、同不可有懈怠也、

一承仕等守護堂舍、不可違背供僧下知事、

右承仕者、隨旬當番不去堂內、固可令守護之處、當番之承仕等、一向住私宅、勤時尙不令參堂之由有其聞、不忠之至也、自由之甚也、依之盜人伺取重寶、風雨破損佛像、是口承仕不仕之所致也、於自今以後者、旬番承仕一向不立去堂舍、不退可奉守佛像、就中至勤時者、殊祗候堂內、而云佛座燈油、云供花燒香、專隨供僧命、可致其沙汰、若於背制府之承仕者、可被改易彼職也、

一可停止御堂堀內牛馬放入、雜人橫行事、

右堂舍廊內者、淸淨結界之地也、然間先年可停止雜人橫行、幷牛馬放入之由、被仰下云々、然近年猥雜人橫行之間、動盜人得其便、仍仰付承仕下部、固可被禁遏、但於聽聞見物參堂之輩之非制限、

以前條々、固守禁遏之旨、各可有其沙汰之狀、所定如件、

文永六年己巳四月　日

〔鑁阿寺文書　一〕下野國足利庄勸農鄕內番匠給幷奈山給等事

爲天下安全御祈禱、奉寄附之狀、依仰執達如件、

享德三年五月一日　　前駿河守重仲花押

祈禱

鑁阿寺

〔東路のつと〕下野の國佐野といふ所へ出たち、〇永正六年八月 足利の學校に立寄侍れば、孔子子路顏回、この肖像をかけて、諸國の學徒かうべを傾け、日ぐらし居たる體はかしこく、且はあはれに見侍り、御當家〇足利 舊跡鑁阿寺一見して、千手院といふ坊にして、茶などの次に、今宵はこゝにとしゐてありしかば、此院主、もと見し人なり、かたがた辭し難くて、三日ばかり有て、連歌あり、

中禪寺

中禪寺ハ、下野國都賀郡日光山ニ在リ、僧勝道ノ創建スル所ニシテ、初メ補陀洛山神宮寺ト稱セリ、蓋シ補陀洛トハ本ト此山ノ二荒(フタラ)ト號セシニ附會セシ文字ニシテ、又日光ノ山名モ二荒ノ音ヲ借リタルモノナリト云フ、

〔中禪寺私記〕日光山滿願寺者、稱德天皇御宇、神護景雲年中、當國芳賀郡人、沙門勝道、勤求佛道、攀躋靈窟、爲鎭護國家、爲利益衆生、勸請於神祇、造寫佛經、始卜斯山、新起道場、其山中央有嶽、其高不知幾千仞、其嶽半腹有大伽藍、號中禪寺、安置丈六千手觀音像、其傍建立靈祠、奉崇權現、又妙法蓮華經一千部、幷大般若經六百軸、所納之箱底、安之堂中、毎歲四月二十二三日、兩朝之間、有修大會、前日講般若經、次日講法華經、奉辨備三十三杯御膳、奉供觀自在尊、辨備百八十杯御膳、奉供權現王子、伴僧、住僧等守次第勤行之、已爲規摸、敢不失墜、爾後碩學相續勤來、講匠嚴重之儀、不遑具記、自玆寺至于山頂、二百四十町者、結界地也、五種相分、四神具足、其前頭有大湖、揚五色浪、如八功德池、湖之南涯有別所、稱歌濱、彌勒大士妙吉祥天靈驗之場也、湖坤有一梵宮、號日輪、安置不動降三世軍茶利大威德金剛夜叉等尊像、蓋是本願勝道上人修練之砌也、其前有小島、彼上人止住此島、禮拜之次、奉祈聖朝、栢

原天皇遙聞此事、深成叡感、令補上野講師、仍號上野島、湖西岸有十六丈千手觀音石像、曰千手崎、弘法大師手書山門題額補陀洛山發心檀門、其門六字、蓋是宛六度也、化導無限、遍被遐邇之鄉、功德不孤必有隣、旁及幽顯境、上自天子以至於庶民、豈是孰不欽仰、誰不歸依哉、其地之爲體、神嶽蔣々、逕千嶺高峙、雲湖渺々、寫四溟而遙廻、凡厥峻極之狀、勝絕之美、具于弘法大師御作勝道歷山水碑文序、今之實錄、粗擧大概而已、于時、保延七年夷則初三日、吏部侍郞藤原敦光、爲貽方來、揚確記云、

〔性靈集二〕沙門勝道歷山水瑩玄珠碑 幷序

蘇巓鷲嶽、異人所都、達水龍坎、靈物斯在、所以異人卜宅、所以靈物化產、豈徒然乎、請試論之、夫境隨心變、心垢則境濁、心逐境移、境閑則心朗、心境冥會、道德玄存、至如能寂常居以利見、妙祥鎭住以接引、提山垂迹、孤岸津梁、並皆靡不依仁山託智水、臺鏡瑩磨、俯應機水者也、有沙門勝道者、下野芳賀人也、俗姓若田氏、神邈救蟻之齡、意清情囊之齒、桎梏四民之生事、調飢三諦之滅業、厭聚落之轟轟、仰林泉之皓然、粤有同州補陀洛山、葱嶺插銀漢、白峯銜碧落、礙雷腹而蕭吼、翔鳳足而羊角、魑魅罕通、人跡也絕、借問振古未有攀躋者、法師願義成而興歎、仰勇猛以策意、遂以去神護景雲元年四月上旬、跋上、雪深巖峻雲霧雷迷、不能上也、還住半腹三七日而却還、又天應元年四月上旬、更事攀陟、亦上不得也、二年三月中、奉爲諸神祇、寫經圖佛、裂裳裹足、弃命殉道、繦負經像、至于山麓、讀經禮佛、一七日夜、堅發誓曰、若使神明有知、願察我心、我所圖寫經及像等、當至山頂、爲神供養、以崇神威、饒群生福、仰願善神加威、毒龍卷霧、山魅前導、助果我願、我若不到山頂、亦不至菩提、如是發願訖、跨白雪之皚皚、攀綠葉之璀璨、脚蹈一半、身疲力竭、憩息信宿、終見其頂、怳惚怳惚、似夢似寤、不因乘査、忽入雲漢、不嘗妙藥、得見神窟、一喜一悲、心魂難持、山之爲狀也、東西龍臥、彌望無極、南北虎踞、棲息有興、指妙高以爲儔、引輪鐵而作帶、笑衡岱之猶卑、哂崑香之又劣、日出先明、月來晩入、不假天眼、萬里目前、何更乘鶴、白雲足下、千般錦花、無機常織、百種靈物、誰人陶冶、北望則有湖、約計一百頃、東西狹南北長、西顧亦有一小湖、合有二十

餘頃、聘坤更有一大湖、纔計一千餘町、東西不闊、南北長遠、四面高岑、倒影水中、百種異莊、木石自有、銀雪敷地、金花發枝、池鏡無私、萬色誰逃、山水相映、乍看絶腸、瞻佇未飽、風雪趁人、我結蝸庵于其坤角、住之禮懺勤經三七日、已遂斯願、便歸故居、去延曆三年三月下旬、更上經五箇日、至彼南湖邊、四月上旬、造得一小船、長二丈、廣三尺、即與二三子、棹湖遊覽、遍眺四壁、神麗影多、東看西看、汎濫自逸、日暮興餘、强託南洲、其洲則去陸三十丈餘、方圓三十丈餘、諸洲之中、美華富焉、復更遊西湖、去東湖十五許里、又覽北湖、去南湖三十許里、並雖盡美、總不如南、其南湖則碧水澄鏡、深不可測、千年松栢、臨水而傾、綠蓋百圍檜杉、竦巖而構紺樓、五彩之花、一株而雜色、六時之鳥、同響而異轉、白鶴舞汀、紺鳧戲水、振翼如鈴、吐香玉響、松風懸琴、坻浪調鼓、五音爭奏天韻、八德澹澹自貯、霧帳雲幕、時時難陀之羅曬、星燈電炬數數普香之把束、見池中圓月、知普賢之鏡智、仰空裏慧日、覺遍智之在我、託此勝地、聊建伽藍、名曰神宮寺、住此修道、在四祀、七年四月、更移住北涯、四望無礙、沙場可愛、異華之色、難名驚目、奇香之臭、叵尋悅意、靈仙不知何去、神人髣髴如存、忿歲精之無記、惜王侯之不遊、思餓虎而不遇、訪子喬而適去、觀華藏於心海、念實相於眉山、蘊羅遮寒、蔭葉避暑、喫菜喫水、樂在中、乍彳乍亍出塵外、九皐鶴聲、易達于天、去延曆中、栢原皇帝聞之、便任上野國講師、利他有時、虛心逐物、又建立華嚴精舍於都賀郡城山、就此往彼、利物弘道、去大同二年國有陽九、州司令法師祈雨、師則上補陀洛山祈禱、應時甘雨霶霈、百穀豐登、所有佛業不能縷說、杳日車難駐、人間易變、從心忽至、四虵虛羸、攜誘是務、能事畢矣、前下野伊博士公、與法師善、秩滿入京、于時法師歎勝境之無記、要屬文於余筆、伊公與余故、固辭不免、課虛抽毫、乃爲銘曰、

雞黃裂地　粹氣昇天　蟾烏運轉　萬類躃闐　山海錯峙　幽明殊阡　俗波生滅　眞水道先

一塵構嶽　一滴深湖　埃涓委聚　畫飾神都　嶺岑不梯　鷲鸞無圖　嵦嵦雪嶺　島嶼誰廬

沙門勝道　竹操松柯　仰之正覺　誦之達摩　歸依觀音　禮拜釋迦　殉道斗藪　直入嵯峨

龍跳絕巘　鳳舉經過　神明威護　歷覽山河　山也峨嵘　水也泓澄　綺花灼灼　異鳥嚶嚶
地頽天頽　如筑如箏　異人乍浴　音樂時鳴　一覽消憂　百煩自休　人間莫比　天上寧儔
孫興鄉筆　郭詞豈周　咄哉同志　何不優遊

弘仁之年、敎祥之歲、月次壯朔三十之癸酉也、

人之相知、不必在對面久話、意通則傾蓋之遇也、余與道公、生年不相見、幸因伊博士公、聞其情素之雅致、兼蒙請洛山之記、余不才、當仁不敢辭讓、輙抽拙詞、並書絹素上、詞翰俱弱深恐玄之猶白、寄以冀表其情、至百年之下、莫忘相憶耳、

西岳妙門遍照金剛題

〔日光山志四〕中禪寺別所　三重塔の東寄にあり、弘法大師の記文を考ふるに、勝道上人延曆七年四月登山せられ、蝸庵を湖水の北涯に移すとあるは、其時上人基を開れ、又補陀洛山神宮寺と號せし一字の跡なりといふ、其比より中禪寺の稱號は起れりといふ、建神宮精舍號中禪寺と云云、古くより、一山の上人職のもの、常に年限有て、山籠して寺務を司りしかど、寛永二年いはれ有て、是より御本院の御持となれる由、今も一山衆徒の內攝行し、常には一坊一人、御本坊の御家來一人宛住番し、外に下部一兩人住り、又一坊の內より、濱役といふは、七年替に勤る由、又御宮の社家、是も年臈の次序を以て、三社權現の社務を司るといふ、

〔日光山志四〕中禪寺古棟札寫

人王八十四代順德天皇御宇　藤原國綱妻子　景綱入道妻子

奉建立一間二面御殿一字

征夷大將軍源實朝公御代　宗綱入道妻子　親綱入道妻子

建保五年丁丑四月十八日　藤原有房妻子

同六年戊寅七月十九日結緣衆左衛門尉藤原朝政　備守之地頭

古棟札、保延、久壽、永曆、文治、建久等、夫より後も造營の毎事數多なるゆゑ、悉も記しがたく、仍て略す、〇中略

大鳥居　唐銅湖水端に建り、玆より石階を登り、平路よりまた石階二ヶ所を上りて、觀音堂に至るの正面なり、　護摩堂　三間四面、石階を登り、觀音堂の前、　鐘樓　二間三間、鐘有、古きもの回祿に及び、今の鐘は文化年中鑄造、　三層塔　赤塗、三間四方、五智如來を安す、右の方にあり、　採燈護摩堂　鐘樓より東の方、艾の後より一階高く築地あり、

〔廻國雜記〕この山日光山の上、三十里に、中禪寺とて、權現ましましけり、登山して通夜し侍る、こよひはことに十三夜にて、月もいづくに勝れ侍りき、渺漫たる湖水侍り、歌の濱といへる所に、紅葉色をあらそひて、月に映じ侍れば、舟にのりて

敷島の歌の濱邊に舟よせて紅葉をかざし月をみる哉

〔日光山志〕四不斷火、當別にては、開闢以來火を絕すことなく、庫裏の大居爐裏の中へ大材をふすべ置、冬夏絕ざるゆゑ、土人いふ神代よりの火なりといへり、日光山内を初め町々の家へも、最初爰の火を得て、各が家にも絕ざるやうに取計ふ土風なりといふ、〇下略

輪王寺

輪王寺ハ、下野國都賀郡日光山ニ在リ、傳ヘテ僧勝道修練ノ古跡ト稱シ、往時ハ滿願寺ト號シテ、眞言古義派ニ屬セシガ、天台ノ僧天海、之ヲ中興セシヨリ、遂ニ天台宗トナレリト云フ、後、德川氏、其祖家康ヲ玆ニ改葬シテ、大ニ寺社領ヲ付シ、一山ノ寺院ヲ以テ悉ク之ニ屬セシメシヨリ、寺運大ニ興リシガ、更ニ後水尾天皇ノ皇子、守澄法親王ヲ迎ヘテ門主ト爲シシヨ

名稱　所在　創建　沿革

り、遂ニ門跡ニ列シ、寺主ノ宮ハ、代々日光門跡輪王寺宮ト稱スルニ至レリ、蓋シ輪王寺ノ號ハ、承應三年、後水尾上皇ノ賜フ所ナリトス、尋デ又當寺及ビ延暦寺、寛永寺ノ三寺ヲ以テ、天台宗ノ總本山ト爲シ、當寺門主ノ宮ヲシテ、特ニ之ヲ管領セシム、爾來、叡山諸門跡ノ首席ニ在リテ、平時ハ多ク東叡山ノ本坊ニ住シ、年中時ヲ期シテ日光山ニ登ルヲ例トセリ、尚ホ中禪寺、寛永寺、及ビ滋賀院條ヲ參照スベシ、

〔書言字考節用集 一乾坤〕輪王寺(リンワウジ)野州日光山座禪院

〔下野國誌 五〕滿願寺

都賀郡日光山なり、一乘寶相院とも云、一山の衆徒二十六院、坊舍八十宇あり、主田一萬三千六百石、開山勝道上人なり、觀世音の坐す山と云義を以て補陀洛山と號くと云、弘法大師登山してより、日光山と改む、そは大日遍照の山と云義なるべし、其後慈覺大師登山して、法華を唱へしより、天台の山とはなりしなり、中興開山慈眼大師は、初祖上人より四十九世なり、同五十世は、毘沙門堂大僧正公海、五十一世は、輪王寺一品守澄法親王と申奉る、夫より以來世々輪王寺宮と稱し奉り、當時は、六十世一品准后舜仁法親王と申奉るなり、

〔官本日光山志 一〕坐禪院跡　今鐘樓堂の邊より、御本坊御構のあたり迄は、往古の寺跡なりといふ、今も御本坊表御門内北の小高き所に、稻荷祠あり、是はもと、座禪院境内の鎭守なりといへり、日光山滿願寺座禪院と號し、古義眞言にてありしといふ、東照宮御在世の内、天海僧正、慶長十八年蒙命、山主となられ、其砌より、天台宗に山法を轉せられしともいへり、御遷座の事をしるせるものに、座禪院へ入御とあれば、天海僧正山主となられけれど、舊號を稱しけり、御遷座より後に、輪王寺とは改められき、古への事實、山内にしかと知べきものなし、唯土人等傳へ語れるを索るのみ、

〔輪王寺宮年譜〕久遠壽院准三宮公海

花山院左少將忠長朝臣〇宮野氏御子、御母東本願寺敬如〇准光女、慶長十二年丁未十二月十二日御誕生、元和六年庚申、爲慈眼大師御繼嗣、〇中略寬永二十年癸未十月、繼開山慈眼大師席、住東叡山、兼領比叡日光兩山、管攝台宗、〇中略承應三年甲子十一月十一日、讓職務於日光御門主一品尊敬親王、別築一室於東叡山之乾隅、被爲移御座、〇中略

本照院前天台座主一品尊敬法親王後守澄

後水尾院帝第三皇子、〇中略御母園中納言基音卿妹、號京極局、〇中略御養母將軍秀忠公御女、寬永十五年戊寅、兼因慈眼大師之言上、從將軍家奏請、而今宮被定儲日光山御門主東叡山圓頓院貫首、〇中略同年同月三〇承應年二十六日、後水尾上皇別賜輪王寺之號、從此東叡山御住持之宮者稱輪王寺宮、又稱日光御門主、同年十二月座主御辭職、同年同月御下關、明曆二年丙申二月二十八日、山門、日光、東叡三山者、爲一宗總本寺、輪王寺宮可有管領之旨、其外、天台宗諸法度、被準慶長十八年二月二十八日、同年八月二十八日、兩御先判之旨、從將軍家更被進之、

〔華頂要略百二十四〕新撰座主傳序〇中略

嗚呼、往年依德川大將軍家光公台命、新有起立一門、所謂輪王寺宮是也、門跡之起立在別自爾以來、根本比叡山、及日本國中台家之諸事、總令管領給、殆如舊座主職、於茲无洩被宮之指揮者、加之據準往昔寺家執事別當之古格、精撰寬永寺之僧侶兩口、更令加執當之稱號焉、不論本寺末寺、一宗之僧徒、皆重令旨、無不屈彼執當之膝下者、惜今猶舉被補任座主、而似有名無實、誠可悲哉、是偏隨時運勢無奈、故露柔和忍辱之法界給者乎、我賤族非所可論、只密爲令覺知古今歷代、粗綴其旨趣、後人觀察之矣

文化八年仲春、於梅室北寓、　爲善

〔官本日光山志一〕御本坊　表御門は、御殿地に相對す、裏御門は、東山谷の方にあり、慈眼大師、慶長

十八年、臺台命、當山に住し、天台の開祖とはなられ、元和三年御遷座被爲在けるより以來、新建の堂宇を御造立、此所は、座禪院境內にて、今も表御門內、丘地にある稲荷社は、座禪院鎭守の社なりといふ、元和六年三月十六日、酒井安藤を初とし、老中連名の書面、宛所は、光明殿坐禪院と、二名雙べて記されたり、如何成ことゆへか、今よりは知べからず、寬永の頃迄も、光明院又は座禪院と、公廳にて御唱ありしかども、其後一品尊敬親王御住職より、日光山輪王寺御門主と奉稱事にて有ける、寬永の頃、御造立せられし時、大師自筆もて、御本坊作事向、繪圖か丶れ、或は朱もて、添書を加へられしものを、おのれ先に、御大工棟梁甲良筑前が家に秘藏するを見たり、當山と東叡山兩山の繪圖あり、彼甲羅が棟梁して、造畢せし功を襃せられ、三社の託宣を、大師自筆にものせられ、外にもくさ〴〵贈られし數品、今も彼家に藏すれは、其頃造畢せしはしられけり、其時の御作事御奥御對面所等の繪は、探幽法印が筆蹟顯然たれは、貞享大火の節も、無事なりしことにぞ、御殿回祿せし以後は、將軍家御登山の砌は、御本坊を以て、假の柳營に設給ふ、御門主御別莊東山谷櫻本院堀內に愈て、御設ゆへ、將軍家御在山中は、御門主、彼御別莊へ移らせ玉ふといふ、御門主、定格として、御登山の事は、四月十五日御著山にて、五月廿一日御發駕、九月十日御著山にて、同月廿一日御發駕、十二月廿九日御著山にて、翌正月廿一日御發駕、例年斯の如し。

〔官本日光山志四〕大師堂　慈眼大師の御廟なり、往古は大黑山と號せし由、古緣起に見へ、別當所は無量院と號し、此山麓南の方にあり、爰へ登れる入口は、法華堂と常行堂の方に、兩堂へ通行す棧橋を高く設たる、其橋下を通りて、山道の石壁木凡一町半程登り、左の方に寶庫有、石階の邊に、唐銅燈爐、一基あり、又右へ折て石階三間許登り、入口門あり、左右圍垣を廻らし、夫より正面拜殿迄、凡十三間許、

文殊堂　入口門より西南にあり、是は慈眼大師の本地堂なり、辰卯向四間に三間、總上ゲ蔀、丹塗二重垂木、向拜撥側附前扉黑ぬり、銅葺左右上ゲ蔀なり、○中略

御廟所　廻

寺領

り石垣、高サ五六尺、其上に石玉垣を四方に巡らす、後の方幅四尺許、敷石の通路有入口は後の方なる歟、前は四五尺も高き石垣の上に、又石の玉垣あれば、諸人登る事のならざるやうに、經營せしものなり、

〔日光巡拜圖誌　二〕相輪橖○中略

銘下、有記曰、○中略于時征夷大將軍從一位左大臣源氏長者家光公、妙德周宇宙、高明朗大虛、妙容雖不動、光燭非無偏、其德至則政令自行、偉哉德之至矣、夫此橖者、他不上言、自不假案、自然發起而忽成、可謂美也、傳敎大師寶法塔之願文、大日本國陰陽應節、風雨順時、五穀成就、萬性安樂、紹隆佛法、利益有情、盡未來際、恒作佛事矣、若爾當家家門相續、武運長久、天下泰平、國土安穩而已、

寬永二十癸未年卯月如意日

相輪橖、寬永二十年、御宮奥院へ御建立、慶安三子年六月、御山下へ御建直し、御奉行阿部四郎五郎、總奉行秋元但馬守、

〔堯恕法親王記　二十三〕貞享二年正月朔日、今晚日光山炎上之書付、從輪門里坊留守居到來、去冬極月廿日朝、五ツ半時、日光山蓮花石より出火、風强、御門跡御本房不殘燒失、坊中も、光樹院、實敎院、觀音院、淨土院、唯心院、安居院、南照院、本宮、并別所、御旅所、其外、西谷坊中則道院燒失、町屋者、去十六日、今度共ニ兩度不殘燒失、　一東照宮者、大猷院殿之佛堂新宮、慈眼大師堂、無別條候、　一公方樣御殿者、御門御番所計燒亡、　右之通申來

〔官本日光山志　一〕豐太閤朱印

當山寺屋敷幷門前足尾村神主社人寺人屋敷等之事、被寄附之、無異儀立置候條、勤行等不可有懈怠候也、

天正十八
九月廿日　　朱印

寺職

日光山座禪院　同衆徒中

〔官本日光山志〕御宮御料一萬石　御佛殿御料三千六百石

新墾の地相交へ、今日光御料と稱する地增加せし事、凡二萬九百石に及べりとぞ、村數七十三箇村、其郡に係ることは、都賀郡、河內郡、鹽谷郡、安蘇郡との四郡に係れり、日光御料の堺限は、東の方宇都宮街道大澤驛迄、日光より四里、壬生街道は、文狹驛迄同五里、西の方足尾迄同六里、久我村迄同七里、乾の方は、栗山鄕の內、湯西迄七里なり、中禪寺の奧湯本へ至り、上野國境あれども、人跡の絕たる所ゆへ、慥に知れるものなし、日光入口より九里許も有べし、南の方足尾より北は會津領の山谷境へ、是も人の至らぬ高山峻谷多きゆへ、定かに知がたけれど、大抵八里餘も有べし、御山內より宇都宮へ九里、高原峠へ八里餘、是は會津堺也、

〔官本日光山志〕坐禪院跡

上世當山の開基は、慈覺大師なりともいふ、此大師は勝道上人と同數、當國の產にて、殊に圓仁は都賀郡の人、其先は國造奈良別王の遠裔下野朝臣壬生氏の出なれば、世人云、日光山へ登て、寺院を建立せしとも傳へ、又は弘法大師の開建ともいへり、○中略當山の座主、○中略古へ宇都宮撿挍とも唱へし、是は僧官といふにもあらで、撿挍大法會の稱にて、高野山の貫主を撿挍と稱するよりおこれりされば古義眞言なること知べし、座主名籍の內に、沙彌丸又は若王丸など〻有は、座主の子にて、いまだ得度せざる中の名なりとしらる、然らば妻帶の座主職も多くありなんとおもはれけることは、勝道上人より十二世とも、又は十一世の住職宗圓座主といふは、右大臣藤原道兼公の四代兼房卿の子にして、當山に住せられ、宗圓座主と稱せり、其子を座主三郞と號し、此人宇都宮に館を構へ、住居せしより、宇都宮氏を氏とするの始にて、後には宇都宮彌三郞宗綱と名乘、是より子孫連綿とし、世に稱せらる〻高名の家とはなれり、○中略或說に、當山の一坊八十字は、

古へ修驗にて有しとも傳ふ、さればにや、採燈護摩、又は峯修行等は、修驗道の遺法にやあらん、文明年中、亞護院宮准后道興親王登山せられ、坐禪院に滯留ありき、座禪院は、補陀落山光明院中禪寺を兼帶し、本山修驗を攝行し、三派兼學の山にてぞありけるにや、是より以前、享祿三年十二月、鎌倉御所成氏朝臣の御舍弟勝長壽院殿、（〇成潤、號大御堂殿、）敵方より謀りける事にや、鎌倉を忍出させ給ひて、日光山へ御移りあり、敵と一味にて、衆徒等を催さる、といふこと、大草紙に見へたり、

〔日光山歷代師承傳抄〕日光山歷代師承傳（日光山者、所謂二荒山也、後曰補陀落山、）

第一世勝道上人（〇註略）　第二世座主教旻大僧都（〇中略）　第五十三世中興　座主慈眼大師　第五十四世座主公海大僧正　第五十五世座主一品守澄法親王傳

法親王、諱尊敬、後改守澄、號曰本照院、後水尾院第二太子、母公園大納言基任之娘、嘗夢明星入懷而生、自幼明敏、駿發絶倫、正保元年謁青蓮院尊純親王、得度納戒、專學智者教觀、而於頓漸偏圓性具理毒之旨、如指諸掌、四年依幕下令命、錫東國、化權隆盛、慶安元詔爲二品、臨御日光、二年轉進一品、美聲洋洋、承應三年有院宣、改日光門室、賜號輪王寺、明曆年中、任天台座主、弘提宗綱、爲衆所徇、大將軍欽其道德、厚加崇禮、實釋門之龍象、台門之鸞鳳也、一旦示重疾、百醫不效、拱手而退、延寶八年夏五十六趺坐而化、世壽四十有七、

〔慈眼大師傳記〕大樹（〇家光）欲增東照大權現神威、盛台宗、合意于師、奉請第二親王（〇守澄）於上皇（〇後水尾）爲日光山門主、然妙齡也、故未遑東行、師預表開於大樹曰、他日令此親王爲一品、冠諸宗、大樹唯諾、

〔諸門跡譜　下〕輪王寺滋賀院（日光山御門跡）

尊敬法親王（一品、日光山門跡元祖、）

俗名幸教親王、院（〇後水尾）之皇子、後陽成院御孫、母后園殿、左中將基任女、號京極殿、寛永十一甲戌降誕、

子院

〔安政三年雲上明覽大全 上〕輪王寺宮〈號二日光宮一〉

御領一万三千石

御宗門天台一品管領宮輪王寺慈性入道親王　四十四　京御里坊新道廣小路上ル元揚一條河原御殿

光格天皇御養子　實有栖川韶仁親王御子

學頭　凌雲院大僧正

紅葉山御別當　凌雲院兼帶

執當　信解院大僧都　住心院大僧都

御宮御別當　寒松院

御靈家別當　東漸院大僧都　大慈院大僧都　津梁院大僧都

御別當　寒松院　津梁院　春性院　福聚院　大慈院　壽昌院　觀善院　東漸院　觀成院　林光院

御使役　泉龍院　青龍院

坊官　万里小路式部卿　本間宮內卿　万里小路民部卿

御家司　古田筑前守

奧諸大夫　野澤近江守　中根伊豆守

同勤　藤澤主水　伴造酒

表諸大夫　乙葉淡路守　石河飛驒守　矢田隆長門守　小杉但馬守

同勤　下村將監

御側　渡邊大監　赤羽兵庫　鵜川內記

御奏者　豐島右兵衞

御取次　高橋圖市○以下十人略

京御留守居　岩井陸奧守

〔官本日光山志 四〕當山の寺院坊舍　一山の學頭、一院衆徒二十箇院、別所四箇院、坊舍一坊八十字、是を山內の寺院坊中といふ、　學頭　修學院權僧正なり、一山の學頭と稱す、東山谷にあり、

右修學院寺領三百石なり、正保二年の御取立といへり、

山内の傳說に、天正十八年御打入の頃は、本院座禪院と、外に衆徒八箇寺ありしといふ、法門　櫻本　敎城　禪智　遊城　淨土　光樹　藤本　此八箇寺ばかり、其後元和三年御鎭座の砌、七箇寺御取立、月增　護光　養源　觀音　安居　實敎　醫王　又正保二年、五箇寺御取立、惠乘　南照　花藏　照尊　唯心　古緣起にも、衆徒といへども、坊號にて有けり、元和三年、御取立以來、廿箇院は院號に定まれり、衆徒一院寺領百石宛、〇中略

衆徒廿箇院在所東谷、各百二十石宛、　唯心院　南照院　安居院　日增院　遊城院　敎城院　櫻本院　藤本院　醫王院　禪智院　護光院　以上十一院は、東山谷にあり、　養源院　花藏院　惠乘院　法門院　以上四院は、佛岩谷にあり、　淨土院　觀音院　實敎院　光樹院　以上四院は、中山にあり、　照尊院此一院は、南谷にあり、

御留主居一院　是は衆徒廿箇の內より兼帶せり

法務の階級、且は老若にも寄らず、其器を撰び、衆徒の內より撰ばる、職なり、御門主御家臣、井社家伶人以下、神人に至る迄、御留主居の指揮する職掌なり、

別所四箇院　大樂院御宮の東、二百五十石、　龍光院御靈屋の北嶺、百五十石、　安養院新宮別所安養澤ニ有三十石、　無量院大師堂別所、大師山の麓、安養澤にあり、六十石、內廿石は大師領、

八十坊　妙月坊　妙金坊　眞鏡坊以下七十三坊略

大中寺

大中寺ハ、下野國都賀郡山田村ニ在リ、禪僧快庵ノ開基トス、曹洞宗ニ屬シ、德川幕府時代ニハ、同宗關東僧錄司三箇寺ノ一タリ、

名稱所在創建

〔下野國誌 六〕大中寺
都賀郡富田郷山田村にあり、曹洞宗の僧錄にて、關東三箇の本基なり、圭田百石、太平山と號す
緣起に云、下野國都賀郡富田莊山田村、太平山大中禪寺者、永平十一世快庵禪師開法梵宇也、師諱妙慶、薩州刺史之苗裔、祝髮行脚、始參濟下耆舊、後欲探洞上玄微、往濃州龍泰寺、終了大事於華叟之室、去際于越後州、國大守慕師之道德、創顯聖寺、令住焉、偶嗣法弟子正悦、雲遊關東、欲爲師求弘道勝槩、將伊白徒、相攸四方、適當州、日觀山頂紫雲屯、相議曰、奇哉此山、決爲吾師瑞世道場乎、於此結茅寓止數月、時小山城主判官重長、(法諱大中存公)招庵下名德、齋次悦公先丁其還、住述此山祥瑞、兼喩吾師道法、重長躍然歡喜、遂草創當山、請快庵禪師、爲第一祖、維時實延德元己酉年也云々、寺號大中者、重長法名、取於大中、是蓋不忘開基之由也云々、快庵禪師在寺五年、明應二癸丑年臘月廿六日示寂、春秋七十二、僧臘四十八、席讓於培芝正悦和尙云々、山號太平者、茲山艮位別峯而有太平權現祠、不知昉於何年、培芝和尙入此山、初爲白衣老人參學夜積而、受于菩薩戒血脈、誓爲山門之鎭護也、故號太平也云々、

寺格

〔江戸砂子 五三田〕太平山大中寺　下野富田の宿寺　寮三田
開山快庵和尙　曹洞宗關東僧錄三ケ寺の內なり
〔全國各宗本山明細帳〕禪曹洞宗　中本寺　大中寺　下野國都賀郡山田村
○按ズルニ、此寺ノ寺格ハ、武藏國越生ノ龍穩寺ニ同ジ、

寺領

〔寺鑑 下 禪宗曹洞宗〕御朱印　高百石　關三ケ寺　野州山田　大中寺

藥師寺

名稱所在

藥師寺ハ、下野國河内郡藥師寺村ニ在リ、天武天皇ノ勅願ニシテ、天平寶字五年、筑紫觀世音寺ト共ニ戒壇ヲ設ケ、專ラ東國沙彌受戒ノ所ト爲セリ、寶龜中、道鏡此ニ左遷セラレ、今尚ホ其墓ヲ存ス、

〔伊呂波字類抄 也諸寺〕藥師寺在下野國、天武天皇御宇二年乙巳立、下野國藥師寺坂東沙彌令受戒於此寺、戒書云、天平寶字五年正月廿一日勅云、東國沙彌以下野藥師寺爲戒壇院、宣下、

〔拾芥抄 下本諸寺〕藥師寺在下野國、在戒壇、

〔下野國誌 六〕藥師寺

河内郡藥師寺村にあり、當所は、もと大山鄕なるを、藥師寺あるゆゑに、世人皆藥師寺村と呼ぶなり、往古の大伽藍は、はやくより廢して、龍興寺といへる別院のみわづかに殘れり、此龍興寺は、彼鑑眞大和尚の、唐の楊州の龍興寺をうつしたるものなり、

創建沿革

〔續日本後紀 十八仁明〕嘉祥元年十一月己未、下野國言、藥師寺者、天武天皇所建立也、體製巍巍、宛如七大寺、資財亦巨多、

〔東大寺要錄 一〕孝謙天皇〇中略

五年〇天平寶字正月廿一日、下勅於下野國藥師寺、筑紫觀世音寺、始建戒壇行授戒、

〇按ズルニ、當寺戒壇ノ事ハ、戒律篇ニ詳ナリ、

寺領用途

〔續日本紀 十七孝謙〕天平勝寶元年七月乙巳、定諸寺墾田地、〇中略下野藥師寺、筑紫觀世音寺、寺別五百町、

〔延喜式 二十三民部〕凡下野國藥師寺、四月八日、七月十五日、兩齋會布施、便以當國庸布一百六十三段充、但供養、用正税三百八束四把六分、

〔藥師寺要錄 下野國諸所引〕建長四年、從鎌倉下御教書曰、

諸堂學侶用供米事

右陵遲無沙汰之間、有二其訴一、就レ中藥師寺者、天武天皇御願、崇敬異レ他之間、可レ專二御佛事一之處、雜掌等存二踈略一、致二緩怠一之儀、尤以不便、早尋二明子細一、可レ被レ申二沙汰一之狀、仍執達如レ件、

建長四年六月廿五日　　相模守
陸奥守

鑑眞

〔下野國誌十二〕鑑眞大和尙碑　河内郡藥師寺村龍興寺の境内にあり、高五尺餘りの石塔にて、鑑眞大和尙、天平寶字七壬寅五月五日と彫付たり、○中略弓削道鏡墓　同所にあり、高一丈餘りの塚なり、但しまるしの石塔はなし、道鏡は、俗稱弓削氏にて、河内國の人なり、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年十一月甲申、藥師寺○大和僧行信、○中略厭魅、下二所司一推勘罪、合二遠流一、○中略以二行信一、配二下野藥師寺一、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年八月庚戌、皇太子令旨、如レ聞、道鏡法師、竊挾二舐粳之心一、爲レ日久矣、○中略今顧二先聖厚恩一、不レ得下依レ法入上レ刑、故任二造下野國藥師寺別當一發遣、宜レ知レ之、

〔藥師寺要錄下野國誌所引〕文曆二年、將軍頼經卿、延二頼賢阿闍梨一、號二意敎上人一、任二下野講師一、初名頼暁、後改二頼賢、東大寺別當、有二頼暁者一、因爲二悪僧一改名云々、東鑑有二頼暁者一、則頼賢上人也、掛二錫於藥師寺一、坊中慈猛、願行等、摳二衣於意師座下一云々、慈猛房號二良賢上人、龍興寺及同國小俣鑁足寺中興開山也、願行房號二憲靜上人一、相州鎌倉極樂寺開山也云々、

專修寺

專修寺ハ、一ニ阿彌陀寺ト云ヒ、又無量壽寺トモ云フ、下野國芳賀郡高田村ニ在リ、眞宗ノ開祖親鸞ノ開基ニシテ、伊勢國一身田專修寺ノ遺院ナリトス、本尊彌陀、觀音勢至ノ三像ハ、信

名佛所在

濃國善光寺本尊佛ノ分身ト稱シ、靈佛ノ名世ニ高シ、尚ホ伊勢國專修寺條ヲ參看スベシ、

〔下野國誌 七〕專修寺

芳賀郡高田村にあり、則高田山と號す、當山は、親鸞聖人大法成就の正覺山たるに依て、淨土眞宗の總本基なり、此故に、聖人一流を、下野流と稱すなり、○下略

〔二十四輩順拜圖會 後篇四下野〕高田專修寺 同國芳賀郡大内の庄にあり

當院は、○阿○彌○陀○寺、又は無量壽寺共云、宗祖親鸞聖人開基御建立の靈場也、勢州一身田御門跡の御舊院にして、今は御兼帶所となれり、　本堂十二間四面、聖人御肖像を安置す、　金堂 阿彌陀堂なり 本尊善光寺同一體の如來、

創建沿革

〔下野國志 七〕專修寺

叡覽傳云、○中略 四月○嘉祿元年 十四日夜、聖人○親鸞 夢、梵僧來告曰、我是善光寺如來也、酬汝宿願、分身與之、宜創伽藍以弘宣大教、聖人夢覺、歡喜不措、乃詣善光寺、寺衆十五人、候迎聖人曰、昨夜我等感同夢、如來發梵音曰、明旦我弟子善信者來、我當分身與之也、今現分身之像、在于壇上、遞贈聖人、聖人餞之、咸戴而歸、于時四衆唱々、万人迎拜、今所安置野州高田山一光三尊像是也、於是經始伽藍、踰年而成、聖人以爲本刹、朝廷嘉之賜御題專修阿彌陀寺、揭之以爲本寺名額云云、

〔和漢三才圖會 六十六下野〕專修寺 在芳賀郡大内庄高田村　本尊　阿彌陀 觀音勢至 金像三尊秘佛 常用新佛

親鸞 五十四歲 在當國欲建寺、○嘉祿二年 既而發一字號專修寺、○中略 其後讓當寺眞佛房、此與常陸眞佛不同○中略

當寺四世專空上人時、移寺於越前熊坂、○中略 十世 眞慧上人時、自越前移于勢州一身田、號高田專修寺以爲本寺、兼帶當寺、而後一代一度下白拜秘佛本尊、

堂塔

〔下野國志 七〕專修寺

芳賀郡高田村にあり、○中略 廓内の兆域九十丈、築地の内四十二丈、金堂縱橫九丈三尺、信濃國善光

名勝所在沿革堂塔

寺感得の如來を安置す但し東向なり、影堂縱横七丈八尺聖人自刻の壽像を安置す是は南向なり、南大門の額は、專修寺、後堀河天皇の勅額なり、西大門の額は、阿彌陀寺、同じく勅額なり北大門の額は、無量壽寺、廊の南門の額は、高田山是等は自筆なり、山内に泰澄寺、壽松寺、遍照寺あり、又覺心寺あり、舊記に云、覺心寺は、二祖眞佛上人の家士、但馬太郎、法名覺信房の子孫、一字を建立し、覺心寺と號して相續せり、後中絶せしを、本山の命に依て再興す

〔開帳差免牒〕戊秋〇文政九年　一向宗　勢州　專修寺

右衆帶所、下野國高田山殿堂爲修復、同所本尊信州善光寺如來一體分身之像、二月廿日ゟ、日數三十日之間、開帳之儀、越前之諸門下相願候付、同國加戸本流院ニおゐて被致開帳、猶又勢州本山ニおゐて、五月朔日ゟ、日數三十日之間、且淺草唯念寺ニおゐて、八月朔日ゟ、日數五十日之間、被致開帳度旨、酉四月、松平伯耆守方江使僧稱念寺を以被相願、御老中江伺之上、同四月廿七日、於自宅年限ニ而、願之通可被致開帳旨、稱念寺江申達之

關川寺

關川寺ハ、磐城國白河郡白河愛宕町ニ在リ、創建詳ナラズ、初メ白河城ノ南方菖蒲澤ニ在リテ、天台宗ニ屬セシガ、明應元年、結城直朝修造シテ、曹洞宗ニ改ム、天正九年、今ノ地ニ移レリ、

〔白河風土記二郭外〕愛宕町〇中略　關川寺境内南北百四十四間、東西九十八間、町ノ南ニアリ、曹洞宗ニテ、山號ハ東光山ト云、豆州賀茂郡大見村國分山最勝院ノ末山ニテ、寛永六年、大本寺能州總持寺ヨリ、僧錄ト定メ、元祿六年ヨリ、常會ノ儀ヲ執行ス、緣起ヲ按ズルニ、寺昔ハ天台宗ニテ、福壽山關鏡院ト云、今ノ城ノ南ナル菖蒲澤ト云地ニアリ、此菖蒲澤關川寺アリシ故、關川鉦トモ云、初

メ此處ニ毒蛇伏蟄シテ、時々祟リヲナシ、土人ヲ惱シムル故、院ノ住僧彼毒蛇ヲ降伏シ、祟リモ止ヌ、諸人是ヲ德トシ、旅行ノ人マデ嚢錢百錢ゴトニ四文ヲ抽取テ寺ヘ賽シ通リケル故、關錢ノ字ヲ撰テ、院號トハナセシ、用ニ便ナリトテ、關東ヘ令シタルトナレバ、我藩(白河)モ下野ノ境ナレバ、此地迄ハ古百チ用イシヨリ、舊習トハナリシモハカリガタシ、〔接ニ天文ノ比、上杉憲政ノ家老長尾意玄九十六文チ以テ百トナセバ、道〕倘ヲ請ヒ、開山トシ、天台ノ敎ヲ變ジテ曹洞派トナル、是ニ於テ禪風頗盛ナリ、近村ノ寺院、皆其下風ニ屬スルモノ多シ、直朝卒シテ關川寺殿海藏潮公大庵主ト號シ、長ク祠リ絶ヘズ、大嶽ヨリ六代僧文拾ノ時、天正九年、關長門守母ヲ喪ケル故、寺ヲ今ノ地ヘ移シ殿堂ヲ造立ス、此地モト結城宗口退隱ノ館跡ナリ、壘土隍渠ノ遺形儼然トシテ存ス、故地ノ菖蒲澤ハ、今ハ田畑ト成、遺址モ定カナラズ、舊地ノ時、山號ハ洞光ト云、移寺ノ後ハ改テ東光ノ字ヲ用ユ、關錢ヲ關川ト改シハ、直朝ノ比ニヤ、慥成ル事ハ口碑ニダモ傳ラズ、結城氏ノ盛時ニハ、百石ノ地ヲ附ラレ、又蒲生氏鄕會津ヲ領セシ時、此寺領地寄附スト也、其譯ハ氏鄕イマダ伊勢松阪ニ居セシ時、當國ヨリ善馬ヲ求メ上セケルニ、子細ナク通サザリシヲ、住僧得峯ノ色々扱テ、伊勢ヘ送リシニ、此馬甚ダ駿逸ナリシカバ、氏鄕之ヲ愛シ、關川寺葦毛ト名ケ、毎ニ戰場ヘ乘リシトカヤ、其舊緣ヲ思ヒ、寄附モアリシトナリ、秀吉公結城家改易ノ時、寺領モ沒收セラレ、今ハ境内ノ外ハ、寸土ノ免除モナシ、今開山ノ東ニ關川寺田ト唱ル名殘リシハ、古ノ寄附ノ地ナリト云傳フ、

本堂　七間三尺、梁行間九間三尺、本尊釋迦如來長ケ一尺三寸、木佛座像、　開山堂　三間三尺、梁行五間、　禪堂　五間ニ九間　庫裏　六間ニ十八間　鐘樓九尺四面高サ一丈　浴室　二間ニ五間　樓門　四間ニ五間、樓上十六羅漢ノ像ヲ安置ス、元文六年、松平下總守財ヲ捐、役夫ヲ給テ造立ス、　總門　間口一丈三尺ニ、奥行七尺五寸、高サ二丈三尺八寸、　白山權現社　三尺四面、當寺ノ鎭守ナリ、　秋葉權現社　九尺ニ二間　太神宮　小祠ナリ　稻荷

寺號

名稱　所在　堂塔

社　小祠ナリ、其側ヲ藥葉ガ塚トテ、古本ノ楓一株アリ、枝葉繁茂數十歩ヲ掩フ、モシ枝葉ヲ折取リナドスル者アレバ、必祟リヲナス事、物ノ憑タル如ク靈アリ、　不動堂　三間ニ五間、土藏作リ、傍ニ一切經ヲ藏ス、

〔日本地誌提要　二十九磐城〕佛寺　關川寺白河郡白河、禪宗、創建未詳、舊天台宗、關德院ト云、曾蒲澤ニ在リ、明應元年壬子、結城直朝修造、禪僧大嶽ヲ住職トス、天正中、今地ニ徙ス、寺域百六拾六坪、

〔日本洞上聯燈錄　八〕最勝鳳庵英麟禪師法嗣
奧州關川寺大嶽祖叅禪師、操行清苦遊歷爲志、及見鳳庵一語下脫落、庵對衆證明、已而出世總持、道聲四播、上野介藤宗廣結城氏鎭奧之白川、有古寺名關錢、此有龍淵、嚴覆船、昔民諸登、昔之刺史、備濟止、旅客乞錢、乃建寺爲祈福也、自後龍不災云、請師重興、師改還爲禪林、大唱宗乘、長松片石皆長顏色、文龜癸亥年○三四月十八日、謝世、門人嘗繪其像、請贊爲書曰、白砂川上、駕無底船、上載下載、不直一錢、

興德寺

興德寺ハ、岩代國會津郡若松郭内ニ在リ、葦名盛宗ノ開基ニシテ、宋僧覺圓ヲ以テ開山トス、臨濟宗ニ屬シ、應永二十四年、十刹ニ列ス、

〔會津風土記　佛寺〕興德寺在郭内、大圓禪師創建、而本朝禪流二十四派之其一也、禪師諱覺圓、字鏡堂、宋ノ西蜀人、嗣法無準、弟子模溪、弘安二年、與佛光來、通津縄、龍吟閣、題通道場、宗鏡堂、瑞龍禪院、洪音樓、靈光寺、寶華室、此年松、耳露泉、是爲十境、第八世書中和尚、入寺之時、相城諸山疏曰、奧州會津瑞雲山奧院德禪、逕大圓禪師草創之地也、應永丁酉(二十四年)秋、京師大丞相述降釣帖、陞諸天下十刹、開左元帥左武衛大將軍、特賜前建長寺中和尚、新進開堂之儀、○下略

〔新編會津風土記　十三若松〕本町　○中略　五之丁
寺院　興德寺、境内東西一町二十二間、南北一町十三間中、興德寺前通ノ北端ニアリ、京師妙心寺末寺、臨濟宗ナリ、相傳

フ、後宇多院弘安十年、大圓禪師ノ草創ナリ、禪師諱ハ覺圓、字ハ鏡堂、西蜀ノ人ナリ、法ヲ天童環溪ニ嗣グ、乃六祖慧能ヨリ二十一代徑山無準ノ孫ナリ、弘安二年、相州鎌倉圓覺寺ノ開山佛光禪師、元ヨリ歸朝ノ時、伴ヒ來リシニ、北條時宗ガ計ヒトシテ、同州禪興寺及建長寺等ニ住セシム、居コト幾モ無シテ、移テ洛ノ建仁寺ニ住セリ、是所謂二十四派ノ一源ナリ、此地ニ來リシハ、弘安十年ノ頃ト云、縁起ヲ按ズルニ、禪師初テ本郡ニ來リ、此地ニ紫雲ノ靉靆クヲ見テ佳瑞トシ、八町四方ノ地ヲ占テ、即時ニ經營ヲ始メケルガ、不日ニ其功成テ、山ヲ瑞雲ト號シ、寺ヲ興德ト名クト云、東鑑ニ、康元元年、北條時頼通世ノトキ、葦名光盛及盛時、時連、兄弟三人、諸共ニ剃髮セシ、事見ユ、是モト時頼ト親昵ナルニヨルトイヘドモ、光盛等モ亦深ク禪道ニ歸依セシトハ見エタリ、然ラバ此寺ヲ草創セシハ、光盛ガ孫盛宗ノ時ニテ、祖父ト同ク禪道ヲ信ジ、コノ禪師ヲ請ジテ、當寺ヲ開カシメシニヤ、其後二十年ヲ經テ、德治元年九月二十六日、禪師遷化セリ、遺偈アリ、

甲子六十三、無法與人說、任運自去來、天上只一月、

即塔ヲ建テ、靈光ト號ス、時ニ勅有テ大圓禪師ト謚ス、其後壽峯ト云僧、其跡ヲ續テ當寺ニ住ス、是ヲ第二世トス、三世大圭ガ時ニ至テ、益莊嚴ヲ加ヘ、凡叢林ノ宜ク有ベキトコロ、悉ク備ハレリ、又靈岩山圓藏寺、(河沼郡牛澤組柳津村)聖會山禪定寺、(同郡笈川組堂川村)高巖山長福寺、(安積郡福良組赤津村)及小谷山大慈寺、(本郡南青木組小谷村)壽福山寶泉寺、(手明町)久昌山少林寺、(耶麻郡小田付組大澤村)等、ヤヽ其法流ヲ慕ヒ、末山トナリシカバ、大圭ヲ以テ當山ノ中興トス、葦名氏亦深クコレニ歸依シ、世々別院ヲ立ルモノ二十四宇、各祖先ノ位牌ヲ安ズ、多寶院、法界庵、正傳庵、福祿聚院、(舊事雜考、永享四年ノ記ニ、葦名修理大夫盛政ノ法號ニテ、其祠堂ナルベシトアリ、)持地庵、慶雲庵、瑞應庵、德受院、謙亭庵、富陽庵、靜香庵、常喜院、能滿庵、寶聚庵、慈視庵、海藏庵、福春庵、香南庵、鶴栖院、大慈院、德雲庵、松源院、長德院、(一字ノ名ヲ失フ)コレナリ、今ハ僅ニ瑞應庵ノミ殘テ、餘ハミナ廢壞セリ、又當時多ク莊園ヲ寄附シ、本郡石村、宮內村、天屋村、香鹽村、大豆田村、關川村、小鹽村、大沼郡小谷村、相

川村澤村、（今ハ詳ナラズ）耶麻郡人田付村、熊倉村等ノ諸邑、皆稅ヲ納ル、其後應永二十三年、當寺ヲ以テ天下ノ十刹ニ列シ、其名海内ニ震フ、同二十五年、鎌倉諸山ヨリ贈ル所ノ疏アリ、（寶物ノ部ニ出ス）又其頃當寺ノ十境ト稱セシハ、通津橋、（山門ノ前ニアリ、此丁ノ南頓士屋敷內ニ橋柱殘ルト云、傳フ、）圓通道場、（即今ノ佛殿ナリ）洪音樓、（今ノ鐘樓ナリ）靈光塔（開山塔ナリ）宗鏡堂、（今ノ法堂ナリ）福祿聚院、（此地今詳ナラズ）龍華室、（方丈ナリ）萬年松、（今猶方丈ノ前ニアリ）甘露泉（萬年松ノ側ニアリ）是ナリ、其後百餘年ヲヘテ、三十二世速傳ニ至リ、妙心派トナリシト云、天正己丑（十七年）ノ亂ニ、諸刹多クハ兵燹ニ罹リ、此寺獨免ル、事ヲ得シトイヘドモ、伊達ノ兵士、境内侵掠シ、堂舍ヲ破却シ、僧徒ヲ追逐セシカバ、時ノ住僧心安コレヲ避テ、河沼郡勝方村勝方寺ニ遁ル、ココニ於テ政宗、當寺ヲ以テ假ノ居館トシ、諸ノ仕置ヲ定ム、翌十八年、豐臣家下向ノ時モ、又當寺ヲ以テ廳事トス、氏鄕封ニ就クニ及テ、心安ガ高行アルコトヲ聞キ、迎テ再ビ住持タラシメ、祿二百石ヲ附セリ、當家（○保科）封ニ就テ、又二百石ヲ寄附ス、（○中略）又三十六世逸傳ガ時、勅シテ紫衣ヲ賜フ、綸旨今ニ傳フ、（寶物ノ部ニ出ス）

制札　門外西ノ方ニアリ、殺生伐木猥藉ヲ禁ズル牓示ニテ、府ヨリ建ル所ナリ、（以下凡テ寺院ノ制札ト云モノ、コレニ倣フ、）

總門　二間四面、南向、扁額ニ瑞雲山ノ三字ヲ題ス、龍飛乙未孟秋吉日、臨濟三十二世隱元書トアリ、

客殿　十間ニ八間、南向、本尊觀音、正面ニ方丈ノ二字ヲ榜ス、落欵ニ張卽之トアリ、

庫裏　十五間ニ七間

書院　八間ニ四間

昌林院　客殿ノ東南ニアリ、九尺四面、西向、内ニ五輪塔アリ、高九尺、地水火風空ノ五字ヲ彫レリ、文祿四年、蒲生氏鄕京師ニ卒シ、紫野大德寺ニ葬リ、昌林院殿前參議高巖宗忠ト謚シ、分骨ヲ當寺ニ納ム、因テコレヲ建ツ、今年々盂蘭盆ゴトニ、使番ノ者ヲ遣シテ、香奠ヲ供ヘ、因國ノ主ヲ禮シ、寺僧ヲシテ歳時ノ勤、懈ラザラシム、（以下寺院ニ香奠ヲ供スト書スルモノ是ニ同ジ）

鐘樓　客殿ノ東南ニアリ、二間四面、西面ニ額ヲ懸ケ、洪音ト題ス、當寺第八世審中、新ニ鐘ヲ鑄テ

自ラ銘ヲ製シ、槌ヲ洪音ト號スト云、今ノ鐘ハ寶暦十三年、住持祖春ガ時、冶工早山安次ヲシテ改メ鑄シムル所ナリ、徑二尺八寸、古銘左ニ載ス、

日本國奥州路會津縣瑞雲山興德禪寺大鐘永廿三年丙申六月十五日鑄造

爲鐘之用　幽顯俱利　斷現世迷　除多劫睡　煩惱所離　菩提茲至　一指半餞　助化策志　二聽五觀　御神慈智　深契正緣　妙符眞理　誓證佛身　廣濟群類　虚空有消　此願無棄　法界可窮　斯文不墜　住持　春中叟謹銘　大檀那　沙彌祐仁

都寺　義乘　化主　詰阿　大工　圓乘

瑞應庵　總門ヲ入テ右ニアリ、六間ニ二間、西向、　開山堂　客殿ノ西南ニアリ、三間四面、東向、大圓喬峯大圭三人ノ木像ヲ安ズ、大圭ガ額ニ大ナル創アリ、傳ヘ謂フ、先ニ此木像寺中守護ノタメ、毎夜境内ヲ巡リシニ、アル夜僕見咎テ盜賊ト心得、斧ヲ以テ傷ケシト、　稻荷神社　境内ニアリ、

〔新編會津風土記十三若松〕本町〇中略五之丁

寺院　興德寺〇中略　鎌倉諸山疏　一幅其文如左

相城諸山奥州會津瑞雲山興德禪寺、迺大圓禪師創業之地也、安衆優裕、叢規肅整、蔚爲一都會之望刹也、應永丁酉〇二十四年秋、京師大丞相薦降鈞帖、陞之以幽諸天下十刹、關左元帥左武衞大將軍、特降前建長壽中和尙新旌開堂之儀、蓋重叢始也、於是乎相城諸山岡詞、相謂云、今之叢林亦百丈叢林也、今之禮樂、亦百丈禮樂也、所慨弛張有時、興衰頼人、苟得其人、執而行之、則祖道勃興、其不墟旋踵也哉、遂晉率作短疏、遠致馳懸之意云、〇中略

綸旨　二通〇一通略　其文如左

興德寺住持職之事、殊賜御前宗、專佛法紹隆、宜奉祈寶祚延長者、天氣如此、仍執達如件、

寺領

慶長十二年丁未正月十日　藤原右少辨明廣

逸傳和尙禪室

〔新編會津風土記若松三十〕本町○中略五之丁

寺院　興德寺○中略　寄附狀　四通其文如左

會津於分領知行貳百石進之候、全可有取納候、恐々謹言、

慶長六十月十八日　秀行判

興德寺

御知行御目錄

大沼西田面ノ內

貳百石

以上

慶長六年十月十八日　岡半兵衞重政花押

町野左近助旂景花押

興德寺

寺領高目錄之事

一百六石八斗九升者　山之郡稻田村之內

一九拾三石壹斗壹升者　同郡半在家村之內

高合貳百石者

寛永五年十月十八日　明成花押

興德寺

會津山之郡之內を以、知行高貳百石令寄附畢、如目錄全可有收納之狀如件、

寛永五年十月十八日　　　　明成（花押）

興德寺

名稱　所在　創建　堂塔

天寧寺

天寧寺ハ、岩代國會津郡天寧村ニ在リ、應永二十八年、葦名盛信ノ建立ニシテ、僧傑堂ヲ以テ開山ト爲ス、曹洞宗ニ屬ス、

〔會津風土記（佛寺）〕天寧寺（在天寧村、應永二十八年、釋傑堂建焉、傑堂諱能勝、楠正成之孫、蚤識流矢傷、慊爲蹤、遂出家矣、第二世南英入明見宣宗、英宗特賜大滿行果大禪師之號、）歸朝之後、依葦名盛信之招、住于此矣、六世天附、以毘首之建磨、牧溪之寒山拾得三幅爲什物、九世仁庵時、有僧侶千人、天正十八年、秀吉公至于會津時、住持祥山獻其畫、公還之賜白銀若干、寛永元年、秀忠公遊忠郷第、僧三幅之畫、備于台覽、

〔新編會津風土記（三十二 會津郡）〕天寧村

寺院　天寧寺（境内東西七十一間、南北六十四間免除地、）村東山麓ニアリ、山號ヲ萬松山ト云、越後國村上耕雲寺ノ末山曹洞宗ナリ、應永二十八年、葦名左近將監盛信ノ建立ニテ、開山ヲ傑堂ト云、第二世ヲ南英ト云、共ニ高德ノ智識ナリ、（傑堂南英ガ傳下ニ出ス）是ヨリ代代高德ノ僧絶ヘズ、第七世ヲ一氣諱正元ト云、其頃當寺回祿ニ罹リシガ、或夜ノ曉ニ、一女子來テ黃金數百ヲ寄附シ、當寺ヲ修造セヨト云、其姓名ヲ問ニ、イラヘモセズ去シカバ、人ヲ遣ハシテ、其跡ニ從ハシメシニ、飯盛山（瀧澤組瀧澤村ニアリ）宗像神社ノ邊ニテ、其形ヲ失ヒシト云、第九世仁庵諱善恕ハ、葦名盛氏ノ頃ノ人ナリ、盛氏歸依深ク、永樂百貫文ヲ寄附シ、雲水僧千人ヲ聚テ結制アリ、第十世祥山諱曇吉ガ時、天正己丑（十七年）伊達氏ノ亂ニ逢ヒ當寺兵火ニ炎上ス、祥山亂ヲ避テ京師ニ至リ、一宇ヲ建立シ、天寧寺ト云、今ニ當寺ノ末山ナリ、仁庵ハ先ニ桂山寺ニ退隱セシガ、此時再住セリ、文祿元年、蒲生氏郷岡左內ニ命ジテ、當寺ヲ修造セ

リ、第十五世覽溪諱善尊ガ時、葦名義廣ノ孫平三郎盛俊、秋田角館ヨリ使ヲ馳テ、瑞雲院ノ爲ニ寺號及法脈ヲ請フ、因テ天事寺ト改メ、此寺ノ末山トナル、又昔ハ十二ノ支院アリ、聽視軒、如雲庵、雲亭庵、降香庵長林庵、退月庵、連峯庵、眞如院、善德院、寶昌院、殿松院、定林菴ト云、今僅ニ善德寶昌ノ二院存セリ、蒲生家加藤家共ニ寺領百石ヲ寄附セリ、當家（〇保科）封ニ就ニ至テ、寺領ヲ附スルコト故ノ如シ、會津曹洞一派ノ僧錄ナリ、末寺三十三箇寺アリ、　總門　四建門ナリ　制札　中門ノ前ニアリ　中門　四建作ニテ、額ニ登龍關トアリ、コノ處ニ石階アリ、　山門　四間ニ二間半、中門ヨリコノ處マデ、石階アリテ漸々ニ登ル、　客殿　十一間ニ八間、南向、本尊觀音長一尺三寸、脇士不動毘沙門、共ニ古佛ナリ、葦名盛信、同盛氏ノ位牌アリ、盛信ノ位牌ハ、寶巖寺殿元慶喜公大禪門、寶德三年辛未三月十八日ト記シ、盛氏ノ位牌ハ瑞雲院殿竹巖宗關大庵主ト記セリ、每年盂蘭盆ノ時、使番ノ者ヲ遣シ、香奠ヲ供ス、　庫裏　客殿ノ東ニ五間ニ三間ノ廊下アリテ、此ニ至ル、十八間ニ六間、韋駄天ノ像ヲ安ズ、長一尺四寸、古佛ナリ、　鐘樓　山門ヲ入テ右ニアリ、二間四面、緣起ニ、天正十七年、伊達政宗寄附ノ鐘アリシト見ユ、又河沼郡笈川組下垂川村禪定寺ノ緣起ニ、應永二十二年ト銘セル洪鐘アリシガ、如何ナル故ニカ、寬文ノ頃、天事寺ニアリシト云、是ニ因レバ政宗ノ寄附セシハ、禪宗寺ノ鐘ナルモ知ベカラズ、今懸ル處ノ鐘徑二尺、貞享四年丁卯、當寺十八世寥堂ガ時ニ鑄ル、　衆寮　山門ヲ入テ左ニアリ、十一間ニ四間半、　寶篋印塔　衆寮ノ前ニアリ、高一丈八尺、　善德院　當山ノ塔頭ニテ、山門ノ外ニアリ、　寶昌院　當山ノ塔頭ニテ、善德院ノ北ニ並ブ、

〔會津舊事雜考　四〕應永二十八年、是歲傑堂能勝建天事寺、勝先甲午（〇應永十一年）ニ師梅山寂後、冬十一月彼山下僧明桂、書記祖道、上座景玉、如容、共來于耕雲寺、（〇中略）玆年傑堂來于黑川、結庵於城東山下、太守葦名左近將監盛信、（塵埃後盛重云）見勝信、大宏院宇、號万松山天事寺、後來非數代主於玆也、

〔新編會津風土記 三十二會津郡〕天寧村

寺院　天寧寺○中略　寶物○中略　蒲生秀行證文　一通其文如左

會津於分領知行百石進入候、如目錄全可有領知者也、

慶長六十月十八日　秀行印

天寧寺

實成寺

實成寺ハ、岩代國會津郡若松大町ニ在リ、嘉元二年僧日尊ノ開基ニシテ、初メ若松城内米代ニ建立シ、法華堂ト稱ス、文祿四年、柳原村ニ移シ、元和九年、更ニ今ノ地ニ移ス、此寺日蓮宗ノ一本寺ニシテ、代々上人ト稱シ、他ノ推擧ヲ受ケザリキ、

〔新編會津風土記 十五若松〕大町

寺院　實成寺 境内東西一町十一間、南北一町四間免除地、此町ノ西頬、融通寺ノ北ニアリ、法華宗久遠山ト號ス、嘉元二年、日尊ト云僧草創ス、初ハ今ノ郭内米代四之丁其地ヲ傳ヘズニ在テ法華堂ト云、文祿四年、高久組柳原村ニ移ル、忠鄉ノ時、住持日瑤ト云僧、參詣ノ便ヨキ地ニ靈場ヲ開カンコトヲ請ヒ、元和九年、此ニ移レリ、開山日尊ハ、日蓮附法ノ弟子日興ガ徒ナリ、父ハ本州三迫ノ内玉野ノ主ニテ、遠祖ハ大職冠ヨリ出デシト云、文永二年ニ生レ、六歲ニテ薙染ス、始ハ天台宗ナリ、十七歲ニテ日興ニ歸依シ、法華宗トナリ、高足ノ弟子タリシガ、故有テ勘氣ヲ蒙リ、正安三年、富峯大石寺ヲ辭シテ諸州ヲ遍歷シ、道場ヲ草創スルコト、三十六箇寺ニ至レリ、當寺ハ其第二ノ靈場ナリ、後富峯ニ歸リ赦免ヲ請フ、日興妙法弘通ノ功ヲ善シ、血脈抄ヲ附屬シ、師弟ノ契約ヲ結ブコト故ノ如シト云、康永四年

五月八日、洛ノ上行院ニテ遷化ス、年八十一、其後數世ヲ經ルトイヘドモ、一本寺ニテ代代上人ト稱シ、他ノ推擧ヲ受ケズ、又當寺建立ノ棟札今ハ其寫ナリ、寶物ノ部ニ出ス、ニヨレバ、藤原實成建立ノ寺故、寺號ヲモコレヲ用キシト見ユ、然レドモ實成如何ナル人ニテ、此ニ至リシヤ詳ニシガタシ、舊事兼考ニ、元弘建武ノコロ、神社佛閣ノ器物ニ、藤原氏女ト銘スルモノ多シ、依テ事蹟ヲ考ルニ、嘉元ノコロハ、兼名遠江守盛宗ノ時ニ當リ、盛宗ノ内室藤原氏ニテ、先考ノ爲ニ一字ヲ建シモ知ルベカラズト云、○註略

制札　門外左ニアリ　總門　東向左右ニ番所ヲ設ク、内ニ扉掛アリ　本堂　七間四面東向、三方ニ庇椽アリ、十界勸請曼荼羅、并祖師日速ノ木像、及畫像ヲ安ズ、畫像ハ駿河國本門寺生寫シ影像ヲ摸セル物ナリ、共ニ肥後守正容生母榮壽院寄附、　客殿　本堂ノ東北ニアリ、七間ニ五間、南向、題目多寶釋迦ノ三幅ヲ本尊トス、又當寺開山日尊ガ作ル所日速ノ像、二十一世日永ガ刻ミシトコロ日興日尊ノ像ヲモ安ズ、　庫裏　客殿ノ西ニアリ、十三間ニ四間、　題目供養塔　客殿ノ東南ニアリ、榮壽院ノ建立ナリ、　寶藏　供養塔ノ南ニアリ　鐘樓　寶藏ノ南ニアリ、三間四面餘、鐘徑三尺三寸、久遠山實成寺二十二世日宥、元祿八乙亥年七月日ト彫付アリ、

三十番神社　客殿ノ東ニアリ　塔頭　常詮院　本堂ノ東南ニアリ　圓乘院　常詮院ノ東ニアリ　覺成院　圓乘院ノ東ニアリ　本量院　燒失シテ再建未ダ成ラズ　蓮淨院　同上　圓養院　同上○中略

棟札　一枚、往時火災ニ罹テ燒失ス、其寫アレバ左ニ載ス、

大檀那　永德院殿前相公遠山日秀大居士從五位愛日向守藤原實成

嘉元二甲辰八月日　玉野阿闍梨法印　日尊

法系寫　一通其文如左

寺領

奥州久遠山實成寺者、開山日尊上人三十六箇寺建立之內、第二之靈場也、因、茲其法系也、本門三箇之秘法、二箇之相承之的派傳弘流宣之靈寺也、故當山代代宜、稱、上人、自木大曼荼羅、幷授戒補任等、如、本山貫主、許之者也、其上近國之諸末寺等、以、弘化廣布之餘暇、於諸寺、可、被、下知者也、仍而附囑指南狀如、件、

貞和三丁亥年五月三日上行院貫主開山附法弟子　日大判

奥州久遠山實成寺永代常住等

〔會津舊事雜考六〕享祿五年天文元年

實成寺相傳牒

判盛氏

依、有、要用、東黑川之內、千本木御簎田三千刈之田地、永代賣渡申處實也、然者彼地之事、爲、實成寺御寄進、周防殿召置候、尤於、子々孫々、爲、不、可、有、相違、御屋形樣御判形申請進獻仕候、仍後證之一筆如、件、

天文元年壬辰八月日　指南　佐瀨大學助

御小者　九郎左衞門

御舘　周防殿參

天文四年

實成寺相傳牒

判盛舜也

東黑川之內法華堂、今實成寺也、舊今來代郡四衞郡門邊在、焉云南堀際外、知、所則昔又郡堀知、當時、乎百五十刈、幷石塚之南三百刈、合三百五十刈之田地、長谷川清兵衞尉介、買得、實成寺致、寄進、所實也、然者向後爲、不、可、有、相違、申請御判

形波者也、仍證文之一札如件、

天文四年乙未五月三日

寶成寺日東上人進上

御館中間勤續佐瀨大隅守常數

慧日寺

名勝
所在
寺領

慧日寺ハ、岩代國耶麻郡大寺村ニ在リ、眞言宗ニ屬ス、大同二年、僧空海ノ開基スル所ナリ、中世寺運隆盛ニシテ、會津四郡ノ地、大概寺領ト爲リシガ、後漸ク衰替シ、天正中、又兵燹ニ罹レリ、明曆ノ頃、保科正之之ヲ修營セシカド、復タ昔日ノ比ニアラズ、

〔會津風土記 佛寺〕慧日寺在大寺村、縁起曰、會津山頂巖凡十里、昔寛猷作祟、故名病悩山、雲山骨陳在月輪寛毅二莊、大同元年、二莊一夜照湲、今猪苗代湖是也、以事聞、二年、弘法大師奉勅來焉、大師歎曰、奴乃比擬登天比天記多連半、左羅之奈良部鎭龍和賀奈仁都久登於毛逢牛、乃加持於八田野稻荷幾臨鑄鬼魅于鳥帽于撥、改山鎭鏡榜、大師手執三結榜新曰、顧此榜先占靈區勝于空中、其杵飛入鎭中、降懸紫藤、杵藤共今尚存其處、建寺靈丈六藥師金像、日光十二神將、四天王等爲密法興起之勝場也、時山神現形、大師以爲鎭守、勝鎭榜明神、乃爲之鎭、曰明神舞、其舞圖今有之、又建戒壇、斬寶塔、奉卷數、天王、觀感、以許多田、充寺供、弘仁元年、大師附囑寺傳燈、而歸京矣、當時有八千八百坊、云戒壇遠址尚存焉、有大蛇、大師加持逐之、時見其尾于此地、故呼尾寺、又稱其突宗基巨靈以呼大寺、廣袤十四五里、寺院遺跡尚在焉、見慧日寺圖、本堂北有磐梯明神祠、自頂上勸請之、神像衣冠束帶、其長二尺七寸七分、弘法所刻、或曰德溢所刻、二月十二日建設殿行祭禮、昔奉神像行之、以有祭于頂、像者從唯奉行之、是日逆年當山諸神、十五日、座飾御供船奉之、集日先月光之狀舞之、十六日造神而還之、是百穀豐年之祈、本堂乾有龍泉權現祠、下有澤、曰龍澤、大師嘗禱雨于此、甘雨降、五穀登矣、因其加持石曰龍化石、殘畢歌則有驗云、本堂北有閼伽井、大師之法水也、井上有三結縁(中略)百、因縁集曰、德溢法師者、藤左府惠美○第○四○男也、本爲因大寺僧、奉嵯峨天皇勅、從弘法大師東遊焉、到處建寺、而常奧二州殊多、大同之年、建清水寺於會津石梯山、今大寺是也、附囑寺弟子時詠歌曰、惠本阿羅波、和禮來多古武與、以波々志乃也、末集不毛登能、集興美豆乃天、今號慧日寺、又曰、德溢者修因和尚弟子、勤學于大和國牧野山焉、得天台一乘法、行東州、神明鎭曰、德溢立清水寺于奧州、靈觀音像、以鎭梯明神爲鎭守、逐陸奧、後改寺慧日寺、按德溢歌詞古武音與來和詞相似、與登皆則謂言、我又來也、或說奧蟠會直近賦金鑛云、(中略)或壇側有知識院遺址、蓋永年中、叢丹坊者、當寺衆徒之巨魁也、越後城四郡割據原郡興衆丹、今小川莊是也、爾來屬會津云、

〔大師御行狀集記〕陸奧國惠日寺條第七十八

大師〈○空海〉昔令修行東國、爽擧〈○擧字恐衍字〉狄之輩致歸依、其威德力自然及遠近、而陸奥國合津郡〈越後出羽三ヶ國之境也〉訪擇殊勝閑寂之地、建立一伽藍、號慧日寺、其堂、瓦葺五間四面金堂一宇、〈有禮堂庭〉奉安置皆金色丈六藥師如來、脇士日光、月光菩薩彩色十二神將等各一體、四面廊、僧房、皆具足、又乾角建瓦葺八角堂一宇、奉安置木像曼荼羅〈金剛界藏〉此堂大壇上、雖國司不能俗人登、況餘人乎、寺家四至之內、田園支配佛聖燈油等云云、于今住僧三百餘人、修行密敎、爲靈驗殊勝伽藍、但彼國自本有聖人、號名德壹菩薩、大師此菩薩付囑此寺、大師歸洛、抑從大師之時、於起請不令入荒凉修行者、由來不違一二、而已云々、

〔元亨釋書〈四慧解〉〕釋德一、學相宗于修圓、嘗依本宗作新疏、難破傳敎大師、相徒稱之、一闘、常州筑波山寺、門葉叢茂、而猒沙門莊修、麁食弊衣、恬然自怡、終慧日寺、全身不壞、

〔新編會津風土記〈五十三耶麻郡〉〕大寺村〈○中略〉　本寺村

寺院　慧日寺〈境內三千百四歩見除地〉本寺村ノ北ニアリ、山城國醍醐山金剛王院ノ末寺眞言宗ナリ、山號ヲ磐梯山ト云、緣起ヲ案ズルニ、〈○中略〉空海此寺ニ住セルコト三年ニシテ、僧侶三百餘人ニ及ビシガ、大同五年、都ニ歸ルベキ由、詔アリシニ因リ、當寺ヲバ德一ニ屬シテ歸レリト云、〈○中略〉德一當寺ニ住セシヨリ以來、相續テ寺門叢繁榮シ、子院モ三千八百坊ニ及ビ、數里ノ間ハ堂塔軒ヲ比シ、〈舊事難考〉〈應安四年ノ記ニ、慧日寺塔供養トアリ、〉堂ヲ並ベ、壯麗言計ナカリシトゾ、サレバ會津四郡ノ地大方ハ寺領ナリシニ、壽永ノ頃、越後城四郎長茂、越後國蒲原郡小川莊ヲ割テ、當寺ノ衆徒頭乘丹坊ニ與ヘケレバ、寺產巍饒ナリシガ、信州横田河原ノ戰ニ、乘丹四郡ノ兵ヲ率テ進發シ、彼地ニテ討死セリ、〈平家物語ニ出、又源平盛衰記ニ、乘丹坊ヲ時路勝ニ作ル、又其子息藤新大夫奥山權守、其子ノ横新大夫伴藤別當トレルモアリ、此四人ノ事詳ナラズ、〉因テ當寺モ稍衰ヘシト云、サレドモ永正ノ頃マデハ、猶宏基巨構ニシテ、院宇モ多カリシト見エ、其圖今ニ殘レリ、〈村者ノ口碑ニ、當寺繁榮ノ時ハ、寺領今ヲ以テ見ルニ、十八萬石許ナリシト云、又倉屋太郎兵衛、瀬井平右衛門、深澤清七郎、桑原主計、鈴木五郎左衛門、大工倉之丞、檜田鶴之丞、近藤治右衛門、磯部十郎右衛門、伊南居治郎右衛門、鹿榻美濃、馬場若狹、湯田土佐ナド云者、寺務ヲ司リシト云、又蘆名四天宿老ノ巨魁タリシ富田氏ノ先モ當寺ノ役人ナリシトイフ、〉蘆名義廣ノ頃ハ、寺產モ漸衰ヘ、僅ニ

八田、居合、柳原ノ三村ヲ所務セリ、天正中、伊達氏ノ亂ニ、坊舍殘ナク、兵火ニ罹リ、衆徒ミナ退散セシガ、當寺ノ撿校歡喜院玄弘ト云者、兎角シテ是ヲ防ギ、只金堂ノミ火災ヲ免ルト云、然レドモ其舊跡ナルニ因リ、伊達氏ヨリ常世三橋竹屋ニテ三百貫文ノ地ヲ寄附セリ、蒲生氏鄕ノ時、之ヲモ失ヒシガ、秀行ニ至リ、五十石ノ寺料ヲ賜フ、明暦中、肥後守正之コレヲ修營シ、五十石ノ地ヲ寄附セリ、今ハ昔ノ形ナケレドモ、古蹟遺蹤四方ノ原野ニ棊布シ、其餘舞師田、笛吹田、大鼓田、香田、油田、四十坊、數萬燈等ノ字、田圃ノ間ニ遺リ、古ノ全盛想像スルニ堪タリ、藥師ノ靈像ハ、今ニ存シテ、靈驗多ク、古器文書等猶少カラズ、皆下ニ擧グ、末寺二十一箇寺アリ、○中略

金堂　七間半ニ五間、南向下ニ石ヲ並ベ敷テ基トス、高三尺計前ニ石階アリ、四方ニ幅四尺五寸ノ石ノ緣メグレリ、丈六藥師ノ像ヲ安置ス、空海作ト云傳フ、舊事雜考、觀應元年ノ記ニ、大寺ノ藥師安座トアルハ、此堂ニ安置セシ始ニヤ、詳ナラズ、應永二十五年、回祿ニ罹リ、金堂燒亡セ〳〵トセシヲ、左手ト藥壺トヲ取上テ修補ス、寬永二年ノ火災ニモ亦然リ、會津五佛ノ一ナリ、脇士日光月光、十二神將、コノ中二軀空海作ト云ハ空海ガ作レル大黑、賓頭盧ノ像ヲ安置ス、鰐口一口アリ、寬永三丙寅四月八日、中興開山座主日道ト彫付アリ、又障子トテ絹地ニ獅子ヲ縫ツケ、帷ノゴトキモノアリ、今ハ長五寸三分ニ、幅七寸程殘レリ、黑絲ニテ文字ヲ縫ヘリ、奉施入障子一本、藥師如來御寶前、承久三年辛巳正月日施主蓮阿生年七十トアリ、金堂ニテ勤行ノ式モ、古來ヨリ傳ハル所ノ禮亡テ、多クハ存セズ、正月元日ヨリ八日マデ祈禱アリ、同七日、院主衆徒參籠シ、追儺ノ式ヲ行フ、二月十三日ヨリ同十六日マデ圓祭アリ、四月七日ヨリ九日マデ會式アリ、十一月六日ヨリ九日マデ、傳一ノ法樂八講ノ法則ヲ行フ、十二月朔日ヨリ八日マデ祈禱アリ、○下略

名勝所在　堂塔

示現寺

示現寺ハ、岩代國耶麻郡熱鹽村ニ在リ、創建未ダ詳ナラズ、初メ慈眼寺ト稱シ、眞言宗ニ屬ス、應安年間、火災ニ罹ル、國人之ヲ再建シ、曹洞宗ノ僧源翁ヲシテ之ニ住セシメ永和元年、寺ヲ今ノ名ニ改ム、

〔會津風土記佛寺〕示現寺在二熱鹽村一、相傳空海建レ之、始名二慈眼寺一、永和元年、洞家源翁改二慈眼一爲二示現一、能曾以二錫杖一打二破殺生石一、其杖今尚在焉、昔讃岐僧有レ槐自黄、三日三夜而倒、鹽井穿焉、溫泉出焉、慶長十六年秋、大地震、井泉俱沒、數歲後、覆得二溫泉一、

〔新編會津風土記六十四耶麻郡〕熱鹽村

寺院　示現寺、境内二千九百三十三歩免除地　三村西ニアリ、曹洞宗護法山ト號ス、能登國總持寺ノ末山ナリ、○中略

總門　四建作ナリ　制札　總門ノ前ニアリ　山門　二間餘ニ二間、上ニ鐘ヲ懸ク、徑二尺二寸餘、承應三年、當寺十九世計外ガ鑄所ヲ、享保十一年二十四世義諫ガ時、改鑄シ銘アレドモ略ス、　客殿　十一間ニ七間、東向、本尊虚空藏坐像、長二尺二寸、作者ヲ知ラズ、　庫裏　客殿ノ北ニアリ、十一間ニ七間、　禪堂衆寮　客殿ノ南ニアリ、七間半ニ四間、　開山塔　客殿ノ西ニアリ、東向三間四面ノ堂ナリ、源翁ノ像ヲ安ズ、長二尺八寸五分、作者ヲ知ラズ、左右ニ二空廣三世玄光ガ像アリ、又空海ノ像アリ、長八寸五分、コノ北ニ源翁ノ碑アリ、其南ニ空海ノ碑アリ、其外住持世代ノ碑多クアレドモ皆無銘ナリ、　觀音堂　三間四面、北向、千手觀音ヲ安ズ、長二尺ノ、立像ナリ、左右ニ童子ノ像アリ、千手觀音ノ腹ニ源翁所持ノ觀音ノ小像ヲ藏ムト云、會津三十三所順禮ノ一ナリ、

〔日本洞上聯燈錄二〕總持峩山紹碩禪師法嗣

奧州護法山示現寺源翁心昭禪師、越後官族源氏子也、○中略應安四年、結城府主源直光興造安穩寺、請師爲開山住持、居四年、謝事命大仙仲公補其處、經行造奧州會津薩草卓庵、學徒四至、遂成寶坊、號

寺領

慶德寺、近里有敎院、名慈眼、曇峰消豁實是絕境也、師一日徐步遊彼、忽有神人、衣冠都雅來而謁師曰、我是當山性法之神也、請和尚住此寺、言訖不見、神人又告住持曰、以當山早讓源和尚、可永紹隆佛法、若不然則佗時必爲祟矣、住持不敢隨之、日未幾匝地大震動、堂塔盡燒亡、人皆驚異之、俄州之刺史及士民、捨貨財以助再造之功、凡伽藍所宜有者、一時全備、於是住持與檀越相議、請師尸之、永和元年四月十五日、進院、改慈眼、爲示現、於時野州那須之曠野有毒石、蓋有物憑焉、人畜禽獸觸者近者皆無不斃、飛鳥過空及石上、則跕跕墮、其毒靈如是、故時世名曰殺生石、無有過其野者、師一日攜杖行敲石三下曰、汝元來石頭、性從何來、靈從何起、又敲三下、石流汗震動、渺然解散、忽有異人、設拜曰、我是此石之靈也、蒙師開示、頓脫苦趣、得生天、言訖而沒、實至德二年八月十三日也、自是名震海內、征夷大將軍義滿源公、重興泉溪、殿閣庖廩撤弊而更新之、頗增壯麗、丹堊輝煌照耀林樹、且施那須莊田一千餘石、以資食輪、乃延師再住之、至德上皇〇後小松勅賜能照法王禪師、洞上宗燄於此廣、徒衆常不減半千、既而退歸示現、州之太守捨田園若干頃、以充寺產、應永乙亥臘月下澣、示疾、翌歲正月七日、訓徒侶訖、索筆書偈曰、四大假合、七十一年、末後的端、蹈翻鐵船、壽七十一、臘五十六、塔曰大寂、嗣法十人、曰鈴山、大仙、南三、雪庭、大雪、劫外、大庵、雪江、壺天、天海、

〔全國各宗本山明細帳〕禪曹洞宗　中本寺　示現寺奧國(岩代)耶麻郡熱鹽村

〔會津舊事雜考六〕天文六年正月廿二日、示現寺燒矣、

〔新編會津風土記六十四耶麻郡〕熱鹽村〇中略　寺院　示現寺〇中略

三浦大炊小太郎左衛門尉盛通妻平氏申、陸奧國耶摩郡內下利根河村、當知行分安堵事、申狀壹通、謹進覽之、子細載于狀候、以代官令言上候、可被經御沙汰候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

貞和四年八月十二日　　右馬權頭國氏花押

右京大夫貞家花押

名稱所在

進上　武藏守殿〇中略

奉寄進示現寺所領之事

右耶麻郡岩崎村内限山在家四間、於永代爲正乘二親菩提所寄進申也、若於彼所正乘子々孫々中列競望輩出來者、永爲不孝、一子正乘所領之中、少ふかしき行事者也、仍爲後日寄進狀如件、

應永二年乙卯六月十三日　　沙彌正乘花押

上書　寄進　示現寺

名稱所在寺格

弘隆寺

弘隆寺ハ、岩代國安積郡ニ在リ、陽成天皇元慶五年、天台別院ト爲ル、今廢寺ニシテ其舊地ヲ詳ニセズ、

〔類聚國史百八十佛道〕元慶五年十一月九日癸丑、以陸奥國安積郡弘隆寺、爲天台別院、

菩提寺

菩提寺ハ、岩代國信夫郡ニ在リ、大和興福寺ノ僧智興ノ創建スル所ニシテ、淳和天皇天長七年、定額寺ト爲ル、今廢絶シテ其所在ヲ失ス、

〔類聚國史百八十佛道〕天長七年十月己未、山階寺僧智興、造建陸奥信夫郡寺一區、名菩提寺、預定額寺例、

名稱 所在　　創建 沿革

瑞巖寺

瑞巖寺ハ、一ニ松島寺ト云フ、陸前國宮城郡松島村ニ在リ、承和年中ノ創建ニシテ、天台宗ニ屬セシガ、文應中北條時頼、禪僧法身ヲシテ再興セシムルニ及ビ、遂ニ禪宗ト爲リ、寺號ヲ圓福寺ト改ム、尋デ慶長年中、伊達正宗ノ入國スルヤ、大ニ修造ヲ加ヘテ巨刹ト爲シ、更ニ瑞巖圓福寺ト改稱シテ、京都妙心寺ニ隷セシメタリ、

〔和漢三才圖會陸奥六十五〕瑞岩寺　在松島　〇同禪宗　境内凡三里許　號松島寺、開山法心和尙、中興雲居和尙、

〔奥羽觀蹟聞老志宮城郡七下〕松島寺
乃今瑞巖寺是也、相傳、仁明帝承和五年戊午、始開台宗、而建此寺、或曰、其始祖乃法身也、法身其氏眞壁、其名平四郎者、爲浮屠而入于宋、受法于經山無準、而歸朝所闢地也、北條相模守時頼修造之、號松島山圓福寺、先是稱松島寺、爾後稍荒廢、慶長十年乙巳、我黄門君〇伊達正宗造營寺院、新起土木、令中村周防、丹野甚右衞門、大塚善内、鈴木左馬介、武藤左傳次等監造焉、上梁乃梅村彦左衞門家次、紀州良匠刑部左衞門國次者勤之、是歳六月癸未落成、輪奐壯麗、極其美焉、請僧海晏以住、改曰瑞巖圓福禪寺、僧房十餘宇、排之左右、左傍覺月、諸國、寶珠、固岡、大光、聯芳、法雲、其右萬松、江月、青松、傳曲、紹隆、得住、合十區、其地也、靑山環其後、蒼瀛湛其前、寺畔有岩洞、曰法身窟、始祖坐禪于此、左方曰陽德院、右方有天麟圓通二院、寺門左右皆市店也、比屋倶設旅舍、構高樓、望徼茫于檻外、挹幽趣于坐上、水灣繫舟、地曰之類舟汀、右有觀瀾亭、太守遊觀之地也、左有五大尊堂、其東溟渤浮群島、遊眺壯觀之美、豈夫靈隱而已哉、此亦樓觀滄海日、門聽浙江潮、未待駱賓王之句焉、

〔鹽松勝譜三〕瑞巖寺
古稱松島寺、仁明帝承和五年、僧慈覺圓仁草創、開台宗之所也、後龜山帝文應中、平時頼爲僧法身、身本

作心、瑞巖先建設、忌拔者偏中、有法身透得之句、故後人因更之、開無住沙石集、曾虎關元亨釋書、及常州眞壁傳正寺開山牌銘、共作心、再建之、革爲禪刹、名曰圓福寺、籍。。。。。。。屬鎌倉建長、圓覺兩寺、而名緇英衲、相繼居者、九十餘世、經年四百餘歲、而法幢頽廢、殿宇荒壞、前大守貞公伊達正宗○一新之、更名稱青龍山瑞巖圓福寺、隷京師妙心寺、董慶長九年秋八月經始之、越十三年春三月落成、使僧海晏主之、殿宇壯宏、庫齋廚鐘樓鼓樓門廡墉垣悉具體、凡叢林所宜有靡弗備、蔚爲東奧禪刹之冠、而佛殿最麗、壁障金壁、爛絢眩目、落成之日、貞公親手栽五鬣松一株於殿前、且賦國風曰、松島乃、松乃齡毛、此寺乃、末榮奈無、年半布留都門、祝新寺長久也、海晏寂矣、月叟碧堂之諸衲繼席、後義公奉貞公之遺命、召僧雲居、雲居一至、叢規整肅、鐘鼓魚板改觀、義公摸彫貞公之遺容、以安于中殿、祝爲護伽藍神、且以雲居爲中興祖、設其像、其他佛像多矣、就中聖觀自在銅像一軀、僧空海所製、或曰天竺佛圓福古來所奉也、列刹則陽德、天麟、圓通、天童、林泉、映帶、匼匝羽翼焉、枝院十有三、共列門之左右、是古圓福之老衲曾卓小庵以爲終焉之處者、舊在各所、瑞巖造成之後、徙而列于茲云、宗久紀行曰、從鹽浦沿海至松島、漁家蜑戶多有風趣、有寺曰圓福寺、是覺滿禪師所開興、而僧徒百餘人住焉、覺滿者、法身六世之住、非開興之僧、傳聞之誤也、

古自慈覺開台宗、至法身改禪、其間經年已四百年、謂應有賢緇英衲事之可採可徵者也、然世遠事逸、無由考索、今錄自法身以下、迄今傳燈諸衲之名、以備松島事實之考證、若夫欲詳諸衲之事業、乃有延寶傳灯錄、本朝高僧傳等諸書之在、各就其書覽之可矣、勿責此書之不備、

法身圓福開祖　大覺二世　義海三世　覺雄四世　知覺五世　覺滿六世　靈巖七世　千峯八世　中略○

朝鮮梅　在瑞巖寺殿前也、有紅白二株、貞公曾征朝鮮之日所得之種、而瑞巖落成後、令栽于茲云、老幹鱗皴、瘦枝樛曲、其花千葉、一花結五六實、或八九實、初花開之時、花心中有數小蕊、簇發而香氣尤烈矣、范石湖梅譜、陳扶搖秘傳花鏡、所未曾載、實可稱奇品者、

無相窟　一曰法身窟、在瑞巖寺門左也、窟中可坐數十人、昔圓福開祖法身所趺坐也、法身姓眞壁、本

那平四郎、常州猫島邑人、幼喪父母、及長仕州牧、爲事偶不合、牧怒履蹴之、履齒爲折焉、平四郎大慚之、潛懷其履齒去、遂入禪寺爲僧、更名法身、後附商船入宋、見佛鑑於徑山、居九年、遂得法旨歸、而遁居此窟中、初慈覺之開此山也、其徒相繼而居、僧坊數十宇、後多歷年所、坊舍廢壞、緇則凌夷、僧咸巖棲穴處、多無賴者矣、正元文應之際、平時賴微行至于此、時偶黃昏、偏就坊舍乞宿、僧徒惡其禪流、或罵或擯、時賴彷徨、逃遯至此窟、見法身、相傳大喜、爲留窟中數日、歸鎌倉之後、遣兵追台徒、恢興寺宇、延法身尸之、後辭隱南部洞内山中、搆小宇擬之松島、曰圓福寺、今改曰法蓮寺、居數歲、文永癸酉二月朔日、於此寺示化矣、

○下略

〔鹽松勝譜 三〕瑞巖寺 ○中略

子院

法雲庵　在瑞巖寺門左也、以下至得住庵、其瑞巖寺枝院、土人稱之十三塔頭者也、此庵法身六世僧空巖所開基也、空巖名慧覺、覺滿禪師者、庵前有二石、石今藏佛殿中、而一長五尺、幅一尺五寸、一其形三稜、大三尺餘、相傳昔空巖一日急呼曰、咄々火々、使徒灌水、二石自朝至日中而止、問之曰、徑山有災、聊相救耳、後二年徑山以書謝之、且贈以古鈴、鈴今藏於瑞巖庫中、一稱火鈴、其高八寸、徑五寸半、下有裂隙、土人曰、每年正月元日早曉、使一僧鳴之、巡行於里中、以爲禳災之祝、曾執事僧適醉臥仆焉、鈴觸石而散、僧搜之不得、卽巡行徒呼曰、火鈴火鈴、諺蓋生於此時矣、庵中藏空巖像、寧一山題其上曰、超然氣宇不群、參然和煦如春、早年誤飲蘭溪水、老去自看松島雲、婆和中方便、峻嚴裏驗人、強把虛空猶鑿、何曾的是渠眞、如何是渠眞、智海機光著眼節、右松島圓福空巖慧禪師肖像、小師智海求讃、嘉元癸卯末、圓覺一山一寧、

護國庵　在法雲庵東也　龍月庵　在護國庵東也　寶珠庵　在龍月庵東也、舊在寶珠崎、　圓同庵　在寶珠庵東也

雜載

〔一宮巡詣記拔萃 上〕延寶六年六月九日、小野を出、高城村を通り、松島に至り、國主の茶屋雲居の住し瑞岩寺へ立寄、五大堂などを見、夫より小島に渡り見れば、かなたこなた岩を切くづし、石碑を

ひしと立置て、昔の有樣少もなし、

名勝所在　創建堂塔　寺領

輪王寺

輪王寺ハ、陸前國宮城郡仙臺ニ在リ、曹洞宗ニ屬ス、嘉吉元年、伊達持宗、其祖母紀氏(伊達政宗ノ妻)ノ所願ニ依リ、此國伊達郡梁川ノ地ニ、建立スル所ニシテ、僧大庵ヲ以テ開山ト爲ス、後伊達氏ノ移封ト與ニ屢〻移轉セシガ、慶長七年、遂ニ今ノ地ニ遷レリ、

〔和漢三才圖會　六十五陸奥〕輪王寺　在仙臺　禪宗　寺領　東山殿(義政公)息女建立

〔封內風土記　二府城〕金剛寶山輪王寺　在城北、曹洞宗、越後州磐船郡小泉莊杜澤村耕雲寺末寺、傳云、當家十一世天海君、依其祖母蘭庭明玉禪尼所願、後花園帝嘉吉元年辛酉、建寺于伊達郡梁川、請大庵和尚、爲開山祖、號金剛寶山輪王寺、將軍普廣院義敎公、以其外親、奏請之、賜宸筆額、(其額往古燒亡)其後從當家移居、而移轉于同郡西山及羽州米澤、本州會津等處々之地、至後陽成帝天正之季、移于玉造郡岩出山、同帝慶長七年、遷于今地、邦君寄附百四十七石之地、梁川、西山、米澤等之地、各存其遺址、米澤今有號輪王寺精舍、而與當山同、其祖牌、東山帝元祿四年辛未七月廿日、値開基明王禪尼二百五十年之遠忌、肯山君新造營佛殿、禪堂、客殿等、附益僧糧三十六石、以贍香積、且蒙將軍家之台許、兼受永平寺並關東三寺之公帖、肇自此冬、每歲兩期結制、金剛寶山與法輪、固約未來際、

〔仙臺輪王寺略記〕原ヌルニ、夫レ當山ノ開闢ハ、後花園ノ帝嘉吉元年辛ノ酉、先ノ邦君大膳大夫政宗公、鑑號東光寺殿ノ夫人、紀氏(山城國石清水善法寺通清法印ノ女ナリ)ノ所願ニヨリテ、時ノ邦君大膳大夫持宗公、(輪王寺殿ノ令孫ナリ)本州伊達ノ郡梁川ニ、一字ノ精舍ヲ創建シ、大庵和尚(太源和尚七世ノ孫ナリ)ヲ遠ク大和ノ國ヨ

リ懸請シ、開山ノ初祖トシ、スナハチ舊腴ノ地ヲサイテ、香華田トナシ給ヘリ、尋デ公方義教將軍ノ吹擧ニヨリ、カタジケナクモ皇帝陛下、金剛寶山輪王禪寺ノ八字ヲ、宸翰ヲ染テ下シ給ヘリ、是スナハチ義滿將軍ノ大夫人從一位紀氏ハ、輪王寺殿ノ令姉ナルヲ以ノ故ナリ、〔中古ノコロ殿宇大災ニカヽレル〕サテモ宸筆ノ額、マタ灰燼トナレリ、ソノ後紀夫人落飾シテ、法諱ヲ蘭庭明玉禪尼ト號シ、勇猛精進ニシテ、嘉吉二年七月二十日安然トシテ順世シ玉ヘリ、時ニ世壽八十七歳ナリ、大人ミヅカラ當寺ヲ開基シ給ヘルヲモテ、別ニ諡號ヲタテズ、直ニ輪王寺殿ト稱シ奉レリ、是ニヨツテ持宗公第五ノ公子ヲ剃髮セシメ、禪尼ノ菩提ヲトムラハシメ給フ、公子聰敏絶倫ニシテ、明應七年九月十七日當山ノ第二世極堂和尚ニ嗣法シ、第三世ノ住山トナリ玉フ、天初和尚コレナリ、此時ヨリシテ邦内ノ寺院、當山ヲ以テ洞門ノ僧錄司ト鑽仰セシトナリ、〇中略是年〇元祿三年七月二十日、開基輪王寺殿二百五十周ノ遠忌ナルヲ以テ、大守新ニ佛殿、客殿、禪堂ヲ再建シ給ヒ、山主亦檀越ヲ化シテ、衆寮及ビ祠堂ヲ革メ造ル、三月廿一日ニハジマリテ、六月六日ニ落成ス、十五日開堂祝聖ス、〇中略是ノ月十八日ヨリ二十日ニ至マデ、輪王寺殿二百五十年ノ追福ヲ修シ、僧侶二千五百指ヲ供養シ給ヘリ、翌年壬申ノ春、太守僧糧三十六石ヲ附ケマシテ、香積ヲ贍シ玉フ、當山兩度ノ結制、此冬ヨリ始レリ、元祿十二年、新ニ樓門ヲ架ス、太守ソノ盛擧ヲ感喜シ玉ヒ、瓦ヲヤカシメテヨセ賜ハル、同時ニ鐘樓幷ニ兩廊ヲアラタメ造ル、大凡伽藍アルベキ所ノ物、盡ク成就セリ、四方ノ衲子來集シテヤマズ、師齡八旬ニチカケレドモ、諄々トシテ化誘スル事、ウム事ナシ、宗風日々ニ熾ンニ、遠近トモニアフグ、

洞雲寺

名稱 所在 堂塔 寺領

洞雲寺ハ、陸前國宮城郡七北田村ニ在リ、文武天皇慶雲中、僧定慧ノ開基スル所ニシテ、爾來廢、退轉セシカドモ、常ニ再興セリト稱ス、現今ノ堂宇ハ、享保中、僧仙沓ノ造營スル所ナリ、曹洞宗ニ屬ス、

〔封内風土記 三郡邑〕七北田邑、○宮城郡、中略、龍門山洞雲寺、曹洞宗、加州金澤大乘寺末寺、傳云、此地上古有夫婦之異人、男號大菅谷、婦號佐賀野、共紅顏美麗而不老、不知其經幾年、常語五六百年以前之事、其容貌如少年、文武帝慶雲中、號定惠僧來止宿大菅谷家、熟視其所居境內、山高而谿深、泉甘水潔、土地饒肥、草木繁茂、九十九峯圍地九十九谿落南而爲川、其形恰如蓮葉、知其靈地、欲請此地而建寺也、一日語以其事、菅谷夫婦不可曰、吾住此山久矣、不知飢寒之憂、今應其請則恐至失其所、定惠以爲、其所答亦宜也、然如此靈場、徒爲愚夫愚婦之住處、亦非本懷焉、再請曰、然則以予所携錫杖圍其地、借其所及之地、則結庵居之、夫婦許諾曰、錫杖所及之地些少也、當如其請、定惠喜之、與夫婦相誓、以錫杖圍其地、奇哉、其所居之境內、悉爲錫杖所及之地、夫婦無辭乎變其約、與其所居之地、去此地西二十里餘、乃去往本郡根白石邑、居于山間之巖窟、後人呼其地曰堂所、于今有偶見異人矣、定惠乃建立堂塔、號蓮葉山圓通寺、安置觀音像、○中略、嵯峨帝弘仁之比、慈覺大師來中興此寺、自此而後、稱山寺、慈覺所開、凡稱山寺、南部圓通寺、名取郡秋保釋迦堂、此寺、羽州最上立石寺、皆呼之曰山寺、淳和帝天長中、寺邊有富民、其名曰勘新太、土人稱之長者、其妻曰菅美子、容色踰人、寺有美童曰竹阿、一日相見喜之、互通書寄其情歎、遂不果、菅美子恨之、投身瀧原淵、在寺北、忽化爲大蛇、瞋恚之怨念爲火焰、長者第宅悉爲灰燼、竹阿亦投身於寺中之池、化爲毒蛇、此池今曰見池、當此時迅風甚雨、山中震動、三日三夜、寺門之傍、山崩路塞、遂爲大湖、彼雌雄大蛇、潛藏水中、食往來之人、是以人跡絕而爲廢地、自天長中至光明帝曆應元年殆五百年、曆應元年正月加州金澤椙樹林大乘寺三世明峯素哲禪師到東國、二月三日、宿本州名取郡岩沼驛、○中略、其後禪師見領主國分刑部大輔盛胤請曰、愚僧加州金澤大乘寺住僧明峯也今春偶到本

州、留止本郡市名坂邑寶相寺、頃日以法力追大菅谷保大湖之毒蛇、冀賜彼大湖之地、則乾水建寺、盛胤大悅許諾之、乃曆應元年十月、令邑民疏通其所塞、三日之間、湖水盡涸、古昔之寺址顯然、禪師乃建寺、號山龍門、稱寺洞雲寺、老人又來、三拜禪師曰、我幸見禪師、解脫畜生界、其渥恩不堪報謝、數百年前、號定惠僧、始開此山、號蓮葉山、安置觀音像、曰寺圓通、其後兩蛇出而爲湖水、故藏彼觀音像於岩窟、既經五百餘年、今幸禪師再興之、是以授其像、禪師乃造堂於岩窟以安置之、傍造白狐祠祭之、禪師其功已成歸加州、其後無住僧人跡絕、復爲廢寺、梅國祥三和尙、無雙道人、而得天下之名望、後小松帝應永七年、東行到本州、聞此寺無住僧而荒廢、尋來視之、草木繁茂荊棘塞路、堂塔朽頽、狐狼交跡、聊無可居之處、傍有巖窟、乃入坐禪累日、○中略一日和尙見領主國分修理亮盛行、獻雌蛇牙一枚、請中興之事、盛行許之、大興土木、造營七堂及二十四院、寄附百餘町之地、龍月、泉龍兩院、在本庵之左右而安衆、實底兩和尙居之、梅國德光日新月隆、四方僧俗如雲相集、安衆實底兩流、分爲三十餘寺、三十餘寺之末流、不追枚擧、爲末流諸寺院轉衣出世之大道場也、後花園帝文安四年丁卯四月二十一日、梅國告衆曰、我化緣將盡、古人爲法忘身、莫以身當法、乃書一喝曰、七十五年辨西東、如今不要白頭翁、無來無去象無住、放下從來自性空、行年七十五歲、法臘六十一年而示寂、其後堂塔復漸荒廢、二十四院僅存龍月、泉龍江北、江西、景雲、當陽六院、中御門帝享保中、輪王寺前住仙杳和尙、請爲退隱之地、造營堂宇、輪奐復新、寄附百十九石餘之地、寺內神社熊野權現、飯盛五社明神、秋葉權現、荒神、山神、凡五社、其不詳何時勸請、有稱龍門十五境、寺僧傳、曰二十四境、今算之十五境也、

〔奧羽觀蹟聞老志六宮城郡〕洞雲寺

在七北田東北根村、號龍門山、鄉人稱山寺、百一代後小松帝應永七年庚辰、釋祥山所開也、往時有僧房二十四宇、其後荒廢、今所存龍目、泉龍、江北、當陽、瑄溪、龍雲、景雲、積苔、回軒、江西幾餘九區、其地峯回路轉、幽邃寂寞、喬林聳寺門、纔逕入空院、古杉喬松、客稀苔深、惟聞鳥聲山靜、溪音響長、有殘僧、說舊時、

而足以發深省之地也、

其所珍藏、一曰舍利、二曰觀音、三曰紺絲袈裟、相傳應永帝所賜也、四曰香合、五曰菩提樹數珠、六曰鈴、七曰唐畫、八曰蟒牙、九曰靈石、

中尊寺

名稱所在

中尊寺ハ、陸中國磐井郡中尊寺村ニ在リ、藤原清衡ノ建立スル所ナリ、始メ清衡ノ陸奥六郡ヲ管領スルヤ、先ヅ此寺ヲ建テ、白河關ヨリ外ガ濱ニ至ル道路ニハ、處々ニ率都婆ヲ設ケ、子孫相踵ギテ又佛寺ヲ營ミ、居館ノ近傍、堂舍相望ミ、頗ル盛昌ヲ極メシガ、其後檀主ノ滅亡ト與ニ漸ク衰ヘ、今ハ僅ニ光堂等數宇ヲ存スルノミ、天台宗ニ屬ス、

〔奥羽觀蹟聞老志十磐井郡〕中尊寺

在中尊寺村、號關山中尊寺、堀河鳥羽兩朝勅願所也、

〔平泉志下〕關山中尊寺　一山の境内、東西十七町三十間、南北十三町、東は官道を限り、西は戸河内村、南は平泉村、北は衣川村の境を限る、卽ち中尊寺村〇陸中磐井郡にして、近時戸河内村を併せて衣關村と改名せしも、再び戸河内村を別にして、舊に復せり、

創建

〔中尊寺經藏文書〕敬白　奉建立供養鎭護國家大伽藍一區事

三間四面檜皮葺堂一宇在左右廂二十二間　莊嚴　五彩切幡三十二旒　三丈村濃大幡二旒

奉安置丈六皆金色釋迦三尊像各一體

右堂宇、則芝栭藻井天蓋寶綱嚴飾、恊意丹雘、悅目佛像、則蓮眼菓脣、紫磨金色、脇士侍者次第圍繞、

三重塔婆三基　莊嚴　金銅寶幢三十六旒 旒別十二旒　奉安置摩訶毘盧遮那如來三尊像各一體、釋迦牟尼如來三尊像各一體　藥師瑠璃光如來三尊像各一體　彌勒慈尊三尊像各一體

右本尊座前瑜伽壇上、置八供養之鈴杵、立八方色之幡幢、儀軌次第莫不兼備、

二階瓦葺經藏一宇　奉納金限泥一切經一部　奉安置等身皆金色文殊師利尊像一體

右經卷者、金書銀字挾一行而交光、紺紙玉軸合衆寶而成卷、漆匣以安部帙、琢螺鈿以鏤題目、文殊像者濫三世覺母之名、爲一切經藏之主、廻惠眼〇眼下恐脫以字 照見、運智力以護持矣、

二階鐘樓一宇　懸廿鈞洪鐘一口

右一音所覃、千界不限、拔苦與樂、普皆平等、官軍夷虜之死事、古來幾多、毛羽鱗介之受屠、過現無量、精魂皆去他方之界、朽骨猶爲此土之塵、每鐘聲之動地、令寃靈導淨刹矣、

大門三宇　築垣三面　反橋一道廿一間　斜橋一道十間　龍頭鷁首畫船二隻　左右樂器

大鼓舞裝束卅八具

右築山以增地形、穿池以貯水脈、草木樹林之成行、宮殿樓閣之中度、廣樂之奏、歌舞、大衆之讃佛乘、遂爲徼外之蠻陬、可謂界內之佛土矣、

千部法華經　千口持經者

右弟子運志、多年書寫之、僧侶同音、一日轉讀之、一口充一部、千口盡千部、聚蚊之響尙成雷、千僧之聲定達天矣、

五百三十口題名僧

右揚口別十軸之題名、盡五千餘卷之部帙、安手捧持、開紐無煩、以前善根旨趣、偏奉爲鎭護國家也、所以者何、弟子者東夷之遠酋也、生逢聖代之無征戰、長屬明時之多仁恩、蠻陬夷落爲之少事、虜陣戎庭

堂塔

爲之不虞、當于斯時、弟子苟賚祖考之餘業、忝拈伊四之上頭、出羽陸奥之土俗如從風草、嵩愼挹葉之海蠻、類向陽葵、垂拱寧息三十餘年、然間時享歳貢之勤、職業無失、羽毛齒革贄、參期無違、因茲乾僖頻降、遠優奉國之節、天恩無改、已過杖鄕之齡、雖知運命之在天、爭忘忠貞之報國、憶其報謝、不如修善、是以調貢職之羨餘、抛財幣之涓露、占吉土而建堂塔、冶眞金而顯佛像、經藏鐘樓大門大垣、依高築山、就窪穿池、龍虎協宜、卽是四神具足之地也、蠻夷歸善、豈非諸佛摩頂之場乎、又設萬燈會、供十方尊、薰修定遍法界、素意盡成、悉地捧其全分、奉祈禪定法皇蓬萊殿上日月之影鎭遲、功德林中霧露之氣長賫、金輪聖王、玉扆無動、太上天皇寶算無頤、國母仙院、麻姑比齡、林盧桂陽、松子伴影、三公九卿武職文官、五畿七道萬姓兆民、皆樂治世、各誇長生、爲御願寺、長祈國家、區々之誠、天高聽卑、綸綍依請、供養遂思、寶暦三年靑陽三月、曜宿相應、支干皆吉、延啒一千五百餘口僧、讃揚八萬十二一切經、金銀和光、照弟子之中誠、佛經合力、添法皇之上壽、弟子生涯、久浴恩德之海、身後必詣安養之鄕、乃至鐵圍破界、胎卵濕化、善根所覃、勝利無量、敬白、

天治三年三月廿四日　　弟子正六位上藤原朝臣清衡敬白

件願文者、右京大夫敦光朝臣草之、中納言朝隆卿書之、而有不慮之事、及紛失之儀、爲擬正文、忽染疎毫耳、

鎭守大將軍（花押〇北畠顯家）

〔奥羽觀蹟聞老志十磐井郡〕中尊寺

釋迦堂　安一百餘體金容、卽釋迦像也、　兩界堂　兩部諸尊皆爲金色木像也、　二階堂　高五丈、本尊長三丈、金色彌陀、脇侍九體、丈六也、按、右三區、及佛像、今已亡、　金色堂（今見經藏地、）　上下四壁內殿、皆金色、堂內構三檀、悉螺鈿也、安阿彌陀三尊、二天、六地藏、定朝作、立、（是乃、天仁二年己丑所藏三代尸者是也、）按、金色堂、如今土人所謂光堂者是也、在經堂東南、堂柱名圖胎藏界大日十二軀、彫螺鈿細紋、堂內壺

金色、中佛三壇、各上置佛像、壇下皆三代之屍也、左壇乃塚基衡、右塚秀衡、前壇清衡也、後水尾帝寛永中、黄門君時修補之、次令人發而點撿焉、清衡棺長六尺、廣二尺、裹之以白綾、漆其上、納雄劍一口幷鎭守府將軍印璽、基衡裹之以白絹、朱其上、襯白衣、表錦袍、秀衡亦同之、藏和泉三郎忠衡函首、高二尺、方一尺五寸、黒漆、壇上佛像、中立者彌陀、是乃定朝所作、觀音勢至、相並于其前、多門持國兩立、六地藏擁後、其雲慶所造也、今晤與東史記合、其他今所藏有藥師二軀、其丈六、有大日一軀、其運慶所造、外有珍藏者、一曰秀衡擊刀、長一尺六寸、廣一寸二分、二曰用大刀(誤、衡府太刀者)長一尺六寸、出秀衡棺中、三曰義經自殺刀(長九寸五分)

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月十七日甲戌、清衡已下三代造立堂舍事、○中略

寺塔已下注文曰(衆徒注申之)

一關山中尊寺事

寺塔四十餘宇、禪坊三百餘宇也、

清衡管領六郡之最初、草創之、先自白河關至于外濱廿餘箇日行程也、其路一町別、立笠率都婆、其面圖繪金色阿彌陀像、計當國中心、於山頂上立一基塔、又寺院中央有多寶寺、安置釋迦多寶像於左右、其中間開關路、爲旅人往還之道、次釋迦堂、安一百餘體金容、即釋迦像也、次兩界堂、兩部諸尊皆爲木像、皆金色也、次二階大堂、(高五丈、本尊三丈、金色彌陀像、脇士九體、同丈六也、)次金色堂、(上下四壁、内殿皆金色也、堂内構三壇、悉螺鈿也、阿彌陀三尊、二天、六地藏、定朝造)之、鎭守即南方崇敬日吉社、北方勸請白山宮、此外宋本一切經藏、内外陣莊嚴數宇樓閣不遑注進、凡清衡在世三十年之間、自吾朝延暦園城、東大興福等寺、至震旦天台山、毎寺供養千僧、臨入滅年俄始修逆善、當于百箇日結願之時、無一病而合掌、唱佛號、如眠閉眼訖、

一毛越寺事

堂塔四十餘宇、禪房五百餘宇也、

基衡建立之先、金堂號圓隆寺、○中略
秀衡建立之、其堂內四壁扉、圖繪觀經大意、加之秀衡自圖繪狩獵之體、佛者阿彌陀丈六也、三重寶塔
院內莊嚴、悉以所摸宇治平等院也、
一無量光院號新御堂事
一鎭守事
中央總社、東方日吉、白山兩社、南方祇園社、王子諸社、西方、北野天神、金峯山、北方、今熊野、稻荷等社也、
悉以摸本社之儀、○中略
一館事秀衡
金色堂正方、並于無量光院之北、構宿館、號平泉館西木戸、有嫡子國衡家、同四男隆衡宅、相並之、三男忠衡
家者、在于泉屋之東、無量光院東門、構一郭、號加羅御所秀衡常居所也、泰衡相繼之、爲居所焉、

〔源平盛衰記 四〕白山神輿登山事
鳥羽院御時、平泉寺ヲ以圓成寺ヘ被付由、其聞エ有シニ、山門ノ衆徒騷動シテ、奏狀ヲ捧テ訴申、非
據之亂訴也ケレ共、院宣ニハ歸依不淺、遂ニ以非爲理、所被裁許也、トゾ仰下サレケル、

宗派

〔中尊寺古文書 平泉末寺所引〕陸奧國平泉關山中尊寺者、從往古、佛法紹隆之勝地、台宗弘通之淨砌也、雖然
本寺未相定之間、請屬東叡山直末、因玆、今般被召加御門下訖、者、自今以後、不背本寺之下知、佛事勤
行等、不可有怠慢旨、依輪王寺宮一品法親王之仰、執達如件、

寛文五年十二月五日　住心院判
圓覺院判

中尊寺

寺領

〔中尊寺經藏文書 一〕鳥羽院御願

關山中尊寺金銀泥行交一切經藏別當職事

僧蓮光所

所領骨寺、（磐井郡有之）御堂出入料田、漆段、屋敷一所、（瀬原有之）燈明料屋敷肆所内、（北谷赤岩兩所藏有之、瀬原村有之、）毎日御佛供料白米二斗、可入銅鉢二之、自高御倉可被取請之、

毎月箱掛料上品絹一疋、白布一段、自御改所可被取請之、

毎月毎御佛事請僧一口、可被請定、

毎年正月修正二季彼岸懺法、毎月文殊講、彼以骨寺田畑一向可募之故也、是偏聖朝安穩御祈禱無懈怠可令勤仕、右件於自在房蓮光者、爲金銀泥行交一切經奉行、自八箇年内書寫畢、依之且爲奉公、且爲器量、故御經藏別當職所定也、就中令寄進蓮光住古私領骨寺、然間限永代任蓮光相傳致御經藏別當并骨寺者、不可在他人妨、仍可令寺家宜承知之狀如件、

天治三年丙午三月廿五日　俊慶判

金清覺判

坂上季隆判

藤原清衡朝臣判

（中尊寺經藏文書一）鳥羽院御願

關山中尊寺御經藏所領骨寺内寵居雜人等事、早於彼雜人等者、還本住所可成安堵思也、但限骨寺內境、東者鎰懸、南者岩井川、西者山王岩屋、北者峯山堂之末、限馬坂、雖於境者可限永堺也、仍所被仰下、執達如件、

文治五年九月十日　觀養奉押

（中尊寺古文書平泉志所引）文治壁書

平泉內寺領者、任先例所寄附也、堂塔縱雖爲荒廢之地、至佛性燈油之勤、地頭等不可致其妨者也云云、○中略

文治五年九月十七日　親能

〔吾妻鏡九〕文治五年九月十日丁卯、今日奧州關山中尊寺經藏別當大法師心蓮參上于二品御旅店、愁申云、當寺經藏以下、佛閣、塔婆、淸衡雖草創之、忝爲鳥羽院御願所、年序惟尙、被寄附寺領、又所被募置御祈禱料也、經藏者、被納金銀泥行交一切經、於事嚴重靈場也、然者始終無牢籠之樣可被定歟、次當國合戰之間、寺領土民等怖畏逐電、早可令安堵之旨欲被仰下云云、則召件僧於御前、淸衡、基衡、秀衡三代間、所建立之寺塔事、尋聞食之、分明報申之上、可注進巨細之言上、仍先經藏領骨寺境四至、東鎰懸、西山王嶺、南岩井河、北峯山堂馬坂也、被下御奉免狀、逐電土民等還住本所之由被仰下云云、散位親能奉行之、　十一日戊辰、平泉內寺寺住侶、源忠已講、心蓮大法師快能等參上、仍寺領事、淸衡之時募置勅願圓滿御祈禱料所之上、向後亦不可有相違之由賜御下文、寺領者、縱雖爲荒廢之地、不可致地頭等妨之旨被載之云云、　十七日甲戌、淸衡已下三代造立堂舍事、源忠已講、心蓮大法師等注獻之、親能朝宗覽之、二品忽催御信心、仍寺領悉以被寄附、可令募御祈禱云云、則被下一紙壁書、可押于圓隆寺南大門云云、衆徒等拜見之、各全止住之志云云、其狀曰、

平泉內寺領者、任先例所寄附也、堂塔縱雖爲荒廢之地、至佛性燈油之勤者、地頭等不可致其妨者也者、

〔中尊寺古文書平泉志所引〕承元四年下知狀

陸奧國平泉保伽藍等興隆事、故有幕下御時任本願基衡等之例、可致沙汰之旨、被殘御置文之處、寺塔近年破壞、供物燈明以下事、已斷絕之由、寺僧各愁申、仍廣元奉行、如故不可有懈緩者也、

承元四年五月廿五日　奉行廣元

弘長三年、六口料下知狀、

鳥羽院御願所

平泉毛越寺圓隆寺、六口供僧、三十六丁、口別六丁、柏崎之內、右之地頭四方田左衞門尉景綱父子、四十四年令押領彼領、被附供僧畢、

弘長三年八月六日　奉行維賀彌治郞

〔中尊寺古文書平泉志附錄所載〕寺領之事

一、當州之刺史大膳大夫時行、兩寺巡禮之時、爲佛餉燈油之料所、毛越寺者、柏崎七箇村、中尊寺者、瀨原、黑澤、白濱三箇村被爲寄附云云、

一、鳥羽院御願所、平泉毛越寺圓隆寺、六口供僧、三十六町、口別六町、六口柏崎之內、右之地頭四方田右衞門尉景綱父子、四十餘年令押領、被六供近年訴申之刻、被改押被附供僧畢、

奉行維賀彌次郞

〔平泉志附錄〕平泉領之事

一貳貫四百三拾九文　院主坊　一壹貫六百九拾壹文　西谷坊　一壹貫九百六拾八文　竹下坊

右於磐井中尊寺村、都合六貫九拾八文之所寄附し訖、目錄在別紙

寛永廿一甲申年八月十四日　黑印〇伊達忠宗

平泉坊中

〔義經記七〕へいせんじ御見物の事

よこ道なれ共、いざや、たう國に聞えたる、へいせんじを拜んと仰ける、その〳〵心えず思ひけれども、仰なれば、さらばとて、へいせん寺へぞか丶られける、その日は、雨ふり風ふきて、せけんもい

とゞものうく步にたどる心ちして、へいせんじのくわんをんだうにぞつき給ふ、大しゆども、是を聞て、長吏のもとにぞつげたりける、政所のせいをもよほして、寺中と一とうになりて、せんぎしけるは、當時關東は山ぶしきんせいにて候に、此山伏は、たゞ人とも見えず、判官は、大津、さかもと、あらちの山をもとをられて候なり、よせてみばや、いかさまにも、是は判官にておはすると覺え候とせんぎす、尤とて大しゆ出たつ、かのへいせんじと申は、山門のまつ寺なり、さればしゆとの規則も、山上にをとらず、大しゆ二百人、政所のせいもひたかぶとにて、夜半ばかりにくわんをんだうにぞをしかけたる、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月十七日甲戌、淸衡已下三代造立堂舍事、〇中略

一年中恒例法會事

二月常樂會　三月千部會、一切經會、　四月舍利會　六月新熊野會祇園會　八月放生會　九月仁王會

講讀師、請僧或三十人、或百人、或千人、舞人三十六人、樂人三十六人也、

一兩寺一年中問答講事

長日延命講　彌陀講　月次問答講、正、五、九月、最勝十講等也、

〔奧の細道〕十二日〇元祿二年五月平和泉と心ざし、〇中略戸伊摩といふところに一宿して平泉に至る、其間廿餘里程とおぼゆ、三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有、秀衡が跡は田野に成て、金鷄山のみ形を殘す、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入、康衡等が舊跡は、衣ヶ關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり、偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる、國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ、〇中略兼て耳驚かしたる二堂開帳す、經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊

名稱　所在　創建

の佛を安置す、七寶散らせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て既に頽廢空虚の叢と成べきを、四面新に圍て、甍を覆て、風雨を凌ぐ、暫時千歳の紀念とはなれり、

五月雨のふり殘してや光堂

毛越寺

毛越寺ハ、鳥羽天皇ノ勅願ニシテ、藤原基衡ノ建立ナリ、本尊阿彌陀佛ハ、佛師雲慶ノ作トス、今廢寺ニシテ、舊地ハ陸中國磐井郡毛越村ニ在リ、

〔奥羽觀蹟聞老志 十磐井郡〕毛越寺址

其址在毛越村中、號醫王山毛越寺、是亦鳥羽帝勅願所、基衡建之、復酷極富麗、正親町帝天正元年癸酉、爲野火燒亡、後盡荒廢、纔餘班神叢祠、(班一作摩多羅)社中藏雲慶作彌陀熊野像八躯、往時三山神象也、

東史曰、堂塔四十餘宇、禪房五百餘宇、基衡建之、

其址在嘉祥寺址北、今荒廢、九間四面石礎猶存、外爲池塘、綠水滮々、金堂、五階塔、南大門、(六間八間)三區址在其傍、

東史曰、金堂號之圓隆寺、○中略

講堂　藏胎藏界大日、今已廢、　常行堂　在班神祠下、其堂荒廢、舊地乃今柳坊舍是也、　法華堂　藏千手像二十八部衆慈覺作、今已亡、　二階總門　鐘樓　鼓樓　經藏　元龜四年燒亡是歳改元天正

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月十七日甲戌○中略

一毛越寺事

堂塔四十餘宇、禪房五百餘宇也、

基衡建立之先、金堂號圓隆寺、鏤金銀、継紫檀赤木等、運萬寶、交衆色、本佛、安藥師丈六、同十二神將、(雲慶作之、佛菩薩像、以玉入眼事、此時始例、)講堂、常行堂、二階總門、鐘樓、經藏等在之、九條關白家、染御自筆、被下額、參議敎長卿書堂中色紙形也、

此本尊造立間、基衡乞支度於佛師雲慶、雲慶注出上中下之三品、基衡令領狀中品、運功於佛師所謂金百兩鷲羽百尻、七間々中徑水豹皮、六十餘枚、安達絹千疋、希婦細布二千端、糠部駿馬五十疋白布三千端、信夫毛地摺千端等也、此外副山海珍物也、三箇年終功之程、上下向夫、課駄、山道海道之間、片時無絶、又稱別祿、生美絹積船三艘送之處、佛師抃躍之餘、戲論云、雖喜悅無極猶練絹大切也云云、使者奔歸、語此由、基衡悔驚亦積練絹於三艘、送遣訖、如此次第達鳥羽禪定法皇叡聞、令拜彼佛像御之處、更無比類、仍不可出洛外之由被宣下、基衡聞、心神失度、閉籠于持佛堂、七箇日夜斷水漿、祈請愁申子細於九條關白之間、殿下令伺天氣給、蒙勅許、遂奉安置之、次吉祥堂本佛者、奉摸洛陽補陀洛寺本尊(觀音)生身之由有託語、爲嚴重靈像之間、更建立丈六觀音像、其內奉納件本佛也次千手堂木像廿八部衆、各鏤金銀也、鎮守者、總社金峯山、奉崇東西也、次嘉勝寺、(未終功之以前、基衡入滅、仍秀衡遂之畢、)四壁幷三面扉、彩畫法華經廿八品大意、本佛者、藥師丈六也、次觀自在王院、(阿彌陀堂)基衡妻(宗任女)建立也、四壁圖繪洛陽靈地名所、佛壇者銀也、高欄者磨金也、次小阿彌陀堂、同人建立也、障子色紙形、參議敎長卿所染筆也、

正法寺

正法寺ハ、陸中國江刺郡黑石村ニ在リ、光明天皇貞和四年、僧良韶ノ開基スル所ナリ、此寺七

名稱　所在　創建　堂塔

寺職

室伽藍ヲ備ヘ、越前永平寺、能登總持寺ト相並ビテ、曹洞三區本寺ト稱セラル、今曹洞宗中本寺タリ、

〔奧羽觀蹟聞老志 十江刺郡〕黑石精舍

在黑石村、號大梅拈華山圓通正法寺、光明帝貞和二年、釋道元六世無底良韶開基也、其地備七堂伽藍、以越前吉祥山永平寺、能登諸岳山總持寺、並此地、爲曹洞三區本寺、佛殿安如意輪像、長一尺八寸、佛工春日所造、釋迦、文殊、普賢、當麻作、客殿彌陀如意輪、安阿彌作、有影堂鐘樓、天井蟠龍狩野氏所畫、建白山、熊野、山神、愛宕、黑石明神小社、以爲鎭守、寺前有古梅樹、横斜蟠根尤可愛、

〔封内風土記 二十二江刺郡〕黑石邑 中略〇 大梅拈華山圓通正法寺、曹洞宗、能州總持寺末寺、傳云、光明帝貞和四年、無底良韶和尙開山、邦君寄附七十五石之地、中略〇 院中古來多珍藏、愛染像長一尺五寸、毘首羯磨作、釋迦左右十六羅漢畫軸雪舟筆、飛龍觀音雪村筆、觀音左右林泉牧溪筆、開山自畫贊像、中略〇 山中佳境花立板（寺院西北十町餘）連臺嵩（寺西七八里、峯頭有石臺、其石白石英）瑞鹿基（寺南一町餘、往古有白鹿、常遊其間相馴）長江流（寺前溪流）黑石巖（寺西北三里餘、有巨石、其色黑乃如漆）菩提坂（寺西北二里餘）靈犬塚（寺前以南一町餘、瘞開山所畜之犬）蛇形石（在佛殿前、形酷恰似伏蛇）瑞鳥峯（靈犬塚南有古杉、三法鳥常來啼）水晶山（寺南五里餘、山上多水晶、所謂白石英也）怪石巖（山坂多異石）寺中有古杉、號老婆杉、不知經幾星霜、根圍二丈二尺餘、寺中又有生虎斑竹及胡粉地、（本文按觀迹聞老志、名跡志共爲貞和二年開山、且良韶作良昭誤矣、）

〔全國各宗本山明細帳〕禪曹洞宗　中本寺　正法寺（陸中國江刺郡黑石村）

〔日本洞上聯燈錄 二〕總持峩山紹碩禪師法嗣

奧州拈華山正法寺無底良韶禪師、姓藤氏、能州酒井保人也、年過弱齡、深厭世相、二十二歲、遂投洞谷明峯室得度、俾參香嚴上樹活、師功夫逼切脇不至席二年餘、一夜定中有省、徑詣伸所悟、峯曰、此則暫

時光影、更須知有向上事在、參峩山於總持、傾誠扣請、一日聞堂前板聲、豁然契悟、趨叩壽室曰、良詔奧觀音大士同圓通、山曰、作麼生是同底、師曰、明頭暗頭遊戲自在、山頷之、付以寶鏡三昧及法衣、時曆應四年七月十日也、師辭去、遊方抵于東奧江刺、有村名黑石、擧目則衆巒岧嶤、有淴流激出、寔絕境也、師結茆而居焉、長部近江守重義、黑石越後守正競、端其道迎接諮詢法要、革所居營梵宇、號曰拈華山正法寺、貞和戊子四年、進院開堂、江湖學子川奔遂成叢席、文和四年、移洞谷、明年謝事歸、康安元年六月十四日集衆擧座唱偈、泊然而逝、壽四十九、臘二十八、塔于本山

永德寺

永德寺ハ、陸中國膽澤郡永德寺村ニ在リ、後光嚴天皇延文元年僧道叟ノ開基スル所ニシテ奥羽兩國曹洞宗ノ本寺タリ

〔新撰陸奧風土記 四佛寺〕膽澤郡

一報恩山永德寺　膽澤郡永德寺村に有

後光嚴院延文元年、道叟和尙開山、奥羽兩國曹洞宗の本寺にして、門葉凡四百八寺、

〔封內風土記 十九膽澤郡〕永德寺邑 ○中略 報恩山永德寺、曹洞宗、能州總持寺末寺、傳云、後光嚴帝延文元年、道叟和尙開山、奥羽兩國曹洞之本寺而門葉凡四百八寺、後圓融帝應安五年蒙勅許、至後陽成帝慶長中、使門丁長老轉衣葛西家、柏山家、各有寄附之地、貞山君 ○伊達政宗 受封之後、如先規尊敬、東限膽澤川、南限川上箕輪大步御前淵長十八町西自山中公林域、北至北澤山道、橫六町禁斷殺生、有君之黑印及執政連署制札、寺庫藏寶劍一振、有號劍池、長二間、橫一間半、

〔日本洞上聯燈錄 二〕總持峩山紹碩禪師法嗣

名稱　所在　寺格　用途

奥州報恩山永德寺獵叟道受禪師、世姓平氏、羽州秋田人也、資生沈靜、負出塵之志、登春山、依師薙度、受滿分戒、習止觀、二十四歲、捨所業、徧參叢林、至北能、時峨山總持師往禮謁乃歎伏曰、此眞吾師也、誓攝衣從之、晨昏敲磕、晝忘寢餐、文和四年春、山令師入室、付以所傳法衣拂子從上相承圓、且囑曰、汝緣在東奥、時至矣、速行莫滯、此師辭去、路詣鷹尾觀音、尊總行道興隆、逾七晝夜、一夕夢大士與一劍、告曰、爾今遊師命東邁、善哉、應隨吾劍栖止、莫他遊、覺而感喜、適寓奥之膽澤郡、一日遊膽澤川、見向所夢之劍浮水去、喜取之、誓曰、神劍不邪、重有靈應、投之於淵、頃刻之間、見劍沂流留一山之下、就此縛茅而居焉、郡主伊勢權守柏山氏、欽御師風、迎接、深契玄旨、延文改元、創一蘭若、山名報恩、寺號永德、捨膏腴之地、以充寺產、寺累石正法寺廬庵、檀護長部氏堅請師住持、師遁應之、後詣津輕之台浦、愛其風景、建寺號高澤、亦爲開山之祖、康曆元年己未九月十三日、無疾端然坐蛻、門徒開維塔於報恩山十成院、嗣法六人、曰月庵、湖海、天產、圓成、圓泰、無著、

極樂寺

極樂寺ハ、陸奥國ニ在リ、文德天皇天安元年、定額寺ト爲ル、後世廢絶シテ、其所在ヲ失ス、

〔文德實錄九〕天安元年六月壬〇壬一本作戊辰、在陸奥國極樂寺預定額寺、充燈分幷修理料稻千束、墾田十町、

靈山寺

法隆寺　觀音寺　瑜伽寺
長安寺　併入

靈山寺ハ、羽前國最上郡ニ在リ、淸和天皇貞觀九年定額寺ニ列ス、今廢寺ニシテ其舊地ヲ詳

名稱 所在 寺格　法隆寺　觀音寺　瑜伽寺 長安寺

名稱 所在　創建 宗派 寺領

ニセズ、

法隆寺ハ、文德天皇齊衡三年ニ、觀音寺ハ、貞觀七年ニ、瑜伽寺ハ、同八年ニ、長安寺ハ、同九年ニ、定額寺ニ列ス、並ニ出羽國內ニ創建セラレシカド、今廢絕シテ其所在ヲ失ス、

○

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十二月廿九日甲午、出羽國最上郡靈山寺預之定額寺、

〔文德實錄八〕齊衡三年三月壬子、以出羽國法隆寺預於定額、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年五月八日戊子、以出羽國觀音寺預之定額、

〔出羽國風土略記一凡例〕一三代實錄貞觀八年九月八日條下、以出羽國瑜伽寺預定額云々、同九年十月十五日、○五恐三誤 出羽國長安寺預定額云々、此二寺在所未考、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年九月八日庚戌、以出羽國瑜伽寺預之定額、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十月十三日戊寅、出羽國長安寺預之定額、

慈恩寺

慈恩寺ハ、羽前國村山郡慈恩寺村ニ在リ、神龜年中、波羅門僧正ノ開基スル所ト稱ス、天台眞言二宗ヲ兼ネテ、寺領二千八百餘石ヲ有セリ、

〔和漢三才圖會六十五出羽〕慈恩寺　在白岩近處○同眞言　本堂觀音(左有弘法大師釋迦堂、右有彌陀藥師不動堂、)　二王門

〔日本地誌提要三十四羽前〕佛寺　慈恩寺同郡(村山)慈恩寺村、眞言宗、僧菩提開基、神龜元年甲子創建、寺域四萬千八百八拾五坪餘、域內二拾三寺アリ、○下略

〔出羽國風土略記十最上郡〕慈恩寺

白岩近所に有、婆羅門僧正、神龜元年開基とぞ、台密兩宗を兼、熊野神社を鎭守とす、御朱印貳千八

百拾貳石三斗餘、兩學頭幷衆徒十餘院、是を配當す、

〔寺鑑上天台宗〕御朱印高貳千八百拾貳石三斗餘之內、高六百八拾七石餘、配當、

羽州最上慈恩寺　最上院

右住職子孫讓、住職御禮無之、年頭御禮、御白書院御次一同、御暇無之、獻上一束一卷、

但慈恩寺と申は、一山之總寺號ニ而、別ニ慈恩寺と申寺無之候、最上院者、天台宗東叡山末、花嚴院者山城國仁和寺末、寶巖院者高野山龍光寺末ニ而、三ヶ寺輪番ニ、年頭御禮申上ル、

名勝所在

立石寺

立石寺ハ、羽前國村山郡山寺村ニ在リ、天台宗ニ屬ス、淸和天皇貞觀二年僧圓仁ノ開基ト稱ス、山中奇石ニ富ミ、風景ノ絕勝ヲ以テ著ハル、

〔和漢三才圖會六十五出羽〕寶珠山立石寺　在最上中野　天台　寺領千四百二十石　開基　慈覺大師
本堂藥師　寺舍十二坊　堂塔多寶物數多　堂後有淸泉慈覺大師所出　八町上有奧院

〔出羽國風土略記十村山郡〕寶珠山立石寺

山形の東北三里計に有、所を山寺村といふ、此寺の境內に、怪岩穴洞の奇景詞に絕たり、中に立聳たる石あり、故に一山の寺號を立石寺といふ、天台宗にして、院室衆徒也、山內に寺家十八ヶ寺有、寺領千四百廿石、代々將軍家々御朱印を被下、守護不入の御文言有とぞ、往古は三百八十石の庄園有しと、山寺狀といふものゝ端に見へたり、同書序文に、出羽國最上村山郡有名山、曰寶珠山立石寺、世俗呼曰山寺慈覺大師奉淸和帝勅、貞觀二年、所創開也、云々、○中略士俗奧の高野といふ、諸人卒都婆を立、碑を立、永世を期する所とぞ、

〔立石寺文書〕立石寺出羽國、

謹案、當寺建立之濫觴、群徒安全之勝依怙、無過此靈嶋、其慈覺大師本願意述之旨、貞觀二年十二月晦日之御記文詳也、誰不敬之、何可疎之乎、抑此寺之常燈者、當初被移根本中堂之燈火訖、尋彼源、横三國傳來、竪三世不滅之熾盛光也、三火如次、天地人所現、過現當來照曜之慈燈、誠以廣大者哉、爰當劇亂之便風、燈炬消盡云々、太以悲歎之至極也、爭無相續之誘哉、因茲逐舊貫、今所奉移本山之眞火也、此是挑三火一燈、古來無替、自今以後無退轉者、先自國安泰而住民增巨益、他境歸悲願而貴賤預利生而已、

天文十二年癸卯六月五日　執行權大僧都法印大和尚位永實在判

座主二品法親王大和尚位尊鎭在判

〔陸奥千鳥〕寶珠山阿所川院立石寺、所の者は、山寺といふ、城下より三里、慈覺大師開基、山の頂上より曲峒の立石、碧落に登て雲頭を蹈む、嶮難百折の靈地、仍立石寺と名付け給ふ、

對面石、文珠堂、藥師堂、毘沙門天傳教大師、金剛鰐口、是は主護義光朝臣寄進也、清和天皇御廟、三王權現、三月二十五日祭禮、近郷氏神、常行念佛堂、此本尊彌陀、御手洗、則阿所川、御枕石、眞似大師御手掛石、無手佛、半途に十王奥院三十番神、十羅刹女、獨鈷水、骨堂、寶藏、胎内潜、十王堂、釋迦堂、卯ノ松、慈覺堂、經堂、五大堂、白山堂、地藏堂、不動堂、十八坊、天狗岩、タチャ川、

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲　芭蕉

山寺や人追ひかゝる蔦かつら　仙化

山寺や蔦も榎木も皆古風　風仙

山寺や岩にまけたる雲の峯　桃隣

〔寺格帳〕上天台宗、高千四百貳拾石日光安居院兼帶故、別段御禮無之、　羽州立石寺○中略

右拾三ヶ寺之寺院住職、從二御門主一被二仰渡一、

一入院御禮無之

一年頭御禮、御白書院、獻上一束一本宛、持參之御禮、

寺領

〔立石寺文書〕立石寺常灯斷絶之間、今度爲二油田一、重澄之鄕之内に畑仁貫八百五十地、於二末代一令二寄附一候、衆中無二如在一可レ被レ挑二法灯一事肝要候、仍爲二後日一之狀如件、

天正十四年丙戌正月一日　　高楡小僧丸

義光（花押）

立石寺衆徒中

〔寛文四年御朱印帳天台宗〕千四百二十石　出羽 慶安元年七月十七日　立石寺

寺制

〔立石寺文書〕謹言上

義光於二本懷一者、立石寺於二一山中一、他宗住居之儀、不レ可レ有レ之候、其上諸篇感德院樣、我々以二談合一、可二相調一之旨、不レ可レ有二相違一候、依如件、

義光（花押）

立石寺

永祿拾三かのとむま年正月吉日

〔立石寺文書〕出羽國最上郡寶珠山立石寺法度之事

一爲二末寺一不レ可レ違二背本寺之命一、尤一山之僧徒、可レ隨二學頭之下知一事、

一諸法事可レ勤二清僧一、付持戒之僧衆之上、不レ可レ有二妻帶一之事、

一知行之儀者、隨二法事之役一、可レ有二其高下一之事、

一自今以後、空房之儀、可レ爲二學頭之計一之事、

一山中不ㇾ可ㇾ置二他宗一之事

一寺内之山林、猥不ㇾ可二切取一、但住山之人者、受二學頭之内儀一、可ㇾ辨二所用一之事、

一一山之僧俗企二公事一、不ㇾ可ㇾ致二一烈一(列○烈恐假借)之事、

右堅可ㇾ相二守此旨一者也、仍如ㇾ件、

元和四年(戊午)五月吉日　山門探題大僧正天海(○花押)

最上源五郎(○花押)

〔立石寺文書〕(關東)立石寺院主別當兩職注記金剛杵田等、可ㇾ令二領掌一之由、依ㇾ仰下知如ㇾ件、

正慶元年十一月廿四日　右馬權頭(在判)

相模守(在判)

立石寺識乘坊

(國宣)立石寺院主別當兩職、爲二譜代相傳所職一之上者、管領不ㇾ可ㇾ有二相違一之由、國宣所ㇾ候也、仍執達如ㇾ件、

元弘元年十月三日　前長門守國統

立石寺識乘坊

(綸旨)立石寺院主別當兩職、與二圓阿闍梨領知一、不ㇾ可ㇾ有二相違一者、天氣如ㇾ此、悉ㇾ之以ㇾ狀、

建武元年十二月八日　宮内卿(在判)

(將軍家)出羽國立石寺院主職(并)別當職任二先例一可ㇾ令二領知一之狀如ㇾ件、

建武三年十二月八日　御判

立石寺識乘坊口竹御房

〔奧の細道〕山形領に立石寺と云山寺あり、慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地也、一見すべきよし、人々のすゝむるに依りて、尾花澤よりとつて返し、其間七里ばかりなり、日いまだ暮ず、杜下の坊

に宿かり置て、山上の堂にのぼる、岩に巖を重て山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑に、岩上の院院扉を閉ぢて、物の音きこえず、岩をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心すみ行のみおぼゆ、

閑さや岩にしみ入蟬の聲

〔漫遊文草三〕游奥暦下卷

余〇平澤元愷初期前月歸于學院、而風逆于三厩、馬盥于牡丹水、雨稽于象潟、今猶在途、歸思日急、上丁亦不遠、然寶山在目、豈徒望而過乎、初三乃游立石寺、寺在天童驛西、停午抵天童、折而西二十餘里、係馬於山下、而登路陡而嶮岨、磴道羊腸六七里、乃抵中堂、僧慈覺所剏、古跡皆以大師立號、可厭矣、古人有云、勝槩多爲釋徒所占、信然、然亦娼嫉之言耳、若令不有佛寺乎、高山之顚誰能尋討、況復文物風流歸于釋徒久矣、此山在僻地而聞、從覺而昉爾、覺取寂於此、其室曰入定窟、板覆而不見、蓋面開二小孔、如眼、覺猶有不能忘者耶、寺所珍藏、皆其所攜來、有呼做獨鈷者、形似石鉞、非鈷、又非佛器、可疑也、但立石寺倉印、篆法奇古、乃請而摸寫以證此游、覽畢南下孤峯嶄起于萬仞之谷、問其名而不知、就而求緣起無有、寺僧如啞如聾、但健歩先行耳、峯下途窮而梯、梯長三弓、乃躡斷岩登而俯臨、不知其深、梯搖動脚軟々、梯盡處岩角似廢舊、佝僂匍匐而抵其顚、顚有小堂、不能十笏、傍堂而路僅通、堂後路窮、設鐵扣一條、岩有受足之穿、手板足捫而過環而出梯之處、而後喘始定、鄉導之僧目不見嶮、習慣然歟、如是天台石橋何足試乎、又有一石峯、名曰天華岩、望之如蜂房、簇々如花、大抵山皆石、石皆腕、是故作洞作窟作竅作穴、不可名狀、日已迫西、前路二十餘里、故不得盡其奇而行、

安隆寺

安隆寺ハ、羽後國山本郡ニ在リ、淸和天皇貞觀十二年、定額寺ニ列ス、今廢寺ニシテ、其所在ヲ失ス

〔三代實錄十八 淸和〕貞觀十二年十二月八日乙酉、出羽國山本郡安隆寺預之定額、

名所 所在 寺格

永泉寺

永泉寺ハ、羽後國飽海郡落伏村ニ在リ、淸和天皇貞觀年中、僧圓仁ノ開基ニシテ、初メ天台宗ニ屬セシガ、後僧源翁ノ此寺ニ住スルヤ、曹洞宗ニ改メタリト云フ、

〔和漢三才圖會六十五 出羽〕永泉寺 在落伏 自酒田七里 同〇禪宗 寺領八石 開基 源翁和尙 相傳曰、境內池蛙不鳴聲、

名所 所在

沿革 堂塔

〔出羽國風土略記六 飽海郡〕剱龍山永泉寺 尾落臥村に有

寺領廿八石七斗八升八合、黑印一通の面、地方尾落臥村、吹浦村、寺家の舊記に、貞觀年中、慈覺大師神宮寺開基の比、當所に伽藍を建、吹浦村の奧の院とし、永泉寺と號と有、其比天台宗なりと云傳、後來、元翁和尙此寺に住職せられ、曹洞宗となる、和尙の影像有、境內に谷有、觀音堂あり、古跡にして慈覺大師護摩修行の道場跡、胎內くゞり、鞁石抔云有、又七不思議と云事を云傳也、寺を前より柚の大木有、毎年正月三日、吹浦村の社家、寺中に御鉾獅子頭をわたす、

〔日本地誌提要三十五 羽後〕佛寺 永泉寺 同郡(飽海)落伏村、禪宗、貞觀中、天台僧圓仁創建、後僧源翁住シ、今宗トナリ、元中元年甲子、僧峨山中興、寺域壹萬四千四百坪、

古事類苑

宗教部六十六

佛教六十六

羽賀寺

名稱　所在　創建　堂塔　寺領

羽賀寺ハ、若狹國遠敷郡羽賀村ニ在リ、元正天皇靈龜二年、僧行基ノ勅ヲ奉ジテ、草創スル所ナリト稱ス、此寺屢、災厄ニ罹リシガ、文祿四年、安部實季之ヲ修補シテ、以テ現今ニ至レリ、眞言宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會〕七十一若狹　本淨山羽賀寺　在遠敷郡　本尊　十一面觀音行基作　元正天皇靈龜二年、行基菩薩奉勅建立、

〔若狹郡縣志〕五寺院　遠敷郡

羽賀寺　在羽賀村、靈龜二年春、一鳳飛來于此地、土人爲奇異之思、入于山求之、而得鳳羽二片、事聞天聽、元正天皇勅行基使造一寺於此地、行基自刻十一面觀音、脇士不動毘沙門等之像、安置堂中、而名鳳聚山羽賀寺矣、天曆元年、土地震動、山裂岩頽、風雨急起、澗流漲出、此時本尊脇士等沒於泥中、同二年、雲居寺淨藏貴所、依靈夢來此得觀音像、村上天皇再興之檀越而三年之間寄正稅、以爲造營之資、且爲勅願所、同四年、寄附田四町三段、建久元年、源賴朝卿建三層塔、安大日像、且以此寺爲祈願所、文和三年、守護職細川清氏、依祈願成就寄田地、延文四年、後光嚴院勅造營伽藍、勸修寺大納言經顯卿爲勅使、是時有樂、應永五年、罹災爲焦土、時一色詮範營假宇、其後永享七年、陸奥國十三湊日下將軍安倍康季檀越而改造堂宇、今之所有是也、康季改山名本淨、取鳳聚之字爲法號、而稱鳳聚院、永正

十四年十二月、武田元信附山林并田地、大永四年九月、後柏原院賜綸旨于寺僧、而開觀音之帳帷、人見丹後守、欲爲勅使代、是時亦有樂、翌年閉帳、武田信豐以此寺爲祈願所、寄山林并田地、文祿四年、安信、康季第八嗣實季、修補堂宇、其裔至于今爲祈禱所、毎歳寄資料、同年十月十日、羽柴勝俊於熊野村寄附寺產五十石、京極高次、同忠高、與山林免除之狀、寬永十四年三月、酒井忠勝公修補外門、其左右有金剛力士之像、又正保二年、依有祈願、再興鐘樓、嗣君忠直公、及忠圓公又從舊例、禁止伐採山林竹木、放飼牛馬、取境內之石、又毎歳寄米九石餘、以資料、倶賜證狀矣、古有十八坊、今存者一坊耳、而眞言宗也、其餘坊跡多爲竹林也、坊傍有護摩堂、安大日像、是古塔中之本尊也、此寺創草之緣起、誠仁親王之所筆、而有一卷、誠仁正親町院皇子、而諡陽光院、其卷末有後陽成院之宸翰、又有勸進帳、青蓮院門主尊傳法親王之處筆、而其奧書定法寺大僧正公助之筆也、其餘寺物不遑枚擧也、

〔華頂要略（八十四 附屬諸寺社第二若狹國）〕羽賀寺（異本云 本淨山）在遠敷郡

本尊十一面觀音（行基作）　靈龜二年丙辰、行基菩薩奉勅建立云々、　天正十二年甲申六月、依尊朝親王奏聞賜綸旨、　若州羽賀寺之事、靈龜已來、勅願無雙之精舍、歷然候哉、然處近國依錯亂、本堂以下破顚壞倒之由、被聞召候、尤被歎思食候訖、然則叡慮之趣、早被任其由緒、十三湊被告申、一寺之再造、以權勢之助成、可致其勵之旨被加下知者、可爲神妙候、併爲國祈、且御門葉之潤色、可有此時之旨、天氣所候也、此由可令洩申青蓮院宮給候也、仍執達如件、

天正十二年六月十日　　左中辨判（○親慶）

內大臣僧正御房（○中略）

同年十月廿日、若州羽賀寺替地、以丹州䳄賀郡法華寺村之內貳拾一石地、被寄於門跡領之旨、被出關白朱印、珍重々々、

一御末寺若州羽賀寺

丹州舟井郡上護摩村之内を以、貳拾石可有御寺務候、恐々謹言、

天正十三 八月廿八日　民部卿法印 玄以花押

羽賀寺玉床下

毫攝寺

毫攝寺ハ、越前國今立郡清水頭ニ在リ、眞乘専ヲ以テ開基トス、越前國三門徒四本山ノ一ニシテ、其宗義ハ謂ユル秘事法門ナリ、此寺初メ京都出雲路ニ在リシヲ以テ、特ニ此門徒ヲ出雲寺派ト稱ス、即チ眞宗十派ノ一タリ、

〔和漢三才圖會 七十越前〕毫攝寺　在清水頭　初在京師今出川、有所以退洛移于此、

淨照寺　在鯖江　俗云佐波夜門徒(佐波江之訛也)　清淨寺、在横越、　專稱寺、在中野、

以上三箇寺稱三門徒、(或云三門徒)　當國大町有僧、名如道、謁親鸞爲弟子、弘一向專修法、後別爲三箇寺、以毫攝寺爲本寺、

〔二十四輩巡拜圖會 二越前〕上野山誠照寺〇中略 越前國四ケの本寺といふは、清水頭毫攝寺、横越證誠寺、鯖江誠照寺、福井專照寺、これを四本山と號く、いづれ親鸞聖人の法脈として、眞宗相承の靈院たり、

〔大谷本願寺通紀 七〕毫攝寺(在越前今立郡五分一村、去府中東二里許、但寺基之地、別稱清水頭云、)
傳、是京出雲路毫攝寺善性孫(善性、是乘専法嗣、爲善喜父、)　善知、剏建出雲路、燬于兵火、善智至越前、寓横越證誠寺、專弘秘事法門、創毫攝寺而隱居之、令養玄秀住持證誠寺、據顯誓記、横越證誠寺道性、以出雲路毫攝寺爲本寺、故至善智時、出雲路廢之後居横越、猶如秘事法門類、弟善秀在京師、善秀子善鎭、弱年以來、

共母至越前、主證誠寺、善智嘗令玄秀（巧宗主從子、興行寺玄典之子、）主之、玄秀歸屬本山之後、善鎭繼席、而以行履不正、家司澀谷氏誘之、歸屬本山、善鎭子善慶、善慶子善秀、今號小濱毫攝寺是也、又考本山系譜、乘專附橫越證誠寺於善性、善性子善喜、兼住毫攝證誠兩寺、善喜子善智、主證誠寺、後屬之其子善榮、已隱居毫攝寺、善榮卽玄秀也、又善智弟善秀、主毫攝寺云云、蓋毫攝寺乘專所創、出雲路分出、而昔年本支兩毫及證誠三寺、更互兼帶耳、（一云、玄秀屬本山之後、橫越門徒、分成二派、異計按不令玄秀入證誠寺、故玄秀寓居加州二役、）傳、由善鸞相承安心、以善鸞爲開祖、乘專、善性、善喜、善智、善榮、善鎭、善慶、善秀、善助、善藝等、次第相承、元祿年中屬青蓮院、爲院家、末寺四十餘所、兼用表裏兩門式、　安永三年役僧失火、諸構焚蕩、天明六年再興成、八月修慶讚、

佛殿　在右、東向、二重屋、　方十門許　　本尊　長七尺許（一云、像首祖師遣、一云、泰澄遣、）　左太子（厨入）　右吉水　安聖牌

祖殿　在左、方十七間餘、　左先主像（紅衣）　右蓮座像二幅（一幅各七幅、左幅郡香衣、右幅紅香開衣交錯、）

門前諸院連列　　三役寺（敎證寺、光照寺、應信寺、）　五條塀　　堂後有諸墓（別有納骨堂、又有寂永僧正墓、）　　禁榜（延保五年十二月、開主綱晶立之、殺生禁制、寄宿狼藉、剪伐竹木、合三條、）

〔一向宗源脈〕毫攝寺在清水頭、初在京都今出川、有所以退洛陽、移于此處、（今按和漢三才第七十四十五、又攝州小濱、亦在毫攝寺、）（後寺下云、覺如上人六十六歲之時、在西國東、延元二年、大谷御坊、爲兵火燒失焉、覺如上京、居住西郊久遠寺、曆應元年、大谷再建、自作聖人眞像二鉢、其一安於本寺、其一歸今出川出雲路乘專、於丹波六人部、一宇建立、安之、其本尊後復於本寺、乘專之子孫、移于處々、今毫攝寺是也、但清水頭毫攝寺、今屬青蓮院宮院家、）

〔二十四輩巡拜圖會（二編前）〕出雲山毫攝寺　　今立郡清水頭にあり、越州讓門徒四本山の内一本山也、開祖は親鸞聖人にして、創建開基は乘專大德也、乘專大德は、舊丹波國にありて、佛心宗を修し、六人部の邑に行ひ給ひけるが、其名高く海内に響けり、されども難行のさとりがたき事を證知して、遂に易行の大道に心ざし、眞宗に歸依し、高祖聖人の法流に入給へり、（乘專大德はじめは、淸範法眼と號す、）始め丹州六人部に毫攝寺を開き、また都出雲路に移り再興有て、終に當國に基趾を開き給ふとなん聞えし、（高祖繪傳、願誓の記にこれをのせり、）一說に善鸞上人を法脈の開基とすといへり、未詳、　金堂九間四面、本

名稱　所在　創建　堂塔

量阿彌陀如來、（聖德太子御作也、）の本堂十三間四面、（高祖聖人六十一歲御自作の眞像を安す、）當山靈寶數品あり、これを略す、

〔一向宗源脈〕又越前國、別有一流本寺、（但此有四箇寺、各無優劣之位、且不屬東西兩本願寺、興正寺、佛光寺、專修寺之下、別立一流、以稱本寺、各有其門葉之末寺耳、然近頃閣之、又近來其四箇寺、各自願以屬天台座主宮之院家分、各任僧正等云、）

證誠寺

證誠寺ハ、越前國今立郡栗越ニ在リ、親鸞留錫ノ舊跡ニシテ、舊ト山元村ニ在リシガ、後今ノ地ニ移ル、越前國三門徒四本山ノ一ニシテ、今此ノ宗派ヲ山元派ト稱シ、眞宗十派ノ一タリ、

〔一向宗源脈〕清淨寺在橫越、此寺亦如導上人爲開基、（傳聞、今於四箇寺中、此寺最爲小寺、故其門葉亦少焉、今屬櫻井宮院家、）

〔大谷本願寺通紀　六〕證誠寺（在越前今立郡橫越村、村在去江府東十二町原山下、）

傳、宗祖（○親鸞）遷謫時、越人逆創寺於山元、延師投宿受化之地、後善鸞至此布化、善鸞孫淨如、亦來再興佛殿、請朝辱蒙勅、號山元山證誠寺、尊信弟子道性（三州池鯉鮒安木像、念寺）正居此寺、弘化故善鸞、淨如、道性、善智、玄秀、善鎭、善慶、善秀等、次第相承、（本山系圖、言乘專讓證誠寺於善性等、則乘專善性善三子、亦當列之祖圖、而不置、今據由疑是後來所設也、）寛明應八年九月廿二日、後土御門院賜綸旨於善秀、以爲一向眞宗之源、元祿六年、屬聖護院、爲院家、於四本山中門戶最小、不能行參內式云、

祖殿東向、堂內九間、（像各八尺許、合十間、）外陣界內少高　左先主像（紅衣）　右道性像（厨入）　左餘間感得佛像（厨入）

右餘間紅衣像　祖殿北有小殿、（橫四間、長六間半、）安佛像、無七祖太子、側安聖牌、蓋對面所兼佛殿者、（佛像前、殿寺主謁門下之席、）案餘間並構佛堂於祖殿右、則當寺亦素如是、而後廢耳、　堂後有諸墓、　無門　殿堂弊陋、庭中荒蕪、

末寺十餘所　寺規兼用表裏兩門、但檀徒唯用本門式、已上五刹、專修專照兩寺、如道開基、誠照寺如覺開基、證誠寺善鸞舊蹤、毫攝寺善智叛建、於中專修已廢、因爲一派四本山、（一記）

名稱　所在　創建　堂塔

周圍、阿專照ニ如道ニ、證誠毫攝ニ道性ニ、誠照聖ニ如覺ニ、於中毫攝誠照稍大、專照次之、證誠最小、四刹各設僧階、有院家内陣餘間飛檐等次序云、今考佛殿祖堂左右太子吉水配位等諸刹多、類東門、豈有由乎、時曰、異執分派、三箇門、王今遺蹟四家存、側門近世、逆捨誤、法水精潤ニ大谷源、　元龜三年六月九日、本山賜書下間正秀理乗賴廣命署毫攝寺云、越前國横越中野三十八社三門徒止於歸參者如前々、不可有相違云云、三十八社未詳

〔二十四輩巡拜圖會 越前二〕山元山證誠寺清水頭より一里、今立郡横越にあり、護念院と號く、越前、讃門徒四本山のうち一本山なり、開祖親鸞聖人開闢の遺流たり、本堂十三間四面、本尊無量壽佛は靈佛にして、奇瑞不思議の尊像なり、又高祖聖人御自刻の像を安す、光明本聖人の御筆、其外靈寶數品あり、開山聖人左遷の時、越前の群俗、山元といへる所に一字を建立し、聖人を請じ奉りければ、聖人即愛に入らせ給ひ、勸化利生有けるが、其後善鸞上人來院あつて、門下を化益し給ひ、續て奥州大網の淨如大德、此佛閣を再興し、忝くも禁廷より山元山證誠寺と勅號を賜り、それより相次で今に法脈相承せり、往古入親鸞位唯授一人口決といふ傳法ありけりといひ傳へたり、

誠照寺

誠照寺ハ、越前國今立郡鯖江ニ在リ、僧如覺ノ開基ニ係リ、越前國三門徒四本山ノ一ニシテ、俗ニ佐波夜門徒ト云フ是ナリ、今誠照寺派ト稱シ、眞宗十派ノ一タリ、

〔越前鯖江志〕佛院

上野山誠照寺、開祖曰如覺上人、親鸞上人之孫也、父曰善鸞上人、爲五分一村毫攝寺開祖、支院六七、有祖師堂、彌陀堂、嚴然一大刹也、在鯖江府館之北、越前四本寺之一也、鯖江誠照寺、横越證誠寺、五分一毫攝寺、中野專照寺、寺隷東都上野王府、院主例自僧都昇權僧正位云、

〔一向宗源脈〕淨照寺在鯖江、（俗云佐渡夜門徒是也、）開基如覺上人、是親鸞聖人在留北國之時爲弟子、又一說云、爲眞佛房（高田第二世）弟子、或一說云、如覺是本爲如導上人弟子、（其如導者、中野專稱寺開基之師也、傳聞此門徒者、此四箇寺中、最爲多矣、今屬東叡山宮院家、）

〔二十四輩巡拜圖會越前二〕上野山誠照寺（橫越より十二町、鯖江にあり、）讃門徒四ヶ院の內、淨土眞宗の一本山なり、寺務權僧正、本堂九間四面、本尊閻浮檀金手引阿彌陀如來を安す、又如覺上人の像あり、御影堂十六間四面、（高祖聖人の眞像を安す、）塔頭三區、　開祖は親鸞聖人創建、開基は如覺上人也、當山開闢は、高祖聖人御在世の砌、當地に波多野和泉守景行といふ者あり、聖人を深く信仰し奉り、則招請して聞法隨意淺からず、終に御門徒とは成りぬ、爰におひて、聖人の孫弟道性大德を請じ、我女を給仕せしむ、其生る息男如覺上人也、高祖化益の勝地を失はずして、基趾を開き給ふ所也とぞ、當山の傳に云、往昔當國上野の領主秦右京進景之、元久二年四月七日の夜、靈夢を感じ、上洛して親鸞聖人の御弟子と成り、空然と號す、𛀁かるに聖人越後へ左遷の御時、空然入道兼て新殿を營み置て、聖人を請じ奉る、聖人爰に數日滯留して敎化あらせられ、夫より越後へ下向なし給ひぬ、空然房此新殿は聖人の輿車を止め給ふ所なれば、車の道場と號して是を守るに、法流大に繁茂して、國郡に充り、聖人御歸洛の後、卽聖人の御息弟五男有房を招請して、是を道性聖人と稱し、空然房の息女を媒嫁して、車の道場に住持せしむ、其息を松壽と號けしが、弘長二年の初冬上洛せしめて、聖人の眞弟と成し、法名を如覺と號せり、此如覺上人、嘉元三年參內有て、後二條院より淨土眞宗讃門徒と勅號を賜り、其後水尾院勅願所と成し給ひ、上野山誠照寺と勅書を賜ふ、當山境內寺領の御朱印あり、位は大僧正に任せられ、上洛の毎に參內すと云々、○中略

世傳曰、高祖聖人越後へ御下向の時、當國大町といふ所に如道といへる高德の僧有て、聖人に謁し奉り、聞法隨喜して御弟子と成り、もつはら專修念佛を弘む、其裔三ヶ寺と別れて、鯖江誠

照寺、中野專照寺、横越證誠寺これ也、是を三門徒と稱す、寬永の記に見えたり、右傳記の異說、後學これを正せ、

寺格 寺領

〔大谷本願寺通紀六〕誠照寺在越前今立郡下鯖江村北路、通稱西逹、作證鯖江、或作鯖屋、横越道性子如覺開創、稱上野山、專信、道性、如覺、如存、道存等次第相承、一云、如覺嗣法如存、常樂存覺第五子也、元祿六年、馬輪王寺爲院家、十二年任權僧正、

本堂在右、東向、殿內八間半、像間一餘間高等內陣失堺內少高、龍堂同之、如東門、　本尊前安花瓶大小各二口、　左太子像入厨　右吉水像　左餘間龍天覺三師像各一幅　右餘間綽導信三師像各一幅合六幅　祖殿十二間像各二間、合十六間、　左先主像香衣　右木像入厨、號是如覺像、　左餘間十字佛名　右餘間九字　經藏傳會像、後安彌陀小像、堂後有諸墓、　禁榜寛永二年十二月立之、　寺領廿四石　左右兩院家證厚寺、西福寺、　末寺凡五十所　役僧居長舍、　寺規率做本門、許僧徒隨意至本門、請佛像及勤事等云、

〔寺鑑上天台宗〕御朱印、境內共、　高貳拾四石貳斗五升餘　越前鯖江　一向宗　誠照寺

右住職、子孫讓、御門主院室僧正官之儀、從御門主執奏、住職并任官御禮無之、參上御禮、御白書院、獨禮、御國之內二疊目　御暇柳之間、御老中、獻上一束一卷　拜領時服三、

〔誠照寺文書〕奉寄進越前國鯖江庄公處之內畠事

合貳所者

右彼在所者、自本所雖取改候、古出雲入道へ任寄進之間、以各別永代指置申者也、可有無相違知行候、依狀如件、

永享六年九月五日　藤原敎元花押

〔誠照寺文書〕鯖江庄內誠照寺敷地幷寺領事、田那部六良左衞門入道、號彼名買得寄進永善寺云々、既長田藏人云放券云右京亮寄進、旁以理運歟、殊寺流方加下知之上者、領掌不可有相違之由依仰

雜載

名稱
所在
創建
堂塔

執達如件、

永享十一年七月卅日　　　　　　修理大夫（花押）

誠照寺住持

〔誠照寺文書〕宜奉祈國家安全寶祚長久者、天氣如此、仍執達如件、

嘉元三年三月十九日　　　　　　左少辨

眞照寺如覺上人

專照寺

專照寺ハ、越前國足羽郡福井ニ在リ、僧如道ノ開基ニシテ、越前國三門徒四本山ノ一タリ、今此宗派ヲ特ニ三門徒派ト稱シ、眞宗十派ノ一トス、

〔二十四輩巡拜圖會二越前〕中野山專照寺（同所(越前國)福井木田町にあり）

當寺も又越前四本山の内、眞宗相承の一本寺也、本堂七間、御影堂十二間、本尊阿彌陀佛の尊像は、春日の作にして、所謂如道大德の開闢有し靈場也、前に記すごとく、初めは大町といふ所に車屋道場といへるあり、如道上人爰に住して、敎化有けるにより、人皆大町の如道大德と稱せしとかや、彼車屋道場の事、既に前に記す、靈像は高祖聖人御眞影、法然上人の御木像、如道上人の木像等あり、

〔大谷本願寺通紀六〕專照寺（在越前吉田郡福井府本田北路邊衛南靈頭南邊）

如道開基、如道初居大町、尋移中野、（中野在足羽郡淺水村西、去福井南二里許、舊地尚存）顯誓記、言中野坊主是也、或傳、永享八年、自專修寺分出、年時大違、未詳孰正、（如道以應長元年、就覺宗主受化、其年至永享八年、凡百二十六年、）後移福井、尙存舊名、稱中野山、

近屬妙法院、爲院家、末寺二十餘所、率倣東門式、佛殿、在右、北向堂内七間、(各半間合八間、)兩脇各一厨、(定長太子吉水像)兩餘間六祖像、(昭登交鎖、與鯖江異、)祖殿堂内十間、(像各二間、合十五間、)左如道像　右先主像兩餘間九字十字　堂後諸墓　樓門　門内子院(敎覺寺、菩提寺、)禁榜(永享天正兩度之制、合二書横板一枚、)

〔大谷本願寺通紀　六〕越州三門徒

專修寺、專照、證誠、毫攝、誠照五寺、並傳如道、道性、如覺三子法義、故稱三門徒、或作讚門徒、恐後人私度耳、依顯哲記、祖師孫弟、有遠州鶴見專海、(號專信房、高田眞佛弟子、)專海弟子有常陸圓善、圓善弟子有如道云、(平判官康頼之裔、)居越前大町、(在足羽郡、)覺宗主北化日、共田島行如和田信性受敎、宗主歸後、如道唱秘事法門、宗徒糺彈、令改悔誑誓、而舊執不已、惑亂諸家、由是被擯門下、又横越道性、鯖屋如覺、中野坊主、各傳其儀、餘黨尚存、稱三門徒不拜之衆、(一云、如道雖已誑誓、悔過見恕擯罰、而歷世異執不已、永享八年、巧宗主、又擯棄之、於是其黨分作二部、一部於中野村創寺、號專照寺云云、)然蓮宗主在吉崎日、大略回心歸投本山、於中專修寺州士大町氏爲僧、執務相繼、急卒還俗、稱大町助四郎、繼席一仕本寺、由是三州勝曼寺高珍來至便詣吉崎門徒自從之、因以永存(梓宗主孫、石田西光寺、)第三子蓮慶、(號作從、永正元年八月二日逝、)配高珍女、令主專修寺、有二男、長子了顯、主勝曼寺、季子顯誓、嗣專修寺、(顯誓、以享祿二年十月三日逝、年四十二、了顯第四子與稱、法名誓玄、嗣法、)是故我流彌恢弘于越前、然尚有三門徒異執之輩云云、(已上)(記文信性爲圓善子信寂弟、越前和田本覺寺、及藤嶋超勝寺祖行如爲越前田嶋興宗寺祖、)

永平寺

永平寺ハ、越前國吉田郡荒谷ニ在リ、寛元元年、曹洞宗ノ開祖道元ノ開基セシ所ニシテ、始メ大佛寺ト稱セシヲ、四年今ノ名ニ改ム、此寺原ト道元隱遁ノ道場ナリシガ、遂ニ能登ノ總持寺ト與ニ同宗ノ總本山ト爲レリ、

名稱 所在

創建 堂塔

〔和漢三才圖會　七十越前〕吉祥山永平寺　自福井四里 禪宗

〔全國各宗本山明細帳〕禪曹洞宗　大本山本寺　永平寺　越前國吉田郡荒谷

〔永平開山道元和尙行錄〕禪師、諱希玄、後更名曰道元、○中略寬元元年夏、爲退休計、越大臣官長諸國刺史、欲構梵宇、延師者一十三人、越之波多野雲州刺史義重、奉佛甚勤、擇于吉田郡志比庄佳境、堅請師、師不獲已而往、命詮慧能興聖席、秋七月、又於一野東巒松下、營緇精舍、二年夏、諸堂備足、秋七月十八日、入院開堂、時天龍興雲、山神現形、卉木叢林有喜色、師爲吉徽、山號吉祥、寺曰大佛、師謂義重曰、這一片地、主山高、案山低、東岳連白山神廟、西溪接靑海龍宮、峯巒重疊、人烟阻隔、實弘法靈場也、義重慵扑歸依、爲祖道金湯、未幾四衆輻湊如雲、四年夏六月十五日、上堂改大佛曰永平、

〔日本洞上聯燈錄　一〕宋明州天童長翁如淨禪師法嗣

越前州吉祥山永平寺道元禪師、○中略寬元甲辰、義重搬大佛寺開堂、其叢規一則天童也、時有山神出現、因山號吉祥、丙午夏、改大佛曰永平、蓋漢永平中、佛法始至眞丹、而今曹洞正宗、始東傳、故擧其曆號以名寺、

〔初祖道元禪師行業記〕後波多野雲州大史義重、依固請移于越州、寬元二年甲辰七月、草創吉祥山永平寺、土木未備、堂閣僅兩三、然而以深山幽谷、占以爲一生幽棲之地、寶治元年丁未、東關西明寺召請受菩薩戒、奉留住建立寺院、欲開叢席、雖堅諸留、堅辭去下越州、恭敬餘爲遂願心、雖供養越州、六條不受之、道風遠聞、緇白普師、受其剃頭弟子、三百餘人、爲菩薩戒弟子七百、餘人、建長四年壬子秋示病、建長五年癸丑八月二十八日夜半示偈、自書云五十四年照第一天、打箇踍跳、觸破大千、渾身無覓活陷黃泉、擲筆而逝、俗壽五十有四、僧臘三十有七、塔本山之西北隅、奘首座繼住永平寺、惠首座住洛陽永興寺、海首座師在世死于興聖寺、

〔碧山日錄〕長祿三年四月一日癸丑、永平道元、謁建仁明庵、庵器許而入、又涉海依如淨於天童、曹洞深

寺格

嘗研究而歸、嘗棲止洛南深草村、以皇都甚近、其喧嘩忤于禪寂、如北番郡一寺名永平、其壹規以太白爲式也、　九月廿日己亥、於滿子之宅、會於洞書記、洞久侍洞下尊宿、予問道元之履歷、洞曰、越之前州永平寺之祖也、入宋嗣天童如淨歸時隆蘭溪同船、元造城南深草村、村有興聖法輪寺、（天台宗日蓮之徒、毀地□之間、有法輪道址存而已、）嘗聽此而作正法眼藏五十卷、（其字或和）以弘宗、關東副元帥時頼公、創建長寺於相州、而欲延元以爲開山始祖也、元無出世之志、固辭之、竟往越構永平精舍居之、頼公敬致蘭溪於建長、以爲祖也、後以元之牌、按建長之祖堂、以第二世記之也、予又問曰、道元之孫不住永平、而住大乘洞谷永光總持何也、曰、元之子有懷弉、弉出義介義圓、一時介爲歷試濟下之法、遊於建長寺、逮其歸時、圓住永平見介、而欲退其位而繼之、介曰、吾爲汝之法兄、豈位其後乎、弉聽之、自補其席居、亡何而延介曰、汝豈有憾吾後手、介乃應命以住、爾後其徒、以介爲永平三代之師、圓之徒又曰、吾師三代也、□□矛楯、介之徒太盛、別構諸寺住之也、（曰此三代、諍論也）　又問曰、洞上之淸規、與濟下之諸寺、其詳略如何乎、曰、詳略相似、又有小異矣、更鼓畢而打板三下、謂之小開靜、爲以覺困睡也、亦昏而鳴出寮之板三下、而推鐘、鐘罷後打鼓一通、與濟下先打鼓三通、而鳴鐘甚異也、其他咸類之云、

〔本朝高僧傳　二十淨禪〕越前永平寺沙門懷弉傳

釋懷弉號孤雲、○中略　及元（元○道）開越之永平、弉又從焉、弉年邁元公二歲、凡有寺制、必命弉施行、弉曰、和尙號令、奈何不自行、偏命某甲、元曰、此山他日佛法流傳無窮者、在公一人耳、建長五年秋、元遘疾退休、命弉補處、以就醫于京師、弉亦侍湯藥、無何元遷化、弉照負靈骨、如法歸葬、一衆悅服、四方歸嵩、不與元師異、

〔宣胤卿記〕永正四年十一月廿三日、永平寺（越前）額事、被執申住持所望分十字也、勅字可爲如何哉御尋也、於禪師號者、已勅許云々、○中略　勅爲本朝第一曹洞道場、

〔永平寺文書〕當寺事、依爲日本曹洞第一、可爲出世道場之旨、應安度被成勅裁之處、去文明五年依回

緣、令紛失之由被聞召訖、不可有相違之旨、天氣所候也、仍執達如件、

天文八年十月七日　左中辨晴光

永平寺住持禪室

〔能登總持寺文書乾〕能州鳳氣至郡櫛比庄諸嶽山總持寺門派之衆、明應年中以來、於永平寺山居之地、成出世儀式、著紫衣黃衣、背先例、剩永平寺爲出世之道場之旨、帶應安勅裁、令紛失之由、去年企謀訴、掠賜綸旨之條、太以不可然、所詮任道元和尙遺文之旨、自今以後、被停止訖、存其旨、彌可奉祈皇家再興者、天氣如此、仍執達如件、

天文九年二月廿七日　左中辨

當住普應和尙禪室

〔總持寺文書曹洞宗史略所載〕御請書

一能登國總持寺ト、越前國永平寺、關三箇寺衣體、其外之儀申爭、雙方ヨリ相願候ニ付、再應御糺明之上、左之通被仰渡候、

一總持寺ヨリ申立候者、同寺者雖爲道元國師四世之孫瑩山國師之開基、元亨已來一宗之本山職、永平寺者、道元初開之道場ニ候得共、宗祖遺訓ノ趣ヲ以テ、山居之地與定置之處、至元和度、御朱印御條目被下、其已來本山職ニ相成候儀ニ付、互格之本山與可心得處、總持寺ヲ末派之由申成、及迷惑候由申之、永平寺關三箇寺ニ而者、永平寺者曹洞濫觴之道場、宗門根源之爲本山儀、勿論ニ有之處、總持寺ニ而者、永平寺者、互格之本山之由申立、雖心得旨申之、爲遂御糺明候處、永平寺者、道元雖爲山居之地、曹洞本山之賜綸旨、殊ニ至元和度、御朱印御條目被下、日本曹洞下之末派、如先規可守當寺之家訓旨之御文段御書載有之上者、曹洞根基之道場、一宗之爲本山事歷然也、雖然於總持寺モ、開基已來、本山之賜綸旨、元和度、永平寺同時ニ、御朱印御條目被下、御禮席其外、公儀御取扱振等、

凡同等ニ被成下、一師印證之御條目等モ、永平寺、總持寺、互格一樣ニ被下候上者、爲本山事無紛、然ル上者、永平寺三箇寺ニ於テモ、右之趣ヲ以、取扱候儀不可有異論、併於總持寺モ、永平寺江對シ、不失禮義、相互ニ致和融、彌宗門興隆ヲ可心懸旨被仰渡候、

一總持寺ニ而、袈裟之儀、是迄用來候環紐有之、九條七條並掛絡者、開山瑩山、二世峨山巳來、至今襲依變動無之旨申之、永平寺、關三箇寺者、右掛絡者、五條衣略製之品、環紐有之袈裟者、南山衣與唱へ、右衣體相用候儀者、宗祖家訓ニ觸候由申之、雙方ヨリ差出候證據類ヲ以テ、被爲遂御糺明候得共、古今區々ニ而、一定不致、從來兩樣之衣體相用來候儀ニ相聞候間、依之追而被及御沙汰候迄者、永平寺、總持寺ヲ始メ、末派之輩ニ至迄、右袈裟兩樣之内著用之儀者、志趣次第、是迄之通可相心得旨被仰渡候、

一總持寺ヨリ宗門規定ニ拘ハリ候儀ハ、向後永平寺、關三箇寺ヨリ、遂相談取計、其餘總持寺ニ而、本末之掟ニ拘ハリ候品、及裁許候處、不伏ヲ唱へ、三箇寺申出候類者、總持寺江遂相談、取計候樣致度旨申之、永平寺三箇寺ニ而者、宗門之規定等、宗祖家訓ニ拘ハリ候儀者、總持寺江可及示談筋無之、三箇寺ニ而モ、一宗之規定並總持寺ニ而、本末之掟ニ拘ハリ候裁許申渡候處、不伏ヲ三箇寺江申出候共、落著之次第、總持寺者勿論、永平寺ノ末寺ニ而モ、是迄不及相談取計來候旨雖申立、總持寺ニ於テモ、御朱印御條目被下、本山タル上者、向後一宗ニ拘ハリ候大儀者、永平寺、三箇寺ヨリ總持寺江示談之上可取計、且本末之掟ニ拘ハリ候儀、同寺ニ而及裁許候處不伏ヲ唱へ能出候類、猶三箇寺ニ而、及吟味候節之取計者、延寶度從御奉行所、三箇寺江御渡被置候掟書ニ於、諸本寺末寺之僧仕置申付之處、彼僧怪之、三箇寺江訴之族有之者、其本寺江委細相尋、裁許之趣、理至極之儀者、不取上之、若本山非道有之者、急度御奉行所江相達、會議之上、可有落著事與有之上者、右ニ隨可取計儀勿論ニ有之、其餘永平寺ニ而申立候廉々者、未タ相談ヲモ不懸品ニ付、先規ニ基、遂示談可相

寺領
寺制

究之、若難決次第モ御座候ハヾ、與其時御奉行所江相伺、可受差圖旨被仰渡候、

右被仰渡之趣、一同承知奉畏候、若相背候ハヾ、御科可被仰付候仍而御受書如件、

安政五戊午年四月六日

能登國總持寺後見　芳春院達元

同寺役局長泉寺異宗代衆興福寺嫩裔

同役局代　石瑞

越前國永平寺代　大圓寺是三

同寺役者　海雲寺常鷟

海晏寺慈光

國府臺　總寧寺靈道

越生　龍穩寺闡明

富田　大中寺無著

寺社御奉行所

〔寺鑑 下 曹洞宗〕

紫衣　總本寺　越前國　永平寺

右住職御白書院御椽頰、御老中御列座被仰渡、

〔和漢三才圖會 七十 越前〕吉祥山永平寺〇中略　寺領二百四十石

〔寺院條目 一〕永平寺諸法度

一遂三十年之修行致江湖頭、經五年僧、有轉衣之望、以嗣法師之推擧狀致登山、可申理從當寺就傳奏申降綸紙以其上出世轉衣可有披露、附非三十年修行了畢者、不可立法幢事、

一出世之戒臈者、可爲綸旨日付次第事、

一到紫衣者、當寺、總持寺爲當住仁者、經奏聞勅許之時、可有著用兩寺其外、一切不可著用、於退院者

雜載

可脫紫衣事、

一開山忌越前一國之諸末寺可出仕、但遠國者可爲志趣次第事、

一日本曹洞下之末派、如先規可守當寺之家訓事、

右、近年法度相紊、往々紫衣黃衣著用之僧滿巷衢、違于佛制、受入嘲、法道陵夷無甚於此、且爲佛法紹隆、且爲宗門繁榮、相定訖、若於違背之僧徒在之者、可處配罪者也、依而如件、

元和元乙卯年七月日　御朱印

〔永平高祖行狀記 坤〕寶治三年己酉正月元日、一山諸堂を莊嚴し、聖賢の諸尊を供養したまふに、羅漢尊者の木像畫影を請じ、供物法式はさらなり、勸請敬禮のとき、此木像畫影をはじめ、諸堂の尊像、一同に光りを放ち、供養をうけ玉ふ、又寺の東なるいはほの松の梢に、十六尊者、彩雲に乘じて降臨あり、故に其老松を、今に羅漢松と號す、その時團扇一柄を遺したまふ、檳榔扇に似たり、收て寶庫にあり、これを高祖行脚の時、宋の經山羅漢堂の前にて、相見し玉ふ老璡の持玉ひしに似たり、されば老璡は羅漢の一尊なるべし、此時供法會の行式は高祖みづから撰せられて、其草稿今に信州松本全久院にあり、又彼羅漢畫像十七軸、幷に現瑞の記、高祖御眞蹟にて、常陸國若柴の金龍寺に安置せり、其文に曰、

寶治三年酉正月一日巳午時、供養十六大阿羅漢於吉祥山永平方丈、于時、現瑞華記、

佛前 特殊勝美妙現　木像十六尊者 皆現　繪像十六尊者 皆現

現瑞花之例、大宋國台州天台山石橋而已、餘山未嘗聞也、當山已現數番、寔是祥瑞之甚也、測知、尊者哀愍、覆護當山當寺之人法、所以如是、開闢當山沙門希玄、

〔天保集成絲綸錄 五十五〕天明八申年十月

寺社奉行 江

名稱　所在　堂塔

永平寺之勸化之儀、常例有之、勸化振合ニ而、一通リ之屆計、關三箇寺より、土井大炊頭江差出候、然ル處、常例之趣とは違候儀ニ有之を請取、其儘糺も無之差置候事之由、いづれ其段ハ不束ニ有之間、勸化之儀、先早速差止可有之哉之旨、先達而被申聞候得共、兼而申達置候一件之儀、其節ハ無程吟味仕、寄附も可申趣故、右勸化屆之始末も一同糺之方、吟味手懸りにも可相成間、先其儘差置、糺有之候樣に相達候處、此度之樣子、急ニ吟味可打合程ニ者不相聞候間、左候得バ右之內、筋違之勸化追々巡行有之儀如何ニ付、先勸化之儀ハ、差止させ候樣可被致候、○中略

天明八申年十月

那谷寺

那谷寺ハ、加賀國江沼郡那谷村ニ在リ、眞言宗ニ屬ス、養老年間、僧泰澄ノ建立スル所ナリ、後世衰頽セシヲ、德川幕府ノ時藩主前田氏之ヲ再興ス、

〔伽藍開基記 六〕自生山那谷寺 第四十四主元正帝養老年中創、至元祿己巳二年、及九百五十餘年矣、

加州小松城去一由旬、有梵刹、號自生山那谷寺、乃大悲觀音靈區也、養老年間、泰澄法師所創、後廢已久、四十年前、○慶安三年本州太守一峯菅公、治政之暇、念大悲勝境不可不復、輙重新之、其殿倚岩而構、其後有大悲龕室、納於石洞、其洞玲瓏幽邃、殿之東有小石洞、僅深十尺許、可頫首而入、既出則懸崖壁立、無措足處也、殿之前有蓮華池、池畔有北天王石像、高一丈許、卓立於嵓上、威容可畏、其旁復有小石窟、高一二丈、上置一石室、蓋長明燈也、遙望前山、有石鐘樓石塔、又有精廬梵宇及三成木浮圖、皆依岩旁石而建、精巧特異、四邊多蒼杉翠柏、殿之西亦皆石洞、或置地藏、或置觀音、或置伊勢大神、倶有石級、疑是補陀淨刹乎、由是黑白男女一禮謁者、靡不歎喜讃歎云、

名稱所在　彌勒寺　高雄山寺

〔日本地誌提要加賀三十八〕佛寺　那谷寺(ナコフジ)江沼郡那谷村、眞言宗、僧泰澄開基、養老元年丁巳創建、寺域貳萬五千百四拾八坪、

〔奥の細道〕山中の温泉に行ほど白根が嶽跡に見なしてあゆむ、左の山際に觀音堂あり、花山の法皇三十三所の順禮とけさせ給ひて、後大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付け給ふとや、那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ、奇石さま〴〵に古松植ゑならべて、萱ふきの小堂、岩の上に造りかけて、殊勝の土地也、

石山の石より白し秋の風

止觀寺 彌勒寺　高雄山寺　併入

止觀寺ハ、加賀國石川郡ニ在リ、陽成天皇元慶二年、天台別院ト爲ル今廢寺ニシテ其舊地ヲ詳ニセズ、

彌勒寺ハ、加賀國加賀郡ニ在リ、光孝天皇仁和元年定額寺ニ列ス、高雄山寺モ亦加賀國ニ在リ、仁明天皇承和六年、眞言別院ト爲ル、今並ニ廢寺ニシテ其所在ヲ失ス、

〔三代實錄陽成三十四〕元慶二年八月十三日丙子、勅以加賀國石川郡止觀寺、爲天台別院、

○

〔三代實錄光孝四十七〕仁和元年二月十六日壬寅、加賀國加賀郡彌勒寺、預于定額、

〔類聚國史佛道百八十〕承和六年三月庚戌、加賀國高雄山寺、爲眞言別院、

天德院

天德院ハ、加賀國石川郡金澤ニ在リ、曹洞宗ニ屬ス、元和八年、藩主前田利常ノ妻天德院ノ歿スルヤ、翌年此寺ヲ建立シ、僧泉滿ヲ以テ開山ト爲ス、元祿年間、祖廟佛殿等造立ノ擧アリ、明和五年、火災ニ罹リ、山門以外、悉ク烏有ニ歸セシガ、後之ヲ再建セリ、

〔和漢三才圖會加賀七十〕天德院　在同處○金澤　禪宗　寺領五百石　前田利常卿之妻東照君之女　菩提所

〔北跡拾穗加賀下〕金澤寺社

寺領五百石御領國曹洞宗總錄禪宗天德院、

利常公御簾中天德院樣、御逝去之翌年、元和九年御建立、寺領御付と也、光尙公御代より、富山大巖寺より配當御寄附也、開山は關東より御招請之泉滿和尙、塔司　小立庵、

此寺屋鋪、昔は小立野とて大成野にて小立庵と云し小庵有しを、今之塔司に附られしと也、

〔三州志來因概覽附錄二〕天德院ハ天德君歸佾ニヨリ、翌元和九年、一本作寛永元年微妙公○前田利常建立、關東ヨリ泉滿和尙ヲ召シテ開山トス、古ヘ此處小立野トテ曠野也、其野ニ小庵アツテ小立庵ト號ス、天德院建立ノトキ、此ヲ塔頭ノ號トナスト云、此後寛文十二年、松雲公○前田綱紀　高泉和尙明僧名激、別號曇華道人、ヲ召シ、小立野獻珠寺ニ寓居セシムルコト一年餘ニシテ、其師隱元、延寶元年寂スルヲ以テ、一旦金澤ヲ去リ、元祿二年、再ビ聘ニ應ジ來リ、亦獻珠寺ニ寓居ス、此時天德院中ニ、祖廟佛殿等ヲ造立ノコトアリ、其造樣ノ指法ヲ高泉ニ命ゼラレ、同七年ニ落成、高泉三月東歸ス、凡ソ金澤ニ掛錫前後八年ト云、此故ニ天德院建法皆檗樣ニ出ヅ、今存スル山門ハ猶其遺也、今ノ伽藍ハ、明和五年罹火ノ後再建ナリ、

〔北藩秘鑑一〕總持寺　寶圓寺　天德院　瑞龍寺○中略　西田國泰寺

右登城之節、三御丸橋爪迄、乘輿不苦候條、得貴意、河北石川兩御門無滯相通候樣、兩所御番之與力中江、可被申渡候、以上、

戌申　正月十二日按享保十三年　奥村伊豫守印

名稱　所在　創建　堂塔

三御丸　御番人衆中○中略

一寶圓寺、天德院、瑞龍寺之隱居も、登城之節、乘用之儀現住同樣之事、

石動寺

石動寺ハ、舊ト天平勝寶寺ト云フ、能登國鹿島郡石動山ニ在リ、養老年中、僧泰澄ノ創建スル所ト稱ス、

〔拾芥抄下本諸寺〕石動寺在能登國、虛空藏、智德上人、光仁第四皇子創、

〔能登誌初編〕石動山

石動山は本郡○鹿島郡の高嶺にして、南方越中の境に在りて、射水郡に跨り、山脈は東北に趨きて、終に鹿渡岬と爲りて海に入る、

〔石動山緣起幷由來〕石動山由來

勅願所

能登國石動山天平勝寶寺者、抑日域無雙之靈區、神仙遊化之寶刹、蓋自天地開闢之始相傳、號金剛證大寶滿宮、夫南閻浮提各有護命、其護命者石也、名曰朝宇動宇竹宇、日月星之三精、而從此三石出萬物種子云々、朝宇石者在月氏阿逸多王宮津那賀原宮、竹宇石者在晨旦岩金島宮、動宇石者在大日本國金剛證大寶滿宮、或曰、星墜爲三石、象天有三光、此山有動宇石、故名石動山云々、人皇第九代開化天皇御宇、天竺摩訶陀國行仙經七百歲、日本來住越中鈴御崎云々、

孝謙仙洞御重祚之御願、當山太朝豪勅奉祈誓、御願依爲御成就、勅使永手卿を以、正一位大僧正大師號を永宜太朝賜給、依之于今當山一臈者僧正衣を著、正一和尙位之御房と申候、二臈者權一和

御位之御房、三﨟者總座主之御房、四﨟者別當之御房、五﨟者所司之御房、六人目者頭人之御房、右上五人者五官と申候而、昇進相續仕條事、
太朝大師者修 求聞持成就之法、天下泰平國家安穩之祈願御座候付、則開山爲 掟之行法、只今以、三月晦日、五月三日迄、堂籠、開山掟之行法執行仕、五穀成就之御祈禱相勤申候事、勝寶八年蒜虫能登國出、損 五穀、惱 人民 候付、勅 宜太朝、於 寶滿宮 十二月晦日祭 之、速伏 其難、爲 其法賞、此國一宮奧院觀貞之管攝、并能登一國を産子且那被 爲 下候、依 之御祈禱相勤、國中札賦、一宮三月四日之神事、今以當山之衆徒罷越相勤申候、十一月鵜祭茂神供等當山より遣相勤申候事、○中略
光明院御宇曆應四辛巳年、命 室町家 有 再建、于 時當山撿挍勸修寺二品法親王寬胤、別當者慈尊院榮海僧正也、抑御鎭座以來、本社者虛空藏菩薩、十一面觀世音、火宮者聖觀世音、梅宮者將軍地藏、劔宮者俱利迦羅不動尊、是則五社權現八十末社之所御座候、

〔荒山合戰記〕能州石動山軍附石動山燒失事
抑此石動山天平寺ト申ハ、人王四十四代元正天皇ノ御宇養老元丁巳年、泰澄法師ノ建立ニテ、人王三十九代天智ノ勅願所也、佛法修業ノ業ヲコソ專ラトスベキ事ナルニ、延曆寺根來寺等ノ大衆等ガ、佛法ノ奧儀深理ヲ忘却シ、武藝ヲ業ト心得タルヲ、天平寺ノ小法師原モ、美敷事ニ思ヒ、任使ヲ家業トシテ、山ヲモ身ヲモ滅シケル、惡業ノ程コソ拙ケレ、去ハ今何故ニ、石動山ノ大衆等ハ一揆ヲ企ルヤト尋ルニ、織田信長在世ノ時、倿僧賓子ノ諸出家等ガ、蛛網ノ術ヲ巧ニシテ、武運長久ハ敵ノ刀刃段々壞ノ功力ニアリ、且後生善所ノ望アリ、天下ノ治亂ハ振 鈴ノ響ニ應ズ、合戰ノ勝負ハ錫杖ノ靡ニ順フ、安鎭國家ノ法刀爭カ貴ザランヤト、檀越ヲ誑ス、愚魯短才ノ守護國司ハ、己ガ武勇ヲ脇ニナシ、出家ノ祈禱數珠ノ音ヲ合戰ノ雌雄ニ掛、大莊大郡ヲ寄進シテ、味方ノ助トスル故ニ、僧モ社人モ吾法式ヲ執失ヒ、明テモ暮テモ弓箭ヲ專ニ嗜、兵術俗義ヲ宗トシテ常ニ合

戰ヲ心トセリ、去バ一犬譟テ虚ヲ吠トキハ、万犬實ト傳フト云ハ、今ノ世ノ出家ナルベシ、斯ル不實ノ出家ヲコソ天魔破旬トハ云ナンメレ、害有テ益ナシトテ、寺領ノ多キ寺々ヲバ能程ニ減少シテ、其國々ノ侍ガ恩賞ノ地ニゾ被行ケル、去バ此石動山モ、高五千貫ノ寺領ナリシヲ、信長是ヲ沒收シテ、千貫ノ地ヲ賜ヘラレシ、大衆是ヲ憤、本領ヲ安堵セントテ、斯一揆ヲ企テ、大衆モ多被討取、寺院悉ク燒亡シ、伽藍一宇モ殘ラザリシ、誠ニ衆徒ノ我慢放逸ハ、則天魔ノ所行ニヤト、淺猿カリシ事共也、

〔太閤記〕四石動山由來之事

或云、石動山天平寺と申は、養老元年泰澄法師之建立にして、天智天皇之勅願所也、故に法師原武勇を事とし、任俠を家業と心得、威を振ふ事、恰延暦寺根來寺のごとし、二千餘之寺僧田舍のくせとし、武勇のあらましきを專にたしなみ、勢甚しきやうに言を巧にし、法威をおびたゞしくのゝしり出街といへ共近年は信長公、觀音經念彼之段、或山伏等が新、或は後生善所などいふ事を専にせし、佞僧をば信じ給ふ事はさて置ぬ、〇中略利家は天智天皇之勅願所石動山を燒亡し、剃僧共を討捨られし故、武運長久し、二位の大納言まで經上り、子孫繁昌有事、よく〳〵かんがへしるべし、信長公自然に明智なりし故に、誰實理をすゝめまいらせけるとはなかりしか共、佞僧等にばかし入られ給はざりしによつて、諸寺の寶子どもそろ〳〵と引て入、寺々院々の法力も其比よりをとろへそめしなり、是實理を諸國之守護用出、國家安寧に成行べき前表か、予わかゝりし時のまよひをかんがへみるに、今世は何事も自身のつとめに在と心得、さのみ佛力等をも賴ず、寶子にも多くは化されざると見えたり、

〔伊須流岐樞要記〕同〇天正十一年、爲兵火神社佛閣燒亡ス、三百六十餘院、東西奔走、有職之衆徒者、率移神靈于荒灕山居住ス、同年人皇百七代正親町院御綸旨給ル石動山之坊中馳走有之旨、筑前守

以權威再造無相違云云、

〔能登誌 初編〕石動山 〇中略

元正天皇養老元年三月、泰澄法師來りて是山に登り、勅に依りて一寺を建立し、名けて石動寺といへり、是時社殿を再興して鎭守神となし、僧坊三百六十餘は甍棟影巍相連りて、頗る壯觀を極め、尋て聖武天皇の御時、一山を天平寺と總稱したり、孝謙天皇天平勝寶八年、永世勅願の綸命ありて、寺號を賜り、加賀、能登、越中、越後、佐渡、飛驒、信濃の七國を產子となし給ひしかば、後連年出で、、七州に供米を勸請したり、〇中略斯て幾春秋を經て建武元年に至り、國司中院定清越中に轉じ、未だ國に之かざるに、越中守普門藏人利清が足利尊氏の反逆に應じて來り攻むるに會ひしかば、定清は僧兵と共に是山の險阻に據て之を防ぎしかども、兵敗れて戰沒せり、是時殿宇僧房盡く賊に燒夷せられたり、後復た之を建て、、漸く舊に依て勢燄、熾んなりしかども、天正十年六月、僧徒温井景隆、三宅長盛を本國に復せんと欲して、國守利家公に抗敵し、堡障を荒山にも築き、界牒外櫓略ぼ成れり、公乃ち加賀金澤城守佐久間盛政の援兵來りて、本郡高畠に陣するに及び、其二十四日軍令を定め、高畠、長、村井等の諸將、步騎三千、七尾を發して芝嶺に至り、翌日黎明是山に攻め寄せんとして、先鋒の軍士會、景隆、長盛竝び僧徒の巨魁なる般若院快存、大宮坊立玄、大和坊覺笑等に遇ひて鬪ひしかば、走り荒山の新壘に保ちたり、公乃ち之を尾擊し、盛政亦兵を進めて荒山を圍み、別に將をして是山を攻めしめしかば、防ぐこと能はずして命を隕すもの衆く、景隆、長盛、快存等遁れて死せり、時に公の先鋒鼓譟齊進して是山を攻めしに、阿彌陀院俊慶等以下皆戰死せり、又此潰敗に乘じて、財寶を縱奪せんと爭ふ士卒もありしが、長連龍火を放ち、焦瓦爛礎枕籍相連りたりし、初め盛政陰かに首鼠兩端を持したりしに、是に於て僧徒の敗候を知り、反心頓に緩みて、景隆長盛等の首級を公に獻じけるなり、

寺格

七月二十八日、昰隆、長盛、快存等の首を芝嶺に梟し、五社權現を伊影山に遷して僧徒の科罪を宥し給ひたり、其十一年正親町天皇特に利家公に勅して、之を造營せしめ給ひしかば、五社權現、及び諸堂は、慶長二年を以て成り、公より社領五十石を賜ひ、利常公は更に百石を加へ賜ひしかども、復昔日の勢なく、纔に五十餘坊の趾を留めたりしに、明治維新の後に至りて傳燈を失ひ、衆徒離散し、僧房壞敗して、終に荒草離離、寒露瀼瀼の墟となり、人をして嗚咽傷心に堪へざることゝはなりにき、

〔伊須流岐山要書寫〕能州石動山天平寺

御室宮御敎示狀

勅願寺之事、古今如有來、無闕怠抽丹精、可事勤行事肝要候、抑其山者、勅願無雙、日域鬼門之鎭守、於北陸惡魔障礙之處、則爲冥應之地、依勅詔七箇國庶人等定產子、古今無異變、毎歲廻檀、御願異于他之間、永代不可怠慢之旨、衆令申沙汰通候、尙亦爲鬼門鎭護、昔日權現攝取之分際、神地領載之限域、五拾町餘之境臺者、神威自然之名委形、四維鎭座之衞護者、一體分身之妙應也、眉目莊嚴、凡情難測量、定依神詫、往昔之勅免守護司不入之鎭定、殊嚴重之所也、尙以前度如令申沙汰、猥伐木犯土之事業無之、勅宜之旨、堅可被相守候、然而近來神領寺領等之地、猥雜之趣相聞候、云神慮、云勅語、恐惶甚重也、一山之僧徒等、至末代努々無違犯、可有護議者也、仍令敎示狀如件、

寶暦七年六月廿九日僧正判

能登國石動山天平寺衆徒中

〔一山要書寫私記〕御會符御紋等拜領免許狀之寫

其山之儀者、依爲勅願所、禁裏御會符拜借之事、就歎願、格別之以御法愛、被仰立候處、今般被渡下之了、然上者御撫物守護之外、猥相用間敷、大切ニ可令護持者也、仍狀如件、

寺領

文政三年辰十月　　吉田近江守花押
　　　　　　　　　芝築地法印花押

能州石動山衆徒中

（伊須流岐桓要記）大納言樣〇前田利家御入國者、天正五年、同拾年ニ、衆徒中斷絕、無程被召直、於羅山居住仕候、其節、寺領者、百姓于今御公義樣江御納取仕候、神領境者如先規被爲立置候、衆徒無之候得共、石動山神領者、諸方諸口ゟ支配仕候事無之、然處慶長二年、從大納言樣於羅山之衆徒中、石動山江還住仕、如先規山中相守べく之旨御意御座候、扨又中納言樣〇前田利長ゟ御壁書被爲下置候、其意趣者如先規之寺法、幷山林亂伐無之樣ニ可相守之旨、御意ニ御座候、如此御代々樣ゟ御恩德を以、安樂ニ住する事忝事存候御事、右之趣被聞召上、石動山境如古法被爲立置被下候ハヾ、忝可奉存候、以上、

慶安四年辛卯五月八日　　石動山山目代判

御公事場樣　菊地大學殿　横山左近殿　御横目脇田平之丞殿

同五壬辰年九月十五日

天正十九年五拾石と、今又百石引合百五拾石、能州鹿島郡多根村之内御寄進有之候、犬千代樣在江戶ニ付、利常樣御一紙御在判、

總持寺

總持寺ハ、能登國鳳至郡門前村ニ在リ、此地ハ元ト僧行基ノ古跡ニシテ、觀音ノ靈場タリシガ、元亨中、住持定賢之ヲ曹洞宗ノ開祖道元四代ノ法孫瑩山ニ讓レリ、是ヨリ曹洞宗ノ總本

山ト爲リ、越前ノ永平寺ト寺格ヲ相爭ヒシコト一再ニ止マラザリキ、尙ホ永平寺篇、寺格條ヲ參看スベシ、

名稱所在

〔和漢三才圖會 七十 能登〕總持寺　在久志比 〇鳳至郡　禪宗　寺領七百五十石

〔全國各宗本山明細帳〕禪曹洞宗　大本山本寺　總持寺 能登國鳳至郡門前村

〔能州名跡志 二〕又寺口は、門前村といふ也、家數貳百軒計あり、總持寺の門前に、宿屋、商家、諸職人有り、家並能き繁昌の所也、道下村より貳十四町、浦上本市へ行く半途にあり、諸嶽山總持寺は、鳳至郡櫛比の庄に有て、曹洞派日域一宗の大總錄にして、寺領四百石、地方壹里四方拜領にて、都合七百石あり、境内に鬼屋村、日野屋村抔とて、寺代官兩人、星野氏三十石、江尻氏貳十五石、寺領の內配分、

創建

〔能登國總持寺文書 乾〕總持開闢緣起

日本國北陸道能登州鳳氣至郡櫛比庄有一敎院、本是行基菩薩創建之地也、本尊者觀音大士也、靈驗甚深、而國人無不敬信也、此時、院主者定賢律師也、元亨元年辛酉四月十八日夜半、定賢律師夢、觀音菩薩放眉間白毫光而來云、汝未知耶、有釋迦牟尼佛第五十四世善知識、而於當國酒井洞谷山出世開法矣、以此寺讓與彼師長、爲佛法紹隆之靈場、爲勅願所、言訖而失處在矣、洞谷開山瑩山和尙亦在永光室、座禪困睡之間、觀音大士相好端嚴而來云、以舊基與師、道了引師至一院、時院主及大衆迎接焉、師入門語云、總持一門八字打開矣、然見院中、有二階樓門、門上安置大般若經幷放光菩薩像、蓋是放光般若之謂乎、放光菩薩、大元廣善寺門上靈像、觀音、地藏二菩薩、當放光明、故稱放光菩薩、其外佛閣、僧房不知其數矣、師夢覺爲奇異、爾後師有所由至櫛比庄、定賢律師與師對談、以所夢告師、師亦以靈夢語、律師恰如合符節、故以院讓于師、師卽住持、次歲八月下旬、今上皇帝 〇後醍醐 以十種疑問、徵詰于師、遂一答之、大愜皇情、卽寺號總持、爲勅願所、修造伽藍、以爲禪刹、行房書額以寄附矣、斯時皇后懷妊、御產不安、所誓放光菩薩、忽宮中有種

堂塔

種靈異無恙王子誕生也、故上從一人下至万民無不尊崇焉、是皆所應瑞夢也、門人等記其大略以爲開闢緣起矣、

元亨三癸亥年六月吉日　　謹書紹碩判

〔能州名跡志二〕總持寺○中略其後は、大納言利家卿御簾中、芳春院殿御菩提の爲に、諸堂御再興あり、山門、廻廊、五院、諸堂、甍をかざり、三十字の塔司、棟をならべ、凡なき行粧也、依て塔司の內にも、芳春院は首領にて、寺領三十石也、其外、塔司は五石宛也、其外金割符役義次第配當也、又境內廣く、門前に唐銅の勅使橋あり、一切經藏の輪藏あり、組物彫物手を盡したり、每年開山忌日に、灯籠の會あり、又右手山を、龜山とて、龜形の山にて、開山墓所也、二世峨山和尙の御母墓所、其外武衞家の墓抔有、又左の山を鶴山といふ、峨山の墓は、寺中永壽院にあり、秋葉社鎭守神明宮の大社あり、是より十五町奧に、高尾山とて、當國觀音十九番の札所の靈地也、御瀧とてあり、此瀧に打るゝもの、諸病を治する也、其外寄願有に成就有、道の坂、岨敷て、餘程のぼる道に、西國三十三所觀音の順札あり、又金毘羅權現の大社あり、又後の秀山とて、風景也、開山御茶の冷水の井戸あり、向の山を獅子山とて、海上見おろし、秀景類なし、又尾の山を、象尾山とて、閑靜の佳景に開山の坐禪石あり、其外境內廣く、筆にも盡しがたし、誠に靈地にして、諸堂美々敷こと、言葉にものべがたき大伽藍也、

但し山門は、芳春院殿御存命の內、御建立也、棟札の表は、奉行越前の住三輪藤兵衞尉藤原の朝臣吉宗、同國住大井久兵衞尉源直泰、奉行田中仁兵衞尉重政、五十嵐角兵衞尉吉連、棟梁藤原朝臣森五郞左衞門尉淸定、脇棟梁藤原朝臣櫛比源兵衞尉重次、藤原朝臣名村甚左衞門尉正藤、此下番匠數三千七百六拾人、

當山門　加賀大納言利家卿御內所、東ノ御方芳春院殿被成建立者也、

以觀音慈眼、壽福增延、子孫繁榮、成就佛法僧之功德、依夢羅漢聖、應除災與樂、百事吉祥、修證過現

寺林

當菩提、時慶長十五庚戌歲暮春、如意吉祥

〔能登〕總持寺文書〔乾〕態令啓候、仍能州總持寺之儀、打捨置もいかゞにて候間、此度とりたて可申候、材木等をも、內々取集候樣ニ尤候、人足など之儀、藤兵衛、久兵衛ニ申付候、此たびは、こけらぶきの下地に可被仰付候事樣子、彼兩人ニ被仰聞候て令書付可給候、恐々謹言、

亥〔天正十五年〕二月十四日　利家黑印

寶圓寺

〔能登〕總持寺文書〔乾〕能州諸嶽山總持禪寺者、直續曹溪之正脈、專振洞上之玄風、特依爲日域無雙之禪苑、補任曹洞出世之道場、宜相並南禪第一之上刹、著紫衣法服、奉祈寶祚延長者、天氣如此、仍執達如件、

元亨二年八月廿八日　經顯

瑩山紹瑾和尙禪室

〔能登〕總持寺文書〔乾〕依爲能州鳳氣至郡櫛比莊諸嶽山總持寺曹洞之本寺、被補出世之地、異于他者也、彌蒙勅宜、可令出世、若老僧勞侶不叶上洛之輩者、於當山可令成轉衣者、天氣所候也、仍執達如件、

天正十七年六月廿七日　左少辨花押

總持寺

〔能登〕總持寺文書〔乾〕今度者暦日在洛、雖被屈老懷、理奏之通被達叡聞、綸旨頂戴珍重々々、寔以總持寺之再興不可如之、然者永平寺與相談、揭高札、連署之逆徒、堅可被擯出、若不相隨輩有之者、爲公儀可被仰出候條、急度可有注意、叡心之趣如斯候也、頓首謹言、

林鐘廿七日〔天正十七年〕　大內記爲良〔花押〕〔五條〕

總持寺五院代主除和尙禪室

寺領

〔能登總持寺文書乾〕能登國總持禪寺者、爲異于他勅願所、被補曹洞出世之道場、相並南禪第一上刹、可著紫衣法服之旨、雖被成後醍醐院勅裁、依前年國中兵亂、御璽、庫藏、僧房悉回祿之時、同令燒失之由、一宗之僧徒悲嘆之趣狀被聞食訖、且又元和年中守武家之下知、可任先規者也、彌專正法之興繁宜奉祈天下泰平海內安全者、依天氣執達如件、

正保二年四月廿九日　右少辨花押

總持寺衆僧中

〔寺鑑下曹洞宗〕　紫衣　本寺　能登國　總持寺

〔能登總持寺文書乾〕當山開基本願權那定賢律師

諸岳寺　觀音堂寺領敷地事

合四至分限

右件寺地之境雖非趣彌分限、東火尾限、南厨谷向谷、西限長峯、限北荒志之横道、爲末代令奉寄進之、仍而令違犯庄元百姓等、爲後見之狀如件、

元亨元年七月廿二日　權律師定賢花押

〔能登總持寺文書乾〕被仰下之覺

一總持寺御領分之內、本地九拾三石貳斗之定納、京升表ニ而、從先規直納ニ被成來候へ共、當納より、斗懸俵ニして、御代官納被申樣ニ被成度旨、尤奉存候、左樣ニ御座候へバ、京升表ヲ斗懸ニなをし申、通帳面ニ理リ書仕リ、前帳ニ引合申樣ニも可然候はん哉、

一御寺領分、御代官星野源五郎義、從先奉行被申付新地貳百石餘之口米、帳面を除而被出置候、然共當年より帳面ニあらはし、拾石貳斗七升五合、星野忠兵衛ニ被遣度候旨、右切米高ニ相違無御座候ハヾ、左樣ニ被成候而も、同事ニ可有御坐候哉、是以、先帳と引合、米高別義無之樣ニ可然

寺職

什物

奉レ存候、

一御寺御右筆、神田與三右衛門御扶持米貳石七斗被レ遣度之由、如何樣共御意次第奉レ存候、

右爲二御相談一被二仰下一一卷拜見仕候、猶以御持僧衆、被レ成二御談合一、可レ被二仰付一候、以上、

戌（天正十四年）十二月十四日　島田勘右衛門（花押）

小森又兵衛（花押）

六院御納所方

〔能登國總持寺文書乾〕寺領所付之事

壹ヶ村草高
一百三拾九石　免五ッ五歩　能州鳳至郡　走出村

壹ヶ村草高
一百貳拾七石　免五ッ四歩　同郡　鬼屋村

壹ヶ村草高
一六拾石　免五ッ八歩　同郡　廣瀨村

壹ヶ村草高
一五拾七石　免五ッ七歩　同郡　日那尾村

壹ヶ村草高百九拾八石之内
一拾七石　免五ッ六歩　同郡　清水村

草高合四百石　定納　貳百貳拾壹石八斗四升　御印　本高四百石

右除二山川、竹木、夫銀、口米一、如レ定全可レ被二收納一者也、

萬治二年六月二日　御印

總持寺

〔能州名跡志二〕總持寺、○中略寶物品々あり、後醍醐天皇勅願所にして、代々の綸旨院宣數通あり、備中の永平寺より、萬治二年に謂ありて寄附ありし、菅天神眞筆の金剛經あり、弘法大師をはじめ、諸宗開山の眞筆あり、其外什寶數多、筆に盡しがたし、常は開帳ならず、毎年七月、虫干の時、拜見あるべし、又行房卿書給ふ、後醍醐天皇の勅額總持寺と書たるあり、又五院塔司にも、いろ〳〵寶物靈像有、普藏院に、井戸よりあがり給ふ靈像の荒神あり、覺國院に、大徹和尚の龍神より捧し袈裟あり、永泉寺本尊觀音は、かな川の御神體のよし、其外什寶多し、

〔能登國總持寺文書乾〕能州總持寺住持職位之事、

緬傳鷲嶺之正脈、直匡曹洞之勝躅、祖位齊瑞龍、宗綱振天下、恢弘祖道、舉揚佛法、鎮奉祈皇國長久於萬春千秋、益榮少林之芬芳於一華五葉者、天氣如此、仍執達如件、

正平九年甲午十月三日　行房

總持寺住持禪室

〔能登國總持寺文書乾〕總持寺未來住持職事

右彼寺者、峨山和尚、讓與紹碩處也、仍於後代之住持職者、於紹碩法嗣之中、撰器用仁而可補任持職、於末代守此旨、可住持之狀如件、

康安二年(貞治元年)壬寅二月九日　住持紹碩花押

〔能登國總持寺文書乾〕總持寺山門住持職之事

紹碩門下守嗣法次第、五箇寺可住持、若此中有山門廢者、法眷等相寄評定之、仍爲後證垂示如件、

貞治三年十二月十三日　總持紹碩花押

〔能登國總持寺文書乾〕峨山門派之衆總持住番之事

奥州正法寺無底長老住院之始也、其外衆無總持住院、不可爲東堂位者也、永平寺、永光寺可爲西堂位之問答、終不落居、故自峨山門下、堅不可有出入事必矣、然而以聯判狀總持寺於末代可爲洞上之本寺儀相定者也、仍聯判如件、

應安三年庚戌八月十三日

普藏院大源判　妙高庵道源判
洞川庵無端判　傳法庵大徹判
如意庵實峯判

○按ズルニ、普藏院以下五院ハ、總持寺ノ子院ナリ、

〔佐渡風土記五〕總源寺ニ在之候宗門控書寫○中略

一日本禪宗五派、能州總持寺開山瑩山和尚弟子、二代峨山和尚之弟子五人ニ候、太源派、道幻派、無端派、大徹派、實峯派、如斯ニ御座候、以上、

太源派　雲洞庵 末寺普光照寺

道源派　總源寺

雜載

〔能登國總持寺文書 乾〕洞谷山住院之事、總持寺東堂位無落居不可住院、於向後者、總持寺爲本寺法眷門徒中一味同心可守當寺、殊更有異子細時者、拋萬事、就本寺可評議、若於背此旨輩者、不可爲峨山門下子孫、仍聯判之狀、如件、

永和四年戊午十月廿三日

安祥寬叡花押　永壽惠祐花押

佛陀碩壽花押　前總持良秀花押

前總持宗令花押　前總持祖環花押

當住寂靈花押

〔總持寺文書 曹洞宗史略所載〕永平寺與公事出入之儀者、慶長中、兩本寺共振公文之儀に付而、永平寺ヨリ被遂穿鑿、關東八州之長老衆剝取候故、寛永五年之九月ヨリ、次年六月迄、江戸於御奉行落居也、其砌、永平寺祚天和尚者、伊勢江流罪、大中寺松薰長老者、越後國江流罪也、

右諸國之僧錄所、關東之兩寺、當山五院之以評定、相極所歷然也、自今以後、亂僧錄中間敷者也、

寛永七年八月十三日　普藏院盧龍花押 ○以下四人略

瑞泉寺

瑞泉寺ハ、越中國礪波郡井波ニ在リ、明德年中、本願寺第五世綽如ノ創建ニシテ、今東本願寺

名稱 所在 創建 堂塔

派ニ屬セリ、

〔和漢三才圖會 六十八 越中〕瑞泉寺　在井波、東派院家御連枝　後小松院明德三年、綽如上人建立、末寺有三百五十餘寺、

〔一向宗源脈〕越中國井波瑞泉寺 東派院家、今連枝寺、

後小松院御宇明德三年綽如上人建立、凡末寺有三百五十餘箇寺、

〔瑞泉寺記〕驛有巨刹、曰瑞泉寺、○中略 後小松天皇明德紀元歲次庚午、眞宗第五世綽如上人所創立也、時南北戰爭未平、大谷本廟衰廢殆極矣、上人曰、京畿雖敷教化、未知僻地何如也、我將試之、出游於越中、寓其徒弟杉谷慶善家、杉谷卽八乙女山背地名、上人夙有博學宏辭之譽、應召將赴闕下、騎到山前、跑地長嘶、鞭之不前、乃堀地數尺、靈泉湧出焉、上人喜曰、我道其興乎、猶泉之滾滾不止、盈科而行、終放於海也、於是相宅於泉側、名其地曰井波、寺曰瑞泉、先記其祥也、入對稱旨、因勅講大無量壽經、賜別號周圓上人、蓋稱其德也、上人因奏曰、臣僧堯雲將創一寺於越中八乙女山下、而費用無所出焉、願許臣以十方勸進之擧、制曰可、辭還、賜以聖德太子自雕靈像、及巨勢金岡所畫太子傳八幅、乃作勸進狀、以募有緣、越中越後加賀能登飛驒信濃六州士女、奔走助役、未幾堂宇落成、於是安置彌陀尊像、及所賜太子靈像焉、宣旨爲勅願所、自此賽者漸多、上人喜曰、湧泉之兆、果不虛也、上人以南北講和之明年夏四月二十四日寂、葬於寺後山林之間、今稱大谷是也、

〔實悟記〕一堂ノ內陣ニ疊マハリ敷ノ事、越中瑞泉寺ハ綽如上人ノ御時御建立ニテ候間、疊マハリ敷ナリ、然シテ一亂ニ燒テ後、草屋ニ坊中立候時、常ノ押板ニ仕候テヨリ、近年如此此寺ヲ引テ立候アヒダ、本泉寺又マハリ敷也ト申候、三河國土呂播磨國ノ英賀、兩所共ニ蓮如上人御建立、疊マハリ敷ノ內陣ニテ候、坊主衆ノ所モ、フルキ所ハ疊ハマハリ敷ノ所多ク候ヘドモ、一亂以後ハ草屋ニ立候テ、皆々常ノ押板ニテ候本泉寺、始ハ內陣疊マハリ敷ニテ候ツルガ、シゲク燒ケ、五六度

火事ニ及候テ、後ニハ草屋ニナリ、常ノ押板ニテ候、

〔越中志徵砺波郡上〕一瑞泉寺〇中略

什物

什物ニハ、上宮太子ノ繪傳、巨勢大納言金岡ノ筆ニテ、御名御讃ハ宇多天皇御宸翰ナリ、表具ハ加賀中納言利常卿ノ寄附ニテ、毎歳六月廿五日拜ズル事ヲ許ス、其外靈寶數品アリ、

〔瑞泉寺文書〕大谷本願寺親鸞上人御影

越中國利波郡井波瑞泉寺、常住物也、

文明元年己丑七月廿八日　釋蓮如花押

願主釋蓮乘

寺制

〔瑞泉寺文書〕朱印秀吉〇豐臣　禁制　越中國北野寺内

一軍勢甲乙人等、亂妨狼藉事、

一放火之事、

一對寺内町人、不謂儀申懸之事、

右條々、堅令停止之訖、若違犯之族在之者、速可處嚴科者也、

天正十三年閏八月日

雜載

〔瑞泉寺文書〕越中國瑞泉寺、安養寺儀、近年牢籠山候、然者此砌一揆等被相催、於忠節者、如先々本知以下、無異儀可申付候條、此旨無油斷樣可被申越候、尙以隨忠義重而知行可申付候、恐々謹言

卯月三日　筑前守秀吉花押

齋藤刑部丞殿

善德寺

善德寺ハ、越中國礪波郡城端ニ在リ、眞宗東本願寺派ニ屬ス、文明三年、僧蓮如ノ開基スル所ナリ、

〔和漢三才圖會 六十八越中〕善德寺 在尉之鼻 東派院家 爲當國本願寺總錄、有檀越凡一万餘人、云々、

〔二十四輩順拜圖會 三越中〕廓龍山善德寺、東派御坊所なり 加賀の國二俣の宿より、越中福光を經て、行程八里、城端にあり、此道より越中に入るには、俱梨伽羅峠を越へず、三里難所といふ藥研のごとき谷間を通行す、難所の泥路なり、

當寺は本願寺第八世蓮如上人、文明三年、越前吉崎に御在住の砌、草創あり、本尊阿彌陀如來、惠心の作 十字名號 開山上人御眞筆 聖人御影、太子七高僧御影、蓮如上人御眞筆 其餘靈寶數品これを略す、當地の北に谷ありて、常に稱名の聲あり、名付て念佛谷といふ、又西に流れ有て、毎夜瑞光を現す、名づけて燈明淵といふ、天正の始め、織田信長本願寺と矛楯の砌、時の住職顯燈院、石山籠城に比類なき働きあり、其功淺からざるによつて、教如上人御自作の蓮如上人の御像、幷に數通の感狀を賜ふ、同十年三月下旬、教如上人、按察使法橋、富井佐渡守等御供にて、此地へ下向ましまし、當寺に數日御滯留御化導ありて、貴賤群詣する事夥し、是より東本願寺の御坊所として、今に法脈を相傳せり、

〔越中舊事記 四礪波郡〕善德寺 門跡連子 東派 寶物ニ笠紐ノ文ト云アリ

地面八丁四方、加州より御寄附、旦那三千餘、門の左右築地、本堂東向十五間四面、中の間四間半ニ六間、脇の間三間半ニ六間、緣側壹丈五寸、本堂の内丸柱五尺廻り、外ハ四尺廻、廻廊七間、夫々書院對面所等間數多し、多分金張付彩色繪、書院上段違棚等有、露地甚だ古く絕景なり、正面には硫黃山(せん)と云雅山を受て、その景言語に及びがたし、此硫黃山と云は、頂上に硫黃あるよし、此山の形、東西南北

雜載

何れより見ても少も違ひなく、誠に珍敷山なり、扨本堂より右に玄關有、白洲有、その先に樓門組物彫物見事なり、本堂の前に鐘樓有、是又近來出來、組物彫物見事なり、

〔善德寺文書〕蓮興之任二一筆一加賀、越中、能登三ヶ國門徒之儀者、善德寺可レ爲二門徒一候、更有二自餘之望一間敷候、爲レ此一筆書遣し候、恐々謹言、

九月十二日　實如

善德寺

〇中略

飛脚到來、得二其意一候、仍之先達柴田山内相動之處、及二防戰一數千討捕之由、心地好之次、御〇御下恐脱二門字一徒越中表相動候、魚津松倉如何にも堅固申付之間、可二心安一候、然に門跡至二于五ヶ山邊一御下向之由、幸之儀候間、任二兼日之首尾一國中相催可レ被レ揚二放火一事肝要候、有二遲々一者、不レ可レ然候、越中能州其國御門徒中於二發向一者、當國差合、今般凶徒之根切可レ成之條、有二其心得一、一刻片時實早々被レ揚二火先一尤候、恐々謹言、

卯月八日　景勝花押

善德寺

名勝所在

勝興寺

勝興寺ハ、越中國射水郡古國府ニ在リ、文明年中、僧蓮如ノ創建ニシテ、舊ト礪波郡土山ニ在リシガ、天正中今ノ地ニ移ル、眞宗西本願寺派ニ屬ス、

〔二十四輩順拜圖會〕三越中 雲龍山勝興寺　西派　高岡より二里、砺波郡古國府に有、

當寺は加越能三ヶ國の大守御歸依所にして、國中西派寺院の僧錄所なり、寺法宗令ともに當山

より支配す、別て實如上人より北陸七ケ國の法頭職たるべき旨御書を賜り、御本山御代々の御書數十通、將軍家國守御寄進狀數十通有之、本堂二十五間四面、本尊阿彌陀佛、(化人將來の作)御寺務職は、西本願寺御門跡御連枝を以住持し給ふなり、

〔勝興寺文書乾〕其御坊御寺號之儀、祖師北地御在居之時分、於佐渡國順德院御歸依御建立之、寺號斷絶有之樣ニ候之間、此度爲相續、其御坊被稱勝興寺と候樣ニ被仰候、此段難有可被思召旨、御申入可有之候、恐々謹言、

永正十四丁丑　七月二日　上野法眼　賴慶(花押)

下間源五郎殿

〔雲龍山勝興寺系譜〕本願寺第八世御留主職中興蓮如上人、○中略文明三年初夏上旬近松ノ坊ヲ出デ、北國ニ下向シ玉フ、○中略マヅ加賀國二俣ノ坊ニ著シ玉フ、夫ヨリ越中ノ國ヲ經廻シ玉ヒ、ツキニ利波郡蟹谷庄内土山ニ於テ一宇ヲ建立シ玉フ、(文明三年五月二日ト云々)土山御坊トハコレ也、則チ一宗相傳ノ法義ヲ弘宣シ玉フ、餘閑ニ庭砌ヲハラヒ、石ヲ立テ、樹ヲウヘテ、シバラク足ヲ憩ヒ玉フ、時ニ往昔宗祖聖人、○親鸞佐渡國ニオヒテ、順德院ノ勅ニヨリ草創シ玉フ勝興寺ノ、干戈ノ際ニテヤ、頽廢ニ及ビ、門徒ノ輩モ離散シ、巍々タル靈場モ破壞ニ及ビヌ、コヽニ彼ノ佐渡勝興寺ノ門徒某等、(藤花村住人、四郎助、樋口時、左四郎、與五兵衞等、)賚彼ノ勝興寺ニ安置アル處ノ聖人ノ眞筆ノ御本尊ヲ持シテ、蓮如上人御座所土山ノ御坊ニ來リ、コノ旨ヲ申シヌ、○中略御本尊ヲ土山坊ノ本尊トシ玉ヒ、四郎助等ノ乞ヘニ任セ、マヅ此草坊ヲ殊勝誓願興行寺ト銘シテ、勝興寺ヲ再興シ、佐渡ノ勝興寺ノ遺跡ヲ悉ク遷シ玉ヒ、先ヅ二男蓮乘權少僧都ヲ住職ト定メ玉フ、○中略

嘉祿元年、佐渡國ニ於テ殊勝誓願興行寺成ル、仁治三年、親鸞上人ヨリ元祖信念上人ヘ北陸ノ衆生化益附屬アリ、文明三年七月、越中國土山ニ移リ、彼ノ佐渡國ニ於テ北國ノ化益附屬ニヨリテ、

前來ノ通リ北陸道七ヶ國ノ法頭職トナシ玉フ、明應三年、高木場ニ移住、永正十六年二月、堂宇燒失ニ付、安養寺村ニ轉住、法頭職前來ノ通リ兵亂ノ砌、礪波半郡ヲ領ス、天正九年四月十二日、兵火ノ爲メ灰燼、同年古國府エ移住ス、

寺格

〔勝興寺文書乾〕爲御意申下候、其地御坊、一國與力中、並七ヶ國、爲縮綱札之御書被遣候、前々ゟ御定之通、爲佛法興隆之間、急度馳走可被申事肝要候、此等之趣、能々掛身相心得可申下候由被仰出候者也、

永正元
五月八日　上野法眼　賴慶花押

越中
總坊主中
總御門徒中

〔勝興寺文書乾〕爲御意申下候、北國者雪積候へば、參詣之つかへに成申ニ付、御本寺遠國御建立難成候、其地御坊北國之本寺興御定、諸式御本寺同格、越中一國與力ニ御付被成候、偏爲御法興隆候間、各馳走可有候、七ヶ之國々へ御印書遣申事候、此之旨拙身能々可申遣旨被仰出候者也、

永正元
八月三日　丹後法眼　賴玄花押

越中
總坊主中
總門徒中

寺領

〔一向宗源脈〕同州中〇越國府勝興寺院家四流寺領四百石
大守小松利常卿爲婿、故有寺領、凡末寺有三百五十餘箇寺、

〔勝興寺文書坤〕爲當寺領加增、於越中々郡古國府貳拾五石、先知高引合七拾五石を令寄進了、全可

寺制

有御寺納候處如件、

天和四年十二月廿一日　宰相利光印

勝興寺

〔勝興寺文書坤〕けはひ田として貳百石の所まいらせをき候、永く收納有べく候、仍くだんのごとし、

慶安貳二月十八日　犬千代○前田光高

犬千代在江戸につき、一判かくのごとし、

とし常花押

おゝるかた○住持圓周妻、前田利常女、へ

寺領所付之事

越中

一高九拾壹石貳斗五升　高免五ツ　氷見庄矢田村

一高七拾五石　免五ツ　同庄古府村

高メ百六拾六石貳斗五升　本高貳百石　外口米定、納壹石ニ付八升宛、夫銀定、納百石ニ付百四拾目宛、但決封納、春秋兩度

右除山川竹木全可令收納者也、

承應三年八月七日　花押

氷見庄古府光昌院

〔勝興寺文書乾〕制札　勝興寺

一府之分一圓令寄進候事

一當御寺内諸役免許事、付不謂儀申懸輩於在之者、嚴重可申付事

鼇頭

一自御坊御用付而舟於有通路者、舟役之儀、自此方手判可遣事、

一公用無沙汰之百姓等、萬一御寺内へ引入候ハ者、可及其屆候間、早速可被相搦、若理不盡雖責、於入置者、被相留、可有注進候、速可申付候事、

一不依貴賤、其身ハ有在所、就商買以下、御寺内別家與可有立置類候、彼輩中不調働在之者、曲事之旨申付候共、於御寺内相立候家者、不可及其尋候事、

一不論甲乙、依爲犯過人、可加其成敗之處、御寺内へ於逃入族者、爲御寺内許者、可有追放事、

一自在々参詣輩、諸渡舟賃馬ハびた二錢、人ハびた一錢ツヽとるべき事、付参詣坊主衆并御寺内者ニハ一圓宥免事、

右條々、聊不可有相違者也、仍如件、

天正十二年十二月日　　神保安藝守氏張花押

（勝興寺文書）坤付札寺社奉行江

古國府勝興寺御事、御歸俗之儀、從中將樣公邊江御願、西本願寺殿江者、爲御使者岡田太郎右衛門被遣、御歸俗之儀被仰達、今般御引取被成候、依之自今右寺江爲御合力、吉久御詰米之内を以、千俵宛毎年可被遣旨被仰出、其段於古國府表、勝興寺江村井久兵衛申述候條、可被得其意候、且又後住之儀ハ、西本願寺殿ゟ指圖有之候樣被成度旨、被仰達置候條、寺格等万端違亂無之樣、可相心得旨、家司江可被申渡候事、

己丑正月

右之通、御用番長九郎左衛門殿被申聞候條、爲承知申渡候、得其意可被申候、以上、

伊藤内膳印
永原求馬印

己丑二月　篠原彌助印

古國府　野呂源太左衛門殿（勝興寺家司）

原田八郎兵衛殿

〔勝興寺文書 坤〕態致啓上候、然者瑞泉寺殿上洛付、從先年貴樣へ御與力ニ被仰付候通、彌爲御意申渡候へ共、御請不被申候付、御勘氣と被仰出候、就其越中御一家衆、坊主衆中、御門徒衆中、瑞泉寺殿與不被致參會、勝興寺殿へ御馳走申樣ニと爲御意申遣候間、被成其御心得、尤忝可被思召候、恐惶謹言、

七月朔日　横田帶刀長明 花押 中略　〇

勝興寺樣

名勝所在

國泰寺

國泰寺ハ、越中國射水郡大田村ニ在リ、初メ東松寺ト稱ス、後醍醐天皇嘉暦清泉ノ二上山ニ創建スル所ナリ、應仁以降甚ダ衰頽セシガ、天文年間、僧雪庭之ヲ今ノ地ニ移シ建ツ、臨濟宗ノ一本寺タリ、

〔國泰寺由來帳〕當寺開基慈雲妙意禪師は、紀州由良興國寺法燈國師の嗣法、雲州雲樹寺三光國師之傳法にて御座候、當國射水郡二上山の內被致庵居候處、諸方之學徒追々に尋來候故、被建殿堂、東松寺と申候、道德達天聽、後醍醐天皇嘉暦三年、依勅請令參內、叡感不淺、清泉禪師號並紫衣、且又摩頂山國泰寺の勅額被下之候、依茲尊氏公、殿堂爲修覆、寺領被爲寄附、勅願所之法式行之來候、光明帝之御宇貞和元年、開山遷化に付、慧日聖光國師號賜之則塔所、今以二上山之內に有之候、夫よ

り代々住持逐參内、奉拜天顏儀に御座候、開基以來四百年之間、天下之大變及數度候得ば、寺領茂公儀之裁許無之、其上應仁二年、諸堂致炎燒、出世參内之儀茂執行難仕處、後奈良院之御在位天文十五年、當寺廿七代雪庭と申住持、右赴禁裏、遂奏聞、蒙紫衣勅許候而、只今之居屋敷に所替仕、伽藍致再興候、

〔全國各宗本山明細帳〕臨濟宗　大本山本寺　國泰寺越中國射水郡太田村

寺格

〔寺格帳〕下　無本寺　越中國禪宗國泰寺

右住職、先住幷末寺相談之上相極ル、

一住職御禮無之

一紫衣勅許之御禮、御白書院獨禮、獻上壹束一卷、御國之內貳疊目、

一御暇、於柳之間老中被仰渡、時服三拜領之、廣蓋ニ而引

一年頭御禮無之

〔國泰寺文書〕著香衣令參內、宜奉祈寶祚延長者、依天氣執達如件、

元和九年五月十三日　右中將花押

越中國國泰寺住持英叔禪室

寺職

〔國泰寺文書〕國泰寺住持職事、可令存知給之由、天氣所候也、仍執達如件、

天文十五年十月九日　右中辨花押

雪庭禪室

雜載

〔國泰寺由來帳〕勅願の古跡由緒、慥成儀に御座候故、寶永五年、先住天英、公方樣御目見儀奉願之、法燈派之總本寺に被仰付、

〔北藩秘鑑一〕總持寺　寶圓寺　天德院　瑞龍寺略○中　西田國泰寺

名所　所在　創建　堂塔

右登城之節、三御丸橋爪迄、乘輿不苦候條、得貴意、河北石川兩御門無滯相通候樣、兩所御番之輿力中江可被申渡候、以上、

戊申正月十二日（按享保十三年）

三御丸　御番人衆中

奥村伊豫守　印

瑞龍寺

瑞龍寺ハ、越中國射水郡高岡ニ在リ、初メ禪僧廣山、高岡ニ法圓寺ヲ建立セシガ、前田利長ノ歿後、其菩提所ト爲シ、利長ノ法號ニ因リテ、今ノ名ニ改メタリ、

〔和漢三才圖會 六十八 越中〕瑞龍院　在高岡　禪宗　寺領五百石　大守前田利長卿菩提所　塔頭五箇寺

〔越中國高岡山瑞龍閣記〕龍公（○前田利長）覩政雄藩、樹風北海之暇、要表其祖德修其遠忌、癸丑（○慶長十八年）春、立國祖（○前田利家）豎織田右府、其令眷其世子（信忠君）之廟於城側、鏤構一香剎、號法圓寺、以廣山和尚爲開祖、公自受菩提戒、（略）○註　故賓天之時、和尚爲公導師、（一說、迎金澤寶圓寺繁和尚爲導師、）茶毗奉葬法圓寺、（龍公營在富山城日、徵廣山和尚於金澤寶圓寺、歸依之餘、造小剎于富山、使廣山爲住居、公遷城之移小剎于高岡、名法圓寺、且因公遺囑、茶毗奉葬、安納骸于法圓寺、以故爾後、徵公（前田利常）建伽藍之日、合此法圓寺、爲一新稱瑞龍寺、即今瑞龍寺中之知客寮、故法圓寺本堂云、○一說、奉葬公于關野繁久寺、此時繁久寺在今瑞龍寺所、其後轉繁久寺于今地、而築公墓、令守之、新建瑞龍寺于繁久寺舊地云、）徵公在喪、弗堪哽咽、忽發大供養心、服闋則鳩良材、此建伽藍、併籌所構法圓寺、始號之瑞龍寺、（略）○註　斯後正保乙酉年（○二）再興、（按是明年丙戌、以當瑞公三十三年忌辰、○中略）至明曆丙申年（○二）落成、（按自乙酉至丙申則經十二年、而成者甚矣、一說、自承應甲午（三年）至明曆丙申、然則中間三年而成也、此說得之歟、○中略）堂閣之鉅麗、廊寮之雄富、足以稱大邦功德院也、此擧也、命良匠山上喜廣（俗稱右衛門）取其造法於贋那萬壽寺、（○下略）

〔高岡開闢由來〕一瑞龍寺御開闢は、瑞龍院樣〇前田利長富山御在城之時分、御意を以、開山廣山和尚御招被成、慶長十八年、高岡へ右和尚御引越、法圓寺與號、一字御建立、瑞龍院樣御逝去之後、瑞龍寺與寺號改申候、

御再興之年號幷御奉行等之事

一山門鐘樓御建立、正保年中、

御奉行　佐久間彌左衛門　御大工　山上善右衛門
　　　　山路九郎兵衛　　　　　　黑田太右衛門

一大方丈御建立　明曆年中

立前御奉行奥村河內殿　笹島市右衛門
　　　　　　　　　　　中村　新　照

加御奉行　近藤　數馬　御大工　山上善右衛門
　　　　　澤崎太右衛門　　　　中村半次〇中略

右御再興は、正保年中より追々諸堂御建立被仰付候、明曆二年二月より、御普請初め、寬文三年五月迄、御寺成就仕候、

一寺領知三百石御寄附、則御一行幷御制法之御判物御座候、

一寺屋敷總步數三萬三千六百四十三步御拜領地之內、　三千六百九十步　下馬道打廻　千五百步　東漸院屋敷　千百步　龜占庵屋敷　千百步　林洞庵屋敷　千百步　法性庵屋敷

〔國事昌披問答〕高岡瑞龍寺之開基は如何、答云、金澤寶圓寺廣山長老也、利長公富山御在城之砌、廣山は富山に隱休し、自分に高岡に寺取立引越在候處、瑞龍公〇前田利長御逝去の砌、御位牌被立、其節

より寺號瑞龍寺と改り候、承應年中より今の所也、繁久寺は、永祿年中、於射水郡加納中務と云者發起の由、其後高岡へ寺引越在之候處、正保三、利常公より、瑞龍公の御墓守被仰付、寺領五十石被下之候、

〔三壺記十四〕越中高岡の利長公の御菩提所幷御墓所御造營、正保年中に、山門は佐久間彌右衛門御奉行して出來す、御墓所に、繁久寺は、昔守山に御在城の時、海老坂の繁久寺御參詣の御寺成を、御墓所へ被移、扨明曆年中に、御大工山上善右衛門に被仰付、漢朝の徑山寺の指圖ニ地を爲作、御覽被成、所々御好出來し、御奉行人代はり、高岡に相詰諸人等無油斷、大方丈には、御本尊は尊靈の御位牌奉崇建、額は則瑞龍院と、隱元禪師の手跡也、御佛殿に有て、唐佛の釋迦如來兩脇に有て、大現達磨の兩尊者、幷文珠普賢二大菩薩を令安置、額者國筆にて大佛殿とぞ書れける、禪堂には陳如尊者安置して、額を枯木堂と打、大庫裏に韋駄天、額者講釋堂と打、衆寮は茶堂、小方丈は式臺也、小庫裏は飯臺座、浴室は湯殿也、拔多婆羅尊者、淨堂者雪隱也、焉首娑摩明王、鐘者堂の鐘の銘者隱元禪師の筆作也、隱元の額の外、何茂額者玉母の筆跡也、山門には觀世音菩薩、十六羅漢、鎮守堂に者大慈大悲觀世音薩埵龍天、白山勸請の本尊に、三百石永代寺領被寄附、五塔頭、繁久寺に百石、東漸庵、法性庵、林同庵、龜占庵、康元寺、是等に五十石三十石宛被執行、御茶湯の御茶、毎年星野上林新壺に詰上て、日々夜々渴仰無申計、午未申三ヶ年にて成就す、言談に不及天下無双の大伽藍職掌の御寺造り、北國珍敷御事也、拜見の人々目を驚かす、誠に御代を請させ給ふ報恩謝德の御心ざし、甚深無上の御孝養、恐々奉感と、諸人難有奉存、御作事濟御一ッ御人持方、御世中者不及申、御佛殿の御鐘堂佛具寄進、中々筆紙に盡事、難及御事なり、

〔金府舊記〕一問、高岡瑞龍寺御建立は、何頃に候哉、明曆元年出來也、但三ヶ年にて成就す、此寺は守山御在城之時、繁久寺と云寺有り、是を今の繁久寺之所へ被移、御墓を被築、其舊地に爲瑞龍寺公

江、中華傳山寺を摸し建立、本尊は唐佛之釋迦、寺門之額は、隱元禪師之筆也、寺領も三百石を付給ふ、此時より瑞龍公之御墓所へ、毎月二十日、茨木右衞門、山森吉兵衞、富永勘解由左衞門、富田內藏允、神尾數馬、梅四郎左衞門等、御代參を勤、萬治二年に至りて止、

寺領

〔瑞龍寺文書〕以分國之內、從先年寺納之地相改加而參百石之所令寄附畢、全可有所務之狀、仍如件、

承應三年十二月廿日　加賀少將　綱利

加賀守就在江戶、一判如此、　小松中納言　利常花押

瑞龍院

寺制

〔瑞龍寺文書〕禁制　高岡瑞龍院境內

一猥剪採竹木事　一殺生之事　一牢人隱置事

右堅令停止訖、若違犯之輩於有之者、可處嚴科者也、

承應四年三月廿日　利常花押

子院

〔高岡開闢由來〕一三百石　瑞龍寺　一五拾石　塔司知藏　東漸院　一三拾三石　塔司平僧　休洞庵

一三拾三石　同　龜占庵　一三拾三石　同　法性庵

雜載

〔北藩秘鑑　一〕總持寺　寶圓寺　天德院　瑞龍寺○中略　西田國泰寺

右登城之節、三御丸橋爪迄、乘輿不苦候條、得貴意、河北石川兩御門無滯相通候樣、兩所御番之與力中江、可被申渡候、以上、

戊申正月十二日按享保十三年　奧村伊豫守印

三御丸　御番人衆中○中略

一寶圓寺、天德院、瑞龍寺之隱居も、登城之節乘用之儀、現住同樣之事、

名稱 所在 堂塔　寺格

國分寺

越後國國分寺ハ、頸城郡五智町ニ在リ、聖武天皇ノ勅願ニシテ、天台宗ニ屬セリ、

〔和漢三才圖會 六十八 越後〕五智山　在二同郡一○頸城　濱邊自二高田一二里　寺領二百石　號二華藏院一本尊五智如來、
寺中有二親鸞上人影像一

東　阿閦如來一名寶幢佛
南　寶王如來一名華開佛
中尊大日如來　西　阿彌陀如來
北　不空成就如來

聖武帝勅願寺、方十三間東向、飛驒工匠建レ之、其五佛希志國作レ之、而爲二雷火一堂及佛像回祿、作二新佛一納二古佛灰於體中一焉、唯二王門無レ恙、其二王行基作、

〔二十四輩順拜圖會 三 越後〕安國山國分寺 鬼伏より九里、巨多より二丁餘、國府の内五智町にあり、
當寺は天台宗にて、五智の如來を安置す、津梁院と號く、本堂十二間に八間也、聖人配流せられ給ひし時、暫く此寺の境内に在けるとて、御二間四方の堂に、聖人御自作の御影像を安置せり、後なる山に鏡の池有、聖人御姿を此池水に寫して自像を彫せたまふ、依て鏡の池と稱す、此所を竹の内の御舊跡といふ、

〔寺格帳 上 天台宗〕御朱印高貳百石 山門正覺院兼帶故別段御禮無レ之　越後國五智　國分寺○中略
右拾壹ケ院住職、從二御門主一被二仰渡一、
一入院御禮無レ之

一年頭御禮、御白書院御次一同、獻上一束一卷、御暇無之、

寺領

〔寛文四年御朱印帳天台宗〕二百石　越後慶安元年二月廿四日　五智國分寺

用途

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻〇中略

越後國〇中略國分寺料二万束、

雜載

〔梅花無盡藏三上七言絶句〕越之後州國分寺、五智梁上有一面琵琶、蓋白盲祈而得明眼、掛之於佛前、爲靈兆云、、

堂宇如山冠海涯、如來皆五寶蓮華、白盲開昔得明眼、梁上至今留琵琶、

〔日本行脚文集一〕名高き越後の護國山國分寺の大伽藍は、聖武帝御建立日域第一の五智尊、座像五尺有餘、放光蓮臺に膝をならべて座し給ふ、則ち春日明神のおほんさし圖、寶問子芥子國の靈刀といへり、信に金容儼然たる形相、五智圓滿の五相好の瓔珞は、名古の海原に影を浸して、天上天下に万月を耀し、五性本有の五白毫は、雪の高山に光を移して、三千大千に一鏡を掛る、しばらく念じ、古歴七堂の礎、眺望の記もかゝまほしけれど、夕陽むなしく雲の睦木、虹の欄に落れば、九輪の梢かくるゝまで斬、〇下略

淨興寺

名稱所在

淨興寺ハ、越後國頸城郡高田ニ在リ、僧親鸞ノ開基スル所ニシテ、弟子善性ノ傳領ナリ、此寺原ト常陸國稻田ニ在リシガ、後屢、移轉シテ、遂ニ今ノ地ニ移ル、眞宗東本願寺派ニ屬セリ、尚ホ此寺ノ事ハ、常陸國西念寺篇ト互ニ相關聯スル所アルヲ以テ、宜シク參看スベシ、

〔和漢三才圖會越後六十八〕淨興寺　在高田、東派眞宗中九院　末寺百有餘寺

創建
堂塔

親鸞上人、貞永元年、常州稻田郡雪吹谷村、建寺附周觀、周觀後鳥羽帝第二王子、出家登叡山、後在常州、歸依鸞師、爲弟子、改名善性上人、移信州長沼、賴朝公寄敷地三千貫、永祿年中、川中島之役、兵火燒寺院、再三換地、今在高田、昔北州五箇國僧錄也、今爲當國一州之僧錄、寶物數多中、有川越名號、

〔二十四輩順拜圖會三後編〕歡喜踊躍山淨興寺（東派院家同所（高田）寺町にあり）

本堂十五間、本尊阿彌陀如來、（小野篁の作）當山は正數開山親鸞上人開闢造建し給ふの靈場たり、○中略抑高祖聖人開闢し給ふ由來を尋るに、聖人御年四十歲の御時御歸洛有て、都に興正寺を建立し給ひ、同年の多の頃、卽建曆二年、常州に島の郡司武弘が宅に下向まし〳〵けるが、○中略此時に當國の御弟子、御門葉の輩、頻りに一宇を御建立の願ひ奉る、聖人甚御歡び有て、卽常陸國笠間郡稻田の鄕雪谷といふ所に一宇を創建して、歡喜踊躍山淨興寺と號け、十餘ヶ年の間居住有て、所々に往返し、御化道あらせ給ひけるが、竟に貞永元年の春、聖人御年六十歲にして、稻田の御坊を御發足有せられ、御歸洛の道に赴き給ふ時、此御坊を御弟子善性上人に讓り與へ給ふ、○中略善性上人は、淨興寺第二代の住職として、專聖人の遺法を弘通したまいけるが、文永五年八月廿日、御年七十歲にして大往生を遂給ひぬ、其後此稻田淨興寺國亂兵火の災にかゝりて、暫く總州磯部といふ所へ靈場を移したりしが、再び信州長沼に寺株を引うつして再建す、此とき鎌倉將軍より寺領の田園三千貫寄附有て、嗣子相續し、數代を歷たり、然るに永祿四年川中島に軍有し時、又もや兵火の爲に寺院悉く回祿す、其時の寺務田園寄附の墨付を取出さんとて、堂中に馳入、猛火の爲に燒死せり、其息巧圓未五歲也けるを寺僧等守育し、寺系の古書寶物諸ともにこれを持ち、小市といへる里に蟄居したりしが、謙信の信州を領せられし時、改めて別府といへる所に寺を營み、上杉景勝の時、當國春日山の麓に方百間の地を寄附有て、當寺を爰に引移す、堀久太郎當國領知の時は、又福崎へ移住せしが、暫くして上野介領地の時に、今の此地へ移て、方百間の境地を得

什物

たりと云云、

〔二十四輩順拜圖會三越後〕歡喜踊躍山淨興寺○中略

靈寶、九字名號、紺紙金泥聖人御眞筆 六字名號、聖人御眞筆 上宮太子眞像、聖人御作、稻田にての御本尊、蓮座御影、親鸞上人、善性上人の御蓮座なり、二十一ヶ條制狀、高祖上人御眞筆にして、歡喜踊躍山淨興寺、奥書に善性上人とあり、法然上人御眞影御自畫、蓮如上人御裏書、寺號の額、高祖御眞筆

雜載

〔一向宗源脈〕越後國高田淨興寺東派前出、有善導大師眞影、從大唐光明寺傳于叡空、叡空傳之源空、源空傳之親鸞、親鸞授之當時開祖善性、但越善性有同名異體、其一人者、下總國豐田郡石下村東弘寺開基善性房、是也、

〔淨興寺文書〕元祖上人并七上人之御遺骨、今度隨成等院殿御願望被分授之處、尤大切之至、信仰不可過之候、是等之旨趣、宜演謝辭之由、任其命候者也、不宣、

五月廿五日　智光院 從因 花押
　　　　　　靈瑞院 從高 花押

淨興寺御房

本誓寺

名稱 所在 創建 堂塔

本誓寺ハ、越後國頸城郡高田ニ在リ、僧親鸞ノ弟子敎念ノ開基スル所ナリ、此寺初メ信濃國高井郡ニ在リテ、眞宗寺ト稱セシヲ、蓮如ノ時、寺號ヲ本誓寺ト改メ、尋デ今ノ地ニ移セリト云フ、眞宗東本願寺派ニ屬ス、

〔二十四輩順拜圖會三越後〕笠原山本誓寺　東派　國府より一里半、越後頸城郡高田に有、

當山は、東本願寺御門跡の院室にして、即御門主の幼君御連枝御入院有之、寺務職と成り給ふ所

也、本堂十三間四面、本尊阿彌陀如來、(惠心僧都の作)塔中八ヶ寺、　往古は下總國相馬郡布川といふ所にて、眞言宗の寺也けるが、高祖聖人に謁し奉り、御教化を蒙り、竟に御弟子と成て、釋敎念と號す、敎念眞宗に歸依有ける其謂を尋ぬれば、敎念或時佛前に坐して、阿字の觀法を修せしめ、即心成佛三密瑜伽の觀念に心を凝し、閉目開目して有けるに、誰云共なく、佛室の外に聲有て、弘法は即身に遍照金剛の位に住し給ふとはいへども、實は彌勒の出世に逢ざれば成佛の極意を悟る事能はず、故に野山の奥に入定す、しかるに末代愚盲の凡僧いかでか觀法を成して悟道する事有んや、笑ふべし〳〵といふ、敎念何者なるやらんと其まゝ立て戸を開き見れば、更に人有事なし、爰に於て敎念思へらく、今戸外に聲有しは、全く人の雜語にては有べからず、是難行の成じがたき事を我に告げ給ふ大師の示言成べし、去にても、以何なる道を行して迷ひを遁るゝ事を得んやと、いとゞ心の苦しげに成りて、伏轉びて有しほどに、幸なるかな、祖師聖人、此時稻田小島邊にましまして、末世の要法、彌陀超世の悲願海を弘通したまふよしを聞及び、直に聖人の御許に詣で、御敎示を蒙り立所に信心受得の身と成り、一向專修の行者と成りぬ、其後敎念坊、信州高井郡井上笠原と云ふ所に一宇を造立有て、眞宗寺と號せしが、代々を歷て後、蓮如上人の御時、請有て寺號を本誓寺と改め、其後又當所へ寺を引移すと云々、　靈寶、高祖聖人御自畫、等身の御影、(敎如上人御染)狀川越の名號、(柿崎彌子屋が老女に賜る由來は、柿崎御舊跡に記ス、)聖德太子御自畫御影、(御讃は聖人の眞筆)九字六字名號、(御染聖人の御眞筆)後水尾院御宸翰の名號、其外靈寶數十品、靈像古筆等、數多有、略之、

〔本誓寺記〕記錄

鎮守府將軍源義家之嫡男、對馬守義親之息井上二郎滿實、(信州井上之城主、後隱岐守、)弟井上九郎滿盛之息井上太郎滿政、文武二道之名將也、然るに滿政世の無常を觀じ、頻りに菩提心おこり、佛緣不淺也、終に居城を忍出、下總國相馬郡布川鄕眞宗寺(眞言宗、弘法開基、)に至り、剃髮有之、法名敎念と改、其頃親鸞聖

人、常陸國稻田之鄕にて、專修念佛を弘通し給ふを聞及び、□□有緣之要路を問ふべしと、稻田に至り、問答有りて、終に□□御門弟□□□品之御形身被下置候、○中略

一十世超賢儀、道德堅固にて、學才勝れ、仁慈之心深く、軍慮にも堅く、義勇勝れ候ものに付、近鄕遠境迄も、能敎諭行屆、不慮之備をもいたし置候故、近鄕は悉く治り、百姓業を樂み罷在候處、甲斐國之大守武田信玄と、信州之大守村上義淸高梨政賴を始、信州之地士と及合戰、不靜成、爲兵火傳來之重寶失ん事を悲み、加州小山は有緣之土地故、衆々弟子唯念を遣し置、爲致敎化けるによつて、天文十九戌年、超賢儀重寶を攜へ、妻子を引連、笠原を發足いたし、小山江罷越候所、北越頸城之郡は、隣國と申、分て有緣之土地に付、春日山東里福島村江著、逗留之間、門徒同行を化導いたし罷在候處、謙信之家來本庄入道宗綱、石田總左衛門尉定賢より、對面いたし度由、使者差越候處、兩人列座ニ而、衆々貴坊之勇才勝れ、僧俗共に從服いたし候段、景虎は勿論、我等共迄も及承罷在、能時節も候はゞ、拜顏いたし度候處、幸福島村に此節御逗留之由歡喜不少、失敬をも不顧、來臨を希ふ、勞を不厭預來臨、歡び何事歟是にしかむ、扨先公爲景疑惑之筋にて、國內之淨土眞宗之寺院被追拂候所、右寺院、加能越三ケ國ニ散在いたし居候由、然る所、景虎が將軍義輝公へ使者被差登候節、右諸寺院度々障碍をなし、難儀に及べり、貴僧加州小山に移住有之者、深智勇才を以、三ケ國に散在之諸寺院江、敎諭有之不致障碍、道路無差支樣なし給らば、爲恩賞何成共御取持可仕旨、折居て被賴候に付、超賢儀も、難默止被致領承、夫々小山へ罷越、家來林丹藏を以、越前吉崎御坊江差遣ス、○中略

一同年五月中、勅使御名不知將軍使同斷御下向在之、景虎彈正少弼從五位下に任せらる、依而翌天文廿二年の春、雪消次第、被致上洛候間、路次無差支樣賴入候、是全く私之儀にあらず、天子將軍江之爲御禮上洛致す事に候間、三ケ國江散在之諸寺院へ、得と被致敎諭、上下道路障碍不仕樣、景虎厚

寺格

く御頼被申候、右爲謝禮本誓寺儀、北越江移住有之候はゞ、建立之義は、景虎より可致寄進、并三ヶ國江散在罷在候諸寺院、本國江爲致歸住、前々之通無心置教化いたし候樣可申付旨、使者被差遣、（此使者名不相知）并宗綱定賢よりも類之書翰（此書翰、如何相成候哉不相知、）差遣スニ付、早速領承いたし、散在之寺院へ左之通申觸、

此度越後國春日山之城主長尾景虎就上洛、通行筋致守護、失禮無之樣、馳走可被致事簡要ニ候、右之趣門徒の面々江も不洩樣可被申通候、以上、

年號月日　　小山御坊役者

御坊主衆中（○中略）

一永祿元午年、春日山東里五村におゐて、本誓寺御堂貳拾間四面ニ御建立、（出村と申は、福島左内門前春日新田黑井右之内左内村ニ、壹町四方之境内被下候、）同七月十三日御遷座、十八日迄法會執行有之、參詣之群集夥敷、然るに同廿日、老女一人來り、柿崎濱之ものにて、先祖は扇屋何某と申、親鸞聖人御止宿なされ、御出立之砌、爲形見九字名號被遊授與、女房は聖人の御出立を不存、御跡をしたひ、聖人米山寺川を越させ玉ふを、我れにも御形見を殘し給はれと申ければ、聖人川向にて、女房持參り候紙江向ひ、筆を點じ給ひければ、六字名號あらはれける、依て川越之名號と申也、先祖より安置致し候へ共、おがむものもなく、當國には淨土眞宗之寺院無之候所、此度御領主樣より、當寺御建立にて、古今希成御繁昌難有事也、六字名號當寺江差上候はゞ、宗門繁昌之基、先祖も可致喜悦とて差出候に付、超賢儀、願之趣尤之事なれば、末々御繁昌可有之旨、老女江申聞被納、今以當寺之重寶なり、

〔本誓寺記〕定（○中略）

一本誓寺儀は、越後出羽佐渡三ヶ國之錄所ニ候得者、地内之者共、宗掟明白にいたし、末山之僧侶、如法之義、年々不洩樣申觸、并末寺之中、若亂方等有之節は、贔負偏頗なく、取調、万一於不分明ハ、

可ㇾ差出ㇾ事

一學問所之義者、都而學頭之可ㇾ爲ㇾ指揮ㇾ事、

一御本山勸金等被ㇾ仰出ㇾ候節、配下江は、本誓寺より申觸取集同寺より可ㇾ相納ㇾ事、

一本誓寺末山は、與力末寺に候上は、以來中本山と可ㇾ唱ㇾ事、

一本誓寺末寺之面々、同寺添翰なき願は、於ㇾ御本山も取上無ㇾ之事、

一與力末寺上納諸屆懸志等之儀は、領主ゟ御賴入有ㇾ之、旁厚思召を以、本誓寺相續方爲ㇾ助力、永々貢被ㇾ置候間、疎意ニ存間敷事、

一本誓寺非常之節は、與力地內七騎門徒可ㇾ遂ㇾ評議を、都而一己之執計致間敷事、

右ヶ條之通相心得、子孫迄寺國法共、潤敷可ㇾ致ㇾ相談ㇾ者也、

永祿元年　　下間按察法橋
　　　　　　下間瀨熊法眼

越後五村
本誓寺

〔本誓寺文書〕今般越中表不ㇾ計令ㇾ出馬ㇾ之條、分國中之諸坊主共被ㇾ驅集、急度走廻肝要候也、

天正十年五月二日　景勝上杉朱印〇

本誓寺

乙寶寺

乙寶寺ハ、俗ト乙寺（オトデラ）ト稱ス、越後國蒲原郡乙村ニ在リ、創建詳ナラズ、新義眞言宗ニ屬シ、京都智積院ニ隷セリ、

名所 所在 堂塔 寺領

雜載

〔和漢三才圖會六十八越後〕乙大日 在五智山巽三里自村松一 寺領百石

本尊大日如來 阿彌陀 藥師 三尊、皆有寶冠、行基作、 號如意山乙寶寺、本堂方六間、東向

有如意輪觀音、地藏千體佛、閻魔堂、三重塔、鎭守社、

〔社寺取調類纂百七十三〕一智積院末 本山 越後國蒲原郡乙村中木寺乙寶寺 住職 法順

一境內壹町四反貳畝拾五步　一滅罪檀家四拾五軒　一除地山林無反別　壹ケ所　外庵

室壹箇所　但獨照庵ト稱、年曆不詳、岩船郡名割村造立空庵ニテ寺持ニ有之候、

右一乙寶寺塔中　寶幢院

〔法華驗記下〕第百廿六越後國乙寺猿

越後國乙寺、有持經者、攝心不亂、調身閑居、讀誦法華經、更無餘念、爰二猿來住前樹上、終日聞經、朝來暮去、二三月間、每日不闕、來聞此經、恠思此事、漸近猿邊問曰、汝猿何故常來、若欲讀誦抄法華經、猿向沙門、振頭不受、若欲書寫經、猿含咲喜、合掌頂禮、持經者告言、若欲書寫經、我當爲汝書寫法華、猿聞此語、從眼淚出、頂禮沙門、下樹還去、從其已後、逕五六日、有數百猿、悉皆召物來、置沙門前、見之紙料、剝取樸木皮、各持來矣、沙門見之、生希有心、以樸皮作經紙、畢、選定吉日、書寫始此經、從書經日、每日不闕、二猿各持薯蕷來、臨秋冬時、栗柿等種々菓子、採持供養、至第五卷、一兩日間、二猿不來、沙門恠念、出寺近邊巡見山林、二猿傍置數本薯蕷、土穴頭入、二猿死了、沙門見畢、流淚悲歎、收其死屍、讀經念佛、訪彼菩提、沙門以其猢猿法華經不書寫畢、剩佛前柱奉籠置了、其後已逕四十餘年、紀躬高朝臣、成其國刺史、著府已後、不勤神拜、不始公事、最初參向三島郡乙寺、守問住僧、若此伽藍、有不書畢抄法華經、諸僧徒求、更不御坐、仲持經者、年過八十、老耄猶存、白長官言、昔猿書始經御坐申、長官大喜、禮老僧云、不審、其經何所御坐、爲果其願、任此國守、我昔猿身、依持經者、聞經發心、依聖人勸、書爲法華、聖人存生時、弟子至此國、是非小縁、未曾有事、唯願、聖人書畢此經、令滿我願、老僧聞守語、流不覺淚、悲歎無限、取於件經、

一心精進、書寫既畢、長官又書寫三部法華經、供養恭敬、勤修善根、不可算數矣、沙門法華經力、得生淨土、寫經二猿、因一乘力、轉生成國守、發道心修善、後生妙果、宛如指掌焉、

〔越後國乙寶寺緣起〕此寺草創より以降、星霜ひさしくつもりて四百二十八年、龍代さらに繼て三十六代、其間堂舍塔廟および千僧坊やうやく荒廢して、今わづかにのこるところは、金堂二王堂ばかりなり、于時高倉院御宇安元二年丙申、越後國に城太郎助長といふものあり、其伯父に宮禪師といふ聖あり、承安四年の秋、空山の猿月にさけび、安元元年の春、桃李の花風にちる、諸行無常のことわり眼にさへぎり、生者必滅のかなしみ心をいたましむるをり、今此きのと寺松原の中に、いほりをむすびとぼそをとぢて、修練觀行功をつむ、惠日西海にかゞやく、春朝は寶蓮を安養界の池にひらき、明月松林にかゝる、秋夕は、道樹を都率天の雲にもてあそぶ、愛上人孤庵の邊に一の古木あり、其もとより安元二年の天瑞光より〳〵たつ、諸人是ををがみて奇異の思ひをなす所に、又一の幡まひくだりて、其上に飄轉すること七日七夜、人おほく是を見て不思儀の思をなす、まことに功德所成の綵幡、如來應作の幡なれば、五百塵點の慈悲番々におほひ、一十二番の增道所々にめぐれり、さてこの幡風に飄り舞あがりける所に、鈴は少々とゞまりて幡はつひにさりぬ、○中略告のごとく彼木をきりのく、其まはり二丈五尺ばかり也、其跡をほるに、塔の火鍵寶鐸などをほり出す、そのまたに四五十人してひく程の石を四ふたにして、面のひろさ六尺七寸、まはり二丈なる大石あり、其面には二重に穴をかまふ、人是をみて石の釜となづけ、又は石の唐櫃といふ、はじめの一重は輪の口廣さ二尺二寸、ふかさ一尺、次の二重は輪の口廣さ八寸、ふかさ四寸也、其中に一粒の佛舍利まします、さて石の根をあらはさんと、二三丈ばかりほるといへども、根いまだあらはれず、人みな金輪際よりおひいでたるかといへども、まことに凡夫のかまふる所にあらず、權化のなすところか、其故は乙浦は洲濱の松原にして小石だにもなし、況や大石

をや、略○中おの〳〵をがみたまへとつげければ、其邊にありける人々助長をはじめとして、人は童部にいたるまで、いそぎあわてゝ、石のもとへよりて、御舍利ををがみたてまつる、略○中御舍利の出現不思議に神變奇異にましますよし、高倉院御宇安元二年して、當國の國司奏聞しければ後白河院聞食て勅定ありて、御舍利をみやこへ御奉請ありてをがませおはします、昨日は滅後に生じたるかなしみを、祇獨薗の露にそへ、今日は舍利にあへるよろこびを歡喜樹の花に開ぬと、一天歸依の光、あまねく城月をてらし、三禮歌讃の聲はるかに雲の上にひゞく、御渇仰のいたり、金塔をつくりてをさめたてまつらむと勅定なりしかば、大納言禪師珍尊城太郎助長等仰事を承て、純金三重の塔婆を建立す、後白河院かの塔の中に、御舍利ををさめたてまつりて、ながく朝家の御本尊とせむ、聖はかへるべしと勅定なりしかば、其時聖なく〳〵花洛をたちいでゝ、ひとり古鄕におもむきけん心のうちいかばかりぞや、さて歎々乙寺へかへりて、御舍利は都にとどまらせ給ぬといひければ、人みな是をかなしみて、石座のもとに集て香をたき花を供せしありさま、沙羅雙樹の昔、人天大會、如來茶毗の跡を供養し、又釋尊の滅後に羅什玄弉等の聖者たち、在世のむかしをこひて遺跡を五竺の境にもとめ給しがごとく、近もとほきも人おほく砌に集て、御舍利すでに都にとゞまらせ給て、此處にはむなしき石座のみのこれりとかなしみければ、一子の慈雲ひろくおほひて、塵點の利益所をきらはずといへども、德因あつくまし〳〵て、安置を乙寺にとゞめたまふ御舍利なれば、濟度をかれにたれんと、安元二年七月に、もとの石座に御舍利とびかへり給て、いまにこの寺にましますと、

詞書　正二位行權中納言兼春宮大夫臣源朝臣　于時貞和三年八月　日　繪所正五位下行加賀守藤原伊久書之

名稱所在

創建

本成寺

本成寺ハ、初メ青蓮華寺ト號ス、越後國蒲原郡本成寺村ニ在リ、僧日朗ノ高弟日印ノ開基ニシテ、日朗ヲ以テ初祖トナス、第三代日陣ノ時、日蓮宗分レテ一致、勝劣ノ二派トナルヤ、此寺勝劣派ノ總本山トナリ、以テ明治維新ニ至リシガ、爾後勝劣派中各、分立シテ、本山ト稱スル者多キニ及ビ、此寺復タ勝劣派中一派ノ總本山トナリテ、派名ヲ法華宗ト改稱セリ、

〔越後名寄 四蒲原郡〕本成寺　薄曾根村　寺領三百石

開基日印上人、勝烈派之本寺也、關東中西國ヘ掛テ、末寺凡七百箇寺有之、

日印ハ日朗ノ弟子、日朗ハ日蓮上人ノ弟子也、日印ハ越後三島郡ノ出生也、鎌倉殿中問答ニ見ヘタリ、

〔和漢三才圖會 六十八越後〕長久山本成寺　法華　寺領　開基　日印上人　九老僧之内

此所ヲ世ニ本成寺村ト云、西口ノ制札ハ謙信ノ立ル所、東口ハ寺ヨリ立、

〔本成寺文書〕本成寺置文

右當寺者、後五百歳之正法、本門之三大事之所住道場根本也、然則奉レ貴二仰先師朗〇日之御遺法一、門徒道俗、諸國貴賤、偏守二此旨一、彼寺可レ爲二門家棟梁一也、若經卷所住之處、卽是道場、諸佛於レ此轉二於法輪一云々

嘉暦二年十月八日　日印花押

〔本成寺古文書 八ノ二十九號〕謹奉レ呈二上本成寺領達一上聞一、頂二戴御朱印一、請下永挑二法燈一、令中法久住上狀

一本成寺者、從二日蓮上人一第三祖日印聖人、於二越後國蒲原郡大面庄薄曾禰村一、永仁五年令二開闢一之寺也、因レ有二靈瑞一、初號二青蓮華寺一、後改二長久山本成寺一也、

一日印者生二于越後國一、自レ幼爲二天台之學徒一、永仁二年、三十一歳而遊二相州鎌倉一、値二第二祖日朗聖人一、改

元宗而歸伏日蓮宗門、卽隨日朗深理之法、其後發志願歸越州、建立彼寺、而復遊鎌倉、元應元年秋九月、於相模守平高時之殿中、對諸宗彙學之十宗坊、并廣學多智之眞俗等、委糺明法之邪正、終勝問答、顯日蓮宗旨建立之大意也、依是日朗感美殿中問答之功莫大、而自日蓮傳受之法財爲塔中所付之本門三大事之表示、以三ヶ重寶付日印也、

其讓狀云、讓與日印所、右大聖人三寶讓狀、日朗法門悉付屬日印、仍讓狀如件、

元應元年己未十月十三日　日朗在判

一日印以彼傳受三ヶ大寶、納最初轉法輪之道場本成寺也、故日印置文云、○中略文

一本成寺第九祖日覺依有廣學之普聞、後奈良院御宇昇進上人僧都僧正大僧正官位、下賜綸旨云、

天下安全、寶祚延命之祈念、專可勤所也云々、

一本成寺者、最依爲古跡、任先規例、越後國守護長尾實景、上杉景虎、景勝、故溝口伯耆守以來、至當出雲守、三百石之寺領被仰付、代々證文有之也、

寬永二十一甲申年八月　越後國長久山本成寺沙門日柔

〔本成寺古記二十〕願蒙於十方檀那之助成、爲慶營於總門及佛像等、牒并緣起

抑越之後州本成寺者、伏見院御宇永仁年中、摩訶一阿闍梨日印、聖人草創之靈區也、印師曰、本門三大事所住道場之根本也、然則事師仰先師御遺法、門徒道俗、諸國貴賤、偏守此旨、彼寺可爲門家棟梁云云、夫本門三大事者、所謂本門題目、本門本尊、本門戒壇也、蓮師曰、迦葉、阿難、龍樹、天親天台傳教未弘大法矣、天台大師者、出興於像法之世、弘演於理性圓具迹門之旨、日蓮大聖者、出現於末法之時、廣宣於事圓宗極本門之法、自爾已降、宗門之法水、嫡傳而流此、在此師此寺哉矣、印公名摩訶一者、蓮祖佐州謫旅之節、宿于越後寺泊、夢路於摩訶止觀第一起、標之雖重伏後、由茲字摩訶一丸、八歲之時矣、蓮祖滅度之後、知鎌倉謁朗師於此事、朗公則以緣之嘉名、爲於長道字、應永二年、相州鎌倉平高時公

執柄之時、於公場與諸宗有對論、印公當于其撰、挫之以無碍辯兮、大抵我宗立破有此師矣、然則正法中興此師哉、朗師悅預甚、而從蓮祖讓與三箇重物付屬印公、自是前、由爲生國、遙跨越後、騎牛馱笈、風僊々兮取野途、自誓曰、牛伏處於道場、特牛既折膝伏、因而號靑蓮花盛生兮、故豫知於勝境、則結構梵刹兮、今本成寺是也、初隨瑞號靑蓮華寺、有所以其後名長久山本成寺、于寔此當體蓮華之所表兮、其淵在于今、雖大旱無涸、瘧疾之處、民飮之則愈（井、）讓功於師範朗公爲開山、從鎌倉所荷負蓮祖御影、朗師之御影、（朗公自刻之云云）釋尊四菩薩者、在願主造立之、（印師日記有之）其外佛像寺寶載之非暇焉、夫寺院構三門、亘于梵漢和繁多兮、是則三脫門也、二王門者總門也、依正法念經、昔在大王號二夫人、第一夫人誕於千子、皆成佛果、賢劫千佛是也、今釋尊其一佛兮、第二夫人產二子、一人者願於大梵天王、願請於兄千佛轉法輪、一人者現於金剛密迹、誓護於兄千佛、（一切經取意）則寺之□□最可立之者歟、往昔當郷大伽藍、而數軒院莊觀宏麗兮、坊舍在二百餘云云、于爾古往以爲亂國、屢罹於兵火回祿汲々兮、層塔辨財天、天神等之地、今在寺內、鎭守之舊地、鬼子母堂等之地跡、成他之領內殘餘、境內今一里許也、雖在於門、年華稍尙、柱根摧朽乎、加焉佛像等數百軀、無不爲殘破、拜觀難忍、客殿庫裏方丈及大破、誰不悲之、彼此欲爲調造補修而無其力、故請於十方檀那之資力、諸國諸寺之助成焉、先聖曰、不毀靈山事寂光矣、于誠野草荐々兮、雜木蔭々兮、雖爲邊土草境、喜瑞靈奇之甲境兮、一度參詣之輩、消滅於無始廣劫罪障矣、結緣之仁、豈不植當體蓮花之良種乎、仰願者由於眞俗芳心、令得成就愚志、望現世豐祿、未曾將來之財、以播三寶、爲當來之福、是併現在一生之靈也、仍而勸進之帖如件、誠恐謹白、

越後國長久山本成寺時輪番　僧日海敬白

〔新編法華靈場記　六〕光了山本禪寺

牛跪現瑞

越後國長久山本成寺は、摩訶一院九老僧日印聖人の御開基にて、現瑞不思議の妙土なり、されば

本尊

永仁五年とかや、印師越後の國に赴給ふのとき、牛に乘りて過給へり、于時印師發願して宜ひしは、此牛我をつれ行ば、おのれとひざをりとゞまりぬべし、其地を靈地として、一精舍を建べしと、首題を唱おはしましけるに、蒲原郡大西の庄に至て、をのづから踞止す、卽時其地に靑蓮花生じ花咲ければ、我本願すでに滿せりと、大歡喜して、頓而梵精を建立し、靑蓮花寺と名付給へり、後又本成寺と改、遂に嘉曆二年、師自筆の置文を記して、永く本成寺にとゞめ給ひぬ、其文に曰、

右當寺者、後五百歲之正法本門之三大事所住道場根本也、然則奉貴仰先師御遺法門徒道俗諸國貴賤偏守此旨、彼寺可爲門家棟梁也、若經卷所住之處、卽是道場諸佛於此轉於法輪

嘉曆二年十月八日　　　　日印（在御判）

〔本成寺記錄〕本成寺ハ、往古境內地ハ里餘ニ亘リ、一山二百有餘箇院ヲ有シ、亦八箇村餘ノ領地ヲ支配シ、光明天皇ノ御宇勅願所トナリ、爾來皇室ノ崇敬不淺、歷朝ノ輪旨御紋章御寄附品不少、（數度ノ兵燹ニ罹テ過半燒失、今保存ノ輪旨ハ別記ノ如シ、）又領主山吉家最歸仰セリ、然レドモ數度ノ回祿ニ罹リ、再興舊ノ如クナラズ、其後上杉家ノ歸依ニ賴テ、稍々寺觀ヲ保持セシモ、德川氏ニ至テ、朱印僅カニ三百石ニ止メラル、當初日印時代ニ在テハ、北陸弘法ノ覇權アリテ、支配ノ門末甚ダ多カリシガ、日陣ノ代ニ至テ本成寺（勝劣派）本國寺（一致派）兩派ニ分カルヽヤ、門末ノ過半ハ他ノ支配ニ屬セリ、然レドモ勝劣派ノ總本山ナルヲ以テ、德川時世ヨリ明治維新後マデハ、日蓮宗勝劣諸派ヲ支配セリ、明治五年四月官一宗一管長ノ法命アルヤ、本成寺貫首召レテ管長職ヲ拜シ、一致勝劣全體ヲ管轄ス、同九年二月各派布敎ノ公達ニ由リ、本宗ハ一時日蓮宗本成寺派ト稱シ、同三十一年十一月官衙ニ訴ヘテ宗祖開宗以來正嫡相承ノ旨趣ヲ明カニシ、派名ヲ改メテ宗名ニ復サンコトヲ請ヒ、同年十二月二十七日、法華宗號ノ認可ヲ得、卽チ法華宗總本山本成寺ト稱ス、

〔本成寺文書〕讓與、南無妙法蓮華經、末法相應一閻浮提第一立像釋迦牟尼佛、安國論赦免狀、是法實

佛寶僧寶也、末法相應之佛上一閻浮提第一也、最可信仰之、

弘安五年十月三日　　日蓮在判

〔本成寺文書〕奉造立供養本尊日記

本門敎主本有三身圓滿久遠實成釋迦牟尼如來遺像一軀　並脇士四菩薩上行菩薩像、無邊行菩薩像、淨行菩薩像、安立行菩薩像、　佛師肥前法橋

已上五體、佛菩薩遺像也、

右本尊者、末法之船筏、濁世之橋梁也、然則尊之則銷禍蒙福、蔑之則招災縮壽云々、爰正像二千年、月支、漢土未造立、末法二百餘年、本朝未崇重、待時待機待國而已、然而法主聖人、依付屬所弘通也、道之施主比丘尼淨妙、爲二世祈禱所造立供養、利益豈唐捐哉、

永仁六歲次戊戌卯月八日　　僧日印在判

大施主比丘尼淨妙

〔本成寺古記十三〕一本成寺、古往堂塔殿樓、嚴麗壯觀坊舍二百餘軒、寺領八ヶ村餘矣、國主代々依爲州之寶地附於田園崇敬矣、到于溝口出雲守殿之時、成三百石之御朱印地、則源家光公之御代也云云、

〔本成寺舊記子之九〕諸堂間數覺

一境内圍内　東西七丁半　南北八丁半　右圍者出水場故、寬文年中、村上城主柳原式部大輔築立ニ御座候、但シ圍外共ニ者拾貳丁四方也、　一本堂平向拜　拾五間四方　古來者貳拾五間四方、諸堂モ右本堂ニ應ジ建揃、塔頭モ百六十餘坊有之候處、文安年中、亂國之砌、兵火之爲、不殘燒失仕候、其節者、足利尊氏奏聞ヲ以、天下安全之御祈禱被仰付候處、綸旨始、諸書付不殘燒失仕候、依ヲ御祈禱之趣モ暫中絶仕候由傳承候、時代五祖日顯之代也、其後六祖日誓、七祖日將之代、延德明德年中、本堂十八間四方、諸堂右ニ應ジ建揃、塔頭モ百餘坊建立有之候間、九祖日覺之代、亦古來之

通リ天下泰平御祈禱被仰付候處、十祖日意之代、天文年中、亦々兵火ニテ燒失仕候、然共綸旨井上
杉長尾諸書物大方取出シ、唯今以有之候、知行ハ此之砌迄千三百石ニ候、此内千石者上杉長尾江
加勢仕候間、高名知行三ヶ村千石ニ御座候、其後溝口家加州大聖寺ヨリ當國江御引越之砌、軍役
等御免ニテ、古來之通、高三百石ニ相成候、本堂諸堂右之通塔頭十坊ニテ、是迄法燈相續仕候事、
一客殿 平向拜 拾貳間四方　一廻廊　拾九間　一多寶塔　貳間四方　古來者五重
之塔ニテ、文明年中、當國三條之城主山吉大炊之助景久之建立ニ御座候處、天文年中、兵火之節類
燒仕候、當時者其印迄貳重ニ建立仕候事、
一寶藏　貳間參間　一上段座敷　貳間貳間半　一次ノ間座敷　四間四間半　一廣間
座敷　四間五間　一小座敷　貳間貳間半　一寄附間　貳間參間　一茶之間　四間五
間　一居間　參間四方　一內佛間　貳間參間　一納戸間　貳間參間　一玄關之間
貳間參間　一庫裏　竪拾六間横七間　一屛重門　六尺九尺　一鐘樓堂　貳間貳尺
四方　一表門　竪壹丈横壹丈四方　一三門　竪參間半横七間　古來者拾貳間ニ六間ニ
御座候而、上杉左馬助房朝之建立ニ御座候處、文安年中之火災ニ者相遁レ候得共、天文年中、當國
再亂之砌燒失仕候、夫ヨリ代々之住職建立之志願有之候得共、大造之事出來兼、漸六代已前之住
職發起致シ、三代已前之住職再建仕候事、　一表總門　未建立無之　一裏門　九尺貳間
一裏總門　九尺貳間　一千佛堂　貳間半四方　一番神堂唐破風別段摸樣無之　參間
半ニ七間　一鳥居　貳間半

右之通、相違無御座候、以上、

寛政二庚戌八月　越後本成寺役僧

寺格

寺社御奉行所御役人御中

〔本成寺文書〕天下太平、國土安全、可レ令レ專二御祈禱一給者、依二天氣一執達如レ件、

七月廿日　　左少辨□□

本成寺日覺上人御房

天下泰平、國土安全、宜レ奉レ祈二寶祚延長一者、綸命如レ此、悉レ之以狀、

七月廿九日　　右中辨宣治

菩提心院日覺僧都御房

〔本成寺舊記　子之九〕一當寺、永仁五丁酉歲摩訶一阿闍梨日印聖人建立也、

一貞和年中、勅願所ノ綸命有レ之、綸旨數通有レ之候得共、中古火災之節燒失申候而、當時無レ之候、當寺二代日靜者、足利尊氏將軍之叔父ニ候、依レ之尊氏之奏聞ヲ以、天下安全之御祈禱仰付候、

一天文年中、禁裏御祈禱所、幷當寺九世日覺大僧正號補任等之綸旨六通有レ之候、二通者京都本禪寺江納置、四通者當山ニ有レ之候、

〔寺格帳　下　日蓮宗本成寺派〕御朱印一高三百石　一本寺　越後國本成寺

右住職、地中末寺相談之上相定、

一住職御禮、御白書院、獨禮、獻上壹束二卷、御闕之外三疊目、

一御暇於二柳之間一老中被二仰渡一、時服三拜二領之一取渡、

一年頭御禮無レ之

〔本成寺文書〕令旨

長久山本成寺者、爲二經宗勝劣諸派大本山一故、代々住持輩、紫衣被二下置一候間、着用可レ有レ之旨、實相院御門主御氣色候、依而執達如レ件、

寺領

嘉永二酉年十二月　　　　藏之坊法印澄伯花押○以下四人署名略

日明上人

〔社寺取調類纂百九十五〕一本山　　新潟縣管轄所　越後國蒲原郡本成寺村　日蓮法華宗本成寺

一紫衣香衣ハ著用、代々僧正ニ無之候、次ニ寺格ハ開基日印因于鎌倉殿中問答勝利、永仁五丁酉歲、稟於久明親王之免許、越後國ニ起立、同國管領上杉家累代之判物、及寺領五百有餘石之地被附置、溝口家領ニ相成候テモ、同然之處、舊幕府之剋、寬永二十未年朱印ニ極リ候節、貳百石溝口家ヘ返上、當時三百石也、且文安年間之頃ヨリ、日蓮宗勝劣一派之大本山ト唱ヘ來候、

一永和年中、本成寺八世日意參內仕、勅願所之綸命ヲ蒙リ、宣旨數通頂戴罷在之處、越後兵亂之砌燒失、其後天文年中、同寺九世日覺、以舊來之由緖參內之上、被任大僧正、勅願所被仰付、宣旨六通于今所持罷在候、從爾已降、參內中絕仕、近來之住職ハ無御座候、舊政府之時、寺職繼目禮於獨禮席、代々相勤來候、

〔本成寺文書〕本成寺事、如元可被打渡彼代候也、謹言、

文安三九月廿八日　　　　實景花押

山吉大炊助殿

〔本成寺文書〕當亂中、山吉被仰合、御加世義具承候、無比類存候、然者大面庄內村上分、蒲曾禰并新堀、上條吉野谷、令寄進候、御知行於末代、不可有相違候也、仍如件、

永正七年三月七日　　　　爲景花押

本成寺

〔本成寺文書〕今度實景以後之判形等、無紛失被成所持、神妙ニ存候、先代任判形旨、殊更御忠信、故亡

父數ヶ所之御寺領、於末代不可有相違候者也、仍如件、

天文十二 九月廿日　景虎 花押

本成寺侍從阿闍梨日景御房

〔本成寺舊記 十之九〕一當寺領分等之事、當國守護職代々之判物、古來紛失ノ分モ有之由申傳候、當時有之候而、年號名判分明之分左之通ニ御座候、〇中略

溝口家先祖之分

當寺領三百石之事、無諸役可有領知候、永不可有相違之狀如件、

慶長五 二月廿二日　秀勝判

越後本成寺

〔本成寺文書〕當寺領越後國蒲原郡本成寺村之內參百石事、任先規寄附之訖、全可收納、幷寺中竹木諸役等免許、永不可有相違者也、仍如件、

慶安元年七月十七日　御朱印

本成寺

〔本成寺文書〕本成寺住持職事、久遠院日含、對日暫日將訴陳之處、長松院殿既御成敗了、然而日含猶以企濫訴云々、太以奸謀至也、所詮任先御落居旨、日含停止競望、可被全寺務由被仰出者也、仍執達如件、

明應五年七月九日　對馬守實高 花押

沙彌宗勝 花押

侍從阿闍梨日現御房

蓮華峯寺

蓮華峯寺ハ、佐渡國羽茂郡小比叡村ニ在リ、未ダ其創建ヲ詳ニセズ、今眞言宗新義派ニ屬ス、

〔和漢三才圖會佐渡六十八〕蓮華峯寺〈在賀母郡〉天台　寺領九十石餘

〔日本地誌提要佐渡四十二〕佛寺　蓮華峯寺〈羽茂郡小比叡村、眞言宗、大同中、僧空海創建、寺域壹萬六千九百八拾六坪、〉

〔寺格帳新義眞言宗上〕御朱印高九拾石餘　佐渡　蓮花峯寺

右住職、智積院ゟ申付ル、

一入院之御禮、御白書院獨禮、獻上壹束一本、御閾之外三疊目、

一御暇、於檜間寺社奉行申渡、時服二拜領之、取渡ス

一參上之御禮、御白書院獨禮獻上壹束一本、御閾之外三疊目、

一御暇、於檜間寺社奉行申渡、時服二拜領之、取渡ス

〔寛文四年御朱印帳眞言宗新義〕九十石五斗　佐渡慶安元年十月廿四日　蓮華峯寺

國分寺

佐渡國國分寺ハ、雜太郡國分寺村ニ在リ、眞言宗新義派ニ屬ス、承久三年、順德天皇ノ此國ニ遷幸スルヤ、此寺ヲ以テ、假ノ御所ト爲シ給ヘリ、

〔佐渡志三佛寺〕國分寺〈眞言宗山城國醍醐山報恩院ノ末寺〇中略〉

雜太郡古府ノ南ニアリ、今ハ此アタリ一ツノ里トナリテ、國分寺村ト名ヅク、聖武天皇天平九年丁丑、天下ニ詔シテ、國ゴトニ國分寺ヲ建テラレ、或ハ法華經ヲ寫サシメ、金光明經ヲ講ゼシメ、或ハ

七層ノ塔ヲ作リ、四天王ノ像ヲ置レシナドイフ也、(續日本紀 元亨釋書)此國ノ國分寺モマタシカゾアルベキ、(七層塔ノ礎ハ、今モ殘レリ、奇古ノ物也、○中略)承和十一年甲子、佐渡ノ國司ノタテマツリシ國解ニ、國分二寺ノ僧尼度緣戒牒ヲ、國庫ニ納メムコトヲ申セシニヨリテ、太政官符ヲナシ下サレシコトアリ、(類聚三代格)其文ヲ見ルニ、此國ニ尼寺モアリタルニヤトゾ思ハル、總テソノコロハ僧徒モ多ク、一方ノ大伽藍ニテ、天台眞言二宗ヲ兼學ビケルトナリ、サレド世カハリ時移リテ、中世ニ及ビテハ、万ムカシノサマニモアラザリシト見エタリ、(前當讓狀地頭下文)初ヲ天平ニ作ラレシ寺ハ、正安ノコロ雷火ニ燒、再ビ建シモ、享祿二年己未、災ニカヽリテ悉ヤケヌ、今モ寺ノアタリノ地ヲ穿チテ、稀ニ天平ノ瓦ヲ得ルコトアリ、古色觀ツベシ、多ク得易キモノハ後ニ修セシ時ノ瓦ナリトイフ、(○中略)順德上皇遷幸ノハジメ、此寺ヲ假ノ御坐トセサセタマヒキ、後眞野ノ山陵ノコトヲモウケタマハリ、末寺眞輪寺シテコレヲ守ラシム、延寶七年己未國分寺ノ僧賢教ガ願ニヨリテ、國司曾根吉正(五郎兵衛)戶江ニ申ス旨アリ、ヤガテ陵ヲ修セラレ、(委シク山陵ノ條ニ出セリ)且賢教ニ營中拜禮ノコト仰下サレテ、明ル八年庚申三月十五日其事ヲ遂シヨリ永キ例トハナリヌ、(是ヨリ後、世々ノ僧住職ノ時拜禮拾結一卷ナメテマツリ、御暇ノトキハ、時服二領ヲ賜ルトイフ、)傳ヘイフ、此寺ノ本尊藥師ノ像ハ、古ク傳ハレル物ニテ、山ヲ醫王山ト名ヅケシモコレニヨレリトゾ、又毘沙門天ノ像ハ、天平ニ置レシ四天王ノ像ノ一ツニシテ、コレモ度々ノ火災ヲマヌカレシト也、

寺ノ南ニ天神山天神林アリ、(古文書ニ見エシ、ウサイガ澤ノ流レハ此アタリナリ、其繪圖ガクガノメアヒ、今詳ナラヌ處モアリ、カヲコノ天神ノ闕ニ、順德上皇ノ書セメマヘル新綿ノ二字圖額アリケルヲ、上杉ノ兵燹後ニ移シテ、國上寺ニ置ト云ヘリ、)鎭守ノ天神、モト此山ニ崇メ置シガ、後ニ寺ノ傍ヘ移セシトナリ、寺中ノ坊字モ昔ハ多カリシヲ、處々ニウツシテ門徒トナシ、今ハ夕寂坊、寶珠院、寂靜院、觀行坊ノ四ツノミノコレリ、

此寺ノ地、殺生ヲ禁ゼラル・以下三條ノ制札〇制札略ヲ下シ賜リテ、總門前ニ揭ゲタリ、

寺格

〔寺格帳 上 新義眞言宗〕御朱印高拾石餘　佐州國分寺

右住職門末相談之上相定ル、

一住職御禮、御白書院獨禮、獻上壹束一卷、御閾之外三疊目、

一御暇、於檜之間寺社奉行申渡時服貳拜領之、取次

一年頭御禮無之

寺領

〔佐渡志 三 佛寺〕國分寺〇中略

地百七町八段八畝　租稅悉免サル　田貳町貳反壹畝四步　租稅半ヲ免サル　田四段四畝拾貳步　租稅三分ノ一ヲ免サル〇中略

サレバ古キ記錄ドモ傳ハレルコトナシ、地頭ノ時ノ下シ文纔ニ殘レリ、爰ニ一二ヲ出ス、

右きヽむ狀、國分寺、上ハをむかふり、南ハうさいがさはの川、西ハなさか神はい道、經が峯、ほしがくぼ、東ハつはやすみ道をきり、そのほか地内の田畠さおいゐて、せむれいにまかせて返付候、仍爲後日之狀如件、

延慶元年五月吉日　左衞門佐泰宣　判

宛行

佐渡國分寺別當職、波身鄕內新田壹町林一反分、當米六斗令有泰寄進者也、

右於彼別當職は、以但馬坊宛行所也、小破之時は、且可致修理候也、仍宛狀如件、

貞治五年七月廿三日　左衞門佐泰宣　判

左兵衞尉殿

用途

〔延喜式 二十六 主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略

名稱 所在 創建 堂塔

佐渡國、〇中略國分寺料一万束、同寺新造藥師佛像分料五百束、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年三月乙巳朔、北陸道使右中辨正五位下豐野眞人出雲言、佐渡國造國分寺料稻一万束、毎年支在越後、常當農月、差夫運漕、海路風波、動經數月、至有深損、復徹運脚、乞割當國田租、以充用度、

妙宣寺

妙宣寺ハ、佐渡國雜太郡阿佛坊村ニ在リ、日蓮ノ佐渡ニ配流セラル、ヤ、國人遠藤盛綱聞法隨喜シ、後遂ニ家ヲ捨テ、寺ト爲ス、卽チ此寺ナリト云フ、

〔佐渡志三佛寺〕妙宣寺日蓮宗、甲州身延、武州池上、下總中山、三ヶ所輪番所、

地四町四段八畝歩　田四段八畝八歩　租稅三分ノ一ヲ免サル　圃四段壹畝拾壹歩　租稅悉免サル　米貳石五升九合三勺

雜太郡阿佛坊村ニアリ、文永八年、日蓮此國ヘ謫セラレシ時、十一月朔日ヨリ、大野村塚原ニアリテ、既ニ饑餓ニモ及ブベキトコロ、深夜ニ食ヲ餽リテ危難ヲ助ケシ遠藤左衞門爲盛ガ舊跡ナリ、爲盛始メ順德上皇ニ仕ヘ奉リテ、上皇コノ國ヘ遷幸アリシトキ、御供シテコヽニ移リ住ヌ、仁治三年九月、上皇崩御マシマシテノチ、薙髮シテ阿佛房トイヘリ、ソノ妻ハ右衞門ノ佐ノ局ノ侍女ニシテ、爲盛トトモニ在家ノ僧タリ、按ズルニ、爲盛ガコト、此國ニ記シ傳ヘシモノニハ、遠藤武者盛遠ガ四世ノ孫ニシテ、故アリテ流罪セラレ、新保村ニ居ルトイヒ、或ハ民部卿忠永ノ六世孫長ノ四子ニシテ、盛遠ガ弟ナリトモイフ、訝カシキコトナリ、又其妻ヲ千日尼ト稱セシハ、上皇都ニ還リタマハンコトノミオモヒ嘆ハセタマヒシカバ、爲盛ガ妻、日每ニ海ニ入リテ、波ニ浴シ、朝日ヲ拜シテ祈誓シ、千日ノ功ヲ積ミカバ、上皇キコシメシテ千日女ト呼セラレタルト、ソノ名ノ異ナルニ附會セシ說トオボユレバ、信ジ用ルニタラズ、斯テ日蓮赦サレ鎌倉ニ歸リ、甲州身延ニアリシ後モ、爲盛ソノ德ヲ慕ヒテ、屢訪ヒケルガ、弘安二年

本尊

寺格　寺職

ニ卒ス、其子九郎盛綱相續ヒテ、法華經ノ行者トナリ、日蓮此國ニアリシトキ、常ニ左右ニ侍シヲ、ソノ勞ニ代ル、年經テソノ宅ヲ捨テ寺トナシ、妙宣寺トイフ、嘉曆年中、雜太郡竹田ノ城主本間泰昌、妙宣寺ヲ居城ノ傍ニ移シ、天正中ニ至リテ、ソノ子孫高滋ナヲマタ田園ヲ寄附シテ、寺ヲ今ノ地ニ移ス、ソノ地遂ニ一村落トナリテ、竹田村ノ內ニテアリシヲ、元祿七年、竹田村ヲ分チテ、始メテ阿佛坊村トイフ一村ヲ置トイヘリ、(遠藤系圖、古文書、)

〔妙宣寺文書〕佐渡國法華衆等本尊聖敎之事

日滿阿闍梨相計守信心子孫被付之、安置阿佛房本堂、可爲本門寺之重寶、不然者、可奉入富士本堂者也、縱雖爲子孫、私與之、若又賣買者、可爲同罪也、背此旨、不用師匠之敎訓、於大謗法之輩者、自今以後、永不可付與本尊也、猶以違背之時者、北頭守護所訴訟申、可沙汰取給也、仍爲後々定置狀如件、

元弘二年七月廿四日　日興(花押)

日滿阿闍梨御房

〔佐渡志〕三佛寺、妙宣寺(中略)

此寺日蓮ノ書セシ大曼陀羅、北陸道七ケ國法華棟梁ノ曼多羅、ソノ外日道ノ消息數通及ビ古文書許多アリ、此ニ一二ヲ出ス、

定補師弟并別當職事

右佐渡阿闍梨日滿者、於學文授法者、雖爲日興弟子、依有代々由緒、日蓮聖人御弟子也、其故者、聖人佐渡國流罪之御時、尊參之處、依一二之功、彼是置本弟子六人之隆然於阿佛坊者、爲直御弟子、蒙聖人命、遣相續佛法之惠命、一切衆生助仁、法花之大棟梁也、然者阿佛房之跡相續之子孫者、北陸道之可爲法雄之由、任日蓮聖人之御筆跡之旨、日滿阿闍梨、北陸道七ケ國之可爲法花之大別當者也、大衆地頭可被存知此旨、總日興門徒之僧侶等、敢勿違失之、若背此旨之輩者、可爲大謗法

也、仍證狀如件、

元弘二年十月十六日　　日興（花押）

御免寺之事、被聞食訖、不可有子細所被仰出也、仍執達如件、

天文三年甲午三月日　　本間之四郎高滋

（佐州雑太郡）武田阿佛房

佐州雑太之郡竹田阿佛坊、可爲北陸道七ヶ國之統領、仍執達如件、

天文三年甲午三月日　　本間之四郎高滋

阿佛房

制札

竹田村

右於當地、諸軍勢濫妨狼藉（井）竹木剪採事、堅令停止畢、若違犯之輩有之候者、於立所可加成敗、由

仰出、被成御朱印者也、仍如件、

天正十七年六月日　　奉行中

阿佛坊

此寺ノ境内ニ、日野權中納言資朝卿ノ墓アリ、（委シク古跡ノ條ニ出ス）又古クヨリ傳フルトコロノ彼卿書寫ノ法華經一部アリ、タケ一寸八九分ノ紙ヲ卷テ、イカニモ細カニ書レタルガ、疑モナク五百年前ノ物トゾ見エタリ、其奥ニ記ストコロ左ノ如シ、

右經、當先考幽靈忌月、爲功德增進書之、

前黄門侍郎資朝

元德三年辛未五月廿一日

右經、慈母幽儀當七々忌、爲功德增進書之、

名稱　所在　創建　堂塔

種類

元德三年辛未七月七日　　前權中納言藤原資朝

〔妙宜寺文書〕寄附之事

一菊桐紋付幕　二張　一同水引　一張　一戸帳　一掛　一同挑燈　十張　一同長
持　一棹

右心願依有之、令寄附者也、

明和六己丑年三月　　左少將隆房

佐州
妙宜寺

根本寺

根本寺ハ、佐渡國加茂郡大野村ニ在リ、天文年中、僧日成、其宗祖日蓮ノ配流ノ遺跡ニ建ツル所ナリ、

〔佐渡志三〕根本寺（日蓮宗、甲州身延、武州池上、下總中山、三ヶ寺輪番、）
地六町五段九畝六歩　田貳町三段九畝貳拾四歩●　租稅悉免サル　墅壹段五畝步　租稅同
上

加茂郡大野村ニアリテ、蓮師謫居ノ舊蹟ナリ、文永八年辛未十月廿八日、越後ノ國寺泊ヨリ此國松ケ崎ヘ著岸、小倉ノ山ヲ經テ、十一月朔日、此村塚原トテ、國人ノ尸ヲ送ル野ニ、草ノ庵アルヲ謫居トシテ、國府ノ本間ガ心ニ任セ、此所ニ棄置マイラス、遠藤爲盛夫婦ノモノ、深夜ニ食ヲ贈リシハコノ時ノコトナリ、後星霜ヲ經テ、天文二十一年壬子、大泉坊日成トイフ僧、蓮師ノ舊跡ヲ訪ヒテ、此所ニイタリ、初テ一宇ヲ草創シテ、根本寺ト號セリトイヘリ、（此寺ノ傍ニ、慶長ノコロ、アル僧一寺ヲ建テ、正教寺ト名ツク、寛

文年中ニ庭ストイフ、此寺ノ境内ニ弔犬塚アリ、往昔日蓮コヽニアラレシトキ、ソノ才ヲ忌ムモノアリテ、食ノ中ニ毒ヲイレテ送リシカバ、蓮師オモフ處ヤオハシケン、ヤガテ傍ナル犬ニ與ヘラルヽニ、ソノ犬忽チ斃レケレバ、竊ニコトノヨシヲ遠藤爲盛ニ告ラル、爲盛コレヲ聞テ、カノ犬、師ノ坊ノ御爲ニ死セシコトヲ深ク憐ミ、一ツノ塚ヲ作リテ弔ヒケルトナリ、

〔日蓮註畫讃〕四佐渡流刑第十九

爲知行佐渡島武藏前司預、故爲其被官等沙汰、同十日出依智趣彼島、其夜宿武州來目河已來、朝朝分泣露千般草村、暮暮過吟風一樣松原、雖白雪遮眼長途易迷、靑嵐徹膚遠路難進、經十二日著越後州寺泊津、同二十二日自寺泊送日常狀云、自此渡大海、欲至佐渡國、順風不定、不知其期、道間之事、莫及心筆、但諸可推度矣、彼津乘船、于暴風俄起、波濤怒鼓、船欲深沈、聖人出舳、聲自我偈、靑衣赤衣二童子忽然來、艫立濟濟三呼、應音風止波恬、征帆如飛、著眞崎浦、被預于本間重連、國人集而嚬眉差指、配處者當國新穗鄕、澤深草茂野中、如洛陽蓮臺野捨死人之處、名塚原、塚上有小堂、黃葉埋軒、靑苔擁柱、無佛無僧小堂、十一月一日、移此三昧堂、晝夜盈耳松風、晨昏剛目庭雪而已、食乏難支命、衣薄叵蔽形、上漏下濕、覆衣笠敷鹿皮、如子卿囚單于絕飮食、徙海北似法道責徽宗燒火印放江南、樂天著讁土才人、菅相者和國奇士、共被勅勘、同閑謫居、今亦惟肖、堂安尊特釋迦、手握持經妙典、晝仰日光法華止觀曝眼、夜向星月妙法題名唱口、恐一朝威、顧萬民嘲、親族蒙恩、不意成毀、適過室希獻食、主人被勘當抑所領、疎父母捨兄弟、故敢無新附、但阿佛房夫妻深愼見聞、夜中具膳、聖人曰、念佛者日蓮庵室、晝夜立副通人强責迷、阿佛房負櫃、夜中度度有御渡、偏悲母佐渡國生代歟云々、若我滅度後、能說此經者、我遣化四衆供養於法師之文在今、聖人曰、此人豈非佛天之化現乎、上來爾國配流、常勤持品數數見擯出之數數二字、聖人曰、法華經故、度度不流者、數數二字如何、數數見擯出之明文、但日蓮一人也矣、

古事類苑

宗教部六十七

佛教六十七

常照寺

名稱　所在　創建

常照寺ハ、丹波國桑田郡山國ニ在リ、禪宗ニ屬ス、貞治年中、光嚴法皇ノ建立ニシテ、法皇ヲ以テ開山ト爲シ、僧清溪ヲ以テ二世ト爲ス、寺內ニ法皇及ビ後花園天皇ノ山陵在リ、

〔常照寺記錄〕文久三年癸亥二月、願書差出如左、

丹波桑田郡山國莊、大雄山常照禪寺者、光嚴院法皇樣御開闢之御寺ニ而、貞治年中、御建立、御住持、御尊號無範大和尚ト奉申上、御陵並勅筆之御經塚、嘉樂門院樣御石塔、當御山ニ御座候、則崩御之砌者、光明院樣、梶井宮承胤親王樣、當御山エ御幸被爲在候而、清溪和尚エ二世之住持被仰付、御葬送被爲在、御中陰之御追善ニ者、後光嚴院樣般若心經、圓覺金剛經、法華經之藥王品ヲ御書寫被遊、三十五日御忌御追善ニ者、天龍普明國師エ御法事被仰付、盡七日御佛事者、普明國師、龍湫和尚兩人江被仰付、勅會御法事ニ御座候、御三回忌ニ者、壹字三禮之紺紙金泥之法華經ヲ御宸筆ニ御書寫被遊、御七回忌ニ者、光明院樣楞伽經御書寫被遊、御陵之側ニ御塚ヲ被仰付、只今ニ御經塚ト奉申者、此事ト申傳候、尤此砌モ勅會御法事ニ御座候、尙又御中陰之砌、公卿百官代ル〱御詰被成、御追善頓寫漸寫之五部大乘經、只今ニ當寺ニ御座候、尙又開山法皇樣、諸國御行脚之砌、御隨身之御持具、黃金四十三體之御守佛、御傳來之佛舍利、御傳法之御袈裟、墨染之御布衣、其外色々、只今ニ相殘、當寺ニ御座候、其後後花園院法皇樣常ニ此御道場ヲ御崇敬被遊、御遺勅ニ而、文明二

年崩御之節上京、大應寺ニ而御尊骸ヲ奉火葬、御骨ヲ不殘赤銅之小塔ニ奉納、當山エ御安置被仰付、只今ニ御佛檀ニ御座候、〇中略

文久三年癸亥二月　常照寺　魯山印

萬里小路權右中辨樣　御雜掌中

〔太平記三十九〕光嚴院禪定法皇行脚御事

諸國御斗藪ノ後、光嚴院ヘ御歸有テ、暫御座有ケルガ、中使頻ニ到テ、松風ノ夢ヲ破リ、舊臣常ニ參テ、蘿月ノ寂ヲ妨ケル程ニ、此モ今ハ住憂ト思召、丹波國山國ト云所ヘ迹ヲ銷シテ、移セ給ケル、〇中略身ノ安ヲ得ル處即心安シ、出有江湖、入有山川ト、一乾坤ノ外ニ逍遙シテ、破蕭園ノ上ニ、光陰ヲ送ラセ給ケルガ、翌年〇貞治三年ノ夏比ヨリ、俄ニ御不豫ノ事有テ、遂ニ七月七日ニ隱サセ給ケリ、

寺領

〔常照寺記錄〕文久三年癸亥二月、願書差出如左、〇中略

御寺領者、開山法皇樣御開基以來、現米三百六拾石御附被遊候、其後後花園院法皇樣爲御祠堂料、右三百六十石之外、同莊小鹽村ニ而地高百貳拾石之處、後土御門院樣ヨリ御寄附被成下、都合四百八拾石、右之通ニ而二百五六十年相續仕、其上御修理一式、古來者禁裏樣ヨリ被成下候處、天正年中之兵亂ニ、寺內亂暴、寺領莊園者不申及、御寶物雜具以下迄被掠メ、已及滅絕可申之處、其時之住持雲室長老只一人、御塔ヲ奉守、後陽成院樣御宇ニ万里小路大納言充房卿ニ御歎キ申上候處、叡聞ニ相達シ、卽充房卿ヲ以、關東エ被仰入、慶長年中ニ、開山法皇樣爲御供養料、只今之寺領五拾石御附被遊候所、然諸堂建物之向者、古來之通リニ而御座候故、每度大破之節者、御願奉申上候而、御修理料拜領仕、相續者仕居候得共、只今之寺領ニ而者、無據人少ニ相暮候故、自然ト御追善、且者御掃除等迄、万事不行屆ニ相成奉恐候、〇中略何卒御寺領之所、古來之通リ被成下候樣奉願上候、且

又御祠堂百貳拾石之所〇中略も、古來之通リ被成下候樣、格別之御憐愍ヲ以、願之通リ被仰付候樣、宜敷御執奏之程奉願上候、以上、

文久三年癸亥二月　　　常照寺　魯山印

萬里小路權右中辨樣　御雜掌中

〔親長卿記〕文明二年十二月廿六日、卯剋許已御命終、〇後花園上下愁傷悲歎、三年二月十一日、今日被移申仙骨於大原法華堂、少々先日被分散山國常照寺所殘也、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今夜戌剋、有御北首事、〇後土御門十一月十二日壬戌、今朝即御收骨儀也、上卿甘露寺中納言、爲凶事傳奏、即有分散儀、一分如例、上卿持之、納深草法花堂、又一分雲龍院、又一分般舟院、皆寺僧賜之、又山國常照寺被籠之、然寺僧不參之間無其沙汰、今度如何哉、恐々頭云々、奉行

法常寺

法常寺ハ、丹波國桑田郡千箇畑村ニ在リ、寛永十八年、後水尾上皇ノ建立ニシテ、禪僧文守ヲ以テ開山ト爲セリ、臨濟宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會〕七十七丹波法常寺　在千箇畑　禪　寺領百石　後水尾院勅願、寛永九年建立、開山佛頂國師、濟家一本寺

〔法常寺文書〕丹州桑田郡千箇畑村大梅山法常寺禪寺開山目子、

一寛永九年壬申之秋八月十一日、廿五歲之時、平安城之西岡村閑夢庵占當地へ被越、結草庵閑居候、

一同十一年甲戌之春、依有施主、別造營一庵被移住、相江庵と號せり、方々占僧俗慕道德來候故、僧

堂衆寮等漸々造營有之候、

一法皇様〇後水尾女院様〇東福門院常々御歸依不淺候、就夫當村初者、雖小出伊勢守殿所領、同年之秋、大猷院様〇德川家光御上洛之時、二條へ從法皇様被遣御使、丹州千個畑村ニ御歸依之僧一絲禪師山居候間、御領ニ被替度思召之由、被仰入之處、卽日小出伊勢守殿御代官五味備前守殿へ被仰付、同州之大井村ニ被爲相替候、

一寛永十二年乙亥之春、從法皇様賜宮鐘、其後被改鑄、鐘樓も被相構候、

一寛永十五年戊寅之秋、從法皇様平安城之北ニ靈源禪庵を御草創被遊、一絲へ被下、十一月初五日入庵、其後相江靈源兼住候、

一寛永十八年辛巳春〇此間有闕字從法皇様、於相江庵之北方丈、食堂、庫裏、御建立被仰付候、則古御殿拜領春夏之內御造營成就、依院宣號大梅山法常寺、又寺後結小庵號淵默室、常居住候、

一同年從女院様御紋付之御斗帳等被爲拜領候、

一寛永廿年癸未之秋、永源寺之住寺空子請待被成ニ付、遷住江州永源寺、四年住持被相勤、卅九歲ニ而於彼地遷化候、

一遷化之後住持相續、從法皇様山號寺號之御額ニ幅拜領候、

右條々、委細開山語錄行狀等ニ有之、

〔本朝高僧傳四十五淨禪〕丹州法常寺沙門文守傳

釋文守、字一絲、工部尙書源具堯第三子、母藤氏、〇中略守嘗幼時侍于內宮、在泉南日、左僕射信尋藤公與庵相善、歷枉台駕、初識守深、招致私第、博談佛理、僕射篤信、奏太上皇〇後水尾云、臣見僧多、未有如守、便殿召對、有愜皇情、緇白扣禪者無虛日、又卜丹之九路峯下、結屋枯坐、後來廣基、號桐江庵、禪寂之士、共嘗氷檗、擧揚古道、蓀亞相光廣入山參扣、徹狗子話、一日齋後、過庵前柚樹下、脫然大悟、應接異常、無觸

名稱
所在　　寺格

機者、將入明國而受明師之證、以國禁不遂志、承嗣愚堂寔、時雲居膺雪窓崔在妙心、守往道契、太上皇命近臣、建盤源禪院於賀茂、辛巳、〇寛永十八年又詔鼎新丹之舊庵、爲大梅山、並賜住持、〇中略癸未、〇寛永二十年住江之永源寺、正保二年罹病、上皇賜醫、翌歲再發、頻詔就醫、守知不治、不敢入京、語左右曰、道俗來者非問疾、擬命我遺付汝等而準今時杜撰耳、我行期近、汝等宜順當寺開山願命、此外更無說、三月十九日、晨粥不匙、巽案支坐、至午時右脇臥瞑目、淨因欲摻手診、守忽開目叱之、蛻然保年三十九、坐夏二十、窆全身於屋山、收遺髮于大梅山、塔曰淵默、撰述緇門寶藏註垂誡、并有佛祖百首頌、重行、談苑狐涎、五葉等集、延寶六年春、賜諡定慧明光佛頂國師、

〔法常寺文書〕女房奉書近衞基熙公寫兩寺の事、勅願寺にて候へば、法皇の御後もしさいおはしましまじき事とおぼしめし候へども、さたの人なく候へば、御心もとなく覺しめし候まゝ、幸に開山と御家と御ゆいえよ、おはしまし候事にて候へば、何事も兩寺の事御肝煎候て、末代までも、かいさんの法道さかへ候やうに、さたおはしまし候やうに申上候、兩寺へもこのよし、こなたより仰出され候まゝ、其御心得おはしまし候べく候、かしく、

佛南寺 圓成寺 雞園寺 〔附〕

佛南寺ハ、丹波國何鹿郡ニ在リ、淸和天皇貞觀五年、眞言院ト爲ス、後世廢絕シテ、其舊地ヲ詳ニセズ、

圓成寺及ビ雞園寺ハ、延喜式ニ其名ヲ載セタレドモ、今並ニ廢寺ニシテ、其所在ヲ失ス、

〔三代實錄 七 淸和〕貞觀五年六月三日甲午、以丹波國何鹿郡佛南寺、爲眞言院、即付國司撿校、

○

國城寺
雜國寺

名稱
所在

創建
沿革
本尊

〔延喜式 二十六 主税〕諸國出擧正税公廨雜稻 ○中略
丹波國、○中略 圓成寺料一千束、雜國寺料一千束、

成相寺

成相寺ハ、丹後國與謝郡橋立ニ在リ、創建年代詳ナラズ、本尊ハ聖觀音ニシテ、西國三十三所ノ一タリ、

〔拾芥抄 下 諸寺〕成相 丹後海、橋立觀音、

〔華頂要略 八十五 附屬諸寺社〕丹後國　施谷山成相寺
在與謝郡橋立之內山上、　聖德太子開基　本尊聖觀音　西國三十三所札所

〔和漢三才圖會 七十七 丹後〕成相觀音　在橋立之內 ○中略 註　號施谷山成相寺　本尊聖觀音　聖德太子開基　順禮第二十八番

〔伊呂波字類抄 奈 諸寺〕成相寺 ナリアヒ
在丹後國與謝郡日置鄉俠屋山矣、草創不辨何歲、檀那不識誰人、前碧海、後臨青山、故老相傳曰、本是方丈草庵、唯有一躰千手(千手恐手中誤)觀世音木像、山險谷深崩、昔禪僧久住此山、忽逢深雪之天、粮人跡不通、件僧在其中、粒食已絕、飢來不遂、余佛端坐、有一鹿來臥軒下、僧住見之、鹿卽命終、僧念云、汝已斃畢、我餓將死、害食汙穢、蓋救命根、生此念、乾採刀至、屠百葉肉、宛一日齋、他時猶有餘肉、遺在器中、受諸佛所、仰讀尊顏、股割血流、宛如生身、愛戀泣憤懺悲愧、于時佛像疵愈、成相如初、故爲寺號、

〔伽藍開基記 六 丹後〕成相寺 至元祿己巳二年、已九百九十二年矣、
丹後州與佐郡日置村、有觀世音靈區、號世野山成相寺、人皇四十二代文武天皇慶雲元年、眞應上人始創之、手造觀世音像、以安置之、其高一尺八寸、梵容靖深、靈驗特甚、四來謁者、四序不絕、實觀世音大名刹也、

〔諸寺略記〕一成相寺者、在丹後國、本尊一搩手半觀音木像也、草創檀那、共不知之、昔在禪侶久住此山、屬苦寒之節、忽逢深雪之天、封地丈餘、人跡不通、粒食已絕、飢來不憂、念佛端座、有一山麋來死砌下、僧自念言、汝已饑渴、餓將死、宛食、汙穢盡救命根、操刀前割居百葉肉、充一日齋、起居輕利、猶有餘肉、遺在器底、當于是時、信心檀那、推凍凌雪、尋人聲來、忽憶死麋行、欲掩瑿、麋去無跡、餘肉不見、詣佛前瞻尊像、股割血流、宛如生身、傷惱無益、檀越至時、先說此事、慚愧發露歸、僧留昏且悲泣、佛像瘡癒、成相如初、今爲寺號云々、

〔成相寺古記〕成相寺者、古傳記曰、精舍之來由者、人王四十二代文武天皇御宇、慶雲元年甲辰、(寶永元甲申迄一千有一歲也)秋九月十一日建造之地也、緣記曰、開山獵者也、宿善開發而染衣云々、不說俗氏、復無生處、思惟薩埵方便之權化也、故被奉拜現生薩埵、役日常六字之唱神呪、〇中略

古傳記曰、文武天皇在天聽開山之靈異、勅而被寄莊田、建立伽藍、被爲成御願寺、成相寺是也、開山亦奉拜所之像被安置、而永奉禱新國家靈場也、精舍者方九間之靈、有四面皆廻廊、同舞臺、鐘樓、五重三重多寶佛塔、三處之塔婆、阿彌陀堂、藥師堂、地藏堂、佛法鎭護熊野三處權現、根本當山之護神、地主權現之社壇、總門二階、汚穢清淨之境、迷悟中道二王堂、共以衆修、爰載狹屋山、有龍出山、入大海、(百一代小松院當應永七年庚辰、寶永元年迄二百九十九年也、)然間嶺崩成谷、谷塞成淵、故靈境頻傾、諸堂欲令陷大地焉、有成吉家族沙彌圓庵云善人、易地遥挽下、堂塔毫髮不違令建立、應永七年庚辰作事始、同二十九年壬寅六月二十九、日全備畢、剩新築文殊堂一宇云云、(私云、今堂屋數是也、私云、天平三辛未年六月十八日開山圓寂云々、〇中略)

一古傳記曰、自慶雲元年今至天文十四乙巳年、(百六代後奈良院御宇)八百四十二年也、痛哉悲哉、二月七日初更一點、天火降懸諸堂、一時焦土成、幷諸佛灰燼一百餘尊、漸本尊殘妙體、大衆歡喜心生、則建權殿、奉遷薩埵、茲雖欲爲再造企、當國久依人亂、諸庄田地荒蕪、无一樣運送、仍某蒙寺命、順廻諸國、欲爲再建云云、有勸進沙門朋心、弘治年中敕、願不成死去、〇中略

一慶長之頃、總持院一世在賢長阿闍梨云人、常歎皆傳建立微、依公往々轉司室、欲成再建、其功漸成、建立五間四面金堂、今堂是也焉、賢長作事未全備、早世也云云、

一古老傳曰、寛永初、寺中慈性院一世有宗政阿闍梨云人、密行數累、其德尤高、常修觀世音密法、金像流汗、或亦登由良嶽、修求聞持法、在年漸老衰、而無弟子、長語曰、公者富弟子、我滅後必公之以弟子可令問予、菩提、賢長愍懃諾、宗政沒後、賢長思惟、彼之院者新造也、我院者朽損、宗政死何不成、縱終依邪了、院宇拽立我院、古院以建彼院、與弟子、○中略爰一宮大聖院有憲祐阿闍梨云人、長弟子等請令祈病、依病床奉掛觀音像祈之、修法欲半時、以石懸觀音處壁破、憲祐向眉間來、其石不當落閼伽之盤、成微塵、觀音亦破、無用所、後依所望、此像登高野山否、其破更不見、在尊像嚴然、至奇異也、（當山之依宿坊往生院谷之成相院ト曰、寺今有之云云、）長者依靈病終、寛永六己巳年二月廿三日、以入寂、沒後不日而、院宇炎燒、有火四邊、一度燒立事、前代未聞魔事也、至斯永正四年之殘實、悉燒失、長之相承亦絕、院宇建立無人、依之太守京極某君、大聖院之憲祐以彼命住職、惜哉彼院者、智海阿闍梨開基也、至此依君命院家永絕、憲祐登當山、長建立金堂、令修補、而遂妙典千部供養、自然復師資相續繁榮、密法再得興、此故祐以總持院中興一世、トス

寺領

〔成相寺文書〕成相寺　御寄進分目錄

一田數　七町貳段百七拾九步　分米　八拾七石壹斗壹升六合

一畠　七段百五拾四步　分米　五石貳斗六升五合三勺六才

一山畑　參町壹段貳百參拾五步　分米　七石六斗貳升八合

都合百石九合三勺六才

天正九年辛巳拾月廿八日　曲順稿

中路佐渡守

名稱
所在
堂塔

智恩寺

智恩寺ハ、又文殊堂ト云フ、丹後國與謝郡天橋立ニ在リ、創建詳ナラズ、寛永中、僧別源之ヲ再興シテヨリ、臨濟宗妙心寺派ニ屬セリ、

〔拾芥抄 下本諸寺〕智恩寺 丹後九世戸、文殊、天龍六齋供、燈明云云

〔和漢三才圖會 七十七丹後〕海橋立文殊 在宮津西半里許、〇中略 別當 智恩寺

〔丹後州宮津府志 二佛閣〕天橋山智恩寺 在與謝郡九世渡今曰切渡 禪臨濟宗、京師妙心寺末、

本尊 文殊菩薩 帝釋化人作 脇士 于闐王均提童子 毘沙竭磨作 中興開山 別源禪師

寺記曰、當寺者、神代開闢之地也、延喜帝勅賜寺號山號云々、〇中略

天橋立圖記曰、延喜四年甲子、勅シテ山號寺號ヲ賜フ、其後四百餘年ヲ經テ、嘉暦年中嵩山禪師住侶トナル、是禪刹ノ始ナリ、ソレヨリ寛永マデ三百餘年、住侶詳ナラズ、寛永年中國主高廣公、別源禪師ヲ請ジテ住持セシム、是ヨリ洛ノ妙心寺ニ屬ス、文殊堂明暦年中改造、禁裏ヨリ修理料ヲ賜フ、傳奏ノ文書當寺ニ納ムト云云、〇中略

本堂 巽向 額、內智恩寺、延喜帝勅筆、外五臺山、隱元禪師筆、 山門 額、海上禪叢、 鐘樓門 額、曉雲閣、 方丈 額、同居窟、

經藏 額、標月指、 地藏堂 額、無相堂、 觀音堂 額 多寶塔 明應年中、當國府中城主延永修理進爲ニ寄願ニ造立、 衆

寮 庫藏 浴室 石地藏二 在門前左右 西方 當國三重城主大江越中守、應永三十四年、所造一千體之內、等身之像也、像背有ニ銘誌、永享四年、日州大守沙彌祐長者所造、

〔日本地誌提要 四十四丹後〕佛寺 智恩寺 同郡(與謝)文殊村、禪宗、開基創建未詳、寛永中、僧別源再興、寺域五千九百九拾四坪、

寺領

〔智恩寺文書〕當山儀爲無雙靈境上、本寺相國法住寺事、外祖三上歸依之由緒在之間、不混自餘、御寺領等、如先々申付候、被全所務、可被勵興隆事肝要候、恐惶謹言、

天正八
九月廿五日　長岡兵部太輔藤孝花押
同與一郎忠興花押

天橋山智恩寺
役者御中

〔智恩寺文書〕九世戸門前　花押(細川幽齋)

中スミダ
一段拾代　貳石貳斗　文殊走夫給　同所一所　壹升　同助五郎 〇中略

彼路

上まつた
六段廿代　七石六斗八升　九世之作　同所中三段拾五代　三石參斗　同新屋 〇中略

總都合卅七石四斗三升四合

天正九年八月十一日　宗堅花押

花押〇細川幽齋

智恩寺文殊分

壹町五段　石河　四段　深津　貳段　渡守給宮津　以上

天正十年八月十一日 〇中略

文殊領、如先規六拾石餘、并山林竹木共令寄進畢、全可有御知行、仍如件、

慶長十三
十月十三日　羽柴丹後守高知花押

智恩寺

〔丹後州宮津府志 二佛閣〕天橋山智恩寺 〇中略　寺領　五十石　黒印

寺制

〔智恩寺文書〕禁制　文殊堂

子院

名勝所在

開山堂塔

一山林竹木伐採事　一橋立於裏向放鐵炮事　一於佛前責馬事

右條々於相背輩者、可成敗者也、如件、

天正十一　十一月七日　越中守花押〇中略

〔丹後州宮津府志佛閣二〕天橋山智恩寺〇中略　塔頭　久昌院　本光院　壽昌院　對潮庵　心月庵

大明寺

大明寺ハ、但馬國朝來郡黑川村ニ在リ、貞治六年、山名時熙ノ建立ニシテ、禪僧宗光ヲ以テ開山トス、天文年中、火災ニ罹リ、祖師堂ヲ除クノ外、悉ク烏有ニ歸セシガ、正保年中、僧大愚之ヲ再興セリ、臨濟宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會但馬七十七〕雲頂山大明寺　在黑川〇同禪宗　開山　正續大祖禪師

〔全國各宗本山明細帳〕禪臨濟宗　中本寺　大明寺　但馬國朝來郡黑川村

〔但馬國史朝來郡〕黑川大明寺月庵和尙開基、貞治中號雲頂山、山名宮內少輔時熙尊信シ、應永十五年卒ス、諡ヲ大明寺殿巨川熙公ト云、月庵ハ康應元年三月廿一日卒ス、正續大祖禪師ト賜フ、永享以來堂舍傾廢ス、天文中火災、什物不殘燒失ス、唯祖師堂一ツ災ヲ遁レテ今ニ有リ、其後澤庵禪師修理、普搜集ニ、

黑川大明寺佛殿ウハフキスルトテカシコニ行テ、

法も末に傾く月の庵にはふらぬ雨にも袖ぞぬれけり

正保初、大愚和尙諸堂ヲ再建ス、慶安中、寺領十五石ヲ賜フ、

〔大明禪寺開山月庵和尙行實〕師諱宗光、號月庵、濃州人也、〇中略貞治丁未〇六年秋、道經山陰、入但之黑

名勝　所在　寺格

名勝　所在

川、愛其幽邃、駐錫以居、柴棚爲床、楮皮爲衣、冷淡枯寂、與世邈然、未半歲、衲從雲臻、師拒之不可、僅造一紀、縞白相半、誅茅插草、遂成梵宇、山號雲頂、寺曰大明、蓋圓山頂高寒、便於行道、泊圓通大圓攝之禪呂、此皆前後門山焉、康應元年己巳三月廿一日、俟感小恙、見容如常、越二日、中夜泊然坐化、壽六十四、臘五十、〇中略源金吾巨川公、嘗預總徒、在朝屢奏、仍追諡正續大祖禪師、寔應永十三年丙戌閏六月六日也、

壽永寺

壽永寺ハ、但馬國城崎郡ニ在リ、仁明天皇承和九年、定額寺ト爲ル、今廢寺ニシテ其舊地ヲ詳ニセズ、

〔續日本後紀十一仁明〕承和九年二月甲午、以但馬國城埼郡壽永寺、爲定額寺、

阿彌陀寺

阿彌陀寺ハ、伯耆國會見郡ニ在リ、僧玄賓ノ建立スル所ナリ、今廢寺ニシテ其所在ヲ失ス、

〔三代實錄十一淸和〕貞觀七年八月廿四日壬申、昔弘仁末、沙門玄賓於伯耆國會見郡、建立阿彌陀寺、至是、勅永免寺田十二町九段四十步租、〇租原脫、據一本補、本國內百姓所施入也、

安養寺

名稱
所在
創建
堂塔

安養寺ハ、伯耆國會見郡山市場村ニ在リ、元弘年中、後醍醐天皇ノ皇女ノ瓊子內親王開基スル所ナリト稱ス、時宗ニ屬ス、

〔伯耆志三會見郡〕山市場村　安養寺領〇中略

勅願所　會見山西月院安養寺　遊行派

本尊阿彌陀如來、春日作後醍醐天皇御寄附　御開基、西月院安養內法親王、〇中略　今寺に藏する〇中略緣起の文左の如し、

當山會見郡會見山西月院安養寺は、人皇九十五代後醍醐天皇、元弘二年隱岐國へ遷幸し給ふ時、〇中略第二十七の皇女、御母は尊良親王と同じく、贈三位爲子の腹にして、十六歲にならせ給ふ有けるが、天皇に別れ給ふ事を歎かせ給ひ、三位局の女の童に、御姿をやつさせ給ひて、當國迄御隨身ありしに、隱岐國へ御渡海の日にあたりて、武家より人數を改る事の嚴なれば、すゝみ給ふに詞なく、終に皇女を此國の守護人佐々木の何某ぞ預り奉りけるとぞ、然るに天皇再聖運を開かせ給ひ、都へ遷幸座ましける砌、御輿を進め奉ると云へども、皇女は兼てより有爲轉變のことわりを觀じ給ひ、遊行第五世安國上人、當國修行の法筵に參りあひて、出離生死の御思ひの餘り、遂て上人の御弟子となり、御飾をおろし給ひて、安養比丘尼と號し給ひぬ、其由叡聞に達しぬれば、國の地頭に勅有て、一字の堂、二棟の室を造らせ、寺の領地若干を賜はり、皇女の院號法名を、院號寺號として、西月院安養寺と云へる勅願の靈場となし給ひぬ、〇中略　御開基西月院安養內法親王御墓、後醍醐天皇御靈社〇中略　氏殿權現　鷲社　稻荷社〇中略　左近櫻　右近橘〇中略　塔頭常樂院趾〇中略　下馬碑在二門外一〇下略

〔伯耆志三會見郡〕山市場村　安養寺領〇中略

安養寺比丘尼を瓊子內親王と定めたてまつる故は、門脇重綾が考證に曰、新葉和歌集の下

寺格

に元弘のはじめ、世中みだりがはしくはべりしに、思ひわびさまなどかへけるよし聞て、瓊子内親王許へ申つかはしける、　中務卿尊良親王

いかでなほ我もうき世をそむきなむうらやましきは墨染の袖

かへし　瓊子内親王

君はなほそむきなはてそとにかくに定なき世の定なければ、と見えたるは、此の安養比丘尼の御事にて、尊良親王は、御同腹の御兄にまして、御親しみも、他に異なりければ、此御贈答は有しにやと思ふによりて、大日本史を參考するに、果して然り、后妃傳に、藤原爲子の腹に尊良親王○中略宗良親王○中略瓊子内親王欣子内親王ありて、又一皇女あり、分註に增鏡曰、爲子生女三宮、然名稱事實不可考と記して、是は皇女傳に載せず、皇女傳には惟子内親王、瓊子内親王有て、又一皇女あり、瓊子内親王御薙髮の事は、右の新葉集に據りて、出家爲尼とあり、かく欣子、惟子御名行弟共に迭に相差ひ、御名の傳らざるも、亦迭に見ゆれば、甚だ混らはしきを、瓊子内親王を、安養比丘尼とするはいかにと云ふに、右の皇女傳に、惟子内親王には、叙二一品一と記し、○中略一皇女は傳無之、○中略凡諸皇女御薙髮ありしは、多く入二某寺一爲レ尼、居二某所一と記せる例なるに、此の二皇女は其の事あらず、瓊子内親王の御薙髮は、上に記するが如くなれば、是必ず安養比丘尼の御事とこそ思はるれ、御居所を載せざるは、新葉集に所見なきが故なり、かくて尊良親王、元弘二年、土佐へ遷され給ひ、明年御歸洛あり、○中略其頃内親王は、當國にて御薙髮の後なれば、此御歌はあるなり、若また安養比丘尼と御同人に非ずして、京中に坐ます事とせば、上に云ふ如く、御居所も筆記に傳はるべし、又親王も爭か御對顏なからん、御詞書も、遠方の御事を聞かせ給ひし趣明らけし、○下略

〔安養寺文書〕當寺者、建武御帝皇女安養内親王爲二御草創地一、被レ寵二勅願一、其後漸經二年序一、殊遠境之間、中

絕訖、然今度再仰勅願之事、速達天聽、復先規之條、彌燃法燈光輝、宜奉祈玉體安全者也、謹言、

十二月一日　　左中辨花押

進行末寺伯耆國會見郡
安養寺亮堂覺阿上人御房

わざと筆をそめまいらせ候、その寺むかしより、ちよくぐわん所のところに、きん年花そのゝゐん御いはい、たいてんのよしに候まゝ、すなはちあひとゝのへ、きしん申候、いよ〳〵三せいゆだんなく、さいこう候やうにと、中事に候まゝ、そのこゝろへ候事に候、めでたくかしく、

七月○天明七年三日　　花押

あんやうじへ

〔伯耆志〕三會見郡山市場村　安養寺領

高百石　家四十戸　人二百口　當寺領は、所謂御朱印地にて、歴代領主の管外なり、然れども命令は本府寺社奉行の傳ふる所なり、○中略斯てまた當寺百石の高にて、餘地有しを、慶長六年、米子城主中村氏の臣、横田内膳一國を撿地せし時、百石に餘る處の地は、悉く公領とす、其高二百五十石餘と云へり、○中略元祿十五年、寺領田洪水に壞はるゝが故に、役價、鳥取郡奉行米村所平に修復の事を請ふ、○中略代地として當村十七石一斗三升五合、四日市村高九石五斗一升六合、都合二十六石六斗五升一合を附す、○中略其後二十五石御寄進有て、是に彼の納むる處を加へ、漸く經營に宛て、今日に至ると云へり、

四王寺

出雲國四王寺ハ、清和天皇貞觀九年、新羅ヲ調伏センガ爲ニ、伯耆、出雲、石見、隱岐、長門等ノ國

ニ建立シタル五道場ノ一ナリ、後世廢頽シテ、意宇郡山代ニ、其舊地ヲ存セリ、

〔雲陽誌意宇郡〕山代

四王寺　風土記ニ曰、山代郷中新造院一所飯石郡少領出雲臣造所トアリ、是ナルベシ、今ハ寺跡バカリナリ、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年五月廿六日甲子、造八幅四天王像五鋪、各一鋪下伯耆、出雲、石見、隱岐、長門等國、下知國司曰、彼國地在西極、堺近新羅、警備之謀、當異他國、宜歸命尊像、勤誠修法、調伏賊心、消却災變、仍須點擇地勢高敞、瞰臨賊境之道場、若素无道場、新擇善地、建立仁祠、安置尊像、請國分寺及部內練行淸進僧四口、各當像前、依最勝王經四天王護國品、晝轉經卷、夜誦神呪、春秋二時、別一七日、淸淨堅固、依法薰修、

〔延喜式二十六主稅〕凡出雲國四王寺春秋修法、每季七箇日供養幷燈分料、四王四前、一前一日供飯料稻四把、粥料稻八分、餅餤料各稻三把、煎餅料油一合八勺、雜菜子四升、燈油二合、僧四口、一口一日供飯料稻四把、粥料稻八分、鹽一合二勺、芥子五勺、紫苔、大凝菜、醬、末醬、酢各一合、海藻、滑海藻各三兩、大豆、小豆各五合、童子四人、一人一日飯料稻二把、鹽二勺、海藻三分、年料除春秋修法日、常燈日別二合、通計長夜短夜、所行四王供飯粥、四僧供飯、海藻、滑海藻、鹽、酢、童子四人、飯、鹽、海藻等、准修法日供行之、以正稅充行、若請用國分寺僧、除二季之外供養本寺充之、

鰐淵寺

鰐淵寺ハ、出雲國楯縫郡別所村ニ在リ、推古天皇ノ勅願ニシテ、僧智春ノ開基スル所ナリト云フ、天台宗ニ屬ス、

〔雲陽誌楯縫郡〕別所

鰐淵寺　天台宗、浮浪山一乘院といふ、夫此寺は人王三十四代推古天皇之勅願、智春上人開基の

靈場にして、しかも傳敎大師唐國に渡、天台宗を稟給ひ、延暦寺草創の時、末寺最初の第一なり、智春上人勅をうけたまはり、鴻基を開、藥師觀音の兩像を根本堂に安置してより、法華三昧堂、常行堂、馬頭堂、開山堂、二王門、藏王權現、摩多羅神、日吉山王、祇園、首神、小守、勝手明神、三十八社、綿々として末世の今に殘れり、古は堂社坊宇都て三千餘ありしに、度々の兵亂に燒亡して、今は僅に十二坊あり、○中略抑本堂は山の半にありて、十二坊は谷々に石をたゝみ、岡のほとり巖を切ぬき建たるもあり、前には靑壁けはしきをうけ、川の流きよく、大竹小竹の猗々たるもあり、權者仙人も入ぬ山なれば、古樹谷嶺にしげり、春の花は雲か雪かとうたがひ、夏の綠ながく、杜鵑の聲幽に、秋の紅葉は錦をさらすがごとく、鹿の鳴音も一入しづかなり、院々へは皆筧にて谷水をとれり、藏王堂は洞の内にありて、峯頭より漲おつる瀑布あり、其流の潭となりたるを、鰐淵とはいふなり、殊に勝れたるは、熊成の嶺なり、○中略中古は毎年正月廿日、三月三日、大衆、大社へ參籠して、神殿にて秘法を修し、經堂にて般若經を轉讀し、造營の時は、國造と當寺の和尙一人相對してまつれり、國造職を繼人、此山にのぼる事ありしに、祠官唯一の神道なりとて、堂頭佛閣を破滅し、中古の式も絕はて、和光同塵の盟も、徒になれりといふ、思に寬文年中、御造營唯一の神道にあらため給ひ、兩部習合をのぞきすて、神代の舊式にかへし、明々として、神の神たる道をあらはし、本たてる善政こそ、世にありがたくぞおぼへ侍ぬ、

根本堂　本尊藥師如來、千手觀音、慈覺大師の作なり、大衆五日かはりにして、毎日の參籠なり、毎月朔日、大般若經、八日、十八日、衆徒集て顯密の勤あり、

法華三昧堂　本尊釋迦如來、普賢、文殊、慈覺大師の作なり、夏九十日、衆僧毎日法華讀誦あり

常行三昧堂　本尊阿彌陀如來、慈覺大師の作なり、毎月十五日、大衆勤行あり、

摩多羅神社　僧二人、和尙一人に從て嚴秘の法を受、正月朔日より十一日にいたる、毎年かくのごとく、三年勤て成就するなり、初て此法を受る者はかくのごとし、三年勤て成就の者は、一年代なり、

本

覺堂　本尊阿彌陀如來、安阿彌の作なり、此堂に智春上人の像を置、毎月廿七日、智春上人忌日の勤あり、十月廿七日、四箇法用論義等あり、　山王、祇園、嘗神、　三神一社にまつる、毎月廿四日勤行、二月廿五日、天神祭、四月中の申の日、山王まつり、六月十四日祇園祭なり、　藏王權現　瀧の半岩窟の中に社あり、毎月十九日衆僧勤行、三月三日、和尚一人本地密供を修し、衆僧大般若轉讀す、　三月十七日、東照大神君の胎曼陀羅供あり、　六月四日、傳敎大師金曼陀羅供あり、　八月廿日、大猷院殿の合行曼陀羅供あり、　十一月廿四日、天台智春大師報恩會法華八講あり、　十二月十九日より廿一日まで、三千佛名經あり、

〔鰐淵寺文書　一〕推古天皇御宇敎到二年ヨリ正中三年マデ七百九十五年也、

鰐淵寺建立幷燒失事

一推古天皇御宇、智春聖人建立、安₂置觀音尊像、勸₂請金剛藏王、爲₂地主權現₁云々、

一寬和二年丙戌、千手堂藥師堂等造替云々、破壞朽損之故歟、國衙造營ト見タリ、

一天永三年壬辰建立、塔同造營國衙造營云々、天治二年四月七日塔供養、三井寺長吏圓乘房請僧百人云々、

一仁平三年癸酉十一月廿七日、依₂久木新大夫與₁鰐淵寺唯乘房万田庄相論、三郎先生源義憲朝臣方人而、燒₂拂鰐淵山₁畢、卯時伊乃谷ニテ合戰ス、燒失未時也、久壽二乙亥年中造營畢、

一永万元年乙酉二月戌時、千手堂藥師堂以下燒失畢、本覺坊火出見タリ

一治承元年丁酉十月九日、千手堂造營供養、

一同二年戊戌千手堂、藥師堂、常行堂、塔、尺迦院、普賢院燒失畢、

乘陽房火出、常行房歟　同年六月千手堂柱立、一年中造營畢、勸進寶光房、

文治年中藥師堂造營、勸進同人、常行堂朝山广事造營云々、

寺領

元暦元年十一月、塔并千手堂供養云々、旃那寶光坊供養、導師天王寺松林房、請僧六十人、講師布施馬二疋、被置絹五十、重色ニ布三百端、筵百枚、米百石、鐵谷等也、請僧布施人別上馬、被置絹一重、舞童十二人、唐綾一端、舞師八人、各上馬二疋也、總一山大衆分、布施馬牛釜鍋筵布鐵、一人モ不漏、至修行者、客僧ニ引擧、

文治二年丙午九月十五日　　藥師堂供養導師松林坊

〔鰐淵寺文書〕目安

勅願寺出雲國鰐淵寺長吏讃岐律師頼源申、當國三所郷地頭職事、

右當寺者、推古天皇之御願、國中無雙之伽藍也、就中先朝〇後醍醐自隱岐御所、去元弘二年八月日、忝被籠震筆御願書於當寺根本藥師堂、依被致朝敵滅亡之御祈念、無程翌年元弘三先代悉被誅伐畢、就之建武三年正月日、於山門所有御寄附三所郷於當寺根本南院也、隨而興國元年八月十三日、當御代〇後村上於吉野皇居下預安堵綸旨畢、然者早任度々勅裁、可有遵行地下之旨、重下賜綸旨、申受宮令旨、全知行、彌爲抽御祈禱之忠勤、謹目安言上如件、

正平六年十月日　　晴久花押

〔鰐淵寺文書〕

鰐淵寺領書立之事

一從直江郷陳夫之事、此方被官共、拘分相除、拾人仁申定之事、
一從國富庄者、此方給人相拘候名散田共仁、陳夫拾人仁申定之事、
一諸御寺領百性等、下地他所之仁、不可立沽却質限之事、
一別所辛川寶役紺役、其外諸課役、如先規令免除之事、
一從直江郷國富庄河除國太篇之儀候者、山中江雁可申候、自然地下人於無□□者、二度程之事者、

寺鰐

御寺江届可申候、其上仁不被仰付候者、直可有催促之事、
一諸郷之内坊之經田、當御知行不可有相違之事、
一兩郷之百性等、武家江奉公不可叶之事、
以上
天文十二年六月廿八日　　立原次郎右衛門尉
幸隆花押〇以下二人略
鰐淵寺年行事

〔鰐淵寺文書一〕鰐淵寺北院一衆　起請文事
合
一不可致經法則於如在事、
一不可令違執上座故實張行事、
一雖爲師匠親昵之沙汰、不可有親疎事、
一不可漏御堂內禮儀於寺家事、
一雖爲上座、以非例不可張行次座事、
右此條々雖爲一座、令違背者、阿彌陀如來、摩陀羅天神之神罰冥罰、各可罷蒙之狀、如件、
嘉曆元年十二月　日　　久俊花押〇以下略

〔鰐淵寺文書二〕鰐淵寺掟之事
一、堂塔建立、不可有無沙汰之事、
一猶衆儀成論之方候者、從此方可申付候事、
一寺領分百性之子、如先規衆徒ニ被成間敷候、當座住山之方、不可有寺內地下之諸細判事、右此旨違輩之於仁體者、爲惣山堅可被申付候、爲後日掟狀如件、

永正六年十月廿日　　經久花押

子院

〔雲陽誌楯縫郡〕別所

鰐淵寺〇中略　和多坊　鰐淵寺十二坊の中の一坊なり、本尊阿彌陀如來、惠心の刻彫なり、〇中略昔年當山に乘徒派、行人派、中乘方とて三派に分て、各尊卑あり、元和年中に、悉く乘徒派となり、十二坊に究ぬ、此時双嚴院より掟狀あり、和多坊は代々師傳の續來、他家より續ざるなり、　松本坊　本尊不動明王、聖德太子の作なり、　禪林坊　本尊觀音大宮形　橋本坊　本尊文珠、安阿彌の作、　井本坊　本尊藥師如來、行基の作、　池本坊　本尊阿彌陀如來、觀音勢至、傳敎大師の作、　密嚴院　本尊如意輪觀音、安阿彌の作、　大福坊　本尊千手觀音、惠心の作、　洞雲坊　本尊阿彌陀、慈覺大師の作、　西本坊　本尊釋迦如來安阿彌の作、　本覺坊　本尊不動明王、大宮形、　櫻本坊　本尊不動、弘法大師の作、

雜載

〔鰐淵寺文書一〕出雲國朝敵人等、爲誅伐、於宿老者、被致御祈禱之精誠、至于若輩之者、可致軍忠、有勳功者、可被抽賞之狀、依仰執達如件、

建武三年二月九日　　伯耆守花押〇名和長年

鰐淵寺南院乘徒御中

妙義寺

妙義寺ハ、石見國美濃郡益田村ニ在リ、益田秀兼ノ建立ニシテ、僧木叟ヲ以テ開山ト爲ス、後世衰頽セシヲ、秀兼二十三世ノ孫藤兼之ヲ再建シ、僧關翁ヲ以テ中興ノ祖ト爲セリ、禪宗ニ屬ス、

名稱　所在　創建　寺領

〔妙義寺文書〕指上申一札之事

□義寺開基之事、石陽益田莊御神本前□「□」大夫越前大守藤原朝臣國兼ヵ當十三代秀兼法名帶幸中人建立妙義寺、木叟和尚爲開山、其續法脈住持十代餘、是他派也、然後益田家當二十三代越中守藤兼、法名大蘊全鼎之御時、雲州之尼子ヲ毛利殿ヨリ退治被成之時、越中守御供被成、永々對陣之內、石屋派之親長老參禪開陳之後、藤兼禁中江參內、石屋門戸之三關透過之御綸旨頂戴、大蘊全鼎者勅賜號也、其御綸旨、益田家ニ于今有之事候、又大蘊全鼎者、建立妙義寺、寺領指添、大寧寺十五代關翁和尚被進而爲中興、其身成再開基、○下略

〔日本洞上聯燈錄十一〕大寧繁興存榮禪師法嗣

長州大寧關翁珠門禪師、筑前穗波郡藤氏子、○中略嘗應請七處、謂妙悟、妙義、瑞雲、松蔭、妙青、枕肱、大蘊、皆推師爲剏業之祖、天正乙丑、退大寧歸妙悟、慶長八年二月十五日、趣寂、壽八十三、

〔妙義寺文書〕妙義禪庵寄進田畠幷名田以下注文

一院內　岡山一丸（堺別紙有之、此內垣ノ外下ニアリ、院內也、）　一三段小　井本　一一段小　檜垣副（代五百疋）
一一段小　村榎（代五百疋）　一六十步　樋本　一一反　堀田　一二反　堀田　慶光庵寄進分　一三反　平大夫名之內爲御門（堀田ニ堺）　一二反　堀田　一一反小　野坂　正義位牌免　一二反　辻堂前　代四百文　一一町　此內五段稻積腐（代四百疋）　三反土器土（一貫五百文）　二反宮家後經坪（代四百文）　此內一反畠代　一六段小　此內一反小門前（代六百文）　號本針袋名、一反辻堂前、（代三百文）　一反琵琶頸、（代四百文）　三段澤利鳴越（代三百文宛）　一一反小
塗士前　一竹內名　虫追之內　以上田一町二反半五步　一篠谷　同美濃地迫、（新白上之內）
以上田數一町九段小、　一一反　タンコ田　秀登位牌免
應永卅年（壬卯）十一月十三日　花押

妙義寺御知行田數分

以上田數三町五反六十歩

此内四段ト三段ハ替地ニ成、在所アリ、　此内一段不知行 宮家後

文安三年丙寅九月廿九日下　　遠江守兼成花押

妙義寺侍者御中

〔石見八重葎九 美濃郡〕益田上本郷　東家禪宗万年山妙義寺　同地〇除貳十石

〔妙義寺文書〕妙義寺井門中禁法之事

一二祖三佛忌者、門中聚會當寺、可成佛事、世人諺云、得恩不報恩如木石、　一不立文字、可脩禪道、古人云、文字是魚兎筌蹄也、　一不用錦帛、可著紙衣、　古德云、紙衣是勝錦衣、　一莫怠朝夜勤行、古人云、懈怠者必天罰之相也、　一不可在家夜行、世人諺云、夜行必女犯之相也、　一不用長短劔、世人諺云、武具寵愛、必還俗之基也、　一不可高歌談笑、古人云縱横無碍、外道魔軍也、　一搭中衆僧、可勵掃地、佛曰、掃地必有五種德、　一自身清淨　二、令他身清淨、　三、諸天歡喜、　四、无病快樂、　五、臨終時、無身苦、　一老若可本法門參學、先哲曰、是則佛祖命脈、列祖骨髓也、

右之條々違犯之輩者、三千里外擯揚花、々々々矣、

時天正九暦辛巳姑洗吉日　　殊梅在判〇以下三名略

太山寺

太山寺ハ、播磨國明石郡門前村ニ在リ、僧定惠ノ開基ニシテ、藤原宇合ノ建立ナリト稱ス、今天台宗ニ屬ス、

名稱所在	創建	堂塔

〔和漢三才圖會七十七播磨〕大山寺　在同郡明石伊川莊　天台　寺領三十五石　本尊藥師如來　開基定惠和尙

當寺者、人皇四十四代元正天皇御願、大職冠鎌足公之草創、定惠和尙開基云々、

〔華頂要略八十〕太山寺在播磨國明石郡伊川莊、附末寺、

傳曰、淡海公御子宇合卿有病惱、浴明石郡摩耶谷溫泉之時、夢中藥師如來告曰、從是當丑寅有鎭護靈蹤、其地東北高山峨々而、表法報應之三身、流四瀧今所謂男瀧、女瀧、乾瀧、照妙瀧是也、具四智、往昔鎌足定惠雖創業不周備、汝今依佛陀擁護、勵信力、建立伽藍、藥師像爲安置七所、衆病悉除、身心安樂也、於是靈龜二年、建立當寺并七箇所、構藥師道場、則病患速平癒、又曰、當寺本尊藥師如來自赤石海中出現云々、刑部定國漁獵之時、網中放光明、得醫王善逝之尊像、卽宇合卿以此像爲太山寺本尊云々、四天王像者、春日佛師作、十二神將者、行基菩薩作、當寺行幸、白河法皇、後宇多院、崇光院、中興、增賀上人、

本堂七丈四面　本尊藥師如來從明石浦海中涌出之尊像云々　護摩堂三間四面　本尊不動明王　三重塔三間四面　本尊大日如來　常行堂四丈五丈　本尊丈六座像阿彌陀如來惠心僧都作　講堂四間五間　延享二年寺家注進狀云、破壞之後未建立云々、　食堂五間七間　本尊僧形文殊菩薩、延享二年注進狀云、未建立、存礎石於本尊者、今安置于本堂云々、　釋迦堂、求聞持堂、此兩堂弘安元年燒失之後、無再建、　二王門貳丈三丈　衆會所五間六間、俗稱茶所　寶藏貳間三間　土藏貳間三間　鐘樓堂貳間三間　三所權現貳間三間　拜殿三間五間　祭神、熊野、白山、藏王、　山王社　天滿宮社　辨財天女社、吉祥天社、　浴室三間四間　十王堂貳間三間　來迎堂三間四面　奥院　本尊阿彌陀如來座像三尺餘　脇士觀音立像三尺餘　勢至同上各惠心僧都作　弘安元年回祿之後無建立、延享二年乙丑十一月注進狀云、奥院本尊并二脇士等、今安置于寶珠律院云々

〔播磨鑑十五明石郡佛閣〕是ゟ東浦之部

寺領

寺制

太山寺　天台宗　在二門前村一、　洛陽青蓮院御門跡末寺

本尊藥師如來七佛藥師ノ其一也、靈佛也、惡病種有新之驗有レ驗云　御朱印　寺領三十石

十二神　大坂亂之時、攝州能福寺より預置、至レ今安置之、

護摩堂　領五石　山林竹木諸役御免　制札建武三年八月六日堅札ノ年號月日也　貞治三年三月四日横札ノ年號月日也

人王四十四代元正天皇之御願寺、藤原鎌子之草創、寶暦十年迄一千四十六年也定惠和尚之開基也、靈龜二年、藤原宇合依二瑞夢一建立也、

壽永年中、平氏沒落之時、門脇中納言教盛之末子出家而、爰ニ隱レ住ケル由云傳、密敎院ト云ハ此寺跡也ト云、

〔華頂要略八十〕太山寺在二播磨國明石郡伊川莊一、附末寺、

太山寺領于レ今存二寄附狀一〇中略　慶安元年戊子八月、始而賜二大將軍家光公之御朱印一、

藥師堂領播磨國明石郡太山寺境內三拾石、護摩堂領、於二同所一五石、合三拾五石事、任二先規一寄二附之一訖、全可二收納一、并坊舍、山林、竹木諸役等免除如レ有來、彌不レ可レ有二相違一者、守二此旨一可レ抽二國家安泰之懇祈精誠一者也、仍如レ件、

慶安元年八月十七日　朱印

〔華頂要略八十〕太山寺〇中略

禁制　太山寺條々

一不レ可下伐二取寺門山林竹木一事、　一於二寺內山野一、不レ可レ致二狩獵殺生一事、　一亂二入寺中一、不レ可レ致二狼藉一事、

一押二取僧坊菓子一、紛爭事、　一爲レ犯二僧身一、雜二居淨行僧侶一條、既背二經敎戒行一之者、一切可レ停二廢彼寺出仕一事、　一里法師等相二綺寺田畠所務一、及二其煩一云々、令レ停二止之一、山上常灌致二執務一、且成二寺家興隆一、且每年於二寺僧中一可レ遂二勸定一事、　一溫室者、爲二山住淨侶一構レ之、然者守番之院主已下令二所用一者、爲二先例一歟、近來亂

子院

次第旨、致沐浴間、濫吹也云々、堅守法例、猥不可亂入事、　一寺領百姓被召仕條難堪云々、須任先規致沙汰事、

右制符如斯、宜守此旨禁斷、若有違犯之輩者、依寺僧註進、可處重科之狀如件、

貞治三年三月四日

〔華頂要略八十〕太山寺〇中略

僧房四十餘院云々　元祿五年壬申八月注進狀云、塔頭十三坊、所謂歡喜院、常樂坊、中之坊常林坊、如意坊、杉本坊、藥師院、瀧叢坊、櫻本坊、寶珠院、密敎院多聞坊、安養坊云々、延享二年乙丑十一月注進狀云、現在十一坊歡喜院、中之坊、密敎院、多聞院、瀧象坊、安養院、理性院、妙覺院即心院、遍照院、寶珠院云々、塵方三坊無坊號、一代限以名稱之、仍俊、敎順、長泉、已上元祿五年八月改之長善仍俊、長圓、已上延享二年十一月改日〇中略

同十月〇享保十年十日、禪忍比丘賜條目、今日參殿被渡之、

靑蓮院殿御末寺播州明石郡太山寺寶珠律院條目定之事

一於法儀者、被屬山門安樂院一派之間、向後可受彼院之指揮、末寺長林寺可爲同前事、

一住寺改補之節者、從安樂院擇其器候上、御門主江相伺、可蒙御許容事、

一修造以下世間之儀大段之事者、御門主江相伺、可請御下知事、

右條々、依靑蓮院宮御氣色所定如件、

大谷少進法橋、

業廣判〇中略

享保十年八月

太山寺寶珠律院

名稱 所在

圓敎寺

圓敎寺ハ、播磨國飾西郡書寫山ニ在リ、永延二年、僧性空ノ草創スル所ニシテ、西國三十三所觀音ノ一タリ、

〔拾芥抄 下本諸寺〕書寫山（播磨、性空上人、如意輪、）

〔書言字考節用集 二乾坤〕書寫山（シヤサン 播州揖西郡、釋性空居于此、創圓敎寺、）

〔播磨名所巡覽圖會 四飾磨西郡〕書寫山圓敎寺（飾西郡坂本村の上方にあり、天台宗、）

本尊如意輪觀世音（丈六の像、安鎭の作、西國二十七番札所なり、）釋迦如來（本堂に安置す、唐濟郷の作、）阿彌陀佛（奥の堂に安置す、定阿彌の作、）淸水（本堂の下より涌出る、飲もの病を愈すと元亨釋書に見ゆ、）一條院永延二年の草創、開山は性空上人也、本尊如意輪の像は、性空庵居のはじめ、傍に櫻桃の二樹あり、一日天人降つて樹を禮し、偈を作つて曰、（稽首生木如意輪、能滿有情福壽願、亦滿往生極樂願、一切衆生心所念、）空師其枝を伐て根株に就て、如意輪大悲の像を造りて、長一尺五寸安鎭行者に命じて是を刻しむ、

創建

〔扶桑略記 二十七一條〕永延二年、同年性空聖人、於書寫山建堂、號圓敎寺、造立丈六釋迦佛像、供養講師延曆寺寶因、

長德四年正月廿二日壬午、供養圓敎寺、

〔朝野群載 二文筆〕書寫山上人傳　花山法皇

沙彌性空者、東京人也、父從四位下、橘朝臣善根、○中略三十六遂出家、籠霧島山、讀誦法華、日夜無餘念、○中略後到播磨飾磨郡書寫山、造一間草庵住之、結構卑微、山木留皮、以薦爲帷幕、以紙爲衣裳、山禽野獸、知心無機、馴而自至、每及齋時、前後群集、先分其食施之、身素無蟣虱、胸間肌膚、雕顯阿彌陀佛像、代代宰吏、及當國隣國道俗男女老少、無不歸依、或建立佛堂、修三昧、凡厥大小、隨分行功德事、皆就上人修之、嚮風感化、致身師事者衆矣、衣之食之、不及闕乏、上人獨去、更占閑地、結廬而住、紙衣不改、繩樞如

堂塔

稱、被諸檀越所付屬種々佛事、以來住僧等、於本所令修之、南北高僧耆碩、洛中公子王孫、賢者諸者、或公德行、聞公異態、往々尋行、頂禮結緣、出家以降一日半時、無有病痛、一心誦經六十年矣、上人少言語、高僧重客、相對言語多言之中、答一二言、面不擧、如有思惟、花山太上法皇、去寬和二年、微行見上人結緣畢、爾來十七箇年、長保四年三月六日、重結緣、宿命仙觀、聞上人行狀、記之、于時地震、蓋是異相歟、○又見元亨釋書

〔書寫山圓敎寺舊記古今攝拾集〕當山堂塔炎燒事

右去元德三年辛未三月五日庚寅未時、五重塔婆懸雷火、講堂、食堂、常行堂、大經藏、已上五宇、一時令烟燼畢、然間、佛像零落、土地絕卷、充滿山林、火焰盈空、日月失光、煙塵和雲、更失方角、依之老若消魂、貴賤斷腸、其時爲體、非所及言語、筆難端乎、雖然押悲淚、早遂奏天聽而已、其奏狀併、

播州書寫山衆徒等、誠惶誠恐謹言、

請殊蒙洪恩、依代代綸命、任度度勅許、將仰天憐、今月五日、爲雷火所燒失、

花山院勅願寺、七間二階大講堂、號圓敎寺、五重大塔、井十五間二階三寶院、五間四面常行三昧堂、十二間樂屋、三間經藏等數宇大伽藍、如本建立、執行每年不闕一切經會、四季長日講演、及願宿以下勅願、紹隆佛法、奉祈皇家狀、○中略

右當山者、○中略 永延元年十月七日、山門明匠實因僧都爲唱導師、遂供養儀畢、星霜已三百四十餘歲也、此時忽逢劫燒之災、爲世爲寺不申、六根清淨之靈跡、五種妙行之靈崛、雷聲裏、觀化炎烟、宙寵影間、忽作灰土、悲哉悲哉、爭向爭向、君而尤可憐、臣而誰不歎、謹考先規、遠則因寬和、長保、承安、寬喜之舊例、近又准嘉禎、寶治、弘安、正應之佳摸、被寄國領歟、被下段米歟、將又被付闕所歟、此三ヶ條一而無御資助者、當寺再興期何日哉、縱又住侶等推丕石以爲礎、迴畫樹以爲柱、費力太多、成功可難、徒自疲勞、不如附驥尾、然而世及澆漓、致尊崇之誠者少、人屬非藩、通施與之思者稀、不遂三諦高聽者、爭遂數宇

造營哉、且追先蹤且蒙哀察、曲垂鴻慈、將浴風術、再建立一山之蘭若、彌奉祈九野之乂安、然則金輪聖主、銀牓儲君、芝山椒房、竹園柳營、明德不限齊日月之照臨、聖算無疆同乾坤之覆載、堯天與釋天俱朗、舜日與佛日並明、以私不申之、偏爲御願圓滿、佛法紹隆也、仍衆徒等不堪懇欵、勒子細狀如件、

元德三年三月日　書寫山衆徒等上（○中略）

凡自元德三年三月五日、至于貞和四年（戊子）二月中、首尾十八年之間、講堂已下、三字造畢、則二月廿三日（庚寅）辰時、遂三字上棟之祝、仍講堂棟現錢一萬疋、兩堂各五千疋、馬百二十疋、（百二十和尚各各沙汰也、）大略如斯、細細略之、

一次五重塔婆造營事

三堂上棟之日、依爲最上吉日、今日則手斧始、（年號等如上斯記、）

〔親長卿記〕延德四年（○明應元年）三月廿五日、在數朝臣語云、播磨書寫觀音寺燒失云々、（此本尊假生木也、其上ニ造堂云々、）希代事也、

〔蔭涼軒日錄〕明應元年三月二十七日、晩來藤子自妙達寺歸、後藤四郎、中島與三、同途夜來、四郎與三悅音泉桂藤昌叢疊壽滿等、勸以正雲社醅、打話及深更、四郎話云、今月書寫本堂炎上、其外房房五六箇爲焦地、一昨日注進到來云々、予云、國家之兵事也、四郎云、不然、僉曰、今度敵軍陣于彼寺、女人等多居之諸篇不淨之事耳有之、以故如此乎、予亦應諾、

〔書寫山圓教寺舊記（新略記）〕三堂之事（○中略）

一本多美濃守忠政、去元和四年（戊午）秋、姬路入城、明年（己未）二月、以寺社奉行觀音寺寬忠政公、先當國東郡在在、衆徒調奉加帳、赴民家催勸進、食堂等爲修理也、然處如上、元和六年五月、講堂又墮落、彌以修造相重、于時同八月二十日、忠政公登山、三堂大破被及御覽、別而驚入給、翌年酢秋中、御自分（并）御一門家中侍衆迄被入御奉加、銀子員數（如日記）同十月上旬、姬路町總總勸進之、町年寄衆被入精、隨分

寺制

奉加。〇中略寺中大營勞勸无計、

〔書寫山圓敎寺舊記遺續集下〕十二箇條起請文卅四〇中略

一客僧可令寄宿事

右經曰、客僧有利養分云々、又曰、日食三兩金云々、客僧來寺、能安置、五日之內、必與美食、若才覺秀發或可乘輦、若常僧、一體常僧、若有犯過、速可擯出云々、臨時可斟酌歟、

一尼衆不可住之事

右本山不登女人、况得久住乎、律曰、不聞壁外女人音聲云々、况終年得同一室交言語乎、可存知哉、〇中略

長元四年辛未閏十月廿七日　大法師政圓圓司學頭

參詣

〔書寫山圓敎寺舊記遺續集下〕後白川法皇當山幸御事廿三

承安四年四月三日、御幸當山、御所者、中院坊也、七日御參籠於如意輪堂、可開如意輪御厨子由、有勅定、草創以後雖不開之、依勅命開之畢、法皇、卽本尊御拜見、第十九和尚慈勝坊慶彙爲御先達參候佛前、法皇與慶彙之外、餘人不奉捧本尊、有其恐故也、其時被召問慶彙之名、一和尚某申上、法皇有勅汝可爲長吏、自今以後、一和尚職可號長吏云々、爲勅定之間、慶彙以來、一和尚號長吏、年預稱行事、上代者、以一和尚稱行事也、二代法皇臨幸之地、希代事也、

〇按ズルニ、華山法皇、二回御幸アリシ事ハ、上ニ載セタリ、

〔太平記十一〕書寫山行幸事附新田注進事

五月〇正慶二年二十七日ニハ、播磨國書寫山ヘ行幸成テ、先年ノ御宿願ヲ被果、諸堂御巡禮ノ次ニ、開山性空上人ノ御影堂ヲ被開ニ、年來秘シケル物ト覺テ、重寶ドモ多カリケリ、當寺ノ宿老ヲ一人召テ、是ハ如何ナル由緒ノ物共ゾト御尋有ケレバ、宿老畏テ、一一ニ是ヲ演說ス、先杉原一枚ヲ折

ヲ、法華經一部八卷幷開結ノ二經ヲ細字ニ書タルアリ、是ハ上人、寂寞ノ扉ニ御坐テ、妙典ヲ讀誦シ給ケル時、第八ノ冥官、一人ノ化人ト成テ、片時ノ程ニ書タリシ御經也、〇中略又延暦寺ノ中堂供養ノ日ハ、上人當山ニ坐シナガラ、風ニ如來唄ヲ引給シカバ、梵音遠ク叡山ノ雲ニ響テ、一會ノ奇特ヲ顯セシ事共、委細ニ演說仕リタレバ、主上不レ斜信心ヲ傾サセ給テ、則當國ノ安室鄕ヲ御寄附有テ不斷如法經ノ料所ニゾ被レ擬ケル、今ニ至マデ其妙行、片時モ懈ル事無シテ、如法如說ノ勤行タリ、誠ニ滅罪生善ノ御願、難レ有カリシ事共也、

大道寺
清妙寺
觀音寺

大道寺ハ、播磨國揖保郡ニ、清妙寺及ビ觀音寺ハ、同國賀茂郡ニ在リ、仁明天皇承和七年、並ニ天台別院ト爲ル、今皆廢寺ニシテ、其舊地ヲ詳ニセズ、

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年七月戊寅、以二播磨國揖保郡大道寺、賀茂郡清妙寺、觀音寺一、並爲二天台別院一、

平等寺

平等寺ハ播磨國ニ在リ、延喜式ニ其名ヲ載セタレドモ、後世廢絕シテ其舊地ヲ知ラズ、

〔延喜式 二十六 主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略

播磨國〇中略、平等寺料一千束、

誕生寺

誕生寺ハ、美作國久米南條郡栃社村ニ在リ、安元元年、淨土宗ノ開祖源空ノ誕生地ニ建立スル所ナリト云フ、

〔和漢三才圖會〕七十八美作 誕生寺　在久米郡稻岡庄栃社村

〔日本地誌提要〕五十二美作 佛寺　誕生寺　同郡(久米南條)北庄里方村、淨土宗、僧源空誕生ノ地ナリ、安元元年乙未創建、寺域四千六拾九坪、

〔校正作陽誌〕久米郡南分寺院 淨土宗　栃社山誕生寺〇中略

夫當寺草創、安元元年也、空時四十三、有顯師不忘楡郷、僧鏡塵塚上之感、一旦來親墓前、恭修超昇法、遺命在耳、悲泣不忍去、覓相地於栃社、輙覆一簣、名曰栃社山誕生寺、蓋誕生者報國極之名也、即安嚴父貧所議持願王、爲本尊、又手彫自像、遺之後昆、現在影堂焉、法燈一輝、餘炎大熾、師資相嗣、闡揚定業、不墜家風者、四百有餘霜、到此有備作大守宇喜田和泉守直家者、大稱日蓮宗、兩機相乘、倍說倍悅、卒欲殄滅諸宗、大與台宗、其徒嫉專修超過餘門、天正六年五月廿五日、率緇素二百餘人、寇于斯寺、斫佛像、逐僧徒、墜殿宇、焚經卷、將上影堂、百碑手調之肖像、寺邊有匠、潛負之遁、隱山中、以故獲全、又迫住持深譽、被以日徒僧伽梨、凶暴無狀而歸矣、同十年、直家罹病而死、慶長五年、嗣秀家與石田治部少輔謀逆、關原破後、竄于八丈、也矣、當寺住持及末徒諸檀信、歎時機既至、而各戮力以議再修矣、一日藝州沙門以八者過此、與住持深譽語旬餘、共歎廢蹤、同州嚴島運譽亦偶爾來、三人歎法契相合、於是僉議同赴洛、投智恩院誠譽、說以廢亡之狀、誠譽又深憫焉、即誘運譽深譽、直詣于闕、奏興復之事焉、天襟有感、不日賜綸命、繇是旁勸衆力、爲經始之助緣矣、既而影堂先成、修裔匠者所出之肖像、以安寶基、本堂尋

又成、蓋從空閑專修、至今五百稘、其風煽四裔、非才器大過人者、奚克如此耶、此寺空之桑弧地也、遊專念門者、不可忽視焉、故言詳也矣、行程去府城三里半餘、　影堂　再興永祿十二年、次天正四年、次慶長六年、堂東面今謂之本堂、影座像長三尺、石棨十柱在堂之前、相傳、安元元年、空歸作州、爲父母追薦、時彫此像、詳前、或曰、是時空母老而倘存、日夕慕空甚切、然空新立專念宗、不暇促歸裝、焉因刻其貌投母許、以代自行、今像是也、二說未詳之、母法諱妙海、卒日十一月十二日、　練供養屋敷　右毎年春秋、緇白相集、成菩薩舞、今彌陀堂本尊者、供養所用之半身佛也、歌舞絕後、新刻腰以下以接之、而爲立像、名其場、曰練供養屋敷、　青蓮池跡　在供養屋敷中、膺空誕、池中生青蓮華、花瓣郁四散、今池廢傍有影向石、一名道場石、

〔法然上人行狀畫圖　一〕抑上人は、美作國久米の南條稻岡庄の人なり、父は久米の押領使漆の時國、母は秦氏なり、○中略つゐに崇德院の御宇、長承二年四月七日、午の正中に、秦氏なやむ事なくして男子をうむ、時にあたりて紫雲天にそびへ、館のうち家の西に、もとふたまたにしてすゐしげく、たかき椋の木あり、白幡二流とびきたりて、その木すゑにかゝれり、鈴鐸天にひゞき、文彩日にかがやく、七日を經て天にのぼりてさりぬ、見聞の輩、奇異のおもひをなさずといふことなし、これより彼木を、兩幡の椋の木となづく、星霜かさなりて、かたぶきたふれにたれど、異香つねに薫じ、奇瑞たゆることなし、人これをあがめて、佛閣をたてゝ、誕生寺と號し、影堂をつくりて、念佛を修せしむ、

〔圓光大師行狀畫圖翼贊　五十〕誕生寺　美作國久米南條稻岡庄栃社ニアリ、大師出生ノ地ナリ、此寺所在ノ處ニヨセテ栃社山ト號ス、何時何人ノ建立ト云事定カナラズ、影堂ノ本尊ハ、上人四十三歲ノ眞形、三尺ノ坐像ノ木影ナルヲ、熊谷入道持參シ奉テ安置スル所、大師御自作ノ尊像ナリト申傳フ、當寺一世ノ住持豐的、或人ニ語云、蓮生房此尊像ヲ此寺ニ安置シテ、サテ歸京ノツイデ

寺領

ニ、菩提寺ニ詣テ、三十餘日逗留シケルト、舊記ニ見エタリ、彼入道ノ營建ニテ、建久以後ノ草創ナルニヤ、〇中略相傳フ弘治ノ比兵火ニカヽリテ、堂宇悉炎上シケレバ、御影佛像ヲバ井水ニ沈ケルトゾ、サルヲ永祿十二年三月二十六日、再興供養シテ、影像以下昔ニ復給ヒヌ、時ニ願主ハ當寺住持持光天祐玉和上、檀主ハ原田三河守貞佐ナリキ、又當寺七世中興誦蓮社玉興和上、元龜元年ト云木牌アリトゾ、今考ニ、弘治四年ハ永祿元年ニテ、永祿十三年ハ元龜元年ナリ、是ヲ當寺ノ本堂トシテ、傍ニ諸堂ヲ造レリ、

〔誕生寺文書〕御寺領如先年無相違百石之都合立置候故、其寺僧中として、無懈怠樣可被相働事專要候、右旨趣如件、

弘治貳年三月吉日　　平朝臣　原田三河守　貞佐花押

誕生寺方丈衆中

〔誕生寺文書〕森美作守忠政寄附狀

爲當寺領五拾石餘、敷地幷山林共令寄附訖、全可有領知之狀如件、

慶長九年十一月二日　　忠政花押

誕生寺

〔圓光大師行狀畫圖翼贊四十寺院〕誕生寺〇中略慶長九年、森中將某入部アテ、春三月十一日、同冬十一月十二日、兩度ニ涉テ五十餘石ノ寺產ヲ入、山林敷地寄附セラル、折紙二通今尙存セリ、元祿十二年、將軍家台命アテ、五十石ノ寺領ヲ賜ル、其狀云、

美作國久米南條郡北庄里方村之內、五拾石之事、今度寄附之訖、全可收納幷山林境內竹木等免除、誕生寺進止、永不可有相違者也、

元祿十二年十月十五日　　在御朱印

西大寺

名稱　所在　堂塔

西大寺ハ、舊ト犀戴寺ト稱ス、備前國上道郡西大寺村ニ在リ、天平勝寳中ノ草創ニシテ、初メ金岡庄松中島ノ地ニ在リシヲ、寳龜八年今ノ地ニ移セリト云フ、眞言宗ニ屬ス、

〔備前國志 十下上道郡〕佛刹

金陵山西大寺 西大寺村、寺領五十七石七升餘、眞言宗、本寺高野山多聞院、 觀音院 院主 圓滿院 寺中 安樂院　持命院　普門院　千手院

寺記略に曰、天平勝寳年中、周防國久ケ庄藤原氏の女皆足の創造也、古へは金岡庄松中島といふ處に有り、今に礎殘れり、寳龜八年、安隆といふ僧、兒島の海槌の戸と云所にて、龍神ゟ犀角を得て是を投ず、則今の地に落つ、よりて堂を其所に移して、犀戴寺と名付と云、猶緣起に委し、後醍醐天皇西大の字に改む、或は尊氏上洛のとき、此寺に入て是を改むと云ふ、正安元年正月、火災、同三年再興、明應四年五月、火災、同七年、又再興、永正年中、住持忠阿上人中興の人なり、當寺に於て毎歳元朝より二七日の間、修正の法會有、國家安全五穀成就の祈りなり、十四日夜更會畢りて、牛王を參詣の人に投與ふる事有、此事世に弘り、今に退轉なき故、此牛王をとり得たるもの、祝賀の供へ物を以て、別に此上人の影像に備ふ、世俗に神といふは非なり、此上人の木像にて、古來より常に本堂に安置す、

〔黄薇古簡集 八〕西大寺村金陵山西大寺所藏

西大寺立始、寳龜九年九月立畢テ、正安元年正月廿二日巳剋、雷電遇法天地大震動、其時炎上如斯、又立始ル事、本尊同年八月十一日奉造始、法樂身也、如本奉造立、次年自正月九日始、至于二月八日、金堂本立板敷假葺ス云々、

寺領

〔山陽遺稿碑三〕西大寺新作石門碑

西大寺、因寺成邑、舟船所輻湊、在前備為一都聚、著稱遠近、西大舊為犀戴、相傳後鳥羽朝改之、或曰、不然、足利尊氏東上時所改、蓋武人不識字、認音濫呼、或文徽副急、苦其點畫稠密、故從簡耳、寺安觀音像、像造於天平勝寶、寺建於寶龜之八年、僧安隆者、遇異人兒島海中、授以犀角、曰、投之水、隨其所沈、可以興寺、從之、卽今地是、備前二水皆自伯作來、南抵兒嶋、其東者襟州治、而西者帶寺、波水衝齧、日夜不休、而基礎屹然、邑屋鱗次、倚寺而宅者、千餘家、犀之戴焉、非虛言也、當芳烈公（○池田光政）之汰諸佛場、此在所不廢、烏知非賴其堅全、以鎭壓方面也哉、寺四更造、最後疊石于岸、登固其垠、今寺主正翁、又與諸檀越謀、新作石門于南岸上、柱桷梁楣、皆石為之、而起樓架其上、柱周丈有六尺、高稱之、取材近邑、一柱栽須舟二隻、助貲者、七十有二人、槩係邑人、揃工於文化丁丑（○十四年）、今茲己卯（○文政二年）粗成、嶷立雄峙、遠望可識、自今而後、凡舟船之上下者、認為繫泊、高帆危檣、群聚於慈雲之下、不慮風水之患、犀戴之名、於是益實、而邑與寺相須、其稱益著、可知也、夫天平寶龜邈矣、足利氏改寺名而降、兵亂相躡、宰備之士者、更亦松、山名、浦上、宇田數氏、寺牒所紀、歷歷可指、而寺獨依然如舊、大士像、一木片、能閱千載之治亂、況石門乎、未可知其更歷幾千祀也、余故不辭正翁之請、而書其事于石、亦將自託不朽焉爾、（○下略）

〔黃薇古簡集八〕西大寺村金陵山西大寺所藏

為御屋形樣（○赤松）御祈禱領、每年段錢方拾貫文事、任去二月廿八日御奉書旨、渡付申處也、仍狀如件、

應仁三卯月廿二日　浦上六郎左衛門　基景（花押）

西大寺別當清平寺（○中略）

西大寺領之事

一高五拾石也　上東郡西大寺內　右內貳石八屋敷定米　四拾八石田畠

右如書付之田畠也、上中下を引、西大寺本願へ可相渡、然者代官高內引候相殘、以高辻可遂算用者

也、

文祿四年十二月吉日　黑印○淨田秀家

長田右衞門丞どのへ

名稱所在用途

蓮嚴寺

蓮嚴寺ハ、備中國ニ在リ、延喜式ニ其名ヲ載セタレドモ、後世廢絶シテ其舊地ヲ詳ニセズ、

〔延喜式主稅二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻○中略
備中國○中略蓮嚴寺料一千束、

名稱所在堂塔

淨土寺

淨土寺ハ、備後國御調郡尾道ニ在リ、未ダ其創建ヲ詳ニセズ、中世屢、衰頹セシガ、足利尊氏ノ筑紫ニ敗走シ、尋デ其北上スルヤ、並ニ此寺ニ止宿シタルノ故ヲ以テ、大ニ足利氏ノ尊崇スル所ト爲リキ、律宗ニ屬ス、

〔藝藩通志三十三備後國尾道〕淨土寺律宗○中略市東の山麓にあり、轉法輪山大乘院と號す、初め高野山金剛寺に屬し、今京都泉涌寺に屬す、當時多寶塔に藏する法華經の卷尾に、推古天皇廿四年丙子、聖德太子、始建淨土寺とあり、いまだ眞否を詳にせず、弘安正應に至、寺漫く頽破す、嘉元年間、僧定證修營す、金堂、本堂、五層塔、鐘樓、食堂厨舍までも備りしが、正中二年、災に罹る、嘉曆貞和の際、重造して舊に復しぬ、元弘年間、綸旨を下され、祈禱を命せらる、因て因島の地を賜ふ、建武三年、足利尊氏、筑

紫に走る時、此寺にやどり、近國の兵を招く、後大軍を帥ひ、北上し又此寺を訪ひ、僧道謙、及び士卒と共に、普門品念彼偈を分ちて題とし、歌三十三首を作り、尊氏手書して佛前に供す、眞蹟現存す、今參籠の間と稱するは、尊氏止宿の處なりといふ、應安七年、義滿も此寺に至れること、後太平記に見えたり、尊氏、直義、寺田を施入し、堂塔を修營せり、元弘の綸旨以下古文書、凡七十餘通、其他古經書畫の類珍藏するもの多し、開山堂に、聖德太子の木像を安置し、方丈に尊氏の位牌を置く、又後白河帝の納經塔と稱するあり、僧定證嘉元四年起請文に、當浦者高野山根本大塔頭、後白河法皇勅願云々とあり、寺内小祠數字ありて、丹生明神社は、昔は祭儀頗盛なりし、其記今存す、又昔は光明會、觀音會などいふこともありしといへり、

〔淨土寺文書三〕起請備後國尾道浦堂崎淨土寺大乘律院建立事

一本堂淨土寺（一間四面、東西各有廂、瓦葺、）　本尊阿彌陀等身座像（定調造、本皆金色也、後行有修復之時、改而爲金泥像、）　觀音勢至二菩薩立像各一體（金泥行有作、光阿彌陀本佛修復之時、造副之、）　二天像各一體（綵色行有作、本佛修復之時、同造副之、）　天蓋、羅網佛壇之莊嚴、皆鏤金銀、盡嚴麗、佛壇後壁表裏圖涅槃像幷廿五菩薩、　堂東西障子畫釋迦八相幷極樂九品、

一五重寶塔一基（空輪金銅、瓦葺、）　本尊四方四佛（行有作、皆泥佛、○中略）

一多寶塔一基　本尊金剛界大日金泥像（○中略）

一地藏堂一字　本尊地藏菩薩像一體（綵色）　鐘樓一宇（在鐘）

已上當浦邑老光阿彌陀佛、或興隆本堂、加古佛之修飾、或始建堂塔、造立數體尊像、

一金堂一宇（三間四面、大工、東大寺大工八重宗遠、）　本尊聖德太子御作等身皆金色十一面觀音像、安置宮殿石座、（有錄）（別願、摸長谷寺觀音造之、）　食堂一宇（五間四面）　聖僧繪像一體（障子繪）　僧房一宇（十二間）　聖德太子十六歲御體、安置御厨子、（京都佛師印憲作、沙彌定性爲亡息菩提造立之、）　厨舍一宇（七間）

已上定證勸進十方檀那造營之、嘉元四年（丙午）十月上旬、奉請西大寺興正菩薩附法長老信空和尙供

寺領

養之焉

一淨土寺曼荼羅堂兩院主職、幷堂崎別所分山野濱在家等事、

預所寄進狀壹通、(具狀子細)於西大寺長老和尙前寄附畢、早守彼狀、可令管領之焉、

以前寺院建立甄錄如斯、(中略)

嘉元四年(歲次丙午)十月十八日　沙門定證起請(以下略)

〔淨土寺文書　二〕奉安置備後國淨土寺塔婆佛舍利二粒(一粒東寺)

右於六十六州之寺社、建一國一基之塔婆、忝任申請、既爲勅願、仍奉請東寺佛舍利、各奉納之、伏冀皇祚悠久、衆心悅怡、佛法紹隆、利益平等、安置之儀、旨趣如件、

曆應三年正月一日　左兵衞督源朝臣直義(花押)

〔東海一漚集別集　銘〕淨土寺鐘銘

余(〇僧圓月)既作寶陀寺鐘銘、叙事不備、後淨土寺亦求焉、辭不可、田原之寶陀、丹生之淨土、不翅同於豐城、爲隣封、寔爲兄弟所建也、東叟日公之於淨土、悟庵徹公之於寶陀、皆嗣山桝業者也、二公者、爲自聞族弟、且於法門亦同業、自聞有斯二弟、猶如優樓頻螺之有伽耶那提三迦葉波、借佛之徒也、自聞、諱正聰、爲實際鼻祖也、三師借爲佛印之徒、故予於蔣山、以三迦葉比之自聞、住世不久、可惜、二師無恙、振起其道也必矣、鐘者爲器也、聖宜其攻德、傳之永々、且夫三師者、皆重淵沈默、待扣而發、則洪韻驚羣、亦鐘是類也、故予不辭、敢爲銘、銘曰、

有扣惟應　厥鳴孔揚　聲聞于天　般兮皇兮

〔淨土寺文書　一〕後醍醐天皇御綸旨

備後國因島地頭職(泰家法師德)令知行、可被致御祈禱忠節者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年十一月卅日　式部大丞(花押)

淨土寺空敎上人

〔淨土寺文書二〕因島地頭方年貢注文

注進　淨土寺領備後國因島中、重井、三津三庄地頭方年貢員數注文事、

合

一、庄分

名々鹽　已上鹽壹仟漆拾壹俵貳斗參升參合、　折石、伍佰參拾伍石漆斗參升參合、　代錢捌拾伍貫漆佰拾漆文、除別捌拾文宛

一色々錢納物　已上錢漆拾伍貫肆佰捌拾肆文

一地頭名田捌町捌段大肆拾步　分米貳拾參石捌斗玖升伍合肆勺

一地頭名新田捌段漆拾步　分米壹石貳斗伍升壹勺

一總新田陸町壹段漆拾步　分米拾石伍斗伍升貳合參勺伍才

一加徵地田拾參町漆段半肆拾步　分加徵米陸石捌斗捌升貳勺

已上米肆拾貳石伍斗漆升漆合壹勺伍才但每年内損之、同、減分不同也、

一地頭名畠玖町壹段肆拾步　分麥貳拾石肆升肆合參勺伍才

一加徵地畠貳拾伍町伍段半　分加徵麥拾貳石漆升伍合

已上麥參拾貳石捌斗壹升玖合參勺伍才但每年内損、同、減分不同也、

一地頭名栗林伍町漆段小　分栗陸石捌斗捌升每年損内同前

一總名栗林拾貳町貳段小　分加徵栗貳石肆斗陸合陸勺漆才

已上栗玖石貳斗捌升陸合陸勺漆才每年内損同前

重井庄分

一名々鹽
已上鹽佰伍拾貳俵
折石漆拾陸石　代錢拾貳貫佰陸拾文俵別八十文宛
一色々錢納物　已上錢玖佰玖拾陸文
三津庄分
一公田拾參町小貳拾歩　分加徵米陸石伍斗壹升玖合伍勺
一新田肆町壹段大肆拾歩　分米玖石肆斗玖升貳合捌勺貳才
已上米拾陸石壹升貳合參勺貳才每年内損同前
一名々鹽　已上鹽肆佰肆拾貳俵壹斗貳升參合　折石貳佰貳拾壹石壹斗貳升參合　代錢參拾伍貫參佰漆拾玖文俵別同前
一色々錢納物　已上錢貳拾參貫參佰文
一公畠貳拾壹町漆段　分加徵麥拾石捌斗伍升每年内損同前、但以此得畠内除人給漆町七段小、
總都合鹽壹仟陸佰陸拾伍俵參斗伍升陸合
總折石捌佰參拾貳石捌斗伍升陸合　代錢佰參拾參貫貳佰伍拾陸文俵別同前
總都合錢貳佰參拾參貫參拾陸文但鹽錢佰參拾參貫貳佰伍拾陸文加定、
總都合米伍拾捌石伍斗捌升玖合肆勺漆才
總都合麥肆拾貳石玖斗陸升玖合參勺伍才
右注進如件
建武四年十月　日
〔淨土寺文書三〕備後國利生塔料所同國櫃田村地頭職事、三吉掃部助押領云々、太不可然、早莅彼所、

任貞和元年十二月三日御寄附之旨、可沙汰付下地於寺家雜掌之狀如件、

貞治五年五月三日　花押〇澀川義行

尾崎加賀守殿

備後國淨土寺領同國得良鄕地頭職事、任御寄進狀之旨、寺家管領不可有相違之狀如件、

康曆元年九月卅日　伊豫守〇山名時義

寺職

〔淨土寺文書一〕奉寄附淨土寺幷曼荼羅寺別當職事

右兩寺者、本雖非律院、西大寺門流故、深敎房移住淨土寺之剋、兩寺共爲僧寺尼寺砌之上者、誠匪直當山之祈禱、恢爲四海之依怙、然則向後以淨土寺長老爲兩寺之別當、殊致佛法之興行、可抽朝家之祈禱、就中爲一山之評議、限永代所宛賜淵信法眼也、而仰信之餘、奉去進長老之上者、寺家又同前也、仍限慈尊之曉、奉寄附之狀如件、

德治二年丁未七月廿九日　預大法師慶尊花押〇以下二人略

檢校權少僧都寛舜花押

祈禱

〔淨土寺文書一〕後醍醐天皇御綸旨

備後國淨土寺住侶等、致御祈禱之精誠、奉祈天長地久御願者、綸旨如此、悉之、

元弘三年四月九日　勘解由次官花押

淨土寺空敎御房

〔淨土寺文書二〕

續觀世音經偈三十三首和歌　尊氏花押

世尊妙相具　道謙法師

たぐひなくたへなるのりのすがたこそうき世をてらすまこるべなりけれ

弘誓深如海　　　　左兵衛督源尊氏

わたつ海のふかきちかひのあまねさにたのみをかくるのりのふねかな〇中略

建武三年五月五日、於備後國淨土寺詠之、所奉法樂觀音也、

不動院

不動院ハ、安藝國安藝郡新山村ニ在リ、曆應二年、足利氏ノ諸國ニ創置シタル安國寺ノ一ニシテ、大永中、兵燹ニ罹リ、殆ド廢絶セシヲ、天正年間、僧惠瓊之ヲ再興シ、朝鮮ノ役後、彼國ノ巨材ヲ用キテ、樓門鐘樓等ヲ造營ス、初メ禪宗ニ屬セシガ、德川幕府ノ時、之ヲ眞言宗ニ改メタリ、

〔藝備國郡志安藝寺觀上〕不動院　舊名安國寺、在安南郡新山下、東福寺之僧惠瓊始開此基、(惠瓊住新寺、依之世人呼惠瓊長老、稱安國寺、)到今有圓爾之像、法堂、山門、今尚存矣、其所用之巨材、悉用朝鮮木、其四角檐牙鐫朝鮮木文祿四年七字、山中有鳥、形類鸜鵒、聲似伯勞、是亦瓊長老自朝鮮携來放雌雄於此山、其所蕃息也、民間名曰韓鳥、以其種自三韓來也、今太守變禪門、令爲密宗、改名不動院、此地後山前水、景象可愛矣、

〔藝藩通志三十九安藝國安藝郡〕不動院(眞言宗下同)　新山村にあり、新日山(一に新山)安國寺と稱す、寺の緣起に、曆應二年、毎國、安國寺を置、當寺も其年搬て建つ開山の僧を空窻阿闍梨といへり、昔は七堂伽藍ありて、本堂の東北に、五重塔もありしといふ、(今其蹟を塔の壇とよび、妙見社あり、)大永年中、兵燹に罹りて殆廢るべきを、天正年間、僧惠瓊再興を謀り、豐太閤に申して、殿堂、方丈、書院、厨庫などを造り、子院十二を建、(常樂院、十輪院、九品院、慈濟院、禪敎院、慈光院、聖明院、眞讀院、寂靜院、杉坊、南坊、長壽院、)歲に米一萬千五百石の寺領を附らる、太閤の印書、今に存す、文祿年間、朝鮮の役に、太閤當寺に止宿あり、今方丈の南に、御所の壇とよぶ、其證なり、惠瓊も

名稱　所在　創建　宗塔

諸將と共に、朝鮮に赴く、今の法堂、樓門、鐘樓など、皆彼國の寺を毀ち、取歸てこれを建といへり、されど法堂の天井に、雲龍の畫ありて、天文庚子冬十月日、僧永怡筆と欵記す、これ文祿に先だつ事、五十餘年なり、これを以見れば、法堂は朝鮮の物には非ず、樓門は四隅の椽に、朝鮮木文祿三の六字を鐫る、木とのみ記せれば、唯彼國の材木を用ひたるに似たり、抑掠略を諱たるにや、本尊不動は、智證の作、樓門の十六羅漢木像は、育王山の物といひ傳ふ、また鐘、鐵、杉化石など、皆朝鮮の物と見えたり、又東福寺聖一國師の作る無準國師の塑像、聖一自刻の像もあり、是等は惠瓊東福寺より移し來るといふ、後惠瓊罪ありて誅に伏せしより、寺も廢壞せしが、宥珍といへる僧、福島正則に從ひ、尾張より來りて、當寺に住し、寺領九十石餘、及合力米を受く、其文書も今に存す、正則讁せらるゝに及て、宥珍從行き、弟子宥辨をして住せしむ、宥辨沒後、守僧もなかりしに、賢宥といへる僧、我藩第二世君に親しく、朝鮮蔚山の役にも從ひし故を以て、後當寺に來住す、賢宥寡欲にして、寺祿廿五石を取、其餘は辭して受けずといふ、今は昔の子院など皆廢して林叢田畝となり、その跡だに定かならず、蓮池も菜圃となりたれど、猶山水門堂、古蒼幽寂にして、一名藍と云べし、

國泰寺

國泰寺ハ、安藝國廣島ニ在リ、文祿年中、僧惠瓊ノ創建スル所ニシテ、初メ安國寺ト稱セシヲ、福島氏入封ノ後、今ノ名ニ改ム、曹洞宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會七十九安藝〕國泰寺　在廣島　同〇禪宗

〔藝備國郡志上安藝寺觀〕國泰寺　在今府治東南矣、曾毛利輝元之所剏建也、豐臣秀吉公爲號國泰院、輝元者秀吉公恩顧之人也、故爲之建一字、名國泰寺、使京都五山第四位惠日山東福寺中退耕庵主

僧瑞甫諱惠瓊者住此寺、世人稱瓊長老、又號安國寺、門前有川架板梁、土人名曰西堂橋、惠瓊爲西堂時、所令造也、此僧爲毛利輝元所愛、領二萬石之采地、甚極奢侈、入則兵士擁左右、出則刀鎗列前後、强僭之餘、與奸臣石田三成、自率軍士會關原之戰場、石田氏不日而潰矣、長老潜逃戰場、雖經過大原志津原鞍馬、所到無地容足、終被梟首京師、毛利家亦減七箇國、纔爲兩國守、自古妖僧之亂世誣民、其害不可勝數矣、如瓊長老、特尤甚者也、宜哉果遺巨害也、今爲曹洞宗、今太守先君之墳墓存于此、賜采地三百石、令寺僧掌香燈也、

〔藝藩通志（八廣島府）〕國泰寺（禪宗下同）曹洞派、○中略　當寺府城の南にあり、鳳來山洞雲禪院と號す、藩五ケ寺の一、寺領四百石、第三世四世八世三公の靈廟、及び諸公子の墓を置かる、按に、當寺初め安國寺と稱す、文祿三年甲午、東福寺西堂惠瓊開基、惠瓊朝鮮の役に從ひ、彼國の材を取りて此寺を建て、椽木に朝鮮木の三字を彫る、（新山村不動院も、是に同じく、今に椽に文字もあり、當寺のは、中比修造の時、除き去るといふ、）惠瓊誅に伏し、福島氏入封の後、尾張國雲興寺僧普照を招て居らしむ、（普照は福島氏の同母弟）此時安國寺を改て國泰寺（國泰は、秀吉公勅諡の字なり、）と稱す、慶長七年、寺領三百石を施せり、同十五年庚戌、結制をはじむ、元和五年己未、福島氏國除かれ、壬戌の年普照も隱居しければ、僧全宋代る（全宋は、もと紀伊大寧寺の住僧、元和己未藩家入封に從來り、玉照院に居りし者、）寛永六年己巳、定て僧錄の寺となる、この年改めて寺領三百石を施さる、元祿六年癸酉、百石を加へ賜ふ、享保九年甲辰、常法幢たるにより、又祿二十口を給す、後晉山開堂式を行ふ、寶曆戊寅の年災に逢ひ、壬午再建、明和二年乙酉より洞雲禪院と稱す、第八世公額字を親書し掲げ給ふ、（謹案に、洞雲の字に、自得公法諡の內、）同丁亥の年又災に罹り、辛卯に重造、安永癸卯經藏を建、文化甲戌書院を興す、境內に愛宕祠、豐國社、（もと豐國廟、こゝに在し其廢趾へ、此社を建と云、）鐘樓、輪藏、禪堂などあり、寺に所藏の器物朝鮮物多し、皆惠瓊が所置なり、

名稱　所在　創建　堂塔

佛護寺

佛護寺ハ、安藝國廣島廣瀬寺町ニ在リ、長祿年中、僧正信ノ開基スル所ニシテ、始ハ天台宗ニ屬セシガ、二世圓誓ノ時、眞宗ニ改ム、今京都西本願寺ニ隷セリ、

〔藝備國郡志 上 安藝寺院〕佛護寺　在今府治、西本願寺之派、而親鸞之徒也、

〔藝藩通志 八 廣島府〕佛護寺 眞宗 下同 廣瀬寺町にあり、龍原山と號す、長祿中、僧正信開基、正信は甲斐の人、武田の族原田氏、政信と稱す、幼にして佛敎を喜び、家を弟に讓り、薙髮して天台宗を修め、甲斐にありて、佛護庵を山間に結び居けるが、衆人その有德に歸す、金山城主武田義信、正信を招て、當國に居らしむ、初は安藝郡中山村に居る、後金山の下、龍原の地に移りて、本坊塔頭坊を建つ、塔頭十二坊、本坊の左右に在、左を甲豐六坊、右を地六坊と云とぞ、寺領三百貫ありける、二世圓誓 正信が甥、武田重康、 明應五年、眞宗に改め、信徒の者益多かりしが、金山落城後、寺を退き、中山村の故居に隱れ、塔頭も皆散じけるを、天文廿一年、毛利氏兒玉周防をして、主僧超順を喚され、超須其意に應じ、毛利氏に歸降しければ、龍原の故墟に歸され、寺領も相違なく施入して、永祿三年、寺再建ありしが、文祿の初、廣島開府の後、本寺及び塔頭を小河內に移さる、今打越村に、小河內あり、慶長十四年、福島氏入封の時、又今の地に移さる、南北三町、東西一町、今も舊に仍る、元祿中、當寺と十二坊と、爭訟の事ありて衰微せしかば、藩より歲に米二百苞づゝを給し、封內より燈明錢、鉢米の施入を定めらる、當宗西一派の巨刹なり、寺に武田、毛利二氏の文書數通を藏せり、

按に、當山の屬寺に、塔頭十二坊といへるあり、十ケ寺は同じ寺町の內に列し、四ケ寺は、郡村の內にありて、都合十四刹なりさるに十二坊と稱するは、龍原の舊稱に依るといへり、塔頭の唱も、最初天台宗の時の稱なるべし、且昔は十二刹、多く坊號なりや、今は報專坊、正善坊のみにて、

餘は寺號を用ふ、享保比の文書に、今の眞行寺は東前坊、德應寺は立藏坊、元成寺は香林坊、善正寺は雪藏坊、光圓寺は東林坊と見えたり、毛利氏、龍原を再興の時、離散の塔頭も、皆古址に返らしめけれど、品窮寺、遂光坊、光禪寺、正傳寺の如きは、散居の地に居留りて返らざれば、また二坊を增置て、十四坊になりけると、本寺の傳ふる所如斯、(この增置二坊詳ならず、天明年間の申狀には、超源寺、德應寺と見えたり、)かの四刹は、郡村にありといへども、猶十二坊の列にて、寺町の內に、三刹は、各寺の地割もありといへり、外地に棲は、便利によるなるべし、同じ寺町に淨專寺といふあり、是別なり、品龍寺、淨蕭寺、實相寺の三刹は、佛護寺垣內に在て、全本寺の役僧なり、

福王寺

福王寺ハ、安藝國高宮郡綾谷村ニ在リ、釋空海ノ開基ト稱ス、正和年間、僧禪智之ヲ再興ス、安永八年、回祿ニ罹リシガ、尋デ之ヲ再建セリ、眞言宗ニ屬ス、

〔藝備國郡志上安藝寺觀〕福王寺 在安北郡綾箇谷、釋空海曾登斯山、以山上植木、手自剋不動佛之像、其後歷年所人不知之、一旦樵夫以斧欲伐此木、于時靈光奪眼、樵夫大驚熟視之、則佛像全備、自茲土人仰之、此近隣有武人、號武田伊豆守、尊崇此佛、建一字伽藍、山名金龜、寺名福王、遠招禪智房、爲斯寺之監事、(禪智房河內國人也、)爲禪智房設一院、號事眞院、又別置十二坊、其僧交供香燈、毛利家亦世々仰之、以斯寺、爲安藝國中密宗之僧錄司、寺物有盆石、號碤碱(サザレイシ)、釋自休曾登此山、題詩曰、攀躋登臨之字路、始知身在梵天宮、數聲清磬人間外、一箇閑僧法界中、湛水接藍浸碧澗、青山攀翠聳虛空、偉哉不動明王境、萬像同揚古佛風、

〔藝藩通志七十三安藝國高宮郡〕福王寺眞言宗 綾谷村にあり、金龜山事眞院と號す、陰德太平記に、天長

五年、空海開基といふ寺の緣起文を按るに、昔空海、此山に登り、林中に一寺奇樹あるを見、其樹の自然の形に隨て、不動の像を造り、枝を以て手とし、根を以て足とす、長丈餘なり、時に山池に金龜浮出、よりて金龜山福王寺と號す、事朝廷に聞えしかば、淳和帝勅して、かの木像のある處に就て堂宇を建、始て事眞院と號し、綾谷、九品寺、大毛寺、三村を寄附し給ひ、僧舍すべて四十八宇ありしといふ、後寄附の地をも失ひ、寺漸く頽破せしに正和年間、僧禪智（河内國の人）此山を訪來り、草庵を構へ住居す、これを中興の僧とす、其時當國探題武田氏信、堂舍を再造して、本尊の左右に、夾侍佛を安置し弘法の影堂、および熊野權現社、嚴島神社求聞持堂、諸天堂、（此堂のある地を下馬の所とす）二王門を建つ、爾後堂宇の營造漸く備り、二王門の外に、三門あり、客殿、浴室、休堂、寶篋卵塔、寶藏などあり小祠も亦多し、後醍醐帝より、大勝金剛といふ號を賜ひ、帝蒙塵の時、萬里小路閩平卿を勅使として、開運を祈らしむと、緣起に見えたり、後僧良海が時、朝廷より、當寺を以、郡內の門首とせらる、應永元年、足利義滿より、四時護摩供を脩せしめ、同六年、奈良原村を以、大師堂龕燈料とす、（寬雅學雄二僧の記文に詳なり）寶曆年間、僧學如有部律を中興し、御室より當寺を以て、有部總の專門學場に定られ、天明七年、僧學杲が時、當寺を象帶永院とす、共に其文書あり、寺、安永八年、回祿に罹り、學杲再造すといへども、昔、足利尊氏、建る所の五層塔及び奥院、山上十二坊などは、とくより廢圮して、僅に其遺址を存す、又末寺三十七、諸村に在しが、往々廢絕し、或は改宗す、むかし、寺領寄附の文書も、數通ありしが皆安永の災に燒失す、今藏するものは後花園帝勅額（事眞院の三字）行基作阿彌陀像、弘法自筆畫像等あり、又礦石（きつたいし）と稱せる奇石あり、殊に珍寵す、事は陰德太平記、及び寺の緣起文に見ゆ、古蹟の部に出す、また山內に燈明杉、金龜池、木魚石、息風石など呼ぶあり、昔寺領凡二千石ありしといふ、福島氏より、九石となし、七口の月俸を施し、一山を以、香燈料とす、山周廻百町許、麓より二王門まで凡十三町、高峯大麓、幽邃の地なり、

佛通寺

名稱所在

佛通寺ハ、安藝國豐田郡別迫村ニ在リ、應永四年、小早川春平ノ建立スル所ニシテ、禪僧愚中ヲ以テ開山ト爲ス、愚中入明ノ時、佛通禪師ヲ師トス、因テ師ノ名ヲ以テ寺號トス、臨濟宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會七十九安藝〕佛通寺 在沼田 同○禪宗 開山愚中禪師

〔全國各宗本山明細帳〕禪臨濟宗 中本寺 佛通寺 安藝國豐田郡

寺域

〔佛通寺文書〕佛通寺山境新牓示之事

東者、大人之足跡三道祖、馬胡木田尾杖衝場、大池之畝、備後安藝之道祖神限、 南者、龍王正面之畝、水呑場、塔之岡簔打越限、 西者、從柿木谷東之畝、船石之前通岡者、古道高良尾、炭竈天池、西畝ヲツハカクシ、高坂之岡道祖限、峯者瀧頭女石限、 北者、從土取之下山神之畝、限貢幡、

右四至牓示之事、或彫顯石、或築驗塚之上者、到後代被守此旨、歷御政道可爲肝要、若有令違背族者可處嚴科者也、仍如件、

永祿三年七月五日 隆景小早川花押○

佛通寺

創建沿革

〔藝備國郡志上安藝寺觀〕佛通寺 在豐田郡、愚中周及入唐登徑山寺、從即休受禪法、歸朝日、路歷此州、小早川平春平請周及、建一字、號曰御許山佛通禪寺、有寺院數箇、其中號含暉院者、尼松岩之所造、而爲周及之塔所、到今有周及并即休之像、四際山圍水流有瀑布泉、高超數丈、響聞數里、絶勝可愛、相傳其景、配濃州巨景山永保寺云々、○中略 一說、此山上舊有八幡社矣、御許山者、八幡山之號也、後不改之、

直以入幡爲鎭地之神、以御許山爲佛通寺之山號、○下略

〔藝藩通志安藝國豐田郡九十〕佛通寺臨濟宗同下別迫村にあり、御許山と號す、應永四年、僧愚中開基、小早川春平創造なり、當派の一本寺にて、末寺も數多これあり、藩內無比の名藍なり、愚中入唐の時佛通禪師を師とせし故に、其跡を慕て寺號とすといふ、時に、紫衣綸旨を下され、足利家より祈願所の御教書を賜はり、祈願護國寺と稱し、南門北門に下馬札を建つ、今に至りて尙然り、そのかみ塔堂五十餘所、寺領四千石に及びけるが、中ごろ漸く廢せしを、永祿中、小早川隆景境界を廣め、殿堂を脩む、福島入封の後、寺領一たび沒收ありしが、後復二百石を附らる、今其側に仍る、境內山林、廣四十餘町、袤三十餘町あり、寬政中、山內失火して、本堂燒亡す、文化中、佛殿、方丈、村堂、茶堂等再興せらる、含暉院といふあり、應永六年草創、愚中所居、唐土の徑山含暉亭の風致に擬す、尼松岩が建立なり、

佛殿、開山堂、方丈、厨庫、寶藏、鐘樓、門舍、鎭守祠等あり、○中略

凡此境は奇巖屹立し、老樹枝を交へ、又激湍奔流などありて、實に塵外の靈地なり、其勝槩各名あり、觀日堂、安禪石、歡得堂、無涯界、臥雲亭、獨立石、多聞堂、卓筆岩、浮舟石、感夢殿、三級瀑、二王石、垂虹板、立雪樹、觀音嶽、不動岩、太子溪、顧王窟、龍頭岩、馬背岩、飛猿岩、塔欄、龍王山、天女石、成道山、轉輪峯、括龍水、猛虎岩、金龍水、白馬渡、寶篋塔、宗鏡池、青松塢、藥研溪、眞夫潤、喜悅堂、龍淵窟、

〔本朝高僧傳淨禪三十八〕丹州天寧寺沙門周及傳

釋周及號愚中、濃州岐阜人、○中略貞治四年大中臣宗泰、虛丹之天寧席、延請、以及有緣于山乃往而住、衆僅十餘員、風規凜如、應永二年、遊化紀州、遇勝居士、搆龍門庵、請及駐錫、四衆競集、夏末示衆曰、龍門一衆玉稜層、內證還如寒谷氷、不向鑊湯爐炭避、頓明心地絕炎蒸、仲秋將赴關西、路經藝州、右近將監平春平、小早川氏建佛通精藍、留及爲第一世、取衆互規、一如天寧、

〔佛通寺文書〕依爲藝州豐田郡佛通寺者、愚中之本寺、相並南禪第一上刹、永代可著紫衣法服之旨、武家之奏狀、被聞食訖、宜奉祈寶祚延長者、依天氣執達如件、

寺制

應永十六年三月二十八日　左少辨判在

佛通寺僧衆中

〔佛通寺文書〕一當寺住持可守三年之規式事

始於當年三月、至來々年二月、凡三十六月、

一番衆不可有懈怠事、若怠慢者、不可許兩寺幷門中出入、　一□□僧不許無伴而出入事　一山中

諸庵除含暉昭堂之外、不許尼女出入事、　一寺家自今以後不許自買田畠事、但有檀越之置文許隨其旨、

右件々、以衆評議、永爲佛通寺不易之規式、

應永三十年三月十四日　玄胤花押　慧統花押　眞知花押　清喘花押

御許山佛通寺制札

一當住持納所諸塔主、堅可被相守先師規式之事、

一諸寮出番納所等不可被任□

一當納所一回之間、寺家細大雜務等、件々可被請衆評之事、

一年々寺領隨土貢豐儉衆僧多寡事、

一寺領田地作之事、給人方可有停止事、

一山中老若共、昏鐘鳴終而、寺中諸寮舍不可徘徊、若於有難廻避用者、扣門成案可辨之、背此旨□

輩者、可爲盜火之罪人□

一諸谷口々構關拔夜中叨□

一於諸經營幷風呂等、高聲狠藉之□評定衆堅可令制之、若有違犯者而、致口論者、相共直擯出而、永

不可許門中出入、其外背師之儀輩、於自餘有□□時許容、以可爲同罪之事、

一□賣買本寺之器、爲本別不許用大小事、

寺職

子院

一於二一番座敦山一、隨二不器之仁一、不レ可二雜入一、但於二本寺成功一者許レ之、亦得矣、

一甲寺山木戶幷夏切含暉之橫路、堅[　　]事、

一□□爲二寺家修造一、伐二築山之木幷山中植木一、失レ境致、其外於二山林一取二材木已下一、不レ可レ出二寺外一之事、

一於二門中一重罪他出之輩、不レ許二再來一事、

一□□無レ伴而山中諸寮舍不レ許二洗濯出入一之事

一本寺幷諸塔頭、若於二一院一有二非例之□□一評定衆可レ被レ董之事

[　　]式末代寺家可レ然樣可レ有[　　]輩者、堅可レ加二成敗一之狀如レ件、

大永五年乙酉八月六日　　當住持瑞□〇下略

〔佛通寺文書〕安心上座　道文書記　成一侍者　永存藏主　周竹侍者　禪慶上座

佛通天寧兩寺住持老僧四員交代、十二年後、此六人次第可レ令二住持一者也、依二衆評議一老僧四人加レ判

應永三十年三月十四日　玄胤　慧統花押　眞知花押　淸唯花押

〔藝藩通志安藝國豐田郡九十〕佛通寺〇中略又五院といふは、一を肯心院と號す、應永九年草創、愚中坐禪の所にて無言榜といへるを、僧覺隱一寺とす、小早川則平建立なり、方丈厨庫門舍等あり、下四院並に同じ一は長松院と號す、僧千畝開基、小早川敬平建立、一は永德院僧一笑開基、小早川煕平建立、一は兩足院僧諸溪開基、一は正法院僧宗綱開基、小早川扶平建立、今此五院年々輪番して、本寺舍職に居住し、山内の事を主る、又肯祥菴、普源菴、吉祥菴、寶勝菴、栖印菴、持心菴、林廣菴、東旭菴、東昇菴、淨心菴、篩月菴、瑞雲菴、一花菴、岩栖菴あり、廢圮の墟亦數十名あり積星塔、友梅菴、傳心菴、大蟲菴、東岳菴、寶積菴、温泉菴、松隱菴、幽松菴、寶聚菴、禪源菴、藏聚菴、養拙菴、知足菴、芥禪院、慈恩菴、雛足菴、疊芳菴、萬休菴、栖眞菴、寶珠菴、香林菴、松壽菴、知泉菴、雲栖菴、林丘菴、潛龍菴、海藏菴、慈苑菴、藏光菴、兩足菴、常喜菴、一滴菴、普濟菴、常清菴、成德菴、楞嚴菴、金龍菴、智春菴、長溪菴、桂昌菴、見星菴、歸一菴、實相菴、無爲菴、正宗菴、海會菴、閑田菴、普門菴、聯□□積聚菴、牧牛菴、金粟菴、開地菴、伽桂菴、一株菴、棲松菴、探源菴、南明菴、明機菴、微笑菴、歸雲菴、耕雲菴、釣月菴、擊竹菴、聽雲軒、見寄菴、

〔佛通寺文書〕安藝國佛通寺僧衆扶持方并合力米之事

一七石者五人扶持　含暉院	一五石者四人扶持　永德院	一五石者四人扶持　青心院	一五石者四人扶持　長松院
一五石者四人扶持　正法院	一五石者四人扶持　兩足院	一四石者三人扶持　東昇院	一四石者三人扶持　肯祥院
一四石者三人扶持　一花院	一四石者三人扶持　篩月庵	一四石者三人扶持　林廣庵	一四石者三人扶持　東旭庵
一四石者三人扶持　岩栖庵	一三石者貳人扶持　桂昌庵	一三石者貳人扶持　栖印庵	一三石者貳人扶持　淨心庵
一三石者貳人扶持　瑞雲庵	一三石者貳人扶持　曹源庵	一三石者貳人扶持　持地庵	

合力米合七拾八石

扶持方合五拾八人

右之通、扶持方合力米申付候間、毎年無懈怠可有御請取候、已上、

寛永拾年二月十日　　光晟在判

安藝國佛通寺僧衆中

國分寺

周防國國分寺ハ、佐波郡佐波村ニ在リ、聖武天皇ノ勅願ニ依リテ創建スル所ナリ、後世堂宇壞、朽損シ、或ハ火災ニ罹ル等ノ事アリシガ、大内毛利二氏相尋テ之ヲ再建シ、以テ今日ニ至レリ、

〔周防國分寺舊記由緒書坤〕防州國分寺由緒書

一周防佐波郡府中淨瑠璃山國分寺者、宗門律兼學眞言、從上古勅願所并御祈願所、勅號金光明四天王護國之寺、又一國一寺之故、號國分寺、〇中略

延喜元年春正月、菅丞相道眞、貶遷大宰都督、遙跨鯨波、過于防之勝間、二月、投于國分寺、請浴法水、山主容其借、而授菩薩三聚之淨戒、既得受戒、而彷徨塵垢之外、逍遙無爲之場、○中略寬元皇帝○後嵯峨自寫金字般若心經一卷、安之於防國分寺、正中二年冬十有一月二十有六日、周防刺史反別羅主簿等、下令國曰、聖武皇帝創建國分寺、詔名金光明四天王護國之寺、拔二十人名德、月初八講金光明最勝王經矣、然伽藍朽荒、法規怠慢、以故主簿覺順檢、構伽藍、復前規、亦隨而檢校梵剎之封疆矣、夫寺邊之戶田者、非新納之、爲使僧徒無其煩、舉遠村移之寺邊耳、又以國中往々地、應合之一、而使保焉、○中略元德二年夏四月、俊海入奏曰、防州國分寺殿宇荒頽焉、是時若不下明詔以起此廢、恐不獨滅正法闕淸化、又廢先王之德業矣、帝○後醍醐以爲然也、即詔之北條高時、冬十有一月、高時謀之本正而修營焉、宏基鉅構而廣壯嚴麗也、可謂與宮闕角逐者也矣、貞治二年春三月、防之主簿至源等、標制度於國、而曰、夫國分寺者○中略自今國人、宜應寺國之命也、若有一貪戾者、罪在不赦、○中略爾來大內累世立之、爲國大禁、○中略弘治元年、元就公○毛利拔與而誅陶晴賢、合大內之故地也、既而興復國、復民俗之敝、月々修法、而祈治於國分寺、是故數賭奮、以謝寺衆之悃祈、弘治三年八月十有二日、隆元公○毛利令國曰、夫國分精舍者、先王遺廬焉、然則其梵區反國中往々寺田剎國、不可有胥暴掠之、若有貪吏乖戾之者、坐法、永祿十年八月、輝元公○毛利式隆元公制、而監國分寺、又加三章、而增呵禁吏民之暴行、○中略爾來綱廣公、吉就公、吉廣公式此例、延及當世、渥浴恩澤、僧寺存前軌者多、且依爲勅願寺、山主入院之後、令參內、近玉扆拜天顏、○故實略之賜綸旨退朝、殊者每歲祈禱卷數井十帖硯、盡心丹奉始當今御所院々獻之、而賜女○女下恐脫房字奉書十帖、白銀等、其例不絕、雖然草創以來及一千歲、物換星移、興廢幾何乎、因茲撮國史井舊記之意略記之、○中略

右當寺由緒書、如是御座候、

享保四己亥四月廿五日

防府　國分寺在判

兒玉左中殿
山田吉兵衛殿

〔周防國國分寺文書 一〕勸進沙門某敬白

請特蒙貴賤之助成、令修理防州國分寺佛閣僧房之頽落狀

右當伽藍者、爲聖武皇帝之勅願、行基菩薩草創之舊跡、覺惠與尊中興之蘭若也、〇中略尊去應永廿四年首夏、天不圖佛閣僧房欵令炎上、本尊聖者適盛、從燼訖、是以爲再興、檀越大內德雄禪定門、造立本尊、營作諸坊、給故倍備神明法樂、更致國家鎭護之所也、雖爾世乏澆季、人姤理政、所以冥應賜威、法欲埋光、悲哉苔枯草封兮、堂舍覺漸傾、雨漓露結兮、法房樞將腐、依之爲補備寺杇損、防本尊當厄、望一塊一塵之施入、勵貴賤勸進、憑一粒一錢之奉加、亡鎦素機嫌、〇中略仍勸進所唱如件、

文龜三年正月日

勸進沙門某敬白

〔周防國國分寺文書 二〕防府國分寺本堂造營傾之儀、言上之子細有之由、彼寺家之事、相易自余在所候、殊近年別而馳走之儀候、何篇可然之樣可被申調事肝要候、委細者、知事可被申候、恐々謹言、

正月廿九日

元春 花押〇吉川

國司右京亮殿 御宿所

〔周防國國分寺文書 二〕防府國分寺被成御建立二付而之儀、綸旨以其辻奉加帳二、殿樣被成御判候、不依多少、志次第、各可有御馳走之旨、被仰出候、恐々謹言、

八月朔日

佘田玄番頭
紹圖 花押〇以下四人略

諸御家人中
付 町人百姓等

〔周防國分寺舊記 坤 周防國分寺伽藍勸進帳〕勸進沙門請特蒙十方檀那之助緣、再興防州國分寺之伽

寺領

藍狀

夫三寶者、一切衆生之所荷恩人天郡萌所以可欽仰也、〇中略 爰聖武天皇之御宇、毎國造國分寺爲勅願之精藍、〇中略 當國之衆閣雖多當藍實新、加之中興超諸興正菩薩、南都西大寺之開山、日本自誓受戒高祖、再弘通大乘戒律、進道俗男女、而令受菩薩之大戒、〇中略 爰當藍五重之塔婆、灌頂道場護摩堂、鐘樓、山門等、從昔一破、洎當曆數歲、靑苔久埋礎扃、淸雨空灑塼瓦、是以俄然奏營造於禁闕、嘗爾奉勸進之勅璽、〇中略 伏乞英賢處斯大事、歡喜布施者、新齊中花之寺摸、兼復西乾之古風、法輪久轉、見聞隨喜、等登天眞之智殿、密室風靜、三界五趣、悉遊法性之製底、皇居恒穩、松柏影鮮、風雨順時、穀果咸豐、

寬永五戊辰九月　謹疏

〔周防國分寺舊記乾寺領〕一當寺總境內四至　南限大道　北限畑山　艮限船岩背道　巽限金切森東側　西限松川　乾限烏越谷　凡六拾壹町餘　內　一築地形南方東西江六拾七間　一北方東西江七拾四間　一西方南北江百拾八間　一東方南北江百貳拾八間　右往古以來、當寺爲寺敷御除地之事、

〔周防國分寺舊記乾寺領〕一幷米貳百石五斗貳升　當寺領之內配分、天正十七年六月六日、湯川平右衞門、長井右衞門太夫、國司雅樂允、內藤與三右衞門等、證判目錄之辻、

米三拾石四升　方丈領　同五石六升　一室領　同五石　二室領　同五石　三室領

同五石壹斗　東一室　同五石貳合　東二室　同四石九斗八升六合　禪光院　同五石貳升六合　寶幢院　同四石九斗九升　地藏院　同五石壹升　禪悅院　同四石九斗九升八合　藏坊　同四石九斗六升八合　法華寺　同五拾貳石五斗三升　年中行方

同拾貳石七斗八升　同護摩料　同五拾石三升　造營料

一現米貳拾七石　右當寺坊中九ヶ寺江三石宛爲御加增、於寺邊下地を以、御引渡有之候、慶長十

年三月廿七日、佐世長門證判有之候事、○下略

用途

〔延喜式 主税 二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻 ○中略

周防國 ○中略 國分寺料二万束、

寺制

〔周防國分寺舊記 乾 禁制〕一院內敷地其外散在之寺領、國衙沙汰人等、勵寄事於左右、致違亂之條甚以不可然之旨ニ付而、度々被加制禁候、

貞治貳年三月、眼代至源圓晴、總端雖加證判候、紛失之故、重而 應永廿六年二月、眼代惠昌、尙加證判、幷 永正九年二月、眼代公意任至源、惠昌證判之旨、重而 下知禁制之狀有之候事、○中略

一於寺中諸人止宿之事

一於寺內馬庭乘、同鞍馬出入之事、

一於寺邊殺生之事

但大內家代々、堅加制禁之狀、證判及數通候事、○下略

寺職

〔周防國分寺舊記 乾 住持職位〕一當寺住持成之時分、於開山前々吹嘘讓與之規式古法有之候、往古已來蒙勅許、日代在廳人等、規式之間、相詰候事、

但至御當家者、秀就公迄者、御判物被出之、尤慶賀之御書簡等有之候事、

一爲法位昇進戒香轉衣、南都於西大寺、以衆儀戒律流轉密法弘通之器、任長老職位候、依之於當宗者、一國一寺之外、此職位全無之候事

一當宗之儀者、興正菩薩開講以降、諸國諸末寺、於西大寺受戒受法、雖規式有之候、當寺之儀者、殊元公異于他由緒を以、遣書翰、深御懇望有之候、依之西大寺衆評議之上、於當山受戒受法之儀、許容之條、證文有之候事、○中略

一住持職爲奏聞致上洛候時分、傳奏勸修寺家江樣子申入候上、勸修寺家ゟ、右之旨を以、被致奏聞、

日限相極候、參內之當日、於勸修寺家ニ饗應、(三十七菜、白木三方、菓子三段、濃茶等迄、)有之候、此時綸旨被相渡候、勸修寺家先達而被致參內、御殿ゟ時刻申來次第、勸修寺家從玄關輿ニ乘候而至公家門、○中略其後勸修寺殿并辨官之衆、長老江相對被致誘引、殿上之案內指南被申候、其後長老、本之所江罷歸著座、勸修寺殿、時刻被告候上、長老罷出、清涼殿之廣緣南方北面ニ著座、傳奏勸修寺殿、廣緣之端、長老ゟ一間計下之方ニ著座、長老著座之後、職事以一束一本、置玉座左邊候而罷退、廣緣北之方南向ニ著座、長老職事著座之後、刷衣儀昇殿、(故實有之、)奉對玉體、(去玉座三間餘、於廣緣公卿列座、)心念御加持之作法有之候而、退朝仕候、傳奏局迄送候而、慶賀之一禮有之、其後如前從公家門罷出、輿ニ乘リ、直樹逐院參候、○中略

已上

右當寺住持職往古以來、外護世諦之為、或者及退轉候、雖然規模法則、參內勅許、并本山補任等之儀者相殘候、此外故實雖多之、大概記之畢、

子院

〔周防國分寺舊記〕(乾 塔頭末寺)一塔頭　一室　二室　三室　東一室　東二室　實幢院　禪悅院　藏坊　地藏院　禪光院　右十箇坊、文祿年中迄相殘分、

禪光院　地藏院　實壽院　右三ケ寺者、現寺有之候、實壽院之儀者、往古者、當寺爲奧院、號安養院候、秀就公正保年中ニ依御願、御再興之、改而號實壽院候事、

一室、二室、三室、東一室、東二室、禪光院、藏坊、實幢院、右之內、實幢院者、元祿八年、照尚住持職之時、前住南溪中興之事、

右十ケ坊、元祿年中御改之時、書出候分、

雜載

〔周防國分寺舊記〕(乾 太守當寺御參詣格式)一御參勤、御上下之節、爲御格式當山御參詣有之、○中略

一御代參之時、事故有之、御參詣無之時者、御供之御手廻り頭衆を以、御代參被仰付候、尤御小姓衆、或番頭衆被仰付候事も、近年度々有之候、前廉は、御供之御老中江御代參被仰付候例有之候事、

名稱 所在
創建 堂塔

大寧寺

大寧寺ハ、長門國大津郡深川村ニ在リ、鷲津某ノ建立スル所ニシテ、僧眞梁ヲ以テ開山ト爲ス、天文二十年、大内義隆此寺ニ於テ自盡スルヤ、火ヲ放チテ燒キタリシガ、後大友義長之ヲ再建セリ、曹洞宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會 七十九 長門〕瑞雲山大寧寺 在深川(フカヘ) 曹洞 寺領百石 開基 石屋鎭梁○鎭梁眞梁誤 禪師

西國僧錄

〔日本地誌提要 五十八 長門〕佛寺 大寧寺 大津郡深川村、同宗、(禪)僧眞梁開基、永享中、鷲頭弘忠創建、寺城三千九百六拾坪餘、

〔陰德太平記 十九〕義隆卿自害井大寧寺炎燒之事

義隆卿佛前ニ向ヒ、香ヲ燒三拜シテ後、腹一文字ニ搔切給ヘバ、冷泉判官哀御自害ヤ候ト、云モ不敢御首ヲ打落シ、其儘障子部ナド取重ネ、香ノ火活ト吹付タリ、異雪和尙吾身ハ若君達ヲ相伴、後ノ山ヘ分入リ、身ニカヘヌ同宿一人、御死骸ヲ孝養セヨトテ殘シ置レシニ、此僧ハ義隆卿御身近ク召仕レタル者ノ子也ケレバ、淚ヲ押ヘテ在ケルヲ、冷泉今迄見居申サルヽ事、返ス〳〵モ有難シ、ハヤ是迄也、急ギ立忍バレ候ヘト進メケル間、頓テ山中ヘゾ入ニケル、カクスル程ニ猛烟所々ニ迸散シテ、智翁和尙ノ開基トシテ、鷲頭(ウズ)ノ某七珍萬寶ヲ抛テ造營セシ佛殿、山門、廚、方丈、僧堂、法堂ニ至迄、一字モ不殘赤土ト成コソ方見ケレ、冷泉其外ノ者共ハ、客殿ノ棟ノ燒落ル迄ハ、義隆卿ノ御死骸ヲ守護シテ居タリケルガ、モハヤ敵亂入共、火裏ニ入テ御首ヲ取事不能ト思、頓ヲ走リ出、經藏ヘ上リ、寄來ル敵ヲ待タリケル○中略 天文二十年九月朔日、如何ナル月日ニヤ、大内家滅亡シテ、琳聖太子ノ苗裔根ヲ斷、葉ヲ枯シケルコソ無念ナレ、

〔陰德太平記　二十〕長州大寧寺之事

長州深川ノ大寧寺ハ、義隆卿切腹ノ時燒失シケル間、義長〇大友ヨリ再建立可有トテ、七堂悉ク造營セラレケリ、抑此大寧寺ト申ハ、石屋和尙ノ的子智翁和尙ノ開基トシテ、佛法繁榮ノ靈場也、昔時石屋和尙通幻和尙ノ會裏ニ於テ、了庵和尙相共ニ三十有餘年、打成一片ニ欲透脫此事、或時ハ求心立雪、不知一身凍損、或時ハ泥句結夏、不厭閣梨熱殺、終ニ一日如桶底脫、忽然トシテ大悟シ給フ、〇中略和尙ソレヨリ再長門國ヘ上リ、間田ニ至テ、又一宇ノ禪院ヲ作リ、是モ妙圓寺ト稱セラレ、暫此地ニ逗留シ給所ニ、或山上ニ紫雲靉靆タルヲ見テ、此山上伽藍建立ノ地ナルベシトテ、特々トシテ來テ見給ヘバ、則今ノ大寧寺ノ山頭也、鷲頭ノ何某、此アタリヲシルヨシシケレバ、和尙ヲ吾館ニ請ジ入申シ、此地ヲ開基シ給ヘ、吾檀越ト成テ、建立スベシト云ケレドモ、和尙思フ子細有トテ、此所ヲ出、美作國ニ至リ、西來寺ト云寺ニシテ、眞寂シ給ケリ、鷲頭ノ某、石屋ノ讖言有シニ任セテ、伽藍建立シ、和尙ヲ勸請シテ開山トシ、瑞雲山大寧寺トゾ名付ケル、カヽル靈場ナリケルヲ、一朝ノ灰燼ト作事、佛神ノ嗔モ恐シク、又義隆卿ノ怨ヲモ宥メン爲也トテ、頓テ此寺ヲ造營シ、義隆卿已下ノ人々位牌ヲ立テ置、後世菩提ヲゾ弔ハレケル、

〔鎌倉大草紙〕大内は大名にて威勢もありければ、天下の御後見を望、一度都に上り、公方の執事と仰がれ、政道を輔佐せん事願ひけれ共、三家の外は、執事の例もなし、叶ふまじとて、多年望を空して過しける時、憲實入道杉〇上此所〇周防國へ來りけるを幸なれと大に喜て、憲實入道を雲洞院高岩長棟庵主と稱し、長門國深川大寧寺と申會下寺に移しをき、馳走渴仰して、則大内殿は憲實の養子になり、上杉山の内の系圖を繼、

名稱	所在	創建	堂塔	用途

四王寺

長門國四王寺ハ、清和天皇貞觀九年、外夷ヲ調伏センガ爲ニ、伯耆、出雲、石見、隱岐、長門ノ五國ニ創置シタル四天王寺ノ一ナリ、今廢寺ニシテ、其舊地ハ豐浦郡四天王寺山ニ在リ、

〔豐府志略三〕一四王寺山二宮雅櫻縁起に應神天皇勅武内の宿禰、於穴戸豐浦山の峯、爲防三韓の凶徒、向西南造立四天王司、可奉安置多門の尊像、是爲異國降伏、我不還入皇居、垂跡守朝と云々、又一説に、皇后三韓征伐の御時、六軍勝利の御祈のため、當山の峯に於て、四天王を勧請有りとなり、今猶嶺上に毘沙門の石體を安置せり、毘沙門は定而當山の鎭守ならん、井田村の來福寺縁起に詳なり、○中略

來福寺

一瑞王山來福寺は、府中を去ル事二里、西北にあたつて井田村山有り、開山三庭和尙、○中略秀元公の命に依て、住持職を勤しむ、三庭謂て曰、來福寺は往古より四王寺勤行の寺役あり、願ハ妙壽大姉の牌を安置し、僧春茂を以て後住とせん、此事許容し給はゞ、何ぞ尊命に隨はざらんや、秀元公諾し給ふ、

〔三代實錄清和十四〕貞觀九年五月廿六日甲子、造八幅四天王像五鋪、各一鋪下伯耆、出雲、石見、隱岐、長門等國、下知國司曰、彼國地在西極、堺近新羅、警備之謀、當異他國、宜歸命尊像、勤誠修法、調伏賊心、消却災變、仍須點擇地勢高敞、瞰賊境之道場、若素无道場、新擇善地、建立仁祠、安置尊像、請國分寺及部内練行精進僧四口、各當像前、依最勝王經四天王護國品、晝轉經卷、夜誦神呪、春秋二時、別一七日、清淨堅固、依法薰修、

〔延喜式主稅二十六〕凡長門國四王寺修法料、稻四千六百六十八束四把、三百東四王燈油料、八百六十二束四把同四王供、井四僧童子四人食料、千七百八十二東、僧四口二季法服料、千七百廿四東、同僧布施料、以當國正稅充之、

古事類苑
宗教部六十八
佛教六十八
金剛峯寺

名稱

所在寺域

金剛峯寺ハ、紀伊國伊都郡高野山ニ在リ、嵯峨天皇弘仁七年、眞言宗ノ開祖空海、朝廷ニ請ヒテ寺地ヲ賜ハリ、數里ノ間ヲ結界シテ伽藍ヲ建立シ、以テ自己修禪ノ道場ト爲シ、遂ニ入定終焉セシ所ニシテ、其廟ヲ奥院ト稱シ、靈場ノ名海內ニ高ク、上皇ノ御幸ヲ始メ、執政大臣以下名流ノ、參詣スルモノ古來其蹟尠カラズ、又結緣ノ爲ニ、貴賤ヲ別タズ、亡者ノ遺骨ヲ此山ニ埋メ、或ハ塔婆ヲ立ツル事ハ、今ニ至リテ絕エズト云フ、

山內ノ僧侶ハ、學侶、行人、聖方ノ三種アリ、各〻階級ヲ立テ、相統治シ、一山ノ寺務ハ東寺長者兼ネテ之ヲ總轄シ、仁和寺宮其進止ヲ主ル、今古義眞言宗高野派ノ總本山タリ、

〔伊呂波字類抄 古諸寺〕金剛峯寺 高野山也

〔同 加諸寺〕高野山 弘仁七年建之、弘法大師入定地也、號金剛峯寺是也、件處委注、仍略之

〔拾芥抄 下本諸寺〕高野 紀伊國、傳法院在此內、號金剛峯寺、

〔倭訓栞 中編十三多〕たか〇〇の 高野は紀州也、千載集、高野に詣で丶、山路にて、守三法親王、跡たへて世をのがるべき道なれや岩さへ苔の衣きにけり、

〔枕草子 九〕寺は〇中略 高野は、こうばう大師の御すみかなるがあはれなる也、

〔紀伊續風土記 五十二伊都郡〕高野山總論並大名十二所

當山は伊都郡の東南隅にして、其地紀伊大和疆界相接する處にあり、四面高峯環合して、其中一

大曠平の原野なり、高野山の名此より起れり、其域、東は摩尼筒香二莊に接し、西は花坂及湯川莊に連なり、南は花園莊に接し、北は北又三尾川二鄕及古佐布細川二莊と界す、其廣袤大抵周回十有餘里、峯巒相圍りて、峯の名許多あり、山僧此を內八葉〈鉢峯、業峯、遍照丘、虎峯山、王峯、小塔峯、今來峯、神應峯、〉外八葉〈姑射山、轆轤山、摩尼山、楊柳山、遍照丘、山王峯、小塔峯、今來峯、〉と稱す、其內、平曠の所、大抵周回三里餘、〇中略山上、地名十二處に分る、山上西の端を西院谷といふ、大門茲にあり、大門より東十三町壇上に至る、是を山上の中央とす、壇上より十七町一橋に至る、寺院茲に畢る、一橋より東二十町奥院に至る、一橋を過れば、東西往還の左右、貴賤の石塔纍纍として稠密なり、大門より一橋まで、東西總て三十町其間、左右諸谷の名總て十一處、南北廣狹一ならず、廣きは十餘町に至り、狹きも三四町に下らず、諸伽藍並に院は其內に充盈す、〇中略　西院谷　山上の西端にあり、〇中略　壇上　西院谷の東にあり、山上中央の地にして、周廻十七町許、伽藍此地にあり、

谷上院谷　壇上の北にあり、〇中略　南谷　壇上の南にあり、〇中略　本中院谷　壇上の東北にあり、〇中略　小田原谷　南谷の東にあり、〇中略　千手院谷　小田原谷の北にあり、〇中略

五之室谷　千手院谷の西に續けり、〇中略　一心院谷　五室谷の北に續きて、六時鐘の辻より、六町許乾の方に當る、〇中略　往生院谷　小田原谷の東にあり、〇中略　蓮華谷　往生院谷の東にあり、〇中略　奥院　蓮華谷の東にありて、一山の東極なり、

〔性靈集　九〕高野建立初結界時啓白文

沙門遍照金剛、敬白、十方諸佛兩部大曼荼羅海會衆、五類諸天、及以國中天神地祇幷此山中地水火風空諸鬼等、夫有形有識心具佛性、佛性法性、遍法界而不二、自身他身、與一如而平等、覺之者、常遊五智之臺、迷之者、毎沈三界之泥、是故大悲大日如來、獨尊三昧耶之妙趣、悲歎六趣之塗炭、如實智雷、震於法界殿、秘密曼荼傳乎閻浮提、從金剛薩埵、搏授龍猛菩薩、師師相傳迄今不絕、遂使弘敎和尚、厮正

三藏、振錫東來、流傳漢地、拔濟群生、雖然地隔泓海、人機未熟、教體秘閣、未及此朝、(東甲)幸賴諸佛加持力、幽明機熟之力、以去延曆二十三年入彼大唐、奉請大悲胎藏及金剛界會兩部大曼茶羅法、並一百餘部金剛乘、平歸本朝、地無相應之地、時非正是之時、日月荏苒、忽過一紀、爰則輪王啓運擬弘此法、必須得其地、簡擇四遠、此地卜食、是故天皇陛下特下恩璽、賜此伽藍處、今爲上報諸佛恩、弘揚密教、下增五類天威、拔濟群生、一依金剛乘秘密教、欲建立兩部大曼茶羅、仰願諸佛歡喜、諸天擁護、善神誓願、證誠此事、所有東西南北、四維上下、七里之中、一切惡鬼神等皆出去我結界、所有一切善神鬼等、有利益者、隨意而住、又願此道場者、普以五類諸天及地水火風空、五大諸神、幷此朝開闢已來皇帝皇后等尊靈、一切天神地祇爲檀主、伏乞、一切冥靈晝夜擁護、助果此願、敬白、

〔女人往生聞書〕高野山ハ、弘法大師結界ノミチ、眞言上乘繁昌ノ地ナリ、三密ノ月輪アマチクチラストイヘドモ、女人非器ノヤミヲバテラサズ、五瓶ノ智水ヒトシクナガルトイヘドモ、女人垢穢ノスガタニハソヽガズ、コレラノトコロニオイテナホソノサハリアリ、イカニイハンヤ、出過三界道ノ淨土ニオイテヲヤ、

〔紀伊國名所圖會〕三篇四上高野山

登山七路(七口ともに、女人堂あり、堂より上には、女人の入る事を禁ず、)

○大門口。(又西口といひ、矢立口、麻生津口、若山口ともいふ、矢立より大門まで五十八町、)此道、當山西方の入口なり、慈尊院の廟を拜し、坤に向ひて攀躋る、これ忝も、帝王の臨幸し給へる道にして、山路迂廻なれども險ならず、文永年間の町石、今猶依然として、町毎に存す、故に町石道といふ、府下より登るものは麻生津峠より志賀郷を經て、矢立にて此道と合し、大門に入る故に、若山口の名もあり、

○不動坂口。(又京口ともいふ、一心院谷にあり、小田原谷にて、大門口より入るものとあふ、神谷辻迄五十町、)此道、當山正北の入口にして、京大坂より、紀伊見峠を越て來るものと、大和路より、待乳峠を越て來るものと、清水村二軒茶屋にて合ひ、學文路を經て、この道より登詣するもの十に八九なり、

○大瀧口。(又熊野口

創建

といふ、小田原谷に通す、此道、當山東南の入口なり、熊野本宮に詣て、夫より絶嶮の深山幽谷を經て、凡十五里にして、高野に至る、○中略

龍神口、又湯川口といひ、保田口あるひは壇瀨口ともいふ、大門の左に通す、龍神より十三里餘、此道、當山坤方の入口にして、日高郡龍神より來ると、有田郡山保田より來ると、新村にて合して、大門に入る、

大峯口、又東口といひ、野川口ともいふ、蓮花谷に通す、大峯より凡十五里、此道、當山東方の入口にして、大峯山上より泥川に下り、天の川を經て、天狗木より入る、俗此道筋を、七度半道といふ、一度此道より登詣すれば、其功德七度半にあたるとぞ、

黑河口、或へ大和口ともいふ、千手院谷にあり、女人堂より、黑河村まで五十餘町、野平村まで百二十餘町、橋本邊よりの近道なり、此道、當山艮方の入口にして、黑河村より來ると、野平村より來ると、粉撞峠にて二路合して、千手院谷に入る、

相浦口、南谷にあり、相浦村迄四十餘町、此道、當山南方の入口にして、相浦鄕より登詣す、

〔性靈集 九〕於紀伊國伊都郡高野峯被請乞入定所表

沙門空海言、空海聞、山高則雲雨潤物、水積則魚龍產化、是故耆闍峻嶺、能仁之迹不休、孤岸奇峯、觀世之蹤相續、尋其所由、地勢自爾、又有台嶺五寺禪客比肩、天山一院定侶連袂、是則國之寶、民之梁也、伏惟我朝歷代皇帝、留心佛法、金刹銀臺、櫛比朝野、談義龍象、每寺成林、法之興隆、於是足矣、但恨高山深嶺、乏四禪客、幽藪窮巖、希入定賓、實是禪教未傳、住處不相應之所致也、今准禪經說、深山平地尤宜修禪、空海少年日、好涉覽山水、從吉野南行一日、更向西去兩日程、有平原幽地、名曰高野、計當紀伊國伊都郡南、四面高嶺、人蹤絕蹊、今思上奉爲國家、下爲諸修行者、芟夷荒藪、聊建立修禪一院、經中有誡、山河地水、悉是國主之有也、若比丘受用他不許物、卽犯盜罪者、加以法之興廢、悉繫天心、若大若小、不敢自由、望請蒙賜彼空地、早遂小願、然則四時勤念、以答雨露之施、若天恩允許、請宣付所司、輕塵宸扆、伏深悚越、沙門空海、誠惶誠恐謹言、弘仁七年六月十九日、沙門空海上表、

〔弘法大師年譜 七〕同弘仁七年七月八日、勅許、表請山地、賜官符紀伊國司、同二十八日、下國符伊都郡

賀在田三郡、

太政官符紀伊國司案文　在內印拾柒所

空地壹處在伊都郡以南、四至東西南北高山、

東限丹生川上峯、南限當川南長峯、西限應神谷、北限紀伊川、

右○中略望請蒙賜彼地、早答國恩者、右大臣宣、奉勅依請、國宜承知、依宣賜之、符到奉行、

參議從三位行左大辨秋篠朝臣安人　左少史正七位上上村主豐田麿

〔續日本後紀四仁明〕承和二年三月丙寅、大僧都傳燈大法師位空海、終于紀伊國禪居、庚午、法師者、讃岐國多度郡人、俗姓佐伯直、○中略年三十一得度、延曆二十三年入唐留學、○中略天長元年任少僧都、七年轉大僧都、自有終焉之志、隱居紀伊國金剛峯寺、化去之時年六十三、

〔元亨釋書十四檀興〕釋眞然、姓佐伯氏、讃州人、弘法大師之甥也、就而學密乘、又受眞雅之灌頂、法臨入定語然曰、我以此山付汝、汝其勵志營構、爲鎭護之靈區眞言之致場、汝其勗乎、蓋金剛峯寺此時未成、故有此遺訓、然盡心於營造、以故高野之峯爲然之門院、寬平二年爲僧正、三年九月十一日滅、

〔本朝高僧傳六十四檀興〕紀州金剛峯寺沙門峯禪傳

釋峯禪、初從眞然剃染受教、又就聖寶稟灌頂法、住和之大安寺、播秘密教、時金剛峯寺、無空退後、日就荒蕪、禪應衆選、補座主職、常抱興建之志、祈親亦到慨然起誓、相共同志、遂復舊觀焉、

〔元亨釋書十四檀興〕釋祈親、七歲喪父、十三投興福寺學相宗、有聰慧譽、偶省母疾、落髮母驚死、自此持法華薦二親、時稱持經者、以故名焉、行年六十、忽自念言、二親之間、我只一子、偏專愛憐、報生苦樂恬不省、豈孝子之情乎、便詣長谷寺、期一七日、索知恃怙法生處、第三日夜夢、或人告曰、西南有山曰高野金剛峯、汝其往彼、必得咸知、乃以指指西南、其指端放一光、金剛峯寺、山川殿宇、灼灼在目、翌日赴紀州、已而至高野、此山弘法定後、距今八十餘年、廢毀尤甚、荊棘塞路、親披榛莽到堵所、祈求如長谷、一日忽淨眼根、

見視史內宮庭上有三莖蓮華、菩薩各坐二花、一花未開、親問曰、是菩薩爲誰、對曰、此二大士汝父母也、是汝法華讀誦之感報也、其不開之者汝當坐耳、親見野山之廢、委身修營、不幾棟棘復輪奐、金剛峯之再興者、實實之力也、

〔紀伊續風土記四十九高野山〕延喜長德之後

諸記を考るに、延喜十七年、無室律師三十帖策子の事に關して、門徒を率て、師資累代の聖教道具寶物等を、各あひ齎して、離山するによりて、山門五箇年の間廢替しければ、山地所所の庄園、多くは他人に侵掠せらる、依て建保六年衆徒解狀に、此山地者、應神天皇堺於四至所去與施也、東限大日本國(大和國又字知丹生川)南限海、(又云阿氐川南横峯)西限應神山、北限日本河、(吉野川也)是大師神筆御手印緣起載之、但延喜之末、依門徒之諍、當山荒蕪、及四十年、其間此四至之內、多以違亂、雖然於此大瀧等鄉者、于今無相違とあるを以て知ぬべし(按に、荒蕪及四十年へ、天曆六年雅眞興復の時までを云、延喜廿二年より、住山の僧相續すれども領所等ハ又復古するに及ざる歟、〇中略)是山門初度の荒蕪といふ、〇中略諸記を捜るに、初め正曆の災、伽藍延燒の後、金堂造營の事に枉げて、國司景理妄りに舊領を進退せしより、山徒その苛酷を厭ひ離散す、是を第二度の中絕と稱し、領所多く復他に蠶食せらる、

南山記云、去長德四年戊戌、以紀伊守景理令造高野山御願堂、仍寄事於造營、進退寺領、宛行非分課役、頗倒諸僧供料、三代國司、相續而不改其例之間、常住不退之山僧、忽失堅住之便、觀念坐禪之道人、永闕止住之謀、或移住他寺他山、或經廻洛中洛外、(南山要集同之〇中略)

同(〇寬弘)三年十月十一日、座主僧正仁海、及び三綱小別當連署して、大塔再造の事を申請ふと云ども、延滯し果さず、五年に至り、國造及び白河寺左大臣等の横妨ありて、領地不安、造塔所闕、次第により、三郡所司に號令して云、

金剛峯寺牒伊都那賀有多三箇郡司等、可任道理糺行寺領志賀長谷毛無原阿手河鄉鄉雜事狀、

牒、件山河内鄕建立大師、從寺家建立之時、所被定置四至内也、自爾以降、專他雜事所不負也、及末代、人人妨方出來、建立大師御置手已相違也、或愁申於公家、或致私妨、因茲寺家又注不安之由、奏聞於公家、未有一定之間、造大塔所闕役事、御願滯澁、尤有於斯、仍牒送如件、早加郡勢、件造大塔所隨催仰、鄕鄕工夫可令役仕、但致于國造幷白河寺愁者、今始横所出來也、於寺家者、自本願之時所領知也、是國内諸人所知歟、就中白河寺使亂入、左大臣殿御使、相共責滅之由云云、仍申事由、其返事云、專不加遣家使、若有稱家使之輩、注姓名可言上之旨致寺家、已本願鄕鄕也、寺家所領四至内鄕鄕也、何催工夫不召仰雜事、郡郡司等察之狀、無他妨可令相叶寺家幷造大塔所雜事、敢勿致阿容、故牒、

寛弘五年十月廿五日

〔本朝高僧傳 六十五 檀興〕紀州高野山沙門明算傳

釋明算、佐藤氏、紀州神崎人、年甫十一、登高野山、翌歲剃髮納戒、器度過人、謁耆宿門、學無常師、依小野成尊僧都之席下、諸流密軌得開懷授、延久四年冬、受傳法灌頂、歸居中院、閉門修棟、金剛峯寺、營構以降、歷百餘年、頽弊難支、寛治四年春、衆議擧算撿校山中、統管重職、十有七年、竭力覃思、百廢俱理、密儀敗厝、南山之廢、算實興之、嘉承元年十一月十日、化於住院、世齡八十有六、法臘七十有四、

贊曰、修多羅曰、新建伽藍不如修廢寺、算公出於野山草創二百年後、續懸絲命、支大廈傾、折中野澤之傳、始立密義、成中院流、斯之可謂兼備二諦也夫、

〔元亨釋書 五 慧解〕釋覺鍐、姓平氏、肥之前州人、將門之鳳胤也、〈中略〉鍐始在高野也、永等法師語曰、此山、大師定後、廢圮相仍、祈親、維範、明算之輩、補苴罅漏、不能復元、今子器宇宏偉、必任此責、盍鼎鼐乎、以故、鍐勤興建、傳法、密嚴二字跨越先矩、雄博壯麗、

〔紀伊續風土記 五十 高野山〕元弘の役に、逆徒對治御祈檮の叡願により、舊領安堵の恩命を下し、或は大・

塔宮の令旨に援兵を乞たまひ、又は御立願等ありて、終に三年十月に至り、恩賞相違なき旨を綸命したまふ、

關東逆徒、以武威亂朝家、萬民之愁、叡襟無聊、何以佛法之力、不令歸王化哉、早當寺殊凝無二懇精、可抽御祈禱之忠勤、然者於舊領者、如元可被返付者、天氣如此、悉之、

元弘元年九月廿三日　中納言判

金剛峯寺衆徒御中〇中略

八月二〇元弘年廿七日　令旨、今月十二日到來、跪拜見仕候畢、當山者、依為大師建立之靈場、上乘弘通之聖跡、眞言効驗超于諸寺、密敎護持勝于諸山之條、深被愍思召、於舊領者、更不可有子細之由事、謹承御歸依之旨、忽開喜悅之眉、元斯寺者、昔嵯峨天皇御宇弘仁聖代、高祖奉為鎭護國家、被建除災秘密之道場以來、偏學瑜伽瑜祇之深義、專嗜事相敎相之奧旨、尋止住禪侶不翫劍戟、國雖有大亂、無與兵法、保元平治之合戰、治承壽永之逆亂、特修三密之勤行、奉祈一天之靜謐、匪啻山上衆徒不與兵法、山下之所司等亦不被驅官兵、寺領不被懸兵粮、是以去元曆年中、平家追討之時、被下傳法院院宣云、任本寺官省之符之例、免除兵粮之役云云、先規有由、後事宜然、至如彼平大相國〇平清盛之輿當寺也、坐制諸候、右大將家〇源頼朝之歸自家也、立拉四海、世變歸依不變、人更信心不更者乎、二品大王令旨之趣、殊所庶幾也、宜抽丹誠、奉祈聖運、早以此趣、可令洩奏給候、衆徒等誠恐謹言、

十二月十三日　金剛峯寺衆徒等

抽三密瑜伽之懇誠、可奉祈四海靜謐之聖運之由、請文之趣、殊以所被感思食也、大師明神實令施冥助給者、御願之成辨更無疑者歟、抑衆徒幷所司等官兵御免事、凡當山者、為修練之禪室上者、行事不可准餘寺之條、頗不能左右、但卻邪賊而顯正道、夷凶徒而興佛法者、釋門之洪基、密家之大本也、敎令輪之忿怒形其意在斯乎、如彼天帝釋之捧羅漢之衲衣、退頂生王之軍、諸佛子之帶甲冑器仗、伏瑠璃

子之兵者、在世之抗敵尙以如此、況屬末代之澆漓、誰聞此儀哉、爰高時法師一族凶徒等、匪啻奉惱神襟、剩破滅佛法之間、任上宮王之舊蹤、所被征罰也、稟祖師之餘流族、何者不奉與此御願哉、然則耆年宿老者縱雖勵建壇修法之精祈、於若輩者悉帶武具、奉警固至寺領輩、早率群勢加官兵、可致合戰忠之由、可相觸滿寺衆徒等者、大塔二品親王令旨如此、仍執達如件、

十二月廿八日　　左少將隆貞奉

金剛峯寺撿挍法印御房

〔顯如上人雜記〕天正十四年

一當山モ、三百年退轉シテ、又再興シタルト云々、徵妙橋ノキハニ、徵妙杉トテアリ、當山再興ノ人ナリ、徵妙ハ解脫上人ノ弟也、

〔高野山事略〕木食上人高野山を再興せし事

興山寺の開祖、興山上人應基といひしは、木食修行の僧なりしかば、世には又木食上人とも申せしなり、此上人、もとは近江の守護、佐佐木ノ流にて、三十七の時に出家し、高野山に登りて、修禪練行す、秀吉關白世を知り給ひし初に、紀伊國高野根來の僧徒等、やゝもすれば、甲冑をよそひ、弓箭をとりて、其國を押妨ぐる事、佛法にも違ひ、王法にも背き、甚無道の至りなりとて、天正十三年の春、自ら十萬餘騎の兵を引具し、國中の要害ことごとく打破りて、うたる、者二千餘人、まづ根來寺ニ攻入り、堂塔寺院、ことごとく燒ほろぼさる、高野の大衆會合して、僉議するに、防ぎ戰ふ義勢もなく、大師の靈跡破滅せん事、此時をもつて其期とす、應基大悲願を發し、いかにもして、此危難を攘ひて、佛祖の恩に報ふべしと思ひ、此僧が申す旨に任せられれば、一身を以て大衆の命に代り、秀吉の軍をしりぞけて、我山の再興を致すべしといふ、大衆大きに力を得て、これすなはち、鼻祖大師再來して、我山を中興し給ふ所なり、いかでか、のたまふ旨にそむくものあるべきといふ、應

基やがて、嵯峨天皇、弘法大師の手印等をうけとりて、秀吉の陣に行むかひ、此山ほろぼさるべきこと、然るべからざる事のよしを、歎き申ければ、秀吉忽に心解て、七條を志るして、一山の僧侶を結願せらる、大衆一同に怠狀をさゝげしかば、木食一身を捨て、大衆の命に代りて、歎きし所を感じ、上人のために、此山を建置のよし、壁書を下され、上人を以て、一山の僧統とせられ、學侶、行人時衆、客僧、ことごとく皆上人に附屬せらるゝ旨を以て下知せらる、

〔續寶簡集 四〕太閤様〇豐臣秀吉御雜談之趣、木食記錄之一札、

御座敷御人數之事

拙僧木食　昌叱

上様　末座爲金剛

聖護院殿　紹巴　峯寺使節衆

徒兩人

次間諸大名

御諚之意趣者高野山之儀、二世之御願所ニ永代被召置上者、寺領等勿論不可有相違、所詮衆徒如法之行儀可爲肝要、後代雖弱武者、其寺於令異見者、猶可相隨、自然其砌對武士、少成共存分たてを仕候者、重而強武士出來候時、必可加退治、然者數珠のつかまでを取候事、山も安全にして、佛法相續之瑞相也、又次ニ、木食一人ニ對し、高野を立おかせられ候間、高野の木食と不可存、木食が高野と可存旨、各衆僧ニ可申聞之由、兩度おしかへし被成御諚候、先以愚老忝奉存、誠ニ日を經ても、猶感涙難押、致歸山、御ことば葉を其まゝ、一字ももらさず、一紙ニ志るしたてまつる、一代教主の御說法も、此外ニあるべからず、ありがたく覺え侍りける、

天正十四年七月廿八日　木食興山上人應基在判

〔紀伊續風土記五十二高野山〕壇場伽藍(壇場周十七町許、伽藍其内に臚列せり、)大塔(金堂の艮にあり)金堂(伽藍の中央にあり)鐘樓(金堂の巽の方にあり)御影堂(金堂の亥の方にあり)寶藏(御影堂の後にあり)准胝堂(御影堂の西にあり)孔雀堂(准胝堂の西にあり)西塔(孔雀堂の西にあり)丹生高野明神兩社(西塔の南にあり)六角經藏(金堂の坤にあり)灌頂院(金堂の北にあり)愛染堂(大塔の東にあり)蓮華乘院(愛染堂の東にあり)三昧堂(蓮華乘院の東にあり)六時鐘樓(東塔の東小田原谷與山寺の前にあり、壇場の外なれども此に載す)穀屋(灌頂堂の北にあり)勸學院(大塔の巽の方二町餘にあり)中門(金堂の南にあり)等なり、中門を去る事八町餘、西院谷に大門あり、

〔高野山燒失記〕永正十八年二月十二日、午剋之時、西院不慮火出、壇上伽藍一宇不殘、院院坊舍堂塔經藏數盡、往生院迄燒畢、佛法破滅、天上物恠、何事如之、凡火事樣、希代不思議、火本西院福智院也、彼火出來迎堂、移脇千手御堂、塔婆、(井)庵室何燒、出其智莊嚴院塔、移勝善集院、妙法院、寶塔院、(井)塔護摩堂、同時燒上、其後、西祓河(江)燒入、東無量壽院塔付、塔婆燒、院家無若其後炎大塔へ飛、諸人向空心亡、一兩人升形上命捨消之畢、又西塔移、煙升形廻事如烏頭卷、諸人馳集、雖仰天、輕無可消樣、兎角之間中燒出事如大火燒、其間、御社玉殿ヲバ、寶性院ノ池ノ邊へ移シ奉、御影堂ノ御寶物ヲバ、悉ク寶性院、南院移置、然則、大塔、(依勅定清盛公再興塔也、)金堂、(此內佛菩薩像悉御作云云、)御影堂、(大師御作之堂也、昔兩度火事不燒、)准胝堂、(大師御持佛堂也、御作觀音在、)孔雀堂、新御塔、御社頭(丹生高野兩社)再拜殿、荒河經藏(女院御願)御社鐘樓、(鐘悉成湯形無)大塔鐘樓、(鐘三分一湯成消)蓮花乘院、(每年大會、二季轉經、每日勤行嚴重也、)三昧堂、東塔新學堂、(每日勤行無欠如、)模經藏、(二部經大疏尺譯井三師尺儀軌悉燒□章等、其外一切作分板木、悉燒了、)同時燒上、炎勢不知言何十丈、塔婆九輪、諸堂財木、御影堂三古松、壇上七重寶樹、何(樣也、)其外植木御影、其外植木近所大木燒崩、煙折音、天地音響、大山震動、三災劫末時、無間火出、初禪燒登云云、(〇中略)又壇上ノ燒ル時分、清淨心院ノ萬ダラ堂ノ近所、小坊四五間ニ火付テ燒出ツ、諸人馳集消畢、其道間十八町計也、不思議次第也、又同時剋、極樂堂塔、并辨財天社付、滅不得燒畢、是壇上間七八町計、障阿彌陀峯、炎飛樣不思議也、隨壇上燒時分、南風頻吹、谷上并本中院吹付、谷上金剛手院口之分、無量壽院、普

金堂

門院二ツ殘而、其餘、正智院、（道範御遺跡）彌勒院、（琳賢御入定跡）其外諸院家、悉燒失、本中院一宇不殘、小塔、彌勒堂、遍明院、（明神御託宣之院家也）龍光院、（明算御遺跡也、御筆經卷御作佛像數多、中院流元祖也、）明王院、（御作五大尊安置御堂アリ）其外諸院家、泉光院、小蓮花院、（法親王御持佛堂也）何不殘、於是客僧一人、煙炎明王院後山龍光院上迯、山十方ヨリ燒來中死、其後東塔、大湯屋火南谷移、則東塔庵室東室地藏堂燒入、又本中院火、蟻道越橫、世尊院、最勝院、悉地院（觀賢僧正御宿坊、大師御掌中持御舍利在、）燒入、西心南院、（尙初御遺跡）妙法院杉之坊、同時燒來、諸人、寶性院、（法性以來代代名跡、諸依律歸等也、）南院、（大師御歸朝時、船中ニテ造シ玉フ、一刀三禮不動明王安置院家、維範御遺跡也、）走集、向火灑水、然則而不燒、後持明院堂黑煙立燒出、初度是滅、其間御影堂御財物ヲバ、重而兩院取出、大概出ストイヘドモ、雜々物燒失、南院不動、（根本在上臨、東寶對治時、尾張熱田下、其後集中爲ニ御本尊、雅範時南院安置被申、四季祈時、御社御門出アリ、）寶性院垣破、西院奉踏、其後西院悉滅、諸人、大樂院（信日律賢御遺跡也）釋迦文院、（持經上人之御坊也）逃集、火滅、サレドモ南風吹テ道ヲ限燒殘、東補陀落院、（井）千手御堂、其外諸坊數不知、同時燒行程、小田原內西光院谷寶栢院、谷淨土院、湯屋谷打過、往生院燒入、小田原金剛三昧院庵室十間計、小坊二三間燒殘、千手院口湯屋燒畢、往生院先湯屋懸時諸人席渾水身纏、是滅風畢、綏消留、實當此時、山中更以一宇可殘不覺、中中浅間敷次第也、凡一山之伽藍、名跡、經藏、聖敎等、御筆御作、多分燒失畢、相殘分、九牛一毛、爰西塔承仕晩出家、諸堂燒落大材木等燼時分、伽藍滅亡ヲヤ悲ケン日來知人少少暇乞、西塔火中走入候後、彼骸骨ヲ見ルニ、頭ベノ分舍利成、或青色、或白色、諸人成奇特思、取散了、雖末世、信心堅固、効驗無疑、○下略

〔嚴助往年記〕永正十八辛巳二月十二日高野炎上、自西院福智院出火、大塔金堂已下、寺家伽藍三百餘宇、塔婆十九基、衆徒行人等坊三千九百餘宇、佛像經卷等、顯密二敎燒失、學侶數輩入火中燒死云云、

〔野山名靈集 一〕金堂造立の事

金堂は兜卒の內院、四重九重の摩尼殿を表して、造立し給ふ所なり、（建長年中、鎭守大明神、遍明院の慈氏王丸に託して、一山の）

諸大德に、種種の御告ありける中に、金堂は、兜率の淨土に往生するもの、集會所なりとのたまひけるとかや、本尊は、藥師如來、丈六の座像なり、並に金剛薩埵八尺五寸金剛王菩薩、八尺五寸普賢延命八尺五寸虛空藏菩薩、八尺五寸不動明王、七尺二寸降三世明王、七尺二寸皆是大師の御作なり、賓頭留、及善女龍王は、輔上座定智の筆、已上御帳の內に安す兩界曼荼羅灑水器共に、御將來の靈物なり、四天王は、定智の筆、又內陳承塵の上座像の彌陀、外陳承塵の上立像の觀音は、御室覺法親王の安置し給ふ所、中壇の鈴は、御將來なり、清盛朝臣の畫ける、金胎の曼陀羅も、此堂內にあり、七寶莊嚴の舍利塔、是は覺法親王東寺の佛舍利を分て安置し給ひ、百八十口の僧を請じて、萬代不易の舍利會をはじめさせ玉ふ、毎年四月の會是なり、此金堂、久安五年雷火燒失の後、翌年七月造立事畢て、同月八日供養の御法事あり、

〔紀伊續風土記高野山五十二〕金堂二層銅瓦一丈一尺、一間として方七間、○中略正曆五年、大塔と同時に燒失す、長德四年宣旨ありて、國司大江景理奉行たり、景理死して後、國司橘儀懷、源惟能等、相續きて落成す、久安五年、又大塔と同時に燒失し、同六年造營す、大永元年、又大塔と同時に燒失す、天正十三年、豐太閤、母堂の爲に、應其に命じて再興す、明年落成す、寬永七年、又大塔と同時に燒失す、同十二年、台命あり、元文元年落成す、

〔野山名靈集一〕大塔建立の事

大塔金堂共に、弘仁十年、天皇の御願として、建立し給ふ所なり、大塔を立らるゝとき、地中より、一の寶劒を掘出せり、其長五尺、廣一寸八分あり、利相凜凜として、威風凄凄たり、極て人間の有にあらず、銘に云、釋迦如來說法地、迦葉佛成道處と、○中略すなはち叡覽に備へられければ、いとたうとくおぼされしか共、不思議の靈物なり、是をあらはにせんこと、佛天の冥慮はかり難しとて、勅して金銅の筒に納られ、本のごとく埋させ玉ひけるとぞ、大塔は、南天の鐵塔を摸して、高十六丈方二十間餘、舊記に云、大塔本壇廻三十三丈八尺、內廻二十丈八尺云云、本朝に於て尤高顯なり、本尊は毘盧遮那大日如來、座像八尺五寸、臺座五尺

五寸、後光一丈五尺五寸、及阿閦、寶生、彌陀、釋迦、各座像七尺、蓮座四尺五寸、後光一丈二尺五寸、の五佛を安置す、是則金胎不二の深旨なりとぞ、

舊記云、清和天皇貞觀三年七月、爲大塔修理料、當國之税稻四千九百束宛行はる、同四年、又二千束宛給、其後醍醐天皇、延長二年十二月、官符を給て、大塔爲修理料、當國之税稻千束を宛行はる、村上天皇康保二年六月、爲修理料、當國之税稻如舊例給之云々、此塔、正暦五年七月六日、雷火の災ありしによりて、嘉保二年三月、再建の院宣を給はり、〇中略康和二年造畢、〇中略其後久安五年五月十二日、亦雷火に依て炎上せしかば、同月二十八日、播磨守忠盛朝臣に仰て、建立せしめ玉ふ、され共、忠盛は、登山なく、子息清盛これを奉行して、久壽三年に造畢し、同年四月二十九日御供養、御導師座主僧正寛遍讃衆二十口云々、今の塔は、當將軍家の御建立なり、

〔百練抄五堀河〕康和五年十一月二十五日、公家供養高野大塔、

〔百練抄七近衛〕久安五年五月十二日、高野大塔、金堂、灌頂堂等、爲雷火燒亡、

〔平家物語三〕大たふこんりうの事

抑平家、あきのいつくしまをしんじはじめられける事を、いかにと云に、清盛公、いまだあきの守たりし時、あきの國をもつて、高野の大たふしゆりせられけるに、わたなべの遠藤六郎よりかたを、ざつしやうに付られて、六年にしゆりをはりぬ、しゆりをはつて後、清盛高野へのぼり、大たふをがみ、おくのゐんへ參られけるに、いづくより來る共なく、老僧の、はくはつなるが、まゆには霜をたれ、ひたひに浪をたゝみ、かせ杖のふたまたなるにすがりて、出來給へり、此僧、何となう物語をしけるほどに、それわが山は、むかしよりみつしうをつたへて、たいてんなし、天下に又も候はす、大たふすでにしゆりをはり候ひたり、それに付候ては、ゑちせんのけひの宮と、あきのいつく島は、兩界のすいじやくにて候が、けひの宮は、さかえたれ共、いづく島はなきがごとくにあれは

て、候、あはれ、おなじくば、事のついでにそうもんして、しゆりせさせ給へかし、さだにも候はゞ、官加階は、かたをならぶる人、天下に、又もあるまじきぞとて立れけり、此老僧の居給へる所に、いきやう則ちくんじたり、人を付けて見せらるゝに、三町ばかりは見え給ひて、其後は、かきけすやうに、失給ひぬ、是只人にあらず、大師にてまし／＼けりと、いよ／＼たつとく覺えて、しやばせかいの思ひ出にとて、高野の金堂に、まんだらをかゝれけるが、西まんだらをば、常明法印と云ゑしにかゝせらる、東まんだらをば、清盛かかんとて、し筆にかかれけるが、八葉の中尊の、ほうくわんをば、いかゞ思はれけん、我かうべのちを出いてかかれけるとぞ聞えし、其後、都へのぼり、院參して、此由をそうもんせられたりければ、君も臣も、御かん有けり、

〔醍醐寺雜事記八〕久壽二年三月七日甲寅、高野大塔安木守平清盛、奉勅造立、今日上心柱之間、柱倒麻柱頽、工并人夫等百餘人同時死了、于時長者寬遍法印也、

〔吾妻鏡六〕文治二年七月二十四日己亥、爲仙洞御願、爲被宥平家怨靈、於高野山被建立大塔、自去五月一日被行嚴密御佛事、而供料所以備後國大田庄、加御手印、今日所被奉寄也、但土肥彌太郎成妨由、依其訴出來、殊被仰下之間、早可退出庄家之旨、今日二品〈源賴朝〉令下知給之、

〔續寶簡集四〕後堀川院　北條陸奧守平義時執權〈貞應二年マデ〉

高野野大塔、五幾七道致勸進可造立之旨、　印〈上缺〉三人被仰付畢、大衆合力、早速可遂成風之功者、爲新寄進泉州下池田鄕遣之、全可寺納、彌可抽國家快樂之丹誠者也、仍執達如件、

貞應二年二月十六日　前陸奧守〈花押〉

金剛峯寺

〔野山名靈集三〕奧院の事

御廟（ごべう）　昔は寶塔なりしが、今は寶形の堂とす、南向なり、總じて一山の中に、七處の御廟あり、秘す

御廟

る事なれば、これを略す、但し延喜年中、觀賢僧正の開かれしは、此御廟なり、禪定が洞ともいふ古歌には、巖の室苔の室ともよめり、

〔帝王編年記 十三 仁明〕承和二年三月廿一日、結跏趺坐、〇空海 作大日印、奄然入定、〇春秋六十一、一本作二 及七七忌、弟子等奉拜見之處、顏色不變、鬢髮更生、因之剃除御髮、改衣裳、疊石壇立、率都婆、觀賢僧都、數十年之後、開殿戶、欲拜其體、都以不見、禮拜懺悔、大師漸現、如霧靄月明、僧都歡喜、剃御髮、改御衣云々、生身者留高野之樹下、靈魂者遊兜卒之雲上矣、

〔高野山奧院興廢記〕承和二年乙卯三月廿一日、寅時、御入定、其後四十九箇日不埋收、五十日滿奉埋斯了、其間六人御弟子逢奉守護給、所謂實惠、眞濟、眞雅眞紹、眞然眞如是也云々、〇中略

一同廟塔修理供養事

醍醐天皇御宇、延長第七年、平珍夢中有其告、故即起廟塔修復願念、厥後空送七ヶ年、畢、朱雀天皇御宇、承平三年十一月廿七日、平珍彼廟塔修理供養訖、子細載願文、在別紙見之、是則般若寺僧正〇觀賢 拝廟塔之後、十二年之事也云々、

一同廟院堂塔爲雷火或云野火燒失事

村上天皇御宇、天曆六壬子之頃、奧院堂塔等、併爲雷火令燒失了、自彼承平三年修理供養之日、迄此天曆六年雷火燒失之時、僅隔廿年之星霜、即經二代之聖朝、是則大師御入定之後、一百十四年也、于時當山第九座主僧正寬空、〇香隆寺 寺家第三執行別當定觀〇號若狹講師 寺務治山間事也、

一廟塔炎上後、改造于寶形堂事、

村上天皇御宇、天德年中、和泉講師雅眞公、奧院炎上後、經五六年、尋塔婆燒失之灰燼、始室宇建立之土木、今奧院廟堂此其是也、于時當山座主僧正寬空、寺務之事也、是則相當大師入定以後一百十九年歟、

〔高野春秋〕四承平七年丁酉、玆春、僧平珍發起奥院御廟再興之念願、是峯宿師世財乏、燒失已來、小茅屋不忍拜見、致悲慨故也、

〔寶簡集〕二後高倉院院宣眞續寶靜遍僧都內々奉書

高野山領紀伊國神野眞國庄事〇中略

一以奥院可爲道場事

院內處々者、恒例臨時佛事、古今有數、仍以此庄地利、於當院、每日不退勤舍利講、而可誦加寶篋印陀羅尼七遍、已以顯密定易修難退歟、且是殊有被凝叡信之深趣故也、御講式被書遣之、凡此式者、覺鑁上人制作、第四段眞慶上人加之矣、〇中略

以前條々、依件行之、此上猶衆徒有所存趣者、可言上子細也、兼別構寺庫一字、納置年貢、以奥院承仕一臈可爲出納之仁、於預所職者、永代就撿挍房補之、更不可有異儀者、依內內御氣色、執達如件、

承久三年十月晦日　權大僧都靜遍

高野撿校法橋御房

影堂

〔寶簡集〕二吉野後村上綸旨

金剛峯寺御影堂本尊修覆事、任先規可致其沙汰之由、可令下知寺家給之旨、天氣所候也、仍言上如件、經高誠恐謹言、

正平十五年四月一日　勘解由次官經高奉

進上　東寺長者僧正御房

經藏

〔野山名靈集〕一經藏　本尊釋迦如來、紺紙金泥の一切經を納む、美福門院鳥羽院の御后の御願なり、經の外題はすなはち女院の御筆、供料として、當國荒川の庄を寄附し給ふ、仍て荒川經藏と云、

東塔

〔野山名靈集〕一東塔　白河院の御願、大治二年十一月供養御幸あり、本尊は金色御等身の尊勝佛

頂の像、不動降三世の尊像なり、

〔本朝續文粹十三願文〕太上皇高野御塔供養　　敦光朝臣

蓋聞、惠日高照、總持之欄楯插天、密雲遐轄、大慈之龕室峙地、塔婆之基、其義邈矣、伏惟弘法大師、延暦聖代、銜綸以忽入李唐、大同皇朝、齎經論以欲歸華夏、孤帆未飛蒼波之上、三鈷遙投白雲之中、照差幾程、紀州高野之靈嶽、計會何日、慈氏出世之佳期、就其奥區、座于寂室之後、經藏之北、大塔之西、起九丈之寶塔、安五智之尊容、而梁柱早壞、基趾纔存、弟子脫屣之時、先詣此山、專依願念之內動、既有言約之外宜、課倕般之功、修以鴈塔、憑衞瓘之力、祈以鵜齡、因玆土圭測景、棟甍之勢仍舊、璧璫含暉、輪奐之美惟新、其中奉安置金色八尺大日如來像、五尺阿閦寶生無量壽不空成就等像各一體、奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部八卷、無量義、觀普賢、般若心經各一卷、奉摸寫色紙妙法蓮華經廿部、無量義觀普賢各一卷、丁未之年建子之月、從幸臨於其砌、致敬禮於其庭、於是禪定法皇同廻仙蹕、陪松柏而代鳳蓋、圖浮樹之風移儀、籍莓苔而設龍床、吉祥草之露比跡、晨昏于坐禪之前、追隨于經行之下、當山長吏法務權僧正法印大和尚位勝覺、爲唱導之師、結祕密之印、谿深兮啼鳥兩三聲、鐘磬和韻、寺靜兮高僧二十口、薜蘿構襟、梵唄讚歎、供養演說、彼周穆王之會靈山也、綠耳之駿馬唯有八焉、隋高祖之建花塔也、葛衣之異僧常賸一矣、在今憶古、旨趣自同者歟、弟子幼而受圖、少而未識、取俗之化惟疎、避位之思云遂、初嘗萬邦之有事、雖引德於眇身、更任一念之不退、猶運志於眞際、仰願周遍法身、擁護庸質、寺是金剛之道場、宜授金剛不壞之身、處又南山之靈窟、定保南山無窮之壽、況十善者往古之勝因也、罪障何妨、三會者當來之宿望也、値遇豈疑、重請聖主之爲長嫡、北辰位穩、國母之爲正妃、陰敎德昌、云藩王、云公主、或如玉、或如金、紫芝差味、赤松讓齡、朝野歡娛、上下凱樂、凡厥蠢動幼居、法界衆類、皆兼邪犯之眠、悉取正覺之路、敬白、

大治二年十一月四日

大會堂

〔紀伊續風土記五十二高野山〕蓮華乘院檜皮葺、東西九尺間五間、南北八尺間六間、又大會堂といふ、本尊丈六の阿彌陀如來、其餘、觀自在菩薩、勢至菩薩、兩界曼荼羅、文殊菩薩影像等を安置す、承安五年、鳥羽法皇御追薦の爲に、五辻齋院〇鳥羽皇女頌子内親王の令旨にて、東別所上乘院の地に建立、

大門

〔紀伊國名所圖會三編五高野山〕大門西に向ひて建つ、大塔まで十五丁、金剛力士佛師康意の作、寶永二年供養す、當山の總門にして、銅雙高き事十丈餘、雲外の峰に湧出して、先法界の莊を視す、參詣の衆生、此に至りて、漸攀躋の疲を忘れ、始て結構の大なるを驚歎す、往昔大師花表を建て、西方の門となしたまへるを、古の門地は、今の門を距る事三丁餘、龍にあり、寛喜二年改めて樓門とす、建長二年、勅して法性寺殿下忠通公に書さしめて、匾額を下させたまふ、其額朽廢するに及びて、更に九條殿下光明峯寺道家公の眞翰を懸しに、元祿元年にいたり、祝融氏の災ありて、悉焦土せるを以て、同十三年より經始して寶永二年に落慶す、即今存する所これなり、是より内を山上といふ、伽藍坊舍透間もなく立雙びたり、

寺格

〔續寶簡集四〕今度、大佛御供養職衆列座之儀、先年大御所樣〇德川家康東寺、醍醐、高野、召以交衆可致觀學之旨、蒙御墨印候、殊更大師之御遺戒、東寺高野不可有高下旨、被載條數候上者、今度之供養ニハ、戒臈見斗ニ列座候樣、御門跡樣〇江義演宜預御披露候、爲其、板倉伊賀守殿、片桐市正殿へ、以書狀申入候、委曲使僧可被得御意候、

七月

大藏卿法印御房

寺領

〔續日本後紀十仁明〕承和八年二月戊申、少僧都大法師位實惠言、在紀伊國伊都郡高野山金剛峯寺、去承和二年二月卅日預定額畢、今在深山、無有燈明料也、准定額諸寺、被施燈分、幷供養佛畫二座、許之、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年七月二十二日丁酉、金剛峯寺水陸田三十八町、在紀伊國伊都、那賀、名

草、牟婁四郡、勅免其租、永爲寺田、

〔寶簡集三〕荒川三巻之内御寄附

太政官牒金剛峯寺

應以太上天皇御封佰拾參烟施入當寺事

若狹國陸拾伍烟　越前國肆拾捌烟

右太政官今日下民部省符偁、左大臣宣、奉勅、件御封佰拾參烟、宜施入彼寺者、省宜承知、依宣行之者、寺宜承知、牒到准状、故牒、

長承二年正月廿九日　正五位下行左大史兼算博士播磨介小槻宿禰在判　牒

從四位上行左中辨兼淡路守平朝臣

〔寶簡集二十五〕被美福門院令旨云、以紀伊國荒河庄、永令寄進金泥一切經藏、毎年初國忌辰修一切經會、毎月初二一晝夜、不斷誦尊勝陀羅尼、奉資鳥羽仙院之菩提、可期三會之曉月之故也、以彼所當充其用途、執行俊覺、一山衆徒、殊任牒状、相共奉行、至僧數者、云法會云念誦、無過差、無省略、只隨庄家所出、相議可計申也、抑功德者在經王書寫之功、金字紺紙之一切經王爲殊勝靈地者在大師入定之地、老少尊卑之一蹈者、必可出離、仍卜此地安此經、豈有比類哉者、令旨如此、悉之、謹状、

七月〈○平治元年〉十七日　在判奉

奉金剛峯寺執行俊寛阿闍梨房

〔寶簡集五〕高野山根本大塔御領備後國大田御庄之庄務執行事、付寺家事〈○此所有手印、朱書云、中指長五寸一分、〉

右件庄者、天下大亂之時、爲國家安穩、萬民快樂幷後白河院御臨終正念之御祈禱、去文治二年之夏、於當山根本大塔、逼期三會之曉、長日不斷金剛胎藏兩部之大法用途料御寄進已畢、　官符院宣之状、幷手印五箇之御起請文明白也、而於彼庄務之職、鑁阿〈○源義兼〉之門跡、師師相傳、雖可沙汰進佛性燈

油、鑁阿本自荷遁世之身、無別同行、只且爲興隆佛法、且爲奉報大師之深恩、且爲國家安穩、且爲諸人快樂、以所及愚意、令奏聞公家、始行法許也、件行法、文治三年五月一日、一百四拾四人供僧引率、御使右中辨棟範（彼時左衛門權佐）奉行所始也、其後年序已經八箇年、刹那無退轉、須臾無怠事、而於彼庄務者、可奉付寺家之由雖存念、源平騷勤之間、庄內損亡、殆如荒野、勸農如本數勵令皆作之間、自然不慮之外、所經年序也、去去年、作田漸開、本數作畠已近本數、因茲可奉付寺家之由、以去年四月一日雖奏聞公家、未宜下之間、徒送日月、空積年歲、依之今方任官符院宣之旨、乍恐以愚意所令分配寺家也、後白河院仰云、今依鑁阿之奏狀、始置殊勝之御願、然供僧之職、并於庄務、至于後代、殊不可有牢籠之由可計置、所蒙御氣色也、因茲須限一山之執行一人、雖可付置件庄務、若未來際之中、自非法之事出來歟、仍撿挍以下、隨臈次三人所令配分也、（○中略）勿背此旨、仍起請如件、（○中略）

建久五年（歲次甲寅）七月七日　勸進沙門鑁阿

〔紀伊續風土記（四十九高野山）〕建仁三年、後鳥羽院の廳宣によりて、諸國分散の寺領運送の通路、種種の煩妨あるを停止したまふ文に云、

廳宣下　留守所

早可令停止號御幸渡船料、高野山金剛峯寺領莊莊佛性人供等、令運上河間煩妨已下雜物等事、

一大塔米（備後國大田莊）　一西塔米（安藝國阿麻莊）　一上人米（同國□賀郷の見等莊）　一蓮華乘院米（當國南部莊）　一灌頂院米（阿波國篠原莊）　一勝蓮華院米（同國勝浦太奈牛牧等莊）　一金剛乘院米（遠江國頭陀寺莊）　一寶幢院米（淡路國賀志尾庄）　一持明院米（遠江國始藏莊）

右彼山者、弘法大師生身卜居之砌、鎭護國家御願非一之所也、誰不歸哉、而國衙船所書生、并梶取

等、號御幸渡船料、或切損河船、或入水佛供等云云、此條爲罪業之上、所行不當也、仍所載于右莊莊運上物、佛供、人供、幷絹布鹽等雜物、縱云一粒一葉、不可有妨煩事矣、不限當任之時、至于慈尊下生之曉、停止之、且院宣有限宜承諾、勿違失、故所宜如件、

建仁參年十月廿日　侍從兼大介藤原朝臣

〔紀伊續風土記高野山四十九〕承久元年、吉野堺論により、山徒一旦退散せしが、大津保寄進の院宣ありて、大衆歸山すと云、○院宣略

〔金剛峯寺文書〕敬白　立願事

一天野社就垂跡本地、可奉甚深法樂事、　一行幸高野山、可興密宗之事、　一爲當山佛法紹隆、興寺領可寄田地事、

右條々、天下靜謐之時、可果遂之狀如件、

延元元年十二月廿九日　天子尊治敬白○後醍醐

〔續寶簡集四〕吉野後村上

高野山金剛峯寺大門造營料所事、以熊野參詣道中紀伊國大野鄕兵士米分、寄附處也、早可知行之旨、綸旨如此、悉之以狀、

正平十三年十月廿三日　權右中辨

金剛峯寺　總分中

〔續寶簡集三〕[illegible]永廿一年就柄淵事連署

定　高野山金剛峯寺一味同心連署事

夫遠考舊記、當山所所領地者、丹生權現御進退山地、高野明神御計略庄園也、仍明神告遠○告遠恐遠告

缺大師入此山、尋佳氣雲、知金杵點著御座、從爾以來、仰靈寶貴所在建立精舍、而號金剛峯寺、蹤來

佛跡覺、何處、是其密嚴世界者乎、恐者眞言一宗繁茂、偏與、從此處、王法無爲精祈專成、自彼砌、加之武運繁榮、逆臣退沒、都當寺餘力也、何人誰輩歟忽緒之、爰當山領鞆淵庄下司次郎男動違背寺命、而下知不承引、剩忘爲庄官儀、致衆徒同輩思、猥籍過法、以外次第也、結句構要害進成寺敵、率凶賊達招追放、何無罪科沙汰、於戲鶴乘斷其家久無保、所詮綺既至極上者、不廻時日、爲加追伐、老若同心群議如此、條々、

一此事書連署衆、可爲一山一味同心事、

一萬一於寺家有鞆淵庄下司次郎男與同仁者、同可爲寺敵、罪科同前、

一己前條々、調衆議、及連署上者、構私曲、不可存偏頗、若於背此旨輩者、梵天帝釋四大天王、總日本國中大小神祇王城鎭守諸大明神、殊地主山王兩大明神、十二王子、百廿伴部類眷屬、三地大聖、兩界諸尊、金剛天等、護法善神御治罰蒙違犯身上、八萬四千毛孔現世受白癩黑癩病感、不交人、果報當來墮無間大城底、永不可有出期、仍起請契約之狀如件、

應永卅一年甲辰正月十九日

預大法師賢秀 在判
行事入寺賢成 在判
年預阿闍梨仙滿 在判
撿技執行法印大和尙位定秀 花押

〔續寶簡集四〕正親町院

當山寺領事、嵯峨天皇并弘法大師被任手印旨、不可有相違、然者今度、至于南方內相府〇豐臣秀吉被驅向、朝敵之殘黨、則時被加誅伐、天下屬靜謐、就中爲寶祚延長國家安全、於和州宇智郡、紀州伊都郡、三千石新寄附之趣被聞食畢、叡忠古今無比類者也、彌全寺納、猶以可抽懇祈之旨、天氣所候也、仍執達如件、

天正十三年六月十一日　左中將（○秀次）

金剛峯寺

〔續寶簡集三〕爲天瑞寺殿（○秀吉母大政所）追善、當山仁、剃髮寺令建立付而、於紀伊國南賀郡內所所、壹萬石事（在目錄別紙也）令寄附之訖、此內七千石者、總中へ有支配可領知之、相殘三千石內千石者、剃髮寺佛供燈明幷寺僧諸賄料仁可下行之、二千石分、每年納置八木、相積候時、高野總山之內、堂塔伽藍何成共於及破壞者、米以三分二修理仕、三分一者備可殘置候、然者春岩每月之忌日、至末代勤行不可有懈怠、只今爲名代聖護院門跡登山候、供奉中村式部少輔、小出播磨守差添遣候條、委曲可相達之候、猶與上人可申候也、

天正廿八月

金剛峯寺御中

目錄

一貳千四百卅六石　紀伊國南賀郡內　紳野　一參百八石　同　志賀野　一千百九拾九石　同　東岸　一四百石　同　眞國　一百卅石　同　黑川　一百參拾五石　同　千田　一五拾八石　同　糟上　一千貳百卅七石　同　鶴月　一貳千五百四拾貳石　同　荒川　一百四拾貳石　同　遠方　一參百參拾石　同　杉原　一四百六拾石　同　荒見　一四百五拾石　同　大津　一百七拾貳石　川張平野田

合壹万石內

〔續寶簡集三〕當寺領方壹萬石之內、竹木幷人足事、爲大佛作事用、木食上人可召仕候由被仰付候間、可成其意候也、

三月十九日　○朱印

高野山總中

〔御當家令條七〕高野山寺領寄附狀

一七千五百石　紀州伊都那賀兩郡之内　右衆徒中　一二千石　内千石ハ碩學衆配分　右

靑巖寺領　都合九千五百石

右領知、永代令寄附訖、配當之通全可寺領、然上者彌可抽天長地久御願圓滿一天泰平四海靜謐精誠者也、

慶長六年五月二十一日　家康公御判

金剛峯寺衆徒中

知行目錄

一二千石　奥院　一千石　修理料　一千石　奥山寺領　但文殊院可爲一代者也　一七千石　行人方

右寺領之内、竹木人足等、全可寺納之、諸沙汰如往古可申付者也、

慶長六年五月二十一日　家康公御判

高野山行人方衆中

〔紀伊國名所圖會三編五〕高野山〇中略

禁止

一禁女人　一禁管絃　一禁鉦鼓　一禁植有利竹木　一禁射弓鞦韆　一禁博戲圍碁雙六等

一禁畜諸禽獸　一禁入牛　一禁竹箒

〔寶簡集一〕禁制條々

一當山參詣之輩、或任往古之由緒、或隨當寺之所緣、可有寄宿之處、於國々宿々廻秘計引旅人之條背寺家之掟者也、殊備前國三石關所自九州中國參詣人語關守、以賄賂令誘引之輩有之歟、令露

題者可處重科、就中旅人依一旦之語、忘多年之由緒、未聞不見之在所令寄宿之條、背先規間、於自今以後者、堅可停止事、

一對遠國不知案内仁、奥院山地令沽却、定墓所由有其聞、於寺家前代未聞事也、若其仁體令露顯者、可被處重科事、

一稱罪科人、理不盡於寺内令殺害之條、不可然、所詮於向後者、沙汰所ェ經案内、可致其沙汰事、

右以前條條、任先規令禁制處也、若於背此旨輩者、可處重科之狀如件、

應永廿一年甲午二月廿二日　　預大法師賢秀

行人入寺長敏

年預阿闍梨仙範

〔續寶簡集三〕自高野山御請狀　　南遣上院覺秀寄進之

秀吉公御朱印寫

一大師○空海手印一書面明鏡上者、如當知行、高野山可爲寺領事、

一高野山押領地於有之者、大師手印、從當山被相破條、行々當山可爲破滅之基條、可有其分別歟事、

一寺僧行人、其外僧徒學文嗜無之、不謂武具鐵砲以下被拵置候段、惡逆無道歟事、

一大師如置目、寺僧行人心持被相嗜、可被專佛事勤行事、

一對天下成御敵、謀叛惡逆人を、寺中ニ被抱置事、不謂儀歟、道心者といふは、親を殺し子をころし主の用にもならず、又は失面目、もとゆひをきる男も不成、眞實於發道心輩者、當山ニ在之事、くるしかるまじき歟事、

一比叡山、根來寺儀、天下へ依敵對申、終破滅眼前ニ相見候條、愛を以可被分別歟事、

一右條數書如面、當山衆行人以下於得心者、一一請狀可有之候、衆徒其外一統ニ於不被殘心底者、

當山相立候樣ニ、秀吉可馳走事、以上、

天正十三年四月十日　秀吉

高野山

○按ズルニ、請文ハ、旨趣此ト同ジキヲ以テ之ヲ略ス、

〔續寶簡集三〕條々

一高野山、根來寺、粉河寺、雜賀等事、年來不似相用兵具武勇勵令蜂起、爲武家及鉾楯之段曲事候事、

一根來、粉河、雜賀、先年被成御追伐候、其折節、高野山も可有破却之處、早速興山上人より御侘言申上、改中古之樣體、駈出武具兵革、成敗逆徒等、佛事勤行無懈怠、學問已下肝心可仕由申上之條、無相違被立置、寺領參千石被下候事、

一日本國中不殘寸土尺地、爲末代御前帳被相定付て、御撿地被仰付處、高野寺領三千石之外、及伍萬石在之事、被驚思食候、舊領外三千石之御朱印と申候哉、諸國之知行方御朱印被下候時、不限舊領知、高辻書載被下候處、舊領之外と申掠段、重科之條、曲事思召事、

一國國御改替之上者、高野之儀も、雖非可立置、木食上人歎申候、誠捨身之上、堂塔佛營建立神妙被思召、對興山、破却之儀被御用捨、寺家被立置事、

一當寺事、只今新敷御建立と不存、寺領被改事、含宿意、自然之時節、凶徒等類深山之切所、起干戈族も可出來歟、所詮彌馳劔刀於寺中僧侶者、唯今新儀一寺成御造營之思、不可忘御恩賞旨、對國家抽懇誠趣、以起請文申上者、其上にて可被加御分別事、

右條條、木食興山聖人仁雖被仰含、猶以相副早川主馬首長政、片桐東市正且元被差遣候、委曲兩人可申渡候也、

天正十九年十月廿四日　朱印○豐臣秀吉

寺職

金剛峯寺總中

〔國師日記〕高野山寺領寄附狀○中略

高野山寺中法度條々

一衆徒行人諸公事、任往古之掟、可爲各別事、

一衆徒方領內之人足、竹木可爲一職進退、但山上山下之諸伽藍造營之時者、貳千石之人足、等分ニ出之、可召使、事付、於人足之差別者、從雙方、於奉行行人方人足之書到者、從衆徒取之、衆徒方人足書到者、行人取之、

一靑巖寺之儀者、依爲公儀之寺、修造之、材木幷薪等、如有來、總山之中、雖爲何之山林、可伐取事、

靑巖寺貳千石之內、千石者、住持撿校、諸賄之領、千石者、衆徒中、碩學衆可有配分、若八人之內、欠如之時者、學侶之內、器量之學者、任臈次、彼跡可令昇進事、付無量光院加增者、可爲當住一代者也、

一諸伽藍破壞之時、從衆徒行人方十道、可令修造之、於出入算勘者、對衆徒可懸之、諸伽藍之無差別、以千石之修理免、可致造營事、

右之條々、堅守此旨、紹隆佛法、永代不忘失、可抽天下泰平之懇祈者也、

慶長六年五月廿一日　　御直判○德川家康

金剛峯寺衆徒中

〔海人藻芥〕金剛峯寺者、御室進止也、但東寺長者被寺務者也、

〔寶簡集一〕表書云金剛峯寺衆徒中　　右中將重通

仁和寺宮、於高野代代住山之儀勿論候、然處今度御參籠之由聞食候、近年世上就忩劇、門中既及退轉之條、爲一山可企再興、是併可爲佛法之紹隆、衆中之名望之由、天氣所候也、仍執達如件、

三月十五日　　右中將判

金剛峯寺　衆徒中

〔金剛峯寺執行撿挍阿闍梨補任略記〕第六座主濟高大僧都之時、始補執行職、所謂自延長之比被補任之歟、

第一執行小別當峯宿　第二執行寺主仲慶　第三執行別當定觀

〔義演准后日記〕慶長六年四月二十日、高野撿挍職、近代、長者之補任不頂戴、爲私任ズ甚以不謂事、去慶長二年、高野大塔供養御導師、予勤仕、于時撿挍不致出仕、不隨其役、背先例段、自由之事、元應二年四月二日、大塔御供養、長者眞光院、禪助僧正勤仕、于時撿挍法印隆傳呪願勤仕、其外禪助拜堂之時、或呪願、或誦經導師致之、然處ニ、今度違失先蹤、輕長者儀、爲狼藉事、右錄一紙、奉行台長老ヘ遣之了、撿挍補任案、撿挍申狀正文、并坊人職申狀、天野社造營事以下十一通、同遣之了、

訴狀一紙綴之了、

〔寶簡集二〕後高倉院院宣、靜遍僧都內々奉書（裏端書）

一講衆被拔補間事

一山禪侶之中、有六重階位、所謂阿闍梨、山籠、入寺、三昧、久住者、衆分也、各撰拔其一臈、爲六人之講衆、以五日爲結番、不退可致長日之勤、傳聞已上一一者、徒闌嗜艾之齡多漏、群英之擇、一鉢資薄、半粒施供、乃殊所拔補也、抑一和上衆必定皆及衰邁、若不堪行步之時、以二臈人且令誂勤、可分供料、正及其闕、闕撿挍可補正位、其供料員數一准本入寺僧一年、各可充拾斛捌斗矣、（○下略）

學侶行人

〔顯如上人雜記〕高野山參詣（天正八年九月十一日發足、十六日ニ歸、○中略）

一學侶、コレガ上方トキコエタリ、行法ヲ面々ニスル、祈禱坊主トモ云ト也、佛法ノ學問ヲ頭トリテ、ソノ家ノヤウニスルヲバ、當山ニテ、寶生院、無量壽院ト云二坊也、

一行人、コレハ刀ヲサシ、モンノアル衣裳、又ハアカネノ小袖ナドヲキテ、武者ヲスルナリ、但メンメンノ坊ニ、持佛堂ヲタテヽ、行法ヲモスルナリ、

〔諸宗階級上〕高野山學侶法式書上○中略

右衆徒、凡千有餘之中、衆分と、入寺と、阿闍梨と、三階ニ相分る、入寺八十五供之内、死闕若辭退等之闕座有之時ハ、衆分之上座より、順次ニ致昇進、阿闍梨ニ闕座有之時ハ、入寺より座頭ニ昇進仕候、阿闍梨百人、入寺八十五人之中ニおいて、學衆非學衆班維仁有之候、其學衆と申候ハ、昇口、打集、勸學院、學道四箇年之出勤庭儀灌頂入壇、大會堂の新會本會の御論義、堅義、精義、讀書聽衆、右學頭、左學頭、權律師、法橋上人位、法眼和尚位等悉く經て、寺務檢校ニ進むものを學衆と申候、○中略

出世之階級之事

下通寺院　院料二十石以下爲ニ下通ニ、不レ拘ニ世壽法臈ニ住職、　此中、院料十石以上之寺院住職之僧、若ハまた、學衆之寺役を勤ざるものハ、住職以後、必學衆の寺役を勤む、

中通寺院　院料二十一石以上爲ニ中通ニ、不レ拘ニ世壽法臈ニ住職、　住職之僧若學衆之寺役を勤ざる者ハ、住職以後、必勤事上ニ同じ、

上通寺院　院料三十五石爲ニ上通ニ、不レ拘ニ世壽法臈ニ、勸學院講釋二年勤仕、已上之僧住職、　上通院之内　二十箇院　名室　經ニ勸學院講釋二年ニ已上之者、非ニ入寺昇進ニ已上之者、不レ許ニ入寺ニ、　但上通院住職○中略　年齢凡四十歳前後也、○中略

右上通住職之中、器量あるもの二十二人撰び、集議碩學門主之三階御座候、○中略

門主二人　寶性院　無量壽院

此上三階、各慶長十四年御條目御座候、○中略

享和二年戌三月　高野山學侶在番　龍光院

〔寺鑑上古義眞言宗學侶方〕高野山金剛峯寺

寺務檢校　如意輪寺

紀州　青巖寺

御朱印　高九千五百石之内　高千石　御朱印　御公儀之寺與被成下

權現樣御神像、奉レ爲本尊、住職之人、弘法大師名代を相務、長日天下安全之御祈禱爲二職分一、一山不出之古法ニ御座候、但一山之學侶、諸寺役巳滿之老僧、任二臈次一、致二轉昇一候、門首碩學之人者三箇年、其餘之人者壹箇年宛、住職相勤候、入院之節者、以二飛札一、寺社御奉行所江相屆ル、住職年頭、都而出府之儀無レ之、

紀州高野門○首○　寶性院

御朱印高九千五百石之內門首領高百五十石、寺領高七拾石配當、

紀州高野門首　無量壽院

御朱印高同斷之內　門首寺領右同斷○中略

紀州高野學○侶○方○碩○學○七人

御朱印高九千五百石之內　高七百石○中略

紀州高野學侶方江戶詰在番二人○中略

紀州高野碩學　正智院

御朱印高九千五百石之內　高四十石　配當

紀州高野集○議○　龍光院

御朱印高同斷之內　高四拾石　配當

紀州高野顯○學○　蓮華三昧院

御朱印高同斷之內　高三拾五石　配當

紀州高野集議　清淨心院

御朱印高同斷之內　高三拾五石　配當○下略

〔高野春秋一〕高野春秋編年輯自序井凡例　野撿挍懷英○中略

中古(大治年中)白河鳥羽兩太上皇、行幸此峯、而勅給三口承仕於奥院、其流派號行人(文名堂衆坊人衆床衆等)、漸増暨數千人也、世業日强、動對學侶募邪議、蔑法威、慶長以來殊跋扈一山、屬日欲法燈已撲滅、故大衆慨歎之餘、頻訴聖廳、久經公評、去元祿五稔壬申秋七月、賜公使於我山、嚴命違背之惡僧六百廿有七人配流七島、其餘舊里免居之徒四百餘、見放逐之輩過八百、殘黨積邪志之僧纔七十七輩也、同六年多被下聖裁、行人坊舍(元千四百餘軒也)縮二百八十宇、(僧員隨之)自餘院悉皆敗潰也、當于此時、賞一山寺務爲檢校支配、滿寺大治、末資安住焉、伏拜公恩之不輕、仰感冥慮之時新矣、

〔高野山事略〕學侶行人兩派わかれたつ事附文殊院の事

文殊院勢譽は、學德才能山中第一の聞えありしかば、木食上人、關白(○豐臣秀吉)に申して、我弟子とし、つひに興山青巖兩寺の住職をゆづる、慶長五年の九月、東西戰けるを聞て、大峯修練の道場より、相從ふ僧徒に物具させて、關ケ原御陣に馳參る、神祖(○德川家康)の御感斜ならず、此年の冬、興山青巖住持職の事相違有べからざる由御書を賜る、同六年の五月、沙門の身、多くの所領あらん事然るべからざるよし仰ありて、(木食上人の遺領は、興山領千石、青巖寺領三千石、行人方行事領二千石、都合六千石の地なり、)青巖寺領三千石の地を上らせられ、(興山寺領はもとのごとし)千石を以て、一山伽藍修理料として、興山寺に附られ、千石を以て、學侶檢校に附られ、千石を以て、碩學の僧分配料とせられ、勢譽を以て、興山寺の住持とし、檢校を以て、青巖寺の住持となす、是よりして、學侶行人の兩派わかれたり、(此事、本願寺を、二ツに分られしに相同じき沙汰たるのよし、世に申傳ふる所なり、)其後、神祖、駿府に御座を移されし時、勢譽を召れて、今より後は、常に御前に伺候すべしとて、其寺地を下されしかば、文殊院を駿府に建立して移り住し、興山寺を以て、其弟子應昌に讓る、(慶長十三年の事なりといふ、)同十七年に入寂す、六十六歲、

〔紀伊續風土記(五十三高野山)〕興山寺(文殊院)

境内周八町餘(○中略)

應基上人の開基、天正十八年建立、論義法談の會場とし、奏請して勤願寺とす、第六世を量譽といふ、元祿四年、台命により行人の役寺とし、上通三十箇院、一年替ニ交替して、輪次ニ監守す、

〔諸宗階級 上〕高野山行人方大衆階級勤式幷衣體之次第〇中略

御朱印頂戴寺二百八十一箇院　内　總頭貫主　興山寺　組頭衆貫ト云　六箇院

老分集議　三十箇院内衣監六人　中通　百箇寺　下通　百五十箇寺　御朱印配當　供僧

僧　五十口〇中略

一總頭興山寺

右住職、於御城被仰付、當時無住ニ付、集議三十箇院輪番、

右〇中略事書上候、以上、

享和二壬戌年二月　高野山行人方在番　實相院

金光院

〔寺鑑 上 古義眞言宗行人方〕　紀州高野行人方總頭　興山寺

御朱印高壹萬千六百石之内高五百八十石配當〇中略　紀州高野　集議三十箇院之内行人方　組頭六人

御朱印高萬萬千六百石之内高四百貳拾石配當〇中略　紀州高野行人方　江戸本所一ツ目詰　在番二人〇下略

〔高野春秋 十四〕正保元甲申年秋八月廿九日、御撿使五味金左衛門尉殿登山、上方代官頭、後任備前守、是爲一山之爲體、先規之作法御見聞也、耳銘筆云、五味氏登山至要者、瑞晶堂上之灌頂萬供、其外法事等執行兌冢就致之、從先規勤來乎、可勤之僧侶乎否、於天野大庵室十餘日滯留之間、再三御登山、委曲御吟味爲也、御改品品、一坊數千八百六十五軒之內、二百十軒學侶坊、一千四百四十軒行人坊、一四十二軒客僧坊、一百廿軒聖坊、一五十三軒谷之者、

〔高野山事略〕學侶行人爭論の始の事

正保元年の春、應昌幷に行人の僧等、東照宮神前において、灌頂曼荼羅供等の大法會を修して、神威を永代に耀さん事を以て望請ふ、其年九月應昌を召れて、其請ふ所を許さる、歡喜に御感有りしとなり又御使を登山せしめられ、一山の大衆に其由を仰下さる、御使は五味金右衛門學侶の僧徒等、あへて仰の旨に従がはずして、事終に行れず、同二年の春、學侶行人等の爭訟に及ぶ、是より先、寛永十六年、興山寺應昌灌頂の事につきて、學侶の僧寶性院異論の事ありき、つひに此時に至りて、學侶、行人の爭論起れるなり、此年五月、應昌入寂す、八月又御使を以て山中を鎭られ、此度の御使は、小堀遠江守、伏見より發向すといふ、學侶の僧寶性院、無量壽院、幷に應昌が弟子僧立詮等、同じく江戸において蟄居せしめられ、世の人遠嶋と申なり十二月、かさねて御使登山して、學侶行人兩院の中を糺問せらる、此時の御使、安藤右京進、曾我丹波守、五味金右衛門、石河三左衛門、林春齋等なり、此御使歸りて、學侶は公家のごとし、行人は武家のごとし、寺方は町人のごとしと申な、御感ありしとなり慶安二年九月、又御使登山して、此度の御使は、松平出雲守、久世大和守、兼松又四郎、駒井右京、五味備前守等なり、高野山御制條を下され、また其寺領の御朱印を改下さる、應昌が弟子立詮を召出されて、其師席を繼て興山寺の住職となされ、東照宮御神領百石の地を以て興山寺に附せられ、是則御神領の初なり、又興山寺領千石の内四百廿石を割き行人の上首六人の役料とせられ、行人方組頭六人といふ事の始なり自今以後は、學侶の僧三人、行人の上首貳人宛を、輪番交替して、江戸に伺候すべき由を仰出さる、學侶、行人の爭論、凡六年にして事決す、

學侶行人第二度爭訟の事

明曆二年十一月、高野山鎭守神壇一宮遷宮の儀は、其神宮の鑰、學侶、行人相共に傳來す、此事によりて、爭論起りて、同三年、學侶の僧訴狀を捧ぐ、是によりて行人の僧を召決せらる、萬治二年八月に至て、學侶の僧四人寶性院、無量壽院、大樂院、高祖院、行人の僧四人文殊院、則立壯なり、見樹院則其堂なり、蓮花玄院、寶瓶院等なり、追放せらる、

○中略

學侶行人第三度爭論の事

寛文三年十一月、立詮が弟子の僧盧堂を召出されて、興山寺住持職になさる、十二月、學侶行人等の制條を改定られ、同四年五月、聖方の制條を下さる、行人の僧に、供法の事に、大內の愁訴ありて、今度の條目を出されて、慶安の條目召返されしによつてなり、同六年八月、靈堂を丹羽左京大夫に召預られ、奥州二本松に謫居す、是行人の僧制條に從がはざる者と、同意の事然るべからざるよしを以てなり、

學侶行人第四度の爭論、幷興山寺住持職興山上人の法斷絶の事、

延寶三年の十月、靈堂謫居の事御免ありて、同四年十月十八日、靈堂幷に學侶行人の僧等を評定所に召れ、學侶行人の僧に、自今以後は、慶安の制條の旨を相守べき由仰下され、靈堂を以て興山寺の住持職に還補せらる、○中略元祿二年二月、學侶の僧等訴申旨ありて、行人の僧等召問る事あり、同四年四月、學侶行人の僧等、評定所に召れて、二十一條の法制を以て、學侶訴論の事を處せられ、靈堂事は、隱居有べき由を仰され、高野の僧來迎院を召下されて、興山寺住持職に補せられ、興山上人より此かた師資相承五代の法緣、此時に至りて斷絶す、○中略

行人の僧徒流刑幷高野山東照宮神位法樂御法事の儀闕如の事、

元祿四年の夏、來迎院某、興山寺住持職になされ、其後追ケ條と稱せられて、先に下されし二十三ケ條の外に、仰出さるゝ事共あり、こゝにおいて、行人の僧徒愁訴の事出來り、同五年七月、つひに來迎院を初として、行人の僧六百八拾人餘、遠流に處せられ、興山寺の事、在山行人の上首組頭六人なり輪番交替して執務させらる、されば東照宮毎月毎日の神法樂天下御祈禱の法事供養等の儀、本導師といふものもなく、わづかに其舊儀の存する事、既に二十餘年に及べり、

〔高野春秋十七〕元祿三庚午年六月十四日、再製記相副御評定衆十一人連印一紙目錄被差上之訖、

覺

高野山學侶方、行人方訴論、遂會議候處、學侶方廿五ヶ條之書付ヲ以、行人方企新法、我意之振舞仕

由訴之、行人方答候者、全新法不仕候、四年已前、寛文三年之御條目被召上、諸沙汰如先規可相務之由被仰渡已來、古法之通務候由、每々條雖申之、古法務來候證據無之、畢竟學侶與行人次第有之候處、近年、行人方各立之樣相心得、我儘仕樣相聞候、學侶證文數通差出之內、始弘法大師眞筆之遺告、何茂慥相見候、自行人方少少差出候證文有之候得共、慥不相見、第一弘法大師眞筆之遺告之由一卷摸寫與相見候、右廿五條、一一行人方以返答書引合之、遂穿鑿、各加料簡、委細認帳面差上候、今般自學侶方訴之趣有謂儀相聞、行人方所答謬與存候、以上、午六月十三日、連印衆、

諸星傳左衛門　荻原彥次郞　稻生伊賀守　松平美濃守　北條安房守　甲斐庄飛驒守

藤堂伊豫守　高木伊勢守　本田紀伊守　戶田能登守　加藤佐渡守　以上

〔天明集成絲綸錄三十〕安永六酉十一月

寺社奉行江

高野行人方末寺觸下之儀ニ付、學侶方行人方出入之儀、元祿六年、秋葉三尺坊、邪法御禁制之御觸は、古義眞言一派之分、學侶最分より相觸、仁和寺御門跡末寺、東寺之末寺江も、學侶より致觸達候方ニ候へ共、行人方追追組頭被仰付、元祿七年より、先規之通り、在番も相勤、其後之御觸等、於奉行所、行人方在番江相達、行人方末寺之分、行人方より相觸候段、致連綿候上は、觸達之儀は、是迄之通相心得、行人方之寺院、縱本寺之觸達請印致候共、學侶方之觸達ニは、急度請印可爲致旨、雙方へ申渡、再論ニ及間敷段、可被申渡候、

十一月

〔豐臣秀吉譜上〕天正十三年四月十日、秀吉督責高野山、其旨趣曰、〇中略十六日、學侶方撿挍法印良運、行人方法眼空雄、以一山之衆議、就細井新介捧請狀、各守條々之嚴命、永不違失、滿山之老弱、一同奉仰恩惠、若於有違背者、雖被成敗、不可有遺恨也、

〔紀伊續風土記 五十二高野山〕高野山總論並大名十二所○中略

又聖僧あり、其初、應保二年、明遍上人の下部、上人に從ひて登山し、念佛の業を勤む、又一遍上人智眞此山に登りて念佛す、聖の輩、其宗風に染み、終に鉦鼓を叩き、諸國を遍歷し、高野聖と號す、其徒漸多く、寺院も亦多し、慶長十一年並に元和元年、台命ありて、聖の徒、念佛を唱ふる事、本意にあらすとて、明遍の舊に復し、眞言に歸入せしむ、聖の徒舊より諸國に徘徊して、檀緣を結びし故、將軍家、三河國御在城の御時よりの檀緣なるを以て、聖僧、大德院を、大將軍家の御宿坊と定め給ひ、佛殿料二百石を寄られ、聖僧の頭と定め給ふ、是より學侶、行人、聖と、並び列して、高野山三派と稱せり、古の寺院總て千八百餘宇、今にありて、寺院の數學侶方總て三百四十五院、成日三百五十三院行人方總て二百八十一院、聖方總て六十二院、成日八十四院客僧坊と稱ふる者總て三十五院、成日五十三院又行人寺院の長屋に、商賈の類居住して、衣珠數の類、寺家入用の諸物と鬻ぐ者、大抵三百餘戶ありといふ、

〔諸宗階級 上〕高野山聖方階級衣體之次第書

聖方之儀者、弘法大師始、座主古德修練之舊跡ニ御座候處、盛衰も御座候、寬保三年、御下知書頂戴以後、階級衣體左ニ奉申上候、

大德院境內江 東照宮樣御宮、台德院樣○德川秀忠御靈屋、寬永十八年御建立ニ御座候、○中略

聖方觸頭之儀者、寬文年中、大德院ニ被仰付候、寬保三年以後も相勤來候、

大德院住職之儀ハ、弟子讓仕來候處、寬文年中、寺社奉行所、御書取を以、大德院後住之儀三十六院組頭役之者、相談之上、人撰いたし、一同之僧兩三人書出候樣被仰付、有之候得共、弟子讓仕來候處、寬政八年、先大德院住職被仰付候節より、寬文年中被仰付候通ニ被仰付候、

一大德院階級ハ、法印相成申候、○中略

右之通、相違無御座候、以上、

高野山聖方 大德院

紀州高野山聖方　江戸本所元町 大德院

高野聖方三十六院總代兩僧○中略

高野聖方 常住光院○下略

享和二戌年六月

〔寺鑑 上 古義眞言宗聖方〕

御朱印高二百石○中略

參詣

〔高野山御幸御出記〕御幸初從白河院、終至大覺寺太上法皇、○後宇多十箇度、殿下御出、初從法成寺入道殿下、○藤原道長終至高臺寺禪定殿下、十一箇度、

〔日本紀略 一條〕昌泰三年十月廿一日乙亥、某日、太上法皇○宇多參詣南山、

〔仁和寺御傳 上〕宇多法皇○中略

延喜五乙丑年八月七日癸亥、御幸金剛峯寺、

〔扶桑略記 三十 堀河〕寛治二年二月二十二日己亥、太上皇○白河爲拜高野弘法大師廟堂、出於東洛、赴御南京、攝政公卿以下參會、　二十七日甲辰、道師表白、說經顯密相交、其啓白云、昔釋尊爲悉達太子之時、辭皇城而歸道、今太上皇抛寶位而攀路靈嶋、往昔未聞、將來又可難者、此言未訖、導師自涕泣、貴賤又莫不拭淚矣、无爭詞何道理至極也、講了、各施布施、講師白大褂一領、絹五十疋、供米三十石、呪願三禮等、各絹三十疋、米十五石、凡僧、絹十疋、米十石、又米二百石付寺家給之、權大納言源朝臣師忠、奉勅命、仰御願之趣、其仰云、置三口阿闍梨、令繼傳法灌頂、造立大塔、可復舊基、理趣三昧導師啓白已了、衆僧感悅、各稱我願既滿之由、尋件塔根元者、弘仁七年、大師表請嵯峨天皇、始造大塔、爲御願、了、然而大厦之構、輪奐牢闊、寛平法皇歎其製作之不了、令知識上下、其後層軒飛梁、不日成之、逮于邑上御宇、重加莊麗、兼置料稻、彼三代之聖主、爲上皇之始祖、今與此願、時之至也、

〔中右記〕寛治五年二月十七日丙午、晚太上皇○白河參詣高野、來廿日御參著云々、御供人、源大納言師

新大納言、家右衛門督、公右兵衛督、雅師信朝臣、顯季朝臣、宗通朝臣、隆宗朝臣、爲章朝臣、行實、知綱、國明、顯隆、基信、爲行、雅清、已上自京中著布衣、權大僧都寬意參入、但御經供養被付寺僧云々、此外檢非違使平貞弘參入也、　廿三日、午時、上皇還御六條內裏、

〔實行公記〕天治元年十月十五日戊午、太上皇白河○爲參御高野之靈廟、自今朝於三條殿被始御精進、一院、中宮、若宮、姬宮、離御此處、於東對有御湯殿事、仍爲正面西門、姉小路面小門、先是有御沐浴事、浴被爲禁汗穢立大防、先是女房等皆被出、然彼又方方男女房有其障者同被出云云、雜具皆以新造、上皇今日自書金泥理趣經、是宸衷懇歎之故也、　廿一日甲子、此日太上皇爲奉拜弘法大師聖廟、令參詣金剛峯寺給、是且爲追希代之勝蹤、且爲遂多年之叡念也、○中略網代御車頭輔朝臣所調進也、畫圖之上飾以金銅、帷裝之文施以縫物、過差之至也、豫引立西中門、御車副牛飼夜前給當色、是又頭輔朝臣所儲也、人人漸參集、上達部侍殿上、殿上人侍御便所、　廿四日丁酉、巳刻、臨幸于東大寺、入御自中御門之內、去丈餘巽方有小丘、高一許尺、廣尺餘、寺家其上敷白砂、其前施廣筵、二枚其上立床子一脚、床上敷高麗端疊一枚、其上供唐錦茵、爲御座、引寄御車下御、御座定之後、合掌低頭、無禮拜之儀、是寬治例也、其後更駕御車、於廻廊西小門下又稅駕、先是、寺家自門內至佛前供筵、卽著御大佛殿、○中略次上皇歷覽堂中、巡禮佛像、母屋庇東西間各懸五大幡、觀音像乾角安置等身金銅觀音像三體、是皆從唐朝之所傳來也云々、北方天右肩折損、近日依加縫新營修補、抑當寺建立以後、星霜遙送、破壞旁多、每日雖有修理之名、追年非無穎危之憂、就中近年以來、郢匠力愚、基趾欲傾、仍法皇忽降綸旨、更致修造、成風振斧、不日終功、佛像新加光、○中略次遷幸於山科寺、入御自南大門之內東頭、○中略漸及衡黑、仍御幸櫃御厨子所雜具及雜人等、慥可催渡之由仰檢非違使左衛門少尉源爲義、此間雖入夜陰、猥指前程、仍被以炬火立以柱松、亥刻著御于火打崎、件御所、井上下供給等、偏攝政家之沙汰也、　廿五日戊辰、未刻、到紀伊河、乘御御船、○中略於南岸更御大觀、於政所門外馳車入御門、　廿六日己巳、卯刻出御、初供麻履、自茲捨車馬、始向幽邃峯、御步早速殆難追從、僧正行尊、身體强健、行役無怠、耆年宿德之人、不泥徒步之事、是多年修行之功、壯齡練習之力也、先是大僧都證觀、遙指前

程、兼就行路、〈中略〉○征途盤折、虛凋幽深、山色水聲養眼洗耳、有懸崖、有橫木、或礙望、或進眸、未剋著御笠置御宿、　廿七日庚午、申剋著御中院之御所、　廿八日辛未、卯剋上格子、先依寬治之例、白妙御幣三捧被奉丹生高野明神及眷屬諸神、〈無御禮拜事〉以廳官紀成延爲使、辰剋供御膳、此間人人漸漸參進、卽著御御裝束、〈御烏帽子、綾御直衣、堅文薄色織物奴袴、白合袴、〉登時出御、先於南簀子著御麻履、爲院司之者皆可著衣冠、〈中略〉○去禮殿三町餘、跨流有橋、上下於焉濯足爲踏淨界也、巳剋參御于奧院之禮殿、件禮殿、五間四面也、艮角北庇爲御所、〈四面掛御簾、其中敷高麗端疊三枚、供火桶、其南立屛風一帖、〉母屋中央間、自本立供養法之壇、其北庇立花机、西南兩面遶柱敷亘紫端疊、爲請僧座、東庇第二間敷高麗端疊一枚、爲長者座、去禮殿三許丈北座、立高座二脚、其中居禮盤二基、禮盤北立机一脚、置蒔繪御經筥、〈納金泥經〉犬防下石上居置御燈明三萬燈、〈土器廿坏盛之、塞供燈明、〉事料、雖送寺家、寺家不存、可謂懈怠、高座左右敷高麗端疊各二枚、爲七僧座、左方僧座後三行、〈東西行〉敷紫端疊各三枚、暫爲理趣三昧僧座、〈各著當色〉其西壇下敷紫端疊三枚、爲侍臣座、諸僧等衆著座、以大僧都證觀爲導師、以長者大僧正寬助爲呪願、以僧正行尊爲三禮、以法橋兼覺爲讀師、以良禪大法師〈當山一和尚門闍梨〉爲唄、以範覺大法師〈大僧正相具〉爲散花、以永嚴大法師〈自去比參籠當山〉爲堂達、御座定後、右衞門督藤原朝臣、早可始法會之由仰長者、寬助唄散花之後、講師啓白之間、左衞門督藤原朝臣仰御願之趣云、依此一度之參詣、爲彼三會之善因者、此間勅使藏人右近少將藤原朝臣公教〈束帶〉隨身御諷誦參于此處、〈在諷誦文、內藏人頭加署、〉左兵衞督藤原朝臣奏事由、卽禮殿南庭立案五脚、積之、〈手作布三百端、絹三百屯、〉先是廳御諷誦積案三脚、同立南庭、〈布三百端〉說法之體、智辯可聞、言泉涌詞、懸河分吻、事畢賜布施各有差、〈導師、呪願、三禮等料、絹三十匹、米廿六石、注用僧四口內、法橋料、絹十五匹、米十五石、自餘凡僧三口料、絹五匹、米各五石、〉上達部以下取之、次長者大僧正寬助、就御所進大師手跡、〈入錦袋、〉〈中略〉○相從還御、未剋御于影堂、長者寬助遲參之間、暫御于南廣庇、〈供御皮〉臣下候地、小時寬助參仕、仰堂預良禪令開堂戶上格子之後、南庇敷高麗疊二枚、其上供茵爲御座、〈戶前〉次長者寬助欲開閣之間、鑰鑑不隨、仍命良禪令開之、其中晻然晝暗秉燭照之、〈寬助秉之、〉先禮大師之眞圖、續覽往昔之什物、時代雖隔、禮容如在、抑往年之

比、影堂之後、食堂幷大塔等、依雷火災皆爲灰燼、而步武之間、餘炎不及、進而有痕、在今爲驗、此處之勝事、當山之希夷也、　廿九日壬午、卯剋供御膳、同剋出御、供奉扈 辰剋到口折坂下、始駕龍蹄、供奉深沓 扈從大忻大夫皆以騎馬、但北面衆御隨身等猶以徒步、各替副御馬、巳剋於笠置御所供御膳、手筥破子 臣下又應之、檜破子 北面隨身所應官召次所各賜檜破子、凡巳上事、今度供大僧正之沙汰也、午時著御于政所、御廚子所供御膳、又兩僧正供御膳、今夕明旦、上下供給、和泉國司勲仕、是寛治例也、　十一月一日甲戌、卯剋出御、駕騎驪大貳、黑、下﨟御隨身等相替就御馬、又所衆武者所不論有官無官、或二人、或三人、相替候御馬後、中略 著御于東南院之房、御儲如先、大僧正奉仕之、　二日乙亥、辰剋供御膳、今日及衛黑可入洛之由有議定、是馬疲人勞、行粧有憚之故也、然而供奉人人各裁綾羅衣、畢、衣服結構之至今謂過差、於此處、當寺別當大僧正寛助、賜以華驪、御隨身左近府生中臣兼近、右近番長下野季忠等牽之、行向住坊、御隨身等歸參之後、巳剋御進發、中略 酉剋還御于三條殿、經三條大路、自東方入御、

〔長秋記〕大治二年十一月一日丁亥、發東大寺、著玉崎御所給也、中略 天明出御、衆徒見物者如立墻壁也、於法華寺鳥居下新院 鳥羽 御馬乘御前、自是始兩方前驅相分供奉、過藥師寺、本院 白河 又遷御腰輿、撿非違使成國、大和河儲竹橋、二橋也、傳聞、依河上小橋之構有國內大亡之愁云々、成國、日來仕此國、構夫功、號橋料、責平民、已庄園所得已多云々、申始著玉崎御所、　二日戊子、雞鳴參御所、新院未供御膳、頗能參申云、本院□□□□未出御云々、仍不食御膳□□□官申云、行定遼遠、不差御膳事尤不穩便、猶雖少可聞食也、仰云、已聞出御由、依小事令遲々矣、奇怪也、不如早早、於二者重奏之、然可食暑預卷許也、仍供之、如形食御之、中略 仍渡河著御政所、新院自中門下馬入御、以南面爲新院御所、以北面爲本院御所、紀伊國司、和泉國司、長吏僧正相共儲此所事、仁和寺宮大僧正被參本院、以顯能被尋仰權僧正云、山上撿非違使不登之由聞食、實否如何、答云、非制撿非違使、佩兵仗也、但前度於撿非違使等皆被留此所了、於別當登山、別當與撿非違使可有差別歟、不具□□□准撿非違使不可有憚之由所之存也云々、後聞、准別當、權佐

願能可登山、於尉以下留此所可候之由被仰下云々　三日己丑、鷄鳴參御所、良久出御、取□攀山、於高野鳥居前消松火、本院御輿、新院御馬、山輪□□落馬輩、　四日庚寅、寅一剋參御所、著白織襖紫衣□出御、法皇御輿先行、新院步行、仁和寺宮、大僧正、皆以步行、長者權僧正自夜詣奥院奉待、未消松火著奥院、自橋下本院著藁履步行、禮殿南廂東一間同母屋二間爲御所、懸御簾、其中敷御座茵等、禮殿中央間母屋居供養法壇、四面居佛供、四角挑燈明、供壇之巽坤立高座、其中央立禮盤二脚、母屋東一間東邊敷高麗端疊一枚、爲法親王座、□（件分北爲御所南也、件座西面也、）南廂東一間敷同疊一枚、爲事柱兩僧正座、（北西）母屋西第一間、及北廂、幷南敷紫端疊、爲七僧理趣三昧僧座、（皆是山籠僧也、晴然不分明、）良禪阿闍梨爲呪願、聖仁阿闍梨爲導師、（西）東廂自中央以南敷高麗端疊、爲上達部座、西廂敷紫端疊、爲侍臣座、廂堂犬褁外壇上居雙、兩所御燈明各盛土器、禮堂南去二許丈引幔、其幔中立輕幄、立兩所御誦經物案、右衞門佐顯能進僧綱等座、目□□□燈明御諷誦、以別導師可被啓白歟、將御經供養次相兼可候歟、付相兼御經供養前後如何、法親王被申云、別御導師不可候、御經供養次可被啓白也、其次第導師皆存事也、○中略 辰始還御于中院御所、兼議直可著御于御影堂、而俄改定被停件議、本院御消息云々、予（○源師時）先年奉禮御影、又前年委令奉禮給云々、今日旁指合無人、假不奉禮如何、新院御返事云、只可隨御定者、密々被仰云、詣此山之人、必奉禮御影云々、而無故停止、雖未得其心、一向隨御定、故不令申左右云々、頗有御不請氣歟、顯能仰人々被早著束帶可參上、於御影堂不定禮也、此間、新院未脫藁履、緣懸尻御座、下官等不昇堂上、退下宿所、食仕未了、人告云、兩院西御塔御幸、○中略 次還御御所、仰云、令早改著布衣可參仕、可令詣大塔御也、依是忩下、乃參上、兩院又渡御御塔、其儀如前、○中略 及子時還御宿所退下、予就寢衾、○中略 雞鳴間參御所、○中略 此間、候御前、東方白間出御、今夜、房主圓如弓來談、次相尋云、入定處今停警蹕、鐘鼓止音響、而其上造營塔婆、可無其憚歟如何、答云、山僧等相議云、此山根本三基塔也、其中於二基依二帝御願造畢、供養、山徒大慶不可過是、今度御廟塔尤可然、於造作間之憚、是

非新儀、大師御入定後、實惠僧都被造彼塔、又爲野火塔已燒後、經年序之間、尋其舊跡立此小堂者、造作條、全不可有憚歟、就中修理時入堂中見御處、全不可口事恐、故何立堂、中央間是御廟壇也、其上覆方丈盤石者、於事不可侵損歟云々、今朝新院仰云、廟堂上被立塔事、本院叡慮未一決、故何者、造立事御願已了、必可被果事也、而破舊堂更致大造事有憚者、本堂上重可立塔之樣可思食成也者、下官奏中云、御堂入道〇藤原道長詣此山時、依山僧等懇情、雖可立廟塔之由有沙汰、仁海僧正不可有憚之旨詳不申、仍被寄田地、不立塔婆之由所傳承也、　五日辛卯、至盤折坂本、供奉人々上下皆乘馬、本院御肩輿、新院騎馬、〇中略　亥刻著御玉崎御所、　六日壬辰、丑一刻出御、乘燭著鳥羽殿、於此所供御膳、兩院同車御入洛、

〔中右記〕長承元年十月十三日庚子、今日、院〇鳥羽高野詣御出門日者御精進鳥羽、

〔百練抄八高倉〕嘉應元年三月十三日、太上天皇〇後白河參詣高野聖廟、太政大臣〇忠雅以下騎馬供奉、月卿雲客莫不裁錦繡、

〔高野春秋九〕正嘉元丁巳年三月廿一日、後嵯峨上皇御幸山、九條殿下峯殿道家之長男教實公也供奉、御參詣奧院、規式如舊時也、御法事表白中勅增賜有職三口、並前檢校法橋良覺、被補任法眼和尙位、是理趣三昧導師之勸賞也、當職檢校導師不相勸、定運師靈病故也、

〔後宇多院御幸記〕夫以、高野山者、古佛經行之靈跡、三密相應之道場也、〇中略　太上法皇十月(正和二年)十七日仙洞持明院殿御落飾、仲秋第六天、相伴曉雲、辭西郊嵯峨之鳳闕、不待朝趣南山蓮峯靈場御、然則月卿雲客之近龍眼也、廻轅而前後相列、四隣參議之隨仙蹕也、並鑣左右侍衞、凡從旋駈御隨身等、及扈從之僧綱幷參會僧衆垂髮等、其勢不知幾千萬、上童折花之姿、桃顏之粧氣、馴附鳳輦、隨兵續陣頭之勢、策駿馬而折散地、綺羅充滿雲上如花、車馬遙列數里塞道、其日及暮著御四天王寺、入夜聊御入堂云々、　七日、寅一點出御四天王寺、〇中略至亥刻慈尊院著御、〇中略　五刻慈尊院ヲ御出アリケリ、不相待四隣參議之

隨從不奉百練千研之玉輦シテ、草履云モノヲ忝十善御足奉、僅御綱松持二人、殿上人一兩人計召具、御歩行ニテ趣五里之嶮難御幸ナリケリ、○中略然從慈尊院至金剛峯寺中門、百八十本石町率都婆、一本ゴトニ立留セ玉フテ、聊御念誦アリケル間、御幸殊之外遲々シテ入夜ケル、○中略從是高野山迄ハ、六十餘町候云々、雷光頻降雨故、山水流路邊、沙石混深泥之間、入夜後、十善之御體疲嶮路御スベシ、痛哉我君、鎭玉樓鳳闕玉床座御、輙下地咫尺寸歩御幸不奉拜、爭堪遼遠數里嶮難御マスベキ、早可奉鳳輦候也、召御力者、御輦差寄奉ケレバ、上皇是聞召曰、汝未知哉、自慈尊院至壇場百八十本町率都婆云ハ、是則胎藏界百八十尊顯也、從奥院至壇場三十七本塔婆者、又是金剛界三十七本也、故率都婆面所顯其種子也、多年宿願、斗藪本意、偏以座此事、朕今度生十善家者、是雖爲戒行薰習、今生若不歩結界靈地者、當來爭得昇覺王華臺、故不可厭深雨、何況物詣者、自穢土詣淨土心也、念念心底滅無量罪垢、歩歩足下開八葉蓮臺云々、假我於途中雖送日數、不可緩此行也トテ、御衣裾半爲泥土被穢、爲雨露打シホレテ、倘歩行ニテ御幸成給ケル、目近被候ケル、月卿雲客、四隣參議等、聞勅語、皆共掩涙旋踵御、自隨身及北面輩、アヤシノ人夫迄、各飜退心生隨喜、然則見物緇素聞之、彌致渇仰、遠近老若感之、同成讃嘆、今思此事、儇業卑劣、愚昧信心猶雖淺、靈地幽閑之氣味彌深、終則丑刻人宿御所著御、稍有御休息之後、御裝束被召替、臨寅一點、中院御所臨幸、御裏頭大衆如雲霞參御、供見物輩不知其數、自大門至壇場、無地立錐、警固之御兵士等、當國守護始、處々武士、郷々地頭、大塔下大衆前、龍光院始、面々ト居引幕各固陣頭、凡供奉雜人不知幾千萬、抑御幸中間、俄雷電降雨シケル事、近里女性等、其數巨多、各爲御幸拜見、假男子姿、擬入結界地、長峯邊迄攀登タル故ナルベシ、仍預幷堂衆等數十人計、各持手枝、行向大門横峯、掃去之了、然後陰雲滅碧落、日光耀齊天、此條即達上聞之間、上皇彌靈地効驗貴被思召ケルトカヤ、○中略任例先有根本大塔御拜堂、夫雁塔一十六丈銜白毫也、星霜雖年舊、烏瑟三十二相之並相毫也、利生日新、並是爲續三密之法教於三會、所移南天之鐵

塔於南嶺也、所謂弘仁聖主御願金剛峯寺是也、次金堂者、當山之補處後、僧正眞然之建立、同帝王之勅願也、共一朝歸依之伽藍、而正爲百王護國之仁祠也、○中略抑尋當山仙幸之例者、始從白河仙院終至後嵯峨之皇帝、既及八箇度、然自正嘉第二之天後嵯峨御幸以降、至此正和二回之臨幸云々、中絕既經五六十年之春秋、爰吾君太上法皇、殊訪寬治大治之舊記、剛叡信敬信之新儀御、何況汲靑龍寺之遺流、寫兩部壇之智水、寔是繼絕興廢之軌範、度人與法之方便也、○中略加之寄阿州之之庄園於奥院御墳、母后京極准后、幷後二條院及遊義門院御菩提御、仍至如暨興隆於永代、分朝恩於滿山云寄敎弘通之芳志、云諸衆哀願之叙情、恐是勝先王代代臨幸者歟、○中略

正和二年癸丑九月日　檀林朽木穎濟志

〔太平記三十九〕光嚴院禪定法皇行脚御事

是ヨリ高野山ヲ御覽ゼントト思召テ、○中略行末細キ針道ヲ經テ、御登山有ケレバ、山又山水又水、登臨何レノ日カ盡ントト、身力疲レテ被思召ニモ、先年、大覺寺法皇○後宇多ノ此寺へ御幸成シニ、供奉ノ卿相雲客諸共ニ、一町ニ三度ノ禮拜ヲシテ首ヲ地ニ著ケ、誠ヲ致サレクル事モ、難有カリケル御願哉、予ガ在位ノ時モ、代靜カナリセバ、ナドカ其芳躅ヲ不蹈ト思召准ヘラル、サテ御山ニモ御著有シカバ、大塔ノ扉ヲ開カセテ、兩界ノ曼荼羅ヲ御拜見アレバ、胎藏界七百餘尊、金剛界五百餘尊ヲバ、入道太政大臣淸盛公、手ヅカラ書タル尊容也、○中略其日聽テ奥院へ御參詣有テ、大師御入定ノ室ノ戶ヲ開カセ給ヘバ、嶺松含風顯瑜伽上乘之理、山花籠雲秘赤肉中臺之相、前佛ノ化緣ハ過ヌレ共、五時ノ說今耳ニ有カト覺エ、慈尊ノ出世ハ遙ナレ共、三會ノ粧已ニ眼ニ如遮、三日マデ奥院ニ御通夜有テ、曉立出サセ給フニ、一首ノ御製アリ、

高野山迷ノ夢モ覺ルヤト其曉ヲ待ヌ夜ゾナキ

〔扶桑略記後一條二十八〕治安三年十月十七日丁丑、入道前大相國○藤原道長詣紀伊國金剛峯寺、則是弘法大

師廟堂也、路次拜見七大寺並所所名寺、　二十一日、於吉野川之末御船、漸棹迅瀨、遠過奇巖、午時、御高野政所、申刻許、指山中假屋御宿登御、前例雖騎馬、此時用藁履、僧侶俗徒皆以追從、　二十二日、內相府以下振晨侵雨、共追御步、申刻、御金剛峯寺、晚頭給住僧卅口法服、此明日法會請僧也、(絹製裝一條、手作衣一一領、綿袖一領、絹裳一腰、狩袴一腰等也)　二十三日癸未、拂曉、詣廟堂、(去大寺五十許町也)於是山窟雲曙、漢天雨晴、供養法華經一部、般若理趣經卅卷、權少僧都心譽爲講師、(今案事情、弘法大師者、密教之祖師、智證大師之外舅也、今講師者、智證之門徒、兼長顯密、所以有故、)　演說之詞傳富留那、顯密之道疑關霧開、僧正被申云、大師入定之後、漸欲二百年、廟堂之戶殊不開闔、而先年有石山僧淳祐者、安住一念、斯以百日、午時廟堂之戶無人少開、禪下深信此語、觀念之中、廟戶棹立、自以仆之、滿座之眼忽以驚之瑞相之感於此現之、

〔永承三年高野御參詣記〕永承三年十月十一日口子、(○此間有缺文)廟令參紀伊國金剛峯寺給、(○藤原賴通中略、)曉更出御、(此差御車)　上達部已下著布衣前驅、遲明於淀渡遷御御船、(宇治殿、備後守良賴朝臣先年所造進也、而星霜漸隔、莊嚴頗綻、仍爲充此度御用、新所修飾也、○中略、)卯刻著御山崎南岸、留御船、著御衣冠、更御御車、令參石淸水、(○中略)　辰刻還御橋下、移御播磨守行任朝臣所進新口川船、(○中略)　江口神崎遊女等、擧首參進還御之次可參之由、各賜戒返遣了、過御長柄橋下之比、漸及昏黑、鵜飼各燃篝火、普照行路、入夜著御熊川、　十二日丁丑、曉天自熊川令還大江給、(○中略)　臨昏著御日根御宿、　十三日戊寅、未昏黑之間、御著高野政所、以別當房爲御在所、　十四日己卯、諸大夫已下著麻履、勤仕前驅、著山麓之後、(自政所十餘町、)令下御馬給、御共上下皆以步行、(○中略)　臨昏令著奧院給、(此日金剛峯寺自中坂迄于件寺、三時許、是後之步行所勤仕也、)　十五日庚辰、午刻著廟堂給、(自本寺六十町許也、住僧說□者)　南小川上假作造橋殿、爲御休幕、(引屛□御座許)　裝將留御件所、以範國朝臣遣問堂莊嚴之作法、僧都被申云、依事便宜奉仕禮堂者、(件堂去廟堂三許丈、)而御定云、尙可依入道殿(○藤原道長)御時例、(○中略)　堂莊嚴了、七僧三昧僧等著座、(講師大僧正明尊、呪願深覺僧都、道三口、寺家請定、)　先是奉供御明十萬燈、(居廟堂砌欄下、)　無別御導師、講師所兼任也、(○中略)　秉燭還奧院、御儲如朝、古老住僧等、內內相語云、問尋故實、當時執政運步於此砌、古今未聞、依萬機之務無一

日之滯也、見今日之儀式、御願之趣、莫事而非、鄭重門徒之面目、山上之光華也、十六日辛巳、拂曉供御膳、僧都被參御宿所、有贈物、（夜裝束一具）幷引出物事、（御馬一疋）次令禮大師影堂給、（眞像萬一開堂也）一室中臨息、繩床、木履、杖等皆在世之物具也、雖經數百年、其形皆以如新、僧都以大師眞跡手書一卷、（入木道繪宮）三股一柄、（入錦袋）被獻物、皆珍重、情感叶時矣、其後下御、雪行泥深、彌難喩岨、不依先例、上下皆以步行、午剋之終著御半坂、十七日壬午、臨昏著御市御宿、御儲同初、十八日癸未、亥剋之終著御日根御宿、國司御儲如例、十九日甲申、入夜著御熊川御宿、廿日乙酉、入夜入御、

伊豫守範國朝臣奉仰記之

〔高野春秋五〕天仁元戊子年二月十五日、從一位關白藤師通公登山、詣奧院、令齋法事、畢、（法會勤力悉如先格）被奉埋堀河院御髮於祖廟前、（今現御所芝埋御髮之墓所、其御石塔有之）

〔高野春秋十一〕永享三辛亥年夏四月日、將軍義教公御參詣、儀式如准后道義公、（○足利義滿）御先格、御滯留僧宿、

〔高野參詣日記〕奧院へまうづ、（○西三條實隆、中略）御廟の前の堂、（今度供養の堂なり）燈明そのかずなく、ひかりかゞやきてえもいはず、住僧いであひて、大師御所持の鈴、杵、水精の御念珠など頂戴せさせられ侍りき、

あふぎつゝみるにいよ〳〵高野山光出べきむろのとぼそか

〔太閤記十六〕高野詣之事

三月（○文祿三年）三日、秀吉公高野へ御登山なされ、青巖寺に御寄宿ましまして、二親尊靈のため、御燒香、いかにも懇に沙汰し給ひけり、かくて一山八千人の僧徒被召寄、御母堂の御志として、八木濟濟給ひにけり、御孝行之至、甚以不淺、奧院へ參詣し給ふに、苺苔埋人跡、左右之塔婆朽るもあれば、又新しく立添、實に無は數そふ世の慣ひ瞭然たり、こゝかしこ、無常體の外はなき故にや、何となう物さびて、さながら罪障之塵垢も消、眞如平等の松風に心も清むべく覺え給ふとなり、寔に開

しにもこえ、殊勝なる靈地なりと感じ給ひつゝ、金堂、大塔を伏をがみおはしますが、金堂既に大破に及びければ、吾登山こそ幸なれ再興有べきとて、八木一萬石被宛行畢、

〔駒井日記〕文祿三年三月二日、一從吉野大閤樣高野へ御參詣、

〔續寶簡集三〕爲御意申入候

一今度被成御登山、當寺之樣子被御覽、被爲驚御目候、殊靑巖寺御作事、其外方々路次等普請以下、貴老御一身之御苦勞故と被思召候事、

一御逗留中、種々樣々被入御念候、至下々迄無殘所御報謝共、懇ニ被聞召屆、御感不斜候事、

一靑巖寺住持御燒香之儀、御朱印之事申上候處、被成御心得候、此方へ御參候時、御文體等御好次第ニ可被成遣、別儀候事、

一大佛瓦薪方々被仰出候外者、紀伊峯路次より被御覽候得者、程遠候條、是ハ被打置、別之所にて被仰付候事、

一還御候ても御機嫌無比類候、何方までも御仕合目出度候、其之御用悠悠と被相叶、可有御參旨御意候、爲私申候、今度ハ色々御懇意共交候、御仕合能候て、兩人滿足、御心中同前候、恐惶謹言、

三月七日　山中山城守長俊花押

木下大膳大夫吉成花押

木食興山上人御坊御同宿中

納骨

〔檀囊抄十一〕諸人取骨、必ズ高野ニ納ルハ何由緒ゾ、

凡ソ不限南山、所々ノ靈區ニ置之歟、就中高野山ハ、是日本ニ九品ノ淨土アル中ニ、上品ノ上生ニ當レリ、是淸凉山ノ文殊ノ示現也、然レバ勝タル靈場ナル故ニ、專ラ此ニ置歟、又寛治年中ニヤ、東寺ノ定額僧正勝覺ト云シ人、讃州善通寺ノ別當ニ被補テ下向シタリケルガ、於彼寺、御筆ノ一紙

ヲ感得ス、文云、

ト居於高野樹下、遊神於兜率雲上、不闕日日之影嚮、撿知處處之遺跡、ト侍ベリ、サレバ
高祖草創ノ砌、望マン人ハ、巨益空シカルベカラザル中ニ、殊ニ彼ノ山ハ親タリ入定留身地也、
彼ニ身骨ヲ納メン輩、爭カ有緣ノ益ニ不預哉、加之大師ノ御記文ニ云、
結舍那之秘印、秘先身、雖留身於樹下、意者有兜率內院、雖然爲加持遺跡、不闕日日之影嚮、至有信
者、其身授幸、不信者可恨先業、但我山所送置亡者之舍利、我每日以三密加持力、先送安養寶刹、當
來我山、可爲慈尊說法之聽衆菩薩云々、

此御記文、寶性院ノ經藏ニアリト云也、依加樣子細、取別高野山亂置者也、

〔山槐記〕永曆元年十二月六日庚戌、宮內卿師綱朝臣語曰、美福門院(○鳥羽中宮藤原得子)御骨、奉渡高野御山、
依御遺言也、而鳥羽東殿、故院(○鳥羽)令起立御塔二基、御一基被納故院御骨、今一基此女院御料也、然
而可置高野山有御意趣云々、而彼御塔三昧僧(天台僧也)六口、幷故院御塔三昧僧六口、合力奉留御骨訴
申、何被貴弘法大師、可被賤傳敎大師哉、故院令定置御事、今更改易不當之由申之云々、仍遣重方被
仰子細之處、申云、然者可分置御骨於兩所、此儀又以外之事也、御骨雖不御座御塔、三昧僧者不怠之
由能態被仰含、仍去二日遂奉渡高野了、云々、

〔蔭涼軒日錄〕長享三年五月十二日、寶篋院殿(○足利義詮)御遺骨一分事、就往年之由緖、所被奉納當寺也、
致不朽之勤行、可被訪幽靈御菩提之狀、依仰執達如件、

貞治七年二月晦日　　　右馬頭判

高野山安養院長老

〔顯如上人雜記〕天正十四年

一高野山ニハ、七月十五日、イカナル坊々ニモ、本尊ヲカケナラヘ、靈寶ドモヲ、誰ニモヲガマセラ

誅殺

ル、也、于今七千坊アリト云々、其内、學侶ト云ハ、百五十坊程アル也、其外ヲバ、世間者ト云也、各院號ヲイヒテ、院家々々ト云也、

〔高野春秋 五〕寛治四庚午年春正月、新熊野別當湛增、武藏坊辨慶之祖父也補遍照光院、授與常喜院心覺闍梨、是湛增以爲峯中之職掌、故白河上皇所有宣下也、蓋惟明春意欲有再御幸之時爲御宿坊之叡慮焉矣、新熊野在州田邊也、今現有社頭井辨慶松等、常喜院者、三井寺住侶之時、心覺之住坊名也、率敎共博學多智、種三井青瀾、一時憤激、故離寺隱遁當山、上皇叡聞故及宣命、常喜院則從本立名也、然至法流、號常喜院流、顯覺理法房追隨覺源、濯瓶法水、鳴一山、金玉之作者也、二師之法流聖敎等在遍照光院、是則自此山有事于大峯修驗道之張本也、後世法事之時、承仕相勤僧侶行人、又號夏衆、是則大童子剃髮之初年、一夏中供花伽藍、故名相寬文四年巳行人止其格了、予登山之時節、彼夏衆等著白衣袈裟、見供花之作法了、今亡、

〔高野春秋 八〕嘉祿二丙戌年秋八月十五日、覺心子乘月明往問往生院谷奈須七郎親張入道後號化千上人是也、之萱庵、庵主向月觀座、覺心詠歌問心地、自加羅、心ヲ澄ヘ身ヲ須幸萱ノ軒端乃有明乃月、入道應聲曰、自羅、心モ須磨寸、身モ須磨寸、萱我軒端乃露乃月影、以詠歌卽答、心子又烈聲曰、汝ト覺心、我ト覺心、而授拂子畢、是則萱堂。號安養寺之元祖也、一條閑辟御歸依詠曰、誠加也、登宇止讃事乃數々違、高野乃山仁、登世利止聞、世諺曰、瀧口入道之故事、或時橫笛女尋之事跡、爲萱堂之元祖者非也、古來編集隱遁者非此限乎、去文治年中尋瀧口時賴入道之事、與花鈞合可折衷之、

〔豐臣秀吉譜 下〕同文祿四年、福島、福原、池田既趣高野、逢興山上人述秀吉之命、示五奉行之書、興山見之曰、秀次之事雖可憐、而其叛虐尤可憎焉、我何可背秀吉之命乎、於是福島、福原、池田、率三千兵進圍靑岩寺、秀次怒曰、何人猥籍如此之甚乎、雀部淡路守出告興山曰、秀次既以自殺爲志、豈怯懦乎、而今三使圍靑岩寺、上人須止之、興山往諭之、三使卽退兵、秀次召興山曰、速設湯沐矣、湯沐既畢、秀次催自殺之事、山本主殿年十八先死、次山田三十郎年十八次不破萬作年十八次玄隆皆死、其次秀次引刃自斃、時年二十八

〔公卿補任 後陽成〕文祿四年

關白正二位豐臣秀次　七月八日、出家於高野山、同月十五日有事、號高巖寺、

〔高野春秋十三〕文祿四己未年秋七月十日、關白秀次蒙讒、逐來自伏見、大閤御所遣呵責故也、木上詣待宵殿寺矣、（秀次公產生已後有逆心之聞故、）十五日、秀次自裁、（雀部淡路守介錯之、）次淡州自滅也、（三將賫秀次首歸伏見後報之、）秀次及殉死五骸葬奧院訖、（秀次牌名）號瑞雲院玉巖麟公、

名稱

根來寺

根來寺ハ、一ニ傳法院ト云フ、紀伊國那賀郡根來山ニ在リ、初メ崇德天皇ノ朝、高野山ニ覺鑁ト云フ僧アリ、智行ヲ以テ稱セラレ、新義ノ法流ヲ唱フ、鳥羽上皇ノ御願ヲ以テ、城內ニ傳法院ヲ建テ、終ニ此ニ葬ラレ、以テ空海ノ廟ニ擬ス、高野ノ徒之ヲ惡ミテ其廟ヲ毀チ、且ツ傳法院ヲ燒ク、覺鑁ノ徒、因テ根來ニ移ル、爾來寺運大ニ盛ニシテ、足利幕府ノ末、浮浪ノ僧俗又多ク來リ集リ、暴掠至ラザル所ナカリシガ、豐臣秀吉ニ攻滅ボサレ、一山全ク焦土ト爲レリ、後德川幕府ニ至リ、京都ニ智積院、大和長谷寺ノ內ニ小池坊ヲ建テ、此寺ノ法流ヲ傳ヘ、新義眞言ノ本寺ト爲ス、是ヨリ此寺モ、亦漸次ニ堂舍ヲ再興セリト云フ、

〔拾芥抄下本諸寺〕傳法院（鳥羽院御願、在金剛峯寺、）

所在

〔紀伊續風土記二十九那賀郡〕根來寺

寺域

根來山は、弘田野、上野兩莊の北にあり、寺域西北は山崎莊に接し、東は池田莊に接す、其間、大抵山峯を以て界とし、周回凡四里許、

創建

〔覺鑁上人傳〕院（○鳥羽）高野ノ事共御尋有リケレバ、御物語之次ニ、彼ノ上人（○覺鑁）ノ宿願ノ事、委細奏聞シ御座ス、院聞召テ、件ノ上人參ス可キ之由院宣有リ、仍テ花藏院ノ宮、御脚力ヲ以テ、上洛セシム可キ之由御消息有リ、仍テ急ギ上洛セシメ給畢、卽チ院宣ニ依テ、御前ニ參入セシム可キ之由

仰セ遣ハサル、之間、早々御前ニ參ラレ、忝ク龍顏ニ近ヅキ、直ニ伽藍造營之事、奏聞ヲ申サシム、仍テ御前ニテ指圖ヲ召出サレ、叡覽ニ備ヘ奉ル之處ニ、彼ノ傳法院ノ事丸ガ勅願ト爲シテ、早々營作ヲ致ス可之由宣下セラレ畢ヌ、其時上人ハ三十六歲也、佛力ト帝力ト、一時ニ函蓋相應ジテ、所願悉ク成就シ畢ヌ、法驗ト云ヒ、時運ト云ヒ、貴キコト得テ稱ス可カラザル者歟、

大治五年庚戌(崇徳院御宇)四月八日、傳法院ニ丈六ノ尊勝安置セラレ、供養ヲ遂ゲ、小傳法院ト號ス、石手ノ庄ヲ寄セラレ、學衆三十六人補セラレ畢ンヌ、凡ソ石手ノ庄、稲荷明神之御託宣ニ依テ、寄附セラル、其子細別段ニコレ有リ、天承元年冬ノ頃、小傳法院餘リニ狹小ナリトテ、大傳法院ニ申シ成テ、七間四面御堂建立セント思立給ヒ、卽チ院宣ヲ申シ下シ、軈テ新始メ畢ンヌ、長承元年ニ、平等院(三井寺)行尊僧正ノ龍童冠者大津判官(不知實名)ニ受領之功ニ申賜ヒ畢ンヌ、仍テ行尊大僧正、高野ニ參籠シテ、手自ラ造營セシメ、十月以前ニ造畢ル、供養之時、御幸有ル可キ之由宣下セラル、仍テ十月十七日御幸有テ、供養ヲ遂ゲラレ畢ンヌ、御導師ハ西ノ院大僧正信證、時ニ東寺一長者、大治二年御年二十九ニテ、之レニ任ゼラル、四十未滿之初例也、○中略此ノ如ク造立シ畢テ、供養之時、鳥羽院御幸有リテ、御覽ジテ、朕ガ此間憶念セショリモ、御堂造營之儀式儼然也ト、勅言有リト云々、○中略

寶藏一字、本堂ノ艮ニ有リ、本ハ是レ大安寺經藏、正ク是レ高祖大師ノ御作也、大師ノ云ク、大安寺ハ是レ我ガ祖師道慈律師、地ヲトシテ建立セラル、是レ祇園精舍之業也云々、是ノ故ニ、大師手自ラ斧ヲ取テ造立セシメ給フ也、然ルニ彼ノ寺ノ執行、傳法院、本願上人ニ沽却シ畢ンヌ、十二月晦日、一山老少此寶藏ニ詣シテ、正ク此板敷ヲ頂戴ス、明年ニ、必溫病ヲ通ル、効驗必ズ之レ有リト云々、此經藏造立シ畢ル後、鳥羽院ヨリ遣唐使ヲ立ラレ、料足貳千貫渡サル、千五百貫ハ唐本一切經一部、五百貫ハ茶垸ノ花瓶三對、三尊御前ニ立花、○中略已上傳法院ノ墎内ニ、一十三字佛閣之レ有リ、　密嚴院ハ別廊也、上院トハ八角ノ寶形造リ、此ノ院者深秘之在所ナルガ故ニ、普通ノ

大門徒ハ参ラズ云々、然レドモ近代斷絶シ而、在所之レヲ知ラザル也、下ノ院トハ、八角方形造リ、當時ノ密嚴院是レ也、此院者上人御入定ノ砌ニ定メラル、壇ノ四方堤ノ樣ニ築廻シ而、中心ニ此堂ヲ建ッ、水ヲ湛ヘ、水輪定ニ之レヲ構ヘラル、

〔撰集抄 六〕覺鑁上人定之中成不動事

近きころ高野の御山に、覺鑁上人とて、やんごとなきひじりおはしけり、眞言宗のさとりをきはめて、一印頓成の春の花は、にほひを寂寞のかすみの衣にうつし、禪心合掌の秋の月は、ひかりを無始の心の内にてらして、弘法大師のむかしの跡をおふて、傳法院といふ所をたて、龍花三會のあかつきを待て、入定し給へりとかや、○中略かゝるまゝに、本寺の僧徒あつまりておの／＼ざするやう、我朝六十餘州には、大師の外、たれの人か、定にいれるはある、中には世下て我山に、いか成行徳ある者なりとも、いかでか大師の御まねをしては侍るべき、いざや傳法院へよせて、彼覺鑁が入定さまさんと議して、俄によせにけり、かくばんの門徒ふせぐべきちからなくて、ちり／＼になり侍りぬ、本寺の僧、入定のところにみだれ入て見るに、不動の尊、二體おはしましけり、一體は覺鑁の日ごろの本尊の不動にておはします、今一體ハ、聖の化したるとおぼゆ、但いづれと見わきがたし、いかゞすべきとためらひけるに、或僧の、一體の不動をさぐり奉りければ、すこしあたゝかにおはしければ、これこそ覺鑁よとて、太刀にて切けれども、露きれざりけるを、なじかはとて、いたくきるほどに、覺鑁定さめて、つゐにきられ給へりが、ゝりければ人々も、谷へはね入て歸りにけり、其後覺鑁は、こは心にもまかせぬわざかな、我此山にすまじとて、紀伊國根來山といふ所に庵をむすびておはしけるが、七十二と云ける三月十二日なん、往生の素懷をとげ給へり、

○按ズルニ覺鑁ノ行年、元亨釋書ニ、康治二年十二月十二日卒、年四十九トアレバ、此ニ七十二ニ作ルハ誤カ、

〔覺鑁上人傳〕保延元年乙卯ノ頃、本願上人ノ言ク、先年官府院宣ヲ以テ、金剛峯寺、大傳法院、件ノ兩御願寺、永ク覺亡ニ賜ル所也、而ルニ我レ既ニ求法之志、諸流ヲ究ム、弘通之思ヒ遠近ニ被ル者也、成佛之濟度、弘法之利人、滿足之上者、件ノ兩寺ノ座主職以テ、持明院眞譽阿闍梨ニ讓與スベシト云々、此持明院ハ、元ヨリ傳法院ノ御內也、故ニ被院宣ニ云、

被院宣偁、依阿闍梨眞譽申請、以彼建立堂持明院、爲大傳法院末寺、安穩泰平、寶壽長遠之由、可令祈念之旨、宜遣仰者、院宣如此、悉之謹狀、

長承三年十一月二十日　　右兵衞督在判

奉眞譽阿闍梨御房、

〔紀伊續風土記 二十九 那賀郡〕根來寺〇中略

覺鑁上人の開基、鳥羽上皇の勅願所なり、初上人高野山に住す、大治五年、上皇、上人の爲に、小傳法院を創建し、岩手莊を寄せ給ふ、後天承元年、大傳法院を建立し、數箇の莊園を賜ふ、〇中略吉田莊に、一老翁あり、豐福といふ、己の宅を根來山に移して、一寺を建立し、豐福寺と號す、上人おもへらく、此地役優婆塞經行の地にして、形勝高野に讓らずといふと、遂に茲に居る、上皇此を聞し召され、野山兇暴の僧徒を罪して、上人を歸山せしめんとす、上人これを固辭し、此地に止りて、禪波を激しめん事を請ふ、勅してこれを允許す、是に於て圓明寺を創し、佛閣、神祠、僧坊等數十區を造らしめ、勅願所とす、一乘山圓明寺と號す、新義眞言一流の鼻祖たり、これに由りて、野山より從ひ來る僧徒、又皆野山傳法院に還り住し、大法會を執行ふ事故の如し、

〔太平記 十八〕高野與根來不和事

先帝〇後醍醐花山院ヲ忍出サセ給テ、吉野ニ潛幸成リシカバ、近國ノ軍勢ハ申ニ不及、諸寺諸社ノ衆徒神官ニ至マデ、皆王化ニ隨テ、或ハ軍用ヲ支ヘ、或ハ御禱ヲ致シケルニ、根來ノ大衆ハ、一人モ吉

野ヘ參ラズ、是ハ必シモ武家ヲ贔負シテ、公家ヲ背キ申ニハ非ズ、此君高野山ヲ御崇敬有テ、方々ノ所領ヲ被寄、樣々ノ御立願有ト聞テ、偏執ノ心ヲ插ケル故也、○中略事ノ起リヲ尋ヌレバ、中比高野ノ傳法院ニ、覺鑁トテ一人ノ上人御坐ケリ、○中略傳法院ヲ建立シテ、我門徒ヲ昌ニセバヤト思フ心、懸ニ成ケレバ、鳥羽禪定法皇ニ奏聞ヲ經テ、堂舍ヲ立、僧坊ヲ作ラル、サレバ一院ノ草創、不日ニ事成リシ後、覺鑁上人忽ニ入定ノ扉ヲ閉テ、慈尊ノ出世五十六億七千萬歲ノ曉ヲ待給フ、高野ノ衆徒等是ヲ聞テ、何條其御房、我慢ノ心ニテ被埋堀、高祖大師ノ御入定ニ同ジカラントスベキ樣ヤアル、其義ナラバ、一院ヲ破却セヨトテ、傳法院ヘ押寄セ、堂舍ヲ燒拂ヒ、御廟ヲ堀破、○中略是ヨリ覺鑁上人ノ門徒五百坊、心憂事ニ思テ、傳法院ノ御廟ヲ根來ヘ移シテ、眞言秘密ノ道場ヲ建立ス、其時ノ宿意相殘テ、高野根來ノ兩寺、動モスレバ確執ノ心ヲ插メリ、

〔紀伊續風土記〕二十九 那賀郡 根來寺○中略

上人、○覺鑁滅後百有餘年を經て、寬元の頃に至りて、山徒蜂起して傳法院を放火す、堂塔僧坊一宇も殘らず燒亡す、正應元年、傳法密嚴二院、及諸堂舍、僧坊の基址を根來山に移して、殿堂を營造し、大會をこゝに强行す、これより野山に住居の僧徒、皆根嶺に移住せり、伽藍の區域四つに分る、圓明寺あり、豐福寺あり、大傳法院あり、密嚴院あり、堂塔祠宇其中に充付し、子院九十八院、諸谷の中に闐登す、足利氏の中世、天下大に亂れ、各處の掠奪を事とす、大伽藍の地、及領內廣き者、常に兵仗を帶びて防禦を事とす、僧徒の兵仗を執る事、防禦に起すといへども、後は戰爭を事として、掠奪を事とするに至る、○中略地を領する事、數十萬石ニ至る、豐公、眞田幸村を使として、舊領の地は悉沒收して、新に二萬石を賜ふべきとの事を諭さしむ、衆徒肯はず、豐公、大に怒て、兵を擧て是を討つ、○中略天正十二年小牧長久手の役、東照神君、井上主計頭を、當國に遣はさる、根來寺總分、幷に雜賀の士を招き給ふ、根來寺命に應じて軍を出す、右の由緒あるを以て、根來破却の後、東照神君、根

來の僧軍二百人を擇ばせられ、內百人を幕下に召して俸米を賜ひ、殘り百人は後命あるべきとの事なりしに、元和の封初南龍公、其由緒によらせられ、百人を召して、廩米八石づゝを賜ふ、これを根來同心といふ、皆院號、坊號を名乘り、總髮にて世々相續せり、根來寺これより僧軍なし、

〔天正記三〕紀州御發向の事幷水責の事

それ右大將信長公、一天の風おさまり、四かいなみをだやかなり、ときに內大臣平朝臣秀吉は、いくわうをまんこにかゞやかし、めいよを四海につたふ、ひいきの外また敵たふものもなし、いはんや近國にをいてをや、こゝに紀伊の國さいが、御せいばつの事、其ゆらいをたづぬるに、天正四年前將軍信長は、一きのけうとをにくみ、是を討んとす、そのみちせつ所にして、そ山のけんしよく國のなんぎたり、これによつて、いにしへよりこのかた、敵軍らんにゆする事なし、然るに秀吉こうは、○中略今年天正十三年三月廿一日に、御くはんざのよし、けん日ちんぶれをなし、○中略同廿三日、ねごろ寺にいたり、御くわんざをふせぐ事は、たうらうが軍にむかふよりもかなし、是をせむる事は、たい山のかいこをけんするよりもやすかるべきと、方々へをひちらし、僧坊がらんに火をかけ、たにたにのいらかをほのほとなし、あまの山のこずゑにのぼり、けぶりとなり、雲つらなり、三日三夜、百里をてらし、只でんばうゐん一宇、ぎせんとして魯の靈光殿のごとし、彼一でうねごろ寺は、かくばん上人、しゆつせして、でんばうゐんこんりうせしよりこのかた、もつはらりんごくりんがうと同心して、弓矢をとる事は、六百年よりこのかた、寺家安たいにして、とみにあき、をのれをほしいまゝにす、がうてきにむかひ、せう敵に其趣をかんずるに、あだかもせいあんのうみをかたらふがごとし、かるがゆへに、一こくにはきやくの折ふし、しゆぎやうじやあるが、一首の狂歌云、

にあはざるねごろほうしのうでだてにあはれゆみやのはちをかくばん、でんばうゐんは本

朝にかくれなき大佛かく也、是によつて都へひきのぼせ、太平山のぶつでんと定め、よく日、さかか谷にいたり、御くはんざあり、〇下略

〔根來破滅因緣〕根來寺破滅之體、大方筆紙相留置、天正十三乙酉三月初之比、大閤樣〇豐臣秀吉依爲御慈悲、高野山ノ木食上人爲御使、仰出之旨、切取ノ知行之內、少指上、殘知行ニテ、御陣立之時分ハ、可罷立之由仰出之處ニ、行仁衆中、半バ領掌申シ、半バ知行少成共差上申儀ヲ迷惑存ジ、仰出ヲ相背、鐵炮百挺計ニテ、夜中、木食宿へ打掛、其上領掌申岩室坊密嚴院山ヨリ鐵炮揃打掛也、木食者、夜間ニ令欠落上洛仕處ニ、大閤樣御立腹之由種々申、寺中雜說不尋常處ニ、三月廿二日ノ夜半ヨリ、近付衆其類云合、高野山ヲ出掛令欠落、晨朝時ハ不殘令離散、二三日相過、大閤樣岩室坊ニ御座ヲ御立、諸軍ハ一山ニ入渡リ、下地福貴安樂ノ寺成バ、財寶滿々テ在之故、諸軍物取ニ出掛ル處、廿九日ノ晝、八方ヨリ火災起リ、諸軍モ自分之武具等迄モ燒失スル體也、傳法院伽藍等ハ相殘者也、傳法院ニハ、行仁ノ年寄百人ホド相殘處ニ、武士之衆、樣子相尋候ヘバ、何方ヘ參リ候テモ、餓死仕外ハ有間敷故、此寺ニテ死去可申返答仕處ニ、其旨達上聞、御慈悲ノ大閤樣成故、御扶持方ヲ被下之、其年寄共、武具ヲ奧ニ納置タルヲ見出シ、重而御扶持無之と見べし、寺之破滅ハ、悉ク行仁惡行故自滅也、岩室坊などの分別ニ於相任者、末代寺ハ長久ニ可有之也、行仁知行とてハ爲一所無之、皆以切取也、四ケ八ケ庄ト云モ悉ク衆徒ノ拜領申知行也、衆徒ノ義思ヒ我儘ノ分別にて、和泉國ニ城二ケ所圍人數ヲ籠置也、根來寺者、從東西武士衆令亂入共、可防樣無之處ナルニ、皆以無分別故也、自滅之作業難及筆紙者也、(行仁武邊ノ衆ハ有五千、古川衆加之也、)愚老ハ十輪院ト令同道、晨朝ヲ開出寺中ヲ、高野山ニ趣なり、常ノ道ニ相替、東坂元へ出て、從夫南方へ行キ、高野へ取退也、上代、奈良滅亡ニ不替也、自滅也、

〇按ズルニ、コノ書ノ奧書ニ、右條々、予、根來寺住山鑽仰ノ節、見聞之分□老筆書之畢、于時寬永

十三曆歲次丙子五月日、智積院閑居權僧正日譽花押トアリ、

〔義演准后日記〕慶長五年九月晦日、傳聞、根來寺再興、內府〇德川家康ヨリ下知、

〔紀伊國名所圖會六下那賀郡〕根來山〇中略

抑開山興敎大師、高野山におゐて、天承元年、大傳法院御建立ありて、金剛峯寺、大傳法院、密勤願寺の座主に任じたまひ、其後保延元年春、兩寺の座主職を、持明院眞譽阿闍梨へ讓給ふ、隆海あざり等、相續て座主職に任ず、學頭は、寶生房敎尋あざり、曉覺房信惠あざり等、滿山の座主學頭共に、開山大師の門葉にて、相續し來りけるが、百五十餘年を經て、のち中性院賴瑜法印、學頭たるとき、天朝に奏し奉りて、正應元年戊子の春、傳法密嚴二基を、根來山に引うつすのとき、傳法院方の大衆、ことごとくきたるによりて、根來寺大に繁榮するなり、しかるに建武以來二百餘年、世間靜ならず、軍卒の狼藉濫妨甚しかりければ、行人の徒、甲冑をちやくし、兵仗を操りて山寺を守護す、學侶は專ら道を修して、世に達することなけれども、行人非學のともがらは、我執甚しく、後には却て他の地を奪ひ、人の境を侵す、其魁三四人、所謂專誠岩室、阿伽井、杉の坊等なり、各百千衆を率て、威稜軍將のごとく、大坂の命に從はざるに依て、天正十三年三月廿一日、堂社、佛閣、作坊等、すべて二千七百餘宇、一時に灰燼となりぬ、大傳法院一廓は、此災を免たりしを、京師紫野の文殊司と云人豐太閤よりたまはりて、寺を毀ち、本尊および材木等を、船に積て、淀川を引のぼせけり、其後慶長の頃、京兆尹板倉伊州是を聞て、文殊司を呵責し、根來へ返りかへさしむるとき、本尊三體は、根來へおくり返し奉り、材木等は、みな大坂に棄おきて朽敗するなり、慶長のころ、淺野左京大夫幸長、于時紀州大守、命じて根來山の四至傍示を正し、山林濫伐を禁止す、元和九年、國祖南龍院殿賴宣卿彥坂氏に命じて、法度をさだめ、東西の坂本口に制札をかけ、下馬および下乘の木牌を立させたまふ、されど行人等割據血腥の固執いまだ除かず、數年山中穩ならざりければ、寶曆元年、國君大惠院殿太夫岡野氏

日向守に命じて、行人等を遂ひはらひて、蓮華律乘兩院をもて、兩學頭と定められ、六十石を寄て、僧厨を資たまふ、まことに根嶺再興は、此君のちからに依れり、嗣君菩提心院殿先考の御こゝろざしを續て、衆僧をして、國家の安全をいのらしむ、又常光明會は、大婦人清信院禪尼公の御願なり、往年智積院僧正蓮敏師此山に登、前山の麓なる菩提院の跡に、小堂を構へて、開山大師の寶塔を安置し奉りしより、何となく奧院の御廟所といひつたへぬ、されども元よりの御廟所は、墓山の麓に、その跡のありければ、寛政十の年、前の小池坊僧正法住師なるきをしめて、石窟を築き、御廟塚と稱すとなん、猶かねて、大傳法院再建の事を國君へ啓、前黄門公太眞公隨喜褒稱して、資貨若干をたまふ、法嗣蓮華院法恕僧正、先師の遺命を續て、常光明眞言堂を造建あり、黄門閣下、常光明眞言殿の扁額を手書して賜ふ、また清信禪尼公の椒房蘭室を移し、庫裏厨屋をならべ建つ、猶傳法密嚴の材木をあつめ、神社佛閣僧房等、いにしへの輪奐に復せんことをねがひ、禪餘は造像堂塔のことのみに明しくらして、つひに文化の五年になりぬとかや聞つたへ侍るを、おろ〳〵書あらはしぬ、

〔紀伊國名所圖會六下那賀郡〕根來山山崎莊坂本村の東北にあり、西坂本は、和歌山より當し、東坂本に、粉河より當するなり、雙方共旅舍あり、

一乘山根來寺大傳法院根來山にあり、宗旨眞言新義、○中略

往古堂塔大概

大塔五間四面、高サ十八間、空輪二十間餘、 本尊金色大日如來長三尺四寸五分、外にまた十三尊ありしと也、今二體存す、 大師堂三間四面 御影木像長三尺六寸 不動堂二間四面瓦葺、長四尺六寸、 經藏竪二間、横三間、 阿彌陀堂三間四面、佛長三尺、 鐘樓 中間面五間 多門天、持國天、殿屋 湯屋 右大傳法院境内にあり 錐鑽不動堂五間四面、八角作、內陣は圓形、 本尊不動明王長四尺六寸、弘法大師作、 樓門 求聞持堂三間四面 多寶塔三間四面 經藏二間四面 地藏堂本尊地藏菩薩、長三尺四寸、 春日社檜皮葺、下院ト云、 拜殿竪五間、横三間、 鐘樓 殿屋 毘沙門堂 天満天神 右密嚴院境内にあり 御影堂面十七間、裏九間、 中尊覺鑁御影上人自作土佛、長三尺一寸五分、 左脇相應不動 右脇尊勝佛頂 三部權現五間四面、檜皮

寺領

茸、華表額稱字　伊太祈曾社　御廏　鐘樓　樓門中三門、透廊六間　右圓明寺境内にあり　豐福寺五間四面　本尊虚空藏長二尺五寸　藥師堂三間四面　千手堂三間四面　鐘樓　中門　地藏堂　開山堂役行者堂

なり　九社大明神社御正體三社一社各三社、三々合九社あり、　拜殿　寶塔　荒神社　右豐富寺境内にあり　千手院三間四面　本尊阿彌陀佛　文殊堂三間四面　鐘樓　毘沙門堂三間四面　不動堂三間四面　丈六堂三間四面

本尊阿彌陀佛　右小谷にあり　菩提院道場　護摩堂　五智堂　五佛堂竪二間、横三間、　本尊五佛

辨財天堂　不動堂三間四面　毘沙門堂三間四面　經屋　稻荷明神社　閼伽井森　辨才天社　地藏堂三間四面　右菩提谷にあり　觀音堂三間四面　本尊馬頭觀世音長一尺三寸　鐘樓　八角の不動堂

右大谷にあり　五寶堂三間四面　本尊阿彌陀佛　虚空藏堂三間四面　藥師堂三間四面、　觀音堂三間四面

地藏堂三間四面　大師堂三間四面　右蓮華谷にあり　地藏堂三間四面、　本尊地藏菩薩　藥師堂三間四面

右西谷にあり　觀音堂三間四面　大師堂三間四面　本尊弘法大師　辨財天堂　右萬瀧谷にあり

阿彌陀堂三間四面　求聞持堂三間四面　本尊虚空藏　稻荷明神社　右三間にあり　御船大明神社　辨財天社　拜殿　稻荷明神社　右前山にあり

一山境内南十一町中北二十一町西十二町東十一町　大門　大橋　大門池　番屋坂口未申のかたに辨財天社あり　下馬口戌亥のかたに金剛童子あり、　百坂口東金剛童子　菩提峠口辰巳のかた不動長一尺六寸、覺鑁上人の御作、

兩。學。頭。

妙音院和州長谷寺に移す、小池坊といふ、　智積院京師東山にうつす、又其先兩學頭寺六院、　月輪院小谷　敎應院小谷　修學院前山　釋迦院前山の東　總持院大塔のうしろ　理趣院前山

〔覺鑁上人傳〕石手庄寄文案公驗

奉寄　私領壹處事

右紀伊國那賀郡河南院字石手村

寺職

四至東限岡田村井沼田畠、西限市村東境、南限大河、北限弘田庄南牓、

右件爲村里、先祖相傳之私領也、高野山正覺房聖人、爲傳法會供料被建立庄、仍致隨喜本公驗相副、限永代奉寄件私領也、於下司職者、爲里次第相承可勤仕之狀如件、

大治元年丙午七月日　平爲里在判

〔海人藻芥〕根來傳法院別當職、付法院、眞光院門跡相傳之所、近代三寶院拜任云々、

雜載

〔紀伊續風土記那賀郡二十九〕根來寺○中略

新義を奉するの僧徒に至りては、天正兵火の後、稍々山内に還り集り、餘燼を收めて堂宇を再興し、佛殿より神祠に至るまで、古の舊址に因りて大抵其髣髴たるを學び、子院二十七字を造立し、再び法燈を挑ぐといふ、寬延年間國命を以て、蓮華院、律乘院を以て、談林學頭地とし、俸米三十石を賜りて寺料とし、外に貳百石を以て寺產とす、新義本山、和州小池坊、京都智積院より、迭に兩院に住職し、權僧正に拜任せらる、これより後、常光明眞言殿、大傳法院大宝などの殿堂を造營して、衰廢の形を振起する事を得たり、

〔和漢三才圖會七十六紀伊〕根來寺　在根來○中略

昔當寺及境內作朱塗飯器、于今往々有之、稱根來椀、

粉河寺

名稱所在

粉河寺ハ、一ニ施音寺ト號ス、紀伊國那賀郡粉河村ニ在リ、寶龜元年、此地ノ獵夫大伴孔子古ガ靈地ヲ發見シ、佛像ヲ安置セシヲ以テ草創ト爲ス、西國三十三所觀音ノ一タリ、

〔拾芥抄下末諸寺〕粉河紀伊國千手

創建

〔書言字考節用集 乾坤 一〕粉河寺(コカハデラ) 紀州那賀郡

〔紀伊國名所圖會 三編一 那賀郡〕粉河寺 粉河村にあり、補陀洛山施音寺と號す、天台宗の靈場なり、 西國順拜第三札所

〔粉河寺緣起〕寶龜元年草創、紀伊國那賀郡粉河寺、故老傳云、先是同國同郡有一狩師、名曰大伴孔子古、敢獵爲業、山林爲栖、然間點一幽谷、定一踞木、夜々窺猪之間、當左眼眦、進有光明赫奕之處、其程如大笠、口許、心中作怖寄特尤切、卽下踞木、漸行放光之處、隨行光去還來如東、屬現此相及三四夜、卽點光地、掃除草木、結構柴庵、心中發願建立精舍、奉造佛像、不經幾程、有一童男行者、請暫寄宿孔子古之宅、則許令住、行者喜悅語家主曰、檀越生前作何善根、若有心中所願者、吾當助成善、曰我有一願、放光之地、爲造立佛像、而無佛師、未遂其願、行者云、我是佛工、當遂汝願、狩師云、我爲法界衆生、兼又我息男船主任奧州軍曹下向、爲安穩歸鄕、欲造佛像也、行者隨喜相共行向草庵之地、行者示而云、我七日內可作佛、但中間莫來見、若造佛畢、吾往汝宅、當叩門戶、其時汝來可拜見新佛、約諾畢、佛工閉戶、檀越返宅、七日間致精誠、至第八日、拂曉開打戶參入拜見千手觀音像、自然出現、更無佛師、於是檀主悲喜相交歡悅尤甚、永絕殺生、偏歸佛法、○中略 自是以降、朝野歸心、花夷低頭歸依者、攘災招福、恭敬之輩、除病延命、因玆都鄙道俗多皆擧登、國內緇素誰不參詣、

堂塔

〔紀伊續風土記 三十三 那賀郡〕粉河寺 ○中略

粉河寺 補陀洛山成就院 境內二町四方山林十二町四方 禁殺生 日光御門主御支配、江州比叡山延曆寺末、

本堂 十五間十四間 額は無量光殿といふ、額字正二位前亞相公親筆、 本尊千手觀世音 六角堂 本堂の南にあり、西國三十三所觀音を安置し、西國順禮納札所とす、 鐘樓 一丈六尺一丈三尺 六角堂の北にあり 御位牌堂 四間四面 本堂の西にあり○中略 龍所 六間二間半 中門の傍にあり 中門 五間三間 丈六堂の傍にあり、四天王を安置す、額字風猛山とあり、正二位前亞相公親筆、○中略 大門 六間半四間 左右に金剛力士を安置す ○中略 御池坊 淨岸院 華山法皇、西國御巡禮の時、仙驛をこゝに駐め給ひ、後しば〳〵臨幸あり、因りて勅して寺號御池坊と賜ふといふ、卽當山四所靈地の一、出現地是なり、○中略 十禪律院 當山四所靈地の一、寶鐸地卽此地なり、

〔粉河寺舊記〕五往昔燒失再興之覺
寳龜元戌年十月八日、孔子古一丈四方之草堂を造、翌亥春、河内國佐大夫長者等合力而小堂を造立、其後船主六角之龕室を造り安置す、其砌澀田村之寡婦太刀女、此堂を伽藍に改造而より、百六十六年を經て、永平五年八月十三日に炎上す、時之別當永祐、氏長者左衞門守氏宗等力を合再興、後五百三十二年を經て、應永元亥年二月廿八日、本堂、禮堂、開帳堂、六所社、中門、大門、一時ニ灰燼之處、同年十一月に、小倉之庄津田監物の後室、本堂を造營せり、奉行吉田左衞門尉、添奉行寺内之蓮上院覺舜也、此堂、百六年之月日を經て、天正十三酉年三月末廿三日、堂社佛閣悉回祿ス、但白山社前山辨天社殘ル、當國主大和大納言季長卿ノ家臣藤堂佐渡守高虎、粉河寺之城ニ住居し、國を謹ス、殊ニ觀音歸依ニより、假本堂并拜殿、童男堂を建立アリ、神輿をも被爲寄進、總而六月十八日之會ニ、隨兵役被勤、祭禮御取立、其後、陣貝一口、客殿一宇、まくり、給等御寄進有之處、此假堂、三十二年後、元和二辰年十月、金堂一宇燒失之後、十一年目寛永二丑年九月、御池坊天英法印願主として、寺僧俗家町在中之合力を以建立ス、此堂、又九十九年過て、正德三巳年三月九日燒失す、夫より又數多之他力を以享保五年ニ再建ス、
右數度之從炎燒、往古よりの記錄、年々之收納書本紙、寳物什物之類、數多燒失シ、漸元和年中改寫之扣書計、依之前後不順し、或ハ半燒之古書、又ハ虫入之本紙など、殘少ニ而難見分、然ども本坊堂并御池坊ニ殘傳シ什物、左之通、〇中略
一中古、當山領粉川勢、喧嘩合戰陣之覺、〇中略
寛正元辰年九月十九日、當山江根來勢押寄炎上ス、〇中略
翌巳年五月、根來寺へ押寄、此時、守護代畳後殿、木澤殿、神保殿、於根來寺打死ス、
應仁元亥年二月廿八日午ノ時、本堂巳下寺内炎上之時、寺家ノ執行坊御池見妙房與力衆之行明

寺領

坊、本堂へ飛入燒死、

〔粉河寺舊記 一〕太政官符　紀伊國司

應免除粉河寺所領鎌垣東西村四至內雜役等事

在那賀郡

四至（東限推尾水無川辨才天、南限南山峯、西限鳳社柴尾門川辨才天、北限横峯、）

右得彼寺去永延二年十月廿日解偁、謹案舊記、此地、白粉流水、時現神變之相、黃笠放光、屢示希有之瑞、點處而發願、結柴而構庵、未及人間之加功、顯紫磨金之尊像、以之稱粉河寺、以之號自然佛矣、于時大伴連公孔子古、奉爲公家、以去寶龜年中所奉造也、玄武山峙於後、靈嶽聳北闕之臺、靑龍河流於前、法水浪唱南無之聲、自爾以降、到今無懈怠、就中奉祈國王聖朝寶祚、獻上年中兩度御卷數、雖殊蒙宣旨、既爲御願修之庭、加以、斯寺千手千眼之光明、好照心懷之暮霧、三十三身之分容、亦現滿願之曉晴、三維北方、繞仙洞而爲鹿苑、一角南面有拜路、而住驚人、所謂鎌垣北而已、時代變改、附負臨時雜役、責凌三綱住僧弟子童子職掌人等、爰堂塔房舍從風破損、參拜貴賤競浪往還、修理造作飾護裝束、以件雜人令勤仕、代代國司免雜役租稅官物、永爲舊例、而郡司背其旨、差課雜役、付煩公事、愁在斯、望請官裁、因准傍例、給官符、在國免除四至之內臨時雜役、將停國郡之責、休寺家之愁、奉祈鎭護國家者、正三位行權中納言兼太皇大后宮職權大夫右衞門督源朝臣伊涉宣、依請者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

從五位上守左少辨藤原朝臣說敎（○說敎恐說孝誤）　正六位上右少史物部宿禰

正曆二年十一月廿八日

〔粉河寺舊記 一〕紀伊國平田庄、任故兵部卿親王令旨、粉河寺行人等、知行不可相違者、大塔若宮令旨如此、悉之、以狀、

延元元年十二月二日　右馬頭花押

〔永承三年高野御參詣記〕永承三年十月十一日□子、○此間有闕字廟、令參紀伊國金剛峯寺給、○中略、藤原頼通、十七日壬午、更驛騎令參粉河寺給、先著御休幕、本堂屋數十字、堂西作五間四面之板屋一字、便宜所所作立、供是一夜可留御之由、依有前定、兼致其用意、召御手水、令參佛前給、禮堂西二間懸列御簾、其內裝御座、南庇鋪疊二枚、爲上達部殿上座、先奉供御明五千燈、御導師召寺僧、布施絹五疋、次令行誦經、手作布百端、施僧作米三千石、召國司、次所司三綱賜祿、別當絹三疋、三綱各二疋、自餘各疋絹手作布等、

〔源平盛衰記三十九〕維盛出屋島參詣高野附粉川寺幷謁法然房事

權亮三位中將維盛ハ、○中略泣々高野ヘ參給フ、思召出事アリケレバ此次ニ粉川寺ヘゾ被參ケル、此寺ハ大伴小手ト云シ人、我朝ノ補陀落是也トテ、菴ヲ結ベル所也、去治承ノ比、小松殿熊野參詣ノ次ニ、彼寺ニ參給タリケルニ、書置給ヘル打札アリ、今一度父ノ手跡ヲ見給ハント思出給ケリ、彼札ヲ御覽ズレバ、落涙ニ墨消テ、文字ノ貌ハ見エネ共、重盛ト云字計ハ、彫テ墨ヲ入タレバ、有シナガラニ替ラネバ、泣々是ヲゾ見給ケル、手跡ハ、千代ノ形見也ト云置タルコトノハモ、ゲニ哀ニゾ思召、御堂ニ入、觀音ノ御前ニ念誦シテ御座ケルニ、僧一人來テ、共ニ念誦シテ有ケルガ、アヤシゲニ見奉テ、是ハイヅコヨリ御參ゾト問、京ノ方ヨリト答ヘ給ヘバ、法然上人ノ入給ヘルヲ聞召テ御參リカト云、三位中將ハ、其事兼テ不知、何事ニ入寺シ給ヘルゾト返問給ヘバ、此間、念佛法門ノ談議也ト申テ、細カニ問答シテ立ヌ、中將ハ○中略夜ニ入テ、重景ヲ御使ニテ、法然上人ヘ申サレケルハ、維盛、高野參詣之志有テ、屋島ヲ忍出テ、是マデ罷傳テ侍ルガ、折節可然事ト存候、出離ノ法門、一句承ラバヤト仰ラレケリ、上人哀ニオボシテ、聽テ三位中將ヲ奉請入、見參シ給テイカニヤイカニヤ難有コソ思ヒ奉レ、都ヲ出給テ後、人々此彼ニテ亡給フト承ルニ付テハ、御身如何成給ヌラント、心苦ク思奉ルニ、奉入再見參御事、哀ニ悅入侍リ、惜モサシモノ世ノ亂ノ中ニ、遙々高野

參詣ノ御志、目出クモ思召立ケル御事哉トテ泣給フ、

〔玉葉和歌集釋敎十九〕花衣かさゝぎ山に色かへてもみちのほらに月をながめよ

此歌は、素意法師、いまだ出家し侍らざりける時、粉河の觀音にまうで、發心して、やがてこもり侍て、いづれの所にてか出家し、いづくにてか佛法修行して、往生をとげ侍べきと、祈り申けるに、內陣より、かくさだめし給けるとなん、

〔高野參詣日記〕粉川の施音寺にまうで、(〇四三條實隆)おがみ侍りければ、堂のさまなど、莊嚴巍々として、殊勝きはまりなくなむ、本尊は、十一面の千手觀音となむ、額の文字施音の二字は、常の文字にて、寺といふ一字なん、古文に侍り、誰人の筆にか侍る、すぐれたる見物に侍り、御前に念誦のほどおもひつけ侍りき、

紀三井寺

紀三井寺ハ、一ニ金剛寶寺ト稱ス、紀伊國名草郡名草山ニ在リ、僧爲光ノ創スル所ニシテ、西國三十三所觀音ノ一タリ、此寺、堂前ヨリ和歌浦ヲ一望ニ瞰下スルヲ得テ、頗ル風景ヲ以テ名アリ、

〔書言字考節用集二乾坤〕紀三井寺(キミイデラ)(紀州名草郡、號二金剛寶堂一、詳二壒囊抄一)

〔紀伊續風土記十五名草郡〕金剛寶寺(紀三井寺)(中略)

當寺を紀三井寺と稱するは通稱にして、實は金剛寶寺なり、(拾芥抄、三十三所の靈場を記して紀三井寺と書し、又別に金剛寶寺等身十一面爲光上人とあるは誤なり、今の印本、爲光誤て爲九と書す、)或說に、紀三井寺は吉備寺ならんといへり、按するに、此說理に近し、吉備は古此邊の總名と思はるれば、吉備紀三語通ひて、美の餘韻伊音あるを以て、井字を添

創建　堂塔　本尊

へて、紀三井寺と書來れるならん、三井は三つの清泉（三清泉下に出づ）より出たる名にして、紀の字を加ふるに、園城寺に分つ爲なりといふは、疑ふらくは、後世浮居氏附會の說に出るならん、

〔紀伊續風土記名草郡十五〕金剛寶寺（紀三井寺）　境內（東西八町南北十二町）　禁殺生

眞言宗古義京勸修寺末

小脇壇聖觀音　脇壇藥師如來　左梵天　本堂（方九間）　中央十一面觀音　右帝釋天　脇壇阿彌陀如來　小脇壇千手觀音　如意輪觀音堂（本尊綱像）　六角堂（四國巡禮納札所）　弘法大師堂　念佛堂　開山堂（本尊爲光上人自作）　名寶塔（本尊五智如來）　釣鐘堂　經塚　奥院辨財天社　三部權現社（方三尺）　樓門（左右金剛力士〇中略）

當寺緣起の大略に曰、昔稱德天皇の御宇、唐朝沙門爲光上人（俗姓李氏、唐皇之裔也）、日本に渡り、勝地を求めて一の伽藍を建立し、十一面觀世音（上人の持尊にして、一刀三禮自作の像なり）を安置せんと欲す、東漂西泊し、遍く名勝を跋涉し、偶、此名草山麓に來るに、其形勝求むる所に適ふを以て、低徊顧望するに、不思議なるかな、澗松の側（今袋谷、燈明松是也）、光明を放ちて、千手千眼觀世音尊像、儼然として現じ給へば、上人歡喜踊躍し、乃伽藍を創建して尊像を安置し、併せて自作の觀音を本尊とす、實に寶龜元年なり（今の本尊は、上人の持尊にして、上人感得の尊像は祕佛にして、本尊の後に安置す、御長七尺といひ傳ふ、）二尊の靈驗日に新にして、渇仰の貴賤雲の如く聚まり、終に後世三十三所觀音第二の靈場となりぬ、かくて上人、國土安穩佛法興隆のため、自大般若經六百卷を書寫して前に埋む（今の經塚是なり、或曰、塔の地なり）、其書寫まさに畢らんとする時、容貌端麗の少女忽然として現す、上人其來由を問ふに、奮然として清淨水に入化して龍となり、上人に語りて曰、吾此山に登り、燈を觀世音に挑ぐる事殆千歲、猶盡未來際退轉なかるべしといふ、今に至りて七月九日夜、千手谷の松間（本堂の山內にあり長五町許）龍燈見はるといひ傳ふ、（按ずるに、丹後國天橋立の文珠堂の海邊、筑前國志摩郡海上、皆龍燈出づといふ、其餘諸國に類多し、當寺傳へいふも同じ類なり、〇下略）

子院末寺

〔紀伊國名所圖繪二編五 海士郡〕紀三井山護國院金剛寶寺名草山の半腹にあり、古義眞言宗、本尊十一面觀世音、開山爲光上人、一刀三禮の作、西國順拜第二番の札所なり、秘龕千手觀世音爲光上人、千手谷において、感得の靈像なり、くはしくは本文にいだす、開山堂本堂の上にあり、開山爲光上人自作の木像なり、二重塔開山堂の南にあり、本尊五智如來、長一尺五寸、作不知、鎭守祠白山妙理權現、熊野三所權現、金剛藏王權現、二重塔に隣る、經塚同所にあり、爲光上人大般若六百卷、書寫して納め玉ふ所也、本文にくわしくみえたり、

〔諸州めぐり四 紀伊〕紀三井寺、紫脊山の東にあり、金剛峯寺と號す、是西國三十三所觀音の第二番なり、觀音堂は山のかたはらのたかき所にあり、大なる堂也、其下に高き石の階五段あり、堂前より臨めば、和歌山弱浦眼下に見えて、海山のけしきかすみわたり、鹽竈の煙たちのぼりて、風にたなびけり、

〔紀伊續風土記十五 名草郡〕金剛寶寺〇紀三井寺 中略

子院　普門院樓門の側の北にあり　瀧之坊普門院の東にあり　寶藏院瀧之坊の東にあり　海龍院寶藏院の東にあり　寶積院今廢す　右石階の北側にあり　平等院樓門の側の南にあり　松樹院平等院の東にあり　寶性院松樹院の東にあり　多門院今廢す　右石階の南側にあり〇中略

末寺八箇寺　穀屋坊樓門外にあり　福壽院三葛村にあり　金藏院同上　青蓮院在田郡天滿村にあり　能仁寺在田郡名島村にあり　神宮寺日高郡森村にあり　龍源寺日高郡印南原村にあり　高山寺日高郡平川村にあり

穀谷坊　眞言宗古義本坊護國院末樓門外にあり、比丘尼寺なり、昔は觀音堂の傍にあり、後世護國院を觀音堂の側に創建して、穀屋を門外に移す、穀屋古き坊なるを以て、金剛寺文安大永の勸進帳、及び天正十三年四月、羽柴美濃守の禁制書、金剛寶寺牛王寶印等、皆此坊に存す、

名稱 所在 創建 寺領

藥勝寺

藥勝寺ハ、天平年中、僧威光、國人紀伊秀貞ト共ニ力ヲ合セテ創建スル所ナリ、天正十三年、豐臣秀吉ノ爲ニ燒カレ、寺領モ亦沒收セラレテ廢寺ト爲ル、舊地ハ、紀伊國名草郡藥勝寺村ニ在リ、

〔紀伊續風土記 十八名草郡〕多田鄕　藥勝寺村

廢藥勝寺

紀伊國治安元年十月、解狀の文の大略にいふ、藥勝寺は、天平年中、沙門威光上人、紀伊秀貞相、ともに力を合せて、國家鎭護の爲に創立する古刹なり、〇中略其後應德三年、仁和寺の末となる、仁和寺諸堂記云、轉輪院本ニ爲鳥羽院母后ニ被造立、白川院御沙汰被造之、當時御室御進上也、當院無ニ莊園、一向以ニ諸國封戸ヲ被充ニ寺用ニ之間、上古者無ニ懈怠、及ニ于末代、諸國司皆對捍之故、全分無ニ寺用ニ顚倒畢、御佛事者、於ニ法金剛院南御堂ニ被ㇾ行ㇾ之、とあり、此諸國封戸の中斷、正應元年、金持廣親といふ者、勢田鄕半分地頭職となりて、寺領相論の事あり、永仁七年文書其後天正十三年、豐太閤南征に堂宇燒亡し、寺領も沒收せられて、事跡悉廢絕せり、今村居の地は、卽當時の廢跡なるべし、

〔紀伊續風土記 附錄四古文書〕多田鄕　藥勝寺村藥王寺藏

太政官符　紀伊國

應ㇾ免ㇾ除紀伊國名草郡藥勝寺所領田貳拾町租稅官物幷臨時雜役寄人貳拾人等事、在名草三上野院、

本渡村拾貳町陸段參佰肆拾捌步

三宅五圖二里拾坪壹町　拾參坪柒段拾柒步

拾肆坪玖段參佰肆拾步　拾五坪玖段參佰步

拾陸坪壹町　拾九坪壹町

貳拾坪肆段貳百貳拾步　貳拾玖坪壹町

參拾坪壹町　參拾壹坪捌段

參拾貳坪伍段

六圖二里拾參坪捌段貳佰拾步

拾六坪捌段　貳拾參坪捌段漆拾貳步

貳拾四坪漆段佰肆拾肆步

岡田村貳町陸段貳拾貳步

三宅五圖里詩步佰拾捌坪〇里詩以下七字、大下所載治曆三年文書、作壹里漆坪伍段拾捌步九字、　拾漆坪捌段佰肆拾肆步

拾捌坪壹町　六圖里壹坪壹段貳佰捌拾步

貳坪參佰玖拾步

多太參町

旦來四圖三里漆坪壹町　捌坪壹町　玖坪壹町

勢田村貳町玖段參佰伍拾貳步

旦來四圖四里四坪捌段　伍坪玖段

拾壹坪陸段　拾貳坪陸段參佰拾貳步

右得彼國去治安元年十月十五日解狀偁、彼寺去九月十日解狀偁、件寺天平年中、沙門威光上人、紀伊秀貞相共合力、爲鎭護國家所創立也、自爾以來、至于今矣、爰傳天台風跡、始修法華三昧、卽施入地利、宛用於佛聖燈油幷三昧供料、其來尙久矣、聖人入滅之後、漸及末代、連水旱爲患、廢之災、或妨國司、有收公之煩、抑此寺靈驗第一之砌、佛法興隆之場也、緇素男女、莫不時而歸、三昧唄音聰十方世界、六時行鎭奉、祈天下安穩、无定施供勤、可闕絕、仍繼勵寺家之衆力、試欲開荒廢之飯田、公家

寺家共利、其從矣、望請國裁、被言上此由於官底、永不輸、免除臨時雜役幷寄人等、奉祈聖皇之寶祚者、今加覆審、所申有其實、仍言上如件、望請官裁、任解狀、給官符、永免除租稅官物臨時雜役寄人等、爲代々御願定額寺、令祈聖朝者、從三位行權中納言兼右衞門督藤原實成宣、依請者、國宜承知、依宜行之、符到奉行、

左少辨藤原朝臣在判　　　　右少史丹生眞人在判

治安三年十一月廿三日

太政官符紀伊國司

應免除任去治安三年官符旨藥勝寺所領田貳拾町租稅官物臨時雜役幷寺廻四至內寄人貳拾人事、

右名草郡三上院

本渡村拾貳町陸段參佰肆拾捌步

三宅五圖二里拾坪壹町字幾田

拾參坪漆段漆拾步字永走

拾肆坪玖段參百肆拾步日佐中

拾五坪玖段參百步九口田　　拾六坪壹町道見

拾玖坪壹町中津作田

貳拾坪肆段貳佰貳拾步上津作田

貳拾玖坪壹町橋木力作　　參拾坪壹町畠田圖作

參拾壹坪捌段下勝手畑　　參拾貳坪伍段上勝田圖作

六圖貳里拾參坪捌段貳百捌拾步

拾陸坪捌段鶴長　　拾參坪玖段貳百肆拾步
貳拾坪四漆段佰肆拾肆步元流本
貳拾捌坪漆拾貳步恒口牛
岡田村貳町陸段貳拾貳步
三宅五圖壹里漆坪伍段拾捌步內山部
拾捌坪壹町外山部　　拾漆坪捌段佰肆拾肆步寛埼
六圖里壹坪壹段貳佰捌拾步始輪
貳坪參佰玖拾步知輪
多太村旦來四圖參里漆坪壹町喪本
拾玖坪壹町毛呂本　　同北壹町壽源
勢田村貳町玖段參佰伍拾貳步
旦來四圖四里四坪捌段玉井田
伍坪玖段渠　　拾坪陸段十一
拾壹坪陸段參佰拾貳步岡邊

右得彼寺去年十月一日解狀、偁、當寺既爲御願、可勤仕法華三昧之由、前大貳成章卿爲當國守之時、以去治安元年十月十五日言上、國解隨則、以同三年十一月廿三日、給供田廿町之官省符於在國、其後偏奉祈天長地久之御願、漸及五十年、而件官省、慮外紛失、因茲永承二年八月十日言上、寺解隨、又同十二月十五日、重給官省符已畢、其時守定家朝臣、次守貞職朝臣、次守敎成朝臣、次守彖綱朝臣、次守範基朝臣、次守重經朝臣等、任官符旨免除早畢、近當時守師俊朝臣、依先例免判先例、而今俄准寛德以後新立莊薗、皆悉收公、御願三昧、幷一乘八講始闕怠、抑定源情按事情、御願是往

代祈禱之靈庭、國司者又定家恩恒之吏途也、須任本官符事除也、然而國宰已悅收公之計、不尋前後、尤似無朝威、就中前々司敎成朝臣、去天喜二年三月、蒙官符、令停止、寬德以後、新立莊時、至此寺領田者、任本官符免除亦畢、今何捨古代之例、收公尤不安、先跡已存、盍無裁許哉、重非官裁何時繼佛法壽命、望請天恩、任本官省符旨、被件收公者、萬代不闕、奉祈鎭護國家者、正三位行權中納言兼皇后宮大夫源朝臣隆俊宣、依請者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

從四位下行右中辨藤原朝臣 在判

正六位上行右少史中原朝臣 在判

治曆三年二月六日

奉行

治曆口年三月

守源朝臣 在判　　掾紀

介伴朝臣

權介秦宿禰

太政官牒藥勝寺

應如舊領知紀伊國誉名草郡三上院田畠寄人等事

寺敷地方伍町

水田貳拾町

畠肆町伍段

寄人貳拾人

右太政官今日下彼國符偁、記錄莊園券契所、今年三月廿九日勘奏偁、國解狀云々、免田二十餘町收

□所在也、勘本寺所進文書、件寺天平年中、沙門威光、紀秀貞、相共合力、爲鎭護國家所創立也、其後依治安三年國解狀、領田廿町程稅官物幷人臨時雜役可免除之由、則官符文畢、厥後又永承二年、治暦三年同以賜官符文畢者、度々官符明白也、可被裁許歟者、從二位行權中納言兼治部卿皇太后宮大夫源朝臣隆俊宣、奉勅、件莊宜令免除者、寺宜承知、牒到准狀、故牒、

延久三年六月廿二日

修理大官城判官正五位下行主計頭兼右大史　守小槻宿禰在判

右少辨正五位下兼行右衞門權佐東宮學士大江朝臣在判

名所所在
創建堂塔

總持寺

總持寺ハ、紀伊國名草郡梶取村ニ在リ、寶德二年、僧光雲ノ開基スル所ナリ、天正十三年、兵燹ニ罹リシガ、羽柴秀長之ヲ再興シテ舊觀ニ復セリ、淨土宗西山派ニ屬ス、

〔和漢三才圖會紀伊七十六〕總持寺　在海部郡廿取村　淨土　淨土談林所

〔紀伊續風土記名草郡七〕梶取村

總持寺　受陽山知足院　淨土宗西山派、檀林七本寺之一、境內周三町二十間門前四間百間　禁殺生、

本堂方十三間　釋迦傳法堂方九間　御靈屋　開山堂　講堂　骨堂　水行堂　釣鐘堂　經藏　鎭守社　書院　玄關　方丈　庫裏　衆頭寮　所化寮　浴室

村中にあり、寶德二年、明秀光雲上人の開基なり上人は播州赤松入道心の子息美濃守範資第二子なり、或傳、圓心三男律師則祐猶子義則末子とぞ、明秀著作の書數種あり、祕決集鈔、愚要鈔三卷、大經鈔、選擇集鈔三卷、名目鈔三卷、後奈良院、正親町院兩帝の勅願寺となる天文十年、永祿十一年の綸旨あり、天正十三年、右の綸旨燒失す、今寫をつたへたり、淨土宗西山派檀林七本寺の一なり、元和

名稱
所在
創建

元年、當寺十九世長盛上人、二條城に於て、東照宮に謁す、京都東山禪林寺、西山光明寺、及當寺三箇寺へ、九箇條御條目御朱印を賜ふ、寛文年中、禪林寺光明寺を西山派の總本山に命せられしより、自然と當寺も兩寺の末寺となれり、紀泉兩國の中に末寺八十八箇寺あり、天正の兵火に諸堂烏有となり、其後羽柴秀長朝臣諸堂を再興して、舊觀に復すといふ、桑山法印三條の法制を定め、淺野氏寺領八石を寄附す、南龍公〇德川頼宣寺主二十二世南楚上人を歸依し給ひ、壓城中に召て佛理を問はせられ、廩米十石を加へ賜ふ、相傳、明秀の來るとき、櫻木を杖とす、明秀杖を地に卓て曰、吾若有縁生三枝葉、過數日生萌芽、後人名けて杖櫻といふ、其櫻後世枯る、遺跡堂前にあり、又傳いふ、當寺の地は、古城の跡にて、興三大夫興左衛門といふ二人の者、此に住すといふ、什物に、後奈良院御宸筆の色紙、圓光大師親筆の一枚起請、圓光大師肉附舍利、惠心阿彌陀像、慶長三年、桑山法印寄附添狀あり、祭山筆十六羅漢十六幅等あり、近年一位老公親筆の廣開淨土門といふ五大字の額を賜ふ、

道成寺

道成寺ハ、紀伊國日高郡土生村ニ在リ、文武天皇大寶年中ノ創建ト稱ス、始メ法相宗ニ屬セシガ、後天台宗ニ改ム、此寺ハ僧安珍ノ物語ニ依リテ其名世ニ高シ、

〔書言字考節用集 一乾坤〕道成寺(ダウジヤウジ)紀州日高郡矢田莊、文武帝勅願所、世云妖怪事、見釋書安珍譜、

〔南紀名勝略志 日高郡〕天音山道成寺

矢田庄土生村ノ中ニ有、古へハ法相宗タル由、今ハ天台宗也、本尊十一面觀音、並日光、月光、四天王ノ木像、各聖德太子作之由也、當寺ハ文武帝大寶年中、紀大臣道成峯行殿御艸創ト云リ、然ドモ不慥、緣起二卷有、畫ハ土佐將監筆之由、書ハ後小松院ノ宸翰也ト云ヘリ、或曰徹書記之由、此說可然之體、勅筆ト不見、右之緣起ヲ將軍義照卿、由良興國寺來ル時被見シ、奧書ヲ加判形シ給フト也、載

堂塔

天台宗海部郡和歌浦雲蓋院末

〔紀伊續風土記 六十四 日高郡〕道成寺 天音山千手院 境内 東西二町、南北一町半、 禁殺生、

本堂 表行十間半餘、裏行九間半、 木像千手觀音 長二尺一寸、脇士日光月光 長一尺八寸 釋迦堂　護摩堂　常念佛堂　十王堂　三重塔

樓門 金剛力士あり

雜載

元亨釋書、

〔法華驗記 下〕第百廿九紀伊國牟婁郡惡女

有二沙門、一人年若、其形端正、一人年老、共詣熊野、至牟婁郡、宿路邊宅、其宅主寡婦出、兩三女從者、宿居二僧、致志勞養、爰家女夜半至若僧邊、覆衣並語、僧言、我家從昔不宿他人、今夜借宿、非無所由、從見始時、有交臥之志、仍所令宿也、爲遂其本意所進來也、僧大驚怖、起居語女言、日來精進、出立遙途、參向權現寶前、如何有此惡事哉、更不承引、女大恨怨、通夜抱僧擾亂戲咲、僧以種々詞語誘、參詣熊野、只兩三日、獻燈明御幣、還向之次、可隨君情、作約束了、僅遁此事、參詣熊野、女人念僧還向日時、致種々儲相待、僧不來過行、女待煩僧、出路邊尋見往還人、有從熊野出僧、女問僧曰、著其色衣、若老二僧來否、僧云、其二僧早還向、既經兩三日、女聞此事、打手大瞋、還家入隔舍、籠居無音、卽成五尋大毒蛇身、追此僧行、時人見此蛇、生大怖畏、告二僧言、有希有事、五尋計大蛇過山野走來、二僧聞了、定知此女成蛇追我、卽早馳去、到道成寺、事由啓寺中、欲遁蛇害、諸僧集會、議計此事、取大鐘、件僧籠居鐘內、令閉堂門、時大蛇追來道成寺、圍堂一兩度、則到有僧戶、以尾叩扉、數百遍叩、破扉戶、蛇入堂內、圍卷大鐘、以尾叩龍頭、兩三時計、諸僧驚怖、開四面戶、集見之恐歎、毒蛇從兩眼出血淚、出堂、擧頸動舌、指本方走去、諸僧見大鐘爲蛇毒所燒、炎火熾燃、敢不可近、卽汲水浸大鐘、冷炎熱、見僧皆悉燒盡、骸骨不殘、纔有灰塵矣、經數日之時、一臈老僧夢、前大蛇直來白老僧言、我是籠居鐘中僧也、遂爲惡女被領、成其夫、感弊惡身、今思拔苦、我力不及、我存生時、雖持妙法、薰修年淺、未及勝利、決定業所牽、遇此惡緣、今蒙聖人恩、欲離此苦、殊發無緣大慈悲心、淸淨書寫法華經如來壽量品、爲我等二蛇拔苦、非妙法力、爭得拔苦哉、就中爲彼惡

女拔苦、當修此善、蛇宜此語、卽以還去、聖人夢覺、卽發道心、觀生死苦、手自書寫如來壽量品、捨衣鉢蓄、設施僧之餐、屈請僧侶、修一日無差大會、爲二蛇拔苦、供養既了、其夜聖人夢、一僧一女、面貌含喜、氣色安穩、來道成寺、一心頂禮三寳及老僧白言、依淸淨善、我等二人、遠離邪道、趣向善趣、女生忉利天、僧昇兜率天、作是語了、各々相分、向虛空而去、○又見今昔物語

〔元亨釋書 九 感進〕釋安珍、居鞍馬寺、與一比丘詣熊野山、至牟婁郡、宿村舍、舍主寡婦也、出兩三婢、餉二比丘、珍有姿貌、中夜主婦潛至珍所、通心緖、初二比丘、怪慰勞之密、至此始覺、珍曰、我是緇服、豈閨閤之徒乎、寡居餘情、溢于非類、又可恥也、婦人大恨、傍珍不離、珍不得已、軟諭曰、我自遠地赴熊野、宿志畜來久、神甚嫌淫穢、者回不可、歸途必來、婦主姑待之、女喜而歸、曉更珍早前路著神祠、卽便反、經婦家而不入、急奔過、主婦數歸程、儲供膳、傍門伺路、過期不至、適一僧過、主婦問曰、二比丘某物色、熊野及途、有相見乎、對曰、如婦言、二比丘我親見而其沙門去此、恐二日前也耳、婦聞大怨瞋、乃入室不出、經宿爲蛇、長二丈餘、出宅赴途、奔馳而過、路人噪亡相語曰、如此大蛇、何爲取路、人人相傳、至珍所、珍思女化、急馳入一寺、寺名道成、告衆乞救、衆僧議下大鐘、置一堂、納珍鐘裏、堅閉堂戶、已而大蛇入寺、血目銜口、甚可怖畏、衆僧走散、蛇赴堂戶、不開、便以尾擊戶、聲如鐵石、戶漸碎、蛇入堂、應時四戶皆開、蛇乃蟠圍鐘、擧尾敲鐘、

〔道成寺考〕道成寺鐘銘　鐘今在京都妙滿寺

聞鐘聲　智惠長　菩提生　煩惱輕　離地獄　出火坑　願成佛　度衆生　天長地久　御願圓滿　聖明齊日月　叡算等乾坤　八方歌有道之君　四海樂無爲之化　紀伊州日高郡矢田庄
文武天皇勅願道成寺冶鑄鐘　勸進比丘瑞光　別當法眼定秀　檀那源萬壽丸　幷吉田源賴秀
合力諸檀男女　大工山田道願　小工大夫守長
正平十四年己亥三月十一日

何の年、いかなる故にて、此寺にうつりしといふこと詳ならず、

名所　所在　堂塔

報恩寺

報恩寺ハ、紀伊國名草郡和歌山吹上ニ在リ、寛文十年、徳川頼宣ノ子光貞、其母瑤林院ノ爲ニ建立スル所ニシテ、僧日順ヲ以テ開山ト爲ス、日蓮宗不受不施派ノ一本寺タリ、

〔和漢三才圖會　七十六　紀伊〕報恩寺　在岡山　同〇法華　寺領二百石　國守菩提所

〔紀伊續風土記　五十五　若山〕吹上

報恩寺　白雲山　境内　東西百三十二間餘、南北百八十一間餘、　法華宗一致派受不施一本寺

瑤林夫人靈牌堂　表行十三間半、奥行八間半、卽當寺の本堂とし本尊井に靈飾像を安置す、〇中略　三十番神堂　拜所鳥居あり　右天眞夫人延寶五年建立、本堂の西にあり、

鐘樓　書院　方丈　庫裏

吹上岡山西麓にあり、寛文六丙午歳、瑤林尊夫人南龍公夫人加藤清正朝臣女掩粧ありしかば、遺骨を此地に葬り奉る、同十年、清溪公〇徳川光貞台計を得給ひて、新に一寺創建ありて、太夫人の菩提所とせらる、白雲山報恩寺と號し、法華特立の一本寺たり、此地舊要行寺あり、其地によりて報恩寺を建立せられ、要行寺は廢絶す、寺領二百五十石、山林一所を寄せらる、開祖を權大僧都日順上人といふ、

長保寺

長保寺ハ、紀伊國海部郡上村ニ在リ、長保年中、一條天皇ノ勅願ニ由リテ建立スル所ナリ、後世衰頽セシヲ、寛文六年、徳川頼宣新ニ佛殿ヲ建立シテヨリ、復タ隆盛トナレリ、天台宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會 七十六 紀伊〕慶德山長保寺　在名草郡加茂谷濱中村、本尊釋迦如來　天台　寺領二百石

一條帝勅願、長保年中建立、初大伽藍、今纔有六院、後又爲大守松平頼宣卿菩提所、

〔紀伊續風土記 二十五 海部郡〕濱中莊　上村

長保寺 慶德山　境内周三十町許　禁殺生　天台宗輪王寺宮末

本堂 方七間 本尊釋迦如來　多寶塔 方二間半　護摩堂 方二間半　食堂 方四間　阿彌陀堂 方三間　鐘樓堂　大門 金剛力士アリ　公家兆域 境内ニアリ　本坊　陽照院　子院　五箇寺　專光院　最勝院　本行院　福藏院　地藏院

傳へ云、當寺は一條院の勅願所、長保年中の草創にして、慈覺大師の門徒の開基なり、應永年中に至りて眞言に改宗し、七堂伽藍、子院十二箇寺あり、其後衰亂の世、七箇寺廢絶し、普賢院、明應院、吉祥院、西福院、西南院、明王院、池之坊なり、五箇寺は存すといへども、衰微に至り、綸旨院宣の類も、次第に紛失して、一も遺れるものなしといふ、寛文六年、南龍公 ○徳川頼宣 此地を經歷し給ひて、數百年の久しきを歷て、兵燹狼藉の患を免れ、七堂古のまゝに傳はりしを感じ給ひ、且其地山巒環抱して外幽にして內敞に、萬世兆域の地となすべきを察し給ひ、則佛殿一字を建立し、眞言を改て天台宗に復せしめ給ふ、寛文十一年、公薨じ玉へる時御遺令ありて、此地に葬り奉り、佛殿を以て御位牌殿とし、新に陽照院を造營して院室とし、寺領五百石を寄附し給ふ、夫より以來此地を以て、公家の廟所と定め給ひ、七堂は舊に仍て修繕を加へられ、淨域の體悉備はれり、大門の額、慶德山長保寺と書し、裏に應永四年六月一日、妙法院宮御筆とあり、然らば長保年間の堂舍破壞せしを以て、應永年間、諸堂共に再建せしなり、今の堂は卽應永再建の堂舍にして、今時の制に較れば、棟宇矮く彫刻の飾なく、制度樸質にして古色餘あり、實に靈場といふべし、什物は法華經の寄合書、其餘佛像佛具等寄附し給

ふ物、あげて數へがたし、これより前慶長六年、淺野家より釋迦堂へ五石の寄附あり、今猶これに襲用ひらる、近年一位老公親筆の、世雄殿といふ三字の額を賜ふ、

興國寺

名稱所在

興國寺ハ、初メ西方寺ト云フ、紀伊國海部郡門前村ニ在リ、安貞元年、葛山景倫、其主源實朝及ビ北條政子母子ノ爲ニ建立スル所ニシテ、普化宗ノ開祖覺心ヲ以テ開山ト爲ス、後今名ニ改ム、天正十三年、兵燹ニ罹リシガ、慶長年中、淺野幸長、僧天叔ニ命ジテ、之ヲ再興セシム今臨濟宗ニ屬シ、妙心寺ニ隷セリ、

〔和漢三才圖會七十六紀伊〕興國寺　在由良　初臨濟派、今妙心寺派、　寺領十三石　開山法燈禪師　當寺虚無僧之本寺

〔普化宗雜記上〕日本國中宗門本寺連名寺號國所附

即是虚無僧ノ本寺トシテ、其所々ニ手寄リテ、本則通印申請クベキ也、

紀州由來　西法寺　開山法燈國師　後深草天皇御宇建長六年建立〇中略　右十三ケ寺、斷詮派、

創建堂塔

〔紀伊續風土記二十六海部郡〕由良莊　門前村

興國寺　鷲峯山　境内山林方八町　禁殺生　禪宗臨濟派京妙心寺末

本堂　方五間　開山堂　開山昭堂　庫裏　十間八間　方丈　九間半、六間半、額降寵、清周王篩筆　鐘樓　地藏堂　寶藏

靈牌殿　廻廊　五十四間　侍衣寮　修造屋　浴室　聯光菴　隨應菴　靈照菴　呼猿亭　居間

鎭守二社　北野天神八幡大龍王　鎭守辨天四社　土藏二箇所　部屋三箇所　小息所　土橋　中門　額鷲峯山宋竹友筆

大門　額南第一禪林明季潭宗泐禪師筆

村の乾にあり、願性上人の建立、法燈國師覺心の開山なり、始は西方寺といふ、後に興國寺と改む、永正年間の緣起に曰、夫紀州海部由良莊鷲峯山西方寺草創由來之事、抑當寺本願檀那願性上人者、元是關東武士、藤原景倫葛山五郎也、右丞相將軍實朝公之寓直近習、而恰如影隨形矣、然實朝一夕夢、吾前生、宋溫州雁蕩山有夙因、以其功力爲日本將軍、覺後有詠歌、世もしらじ我もえしらずから國のいはくら山にたきゞこりしを、加旃建仁開山葉上僧正夢、實朝公者、玄奘三藏再誕也云々、所以身雖在靑油幕、心常染墨汁衣、實朝於宋朝之前因不唯一焉、然以景倫被差遣宋國、彼雁蕩山寫繪圖、來於日本、如圖可建寺、仍景倫奉其命、下鎭西博多津、待宋船順風處、從關東飛脚下、告去正月廿七日(承久元年)將軍御夭薨之訃、景倫哀歎、卽時剃髮染衣、法名稱願性、不再歸鎌倉、徑登高野、奉弔主君實朝將軍御菩提、誠以忠心所致也、實朝御母儀尼將軍(賴朝之御內從二位政子)聞召此旨曰、近習七百人中忠義無若於景倫者、然間爲高野居住資緣、下賜由良莊地頭職、承久三年辛巳、入部自其七年後、安貞元年丁亥、建立當寺、(號西方寺)爲右丞相兼征夷將軍實朝公幷二品眞如大禪定尼兩靈御菩提、當莊地頭職二割分半分充、寄進金剛三昧院與西方寺、兼願性金剛三昧院居住之砌、鹿跡二郎入道西入、於將軍葬所取御頭骨持來、付與願性、願性就當寺思遠卵塔西、建實朝石塔、塔火輪中安御骨半分、師以其半骨欲納于實朝前生之國云々、覺心在高野、與願性成父子契約、依其資助、建長元年、師渡宋云々、師宋淳祐十一年掛塔、於明州育王山、(育王廣利)寺在平坦山中、爰有塔、是阿育王八萬四千基之其一也、(故曰育王山)傳曰定海網人奉上此塔、又說、從寺四五町外現大石上、放舍利光明、自諸國每年二三月、人多參詣、奇瑞太多矣、大權菩薩爲守護神、師於此山建一字堂、安日本將軍實朝遺骨於等身觀音像肚內、凡實朝前生之雁蕩山合被納遺骨、安措此山、未審師意如何、師止住此山三年矣云々、師五十二歲、正嘉二年戊午、通謁書於無門和尙、罷禪定院住持、遊由良鷲峯、有終老志、功德主願性拜請、以爲開山住持、而同心同力、新於精藍、而資嚴後鳥羽禪定法皇仙駕、專爲實朝公、眞如禪定尼、追修道場、(安貞元年丁亥、由良莊地頭願性、始從建立此)

西方寺、三十二年之間他宗也、往年因前書而改爲禪刹、拜請覺心長老、以爲開山住持、順性云、師戒珠無疵、道眼是明、是故道俗冒嶮遠近趨風云云、師未到日、鷲峯有妖鬼、從者三百有餘、作多般伎倆、令人怖、師至後授三歸五戒、妖邪自然息、彼妖鬼者、人王八十二代後鳥羽院崩御之後、墮魔道也、後鳥羽院之皇后者、修明門院也、然由良莊領家方此女院御領也、依是御代官之伊王左衛門能茂入道西蓮、與順性同心、而當寺爲後鳥羽法皇御菩提所、寄進領家之內膏腴地一町小四十步、而每月廿二日、奉致御弔、是故後鳥羽院尊靈栖此山者也、此後師之直弟之代領家方一圓、自修明門院寄進也云々、

昔は一本寺なり、天正十三年、豐太閤南征諸堂兵燹に罹り、緣起、舊記、寶物、諸堂の額興國禪寺額、勅賜法燈圓明國師額は後醍醐帝の宸翰、選佛額は後二條院の宸翰、降寛額は明宋景濂の書、其餘唐僧幷高僧等の筆多し、又西方寺の名に、明鑒上人の號けしなり、其ときの額に永平寺佛法上人道元の書なりと、法燈國師年譜に出たり、等悉く燒失す、寺域には行者虛無僧等庵を結び、境內を耕耨せしに、慶長中、淺野氏、若山龍源寺主天叔といふ僧に命じて、當寺を中興し、寺領十三石を寄附す、此より京都妙心寺末となる、本尊釋迦脇士四天、其外觀音、幷開山及順性の木像あり、○中略

天正以前門內子院十庵

思遠庵、大中庵、白龍庵、雲洞庵、三光庵、快甕庵、續燈庵、三庵は當時再建す、前に出たり、

天正以前門外子院二箇寺

護國寺里村　修善寺門前寺

又法燈宋より歸國のとき、法普居士、國佐居士、理正居士、宗恕居士といふ四人のものを隨へ歸る、此今の虛無僧の始なり、四人浴室に任せしより、今に虛無僧の居所を風呂地といふ、四人四派に分れ、諸國に虛無僧寺あり、舊は皆當寺末なり、兵火の後は離散せり、只今にても京都明暗寺は當寺末なり、又同寺の末に筑前に一朝軒、伊勢に普濟寺といふあり、明暗寺は國佐派といふ、風呂屋の跡を、今普化谷といふ、

○按ズルニ、此寺ノ事ハ、普化宗篇傳統條ヲ參看スベシ、

名稱 所在 堂塔

國分寺

淡路國國分寺ハ、三原郡國分村ニ在リ、僧行基ノ創建ト稱ス、後世廢、退轉セシヲ、寛文五年僧照運之ヲ再興セリ、初メ法相宗ニ屬セシガ、後眞言律宗ヲ兼學ス、

〔淡路常磐草 六〕國分寺 國分村にあり、眞言宗今南都招提寺末 是聖武天皇建る處なり、寺說曰、大永中、沙門俊泉何許人たる事を知らず、廻國納經してこゝに來り、國分寺を再興し、其後松帆浦にて水定に入て終るといふ、而後國分寺朽損久し、唯古大像と礎石とのみあり、正保の頃、僅に一院ありて僧快尊住す、大像は草堂にあり、寛文五年、僧照運、寺を建て住す、貞享元年、本堂を建立して古像を安置す、丈六釋迦の古像、行基作也、寺には彌勒、惠心作、比沙門、聖德太子作と云傳ふ、但し古像の佛工何れの作とは定め難かるべし、今の本堂は金堂の跡、寺は講堂の跡、大日堂は寶塔の址といふ、每年四月佛誕生會に士民多く聚る、

曆應三年、釋迦大像を修理す、像中に記あり曰、

淡州國分寺本尊釋迦像一體、敬白、曆應三年歲次庚辰三月□辰手斧始、同四月廿七日庚戌本開眼、四年歲次辛巳六月廿五日辛未御安坐、新禱聖人僧乘□、式圓房、同寺住、大願主僧盛尊、尊忍房、當寺住、女大施主海氏女、 大佛師兵部法橋僧命圓、觀地房、昔者洛陽住、今者阿州名西庄第十蓮福寺住、結緣細工番匠僧流泉、戒忍房、八太□光寺住、僧盛弘、眞忍房、上田八幡住、僧重信、性圓房、當寺承仕、 信心結緣衆僧□□、道賢房、阿州名西庄中島郷延福寺僧、 平光久治部允藤原近實□□□僧禪尊若盤□□□按ずるに記文磨滅して見えざる處に圈を加ふ、記文を見るに、曆應三年古像に擬して、新像を造刻したるなるべし、或は古像の破壞したるを修補せしか、意得がたし、

大永五年乙酉八月、沙門俊泉、淡州國分寺本堂再興勸進疏一卷あり、其略に曰、

聖武皇帝於六十六箇國、建立國分寺、本尊一丈六尺座像釋迦、行基菩薩之作也、本堂五間四面之伽藍莊嚴魏々、世及澆季、寺社供料墜落、佛閣朽損、爰六十六部之徒某、至于此歎伽藍之敗壞、有志興復、於是勸進云々、大永五年、沙門俊泉敬白、　今寺中礎石多し、境內一町ばかりあり、寺家皆廢毀して、其名の遺れるは、西蓮房、寶幢坊、彌勒坊、神宮寺、法界寺、十輪寺、法蓮寺なり、法界寺は寺家の第一と云、その寺延寶中廢す、

按するに、今大日堂のある處は、日本後紀に所謂所納金光明經七重塔の址なり、○中略

春日祠　同じく國分寺界內にあり

〔淡路國名所圖會二〕國分尼寺古趾（新庄村にあり、今俗に尼寺と稱す、小堂に藥師佛を安す、境內に稻荷祠あり、例祭八月十日相撲あり、○中略）

護國山國分寺（國分村にあり、其始法相宗たりし所、當寺第六世眞源法印の代、寬文六年より南都招提寺の末寺となり、眞言律宗兼學となれりと云、金光明寺と稱す、）

本尊　釋迦牟尼佛（丈六、行基僧正作、）　脇檀　彌勒菩薩（惠心僧都作、）　毘沙門天王（運慶作、）　大　賓頭盧尊者（十五世賢算建立、本堂椽の傍にあり、）

七重塔址（本堂の向ふ左傍あり、今小堂を營み、大日如來を安す、堂の四面に古の塔の礎石あり、天平十三年二月十四日を以て、天下諸國に詔して曰、國別に金光明寺を造らしむ、其金光明寺に、各七重の塔一區幷ニ金光明經を一部を寫して、塔の裏に安置すと、續日本紀に見えたるは則ち是なり、今の大日堂は、元祿年中に建替すといふ、）

春日社（大日堂の右ニならぶ、相殿ニ金毘羅稻荷を祭る、）　鐘樓（同右にならぶ、當寺第七世眞快律師の代、元祿七年鐘幷ニ鐘樓を再建す、）　羅漢堂（本堂の前右の傍にあり、十六羅漢像を安す、天明八申年、羅漢像幷ニ堂建立、志知川浦の村長船越直翁發願主にして、一門を勸進し成就すとぞ、堂內ニ記して曰、羅漢尊幷堂成就入佛供養、寬政三年亥年、發願主船越直翁景政、）

〔日本地誌提要六十淡路〕國分寺（同郡〔三原〕國分村、同宗〔眞言〕天平中、僧行基創建、寬文五年乙巳、僧照運再興、寺域千八百坪、）

用途

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻○中略

淡路國、○中略　國分寺料五千束、

雜載

〔吾妻鏡十〕文治六年○建久元年四月十九日壬寅、造大神宮役工夫米地頭未濟事、類有職事奉書、神宮使

又參訴之間、可致不日沙汰之旨、下知給、於有子細所々者、今日令注進京都給、因州幷盛時使衆等奉行之、其狀云、

內宮役夫大工作料未濟成敗所々事〇中略

淡路國　國分寺　下知橫山權守時廣〇中略

文治六年四月十九日

〔吾妻鏡十三〕建久四年七月廿四日戊子、橫山權守時廣引一疋異馬參營中、將軍覽之、有其足九、前足五、後足四、是出來于所領淡路國國分寺邊之由、去五月之比、依有告、乍恠召寄之旨言上、仰左近將監家景、可被放遣陸奧國外濱云云、

補陀寺

補陀寺ハ、阿波國板野郡萩原村ニ在リ、光明天皇曆應三年、細川和氏ノ同國阿波郡秋月莊ニ建立スル所ニシテ、禪僧疎石ヲ以テ開山ト爲ス、天文年中今ノ地ニ移セリ、

〔阿州板野郡萩原邑光勝禪院草創記〕一曆應二年、征夷將軍源尊氏公、爲國家安鎭、傳命諸國、以使建安國寺、鼎草開補陀禪刹、用此寺令爲當國之太平安國寺、〇中略

一觀應三年閏二月、此時細川賴春〇中略戰死、則法名號光勝院殿祐繁實測大居士矣、緣是此後革補陀寺用扁光勝院也、

〔光勝院下馬札來由記〕曆應二年秋、勅觀音尊像、細川阿波守和氏ニ台命下リ、於阿州秋月府、建立大伽藍、尊像を安置せしむ、號曰南明山補陀落寺、請夢窻國師、爲開山始祖、補陀落と申者、觀音之道場ニ而御座候、

〔阿州板野郡萩原邑光勝禪院草創記〕一光明皇帝曆應三年之秋、前阿州太守細川源和氏相攸於阿

陽秋月莊、新建南明山補陀寺、以請天龍寺開山夢窻正覺國師、爲開山始祖、今到正德三癸巳歲、既得三百七十五年、適禪宗首傳阿淡兩州、則此地爲先登也、

一康永元年秋九月、細川和氏逝去、家弟四州總轄刑部大輔讃岐守賴春相繼修造焉、佛閣、僧堂、經藏、廊廡、函丈、廚庫四十餘箇所之塔頭、凡叢林所宜有者、皆完具焉、寄附三千貫、爲寺領、〇中略有支證

一細川賴春十一代之後裔讃岐守持隆、天文年中、築城於勝瑞以居焉、同時移光勝院於今之萩原北嶽、堂塔僧舍全修造焉也、

一天正年中、野燒之燎燄發、殿宇僧房幷累世所傳之什物悉灰燼畢、〇中略

一蜂須賀蓬庵大居士家政公守護當國、握政布教、面歎名藍地羅廢頽、且前國守細川家累代廟奠斷絕、恭傳命令、再修營當山堂宇、自爾以降草敗損、則國君相續加修覆也、

一寬文年中、再有回祿、堂舍一時炎上畢、僅結茀屋以存其名耳、〇中略

一貞享三年龍舍平寅冬十月、阿淡二州太守賢君源綱矩公、〇蜂須賀因閣老之長谷川氏貞昌執奏、降鈞命於家臣坪田氏加左衞門某江口氏彌三兵衞某再董營構之儀、中年厄丙丁、既經二十餘歲星霜、庭際荒蕪、山門寂寥也、至此叢剎剪除、堂宇輪奐矣、將復舊觀、

寺格

〔阿州板野郡萩原邑光勝禪院草創記〕一康曆二年冬、將軍源義滿公、初定日本十剎之次第、今之當國南明山補陀寺正其一也、見日本名藍記、

寺領

〔光勝院文書〕諸寺領事、此亂靜謐之間、可致所務之旨、成敗仕候之間、重松事同申付候、再興之時可申談候、此分可得御意候旨、可申由候、恐惶謹言、

十一月廿二日　常連花押

光勝院侍者御中

寺職

〔光勝院下馬札來由記〕安國寺之中、光勝院、眞乘院ノ二剎は、格別ニ而、細川家連枝之僧ニ而系之候

得バ、住職不仕、總而合戰ニ相及候節、右二箇寺之住僧、乘物ニ而大門下馬所迄出懸候得ば、領分之取合、早速ニ和睦成申候云々、三好道知と申人書殘御座候、

〔昔阿波物語〕一光勝院と申寺は、三千貫の寺領にて候、國に私の取あひ出來候時は、光勝院の院主の乘物出候へば、互に矢を留、無事仕候、人をころしたる者も、門内へ逃込候へば、たすかり申候、

名稱 所在 創建 堂塔

太龍寺

太龍寺ハ、阿波國那賀郡加茂村ニ在リ、延暦十七年、桓武天皇ノ勅願ニ由リ藤原文山ノ建立スル所ト稱ス、後衰頽セシガ、嘉保二年、僧長範之ヲ中興セリ今禪宗ニ屬シ、四國八十八箇所ノ一タリ、

〔和漢三才圖會七十九阿波〕大龍寺二十一四國遍路○在那賀郡 巽向 本尊虛空藏秘佛

〔阿波國寺々記錄〕阿波國太龍寺緣起 眞然僧正作

右太龍寺者、一天歸依之靈場、三地應跡之聖跡也、桓武天皇之開花構也、以滿虛空藏爲本尊、高祖大師○海空之致草創也、崇和食明神爲鎭守、○中略延暦十七年五月日、應桓武天皇之御願、阿波國司藤原朝臣文山、謹承綸旨、建當伽藍、爰大師自彫刻諸佛諸尊數體之形像、安置山上山下五所之伽藍、是則酬弟子多生之宿願、致皇帝永代之歸依、寄進那賀山、興隆太龍寺、○中略弟子眞然今來彼地、修明星天、于時親仕在世、憐承其誡言、泣々在滅後、粗記彼遺訓而已、○中略承和三年九月十三日記之

于時嘉保二年乙亥十一月廿四日、辰明天下大震動、海内悉驚怖、祈之佛神、占之陰陽云々、是則有異國蜂起難、須有本朝不預之憤、故課處々之道場、令修種々之秘法、專依爲密敎根本之聖跡、卽止阿波國太龍之靈地、令修瑜伽上乘之秘敎、欲致祈禱中棡之精誠、於是佛子長範忝承綸旨、方勤勅願、天下安

寺制

穩、海內無爲也、因玆同三年八月廿三日、任大師本願之先蹤、抽一條御宇之中誠、寄進那賀山五箇之庄園、興隆太龍寺滿山之伽藍、擺棘荊兮顯礎石、攉磐石兮跡基砯、其人力所難及、佛神能助者歟、〇中略遙送數廻之星霜、方記一寺之成就而已、　長治元年甲申八月廿五日記之

〔阿州三好記幷寺立屋敷割次第〕大瀧寺　一六間ニ十壹間客殿、四間ニ七間庫裏、幷三間ニ五間取次、四間四方護摩堂、三間四方鐘撞堂、三間ニ五間土藏、三間ニ六間座敷、三間ニ八間半下坊主部や、四間四方觀音堂、三間ニ六間仁王門、三間四方表門、貳間ニ三間裏門、寺立西向也、屋敷壹町五反、本尊阿彌陀、

〔阿波國寺々記錄〕泰龍寺山林禁制幷殺生禁斷

一泰龍寺者、一天歸依之靈場、四海豐饒之寶窟也、然則於彼山殺生云々、伐樹木其罪重、況於大悲廬藏鎭地、種桑落河之業因、爲自爲他不可然、堅可禁制、若於有異違之族者、可注進其交名焉、

寛元三年三月十一日

右後嵯峨院御勅判

定

一舍心山太龍寺山林幷殺生制法之事、可守往古者也、

一太龍寺僧侶免許之榑、大宮殿御氣色之上者、榑不可仔細事、

一太龍寺筏於關所取口云々、筏廿一艘分者不可取之、大宮殿御下知尤可相守者也、

一號太龍寺筏、廿一艘之外、爲私用致自由云々、所詮廿一艘之外內三艘已下之字本紙破損若致謀略者、可注進其交名、依巨細可有其沙汰、

一太龍寺分吉井村壹畝餘川成由雖有子細、田畠川成義非所及仁力、阿波入道雖當〇當下恐脫知字行、御信仰之間、代地可有、此旨僧徒可爲披露焉、

一大井之百姓等、依有子細太龍寺江不致忠勤事、雖有其由、大宮殿御免許之上者、自今以後可致功勤者也、

右所定之趣、堅可有形賞焉、

建治二年三月十五日　御判

右後深草院勅書

志度寺

名勝所在　創建

志度寺ハ、讃岐國寒川郡志度浦ニ在リ、推古天皇ノ勅願ニ由リ、藤原鎌足ノ創建スル所ト稱ス、眞言宗ニ屬シ、四國八十八箇所ノ一タリ、

〔國花萬葉記讃岐十四〕四國邊路八十八ヶ所之内、當國に有之廿三ヶ寺之次第、

八十六番　志度寺　寒川郡　堂南向　本尊　十一面　立像五尺二寸、ふだらく觀音の御さく、

是ゟ長尾寺へ一里　長行村　宮にし村

〔全讃志寒川郡四上〕志度寺在志度浦

當今十箇寺之一也、勝國時、國中有十五箇院、寛永以來、五箇院屬西讃、十箇院屬東讃、今之十箇寺是也、寺記云、推古御宇、大職冠鎌子大臣、奉勅建寺於讃寒川海濱、時有國小尼知法者、以高島深木、作十一面觀音像、以爲其寺本尊、今之志度寺是也、○中略持統七年、房前大臣、年甫十三、請行基法師、爲母公追福於此寺、因謂此寺曰死度寺、今曰志度寺、轉語也、寛文中、英公捨寺領七十石、末院五箇寮、曰普門院、曰自性院、曰圓通寺、曰地藏寺、曰林藏坊、

〔芊陶棗一〕讃州志度寺東閻魔堂幹緣疏幷序

寺領

讃州路志度道場燈盛光院、乃海岸弧絶之處、觀音靈感之地也、推古天皇三十七年、補陀大士變身爲工、來自造聖像、桓武帝延曆元年、琰羅國王、託人以建梵宇、故山號補陀落、俗傳爲琰羅氏香火矣、爾來一千餘歲、寺廢燬者數矣、按寺故事、其將起廢也、必先有人暴死、入冥中見王、王命之以寺事、蘇生之後募財十方、以復舊觀也、大擧以爲常矣、寺之東西架兩堂、以安王像、取義雙王者耶、昔有苾芻尼彌阿、不知何許人、結草寺側而居、堅持毘尼、專念彌陀、人皆異之、一夕無病氣絶、信宿而蘇、曰、吾到冥府、王見喜曰、汝命未盡、當返本國、爲我於志度道場東偏、規地構堂、而剝等我長之像安之、是我所望汝也、仍自以手量其身、示彌阿、彌阿拜而受命、於是如夢寤而蘇矣、輙傾赤心、戶告家募、見者聞者、靡不樂施、堂成、于且夕、如王言焉、所謂東閻魔堂是也、堂中安王及地藏薩埵泰山府君倶生神也、敎中以琰羅爲觀音應化者有焉、爲地藏應化者有焉、可幷按、蓋三郎一、豈果身乎、又琰羅在當來爲三界導師、號普王如來、孰不歸敬哉、文明十一年十月十八日、畢方爲祟、碧瓦朱甍二十餘宇、食頃灰燼矣、東堂其一也、凡草創以來、火于寺者六、而東堂罹災者三、于茲矣、經曰、閻羅宮殿、百寶莊嚴、一日之中、三變炎熾、由之觀之、今東堂三火、抑亦有以哉、蓋示衆生界成壞有數也、夫本寺之宜先者、琰羅堂、而堂之宜先者、東堂爲最也、雖然寺無恒產、費用居多、爲之奈何、小比丘朝吽、謹持短疏、遍扣大小檀門、庶幾各戮力、以成就勝緣、則一滴一錢、變成現在福海、未來佛果海者也、

〔志度寺文書〕寄進讃岐國志度寺領天野村事

右爲寺領、上者任先例人足已下諸公事一圓不輸、幷天神御筆仁王經等奉寄進所如件、

永德三年六月十八日　　武藏守花押〇細川頼之

〔志度寺文書〕讃岐國志渡庄内志度寺領天野村三名半事、任去貞治二年三月十八日顯綱寄進狀幷當知行之旨、寺家領掌不可有相違之狀如件、

長祿元年十二月廿九日　　右京大夫〇細川勝元

名稱 所在 沿革 堂塔

住寺

法然寺

法然寺ハ、讚岐國香川郡百相村ニ在リ、初メ生福寺ト稱シ、同國那珂郡子松庄ニ在リ、僧空海ノ開基スル所ニシテ、眞言宗ニ屬セシガ、承元年中、僧源空ノ流サレテ此國ニ來ルヤ、此寺ニ住シテ、改メテ淨土宗ト爲ス、天正中、兵燹ニ罹リ、一旦退轉セシヲ、寛文八年、松平賴重、今ノ地ニ移シ寺號ヲ法然ト改メ、僧相閑ヲ以テ中興ノ開山ト爲セリ、

〔和漢三才圖會〕七十九讚岐佛生山法然寺 在那珂郡小松庄 寺領三百石、

本尊 阿彌陀 二十五菩薩 淨土宗又名來迎院、紫衣、〇中略

當寺本號生福寺、弘法大師開基、眞言宗也、法然上人左遷時、暫在住于此、其後爲兵火退轉焉、寛永〇永恐文誤年中、大守源少將賴重卿興絕、建寺號法然寺、爲不斷念佛精舍、延寶三年令住持僧勅許永代紫衣、自高松二里南、

〔日本地誌提要〕六十二讚岐佛寺 法然寺 香川郡百相村、淨土宗、舊眞言、僧空海創建ニシテ、那珂郡東高篠村ニアリ、生福寺ト號ス、承元中、僧源空再興シ、今宗トナル、寛文九年己酉、松平賴重、今地ニ移シテ改稱ス、僧相閑ヲ中興開祖トス、寺域壹萬千六百六拾坪、

〔法然上人行狀畫圖〕三十五讚岐國子松庄におちつき給にけり、〇源空當庄の內生福寺といふ寺に住して無常のことはりをとき、念佛の行をすゝめ給ければ、當國近國の男女貴賤、化導にしたがふもの市のごとし、或は邪見放逸の事業をあらため、或は自力難行の執情をすてゝ、念佛に歸し、往生をとぐるものおほかりけり、邊土の利益を思へば、朝恩なりとよろこび給けるも、まことにことはりにぞおぼえ侍る、かの寺の本尊、もとは阿彌陀の一尊にておはしましけるを、在國のあ

ひだ、脇士をつくりくはへられけるうち、勢至をば、上人みづからつくり給て、法然本地身大勢至菩薩、爲度衆生故、顯置此道場、我每日影向、擁護歸依衆、必引導極樂、若我此願念不令成就者、永不取正覺とぞ、かきをかれける、勢至の化身として、みづからその體をあらはしなのり申されける、まことにいみじくたうとき事にてぞ侍ける、

〔全讃史〕四上佛刹志 香東郡　法然寺　在百合鄕佛生山

昔在建永二年〇承元元年春三月、法然上人竄居於讃州、建寺於那珂郡子松鄕、曰生福寺、爲念佛三昧道場、而天正中、罹兵火、只彌陀善導像存焉、皆上人所親刻也、寛文八年、英公移其本尊於此地、大加修造、號佛生山來迎院法然寺、迎前傳通院輿譽相閑上人令住、擬十八檀林、爲永正紫衣之地、又山上築邦君世々夜臺、曰般若臺、傍營來迎堂、安廿五菩薩像、是空海刻云、其他二尊堂、三佛殿、文殊樓、二王門、四天門、韓門、四脚門、鐘樓、十王堂、祖師堂、僧坊香積諸寮、不遑枚擧也、

寺格

〔寺格帳〕上淨土宗　高三百石御朱印　紫衣　讃州　法然寺

右住職於御白書院御椽頰、老中列座被仰渡、

一入院爲御禮參府之節、御白書院獨禮、獻上壹束一卷、御闕之外貳疊目、

一御暇、於柳之間老中被仰渡、時服三拜領之、廣間ニ而引

一年頭御禮無之

寺領

〔全讃史〕四上佛刹志 香東郡　法然寺〇中略

寺領三百石、自台朝捨之、其劵文曰、

當寺領讃岐香川郡百合村之內、以開發之地、高三百石事、新寄附之訖、全可收納、幷境內門前屋敷山林竹木諸役等免除、永不可相違者也、仍如件、

延寶元年十二月廿日　御朱印

佛生山法然寺

白峯寺

白峯寺ハ、讃岐國阿野郡青海村ニ在リ、四國八十八箇所ノ一ニシテ、空海、圓珍二僧ノ創建ト稱ス、崇德天皇ノ當國ニ崩ジ給フヤ、此寺內ニ葬リ奉リ、之ヲ白峯山陵ト謂フ、白峯山陵ノ事ハ、帝王部山陵篇、神祇部白峯宮篇等ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔國花萬葉記十四讃岐〕四國邊路八十八ヶ所之內、當國に有之廿三ヶ寺之次第、

八十一番　白峯寺　あの丶郡青海村　山上坤向　本尊　千手　立像三尺三寸　作者不知

是より根來寺迄五十町

〔白峯寺緣起〕夫讃岐國白峯寺は、弘法、智證兩大師の建立なり、弘法は先此山に登て、峯には寶珠を埋み、阿伽井をほり、行給ふ、彼の寶珠の地瀧つぼとなれり、三方へ落る水增減なし、智證大師の歸朝の初、金藏寺に止住して、行業薫修をつまれしに、貞觀二年十月一日子剋に、當國北條の郡大椎の興に櫨出現す、光明海上をてらし、異香國內に薫ず、國司性給ひて、圓珍和尙に尋申さる、同三日、和尙十峯山に攀登て、瑞光を見給ふに、彼山上に靈嶋あり、瑞光かの嶋に通せり、希有の思をなし給ふところに、老翁一人現じて云く、吾は此山擁護の靈神、爾は法輪弘通の聖者なり、此嶋は、七佛法輪を轉、慈尊入定の地也云々、卽山中を巡檢、東谿の水門は吉水の字形なり、艮の洞の苔徑は根香の字形なり、西峯の大石に白峯の字を書す、南窪に和尙休息の處、白牛出現す、妙法二字背の毛に備ふ、かの蹄跡、千手觀音の像體也、その丶ち海濱に趣き、祈念し給ふ處、虛空に音ありて、補陀落山より流來れりと示、大師と明神とあひともに山中に引入、十體の本尊を造立し給、四十九院を

寺格　寺領　寺職

草創し給、

〔白峯寺記錄〕一崇德院崩御以來、當寺ハ勅願寺之事、

一建長五年院宣ニ、當寺之禪侶ハ、不レ論二俗性之高卑一、可レ准二卿相一事、卿相ハ三位以上依レ之當寺ヲ宮之御坊共申候事、其上永正拾貳年二月、崇德院政所下と而、權律師、少僧都職を明王院一代秀和と申候人ニ免許之事、明王院當時丸龜領、只今ニ五ヶ之口家寺也、

一建長五年、當山廿一口之供僧ニ、勅諚として、各廿一通之御手印補任被レ下事、

一同六年、年中之勤行勅諚、其法會料、西山本津郷新居郷松山郷之內、

一同四年、右松山之鄕勅諚御寄進、此所堀切、于レ今有り、只今も其田地を松山と申候、則太平記ニ延文四年、繁氏蒙二神罰一處、依レ之天文八年、細川讃岐守持隆、同三好之相軍勢濫妨狼藉禁制之板札二枚、于レ今有レ之、

一治承年中、高倉院御寄進寺領、青海村、川津村、

〔白峯寺文書〕補任讃岐國白峯寺

崇德院政所下

少僧都職之事

權律師秀和所

右□□□宣下之旨、以二彼人一、令レ補二任國宜承知、敢勿二違失一、故以下、

永正拾貳年二月吉日　洞林院代阿闍梨宗圓花押

〔白峯寺文書〕令レ寄二進寺領分一之事

一百石者　白峯寺

右改而令二寄進上一者、全可レ有二寺納一候、仍如件、

天正拾四年二月十三日　千石權兵衞尉　秀久花押

〔白峯寺文書〕（編脩）建長年中當山勤行役定

讃岐國白峯寺勤行次第、山號綾松山也、後嵯峨院御勅願所、號二千手院一、土御門院御願、

一千手院堂料所、松山庄一圓、并勤行次第、十二不斷行法毎日、同供僧廿一口、人別三升供毎日分分田在レ之、松山庄内、夜番供僧役、

一正月六日、御修正、七日勤行次第在レ之、料所西山本新庄在レ之、

一毎月十七日、御勤理趣三昧行法并阿彌陀經、後嵯峨院御訪、不レ參仁料在レ之

一毎月廿七日、御勤理趣三昧行法、但空上人御訪、

一毎月十八日、御勤觀音講式並阿彌陀經、同讃世尊偈、千手陀羅尼五反、

一毎日大般若一部日中時供僧衆轉二讀之一、料所當國新居鄕、壹町在レ之

一毎年二月、八講、法花問答講、並十六日、七日兩日、後嵯峨院御忌日、

一毎年四月十四日ヨリ七月十四日迄供夏、末繭役、毎朝理趣經上ヨリ次第十日宛、

一毎年七月、孟蘭盆供、十五日同四十八願式並阿彌陀經、同讃世尊偈、千手陀ラニ五反、

一毎年八月、法花會法事在二別紙一在レ之、舞童役毎年不レ缺レ之、

一毎年十月、八講、十九日、廿日、兩日法花問答講、並寺僧役勤レ之、

一同□師講式並講師一山會合、土御門御弔、

一同十一月、□講式並講師法則一和尙役、勤次第法則祭並ワサン講、並講衆役、

一毎年十二月十九日、佛名、供僧役、同大歳ヨリ修正始レ之、

一願成就院明實坊中、毎年正月八日修正、料所松山庄内ヨリ、

一成願寺實語坊中、免地津鄕内一町在レ之、

一御瀧嶺盛山號二藏王社一、

名稱	所在	創建

再興洞林院代 阿闍梨宋有

廣原 筆者重親

善通寺

善通寺ハ、讃岐國多度郡有岡村ニ在リ、四國八十八箇所ノ一ニシテ、釋空海誕生ノ舊蹟ヲ以テ世ニ著ハル、

〔和漢三才圖會(七十九 讃岐)〕四國遍路八十八箇所(中略)

善通寺(七十五) 在多度郡屛風浦　本尊　藥師(坐像四尺五寸 弘法作)　弘法大師出生之地、號誕生院、父佐伯氏(法名善通)、母阿刀氏、大師歸朝後、爲考妣建寺、號五岳山善通寺、諸堂舍今僅存、

〔全讚史(四下 佛廟志)〕多度郡　善通寺(在有岡村)

夫屛風浦之爲地也、右有象山(大麻山也)左有獅峯(天霧山也)後有五岳、(一曰香敷山、二曰筆山、三曰我拜師山、四曰仲山、五曰火上山、)五岳則五智如來也、獅子則文殊、而象則普賢也、從剖判已有如此因、是以弘法大師降誕而爲密教弘通之祖矣、又大師以西竺八塔之土布地、以建伽藍、又圓光大師(法然上人也)立五輪塔於伽藍側、曰一蹈善通寺地者、應可爲一佛淨土友云、土人云、大師父名善通取以爲寺名、本尊則座像丈六藥師如來、及彌陀三尊、四天王、皆大師作也、境地方二百五十步、摸唐青龍寺、後宇多、龜山、後嵯峨三帝、以爲勅願所、而以多度郡捨之、室町氏末、王道衰、皆爲武弁所奪、今則歷寺領高六十石、而境內則依舊矣、北有三帝山陵、此地舊有五重塔、戰國燒亡矣、然寶曆時、住山僧正某發願而奏天朝、公卿僉議許之、其勅書曰、讃岐國善通寺五重塔婆再建之事、温其本源、大師利生芳躅、鎭護國家勅願、異於他處也、勸誘都鄙異言之僧侶、募隨分職力、令致同心之扶助、早遂再建、光顯護國之場者、可爲神妙之旨、天氣之處候也、仍執達如件、

寶曆十二年三月二十九日　左少辨伊光

堂塔

善通寺權別當誕生院權僧正御房
又一條關白從一位左大臣忠良公賜額字
弘法大師誕生之場〈八大字〉其落款云、文政元年五月二日關白忠良題、　又塔南有豫章大樹、是從大師
誕生時所有云、〈見三教指歸〉

○按ズルニ、本書ニ、土人云、大師父名善通云々、下文引ク所ノ南海流浪記ニ、大師御先祖俗名郎爲寺號云々、又善通寺古文書、承元三年八月ノ廳宣ニモ、佐伯善通建立之道場也云々トアリテ、何レモ空海ノ父ノ名ヲ善通ト爲シタレドモ、梅園奇賞載スル所ノ、石山寺什藏ノ延暦二十四年九月十一日ノ太政官符ニハ、戶主正六位上佐伯直道長戶口トアリ、元亨釋書ニハ、父田公、母阿刀氏トアリテ、共ニ善通トアルニ合ハズ、今其何レカ是ナルヲ知ラズ姑ラク附記シテ後攷ニ備フ、

〔南海流浪記〕三月〈○仁治四年〉二十一日、善通寺ニ詣デ、大師聖跡ヲ巡禮ス、金堂ハ二階七間也、青龍寺ノ金堂ヲ被模トテ、二階ニ各今少引入リテ、モコシアルガ故、打見ハ、四階大伽藍、是ハ大師御建立、于今現在セリ、御作、丈六藥師、三馬四天王像イマス、皆埋佛、後壁ニ又藥師、三馬、半出ニ埋作ラレタリ、七間講堂ハ、破壞後今新造營、五間常堂同新造立、大師御建立二重寶塔現存、本五間令修理之間、加前廣廂一間云々、於此內奉安置御筆御影、此御影ハ、大師御入唐之時、自圖之奉預御母儀云々、同等身像云々、大方樣如普通御影、但於左之松山ノ上、釋迦如來影現形像有之云々、凡此善通寺ノ本ハ、四面各二町、其內種々堂舍、寶塔、灌頂院、護摩堂、嚴重羅列、今ハ皆破壞シテ、礎石許在之、御筆之額、二枚有之、皆善通之寺トアソバサレタリ、其外、大寶樓閣ダラニアソバシタル額二枚有之、皆破損云云、抑善通之寺ハ、大師御先祖俗名郎爲寺號云々、破壞之間、大師修造建立之時、不被改本號歟、金堂之西有一直路、一町七反許者、則自寺中參御誕生所之路也、則參詣拜之、正御誕所ニハ、石高ク廣

疊タリ、今如法經奉納之七重石塔有之、大樹少々有之、拜見之間戀慕恭敬、催涙拆膽、

高野山岩のむろ戸に澄月のこのふもとより出けるかさは、此御誕生所ハ、西方ニ五岳山ト云ノ、五佛之高山ノアル其麓也、同日午剋、於講堂有法華講、大師御報恩云々、其後有舞云々、其日及晚景、不能還向、卽通夜御影堂云々、翌日、宇足津ニ歸、寬元元年九月十五日、善通寺移住ノ寺僧等、兼テ大師誕生所傍ニ庵室ヲ構テタマヘリ、同月二十一日、大師至御行道所ニ世號世坂、參詣其路嶮岨嵯峨、老骨難擧蹄、只人ニタスケラレテ登イタル、此行道ノ路ニハ于今草不生、淸淨寂寞タリ、南北諸國皆見テ眺望疲眼、此行道所ハ、五岳中岳我拜師山西岫也大師此處ニ觀念經行之間、中岳靑巖綠松巳、釋迦如來乘雲來臨影現タマフ、大師拜ミ玉フ故云我拜師山ト也、此行道所ニ、斂剣大佛頂寶篋印等陀羅尼ヲ、滿眼ノ所及海生山獸等ノ養生ニアツ、如來影現事、貴目出覺テ、

わしの山つねにすむなる夜半の月きたりて照す峯にぞありける、十月之頃、南大門ニ出テ、南方名山等眺望、南大門前ノ路、弘三丈五尺、長八町、左右ニ卒都婆多立之、其門東脇ニ古大松アリ、寺僧云、昔西行此松ノ下ニ七日七夜籠居テ

ひさに經てわが後の世をとへよ松あとしのぶべき人もなき身ぞ、とよめるによりて、此松ヲバ、西行ガ松ト申也ト申、○中略同年○承元三年十一月十七日、尾背寺參詣、此寺大師善通寺建立之時、杣山云々、本堂三間四面、本佛御作藥師、三間御影堂、御影幷七祖又天台大師影有之、同十八日還向、○中略

一誕生院緣起之事

右當所者、弘法大師御誕生處也、昔定有精舍、宛如釋迦如來淨飯王宮生處塔、而五百廻ノ星霜相遷之間、唯遺基跡、尙無礎石、于爰行竝上人者、寬元三年、木像御影建立之時、卽與寺僧共評議シテ、於此御誕生所、建立一堂、可安置之云々、因茲、或勵自力、或唱勸進、以今年建長元年巳口月十日、手斧始同

二月二日棟上、大公沙彌陀佛、同年五月一日戊申寅時有鎭壇、阿闍梨道範、

〔本朝高僧傳淨慧十七〕讃州善通寺沙門宥範傳

釋宥範、〇中略嘉曆末再治抄印鈔成八十卷、抄辭之徒來受密訣、且請東遊、範將赴招、善通寺衆曰、我寺頹廢、非師難興、見此散落而他之哉、範不獲已移東北院、元弘年中創誕生院、曆應三年、護摩堂火、餘熖及院、一衆騷劇、範時修定、初不起座、加持灑水、猛火便消、弟子入堂告曰、火滅、範趺座莞爾、尋住善通、十餘年間、力而興復、殿塔厨庫隨序壯成、觀應三年七月朔日、奄然唱化、壽八十三、

〔善通寺文書〕今度、善通寺伽藍再興願望之事、令披露候之處、彼淨刹者、高祖大師誕生之靈地、於自宗由緒異于他所也、因玆、代々之綸旨院宣等、至于今現在也、若再興令成就者、一宗之大幸也、隨分可被抽造立之精誠之旨、總法務宮御消息之所候也、仍執達如件

元祿七年三月十五日　前大僧正奉判

光胤僧都御房

誕生院光胤御　前大僧正孝源

〔善通寺文書〕寶曆年中、誕生院光國僧正五重塔、準先例、奉勸願書左之通、

奉願口上覺

讃岐國善通寺者、弘法大師誕生之靈地、鎭護國家之伽藍勅願、異他之處也、然處永祿元年兵亂之節、大師御建立之伽藍十八宇、多分燒失仕候、其後代々之住僧等、勸誘之力ヲ以、金堂、常行堂、鎭守神祠、御影堂以下、漸々致再興、其餘未造立之堂塔者、假屋取構、恒例御祈之法要令執行候、中古之時、五重之塔及大破候節者、後宇多上皇、殊降勅命、被爲有御再興候、永祿燒失之後、假造之小塔ヲ以、其員相備有之候處、近年ニ至リ、右假塔モ破壞ニ相及、伽藍衰弊之段、歎ケ敷存候、爰ニ昇平萬歲之御世、彌以護國安民之靈場、大師利生之芳躅、如形再興仕度致發願候所、諸人歸依之助力、近年連々相積リ、

寺領

五重之塔、漸柱礎之企ニ相及候、然共不依勅願致再興候儀ハ、祖師深重之本志ニ不相叶、尤不易御願之規摸相失候歟、若不存此由、私致經營候而ハ、却而當寺門之瑕瑾ト相成、一宗之疊可歎入儀ト存候、仍恐多候得共、今度五重之塔再興之儀蒙勅願之仰、兼而ハ眞言一宗之僧侶、可勵助成之懇志旨、准先規被成下綸旨候樣、伏奉願候、以天恩願之通蒙勅許候ハヾ、寺門之榮幸ハ不及申上、一宗僧徒同意深畏入、再興速成就可仕候、然上ハ、顯密二敎之法門彌令興行、天下泰平、國家安全、寶算延長之御祈、永可奉抽精誠候、右擇歎狀候之趣、宜樣御沙汰奉希候、以上、

寶曆十一年十月廿二日　善通寺權別當誕生院權僧正

廣橋大納言殿

姉小路前大納言殿〇中略

讃岐國善通寺五重塔婆再建之事

温其本源、大師利生芳躅、鎭護國家、勅願異於他處也、勸誘都鄙眞言宗門之僧侶、募隨分戮力、令致同心之扶助、早遂再建、光顯護國之場者、可爲神妙之旨、天氣處候也、仍執達如件、

寶曆十二年三月廿九日　左少辨伊光

善通寺權別當誕生院權僧正御房

〔善通寺文書〕廳宣　留守所

可早以生野鄕內重光名見作田□每年奉免善通寺御影堂事

右彼寺者、弘法大師降誕之靈地、佐伯善通建立之道場也、早傳最上乘□□多積數百栽之薰修、斯處有大師之御影、是則留平生之眞筆也、方今宿緣之所□爲宰于當州、傳聞而奉請尊影於華洛、肅拜而增進信力於棘府、因玆、早備上皇〇後鳥羽之叡覽、奉送南海之梵宇、裹以錦繡、寄以田畝、蓋是四季久□□□□□□仰六口之三昧僧、爲令勤行理趣□□□□件陸町之所當、納寺家□□□年爲三昧僧之沙

什物

汰、偏可令下行彼用途、於餘剰者、可宛用御堂修理料、凡當寺徒雖募數十町之免田、別當以下恣企私用、佛聖燈油追年闕乏、門垣棟甍口口頽壞云々、事實者、尤以不當、內不恐罪障、外如忘國典、自今以後、每任各注進其勤否、偏可蒙處分也、抑以所修之惠業、上則奉資聖朝安穩、天下靜謐之御願、下則可致宰吏泰平、國中肅雍之清新、契以龍華樹之春風、待以鷄頭城之曉月、長備寺用、不得陵夷、縱雖末代貪婪之吏、豈恐大師聖靈之威、而不顧起請之奧旨、若有停廢之國司者、蒙大師譴、無成二世之悉地、中心所誓大師證明者、留守所宜承知、依件行之、故宜、

承元三年八月　日

大介藤原朝臣在判

〔善通寺文書〕廳宣　留守所

可早以良田鄉內見作田參町宛置善通寺御影堂修理用途料事、

右善通寺者、弘法大師誕生之地、秘密上乘流布之庭也、手自染筆寫真影於生前、精靈在圖、留遺像於其中、金剛刹之化身、白居易之老婆、自課塞婦、被圖帛上之義也、代々宰吏各歸敬、方今不圖當國有屬此案、聊訪舊跡、奉渡尊容、只悅一禮之宿緣、奉送萬里之本所、爲表匪石之誠、專宛立錐之貲、宜爲善通寺之管領、永支御影堂之修理、可以傳三會之期、可以成二世之願、宗門繁昌、國邑豐饒者、留守所宜承知、依件行之、以宣、

嘉祿元年四月　日

大介源朝臣在判

〔善通寺文書〕晴目大師御叡覽之時

當寺高祖大師御影等、追往古之例、奉備禁裏法皇之叡覽、尤以神妙也、誠靈異之影像、崇敬不尋常之旨、仁和寺宮御氣色所候也、仍執達如件、

寛文六年六月十五日　判

誕生院法印御房

寺職

〔善通寺文書〕寶曆年（〇中略）別紙申上ル覺（〇中略）

一當寺別當職規模之儀ニ付、往時ハ眞言宗小野廣澤之門主競望御座候所、段々被爲及勅裁候所、貞和曆應之御世ヨリ、隨心院御門跡相傳管領之處ト相成候、誕生院ハ、善通寺伽藍西門ヨリ一町許西ニ相當リ、正ク大師御誕生所ニテ、其所之院室、往古者、別當坊ニ而御座候處、中古以來、別當之下向無之候ニ付、院主補任有之、則別當代相續仕候、正別當之義者、不相替隨心院御門跡相傳之處ニ御座候、（〇下略）

雜載

〔東寺百合古文書〕（三）始宛國役事、永久三、

東寺政所下　讃岐國善通曼陀羅兩寺所司住人等、可任先例停止國役公事、偏勤本寺役事、（〇中略）

永久三年十二月十四日　都維那法順

〔善通寺文書〕文久三癸亥夷賊退治願書（料紙中奉書竪紙）

奉願口上之覺

讃岐國善通寺者、弘法大師誕生之靈地、鎭護國家之道場、勅願異于他之所也、然近年異國渡來、萬民苦塗炭、被惱宸襟之段、竊傳承仕奉恐入候、以自願夷賊對治之儀、朝暮无懈怠雖祈念仕候、不蒙勅命致祈念候、不叶攘夷之本旨、且不易勅願所之規模、相失可申候、仍多恐候得共、今度、異國對治之蒙勅許者、彌以奉爲國恩報謝、一山之僧徒、擲身命於攘夷之祈、任蒙古治罰之舊例、修行仕度候、其節之御綸旨者、隔年月候故、相見不申候得共、今度者、以勅命、御綸旨被成下候樣、伏奉願候、以天恩、願之通蒙勅許者、寺門之美目、不及申上、一宗之緇素、同意深畏入可申候、然上者、寶算延長、夷賊退治之御祈禱可奉抽精誠候、右捧願書候之條、宜樣御沙汰奉希候、以上、

名稱 所在 用途

文久三年五月　　普通寺權別當誕―旭雅花押

坊城大納言殿

野宮宰相中將殿

御綸旨左之通

近年外夷追日跋扈、深被惱宸衷、將攘夷拒絶之期限被決定之處、此頃既英夷之軍艦來橫濱、請求之旨趣、必可開兵端之情態顯然、實天下安危在於是時矣、庶幾依佛陀之冥助、以奮起皇國之勇威、國內一和、上下齊志、早攘醜夷于汎海之遠、永令絶於覬覦之意念、不汚神州、不損人民、寶祚延長、武運悠久御祈、一七箇日可抽丹誠者、依天氣上啓如件、

三月四日　　右少辨俊政

普通寺權別當誕生院權僧正御房

彌勒歸敬寺

彌勒歸敬寺ハ、讃岐國ニ在リ、延喜式ニ其名ヲ載セタレドモ、今廢寺ニシテ其舊地ヲ詳ニセズ、

〔延喜式 二十六 主税〕諸國出擧正税公廨雜稻〇中略讃岐國〇中略彌勒歸敬寺燈分料五百束、

觀念寺

名稱 所在 創建

觀念寺ハ、伊豫國桑村郡上市村ニ在リ、四條天皇ノ延應中、越智盛淸ノ創建スル所ニシテ、僧鐵牛ヲ以テ開山トス、禪宗ニ屬ス、

〔伊豫古蹟志〕四桑村郡上市邑（○中略）有精舍、曰觀念、延應中、越智盛淸與僧鐵牛、共圖鳩工營斯大名藍、安置釋迦像、以普賢文殊爲挾侍也、正和中、新居盛康修之、寬永中、眞常侯巡國、憩斯金刹、乃觀什寶、因歎頽敗、使釋明道修之、貞享四年、修開山堂、正德四年、附田數畝、六年丙申、大起土功、佛舍、僧廬、盡新焉、享保十六年、爲啓爺於侯第、（○中略）堂前有櫻樹、每一花結實數多、爲奇焉、

〔豫陽舊跡俗談〕上桑村郡大雄山觀念寺　禪宗　上市村に有

本尊玉觀音、釋迦、文殊、開山鐵牛禪師也、延應年中、散位越智宿禰盛淸建立之由、其後正和年中、新居盛康修覆、建武年中、鐵牛に天長地久安泰之祈禱、尊氏將軍より仰付られ候御敎書あり、勝山樣（○久松定行）寬永年中に御廻領之節、右寺（江）被爲入寶物由緒等不殘被爲思召、宇摩郡川ノ江村明道和尙の寺毀有しを御引せ、御建立被遊候由、貞享二丑年、大龍院樣より開山堂御建立、同四卯年、山林境内東西三百間、南北百六拾貳間、御免許被成下、正德四午年、大龍院樣より堂塔御修覆被成下、同六申年、玉觀音開帳被仰付、於御屋形御拜覽被遊候、享保十六亥年、天（○天一本作大）樂院樣（○久松定秀）より寺内殘らず御修覆被成下候よし、

開山

〔伊豫松山世語〕同（○貞享）四年桑村郡上市邑觀念寺開山堂造營

〔本朝高僧傳〕二十八淨禪豫州觀念寺沙門景印傳禪淨

釋景印號鐵牛、從無爲元和尙出家、元亨年中、入元謁靈石芝、獨孤朋、月江印、龍巖眞、古林茂、明極俊等諸尊宿、各作偈贈之、（○中略）印在元十餘年、飽算而歸、開豫州觀念寺、爲第一代、開堂乳香酬無爲之證、（○下略）

寺領

〔觀念寺文書一〕寄進　伊豫國桑村本郡得恒名觀念寺御燈油田畠事

合

一所參段内〈二反介三郎屋敷　一反物三郎屋敷〉　一所貳段　王子内

一所貳段　後谷〈新居彥四郎殿賣地〉　一所參段　恒光　島原尼御前賣地〈作人江左近〉

一所壹町　移作　大藏入道賣地作人寺岡藤二　一所漆段　拜志郷得恒名　土居西内

一所參段　同所得恒名　土居小御門〈新居彥三郎入道殿賣地〉

一所參段　同所延吉名土居　岸井新居彥九郎殿賣地

右當寺者、圓心之先祖建立氏。寺也、故依有啟歎之志、盡未來際之間、彼田畠等、所奉寄進觀念寺也、然則此内於拜志郷土居西内漆段者、爲祖父定阿追善、諷經田寄之、同郷内於小御門參段、幷延吉土居參段者、爲親父智阿追善、諷經田也、所殘於桑村分田畠等者、爲觀念寺燈油田幷僧食、所奉寄進也、雖爲何子孫、於件田畠等者、敢以不可致違亂者也、若致違亂之輩者、爲不孝之仁、雖爲段步、不可令知行圓心之跡矣、仍爲後々末代、寄進之狀如件、

延元貳年〈丁丑〉十二月廿七日　沙彌圓心〈花押〉

奴婢

〔觀念寺文書 二〕觀念寺方丈奉寄進□□事

合壹人者　字忠三郎男

右彼男者、愚身重代相傳、雖爲下人、依有志觀念寺方丈鐵牛聖人、奉寄進所也、御壹後期〈○後恐假借〉之間は、何様可被召仕者也、仍爲後寄進狀如件、

貞和六年二月　日　島山祖覺〈花押〉

寺領

〔觀念寺文書 一〕伊豫國諸山觀念寺、可專天長地久寶祚安泰、朝敵退散、御願成就、御祈禱之精誠、仍寺家領、可停止軍勢幷甲乙人等濫妨狼籍之狀如件、

延元二年三月廿一日　左少將〈花押〉

鐵牛上人御房

〔觀念寺文書二〕伊豫國觀念禪寺事、可致御祈禱之精誠之際、於諸鄉散在寺領等者、任先例可被知行、若軍勢已下之輩、或號給恩之領內、或構本領之名內、於致違亂妨之族者、可處重科之狀如件、

貞和七年二月三日　左衞門藏人 花押

觀念禪寺方丈

寺職

〔觀念寺文書一〕一この寺はじやうぎやうちかいの寺として、じやうぎやうの僧しゆあひついで、ぢうぢのしよくおつぐべし、○中略

□□□の五ケ條のことにおきては、子々□□□もに、このむねおまぼつてあい□□くことあるべからず、ゑいたいふき□□□ために狀如件、

□永三年十一月五日　越智兼信 花押　越智盛忠 花押　越智盛家 花押

てつぎう上人御房

善應寺

名稱 所在 創建

善應寺ハ、伊豫國風早郡善應寺村ニ在リ、後醍醐天皇建武二年、河野通盛ノ創建スル所ニシテ、僧顯正ヲ以テ開山ト爲ス、禪宗ニ屬ス、

〔伊豫古蹟志三風早郡〕善應寺邑有精舍、爲名焉、河野通治、建武二年肇營矣、南北之亂、通治初屬六波羅、勇而有膽略、既而六波羅亡焉、通治潛行于藤澤、謂剃除鬚髮以爲沙門、主僧曰、貧道不敏、不忍爲人之師也、建長南山士雲其人也、貧道友善、爲足下請之、乃語士雲、士雲諾焉、及期通治見士雲縣官韋氏至矣、士雲舒徐而謁曰、玆有人來、請從學貧道、因貧道使彼摩頂以著壞色衣、彼西方之故諸侯、今窮而然

人孰不愍之、貧道以斯故、乃及于遲謁矣、尊氏曰、其人爲誰、曰故河野通治也、尊氏曰、吁然與、彼乃歷世之名家也、我不知居其何地、不虞居于斯也、卽微見焉、賜舊國、通治叩首而謝矣、自是逐傾信於佛乘、使久万阿彌命召南山弟子顯正、共圖爽愷起功、使顯正爲主僧、於此梵刹、又附腴田若干、以爲通治香火院、

〔豫章記〕通治〇河野、中略、著國〇伊豫、有テ、親疎一族幷國民悉ク歸伏シ、住所ニ安坐セラレケル、其後河野所居ヲ捨テ、一伽藍建創セラレケル、〇中略、府中ノ西念寺樞浴主トテ南山和尙ノ御弟子開出給ヒ被召寄、〇中略、樞浴主御信心至尤難有、然者中道前北條長福寺顯正堂和尙、近來御歸朝也、〇中略、此和尙ヲ召請有テ、開山祖ト可有崇敬、然則南山餘光可照徹四海也ト被申ケレバ、此儀尤也トテ、爲使久萬阿彌ヲ被遣、〇中略、異儀ニ不及、卽領掌有テ、其日府中迄御越アリ、翌日河野鄕善佛寺迄御著アレバ、善惠卽參拜有テ開山ト請申シ入院有テ、寺號善應、山稱好成、是則大通智勝佛出世國名ヲ表者也、〇下略、

〔二名集風早郡〕善應寺〇中略、伽藍七堂有、佛殿、法堂、僧堂、方丈、庫司、東司、浴室、

〔善應寺緣起〕原夫好成山善應禪寺、建武二年建立、伽藍七堂、佛殿、法堂、僧堂、方丈、庫司、東司、浴室、十三塔中、准洛東福也、溫玉庵、千手院、養壽院、大崇院、宗玄庵、林少院、万年寺、一心庵、少林庵、見壽庵、明智庵、靈雲庵、少室庵、以上、惜哉、天正十五年七月、河野家落城ノ後、慶長年中マデ、伽藍幷寺家幷知行相續ノ樣ニ相見候ヘドモ、ソノ後寺家境內寺領沒却シ、伽藍破却ス、善應ノ名、塵中ニ沒スト云ヘドモ、コヽニ元文元戊午歲、南山十七世ノ孫默翁士徹西堂眞如ニ出世シテ、將軍吉宗公ヨリ、眞如寺善應寺アテノ台帖ヲ申下ス、寬保二壬戌、本山東福寺ヨリ御願ニヨリテ、御公儀ヨリ中書院御禮式諸事一料願ニ仰付ラル、善應寺ノ名普ク諸國ニ聞ユ、大檀越ノ浩恩謝スルニ時ナシ、

〔善應寺緣起〕奉寄進伊豫國善應寺、

同國風早郡河野郷土居分內田地伍町(坪付別紙在之)間事

右件地者、爲善惠之舊領、惠一安堵御下文、令拜領之間、永代所奉寄附當寺也、然早守先例、可被全知行、總天下泰平、諸人快樂、別家門安寧、子孫繁昌、殊爲二世所願、成就圓滿、寄進之狀、如件、

貞治二年六月一日　　沙彌善惠(○河野通盛)

寺制

(善應寺緣起)善應寺近處殺生禁斷之事

東限鳩谷山之透、南限楊岐庵山且過山峯之透、西限娑婆山之透、北限土居山尾新宮山、

右於此山林、致狩獵之輩、可處罪科之狀如件、

永享六年十一月二日　　刑部大輔判

寺職

(善應寺緣起)伊豫國善應禪師住持職事、爲南山和尚門徒寺、至後々末代、不可有違變之儀者也、仍證文狀如件、

貞治三年七月五日(右者御自筆也)　　善應在判

善應寺正堂和尚

石手寺

名稱
所在
創建
沿革
堂塔

石手寺ハ、舊ト安養寺ト稱ス、伊豫國溫泉郡石手村ニ在リ、聖武天皇神龜五年、勅ヲ奉ジテ越智玉純ノ創建スル所ト稱ス、初メ法相宗ニ屬セシガ、後改メテ眞言宗ト爲ス、四國八十八箇所ノ一タリ、

(和漢三才圖會七十九伊豫)石出寺　五十一　在同郡(○溫泉郡)石出村　後山東向　本尊藥師(坐像三尺行基作)

(伊豫古蹟志一溫泉郡)石手邑、有精舍亦名焉、神龜五年戊辰、聖武帝爲祈國家安寧、使河野玉純置伽藍、

號曰虛空藏院安養寺、天平元年己巳春三月八日、行基自彫刻藥師而安厝焉、五年癸酉、行基建三層塔及山門、又置二王門、安金剛力士、勝寶七年乙未、孝謙帝勅置韋馱天堂及伐貫門、又附大般若六百卷、弘仁四年癸巳、主僧良實改法相爲眞言門、寬平三年辛亥三月朔日、山趾泉涌數尺、經三日而浮雲獨塞四溟、內發光彩、有二十五菩薩熊野拾二神、乃爲造十二社於彌陀堂東、略○中十二社不日而成焉、寬平四年壬子、改名曰熊野山石手寺、置子院六十六舍、附荏原焉、略○中天德二年壬子、河野侯元興使義興禪師行密法於斯寺、延久五年癸丑、源侯賴義命北條親經、略○下繕治伽藍、永保二年壬戌、夏旱魃爲虐、下民之患、白河帝命使雩、乃九月、修堂舍、拜主僧良覺爲權大僧都、又自書于扁以揭矣、寬治三年己巳、堀河皇帝使北條親經置弘法像、永久二年甲午、鳥羽院命爲祈願所、秋七月七日、河野親淸與良賢共圖繕治堂舍、崇德帝、幸讃州也、寬花於斯寺、乃詠國風一篇、車廻櫻是也、年歷失傳、不知誰氏之世矣、治承元年丁酉、高倉帝使河野通淸附大盤若六百卷、又置經藏庫、建久元年庚戌、縣官賴朝附田若干、又河野通淸造賴義墓於墓所谷、後移之門首、是亦有司失年歷云、元久初年甲子三月三日、河野通信肇造二十五菩薩之假面、以起十二社權現之祭祀、永仁二年甲午、六原公陸奧守及相模守、命附田若干、文保二年戊午、河野侯通繼營護摩堂及二王門、元弘二年壬子、縣官尊氏附田若干、文明十三年辛丑、河野侯通直修伽藍及山門、永祿九年、欻然火起、焚藥師堂、佛飛揚而憩于櫻樹之梢、天正十九年、織田信雄謫配斯寺、文祿元年、歸京矣、慶長九年、加藤嘉明使載與左衞門移勝山愛宕於此、其墟築城、十年己巳五月二十七日、又使三上亦右衞門繕治堂舍、十四年癸酉五月二日、使二神瑞庵繕治藥師堂及白山堂、十八年癸丑六月、使足立半左衞門修權現堂及數所、寬永八年辛未八月、蒲生侯中務使鵜飼壹岐修彌勒堂及大師堂、正保二年、我眞常侯使大川三郎大夫修堂舍、又賜材木七百五十、寬文十三年五月十五日、天鐘侯使吉村三右衞門、菅谷庄右衞門、內藤加兵衞修權現堂伽藍三層塔辨才堂及諸門、延寶五年、旱魃爲虐、主僧雲龍雩于權現、有效驗矣、夏六月、淋雨、北麓崩埋伽藍、大龍侯使佐

久間義左衛門營之、寶永四年七月十二日、命附田五十石、〇下略

〔伊豫松山世語〕同〇延寶五年、大雨、石手山崩ル、本堂再建、奉行ハ佐久間義左衛門、

〔豫陽俚諺抄〕温泉郡熊野山虚空藏院石手寺〇中略尊氏ノ御書

安養寺當知行地、不可有相違之由、國宜之處也、執達如件、

元弘三年九月三日　左衛門佐言上

〔豫陽俚諺抄〕温泉郡昔ハ此寺六十六坊ニテ在シト、今ハ保壽院、定觀坊、僧林坊、新坊、地藏院也、

〔伊豫古蹟志外傳下〕遊石手寺、堂前有芳樹、名回車櫻、是昔時帝王所觀賞云、因題、〇平時春

遙駐六龍運目矚、堂前花樹異芳芬、勝因今仰白毫處、山上長懸五色雲、〇中略

石手回車櫻　崇德皇帝

名爾志乎和婆、復毛來天見武、花乃春、夕影殘、雪乃古寺、

同　前關白基通

野土成志、借乃乎間志乃、跡毛猶、絕須玉敷、秋乃白露、

彌勒寺

彌勒寺ハ、淳和天皇天長五年、定額寺ト爲リ、尋デ天台別院ト爲ル、今廢寺ニシテ、其舊地ハ伊豫國温泉郡食場村ニ在リ、

〔愛媛面影三温泉郡〕彌勒寺　此寺古は定額寺とて、一國に幾寺と定められたるほどの大寺なれど、今世絕て所在をしらず、春枝云、食場村山中横谷と云處に、彌勒寺山と名付たる處有、大門、又は彌勒堂、毘沙門堂、藥師堂な

どいふ處もありて、即定額寺の跡なり、いつの頃にか燒失て、今は其名のみ殘れり、彼藥師堂は、今石手寺中に遷たり、加藤嘉明朝臣、城を松山に築き給ひし時、城山の東に此毘沙門を遷祭玉ひける、今横谷山毘沙門堂といふとぞ、

〔類聚國史百八十佛道〕天長五年十月、伊豫國彌勒寺預定額寺、　七年九月庚辰、以伊豫國溫泉郡定額寺爲天台別院、

名稱　所在　創建　沿革　堂塔

大寶寺 岩屋寺 附入

大寶寺ハ、伊豫國浮穴郡菅生村ニ在リ、文武天皇大寶元年ノ創建ニシテ年號ヲ以テ寺號トストト云フ、舊ト天台宗ニ屬セシガ、後改メテ眞言宗ト爲ス、四國八十八箇所ノ一タリ、

岩屋寺ハ、同郡七島村ニ在リ、大寶寺ノ奧院ニシテ、嵯峨天皇ノ弘仁六年、僧空海ノ開基スル所ナリ、眞言宗ニ屬ス、亦四國八十八箇所ノ一タリ、

〔和漢三才圖會七十九伊豫〕菅生山四十四四國遍路〇　在浮穴郡　山上南向　本尊十一面觀音立像四尺三寸、三國傳來、　爲頼朝臣

〔夫木和歌抄二十山〕すがほの山伊豫　題不知

朝なぎに漕出てみれば伊豫ちなるすがほの山に雲ぞかゝれる

〔伊豫古蹟志二浮穴郡〕菅生邑〇中略　有精舍曰大寶、古有明神左京其弟隼人者、二人移于豐後居此邑、性好田獵、嚴嶂千里、莫不遍歷登踐、大寶元年辛巳夏四月八日、領獵犬而陟嶺造崗岐、過菅叢中、視有光彩、二子異焼之、則有觀音佛、因以笠覆其上、張披薜爲四壁、安之其內矣、六月十八日、地大震矣、佛飛憩櫻樹、二子就觀、以爲平夷宜安之地、輒起功營一小宇而安焉、後衙役于京師、時有双鶏啣烘飯日來授之二子、人怪之、事升聞、帝比蠲衙役、乃徵賜黃金若干、且詔宏麗此伽藍、置子院一百二十舍、又使佛工

造大日像、其體中藏佛舍利、安之五層塔、使徵天台門釋氏某於百濟、爲主僧矣、左京後死、祠祭於西明神邑、號曰神殿明神、隼人亦死、祠祭於露口邑、號曰耳戶明神、天長中、改台門爲眞言門、仁平元年、罹災、保元初年、後白川帝勅再營、以爲祈願道場、自書菅生山三字、揭之寺、又使嵯峨大覺僧某爲主僧、因號曰大覺院、後世漸頹敗、子院多爲空宇、僅存者十二舍耳、曰大坊、曰中坊、曰西坊、曰本坊、曰定泉、曰十輪、曰西林、曰石垣、曰理覺、曰東角、曰新坊、曰釜田也、以上十二舍皆稱坊焉、

〔愛媛面影四浮穴郡〕大寶寺　菅生山に在り、本尊十一面觀世音立像四尺三寸、百濟國より渡り來る所の天竺佛なりと云、文武天皇大寶年中に建立せり、仍て大寶寺と號く、二王門の二金剛は運慶作、菅生山の額は、後白河院宸筆也、仁平二年燒失せしを、保元二年再造せり、嵯峨大覺寺宮住職せさせ給ひし時、勅命に依て、大覺院と號すといへり、四國順拜四十四番の札所なり、此寺昔は天台宗なりしを、空海奧院を開基有し時、眞言宗に改む、舊は四十八坊有しを、今は大坊、中坊、東坊、西坊、定泉坊、十輪坊、東角坊、新坊、西林坊、釜田坊、理覺坊、石垣坊の十二坊殘れり、

〔伊豫二名洲大鑑〕文武天皇勅而太寶元辛巳年十一月、伊豫國仁五大寶寺於建立、國司河野越智宿禰玉興、亡父守興之遺命仁出處也、

○

岩屋寺

〔和漢三才圖會七十九伊豫〕岩屋寺　四十五　在同郡〇浮穴竹谷村　東向　本尊不動弘法作秘佛

〔豫陽俚諺抄浮穴郡〕海岸山岩屋寺七鳥村　人皇五十二代嵯峨天皇弘仁六年、空海ノ開基、本尊不動明王也、空海一刀三禮ノ不動ノ石佛ヲ刻ミ給フニ、靈像忽岩窟ノ內ニ入給フ、空海隨テ二三丁入給フニ、明王立歸リテ、肉身ノ者此所ニ入ラバ、命ヲ遠ニ失フベシトテ去リ給フ、夫ヨリ石ヲ疊ミ封ジ籠メ給ヒヌ、此處ヲ奧院ト云、空海獨鈷ニテ鑿給フ水アリテ、亡人ニ手向ルコトナリ、常ニ閼ケレバ火ヲ灯テ詣ルナリ、空海又柚ノ木ヲ以テ刻給フ、是今ノ本尊也、其切捨タル柚ノ木生出テ、

堂前ニアリテ枝葉榮エタリ、又此山ヲ海岸山ト云事ヲ末世ニ疑フベキトテ、空海ノ御歌ニ、

山高ミ谷ノ朝霧海ニ似テ松吹風ヤ海ニタトヘン

〔豫陽舊跡俗談浮穴郡下〕海岸山岩屋寺　在七鳥村

岩屋寺と云へるは、菅生山より七十五町計隔、則菅生山奥の院として、嵯峨天皇弘仁年中、空海の開き給ひし靈地なり、

〔伊豫松山世語〕寛保元年四月三十日、京師嵯峨大覺寺前法務大僧正久万岩屋寺へ參詣アリ、

〔愛媛面影浮穴郡四〕岩屋寺〇中略

此邊すべて斷巖絶壁にて、風景たぐひなし、巖と巖との間、わづかに人身を通すべき處あり、俗に迫割と名づく、鎖を攀て升る處あり、此を鎖の禪定と云、二十一級の階子を升りて、白山權現社に至る、此處尤危險し、此より東を望めば、阿波讃岐の海見ゆ、又西を望めば、宇和島九國の境まで見渡さる、岩嶋の不動は松明を點じて詣べく、仙人堂は階子を升りて至るべし、絶壁の頂人の至るべからざるところに、卒都婆たてり、俗に投卒都婆と名づく、其外洞中の舍利塔洞中の彌陀佛等、すべてかぞふるにいとまなし、此國第一の奇觀といふべきなり、

等妙寺

等妙寺ハ、伊豫國宇和郡奈良村ニ在リ、後醍醐天皇元應二年、僧理玉ノ開基スル所ニシテ、天台宗ニ屬ス、

〔愛媛面影宇和郡五〕等妙寺　成妙鄕奈良邑に在り、因て奈良山と號す、本尊如意輪觀音、八十許の老人負て來り、當寺の本尊にせよとて、行方不知、今の本尊是也と、緣起にみえたり、元應二年庚申歲、

理玉和尚の開基也、

〔宇和郡舊記和河原淵殿之事〕一芝村　奈良山等妙寺　開基元應貳庚申歳、開山理玉和尚は、生國淡路之人也、此の理玉和尚故有之、奈良山に入し時、黒毛の駒を洗居たる武人のおのこあへり、其者久しく所持せしとて、佛舍利二粒和尚へ奉る、是曾我兄弟の亡靈となり、夫より目黒の山奥へ入給ふに老翁貳人居住せり、此地に何ほど住宅せしぞと尋ね給ふに、紙袋二ッ出して、我等生涯の内替りたる歯なり、年々入置く、是にて御察し候へとて、牛玉鹿玉を和尚へ奉るといふ、是則鬼王團三郎となり、〇中略

一北山西園寺大納言宣房卿の家の人にも助成有て、十二坊まで、元德二庚午年十月十八日、造營と云々、〇中略

一本尊如意輪觀音也、〇中略　延寶年中に開帳せし本尊は、是也といへり、〇中略

一開山理玉和尚より旭榮和尚迄廿五代、山繁昌す、然處に戸田民部少輔入部の後、此山參詣の序に、山中悉荒し被申故歟、十二坊共に天火の爲に燒失す、其以後寺領等まで取上らるゝにより、次第に破滅に及び、住居成難きゆゑ、一町計里へ御本尊を移し奉る、是は天正十八年の事なり、芝村に有德の人有て、只今の寺地へ引申也、是則鎌田兵衛正濟の末流に、正秀法名は善正と靈光庵の棟札に有之よし、いまは棟札もなくなりぬ、

寺林

〔宇和郡舊記利河原淵殿之事〕一理玉和尚、元弘元年八月上京有之、　後醍醐天皇御宇也、勅願所として、比叡山延暦寺圓頓戒場會天下四箇寺と定る、

東方 關東　寶戒寺　南方 豫州　等妙寺　北方 加賀　藥師寺　西方 肥後　鎭興寺

中央 洛陽東山法勝寺是は白河院御舊跡なり

寺領

〔愛媛面影五宇和郡〕等妙寺〇中略　足利義詮將軍より、等妙寺領文野市を被付之御敎書有り　無年貢

子院

畑五町廿五歩、

〔宇和郡舊記河原淵殿之事利〕一奈良山等妙寺芝村〇中略

一十二坊　智光院　福壽院　如意顯院　戒藏院　淨土院　總堂院　不動院　說性院　上藏院　寶藏院　延命院　靈光庵

名稱所在創建沿革

龍澤寺

龍澤寺ハ、舊ト龍天寺ト稱ス、伊豫國宇和郡魚成村ニ在リ、後醍醐天皇元亨三年、平吉貞ノ創建スル所ニシテ、僧德翁ヲ以テ開山ト爲ス、禪宗ニ屬ス、

〔愛媛面影宇和郡五〕龍澤寺

魚成村奈良谷に在り、舊名龍天寺禹門山と號す、後醍醐天皇元亨三年癸亥、開基開山德翁禪師、願主中尾坂城主采女正吉貞ト云、其後斷絶せしを、後花園天皇嘉吉三年癸亥歲、再興、開山仲翁和尙といふ、仲翁は薩摩鹿兒島薩摩守元久朝臣の長男也、少名梅壽と云、此元久は賴朝公遺腹子島津忠久七世孫、

〔宇和郡舊記魚成殿の事利〕禹門山龍天寺、今は龍澤寺といふ、なら谷の事なり、開山德翁禪師、願主中尾坂城主采女正平氏吉貞、法名伊勢禪師、禪門と云〇中略

一仲翁和尙より星文和尙、夫より立室和尙なり、〇中略康正元年、歲次乙亥、蒲庵龍ヶ森城主豐後守通親に語て、相俱に登山して、周覽するに、精藍を建るに宜かるべき處に杖を卓せり、卽今の境致也、通親一族檀越として、康正元年より文明年中まで三十年間に、佛殿、僧堂厨庫、三門、倉廩、湯浴迄造功畢、時に寺號龍天を改めて龍澤寺と云、

寺領

〔宇和郡舊記利魚成殿の事〕龍澤寺寄進田坪付之事

一一所五百文小左右河内アリカナ崖為賀翁常慶也忌日十月一日半齋同如分

一一所五百文今田の内あせたり為松林妙貞也忌日十二月九日、半齋同如分

維那殿司靈供不可有懈怠者也

右此兩所、為父母作佛院之旨、於末代不可存違亂、少茂無違背之子孫者、彌昌盛可守護者也、將又盆日總領御一人、水御祭の事、從是初日也、若於懈怠者、時々住持可宛行者也、仍為後日如件、

天正十二甲申七月十五日　平朝臣上總介親能手判

若子瀬五郎親盛手判

奈良谷立庄和尚〇中略

龍澤寺寄進狀之事

一せいつめ永代に祐生大師寄進申候也、彼在所万一よそへいたす事候はゝ、奥河の内ともまなか可進候、於後々いらんの方は、道宗祐生の子孫たるまじく候、仍寄進狀如件、

寬正五年甲申霜月十五日　西川兵部少輔道宗手判〇下略

寺制

〔宇和郡舊記利魚成殿の事〕一就于龍澤寺之義、加堂守太年形木〇加堂以下恐有誤脫萬雜公事可除候、并寺山之竹木可切事、堅停止、此旨違亂方々、不可為應能兒孫也、右狀如件、

顯手院亦如件

永正十三年丙子十二月吉日　應能手判〇二人署名略

進上　龍澤寺花鉢閣下〇中略

條々

一對寺中、非常ノ義、申懸輩出候者、一錢切たるべきの事、

一檢地奉行共、自在庄たるべき事、
一山林竹木伐採候義、停止之事、
右之旨、違背之族於有之者、可加成敗者也、
天正十五年七月十八日　淺野彈正少弼
長吉手判

金剛頂寺

金剛頂寺ハ、土佐國安藝郡元村ニ在リ、同郡最御崎寺ニ對シテ西寺ト稱ス、大同年中、釋空海ノ開基スル所ニシテ、寛永中、山内忠義之ヲ再建ス、眞言宗古義派ニ屬シ、四國八十八箇所ノ一タリ、

〔和漢三才圖會土佐七十九〕四國遍路八十八箇所（○中略）
西寺二十六　在安喜郡（本名金剛頂寺）　女人禁界　本尊藥師（弘法作秘佛）

〔日本地誌提要土佐六十四〕佛寺　金剛頂寺（同郡（安藝）元村、同宗（眞言宗）大同中、僧空海創建、世ニ西寺ト云、寛永中、山内忠義再造、寺域三千四百六拾五坪、）

〔土州淵岳志下釋教〕龍象山光明院金剛頂寺ハ即西寺也、弘法大師ノ開基ナリ、此寺ヲ本寺トシ、東寺ヲ當寺ノ開隠居ノ處末寺ノ如クナリト云説アリ、傳聞ノ誤也、本尊瑠璃光藥師如來也、醍醐金剛院ノ末寺ニテ、寺領八十石也、古義派ニテ、昔ハ高野山ヨリ住持下ルト云、凡土左國ノ眞言宗寛文延寶ノ頃ヨリ國君ノ命ニヨツテ、新義興教大師ノ流ヨリ來ル、當寺バカリハ弘法院ニテ古義ナリ、近年ハ常通寺五臺山ヨリ、願ニ依テ新義ノ僧ヲ住持トス、然レドモ末寺ハ古義ヲ、其儘ニ守ル寺モアリト云、

〔土州名勝記上安喜郡〕龍頭山光明院金剛頂寺　弘法大師、大師二所御崎寺同時之開基なり、本尊藥

師如來、則大師の御作なり、大同元丙戌年、大師歸朝之時、麓行道が崎硯が浦に著船し給ひ、此山に登り、草創し給ひしといふ、又嵯峨淳和兩帝の勅願所にして、庄田三千三百斛餘をたまへりとぞ、役國役雜爭等免許之綸旨院國宣、今に明らかなりとぞ、四國八十八ヶ所之其一なり、〇中略鐘一口、銘ニ曰、

大扶桑國南海道土州安喜郡龍頭山金剛頂寺光明院者、弘法大師昔年自法降魔以後、世々相繼爲密宗坊矣、斯地也、前是巨海、後靑山境、遠觀壯谷深勢岨、寔四州之勝攸、一方之靈跡也、爾來年代深遠、紺宇已斜、風雨洗粉墻將壞、爰大檀那太守從四位下藤原朝臣忠義公、夙承業於武門之家、馳名於靑雲下、寛仁愛民、大度治國內、繼神社已絕、舉佛閣已廢、脩治建立、不其幾百許也、以故此寺堂宇再新、法器全備、到其餘之玉軸靈等、皆以華美矣、雖然商樓古鐘已打破也、於是乎命泉州堺之島氏鑄梵鐘、以晨昏、令余等爲銘、〇中略

萬治二己亥三月吉辰　天台沙門見龍日讃　雲溪比丘碧峯宗積　吸江比丘潮山祖淨

名稱　所在　創建　堂塔

最御崎寺

最御崎寺ハ、土佐國安藝郡室戸崎一名最御崎ニ在リ、金剛頂寺ニ對シテ、東寺ト稱ス、釋空海ノ修道セシ所ニシテ、曆應四年、足利氏ノ諸國ニ安國寺ヲ創置セシ時、本寺ヲ以テ之ニ充ツ、後衰頽セシガ、元和中、僧最勝中興シ、山內忠義再建ス、眞言宗ニ屬シ、四國八十八箇所ノ一タリ、

〔和漢三才圖會七十九土佐〕四國遍路八十八箇所〇中略

東寺二十四　在安喜郡　南向、女人禁界、自此至津寺一里　本尊虛空藏弘法大師祕佛　二十町前、上美津村下美津村於是女人拜山、海濱直出津呂浦、〇下略

〔日本地誌提要(六十四土佐)〕佛寺 最(ホツ)御(ミ)崎(サキ)寺(安藝郡高岡村、眞言宗、僧空海開基、創建年月未詳、世ニ東(ヒガシ)寺ト云、元和中、僧最勝中興、山内忠義再造、寺域五百七拾五坪、)

〔土州淵岳志(釋下教)〕室戸山明星院最御崎寺ハ、安喜郡室戸山ニアリ、弘法大師ノ開基ニシテ、京仁和寺ノ末寺也、女人禁制ノ靈地、寺領百二十三石二斗八升三合、此山ニ水ナシ、麓ヨリ八町バカリ毎日水ヲ汲通フ也、四國邊路ニ云キカスルニ、東寺ニテ水ヲ問フナ、西寺ニテ花ヲ問フナト云コトアリ、(○中略)

順徳院

イカナレバ此二文字ヲ契ラム土佐ヲバ出テ佐渡ニ行哉、此御製、土佐ノ傳ニ、承久年中、當國ニ流サレサセ給ヒ、室津ノ邊ニ御座シマシテ、皇居ヲ忍バセ玉ヒ、東寺西寺ニナズラヘテ、最御崎寺ヲ東寺、金剛頂寺ヲ西寺ト名ケサセ玉フトアリ、其後佐渡國ニ移シ奉ルト云ヘリ、然レドモイツレノ書ニモ、此國ニ渡ラセ玉フコト不見、初メ土佐ニウツサントシテ後ニ佐渡ニ赴カセ玉ヒヌレバ、コミ玉フトモイヘリ、

〔土州名勝記(上安喜郡)〕室戸山明星院最御崎寺、(室戸にあり、)大同二年丁亥、弘法大師の開基にして、嵯峨天皇以來代々勅願所なり、本尊は虚空藏菩薩大師一刀三禮の御作なり、(○中略)坂中に求聞持堂あり、是より上は女人禁制なり、明星石、(昔大師闇夜に此にて御經讀誦有ける時、天に向て加持し給へば、一の星降來て照すこと白晝の如し、後此星化して石となり、今に存す、)四國靈場八十八ヶ所之其一なり、(○下略)

〔續日本後紀(四仁明)〕承和二年三月丙辰、大僧都傳灯大法師位空海、終于紀伊國禪居、 庚午、法師者讚岐國多度郡人、(○中略)於是信大聖之誠言、望飛焔於鑽燧、攀躋阿波國大瀧之嶽、勤念土左國室戸之崎、幽谷應聲、明星來影、自此慧解日新、(○下略)

〔最御崎寺文書〕宣旨

左辨官下土佐國

應因准先例遂庄號、斷絕未來牢籠、永爲最御崎寺領、當國室津一色壹處事、

在管安藝郡　四至（東限最御崎寺後横山　南限腹池山峯　西限金剛頂寺領浮津境　北限左貫堺燒尾峯）

右得沙門我寶今月日解狀偁、謹考舊貫、當寺者、〇中略爰去建仁二年二月、伽藍回祿之時者、靈像忽飛去火災之外、彰傍林放光、其後同三年正月、嚴耀祈請之時者、右手亦歸來、於焦熱之底代罪人救苦故也、〇中略勝地雖多、未聞如此靈驗奇特地、因此叡信之餘、去正安年中、所有御寄附室津一邑也、仍令始大滿虛空藏、如意輪、愛染明王等長日之行法、專所奉祈四海之安危、一天之理亂、寶祚延長之御願也、〇中略望請天裁、任申請被下室津一邑庄號宣旨者、佛神含咲、彌施都鄙之樂化、僧侶合掌、倍祈國家之泰平者、權中納言藤原朝臣經繼宣、奉勅依請者、國宜承知、依宣行之、

嘉元四年三月廿三日　　大史小槻宿禰判

少辨藤原朝臣判

〔最御崎寺文書〕宣旨

左辨官下土佐國

應且斷未來牢籠、永爲兩界長日供養法、幷尊勝陀羅尼光明眞言等供料所、且禁斷殺生、當國最御崎寺領潮江庄壹處事、

右得沙門我寶去年十二月日奏狀偁、謹考舊貫、當寺者、三地大聖悉地成就之道場、明星天子影向顯現之靈地也、本尊者則平城皇帝御宇、應勅命、高祖大師手自一作三禮之刻彫、虛空藏菩薩像也、利生揭焉、所願能滿者、因玆令修金剛胎藏兩部長日行法幷尊勝陀羅尼光明眞言等、專所奉祈四海之安危一天之理亂也、爰彼潮江庄者、爲當寺領、雖無違亂、爲斷末代之牢籠、被下不朽之鳳綸者、承前之恒規乎、望請天恩、且向後被停止國衙以下方々之亂妨、且以當庄永代爲長日兩界供養法幷尊勝陀羅

寺職

尼光明眞言等之供料所、可禁斷殺生之由、被下宣旨者、將奉祈國家泰平寶祚延長者、權中納言藤原朝臣實香宣、奉勅依請者、國宜承知、依宜行之、

大史小槻宿禰判

德治三年四月十六日

少辨藤原朝臣判

〔壹簡集拾遺一〕當國最御崎寺領室津潮江兩莊事、任度々勅裁幷官符之旨、寺家知行、不可有相違、仍執達如件、

建武二年四月十三日　　土左守

謹上　淨印上人御房

〔最御崎寺文書〕寄進　土佐國最御崎寺

當國大高坂鄕幷國澤名、大高坂左衞門太郞、同道江房等跡、永武一邑櫻田一郞跡一地頭職事、

右爲六十六基塔婆料、所々被寄附也、守先例可被致沙汰之狀如件

曆應四年十一月廿九日　　權大納言源朝臣〇足利尊氏

〔最御崎寺文書〕管領中最御崎寺、爲當門往古以來末葉、而密法流傳之由緖、不混于他俗姓、今正嫡子世々爲當住持、雖然中間佛宇殿堂暫零落、爰最勝上人歎靈場破壞、庶幾再興精舍、加之今度被加貴命、伽藍僧寶共屬舊儀由、達當宮高聞、喜感不斜、彌向後被加扶助、國家安全武運長久、精祈無怠慢様、於被相計者、自他太慶、不可過之旨、御室宮御消息候、恐惶謹言、

十月十一日　　寬海判

松平土佐守殿

名稱　所在

創建　堂塔

金剛福寺

金剛福寺ハ、土佐國幡多郡伊佐村ニ在リ、弘仁年中、嵯峨天皇ノ勅ヲ奉ジテ、釋空海ノ創建スル所ナリト稱ス、後漸ク衰頽セシヲ、寛永年中、山内忠義之ヲ再建セリ、眞言宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會七十九土佐〕四國遍路八十八箇所〇中略蹉跎寺　三十八　在幡多郡伊佐村　山寺後深山　本尊千手觀音立像八尺

〔土州淵岳志下釋教〕蹉跎山金剛福寺、補陀洛院ハ、〇中略傳嵯峨天皇ノ御願、忠仁公〇藤原眞房ノ執奏ニテ弘法大師ニ勅詔有テ、コレヲ創造ス、宇多、醍醐、村上、冷泉、圓融ノ天皇ヲ始メ奉リ、代々ノ勅願所タリ、〇中略蹉跎山舊ハ月輪山ト號シケルガ、遲峯上人住持ノ時、天魔障碍ヲナス、上人一指ヲ擧テ降伏セシカバ、諸魔悲歎蹉跎セシ故、月輪山ヲ改テ蹉跎山ト號ス、〇中略世人ノ説ニ、當山ハ役行者ノ開基ニテ、多田滿仲ノ再興也トモ云〇下略

〔蹉跎山縁起〕夫蹉跎山金剛福寺者、過去遠々の佛諸菩薩説法の淨場也、〇中略伏て往事をうかゞふに、嵯峨天皇弘仁暦忠仁公、(藤原眞房、號白川大臣、攝政始、大職冠六代孫、)事の由を奏聞有て、弘法大師に勅詔を下し、則勅願所として伽藍を起立し、大悲觀世音菩薩を本尊とす、(於靈像有口傳)鎭護には熊野三所權現、愛滿實滿白皇白山等を勸請し奉る、〇中略安和二年二月廿二日、後小野宮右相府、(實資公、忠仁公六代孫、)夢想に感じて、當山によぢのぼらせ給ひ、缺漏を補ひ、錦帳を飾り、世財を僧侶にくばらせ給ひ、一郡土貢當寺の依怙たるべしと、紙疊をのこさせ給ひ、二世の安樂をいのらしめ玉ふとなり、且は忠仁公の御素意のすゝめなるべし、〇中略就中嵯峨天皇、宇多天皇、醍醐天皇、村上天皇、冷泉院、圓融院等、代々勅裁、此外往古の公驗、貴賤田畠寄進狀等、當寺回祿時燒失之由、本家政所の御下文に見えたり、可謂無念者歟、康元元年八月廿七日回祿せしむ、造營早成、文永四年供養をとげゝる、(其間一年)十本尊の御身に後光明寺殿御名字を籠らる、正應二年二月四日又回祿せしむ、營功早成て、正安二年供養あり、(其間

十二年本尊御身に後光明峯寺殿御名字を鐫奉る、延慶三年正月二日又回祿、心慶僧都政所の御下文を申請、以一郡之奉加、不日成風の功をなす、今の堂舎これなり、〇下略

〔土州名勝記〕下幡多郡 蹉跎山補陀洛院金剛福寺、〇中略本堂の右に有、十三重の塔は、忠義公〇山内御造立、其外愛染堂、役行者堂　大師堂　熊野權現　天神宮　仁王門　其前に除石といふ有、辰巳の方に伊勢兩宮、左の方をば室滿が嶽といふ、元此地は熊野權現垂跡の地なりしを、大大師改て千手觀音を安置したまふ、東は窪津川、西は松尾すい川まで、百八十丁を境内とす、

〔金剛福寺文書〕前攝政〇藤原師忠家政所下、土佐國幡多庄沙汰人百姓等、

可早任正嘉元年政所御下文旨、依院主快慶勸進奉加造金剛福寺堂舍神殿以下用途事、

副下　御奉加御敎書　正嘉政所御下文案

右造營者、公私之祈禱、寺院之大營也、子細且見于正嘉御下文、仍庄内住人等、任快慶之勸進宜奉加、兼又於寺領田畠之所當者造營之間、閣寺僧之依怙、爲院主之奉行、一向可宛用作料也、次香山寺供田內南佛領作分同可宛用、至自餘供田者、隨堪可合力之狀、所仰如件、沙汰人百姓等宜承知、勿違失、故下、

正應二年五月　日　案主掃部允中原花押〇以下署名略

〔金剛福寺文書〕政所下幡多庄蹉跎御崎住侶等仰下條々〇中略

一當寺造營事

右住侶等可令合力之上、以供田土貢可宛作料以下用口被定下畢、雖及五ヶ年、于今無土木之實云云、是併寺僧等緩怠之故歟、太口口口謂、不日可終造畢之功也、〇中略

正應五年十二月　日　案主左衞門尉中原

別當前丹波守源朝臣花押　大從前能登守安倍朝臣花押

寺領

〔金剛福寺文書〕領國之中、足摺山者、昔時爲忠仁公〇藤原良房執奏、嵯峨天皇御願、弘法大師草創、觀音垂降之勝地、熊野鎭護之古跡也、爰以閣臺極工人之妙、樓殿盡丹青之飾云々、然而露往霜來、爲風雨悉破却、僅存一宇、而今於被加修覆之扶助者、佛神重增擁護、武運永及子孫者、依爲當門甚深之由緒、粗令仲子細給旨、御室宮御消息所候也、仍執達如件、

寛永二
九月朔日　寛海花押

松平土佐守殿

〔金剛福寺文書〕花押

蹉跎山御寄進之在所津倉淵四至事、嘉元元年撿注帳、同二年符、元弘四年正月御下知狀等、明鏡之處、布加賀入道道印號地下專當□□□不避渡在所云々、太以不可然、早任御寄附狀之旨、南限小名師子川湊海、北限間崎小川、東限本鄕湊口、西限白崩峯、全寺家知行、可被致御家門長久御祈禱之由、御氣色所候也、仍執達如件、

文安四年三月廿九日　前大藏卿花押

蹉跎山院主法印御房

〔土州淵岳志下釋敎〕蹉跎山金剛福寺補陀洛院ハ、眞言第一ノ靈地也、京仁和寺末寺、寺領百石、昔ハ幡多郡ノ内三万石寺領ナリシト云、

寺職

〔金剛福寺文書〕讓渡土佐國幡多庄蹉跎三崎金剛福寺院主職事

右當寺院主職者、從大師草昔〇昔恐創假以來、數代相承、敢無他之妨、故撰法器淨業之輩所讓與寺務之所職也、爰阿闍梨村慶爲法器之仁間、成附弟之思處、先立于心慶早生、無力次第也、此上者、雖爲何仁、撰法器之輩可讓與之處、定慶宮內卿公適爲器量弟子之間、代々攝政家御下文、幷次第手繼、重書、供田、寺田、免田畠等坪付本券、住房、屋敷、男女所從、資財雜具不殘一塵所讓渡實也、更不可有他之違亂、

兼又於供僧幷末弟等之中、若背院主之命、及敵對之儀者、任前攝政家御下文、幷先師南佛房之置文旨、擯出門徒之中、可停止寺中之經廻、將又院主幷供僧等一期之後、不及法器之沙汰、以供田寺田讓與道俗之輩條、御祈禱退轉之基、寺領顚倒之源也、尤可撰法器之仁、定此等之趣、早致寺務管領、先造營興隆、可專公私之御祈禱、仍爲後々末代讓狀如件、

正慶貳年五月十日　　院主權少僧都心慶花押○中略

蹉跎山金剛福寺院主職昌宗法師讓與事

右彼寺別當職者、從弘法大師以降、嵯峨、淳和、延喜、村上、冷泉、一條院等御門不淺叡信、弘仁十三年七月二日御手印勅在之、從其以來、金峯上人、性空上人、賀登、日圓等傳來、于今無退轉、中比住持南佛上人、心慶、受慶、隆慶、南慶、宥心、善慶、善雅八代相續、子孫付屬來者也、以上依闕闕及七百年歟○中略

文明十一年己亥八月十八日　　法印善雅花押

〔金剛福寺文書〕土佐國幡多庄內諸檀那等、熊野參詣先達職事、就蹉跎山之院主職、知行不可有相違之由、乘院大僧都御房御奉行所候也、仍執達如件、

應永廿五年三月廿七日　　權律師慶法花押

謹上　大輔僧都御房

〔日本行脚文集五〕蹉跎寺、かねて耳おどろく靈山、蓬むぐら荊畔、七十八坂の曲徑、陘たゆく簦笠さへ重げなる、○中略

蹉跎寺美眺、暫默して向上(みあぐる)に、北嶺にはかつらおのこも額をうち、南極は天海肌とをくあはすめる、西は日向さつまがた、硫黃島の嶽岳も、雲の背に負たるや、本院金剛福寺、如眞法印に淸談して案內をこひ巡禮す、

古事類苑

宗教部六十九

佛教六十九

聖福寺

名稱 所在 創建 沿革

聖福寺ハ、筑前國那珂郡博多ニ在リ、後鳥羽天皇ノ建久六年、禪宗ノ開祖榮西ノ創建スル所ニシテ、我邦禪院ノ甚ダ古キモノナリ、而シテ豐臣秀吉、小早川隆景、黑田長政等ノ再興ニ係ル、今臨濟宗ニ屬シ、京都妙心寺ニ隸セリ、

〔和漢禪刹次第〕十刹位次 筑前博多 聖福寺 安國山、開山千光祖師、扶桑最初禪窟、[illegible] 開山塔聖院、號ニ龍淵無染流、白山妙理祠鎭守、

〔筑前舊志略 博多上〕聖福寺 御供所町ニアリ、安國山ト號ス、禪宗濟下京都妙心寺ニ屬ス、

〔筑前國續風土記 四 博多〕聖福寺

千光國師榮西開基の寺にて、建仁寺に屬せしが、近世九皐宗鴨と云し住持の時、故有て關山派と成、今に至て然り、安國山と號す、開山榮西は明庵と號し、朝廷より千光國師と號を賜る、文治三年入宋し、始て黃龍八世虛庵の禪を傳て、建久二年歸朝す、是日本に禪法傳來の初なり、時に博多におゐて宋人の建立せし百堂の舊跡有、此所に寺を立ん事を願、申狀を以て大將軍源賴朝卿の嚴聽に達す、其申文に云、

榮西言上

博多百堂地者、宋人令建立堂舍之舊跡也、而件精舍破壞之後、再不修營之間、偏爲空地、雖送星霜、既亦依爲佛地、人類不居住、仍建立伽藍、欲備大菩薩御法樂、致本家御所禱、并建立堂舍、安置丈六

釋迦彌勒彌陀之三尊、鎭二護國家、且爲レ除二凶徒之障碍、且爲レ備二向後之證跡、殊被レ仰下可レ加二守護一之由一者、佛法興隆之御願、何事如レ之哉者、賜二御下文、欲レ遂二造營之功一而已、

建久六年六月　榮西言上

此書賴朝卿へ奉し、本書榮西自筆、今に聖福寺に傳れり、賴朝卿の袖判有、又大なる朱印、右の文の中に五ッあり、賴朝卿卽此地を榮西に給ふ、依て此寺を立、開堂説法す、是よりして日本禪法始て興隆せり、故に後鳥羽院より、扶桑最初禪窟の額を宸翰に遊ばして給はる、爰を以て、當寺には賴朝卿を以て、開基の大檀那とし、古來より、佛殿に賴朝卿の位牌を安置し、毎年忌日に諷經執行す、元祿十一年正月十三日、賴朝卿の五百年忌日當りしかば、住持舟岩禪師、兼てより僧徒を集め、法會をなして、遠諱を弔ひ、冥福を祈る、追遠慕古の志、誠に舊恩を不レ忘と云つべし、此時に、前國主光之公より、賴朝卿の眞影を廣く求め、山州高雄寺に在りしを摸寫せしめて、遠忌の法會以前より寄附し給ふ、當時は此寺の境内甚廣かりしとかや、其界限の內、今は民家に成たる所多し、北に西川町有、是も當時の西門ありし所なり、今は昔にたかすといへども、寺門猶廣し、古者諸堂諸坊、ところせく作並て繁榮の寺なりしに、亂世に度々兵燹にかゝりて、皆焦土と成ければ、此寺も同じく炎燒せり、

〔千光法師祠堂記〕建保元年、〇中略夏示二微疾一、〇中略坐レ椅安祥而逝、〇中略實七月五日也、〇中略所レ創大道場三、曰建仁、曰壽福、曰聖福、

〔聖福寺佛殿記〕西海道筑前博多津之安國山聖福禪寺、光明庵法師開化之地也、師自二日本東一入二中國一、抵二淛東天台、乃是宋淳熙間也、歲大旱、請レ師禱レ雨、身發二千光、上燭レ天、雨大澍、世因以稱云、事在二天童虛庵和尙記、玆不レ書、師歸二大啓宗乘、刱二始玆山、則元久改元初年也、至レ今無隱禪師已三十三代矣、禪師亦自祝髮浮海、至二中國、凡三十有三年、大得二其道、以歸、名震二朝野、卽奉レ旨主二席玆寺、乘二座之暇、顧二瞻杏諷慨歲

寺格
寺領

月之推遷、念前人之靈蹟、視殿宇之無成、遂奮志於作興、於是升堂據法牀、考鼓集衆曰、玆寺千光法師所建、寔西海法窟、日東名刹、廢而不治、其如法師覺皇何、衆咸悚悅、唯禪師命是從、赴功趨事、莫敢或後、詢諸司帑、則寺之歳入、緇素衆多、廩稍恒不給、非勸募難以有成也、乃榜于山門、而施者咸集焉、師嘗以春秋農隙時、遊覽山水間、逢友富人傾聚落迎拜、錢幣之獻、材木之奉、舟衔騎踵、以先至爲幸、至若不彰其名而樂施者恒有之、禪師又以衣鉢之餘悉助其費、亦凡若干緡、苟非道尊德重一出於大公至正忠義之心、其能致此哉、爲殿四楹崇若干亦廣若干亦、疊石爲基、覆以瓴甓、狨以來室、左右回廊、輪奐翬飛、藻棁妍、中設三世佛像、塗金飾朱、五采鮮好、天光日華、遶蕩櫺檻間、鼓鐘相宣、梵唄相應、眞若祇園勝地也、迨爲九州冠、此今之所剏、而昔之所弗及也、經始於正平十年月日、落成於正平二十有二年、於是寺之侍史泊寺之僧、以禪師之命來徵予記、予適以避世至其國、與禪師素相聞、今復相逢遇於萬里之外、義弗敢辭、

〔攝壤集上寺院〕十刹京師幷諸國及甲刹○中略　筑前聖福寺

〔筑前國續風土記三博多〕一聖福寺○中略　秀吉公博多再興の時、漸くかたばかりに寺境を再興す、小早川隆景、當國を領し給ひし時、當時に方丈を建つ、今の前堂是なり、寺領三百石ヲ寄附せらる、隆景の養子秀秋相傳て、當所を領せられし時、百石減せり、長政入國の時、慶長六年、二百石の寺領を寄附あり、先國主小早川秀秋の時の寄附の例に任せしかば、近年に至り、佛殿、王門、鐘樓、開山堂、經藏等建立あり、

〔聖福寺文書〕聖福寺領當知行之目錄

一博多中行堂力者、幷木工鍛冶諸役者等、居屋敷給分之事、
一那珂郡內三宅村參拾町、幷千手丸拾貳町之事、　一早良郡內西山伍町之事
一夜須郡內砥上參拾町、幷依井㮶町之事、　一穗波郡內大豆田參町大之事是者寶淨院領也

一賀摩郡内安國寺之事、寺領肆拾町也、是者寶淨院之末寺也

弘治參年丁巳九月廿三日　常住　碩鼎在判

以上

〔聖福寺文書〕筑前國那珂郡三宅村之内貳百石之事、今度以檢地上令寄附訖、全可寺納候也、

文禄四　十二月朔日　朱印〇豐臣秀吉

正福寺

〔國師日記〕寛永八年三月七日、一翌日聖福寺へ參、寺中不殘一見仕候、殊外零落與哀歎候、則寺僧衆相集、樣子共委承候處、寺僧廿人計之内、三分二者、先住持一燈會裏之者を置候て、空屋敷餘多拘取、其内一燈も代僧置候而然ニ老僧衆被申付儀共不承、奉公人、我寺役をも不勤、何共無正體樣子ニ御座候、拙子從國師無住持間何篇申付候へと被仰聞候條、其分被相心得候へと、申付候得共、口論計仕、俄落著申間布體ニ候間、諸塔頭之書立仕、其上先世當法度九箇條相渡申付、即其條子書寫候て、太守家老之小河内藏允、栗山大膳方へ遣、聖福寺之儀、任國師被申付、如此申付候、此外寺中無調法之儀も御座候はゞ、可然樣ニ被仰付可給候、國師も無住持間、彌御心添候て被下候樣ニと、被申事候由、吳々以書狀申入候キ其條子書今度遣候條、可然候はゞ、被懸御目候而、以來者、何篇之儀、國師樣以御直判被仰付樣ニ仕度候、一先住持退出之後、寺領貳百石之所、大虛、悟法、其外役者ニ一兩人取計ニ而候間、定而常住之用相違、餘慶も候哉と申懸候得者、最前一燈退出之時、一器をも不殘候故、其後者借錢仕、寺用相續候間、從今年者、少々餘慶も可有之哉と被申候間、各無調法ニ被仕候而は、聖福之再興も難成、復遠規候甲斐も無之候へば、國師樣も、各無調法之樣ニ可被仰付候、何事も相替儀者從拙僧註進申候へと、被仰付候間、各油斷候はゞ、可爲曲事由申渡候、算用をも大形可承と存候得共、後此一度ニハ成間敷と存、先右之老僧衆ニ、一兩人相加申付置候、太守家老之衆も

雜載

國師様御寺ニ候間、如何様ニも御計次第との内意之由承候條、此次彌太守へも、家老衆へも、以書被仰入候はゞ、首尾能可相調と存候、太守四月中ニ可爲御東行由候間、於其地直能々被仰達候様ニ可被仰上候、乍無調法被仰付候首尾ニ候間、從愛使者何時も罷渡、肝煎可申候、先住持一燈、去年迄出世之衣著仕由承候間、左様之義迄可申と存候得共、當正月ニ者、黑衣ニて太守江被罷出由候間、責而と存事ニ候、且又何篇寺僧衆へ申渡候折節不罷出僧得首座、又口論仕、座を立候僧導首座と申、達々不隨寺法、隨意之人と承候間、今度も被退出候様ニと存候得共、可得御意と存、相待候、爲御心得申入候、

(聖福寺文書)尊翰拜讀仕候、就島津御退治、此境罷下候、被聞召付、御使僧御卷數扇子幷胡桃贈賜、辱存候、其津可再興候條、寺家御建立尤ニ候、不可有如在候、恐惶謹言、

十月十〇天正十五年十三日　　黑田官兵衞尉孝高花押

聖福寺　侍衣禪答

(聖福寺文書)釜山浦爲先退祈禱之配供到來、悦之至候、彌以可被抽丹精事肝要候、尙山口玄蕃頭可申候、恐々謹言、

十月二〇慶長年十日　　中納言秀秋小早川花押〇

聖福寺

承天寺

承天寺ハ、筑前國那珂郡博多辻堂町ニ在リ、四條天皇仁治三年、宋人謝國明ノ建立スル所ニシテ、禪僧辨圓ヲ以テ開山ト爲ス、寬元元年、勅シテ官寺ト爲ス、此寺屢、火災ニ罹リ、佛堂三門

名稱 所在　創建 至塔　寺格　寺領

等ハ、僅ニ其礎石ヲ存スルノミ、今臨濟宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會筑前八十〕承天寺　在博多禪宗　寺領三百石　開基　聖一國師　塔頭數多

〔日本地誌提要筑前六十五〕佛寺　承天寺同所(那珂郡博多)辻堂町、禪宗、僧辨圓開基、仁治三年壬寅、宋人謝國明創建、寺域壹萬六千百貳拾坪、

〔筑前國續風土記博多四〕承天寺

聖福寺の南にあり、萬松山と號す、東福寺に屬して、十刹の第口位とす、開山は聖一國師圓爾なり、〇中略此寺も亦聖福寺と同じく、度々兵火にかゝりて、佛堂三門は只礎のみ殘れり、〇中略いにしへは塔頭四十三區あり、今わづかに十四區殘れり、常樂院、寶聚庵、天興庵、四德院、天德院、寨德院、祥麟院、本城院、海藏庵、退耕院、釣寂庵、元亨庵、禪光院、乳峯寺、此中海藏庵は是虎關和尚開基の地也、

〔元亨釋書淨禪七〕釋辯圓字圓爾、以字行、姓平氏、駿州藁科人、〇中略嘉禎元年、泛海、十寅夕而著宋明州界、即理宗端平二年也、〇中略淳祐元年四月、辭佛鑑、鑑出密庵師祖法衣幷自贊頂相與之、〇中略仲夏發四明、孟秋著博多、本朝仁治二年辛丑也、〇中略仁治三年秋、謝國明於博多東偏、創承天寺、與爾領之、佛鑑聞新寺事、書承天禪寺及諸堂額諸牌等大字寄之、佛鑑書法妙絕、故有此送、宰府有智山寺者、西州之大講肆也、嫉爾之禪化、欲毀承天新寺、執事者聞于朝、寬元元年、勅賜承天崇福二刹為官寺、而息有智山之濫寇、爾乃高揭佛鑑所書勅賜大字、又協鑑之遠識也、〇下略

〔和漢禪刹次第〕十刹位次　承天寺筑前博多　萬松山、開山聖一國師、相那謝氏、開山塔曰常樂院、

〔筑前國續風土記博多四〕承天寺

天文廿一年、大內家の寄附狀に、當國那珂郡野馬、高宮、平原三箇所、同郡藥王院入法寺、並肥前國神崎郡の內百町地を、先例に任せ、寺領とするよし見えたり、文祿四年十二月、秀吉公より那珂郡三宅村にて、二百石の寺領を寄附したまふ、此前隆景より聖福寺とおなじく寺產寄附せられしならん、文書廢はらされば詳ならず、筑前中納言秀秋、慶長四年に、寺產百石を減じ、那珂郡春日村の內にて百石附せらる、長政公入國の後に、先

國主の例に任せ、百石の地を寄附し給ふ、

名所 創建 堂塔

崇福寺

崇福寺ハ、筑前國那珂郡箱崎ニ在リ、四條天皇仁治元年、僧湛慧ノ御笠郡横岳山ニ建立スル所ナリ、天正十四年、兵燹ニ罹ル、慶長五年、藩主黒田長政、之ヲ今ノ地ニ移シテ、其菩提寺ト爲ス、臨濟宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會八十筑前〕横岳山崇福寺　在宮崎松原中禪家　寺領六百石

〔筑前國續風土記八御笠郡〕横岳山崇福寺址

此寺の跡、安樂寺の西北にあり、則宰府村の境内なり、思ひ川をへだつ、むかし此所に崇福寺あり、此寺横岳の下にありし故、山號を横岳山といふ、崇福寺の事、那珂郡の所に詳にしるす、四條院仁治元年、湛慧といふ僧、始て此寺を立、其後湛慧、大應國師南浦明和尙を請じて、此寺の開山とす、南浦は徑山虛堂に嗣法せり、其寺天正年中兵燹にかゝりて、再興する人なし、長政公の時、春屋和尙のすゝめに依て、箱崎松原に崇福寺をうつさる、此所に方丈、法堂、佛殿等の礎の石猶存せり、いにしへはさばかりの大寺にて、南に向ひて諸堂をたつ、僧坊甚多かりしといふ、靈勝院、長松軒、蘭玉軒、雲谷庵、雲花庵、棲鳳軒、逢春軒、雲松軒、毘盧庵、正瑞庵、心宗庵、大中庵、勝齋庵、三友軒、向陽軒、正傳庵、大聖庵、又東軒、正淵庵、耕閑軒、大成軒、正卯庵、又八景あり、飛瀑岩、瀑布今も有、此君亭、竹林今少殘れり、圓通閣、甘露井、今も井有、古覆陰藤、瑞雲庵、白蓮池、今も纔に殘れり、長松嶺、寺の西なる松山をいふ、是なり、此地は谷の間にありて、いと閑寂なる境區也、湛慧墓は、横岳にゆく道の傍にあり、此所入定の地なる故、石塔をたて、其しるしとす、

〔筑前國續風土記五那珂郡〕崇福寺

四條院仁治元年に、湛慧といふ僧、太宰府横岳に一寺を建立す、其翌年聖一國師圓爾、宋國より歸國し、博多に著く、湛慧是を請じて開堂說法せしむ、聖一の師、經山の佛鑑禪師（無準和尙）能書なりしか、勅賜萬年崇福禪寺の扁額を自筆して、聖一にあたふ、聖一其額を持來り、此寺に掲て寺號とす、（無準かれてより勅賜の二字を書し、事、元亨釋書第七圓爾傳に委し、）山號は則所の名を用て横岳山といふ、後嵯峨院寛元元年に、勅詔有て、博多の承天山と同時に官寺となり、西都法窟といふ勅額をたまふ、（承天寺は仁治三年に圓爾創立）其後圓爾東福寺に住持の時、湛慧より南浦明和尙を請じて、當山の開山とす、（○中略）其後後二條院嘉元元年に勅を蒙り、京都万壽寺に住持せり、是に依て當寺を弟子卽山和尙に讓りて住持せしむ、其後は彼の法眷一派の長老、かはる〳〵住持し、今に至て八十二代に及べり、此寺むかしは繁榮の地にて寺產も多し、大友宗麟の時も猶筑前、豐前、肥前にて、二百三十四町六畝の田地此寺の產なり、然るに天正十四年七月、薩摩の兵、岩屋の城を責落せし時、此寺も程近ければ兵火にかゝりて、數多の堂宇悉く灰燼と成ぬ、此時に至て、龜山院、後二條院、花園院の宸翰、勅額、綸旨、及虛堂より傳來の經錄、墨跡、珍器、重寶、一時に皆燒失せり、其後再興する人もなく、名のみ殘りて侍りしに、慶長五年、長政公（○黑田）當國の主と成給ひて後、大德寺の春屋國師、此寺再興の事を願はる、長政公もとより春屋に歸依參得し玉ひしかども、其身八旬に及び、遠國の遊歷成がたく、法姪雲英和尙をさし下さる、長政公宣ひけるは、宰府は福岡より遠路にして、常に參詣しがたし、崇福寺を博多の東十里松の內に移し、菩提所にすべしとて、今の地に經營せらる、其翌年雲英は上方にて遷化せし故に、當寺營作の事を春屋の弟子江月和尙に任せらる、春屋遺命して、遷化の後は、當寺及大德寺の內龍光院ともに、江月住持すべきよし定めらる、是に依て當寺の住持、今におゐて江月法孫相續す、かくて數年を經て、寺の營作成就せり、方丈、三門、佛殿、開山堂、鎭守社、庫司、僧堂、浴室、書院、小廚、鐘樓、庫藏、外門、內門、廊下等、悉長政公建立し玉ひぬ、此外塔頭三軒あり、瑞雲庵は、博多の富商島井宗

室建立す、心宗庵は、江月和尚建立、正傳庵は、長政公の家臣久野外記入道卜眞建立せり、慶長六年に、長政公寺領三百石寄附し給ふ（是姪浜にありし時なるべし）其後開山塔領五十石寄進せらる、都合三百五十石の寺産あり、（○中略）此寺は右に記せし如く、むかしは御笠郡横岳の下にありしを、長政公當家の墳墓の地として、且冥福を求んために、爰に移して改立し、菩提寺とし玉ひしかば、如水公の墳墓をこゝに築き給ふ、是初なり、其碑銘は、禪僧玄蘇長老是をかけり、此僧は南禪寺聖福寺に住持し又對馬にありしに、秀吉公の命をうけて、大明の朝廷に至て筆談し、異國本邦に名を稱せらる、其後長政公をこゝに葬りて墓を築き、石碑を建立し、遺命によりて碑銘は林道春是を作れり、是忠之公の時なり、長政公は此寺を初めてこゝに移し、改造り給ひし本主なり、

〔太宰管內志（筑前二十三御笠郡）〕崇福寺

筑陽記十巻に、御笠郡宰府村枝村横岳勝禪寺云云、崇福寺舊跡也、傳云、云云、寛元元年、詔興西都法窟之勅額、爲官寺、其後附屬當寺於大應國師、天正十四年、薩摩勢攻岩屋城、罹寇火、寺院悉爲烏有、慶長年中、長政朝臣受封於當國之時、京師紫野大德寺春屋口國師者、大應國師之法孫也、因歎當寺廢亡、法甥雲英和尚下當國、冀再興於國主、國主許諾之、當地依爲邊鄙、十里松間移焉、（横岳の子院と云は、雲勝院、叢花庵、長松軒、鳳凰庵、心宗庵、勝輝庵、白陽軒、大雲庵、心瑞庵、大中庵、三友軒、正傳庵、又東軒、正禪庵、耕閑軒、大成軒、正卯軒是なりと云、又横岳にゆく道口に、瑞雲墓と云物あり、是入定の地なれば、石塔な立て印とするよしいへり、）

〔太宰管內志（筑前七那珂郡）〕崇福寺

仙巣稿下巻、龍光院殿碑銘に云云、以紫府崇福禪寺、徙宮崎松間、招請大德禪寺雲英大和尚、開堂演法、發動衆聽、古人云、王者德出山陵、洞慶雲出雲英、乃是居士慶雲也とあり、（○中略）寺は官道の西傍に在て、東南方に向へり、境內廣く塔中口區あり、

〔元亨釋書（七淨禪）〕釋辯圓字圓爾、以字行、（○中略）嘉禎元年、泛海十寅夕而著宋明州界、卽理宗端平二年也、

○中略淳祐元年四月、辭佛鑑、○中略仲夏發四明、孟秋著博多、本朝仁治二年辛丑也、○中略佛鑑臨別自書勅賜萬年崇福禪寺八大字、囑而曰、女最初住院以是爲額、爾受已白言、佗時若庇身茀廬、或掲崇福名、勅賜二字豈我之有哉、鑑曰、女氣宇必爲王公欽崇、女只將去、不得避遜也、爾携而歸、先是湛慧就橫嶽山建精舍、聞爾歸即日來請入院開堂、仍以佛鑑所囑崇福爲寺號、○中略寛元元年、勅賜承天崇福二剎爲官寺、○下略

觀世音寺

觀世音寺ハ、筑前國御笠郡觀世音寺村ニ在リ、天智天皇、其皇妣齊明天皇ノ遺志ヲ奉ジテ開基シ給ヒシ所ナリ、寺中ノ戒壇ハ、日本三戒壇ノ一ニシテ、西海ノ沙彌、皆此ニ就キテ受戒ス、事ハ戒律篇戒壇條ニ詳ナリ、

名勝所在

〔拾芥抄 下本諸寺〕觀音寺 在法性寺、又在筑紫、在戒壇、

〔筑前舊志略 上〕觀世音寺　觀世音寺村ニアリ、清水山普門院觀世音寺ト號ス、

〔筑前國續風土記 七御笠郡〕觀世音寺

普門院清水山と號す、源氏物語玉かづらの卷には、大貳の御館のしみづの御寺の觀世音寺に參り給ひしこと書り、寺の後の田の中に、清水の出る所あり、この故に、清水の寺と號せしにや、

創建

〔續日本紀 四元明〕和銅二年二月戊子、詔曰、筑紫觀世音寺、淡海大津宮御宇天皇○天智奉爲後岡本宮御宇天皇○齊明誓願所基也、雖累年代、迄今未了、宜太宰商量充駈使丁五十許人、及逐閑月、差發人夫、專加撿挍、早令營作、

〔東大寺要錄 六末寺〕太宰府觀世音寺 在筑紫國三笠郡、養老七年癸亥造觀世音寺、續日本紀、

右和銅二年二月十一日、天智天皇第四皇女元明天皇之建立也、元明天皇和銅二年二月戊子、詔曰、筑紫觀世音寺、淡海大津宮御宇天皇奉爲後岡本宮御宇天皇誓願所基也、雖累年代、迄今未了、宜太宰商量充駈使丁五十許人、及逐閑月差發人夫、專加撿挍、早令營作云々、後孝謙天皇立戒壇、

〔筑前國續風土記七御笠郡〕觀世音寺〇中略

本尊

此寺の本尊は如意輪觀音、天智天皇の御願にて、座像なり、其高九尺有、西の脇は不空羂索觀音、天武天皇の御願にして、高一丈六尺あり、東脇は、持統天皇の御願の十一面觀音なり、文武天皇の御時、海中より引出しけるなり、觀音の内、岐島觀音といふをも、厨子の内に安置せり、鳥羽院保安年中に、太宰大貳長實阿彌陀佛を西の端に安置し、崇德院の御時、大治年中、太宰大貳經忠、馬頭觀音を東の側に安置し、保延年中に、觀音寺別當阿闍梨維寛、新に十一面觀音を造進せり、

〔筑前國續風土記六御笠郡〕觀世音寺〇中略

堂塔

後冷泉院の康平七年五月十一日、白日に火ありて、講堂、金堂、法塔、四十二區の僧坊、八十四間の廻廊、及寶藏、鐘樓、經堂、溫屋食堂以下、一宇も殘らず燒失せり、此時、正三位藤原師長、太宰府に官たりしが、再興を志し、治曆元年八月廿二日柱立あり、同二年十一月廿一日に成就して、供養を遂ぬ、然れども、昔の十分が一にも及ばざりしとかや、そのかみ四十九院ありしと云別院も、今は其名のみ殘て、其趾さへ詳ならず、〇中略其後も又燒失せしにや、文明二年、宗祇法師筑紫に下りし時も、諸堂塔廻廊皆跡もなく、石のみぞ昔の形見とは見へ侍る、觀音の御堂、今に廢せる事なし、亦戒壇院、形の如く在り、結緣にて後ある坊に立よる、當寺は、南都東大寺の末寺なり彼衆徒、此坊の主なり、古き都の人なればにや、花立て空ら燒して、ゐんなるさまに、さかへき、心ばへ何となく志なをざりに見へずなんと書り、然れば諸堂側寺等の絕ぬる事は、久しき事になん侍るなり、此所にかぎらず、凡古へより名高くいかめしかりし寺院も、世遠くなりもてゆけば、多くは絕果て、其跡のみ

ぞ落るあるは其形は殘ながら、有甲斐もなく衰へ捨れるも有、近き世に造はじめし、いまめかしき梵宇は、かへりて日々に新に榮侍る、古今の變遷ことなるかな、又弘法歸朝の時、暫此寺に居住せられしとかや、（中略）其時〈○空海歸朝之際〉弘法の住せし寺にや、前に記せし、昔の側寺の號に、弘法寺と云名有、中頃造れる觀音の堂、横十四間長十八間有しが、〈一說、十間に、十四間とあり、〉寶永七年梅雨の久しく降し時頽破せり、其後は西の方に假堂有て、古き佛像の破壞せるをも、其内に込置しが、元祿元年、今の堂を建立せり、其建立のよしを尋るに、貞享元年、福岡簀子町天王寺屋浦了夢と云商人有、其家富めりしが、米を多く當寺建立の爲に、是を人に借して、利を納む、當寺の留守別當、琳重が計營にて、宰府及他村の富人の銀を借集めて、造立料として、元祿元年に營作なれり、彼了夢が人に借置し米、數年の間、利重りて、毎年其利米を以て、琳重が借し銀をつぐのふ、右造立料の外、瓦料繩等は、諸人是を助て贈せり、此外竹木は皆國君より給はる、其營作の役夫は、國君より出し給ふ、其外にもまた、御笠夜須兩郡の農民、私に是を助く、是諸堂重建のよしなり、本堂を講堂と云、講堂の本尊觀音三軀を建しは、浦了夢が末子了本なり、其佛像は、昔より有し古佛なり、されども破壞多かりしを、京都の佛師、中田康意を招き下し修造せしむ、康意弟子三人を誘ひ來る、康意は是よりさき、寛文の頃、京より下り、當寺戒壇院の本尊を修補せし者なり、佛堂は、昔の大殿にたくらふべうもなけれど、略莊嚴を成せり、此寺昔は寺領多く、僧坊八十區有しと云、往昔の盛なりし時の圖傳はりて今も在り、大きなる構なり、其記せる所を見るに、佛堂の左に五重の塔あり、廻廊有、三門有、本堂の後に、總坊とて長き家有、是學寮なりけるにや、其西の端に、傳敎弘法の住めりし所有、其外諸堂多し、二王門の外に鳥居あり、總築地有、廻廊の内には五重の塔と、金堂のみあり、戒壇院は、總築地の内に有、卽今の戒壇ある所なり、其餘の諸院は、今は名許にて、其跡さへ多くはさだかならず、然れども寺の後の山の谷々に、古寺のありし跡多く、今も其寺の名を稱す、昔此寺僧の上首三

坊有、第一留主坊と云、是當寺の別當なり、次は西坊と云、上座坊なり、近世西坊上座坊は絶て今はなし只留主坊のみ殘れりき、妻帶なり、

〔筑前舊志略 上〕戒壇院 律宗ナリ、觀世音寺四十九院ノ一ナリ、昔ハ東大寺ノ末ナリシガ、今ハ博多聖福寺ニ屬セリ、○中略 觀世音寺ノ側寺、皆絶果ヌレドモ、此院計リ、古ヘヨリ所ヲモカヘズ、今ニ至リテモ殘レリ、本尊釋迦佛モ古ノ物ナリ、

〔續日本紀 九 元正〕養老七年二月丁酉、勅僧滿誓、俗名從四位上笠朝臣麻呂於筑紫令造觀世音寺、

〔續日本紀 十六 聖武〕天平十七年十一月乙卯、遣玄昉法師、造筑紫觀世音寺、

〔源平盛衰記 三十〕太神宮行幸願附廣嗣謀叛、并玄昉僧正事、

聖武皇帝ノ御宇ニ、玄昉僧正トテ、貴キ、僧座シキ戒行全ク持テ、慈悲普ク及ボシ、智行兼備シテ、濟度隔ナシ、一天唱道、國家珍寶也、遣唐使吉備大臣ト入唐シテ、五千餘卷ノ一切經ヲ渡シ、法相唯識ノ法門ヲ將來セリ、皇帝○聖武 皇后○光明子 深ク御歸依ヲ致シ給ヘリ、常ニ玉簾ノ内ニ召レテ、后宮掌ヲ合御座ス、廣嗣后ノ宮ニ參給タリケルニ、玄昉婚遊シ給ヘリ、廣嗣奏シテ申サク、玄昉后宮ヲ犯シ奉ル、其咎尤重シト、○中略 帝忍テ幸成テ、御簾ノ隙ヨリ叡覽アリ、光明皇后ハ、十一面觀音ト現ジ、玄昉僧正ハ、千手觀音ト顯テ、共ニ慈悲ノ御顏ヲ並テ、同ク濟度ノ方便ヲ語給ヘリ、皇帝彌叡信ヲ發シ御座テ、廣嗣ハ國家ヲ亂スベキ臣也、一天ノ國師タリ、貴キ僧ヲ讒シ申條、罪科深シトテ、西海ノ波ニ被流タリケレバ、怨ヲ成テ謀叛ヲ起ス、凡夫ノ眼前ニハ、非梵行婚嫁ト見奉レ共、賢帝ノ叡覽ニハ、大悲薩埵ノ善巧方便ト拜ミ給フモ穴貴シ、○中略 同十八年六月ニ、太宰府觀音堂造立供養アリ、玄昉僧正導師タリ、高座ニ上テ啓白シ給ヒケルニ、俄ニ空掻曇雷電シテ、雲高座ニ卷下シ、導師ヲ取テ天ニ騰ル、次年ノ六月ニ、彼僧正ノ生シキ首ヲ、興福寺ノ南大門ニ落シテ、空ニ咄ト笑聲シケリ、此寺ハ、法相大乘ノ砌也、此宗ハ、玄昉僧正ノ渡シタレバ、廣嗣ノ惡靈、玄昉ヲ怨テ、角シケル

コソ怖シケレ、

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕康平七年五月十三日、太宰府觀世音寺燒亡、

治暦二年十一月二十八日、公家撰定吉宿、延百餘僧、供養鎭西太宰府觀音寺、瓦葺五間四面講堂一宇、奉造立安置金色丈六觀世音像一體、又同丈六捻像不空羂索像一體、此像者、全逃猛焔之底、遂現常住之相、殊加補修、如舊安置、

〔本朝世紀〕康治二年七月十九日甲戌、今日、左大臣召外記、下給太宰府解、可勘例者、其狀云、去六月廿一日夜、觀世音寺堂塔廻廊燒亡、件寺、是都府之大廈、天智天皇以後、元明天皇以往、五代之聖主相續草創之御願也、五百餘年之間、奉祈國家不退靈驗之砌也、但於塔者、康平七年五月十一日燒亡了、中尊丈六金銅阿彌陀如來像、在猛火之中、尊容無變、昔自百濟國奉渡之云々、

〔本朝高僧傳 六十五 檀興〕筑前觀世音寺沙門濟寶傳

釋濟寶、鎭西人、寛元年中入宋、逢一時名匠、傳習經律、周踐靈區、歸來、住觀世音寺、此寺、白鳳十年艸創、一千二百餘歲間三罹回祿、治暦二年、太宰府大貳藤氏某與諸官士戮力復興、又歷一百八十餘年、佛殿戒壇風磨雨洗、寶見散落、慨然宣力、建長二年自抱化疏、奔走四方、取資於人、殿閣門廡奐然改觀、且書施者姓名、納塑觀音像中、州民稱其功矣、

寺領用途

〔延喜式 二十六 主税〕諸國出擧正税公廨雜稻

筑前國 〇中略 修理觀世音寺料一萬束、

〔續日本紀 二 文武〕大寶元年八月甲辰、太政官處分、近江國志我山寺封、起庚子年計滿三十歲、觀世音寺筑紫尼寺封、起大寶元年計滿五歲、並停止之、

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十年三月丙申、又限五年、施捨觀世音寺食封一百戶、

〔續日本紀 十七 聖武〕天平勝寶元年七月乙巳、定諸寺墾田地、〇中略 筑紫觀世音寺、寺別五百町、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年九月辛巳、又先是勅、如聞、太宰府收觀世音寺墾田、班給百姓、事如有實、深乖道理、宜下所司、研其根源、卽仰太宰搜求舊記、至是日、奉勅、班給百姓、見開田十二町四段、捨入寺、園地卅六町六段、依舊爲公地、

〔東大寺續要錄一〕筑前國

觀世音寺

寺領田數不能注進、相分四封四庄　本寺年貢三百五十石

〔筑前國續風土記七御笠郡〕觀世音寺略○中

豐臣秀吉公九州征伐の時、當寺の別當田舍人にて、世變を不知、秀吉公の威風を恐れず、其邊の郡司村長など對接せし如く、秀吉公の御出の時、車に乘り出、甚無禮なりしかば、秀吉公是を怒給ひ、寺領を沒收せらる、然れ共此寺は、他寺に異なる所なればとて、百町の寺領を寄附し給ふ、其後改て、千石の寺領を付らる、小早川隆景、當國を領せられし後、三百石の地を付らる、其養子秀秋の時、隆景の附給ひし地も沒收せられぬ、長政公入國の後も、國中の諸社諸寺、先國主の例に任せらる故、寺領を寄附し給ひぬ、然れども、如水公の時より、今に此寺に五百石餘の寺產あり、

〔筑前國續風土記七御笠郡〕觀世音寺略○中

觀世音寺の前に、昔の石臼とて、徑三尺二寸五分、上臼厚八寸、下臼厚七寸五分なるあり、是は古昔、此寺營作の時、米を挽きたる臼なりと云、今案るに、此臼も、鎌倉極樂寺の千帖茶臼の意にや、千帖茶臼は、昔此寺繁昌成し事をしらしめん爲と云、後小松院寄納し給ひし、唐の鏡あり、徑六寸六分の圓鏡なり、かねにて其鏡をかくる、圍き臺有、一尺六寸九分有り、又大なる圓鏡あり、徑一尺七寸三分あり、寄進の人不知、又古昔歲初に追儺せし時の假面四有しが、今は三ッ殘れり、其裏書に云、

觀世音寺日吉御神寶龍王面四內

應永十年癸未三月二十七日

觀世音寺衆修理勾當一番長圖

此外古來傳はりし、此寺の寶物什器等、此寺頽破の後、所々に散失せり、今も玆寺に有し物也とて、古記佛經古器など持傳へたるも有と云、當寺の扁額は、小野道風の筆なり、草字に觀世音寺と書り、篤信諸國を歷覽し、多く寺社の額を見侍りしに、斯うるハしき文字をいまだ見ず、をしむべし、其字所々漫滅せる事を、觀世音寺頽破の後は、天滿宮に納め置しを、近年觀世音寺を造營せしより、此寺に返せり、又此寺の鐘樓にありし鐘を、近世安樂寺の鐘と成、今に彼所に有て、此寺にはなし、菅公の詩に、觀音寺唯聞鐘聲と作らせ給ひしも、此鐘の事なるべし、觀音寺村の內に、祇園社有、昔は宰府に有しと云、いつよりか、此所に移しける、古へ祇園社繁榮の時は、其祭禮に田樂せしと云、其の田樂法師と云座有しが、其子孫、今に宰府町に農人と成て仕す、

寺職　〔筑前舊志略 上〕觀世音寺〇中略當寺ノ別當ハ、東大寺ノ別當ヨリ兼ルノ古例成シヲ、中頃、男山ノ別當ヨリ司ドリシ事モ有タリ、坊院追々滅ジタレドモ、慶長ノ頃迄ハ、六坊有シモ、今ハ公文所一坊殘レリ、此坊代々妻帶ノ僧ナリ、

參詣　〔筑紫道記〕翌日、又きのふの菊にて一座有、杉弘相會席に來合て、いとゞ其興有、會過ぬれば、觀音寺に入ぬ、此寺は、天武天皇の御願なり、白鳳年中の草創なり、沙彌滿誓が歌に、とぶさたてあしがら山に舟木きり、とよめるも、此所を讀るよし、萬葉集に侍るにや、諸堂塔婆回廊、みな跡もなく、名のみぞむかしのかたみとはみえ侍る、觀音の御堂は、今に廢せる事なし、さては阿彌陀佛のおはします堂、又戒壇院かたのごとく有、結緣してのち、ある坊に立寄、當寺は南都東大寺の末寺也、彼衆徒、此坊のあるじなり、古き都の人なればにや、花立空燒して、えむなるさまに、盃の心ばへ何となく、心ざしの等閑に見えずなむ、暮る程に、名におふ鐘の音も聞捨がたく、歸りゆくあたりなれば、

思川染川などをみつゝ、宿坊に至る、

〔弘法大師行化記〕府牒　觀世音寺三綱　入唐廻來學問空海師

右件僧、負笈遠涉、收嗜大道、空往滿歸、從學可稱、今及歸朝、暫住彼寺、宜至于入京之日、准僧住例、充供養、牒件狀如前、故牒、

大同二年四月廿九日　正六位上行大典大村直織麿

大貳從四位下藤原朝臣藤嗣

〔元亨釋書七淨禪〕大宰府有勝藍、名觀世音寺、歲首行驅儺、其日捕寺之四傍路人、頭蒙鬼面、身披彩服、名爲儺鬼、引過殿庭、此夜國府男女入寺、打是鬼、爲驅儺、鬼甚困極、國俗自古有之、以故觀世音寺四畔、此日無行人、花州旅客往往來此、就從府之橫嶽山有湛慧、明湛密、多異迹、適過是境、僕曰、今日觀音寺驅儺也、師恐遭追捕、乞從別路、慧曰、戒德之士、豈有之哉、果執慧行鬼事、〇下略

〔筑前國續風土記七御笠郡〕觀世音寺〇中略

古は、此寺及安樂寺、武藏寺にて、正月七日に、寺の邊りの道行人を捕て、面に蒙倛をおゝはせ、身に色どれるきぬをきせ、儺鬼と稱し、里のうちゆすりて、男女多く出で、是を打て鬼やらいとす、鬼いと苦めり、此俗古へより是有り、此故に、觀世音寺の邊り、此日行人なしとぞ、元亨釋書にも見えたり、此事弘仁三年より始りて、慶永年中までは、毎年是を執行せり、其後はいつの時絕けるにや、今は安樂寺にのみ、此事殘れり、

四王寺

四王寺ハ、舊ク大野山寺ト稱ス、筑前國御笠郡坂本村ノ北方四王寺山一名故峯ニ在リ、未ダ其創

名所所在堂塔

建ヲ詳ニセズ、後世火災ニ罹リテ遂ニ廢絶シ、山頂僅ニ草庵ヲ存スルノミ、

〔筑前國續風土記八御笠郡〕四王寺址

坂本村の北なる四王寺山に寺跡あり、寺の山號圓滿山といふ、又此山を鼓峯といふ、坂本より山上まで一里許あり、創立の時代詳ならず、〇中略三代實錄に、貞觀八年二月十四日、神祇官より奏言す、肥後國阿蘇大神怒氣を懷藏し給ふ、是によりて太宰府司、城山四王院にて金剛般若經三千卷、般若心經三萬卷を轉讀せしめられし事あり、但し城山は四王院山にあらず、四王院は大城の山にあり、城山四王院と三代實錄に書しは、城山と四王院と兩所の事にや、若は大城山を城山と稱して、城山四王院と書しにや、いぶかし、四王院は僧坊千區ありしといひ傳へたり、古は甚大寺にして、朝廷よりもたうとび給ひし寺なりけらし、此寺いつの時にか、炎上して斷絶せしとかや、今猶礎所々に殘り、四王院とて絶頂にわづかなる草庵を立置ぬ、井も猶三所に殘れり、又岩屋の城址の北五町許に四王寺の倉ありし址とて、礎あり、其所に米の燒たるが石となり、炭の如くにして今猶あり、是は米藏炎上の時、米も燒たるが殘れりといふ、上座郡宮野村八並長者が宅址にも、燒殘りたる米あり、凡米は燒ぬれば、久を經て石と成て朽ずとなん、伯耆國汗入郡名和庄に、名和長年が宅址あり、是も屋敷の址に、土の中に燒米の石に成たるあり、是は長年屋敷を燒すて、船上山に籠城せし時、倉の内の米殘りけるが燒たるとかや、

雜載

〔類聚國史百七十八佛道〕平城天皇大同二年十二月甲寅朔、大宰府言、於大野城鼓峯、興建堂宇、安置四天王像、令僧四人如法修行、而依制旨、既從停止云々、遷像以來、疫病尤甚、伏請奉遷本處者、許之、但停請僧修行、

〔類聚國史百七十八佛道〕延暦廿年正月癸丑、停大宰府大野山寺行四天王法、其四天王像、及堂舍法物等、並遷便近寺、

名勝所在　創建開山堂塔

(日本後紀 二十一 嵯峨) 弘仁二年二月庚寅、於太宰府鼓岑四天王寺、造釋迦佛像、

(文德實錄 五) 仁壽三年五月庚子、詔、十七箇寺讀大般若經、限三日訖、攘災疫也、　壬寅、亦詔大宰府、於觀音彌勒兩寺、並四王院、香椎廟、管內國分寺、讀大般若經、

(三代實錄 十二 清和) 貞觀八年二月十四日庚申、神祇官奏言、肥後國阿蘇大神懷藏怒氣、由是可發疫癘、憂隣境兵、勅、國司潔齋、至誠奉幣、幷轉讀金剛般若經千卷、般若心經萬卷、太宰府司於城山四王院、轉讀金剛般若經三千卷、般若心經三萬卷、以奉謝神心、消伏兵疫、

善導寺

善導寺ハ、筑後國山本郡飯田村ニ在リ、僧辨阿ノ建立スル所ニシテ、淨土宗鎭西派ノ一本寺タリ、

(和漢三才圖會 八十 筑後) 善導寺　在山本郡草野庄井上(自府中一里半)、號井上山光明院、淨土宗鎭西派之本寺　寺領五百石

(筑後志 三 寺院) 善導寺　山本郡飯田村に在り、井上山〇註略光明院と號す、

(全國各宗本山明細帳) 淨土宗　本山　善導寺　筑後國山本郡飯田村

(法然上人行狀畫圖 四十六) 建久十年二月に歸洛して、〇聖光上人〇源空に奉仕す、〇中略つゐに學なり功をへて、元久元年八月上旬、吉水の禪室を辭して、鎭西の舊里にかへり、淨土一宗を興するに、利益四遠にあまねし、〇中略筑後國山本の郷に、一寺を建立して、善導寺と號す、のちにはあらためて光明寺となづく、此寺にして、上人相承の法門を住持し、念佛往生の解行を弘通すること、一生をふるまで、片時も廢することなし、〇下略

〔聖光上人傳〕善導寺(筑後國)開山聖光上人、諱辨長、順乘竪者孫、筑前國香月庄人也、〇中略迺詣東山禪室、初謁法然上人、時年三十六、建久八年丁巳五月上旬、〇中略因茲三箇月間、(自五月至七月)片時不離座下、敬稟勸化、其後歸國、〇中略建久十年己未二月、亦趣帝都、重奉仕大師、〇中略元久元年甲子八月上旬、辭東山之學窗、赴鎭西之舊里、弘於眞宗、勸於稱名、道俗歸者二千餘人、男女去者其數幾耶、〇中略同國(〇筑後)山本郷、建一伽藍、號善導寺、(後號光明寺)堂塔比甍、僧徒成林、長日勤行、恒例大會、臨日不懈、逐年無絶、地主要阿寄進數地、置四九本房、彼妻作阿施入水田、擬衆僧糧、夫婦同心、銘寄進文於洪鐘腹焉、

〔圓光大師行狀畫圖翼贊〕五十二　同(〇筑後)國善導寺(附吉祥寺)　傳文ニ、聖光上人一寺ヲ建立シテ善導寺ト號ス、後ニ改テ光明寺ト名ヅクト、今井上山光明院善導寺ト稱ス、山本郡(傳ニ山本ノ郷トアリ)草野庄ニタテリ、井上ハ處ノ名ナリ、授手印徵心抄云、善導寺者正號光明寺、(本尊彌陀)而世人常云善導寺、寺有善導堂(本尊釋迦)故也、(已上全文)決答疑問抄云、又被仰云、(辨阿上人)自善導堂釋迦像放光照辨阿給也、(延應元年二月廿八日、御臨終前日也、別傳同之、)按ズルニ、此後改テ光明ノ號アルニヤ、中比ノ事トカヤ、住職其人ヲ闕、殿堂火災ニ逢トイヘドモ、草創以來其地ヲ改メズ、一宗正流、彼源ヲ失ハザレバ、天下相推テ一派ノ本所トシ、開祖以後良忠敬蓮社道光以下、今ニ至テ法義相續ス、會近古比永宣旨ヲ賜ハリテ、代々ノ住職紫衣ヲ著スルヲ定式トセリ、延寶ノ末ニ及テ、當寺修復ノ事ニ開祖ノ影像京洛ニ入給ヒ、江府ヲ經テ歸座ナリキ、時ニ九重及關東ノ一宗ノ法流ヲ酌者、施財ヲ擲テ報恩セザルハナカリキ、　本堂坐像彌陀二尺四寸五分、同立像、脇士二菩薩ヲ本尊トス、聖光上人ノ自作トイヘリ、　釋迦堂五間四面南方ニ向フ、大中二門各南面ナルヲ過テ五六間バカリニシテ立ラル、本尊釋迦ノ古像、作者分明ナラズ、坐像四尺五寸、大門ノ外ニ西面ノ藥師堂一字アリ、此堂ニ對向セリ、一尺五寸バカリノ尊像ヲ安ゼラル、(按ズルニ、古ハ當堂ヲ呼テ善導堂ト云事上ノ如シ、今御影堂ヲ別立セラレテ、善導ノ像ヲ移サル、釋迦堂ノ稱號此ニ始マル歟、)　御影堂　七間四面ナリ、大中二門ノ中間南傍、五六間バカリヲ去テ、杉林ノ中ニ立ラル、此所ニ三祖

ノ影ヲ安ジ、不斷念佛ヲ行ハル、須彌壇中央ニ善導ノ像ヲ祟メ、左右ニ圓光聖光ノ二影ヲ安ズ、聖光上人別傳云、築墳墓於院內、彰影像於寺ノ砌、サレバ此堂ノ營構ハ、開祖入寂ノ以後ト聞エタリ、抑此善導ノ尊像ハ、大師ノ肉身異僧ノ形ヲ現ジ、來朝ノ唐船ニ乘ジテ、日本ニ著岸マシマシテ、化シテ木像トナラセ給フトナン、建暦二年三月十三日ノ夜、聖光上人ノ夢中ニ示現シ給テ、我筑前ノ國博多津ニ渡リ居リ、汝速ニ迎取ベシトアリシカバ、翌日彼處ニ馳向ヒテ、果シテ此像ヲ得給ヘリ、(已上前ノ天福寺上人某ノ筆記)此上人ハ善導ノ再誕ナル由門弟敬蓮社ノ夢ニ見エケル(傳文)ナドアリ、サレバカヽル奇瑞ヲ示サルヽモ、定メテ深意アルニコソ、

〔筑後地鑑(上北筑)〕山本郡

一井上山善導寺淨土宗鎭西派之一源也、法然之徒辨阿(諡二聖光上人一、號二鎭西禪師一、)乃爲其第一祖、寺僧傳言、初山本郡人家稀疎、而盜賊每夜殺人於曠野、野中有廢井、投屍於其中、辨阿悲之結廬於井上、以修念佛、是此寺之權輿也、今之堂基尙少坳之、以存古意、故號井上山、又曰、營寺之初、善導大師之木像、不求而自宋至、辨阿喜而事之、今所有卽是也、仍號善導寺、每年二月廿七八九日、有三日法會、是開山聖光上人之御忌也、法事奏鉦管、交樂、僧徒皆習熟之、所謂筑紫樂也、中州九國之門流之緇素、來湊而行大念佛、逆法會、老弱群集、三夜白成市、燒膏油續晷、商賈賣買、門前擾々矣、前太守田中氏、寄附寺田五百石、爲住持之僧、世々例賜紫衣、代々紫衣古今稀、寺中有一靈堂、榜曰、實相精舍、此州故太守田中氏夫人松平氏、乃東照大神君(家康○德川)之至親也、故營此堂、奉安大神君之靈塔、又奉寘台德院殿(秀忠○德川)之靈牌於方丈、府君以每月十七日(家康忌日○)及二十四日、(秀忠忌日○)拜謁兩尊所、

〔筑後志(寺院三)〕善導寺(○中略) 起主禪師の時綸旨を賜はりて、代々の住職紫衣を著するを定式とす、

〔寺格帳(淨土宗上)〕

紫衣 筑後國 善導寺

右住職、於增上寺申付ル、(明和八卯年ゟ、增上寺依願、於御城住職被仰付、)

一入院之御禮、御白書院獨禮、獻上壹束一卷、御黷之內貳疊目、

一御暇於柳之間老中被仰渡、時服五拜領之、廣蓋ニ而引、

一年頭御禮無之

寺領

〔筑後志三寺院〕善導寺〇中略草野氏永平、同舍弟永信、水田五拾町を寄附す、亂世數歲を經て退轉し、僅に百石の地を存しけるが、元和元年、田中兵部大輔吉政、寺田四百石を加附し、都て五百石、今猶存す、

子院

〔筑後志三寺院〕善導寺〇中略塔頭の脇院、往昔三拾六坊あり、中世火ありて悉く燒亡し、今拾五坊を存す、所謂稱光院、不斷院、勸喜院、長松院、智香院、心光院、菁蓮院、淸光院、上品院、淸體院、無量院、昌泉院、淨光院、涼光院、大乘院是なり、子院筑後州內四十八宇、肥後國五拾宇、肥前國十一宇、筑前國五宇、豐後國二宇、豐前國一宇、伊勢國一宇、武藏國一宇あり、

羅漢寺

名稱所在

羅漢寺ハ、豐前國下毛郡跡田村ニ在リ、後光嚴天皇延文五年、禪僧昭覺ノ開基スル所ニシテ、次デ僧建順、羅漢像ヲ彫刻シテ、石窟中ニ安置ス、此寺岩窟中ニ、結構セラレタルト、耶馬溪ノ勝地ニ在ルトヲ以テ著名ナリ、

創建堂塔

〔和漢三才圖會八十豐前〕耆闍崛山羅漢寺　在宇佐之西北五里、曹洞宗　寺領百石、釋迦、文殊普賢　五百羅漢、及千體地藏、總三千七百體、皆石像也、開山圓龕禪師、彫作之仙人、名逆流健順者、忽然飛來、合力一夜中全成、其靈窟本堂、皆希世精舍也、

〔蕉堅稿銘〕豐州羅漢寺舍利塔銘

豐前州羅漢寺鎭西勝地、而鍾台雁之秀、延文五年春、釋昭覺始入石室而居、遂成寶坊、未幾有僧建順、际山石起伏瓌奇、手雕羅漢像五百軀、儀貌魁梧、靈祥荐顯矣、永和二年、長州赤間有五男二婦人來禮、自探錦嚢、施以舍利一顆、衆僧以爲蠙珠不敬之、亦不以告覺、覺一夕夢、人告曰、此佛舍利、卽育王塔中舊物也、翌日問之衆僧、皆以實告、覺駭而躬往赤間、物色尋之、不得其人、益以爲神授、感泣頂戴、欲造寶塔以安奉之、未果而物故矣、實至德元年九月十一日也、其徒省卓遠來京城、具狀其事、聞之於大丞相源公、公親書賜額羅漢、名山曰耆闍崛、卓又以塔費諏于前武州太守桂殿居士、士爲作寶塔、增以家堂、所奉舍利二八顆、夫人藤氏用水晶寶壺貯之於塔中、而嚴加粧飾云、覺字圓鑑、受業于壽福寂庵順三光之徒也、卓求銘、銘曰、

豐山毓秀　應眞所宅　昧者不覩　瞻背于石　蘇塗盈尺　量含法界　式妥眞身　歷劫弗壞
權輿于覺　繼焉者卓　烈烈武守　檀施優渥

〔豐州紀行〕羅漢寺は耆闍崛山と號す、下毛郡跡田村の境內に有、古は五山流の禪寺也、此六代以前傳宿と云ひし住持より、曹洞宗に改む、慶長の頃なり、此所寺一區あり、下にも末寺一區あり、いづれも大寺にはあらず、寺領百石の內、五十石は山林なり、北の方は山に傍て、むかひに南山近し、石階をのぼりゆく、寺は山下の高き所に有、上にて參詣道とて、先づ左の方より細石の所々に出たるをふみて、坂にのぼり行、其坂數所有、いづれもさかし、大なる石橋有て、其上を通る、此はしは自然の天工なり、其下におりて見れば、其橋の下高一間ばかり、猶のぼり行ば、大岩の下に十六羅漢あり、千體地藏左右一所につらなれり、千體地藏皆こまかなる石佛也、是は慶長の頃、羅漢寺の住持傳宿創て彫刻す、猶のぼり行く、大岩のさしかゝれる所、其下のひくき方九間、內の高さ四間餘りあり、其奥に五百羅漢あり、皆一軀づゝ作れる石佛也、石に切つけたるにはあらず、石佛皆窟の下に有、羅漢を此所に刻めるはじめをたづぬるに、僧絕海が文集蕉堅稿下卷、此寺の舍利塔の銘

の序にしるしていはく、豐前州羅漢寺は、鎮西の勝地にして、台雁の秀をあつむ、延文五年春釋昭覺はじめて石室に入て居り、遂に寶坊となる、其後未幾、僧建順手づから羅漢の像五百軀をきざむとあり、又一說、大友興廢記に云、敏達天皇の御時、百濟より日羅と云人來りて、豐前に五百羅漢を立といへり、絕海が說を是とすべし、後說は信じがたし、延文は後光嚴院の年號也、羅漢寺のはじめ延文五年より、ことし元祿七年まで、凡三百三十五年也、五百羅漢は石佛といへども、ある人のいはく皆ねり物なりと、其きざめる工まことに奇妙をきはめたり、一佛ごとにそのかたち各ことなり、一樣ならず、また其中にこがれすすけたる大なる佛あり、水にて洗へども、つねにこがれたるがごとし、是又ねり物なる故にかく見ゆるにや、いはやは人力にてうがてるにあらず、自然の天工也、いはやの前に欄干有て、むかひのまぢかく見ゆる古羅漢といふ所、是又大岩のあまた峙ちたてる有、天然の石橋有、其望見る景まことに奇賞すべし、

〔山陽遺稿七記〕耶馬溪圖卷記

其明又徑田塍、至羅漢寺、寺据山、鑿山作洞、架橋梁狀、安五百像、余復不甚賞、宿寺前逆旅、挑燈而談、余曰、山不得水、不生動、石不得樹、不蒼潤、所以余賞馬溪、而不賞仙巖、至於羅漢、則人工耳、然皆馬溪之支裔矣、○下略

萬壽寺

萬壽寺ハ、豐後國大分郡大分町ニ在リ、創建未ダ詳ナラズ、中古廢頽セシヲ、後二條天皇德治元年、大友貞親之ヲ中興シ、僧智侃ヲ以テ開山ト爲ス、永祿中、兵燹ニ罹リ、慶長中、僧玉粲之ヲ再建ス、禪宗ニ屬シ、十刹ノ一タリ、

名所創建堂塔

〔豐州志豐後十三〕大分郡　佛寺

蔣山萬壽寺（在府内城南東新町、此寺不知其創、相傳、昔者百合若有女、名萬壽姫、爲賊所殺、痛悼之、爲建寺追薦、故名、歷年之久、惟其廢址耳、紀聞曰、德治元年、大友出羽守貞親、就萬壽舊址、更興寺、請直翁禪師住焉、仍舊號稱萬壽寺、山名蔣山、直翁師、嘗遊學於元、與翰林學士趙子昂相善、故因入元請益之僧、寄書請筆蹟、趙公乃書蔣山二大字以贈焉、今之榜額即是也、當時堂宇門樓莊麗、僧房十餘區、一方名藍也、永祿中、爲田原紹忍所燒、國初再修、不及其故迹矣、）

〔日本地誌提要六十八豐後〕佛寺

萬壽寺（同郡（大分）大分町、禪宗、明基創建年月未詳、德治元年丙午、大友貞親僧智侃ニ命シテ再造ス、慶長中僧玉泉中興ス、寺域千六百六拾坪）

〔東福第十世勅賜佛印禪師直翁和尚塔銘〕諱智侃、字直翁、上州人、源氏子、寛元乙巳歲（○三年）生、幼而出家爲僧、（○中略）俄有南詢之志、乃禮辭而入宋國焉、偏參諸老、乃知法无異味、歸來再侍蘭溪於建長寺、（○中略）筑前州承天寺虛主席、衆請住持、鎭山門居方丈、說大法葷、玄徒咸謂、復覩回古風焉、（○中略）關東副元帥府主相模州太守平貞時、乃掌天下政焉、乃如齊桓公、晉文公之爲霸主矣、建寺院、安僧侶、崇敬佛心宗矣、如裴相國王常侍之爲外護焉、於嘉元乙巳歲（○三年）鎭西豐後州主大友羽州太守平貞親、亦如周之列國諸侯焉、羽州時謁霸主、霸主問大友曾建寺否、安徒侶多少乎、羽州意謂、若據實告、則恐誤霸主意也、乃以虛語答云、造小寺焉、安一百員僧耳、霸主洎諸公、異口同音、贊嘆褒美焉、既而告辭矣、乃歸豐後州、建道場焉、山號蔣山、寺號興聖萬壽禪寺、德治丙午歲（○元年）仍詣承天寺、請師而爲開山住持第一祖焉、開基、无幾成大寶坊、安僧一百十員、不敢辜負當時答霸主之語焉、賢矣哉、殿堂華麗、齋粥豐饒、考鐘伐鼓、鏜々焉、塡々焉、大衆行道、濟々焉、棣々焉、規矩禮樂、一如大方叢林法度、坐禪看經、一無缺焉、可尙也矣

寺格

〔和漢禪刹次第〕十刹位次（○中略）

豐後萬壽寺　蔣山興聖萬壽禪寺、開山眞翁和上、佛印禪師、（○下略）

名稱　所在　沿革　堂塔

寶陀寺

寶陀寺ハ、豐後國國東郡上沓掛村ニ在リ、初メ清水寺ト稱シ、僧仁聞ノ開基スル所ナリ、建武中、田原直平更ニ其地ヲ廣メ、堂塔ヲ建立シ、禪僧智徹ヲ以テ開山ト爲ス、

〔豐州志 豐後二 十一〕國東郡 佛寺

寶陀寺 在田原莊上沓掛村、舊號疵龍山清水寺、仁聞師所創、後廢、普鳴錄曰、建武中、田原左近將監直平、有夢想之感、與其義法印相謀、請悟庵智徹禪師、建寺於其地、榜曰蟠龍山寶陀寺住焉、貞治中、大將軍義詮源公降鈞帖、爲官寺、

〔太宰管内志 豐後九 國埼郡〕寶陀寺

豐鐘善鳴錄四卷に、悟庵禪師、諱智徹云々、住州之田原府清水寺、一夕夢、神人告曰、悟庵禪師、即正法明如來應化也、汝宜建刹邀延、寤而異之、語諸府主左近將監藤直平、大友族、田原氏、直平歎曰、我夢亦爾、遂廣地建寺、革教爲禪、請師爲開山祖、即蟠龍山寶陀寺是也、師居之十七年、不張法席、陶治學者、同書一卷に豐後州萬壽山豐山禪師云々、初親參國東寶陀寺、六鄕山定額院主目錄に、斑龍山清水寺院主、傳乘寺徒などあり、是とは別か、

〔東海一漚別集 銘〕寶陀寺鐘銘

豐後國田原別府盤龍山寶陀禪寺、新鑄鐘成、索銘中正圓月、爲之銘曰、

田原之封、寶陀之境、有器鍠々、逹蘇迷頂、寅賓朝曦、晡餞頽景、停彼苦輪、啓其瞑眸、覆則惟鑰、仰之爲鼎、元助宜銘、揭聲悠永、

晧臺寺

晧臺寺ハ、舊ト洪泰寺ト稱ス、肥前國彼杵郡長崎ニ在リ、慶長年間、平戸ノ僧龜翁ノ創建スル所ニシテ、元和中、僧一應公命ヲ蒙リテ此寺ニ住スルニ及ビ、專ラ力ヲ耶蘇教ノ防遏ニ盡セ

名稱 所在 創建 沿革

リ、曹洞宗ニ屬ス、

〔長崎志　五〕禪宗曹洞派　肥前佐嘉玉林寺末寺

勅賜海雲山普昭晧臺寺　元和元乙卯年建　境內壹萬千六百二十八坪（一本作二千七十七坪）　伊良林鄕之內

當寺最初、慶長年中、平戶ゟ龜翁と云僧、筑後町山手岩原村之內に開創し、笠頭山洪泰寺と稱す、然ル所、元和元年、肥前佐嘉玉林寺（勅願所）住持一應和尙、京都に被ㇾ爲ㇾ召登、爲ㇾ上意、長崎南蠻人著船して、邪宗門發興之地となる、其方彼地に於て、諸人を佛法正道に信服せしめ、邪心をはなれしむべし、則洪泰寺の住職を被ㇾ仰付ㇾ之旨蒙ㇾ命令、一應御請申上、當寺に住持して、說法敎導誠心を盡し、長崎之頭人たりし數家を始、市中諸人檀家に隨從する者枚擧し難し、是ゟ年月を經るに隨ひ、邪執之風俗漸々に消滅す、

一寬永三年、高野平村之內、今之地に寺を移し、一應、中興開山となる、（○中略）

一同十九年、江戶參府、御目見被ㇾ仰付、其上達ㇾ明正帝叡聞、同年閏九月十七日、參內有ㇾ之、勅賜了外廣覺禪師之號、紫衣、井海雲山普昭晧臺寺と、黃紙之御綸旨頂戴有ㇾ之、則晧臺寺と改稱す、（○中略）

一逐年、切支丹殘黨屛息之段、大猷院樣達ㇾ上聞、慶安元年、御朱印被ㇾ下ㇾ賜之、（○中略）

一慶安二年、一庭和尙隱居後住之御願申上、當表ハ大切之場處ニて、切支丹令ㇾ斷滅、正法ニ可ㇾ令ㇾ歸服役寺ニ被ㇾ仰付ㇾ上ハ、後住之儀、道德兼備之僧を相撰、以ㇾ上意住職被ㇾ仰付、被ㇾ下度奉ㇾ願之所、則願之通御免にて、同年常州長興寺住持、雪山和尙、爲ㇾ上意江府（江）被ㇾ爲ㇾ召、於御前、御老中御列座ニ而、今度長崎晧臺寺住職被ㇾ仰付ㇾ之條、彼地ハ、異國本朝要津之地、別而勤行不ㇾ怠慢、邪宗門禁絕し、再發無ㇾ之樣、嚴密に可ㇾ相勤ㇾ旨被ㇾ仰渡、黑田筑前守へ被ㇾ仰付、長崎へ被ㇾ送屆、入院有ㇾ之以後、代々住持交代之節、諸國大地古跡に限らず、當寺ゟ以ㇾ書付、後住相願に於ては、御吟味之上、御老中連署之

寺格

以御奉書住職被仰付、私領ハ長崎御奉行所ゟ被仰通其領主ゟ差送る事、以後之定例となる、

〔全國各宗本山明細帳〕禪曹洞宗　中本寺　晧臺寺　肥前國彼杵郡長崎村

〔長崎港草十二〕晧臺寺

晧臺寺ハ、鎭治ノ東、山ノ麓、高野平郷ニアリ、舊ハ岩原山ノ下ニアリ、其趾正保中、建八幡廟ノ處、今聖福寺境内トナル、元龜以來、蠻賊據崎、倡ッテ邪教ヲタッ、慶長末年ニ至テ、公命アリテ、蠻僧伴天連ヲ竄シ、衆類ヲ逬ケラルレドモ、餘黨未絶、時ニ僧龜翁、平戸ヨリ來リ、則力ヲ以摧キ服ス、元和四年、鎭臺幕府ニ奏シ、命ヲ承リテ寺ヲ剏ム、竺頭山洪泰寺トス、○中略

總門　額ハ勅賜海雲山トアリ、堅額ナリ、聯ハ法窟爲國賜建立、直補王道千古、堂頭承鈞旨提綱、永祝經世万年トアリ、林道榮筆ナリ、此門ハ悉ク暹羅船ノ帆柱一ヲ以、コレヲ造レリト云、今尙存ス、

大佛殿　樓門ノ左、松心院ノ下ニアリ、丈六ノ盧舍那佛ノ銅像ヲ安ズ、延寶五年建、○中略

本堂　額ハ萬德殿陳楨ノ筆ナリ、本尊ハ釋迦文殊普賢、何レモ唐佛ナリ、高一覽捨子岱ノ記アリ、

〔寺鑑下 曹洞宗〕　肥前國長崎　晧臺寺

右住職、於長崎御奉行所申渡有之、　住職御禮、御白書院獨禮、御圖之外三疊目　御暇、檜之間、寺社御奉行、

年頭御禮無之　獻上一東一卷　拜領時服三、

御朱印　境内山林

大慈寺

大慈寺ハ、肥後國飽田郡野田村ニ在リ、後宇多天皇弘安元年、龜山上皇ノ御願ニ由リテ、建立スル所ニシテ、僧義尹ヲ以テ開山ト爲ス、大永元年、兵燹ニ罹リシガ、享祿二年僧洞春之ヲ再

名勝所在 創建堂塔

興セリ曹洞宗ニ屬ス、

〔肥後國志 三 飽田郡〕大慈寺大梁山 熊府寺奉行支配 禪宗洞家、越前國永平寺末寺也、寺領高五十石、外僧錄料現米五十石、一記勅額大梁山大慈寺 龜山法皇叡願紫衣道場曹洞ノ禪刹也、開基寒巖和尙、諱ハ義尹、後鳥羽ノ帝第三皇子、○中略 弘安元年、大渡ニ一寺ヲ構營シ、寶殿、法堂、庫院、丈室、七堂伽藍、多寶塔、三門迄悉ク成就シ、本尊釋迦八尺ノ座像、卽寒巖一刀三禮ノ作、脇士文殊普賢ナリ、後ニ當寺再興ノ時、脇士同離伽藍ニ改、而後明和五年、悉ク燒却ス、往日師、明州ニ南遊スルノ日、大慈山ノ佳境ヲ愛シテ心ニ不忘、今此大渡ノ津、適明州ニ似タル故、寺ヲ號大慈、山ヲ大梁ト稱ス、長橋アルヲ以也、古ノ大渡ハ今ノ大慈寺山門前ニアリ、緑川ノ流ナリ、寒岩勸化シテ大梁ヲ架ヘ、往來ノ便トス、依號ニ大梁山、河尻泰明太ダ師ヲ崇敬シ、法場ノ外護トナリ、境內四町四方、幷海邊ノ岸田、假令三十町寄附也、悉ク四至寄進狀ニ有之、一書云、飽田郡錢塘五十五丁ハ、寒岩義尹自ヲ開發ノ田畠ト云、龜山法皇寒岩ノ德業ヲ叡感有テ、綸旨ヲ下シ、紫衣及宸翰ヲ玉リ、擧テ官寺ト爲シ玉フ、世ニ法皇長老ト稱スルハ此故也、○中略 寒岩晚年ニ如來寺ニ移リ、正安二年八月廿二日遷化、八十四歲、大慈寺ニハ寒岩ノ高弟鐵山和尙住持スベキ處ニ、豐後國府內萬壽寺ノ惠文、常ニ寒岩ニ從ヒ門弟タルガ、師遷化ノ後、朝廷ニ訴テ、大慈寺ニ住セン事ヲ望ム、勅命有テ、磬一聲ノ間ニ、詩先キニ成ル者ニ住セシメント有リ、鐵山應聲賦ス、先王綸旨定封疆、寺號大慈山大梁、從是兒孫相繼住、盡乾坤裏有誰妨、聞者不稱ハナシ、故ニ鐵山無異議住持トナル、其後永正十七年、國內ノ鬪亂荐リニ起リ、翌年○大永元年三月十七日、當寺罹兵燹、殿堂樓閣過半燒失、此時ノ綸旨勅額寶物等灰燼トナリヌ、依之五十一世ノ住持洞春宗和尙上京參內シテ、再興ヲ仰ギ願フ、享祿二年、後奈良帝綸旨幷宸筆ノ額ヲ賜リ、佛殿方丈造立之、○中略 中古以來寺領爲大友氏被掠略、寺境既ニ地子ト成レリ、住僧洞春此旨ヲ以テ、禁廷ニ歎訴ノ處ニ、永祿六年、正親町ノ帝賜綸旨、依之寺領等復舊貫、○中略 六十六世雲龍俊和尙住職、紫衣頂戴、上京參內ノ時、後陽成院綸旨ヲ賜フ、○中略 此年當佐々陸奥守成政領トナル時、寺領ヲ沒收シ、境內ノ地子ヲ

入貢セラル、故ニ寺中ノ衰弊惟ニ谷ル處ニ、翌十六年、佐々氏滅亡シ、同年加藤侯ノ領ト成ル、後當寺ニ參詣シ、伽藍ノ頽敗ヲ患ヘ、爲香華ノ資料境內高五拾石分ノ地子ヲ許サル、寛永九年ノ冬ニ至テ、御當家ノ御領ト成リ、同十五年春正月、依先例寺境高五拾石寄附之、(此內三十石ハ塔頭配當ナリ)卽賜印章、其後亦寺僧手作ノ高地九十石餘、諸高役隨先規免許ノ旨、時ノ役人中、印證折紙寺納之、當寺ハ皇子開基ノ勅願寺タル故ヲ以テ、草創以來、肥後曹洞法皇一派ノ本寺、紫衣ノ道場ニシテ參內出世タル所ニ、天正以降遠國ト云、且寺僧衰弊ニ依テ、其事中絶シ、徒ニ於寺中出世ノ儀式相續ス、然ルニ七十六世白堂珪和尙ノ時ニ至リ、延寶七年七月上京任先例紫衣勅許ノ願上達處、時ノ所司代戸田越前守忠昌召白堂、其第云、公義御條目并寺法違背ノ義、旁率爾ノ擧動也、速ニ可歸國云々、依之卽令歸國ノ處、同年十一月十二日、依官命閉門蟄居焉、同八年十一月朔日、免許閉門、天和元年五月十七日、從江府寺社御奉行有公命云、寺法隨舊例、於寺中紫衣著用ノ儀、可任其意、於外邊堅不著紫衣、七十七世谷吟和尙住職ノ時、元祿九年七月、江戸參府ノ上、當寺由緒書ヲ以テ、寺社御奉行中ヘ入內見處、寺法被遂裁許、古ヘノ由緒雖結構至極也、東照宮被定置寺院法式、本朝曹洞派ノ一宗永平寺總持寺ヲ可爲本寺ノ儀、顯然タレバ、格別ノ可被及裁許旨ニテ、同年、加州吉祥山永平寺ノ末寺ニ屬ス、同十五年、綱利公依願、領內曹洞一宗ノ僧錄所ニ成レリ、又僧錄役務ノ糧料トシテ、正德五年九月米五拾石宛、每歲賜之ノ命アリ、連綿タリ、

〔日本地誌提要 七十 肥後〕佛寺

大慈寺 (同郡(飽田)野田村、禪宗、僧義尹開基、弘安元年戊寅創建、享保二年己丑、僧洞春再興、寺域壹萬三千八百四拾坪、)

〔本朝高僧傳 二十 淨禪〕肥後大慈寺沙門義尹傳

釋義尹、號寒巖、順德帝第三子也、自少登叡山、爲苾芻、學一心三觀之旨、俄慕教外宗、謁道元和尙於興聖、易衣參究、遂得契悟、○中略在宋十餘年而歸、首寓博多聖福寺、繼往肥後州、創如來寺、建治年中、尹募衆緣造大渡長橋、人民皆被其利濟、刺史源泰明檮仰道風、誓爲外護、弘安六年勸諸檀信、復建一寺於

大渡、設梵像窣堵、牓曰大慈、金碧焜燿飛出林梢、參玄之徒烏立鱗振、龜山上皇特賜宸翰賜額、正安二年八月某日謝世、壽齡八十有四、塔曰靈根焉、

名稱 所在 創建 沿革

本妙寺

本妙寺ハ、肥後國飽田郡井芹村ニ在リ、後陽成天皇慶長五年、加藤清正ノ建立スル所ニシテ、僧日眞ヲ以テ開山ト爲ス、日蓮宗一致派ニ屬シ、京都本國寺ニ隷セリ、

〔肥後國志三 飽田郡〕中尾村 井芹村ノ内 高百七石餘、西原村、檜林村等ノ小村アリ、

本妙寺發星山　法華宗京本國寺末寺ナリ、寺領四百石、加藤肥後守清正侯建立、山號發星、又中尾山、始ハ法性山ト號シ、中頃金峯山トモ號セリ、開山日眞上人也、日眞ハ清正侯師依僧、初名慶傳ト號ス、下總國佐倉長勝寺、同國平賀本土寺ノ門人所化也シト云、京師法鏡山妙傳寺十二世ノ住職ナリ、天正十三年十一月十五日、廿八歲ノ時、攝州發星山本妙寺ヲ建立シ、同十六年、清正侯肥後入國ノ時來リ、即チ清正侯ノ旨ヲ得テ、熊本ノ府城下三ノ丸 或云、法華坂、 三寶院ト云、天台ノ寺迹ヲ法華ノ敎利トシ、日眞暫ク住之、其後慶長五年十月十四日、清正侯大坂ノ菩提所本妙寺ヲ此地ニ遷シ、日眞ヲ開山トス 發星山、舊法性山ト云、開祖日眞、瑞夢ノ兆アリ、殿前清水涌出、祥星池水ヲ照ス、因テ山號ヲ改メ發星ト號ストイフ、 同十一年、近衞信尹公ノ執奏ニ依テ、紫衣ヲ賜リ、爲權大僧都法印、同十二年、寺ヲ二世日繞ニ讓テ隱居ス、同十六年六月、清正侯卒逝、同年令嗣忠廣主、其亡考清正侯ノ靈廟ヲ、飽田郡池龜庄井芹村中尾山ニ建、同十九年、本妙寺ヲ 法華坂ニアリ、 亦此所ニ移ス、當寺建立ノ儀嘗テ達天聽、後陽成帝勅願ノ綸旨ヲ賜ル、其文ニ曰ク、

令專佛法紹隆、宜奉祈國家之安泰者、依天氣執達如件、

慶長十年六月廿四日　頭左中辨

日眞上人御房　私考、廣橋左中辨總光卿也、

寄附ノ寺領現米、七百石餘、且境内山林年貢免許ノ地アリ、寛永九年、忠廣主配流ノ後、江府ヨリ上使衆下向、寺境巡撿ノ上、山林封境本地ノ税等、前方ノ通タルベキ旨台命アリ、亦五ケ條ノ制書附置ル、同年忠利君三百石ノ寺領寄附之、同十一年隱居料百石、合四百石ノ寺領ナリ、同十年、忠利君光貎ヲ寄ラレ、寺式先規ヲ守ルベク、且寺境ノ儀、南北ノ谷限タルベキ旨、御繪圖ニ御直筆ノ裏書ヲ加ヘラレテ賜レ之、爾來六十餘年ニ至リ、山林ノ境、混亂アルニ依リ、當寺九世正心院日榮住職ノ時、元祿十二年、公裁ヲ仰グノ處、十世寂圓院日堯在住ノ時、舊繪圖ノ表相違無ク裁斷ヲ遂ラレテ相渡サル、當寺開山權大僧都法印發星院日眞、寛永三年四月廿二日遷化、六十九歲、二世權大僧都妙雲院日繞、慶長十七年八月十二日化、三世本住院日遙、万治二年二月廿六日化、日遙ハ高麗國ノ人也、世ニ高麗上人ト云、日遙ハ朝鮮國慶尚道河東ノ居、余天甲斎偉ノ男也、小名余大男、壬辰年始八歳、寓ニ居曹溪洞普賢庵燈巡之處、捕來、清正郎重岡ニ其姓名、始末唯言ニ白雲生虜有ニ人家、更敢不レ鎔、清正公歸朝ノ後投ニ寂照院日乾上人之室ニ今ニ蹟ニ嶷字ニ學ニ淵ニ其後余天甲贈レ書招レ之、日眞復書アリ、余天甲ガ書翰、學淵ガ復書案、共ニ本妙寺ニ有レ之、四世本住院日還、五世一圓院日悠、六世惠雲院日潤、七世玄收院日顗、八世久遠院日長、九世正心院日榮、十世寂圓院日堯、十一世好賢院日山、十二世靜照院日良、十三世本住院日念、十四世誠諦院日證、十五世鷲峯院日清、十六世靈智院日慼、十七世當住諦智院日健ナリ、又寺記云、清正公往日、壽藏ノ地ヲ今ノ所ニトシ、荊棘ヲ伐、牓示ヲ定メ因テ全身ヲ收藏シ、廟殿ヲ建、面リ熊城ニ對ス、層級最頂等ク高下ナシ、廟額淨池院三字、朝鮮國松雲禪師書、左右ノ塔殉死、左ハ大木土佐守、法名道了日解右ハ金官、法名法四日融從廟門降ニ石階、二百廿五、其程二町餘、至ニ本堂門前ニ本堂四面十三間、額ハ當山日遙書、勅願祈禱牌祈禱二字日遙筆、後堂渡廿八間廊入大方丈額、方丈二字日遙筆、此處亦安ニ日乘大居士之形像ニ山門額、發星山三字、松雲禪師筆、門未レ造、從ニ總門ニ至ニ本堂門前ニ三町半餘、從ニ總門ニ百八十間、大方丈前有ニ石階ニ世人

是名、三段石階、今有八階、石階上右方向南、有代香門、次構門、太守佛詣之時開之、代香門東廿餘間大門、自餘人々從是出入、此門內數十步向西有出仕門、塔頭末山僧侶出入、同向東設中門、入玄關、從是三十間有理門、出本堂庭際、西方升石階五十計、七面社鳥居總門前十一段石階上、北下馬札石、南山門殺生禁斷之碑、其江村宗因筆、從總門西方直入到廟門五町半餘、兩側有櫻樹、其間南北塔頭十二字、本堂後方有一院、名發心院、(共十三院)本堂門前有丈六釋迦堂、堂後方高低曲折、數千步、到常唱堂、十二時鳴鐘、晝夜唱題目、始于寬文年中、永々不絕、當院亦綱利尊君有御成之間、廟堂山上山下數千步地廟建立、後無雷擊災、人皆爲異事、谷西南有毘沙門堂、(不知其始)當山西方出山上村大道、有清流、四時不斷、寬永九年、上使巡撿之時、因台命五ヶ條之立制札、山中蛇谷、姥懷堂、床山、蝙蝠谷、小粒山、岩上等有地名、小粒山之西谷有馬瀧、又稻荷靈所アリ、又東廿餘町有山王祠、云三點山一乘寺、寺ハ無シ、井芹村有遠池、爲供日乘大居士廟堂、藤太守忠廣主所設也、神妙山理性寺之有廢迹、東北廿餘町有岩、立處周廻三百間計、日乘大居士殯送之迹云、靜慶庵發心院北三町餘、當寺歷代有墳、從是三町餘、岩洞小水濺出、俗是名地藏米泔水、猶二町計、有石不動、辨才天石像、不知年歷、此間云四無礙谷、西頭有妙樂寺迹、(一壇日眞、五壇日無、七壇日頭陀塔迹也、)從是西數百步有辨秀上人石經塔、不知年序、象宗致、四無礙谷東北有西福寺迹、又北方山中有數園椰樹、不知歲百歲、又有山中千年松樹東南數百步、有地藏塔、文安元年造之、其外山中所々有廟地、

〔本妙寺文書〕殿樣御祈禱之事

一一日、十五日、每月御日待之事、

一三ヶ月、十七夜、十八夜、廿三夜、每月御月待之事、

右之通、每月無懈怠可有御祈念之旨、宿老衆御申候、爲其申上候、以上、

慶長十六年十一月十七日　　加藤平左衛門（花押）

雜說

日眞上人樣 まいる

〔本妙寺文書〕于時天正十三天戊子霜月十五日、鎭西肥後國飽田郡隈本國主淸正公建立寺號發星山本妙寺、慶長五天庚子十月十四日、筑後肥後兩國之主君淸正公建立寺之住持、關東下總國作倉長勝寺平賀本土寺門人所化名慶傳、實名日眞、然攸國主高麗之渡海者、文祿元年壬辰同三年甲午日眞渡海、慶長元年乙未九月歸朝、同伴肥前國林藏坊日禪、已上出家十八人也、新記慶長五天庚子霜月十五日、本妙寺權大僧都法印日眞　第一老肥前國小城郡深河住林藏坊日禪　第二關東下總國大須賀住玉琳坊日就　肥後國住泉林坊　肥前國住本成坊後代衆僧加ㇾ判、每月十八日、懸ㇾ佛前ㇾ讀ㇾ誦ㇾ之、可ㇾ二世願望所ㇾ念者也、

林藏坊日禪 花押

玉琳坊日就 花押

〔本妙寺文書〕(表書)本妙寺　淸正

今夜身上に、よきゆめ見申候間、はんしんへ、御きねん候て可ㇾ被ㇾ給候、爲ㇾ其申入候、御きとう爲ㇾ領、同しゆく衆中へ、かみこかみを可ㇾ進之候、かしく、

廿四日

名稱

所在

寺格

淨水寺

淨水寺ハ、肥後國ニ在リ、淳和天皇天長五年、定額寺ニ列ス、今廢寺ニシテ、其所在ヲ詳ニセズ、

〔太宰管內志〕肥後五八代郡淨水寺

日本逸史三十六卷十〇天長五年月乙卯に、肥後國淨水寺云々、又彼寺南大門碑銘に、南大門幷碑文開、夫不ㇾ

人猶發、發者法。法不獨弘、弘者人、然玄弉法師、早陀四忍、敏。悟三空、智通。無。累、神測未然、超六歳迴出掩、中古以無對。悲。佛法文陵遲、慨深文訛謬、遠踐。百□□國□□萬里之山川、積雪失地、驚砂。迷天、西域□揚八識五乘三教梵本經論一千□六百五十七部、手□□□□爾、仍葬。善獄。山。淨水寺、治田壹拾所。益城與宇土郡間□宮□椅料□□（益城三所、宇土四所、）□因。料內典雜書合六□千四百□卷□以前、若□親戚。等□犯用者、妙見并、及一千七百諸神。群諸知識□機命□除。情。理。無。敎。矣、延曆九年二月廿二日とあり、石面駁落して見分がたき物と云、今諸索に依て數字を補へり、そは字傍に○を記して是を分てり、吾友岡崎勝海云、熊本方より八代にゆけば一里計前にし、左に一里計入て、其處の聊高所に淨水寺あり、古碑傍に又一碑をたてたり、寺はいたう衰へて廢寺とも云べきさまなりと云りき、（此寺の事かされて委く考ふべし）常足按ずるに、碑文に益城與宇土云々とある所は、官道椅料事を記せりと聞ゆ、（宮、官字を書ひがめたるものなるべし、）

〔太宰管內志肥後四飽田郡〕淨水寺

後紀十八卷に、天長五年冬十月乙卯、肥後國淨水寺預定額寺とあり、此寺今は詳ならざれど、長瀨氏の說に、今飽田郡北岡に淸水寺あり、是彼淨水寺なるべしとあるに因て、暫く此所に擧つ、

〔類聚國史百八十佛道〕天長五年十月乙卯、美濃國菩提寺、伊豫國彌勒寺、肥後國淨水寺、預定額寺、

大慈寺

大慈寺ハ、日向國諸縣郡志布志ニ在リ、光明天皇曆應三年、楡井頼仲ノ建立スル所ニシテ、僧玉山ヲ以テ開山ト爲ス、臨濟宗ニ屬シ、十刹ノ一タリ、

〔太宰管內志日向四諸縣郡〕大慈寺

創建
堂塔

志布志記略に、諸縣郡、龍興山大慈廣慧禪寺者、臨濟宗開山派、而京都妙心寺末寺也、寺領五百八十一石餘、開山玉山和尚、勅謚佛智大通禪師、南禪寺開山大明國師之法嗣、而信濃國井上氏之子也、曆應三年草創、施主檀那楡井遠江守賴仲建立之、賴仲元來信濃源氏也、爲宮方大將、押領志布志幷肝付等、依之引移肝付帝釋寺于志布志、建立當寺、楡井在當鄕松尾城、振威、於是宮方大將畠山禮部猜楡井攻之、楡井討負於當寺內寶地庵自殺、(今其跡に少き五輪ノ石塔あり○中略)六代大守氏久公之時、以龍翔寺剛中和尚爲當寺二代之住僧、大門有額、大慈寺三字也、(鼓山大心和尚之筆也)門前有下馬札、山門當時廢絕、本堂有額、拈華堂三字也、(支那高泉之筆也)本尊千手觀音者、佛工運慶之作也、唐渡半鐘一口在本堂內、(此鐘は、義久入道龍伯御陣鐘の由申傳也、この一對の鐘、國分の龍昌寺にあり、)鎭守熊野權現社、江隈大明神社、是祭新納惡四郎久顯靈、初號荒人神社、又江林神社、鐘樓、(此樓又古靈板の一重三重にれぢれぢ遍したるあり、是に惡四郎太刀にて自れぢられたりといふ、)鬢鉤松、(此松今はなし、此松四十五世龍雲和尚又のかしらなつかんで釣り上たりと云、龍雲大德の人たるに依て、つゝがなかりしよしいひ傳へたり、)大樹庵、有額、淸凉軒三字也、南岳悅山之筆也、是領主新禱所也、每年正月自十一日至十五日、有疏銘祈禱懺法、此堂裏有剛中和尚影像、衆寮亦在此裏、開山堂、有額、止々庵三字也、南岳悅山之筆也、此堂者、觀應二年五月二十五日開山、大通禪師入定之地也、唐門、在方丈前、方丈、有額、烹金爐三字也、支那高泉之筆也、紫雲軒當寺書院也、又有十景、萬菖峯、擴鄕島、夜明庭、雲秀溪、潮音閣、拈華堂、烹金爐、止々庵、淸凉軒、綠池、又有八景、瀧山春望、古寺綠陰、野市炊烟、漁浦歸舟、橋邊暮雨、江上夕陽、東營秋月、西塞夜雪、應永十一年、太守元久公、與京都將軍義滿公之上使、朝山出雲守師綱、同小次郎重綱、於此寺面謁之時、有和漢之會云々、塔頭卽心院、寺領十五石、御佛餉米八石、開山大慈寺二世剛中和尚也、○中略塔頭、龍澤庵、見性庵、龍樹院、大全庵、瑞泉院、大雄庵、龍護庵、右七庵者現存之、安住院、秀照庵、龍翔庵、寶地庵、海雲庵、慈雲庵、德壽庵、延命寺、右八庵者、當時廢絕、大慈寺門前二町許、屋敷七十餘、十王堂在大慈寺裏門下濱際、

寺格

〔攝壤集(上寺院)〕十刹(京師井諸國及甲刹)
大慈寺(向州)

名稱 所在	寺格 寺職

島分寺

多褹島分寺ハ、舊ト大隅國熊毛郡多褹島ニ在リキ、其名ハ始テ文德天皇齊衡二年ノ格ニ見エタレドモ、是ヨリ先仁明天皇天長元年、多褹島ヲ停メテ、大隅國ニ隷屬セシメタレバ、此寺モ亦既ニ其寺格ヲ失セシナラン、

〔太宰管內志大隅下熊毛郡〕島分寺〇中略島分寺、今は詳ならず、此島〇多褹今はすべて法華宗なる由なれば、島分寺も其宗旨にて傳はれるにや、もし島分寺今に傳はれる事あらば、必尼寺もそのあたりにあるべし、海上遠に隔たる島なれば、たど〱しき事のみなり、

〔類聚三代格三〕太政官符

應ㇾ置二對馬島講師一事

右得二大宰府解一偁、島司解偁、依二民部省去十月十六日符一、停二止大隅、薩摩、對馬、壹岐、多褹等國島講師一、自ㇾ爾以降、經二百餘歲一、徒有二島分寺一、曾无二修善根一、空聞二六時之鐘聲一、希ㇾ見二一乘之說法一、〇中略

齊衡二年十一月九日

感應寺

感應寺ハ、薩摩國出水郡野田村ニ在リ、後鳥羽天皇建久年中、島津忠久ノ創建スル所ニシテ、僧榮西ヲ以テ開山ト爲ス、元亨三年、島津貞久之ヲ再興シ、僧雲山ヲ以テ中興ノ開山ト爲セリ、臨濟宗ニ屬ス、

名稱　所在　創建　堂塔

〔薩藩名勝志 六 出水郡〕鎭國山感應寺　下名村にあり、地頭假尾の子方、凡拾壹町、臨濟宗京都五山第四東福禪寺の末にして、開山千光國師、（初め葉上僧正、諱は榮西といふ、京都東山建仁寺開山なり、建保三年七月五日、歳七十五にして寂す、）本尊千手觀音、（坐像長三尺餘、定朝作、脇侍持國天、多門天、增長天、廣目天、凡長二尺八寸、同作、）當寺は建久五年、本田二郎親恒、得佛公（○島津忠久）の命を蒙り、薩州山門院に下向して、國家鎭護の爲に一字を建立し、鎭國山感應寺と號す、其後親恒は鎌倉に上り、親恒子、二郎貞親、得佛公の供奉して當國に下向し、公を山門院木牟禮城に入奉り、貞親は竹林城に住居して、感應寺をもて公の御寺と定む、公嘉祿三年丁亥六月十八日、相州鎌倉に逝去し給ふ、よて當寺內に御骨堂を建立して、光明院と號し、御石塔を立て、冥福を修し奉る、卽安貞二年戊子六月十八日なり、（安貞二年八月十八日、得佛公御子道佛公（島津忠時）水田三町を、光明院に寄進し給ふ、御判の文書ありしと見へたり、今その御判物なし、其後光明院は廢して、御石塔は感應寺洒掃を司る、）其後元享三年、邦君道義公（○島津忠宗）の時、御子道鑑公（○島津貞久）當寺を再興し給ひ、惠日山東福寺の境地を表して、七堂伽藍を造營し、雲山和尚をもて中興開山となす、此時東福寺末山となりしと見へたり、（道鑑公佛殿造立地引折紙壹通、佛殿造營用水折紙壹通、其外立柱儀式水田等を寄附し給ふ御判の證書、數通ありしと見へたり、火災に罹り今なし、建武三年丙子九月廿七日、開山祖興證文、檀那島津貞久封裏の文書も今見えず、雲山は東福寺二世聖鑑禪師の嗣法、康永三年甲申九月二十日七十一にして入定す、卽開山堂下に安す、○下略）

〔三國名勝圖會 十五 薩摩國出水郡〕鎭國山感應寺（地頭館より、子方、十一町、）野田村下名にあり、京都五山の內、東福寺の末、臨濟禪宗なり、本尊千手觀音、（坐像、長三尺、定朝作、夾侍持國天、多門天、增長天、廣目天、凡長二尺八寸、同作、）開山千光國師、（諱榮西、建保三年七月五日寂す、）國師は初め宋國に入り、禪宗を傳へて歸る、京都建仁寺の開山にて、本朝禪宗傳法の始祖なり、○中略文治二年丙午の歲、得佛公（○島津忠久）薩隅日三州の封を鎌倉右幕府に受くるや、本田左衞門尉貞親に命じ、先づ薩州に下して變を觀せしむ、貞親山門院に於て、木牟禮城を築き、（此城出水郷にあり）又當寺を建立し、鎭國山感應寺と號す、（長島寺記曰、長島に感應寺あり、是を當邑に移すと、）既にして貞親鎌倉に上り、事狀を啓す、於是得佛公貞親等、若干人を從て當國に下り、木牟禮城を治所とし、貞親をして竹林城に居

らしむ、寺說に、本田貞親が當寺の創建を、建久五年とす、かくて當寺の開山榮西は、元亨釋書に、建久二年、宋より歸ると見え、建久五年は、榮西禪宗を傳へて歸るの後に在ば、榮西當寺の開山といふも、論すべきことなきに似たり、然に出水木牟禮城等の條に記せし如く、貞親得佛公に先つて薩州に來り、公始て入州、並に文治二年にして、寺說時世是と符せず、是を以て觀れば、當寺は、公就封の後、建久五年、創建せし歟、一說には得佛公入部を建久七年といふ、是に由て先貞親の下て當寺の創建を、建久五年とせば、寺說には僻といへども、是固より確證なし、故に本文に暫其歲月を闕く、後考を俟つ、竹林城は、出水木牟禮城に見ゆ、嘉祿三年丁亥六月十八日、公鎌倉に薨す、適當寺境內に御石塔、及光明院を立て、冥福を修し奉る、寶安貞二年戊子六月十八日也、得佛公の後嗣道佛公〇島津忠時水田三町を光明院に寄進し給ふ、花押の文書ありしが、其後光明院は廢して、文書も傳らず、御石塔は、當寺より洒掃を司る、光明院址は、今開山堂あるの所といふ、元亨三年癸亥の歲、道鑑公〇島津貞久當寺を再興し給ひ、東福寺の景狀を摸して、殿堂伽藍を造營し、雲山和尙を中興開山とす、此時東福寺の管下となりしとぞ、雲山は東福寺第二世圓鑑禪師の法嗣なり、康永三年甲申九月二十日、七十一にして入定す、開山堂下に入定の石棺あり、曆應二年己卯の歲、道鑑公京師に上り、足利大將軍尊氏に謁す、大將軍大に悅び、薩國の緇林に禮樂を興すべき所ありやと問はる、公感應寺を以て答ふ、大將軍乃ち使者を下し、當寺の來由、主盟の家風を問ふ、雲山其來由を說ずして一偈を賦して答ふ、大將軍感歎して倭歌一首を賜ふ、短册の和歌は、天文十二年辛丑正月廿日、火災に罹て今はなし、其歌雲山和尙像讃に見えたり、其像は當寺第十世徹堂和尙、畫工に請て圖す、かくて雲山和尙、東福寺に至る、大將軍に謁す、十二月十七日、大將軍敎書を賜ひ、諸山の班列とし、同月廿三日、十刹に加へらる、故に大將軍の靈牌を客殿に安置す、貞治五年丙午八月廿七日、雲山より第三世大圓和尙に、大將軍義滿十刹の御敎書を賜ふ、爾來世々の住侍に、足利大將軍より御敎書を賜はりて、西堂となす、第十世を徹堂和尙といふ、明應七年戊午十二月十四日、宣旨を下し、徹堂和尙に佛宗大彌禪師の號を賜ふ、得佛公以來、道鑑公に至り、五世の御石塔あり、往古は邦君及び出水領主薩州家等より寄附ありし寺領、甚多かりしに、薩州家島津又太郎忠辰、罪ありて封を除かれし時、寺領沒入して、其後小刹となる、當寺定祿の外に、毎年廩米十二石を賜

名稱　所在　創建　堂塔

ふ、

先世邦君御石塔　前文に見ゆ、當寺本堂の西四十八歩許にあり、

開山堂　前文に見ゆ、當寺本堂の西南數十歩にあり、中興開山雲山和尚の肖像を安す、〇下略

福昌寺

福昌寺ハ、薩摩國鹿兒島郡坂本村ニ在リ、後小松天皇應永元年、島津元久ノ建立スル所ニシテ、僧眞梁ヲ以テ開山ト爲ス、島津氏ノ菩提所ニシテ、日薩隅三州ノ最大伽藍ナリ、曹洞宗ニ屬ヌ、

〔和漢三才圖會　八十薩摩〕玉龍山福昌寺　禪宗　寺領千石

大守島津氏建立、開山鎭梁〇鎭梁、眞梁誤、石屋禪師、後小松院朝應永元年草創、

〔三國名所圖會　五薩摩國鹿兒島郡鹿兒島〕佛寺

玉龍山福昌寺の府城北　坂本村長谷場にあり、能登州諸岳山總持寺の末にて、曹洞宗なり、大門、山門、本堂、皆南に向ふ、七堂伽藍を作る、大門に獅子吼の額、僧月舟が所書　山門には、玉龍山の額、大信公の御書なり　本堂には覺皇寶殿の額を標し、唐土石鼓山湧泉寺道霈の書　客殿には、勅願所福昌寺の六字を題す、近衞藤公前久所書　本尊釋迦如來、座像、長三尺、運慶作、後光の銘文云、大檀那島津修理大夫藤原義久朝臣、大願主福昌寺現住天澤修補之、費用之施主勸天澤圓書禪師傳室和尚京一條大宮大佛師少貳公圖獻生隆惠法眼、彩色天正十五自丁亥至戊子畢之、夾持阿難、迦葉、須菩提、八金剛、共に運慶作　旁に皇帝牌、牌文曰、今上皇帝萬々歲　檀那牌、檀那本命元辰星君　火德牌南方火德圖部聖衆　の三牌を掛く、此牌文字、皆仲書和尚の所書と云、且恕翁公〔島津元久〕并　大信公の尊像を安置す、開山は石屋眞梁和尚とす、當寺は薩隅日三州の僧錄所にして勅願所なり、應永元年、恕翁公、石屋禪師に歸依し、法緣相契ひ、創建し給ひて、藩國第一の巨刹なり、累代邦君の靈廟を建立せる所にして、藩

朝の菩提所たり、按ずるに、石屋禪師、諱は眞梁、○中略恕翁公歸依して屢法を問ふ、應永元年、公鹿兒島長谷場氏が故居に、長谷場六郎久純が宅地なり巨刹を創建し、師を請じて是に住せしむ、師時に年五十、寺成て玉龍山福昌寺と號す蓋し文殊大士夢授の福玉の二字を取るなり、恕翁公、溪山郡宇宿村田一千三百五十石を喜捨して、永く寺祿に付す、寺中常に僧千五百餘人を安ず、○中略恕翁公御創建の以後、代々の邦君の御崇敬他寺に勝りて、永く本藩の御菩提所と定まれり、其後亂世相つゞき、當寺稍衰廢して、溪山宇宿村の田祿領地も、何となく欠落して、舊の如くならざりければ、大中公○島津貴久の御時、天文九年、當寺を御中興ありて、宇宿村の寺領も全く舊に復し、剩へ谷山郡福本村水田三段を加へて御寄附ありければ、當寺の佛日光輝更に前代に倍せり、故に大中公を當寺中興の大檀越と稱せり、今に數百歲相つゞき、當寺を本藩の菩提所と崇め、累代の邦君御崇敬特異にして、邦君の薨時には、靈廟を建立し給ひて香花を供へ、其冥福を修するの所とす、先代邦君及び諸公子、諸夫人等の法會頻繁にして、其法會の品に由て邦君親ら臨し、或は國老等代詣して、行香等の事をなす、其國式定例あり、誠に當寺は、本藩特待の大法窟たる事、言を待ずして知るべし、天文十五年、住持忍室和尚第十五世が時、勅願所の綸旨を賜ふ、此時忍室和尚に號を佛照大圓禪師と賜へり、又忍室一師のみならず、當寺傑出の住僧へは、天庭より時に法號を特賜あり、是等當寺の眉目、高く天庭に照輝せり、天明三年、住持圓山和尚が時、住持の僧ごとに、江府に詣りて大將軍に拜謁を許さる、是淨岸夫人の淨岸夫人は邦君宥邦公の配にして、大府より降り嫁す、法事を修し、且古來勅願所の由緒及び西國中國の古本寺たる故を以、永く一住一度獨禮並乘輿格式の命を蒙る、當寺の光輝益す遠に及ぶ、又當寺の住持は時に能登總持寺の輪番に赴き勤むる事もあり、是當寺の由緒特異なるを以てなり、延寶元年四月廿六日、當寺火災に罹て燒亡す、享保廿年十月三日、回祿に厄して、蕩然たり、其後重建ありて、暫く簡陋に從ひしに、住持疎山が時、大信公の代、明和八年、命じて殿堂門廡を改

め作り、悉く其舊に復し、或は光華を加へらる、〇中略　開山堂　本堂の西にあり、智日堂と扁す、竹居和尚の書なり開山石屋禪師の像を安ず、寺宇宏麗にして前庭亦廣し、師年回忌の時は、本藩の末寺は論なく、他國末寺の僧徒も來會して、法會甚盛なり、當寺の住持僧侶と問答商量等の式あり、〇中略　禪堂　本堂の西南方にあり、僧徒修定の處なり、　方丈　寺内の北にあり、後山を刷て假山とし、下に清池を開き、景致清幽なり、　鐘樓　本堂の東にあり〇下略

〔本朝高僧傳三十九淨禪〕薩州福昌寺沙門眞梁傳

釋眞梁、號石屋、薩州伊集院人、姓源、島津忠久之後裔也、〇中略應永改元、薩州太守源元久島津氏建梵刹、梁爲開山始祖、梁揭以玉龍山福昌寺、標昔日所夢、稱皂隨風梯山航海、來至一千五百指、鐘鼓交鳴、規繩井井、成一方望刹、開堂祝釐、

寺格

〔三國名勝圖會五薩摩國鹿兒島郡鹿兒島〕佛寺

玉龍山福昌寺〇府城の北中略　天文十五年、住持忍室和尚第十五世が時、勅願所の綸旨を賜ふ、〇中略

當寺爲勅願之淨場、宜奉祈皇家再興之由、天氣所候也、依而執達如件、

後奈良帝勅書

天文十五年三月八日　　　名字花押略

福昌寺住持和尚

子院

〔三國名勝圖會五薩摩國鹿兒島郡鹿兒島〕佛寺

玉龍山福昌寺府城の北　坂本村長谷場にあり、〇中略　惠燈院　龍門橋の前にあり、義天公の菩提所にして、本寺の後見寺なり、本尊十一面觀音、坐像、運慶作　開山石屋禪師なり、惠燈の二字は福昌寺の院號なりしといふ、〇中略　深固院附秋葉權現社　福昌寺三塔司の一にして、後山の半腹にあり、本尊聖觀音、坐像　開山石室和尚なり、〇中略　華舜軒　福昌寺三塔司の一にして、其境内にあり、

本尊阿彌陀如來、坐像開山喜冠和尚福昌寺十六世なり、永祿二年、梅岳君華舜夫人の爲に建立し給へり、華舜夫人は梅岳君の季女にして、貫明公の御夫人なり、　月香院　福昌寺三塔司の一にして、其境内にあり、本尊聖觀音大士、坐像開山代實和尚福昌寺十八世なり、當寺は島津左衛門督歲久の開基にして、大中公の靈牌を安置し、良等庵と號す、其後慈眼公○島津忠恒の側室相良氏の靈牌を安せられて、今の院號に改む、相良氏法名を月香院といふに由てなり、

福昌寺會中の諸支院　凡當寺の內支院多し、僧徒此支院を福昌寺會中と稱す、各左の如し、石心院、開山福昌寺第十二世了達和尚、　松月亭、開山石屋和尚を勸請す、福昌第四十一世定源和尚退院の地、　大翁軒、開山福昌第廿五世岱翁和尚、　延壽堂、開山石屋和尚、　龍護院、開山福昌第三十一世嶺室和尚、　實相軒、開山福昌第二十八世天室和尚、　靈鷲軒、開山福昌第二十九世貫室和尚、　得水軒、開山福昌第廿七世奪文和尚、　宇參軒、開山仲翁和尚、　了寂軒開山詳ならず、　了性軒、開山詳ならず、　花翁軒、開山福昌第十三世大廉和尚、　昌山軒、開山福昌第二十四世桃屋和尚

福昌寺山中禪院合記　凡そ當寺の山中廣大なれば、下刹多く建立せり、僧徒此を福昌寺山中の禪院と稱す、前條の會中支院より、或は頗る大なるあり、　嶺鷲院、開山石屋和尚を勸請す、福昌第三十一世嶺室和尚開基なり、此地高敞にして、海山の眺望あり、　桂樹院、開山福昌第三十世潭州和尚を勸請す、通徹和尚開基す、寬永十四年、福昌寺內に建て、休外院と號す、其後內の丸の地へ移し、今の院號に改む、　慈雲院、開山福昌第四十二世、太春和尚、福昌住持是に退老の僧多し、　翁心軒、開基蘭甫和尚、此外前條に見えたる蛇之窟の正眞軒も此列なり、

島分寺

名稱　所在

壹岐國島分寺ハ、壹岐郡中野郷村ニ在リ、原ト壹岐島直ノ氏寺ヲ以テ之ニ充ツ、中世衰頽セシガ、寛文二年、禪僧暗宗之ヲ再興セリ、初メ國分村ニ在リ、後今ノ地ニ移ス、

〔延喜式玄蕃二十一〕凡〈○中略〉壹岐島直氏寺爲二島分寺一、置二僧五口一、

〔日本地誌提要壹岐七十四〕佛寺 國分寺〈壹岐郡中野郷村、同宗、(禪)天平中、僧行基創建、寛文二年壬寅、僧暗宗中興、初國分村ニアリ、元文三年戊午、今地ニ移ス、寺域三千貳百八拾八坪、〉

用途

〔延喜式主税二十六〕凡壹岐島島分寺法會布施供養寺料稻一万二千九百七十一束一把一分五毫〈最勝王經料一千八百八十七束五分五毫、吉祥悔過料三千三百六十四束二把六分、〉太宰府以二管内諸國正税一通計〈崇道天皇春秋讀經料八百五束、居雜用料六千九百十九束八把六分、〉以充行、〈筑前國八百八十束、肥前國二千七百六十六束、肥後國三千六百廿束九把一分五毫、豐後國三千九百四束、日向國一千八百束、〉

凡壹岐島島分寺佛聖供料稻一千三百卅二束八分、講師當供〈○供下恐脫二料字一〉四千七百廿六束、以二筑前國正税一毎年充行、

島分寺

名稱　所在　創建　沿革　堂塔

對馬國島分寺ハ、下縣郡嚴原ニ在リ、天平中、聖武天皇ノ勅願ニ由リテ創立スル所ニシテ、文明中、僧宗睦之ヲ中興ス、此寺初メ國府ノ西ニ在リシガ、後屢移轉シテ、遂ニ今ノ地ニ遷ル、曹洞宗ニ屬ス、

〔津島紀事二州治〕寺院

天徳山國分寺〈曹洞、原眞言、〉聖武天平丁丑、〈○九年〉勅二建之一、號二島分寺一、〈元正養老辛酉(五年)毎州置二國分寺一、立昇、按宜下在二此朝一、而丁丑營レ之歟、〉在二府治西一、以二大日金像一爲二本尊一、天安丁丑、〈○元年〉罹二兵火一、戊寅、〈○二年〉權營二建大日堂於國府岳下一、〈後爲二寺剎一、謂二之大日寺一、〉文明初再營、避二故跡一遷二於山間一、寛文乙巳、〈○五年〉遷二於日吉一、天和癸亥、〈○三年〉興二以酊庵一換易徙二於嚴原一、〈此時相國寺ニ〉

寺職

雲庵、大虛顯虛、是老輪住以町庵北翁天海主國分寺、山稱福屋、成作福利寛保壬戌、〇二年再稱天德、享保壬子(十七年)三月、國分寺罹災故也、當寺中興開基、甫庵宗睦、刑部少輔盛國季子、十三學眞言、後爲禪學、文明己亥、〇十一年示寂、後安像、因領曹洞淨土眞宗法華眞言等在本州者、爲錄所、

藥師堂古藥師神社、已見前、後安佛像、遂遷國分寺、以此像及太平寺地藏成相寺太士、爲本州三佛、良工所刻相傳、永和丙辰〇二年二月、國分寺火、藥師獲免、享保壬子(十七年)亦免災、

〔日本地誌提要七十四對馬〕佛寺 國分寺下縣郡嚴原、禪宗、天平中創建、文明中、僧宗睦中興、寺域千八百九拾六坪、

〔太宰管內志對馬中上縣郡〕島分寺今下縣

さて此寺のありどころも、今たしかにしれされども、國分寺必國府と同處にあるべき例なれば、しばらく此處に擧て、のちの考をまつになむ、宗氏家譜、文安五年ノ件に、盛國有四子云々、熊松後爲僧號甫庵宗睦、居國分寺、同書二卷に、天文八年云々、晴康者、能登守盛俊盛國第一子也長子也、初爲僧經暦諸國、歸來居國分寺、其後長髮還入道、

〔類聚三代格三〕太政官符

應置對馬島講師事

右得大宰府解偁、島司解偁、依民部省去十月十六日符、停止大隅、薩摩、對馬、壹岐、多褹等國島講師、自爾以降經百餘歲、徒有島分寺、曾无修善根、空聞六時之鐘聲、希見一乘之說法、方今大隅、薩摩、壹岐等國島、依舊各置講師、始勤薰修、望請此島同亦置講師、令修御願、其供養願以闕官料不仕人粮內、因准品官、每月充粇二斛五斗、但法服布施料准壹岐島、以陸地物被施充者、府依解狀請官裁者、右大臣宣、奉勅依請但依承和十一年四月十日格、以彼府管內之僧選補、

齊衡二年十一月九日

古事類苑

宗教部七十

耶蘇教上

耶蘇教ノ始テ我國ニ弘マリシハ、後奈良天皇ノ天文年間ノ事ニシテ、葡萄牙人ノ傳フル所ニ起リ、或ハ豐後ノ府内港ニ於テスト云ヒ、或ハ薩摩ノ鹿兒島若シクハ大隅ノ種子島ニ於テストモ云フ、是レヨリ諸國ニ傳播シ、京師ニ及ビ、織田信長ニ信ゼラレ、永祿年中京都四條坊門ニ、南蠻寺ノ設立ヲ見ルニ至レリ、爾來上ハ諸侯ヨリ下ハ庶人ニ至ルマデ、之ヲ信ズルモノ漸ク多ク、特ニ豐後ノ大友氏、肥前ノ有馬、大村諸氏、及ビ京攝間ノ諸侯ハ、尤モ之ヲ信ジ、或ハ神社佛閣ヲ破却シ、或ハ使節ヲ羅馬法王ニ致シテ、奉教ノ志ヲ表スルニ至レリ、此後、豐臣氏、德川氏、相踵デ之ヲ嚴禁セシカド、奉教ノ徒、全國ニ瀰蔓シタレバ、後年全國諸藩ヲ普ク檢察セシ時ニ當リ、其絶エテ奉教ノ徒ヲ出サヾリシハ、僅ニ大隅、日向、隱岐、伯耆、丹後、志摩、甲斐、安房ノ八國ニ過ギザリシト云フ、以テ其傳播ノ甚シキヲ察スベシ、

耶蘇ハ一ニ基督(キリスト)ト云ヒテ、此教開祖ノ名ナリ、此宗教ハ、天ニ一箇ノ神アリテ、萬物皆其生ム所、其支配スル所ナリト唱フ、其神ノ名ヲ葡萄牙語ニ、デウスト云ヒ、漢譯シテ天主ト云フ、而シテ葡萄牙語ニ、又基督ヲ、キリシタント云フガ故ニ、我國ニテ此宗ヲ當時切支丹宗門(本吉利支丹ニ作ル、後德川綱吉ノ諱ヲ避ケテ改ムト云フ、)ト呼ビシナリ、其教義行事等、佛教ニ似タル所多ク、五戒、十戒等ヲ立テ、受戒灌頂等ノ如キ作法ヲ、奉教者ニ授ク、僧侶ノ階級十等アリテ、其上首ヲパッパト呼ブ、

即チ葡萄牙、羅馬、西班牙等ノ語ニシテ、譯シテ羅馬法皇ト云フ、我國ニ渡來セシモノハ、其下級ニ居リシモノナリ、當時宣教師ヲ、イルマン、バテレン等ト呼ビシハ、僧ノ位階ニ非ズシテ、之ヲ尊稱セシモノナリシト云フ、而シテ此宗亦佛教ノ如ク、流派甚ダ多クシテ、當時我ガ國ニ來リシモノハ、コンパニヤ、サンフランシスコ、サンドミンゴス、サンドアグスチイノ等ノ派ナリト云フ、

我國ニテ、往時此教ヲ嚴禁セシ事ハ、世界萬國ノ熟知セシ所ナリ、天正十五年、豐臣秀吉九州征伐ノ時ヨリ、其端ヲ發シテ、教徒ヲ逐ヒ、南蠻寺ヲ毀チ、又其信者ノ我命ヲ奉ゼザルモノヲ流死ニ處セリ、然レドモ其禁時ニ弛緩アリテ、教徒益〻增加セリ、慶長十八年、德川家康又之ヲ禁ズ、然レドモ其勢減ゼズ、既ニシテ天草ノ亂アリ、是ニ於テカ、寛永十五年、偏ク令ヲ布キ、其禁益〻嚴ナリ、

初メ德川幕府ノ耶蘇教ヲ嚴禁スルヤ、諸人奉ズル所ノ宗旨ヲ檢察シテ、以テ耶蘇ノ信者ナリヤ否ヤヲ識別セリ、之ヲ宗門改ト云フ、宗門改ノ役人ハ、慶長十九年、板倉勝重等ヲ、特ニ京畿西國ニ遣ハシテ、教徒ヲ追捕セシメシヲ始トスベシ、其後井上政重等、相踵デ大目附ヨリ之ヲ兼帶シ、又御作事奉行ヨリモ兼帶シ、長崎奉行ハ始メ一人ナリシモ、寛永十六年、阿媽港人七十餘人ヲ刑セシ後ハ、一人ヲ增加シテ二人ト爲シ、大ニ宗門改ニ盡力セリ、然レドモ猶ホ檢出シ難キガ故ニ、賞金ヲ懸ケテ、汎ク之ヲ搜索ス、是ヲ囑託ト云フ、斯クテ捕フル所ノ教徒ヲバ、或ハ斬首シ、或ハ磔殺シ、又ハ焚殺、坑殺セリ、然レドモ教徒ハ、之ヲ殉教ト稱シテ、尤モ名譽ノ事ト爲セリ、故ニ後ニハ之ヲ捕フルモ、容易ニ殺サズシテ、種々ノ慘毒ヲ極メ、改宗セシムルコトニ力メタリ、改宗スルモノヲバ、コロブト云フ、即チ其本人ヲ轉(コロビ)吉利支丹本人ト云ヒ、終身本教ニ復セザルモノヲ、古吉利支丹本人ト云ヒ、其一族七世マデヲ類族ト云ヒテ、

戸籍及ビ死後葬式ノ法ニ至ルマデ、之ヲ一般人民ト區別セリ、又敎徒ヲシテ本敎ヲ棄テシムルニハ、苛責ノ外、別ニ佛敎ノ僧侶ヲシテ之ヲ敎諭セシメ、其敎義ノ蔓延ヲ防ガンカ爲ニハ、内外ノ書籍中、直接ニ敎旨ヲ記スルモノハ勿論、片言隻句モ敎義ニ渉ルコトアレバ、亦名目、噂等ト稱シテ、之ヲ讀ムヲ禁ジタリ、而シテ名目ト噂トノミハ、八代將軍吉宗ノ時ニ至リ、洋學ノ必要ヲ感ジ、特ニ其禁ヲ解ケリ、

凡ソ宗門改ハ、慶長年中ヨリ始リテ、諸藩ニ至ルマデ、士民ヲ論ゼズ、之ヲ檢シテ改帳ヲ作リ、且ツ檀那寺ヲシテ、其異狀ナキコトヲ證明セシメタリ、其證明ヲ世ニ寺請證文ト云フ、而シテ其改帳ハ、年々之ヲ幕府ノ寺社奉行ニ上申セシメタリ、又宗門改ニハ、踏繪ト云フ事アリ、卽チ敎徒ノ尊信スル所ノ耶蘇ノ像ヲ踏マシメテ、其信否ヲ試ミルナリ、蓋シ踏繪ノ法ハ、寛永五年ノ比、始マリシモノヽ如シ、而シテ此法ハ、啻ニ本邦ノ人民ノミナラズシテ、支那和蘭等ノ商人ニモ施シタリシガ、安政年中、歐米諸國ト通商條約ヲ結ブニ至リ、其法漸ク弛ミ、且ツ禁敎ノ制ノ如キモ、亦相繼ギテ廢絶セリ

〔大友興廢記 十八〕府内萬壽寺炎上之事

きりしたん宗は、西洋宗とも、又は耶蘇宗ともいへり、○下略

〔破邪編〕第三

耶蘇敎と曰ひ、切支丹と曰ふ、其名は異にして、其敎は同じ、彼の徒の尊奉する所の本尊をば耶和華と名づく、又デイウスとも、デーウスとも云、是は言葉の屈伸長短によりていふと思はる、又デーウスを天主と唱ふるは、洋語を漢音に譯せしなり

〔五月雨抄 上〕吉利支丹とは、音をかるなり、切死丹は調伏の意なり、公に是をもちゆ、

〔海錄 一〕寛永二乙亥年十月、吉利死丹宗門無之旨起請文、案文を以て被仰出候、是則島原一揆の二

傳來

年前也、吉利死丹の字如此の處、切支丹と書改之、常憲院殿〇綱吉御諱之字を憚て改之、

〔天文末錄 下〕百年以前、フランシスコ、シアイエル、初て日本に渡り、大友を勸め、夫より明暦四年までに、伴天連百五人渡し、日本に吉利支丹宗門ひろまり、ハッハに隨ひ候樣に存候得共、〇下略

〔對治邪執論〕原夫天文末、有商客從西夷恚哆俚夜國浪廢京來、寄船於豐後國、尋其船路、從西海而向南方往、自南方向北而來于日本、故和國人呼之、爲南蠻人、見其船中、商客棹郎者二百餘人、其中見形服異于衆人者兩人、一人名曰三附亂志須古婆古惠實、一人曰我須頗實、稱此二人曰頗姪連、此翻和尙、又有一人伴者、名曰路連曾、是爲由實漫、由實漫此翻首座、路連曾、本日本和州之產、名曰了西、從薩州渡浪廢、學天主敎、來歸于日本也、其宗旨名曰喜利志祖、於是路連曾代頗姪連說天主敎、令人歸宗門者凡百餘人、婆昆惠實爲弘通宗旨、且留日本、我須頗實爲重遣頗天連數人、其明年還浪廢、然後婆昆惠實、終致國主歸宗門、建立寺門、演說邪法、當于此時、歸入宗門者如麻粟、其後歷三年、頗天連十一人、乘商船來于肥前國平戶島、然後大村、島原、長崎、天草、筑前國博多、豐前國小倉、攝州大坂、山城伏見、西京、其外於在在處處說邪法、而誹謗佛神、行布施以傾勸男女、因之歸其宗旨者不可勝記、

〔耶蘇天誅記前錄 上〕耶蘇宗門制禁之大旨 上

人皇百六代後奈良院ノ御宇天文年中ヨリ、弘治、永祿、元龜、天正、文祿ノ年間ニ至テ、（天文廿三年、弘治三年、永祿十二年、元龜三年、天正十九年、文祿四年、凡六改元ノ間、六十有四年也、）異國ノ商船吾朝ニ渡來スルコト幾回ト云フ數ヲ知ラズトカヤ、其比ハ、日本ノ諸家書守割據シテ、戰爭ノ最中ナレバ、諸國ノ領主等、國政家法我威ヲ擅ニシテ、一同ノ法令ナク、外國通交ノ禁モ無リシ故、異國ノ商船、心ノ儘ニ津々浦々ニ著岸シケルガ、別シテ豐前、豐後、筑前、筑後、肥前、肥後ノ六國ノ探題大友左衞門督義鎭、如何ナル謂ニヤ、强ク外國ノ交リヲ好ミシ故、南蠻ノ商船、六ケ國ノ間ニ著津スルコト、年々月々斷絕無リシトゾ、其外安藝、周防、長門、出雲、紀伊等ノ海濱ニモ、異國船ノ著岸數ケ度ニシテ、逐一舉ルニ遑アラズ、或ハ交易ノ爲メ

ニ渡來スト稱シ、或ハ風波ノ難ニ遭ヒテ漂著スト云ヒ、彼是事ニ託シヌレバ、其故有ガ如シトイヘドモ、五度ガ中ニ三四度ハ西夷南蠻西夷トハ臨周寛亞、諳厄利亞、阿蘭陀ノ類ヲサス、南蠻トハ、咬𠺕吧、呂宋、莫臥爾、阿媽港ノ類ヲサス、等ノ國ヨリ出タル賊船ニシテ、吉利支丹ノ邪法弘通ノ詳略ヲ、蓄ヘテ來レル者ナリシトカヤ、其巨細徃ハ下ニ記ス、照見ルベシ、

按ズルニ、或書ニ曰、是ヨリ先、人皇七十七代後白河院ノ御代、保元、平治ノ年間ニモ、邪宗門ノ蠻賊ドモ、異船ニ乘來リテ、日本ノ地ニ居住シ、愚民ヲ欺キ勸メ、宗旨ヲ說キ弘メケレドモ、時ノ人歸依セザリケレバ、是非ナク彼宗賊等モ、アトヲ閉マシテ、本國ニ立歸ルト也、其時ハ宗門ノ號ヲ勃魯呂宗ト稱セシトカヤ、〇中略

天文二十年辛亥秋九月、南蠻咬𠺕吧ノ商船、豐後ノ國府內ノ湊ニ著岸ス、此船中ニ、吉利支丹ノ宗賊伴天連以留滿等數人アリ、是則蠻賊ドモ、商買交易ニ據託シテ、吾邦ニ止リ、邪宗門ヲ擴充テ國民ヲ服從セシメント欲スルノ謀略ナリトカヤ、此時渡來ノ宗賊ドモ、各姿貌異形ナル中ニ、譯テ首領宇留鑑伴天連ト云ルハ、船ノ尺七尺五寸、面ノ色黑ク煤ビ、鼻赤ク隆ク、頭小ク、頸細ク、鬚髮鼠色ニテ縮ミタリ、齒牙大ナルコト馬齒ニ均ク、手脚ノ爪剪ルコト無ク、甚長シ、額上ニ月代アリ、形ハ丸クシテ、斗蓋ヲ覆フノ量ナリ、勿論言語通ゼズ、音聲梟ノ鳴ニ肖タリ、六國ノ探題大友左衞門督義鎭、卽此宇留鑑ヲ招テ、始テ吉利支丹ト云ル法ヲ說シメケルガ、如何ナル會得カ有ケン、彼伴天連ガ勸メニ誑サレテ、邪宗門ニ歸依シ、ツイニ府內ニ於テ宅地ヲ與ヘ、長ク爰ニ居ラシメタリ、是ヨリシテ、宗賊大ニ力ヲ得テ、國中ヲ往行シ、憚ル所ナク、邪宗ヲ說テ弘メケルト也、

〔原城紀事　三〕散史氏曰、予已纂ニ天敎之害ヲ於レ我者ニ、敍ニ之編ニ、起ニ享祿ニ至ニ慶長ニ、既而讀ニ明淸諸儒記載ニ、西人說レ彼、略與レ我同、〇中略　槐西雜志云、明天啓中、西洋人艾儒略、作ニ西學凡一卷ニ、末附ニ唐碑一篇ニ、明ニ其敎之久入ニ中國ニ、碑稱、貞觀十二年、大秦國阿羅本、遠將ニ經像ニ來獻ニ上京ニ、卽於ニ義寧坊ニ勅造ニ大秦寺ニ一所ニ、度レ僧

二十一人云々、考西溪叢語載、貞觀五年、有傳法穆護何祿、將祆敎詣闕聞奏、勅令長安崇化立寺、號大秦寺、又名波斯寺、至天寶四年七月、勅、波斯經敎出自大秦、傳習而來久行中國、爰初建寺、因以爲名、將以示人必循其本、其兩京波斯寺、並宜改爲大秦寺、天下諸州郡有准此、冊府元龜載、開元七年、吐火羅國王上表、獻解天文人大慕闍、智慧幽深、問無不知、伏乞天恩喚取問諸敎法、知其人有如此之藝能、請置一法堂、依本敎供養、○中略是祆敎、至宋之末年、尙由賈舶達廣州、而利瑪竇之初來、乃託爲亘古未有、艾儒略作此書、○西學凡既援唐碑以自證、則其爲祆敎更無疑義、乃無一人援古事以抉其源流、學讀齋雜著、續字彙補等亦載祆字、由此觀之、天敎之入彼已久矣、吾子以利瑪竇爲嚆矢、無乃謬乎、曰景敎于唐、祆祠于宋、曰大秦寺、曰波斯寺、異端蔓衍、豈啻白馬馱經而已、雖然其所祠果何神、其所說果何言、皆未審、謂景敎爲天敎、以僧景淨所述景敎流行中國碑頌爲證、此碑明時長安中掘地所得、當時雖有涼庵居士者、論其爲天主的確如可據、而唐時未知天主之名、則不得爲明證、天主二字藏經中多散見、或引以爲耶蘇者非也、且以利艾二人所述、西洋耶蘇以前亦數有畸人出、如所謂亞利斯多(アリスト)覺、其識超卓、其才曠逸、爲歷山王師、是等所說亦果何敎焉、知杜預註左傳、其他諸書所稱祆神祆祠不出於是等說、夫耶蘇者、生於漢哀帝元壽二年、稱吾儒敬天畏天之天與耶氏天主之天、新立其敎、後二千年、利瑪竇入明著天主實義等書、而後天主敎之名初顯於世、明史曰、拂林卽漢大秦、桓帝時、始通中國、晉及魏皆曰大秦、嘗入貢唐、曰拂菻、宋仍之亦數入貢、而宋史謂、歷代未嘗朝貢、疑其非大秦也、○中略萬曆時、大西洋人至京師、言、天主耶蘇生於如德亞、卽古大秦國也、其國自開闢以來六千年、史書所載、世代相嬗、及萬事萬物原始、無不詳悉、謂爲天主肇生人類之邦、言頗誕謾不可信、明信諸儒之說、大槪如此、今按、天主與耶蘇見正史、以明爲始、因敍天敎害於彼、斷然從此、若夫舉近似者、類推之、則事事無礙之流、謂之耶蘇亦可矣、白蓮赤眉黃巾綠林之徒、謂之耶蘇亦可矣、自老佛之流、以暨穆王之王母列子之眞人、謂之耶蘇亦可矣、豈有斯理乎、孟子曰、邪說暴行有作、舜

與曰、朕聖讒說殄行震驚朕師、邪之蓋正、何時無之、不可不排、利瑪竇入明在萬暦九年辛巳、彼我享祿五十年、是天教之害、先入我而及彼、此篇之所以顧前篇也、

〔西洋紀聞 下〕むかし我國に來りて始て、其法を説しもの、事を聞よ。〇新井白石、ロコ問ロシナリ、今を去る事百二三十年前、彼方の化人に、フランシスクス、サベイリウスといひし、此土に至りて、我法を説く。豐後の屋形はじめに其教を信受して、つゐに麾下の大名して、はるかに我本國に使せしめ、多くの物を施入せらる、其使いとけなき子を携來て、我徒となし、歸らむとするに及びて身死したり、其使葬りしところは、猶今にローマンにあり、其フランシスクス、サベイリウスは、カステーリヤの人にして、ポルトガルの君の師たりしかど、我法の弘通のために東し、此土に來れることも、再びに至りて、其西に歸れる時、サンチヤンにして、終りき、サンチヤンは、チイナ、カンタンの南にある海島也といふ、カンメンは廣東也、サンチヤンは都督山縣也、都督山の音轉じ訛れる也、

〔日本西教史 上〕第一章〇中略

アントワンガルアンノ著書中ニ云ヘル一條ヲ引テ云、葡萄牙國商人、アントワンモタ、フランソワーザウヰヱー、及ビアントワンペヰツト云ヘル三名、千五百四十一年、我天文十年、暹羅國内ドドラヨリ出帆シテ、支那國ニ向ヒ駛進セシ途中、暴風ニ逢ヒ、日本島ニ漂到シ、鹿兒島ノ地ニ入港セリト、是ヨリ後チ二年、他ノ葡萄牙商人等、同地ニ來リテ貿易ス、此時アンゲル鹿兒島人牛次郎ナラン、一說ニ大和國彌了國ナリト云フ、ト云ヘル日本人ニ逢ヘリ、此アンゲルハ、其時三十五歳ニシテ、門地モ賤シカラズ、且資產モ富メリ、然ルニ若年ヨリ行跡放肆ナリシガ、一朝良心發見シテ後悔シ、心中ハ之ガ爲メ甚ダ安カラズ、痛心ノ餘リ、佛僧ニ其心事ヲ告シニ、僧ノ答フル所、其心ヲ鎭靜スル能ハズ、又基督教ニ從テ、其所願ヲ果スベキヲ知ラシムルニモ至ラザリシガ、後チ在港ノ葡萄牙商人ニ、其所思ヲ明言セシニ、商業ノ外ハ知ルコトナキ賈人ナレドモ、答ヘテ云ヘラク、印度地

方ニ、一ノ聖徒アリテ、博學多才ニシテ、善ク人ニ安神ノ道ヲ敎ユ、足下印度ニ航セバ、此聖僧ヲ見ルコト難カラザルベシト、此商賈等ガ語ル所ノ聖僧トハ、サンフランソワーザウヰエー師ノコトナリ、此聖僧ハ、アンゲルノ至ルヲ見バ、必ラズ欣然相接シテ、其心痛ヲ救フベシト告タリ、然ト雖モ、此ヨリ印度ニ至ル航路六百里、加之暗礁所々ニ散布シ、時々暴風ノ虞アルト、妻孥ヲ棄却スル等ノ事アルヲ以テ、アンゲルハ此事ヲ遂ル能ハズ、然ルニ其後アンゲル、同國人ト爭鬪シ、竟ニ之ヲ殺セシカバ、父母ヨリ追趕セラレ、逃ルニ道ナク、葡萄牙船ニ身ヲ投ジ、竟ニ航海ニ決心セリ、〇中略アンゲルハ、ザウヰエー聖師ニ逢ハント希望セシニ、豈料ランヤ、聖師ハモリクニ赴キテ不在ナルニ會セリ、〇中略アンゲルハ、此ノ時再ビ海路ヲ支那ニ取リ、本國ニ歸ラント決意シ、此地ヲ離レ、〇中略アルワレト共ニマラカニ到ルヲ得タリ、陸ニ登ルトキ、岸邊ニテヂヨルジアルワレニ出會セシニ、彼レノ云フニ、ザウヰエー聖師ハ、既ニ歸リテ、現ニ此城中ニ在リト、アンゲルハ、病客ノ良醫ヲ求ムルニ切ナルガ如ク、直チニアルワレニ伴ナハレテ、ノートルダムノ天主堂ニ至リシニ、聖師ハ說敎ヲナシ居タリシヲ、禮拜シ了ハリテ、其胸襟ヲ開テ之ニ告ゲ、遠ク航海セシ主意ヲ物語シニ、聖師大ヒニ悅ビ、且ツ云ヘラク、神予ヲ日本ニ遣ラントスルニ因リ、先ヅ此人ヲ送リテ、予ヲ迎ヘシメシナラント、遂ニ友誼ヲ以テ之ニ交ハリ、アンゲルガ希望セシ安神ノ法ヲ授ケント約セリ、〇中略アンゲルハ、既ニカピテンアルワレヨリ、基督宗門ノ要秘ヲ授カリタレバ、此時直チニ、洗禮ヲ受ケンコトヲ願ヘリ、然ルニザウヰエー聖師ハ、尙ホ未ダ之ヲ可ナリトセズ、且日本人ノ初メテ宗門ニ入ル者ハ、宜シク印度ノ首府ニ於ヲ、臥亞ノ敎正ドムヂアンダルブケルク師ニ由リテ、眞神ノ啓知ヲ被ラセンコトヲ欲セシニ因リ、アンゲルニ須ラク臥亞ニ往キテ、オアジルヲ學ブベシ、ベセリーノ海岸、コモリン島及ビバワワヲ經歷ノ後、再會スベキ由ヲ語リケレバ、アンゲルハ、聖師ニ別レヲ惜ムト雖モ、何事ニ

因ラズ、師ノ命ヲ背クマジキヲ約セシ上ハ、都テ師ノ欲スル所ニ服從セント答ヘリ、〇中略時ニ千五百四十八年天文十七年三月廿日、臥亞ニ達シ、聖師ノ敎育ヲ得テ、洗禮ヲ受クルニ至レリ、〇中略聖師ハ、臥亞ノ敎會長社中ノ人々、幷ニ知音ノ者ニ別ヲ告ゲ、〇中略馬剌加港ニ滯在中、日本ヨリ、喜ブ可キ報知ヲ得タリ、其仔細ハ、日本某州ノ國主、天主敎ヲ奉ゼンコトヲ望ミ、敎ヲ受クル爲メ、敎師ノ渡來ヲ請フヨシ、彼地在留ノ葡萄牙商人ヨリ告ゲ越シヽナリ、〇中略耶蘇敎師幷ニポールノ至リシト云フ巷說、薩摩ノ國主島津貴久鹿兒島港ノ領主ナリ、港ヨリ五里バカリ距テシ所ニ館ヲ構フ、ノ聞ニ達シケレバ、〇中略國主ハ、其敎法ヲ說クヲ聞ント望マレケレバ、ポールハ、我ガ敎法ノ大旨ヲ詳ニ說キ、國主ノ服スルヲ見テ、曾テ聖師ヨリ我敎法ノ略ヲ知リタル者ニ示セトテ、授ケラレシ聖母ノ耶蘇神童ヲ抱ケル圖ヲ君前ニ出セリ國主ヨリ其宮中ノ諸人ニ至ルマデ、容貌ノ非凡ナルヲ見テ、忽チ信心肝ニ銘ジ拜伏ス、〇中略翌年ノ始メニ至リ、百名ノ人、敎ヲ奉ジテ洗禮ヲ受ク、〇中略聖敎ハ、此等ノ靈驗ニヨリ、日々ニ鹿兒島ニ盛ナリ、〇中略サレド釋徒ノ暴戾ヲ致セシハ、國王島津貴久聖師ニ對シテ惡過ノ衰ヘシニヨレリ、偖テ國主ノ心ノ變リシ事ノ起リハ、常ニ鹿兒島ニ來レル葡萄牙船、此年ハ平戶ヘ停泊セシカバ、其國民互市ノ利ヲ獲ル能ハズ、且ハ其敵國タル平戶ノ領主ヘ、薩摩ト戰フ爲メノ兵器ヲ送リシヲ、深ク憤リシナリ、加之國主ハ、葡萄牙人ヲ、領地ノ港ヘ來タスト否トハ、敎師ノ權ニアリト思ヒシニ因ルナリ、〇中略ポールハ〇中略既ニ聖師ニ代リテ諸人ヲ慰セシニ、忽チ釋徒ノ苛責ニ堪ヘズ、聖師發程ノ後六箇月ニシテ國ヲ去レリ、諸人ハ依賴スル者ヲ失ヒケレド、天主之ヲ救助シ、勇力ヲ授ケシカバ、其信心ノ動カザルノミナラズ、是ヨリ十三年ノ間ニ、敎師ナクシテ、五百ノ異敎人ヲ化シテ、天主敎ヲ奉ゼシメタリ、〇中略偖聖師師徒ハ、九月〇九月恐誤下旬〇事係千五百五十年十月平戶發程之時、ヲ以テ、山口ヲ出發セシガ、〇中略斯クテ聖師ハ、一千五百五十一年天文廿年ノ二月、遂ニ其同行ノ者ト共ニ、京師ヘ到着セリ、〇中略而シテ聖師ハ、京ニ

留マル事十有五日、此時ニ當リ、皇帝ハ有名無實ノ君主ニシテ、將軍ト雖モ命令ノ行ハル、所ハ、僅カ五畿内ニ過ギズトノ事ヲ聞知シ、因テ塾師ハ、日本ノ君主ニアラザル者ニ、大金ヲ費シ、日本全國ニ於テ、宣教スベキ允許ヲ求ムルトモ、無益ニ屬スベシト思慮シ、日本ノ都府ニ於テ耶蘇教ヲ講述シ、其神聖ノ道ヲ説クノ名譽ヲ以テ、却テ多クノ凌辱ヲ受ケシヲ快トシ、遂ニ平戸ニ歸ルニ決定セリ、

〔日本西教史上〕第六章○中略

アレキサンドルワリニヤン大師ノ、日本ヲ離レ歐洲ニ歸ルノ前、千五百八十一年天正九年ニ當リ、日本基督寺院ノ景況如何ヲ爰ニ説ク可シ、大師ハ所轄ノ便ヲ得ンガ爲メニ、日本全國ヲ三部ニ分チ、宣教師等ノ教區三箇ヲ設ケ、一ハ京、一ハ安土、一ハ高槻ニ在リ、京師ノ區ニハ、師父二人、法兄弟二人、説教ヲ勤メ、且美麗ナル寺院中ニ於テ、儀式ヲ執行セリ、○中略日本ノ第二部ハ、シモ九州ヲ云フト名ヅク、此部分ニ在ル基督信者等ハ、許多ノ寺院アリテ、師父ノ宅モ亦許多アリ、豐後ノ都府タル府内ノ市街ニ於テハ、小學校一箇所、大學校一箇所アリ、此大學校ニ於テハ、諸術、神學、日本語等ヲ教授シ、大小學士ノ位階ヲ授ク、小學校ニハ二十人ノ宣教徒アリ、又臼杵ニ於テ、一ノ僧學校アリ、此ニ國主フランソワー宗麟ノ宮殿アリ、府内ヨリ七里許ニシテ、ワルドデュト名クル地アリ、此地及ビノセンノ市街ニ於テ、師父等ノ居宅二箇所アリ、聖教ヲ布ク爲メニ、宣教師等ノ諸國ニ派出スルハ、皆此等ノ居宅ヨリス、○中略日本ノ第三部ハ、僅カニ四个國ナリ、此四个國ノ中、基督信者タルモノハ、土佐ノ國主長曾我部元親カノミアレキサンドルワリニヤン大師、此國ヲ巡廻シ畢リ、印度ニ歸ントスルニ當リ、日本國中ノ基督信者等ヲ算スルニ、人員十五萬、寺院二百、之ヲ統轄スル宣教師五十九人アリ、日本人ノ有德ニシテ敏才ナル、少年ノ教授ヲ補助スル者アレドモ、此レ等ハ其數ニ算入セズ、アレキサンドルワリニヤン大師ノ日本ヲ發ス

ルノ前、千五百八十一年ニ當リテ、長崎ニ於テ、師父等ヲ悉ク會合セシメ、メルシヤルドモラー師ヲ以テ、日本在留ノ師父長トナシ、其後チ印度ニ向ヒ出發セリ、

〔剏蠻錄 一〕吉利支丹宗門濫觴之事

本朝後奈良院之御宇、弘治三年丁巳秋、〇西暦千五百五十一年南蠻國ノ商船ニ便リテ、異人獨リ渡來セリ、身ノ長七尺餘、首小クシテ、手足ノ爪長ク、面色黑クシテ、鼻高ク、色赤シ、頭髮鼠色ニシテ、齒ノ大ナル事、馬ノ齒ノ如シ、額ノ上ニ月代ヲ剃ル事、盃ノ大サニ似タリ、物云聲梟ノ如ク、俗ニ云天狗ノ形ニ肖テ、其名ヲ宇留合伴天連(ウルガンバテレン)ト云、船ヨリ肥前ノ唐津ニ上リテ、吉利支丹ト云宗門ヲ敎ヘテ、廣メントゾ申ケル、彼ハ吉利支丹ノ達人ナリトテ、唐津長崎ノ農人商工ノ類、群ヲナシテ拜ミ信ジテ、敎ヘニ從フ者擧テカゾヘガタシ、宗門ニ入レテ、彼ガ敎ヘニ從ヒヌル者ニハ、南蠻ヨリ種々ノ珍物ヲ持來テクレケル間、門前ニ市ヲナシテ、更ニ晝夜ノサカヒモナシ、日ヲ重ネ、月ヲ經テ、肥前國ヲ立テ、平戶小倉ヨリ、安藝ノ廣島、周防ノ山口、備前ノ岡山、播磨ノ姬路ヲ經テ敎化シ、攝州大坂、和泉ノ堺ヲ廻リテ、京都ニ出テ、宗門ヲ廣メケルニ、信從スル者市ニ歸スルガ如シ、宗門ヲ慕ヒ來ル者ニハ、大名ニハ印子ノ珠數、眼鏡、若キ人ニハ、伊達道具ノゴンタツ抔云物ヲ取ラセ、親シミヲ厚クシテ、其所ノ所司代奉行ニハ、夥シク捧物ヲ獻上シ、上戶ニハ珍駄、葡萄酒、ロウケ、カネフ、モリチウ、下戶ニハ、カステイラ、ボウル、カルメイル、アルヘイ、コンペイ類抔ヲスヽメ賞シケル間、智有モ愚成ルモ、推ナベテ宗門ニ入テ、次第ニ繁昌仕ケル程ニ、其時分五畿內ニテ、時メキタル大名、三好修理大夫、松永彈正、長岡越中守〇細川ナド、崇敬セラレケル程ニ、早リ雄ノ若侍達、押ナベテゴンダツヲ持タザレバ、當世ヲ知ラヌ人ヨ迚、アザムキ笑ヒケルトカヤ、係リケレバ、江州安土ニテ、右大臣信長公聞シ食サレ、時ノ出頭菅谷九右衛門ニ仰付ラレ、宇留合伴天連ヲゾ召レケル、依之宇留合宿送リニシテ、安土ニ來リ、二三日ヲ經テ、御禮之爲登城ス、身ニハアヒトト云物ヲ著セシガ、鼠色

ノ鵠ニテ仕立、袖長ク裾廣シ、獻上物ニハ、鐵砲十挺、圓金ノ眼鏡、八疊ヅリノ蚊帳ヲ、香箱ニ入テ、一ツ長サ五丈ノ猩々緋、藥物ニハ、野牛羊唐犬等ヲゾ差上ケル、信長公御目見ヲ許サセラレ、不淺御感悅アリ、安土ノ城下ニ土地ヲ給ハリ、大キ成ル寺ヲ建立ス、如此發向シケル程ニ、永祿天文ヨリ、元龜年中迄ノ亂世ニ便ヨクテ、デリヨリヤスイス伴天連ト云フ者渡リ來リ、シテロ違須ト云フ、昔ノ通事トシテ法ヲ弘ム、違須ハ肥前ノ者也、又ガウスモト申ス者、シモント云フ者、泉州堺ノ者ニテ有ケルヲ、取リ立テ、印留幔(イルマン)ニ成テ、替々ノ談議ヲナス、或ハ日本ノ諸宗ノ惡僧共ヲ集メ、印留幔ニ取リ立テ、宗門ヲ進ム、又文祿年中ニ、ハフヌ天伴天連ト云フ者ヲ渡ス、是南蠻國ノ道心者ナリケルガ、外科ノ名人ニテ、乞食非人ヲ集メテ、兎口癩病ヲ治シ、癰疔瘰癧ナドヲ療シテ、我ガ宗門ニ引入養立テ、外療ヲ敎ヘテ痛醫ト成シ、我宗門ニダニ入ヌレバ、內證ニテ金銀ヲ合力シ、親染ヲ深クセシニ依テ、日々ニ繁昌シテ、攝州大坂、泉州堺、肥前長崎、周防山口、安藝ノ廣島、備前ノ岡山、播州姫路、長門下ノ關ナドニ、大ナル寺ヲ建立シテ、參詣ノ老若男女群ヲ成セリ、京都ニモ、五條堀河、一條油ノ小路ニ大寺有テ、談議シケル程ニ、其弊慶長元和年中迄ニ盛ニシテ、高山飛驒守、同右近、小西攝津守、浮田宰相、津田長門守等ノ諸歷々、此宗門ニゾ陷ラレケル、

〔總見記二十一〕爆竹興行附自異國黑坊主來朝事

天正九年辛巳、前右大臣平信長公、四十八歲ニナラセ玉フ、〇中略同〇月二廿三日、南蠻吉利支丹國ヨリ、黑坊主一人來朝ス、年ノ齡廿六七計ニ相見ヘ、總身黑シテ牛ノ身ヲ見ルガ如シ、健體强力廣並ノ人ニ越タリ、伴天連召連候テ御禮申上畢ヌ、誠ニ以テ是御威光ノ致ス所歟、

〔一話一言五〕呂宋國書簡

むかし呂宋國より、天主敎をひろめんとて、その道を學べるものを使として、本國におくれる書簡の寫とて、人のみせ侍りし、

呂宋國王郎畝洛黎勝君迎謹沐浴頓首、呈書于日本名高國王陛下、昔者巳有復書言謝、玆因山厨〇按下文作厨、恐一誤、羅明敎寺巳禮寓薩諸瑪稱、欲往名高謁見聖上、恭惟聖上當知此山厨羅明敎寺巳禮、乃呂宋分派、往寓貴國、彼爲人聰敏得道、好爲美事、敬本朝于系蠔氏一統奉祀一位無極、至尊名寮氏、乃天地萬物之主、僕等棄邪歸正、破暗崇明、識升天之大道、于是本朝于系蠔氏一統皇帝、及諸官長、至士庶民、無不欽羨而讃揚之、然此巳禮往貴國、非爲世間金玉之玩好、止欲人超拔魂靈升天、受福無窮、倘到陛下乞存薄面、嘉善覆陰、毋斯遐棄、則僕佩戴曷敢忘乎、其餘別寺巳禮寓貴國、倘有數年矣、佗亦如此善心、貴國人民既所識也、第因海天遙隔、不得躬造、特書上達、伏冀如面、僕不勝口歡之至、西土壹千六百單肆年柒月念捌日、郎畝洛黎勝君迎再頓首、

按、歐羅巴の年紀天明四年に至て、千七百八十四年なり、此千六百年といへるは、慶長九年の頃か、猶可考、

〔憲敎類典四ノ十六切支丹〕慶安二己丑年九月八日、

今度筑前國大島にて捕候南蠻伴天連いるまん同宿白狀之覺

一いたりやの國、らうまと言所に、吉利支丹宗門之頭、はつはと云者有、國々江伴天連を遣し、宗門を弘め、其國はつはに隨ひ候へば、漸々奉行を遣し、致仕置候、のひすばんご王呂宋其外國多貪取申候、日本は、軍にては難成ゆへ、後世之爲に、宗門を弘るとて、伴天連を渡、宗門大形弘り候時分、仲ケ間にて軍をいたし、日本之他宗をうちたいらげ、はつはに隨はんとのたくみに候事、〇中略

一伴天連を日本江渡申事、數年にて候、此入目金銀、門派々々に幔に附置候、數百年過候ても、日本はつはに隨候時、右之入目、面々の派之旦那より取可申爲之儀に候、世界有之間は、ばてれんを渡、宗門を弘、日本を可取との覺悟に候事、

一呂宋に、日本人之伴天連、四人有之、其内一人は、豐前國加賀山隼人親類にて候、隼人は、先年大罪に遣申候、此親類のばてれん、日本江渡し可申との儀にて候、一人は黑川壽庵と申候、來年日本江渡し可申由、呂宋にて我等共に語申候、其外日本人之子五六人、呂宋にて唯今學問を致させ申候、天川にても、日本人の子供二人、學問を致させ、何もばてれんに取立、日本江渡し可申爲之由承候、如此伴天連を多く方々の國に仕立置、追々日本江渡可申由、尋取沙汰仕候事、

一先年日本にて吉利支丹宗門弘り申候時分に、日本之出家に、金銀を出し、吉利支丹宗門に致し、其外日本のいるまん同宿を、諸寺諸山江遣し、學問を爲致、佛法神道之極意を習取、はつは方江遣、南蠻口に引直し、板にをこし、國々のばてれんに遣、學問を致させ申候、何れ之道にも、日本に法を弘、ゑたがへんとのたくみ候事、

丑九月八日　　井上筑後守

〔西洋紀聞下〕其こゝに來らむ始、本師命せし所、また彼告訴ふる事ども、其大要いかにと問ふ、○新井白石、ローマン問答、昔フランシスクスサベイリウス、始て此土に來りて、我法こゝに行はれし事七十餘年、タイカフサメの時に至て始て我徒を讎け逐はる、タイカフサメは、こゝにいふところの太閤樣也、其事は、秀吉九州を征されしときに、長崎に住せし、パアテレを逐出されし事をいふなり、これよりして、我法の師徒、囚誅をまぬかるゝものなく、つゐにエウロパ諸國の人、此に通ずる事を得ざるに至れり、先師ホンテヘキスマキスイムス、イノセンチウスウンデイシムス、ホンテヘキスマキスイムスは、こゝに最第一無上等といふがごとし、ローマン教化主の稱なり、イノセンチウスは名也、ウンデイシムスは、こゝに十一世といふがごとし、其第一祖より、十一世にあたれば也、ウンは一つ也、デイシは十也、ムスは世といふがごとしといふ、此事を深く歎きしかど、其志むなしくして、十年前に終れり、今のホンテヘキスマキスイムス、キレイメンスト、ヲデイシムス、キレイメンスは名也、ワトナデイシムスとは、十二世といふがごとし、ワトナは二つ也、デイシは十也、ムスは世といふがごとしといふ、前志を繼ぎて、此事を議せしむるに、衆議決せずして、年を經しほどに、カルデナアル相議して、カルデナアルは本師に次ぎしもの、七十二人ありといふ、昔チイナにおゐて

も、我法を禁じしかども、今は其禁開けしのみにあらず、其天子の使、こゝに来る、またスイヤムのごときも、我法を禁ずといへども、これまた其禁を除けり、今に至ては、テイナ、スイヤム、すでにかくのごとし（此事前に見ゆ）ヤアパンニヤにも、まづメツロシナヽリウスを率りて、告訴ふる所ありて、次ぐにカルデナアルをヌンシウスとして、其好を修めて、我法をふたゝび東土に行はるべきもの歟と申す（ヤアパンニヤは日本也、メツロシナヽリウスは、前に注せり、カルデナアル、上に見えたり。ヌンシウスは、こゝに信使といふがごとしといふ、）衆議つゐに一決して、メツロシナヽリウスたるべきものを撰ぶに、衆また同じく某を薦挙しかば、其命をうけて、こゝに来れる事は、前に申すがごとし、老大の母と兄とを棄て万里に来る事、法のため、師のため、其他あるにあらず、初此命をうけし日より、我志を決せし所三つ、其一つは、本國望請ふ所を聽されて、我法ふたゝび此土に行はれんには、何の幸かこれにすぐべき、其二つには、此土の法例によられて、いかなる極刑に處せられんにも、もとより法のため、師のため、身をかへり見る所なし、さりながら、人の國をうかゞふ、間諜のごとく御沙汰あらんには、遺恨なきにあらず、それも本師の命せしに國に入ては國に志たがふべし、いかにも其法に違ふ所あるべからずと候ひしかば、骨肉形骸のごときは、ともかくにも、國法にまかせむことといふにおよばず、其三つには、すみやかに本國に押還されん事、師命をも達し得ず、我志をもなし得ず、万里の行をむなしくして、一世の譏を貽さむ事、何の恥辱かこれにすぐべき、されど我法いまだ東漸すべからざる時の、不幸にあひし事、これ又誰をか咎むべき、これらの外、申すべきこともあらずといふ、

〔息邪漫錄〕昔我西邊へ、邪教を傳へたるは、波爾杜瓦なれども、明國へ傳へたるは、多くは意太利人なり、其他熱而瑪、伊斯把、波爾杜瓦等の人もありしなり、又我西邊に來りしも、寛永中は那勿蠟人、正德中は羅瑪人なり、波爾杜瓦には限らざるなり、天明中、蝦夷を蠶食せんとて、エトロフ人の戶外に、十字架を立させ、邪教を傳へたるは魯西亞なり、文政中、諸夷所々に來り、邪宗門に勸め入、西乙

遣使求法

〔讀令〕天保中は、アメリカ人、船中に西洋有名の説法師を載來る、其名をギユツツラツと云ものなりといへり、佛郎察は琉球に滯居して、土人に邪敎を説聞せたりと云、異人讀

〔大村家秘錄〕異宗之始終且異説之條〇中略

一其比家士千々石清左衛門と云者、幼少より彼門弟になり、ろうまに渡り、勤學極奥を究、歸朝し潜に喜前公に語て云、彼宗旨極て邪法なり、表に後世菩提の理を解といへども、實は國を奪の謀なりと、然ども亡父遺體の導師として、亡魂の祭らしむる處に、其實を礼さず、禁戒も默止がたしとて、天正二年甲戌、猶清左衛門を案内とし、與儀を採るに、清左衛門が云るに必せり、〇下略

〔日本西敎史上〕第七章〇中略

豐後ノ國主、ドムフランソワー、大友宗麟有馬ノ國主、ドムプロタ―、有馬晴信大村ノ國主、ドムバルテルミー大村純忠ハ、アレキサンドルワリニヤン師長ノ、歐洲ニ歸リ、日本ニ於テ董セル所ノ職務ノ形狀ヲ、羅馬ニ在ル基督敎會ノ師父長ニ具上スルコトヲ聞キ、此機會ヲ賴ミ、法王ゲレゴワール九世聖位ニ恭順ヲ表シ、且己等ノ名ヲ以テ、其足ヲ吻セシメンガ爲メニ、其親族ノ中二三ノ公子ヲ使節トシテ、遣ランコトヲ決議シケレバ、アレキサンドルワリニヤン師長ハ、其志ヲ大ニ稱贊シ、且此事ハ、二箇ノ善良ナル成果ヲ生ズベシト思考シタリ、一ハ歐洲ノ諸侯、及ビ基督敎會ヲシテ、日本人民ノ才智性質勇氣ヲ知ラシメ、且數百年來放下セシ所ノ異域ニ於テ、己レノ勉强シテ職ヲ盡セルコトノ、無益ナラザルヲ知ラシムルニ足ルベシ、又一ハ此使節等ノ日本ニ歸リテ後、羅馬ノ基督寺院ノ華美盛大ナルコト、歐洲ノ諸侯ノ威勢、且尊貴ナル事、及ビ基督敎ノ行ハルヽ、諸國ノ廣大ナル事ヲ、眞ニ證スルニ足ルベキナリ、抑此旅行ハ、日本人ノ爲メニハ、極メテ利益アル事ナリ、〇中略此旅行ハ、日本人自大自尊ノ心ヲ去ラシメ、且宣敎師等ニ信ヲ表セシムルハ、此行ニ如クモノ無カルベシ、豐後前國主フランソワー宗麟ハ、己ノ甥ニシテ、日向

國主伊東氏ノ公子タルドムマンシオー(伊東義賢カ)ヲ使節トシ遣セリ、此公子ハ、齢甫テ十五六歳ナリト雖モ、賢明ニシテ思慮アルコト、少年ヲ以テ觀ルベカラズ、有馬國主(晴信)及ビ大村國主(純忠)ハ、ドムミクセルシバノ(千々石清左衛門)ヲ遣セリ、此人ハ大村國主ノ甥ニシテ、有馬國主ノ從兄弟タリ、其年齒ハ伊東公子ト同年ナリ、容貌ノ高邁ナル、一見シテ公子タルヲ知ルベシ、此伊東公子ト、シバノヲ以テ正使ト爲シ、ドムジユリヤン中浦氏、及ビボムマルタン原氏ヲ以テ副使トナス、二人モ共ニ貴人ニシテ、亦同年ナリ、〈略中〉使節ハ、法王ノ足ヲ吻シテ後、其身ヲ起シ、通辨官メスキタ―師ニ介シ、陳言シテ曰ク、我ハ日本諸侯ノ代理ニシテ、且我ガ身ノ爲メニ、法王ヲ拜シ、誠實忠信從順セン爲メニ來レリト、法王ハ、深ク感ズベキ詞ヲ以テ、貴使ノ主君タル、王ノ書簡ヲ與ヘヨト答ヘリ、〈略中〉法王ノ書記官、伊太利亞語ニ譯スル所ノ、左ノ書簡ヲ高聲ニ讀初メ、衆人謹デ之ヲ聞ケリ、

第一ニ、豐後國主ヨリ呈スル所ノ、左ノ表題ヲ書記シタル書簡ヲ高聲ニ讀上ル、

天帝ノ代トシテ、地上ニ位スル、恭敬ス可キ尊大神聖ナル法王陛下ニ呈ス、〈略中〉

千五百八十二年一月十一日(天正十年十二月廿七日)　豐後ノ國主フランシアー

〔關使日本紀行〕一(九)千五百八十二年(天正十年)西班牙及羅瑪ニ、有馬及ビ大村侯ノ血族、(共ニ十五歳)且ユリアニユス中浦、及マルニチユス原、及外ニ從僕二人、合シテ六人、洋教ヲ奉ズルノ見込ニテ出立セリ、〈略中〉(三)千五百八十五年(天正十三年)六月三十日、日本人ハ、法王ノ足ヲ吸ヒ、敬禮スルノ後、歸途ニ就キ、マンカハルコニ於テ、コラヽノ體ヲ尊奉ニ、此心中ニハヘーランヅレーデン隱レタルヲ見ルベシ、アシヽウムニ於テ、名譽アル五ケ所ノ創ヲ蒙ムルノ後、フランスキユスノ著シタル鞋、及毛衣ヲ見ル、バーレンニ於テ、五百年前ニ昇天シ、再ビ神前机上ニ來ルノ小狐ヲ見ル、但シ此等ノ件ヲ數フルハ、カナリーンノ、ビスコツプメルシオルカニユスハ無要ナリトス

ル所ナリ、日本人ハ、是ヨリ途次マンチユア、ミラーン、西班牙、及葡萄牙ヲ經テ、日本ニ歸リ、千五百九十年天正十八年八月二十一日、長崎ニ著シ、次デ京都ニ入レリ、是日本貴人ノ歐羅巴ニ至ルノ嚆矢ナリ、爾後合衆阿蘭ハ、日本ニ航路ヲ開キ、大利ヲ得タリ、殊ニ葡萄牙人ノ通商ヲ禁ゼラルノ後、最モ然リ、蓋シ耶蘇教騷動ノトキ、葡王ハ船ヲ艤シテ日本ヲ襲ハントスル陰謀アルヲ、阿蘭ヨリ早ク書ヲ寄セテ、預メ報告注意セシメタレバナリ、

〔伊達政宗遣南歐使考〕佛人レヲンパジエ氏、日本耶蘇教記ヲ著シ、此事ヲ記シテ曰ク、初メ政宗ハ、傳導師ベーソテロヲ其城中ニ誘引シ、自ラ耶蘇教ヲ奉ズベキ意志ヲ表シ、且ツ其國内ニ寺院ヲ新設シテ、傳導師ヲ置クベキコトヲ約シ、因テ、ソテロニ、其家臣支倉六右衞門ト共ニ、使節トシテ西班牙羅馬兩國ニ至リ、法王ト宗教ノ爲ニ便宜ノ處置ヲ議シ、又西班牙王ト交際貿易ノ條約ヲ議定スルコトヲ委任セリ、故ニ兩人ハ其命ヲ受ケシ後、少時ヲ經テ出發シタリ、千六百十三年我慶長十八年十月二十八日、ソテロハ支倉ト共ニ呂宋ニ著シ、其翌年慶長十九年一月二十五日、アカピユルコ港墨是可ノ府名ニ至リ、此所ニ於テ、西班牙官吏盛備シテ、兩人ヲ迎接ス、兩人ハ次デ墨是可ニ赴キ、該地ニ於テ總督ノ厚遇ニ逢ヘリ、時ニ耶蘇蘇生祭日ノ前週ニ會シ、隨行六十八人ハ、預メ其報知ヲ受ケタルヲ以テ、悉クセエンフランソアノ寺院ニ於テ洗禮ヲ受ケ、大僧正ノ允許ヲ得タリ、而シテ使節支倉ノ洗禮ハ、必ズ西班牙ニ於テ之ヲ行フニ決定シ、アツサンシヨン耶蘇昇天ノ期日ノ日ヲ以テ、墨是可ヲ發シ、バンテコート祭日ノ日ニ、ピユエブラ、ド、ロス、アンジエル墨是可ヒユエブラ洲ノ府名ニ至リ、六月十日サンジヤン、ジユロア墨是可ノ港名ニ於テ乘船シ、七月二十三日、バ、ヾヌキユーバ島ノ都府ニ著シ、八月七日、再ビ該地ヲ發シ、十月五日、西班牙國アンダルージー省中バランダノサンリユーカル港ニ著セリ、此時セビル府アンダルージー省ノ首府ニ於テハ、盛ニ使節入府ノ備ヲ爲シ、該府ノ官吏ハ、儀式ヲ整ヘテ、使節ニ相見シ、使節ヨリ該府ニ呈セル、書翰ノ旨ヲ領シテ之ヲ受ケ、之ヲ西班牙王ニ上申スベキニ

決定ス、(附錄第一號ヲ見ルベシ)十一月二十五日、使節ハセビル府ヲ發シ、コルズー、トレード兩地(共ニ西班牙ノ府名)ヲ經テ、十二月廿日、遂ニ馬德里(マドリット)ニ到著シ、西班牙內地旅行中ハ、總ベテ國王ヨリ厚ク費用ヲ給セラレ、馬德里著後モ、猶其費用ヲ受ケテ、セエンフランソア寺院ノ旅館ニ寓居セリ、千六百十五年(元和元年)一月卅日、使節ハ、ゾテロニ伴ハレテ、西班牙王ヒリップ三世ニ謁見シ、其式嚴正ニシテ、王ハ玉座ニ起立シ、貴族等其周圍ニ列ス、使節ハ三跪三拜ノ禮ヲ行ヒ、席ヲ進デ王ノ手ヲ握ル、王則チ其手ヲ引キ帽ヲ脫シテ揖シ、以テ之ヲ祝シ、使節ハ東洋風ノ文書ヲ王ニ捧呈セリ、(附錄第二號ヲ見ルベシ)西班牙王ハ、此書翰ヲ閱シ、奧州侯ノ將來日本全國耶蘇敎公許ノ日至ルヲ希望シ、且ツ今ヨリ奧州ニ該敎ヲ傳播スルノ意アルコトヲ嘉納シ、並ニ和親條約ヲ訂調スルコトヲ領承セシ旨ヲ答ヘ、其使命ノ信僞ヲ徵證確討スルノ事ハ、姑ク之ヲ止メ、大ニ使臣支倉ノ耶蘇敎ヲ奉ズベキ宿志アルヲ稱讚シ、目前ニ於テ其式ヲ行フベキコトヲ許セリ、(西班牙王ノ支倉ニ答フル書翰ハ、附錄第三號ニ出ヅ、)此時ペーソテロハ、發言ノ端緒ヲ得、更ニ日本皇帝ノ名ヲ以テ陳述シテ曰ク、是ヨリ先キ五年、日本皇帝ハ余ヲ撰ンデ、陛下ニ和親條約ヲ申稟スルコトヲ任ゼリ、時ニ予病ヲ以テ命ヲ奉ズルヲ得ズ、ペーアロンゾミユノ代テ之ニ任ジタリ、而予日本在留中、和蘭人等、西班牙日本和親條約ノ意旨ヲ妨ゲン爲、更ニ日本ニ利益アルノ條欵ヲ設ケ、歐洲ヨリ使節ヲ將軍ニ派遣セシトノコトヲ聞キ、因テ皇帝ニ建言スルニ、西班牙王ト和親ヲ結ブ時ハ、和蘭人ノ約セルヨリモ、大ナル利益ヲ得ベキコトヲ以テセリ、故ニ該國皇帝ハ、陛下ニ和親條約ヲ請ハシメン爲メ、今回改テ予ニ使命ヲ任ゼシナリト、西班牙王ハ、厚ク日本皇帝ノ意旨ヲ領シ、完全ノ所置ヲ施スベキ時機ヲ得テ、條約ヲ訂調スベキ旨ヲ答ヘタリ、是ニ於テペーソテロハ、日本ノ國書ヲ西班牙皇帝ニ呈シ、則其謁見ヲ畢ル、二月十四日、使節書ヲ羅馬維尼斯(ウェニス)總政院ニ贈リ、恩ヲ謝ス、(○中略)十一月三日、使節ハ改テ法王ニ對シ、儀然タル謁見式ヲ行ハントシ、アラクーリー寺院ヨリ啓行セリ、此日使節ハ、黑衣ヲ穿チ、セエン

ピエルノ宮殿ニ至リ、黑衣ヲ脫シテ、更ニ靑白文繡ノ衣ヲ著ス、蓋シ是レハ王公等ニ謁見スル時、用キル所ノ禮服ニ係ル、旣ニシテ謁見所ニ至レバ、法皇ハ玉座ニ坐シ、カルジナル官、アルジエベク官、書記官、諸僧侶、諸貴族等、其四邊ニ整列ス、是ニ於テ使節ハ、例ノ如ク三拜ノ禮ヲ施シ、奧州侯ノ書翰、幷ニ絹包ノ進獻物ヲ以テ法皇ニ呈シ、再ビカルジナル職ノ座下ニ退テ跪坐セリ、但右ノ書翰ハ、二通ニシテ、一ハ日本文ヲ用キ、一ハ羅甸語ヲ用キタリ、（附錄第四號ヲ見ルベシ）此書翰ヲ朗讀セシ後、フレール、ミヌール、ヲブゼルバンテン敎會ノ僧ペードル、グレゴアル、ペトロシヤハ、奧州侯及ビ兩使節ノ名ヲ以テ、該侯ヲ耶蘇敎ノ願主ト稱シ、死ニ決シタル千八百人ノ敎生者、幷ニ日本ニ該敎ヲ傳播スルノ護法人ト陳述シ、（按ズルニ、本文死ニ決シタル千八百人ノ敎生者トイフモノ、其義未ダ詳ナラズ、當時日本ニ於テ耶蘇敎ヲ奉ジ罪ヲ得タルモノ、遽此數アリテ、今政宗該敎ヲ奉セルニ因リ、之ヲ赦スベキヲ請フカ、暫ラク記シテ疑ヲ存ス、）又法王ノ名ヲ以テ、答辭ヲ演ベ、法王ノ大ニ喜悅シ、甚ダ奧州侯洗禮ヲ行フノ期至ルヲ、跂望セラルヽノ旨ヲ陳述セリ、此時使節支倉、ソテロノ兩人ハ、更ニ席ヲ進ミテ、法王ノ足ヲ吮ヘリ、法王ハ支倉ヲ扶ケ起シ、手ヲ握リテ其幸福ヲ祈念シ、此日ノ謁見ヲ畢ル、居ルコト幾モナク、十一月十五日、使節支倉ノ書記官ハセエンジヤン、ド、ラトラン寺中コンスタン帝ノ洗禮所ニ於テ、洗禮ヲ受ケ、卽日允許ヲ得テ、ユーシヤリスチー（麵包葡萄酒ヲ以テ耶蘇ノ肉身清血ニ表スルノ禮式）禮式ニ出席シ、パール、カミユノ法名ヲ受ケタリ、十二月十五日、羅馬總政院使節支倉ニ公書ヲ授ケ、之ヲ羅馬府民ニ編シ、議員ニ列スルコトヲ許ス、（此一節ハ本書ニ據テ之ヲ補入ス、本書ハ附錄第六號ニ出ヅ）暫ラクアリテ兩使節ハ終ニ羅馬ヲ發途ス、

〔耶蘇天誅記前錄下〕耶蘇宗門制禁之大旨（下○中略）

寬永七庚午年、肥前島原ノ城主松倉豐後守重政、關東ヘ言上アリケルハ、累年吉利支丹宗門稠ク御制禁タリトイヘドモ、今以テ一統ニ斷絕仕ラザル儀ハ、偏ニ呂宋國ヨリ年々商船ノ便リヲ求メテ、邪宗ノ導師渡來仕ル故ニテ御座候、呂宋國ヲダニ征伐仕ツ候ハヾ、自カラ日本國ノ邪宗門

傳播

ハ斷絶仕ベク候、適、出陣ノ御免ヲ蒙リ奉ラバ、手勢ヲ以テ、彼國征伐仕リタキ由ナリ、然レドモ兎角ノ御沙汰ナク、暫ク程過ギケル中ニ、同年十一月十六日、重政、病ヲ發シテ卒去ス、依テ其事相止ミヌ、是ヨリ先、私トシテ呂宋國見分ノ爲ニ、松倉ガ家士吉岡九左衛門、天野千右衛門ト云シ二人ヲ、呂宋國ヘ渡ラシム、彼地ノ様子審ニ候ヒ、程經テ歸國スト イヘドモ、重政沒シケル間、其詮ハ無リケリ、

〔大村家秘錄〕異宗之始終、且異說之條、

往昔日本を責取らんが爲に、軍船數萬艘を艤して、大隅國種子島に來りて、攻戰する事兩度、或は難風に破船し、助命して歸る者幾なり、蠻國の主、日本の人品、軍の次第を問ふ、日本人長低く色黑く、眼さかづると答ふ、是武勇の相なり、攻討に利あるまじと云ふ、又信じ好むことを問ふに、何とは知らず合掌し拜すと答ふ、扨は信心の國なり、宗旨を弘め、漸々と奪ひ取るにしかじと評議し、多年を經て天文十二癸卯年、商船漂着の體にして、蠻船壹艘又種子島に來着す、往昔の兵船に似たる故、島人怪之といへども、船中穩に數日を送れば、島人馴近く、耶蘇悅て種々の珍味を給し、財寶をあたへ、曾て逆はざるに仍て、自然と心安くなり、島中徘徊をゆるし、後には種子島地頭も歸し、鐵砲の打様、張様、藥の調法を傳授して、尊信する事甚し、其比和州の醫者、種子島にあるを誑し蠻國へ連行、ばてれんに仕立、再び連來て、密々法を弘め置、其後畿內、西海、南海、山陽、山陰、東海道、津津浦々に漂着し、金銀珠寶をあたへ、飮食を飽しめ、鄉民を親睦し、宗旨を弘るを專要とす、

〔長崎志 七〕九州諸所に南蠻船渡來之事

一其後、弘治永祿數年之間、薩摩、肥後、肥前、豐後、豐前諸所に、蠻船渡り來り、商賣に事寄せ、密に切支丹之邪宗門を勸め入たり、就中豐後大友宗麟、深く邪宗門を信敬し、城下臼杵之地に、蠻船を滯留せしめ、領內に切支丹寺を造立有しに依て、國中之もの、鄉村卑賤の男女に至る迄、邪敎に立入も

の、甚多かりしとなり、又肥後小西攝津守〈○行長〉も、邪宗門を信仰せし故、領地又は同國天。草。のもの、其外肥前島。原。郷。村のものとも、多く邪宗門に立入れり、是寛永年中、天草島原之一揆蜂起せし災殃之根元なり、

〔大友記上〕宗麟公キリシタンニ成タマフ事

南蠻國ヨリ、キリシタント云宗旨ワタリテ、府。内。丹。生。島。ニ一宇ヲ建立シ、其宗旨ヲトク、濱田鎭忠、田原近江守、彼宗ニスキ、日夜聽聞ス、宗麟公〈○大友義鎭〉御聞アリ、近江守ヲメサレ、吉利支丹宗ノ儀尋ネタマフ、近江、九國一ノ辨舌人ナレバ、吉利支丹外道ノ子細ヲ、サモ面白クコソカタリケレ、宗麟公被仰ハ、ムカシ頼朝公ノ仕置ニモ、佛神ヲシブノヨトハ第一ニ見エタリ、大法ナレバ、某モ佛神ヲカツゴウス、ザレバヨキ事ハナクシテ世ノ禍多シ、諸寺諸社ヲ破却センニハ、外道宗ニアラズンバ成ガタシトノ給ヒ、吉利支丹ニコソナリ給ヒケレ、一年、國中ノ社家人、義鎭公ヲ調伏仕コトアリ、此儀御ミヽニ立、大キニ御キゲンアシク、予カ武運長久ノキタウナドコソ尤タルベキニ、サハナクシテ、某ヲ調伏スル事、手ガヒノ犬ニスネヲクハルヽ、通リナリ、事ヲヨクセントテ惡クスルト云フ、加様ノ儀ナリ、一人モ殘サズ、死罪ニヲコナハルベキ由仰出サレケレ共、吉岡宗歡トマメ率リ、御領内ヲ拂宗麟公其イキドヲリ不散シテ、吉利支丹ニナリ給フトゾ聞エシ、

〔大友興廢記十八〕府内萬壽寺炎上之事

きりしたん宗は、西洋宗とも、又は耶蘇宗ともいへり、近年當國に盛にはやりたりければ、村夫野人何の聞分けたる事はなけれ共、我も／＼と、此宗門に隨ひなびくこそうたてけれ、此宗門に入るともがらは、上下貴賤を撰ばず、伴天連の志とて、寶祿を其分限に應じ取らせ、難病重病の者には、妙方秘藥をあたへぬれば、病も立所に平愈する故、二世安樂の宗旨ぞと尊崇ありしかば、大友家の一族門葉たる人は云に及ばず、外樣の大名、幕下の國主郡主に至迄、大半心を傾けゝる、殊更

宗麟大かたならずの信敬にて、月々に講を立、西洋宗の會合に、法論に日を送る、凡日本の神道西域の釋敎、何の益にかなる、佛閣僧坊宗廟社稷も、一々に破却せよと下知せられけるほどに、豐後國田原八幡宮、豐前國宇佐宮、求菩提山、筑前國安樂寺、箱崎香椎の宮、肥後國阿蘇宮等に、先年より寄附ある神領不殘沒收し、彥山へは軍勢を差遣し攻討しめける、〇中略神社佛閣拾にして八九は燒却しぬ、〇中略吉弘内藏助、橋本五右衞門正行は、佛像を燒却する事を承り、在々所々をかけ廻り、佛像を、毎日五駄十駄程づゝ取よせ、悉くわりて薪となしにける、

〔大村家秘錄〕異宗之始終且異說之條〇中略

一天文年中、純忠公龍造寺隆信に掠られ、親族等も別心し、四方に敵を受、勇猛智謀の純忠公も、軍用不足、自主の功成難きに依て、石火矢、鐵炮、玉藥、金銀、米錢乞請、城墎を經營し、軍器を設け、外敵防戰の助成の爲、一旦彼徒に與し、耶蘇の望を應諾し、銀百貫目借財す、長崎村、隣村山里村、浦上村、淵村等の年貢を以て年々返辨す、

〔長崎志十七〕長崎湊ニ南蠻船著岸恣ニ横行之事

一元龜元庚午年、長崎湊に、南蠻船著岸す、去る天文年中、種子ケ島に來著以後、二十八年之間、諸所に往來し、今年初て長崎津に入船せり、蠻人ども、當湊之地勢を考へ見るに、四方に高山峙ち環りて、風波の難を凌ぎ、海底深くして、舟楫之進退安穩なり、向後、此地を渡し之湊に定めたき旨、領主大村理專に願ひ訴へけり、然るに彼蠻人共、本來貪欲無道にして、邪智深く、表には商賣に來れりといへども、内心は、他方の國土を奪ひ取べき謀計にて、諸人に金銀財寶を與へて、恩惠を施し、或は奇怪之妖術を成して、愚民を感服せしめ、機を見て、切支丹の邪法を敎へ導きし故、其宗門に歸依する者甚だ多く、惡執染著之餘り、神社佛寺、一字も殘らず破却し、剩へ長崎地内に、切支丹寺敎箇所造立し、猶又市町郷村ともに、寺領にせん事を願ふといへども、理專承引無りしを、種々難題

を仕掛け、巧計を盡せし故、理事も是非なく許容有之、此地を彼徒に與へたり、是より彼輩當地領王之ごとく、仕置等をも取捌き、恣まゝに横行し、暴惡無道之仕業、年月を經るに隨て、甚勇猛なりしとなり、

〔耶蘇天誅記前錄上〕耶蘇宗門制禁之大旨（上中略）

弘治年中、南蠻國吉利支丹ノ宗賊、肥前國平戸ノ湊ニ著岸ス、彼地ニテ、暫ク宗門ヲ押廣メ、其ヨリ豐前ノ小倉ニ渡リ、猶日ヲ追ヒ月ヲ彌リテ、周防ノ山口、安藝ノ廣島、備前ノ岡山、播磨ノ姫路等ヲ經歷シ、次第ニ勸法教化シテ、攝津州大坂、泉州堺ヲ打廻リ、其ヨリ京都ニ出テ、專ラ宗門ヲ弘ム、卽五條堀川、一條油ノ小路、二ケ所ニ耶蘇ノ坊舍ヲ建、日々ニ法談シ、夜々ニ教化シケル程ニ、漸々ニ信從歸依スル者夥ク、二箇ノ坊舍出入ノ輩、恰モ市ヲ成スガ如シトカヤ、

〔吉利斯督實記〕一其後こゝにおそろしき道理あり、其故いかんと申に、ころは慶長九年二月中旬の事なるに、筑前の國はかたに、ゑきれんしやありけるが、其時の住持をば、へるろまんといふなり、ゆるまんの名をば、にこらをといふ、同宿の名をば、いなつそと云、其ころはかたは、次第々々に、吉利支丹はん昌の時分なるが、所の守護の名をば、黑田甲斐守殿と申なり、其時分、古鄕は平戸の住人里庵といへるものあり、この人は、いとけなき時より上洛して、其頃下向せしが、子細有て國には歸らずして、はかた邊にぞ居たりしが、俄に足に惡瘡出來たり、存命あやうかりしに、ある人申けるは、ゑきれんしやにこそ、かくれなき醫者の候ひしに、御身きりしたんにて有ば、たちまち快氣せらるべき物をと、かたるを聞て、快氣をだにいたすならば、我等きりしたんになるべきに、御取合にあづかれかしと申ければ、いとやすきことゝて、ゑきれんしやにめしつれ、七日の談義を聽聞する、くるしからずはあらざれど、惡瘡快氣の爲に、頓て水をさづかり、其名を里庵と云なり、其時里庵申けるは、御はからひにて、きりしたむには成りけれども、世の中はせばくなりたり、

それをいかにと申に、きりしたんと云は、万民よりきらはるべし、たゞ願はくは、御寺の同宿に召なされよと、ゑきりに申ければ、頓て住持も、りやうしやうし玉ふ、やがていしやにあはせて、惡瘡も快氣しければ、其身けなげになりて、吉利支丹の學文を相傳す、其身の少し覺えたる、佛法をかへものにすれば、伴天連もなのめによろこび、のこる所もなく、きりしたむの極意まで、皆相傳せさするなり、かくて里庵、寺に三年まで逗留しければ、慶長十一年の三月二十一日に、長崎より伴天連ゆるまん大勢來りければ、里庵不審におもひ、ことの子細を、人にとへども、更にあかさず、住持に向て、ひそかに尋ねければ、住持返事に、人にしらすることにはあらず、御身聞て、何のゑきやある、其時里庵、我等三年が間、御寺に逗留し、極意の處も、かたのごとくつたへ申　しに、今更物をつゝみ玉ふ事こそ、うらみなれ、さらば御寺をまかり立んとあれば、住持きこしめし、かの物てらをいづれば、我法をあらはに云なされては、あしかりなんとやおぼしけん、相かまへて、この事口外すな、御邊も我々が一身に同ずべし、別の子細にあらず、今は是長崎もはん昌し、少身とは云ながら、大むら、ありまも、きりしたんなり、其外あなたこなたの國々のはし〴〵にも、きりし丹など多ければ、本望此時にはしかじ、かゝるが故に、諸出家をあつめ、存ずる旨を評定すなり、長崎は爰かしこの人々の、つき合おほきところなれば、ひそかに寺にて、ひやうぢやうを致すなり、それを何ぞと云ふに、爰にては甲州のよしみ黑田早衛門と云人、是は本よりきりし丹なり、かれ等の人をさきとして、日本國中の大名小名を、十人もそのうへも、我門に入れなば、是もいくさの種なるべし、其爲に諸出家をあつめ、國々にさし遣し、法をといて聞す、我門にすゝめ入れ、其後天下に弓をひかんずる時、隨まじきと云人あれば、くだんのゑすくもがあとを、あたへんとおどさば、後生のことのおそろしさに、ばてれんと、一チ身をせぬはよもあらじ、其時は天下の主を、ともかくもなし、ひすほを日本の將軍つかさになし申さんこと、案の內と覺ゆれば、其ひやうぎのために、かゝ

る出家あつまるなりと語りけり、

一其後、三月二十二日より、談義を初めて、同二十八日まで、七日の談義をのべて、万民聽聞させらる、斯て談義も過ぎ、四月二日より、伴天連十人にて、さん吉やといふ所にとぢこもり、あたりに人をよせずして、夜る日る三日の内談なり、それを何ぞと聞に、筑前にゆるまんはいあんを下し、談義をのべさせ、まづ甲州をすゝめ、此門に入るべし、薩摩には、ゆるまんかんほうを下し、大名共をすゝむべし、豐前には、辻登明、ゆるまんで、たうりすかの両人をつかわすべし、肥後には、中浦壽里庵こそ然るべけれ、さりながら愛に一子細あり、我が國にたとへば、日本にては、長崎が良摩なり、されどもゑきれん玄やに、少の寺領なければ、人夫等などの時事かけたり、先浦上と云所か、また御公領なれば、是を天下に申請べきやとの評定なり、其中に如庵ふらん玄ゝことゝいへる伴天連ありしが、すゝみいで申されけるは、浦上と云在所は、名々御存のごとく、長崎にて少しへだゝりたるところなれば、大村どのゝ知行長崎をば、天下の御意を請て申替、長崎の町在所を押くわへ、天下の御藏入になすならば、ゑきれんじやのまゝたるべし、後には是も我等がものたるべし、此こと然るべきや、いなやと申されければ、住持へるろまん此由を聞、日本國をうばゝんとする我々が、わづかなる長崎を沙汰しては何かせん、いづれの伴天連是をきゝ、天の沙汰をしけるにも、一天より二天にあがるものなれば、何ごとも只次第々々のものなり、先長崎の事を然りなんと、評定落著して、皆長崎へぞ歸られける、

〔契利斯督記〕吉利支丹宗旨廣リ候筋

一加賀國、此國ニハ、高山右近、大閤〇豐臣秀吉之時分、十二萬石取申候、加賀國江御預之時分、四萬石取候、内藤飛驒、後ニ道順ト申候、是モ加賀ニテ、三萬石取申候、吉利支丹宗門ニテ候、此者両人ハ、呂宋江流罪被仰付、彼地ニテ、両人共ニ相果候、其家來宗門ニテ、大猷院〇徳川家光様御代モ、多出候由、肥前

國島原ハ、城主有馬修理吉利支丹宗門故、町人百姓、不殘吉利支丹ニテ候由、會津ニテハ、岡野越後、吉利支丹故、家來大形宗門ニイタシ候、猪苗代ト申所、城地ニテ候、此所ノ百姓、吉利支丹ニテ候由、豐後一國ハ、大友領地、是モ宗門多出申候、筑前國ニテモ、如水〇黒田一度吉利支丹ニナラレ候故、一門ノ内ニモ、能吉利支丹候ツルヨシ、大閤ノ時分ハ、御當代〇徳川程政道無之故、宗門多有之由、吉利支丹寺、日本有之候所々ハ、長崎大村、深堀、有馬、筑後ノ柳川、肥後ノ國八代、天草、豐前國小倉、筑前ノ博多、周防ノ山口、安藝廣島、紀州和歌山、京、大坂、堺、伏見、駿府、江戸、仙臺、會津、加賀金澤、

一逢坂ヨリ西ノ吉利支丹寺ハ、コンメニヤ、逢坂ヨリ東ノ寺ハ、フラテ派也、

吉利支丹出申國所之覺

奥州　松平陸奥守領分仙臺ヨリ、二十一年以前寅年、日本伴天連□□ヘイトロマル、チイノ市左衞門、南蠻伴天連フランシスコ孫右衞門、シユアンハウチヌズダ、以上四人出申候、其外宗門ノモノ多出申候、侍分ノモノ七八人モ出申候、此所ニ、先年キリシタン寺御座候、〇中略

出羽國　松平下總守領分山形ヨリ、二十年以前之卯年、南蠻伴天連ペルナアルトウ市左衞門出申候、其外宗門多出申候内、侍四五人モ出申候、〇中略　三浦志摩守領分壬生ヨリ、宗門一人出申候、　伊奈半左衞門御代官所三波川村、渡瀬村、鬼名村、中ツカ原村、此四箇村ヨリ、明暦二申年五月マデ、宗門十四五人モ出申候、渡瀬村ニ、對庵ト申能宗門御座候、

武藏國　江戸ヨリ、宗門多出申候、此所ニ、先年キリシタン寺御座候、センダガヤニテ、乞食二十人餘リ出申候、牛込ニテ、乞食十人出申候、　伊奈半左衞門御代官所ホキマヨリ、七八人モ出申候、　同斷神奈川ヨリ、穢多ニ宗門二十人餘出申候、〇中略

駿河國　府中ヨリ、宗門二三人モ出申候、此所、先年キリシタン寺御座候、　小田原領ミクリヤヨリ、ケツシント申能宗門出申候、〇中略

◦山城國◦　京都ヨリ、宗門多出申候內、侍一人出申候　永井信濃守領分淀ヨリ、宗門四五人モ出申候、　水野石見守伏見ヨリ、宗門多出申候、此所ニ先年キリシタン寺御座候、　永井日向守知行時勝龍寺ヨリ、宗門七八人モ出申候、

◦攝津國◦　大坂ヨリ、宗門多出申候、此所、先年キリシタン寺御座候　堺ヨリ、宗門多出申候、此所、先年キリシタン寺御座候、　永井日向守領分高槻ヨリ、宗門十人計モ出申候　青山大膳亮領分尼崎ヨリ、宗門二三人モ出申候、　板倉周防守領分下音羽村ヨリ、宗門多出申候、

◦紀伊國◦　和歌山ヨリ、宗門多出申候內、侍四五人モ出申候、此所ニ先年キリシタン寺御座候、〇中略

◦加賀國◦　金澤ヨリ、宗門多出申候內侍七八人モ出申候、此所、先年キリシタン寺御座候、　小松ヨリ、宗門多出申候、〇中略

◦安藝國◦　廣島ヨリ、宗門多出申候內、侍四五人モ出申候、此所ニ、先年キリシタン寺御座候、〇中略

◦筑前國◦　大島浦江、十六年以前未年、南蠻伴天連四人、日本イルマン一人、唐人二人、日本人三人、以上十人捕之、右ノ外、宗門二三人モ出申候、此所ニ、キリシタン寺御座候、〇中略

◦筑後國◦　有馬松千代領分久留米ヨリ、宗門七八人モ出申候、　立花左近領分柳川ヨリ、宗門二三人モ出申候、此所ニ、先年キリシタン寺御座候、

◦肥前國◦　大村因幡守領分大村ヨリ、宗門多出申候、此所ニ、先年キリシタン寺御座候、〇中略

◦豐前國◦　小笠原右近大夫領分小倉ヨリ、宗門七八人モ出申候、此所ニ、先年キリシタン寺御座候、

◦豐後國◦　稻葉能登守領分、近年ハ、キリシタン澤山出申候、　臼杵ヨリ、宗門二人出申候內、侍

一人出申候、木下伊賀守領分日出ヨリ、宗門侍一人出申候、近年ハ澤山出申候、○中略

薩摩國　十七年以前午年、南蠻伴天連四人、日本伴天連一人、同宿四人、薩摩浦江着船仕候ヲ捕候テ、長崎江遣申候、

大隅　日向　志摩　甲斐　伯耆　丹後　安房　壹岐

右八箇國ヨリ、キリシタン宗門出不申候、

以上

○按ズルニ、耶蘇教傳播ノ事ハ、尙ホ寺院條ニ散見シタリ、宜シク參看スベシ、

〔大村家秘錄〕異宗之始終且異説之條○中略

一御領分耶蘇宗漸々弘まり、寶性寺を始、大小寺を建立し、元よりの寺社悉く破壞す、

一天正二甲戌年、多羅山阿春法印は、寺中亡失に付、富松宮に下り拜殿にて御經を讀誦候を、純忠公被聞付、討手の侍被仰付の處、御奥おゑん様（マリヤ様と申奉る、御逝去以後者井上氏の御息女、京より御下り、ジンガウ様と云、）被仰候は、本領安堵の義、偏に多羅山權現御蔭に而候、法印を被爲討候はゞ、可自害よし被仰、御守刀を御拔被成候に付、討手不參、其內に法印は諫早へ退被申、夫より多羅山里坊金仙寺へ參候よし、

一多羅山後住阿金法印は、郡村極樂寺の住持にて、未多羅山には入院なし、純忠公元來軍配者に而、阿金數度の働、別而御意に入候、然處隣國耶蘇宗門に成、御領分も此宗旨行はれ、御領中神社佛閣燒捨申に付、阿金法印御城へ被召寄、被仰付候は、數年の忠節偏に被成御滿足候、此上は阿金も耶蘇宗に可致宗替、加增可被下由、御懇意に被仰出候、阿金申上候は、多年の御恩難有奉存候、則御意次第宗替可仕候、迚もの事に佛具等も燒失仕候而、明日登城仕、御請可申上候、先今晩は御暇被下置候へと申御城を退、直に山田觀音寺へ參候而、御本尊千手觀音權現御神體を奉取、山田泉識坊と申脇坊住持に而候弟子阿乘へ申付候は、我等事今晩御領分立退、嬉野へ可罷越と存候、其方

は此邊仕舞跡より追々可罷退の由被申、阿金は郡の幸天御神體、極樂寺の本尊毘沙門、黒丸村の八幡宮諸社の神體を取負奉り、同村の海邊柳浦より乘船、彼杵へ着船可仕の處、阿金討手三城より被遣候よし聞屆、直に川棚へ着船、虛空藏建をし、嬉野大宜寺と云古跡の寺地に草庵を結び、御本尊を奉移、二十四ヶ年住居にて遷化す、

一阿乘は忍び立退んとする處に、所々に討手被仰付候付而、福重村一類の者を賴み、暫く隱れ居候を押懸討取、耶蘇寺より死體を雪隱に堀埋也、依之大村家に阿乘祟りをなし候ゆへ、大村彥右衞門純勝了簡にて、阿乘死體の跡地に大日堂を立、大村末代迄盆の施餓鬼すべきよし、寬盛に申付于今於多羅山勤之也、

〔長崎志四〕眞言宗當山派　醍醐三寶院末寺

大生山威福寺寶正院　慶長十二丁未年建　境内六百三十二坪半　馬場鄕之内

當院開基成福院高順は、唐津出生にて、多年天滿宮を信敎し、一社建立奉度志願有之、慶長年中、當表に來りしに、其頃は邪宗門之ものども、長崎地內之神社、一宇も殘らず破却せり、仍て威福院東中町筋達橋之邊に小室を構へて、密に天滿宮を安置し奉るの所、邪宗之輩、瓦石等を投打て、神祠を破却せんと相妨る故、同十五年、八幡町內に、小地を求て引移る、然る所元和九年、長谷川氏、馬場村今之地を寄附あり、則天滿宮社造營成就せり、是當表にて、神社再興之始なり、

一元祿八年、本山より、山號寺號免許有之、

〔南蠻寺興廢記〕天正十六年ヨリ同廿四年ヲ歷テ慶長十六年、西國肥後國ニシテ、加藤肥後守淸正病死アリケレバ、其節ヲ窺ヒ、肥後國宇登郡ニ、梅庵ガ弟子アツテ、天帝宗ヲ內々ニ弘法シ、同郡船井村實與寺ト云禪寺ヲ打破リ、眞藏主ト云僧ヲ追出シケレバ、其僧怒テ江府へ下リ、寺社所へ訴達ス、則關東ヨリ官使下著シテ、徒黨ヲ糺明シテ宇登郡靜謐ス、

○按ズルニ、耶蘇敎徒ノ神社佛閣ヲ破却シタル事ハ、傳播條及ビ神祇部肥前國長崎諏訪神社篇ヲ參看スベシ、

〔官中秘策三十〕邪宗門之事

一黑船毎年長崎ニ來るニ付、耶蘇の外法漸に廣まり、天草高麗の衆民邪宗にまたがひ、領主の苛政を憤り、徒黨を催し有、島原の城の廢跡を取立、男女の數貳萬人楯こもりぬ、時に寬永十四年丁丑十月也、則關東の御下知として、上使板倉內膳正重昌、御目付石谷十藏發向にて、其外九州之大名には細川越中守忠利、黑田右衞門佐忠之、鍋島信濃守勝茂、有馬玄蕃頭豐氏、立花飛驒守宗氏、小笠原信濃守長之、小笠原右京大夫、有馬左衞門佐康純、水野日向守勝成、榊原飛驒守、同左衞門等、數萬之軍士寄手なりしか共、城堅して數月を送りぬ、板倉氏打死ありて、重而松平伊豆守信綱、戸田左門氏鉄發向あり、翌年寅の二月落城の時、大將大江四郎大夫は、長崎所生のものなれば、懲しめのため、其首を長崎大波戸にて七日獄門にかけ、籠城の惡徒貳萬人之首も、皆一同に西口といふ所に埋めたり、今に有馬塚といふ是也、終に黑船御制禁として、其年之秋太田氏下向にて、日本に來るべからずと堅仰ありて被歸ぬ、夫より日本へ黑船渡海の道絕たり、其後島原の城主は、松倉長門守勝家、天草の城主は、寺澤志摩守廣孝也、

〔信長公記十三〕天正八年閏三月十六日より、菅屋九右衞門、堀久太郎、長谷川竹、兩三人爲御奉行、安土御構之南、新道之北に、江をほらせられ、田を塡させ、伴天連に御屋敷被下、

〔南蠻寺興廢記〕頃ハ人王百七代、正親町院ノ御宇、織田信長、○中略京都四條坊門ニ、四町四方ノ地ヲ寄附シ、石垣ヲ築キ、一寺ヲ建テ、永祿寺ト號ス、○中略勅命ニ准ヒ、永祿寺ヲ改テ、南蠻寺ト號ス、則江州甲賀郡ニテ五百石ノ地ヲ寄附セラル、寺ノ結構莊嚴目ヲ驚ス、又ウルカン一人ニテハ、弘法力ニ叶ベカラズ、本國ヨリ數人召呼ベシト命ゼラル、ウルカン悅テ本國ヘ申送ル、○中略斯テウルカ

ンガ本國ヨリ渡來スル者、浮羅天破天連、計理故離イルマン、彌里居須イルマント云、(破天連ト云ハ、師ノ如ク、イルマント云フハ弟子ノ如ク、)是等ガ乘ル所ノ南蠻船、若州小濱ニ著船ス、信長聞テ再度南蠻人渡來ノ時、龍造寺ガ思慮計リ難ク、ウルカンニ命ジテ、小濱ヘ入津セシムルナルベシ、南蠻人共、若州ヨリ江州海津ヘ至リ、船ヲ湖上ニ浮メテ、大津ニ至リ、京都南蠻寺ニ入テ、ウルカンニ謁シ、信長ヘ注進ス、信長喜テ安土ヘ召呼バル、渡來ノ南蠻人妙本寺ヘ入テ命ヲ待ツ、斯テ南蠻人三人登城シテ、信長ニ拜謁ス、其禮式ウルカン破天連ガ通リナリ、此度渡來ノ浮羅天破天連ハ、ウルカンヨリ脊高キコト一尺五寸、色青ク、髮鬚黃色ナリ、衣類ハウルカンガ如ク、アイトナリ、彌イルマンハ、醫術外治トモニ奇妙ナリ、(最初ウルカンガ、安土ヘ來リシ時ヨリ、南蠻人奏者ハ、長谷川竹ニ命セラル、)今般ハ六種ノ捧ゲ物アリ、瑠璃ノ寶珠、香一包、犬皮十枚、瑪瑙ノ机一脚、虎皮十枚、五色羅紗五十枚獻上ス、不日ニ南蠻寺ヘ歸リ、重テ信長ヘ訴達シテ曰ク、天帝宗ハ、普ク病難貧苦ヲ救テ、起臥ヲ安ジ、法ヲ傳ヘテ、現安後樂ノ願望ヲ成就ス、藥園ヲ給テ、藥種ヲ植エ、其備ヲ成ンコトヲ願フ、信長許諾シテ、山城近國ノ内、其地ヲ選ブベシト有ケレバ、彌イルマン、江州伊吹山ヲ願ヒ得、此山ニ登テ五十町四方切開キ、藥園トシテ、本國ヨリ三千種ノ藥草ノ苗種ヲ取來ラシム、伊吹山ニコレヲ植エ、(此故ニ、今二百年ノ後マデモ、其根此山ニ止テ、川芎艾ノ類、此山ヲ以テ名產トス、)ソレノミナラズ、本國ヨリ、財寶夥シク取寄セテ金銀ニ替ヘ七寶ノ瓔珞、金襴ノ幡、錦ノ天蓋、六十一種ノ名香、門外マデ薰ジ、往來ノ人々止マル、(此寺常ニ佛壇ニ本尊ヲ見セズト云ヘリ、)是ヲ傳聞シテ、五畿內ハ勿論、四國、中國、京、近國、來集スルコト夥シ、南蠻寺ハ、日々群集ヲナスト雖ドモ、宗ニ歸伏セザルモノニハ、本尊ヲ拜サスルコトナシ、南蠻寺ハ、此群集ノ人ニハ、聊モ構ハズ、洛中洛外ヘ人ヲ出シ、或ハ山野ノ辻堂、橋ノ下等ニ至ルマデ尋捜非人乞食等ノ大病難病等ノ者、召連レ來ラシメ、風呂ニ入レテ五體ヲ淸メ、衣服ヲ與ヘテコレヲ暖メ、療養シケル程ニ、昨日ノ乞食、今日ハ唐織ノ衣服ヲ身ニ纏ヒ、病モ自ラ心ヨク快復セル類多シ、就中癩瘡等ノ難病、南蠻流メ外療ヲ受ケ、數月ヲ經ズシテ全

快シ、誠ノ佛菩薩、今世ニ出現シテ、救世濟度シ給フナリト、近國他國風說區々ナリ、故ニ諸國ノ大病難病ニ侵サレ、貧賤ニテ我力ニ叶ハザル者、或ハ諸醫ノ療養ニ治スルコト能ハザル者、貴賤共ニ南蠻寺ニ群集スルコト、斜ナラザリケリ、〇中略大難病ニテ、諸醫ノ力ニ及ザル者、快復ヲ得タルモ、三十人ニ及ベリ、如斯ノ方便ヲ以テ、追々此門徒ニ歸伏スル者夥シ、其中ニ智惠才覺アッテ、破天連ノ門弟子ト成リ、愚蒙ノ者ヲ敎化スル者三人アリ、一人ハ、生國加賀ノ國ノ者ニテ、禪家ノ僧名ヲ惠春ト號ス、此僧癩瘡ヲ病ミ、身體破レ、膿血溢腫、僧家ノ交リ叶ハズ、其親貧賤ニシテ、保養スルコトモ叶ハザリケレバ、乞食トナリ、京都ニ至リ、眞葛ケ原ノ邊ニ倒レ臥テ在リシヲ、南蠻寺ヨリ引取リ、兩イルマン施藥シテ、數月ヲ經ケル所ニ、癩病漸クニ平癒シテ、遂ニ全體快復スルコトヲ得タリ、此僧大キニ悅ビ、誠ニ不思議ノ因緣ヲ以テ、天帝廣大ノ恩惠ヲ蒙リ、難病忽ニ全快ヲ得テ、再ビ人界ノ生ヲマヌカル、此高恩ヲ報ゼンニハ、縱ヒ粉骨碎身ストモ、宗門ノ爲ニセンコト本望タルベシトテ、信心ニ歸伏ス、今一人ハ、和泉ノ國境ノ商人、吳服屋安右衞門ト號ス、是ハ富家ノ町人ナリシガ、身上沒落シテ、剩ヘ瘡毒ヲ患ヘ、身體ヘ溢出、遂ニ跡ヲクラマシテ乞食ト成、大宮通リ東寺ノ廻廊ノ下ニ伏シテ、寺中ノ殘飯ヲ得テ、今日ノ命ヲ全ス、又一人ハ、是モ和泉ノ國ノ者ニテ、墨村ト云所ノ百姓善五郞ト云者ナリ、生質缺唇ナリ、是モ身帯滅却シテ乞食トナリ、安右衞門ト共ニ、東寺ノ廊下ニ屈ミ居タルヲ、南蠻寺ヨリ引取、藥湯ヲ浴シ、全身淸淨ナラシメ、美服ヲ與ヘテ、五體ヲ溫メ、服藥月ヲ重ネケレバ、兩人共ニ快復ヲ得、奇代ノ時節ニモ逢ヒ、希有ノ法力ヲ蒙リ、再度人間ノ交リヲスルコト、天帝ノ冥加ニ叶ヘリトテ、深ク宗ニ感伏ス、兩破天連、是等三人ガ智惠サトク、殊更博識ニシテ、敎ニ通達セル、ヲ大キニ悅ビ、惠春ヲ梅庵ト號シ、(僧形其儘ニ剃髮ナリ)安右衞門ヲ告須蒙ト名付、善五郞ヲ蕃問ト號シ、天帝ノ宗意ヲ傳ヘ、追々歸伏ノ人ヲシテ、此三人ヲ以テ、說法、敎化シテ、攝得令ムルニ、和語ヲ以テ敎喩スル故、辨利能通ジテ、大ニ利益アリケレバ、南蠻寺ノ

法器ヲ得タリト、破天連イルマン悅アヘリ、爾破天連感悅ノ餘リ、密ニ內殿ニテ、奇術ヲ敎ルニ、此三人流水ニ棹ヲサスガ如クニ、法術ヲ傳受シテ、手拭ヲ以テ馬ト見セ、塵ヲ虛ニ投テ鳥トナシ、枯木ニ花ヲ咲セ、塊ヲ寶珠トシ、虛空ニ座シ、地ニ隱レ、俄ニ黑雲ヲ出シ、雨雪ヲ降ス等ノ術、得ズト云コトナシ、此三人ノ外、南蠻寺ニテ、病氣全快ノ者共、或ハ金銀ヲ與ヘテ商人トシ、或ハ帶刀シテ仕官ノ人トシテ、悉ク洛中近國ニ放遣シ、南蠻寺廣大ノ恩惠ヲ云ヒ弘メ、諸國難治ノ病人ハ、南蠻寺ニ來テ利益ヲ蒙ルベシト、信長ノ命ナル由、南蠻寺ニテ快復シタル者ドモ、近國他國ヘ分散シテ、報恩謝德ノ爲ニ、申シ觸ケル故、南蠻寺ヘ來集スルコト雲霞ノ如シ、如斯群集スル者共ヲ、破天連イルマン、彼三人ノ者共、其外此寺ニ渡世スル門徒共ヲシテ、一々ニ點檢シテ藥ヲ與ヘ、又宿ニ殘所ノ父母、妻子、渡世難義ノ族ニハ、彼病人南蠻寺ニテ、療養ノ中ハ、夫々ニ助成ヲ施シケル程ニ、南蠻寺ノ門徒、日ヲ追テ夥シ、或說ニ、病人南蠻寺ニテ養生ノ中ハ、其家內ノ者赤子ニ至ルマデ、一人ニ付、金一分ヅヽ、每日與ヘシ程ニ、是ヲ見聞スル者、無病ノ者モ、斯ル病銀、或樣ノ類トテ來リ、其施金ヲ貰ケリ、左有ドモ、南蠻寺ニテ少モコレヲ告メズ、門徒トサヘナレバ、普ク金銀ヲ與ヘケルトナリ、然ト雖ドモ、門徒ノ者共ヨリハ施物ヲ受ケズ、斯ク夥ク財寶ヲ費スコト、皆以テ本國ヨリ渡リ來ラシムル所ナリ、後々ニ至テハ、南蠻寺ノ門徒タル人ニハ、每日人別ニ米一升、銀八分ヅヽト定メ、大帳ニ記シテ、施シケル間、筆者四人、配劑八人、扶持渡シノ役人八人、卯ノ上刻ヨリ、酉ノ下刻マデ二十人ノ者ハ、息モツカズ渡セシ故、日々門徒繁昌ス、新宗南蠻寺ノ弘法ハ、今世ヨリ卽身成佛ナリ、未來永劫、生天ノ樂不可疑ト、サヽメキ合ヘリ、此時節ニ至テ、公家武家ニモ、此宗歸伏ノ人多カリケリ、

〔日本西敎史上〕第五章○中略

此頃、○千五百六十五年、卽我永祿八年京。地。ノ。耶。蘇。本。寺。ハ、日本全國中ノ、最モ隆盛ナルモノナリ、而シテ敎法ノ漁者ハ、大ニ漁スルヲ得テ、サンピエールノ舟ニ乘リ、其釣綸ヲ投ゼンコトヲ乞ヘリ、此大意ハ、敎法ノ大ニ行ハルヽヲ、漁者ニ比喩シテ云フナリ、然リト雖モ、暴烈ノ妖風、一度ビ激波ヲ起シ、以テ日本ヲ覆シ、以テ公方ヲ

倒シ、以テ宗教ヲ廢シ、以テ干戈ヲ動シ、終ニ全國諸州、所トシテ兵燹流血ノ大患ヲ被ラザルナキニ至レリ、

〔雍州府志八古蹟〕徒斯辻子 在二一條北油小路與二堀河一之間一、近世、耶蘇宗門之寺在二斯町一、俗誤二徒斯一謂二太宇須一、故今稱二大宇須辻子一、

〔耶蘇天誅記前録中〕耶蘇宗門制禁之大旨中略 慶長年中、大坂天満橋、久寶寺橋、安德寺橋ノ近邊ニ、耶蘇宗ノ坊舍ヲ建テ、大坂曲中ノ男女歸依スル輩夥ク、參詣ノ貴賤市ヲ成ガ如シ、故ニ本多佐渡守正信、本多上野介正純等ニ命ジテ、糺明停止セラル、加旃、畿內幷ニ西國筋ニモ、彼邪宗門信用ノ輩多キノ由、其聞ヘアルニ依テ、大久保相模守忠隣ヲ京都ヘ差遣サレ、繼テ西國ヘモ上使ヲ下サレ、屹ト穿鑿ヲ遂ベキノ旨ヲ各ヘ仰含メラル、兩人彼地ニ至リ、稠シク糺明譴責セラル、去程ニ邪宗ノ流行稍ク磷ギケルト也、

〔長崎志七〕切支丹寺燒捨之事

一慶長十九甲寅年、山口駿河守を被差越、長崎地內に建置し、切支丹寺十一箇所、近國諸家に被仰付、寺內の佛像を破裂し、堂塔諸具共に悉く打碎きて燒捨らる、

鍋島信濃守　西御役所境內に二箇所

寺澤志摩守　春德寺地內に一箇所　爐粕町に一箇所　勝山町に一箇所

有馬左衞門佐　桶屋町に一箇所　十善寺村に一箇所

松浦壹岐守　本博多町に一箇所　今町に一箇所

大村民部少輔　立山御役所境內に一箇所　本蓮寺地內に一箇所

右十一箇所燒捨られ、其後駿河守は、茂木より乘船にて、島原に渡り、諸所餘黨之もの、嚴しく穿鑿有之、直に歸府せらる、

經典

〔寒更霰語上〕舊約書三十九冊あり、天教の徒の尊崇して聖經とするものにして、亦約書と云、聖經と名ることは、猶太國古の先知、上帝耶和華(シホーワ)の命を受て記す、皆聖令を感じて記するを以て、これを聖經と云、又昔上帝耶和華亞當(アダン)と約し、又挪亞(ナウア)と約し、又亞伯拉罕(アブラハン)と約し、又摩西(モオス)と約す等、上帝耶和華顯現して、古の先知と約するの事を、皆此書に載て、以て萬人に信せしむ、故にこれを約書といふ、新約書は、總じて二十七冊あり、これは耶蘇未生已前、先知の預言に應じて出現し、天國の要道を明にして、世人を救ふ大功を成す、其一代の言行を集めたる門人の所記を新約書と名く、其舊約書は、天地開闢の初より、耶蘇降世四百年許已前までの事を記す、先知の勝れたる二十餘人出づ、皆是天王上帝の命をうけ、聖令を感じて錄する者といへり、舊約書は、猶太國語を以て記す、新約書は、羅馬語にて記せり、而して新約全書は、耶蘇降世一千八百五十五年(清咸豐五年乙卯、皇國安政二年也、)江蘇松江上海墨海書館印と識せり、舊約全書は、耶蘇降世一千八百五十八年(清咸豐八年戊午、皇國安政五年也、)江蘇松江上海墨海書館印と識せり、合して一帙とす、兩約全書是なり、(余所覽之本如此、聞舶來多種、文有少異、)〇中略

〇〇天道溯原三卷(二十四章)合衆國丁建良撰、清人序之、其推辨を極む、末に署して曰く、時在大清咸豐八年、(皇國安政五年戊午)花朝月之中澣、婺州敎弟候補教諭唐傳中拜撰、此書もつはら耶蘇教を主張し、天主の信ずべきことを辨せり、兩約書及此書を研究せば、方今邪教の建立、宛も掌を指すが如くならん、〇下略

教說

〔吉利支丹物語上〕きりしたんぶつほうの事

さてもきりしたんぶつほうのいしゆを聞に、天地かいびやくの時、でうすとも、大あるじとも申佛、一たいしゆつげんましまして、日月をつくり出し、世界をあきらかにして、人ちく、さうもく、しんら万ぞう、ことごとくつくり出せり、世界國土こんりう有て、人げんをゆたかにすませ、ぜんをせよとも、あくをせよとも、おほしめさぬ所に、末世に及ぶ程、人の智惠うすくなりて、でうすの御

おきてにたがひ、あくしんぶだうの、しゆくやうなれば、からにいんへるのといふ所、地の下くらき中に、鳥けだもの、かたちをうけて、くるしみをうくる、又おしえにたがわざるしゆじやうをば、はらいぞうと申て、これより天上に、あんらくけらくのぎやうじざゐの所へむまるを、ばらいぞうといふ、すべて衆生のきより、八く八なんあり、でうすははじめも今も、りやくに不同なし、たとへば、をやの子をまうくるに、あしかれと思ひてそだてつるはなく、せいじんして、びやう人も、ふかうのものも、ぬす人もあるがごとし、あながちに、でうすにあやまりなけれども、衆生の氣まち〳〵なれば、あく人をばふかくにくみ給ふ、でうすの御をしへにたがはぬといふは、こひさんと申て、佛の御まへにまいり、ざんぎさんげして、みらいの樂みをいのる、くわりすもと申て、日本のかんきんといふがごとく、經をよみ、むねをほと〳〵とたゝく、是はむねに何のおもひくなし、でうす、さんだまるやを、一すぢにあがめ奉るといふしかたとみへたり、次に、天を見あげて、ゆびをさし上る、是は天上より、此かいをまぼり給ふ程に、うやまひ奉るてい、其次に、をのれが、兩がんをよこになづる、何を見ても、物にうつりごゝろあるまじきとのしかた、其次に、くちをそしへて、はだゝきをするとみゆる、口にていつわりもうご有まじきとばかりの、ゑかたと思へり、又夕べには、へんていしやと申て、婦うちのやうなるものに、あかゞねのはりをうへて、つくりためたるあくを、口のうちにて、さんげして、せなかを我とせんすまる〳〵となへて、血をたらす事あり、まぼりには、こんたつと申て、でうすのをもかげをうつしたるものを、ほそがねにてはりく、ませて、をゝつけて、くびにかくる、ゑゆずにははつけばしらをおどめにして、むかいのかたへつまぐりて、せんすまる〳〵ととなゆるばかりなり、又くるすといふものを、かんよふともてあつかふ、べつにちやつよりふかき文はなきと見へたり、さて又、寺のもやうをつたへうけ給るに、ひみつのまとて、でうすのすがたを、ものすさまじげにつくり、はつけにかけたる所を見する、是は

そも、なんぎやう、くぎやうのすがたを見せて、もんとどもに、かんるいを、ながさせんとのはかりごとゝ見へたり、そのをくのまを、たいめんのまと申て、さんだまるやといふ女房、でうすをうみいだし、二歳ばかりの子をいだきたるすがたを見する、そのしさいは、でうすと申佛、天神のあるじたりといふばかりにて、衆生うたがひをこすべし、佛法せほうのことわりをも、聞しるまじきとおぼしめして、さんだ丸やのたいないに、やどらせ給ひて、世界にむまれ出給ふ所を見せて、たいめんのまといふ、其おくのまは、さんげの、まと申て、此あひだの、とがあくじどもを、ばてれん、いるまん、ゑうていのものどもまで、車座になをつて、そのまんなかにて、さんげをし、わびことをして、又たゝかに、はじしめられて後、くだんのべんていしやをもつて、ばてれんがてづから打て、血を出し、ふくさものをもつてぬぐひ、其うでをあらわずして、佛をおがむを、大ぎやうといふ、かやうの行をつとむれば、朝夕かげかたちのごとく、でうす又ゆごし給ふあひだ、しんみやうは、露ちり程もをしむべからず、でうすの御法をきく人は、大かいのそこのこがねをひろい、一がんのかめの、ふぼくにあふより、猶まれなる事と、したゝかにほめられて、まんぞくし、まことに、佛になるぞとおもひさだめて、火あぶりになるも、うしざき、車ざき、さゝのはつけ、かやうのなんにあふが、のぞみのかのふ成佛と心へて、いのちをいとひ、かなしむものなきと見へたり、哀なる事共かな、ちゑのなきものは、をのれがみゝに聞入、心におもひさだめたる事をば、かつてひるがへす事なく、たとへば二三歳のわらんべが、かゞみのうちのかたちを見ては、誠のかたちと思へる、水の月を見ては、ゑんこうが、てにとらんとおもふをろかなるこゝろとひとしきものなり、ぐ人は、みなかくのごとく、げどうの法まほうなるべし、

○按ズルニ、此書ハ、跋文ニ寛永十六年己卯八月吉祥日刊トアリ、

〔西洋紀聞下〕天主の教我いまだ聞所あらず、其大略を聞かむと問ふ、○白石、ロヲンニ問ヒシナリ、大凡、物自ら成

る事あたはず、必これを造るものを待得て成る、今試に、一堂の制を見るに、其制自ら成る事あらず、必工匠を待えて成る、一宗の政を見るに、其政自ら治るにあらず、必君長を待得て治る、天地萬物これに主宰たるものあらずして、成る事あらず、其主宰名づけてデウスといふ、（デウス漢に天主と譯す）デウス初に天地萬物を造らむとするに當りて、まづ善人を住しめむために、諸天の上に、ハライソを作り、（ハライソとは、漢に譯して天堂といふ、佛氏いはゆる極樂世界のごとし、）無量無數の、アンゼルスを作る、（アンゼルスは、佛氏いはゆる、光音天人の類、ポルトガルの語に、アンゼルといふなり、）其後に、天地世界を作りて、タマセイナを取て、（タマセイナ、此に清淨土といふが如し、）男を作りて、アダンといひ、其右脇の一骨を取て、女を作りてエワといふ、すなはちこれ人の始也、彼男女をして夫婦となし、テリアリの地に居らしめ、（テリアリ、こゝに安樂國土といふがごとし、）其餘の地をば、鳥獸のある所とす、凡人物のアニマに三の品あり、（アニマは魂なり）草木のごときは、生のみ、（榮枯のみあるをいふ）禽獸のごときは、動のみ、（飛走のみあるをいふ）此二つの物は、形すでに滅びぬれば、アニマもまた滅びぬ、これを始あり、終ありとす、人のごときは最靈にして、其アニマ、天地と共に滅びず、（人は靈魂ありて、鳥獸に異也といふ、）草木これを始あり、終なしとす、これによりて、デウス、アダン、エワに戒むるに、つゝしみてマサンを食ふことなからしむ、もしそのこれを食はむには、禽獸の中に墮して、長くその苦をまぬかるゝ事なからむがため也き、（マサンは果の名也といふ、佛氏いはゆる地餅の類歟、其苦とは生老病死等の苦也といふ、）こゝにルウチヘルといひしアンゼルス、自ら其智なるにほこりて、稱してデウスといひ、またこれを僭せしアンゼルスすくなからず、デウスこれをにくみて、インペルノを作りて、それにくみせし輩と共に、こと〴〵く皆下界に追下して、インペルノに居らしむ、（ルウチヘルは、アンゼルスの名也、インペルノは、こゝに火坑地獄とすといふ、）ルウチヘルぞの輩とのみ、インペルノに苦しまむ事を恨て、テリアリに飛行き、まづエワをすゝめて、マサンを食はしむ、アダンまたエワがすゝめによりて、これをくらふ、かくてアダンとエワと、共に天戒を破りて、テリアリを逐れてければ、其子孫人間に降りて、其苦をまぬかれず、こゝにおゐて、アダン、エワ、コンチリサ

ンの心を發して、コンチリサンとは、此に懺悔といふ、ふかく其罪を謝す、デウス其罪の大きにして、自ら贖ふ事のあたふまじきをあはれみて、自ら人の身と生れて、二人に代りて、其罪を贖はむ事を誓約す、二人はつひに、九百三十歳の壽をたもちて、終りてハライツに至りたり、アダンをさる事、二千餘年にして、今をさる事四千年の前なりといふ、ノエといふもの、其男子三人あり、父母子婦すべて八人のみ、デウスの敎をうけまたがふ、世の人これを信せず、デウス降りて、ノエに敎て船を作らしむ、百二十年にして、船成れり、デウスまた降りて、彼等を敎て、穀蔬雞豚の類迄、ことごとく共に船に載しむ、すでに大雨降る事四十日、大水、山をかねて、大地の人物、ことごとく溺れ沒す、ノエが父子夫婦のみ、死をまぬかる、其船猶今アルメニヤの山の嶺に現存し、また其水に漂來る螺殻の類、エウロパ地方、所在の山岳の上にあるもの猶あり、ノエを去る事、一千餘年にして、今をさる事三千餘年前なりといふ也、デウスユウデヨラの、スイナイに降て、モイセスといふものに、マンダメンドを授て、世の人にをしへしむ、ユウデヨラは國の名、前に注す、スイナイは山の名、モイセスは人の名、マンダメンドは佛氏いはゆる戒也、十條ありといふ、エヂップトの君、其敎を信せず、つゐにモイセスを殺さむとす、エヂップトは國の名、ヲランドの語には、エザップといふ、漢に譯せし所詳ならず、これに隨ひて國を避しもの數萬人、其君自ら兵をひきゐて、マーレブロムに逐至る、海中忽に潮わかれ、路ありて、のがれさる、潮また忽に湧きて、逐ふもの皆溺れ死す、マーレブロムはマーレは、海也、ブロムはまたアルタといふ、此にいふ血也、人死して其海ことごとく血となれると也、漢に西紅海と譯するもの即此也、モイセスをさる事、凡一千八百年、今を距る事一千七百餘年也といふ、ユジデヨラの國ナザレツに、サントスマリヤといふ聖女あり、ヘーラレアムの君、ダアヒツドの後也、ナザレツ地名也、漢譯未詳、サントスとは尊稱也といふ、餘皆これに倣ふ、ベーマリヤは漢に瑪利亞と譯すといふ、ヘーテレアム上地名也、ダアヒツトは其君の名、漢譯ともに未詳、十六歳の時、夢にアンゼルス降りて、デウスの命を告て、デウス其子となりて、名をエイズスキリストスといふべし、またサントスヨジセフして、これが父とし、ベイテレエウンに產しめて、エヂップトより、むかへかへすべしといふ事を見る、アンセルス前に見えたり、エ○イ○ズ○ス○キ○リ○ス○ト○ス、漢に耶蘇と譯す、我俗に、ゼスといひしは、漢譯の音轉じ訛れるなり、サントスヨジセフ人の名也、ベイテレエウンは、地の名な

リ、漢譯未詳、エヂツプト前に見ゆ、こゝにおゐてジヨセフをともなひ、ナザレツを去り、ベイテレウエンの驛に至りて、つゐに男女の道にあづからずして、男子を其厩中に產む、夢見し所によりて、エイズスキリストスと名づく、エイズス生れしは、是歳乙丑の年を去る事、一千七百九年前の、十二月二十五日の夜半也といふ、されば本朝人皇第十代、崇神天皇三十年辛酉の歳にて、漢平帝元始元年にあたれり、アラビア、タルソ、サバ、三國の君、エイズスが生れし夜に當て、客星現れしを觀て、聖人ありて、生れし事を去りて、をのをの國を出で、其所をもとむ、アラビアは今アフアの地方にあり、タルソ、サバ、ともにあるところを去らず、漢譯共に未詳、三國の君同じき所にゆきあひて、共にジユデヨラの君、エローデスに見えて、此事を問ふ、エローデス其事を去らず、其人をもとめ得ば、必我がために告知らすべしと約す、こゝをさりて行程十三日、ベイテレウエンに至るに、彼星かしこの上にあたれり、つゐに其驛にして、エイズスを拜する事を得ぬ、アンゼルスありて、降りて三國の君を戒むるに、エイズスの事をもて、ジユデヨラの君に告る事あるべからずといふ、これ彼こゝろにいむ事あるによれる也、マリヤ、つゐにこゝをさりて、エヂツプトにゆく、ジユデヨラの君三國の君の、其事を報せざるをあやしみ、明年國中の幼兒、生れて二歳なるもの數万を索て、ベイテレペエンに殺す、七年にして後其君死す、アンゼルス、また降りて、マリヤに告て、ナザレツに歸らしむ、エイズス生れて、瑞應多く、幼にしてみづから天主の子と稱し、十二歳にして、始てエルーサレムに說法する事三年、其敎をうけしもの五千人、エルーサレムは、ジヨデ[illegible]フの地名也といふ、漢譯未詳、ジユデヨラの君セイザル、これをにくみて、其罪を断りて、カルワーリエにおゐて磔し殺す、カルワーリエは山の名、イタリヤの語には、カルワリヨといふといふ、共に漢譯未詳、番語磔をクルスにかけしといふ、クルスは漢に翻して、十字架といふもの也、また貴金を以て、其像を造りしを、イマセンといふあり、これエイズスとらはれゆく時に、まろびしを、女人の帨巾にて、其面を拭ひしに、其面の形、帨巾にうつりしに始れりといふ、又エイズスが像を見しに、銅像の十字架上に、磔殺せられしところ也、死して後三日にして蘇生し、其母マリヤにみえて、弟子のために、法を說く事、また四十日、終に上天しつ、これデウス初の誓約のごとく人と生れてアダン、エワがために、其罪を贖ふ所也、

〔西洋紀聞下〕按ずるに、西人其法を說く所、荒誕淺陋辨ずるにもたらず、ゑかりといへども、其甚しきもの丶ごときは、また辨せざる事を得べからず、まづ其番語、稱してデウスといふもの、漢に翻して天主とす、これ彼此聲音相近きにとれる事、たとへばエイズス、譯して耶蘇とするがごとし、番字もと讀むべからず、漢字を假りて其聲音をうつせるのみ、其義番語にありて、漢字にあるにはあらず、然るに明季の諸儒、利瑪竇初に天主の字を借り用ひて、其番語を譯しつゐに其說を附會して、經にいはゆる上帝これ也とす、諸儒其說にまどひて、其非を覺らず、もしデウス譯して天主といふ、すなはちこれ天の主宰、經にいはゆる上帝なるべくは、エイズスを譯して耶蘇と曰ふ、耶蘇また何の儀かあるべき、此事我國にして、日神の御事を漢字を得るに及び、大日靈貴とよまれしによりて、大日如來これ也と云說の如し、經に所謂上帝の說のごときは、耆ノ音を讀むもの丶、自ら知れる所なれば、今此に論ずる事を待たず、

〔天主實義上〕首篇、論天主始制天地萬物而主宰安養之、〇中略
西士曰、予欲先詢所謂始制作天地萬物、而時主宰之者、予謂、天下莫著明乎是也、人誰不仰目觀天、觀天之際、誰不默自嘆曰、斯其中必有主之者哉、夫即天主吾西國所稱陡斯是也、〇中略
中士曰、萬物既有所生之始、先生謂之天主、敢問、此天主由誰生歟、西士曰、天主之稱、謂物之原、如謂有所由生、則非天主也、物之有始有終者、鳥獸草木是也、有始無終者、天神鬼神、及人之靈魂是也、天主則無始無終、而爲萬物之始焉、爲萬物根柢焉、無天主則無物矣、物由天主生、天主無所由生也、
〔天主實義下〕第八篇、總舉大西俗尙、而論其傳道之士所以不娶之意、并釋天主降生西士來由、〇中略
西士曰、望予此間久矣、〇中略 於一千六百有三年前歲次庚申、當漢朝哀帝元壽二年、冬至後三日、擇貞女爲母、無所交感、託胎降生、名號爲耶蘇、耶蘇即謂救世也、躬自立訓、弘化于西土三十三年、復昇歸天、此天主實蹟云、

誅佐

〔契利斯督記〕三ツノヘルソウナ

一デウスハカテレ御作リ、デウスナ、御チヤト申心ニテ候、一デウスヒイリヨデウス、世界へ来生済度ノタメニ天タダリ給フナ、御子デウスト申儀ニテ候、一デウスイスヒリトサン右ノ御チヤ、御子、御大切ニ思召ト申儀ニテ候此三ツヲ、ヘルソウナト申候、此言葉ハ、デウスアマクダリ、此三ツヲ、ヘルソウナト申由ヲシヘタマフ言葉ニテ御座候、

〔切支丹勸方之書〕切支丹勸る心入之事

一切支丹宗旨にて無〻之帝王の掟たり共、違背仕まじき事、一他のものを察まじき事　一僞申まじき事　一邪婬侵まじき事　一他人を我身の如く大切に可〻仕事

右一通、禮儀も有〻之樣に聞ゆ、又釋迦は悉皆成佛と說玉ふ是無なり、切支丹は有に無〻疑と、色々のたとへ事、或は樣々の名譽有〻之と勸め、有と心得なければ損なし、無と心得、有なれば限なき損也、現世にての義は、貴人高人たりといへ共、狂言などに、大名に成たるが如し、來世は果しなきすみか、はらいぞといふ、思ふまゝのよき所あり、かのはらいぞへ至らんと思ふ者は、萬事をやめ、でうすを尊び、掟を不〻背、異の志ふかきものは、此世にては、其身安穩に國家治り、來世にては、はらいぞへ參る事疑なしと勸む、

極意は、たとへ主君の命たりといふ共、切支丹の法に不〻背者は不〻可〻殺、又他宗切支丹共に、でうすを不〻尊、掟の如く不〻勸者は、でうすへ敵對ふゆゑ、主君親にても不〻殺ば、はらいぞへ至りがたし、果しなきはらいぞにはかへがたきによつて、主君親にても殺すは道也、其故は唐には伊尹般の大甲の位を移すためしあれば、儒道にも、惡王は民の憂にかへがたしとの心を以て、主にても親にても殺せと勸む、是事の少相似たるを據として、新法を立といへども、道理に於て各別のさた也、たとへば猿の形人に似たりといへ共、人とはいひがたし、然る故切支丹の法談、一ツとして實なければ前後不合せり、併端々勸入たる所も有と見えたり、是に理を得、日本は金

銀多き國、別而此所を、切支丹に金銀をむさぼりたきとの存念深く、時節を計ひ、一度切支丹になびけんとの根本ならずや、

右切支丹勸之根本、御了簡一々致承知、御尤至極仕、毛頭相違無御座、付而判形仕爲者也、

延寶三乙卯歲五月廿一日　　南蠻こんばにやの門派、はあてれおかぜふ、　岡本三右衛門（蠻字あり）

青木遠江守樣御內
久木源右衛門殿

中垣內權兵衛殿〇以下與力三人略

〔邪宗門穿鑿之書并勤方之書〕十箇條のマメタンとは、デウスよりの御掟之事、

第一、御尊體のデウスを、万事に越て、御大切に存じ、敬ひ尊み奉る事、第二、デウスの尊き御名に掛て、空き誓すべからず事、第三、御祝日を勤め守るべき事、第四、父母に孝行にすべし、第五、人を殺すべからず、第六、他犯すべからず、第七、偸盜すべからず、第八、人を讒言すべからず、第九、他の妻を戀すべからず、第十、他の物を猥に望むべからず、右十ケ條、都て二ケ條に極る事、

一には、御一體のデウスを、萬事に越て御大切に奉存事、

二には、我身の如くに、他人を可思事是なり、

〔破提宇子〕或人問曰、提宇子ノコンヒサント云フハ、何トシタル因緣ゾ、答云、ゼスキリシト在世ノ時、ペイトロト云第一ノ弟子ニ、汝地ニテ赦スベキ科ヲバ、我天ニ於テモ赦スベシトノ約アリシ故、コンヒサント云義ハ始リタリト云、サレバ、コンヒサンノ時ハ、他ヲ近付ズ、其人ト伴天連ト唯二人相對シテ、父母ヲ殺セシ五逆罪、國家ヲ傾ントノ謀反等ノ大犯ナリトモ殘ラズ、懺悔スルニ、伴天連コレヲ聞テ赦セバ、其罪消滅スルト云、然レバ科ヲ犯シテモ苦シカラズト敎ユル同前ナ

リ、是ヲ以テ見ル時ハ、伴天連ハ殘賊ノ棟梁、謀反ノ導師ナリ、兎ニモ角ニモ魔法ト思召セ、

〔邪宗門穿鑿之書幷勤方之書〕一アチリサンと申は、後悔の事にて御座候、然皆万事に越て御大切に事存べく候、デウスを背き奉りたる事に拘らず科に落てハヲイゾの樂を失ふ、さあれはインヘルノの苦を不受して不叶と、悔かなしみて後悔仕候を、アチリサンと申候

一コンチリサンと申事御座候、是は万事にこえて、御大切に可事存、デウスの御内證を背き奉る事を、深く悔悲、ハライゾの樂を失ひ、インヘルノの苦みを受所に拘らず、デウスを背き奉りし事を後悔仕を、コンチリサンと申候、

一ゼスウハデウス、此世界へ天下り、人界を受玉ふ人となり玉ふ所を、ゼウスと申候、則御助と申事にて候、ゼウスマリヤ、是はゼスウス御母、サンダマリヤの事にて御座候、

一ホロヘイタラウス、未來可有事を、兼て宣置玉ふ事を、ホロヘンヤと申候、又御告を、未來可有事を、兼て云置かるゝ人を、ホロヘイタと申候、

〔西洋紀聞下〕其徒受戒の時、必らず授水の儀軌あり、これイエズス殺されし時の血をもて、一切の罪惡を祓除するの義也といふ、たゞし其事佛氏灌頂の法に相同じき歟、ツラツテといふは、ジルエウステル隱れ居し山の名といふ、

〔長崎港草一〕砕邪建梵刹

大閤秀吉公、禁僧ヲ禁ジ玉ヘドモ、商賣ノミニ來レル黑船ハ、不苦トアルニヨリ、加里用多船トテ、年ゴトニ來リヌレバ禁僧モ忍ビ忍ビニ渡リシニヨリ、慶長十九年春ノ末ツカタ、伴天連ドモ長崎町中ニ充滿シ、鬼利支丹ヲ引連々々、町中ヲ廻リケル、其樣記スモ淺猿ケレドモ、古キ書ドモノ中ニアルヲミテ爰ニ載ス、其中ニ七八人モ、一鎌ニ首枷ヲ入ラレテ通リ、又ハ苞ニ捲レ、劑木ニ縛ハレ、板ニ狭マレ、大ナル綱ニテ卷レ、又ハ縛リ搦メ、破竹ヲ以背ヲ敲キ、或ハ木石ヲ背ニ負ヒ、遣廻

法具

ルモアリ、石ニテ胸ヲ打破リ、朱ニ染ミテ通ルモアリ、足枷ヲ入ラレ、一足モヒカザルモノアリ、生ナガラ磔ニ乗セ、五六人ニテ之ヲカキ行モアリ、此等ヲ名ケテ、テンヘンシヤト云、日々ニカヽルモノヽ通ラザルハナシ、初メハ七百餘人、後ニハヤヽ多クナリ千人ニアマリ、千五百人モアリ、或ハ一日ニ通ルコト、三千人ニモ及ベリ、カク我身ニ、難儀苦行シ、終ニ其功ヲツミ、マリチリニ逢ン爲トカヤ、其出立様々多キ中ニ、サンダアグスヽキ杯ト云寺ノ組合千四百七十餘人ノ内、九百七十人バカリ、右ノ如クテンペンシヤヲウチ、五百餘人ハ、皆悉ク紫ノ衣装ヲ着テ、大ナルクルスヲ作リ肩ニ架ケ、セズヽヲ木像ニ造リ磔ニ架ケ、眞先ニタチ、其次ニサカラメント云テ、印子ニテ二尺四方計ニ、乗物ノ様ニ拵ヘテ中ニ舁セ、町々ノ伴天連ドモ、右左ニ分レテ通ル、サンタマルヤロリ、上ノ道筋ニハ、端物或ハ毛氈ヲ以テ、家々ノ柱ヲ巻キ、五色ノ幟ヲカケ、金銀ヲ鏤メテ、諸道具ヲカザル、五月二十日頃マデ、町々廻リ申コト夥シ、然ルニ六月ニ至テ、長谷川左兵衛下着マシ〳〵テ、此アリサマヲ御聞アリテ、即是趣、江府へ言上アル、

〔西洋紀聞下〕其法衣の名を問ふに、〈〇白石、ヨワンニ問ヒシナリ、〉ルリヂヨと答ふ、これを製れる所の布は、我國の産也、いづれの方にて求得しにやと問ふに、これもマルパルのホンテチリにて買得て、ロクソンに至て、法衣とはなし[illegible]といふ、〈其法衣、ポルトガルの語には、カツパといふ、昔我俗、其製ニ倣ひ、雨衣を作れり、今其製を見るに、今俗にマルガツパといふものゝごとくにして、くびかみの所少しく異也、これを身に披きて、前繋にてボタンといふ物をもて、左右を綴す、其たけ長くして、地を曳くこと三四尺に至れり、本師より以下、其等位の高下によりて、其たけの長短あり、本師のきる所は、特に長くして、地を曳く事数尺、侍者してこれをとらしめてゆくなりといふ、〉

〔西洋紀聞下〕エイズス上天の時、其年三十三、其母マリヤは、六十三歳にして上天せり、〈此徒の念珠コンダツといふ、珠の数三十三なるは、エイズスが年の数に取り、六十三なるはマリヤが年の数に取る所なりといふ、〉

〔吉利斯督記〕一コンタツト申珠数ノ事

三十三ハ、ゼスウスノ御年ノ數、六十三ハサンダマリヤノ御年ノ數、百五十ハサンダマリヤノ十

門派

五ノ観念也、五ツハ至極ノヨロコビ、五ツハ至極ノカナシミ、五ツハ至極ノタノシミ、此十五ヲサンダマリヤノ御一代ノ中ニ御座候、此一ツニ付テ、十遍宛ヲラッショ申候、

〔邪宗門穿鑿之書幷勤方之書〕一デンビリナ、是は科送の時、背中をたゝき申候縄にて御座候、此縄にて、面々の心持次第、たゝき申候、

一コロトン、是はサンフランシスコの門派の者、常に上帯に仕候、日本にては御法度故、腹帯にいたし候、其外の門派の者は用不申候、サンフランシスコの門派は、日本の出家遁世者の様なる者にて御座候故、縄帯仕候、

〔西洋紀聞下〕凡一世界の内にして、をの〳〵其たつとぶ所の教法あり、其宗をわかつに、三つに過ず、一つには、キリステヤン（これエイズスの法也、我俗に、キリシタンといふは、ポルトガルの語也、）二つには、ヘイデン、またこれをゼンチイラといふ、（此法を聞ひしに、此宗には、佛を多く立て、それにつかふる也といひて、其教とするところは、つまびらかならず、）三つに、マアゴメタン（これ、漢に回回教といふものないふ也、）エウロパ地方にして、奉ずるところは、皆是キリステヤンにして、またをのをの其宗派あり、我うけ傳へし所は、カトーリタスの派也、そのキリステヤンより出て、別に一法をたつるものを、すべてエレゼスといふ、（これ、その教の異端なりといふ、）ルテールス、アルリヨ、カルビノ、マニケヲの類、皆是エレゼスとす、ヲ、ランデヤに奉ずる所は、ルテールス、すなはちこれ也、（ルテールスは、人の名也、ポルトガルの語には、ルテロといふ、もとこれキリステヤンにして、後にをのれが宗をたつ、ヲ、ランデヤ人の説を聞くに、たとへば羅師羅あるが如く、其教外の宗見えたり、）アジア地方に行はるゝ所、モゴルの教といふものゝごとき、これを稱して、マアゴメタンとす、（アフリカ地方、トルカのたつとぶ所も、マアゴメタンなりといふ、按ずるに、エウロパ地方、ムスコービヤ、俗もモゴルのごとしといへば、これもマアゴメタンなるや否、其説はきかず、）其以此外、チイナにして尊信する所のごときは、其學稱して、コンフウジといひ、（これ、儒者自然の學也といふ、彼教には、天地万物、みづから成る事なし、皆これデウス造れる所也といふ、まかるに儒には、大極両儀を生大極すなはち理也などいふを、まかにあらずといふなり、）ず、其徒を稱して、アデイエスといふ、（これ儒者の事也、）これ此土におゐて、周孔の道といふもの、即此也といふ、

〔邪宗門穿鑿之書幷勤方之書〕門派

日本へ渡　一コ。ン。パ。ニ。ヤ。　一サ。ン。フ。ラ。ン。シ。ス。コ。　一サ。ン。ド。ミ。ン。ゴ。ス。　一サ。ン。ド。ア。グ。ス。チ。イ。ノ。

學文之事

談議當日

一レトリカは、ダンギにアタル學文に而デウスの御言葉を進め申候詞に而御座候、

一ヒイツソヒヤは、世界に在程の物性儀を、四年の間に知學にて候、

一ロシガハヒロソヒヤ初の年の一年、學文仕儀を、ロシカと申候、

〔憲教類典四ノ十六切支丹〕慶安二己丑年九月八日

今度筑前國大島にて捕候、南蠻伴天連いるまん岡宿白狀之覺、

一吉利支丹宗門に、こんはにやと申派、さんふらんしすこと申派之伴天連、年來日本ヘ渡申候、はつは前にて日本をうばい、公事仕候所、はつは批判にて、日本六十六ケ國を二に分、大坂より東は、さんふらんしすこ、西はこんはにや法を弘べし、日本はつはに隨ひ候はゞ、右之通違亂有之間敷と申渡候由、異國にて、專此沙汰仕候事、○中略

丑九月八日　井上筑後守

〔西洋紀聞下〕はじめシルウエステル、此地を開きしより、今のキレイメンスに至るまで、二百四十餘世、凡一千三百八十餘年、其敎化之主、相繼でこれを稱して、パアパといひ、またこれをホンテヘキスマキスイムスといふ、ヲ、ランド人は、その本主をパウスといふ、パアパの轉語なる歟、按ずるに今の本主は、シルンステルより、二百四十餘世といひ、又十二世ともいふ、これホンテヘキスマキスイムスの號ありてよりは、十二世なるの義歟、其徒をの〳〵位號あり、其上等は、スムテホンテヘキス、すなはちこれ敎化之主也、其次は、カルデナアリス、此位にあるもの七十二人、これエイズスの七十二弟子に准ず、そのバア

パの席をつぐものには、七十二人の中を撰びて、なの〳〵其名を紙にしるし、これを封じ、エイズスの像前にてひらき見て、其名しるせし數おほきをもて、其人とすといふ、其次はエピイスコプス、其次はサチエルドス、其次はリヤアコノス、其次はスブ、チアアコノス、其次は、エキソルチイスタ、其次は、アコーリトス、其次は、ヲスチアーウス、其次はレキトラトス、これより以下、其職掌の名號猶多し、そのエピイスコプスより以下、其數皆定まれる事はあらず、パアテレ、漢には巴禮と譯す、我俗には、パテレンとも、パテレンともいふはこれなり、イルマンなどいふは、其位號にはあらず、エウロパのことばに、父をパアテレといひ、母をマアテレといひ、兄弟をイルマンといふ、されば我たつとぶものは、パアテレともいひ、我したしきものをば、イルマンともいふ也、此土のむかし、其教の師友を稱して、パアテレ、イルマン等の稱ありしは此義也、

〔邪宗門穿鑿之書幷勤方之書〕出家の位の事

一パッパ　後世の道のおしへ總司、六十以上の者罷成候、世界に御一人御座候、　一ガルデアル　常に六十人程御座候、此内より、パッパをつぎ申候、　一アルセイスホ　一ハチリアルカ　一ピスホ　一ノンチヨ　一ハアテレ　此三人は同じ位にて候、是をサセルトラテと申候、　一ケレリコ　一イルマン　是は寺の同宿にて、□□□ミイサおこなひ不申候、　一ヒイテス　心に眞實に請る所を申候　一コヒサン　伴天連にあひ、科ノ輕重をさんげ仕候儀を申候、　一コンセンシヤ　心の事

〔西洋紀聞下〕大西人に問ふに、其姓名鄕國父母等の事を以てす、其人答て、我名はヨワンバッテイスタシローテ、ローマンのパライルモ人也、〇中略我幼よりして、天主の法をうけ、學に從ふこと廿二年、師とせしもの十六人、彼方の學、其科多し、師十六人といふ事は、其學科につきて、なの〳〵師ありしといふ、ローマンにありて、サチエルドスに至り、六年前に、一國の薦擧によりて、メッショナ、リウスになされたりき、サチエルドスは、彼方教化之主よりして、第四等の號、メッショナ、リウスは、彼方弘法の事のために、使たるものを稱する所なりといふ、初本師の命をうけて、此土に來るべき事を奉

りしよりして、此土の風俗を訪ひ、言語を學ぶこと三年、またトーマステトルノンといひしもの、これも師命をうけて、ベツケンにゆくべし、三年の前、二人その〳〵カレイ一隻づゝに乘りつれ、ヤネワを歷て、カナアリヤに至りこゝにてまた、フランスヤの海舶一隻づゝに乘りて、つゐにロクソンに至れり、これよりして、トーマステトルノンは、ベツケンにおもむき、我は此土におもむく、海上忽に風逆し、浪あらくして、船覆らむとせし事、三たびに及びしのち、はじめて此土に至る事を得しといふ、

宗論

〔南蠻寺興廢記〕永祿十二年夏、信長上洛アツテ、京都ニ於テ、新宗南蠻寺、弘法繁昌シテ、門徒群集スルヲ見聞シテ、大ニ悅ビ、近習ノ人ヲ以テ、其新宗歸伏ノ人ヲ近付テ、委ク教諭スル所ヲ聞シ召シ給フニ、諸宗ト反シテ、門徒ヨリ施入ノ物少シモ受ケズ、洛中近國ノ難病大病ヲ引取テ、大分ノ施藥ヲ費スト雖ドモ、曾テ報謝ヲ取ラズ、剩貧窮ノ者ハ、其家內ノ人迄モ助成ヲ與ヘ、大分ノ門徒ニ日々米金ヲ施ス、其敎化セル所、南蠻國ノ大王、仁慈ヲ以テ、天帝ノ法ヲ知ラザル國々ノ窮民ヲ救ハシムト云リ、今アル所ノ佛法ハ、人民ノ施物ヲ以テ相續ス、是惟、未來永劫ノ罪ヲ恐ルヽ計ナレドモ、佛家ノ僧法師、渡世スル所ナリ、夫サヘ近來、北國一向宗門徒ノ者ドモ、宗ノ爲ニ一揆ヲ起シ、加賀一國ヲ押領シ越前モ既ニ是ガ爲ニ破レントス、大坂ノ顯如上人等ノ門徒、皆以テ未來ヲ恐ルヽ而已ナレドモ、身命ヲ拋テ、宗ノ爲ニ一揆ヲナス、今此宗ハ、未來ヨリ先今世ノ高恩ヲ得、殊更未來ノ善所ヲ示ス、殊ニ又門徒ノ施物ヲ、少モ受ケズシテ、本國ヨリ夥ク財寶取來ラシメテ諸人ニ施シ、現世ノ恩澤ニ歸服サスルコト、蠻國異賊ノ企、何ノ爲ゾヤト、初テ信長不審ノ心ヲ發ジ、後來此宗本朝ニ害アルトキハ、信長文盲暗愚ニシテ、邪正ヲ分タザルガ故致ス所ト、末代ノ汚名ヲ呼バルベシ、此宗破却セバヤト思惟セラレケレバ、五月十一日、京都ヲ立テ、十三日安土ニ歸城アリ密ニ內談アリケルトキ、前田德善院法印玄以申ケルハ、最初此宗弘通免許仰付ラレ候節ヨリ、

統、御尤ニ存ジ奉ザル儀ニ候、其所謂ハ、本朝往古ヨリ三教通達シテ、事不足コレナク候、然ニ邪正不分明ナル、新宗御建立ノ義、當時本朝其邪正分明ニ辨別スル者コレナク候得バ、末代ニ至リテハ、御誤有之時ハ、御名ノ出申處不可然トハ存ナカラ、君甚ダ弘通ノ義思召立候義、殊更邪正モ難別候得バ、各口ヲ閉ヂテ不申上候、新宗此節停止ノ儀事及延引、其所謂ハ、近國他國、身命ヲ抛テ信仰ノ門徒多ク、殊更大名、高家、御旗本、大友宗麟、高山右近等ノ如キ、一心不亂ノ歴々モ、多ク相聞ヘ候、然レバ新宗停止ノ儀、率爾ニ被仰出事不可然、不思議ノ内變等計リガタシ、當時ニテハ、高聲ニモ御話談御愼ノ方可然歟ト申ケレバ、伊賀伊勢守傍ニ在テ申ケルハ、玄以申條最ニ候、當時無謂御破却ト候ハヾ、騷動ノ程難計候、諸宗ニ被命、新宗ト宗論有之、僧家勝コト能ハズバ、新宗正法ニ候得バ、今少シ行末ヲ御覽アルベシ、新宗負バ、邪法紛ナキ上ハ、急度停止被仰付候共、聊違背ノ者不可有ト申ケレバ、信長其儀ニ同ジ、諸宗ノ僧家、幷南蠻寺ヘモ命ゼラレ、宗論ノ期日ヲ定メラレケレバ、是ハ大切ノ宗論ナリトテ、僧家ニハ、南禪寺ノ印長老、淨華院ノ理道和尚、永觀堂ノ深海律師、其外諸宗ノ碩學、安土ニ到テ下著ス、南蠻寺ヨリノ論師ハ、新宗後見トシテ、本國ヨリ渡來スル所ノ碩學、普留考務ト云學匠、其外破天連、イルマン、安土ニ到ル、此普留考務ハ、始テ長崎ヘ渡來シ、一年ニ、一切經ヲ三遍熟讀シテ、佛法ニ通ジ、諸宗ノ大概ヲ諳ズ、○中略雙方安土ニ到テ、期日ヲ定メ、其時刻ニ及デ、諸宗ノ僧侶列坐スレバ、普留考務ヲ論師トシテ、南蠻寺ノ學徒出席ス、時ニ普留考務、蜀紅錦ノ衣ヲ著シテ、二尺許ノ劔ヲ帶シテ、向ヒ進ム、僧家ヨリ南禪寺ノ印長老是ニ對ス、時ニ普留考務曰、如何ナルカ佛法、印長老答曰、即心即佛、普留考務又曰、如何ナルカ即心即佛ノ奥意、長老又答曰、即心即佛、其時、普留考務坐ヲ立テ、長老ノ胸ヲツカンデ、劔ヲ拔テ胸ニ押當テ、如何ナルカ即心即佛ノ奥義ト、責掛テ問ト雖ドモ、長老不動、眼ヲ塞テ默然タリ、淨華院ノ理道和尚、コレヲ見兼進デ是ニ對セントス、印長老ノ弟子中、少モ不騷、未ダ落著見ヘズ、暫ク待給ヘト止ム、因茲、理道

駁論

進ムコトヲ得ズ、漸ク有テ、長老眼ヲ開キテ、喝ト一喝ヲ吐ケレバ、普留考務眼ヲ塞テ忽ニ氣絶ス、僧家口々ニ、邪法正法ニ歡セズ、新宗邪法ナリト罵ル、南蠻僧徒怒テ、法問未分、勝劣誰カ知ラント、既ニ鬪諍ニ及バントス、信長、大ニ制止テ曰、宗論ハ邪正ヲ分ツニアリ、何ゾ鬪諍シテ勝負ヲ可分ヤ、違背セバ、夫ヲ以テ劣レリトセントアリケレバ、騷動忽ニ鎭マル、然ル處ニ、攝州荒木攝津守村重、中國毛利ニ與力スト注進ス、信長曰、是急務ナリ、法論ハ邪正勝劣未ダ分明ナラズ、重テ召合スベシ、雙方歸寺アルベシトテ、宗論落著ナカリケレバ、新宗破却ノ沙汰モ止ヌ、天正六年十一月、高山右近歡ニ組シテ、信長ノ命ニ應ゼズ、信長、南蠻寺ノウルカン、破天連ヲ召寄テ、菅谷九右衛門ヲ以テ仰テ曰、抑天帝新宗ハ、我命ヲ以テ廣ク弘通スルコトヲ得タリ、然バ新宗ノ門徒、我ニ對シテハ、身命ヲ捨テモ、奉公スベキノ所ニ、高山右近ハ深ク天帝宗ヲ崇敬スト聞ニ、今却テ我ニ背テ、敵ニ與ス、天帝ハ天地ノ始ニシテ、正直ヲ以テ法ノ本トスト雖ドモ、荒木村重ガ不忠ニ與スルノ條、正直ノ門徒ニアラズ、急ギ高山右近不義ヲ穩シテ、味方ニ來ル樣ニ致スベシ、左ナカランニ於テハ、忽新宗破却シ絶法スベシト、大ニ怒テ仰ケレバ、ウルカン甚ダ惶入、急ギ高山右近ヲ勸テ、信長ヘ從屬セシム、是等ノ故ヲ以テ、信長速ニ新宗破却ノ沙汰ニモ及レズ、兩破天連諸宗ヲ誹謗シテ、佛法ヲ破シ、信長一代ノ間ハ、心ノ儘ニ新宗ヲ弘法ス、

〔羅山文集七書〕示石川丈山○中略

又申覆思之、往歲、難波之役、耶蘇明石某、被召募在城、有長崎大賈村山等安、請潛納兵與糧于城中、以爲小援、願戰勝後廣弘耶蘇法于闔國、聽之、於是村山使其子入城、幸以大神君○徳川家康之威稜、諸軍來屬、墮難波城、翌年焦土自亡、耶蘇共殲、村山梟首、鑒戒惟近、何可不懼、亦是足下所可知也、方今、耶蘇之化、爲邪學者、所在密會、僞書妖抄、倭字漢字、混雜轉寫、不惑文理、然或剞板流布、誑惑士民、更相結習、如同膠漆、識者可以寒心、他後滋蔓發動、蟻同蠅集、如蛾賊米賊水仙豆兵、方臘之徒、淮南之二積、江東之

四果、福建之明教、掲諦齋再出于我朝乎、可大歎哉、可不懼乎、嗟世之匹婦、妬忌最多、耶蘇誑女、以教男不蓄妾不強姦不和姦、故凡婦女悅而信奉之、彼邪學務勸諸方之室家、亦如之云、爾有意者誰不懼焉、耶蘇將觀中華之俗、然恐佛者觝排己、而乃曰、昔入漢明帝夢、則天主也、耶蘇也、謂之釋迦者、譯者之誤也、

〔羅山文集五十六雜著〕排耶蘇

慶長丙午（十一年）六月十有五日、道春及信澄、依頌遊佽、不意到耶蘇會者不干氏許、不干令守長（不干侍者）招三人入室、彼徒滿席、坐定、寒溫已而後、春問、以徒斯（デイス）畫像之事、使彼言之、對語偶突、蓋恐淺近而不言之、又見彼圖模之地球、春曰、無有上下乎、干曰、以地中為下、地上亦為天、地下亦為天、○中略且又終不知物皆有上下之理、彼以地中為下、地形為圓、其惑豈不悲乎、○中略又見彼日月行道之圖、不及一行沈括之萬分、蓋彼潛在大明、見渾天之遺則、而竊摸倣之耳、可咲、又見形如水晶有三角者、掩目見物為五彩、蓋以有稜故為彩也、又見表凸裏平之眼鏡、以是見物、則一物分而為數物、蓋以面背不平故如此、凡如斯奇巧之器、眩惑庸人、不可勝計、王制曰、作奇技奇器以疑衆殺、宜哉、斯語、又見妙貞問答書、是干之所作也、使于讀之、其書設妙秀幽貞兩尼、互問答之、或論釋氏、（十宗之外、加一向宗、日蓮宗至十二宗、）或言儒道及神道、無一可觀者、皆綴和語之卑俚、而浸叫騷罵詈、聞之如蚊虻之過前、豈介於懷乎、○中略春問曰、利瑪竇（耶蘇會者）天地鬼神、及人靈魂有始無終、吾不信焉、有始則有終、無始無終可也、有始無終不可也、然又殊有可證者乎、干不能答、春曰、天主造天地萬物云々、造天主者誰耶、干曰、天主無始無終、天地曰造作、天主曰無始無終、如此遁辭、不辯而可明也、春曰、理與天主有前後乎、干曰、天主者體也、理者用也、體者前、理者後也、春指面前之器曰、器者體也、所以作器者理也、然則理者前、而天主者後也、

〔破提宇子〕夫提宇子門派初入ノ人ニ對シテハ、七段ノ法門アリ、其初段ノ所詮ト云ハ、天地萬像ヲ以テ能造ノ主ヲ知リ、四季轉變ノ時ヲ違ヘザルヲ以テ其治手ヲシル、譬ヘバ一字ノ殿閣ヲ見バ、

其巧匠アルコトヲシリ、家內ニ壁書アッテ其旨ニ隨テ、家中治マルヲ見ル時ハ、必主人ノアルコトヲ知ハ常ノ習ナリ、去レバ天モナク、地モナク、一物ナカリシ空寂ノ時アリシニ、此天地出現シ、天ニハ、日月星宿光ヲ放ッテ、明歷々トシテ東涌西沒ノ時ヲタガヘズ、地ニハ、千草萬木アッテ、飛花落葉ノ節ヲアヤマタザルハ、能造ノ主ナクンバアルベカラズ、此ノ能造ノ主ヲ𠀋(デウス)ト號ストス云ヘリ、

破シテ曰、是何ノ珍シキコトゾ、諸家何レノ所ニカ此義ヲ論ゼザル、有物先天地、無形本寂寥、能爲萬像主、逐四時不凋トモ云、孟子曰、天何ヲカ言哉、四時行焉、百物生焉トモアリ、其外佛法ニハ成住壞空ノ次第ヲ以テ此義ヲ論ジ、神道ニハ、天神七代、地神五代ト神代ヲ分ツ、就中天神七代ノ始メ、國常立尊、國狹槌尊、豐斟淳尊、三ハシラノ神在マシテ、天地開闢シ玉フ常ニ、立テ國ヲ治メ玉フ故ニ國常立尊ト申奉ル、何ゾ提宇子ノ宗バカリニ、天地開闢ノ主ヲ知リタル顏ニ此義ヲ說ヤ、言多キモノハ品少シ、閉口シケル、

提宇子云、此𠀋(デウス)ハ、インビニイトヽテ、始モナク終リモナク、スピリツアルスヽタンシヤトテ、色形ナキ實體、ヲムニポテントテ、萬事ニ叶ヒ、サゼエンチイシモトテ、上ナキ智慧ノ源、ジエズイシモトテ、大憲法ノ源、ミゼリカウルヂイシモトテ、大慈大悲ノ源、其外諸善万德ノ源ナリ、佛神ハ皆人間ナレバ、件ノ德義備リ玉ハズ、生死ヲ受玉ヘバ、ナンゾ天地作者ト云ンヤトナリ、

破シテ云、佛神ヲ人間トバカリ見ハ、無學ノ人ノ邪見、尤モ提宇子ニ似合ザル見計ナリ、○中略日本ハ神國、東漸ノ理ニ依テハ、佛國トモ云ベシ、サレバニヤ、佛ヲ罵辱スル提宇子ハ、當來ヲ待ニ及バズ、現世ニテモ佛罰神罰ヲ蒙ルベキコト、踵ヲ回ラスベカラズ、人ノ名ヲモ知ザル者共ハ、不追欺、看々豐後ノ大友宗麟ハ、佛神ニ歸依セラレシ程ハ、威ヲ九州ニ振ヒ、名ヲ西海ニ飛バセラレシカドモ、提宇子ノ門徒ト成ラレシ後ハ、武運モ忽ニツキ、嫡男義統諸共ニ、日向ヘ打越ヘ、志摩津ト戰

ヒシニ耳川ノ一戰ニ討負ケ、單孤無頼ニ打ナサレ、ホウ〳〵國ニ歸リ、其後ハ、宗門次第ニ衰弊シ、今日ニ至ッテ、累代繁榮ノ豪家ナガラ、子孫ツキテ在カナキカノテイタラクナリ、又小西攝津守〇略行モ、提宇子ノ張本タリシ故ニ、佛神ノ加護ナク、石田三成ガ非道ノ謀反ニ與シ、大路ヲ渡サレ、首ヲ刎ラレ、從類悉ク絶エ、子孫殘ラズ、又攝州高槻城主高山右近〇略次モ、提宇子ノ棟梁タリシガ、其子孫イヅクニカアル、明石掃部モ、提宇子宗ト成テ、家ヲ失ヒ、身ヲ亡シヌ、又京洛ノ中ニ於テ、桔梗屋ジユアント云シ者ノ一類、泉南ノ津ニテハ、日比屋ノ一黨ハ、商家ナガラモ、提宇子ノ大檀那ニテアリシガ、此等ノ一族、多ハ死然ヲ得ズシテ亡ビニキ、此等ノ子孫、今何レニカアル、是皆眼前ニ諸人ノ知所ナリ、斯ノ如キ義ヲキヽナガラ、猶モ佛ヲ人間ナリト云ハ、譬ヘバ釋尊ノ淨飯大王ヲ御父トシ、麻耶夫人ヲ御母トシテ、誕生ノ相ヲ現ジ玉ヒ、鶴林ノ御入滅ヲ唱ヘ玉ヒ八幡大菩薩ノ仲哀天皇ヲ御父トシ、神功皇后ヲ御母トシテ生レ任マス體ノ義ヲ、人間ナリト思フト見エタリ、然ラバジヨセイヲ父トシ、サンタマリヤヲ母トシテ、提宇子ノ本尊ゼスキリストモ誕生スト云フ時ハ、是コソ人間ノタヾ中ヨ、此方ニテハ、人ヲ天地ノ主ジトハセズト云フナリ、〇中略

二段

提宇子云、此砌(デウス)ハ現當二世ノ主賞罰ノ源也、サレバ主ハアリテモ、現在ノ善惡ノ業ニヨリ、當來ニテ賞罰ニ預ルベキ者ハ、何ゾト云フコトヲ知ズンバアルベカラズ、總ジテ色形アル物ハ、人畜草木皆終アリテ、燒バ灰、埋メバ土ト成、後世ニイキ殘テ、苦樂ヲ受ン者ハ何ゾト歎ユベシ、然レバ精魂ニ品々アリ、先草木ノ精ヲバ、アニマベゼタチイワト云、アニマベゼタチイワト云ハ、生成榮枯飛花落葉ノ用ノミ備ヘタル精命ト云フ義也、又禽獸ノ精命ヲバ、アニマセンシチイワト云、アニマセンシチイワトハ、生成ノ用ノミナラズ、知覺運動等ノ用ヲ具シタル精命也、喩ヘバ鳥雀ノ鷹ヲ見テハ、己ガ敵也トシリ、飢渴痛痒等ヲ覺ユル精命ナリ、右二ノアニマハ色相ヨリ出テ、色相ノ

ミニ當ル用ヲナス精命ナレバ、色相ノ四大ニ歸ル時ハツレテ滅スル命根ナリ、サテ人間ノ心ヲバ、アニマラジヨナルト云、此ラジヨナルト云アニマハ、右二ノアニマノ用ノミナラズ、是非ヲ分別スルヲ、ラジヨナルアニマト云也、此ラジヨナルアニマハ色相ヨリ出ズ、却テ色相ヲ制シ、スヒリツアルス、タンシヤトテ無色無形ノ實體ナリ、色相ヨリ出ズト云道理ハ、人間モ色相アル者ナレバ、飢渇寒暑ヲ覺ルハ禽獸ニ違ヘズ、然レバ飢ニ臨テハ食センコトヲ欲スレドモ、並ニテクラハヾ耻辱也ト思フ時ハ、死スレドモクラハズ、又戰場ニ於テ身ハ退カンコトヲ思ヘドモ、透テ後ニ指ヲサヽレンヨリハト、義理ヲ思ヒテ、イヤガル身ニ我ト討死ヲサスルヲ以テモ、アニマラジヨナルハ色相ヨリ出ズ、可ヨリ一身ノ主ト作リ玉フト云處明カナリ、然レバ色身各別ノアニマラジヨナルナルガ故ニ、色身トツレテ滅セズ、後世ニ生殘テ現世ノ業ニ隨テ、永劫不退ノ苦樂ニアヅカル者也、其善所ヲバ、ハライソト云テ天ニアリ、惡所ヲバ、インヘルノト云テ地中ニ在者也、

破シテ云ク、右三品ノアニマヲ擧テ銘々ニ名付、各々ニ之ヲトク、就中人間ノアニマラジヨナルトテ、色身ヨリ出ズ、可ヨリ各別ニ作ラレ、現世ノ業ニ隨テ、後世ニテ苦樂ヲ與ヘラルヽト云フ、アア哀ナルカナ、提宇子ノ眞理ヲ知ザルコト、アヽ悲ヒ哉、吾朝ノ凡夫、此異端ニ惑サラルヽコト、我眞理ヲ說テ汝ニ明セン、總ジテ萬物ニ事理ノ二アリ、適事アレバ此理ナクテ叶ハズ、此理ヲ賦命ト云、千差萬別ノ物アリトイヘドモ理ハ二モナク、三モナク、唯一ノ理也、用ノ差別ハ事ノ品々ニ隨フ、一味ノ雨ハ理、千差ノ器ハ事也、譬ヘバ天油然トシテ雨ヲ降スニ、諸器ヲ出シテ是ヲウタ、雨水ニハ長短方圓ノ相モナク、香臭ノ氣モナク、淸濁ノ義アラズ、甘苦等ノ味モナシトイヘドモ方圓五味香臭淸濁等モ、皆器ノ方圓善惡淨穢ノマヽニ任ス、去レバ賦命モ亦如斯、氣質ノ淸濁厚薄ノ不同ニ依テ、用モ同ジカラズ、何ゾベゼタチイワ、センシチイワ、ラジヨナルナド、其理ヲ各々

ニ分タンヤ、別シテ人間ノ心ハアニマラジヨナルト云テ、各別ノ物ナル故ニ、身欲ヲ制スルト云ヲ、究竟ノ理トシテ、諸家ニハ知ズト思ヘリ、誠ニ管見ノ第一也、儒家ニハ氣質ノ欲ヲ人心ト云ヒ、義理ヲ思フヲ道心ト云、此段に於テ儒門ニモ善盡シ美盡セルコト、提宇子夷狄ノ曲說ノ及ブ所ニアラズ、書經云、人心惟危、道心惟微也ト此義也、サテ佛法ニハ心意識ノ三ヲ擧テ論ズルコト精シカラザルニ非ズ、不起一念ノ處ハ心王不動ノ妙體ナリ、一念ノ私欲起ルハ意也、猶モ綠紅ト細ニ工夫スルヲ識ト云、譬ヘバ同ジ火ナレドモ、火焰燼ノ三ノ如シ、去レバ、是程諸家ニ云盡シタル義ヲバ知ズシテ、珍シ顏ニアンマセンシチイワノ、アニマラジヨナルノナド、、唐人ノ寢言ノヤウナル事ヲ云テ、愚人ヲ誑カスハ曲事ナリ、猶又アニマラジヨナルニハ、今生ノ業ニヨリテ、後生ニテデウス苦樂ヲ與ヘラル丶ト云、カ丶ル無道ヲ行スルデウスト云フヤ、人主ニ於テモ知ルベシ、○中略然ルニデウスハ誰ガ頼ミ、誰ガヤトフトモナキニ、無量恒沙ノ人ヲ造リ、地獄ニ墮シ、一日一月ノ間ノミカ、不退永劫ノ苦ニ苦ヲ受カサネサスルヲ、大慈大悲ノデウスト云ハンヤ、大慈大悲トハ、樂ヲ與ヘ、苦ヲ拔クヲ云フゾ、

〔破提宇子〕破提宇子月

華頂山文庫藏弆古本一冊子、題曰破提宇子、巴毗弇者所著、巴毗弇未詳何許人、元和六年庚申春所撰也、蓋學耶敎者、捜盡彼奸情、而轉破之也、雖文藻不甚醇粹、持論快暢、確乎不可拔、借彼矛攻彼盾、直令邪徒結舌矣、按、元和六年爲明萬曆四十八年、是時未傳明人闢邪諸集、徐氏破邪集成於崇禎十二年、鍾氏闢邪集成於十六年、後于是書凡二十餘年也、然則是書皇國闢邪之祖、而非襲明人之論、可謂不愧三眼之名矣、○中略　戊辰○明治元年　仲春、題于華頂峯忠岸精舍寓廨、

杞憂道人○徹定識

〔對治邪執論〕原夫天文末、有商客從西夷盡哆俚夜國浪魔京來、○中略　其後歷三十年、頗天連十一人、乘商

船來于肥前國平戶島、○中略然後、或擇門下生之有才能人、或取出家人之無道服者、與實祿、令渠僞聞釋門名相儒林初學及神道祭祀之法、而後作出宴假、令渠說法要、於是設虛妄手段、誑詑諸人、先不露自法之理路、不謗他宗之教門、只以布施愛語、令人懷其恩惠、而後時時出數言、潛讃自法、暗謗他宗、到其聽法人半信半不信之時、告其人曰、請聽取喜利志祖宗旨之勝劣法門之根源、若我法不相應汝心、可守汝本宗之旨、若也會得我宗本源、可歸我宗門、其人曰唯然、願樂欲聞、於是號甚深秘法、堅鎖門戶、不令他人聞法理、猶說法要者一七箇日、先稱初日號善知識與談議、此翻他宗、然而排斥三教、凪倒諸神、就中、謗釋門者爲甚切、○中略

評曰、○中略竊以、是寸須爲人也、膽大蟲心、虛妄巧見、雖歸釋氏、只學其名相、不到其究去、僞稱釋氏法相、還作外道邪見、或改其名而執其實、或同其事而異其理、故改梵天王名泥烏須、改諸梵王名安助、改天堂名頗羅夷曾、改人道名附婁伽倒利夜、改地獄名因邊婁濃、改灌頂名婆宇低寸茂、改懺悔名混毘三、改十善戒名十麻駄兎徒、改丘尼名毘婁善、改錫杖名惠寸苦茂儀阿徒、改地餅林藤名麻三墓、改數珠名混多須、取罪人死骨名名苦利喜物、擬佛舍利、從是上方過十天、又有天、其名曰頗羅夷會、是指持國天、多門天、廣目天、增長天、忉利天、夜摩天、兜率天、樂變化天、佗化自在天、梵衆天也、自先祖阿段惠和、爲男女始祖、○中略

初日談議曰、夫佛法者、是以無法爲極則、釋迦傳法迦葉、偈曰、法本法無法、若一切皆無、何育天地萬物、是天主泥烏須作天地萬物、且又教世人、大因緣法、而無虛無法、不知此理、故以無法爲宗旨、又大乘、小乘、權實、顯密、說多岐法、令人失途轍迷徑路、今時諸宗法師、皆說妄法誑惑男女、宗途雖多、先擧三宗、日蓮宗者、歸依釋迦佛、受持法華經、只唱題號、欲因此功力死後生寂光土、是愚之甚者也、夫釋迦者、中印度淨飯王子、卽是人也、以其人何能得救人乎、加之釋迦有五百大願者、是對天主泥烏須而所立之誓願也、夫有能願之人者、因有所願之主也、若無能受之天主、何有所立之願乎、世人不知此理、深可思之、

受持經卷、何足用哉、除上天頗羅夷會外、別無安樂處、何寂光之有哉、念佛宗者、賴彌陀佛、口稱名號、欲由此功德力、生西方淨土、此義不然、無量壽經略曰、昔有國王、棄國捐王、作沙門、號曰法藏比丘、在世自在王佛所、建立四十八願、修淨土之行、莊嚴佛國、所願成滿、安住西方、而後號阿彌陀、是亦人也、世自在王者是何乎、天主泥烏須作天地世界、生有情非情於天地世界、現大自在身、是故稱世自在王也、西方淨土者、下界之人間世是也、念彌陀願西方、人愚之至也、禪宗者、世尊拈華、迦葉微笑、敎外別傳不立文字、直指人心、見性成佛、謂之最上乘禪、雖然比天主無始無終、則只是過高之言說、虛無宗旨、僧問趙州、狗子有佛性也無、州曰無、此一則此語頭、釋迦一代極妙、諸佛頂上宗旨、尺以無一字答他問頭、是何謂乎、不知有泥烏須、故說自悟成佛者、虛妄之法、若不憑泥烏須、何得天上快樂乎、又神祇者、人死而後、其靈魂作怨靈、而感動人、崇其靈、以爲神明、或畜生之靈、有憑人之時、祀其靈以爲神、皆是妄法、人畜之靈、何與好事於人乎、是故、破壞社堂、燒却佛神者、皆是奉泥烏須之大勳功也、

評曰、○中略竊佛與竊神道、假詞擊難、辨駁繁端、卑省聖賢、罵倒佛神、焚燒經像、破壞社堂、引誘多方、蠱于邪見、令凡夫親附于我一法者、是何謂乎、無他、爲欲假衆力奪國位故也、原邪宗起本、全非後世事、只謀計法而已、具見邪書、卽是五逆罪人也、豈免三途苦乎、諸人若不信此語、看今時於本朝羅王難者千萬記取焉、抑言喜利志祖宗者、賴泥烏須而死、後生頗羅夷會、作不滅身、受無量快樂也、從是上方過十天、有天、名曰頗羅夷會、其天有主、曰泥烏須、卽是無終尊體、天地萬象之作者、智慧之源、慈悲之源、憲法之源、萬德之主、自在之身、謂之須昆利都體、此翻不生滅也、先作數多安助、而備常隨給仕、其中有首長名曰輿須邊留、具萬德得自在者、與泥烏須一般、於下界衆生、以其子孫故、作生老病死身也、從泥烏須造天地已來、歷六千年、而後是時喜利志徒生、自曰、我是頗羅夷會之主、無始無終之尊、造作天地、建生萬物、頗羅夷會化身、爲救衆生之後世、假降生世間、隨我敎一類天主者、縱罪惡如山、卽便消滅、天主與之天堂之樂、雖然修行有淺深、而苦樂亦然、其深有四、一者歸他宗門、求後世人

不能生彼天、空墮因邊婁濃、除泥烏須外別無世界主、故二者雖歸喜利志祖宗旨、修行不成滿、不受泥有須許可者、不得直生彼天、先在踏婁加到利夜、受苦者輕微而無快樂、在此處盡劫數、盡其業因而後受泥烏須之許可、生彼天、受快樂、三者修行成滿而受天主許可者、直生彼天、坐寶殿、被自然衣、食不死菓、作無始無終身、受大安樂也、四者因國法禁制此宗之時、不改宗旨、不惜身命、逢麻婁遲僞而死人、不拘修行淺深、不待天主許可、徑生頗羅夷曾、得安樂、又有天地滅盡時、名曰濡夷曾是羅婁、此翻普同、推明劫末之時、天主指揮燒却天地世界、滅盡有情非情、然後諸人再活、又作本形、生善處人自光自照、墮惡處人皮骨連立、然後皆集會濡泥預國茄畢谷、天主降生而引善人安右坐、引惡人安左坐、而分善惡、定輕重、惡人永墮因邊婁濃、受苦患、善人從天主生頗羅夷曾受快樂、昔日喜利志徒於濡泥預國是婁坐連京邊、說此法時、歸人此宗門人如雲霞、十駄須起疾妬心、往是婁坐連、告守護彼羅阿士須曰、喜利志徒說邪法惑亂人民、請誅此人焉、守護卽遣軍兵捕喜利志徒於伽婁和利須山、掛十字架刺殺焉、喜利志徒曰、我爲救衆生之後世、甘心捨身、懸十字架、代衆生受苦惱、以贖其罪矣、其後歷七日再活、有種種奇特、因玆諸人恭敬無限也、其後生身而昇天上去、然則除此法外、別無救人之道、今生一夢中早可歸此宗旨、說此法時、其聽法人請歸宗門、於是頗姪連行授之法、始作宗徒之人、額上置白手巾、持蠟燭、口中入鹽、而頗姪連取水灌其人頂上、有誦文、又入頗姪連室、投懺悔、此時與小麥餅受之食、又與蒲萄酒受之飲、其後逢司頗姪連、其時司書十文字於其人額、取油塗其人頭、用手打其人右面、然後日用中所作行法、逢茶飯時、以手覺十文字而飯食、又打背後出血、以此功力滅除罪障、又朝暮持數珠、唱於揀諸、頸掛苦利喜物、其外有種種別行、又有令人決定一心於此宗旨之敎、名曰非爲姪須、縱大世界石有銷日、我一心終無變易矣、記一念時、取峯作谷、取海作山、事不難、書此意趣而押血判、以納奕連邪、此翻寺院、又令人起志願之敎名曰我羅左、此翻合力、依國法禁制此宗門、其時非爲姪須堅固之人、歸一心於宗旨、捨身命於世間、或受倒懸之苦、或逢猛火之

責當時片時中、一心念天主受呵責忍苦惱、卽天主代其人、合其力受苦、是故其人苦惱頓脫、剎那頃生天上、受快樂、故逢麻裏遲便而死人、縱雖殺君父、無罪、蒙天主許可、故從是寸喜利志徒建立此宗門、至今茲正保五年、凡千六百四十七年也、

評曰、先押喜利志祖之字者、因邪宗之意樂、因蠻語之韻律、直將西洋語厭寫作東土文字、蓋原彼宗起本、只喜物之利于己、深志人之祖十字、故押此文字也、詩曰、南箄不祖左邊袖、四老安劉是滅劉、故初譯天名頗羅夷會、改梵天王名泥烏須、十天說見于上節、喜利志徒竊最勝王經所說天主敎法、而惑愚民、黨于邪見者明矣、○中略　泥烏須無風起波、作天地萬象加之作裏須邊留、而不知作自己之怨家、豈得謂智慧之源乎、造天堂地獄、生苦樂憂喜、而令人受其苦惱、豈得謂之慈悲之源乎、汝云、有人罪惡如山、但一歸天主罪、卽消滅、天主與之天堂之樂、不知信向者、雖聖賢、猶入因邊裏淺矣、豈得謂之憲法之源乎、大千界內、有無量國土、其中歸依泥烏須者、只西洋僻地人民之巳、其餘國人不聞德聲、況於其信向者哉、且又其所造之物、皆不得其正、豈得謂之萬德之主乎、不能化大千世界衆生、不能主宰一形軀、作泥預一罪人、而掛剎於十字架而死、豈得謂之自在之身乎、若實有泥烏須、造天地萬象、是招過及身者也、據實言之、則何有如是事乎、皆是喜利志徒臆說者必矣、汝若謂如人之作物、因時之變、隨物之緣、而其所作物不得其正、不若其意者、卽是因與像相違、若能作者天主、與所作之人、同其工巧、豈得謂之天主乎、三身壽量無邊經曰、妙覺地毘盧遮那、承無始無終一心一念、本佛說法、汝云、天主則無始無終、而爲萬物始焉、便是喜利志徒妄執無始無終、爲天主、邪見根原矣、○中略　喜利志徒、全不省天地萬物備于自己、而自己與天地萬物、具足無始無終、本來者一箇子、向天地萬物之外、妄執有一天主獨具無始無終、誠爲邪見外道也、蓋萬物既有最初始生之時、則最初始生之前、無有萬物、既無有萬物、則必彼時天主能生之功、亦必有滅有終、以因天主能生之功有滅有終、故顯萬物最初始生之前、無有、既彼時無有能生之功、又無所生之物、則無有天主、唯混沌空晦而已、○下

○按ズルニ、此書ハ京都南禪寺ノ僧宗嵩ノ著ナリ、

〔護法資治論 一〕明之末有謝肇淛者、著五雜組、以西洋琍瑪竇之法、爲超於佛、何其惑之甚哉、渠小智偏見、不知大道、自不能辨善惡邪正、五雜組曰、有天主國、更在佛國之西、其人通文理、儒雅與中國無別、有琍瑪竇者、自其國來、經佛國而東、四年方至廣東界、其教崇奉天主、亦猶儒之孔子、釋之釋迦也、其書有天主實義、往往與儒教互相發、而於佛老一切虛無苦空之說皆深詆之、是亦排楊之類耳、琍瑪竇常言、彼佛教者竊吾天主之教、而加以輪廻報應之說、以惑世者也、吾教一無所事、只是欲人爲善而已、善則登天堂、惡則墮地獄、永無懺度、永無輪廻、亦不須面壁苦行、離人出家、日用所行、莫非修善也、余甚喜其說、爲近於儒、而勸世較爲親切、不似釋氏動以恍惚支離之語、愚駭庸俗也、其天主像乃一女身、形狀甚異、若古所稱人首龍身者、與人言、恂恂有禮、詞辯扣之不竭、異域中亦可謂有人也已、後竟到於京師、其徒曰龐迪峨、是輕視佛教之過也、渠不知無苦可捨、非空即空之深義、漫指以爲苦空支離之語、渠不知報應影響唯心所造之源本、濫唱以爲惑世駭俗之說、渠不知天堂地獄、共是變易無常、佛之法身般若解脫三德、圓妙可以濟度焉、孟浪而言、永無懺度、永無輪廻矣、且彼天主女像異狀、豈比佛之相好圓滿具足哉、琍瑪竇等所得見解、豈侔馬鳴龍樹哉、若言彼佛教竊天主之教、而加以輪廻報應之說、最可笑者也、佛教漢已來其傳久矣、竇等之法於古無有、初聞于明季、不辨其久近、亦甚戾矣、謝氏博洽、何昧道理如是乎、愚○森俞謙書閱廣百川學海、有竇所著交友論一卷、甚重朋友之信、夫朋友者、五倫中之一倫也、豈可輕餘四倫而偏重朋友哉、是無他、欲堅固約束、遂結徒黨也、未必讓後漢黃巾賊之變、靈帝中平元年、鉅鹿張角奉事黃老、以妖術教授、衆共神之、徒衆數萬、皆著黃巾、以爲標幟、時人稱之黃巾之賊、京師震動、皇甫嵩朱儁曹操等共伐之、遂破之、見後漢書、起元魏狂藥僧之妖、元魏宣武帝延昌四年、冀州沙門法慶、以妖幻惑衆作亂、以尼惠暉爲妻、自號大乘、又合狂藥、令人服之、父子兄弟不復相識、唯以殺害爲事、詔光祿大夫元遙討平之、見通鑑、大致禍亂、荼毒黎元、噫外道邪法、害政傷民、可惡之最大者矣、觀夫西天高僧越葱嶺、渡流沙來遊東土者、穎悟秀發、操履清白、其平等大慈、非墨子之兼愛、閑思修慧、非楊子之爲我、曾無變詐詭譎之行、豈有覇者功利之術、西僧德行詳見高僧傳、後漢已來、尋來甚多、法義同途、轍紹述無紊亂、豈可與彼西洋外道同席而談哉、吁謝肇淛之謬誤、不可不禁呵焉、儒者彼西洋外道耶蘇之徒、駸駸然來誘化吾民、偏邪樹黨構成宗門、其心思欲廢毀神祠、隳寺破僧、毀像焚經、勸獎吾民、爲己門徒、

不用刃而竊行大事、嗚呼可畏之至、無以加焉、幸而東照神君〇徳川家康崇正法、嗣君〇徳川秀忠相繼守文由正、遂禁彼耶蘇、兒類蕩盡、可謂貽峻功於萬世者矣、蓋釋氏之徒、而偏邪樹黨者、皆同外道、馭世君子、嚴禁遏之可也、

〔辨妄〕辨妄二〇中略

猶太國有耶蘇基督者、祖述耶和華之教、以君父爲假、其眞君眞父則在天、耶和華是已、而己即其愛子、天主特降己以教世、故愛己即愛天主、而天主賜之不死之榮不弊之冠矣、何以謂君父假也、父母能與我肉身、而不能與我靈、君能死生我肉身、而不能死生我靈、肉身假也、靈眞也、尊眞卑假、天之道也、故其設教也、使人疏其父、女疏其母、婦疏其姑、然知骨肉之愛不可得而絕也、又粗以愛父母立說、而恐其愛之過於愛己、乃又曰、愛父母過於我、不宜乎、我愛其子女過於我、不宜乎、我耶蘇方與衆語、其母與兄弟立於外、欲與之語、或告之、耶蘇曰、何者爲我母、何者爲我兄弟、蓋欲示其徒以至公、而不知自陷於悖逆也、其徒有父死者、請往葬之、耶蘇不許曰、爾從我、任夫死者葬其死者、言父與葬父者、同期於盡、爾從我、則其靈永不死也、至君人者、則眇然邈視之、未嘗說所以事之之道、不唯未嘗說所以事之之道、國君有不信己者、稱之爲敵、必欲克之以令服從於己、而鄙視稅吏、與盜賊同、溯其源、則是鄙視其君也、蓋彼自稱爲天主之子、則天下無尊於己者、其蔑視人主固宜、故其徒士北拉魯答諭己拜王者曰、我不知地下王與神、唯崇拜在天上帝、我以大道所積之金輸稅與王、尊之爲主、而不向之屈膝、是以輸稅爲主、爲己施恩於君也、嗚呼、聖人以忠孝立教、當道之不行也、猶有弑君與父者焉、今也以君父爲假、別有眞君眞父尊於君父者、以耶蘇之故獲罪於假君父、眞父深愛之、爲之增天上之榮、其受罪益甚、榮之益大、以此導民、民無復所畏憚、凡可以利己者、何事不爲、是以奉其教者、事背君父不敢違耶蘇之教、事害肉身百年之命、不敢失天上無窮之榮、蠱惑至此、刑罰不足以威之、爵祿不足以勸之、爲之君父者、不亦難乎、

〇按ズルニ、此書ハ安井息軒ノ著ナリ、

又按ズルニ、此他耶蘇教ヲ駁シタル書ニハ、鈴木正三ノ破鬼理死端、森尚謙ノ護法資治論、大橋順藏ノ闢邪小言、會澤安ノ闢邪篇、富樫讓ノ破邪編、僧超然ノ斥邪漫筆、寒更霰語等有リ、

古事類苑

宗敎部七十一

耶蘇敎中

〔破邪集 一〕破邪集序

邪敎之入神國、豐臣太閤固嘗禁絕之、東照宮固嘗驅攘之、台德〇德川秀忠大猷〇德川家光二公、皆善繼善述、而寬永之亂發於至治之日、時人或以海隅小寇目之、而逆鯨所鼓、鄰境皆靡、西海爲之震擾、其禍大矣、然聚邪徒於一城而殲滅之、不可謂非天意、厥後禁令益嚴、邪徒或有來者、殺其人火其舟、使蠻夷永絕窺窬之心、比之西土明末僅能驅逐而不能掃蕩者、不啻霄壤、可謂偉矣、至常憲公〇德川綱吉時、海外頗有輸妖邪之書者、賴當時能辨其奸、不得逞其害、〇中略

安政乙卯〇二年陽月初五　源齊昭

〔南蠻寺興廢記〕天正十年六月二日、信長公御父子、明智光秀ガ爲ニ、京都ニ於テ殃死アリ、羽柴秀吉不日ニ上洛アッテ、光秀ヲ退治シ、柴田ヲ討テ天下ノ權柄ヲ執ラル、サレバ南蠻寺新宗門ハ、永祿十一年ヨリ天正十三年マデ、前後十八年ノ間繁昌セリ、然ルニ今年天正十三年、秀吉俄ニ此宗門ヲ破却セラレケル、其故ヲ尋レバ、此年天正十三年ハ、秀吉大坂ノ城ヲ築キ、關白ニ任ジ、北越ノ佐々ヲ伐ツナリ、秀吉公ノ近習ニ、中井修理大夫ト云者アリ、渠ハ元來中井半兵衞ト云工匠ナリ、秀吉公ノ大坂ヲ始、處々ノ普請ノ評議相手トシテ、晝夜傍ヲ去ラズ勤仕ス、宿所ハ淀ノ城下ニ在テ母ヲ置ク、自分ハ天下ノ大工頭ト成テ、威ヲ工匠ノ徒ニ震フ、爰ニ南蠻寺ノ破天連、イルマンノ徒ハ、信長一代ハ、開宗ノ大檀越ニシテ、心

ノ儘ニ弘法シケレドモ、今ヤ秀吉公天下ノ權ヲ執テ、一言以テ天下ヲ動カサズ、何トゾ秀吉ニ親ク馴睦シ奉リ、宗門無障弘法セバヤト、種々ニ智略ヲ廻ラス、然ルニ此修理大夫ハ、晝夜秀吉ニ隨順シテ、傍ヲ不離ト聞バ、如何ニモシテ、修理大夫ヲ宗門ニ歸伏サセ、夫ヨリ秀吉公ヘ執リ入ラバヤト計謀シ、〇中略然ルニ、中井修理大夫、秀吉公ノ暇ヲ得テ、宿所ニ歸リテ母ニ對面シ、南蠻寺ノ梅庵ガ始終ノ樣子ヲ具ニ承リ、如何樣用アリゲニ聞請ケレバ、秀吉公ヘ參リ、其始末委細ニ是ヲ言上ス、秀吉前後ノ洒落ヲ尋問アツテ、後發頓知ノ良將ナレバ、忽ニ了察シテ曰ク、信長ハ開宗弘法ノ大檀越ナリシニ、不慮ノ殃死アリ、今我天下ノ權柄ヲ得タレバ、渠弘法スルトモ、予ガ思慮ヲ悟レ、我ニ親ミ近付ンコトヲ欲シ、汝ガ我ニ昵懇スルコトヲ知テ、先財寶ヲ以テ、汝ガ母ヲ宗門ニ歸伏サセシメ、夫ヨリ傳々シテ、汝ヲ門徒トナシ、汝ヲ以テ我ニ近付親マント、計謀ナシタルコト必セリ、抑佛法ノ說法敎化ハ、誰レ云所モ同事ト雖ドモ、其人ノ道德ニ因テ、人信ジ道行ハル、南蠻宗ノ如ク、財寶ヲ費シ、人民ノ利欲ヨリ歸伏セシムルコトヲ未ダ聞ズ、今度汝ガ母ヲ親ミ近付ン計謀、誠ニ以テ權ルベシ、後如何ナル害ヲナサンモ計リ難シ、殊更當時大名ノ中ニ、少々信仰スル族モコレアル由相聞ユ、事ユルガセニ計テ、大身ノ歷々、此宗ニ歸伏スル者數多出來タル時ハ、此宗ヲ停止センコトヲ思フトモ、容易ニナルベカラズ、兩葉ノ內ニ、其根ヲ絕ニ如ジ、速ニ南蠻寺破却セラルベシトテ、增田右衛門尉〇長盛長束大藏大輔〇正家ニ命ジテ、南蠻ヨリ渡來ノ者、一人モ殺スベカラズ、搦捕ルベシ、南蠻寺ニテ門徒ニナリ、宗門領分ノ者、一人モ殘ラズ召捕ベシトテ、三千騎ヲ差副テ、南蠻寺ヘ差向ケラル、此時石田治部少輔〇三成小西攝津守〇行長高山右近等宗門歸伏ノ人々、密ニ知セケレバ、寺中騷動不斜、梅庵、告須蒙、壽間ノ三人ハ、口々ヲ差シ塞レナバ、通レ出ルコト叶フマジト、取物モ取敢ズ、梅庵ハ西國ヘ逃下リ、告須蒙ハ遠州ニ智邊アツテ出奔セリ、壽間ハ越前ヘ走テ隱レヌ、兩破天連、兩イルマンハ、手足ヲ置ニ所ナク、惟ダ迷妄シテ居タル所ニ、增田長

東押寄セ、寺中ヲ取リ圍ミ在ル所ノ人一人モ不殘搦捕、秀吉公ヘ奏達ス、秀吉公命ジテ宣ク、往古鎌倉北條ガ時、異國人ヲ誅戮シテ、日本ノ大事ニ及ビタル事アリ、日本ニ住居セザル者、日本ノ罪科ヲ糺スニ及バズ、肥前長崎ヘ送リ遣シ、阿蘭陀船ニ乘セ、再度日本ヘ來ラバ、重テハ斬罪スベシト、本國ニ歸テ申傳フベシトテ歸サレケル、是切支丹最初ノ破却ナリ、南蠻渡來ハ、信長公ノ治世、永祿十一年ヨリ、秀吉公ノ代、天正十三年ニ至テ、前後十八年ニシテ滅亡ス、

〔長崎志　一〕秀吉公被禁邪宗門長崎御料所被仰付事

天正十五丁亥年、秀吉公、島津爲征伐、九州に發向有し凱陣の時、筑前博多に暫く御逗留有之、其頃、長崎之頭人ども、博多へ參上し、御目見を願ふ由、然るに於彼地、御老中に無禮を成せし故、如何成ものぞと御詮義有之處、彼ものどもは、數年長崎之地に、南蠻船を相付、切支丹の邪法を信用し、神社佛寺を破却し、所々取捌をも、心儘に計らふの旨、御聞達し、甚以不法至極なりとて、右之頭人共、即刻被追立、伴天連どもは、早々可令歸國旨、長崎表に、藤堂佐渡守を被差遣、御條目を以て、急度被仰渡之、

定

一日本は神國たる所に、切支丹國より、邪法を授け候儀、甚以不可然事、

一其國郡之ものを近付、門徒になし、神社佛閣を爲打破、前代未聞に候、國郡在所知行等給人、被下候儀は、當時之事に候、天下よりの御法度相守、諸事可得其意候、所々下々として、猥成義曲事に候事、

一伴天連、其智惠の法を以、心ざし檀那を持候ん旨、被思召候所、如右、日域之佛法を打破候事、曲事に候條、伴天連の儀、日本の地には、被差置間敷候間、今日より廿日の間に用意仕可歸國候、其内下々伴天連に不謂族申掛るものあらば、可爲曲事候事、

一黒船の儀、商賣の事に候間、格別の事、年月を經、諸事賣買可仕事、

一自今以後佛法の妨を不成輩は、商人の儀は不及申、何にても切支丹國より往返不苦候條、可得其意事、

天正十五年

〔日本西教史上〕第九章○中略

千五百八十七年天正十五年日本國内ノ基督信者者算フルニ、二萬人ノ餘ニ至レリ、此内、國主、貴族、將校、大臣等ノ貴人アリ、概シテ之ヲ言ヘバ、日本ノ貴人中ノ撰ト云フ可キナリ、關白殿下○豐臣秀吉ハ、聖教ヲ尊敬セル說教者、及ビ之ヲ保護スル所ノ者ヲ寵愛シ、或ハ佛徒ヲ輕視シ、之ヲ其寺院ヨリ放逐シ、殿堂ヲ燒キ、且偶像ヲ毀タシメ、或ハ基督信者タル諸侯ニ與ヘラレタル土地ハ、特別ナル管理ヲナシ、或ハ其臣等ニ洗禮ヲ受ルヲ許可シ、或ハ眞神ノ爲メニ寺院ヲ建設セシメ、或ハ宮中ニ、屢師父等ヲ招致セル而已ナラズ、ガスパル、ケロ師長、船中ニ在ルトキ、自ラ行テ懇親ニ談話セラル、此ノ如ク、師父等ヲ厚遇セラレタルヲ以テ、聖教ヲ奉ズル者ノ員數ハ、日々ニ增加セリ、然レドモ殿下ハ聖教ヲ、毫モ感覺セルコトナク、却テ自ラ神ト爲ランコトヲ欲シ、且歐羅巴諸國ヲ奪領シ、名聲ヲ輝サント欲セル、大望アル人ナリ、○中略當時ノ形狀此ノ如ク、基督宗寺ハ、各所皆無事ナリ、然ルニ、耶蘇ノ名譽ノ魔敵ハ、日本全國ノ改宗セントスルヲ先見シ、叡チ基督宗寺ノ船ヲ、暗礁ニ向テ衝突セシムル所ノ烈風ヲ起シ、是ガ爲メニ全ク破壞セシメタリ、蓋日本ノ基督信者ノ、信仰ヲ試ンガ爲メカ、將タ歐羅巴ノ信者ノ、放蕩ヲ戒メン爲メカ、上帝此災害ヲ降シタルナリ、吾レ今歐羅巴ヨリ、日本ニ貿易ノ爲メニ、渡來スル所ノ商人ノ事ニ付テ、言ハント欲スル一事アリ、此商人等ノ内ニ、度外ノ放蕩ヲ爲ス者アリテ、日本ノ改宗者ニ至ルマデ、歎ズベキ汚辱ヲ與ヘタリ、此不行ハ、晝夜ヲ分タズ、船中ニ婦女ヲ强誘シ、放蕩淆慢至

ラザル所ナシ、是ヲ以テ、日本人常ニ言テ曰ク、歐羅巴僧ノ說法ニ反シテ、其商人ハ法外ノ事ヲ爲セリト、基督會友ハ、歐羅巴商人等ヲ說諭スルト雖ドモ、毫モ其諫ヲ聽カズ、娛樂ニ任ジ、淫放恣ニシテ、師父等ノ在住セザル所ノ港ニ至リ投錨セリ、此ノ不善ノ世評、大ニ流布シタルニ由リ、關白殿下ハ之ヲ傳聞シ、基督法敎ハ、不良ノ敎ナリト想像シ、而シテ師父等ノ信仰ハ、虛飾ニシテ、基督信者タル國主ニ、日本帝國ヲ服從セシムルノ陰謀ヲ爲ス者ナリト信ジケレバ、ジユードー右近高山ハ、基督宗寺ノ、應ニ破滅セラルベキヲ豫知シケリ、〇中略此事ハ、彼ノ關白殿下ガ、自己ノ意志ニ忤フコトアレバ、忽チ威發スル高慢心ニ基ケリ、此時葡萄牙國ノ、非常ニ巨大ナル一船、平戶港ニ來著セル旨ヲ、殿下ニ告グル者アリ、殿下ハ、之ヲ一見セント欲シ、師長ニ乞ヒ、船長ニ命ジ彼ノ巨船ヲ博多ニ回ラシム、船長ハ、師長ノ書翰ヲ得テ、直チニ殿下ノ許ニ至リ、告テ云ヒケルニハ、予ハ殿下ノ尊意ニ從ヒ、彼ノ船ヲ博多ニ廻サント欲スレドモ、奈何セン博多ニ至ルニハ、再ビ大洋ヲ經過セザルヲ得ザレバ、船ト貨物ノ爲メニ、自ラ危險ヲ保セザルヲ得ズ、又海峽狹隘ニシテ、入船最モ難シト、殿下ハ此言ヲ聽キ、了解セル所アルガ如ク厚ク船長ヲ待遇シ、又宮中ニ居合セシ師父ニモ、同ジク丁寧ヲ示シ、同夜忽チ命令狀ヲ師長ニ下シテ云ク、汝等、基督敎法ヲ說ケルヲ以テ、二十日內ニ日本ヲ退去スベシ、否ラザレバ死罪ニ行フベシト、

〔日本西敎史下〕第十一章〇中略

蓋當今ニ至ルマデ、日本ニ於テ宣敎禁止ノ害ヲ釀セシハ、此船長ノ驕慢粗忽ヨリ生ゼリ、〇事係ニ千五百九十六年西班牙國サンヒリップ號船長マチヤス本國歸著之時、茲ニ其仔細ヲ述ン、初メ增田右衞門浦戶港ニ往テ、太閤殿下ノ命ヲ施行スルニ當リ、船長ハ沒收ノ事ヲ止メントシテ、西班牙人ハ日本ト互市ヲ行フノ權ヲ授ケラレシヲ述ベ、百方之ヲ拒ミケレドモ、增田ハ狡猾ノ人ナレバ、暫ク應答セシ後、談ヲ他事ニ移シテ云ク、西班牙人ト葡萄牙人ハ、國風同一ナルヤ、又白露、ヒリピン、東印度、西班牙ヲ

領スル王ハ一人ナリヤト、船長答ヘテ云ク、西班牙ト葡萄牙人ハ、貿易子母ヲ權ル者ナリ、又東西ノ印度（西印度ハ亞墨利加洲ヲ云ヒ、東印度ハ乃チ天竺地方ヲ云フナリ、）ヲ領スル王ハ一人ナリト、且日本ヘ其國王ノ強大ナルヲ示サン爲メ、地圖ヲ出シ、之レニ服從スル諸國ヲ一々ニ指點ス、增田ハ、西班牙王ニ屬スル土地ノ廣大ナルヲ見テ大ニ驚キ、又問ヒ曰ク、如何ナル計略ヲ以テ、此諸國ヲ征服セシヤト、其時船長ハ甚ダ虛誕狂愚ノ答ヲ爲セリ、其語ハ、船長ノ云フ可キ言ニ非ズシテ、甚ダ信ジ難ケレドモ、日本紀行ニ載セザル者ナシ、因テ此ニ記載ス、云ク、我國王ハ、數多ノ宣教師ヲ諸國ニ派出シ、奉教ヲ說カシメ、異教ヲ奉スル者ヲ、多ク化セシ後、兵ヲ遣ハシ奉教人ト合併シテ、其國主ヲ討滅シテ土地ヲ奪フナリト、增田及ビ此座ニ列セシ土佐ノ國主ハ、此語ヲ殿下ニ報ジケレバ、殿下ハ忽チ奉教人ノ根ヲ絕テ、其位ヲ安ンゼント欲セリ、抑殿下ノ此心アルハ、今ニ始マルニ非ズ、シモノ國主ハ天主教ヲ奉ズルニ由リ、背反謀リ難ク、且此九國ニ無數ノ奉教人滋蔓スレバ、如何ナル變ヲ生ズルモ圖ル可ラズ、サレバ那古耶ニ出陣ノ時、九州ノ人々ニ兵器ヲ取ラシメズ、且有名ノ諸侯ヲ朝鮮ニ遣ハセシハ、之レヲ彼地ヘ移スカ、或ハ疲弊シテ死セシメント計リシナリ、其後奉教ノ諸侯外國ヘ渡リタレバ、大ニ心ヲ安ンジ、且耶蘇教師モ潛躍シテ命令ヲ奉ズル如クナルヲ以テ、更ニ禁止ノ令ヲ嚴ニセズ、然ルニ今彼ノ船將ノ粗忽ニヨリ、再ビ殿下ニ疑念ヲ起サシメ、益禁止ノ令ヲ嚴ニスルコト、此ノ如キニ至リシナリ、前ニ說ケル諂諛ノ佞臣、ヤクイント云フ侍醫、此機ニ乘ジ、讒言シテ曰ク、天主教徒ハ命ニ背テ日本ニ住シ、公然ト說教ヲ行ヘリ、サレバ彼等ハ我ガ君ニ反シ、說教ヲ名トシテ密謀ヲ企ツル者タルコトヲ明白ナリト、殿下云ク、我之ヲ縊殺、或ハ燒殺セシメ、盡ク夷滅シテ其謀ヲ止メンノミト、

〔耶蘇天誅記前錄中〕耶蘇宗門制禁之大旨〇中略

一慶長初ノ年間トカヤ、吉利支丹宗門ノ勸化、佛法ノ妨碍トナルノ由ヲ、諸派ノ佛宗ヨリ一同ニ

相願フ、其上諸人敎化ノ趣キ、正法ニアラザルノ旨、追々ニ聞召サル丶ニ就テ、今度酒井雅樂頭忠世、安藤對馬守重信、土井大炊頭利勝等、上意ヲ承リテ、耶蘇宗門御制禁ノ趣ヲ、諸國へ相觸ラル、然レドモ嚴重ノ御沙汰ニテハ無リシト云フ、

〔大村家秘錄〕異宗之始終且異說之條〇中略

一其比家士千々石淸左衞門と云者、幼少より彼門弟になり、ろうまに渡り、勤學極奧を究歸朝し、潜に喜前公に語て云、彼宗旨極て邪法なり、表に後世菩提の理を解といへども、實は國を奪の謀なりと、然ども亡父遺骸の導師として、亡魂の祭らしむる處に、其實を糺さず、禁戒も默止がたしとて、天正二年甲戌、猶淸左衞門を案內とし奧義を探るに、淸左衞門が云るに必せり、且家中の風俗自然と法令を受用せず、公務を輕し寺役を專勤む、旁以其邪宗觀察して、喜前公親族家臣等と議して、大村彥右衞門を以、寺々ばてれんを追拂、ばてれん共立腹して怒罵といへども、敢て許容せず、遠に追放し領內邪宗の寺々を一圓に毀之、加藤主計頭淸正に議し、日蓮宗に歸依す、

一慶長十八年、領內耶蘇の徒を禁止する旨達上聞、其謂如何と本多上野介正純命を傳ふ、喜前公其故を悉く演述するの處、邪宗なる事を達台聽、日本一統禁止の命あり（委在二于御附錄一）

一同十九年、崎陽の耶蘇場屋破却の蒙台命、純賴公彼地に赴き、不日に取崩す（喜前公蒙レ命、依レ病、依て、代て勤レ之、委二于御附錄一）

一喜前公耶蘇邪宗の實を糺し、領內彼徒を制禁し給ふを、ばてれん共甚惡レ之、慶長十五年庚戌三月廿一日、筑州博多の寺に會合し、喜前存生に而者陰謀難レ顯し、日本住居成難也、然れば宗旨の大敵は喜前、其根元は千々石淸左衞門也、毒藥を以殺害せんにはしかじと議定して、里庵と云者に委く云合せ崎陽に赴しむ、四月二日、長崎に到り謀計を巡て便を設け、多年を經るの處、諸國一同に嚴く御禁止、是偏に喜前の所爲なりと彌惡みて、毒藥の企間斷なく謀る處に、朝長ミケルと云

者邪宗を深く信守す、故に彼を誑し密に賴て喜前公に毒を與へ、元和二年丙辰八月八日、毒に當て卒し給ふ、其相伴兩輩も亡命す、此暴惡巨細の書簡ばてれん本國に送るの處破船し、此際簡流れ寄て顯然す、且純賴公、元和五年己未十一月十三日、俄に吐血して卒給ふ、群臣怪之、果して耶蘇邪謀なるに必せり、家士及奴僕等に至るまで臍を噬、彼徒を亡主の怨敵とし、採し求て殺害するを以て、亡君の供養とす、

〔白石紳書 六〕一慶長十五庚戌、有馬修理亮、黒船を燒沈む、有馬は大村より兄の家、但し庶兄也と云、同十九甲寅、切支丹寺破却あり、是は大村も家中も領內も、年來此宗門たりしが、此比大村領の切支丹寺破却せしに付、駿府より大村をめして、其子細を本多上野介して尋ねられしに、大村言上せしは、某先祖より小身にて、大國の間にはさまり居候事故、石火矢を武備のたすけのために、南蠻人の宗に罷成候へども、心得ぬ事候故に、一本と申すものを、イタリヤの國ロウマにつかはして、其學を仕らせ候事十二年にて、バテレンとなりて罷歸りて申すに、此宗門心得がたきにつきて、猶又嬉野と申す家人を、呂宋へ遣し置候事三年、二人申す所相同じきによりて、疑を決して、其宗門を改めて、加藤肥後守清正朝鮮陣以來の知音仕候に付、法華宗は、下々の心得をりてよろしとて、上人壹人さしこし候間、それへ口口と申す寺を建立して住持させ、悉く法華宗となし候、同じくは、長崎の寺院をも破却せらるべく候歟、法をすゝめ候處をたて置れ候事、不可然と申すに就て、長崎の南蠻寺を破却せられしと、家には申傳候所也、

〔駿府記〕慶長十八年十二月十九日、伴天連門徒爲可有御追拂、大久保相模守于京都可被遣之旨被仰出云々、

〔異國日記〕慶長十八癸丑十二月廿二日之夜、於江戶新城、大御所様被仰出、伴天連追放之文製之、其夜從鷄鳴至于曙天、文成矣、翌日廿三、獻御前、厥文云、

乾爲父、坤爲母、人生於其中間、三才於是定矣、夫日本者、元是神國也、陰陽不測、名之謂神、聖之爲聖、靈之爲靈、誰不尊崇、況人之得生、悉陰陽之所感也、五體六塵、起居動靜、須臾不離神、神非求于他、人々具足、箇々圓成、卽是神之體也、又稱佛國、不無據、文云、惟神明應迹國、而大日之本國矣、法華曰、諸佛救世者、住於大神通、爲悅衆生故、現無量神力、此金口妙文、神與佛其名異、而其趣一者、恰如合符節、上古緇素各蒙神助、航大洋而遠入震旦、求佛家之法、求仁道之敎、孜々屹々、而內外之典籍負將來、後來之末學、師々相承、的々傳受、佛法之昌盛、超越於異朝、豈是非佛法東漸乎、爰吉利支丹之徒黨、適來於日本、非啻渡商船而通資財、叨欲弘邪法惑正宗、以改域中之政號、作己有、是大禍之萌也、不可有不制矣、日本者、神國佛國、而尊神敬佛、專仁義之道、匡善惡之法、有過犯之輩、隨其輕重、行墨劓剕宮大辟之五刑、禮云、喪多而服五、罪多而刑五、有罪之疑者、乃以神爲證、誓定罪罰之條目、犯不犯之區別、纖毫不善、五惡十惡之罪人者、是佛神三寶人天大衆之所棄捐也、積惡之餘殃難逃、或斬罪、或炮烙、獲罪如是、勸善懲惡之道也、欲制惡、惡易積、欲進善、善難保、豈不加炳誡乎、現世猶如是、後世冥道閻老之呵責、三世諸佛難救、歷代列祖不奈何、可畏可畏、彼伴天連徒黨、皆反件政令、嫌疑神道、誹謗正法、殘義損善、見有刑人、載欣載奔、自拜自禮、以是爲宗之本懷、非邪法何哉、實神敵佛敵也、急不禁、後世必有國家之患、殊司號令不制之、却蒙天譴矣、日本國之內、寸土尺地、無所措手足、速掃攘之、强有違命者、可刑罰之、今幸受天之詔命、主于日域、秉國柄者有年、於玆外顯五常之至德、內歸一代之藏敎、是故國豐民安、經曰、現世安穩、後生善處、孔夫子亦曰、身體髮膚、受于父母、不敢毀傷、孝之始也、全其身、乃是敬神也、早斥彼邪法、彌昌吾正法、世旣及澆季、益神道佛法紹隆之善政也、一天四海宜承知、莫違失矣、

慶長十八龍集癸丑臘月日

御朱印

右淸書者大膳也、將軍秀忠様之御印也、日本國中諸人可存此旨之御諚也、板倉周防守持是上洛

也、追放之總奉行大久保相模守也、相州次之正月三日、立小田原上洛、

〔時慶卿記〕慶長十九年正月十八日、大久保相模守上洛、ダイウス門徒被拂奉行ト、曉ニ北野邊在之寺ヲ被燒捨ト、

〔當代記〕慶長十九年正月十八日、大久保相模守、昨日十七日京著、藤堂和泉守屋形ニ宿ス、京、大坂之伴天連宗迷惑此事也、伴天連師匠寺有二ケ所、右之内西京寺ハ被燒拂、四條町中ニ有之寺ハ厭類火、コボチテ被火付、師匠兩人ハ無構家財、西國へ退、　三月七日、伴天連ノ門派者共、京、大坂在之分、此間大方コロブ、相殘七十人除コロバザル有之、奥州外濱江可有流罪相定、今日出京東下、加州居住高山南坊、去比ヨリ坂本江參居ス、是モ妻子已下十人許、九州長崎江下、　六月、此比伴天連京都ニ蜂起、寺ヲ立、憚無氣色行之、町々ニ訴人多有之ト云ドモ、餘大勢成故、シラヌ體ニテ打置、先十人被行罪者、其妻ヲ取テ、傾城亭主ノ又一ニ被預、

〔細川家記忠興十四〕慶長十九年正月廿二日、長岡右馬助、小笠原民部少輔、長岡勘解由、藪内匠、村上八郎左衞門、牧左馬之允、中路周防、加納曲齋、長岡式部少輔へ被下候御書之内、〇中略

一くるすたみをはじめ伴天連ノはか、國中ニうちくづすべく候、不及申念を入べく候、殘ハ郡奉行に可申候事、

〔駿府記〕慶長十九年六月十八日、松浦肥前守隆信出御前、頃江戸勤御普請、西國平戸吉利支丹可改ノ旨被仰出云々、　八月廿四日、自長崎、長谷川忠兵衞藤繼、茶屋又四郎清次來、〇中略　吉利支丹追放之儀、被成御尋云々、　十月十三日、自長崎、飛脚到來參著、長谷川左兵衞申云、其趣者、去月廿四日、伴天連徒黨百餘輩、并大檀那高山右近□□內藤飛驒守□□、其外長崎中伴天連乘船、于天川遣之由申上、仰曰、御快氣之由可申遣云々、

〔大村家覺書附錄二〕耶蘇宗門御制禁始之事

慶長十九年六月廿一日、山口駿河守重弘鈞命を奉、伏見を出、肥前國長崎に赴、耶蘇宗を制禁し、伴天連、いるまん、同宿等悉く擒之、

同年七月、崎陽の耶蘇場屋破却の台命を蒙り、鍋島信濃守勝茂、寺澤志摩守廣高、松浦壹岐守隆信、有馬左衛門佐直純、大村民部少輔純頼、（丹後守喜前雖蒙命、病に罹る故、純頼代て勤之、）相共に武備を厳にして長崎に到る、（此時長崎中、密に耶宗を信守するもの多し、且南蠻商船長崎に入津して有、是故に一揆蜂起せん事を慮て、多兵を以警固すと云々、）各請取場所を定、一手切に寺を圍み、用心きびしくして取毀す、彼場屋大木を以て丈夫に營構する故、急に難取崩、斯る所に、上使及崎陽吏以爲延引しては虚事あらん事を恐て、毎日巡見し、速に破壊せん事を責はたる、依之純頼家臣大村彦左衛門純勝を以、崎陽吏長谷川左兵衛尉に相伺て曰、民部少輔請取之寺屋材木を不燃バ、速に可取毀旨を達する處に、應材木以後用なし、急に破却すべき旨を命ず、是を以純頼請取の寺此彼挽切、或は斧にて切折大綱を以て引倒し、不日に取崩し燒捨る、上使長崎吏甚稱美す、諸手に令有て、民部少輔作略之通に、各毀捨べしとなり、爾後各崎陽の場屋破却速にして、悉く灰燼す、

〔當代記〕慶長十九年七月、九州長崎古有馬修理男左衛門佐ニ、日向國高橋右近領跡被下間、左衛門佐爲國替相移處ニ、家中者一人も不隨之、伴天連之依爲宗派也、自駿河可有成敗トテ、被遣御使、人數等儀、島津陸奥守以手勢可打果トノ仰也、　八月、此比自九州長谷川忠兵衛（長崎商物糸巻物以下賣買ノ代官）駿府江下、此度來朝黑船伴天連遂侘言如此、以前彼宗派九州ニ有居住樣ニトノ儀ニテ、舟中ノモノ曾不賣買間、カ樣ノ事可有言上儀歟、又ハ長崎有馬家中者共、就成敗爲可得貴意カト云々、

〔長崎港草一〕碎邪建梵剎

太閤秀吉公、蠻僧ヲ禁ジ玉ヘドモ、商賈ノミニ來レル黑船ハ不苦トアルニヨリ、加里用多船トテ、年ゴトニ來リヌレバ、蠻僧モ、忍ビ忍ビニ渡リシニヨリ、慶長十九年春ノ末ツカタ、伴天連ドモ、長

崎町中ニ充滿シ、鬼利支丹ヲ引連々々町中ヲ廻リケル、○中略同年ノ秋、東武ヨリ命アリテ、山口駿河守上使トシテ、下著アリテ、伴天連悉ク捕ヘラレ、彼等ガ建ヲケル寺、十一所、佐嘉唐津、島原、平戸、大村五箇所ノ侯エ命ゼラレ、悉ク破却之、其地ヲ掘穿チテ捨ラレケル、駿河守ハ、夫ヨリ島原ニ到リ、且近國所々ノ切支丹ヲ改メ、歸府セラル、同年九月ニ、長崎ヘ捕ヘ置ク處ノ伴天連、其外所々ヨリ送リ來リシ耶蘇ノ黨百餘人、コトニ高山右近、内藤飛驒守、是等ハ邪宗門ノ大檀那タルニヨリ、同時ニアマカスヘ流罪ナリ、

〔憲敎類典切支丹四ノ十六〕元和二丙辰年八月八日

追て、唐船之儀は、何方江著候共、舟主次第賣買可仕旨、被仰出候、以上、

急度申入候、仍伴天連門徒之儀、御停止之旨、先年相國樣○德川家康被仰出候上は、彌被得其意、下々百姓以下至迄、彼宗門無之樣に、可被入御念候、將亦黑船いぎりす船之儀、右之宗體に候間、御領分著岸候共、長崎平戸江被遣之、御領内にて、商賣不仕候樣尤候、此旨依上意如此候、恐々、

八月八日　安對馬○安藤重信　土大炊○土井利勝　酒備後○酒井忠次
本上野○本多正純　酒雅樂○酒井忠世

〔國師日記〕元和貳年丙辰八月十日、細川越中殿江書狀遣す、

伴天連御領内に、被爲置間敷旨、御觸狀參候由、内記殿より被仰聞候間、好便令滿足、無別條候得共、一書令啓上候、去月二十八日、乍御報申入候、彌此地相替儀も無御座候、將軍樣○德川秀忠御機嫌克被成御座候、可御心安候、拙者儀も、于今當地に相詰罷在候、秋中には上洛仕度と存事に候、○中略尚奉期後音候、恐惶謹言、

八月十日　金地院

細川越中守樣　人々御中

〔武邊大秘錄十二〕京都町中可ㇾ令ㇾ觸條々

覺 ○中略

一伴天連門徒停止之事

右此徒黨頭次第被ㇾ處ニ死罪ー者也、至而嚴重之制法也、自然彼門徒町中に有ㇾ之ば、早速可ㇾ申ニ出ー候、褒美可ㇾ遣ㇾ之、若隱置、他所より於ニ申出ー者、其町中可ㇾ爲ニ同罪ー事、○中略

元和八年戌八月廿日　周防守判

下京年寄

〔采覽異言一〕歐邏巴〕イスパニヤ 和呼ニイスパンヤ、又云ニスパンヤ、　伊斯把儞亞 一作ㇾ西

歐邏巴西方大國也、○中略 遂併ㇾ有南海呂宋國、君民一皆崇ニ信天敎、尊ニ敬其徒、上下悉依ニ敎門ー而行云、

（中略）慶長之初、始通ニ於此、自ㇾ是其來不ㇾ絕、始併ニ得其呂宋、亞墨利加等地ー、蓋此間時事也、其後官禁ニ沮之、以ニ其挾ニ天敎徒ー而來ー故也、寬永元年春、遣ㇾ使來請ニ貿市、官移告卻ㇾ之、是後遂絕、

〔羅山文集五十八 雜著〕肥前國長崎港禁令

一西洋耶蘇會人、載ㇾ渡日本國事、

一日本國兵器、齎ㇾ渡異域事、

一奉書船定額外、日本人渡ニ異國ー事、附投化異國人准ㇾ此、

右所ㇾ定三章、須ㇾ守ニ禁法、若有ㇾ犯ㇾ之、則可ㇾ處ニ重罪、施行如ㇾ件、

寬永十一年五月

〔御禁錄〕條々

一異國江奉書船之外遣候儀、堅停止之事、

一奉書船之外に、日本人異國江遣申間敷候、若忍候而乘來候者在ㇾ之ば、其者死罪、其船幷船主共留置言上可ㇾ仕事、

一異國江渡住宅仕有之日本人來候者、死罪可申付候、但不及是非仕合在之、異國に致逗留、五ヶ年より內に罷歸候はゞ、遂穿鑿候而、日本に留置申付而は御免、但異國へ又可罷歸においては、死罪可申付事、

一伴天連之宗旨有之所へは、南人申遣、可遂穿鑿事、

一ばてれん訴人褒美之事、上之訴人に銀百枚、夫より下へは其忠にしたがひ可相計事、

一異國船申分在之而、江戸江言上之間、番船之事如此以前大村江可申遣事、

一ばてれんの宗旨弘候南蠻人惡名之者在之時は、如前大村之籠江可入置事、

一ばてれん之儀、船中改迄、念入可申付事、〇中略

右可被守此旨者也、仍執達如件、

寛永十一年戌五月廿八日　加賀守〇堀田正盛　豐後守〇阿部忠秋　伊豆守〇松平信綱

大炊頭〇土井利勝　雅樂頭〇酒井忠世

榊原飛驒守殿

神尾內記殿

〔長崎志一〕唐船、長崎一方、令著津、并從日本異國渡海御停止の事、〇中略

一同〇寛永十三丙子年、御奉書到來にて、向後日本より、異國渡海一切御停止被仰出、猶又切支丹御制禁之旨、其外御條目の趣被仰渡之、

〇按ズルニ、此條目、前ニ載スル所ノ寛永十二年ノ條目ト、殆ド同一ナルヲ以テ省略ス、

〔大猷院殿御實紀三十九〕寛永十五年九月二十日、天主教は先々年をかさねて制禁有といへども、いまだ艾夷せず、まして今度、天草の叛民等、その邪教を唱へ、一揆をくはだてたり、今より後は、各國いよ〳〵其禁令を嚴にし、もしその徒を訴へ出ば、其身の罪をゆるされ、褒賜せらるべし、その

制限は、ばてれんの訴人銀二百枚、いるまんは百枚、切支丹は五十枚、亦は三十枚下さるべしとの旨を諸大名在府在封の輩に、なべて仰下さる、旗下の輩にもおなじ、

〔長崎志七〕南蠻船渡海一切御制禁之事

一寛永十五戊寅年、太田備中守、長崎に被差越、向後南蠻人日本渡海一切御制禁被仰出、則在津之蠻船、同出島在留之蠻人共、一人も殘らず、歸國被仰付、向後決て渡り來るまじき旨、嚴しく被仰聞、尤去天正年中、邪宗門は、御制禁にて、商賣一偏に渡來る事は御免にて、猶又去々年より、蠻人を出島屋敷に被差置之處、一圓邪宗門之餘黨不斷絶、剰へ今度島原一揆籠城に及ぶ事なる故、右之通、急度被仰出之よしなり、此時出島明屋敷と成る、

〔享保集成絲綸錄二十一〕寛永十六卯年七月

一太田備中守御前江被召出、御用之覺書被渡下、所謂、

條々

一日本國被成御制禁之きりしたん宗門之儀、乍存其趣、弘彼法之者、于今密々差渡之事、

一宗門之族、結徒黨企邪儀、則御誅罰之事、

一ばてれん同宗旨之者、隱れ居る所江、從彼國つけの物、送あたふる事、

右因茲、自今以後、かれかた〔○印度甲他港〕渡海之儀、被停止之事、此上若差渡にをひては、破却其船、并乘來者悉可處斬罪之旨、所被仰出仍執達如件、

寛永十六年七月五日

對馬守〔○阿部重次〕在判
豐後守〔○阿部忠秋〕在判
伊豆守〔○松平信綱〕在判
加賀守〔○堀田正盛〕在判
讃岐守〔○酒井忠勝〕在判
大炊頭〔○土井利勝〕在判
掃部頭〔○井伊直孝〕在判

〔長崎港草四〕蠻夷誅戮之話

寛永十七庚辰ノ年五月十七日、唐船一艘入津セリ、蠻僧一人、船ヨリ上リ、訴テ云、先年ハ黒船ニテ乘渡リ、心ノ儘ニ商賣仕、其後、加里用陀船ヨリ渡海仕ル處ニ、貴國ノ掟嚴シクナリテ、渡海ヲトヾム、アワレ前々ノ如ク、商賣御免下サルヽニ於テハ、貨物ヲ積乘セ、渡海仕度旨奉願候トノ趣ナリ、奉行馬場三郎左衛門御吟味アリテ、江府エ此旨言上アル、上使加賀爪民部少輔、野山新兵衛、六月六日下向アリテ、上意之趣被仰渡サルハ、先年ヨリ渡海停止、若重ネテ來ルニ於テハ、日本掟ヲ以テ、罪科ニ行ベシト云含メ置ルヽ處ニ、其旨亡却シ、重テ來ルコト、大罪ナルニヨリ、一人モ不殘誅セラルベケドレモ、日本ノ掟ヲ本國ヘ知ラスベキ爲、人數ヲ分チ歸スベシ、然レバ鬮ヲ取リ、其死ニ當ルニ於テハ、死刑ニ行ハルベシトテ、都合人數七十四人ノ内、生鬮十三枚、其餘ハ皆死鬮ト定メラレ、暫ク出島ニ籠置レ、其後日ヲ定メテ鬮ヲトラシメ、則六十一人、死刑ニ處セラレ、十三人ハ助命ニテ、唐船ノ小舟アリシヲ、代銀二貫百目ニ調ラレ、飯米薪水等ヲ與ヘラレ、仰渡サレケルハ、重ネテ日本ノ内、何レノ浦ト云トモ來ルコト勿レ、若此言ヲ不守、來津スルニ於テハ、罪科ニ處セラルベシト云聞セ、七月十九日、歸帆セシメラル、乘來リシ船ハ、七月十六日辰刻ヨリ、スヽレノ沖ニテ、燒捨ニセラル、

〔羅山文集五十八雜著〕諭阿媽港〔代加加爪忠澄〕

夫施政安民者、國家之本也、修文懷遠者、主將之德也、及本朝慶長之初、源大君〔○徳川家康〕之治世、文武兼備、寬嚴相濟、四夷來款、而立市舶司于肥前長崎浦、商賈交易者、往來絡繹、阿媽港之蠻、平素尊天主之教、欲弘其邪法于本朝、比年所來之船中、或雇唐船以載耶蘇之徒、號伴天連者、到于此、蓋是以此教而誘我里民、竊有覬覦本朝之志、故大君震怒、捕伴天連及其徒、悉斬之、磔之、下令禁之、有信其法者、罪及三族、爾來先君〔○家康〕大相國〔○徳川秀忠〕今大君〔○徳川家光〕幕下、三葉之間、最惡徒斯(デウス)之術、制禁益甚、然阿媽

港猶寄事于商賈、匿伴天連于所雇唐船底、來而徵服潜行于群國、以此邪術誑惑唐人、且蠻船寄養其衆、是以其徒連年逢囚繫、或陷大辟、或被焚死者多矣、加之丁丑之冬、彼邪徒蟻集蜂起于肥前島原、廣入邑里、燒家屋、害人民、據舊壘、不急破之絕其根、而使枝葉滋蔓、若有及張魯孫恩之類乎、戊寅之春、凶徒亡滅、斬馘者殆可四萬人、然我騎兵步卒以下、爲彼被殺死者亦有之、然則蠻賊其罪最重、可憎而可嫉之至也、由是、去歲使節到長崎、諭汝國人、向來必無向于本朝、若有再來者、悉殺其船中人、以無孑遺云々、而今背其嚴旨、詐爲乞和平者、重到于此地、官事無隱、假令何變、某等謹奉鈞命、不知其他、不敢赦之、即壞其船、執其徒若干人、梟酋長徇于市、其餘者無少長皆誅之、但船子及醫師者、准彼則其罪輕、且欲令汝國覺知此事、故免其死刑、別造小舟放還之、使此狀告于本國也、凡阿媽港近隣酋長聞之者、宜仰本朝之德、以察武威之嚴也、

寬永十七年　月　日　　加加爪民部少輔藤原忠澄

禁耶蘇狀、諭大明商船、（代井上筑後守）

日本國欽差使井上筑後守政重、告諭大明國諸商船主狀、

一頃年、阿媽港蠻船、託于商賈、來於長崎、竊弘耶蘇邪道、勾引蚩々之氓、我大君聰明英武、早察之、稠禁嚴密、闔國畏服、若有信彼邪法者、發覺、則罪夷三族、然彼船中匿載號伴天連者、來、誣民掠人、故去歲降鈞命、絕阿媽港曰、無再赴于本朝、若有重到、則破其船、誅其人、而無噍類、今茲彼蠻賊不順嚴旨、佯爲乞和者來款、大君震怒、遣使節到長崎、縛其徒七十人、悉皆梟首、燒其船幷器財、沈之于海、是汝曹之所親見之也、自今以往、能守我法、商船往來、多交易、則彼此之利也、

一蠻之自阿媽港來者、既伏其罪、耶蘇之禁彌嚴也、然則彼必不得來、然彼猶欲弘其法、則邪師妖僧、或爲有髮、或爲無髮、或裝唐人之形、或衣日本之服、隱汝曹船底、到于本朝、竊惑愚民、亦不可知也、然其猫眼亢鼻赤鬚缺舌則焉廋哉、欲廋之、則大愚也、大罪也、且又先是我民之入蠻而習彼法、爲妖師者、

蓋可有之、他後以之僞爲日本人、或爲大明人、潛載來乎、是亦不可掩也、如此則汝合船無老弱、皆殺而無赦、且燒沈其船者必矣、問國之大禁而後入者、中華之制而、汝曹所可遵也、謹守嚴制、勿驕于蠻、

一仄聞蠻賊以重賄討汝曹而後竊匿耶蘇妖人于船底、到於我地、而放置之于海岸、僞爲不知所由來者、其然乎、若果然則早到長崎司、當申告之、以汝曹爲忠款、而其恩賜於汝、須多於彼重賄若干也、勿疑焉、若隱而不告、則必誅之、急急如律令、

寛永十七年仲秋日

諭大明商船三章

一吉利支丹以罪惡深重、故其駕船所來者悉皆斬戮、且其徒自阿媽港發船渡海之事既停止訖、自今以後、唐船若有載彼徒來、則速斬其身、而同船者亦當伏誅、但縱雖同船者、告而不匿、則赦之可褒賞事、

一吉利支丹之書札、幷贈寄之物、潛藏齎來於日本、則必須誅之、若有違犯而來者、速可告訴焉、猶有匿而不言者、其罪同前條事、

一以重賄密載吉利支丹之徒于船底而來、卽可早告之、然則宥其咎、且其賞賜可倍於彼重賄事、

右所定三章如此、唐船諸商客皆宜承知、必勿違失、

寛永十八年　月　日

○按ズルニ、憲法類典卷二之二十二ニ、貞享四年十二月、諭唐諸人ノ書ヲ載セタリ、文此ト同ジ、

〔契利斯督記〕定

一吉利支丹事、罪科依爲重疊、乘來族被停止之訖、然上者、自今以後、彼國之輩、唐船ニノセ來ルニヲキテハ、其身事不及沙汰、船中之者悉可被處死罪也、縱同船之ウチタリトイフトモ、申出ルニ付キテハ、科ヲユルシ、御褒美可被下之事、

一吉利支丹ノ書狀、幷コトヅテ物、モチ來ルベカラズ、自然相背族アラバ、是亦可申上、於隱置者、其科可爲同前事、

一屬託ヲ出シ、吉利支丹ノ族、唐船ニノリ來ル事有バ、早ク可申上之、然者科ヲナダメ、爲御褒美、其屬託之一倍可被下之事、

右可相守此旨者也、仍執達如件、

〔契利斯督記〕萬治二亥三月八日、阿蘭陀御暇、同日殿中日記留、

一阿蘭陀カピタン、今日御暇、依之被仰出之儀有之付而、登城、殿上間次之席著座、此時、雅樂頭〇酒井忠清、伊豆守〇松平信綱、豐後守〇阿部忠秋、美濃守〇稻葉正則、大廣間三間江出席列居、時ニカピタン、殿上間ヨリ、黑川與兵衞、幷御目付兩人令案内、板椽之内、杉戸際ニ被候、此節上意之趣、北條安房守へ、老中含之、安房守通事江傳達之、然而カピタンへ通事演達之、所謂、

覺

一阿蘭陀事者、御代々、日本致商買候樣ニ被仰付之、前年長崎江著船仕候、自此以前、如被仰付之キリシタン宗門ト、通用仕マジク候、若致入魂之由、イブレノ國ヨリ申上候共、日本渡海可被成御停止候、勿論彼宗門之族、船ニノセ來リ申間敷事、

一不相替、日本爲商買渡海仕度奉存候者、キリシタン宗門之儀付而、被聞召可然儀於有之者、每年阿蘭陀船渡海之事候間、急度長崎奉行人迄可申上事、

一日本渡海之唐船、バハン仕マジキ事、

以上

右之趣、以通事、カピタンニ相達之、御請申上候旨事、又安房守江演謝之事、終而、カピタン殿上間江退去、其以後、綿衣三十臺載之、進物番持出之、三間敷居際ニ幷置之、重而カピタン殿上間ヨリ、黑川

與兵衛、御目付兩人案內有之、而最前席江罷出、祗候御暇付而、綿衣被下候旨、安房守通事江達之、其旨カピタンニ通事謝之、則カピタン敷居際マデ出座頂戴之、老中江一禮イタシ退去、進物ハ坊主入之、

右被仰渡之席、幷進物置所等、左ニ圖之、○下略

〔教令類纂初集百五〕正德元辛卯年十月

條々

一伴天連、幷切支丹宗門之族、異國より日本江渡海之沙汰、近來無之間、自然相忍、密々差渡儀可有之事、

一先年異國江被差渡之南蠻人子共、伴天連に可仕と企有之由、此以前渡海之伴天連は申候條、今程漸伴天連に可成之間、日本船を作り、日本之姿を學び、日本之詞をつかひ相渡候儀可有之事、

一異國船、近來四季に渡海自由之間、浦々之儀は不及申、在々所々に至迄、常々無由斷心を付、見出し聞出し申べし、縦彼宗門たりとも、お尋申出ば、其咎を免し、御褒美之上、乘渡船荷物共に可被下之、萬一隱置、後日に伴天連、又は同類之輩等捕之、拷問之上は、其隱不有之間、不申出して、相隱輩之儀は不及申、其一類、又は其品に寄、一在所之もの迄、急度可行曲事事、

卯十月　備後　加賀

〔寶曆集成綠綸錄二十〕延享四卯年三月

覺

一阿蘭陀事は、御代々日本商賣可仕旨被仰付之、毎年長崎令着岸候、從此已前被仰出、與南蠻と切支丹宗門之通用彌仕べからず、若致入魂之由、いづれ之國より相聞といふ共、日本渡海可為停止、彼宗門より、日本江之通事、一切不可仕勿論、宗門之者船にのせ來まじき事、

一不相替日本爲商賣渡海仕度存においては、切支丹宗門之儀に付て、被聞召可然儀於有之は可申上、南蠻人宗門之儀に付て、新規に手に入候所々有之候哉、渡海之道筋の儀も、可存候間、及見及聞候段、長崎奉行人迄可申上事、

一日本渡海之唐船、不可奪取之、阿蘭陀往來國々之內、與南蠻人と出合候國可有之候、彌南蠻人と通用不可仕、若出合候國於有之は、其國其所之名具に書記之、每年著岸のかぴたん、長崎奉行人江可差上事、

附琉球國は、日本江相したがふ國候間、何方にて見合候共、彼舟奪取べからざる事、

以上

三月

(譯家必備 二)諭唐山併各州府船主及客目梢等知悉

一南蠻醜類、妄以合種耶蘇、僞立天主敎、煽法惑民、倡邪逆正、罪惡滔天、難以備述、由是本朝歷年嚴加杜禁、勦絕其黨、向有竊附商船而來者、悉經罪誅、仍革阿媽港發舟通商、實爲除其根苗、玆爾唐山及各州府商船、輻輳長崎、計已有年、互相貿易之道、市買之便、各宜愼守爾分、入國知禁、恪遵法禁、勿致毫犯、倘有藏匿邪黨而來者、不獨誅其原惡、禍延船衆、合行同罪、間若知情出首者、非啻免罪、別行厚賞、

一天主敎詭謀百出、恐爲敷敎貽害之便、密附妖書器物之類、隱藏攜至者、原惡處罪有科、仍又將船減壞、沒其貨物、必不饒容、間若稍知而出首者、無論同惡同黨、合炤輕重行賞、

一各船人衆中、或者密受蠻惡賄賂、謀合妖類、誘學唐話、使著唐衣、混載而來、事或有之、爾船主等合就彼地預先查詳、設有一二不週誤載而來、及至洋中知覺、續到長崎之日、宜當速首、則不論同謀及船衆等、曁恕其罪、併行重賞、

以上條款、特遵上令、就委通事等傳示嚴諭如是、爾諸港來商、各宜知愼、毋違毋忽、

右諭知悉

〔日本教育史資料十九項外雑件〕諸國學問所御取建の儀申上

耶蘇教御制禁の儀は、國初第一の嚴法に御座候處、方今萬國一變之時勢に相成、御國にても、魯、亞、英、佛の四國等、和親の御條約相濟、長崎踏繪等も、蘭人願により相罷み候、時勢不得已御儀に御座候得ども、世上にて何となく、邪教御制禁相弛み候樣心得候向も不少被存候、且數ヶ所御開港貿易相始り候得ば、追々夷人渡來、御國民雜居交通致し候上には、彼の尊崇致し候を見狎れ、人々新奇を好候情より、いつとなく彼教に浸淫致し候樣成行候は、必然の勢に御座候、〇中略都て學問所處々へ出來、教導徧く行屆候樣相成候得ば、邪教御防ぎ方の事のみならず、天下風俗も一變仕、國家益隆昌の義と奉存候、左候て、是迄諸大名の國々學問所有之向は勿論、其他にても、學問世話仕候樣可相成と奉存候間、速に御英斷被爲在、向々へ被仰出可然御事と奉存候、依之此段申上候、

以上、

午〇安政五年　九月

〔譚海十〕薩摩國へ行脚せし僧の物語しは、きつしう至て嚴制なり、細川家領分と、薩摩家領分との境に、川一つあり、其河を半にして、兩國の境とする故、川の眞中に、大成四角柱二本あはせたて、各廿領分のよしを志るしたる在、拶橋を渡れば、薩州の入口に番所あり、そこに一向宗幷切支丹の者禁制のよし、札に志るし在、

〔浦上村切支丹宗徒事件〕明治元辰年閏四月十八日御達

切支丹宗門之儀、年來元幕府ニ於テモ固ク制止ニ候得共、舊染餘燼絶切不申、近來長崎近傍浦上村之住民、竊ニ其教ヲ信仰ノ者、追々蔓延致候ニ付、今般廣ク御評議被爲在候上、格別御仁旨ヲ以、御所置御決定被遊候、依之、別紙之通御預被仰付事、

一右宗門、元來御國禁、不容易事ニ付、御預ノ上ハ、人事ヲ盡シ、懇切ニ敎諭致シ、良民ニ立戻リ候樣、厚可取扱候、若悔悟不仕者ハ、不得止可處嚴刑候間、此趣相心得、改心ノ目途不相立者ハ、可屆出候事、

一改心ノ廉相立候迄ハ、住人トハ屹度絕交之事、

一開發地土工、金工、或ハ石炭掘、其外夫役等、勝手ニ可召仕事、

一山村ニ住居可爲致事

一當日ヨリ先三ケ年ノ間、一人ニ付、一人扶持ツヽ、其藩ヘ被下候事、

但長崎表ヨリ、追々差送候間、支度次第早々到着所ヘ、其藩々ヨリ人數差向、請取可申事、

右之通被仰出候間、此段申達候事、

閏四月

〔原城紀事 四〕九年〇長慶甲辰、一向僧道智、說法於長崎、專闢天敎、小笠原氏爲創一寺、後爲光壽山正覺寺、長崎實錄大成汰西僧、遣還本國、而託互市來者猶夥、嘗木長崎記

〔耶蘇天誅記前錄 中〕耶蘇宗門制禁之大旨〇中略

慶長十六辛亥年、西國筋吉利支丹御改トテ、山崎長門守（一本ニ山口但馬守ト記ルス、擯寫ノ誤リカ）ニ仰付ケラレ罷下ル、猶又愚民ドモ、嚴制ヲ恐レズ、彼宗ニ拘泥シ、死刑ニ陷ルコトヲ御憐ミアツテ、其比淨土宗ノ碩學靈巖和尙ヲ召テ、山崎長門守ニ相添ラレ、西國ニ罷下リ、愚民ドモヲ勸化シ、佛宗門ニ歸服セシムベシト仰渡サル、靈巖和尙、西國ニテ勸化アリテ、胡路備（コロビ）タル輩モ多カリケレドモ、密々邪宗ヲ改ザル奴原モアリシトカヤ、〇中略

慶長十八癸丑年、有馬左衞門佐直純ガ領內肥前高來郡ノ村ニ、先年修理大夫晴信配流仰付ラレシヨリ以來、吉利支丹宗門ノ制止、日ニ間斷ナク穿鑿アリトイヘドモ、トカク舊染改リ難ク、勤モ

スレバ違犯ノ奴原アリテ、靜謐ナラザルノ間、直純、此旨ヲ公聞ニ相達シ、關東ヨリ幡隨意和尙ト云ヘル淨土宗門ノ碩學ヲ請待セラレ、耶中所々ニ於テ、數日說法アリケレドモ、耶蘇ノ先入更ニ不レ退故ニ、信心聽聞ノ者無リシカバ、和尙モ恍惚果テ申サレケルハ、佛ノ魔界ト宜シハ、取モ直サズ即此國ノ人心ヲ云ナリ、年來日來、異國ノ外道ニ勸メ入ラレタル事ナレバ、如何程說法シタリトモ、中々急ニハ佛道ニ入ル間敷ク、隨機說法トハ申セドモ、此機ニ應ズル說法ナシ迚、程ナク關東ヘ歸府セラル、

按ズルニ、〇村井昌弘慶長十六辛亥年、西國筋邪宗門流行ノ由、台聽ニ達シ、吟味ヲ可レ遂ノ旨、山崎長門守ニ仰付ラレ罷下ル、猶愚民ドモ嚴側ヲ恐レズ、彼宗ニ拘泥シ、死刑ニ陷ルコトヲ御憐ミアツテ、其比淨土宗ノ碩學靈巖和尙ヲ召テ、山崎長門守ニ相添ラレ、西國ニ下シ玉ヒテ、彼愚俗ドモヲ勸化サセシメラルト也、右十八年ニ記ス所ト、其事粗相似タリ、靈巖、幡隨意兩和尙トモニ、西國下向有リシニヤ不審ナリ、恐ク一說ハ僻言ナルベシト思ハル、

〔江戶名所圖會十六〕神田山幡隨意院

開山演蓮社智譽上人、始の號は興譽幡隨意白導と號す、〇中略同〇慶長十八年癸巳慶七十二蠻夷の凶賊九州に發り、邪法を弘め、幻術を以て人を惑はし、顚國を傾んとするの兆あり、されども是を平治するに干戈を動す時は國中の人民を塵にするに至れり、高僧に命じ、正法に導しめむにしかじ、こゝにをひて乖義一決し、幡隨意其器なりとて、直に召れ、大樹〇德川秀忠自命せられて云く、吾聞、國に患ある時は必佛法の護持によるといへり、師は既に天下の法將にして、邪徒を退治すべきの英雄なり、又邪徒に對するは、軍將の干戈を揮ひ、敵陣に向に等しければとて、蜀江の陣羽織、及び金の軍配團扇とを賜ひ、急ぎ彼地に赴き凶徒を敎化せしめ、國家の患を除くべきの旨鈞命ありしかば、師も辭するに語なく、命に應じ、終に九州に至り、邪徒と宗義の對論ありしに、各道理に歸して、凶徒

直に志をひるがへし、邪法を出て、淨土門に入ける、實に師の德のしからしむる故なるべし、軍記國鑑は幡隨意院に藏す、障羽織は法孫是を傳持せり、○中略其後崎陽に至り大音寺を開き、竟に晩年におよび、紀州和歌山に於て萬松寺を建立してこゝに住せられしに、一日微疾を示す、○中略眠るが如くにして化す、時に元和元年乙卯正月十五日、歳算七十四、以上行化傳の要を摘

〔徂徠集十四〕崎陽大音寺傳譽上人碑

享保己亥歳、肥崎陽大音寺住持上人慧海、奉其先師異公之遺命、爲開祖傳譽上人、立碑山門之右、又不遠千里、將幣東都、謁予不腆之辭、以紀其功績、予不佞謝不敏、不可、按狀、上人諱觀徹、傳譽其字、號法蓮社、筑後州人也、○中略慶長甲寅歳、○十九年游化崎陽、初勝國時、以筑之博多、爲海舶互市所、國朝始制、廢博多、置鎭崎陽、方其時、百事草刱、亦莫有寺院矣、値西洋人執左道以惑衆者、蔓延海內、有旨禁之、弗能戢、乃以酷刑刑、然後稍稍戢、獨崎陽爲夷人所館、自非我民人、不可得而詰、而民之蚩蚩、習於邪不悛、盤結莫之解也、官吏執法能革其面、而莫喩于裏、鎭臺患之、聞上人勇且辯也、乃構圜焦于古街以居之、號中道院、大張金仙之敎、以喩導爲務、初稱檀越者、廑廑二三十人、及於玄風大煽、邪徒屛息、踏銅版以來歸者、日益衆矣、左道之鬼於是乎大沮、遂至有稱謀害上人者、凡國家之制、不許民帶雙劍、而鎭臺特許其檀越家、以此捍上人、重其任也、台廟○德川秀忠時、元和丙辰歳、○二年鎭臺奏准、以故西洋館之地、在舊博多街者、賜上人爲寺、越明年丁巳歳、寺成、山號正覺、寺稱大音、惟院之名仍舊、崎陽於是乎始有寺焉、凡其俗土官譯人、以至諸禪師上人、皆以八月朔執謁鎭臺、如它邦賀正者儀、而大音寺住持上人例、獨先諸禪師上人者、以此、猷廟○德川家光時、寬永丙子歳、○十三年民之稱奉西洋敎者、聚反於州之島原天草地、豆州刺史川越侯源信綱、督海西九州諸侯之軍以圍之、越明年賊平、又明年戊寅歳、源公聞上人嘗有大功勞、特厝賊鐘寺樓、以爲京觀、又奏請賜今地以移寺、以市街囂也、辛巳歳、猷廟召見上人、出班獨謁、賜時服三、又特賜封告、以鎭道場、祠曹文書副焉、凡崎陽諸寺院有封告者、莫先焉、又賜白金百錠、以充移

宗門改

寺之貨、令崎陽戸出一夫、以助其役、厥後大音寺住持上人世朝東都、例皆出班獨謁者以此、慶安辛卯歳〇四年十一月十三日丁亥上人寂、法臘五十有六、世壽六十有四、厥嗣〇德川家綱時、寛文甲辰歳〇四年特賜白金百錠于第三世住持上人法養、爲修寺料、以開祖上人之故也、凡國朝之制、無貴賤、死必受度於寺、蓋憩西洋之姦也、而崎陽諸寺院毎度死者、必券以告官、以嚴其防、獨大音寺則否、亦以開祖上人之故也、

〔原城紀事 四〕六年〇和元甲申、明僧眞圓來、爲一精舍修道教化、擯擯南京諸商執異教而往還者、南京諸商請以爲香花院、命於長崎伊良林郷、創興福寺、號東明山、以眞圓爲初祖、（中略）〇長崎實録大成熊本僧日慧、堅持法華、遊長崎、就天主觀廢地、結廬修法、耶蘇黨恐懲、百方爲害、日逵持守彌固、誘導至數十百人、事聞官、爲鄕一寺、名本蓮寺、上略

〔興正寺記〕慶應四年〇明治元年八月廿三日、辨事ヨリ御召ニ付、代人出頭候處、

興正寺

九州表邪蘇之徒、教諭盡力致度願之趣、尤ニ候得共、既ニ巨魁數人御取調有之、藩々江御預相成、自餘之輩、當分肥前藩江乾度取締被仰付候間、於其宗教諭之儀、不被及御沙汰候事、

八月　行政官

〔長崎志 七〕邪教之主意訴人出事

一慶長十六年辛亥、肥後國八代より、僧壹人職府に參上し、訴訟を願ふものあり、某は前の肥後之國主小西攝津守造立有し、切支丹寺の住僧なり、然るに當住之僧、某に無禮之難題を申掛け、寺を追出せり、仍て彼僧を召れ、是非を御糺明被成下なば、御忠節として、切支丹宗門之主意を言上可仕よし、依之相手之僧を職府に被召委しく御詮義有しに、相手之僧非分なる故、御裁判之上、令追罰らる、件之僧御高恩を有難く奉存、切支丹邪教之根源を言上仕けるは、抑彼南蠻國王、己が領地

五箇國の物成を、其料に當て、毎年商船と名けて、金銀珍寶緞もの器物等を日本に渡し、諸人に邪宗門を勸め入べき旨、年々伴天連入滿方より、大粮を作り、何之年には、何千何百人を勸め入たるよし、其人數に應じて、褒美の品を與ふ、昔年より此方術にて、南海に有之呂宋國ノビスパンヤ國にも、南蠻人方より珍奇之財物等を贈り、初は僅か計りの地を借り、寺を立、密々に切支丹之法を勸めしかば、其國の愚民ども、彼宗門を信用し、遂に南蠻人に一味同心し、我國を輙く蠻人方に奪取しめたり、扨其後は奪取し國々に、蠻人方より守護人を居ゑ置、其地出產の諸物金銀一切、己が得分とし、三年目に、其諸品を本國に運送せしめしよし言上す、猶又畿內西國諸所に隱れ居たる僧徒ども、數多駿府ニ被召、嚴しく御穿鑿を遂られしに、件の僧言上之趣、一々明白なり、是において切支丹之御制度、天下一統爲嚴勵之旨被仰出たり、則五畿內之御改には、板倉伊賀守に被仰付、西國方之御改には、山崎長門守に被仰付たり、京、大坂奈良、伏見、其外諸所において、改出せし邪宗門の者ども、悉く五條河原にて斬罪せらる、尤彼徒の內にも、邪心を翻し、正道に歸誠し、改宗を願ふものをば、轉びと名付て助命せらる、

〔享保集成絲綸錄 二十一〕寛永十二亥年九月

一伴天連幷切支丹宗旨之儀、従此已前雖爲御制禁、至于今無斷絕様被聞召之間、彌領內幷面々家中、急度相改、自然右之宗門於有之者、捕置可致言上之、自分之儀ハ勿論、組中與力步行同心已下迄可相觸之旨、執役之面々、於御白書院上意之趣、年寄中被申渡畢、

〔日本西敎史 下〕第十六章○中略

斯クテ江戶ノ市街、及ビ其周圍村落ニ至ルマデ、基督敎徒ヲ探索スルコト、甚嚴密ニシテ、其所在ヲ發見シタル者ニ、恩賞ヲ與フベシト令シ、逮捕ノ吏員、毎家ニ突入シ、敎徒ト認メ得ル時ハ、忽チ拘引セリ、此ニ於テ暫時ニシテ、入獄スル者五十名ニ至レリ、此入獄者ノ家屋ハ、盡ク官ニ

沒入シ、幼者ハ其居宅ニ於テ、晝夜護衞ヲ附ス、其尤モ憫然タルハ、江戸ニ住スル人民ハ、何レモ其姓名ト、其信仰スル宗旨ノ佛僧ノ名ヲ記シタル書面ヲ出ス可キ事ナリ、此レニ由テ、人々江戸ニ住スルヲ好マズ、家具等ヲ賣却シ、他ノ地方ニ移住スルモノ甚ダ多ク、或ハ野外ニ宿スル者有ルニ至レリ、

〔享保集成絲綸錄二十一〕寛永十八巳年五月

一在江戸之諸大名、爲御馳走御能被仰付之、出御以前、尾張紀伊兩亞相、兩宰相、水戸中納言、及同中將、幷國持大名、其外總大名へ、掃部頭、讃岐守、加賀守、伊豆守、豐後守、對馬守、傳上意之趣、所謂

口上之覺

一きりしたん改之儀、彌念入可申付候、然共所々に番を置、往還之者不自由成樣ニ仕候儀ハ、今程之御仕置ニ不入儀ニ候間、常々人改之儀は先規より如有來申付、往還之者不自由無之樣ニ可仕候、以來さし當り、御改之時分は、御下知次第番をも置、急度相改可申候、他領之者を領内にて改出差上候においては、猶以可爲御奉公事、〇中略

寛永十八巳年五月

近習之面々、其外總物頭、殿中召集、豐後守、對馬守、志摩守、被傳上意之趣、讃岐守、加賀守、其席有之、所謂、

一きりしたん宗門之儀、面々領内入念、彌無油斷樣ニ可申付之、幷面々領分之者、他所行其所ニ致年有付、妻子をも持有之候を無科して返召事不可然、但重科のものは各別ニ候、因玆知行境、人を留め候樣ニ相聞候間、往還之者自由ニ候樣可申付候、兼又御旗本萬可用儉約之旨、被仰出候、主人之儀は勿論、下々迄念入可申付候、江戸中は御目付被仰付之間、油斷仕間敷候、先年又御國廻被遣候得共、來年も國廻可被遣候間、領分之仕置等可申付之旨、段々被仰渡候事、

寛永十九午年五月

今度御暇被下、大小名ニ被仰出之趣、

一於領分きりしたんの宗門、彌入念可相改事、

一領分中、きりしたん宗門改と號し、所々に番を付置往反不都合云々、向後往還可爲自由事、○下略

〔憲教類典四ノ十六切支丹〕萬治元戊戌年三月

吉利支丹就御穿鑿、井上筑後守申渡被成御預候宗門之者有之候はゞ、書付可被差上覺、

一宗門ニ極候とも致白狀御赦免ニて被成御預候哉、又宗門ニは究不申候へども碇申譯不立故、御預ニ被成候哉、御預被成候時分被仰渡候樣子、委細書付可被差上事、

一御預者名名字、又此以前之奉公所、或何町人哉、百姓哉、何國何之所之者、

一御預之者、籠舍申付被置候哉、放者ニテ被居候哉、當地有之候哉、國本ニ被差置候哉、

一籠舍之者被仰渡ニて、籠舍被申付候哉、自身之心得ニて籠舍被申付候哉、

一御預之者、親類書知候はゞ、書付可被差上事、

萬治元戊戌年三月

〔享保集成絲綸錄二十一〕萬治二亥年六月

今朝、評定所へ、壹萬石以上之大小名、在國在府共、家來之者一人づゝ召寄、伊豆守出座、被仰出之趣被相傳之、北條安房守御目付森川小左衛門列座ニて書付一通づゝ相渡之、

覺

一きりしたん宗門之儀、密々今以可在之間、家中之輩、中間小者ニ至迄、常々無油斷可被申付之、勿論奉公人出替之刻は、諸人に念を入、宗旨を改可相抱事、

一百姓町人は、五人組旦那寺を彌相改之、不審成宗旨於有之は、可被遂穿鑿事、

一きりしたん御制禁之高札、明暦元年八月相立候、經年序文言見へ兼可申候、あたらしく書直し、可被立之事、以上、

六月

寛文元丑年七月

覺

一きりしたん宗門御制禁之高札、今度年號改元候間、書直し可被相立事、

一切支丹宗門之者、今以所々より密々あらわれ捕之候、何方にかくれ可有之も難計之間、家中幷領內彌入念相改之、ふしん成者於有之は、可有穿鑿事、

一町人百姓五人組を定め、庄屋町年寄無油斷改之候樣に、領分堅可被申付候、自今以後、他所からあらわれ、於捕之は、其所之庄屋町年寄、手前迄穿鑿、油斷仕不相改儀無紛候はゞ、科之輕重にしたがひ、可被行曲事之事、以上、

七月

〔憲敎類典 四ノ十六 切支丹〕寛文四甲辰年十一月廿五日

口上之覺

一切支丹穿鑿之儀、一万石以上之面々は、今度如被仰出候、役人を定、家中幷領內、每年無油斷可相改事、

一九千石以下之輩は、役人定候儀、可難成候間、家中之者は不及申、知行名主、年寄、百姓巨細に致吟味、今度御書付之通申含之、其上每年五人組手形を取置、何時によらず、從公儀御尋之砌、其手形を出し候樣に、番頭、組頭、支配方より、入念急度可被申渡事、

一御代官所之儀は、手代之內、役人を定、無油斷、書付之通可遂詮議事、

一此以前切支丹にて、ころびの者於有之は書記之、北條安房守、堀田若狹守迄可相達事、

一寺社領門前之町等は、其住持神主より委細遂穿鑿候樣、從寺社奉行所急度可被申付事、

一切支丹御制禁之高札、ふるく成、文字見え兼候はゝ、書直し可被立事、

以上

寛文四年十一月廿五日

〔享保集成絲綸錄二十一〕寛文十一亥年二月

一一季居出替之時節たるの間、宗門之儀入念改之、耶蘇宗門ニて無之旨、請人を立可被相抱事、○中略

二月

〔教令類纂初集百五〕寛文十一辛亥年六月十九日

覺○中略

一其方御代官所、耶蘇宗門改之儀、被入御念由ニ候へ共、彌無油斷可被申付候、向後は百姓一軒ツヽ、人別帳ニ記之、一村切ニ男女之人數寄を致し、又一郡限に成とも、國切ニ成とも、都合をしめ自今以後無懈怠被申付、帳を作り、手前ニ被差置、此方江は、當年之通り、一紙手形可被差上候、不及申候へ共、御代官所之男女、他所へ緣付、並奉公ニ遣之勿論、令死去減候分、他所より來候者有之而增之分、差引無相違、男女も年齢をも、銘々書印候樣尤候、宗門改計ニ不限、諸事被爲吟味可然事候間、可被得其意候、但改被申時分之儀は、春夏中より申觸置、秋中爲檢見手代遣之節か、又は御年貢取立ニ遣し候剋ニ成共、其段は可爲勝手次第候、以上、

亥十月晦日

德五兵衛

杉內藏允

松猪右衛門

〔契利斯督記〕宗門穿鑿式

一宗門之者、訴人有之時ト、訴人ノ申口ヲ口書ニシ、其後訴人ノ宿ヘ、人ヲツカハシ断置候事、

一宗門ニサシ候者、申遣候時ハ御領地ニテ候ヘバ、直ニ従此方申遣ス事モ有之、亦御勘定所江申渡シ候事モ有之、給人方江ハ、従御老中御奉書被遣候事、

一宗門穿鑿仕候時分、訴人トサシ候者ヲ引合、穿鑿不相極候内ハ、奉公人ハ主人御領所之者ニテ候ヘバ、其御代官江預置候、町人ニテ候ヘバ、五人組ニ預置、度々召寄、大形穿鑿キハマリ候時分、両町奉行江申渡シ、籠舎申付候事、

一従籠屋此方江召寄、穿鑿仕候時分ハ、町奉行江申遣候、其時ハ町奉行同心、并囚獄同心召連参候事、

一宗門ノモノ訴人有之時、國々江被仰遣候時ハ、御奉書、訴人ノ口書ヲ添被遣事、

一手前ニテ吉利支丹穿鑿之刻ハ、自身承候籠屋江遣、吟問之刻、南蠻人歟、或日本人ニテモ、大事之モノニテ候ハ、筑後守時分ニハ、玄蕃ヲ遣シ候由、軽キモノニテ候時者、當座見計候而遣候由其役人トテ定候而ハ置不申候由、左様之時分、撿使ニ遣候者ニ、誓紙ハカヽセ不申候由、口々伴天連ナド二度ニツキ合候ヘバ、宗門ニ成ソウニ存ズルノモ有之候、萬存之外成義多有之候事、

一親吉利支丹宗門之由、訴人御座候而モ、女房兄弟ニ訴人無之候ヘバ、女房子兄弟ハ此方ヨリ構不申候事、但様子ニヨリ、切支丹宗門ニテハ無之候哉、尋申事モ有之候事、

一何程ノ科人ニテモ、吉利支丹宗門訴人候ヘバ、斬罪御赦免被成、其所江被遣候事、

一吟問ノ上ニテ、訴人不仕候而モ、ツルサレクルシミノウヘニテモ、能モノヲ一人ニテモ、訴人イタシ候ヘバ、死罪御赦免、但籠ヨリ出シ候事ハ、其品ニヨリ申候事、

一宗門之儀ニ付、張文落文ナド仕事有之左樣事候而モ、書物ヲバ此方ヘ取置、其人ハ改不申候事、

一宗門ツルシ候時分ハ、二三日モ前廣ニ、町奉行所江申遣、ツルシ場出來次第、ツルシ候モノ、傳馬町籠屋ヨリ出遣候、其時分ハ町奉行衆與力同心付候而參候、自分ノモノハ先立、ツルシ場ヘ參、相待居申候、ツルシモノ參候得バ、穢多ニ申付ツルサセ候事、町奉行與力同心ハ、カマヒ不申候、晝夜ツルシ場ニ番仕候儀モ穢多致候、所ハ淺草穢多居申近所ニテ候、ツルシモノ白狀可仕ト申候ヘバ、穢多注進イタシ候、其刻家頼ノモノヲ遣、樣子相尋候、大事之ツルシモノヲバ、筑後守時分ニハ、筑後守野村彥太夫ニ借置候野屋敷之內ニテツルシ候由、其砌モ番ハ穢多仕候、

一ツルシ初候事ハ、御精進日ナド除候由、ツルシ、カヽリ候而ハ、其カマヒ無之候由、

一ツルシモノ相果候屍ハ樣シ捨申候事

一斬罪ノモノ有之時分ハ、右同前ニ、町奉行所江申遣候、與力同心サイリヤウイタシ、淺草ヲンボウヤ、ハタモノ場ニテ申付候、斬罪ハ、町奉行衆同心仕候、手前ノ者撿使ニ遣ハシ候、屍ハ穢多共ニ申付、ヲンボウヤニ埋サセ候事、

一吣問、傳馬町籠屋ニテ申付候刻ハ、午前ノモノ撿使ニ遣シ、囚獄同心ドモニ申付、吣問イタサセ、筑後守致言上、囚獄同心十人增申候由、此モノドモ、宗門ニ付此方ヘモ參候而、吣問之時分モ手傳仕候由、

一小日向ニテ吣問申付候刻ハ、自分ノモノ計ニテ吣問仕候由或ハ能宗門ノモノカ、又ハ大事ノモノニテ候ヘバ、小日向切支丹屋敷ニテ致吣問候、

一吣問ヲ頻ニイタシ、好ム事、惡ム事、奉行骨ヲ折候トモ、切々穿鑿イタシ、細ニ口書ヲ申付、色々思案イタシ、手ヲ廻シ、サグリ尋ルコト可然由、或ハ宗門ヲカクシ、又ハ類門白狀イタサヾル時、センカタツキタルトキ、吣問仕べキ事、

一嗷問ツヨク申付タル計ニテモ、白狀不仕候由又ヨワク候ヘバ、猶以白狀不仕候、能科人ノ心ヲ考ヘテ、イタスベキ由、久敷嗷問仕ルモノハ、木馬ヨク候事、ツヨク嗷問イタシ候ヘバ、科人草臥、重而嗷問難成事有之、又ハツヨキ科人ヲ、ツヨクイタシ、コラヘラレ、重而イタスベキ樣無之事アリ、能心配遠慮有ベキ事、

一吉利支丹宗門十人計モ、一度ニ訴人有之時ハ或ハ三人或ハ五人計モカラメトリ、一度ニ十人トモハ捕ヘ不申候、但上意ヲ候ヒ、又ハ御指圖ヲ請可申候事

一吉利支丹宿イタシ候モノ、初ハ科ニ被仰付候、侍ヲモハリツケニ御掛被成候コトモ有之、其後ハ宿ヘハ御カヽリ不被成候事、

一最前ニ親宗門ニテ候ヘバ、女房マデ御穿鑿ナシニ、同罪ニ被仰付候、其後、御穿議候而、親吉利支丹ニテ候テモ、御穿鑿ノウヘ、女房子宗門ニテ無之候ヘバ、御赦免候事、

一宗門者申分ニ、子ヲ出家ニイタシ置候由、申事有之、實正ニテ候ヘバ申分立、御預被成候事、

一初ハ一兩人訴人イタシ候ヘバ、御預被成候、ノチニハ五人六人モ數多訴人不申候ヘ(?)バ、先籠舍被仰付、彌御穿鑿ノ上ニテ、御預被成候事、一人ニテモ、能モノヲ訴人イタシ候カ、又ハ能モノニテ無之候ヘドモ、五人六人十人バカリモ、白狀イタシ候ヘバ、御預被成候事、

一親、兄弟、子、伯父、伯母、親類ヲ訴人イタシ候ヘバ、御穿鑿ノ上、其科ニヨリ御預ノ事、

一何方ニテモ、伴天連被捕候者、其書物、藥幷ミイサノ道具トリヨセ可申候、

一小日向吉利支丹屋敷御預ノ者、病死カ或ハ自害仕事有之時ハ、御歩目付死骸ヲ穿鑿被申候、シカバネハ手前ノ者ニ申付、タメシ、其後ヲンボウヤヘ遣シ埋置候事、〇中略

宗門穿鑿心持之事

一宗門之者、初者吉利支丹カト相尋候ヘバ、少モ不隱吉利支丹之由申候、今程ハ成程宗門ヲカタ

シ候事、

一ウバ、幷女ナドハ、デウスノ踏繪ヲフマセ候ヘバ、上氣サシカハリ、モノヲ取捨、息合アラク、汗ヲカキ、又ハ女ニヨリ、人ノ不見樣ニ、踏繪ヲイタヾキ候事モ有之由、

一宗門穿鑿ノ時、生國亦久敷住居イタシ候所可相尋之、國ニヨリ、伴天連不參所、亦參候而、宗門廣候所可考タメノ事、

一チヒサキイマセヲ脇指ノ柄頭ヱ掘入、又イマセヲ、伴天連ノ骨灰ナドヲ、枕ノ内ニ入、燒物沓箱ノ内、ネリ藥ナドノ中ヘ入置事有、心付べキ事、

一切支丹宗門ナ、自害ハ不致法度ニテ候ヘドモ、ゼシエントテ、食事ヲヒカヘ、食ヲモ少シヅヽ食シ、其外大根カブナドノ類ヲ、命ツナギ計ニ食シ、ヨウ〳〵一身ヨワリ、相果候事有之、自害デハ無之、食ヲバイタシ候ヘドモ相果候ト、コンセンシヤニカケ相果候儀ニ候事、

一ツルシ殺、又ハ斬罪、火アブリニ被仰付候内ハ、伴天連切ノ渡シ申由、其後オンコロバセ、日本之宗旨ニ被成、小日向ニサシオカレ、女房ヲ被下、伴天連ニハ、十人扶持ニ、銀子一貫宛被下、切々色々ノ儀御尋被成、不申上候時ハ、嗽問被仰付候樣ニ被遊候而ヨリ、宗門ノ者スクナク罷成候由、加樣ノ者ノ嗽問ハ、木馬能御座候、合點無之モノヲ、撿使ニ遣シ、嗽問六ケ敷存ジ、キツクイタシ候ヘバ相果申候、又病者ニ罷成、嗽問不罷成、體成申由、兎角嗽問致候事ハ、不死樣ニ可仕由上意候、ツルシヨウ、弱クモ強クモ、色々指引有之候由、罪ナドニツル、又ツナギオキ候而、考ヘ申事モ有之候由、但死罪場ナドニツルシ候時ハ、穢多ムヅカシガリ、コロス事モ切々有之候間、其考可有之事、

一伴天連穿鑿之内ハ、奉行ヲモ、家來ヲバ勿論、穿鑿ノ内ニモ、ヨソナガラ勸メ、色々ダマシ候事有之候間、其心得可有候、

一嗽問ツカハシ候內、撿使ニ參候者、心ヲ色々考、慈悲成撿使トオモヒ候ヘバ、彌慈悲ヲ加ヘ候ヤ

ウニイタシカケ申候事、

一吉利支丹宗門ニハ、メイヨ有之由勸メ候間、ナニヨウノメイヨ候哉、嗷問ノ内ニテモ、ツルシ候内ニテモ、見出シ候ヘト、申ツカハシ候ヘドモ、僞ヲ勸メ候故、小モ不思議成儀無之候由、

一伴天連入満同宿宗門之モノ、コロビ候時分ハ成程堅ク申付、宗旨ヲ替、禪宗或ハ淨土宗ニ被成寺參ヲ申、旦那ニイタシ、伴天連入満ニハ、女房ヲ被下候、其上ニテ立アガリ申時分ハ、吉利支丹アヒシラヒニハ不仕、スリ盜アラガヒニイタシ、斬罪可仕被仰付、同宿宗門ノ者、小日向ニテモ二三人、籠屋ニテモ五六十人モ斬捨申候由、

一此以前ハ、伴天連ヲ死罪ニ被仰付候ヘバ、骨灰ヲ方々ヘ竊參候、能宗門ナドヲモ、骨灰ヲトリ參候、大昔ハ日本ニテマキチラシ候モノヽ、骨灰ヲバ、異國ヘモ渡候由、

一出家ニハ吉利支丹、唯今マデ無之由、山伏ニハサヽレ候モノモ有之候由、

一萬事ニ付宗門改之時、奉行僞ヲ不申、申出シタル儀ハ不替ヤウニ、籠舍、或ハツルサレ候、宗門ノ者ドモ存候樣ニ、仕事御座候由、左樣ニ無之候ヘバ、類門モ、人イタス時、モ、又ハコロビ申候モノモ、奉行人ヲ疑申兼候、下々穿鑿ノ役人マデ、其意得有之樣ニ可申付事、

一奉行人モ、家來役人モ、慈悲ナル奉行役人ト吉利支丹存候ヘバ、穿鑿ノサハリニ罷成候、左樣ニ候トテ、强クムリニイタシテ候ハ、彌惡敷候、能々宗門ノ心ヲ考ヘ可仕由、木馬穿鑿ノ時分、切々小便ニオリ、タバコナド所望仕候事有之時ハ、心ニシタガヒテ、能事モ有之候、又時分ニヨリ、人ニヨリ、切々オロシ申サヌガ、能事モ有之事、

一ヲツト吉利支丹ニテ女房ノ事、獨子吉利支丹ニテ親事、父母吉利支丹ニテ子ノ事、又大形十カ七八マデハ、吉利支丹ニテ有之候事、

一朝鮮人吉利支丹ニ勸メ、被入候而ハ、男女トモニオモヒ入深ク、コトニ女ハ聞入候ヘバ、思入深

ク候事、

一穿鑿之時、初日詞ヲ聞事有、二三日モ申事計リヲ聞、其ノチ聞屆候テヨリ、不審ヲカケ可然由、念頃ニ聞事無之、卒爾ニ不審ヲウチ、論ニイタシ候事アシク候由、宗門ノモノハ、カナツチ論ハイタシ候事ヲ好ミ候由、タガヒニ後生ノ事ニテ論ヲイタシ、雙方トモニ證據ナク、カナツチ論ニ成候ヘバ、ワキヨリ聞、奉行ノ誤ノヤウニ存、家來マデモ吉利支丹宗門ニモ、道理有之ヤウニ存知候ヘバ、大惡事ニテ候、吉利支丹邪法萬僞計リヲ申、人ヲ迷シ候所ヲ道理ニ詰、諸人邪法ト存ヤウニ不仕候ヘバ、下々家來穿鑿ノ役人ニテ、難有可存體ニテ候由ノ事、

一件天連吉利支丹宗門ニヲシヘ申候ハ、穿鑿之節、奉行智慧モ有之、善惡ヲモ明決スル人成トモ、宗門穿鑿之時ハ、智慧モクラミ、辯舌モ不自由也、デウスノ名譽ニテ、合力シ給故ニ、宗門ノ者ハ不辯舌ニテモ、不智慧ニテモ、智慧モ出來、辯舌モアキラカニ成トヲシヘル故、其敎ノ如ク、樣子見ルヨシ、又訴人候而、奉行所ニテ對決ノ刻モイセウヲモトヽノヘ、奉行ノ前ニテ如何ニモ慇懃ニ致禮、訴人ヘモアシキ詞ヲツカハザルモノ有之、是モ上天致スベキ時分來テ、奉行所ヘヨバルト勸メ候ユヱナリ、訴人ヘモ恨有之儀ニテナシ、怨ニ存候ヘバ、上天ノサハリト成ト勸メ候ヨシ、

一國主吉利支丹宗門之仕置、善惡有之宗門ノ考ヘアシキ仕置ノ國ニハ、カクレ候事マギレヤスキニヨリ、其國ニハ必ズ吉利支丹宗門アリ、切々旦那寺ノ改可入念也、出家モ亦ダマサレル事、只今迄ハ吉利支丹ハ、死骸火葬スルコト無之候、尸ヲ己レガ宿ニテ桶ニ入、桶ノ内ニ板ニテクルスヲ作入、桶ノ上ヲヨクカラゲツカハシ、土葬ニイタシ候事有ヨシ、薪拂底ノ所カ、又釋氏ニモ、土葬ニスル事モアレドモ、カヤウノ所ニモ、不審ヲ可立事也、死骸ヲ掘出シ、桶ノ内ヲ穿鑿イタシ、宗門アヲハレタル儀モ度々有之候由、農人町人職人等ニ、日本ノ誓詞、南蠻ノ誓詞ヲイダサセ、寺請ヲトリ、其後ハ一年モ二年モ改メ沙汰無之、サシオカルヽ國有、左樣ニテ油斷有之所ヘハ、必吉利支

丹カタレ有之事多候由、

〔蒼梧得聞〕人見ト幽、名ハ壹、字道生、號林塘叟、又白賁園ト云フ、林羅山先生ノ門人ナリ、威公〇德川賴房召シテ祿四百石ヲ授ケタマフ、是水戸ニテ儒者ノ始ナリ、〇中略一年切支丹宗門改ト云事アリシニ、ト幽答エテ、我等林道春ノ門人ナル故ニ、佛ノ宗旨ト云コトアル事ナシトテ濟タリ、

〔基量卿記〕貞享五年十月十日、吉利支丹改事、評定衆へ申渡、如去年樣、千種へ直ニ可持來由也、

〔寶曆明和撰要集〕明和切支丹宗改之儀御書付神事舞太夫之者共、人別宗門改之儀ニ付、寺社御奉行方より御問合ニ付、相調申上候書付、

喜多村喜右衛門

御當地町方ニ罷在候神事舞太夫之者共、宗門人別帳外、町家之者一帳ニ而改相濟候哉、又は別帳ニ有之候哉、別帳ニ候ハヾ、何々之職業之ものと組合候事ニ候哉之段、寺社御奉行方より、御問合ニ付、早々相調可申上旨被仰渡候、

右相調候處、町中ニ右名目之もの無之旨、名主共申出候、然處淺草觀音境内三社權現之致神職、寺社御奉行方御支配之由ニ而、神事舞太夫頭田村八太夫と申者、同所田原町貳丁目ニ罷在候段、所之名主申出候ニ付、則右名主方より爲承合候處、右八太夫配下ニ而、神事舞太夫と申者、町方ニ致住居、人別宗門改之儀も、町方江差出候由申聞、名前書付差越候ニ付、右名前之者、猶又相尋相調候處、神事舞太夫と申名目ニ而は無之、神職又ハ神道者と申名目ニ而罷在、人別宗門改之儀も、町方江差出候由、所之名主共申之候、

右之通只今迄、神事舞太夫と申名目ニ而は、店借受不申候間、町方ニ而相知不申候處、前書之八太夫差越候名前書付を以、再應相調候處、神事舞太夫共儀、神職又は神道者と申名目ニ而、町方ニ致住居、人別宗門之儀も、町人共一同ニ改相濟候儀ニ御座候、依之申上候、以上、

午〇寬永三年二月

喜多村喜右衞門

〔享保集成絲綸錄二十一〕寬文十三丑年四月

覺〇中略

一從此以前、如被仰出之、家來領分之輩、年々宗門被改之、自今以後、隔年ニ證文可被差上事、

右條々、以此趣、與書注之、渡邊大隅守、青木遠江守所迄、可被差越候、以上、

四月

〔憲教類典四ノ十六切支丹〕天和元辛酉年二月廿九日

青木遠江守宅江諸留守居扣之申渡覺

切支丹宗門改之儀、前々隔年に證文被差出候得ども、當年よりは、毎年四月より十一月迄之內、宗門改之證文可被差出候、彌入念可被申之旨、御老中被仰渡之由申渡之、

延寶九年二月廿九日

元祿八乙亥年六月〇中略

一二季斷之儀、七月十二月共ニ十日を可限、十日以後之生死ハ、其次之屆ニ可致事、

〔續百一錄〕享保廿一年〇元文元年十月七日、宗旨改、并鐵炮改御帳面、當月廿日切ニ御差出可被成候、向後者右之通廿日切ニ御差出被成候樣ニ可申入旨、兩傳江申付如之候□

葉室家雜掌
冷泉家

十月七日

〔寶曆集成絲綸錄二十〕延享二丑年二月

覺

一切支丹宗門之儀、御觸之通一人も無之樣、町中家持は不及申、借屋店借り、下々召仕等迄、一季居出替之時分、彌入念可申付候、毎年三月と八月、兩度御番所江手形差出候通、町中名主之儀は、町內

年寄、月行事立合、寺手形取置、家持之儀は、其町之名主方江寺手形取置、借屋店借之儀は、家主方江銘々寺手形取置、急度吟味仕、自分屋敷之内は不及申、他之屋敷ニも不審之者有之候はゞ、早速可申出候、若隱置脇より於申出は可為曲事事、

二月

〔續百一錄〕延享二年九月廿九日、口上覺、

宗門改證文、例年十月廿日迄ニ御差出之事ニ候、今年は兩傳江府下向候間、歸京之上、尙可被申進候間、其節御差出可被成候、此段各迄可申入候之旨、兩傳被申付、如此御座候、以上、

九月廿九日

〔寶曆明和撰要集明和切支丹宗改之儀御書付〕明和三戌年十月十六日、松平右近將監殿御渡書付、

町奉行衆

大目付江

古切支丹轉切支丹類族、右之面々生死、其外異變等、年之七月十二月、無懈怠相改候儀ハ勿論之事ニ候得共、近來屆後も有之旨相聞、左樣ニは有之間敷儀ニ候、向後二季之改、異變無之候共、有無宗門改ゟ可相屆、且亦每年十月ニ至、差出候宗門改證文も、無遲滯宗門改江差出可申候、

右之趣、向々江可相觸候、

戌十月

宗門改役人

〔柳營秘鑑四〕諸御役人員數井組支配中略○

一切支丹奉行二人大目付、御作事奉行兼帶、與力六騎、同心三十人宛、

〔元治武鑑〕宗門御改大目付ヨリ一人御作事奉行ヨリ一人兼役與力六騎同心三十人宛

大目付ヨリ兼役　大久保紀伊守略○註

御作事奉行ヨリ兼役　岡松伊豫守略○註

〔吏徵附錄〕切支丹改與力、六人、同心三十人、(一組與力三人同心十五人)
頭注　與力現米六十石、同心三十俵一人扶持、

〔明良帶錄(後篇)〕大目付(○中略)
宗門方は、御作事奉行よりも兼帶す、與力六騎、同心三十人宛にて、毎年十月、切支丹宗門御改なり、

〔長崎志(七)〕邪教之主意訴人出事
一慶長十六年辛亥、(○中略)切支丹之御制度、天下一統爲嚴勵之旨被仰出たり、則五畿内之御改ニは、板倉伊賀守ニ被仰付、西國方之御改には山崎長門守に被仰付たり、

〔長崎志(一歷代奉行)〕兩宮權右衞門
右者慶長十九年、諸國にて捕置し、邪宗門の者共、阿媽港に流刑被仰付の節到著有之
山口駿河守
右者同年、長崎地内に建置し、切支丹寺十一ヶ所、燒捨被仰付の節到著有之、

〔契利斯督記〕一寅年(○寬永十五年)天川船、日本渡海停止ノ旨被仰付、爲上使太田備中守被遣候、卯年(○寬永十六年)又天川船一艘參ニ付、加々爪民部、野々山新兵衞爲上使、於長崎天川人七十人御成敗被成候事、
一其前ハ長崎奉行一人充被仰付候所ニ、兩人ニ被成、高力攝津守ヲモ、島原江被遣、大形毎月長崎見廻被申候由、天川人斬罪被仰付候テヨリ、松平筑前守、鍋島信濃守、長崎湊ノ御番、一年替ニ被仰付、九月二十日、船拂迄、家中ノ者共、御番所ニ相詰、當番ノ時分、自身モ切々見廻被申候由、當御代ニ、石火矢臺、湊ノ外七所ニ被仰付、石火矢臺一ツニ、石火矢、幷大筒合五挺充被指置候由、
一大久保加賀守唐津江被遣候、是モ御用ノ時分ハ、長崎江可參由被仰付候、松平隱岐守、日根野織部モ、御用ノ時分ハ、長崎江可參由被仰付候、日根野織部ハ、一年ノ内一度充見廻、二十日モ三十日モ、長崎ニ致逗留候由、長崎奉行二人、井上筑後守、高力攝津守、日根野織部、松平隱岐守、大久保加

賀守、大村丹後守、湊御番松平筑前守、鍋島信濃守、御役人合十人ニテ候由、

一亥年〔○正保四年〕ホロトガルヨリ、使者船二艘越申候、湊ノ内ミナケト申所ニ、馬場三郎左衛門、日根野織部參會、相談ニテツナガセ、九州中ノ船幷人數ニテ、西泊ト申所ノ近所ヲシキリ、〔西泊近所三町七又湊ノ内ニテ狹キ所ナリ〕大筒石火矢ヲカケ、二艘ノ船歸帆無之樣ニイタシ候由、人數モ大形、九州中ハ家老召連參、長崎湊ニ相詰候由、其後筑後守御使ニ被遣、亥七月朔日八時分、長崎〔江〕參著申候由、其年當番ハ松平筑前守、長崎〔江〕參候衆ハ、鍋島信濃守、高力攝津守、大村丹後守、松平隱岐守、日根野織部、各人數ヲ率シ參候由、筑後守、馬場三郎左衛門、於宅上意ノ通申渡、七月晦日申刻、筑後守家來、井上玄蕃ヲ船中〔江〕遣候、八月朔日ニ、ホロトガル使者ノ御請ヲ、江戸〔江〕遣候由、同六日ニ歸帆申付候由、

○按ズルニ、阿瑪港商船禁止ハ羅山文集ニ云ヘルガ如ク、寛永十七年ノ事ナルベシ、今此書十五年ニ係クルハ誤ナラム、

〔契利斯督記〕明暦四年戊四月二十九日、御座間〔江〕被爲召、被仰付候、吉利支丹之儀、大猷院樣〔○德川家光〕御時分ヨリ大切ニ被思召、御用ニ候間、念ヲ入穿鑿可仕之由、御直ニ被仰付、御加增千石被下候、就夫井上筑後守吉利支丹之穿鑿被仰付候初、誓詞仕候ヤト相尋候ヘバ、筑後守ハ大目付御役儀之誓詞仕、吉利支丹御改被仰付候、誓詞者不仕候由申候ヘドモ、私ノ儀相應ニ無之、大分ノ御役被仰付候間、誓詞被仰付被下候ハヾ、難有可存之由申上ニ付テ、御老中ヨリ五月四日被下候起請案文、

起請文前書

一今度吉利支丹穿鑿之儀被仰付候、然レバ御爲第一奉存、毛頭御後闇義仕間敷候、及心處入精穿鑿ヲトゲ、不寄誰人無依怙贔負、正路可致沙汰事、付相役人ト中惡敷不仕、萬事遂相談不立私申分、御爲能方ニ付可申候事、

一吉利支丹穿鑿之儀、御尋之刻、不殘心底存寄候通言上可仕候、勿論御隱密之儀、聊以他言仕間敷事、

一以御威光者申義、又者非分申懸間敷事、

右條々、雖爲一事於致違犯者、〇下略

〔嚴有院殿御實紀十五〕萬治元年四月廿九日、大目付北條安房守氏長、天主敎考察命せられ、千石加恩あり、かねて此事奉はりし井上筑後守政重衰老によてなり、

〔嚴有院殿御實紀十七〕萬治二年四月二日、大目付北條安房守氏長、天主敎考察によて、先手組與力三騎同心三十人を附屬せられ、別ニ與力三騎召かゝへしめ、總計六騎になされ、廩米六十石づゝ給ふ、

〔嚴有院殿御實紀二十三〕寛文二年二月八日、作事奉行保田若狹守宗雪、天主敎考察の事を兼しめらる、

〔邪宗門穿鑿之書〕寛文二年壬寅二月八日、保田若狹守宗雪、應召登營、參御座間、前橋少將忠清、忍侍從忠秋、小田原侍從正則伺候、有台命近出御前、仰曰、宗雪可勤仕作事奉行稽古、少退、重有命進闕、仰曰、吉利支丹邪徒制禁支配、自前代爲要務重事也、自今與北條安房守氏長同可沙汰之云々、拜命之、辱退出、　後日與氏長會、傳此兩冊〇邪宗門穿鑿之書幷勤方之書寫之、

〔契利斯督記〕寛文二年壬寅二月十二日、於評定所誓紙其前書曰、

起請文前書

一今度御作事奉行、幷幾利支丹宗門穿鑿之儀、北條安房守相加、僉儀可仕候旨被仰付、彌御爲第一奉存、御後闇儀不仕、御奉公致油斷間敷事、

一被仰付候御役大切奉存、彌以入精、末々迄も猥不成樣ニ、堅相守可申候、勿論御用之儀、ぬりあひ

宗門改帳

申間敷候事、

一御作事之御用訴訟、幾利支丹宗門穿鑿等之儀、成程入念御後闇儀不仕、縦親子兄弟知音之好、又ハ中惡輩たりとも、依怙贔負なく正路沙汰可仕候、存寄之儀は、不残心底申出、御爲能方付落著可仕候、極之儀は陰ニ而何角取沙汰仕間敷事、附以御威光奢たる儀不仕、幷非義申懸間敷事、

一跡々より被仰出候御法度之趣、堅相守可申候、自今以後、被仰出候御條目壁書等御座候而は、同事違背仕間敷候、相役中は不及申、御一門方を始諸大名諸傍輩と奉對御爲以惡心申合一味仕間敷候、猶殿中は勿論、宿々ニても無用所にて、切々寄合入魂だて仕間敷候事、

一御隱密之義、自然承り候共、一切他言仕間敷候、幾利支丹宗門穿鑿等之様子、御尋之刻、不残心底存の通有體可申上候、御爲之儀ニて相役人と中惡敷不仕、諸事遂相談可申事、

右之條々、爲一事於致違犯者〇下略

保田若狹守

充所　阿部豊後守殿

同　乗松下總守殿

〔憲廟實錄五〕天和二年十月廿五日、大目付林藤四郎、普請奉行田中孫十郎、天主教考察の命を奉る

〔地方落穗集十三〕京都町奉行所に有之帳面寫の事

切支丹改覺書

一前々切支丹宗門の由にて、本人有之に於ては、何年以前何方にて僉議有之候て、何年以前轉邪宗門の者に候へ共、切支丹を訴人仕候に依て、罪科御免に成、在所へ歸り罷在候哉、其譯委細書付申さるべく候事、

一右轉候前切支丹のものに有之、只今迄も預に差置候哉、又ハ何にても面々職を仕罷在候哉、其

譯、一人毎に、別々委細書付申べき事、

一最前切支丹にて轉じ申さゞる以前の子は、男女共本人同然の儀に候間、本人の內に書入申さるべく、轉じ候後の子は、男女共類族の內へ書入申さるべく候事、

一前々切支丹轉じ候後、旦那寺有之候ハヾ、何宗にて、平生寺へ參詣仕候哉、其寺へ付屆常體に仕候哉、又珠數等を持父母の忌日などには、寺へ參詣候哉、持佛を構へ香花を備へ候哉、其趣旦那寺にて慥に吟味を遂、又下人等を遣ひ候者は、其下人迄念入穿鑿致さるべく事、

一切支丹の儀は申すに及ばず、宗旨疑はしき者有之に於ては、御料所ハ、代官私領ハ領主地頭へ訴へ出べく、勿論役々より奉行へ早々申出べく候、品に寄乾度御褒美下さるべく候、其上同類たりといへ共、其科を免し、仇を爲ざる樣仰せ付らるべく候、若し隱置、後日に顯るゝに於ては、曲事たるべき事、

一類族の者、忌掛り候親類、幷に聟舅吟味有て、書付申さるべく候、此外は書付に及ばす、尤も諸親類等迄、他國へ放し遣し候儀無用たるべく、但し據り候はで叶はざる儀有之に於ては、切支丹子孫の譯、御料所は御代官、私領は地頭へ申出べく候、尤　何年過候ても、其譯切支丹奉行へも申達し、帳面書直し候樣仕るべく候事、

一前々切支丹宗門の者果候ハヾ、死骸ハ鹽詰に致し置、切支丹奉行の差圖次第に仕るべく候事、

一類族の者果候はゞ、死骸等吟味を遂、別條無之ば、旦那寺にて取置、其趣帳面に記し、毎年七月十二月兩度、切支丹奉行へ差出し帳面を除せ可申事、

右之趣、相改め帳面に記し、切支丹奉行へ差出すべく候、帳面奥書等の儀、奉行中より相達すべく候、前々より切支丹宗門無之方へも、心得の爲め相觸候間、其意得らるべく候、

貞享四年卯六月

〔憲教類典四ノ十二切支丹〕安永五丙申年十二月二十九日

松平伊賀守殿御渡

御目付江

諸國御料、私領、宗門改帳、大概寛文之頃より以來、年々之帳面を、寺社奉行ニて取集候筈候、

一御料所之分は、其所之御代官ニて取集、御勘定奉行を以可被差出候、

一江戸町方は、町奉行ニて取集、可差出候、

一遠國奉行有之町方は、其所之奉行より可差出候、

一萬石以上、幷御役人交代寄合等、銘々より可差出候、

一頭支配有之面々は、地頭々々ニて取集置、頭支配を以可差出候、

但與力伊賀、同心等之給知其外小給ニ候とも、知行所之人別帳は、頭支配ニて不洩樣相改取集置、追て差出可申候、

一寺社領之分は、其寺社ニ取集置、成丈其所之御代官領主地頭を以可差出候、

但前々諸役等、直ニ寺社奉行江差出來候分は、寺社奉行江直ニ差出候ても不苦候、

右之通相心得、帳面集次第、一箇年毎之年號、幷冊數、箇條書ニ致し、出來次第、牧野越中守方江指出、追て差圖次第、帳面も指出可被申付候、

右之趣、不洩樣可被相觸候、

○按ズルニ、天明六年三月ニ、又此令ヲ發ス、天明集成絲綸錄卷三十三ニ見ユ、同文ナレバ略ス、

〔憲教類典四ノ十六切支丹〕安永六丁酉年正月四日

松平伊賀守殿御渡

御目付江

諸國宗門改帳之儀、當年迄は、諸宗一帳ニ相認差出候へ共、來年よりハ、一宗限り、一冊宛ニ致し、最宗號、其外認方、新規之儀不ㇾ致、是迄之通相違無ㇾ之樣相認、可ㇾ差出候、

右之趣御料は御代官、私領は領主地頭より相觸、猶又御代官領主地頭ニても、入念可ㇾ相改候、最承合候儀も有ㇾ之候ハヽ、牧野越中守可ㇾ被ㇾ承合候、

申十二月

〔信府統記 七〕享保七壬寅年、同八癸卯年、松本兩郡宗門改目錄寫

但シ每年改帳目錄アリテ、高增減ヲモ記セル故、今ハ兩年ノ目錄ヲ載スルノミナリ、

信州松本領、町在々宗門改人高、宗旨分目錄、

筑摩郡八與

一二千三百五十八人　增二十三人　内 男千二百四十二人 女千百十六人　庄内組

一三千四百二十二人　減十六人　内 男千七百六十人 女千六百六十二人　岡田組

一三千四百十九人　減二十二人　内 男千七百七十五人 女千六百四十四人　山家組

一二千九百五十五人　減二人　内 男千五百三十八人 女千四百十七人　出川組

一八千六百四人　增八人　内 男四千四百九十四人 女四千百十人　鹽尻組

一四千七百人　減十七人　内 男二千四百八十三人 女二千二百十七人　島立組

一九千三百十九人　減五十九人　内 男五千十一人 女四千三百八人　麻績組

一八千二百五十六人　減八十三人　内 男四千三百六十人 女三千八百九十六人　會田組

右人高四萬三千三十三人　内 男二萬二千六百六十三人 女二萬三百七十人

〇下略

〇按ズルニ、右ハ只當時宗門改ノ情況ヲ知ラシメンガ爲メ、一斑ヲ示セルノミ、

〔馬籠村人數改帳〕元文四年馬籠村

切支丹宗門御改、從前々被仰出候通、此度彌以御穿鑿被仰付候、當御村中、諸寺院並面々家内ハ不及申、名子、水呑、借屋、被官ニ至迄、左ニ相記申候人數之通、無殘詮儀仕候所、右宗門之者無御座候、若此已後、不審成者於有之ハ、此度可申上事、

一切支丹類族之者迄、常々之行跡疑敷儀無御座候事、

右之通御改ニ付、中間五人組切僉儀仕、面々各元判形仕候、宗門之寺判爲仕候、若訴人在御座候ハバ可申分候、仍而如件、

元文四年二月朔日

高三貫四百六十四㊞外一百十二 四十五 新田 畠田

曹洞宗吉祥寺㊞

波路上濱播州流御鹽師

轉切支丹類族

一大東屋敷吉兵衛三拾七　一女房三十　一婿三右衛門十九　一養女ふち七ッ　一母五十六　一扶持喰十右衛門八十一　一添人谷庄左衛門四十一　一添人磯助八ッ　一下男與助二十九〇以下四戸略

合二十六人、內一男十五人 一女十一人〇此合計部吉兵衛以下五戸人員ノ總數

高二百七十三㊞外一貳拾五　新田

同宗㊞

鐵砲持主

一町田喜左衛門四十七死　一女房四十二　一男子喜三郎十一　一女子ゆね十　一男子万三郎二十四

古切支丹類族

一母六十七　一下女ふく八十三

同宗㊞
古切支丹類族
一借屋孫八㊞六十二

同宗㊞
轉切支丹類族
一借屋三助㊞六十三　一女房五十二

同類族
一男子五平次二十三

合十一人㊞内 一男六人 一女五人

外

借屋三助
一女子十四

一紙 元文二年八月より、同郡南方入谷村棟勝屋數伊三郎所ニ十年之年季賣物證有、〇中略 〇以上係ニ人別、自此以下者全戸口之總計也、

高四十一貫五十五文、内三十六貫二十八文、　百姓前

高五貫三百九十二文、新田五貫八十二文、　百姓前

高五十四　茶畑

人頭六十七人、内寺一箇寺、

此人數五百二十人　鐵砲持十一人　六十四人類族

内 一古切支丹類族九人 一轉切支丹類族五十三人

一男三百人　一老男四十七人　一長男二百四人

四十五人　一童男五十五人　一出家三人

内一古切支丹類族七人　一轉切支丹類族三十八人　一山伏二人〇老男以下、有ニ三百十一人、不レ合ニ三百人之總數、恐誤算、

一女二百二十人　一老女三十人　一長女百三十八人

十七人　一童女五十一人

内一古切支丹類族二人　一轉切支丹類族十五人

右之内四人寺家内　四十八人五歳以下

右之通當御村中、切支丹宗門改之儀、屋敷並を以、僧俗共ニ五人組切、委細名々宗旨之判形爲レ仕、向向名元帳面ニ相記差上候通、相違無ニ御座一候、以上、

元文四年二月朔日

組頭　作兵衛〇以下組頭八名略

同所検断　庄之助

同村肝煎　四郎右衛門

北方大肝煎名代　熊谷庄兵衛

新田彌兵衛様〇以下三名略

右之通、切支丹宗門ニ無ニ御座一候、若訴人も御座候ハヾ、拙僧可ニ申分一候、

曹洞宗吉祥寺　目山華押

元文四年二月朔日

新田彌兵衛様

〔出羽國庄内社人宗門御改帳〕享和二年戌二月　備引通　島組

小眞木村出雲正家内

一禪宗寶川寺　印　山王社人　田村出雲正印　年三十五

一同宗　同寺　印　出雲正女房　年三十二

一同宗　同寺　印　同人親相模守（年五十七）
一同宗　同寺　印　相模守女房（年五十二）
一同宗　同寺　印　同人忰八十（年三十一）
一同宗　同寺　印　同人娘つる（年十七）
一同宗　同寺　印　同人忰三蔵（年十五）
一同宗　同寺　印　同人忰角治郎（年十）
人數合十人（内二人社人　同四人男　同四人女）　召仕二人（寺請狀有ㇾ之候）（内一人男　同一人女）
小眞木村大和頭家内
一禪宗寶川寺　印　山王社人　五十嵐大和頭印（年二十四）
一同宗　同寺　印　大和頭女房（年二十）
一同宗　同寺　印　同人母（年五十二）
一同宗　同寺　印　同人伯叔源八（年五十一）
人數合六人（内一人社人　同二人男　同三人女）　召仕二人（寺請狀有ㇾ之候）（内一人男　同一人女）〇中略
若〇若上原書有㆑落丁㆑御制禁之邪宗門之者、幷疑敷者、總而御帳面ニ書載不㆑申者、家内ニ隱置、後日ニ於㆑顯者、其身者不㆑及㆑申上、連判之者迄、何樣之曲事ニモ可㆑被㆓仰付㆒之旨、奉㆑得㆓其意㆒、彌無㆓油斷㆒相改申候、爲㆓後日㆒仍如㆑件、

享和二年戌二月

小眞木村　田村出雲正印
同村　五十嵐大和頭印
下山添村　佐藤播磨正
同村　佐藤駿河正

宗門改證文

稻荷村　齋藤市正
片貝村　鱸下總正
民田村　後藤六太夫○下略

〔官中秘策三十〕邪宗門之事○中略
一切支丹蜂起以後、毎年十一月迄の內奉行所に、諸大名より兩判之證文差出し、是を一紙證文といふ、○中略
一寛永十二亥年十月、吉利支丹宗門無之旨、起請文案文を以被仰出、是則島原一揆之二年前也、元吉利に作、常憲院樣○德川綱吉御諱を避て切に作、

〔柳營秘鑑三〕切支丹宗門改之事
一例年七月ゟ十一月迄之內、奉行所江、諸大名ゟ兩判之證文差出之、是を一紙證文と云、○中略
一寛永十二乙亥年十月、吉利死丹宗門無之旨、起請文之案文を以被仰出、是則島原一揆之二年前也、吉利死丹之字如斯之處、切支丹と書改之、常憲院殿○德川綱吉御諱之字を憚而改之、○中略
一貞享四丁卯年六月廿三日、切支丹之改御定書出、當時一紙證文ニ、從先年被仰出候御法度書之趣相守之、被書載たるは、右被仰出之儀共也、御代々之御法令書は、繁多之事故略之、但幼少之大名よりは、自分之兩判之證文之上ニ、其家之長臣兩判を以證文出之尤證文之文言品あり、

〔明良帶錄後篇〕大目付○中略
毎年十月、切支丹宗門御改なり、諸家より證文出る、万石以下は席々にて、一紙證文となる、是は近來の事也、

〔地方落穗集十三〕宗門改の節、旗本衆より書上文言の事、
一札

一切支丹宗門の儀、前々より懈怠なく相改申候、先達仰出され候御法度書の趣、僉議を遂候處、自分家來知行所百姓等に至迄、切支丹に紛はしき者御座なく候、之に依て銘々寺證文取置候事、

一與力同心支配の者、家來迄穿鑿を遂候處、切支丹に紛敷者御座なく候、勿論寺手形取置申候事、

一此以後與力同心支配の者、家來末々迄、切支丹に疑敷者御座候ハヽ、早速申上べく候、其爲仍て如レ件、

年號月日　　名印判

名乘書判

宛所兩名殿付

宗門改の節、大名衆より書上文言の事、

一札

一切支丹宗門、前々より懈怠なく相改申候、先年仰せ出され候御法度の趣彌相守り、私領中在々所々に至迄、穿鑿を遂、家來下々迄吟味致し候處、不審成者御座なく候事、

一古切支丹の者、末々迄、常々行跡疑はしき儀御座なく候事、

一領中在々所々家來の者、下々又者に至る迄、此以後不審成者有レ之に於ては、早々申達すべく候、

以上、

年號月日　　名兩判

宛所兩名殿付

〔康道公記〕寛永十二年十月十七日、昨日此書物〇起請文を仕事不レ能レ成候て、きりしたん欠落仕由申候間、寫進上申候、禁中方にも御座候樣ニ申候間、御島飼、仕丁、御公家衆被レ召仕候上下男女共ニ一札を被二仰付一、御覽可レ被レ成候、若書不レ申もの御座候ニおいては、此方へ可レ被レ下候、

〔續百一錄〕寛保四年〇延享元年九月廿二日、出納家へ出ス、

宗門御改之覺 毎年廿五日迄也

一代々淨土宗 智恩院末寺 上善寺旦那　山本内藏大屬

一同斷 金戒光明寺寺中 清心院旦那　淨甫

一同斷 智恩院末寺 上善寺旦那　内藏大屬 妻

一同斷　淨 同　喜内

一同斷 淨花院寺中 高雲院旦那　下女

右之通、家内宗門相改候處、御法度之切死丹耶蘇悲宗門壹人も無御座候ニ付、今度證文差上申候處如件、

延享元子年九月　山本内藏大屬印

出納殿

〔漂客見聞錄 上〕無人島江漂流仕候後、アメリカ船江被助上候土佐國之者三人口書、〇中略

右之通申上候處、外國逗留中、邪宗門等學候義は無之哉、若右體之義有之候ハヾ有體ニ可申上旨、再應御吟味御座候、

此段私共外國逗留中、邪宗門等學候義は勿論、右體之義進候義無之、如何と心付候義も毛頭無御座候、若隱置、外より相顯候ハヾ、如何樣之御咎ニも可被仰候、〇中略

右之通、少しも相違不申上候、以上、

嘉永四亥年十一月八日　筆之丞事 傳藏爪印

五右衛門爪印

萬次郎爪印

〔政談四〕宗門手形事

宗門手形ニ、代々何宗ト書スルコト、僞リヲ敎フルナリ、公法ノ第一嚴害ニスルコトニ、僞リヲ敎ヘテ其レヲ定法ト覺ユルハ、不詮議ノ至リ云ハンカタナシ、當時ハ何事モ斯ノ如ク、法ヲ立ツルト云ヘバ、下ニ僞リヲ敎フルコトニ成ル故、下ニ僞リ多キハ、畢竟上ノ敎ナリト云フベシ、サレドモ吉利支丹宗門ノ御改メノコトハ、僅ニ百年以前ニ始マリタルコトニテ、右ノ文言ハ、其ノ時分ニ立テタル法ナリ、其ノトキハ、武家皆知行所ニ居住シ、家來多クハ譜代者ナリ、サナキモ皆知行所ノモノナレバ、右ノ文言全ク僞リニアラズ、然ルニ世移リテ、武家江戸住居ト成リ、譜代ナクナリテ、出替リモノヲツカヒ、其ノ出替リモノ、皆フダンニ御城下ニテ召シ置クコトニテ、其ノ來歷ノ知レヌニ、御城下ニテ請人ヲ立テ、其ノ請人ノ寺ヲ旦那寺ニシ、又大名ノ家來モ江戸勝手多クナリ、他所ノ浪人ナドヲ召シ置キタルニ江戸ニテ旦那寺ヲ拵ヘサスル故、右ノ文言大ナル僞リトナリタリ、一卷目ニ云ヒタルガ如ク、出替リ奉公人ヲ皆地頭請ニセバ、宗門手形ハ在所ニテ濟ムコトナル故、昔ニカヘリテ、右ノ文言ノ通リニテ少シモ僞リニナルマジキナリ、何事モ世ノ風俗ノ移リ行クコトヲ心得ヌ故、斯ノ如キ誤リアリト知ルベキナリ、

寺請

古事類苑

宗教部七十二

耶蘇教下

〔闢邪管見錄 上〕宗門檀那請合之掟

掟

一切支丹の法は、死を不顧、入火も不燒、入水も不溺、身より血を出して、死を成すを、成佛と立る故に、天下の法度嚴密なり、依之死を輕ふする者可遂吟味事、

一切支丹に取付ものは、闍單國より、毎日金七釐を與へ、天下を切支丹に成べし、神國を妨る邪法なり此宗に取付ものは、釋迦の法を不用ゆへ、檀那寺の檀役を妨げ、佛法の建立を嫌ふ、仍之可遂吟味事、

一頭檀那なりとも、其宗門の祖師忌、佛忌、盆、彼岸、先祖の命日、絕て參詣不仕ものは、判形を引、宗旨役所へ斷り、急度可遂吟味事、

一切支丹、不受不施のものは、先祖の年忌、僧の弔を不請、當日宗門寺江一通り志を述、內證にて俗人一類打寄、弔僧の來る時は、不興にして不用、仍而可遂吟味事、〇中略

一切支丹、悲田宗、不受不施、三宗ともに一派なり、彼尊む處の本尊は、牛頭、切支丹、丁頭佛といふゆゑに、丁頭大うすと名乘なり、此佛を頼み奉り、鏡を見れば佛面と見え、宗旨轉じて犬と見ゆる、是邪法の鏡なり、一度此鏡を見るもの、深く牛頭切支丹丁頭佛を信仰し日本を魔國に成す、雖然宗

門吟味之神國故に、一通り宗門寺へ取付、今日之人変りし、内心不受不施にて宗門寺に不出入、仍之可遂吟味事、

一親代々より、宗門に取付、八宗九宗の内、何宗に紛無之とも、其子如何成勧めにより、心底邪法に組し居可申も不知、宗門寺より可遂吟味事、

一佛法を勧め、談義講釋をなして、參詣致させ、檀那役を以て、夫々の寺法用修理建立勤さすべし、邪法邪宗は、寺の事一切せず、世間交り一通りにて、内心佛法を破り、僧の勧めを不用、仍之可遂吟味事、

一死後死骸頭ニ剃刀を與へ、戒名授け申事、是は宗門之住僧、死相を見屆、邪宗ニ而無之段、慥ニ合點之上、可致引導なり、能々可遂吟味事、

一宗門寺を差置、外寺の僧を頼弔ひ、其宗門寺之住持人を退け申事、別して可致詮議、邪宗邪法可遂吟味事、

一天下一統、正法に紛無之者には、判形を加へ、宗旨請合可申候、武士は其寺之請帳に印證を加へ差上、其外血判難成ものは、請人請合を以、證文可差出事、

一先祖之佛事を、他寺へ致持參、法事勤申事堅く禁制、雖然他國他在にて、死たるものは格別の事、且持佛堂、佛像畫像備物に至るまで、能々見屆可申、且又毎年參廻之儀、其宗門之佛壇吟味として相廻可申事、

一相果候時は、一切宗門寺之指圖を請、取行可申事、

一天下之敵、万民の怨は、切支丹、不受不施、悲田宗なり、馬轉連之類族相果候節は、寺社役所へ相斷、撿使を請て、宗門寺之住持、弔ひ可申事、役所へ不斷弔ひ申時は、其僧之越度、能々可致吟味事、將又横樣無體に、檀那役等其もの分限不相應之儀は、宗門寺より可有用捨事、信心をもつて、佛法を尊

み、王法を敬ふものは正法なり、

右十五ヶ條之趣、一ッも於相背は、上者梵天帝釋、四大天王、五道之冥官、日本伊勢天照太神宮、八幡大菩薩、春日大明神、其外氏神日本六十餘州之神明之可蒙神罰もの也、

慶長十八年癸丑十一月日　奉行

天下之諸寺院、宗門請合之面々、此内一個條も相背候面者、急度可被仰付、能々可被相守者也、

右之通、被仰出候條、堅可被相守也、

諸宗役寺血判

（國師日記）慶長十九年二月四日

吉利支丹御拂ニ付而御法度被仰付故、宗旨をかへ候衆をば、其寺々より宗旨御請由、其上依上意津輕へ可被遣旨承尤ニ存候、

（天龍寺文書七）覺

此度自御公儀被仰出候、吉利支丹宗旨改、門前境内所々召使之者等迄、人々之判形取、不殘吟味申候、末寺等之儀、遠方故、書状遣吟味申事候、以上、

極月四日　鹿王院　金剛院　正圓院　瑞應院　法苑院　玄擧花押

天龍役者禪師

○按ズルニ、此文書ノ包紙ニ延寶八年トアリ、

（天龍寺文書七）一札

一吉利支丹宗門御法度御改、從御公儀被仰付候ニ付、院内僧俗召使□下人幷家來之輩、境内之百姓等、逐一吟味仕候處、御法度之宗門無之候、萬一訴人於有之者、重而御斷可申上候、仍而爲後證之狀如件、

神職行宗門改

踏繪

天和元辛酉年霜月七日

慈濟院代　妙悦黒印　華德院代　梵壽黒印

寶筐院代　周桂黒印

天龍寺役者禪師

〔大學或問〕或問、吉利支丹の法を斷絶せん事いかゞ、云、吉利支丹は、○中略諸のごとく吉利支丹ならでは吉利支丹は知らずといへり、今の寺請は何の用にもたゝず、殊の外なる國の費なり、九州にてさし來るものを捕へに行たる者のいへるは、常人よりは佛寺を信じ、後世願と見ゆるものなり、○中略其上此吉利支丹請にて、不義無道の出家變り、佛法の實は亡びたるといへり、○中略或問、佛法は、○中略今吉利支丹の寺請に、貧なるものは迷惑し、貧にあらねど、少し目の明たるものは、きのどくに思ひ居れり、其故は貧なるものは、出家に金銀をあたへざれば、寺請ニ立ぬ事を迷惑し、目の明たる者は、不義不作法の出家なれども、是非なく檀那とする事をきのどくにおもへり、

〔日本教育史資料十二岡山藩〕芳烈祠堂記

故國主從四位下左少將源朝臣、小字新太郎、稱松平、本氏池田、○中略於是公時權宜以告於東都、令祠官各監耶蘇、以出證狀、可謂後世治國之良法也、

〔長崎港草四〕踏繪之始

踏繪ノ始マリシハ、寛永五戊辰ノ年、水野君○守信ノ御時ニ、轉ビノ者ヲ試ン爲、切支丹ノ宗信スル掛物ノ繪像ヲ以、是ヲ踏セラル、翌年、竹中氏掛物幷ニ鑄物ノ銅像ノアルヲ版ニ彫イレ、廣ク諸人ニコレヲ踏セラル、同七年庚午ノ年、大坂ヨリ邪宗門ノ乞食七十人送ラレ來ル、是ハ其頃大坂ニ於テモ改之ルコト嚴密ナルニヨリ、乞食非人トナリテ隱居タル、執書深キモノドモナレバ、長崎ヨリ警固ノ士、幷通詞名村八左衞門ヲ差添ヘ、呂宋國ヘ流罪ナリ、今乞食非人穢多ニ至ルマデ、踏

繪アルハ此因緣トゾ聞ヘケル、寛文九年、河野氏ノ御時ニ、繪像破レ、銅像不足ナルニヨリ、本古川町祐佐ニ仰付ラレ、唐銅ニテ廿枚ノ繪板ヲ造ル、

一說ニ銀屋町ヨリ、細工人ヲ呼ビ、誓詞ヲサセ、西政所ノ前ニ假屋ヲ構ヘ、廿枚一日ニ鑄造ルト云ヘリ、

長崎ヨリ、踏繪借用ノ國ハ、肥前島原、同平戶、大村五島、筑後ノ久留米、豐後ノ木付、同竹田、同臼杵、同ク府內、同日田、日向ノ延岡、以上十箇處ナリ、島原ハ近來國元ニ於、鑄造ラルトナン、

〔踏繪〕大サ圖略○圖の如く、眞鍮にてよちの高サ五分程、兩端に丸く足附キ、高サ五分程、總高サ一寸程、繪形あげにて、至て美觀なる物也、此繪廿五枚ありと言、各違候哉其所は不知と言、豐前國中津ニテ宗門改之節、隔年に長崎御藏よりして上に數を切ぬき置踏するといふ、此四枚は菅沼定主、其改役にかゝりたる時、見たるを寫、

〔遲媽款狀〕長崎奉行の家士へ問合たる所、答書左之通、

一崎陽踏畫之義、被仰下承知仕候處私方ニ寫等一向無御座候、成程崎陽官府へ、九州諸家より借用ニ使者參り候得共、貸し遣申候員數之所も覺不申候、かねの踏畫と申候得ば、板のも御座候哉、鐵の厚みは凡而一寸も可有御座候、長サ六七寸、幅四五寸も可有御座候、夫江切支丹佛の由、異人仕置ニ相成居候金鑄付候ものニ御座候、或は四足を一所ニえばり、夫へ大きなる釘抔を打候抔相見え申候、其踏畫を壹人別ニ踏候事之由承り申候、猶員數幷畫之品等は承合仕、尙又可申上候、乍去寫は御坐候まじく奉存、右之段宜被仰上可被下候、折節取込早々申上候、

七月十八日

踏畫之義、猶又承合候所、員數等書留ニテ御座候得共、其外ニハ覺不申候よし、尤此間申上候通木と銅兩樣御座候、畫は不殘違申候、繪のふり合は、此間申上候通ニ御座候、畫の留は無御座候由申

聞候、

○按ズルニ、今現ニ東京帝室博物館ニ銅版十個、木版七個ヲ藏セリ、其形狀ヲ言ハンニ、銅版ハ各長六寸許、横四寸許、高一寸五分許アリテ、表面ニハ緣廓ヲ造リ、其中ニ或ハ聖母ノ耶蘇ヲ抱クル體ヲ隱起スルアリ、或ハ耶蘇ノ弟子ニ說教スル體ヲ隱起スルアリ、或ハ耶蘇ノ刑セラルル樣ナドヲ隱起スルアリテ、其狀ハ一樣ナラズ、木版ハ概シテ銅版ヨリ大ナル事、竪横各二三寸許ニシテ、中央ニ耶蘇ノ事蹟ヲ隱起セル圓形ノ銅版ヲ嵌入セリ、而シテ以上銅版木板共ニ長方形ノモノト、圓形ノモノトアリ、中ニハ隱起ノ畫像顯然トシテ存スルモノアレドモ、又大ニ磨滅セルモノアリ、

〔長崎志五〕切支丹改樣之事

一每年切支丹宗門御改ニ付、總町人數男女不殘宗旨帳仕立、正月四日より八日迄、町年寄年番より、踏繪請取一町限りニ、乙名組頭立合、壹人宛相改、印形を取、踏繪爲踏申候、追而宗旨改帳、町内家持竈主印形取揃、御奉行所にて御改之上、乙名組頭奧印仕、直ニ相納申候、

但旅人者別ニ帳面仕立、踏繪仕らせ申候、

一總寺社家内門前之者ニ、不殘御代官手代相廻り、踏繪爲踏申候、尤町掛り山伏之義は、乙名組頭立合、町内同前ニ相改申候、

一鄕方踏繪之儀者、御代官手代庄屋使、立合、踏繪爲踏申候、

一穢多非人者、牢守支配ニて同前ニ踏繪仕候、

〔教令類纂初集百五〕明曆四戊戌年四月廿六日

覺

一大村領宗門改仕度候間、切支丹ふみ繪かり申度と、大村因幡守家來方より、與兵衛所江申越候

へば、先おそからざる儀と申、ふみ繪かし不申由、與兵衛方ゟ申越候所之籠舍之ものども、かたづけ候て以後、蹈繪貸申候ては、如何可有御座哉之事、

是ハ書面之通可然事、○中略

明曆四年四月廿七日　名なし

甲斐庄喜右衛門殿

黑川與兵衛殿

〔鹽尻六〕長崎蹈繪并耶蘇一件　肥前長崎港、每歲正月四日以後、一七日のあひだ、蹈繪とて紫利窮當が所崇の像を、ひろく市井に出して、諸人にふませ侍る、此像は銅にて鑄たるもの、六七寸ありとぞ、常は獄舍に藏め、此時三人町年寄、官吏の命を奉じて出す、正月十日後は、長崎近き城府へ此繪をわたして、ふませ侍る、天草等の如きは、其處別に繪を置き時々蹈ます、凡そ異邦の船入津すれば、先かならず船中の人に、彼繪盡く蹈ませ、然かして其土の街談を聞て後、船より上げ侍るとなん、且齎來の書籍は一所に上させ置て、通事等の役人考改、若天主法なれば卽燒く、先年一書あり、よんで何事ともしらず、其理通じ難きものあり、咸通詞考へ、此を横行によみしに、皆耶蘇が邪法なりしかば、やがて官に告て、其船ともにやきしづめ侍りしとかや、彼耶蘇萬づ巧にして、每に人を欺き、己が法にみちびくゆゑ、國禁殊に嚴密なり、○中略　同年、○寬永六年我薩摩國へ漂寄せし、異國人略倭語に通じ、人事を問へば、己が懷なるよこ文字の書簽を考へ答へし、まぎれなき南蠻伴天連にて、其名をヨアンキリステカウスウロと云ひし、近年我朝に鑄たる、元の文ある小判金三兩を懷中せしとぞ、とかく僉議ありて、長崎の獄舍に繫しとなん、

〔日本西敎史下〕第二十章○中略

初メ前將軍○德川家光天主敎信者ノ日本ニ出入スルヲ絕タントシテ、新法ヲ設ケ、外商上陸ノ時、

十字架ヲ出シテ、之レヲ踏マシメタリ、蓋天主教徒ハ決シテ此般ノ事ヲ做シ得マジト信ゼシ故ナリ、爾來和蘭人ハ之レヲ蹈ミ、難色ナシト雖モ、之レガ爲メニ通商ヲ減ゼリト聞キ、五諸侯舊制ヲ廢シ、十字架ヲ外人ニ蹈マシムルヲ止メタリ、

〔亞墨利加國條約并稅則〕第八條

日本ニある亞米利加人、自ら其國の宗法を念じ、禮拜堂を居留地の內ニ置も障りなし、並ニ其建物を破壞し、亞米利加人、宗法を自ら念ずるを妨る事なし、亞米利加人、日本人の堂宮を毀傷する事なく、又決して日本神佛の禮拜を妨げ、神體佛像を毀る事あるべからず、

雙方の人民互ニ宗旨ニ付ての爭論あるべからず、日本長崎役所に於て踏繪の仕來は既ニ廢せり、〇中略

第十四條

右條約の趣は、來る未年六月五日（千八百五十九年七月四日）より執行ふべし、〇中略

本條約は、〇中略此取極のため、安政五年六月十九日、（千八百五十八年、亞墨利加合衆國獨立の八十三年七月廿九日）江戸府において、前に載たる兩國の役人等名を記し、調印するもの也、

井上信濃守　花押

岩瀨肥後守　花押

〇按ズルニ、豐前國中津藩（奧平氏）ノ舊記ニハ、萬延元年ヨリ踏繪止ムトアリ、

〔譯家必備　二〕諭唐山併各州府船主及客目梢等知悉〇中略

踹銅板、也是要緊、不可亂來、乙个々々除帽脫鞋、正々經々踹付去、原來備們、踹銅板、的規矩、狠不好、備我備來去、各人爭先、竟不像樣子、一邊踹銅板、一邊點人、一齊去不傳點了、乙个々々、慢々去、總管備在傍邊叫、大家齊々整々、不要亂走亂來、我一時忙了、竟忘記了一件事、〇中略

囑託

某年某番船主

〔清白士集二十四警紀〕日本碎語〇中略

俗禁天主敎甚峻、唐船初至、例有讀告示、蹈銅板二事、告示敍說天主邪敎煽惑人心、慮客有挾之而來者、故徧諭之、銅板鑄天主像、踐蹈以明無習敎之人、

〔原城紀事四〕三年〇寬永丙寅、河內守水野守信、爲長崎奉行、囑託。州郡、索伴天連黨、初其法猶疎、至正德中、購伴天連銀五百枚、伊留滿銀三百枚、已改宗復舊三百枚、新入者百枚、躡徒弟訴其師若其朋、照例購賞、知而匿者罪及隣伍、著爲永典、長崎實錄大成

〔敎令類纂初集百〕寬永十癸酉年二月二十八日

長崎奉行江之奉書

覺〇中略

一伴天連訴人褒美の事

附上の訴人には銀百枚、それより下はその忠にしたがひ可被相計之事、〇中略

右條々、可被守此旨もの也、依執達如件、

寬永十年酉二月廿八日　伊賀　信濃　讚岐　大炊

曾我又左衞門殿　今村傳四郞殿

〔憲敎類典四ノ十六切支丹〕寬永十五戊寅年九月十二日

覺

一ばてれんの訴人　銀子二百枚　一いるまんの訴人　同　百枚　一きりしたんの訴人

同　五十枚　又は三十枚、訴人之品による

右訴人いたし候輩は、縱同じ宗門たりといふとも宗旨をころび申出においては、其咎をゆるし、

御褒美如御書付可被下之旨被仰出者也、

寛永十五年九月十二日

〔享保集成絲綸錄二十一〕寛永十六卯年七月〇中略

條々〇中略

一領内浦々に、常々慥成者を付置、不審有之船等におひては、入念可相改候、自然異國船著岸之時は、從先年如御定、早船中之者を陸へ上之義あらば可申出之、隨訴人之高下、急度御褒美可被下候、若以屬託頼候におひては、其約束之一倍可被下事、

右條々所被仰出也、仍執達如件、

寛永十六年七月五日　對馬守在判　讃岐守在判　伊豆守在判

右諸大名江被仰出、浦々御仕置之奉書、

〔憲敎類典四ノ十六切支丹〕承應三甲午年正月

切支丹之高札

定

一伴天連訴人　銀三百枚　一いるまん訴人　銀二百枚　一同宿并宗門訴人　銀五十枚或三十枚

吉利支丹宗門累年御制禁也、御代替に付、彌以御改嚴重に、御褒美之品被增加候、此上若かくし置者於有之者、奉公人は不及申、町人百姓等は、其五人組迄、可被行曲事之由、被仰出所也、

承應三年正月

〔敎令類纂初集百五〕延寶八庚申年八月

定

切支丹宗門之事、累年御制禁たりと云共、彌以無斷絶相改べし、自然不審成者有之者、申出べし、為御褒美、

伴天連之訴人　銀五百枚　いるまん之訴人　銀三百枚　同宿幷宗門之訴人　銀五十枚　又は百枚、品によるべし、隱置他所より於顯は、其五人組まで曲事たるべし、

右之通、囑託可被下之旨、從先年雖被仰出、彌以可相守之、若令違犯においては、急度可被處嚴科者也、仍下知如件、

延寶八年八月日　　奉行

〔憲教類典切支丹四ノ十六〕天和二壬戌年五月

定

一切支丹宗門は、累年御制禁たりといへども、自然不審成者之ば、可申出之、御褒美として、

一ばてれんの訴人　銀五百枚　一いるまんの訴人　銀三百枚　一立かへり者の訴人

同斷　一同宿幷宗門の訴人　銀百枚

右之通可被下之、たとひ同宿宗門之內たりといふ共、訴人に出る品により銀五百枚可被下之、隱置他所より顯に於ては、其所名主、幷五人組迄、一類共に可被處嚴科者也、仍下知如件、

天和二年五月

〔官中秘策三十〕邪宗門之事〇中略

一切支丹之儀は不及申、宗旨疑敷者於有之は、御領は御代官、私領ハ其地頭江可訴之、勿論切支丹奉行江早々可申出之、品ニより急度御褒美可被下之、最雖為同類、其科をゆるし、あだを不成樣に可被仰付候、若隱置後日顯に於ては、可為曲事事、

〔千載之松〕寛永十九年五月、甲斐國武田家の浪人梶原傳九郎召出されしは、難有思召なり、傳九郎兄弟、是よりさき、殊に貧窮にて、親を養ふべき手立なき程に、行詰りし故、身を殺しても親を可養と存究め、折節切支丹改に付、其訴人せし者は、褒美銀數多下賜せらる・旨、高札に記し立られしを見て、傳九郎其弟に言ふ樣、我等伴りて切支丹宗の者となり、其許訴人すべし、然らば褒美銀下賜せらるべし、夫にていか樣にも孝養すべしと、弟答ふるには、弟の身として兄の訴人に出で、世にながらへ居るは甚だ不本意故、某切支丹の者とならんとて雙方爭ひし處、傳九郎言ふ、決して然らず、我等年もたけ、親の介抱久しくは難任心底、其許は年若なれば、永く親の爲とならん程に、早々訴人に出べしと言ひしに付、其意に任せ、弟江戸へ出で、評定所へ訴出たり、奉行衆召出し、對決せられしに、彌傳九郎切支丹宗無紛に決す、然れども訴人愁嘆の樣子自然相顯れ、難心得事なりとて、再應糺明ありたれども、彌切支丹宗相違なしと申立、去れども其樣子いかにも不審の事に付、甲斐國の役人、並其邊の者ども召出され、尋問ありしに、切支丹宗の者とは聞えず、實は貧窮にせまり、孝養のため、如斯兄弟相談せし始末段々顯れ、去とは奇特なる志、珍敷事故、忽ち達上聞褒美として金子下賜せらる、

〔日本武士鑑四孝子〕孝子僞切支丹訴人事

江戸にて或浪人兄弟、親を養べきたよりなくして、難義に及し比兄がいはく、某を切支丹と訴人して御褒美を得て、親を安樂に育てしがなと密談す、弟此義尤然べし、乍去兄を訴む事は、天の恐も有ぬべし、只我等を訴られよと、一向歎しかば、よしや親の爲に捨ん命可惜事かは、兎も角もせよとて、親には深く隠し、切支丹御奉行井上筑後守殿に訴しに、召出し尋ね給へば、其身も切支丹なりといひしにて、訴人には白銀百枚くだされ、其者は則禁獄せられしに切支丹の頭ばてれんが方より訴しは、今度の者は、我等が宗門にては候はず、其故は此方の宗門には、定りたる唱ごと

候を、此者は不存、又何の手筋よりなれるぞと問へども、分明ならずと申せしかば、其者を召出され、僉義せられしかば、此上は包に所なし、誠は親を養ひ兼、兄弟談合にて、一人身を捨、親を養べき謀にて、公儀を掠申科難遁候、あはれ願くば親と兄が命御助候て、某一人いかやうにも御仕置に仰付られ被下候ハヽ、生々世々難有御事に候と、あながちに歎しかば、頓逹上聞に奇特の者なりとて、町年寄樽屋藤左衛門に、暫御預有て、其後命助させ給ふに、井上筑後守殿より金拾両、町奉行加々爪民部少輔殿より黄金壹枚、囚獄司石出帶刀、金子三両、藤左衛門金三両合力有し、此義世上にかくれあらざれば、彼兄弟を保科肥後守殿召出し給ひて、恩賞にあづかりけるとなん、

自首

〔西洋紀聞上〕正德四年甲午の冬に至て、かのむかし、其教の師の正に歸せしものゝ、奴婢たりしといふ夫婦のもの（此教師は黒川壽庵といひしなり、番名はフランシスコチウフアンといひし歟、奴婢の名は男は長助、女ははるといふ、）自首して、むかし二人が主にて候ものゝ、世にありし時に、ひそかに其法をさづけしかども、國の大禁にそむくべしとも存せず、年を經しに、此ほど彼國人の我法のために、身にかへり見ず、萬里にしてこゝに來り、とらはれ居候を見て、我等いくほどなき身を惜しみて、長く地獄に墮し候はん事のあさましさに、彼人に受戒して、其徒と罷成り候ひぬ、これらの事申さゞらむは、國恩にそむくに似て候へば、あらはし申す所なり、いかにも法にまかせて、其罪には行はるべしと申す、まづ二人をば、其所をかへてわかち置かる、明年三月、ヲヽランド人の朝貢せし時、其通事しら、ローマ人の初申せし所にたがひて、ひそかにかの夫婦のものに、戒さづけし罪を糺されて、獄中に繋がるこゝに至て、其異情敗露はれて、大音をあげて、のゝしりよばはり、彼夫婦のものゝ名をよびて、其信を固くして死に至で志を變ずまじき由をすゝむる事、日夜に絶ず、此年來れるヲヽランド人申せしは、はじめ北京におもむきしといふ、トーマステトルノンも、ほどなく其國に歸れりと聞ゆ、これは初よりかしこにありし其國人に、妬忌せられて、とゞまり居る事かなひがたくてなど承りぬと申しき、ま

た此人のこゝに來れる事、いかにやおもふと問ふに、されば此事、我方の人も心得ぬ事に申す也、或はもし其罪を犯す事ありて、すでに死に當り候ひしを、いかにも其罪贖ふべき事をおもひはかりて、此國に來らむ事を望みしかば、彼國の人も、もしかれが申すごとくに、申ひらくこともありなむには、何の幸かこれにすぐべき、又國法のごとくに殺されんには、もとよりの事也とおもひて、望請ふ所に任せてもや候らむと申しき、略○註かくて此年の冬十月七日に、彼奴なるものは病し死す、五十五歲と聞えき、其月の半より、ローマン人も、身病ひする事ありて、同じき廿一日の夜半に死しぬ、其年は四十七歲にやなりぬべき、

轉宗

〔南蠻寺興廢記〕慶長十六年ヨリ十六年過テ、寛永三年ノ頃ヨリ、六十六部ノ如キ者、丹波近江等ノ近國、其外遠國ヘモ徘徊シテ金銀ヲ與ヘ、三世鏡ヲ見セ、勸メ巡ル者アリ、諸國又此宗發スル由相聞ヘケレバ、嚴所ノ官使、嚴ク糺明シテ、改宗セザル者共ヲ召捕、一人ヅヽ俵ニ入レ、京都三條河原大坂御城ノ馬場、堺七道ノ濱、此三箇所ニ、五十俵ヅヽ積上ル、改宗ノ願ヒアル者ハ、俵ノ儘コロビ出テ願ヲ遂ス、願所ノ宗門ヲ聞、其寺ノ寺僧ヲ呼ビ、其寺ノ檀那ニ仕ル旨、證文ヲ奉行ヘ差出ス、是レ寺手形ノ始ル所ナリ、改宗スル者ヲコロブト云モ、是等ノ節ニ始ル事ナルベシ、其節遠州敷知郡炭拔ト云所ニ、此宗門起ル、是ハ告須棗ガ、暫ク此國ニ止リシウチノ弟子ナリ、奉行所ヨリ之ヲ制止ス、大坂ニテ、コロバヌ者二人、內一人ハ備屋七兵衛逆磔、百姓八右衛門同罪、青物屋惣吉ハ水責ニテ死ス、京都ニテ、コロバヌ者四人、內二人ハ磔罪、二人ハ火焙、泉州堺ニテ、コロバヌ者三人、內二人ハ磔罪、一人ハ牛割、此時宗門不殘斷絕ス、

〔吉利支丹始末〕一寛永三年より、此契利支丹に歸伏の輩一人ヅヽ俵へ入れ、京三條、大坂御城內の馬場、境七道の濱といふ所に、五十俵ヅヽ積み重ねて、改宗せぬ者を柴薪にて燒殺す、改宗する輩は、ころぶといふは、助くべくと云わたし有故に、差當り下積になりし者、かなしさに、ころぶべく

といふに、ころばんといふものは、これを引おろし何宗になり度とたづね、其願の宗門の住持に引合せ、當寺旦那に仕候との、寺證文取渡し、助りけりとなり、夫よりして寺手形一札といふこと始りぬ、其節遠江國富士郡といふ所に、又此宗門起りける、是は、コウスモウ、此所に暫く居たりし時の弟子共とかや、しかし是も御詮議強く早速鎭り、其後打絶し所、また十二年過て寛永十二年十月、肥前國天草一揆起る、島原合戰是なり、

〔耶蘇宗門制禁大全 一〕宗門制禁來由○中略征伐記ニ曰ク、肥前國高來郡伴天連有之、人民ヲ勸ム、故ニ諸人悉ク吉利支丹ニ歸依ス、○中略板倉伊賀守勝重ハ、諸司代タルニ依テ、洛中洛外ヲ詮議シテ、伴天連ノ輩召捕ヘシニ、今度ハ上意ニ依テ助命、本國エ追放サル、重テ來朝仕ルニ於テハ、可為死罪ノ旨申シ渡ス、悉令禁斷ト也、猶モ本宗ニ不歸者ヲバ、俵ニ巻テ五條ノ橋ニ積重テ、鐵杖ヲ以テコロベコロベト責ケル、夫故本宗ニ歸ルヲコロブト云也、狂歌ニ云、ころびふく尺八竹をきりしたん俵にまかれこもそうになる、

〔長澤聞書〕一天下吉利支丹御法度被遊候事は、板倉伊賀殿京都所司代被成候時、五條松原通りを稻荷の神輿渡申候折節、柳の馬場の辻にて、みこしに半弓を射つけ申により、神輿渡不申候、依之伊賀殿へ相届候ところ早速家來中數多被遣、御吟味被成候得ば、吉利支丹宗旨の者に候、それより御法度に被成、三條五條の橋に、右の者共を、竹の簀巻にいたし、らんかんに持せかけて置、宗旨を成かへり候得ばゆるし、なりかへらざるものは、其後七條川原にて七十人火あぶりに被仰付、夫より堅く被成候、

〔翰川筆話 四〕切支丹改宗
米原が女の話とて聞し、板倉平右衛門殿、京の御役の時、切支丹宗門の者おびたゞしくありて、いか樣に改宗せよと諭されしかども、いれず、ある日大暑炎天の時、切支丹宗の者六百人ばかり

たわらに入、首ばかり出し、くゝりまろめ、六條河原にやらひを結ひ、ひろくつみおき、朝より晩まで其儘おけと有事也、はじめはかの宗のもの共、提斯の守りあれば、何たる炎天も、涼氣生せんとたのみ居しに、本尊の守り何かあるべき、大陽の炎熱赫々とやくが如くにありしかば、かの儀の者共くるしみにたへず、皆改宗を願ひ出ければ悉くゆるし、たゞうどになれと命せられ、一人を不刑して、邪宗を改められし、この儀につみしを、米原が女人に負はれて見に行きて、叫喚の聲、京中にひゞきしを、後までおぼえ居しよし云へりとなり、

轉宗起請文

〔制禁集〕就、幾利支丹御改一札之事

私共儀妻子共、幾利支丹宗門ニ而無御座候、若偽於申上は、日本之神祇、不殘蒙御罰可申者也、為其一札如件、

一幾利支丹宗旨ニ成り、此前應願申事、後悔ニ而御座候間、後々末代幾利支丹ニ立歸事仕間敷事、

同妻子眷屬他人へも其勸仕間敷候、自然何方より伴天連來、こんぴさんの勸をなすと云とも、此書物判いたし候上は、其儀曾以妄念ニもおこし取扱事、同心仕間敷候、本之幾利支丹ニ於、立歸は、じゆらめんとの起證文を以、是をてにする者也、

一上には天公でうす、さんだまりやを初メ奉り、諸のあくしよの蒙御罰、死ては、いんへる野といふ獄所ニおいて、諸天狗の手に渡り、永五衰三熱之苦を請、白癩黒癩とよばるべし、仍而じゆらめんと如件、

一私共祖父親之代、拙者共勿論、女房ニ至まで、幾利支丹誓紙、偽無御座候、召仕之者共改申候得共、先祖右之宗門之者無御座候、以上、

伴天連幷吉利支丹宗旨、從此以前御制禁候得共、于今斷絶無之樣ニ被聞召候、依之御法度被仰付候間、領分能々穿鑿候而目利右之宗門於有之者、捕置可申上候、以上、

寛永十二年亥九月七日

〔法金剛院文書〕吉利支丹ころび申、しゆらんめんとの事、

一我々は何年より何年まできりしたんにて御座候へ共、何年の御法度より、ころび申候事、うたがひ無之候、今程なにの宗體にて御座候、

一吉利支丹宗旨ニ成、此前方ねがひ申候事、今に後悔にて御座候間、後々末代きりしたんに立歸る事仕間敷候、同妻子けんぞく、他人へも、其すゝめ仕間敷候、自然何方より伴天連並、こひさんのすゝめと云共、此書物判をいたし申上候儀、かつて妄念にもおこし取あつかふ事に、同心いたすまじく候、もとのきりしたんに立歸るにおいては、しゆらめんとの起請文以て、是をてつする者なり、

一上ニは天公でうす、さんたまりやをはじめたてまつり、もろ〳〵のあんじよの蒙御罰、死てはいんへる野と云於獄所、諸天狗の手に渡り、永々五衰三熱のくるしみを請、重而又現世にては、追付らざかなり、人に白癩黒癩とよばるべき也、仍おそろしきしゆらめんと如件、

寛永十二年十月　　　何々村ころび　誰　判

　　　　　　　　　　妻子　判

右三ヶ條は、ころび候きりしたんに書せ取可申候、奥二ヶ條ハ總様之百姓共并召仕之者迄書也、庄屋所に請取可申者也、

亥十月十日　　　　　周防印

法金剛院

庄屋

百姓中

（長崎志六）きりしたんころび書物の事

一我等數年元きりしたんにて御座候得ども、きりしたんの敎承り候程、魔法之敎へにて御座候、第一後生之事取成、伴天連の下知を背き候もの、ゑすこむにゆんをなんやかのへ落し申べくと敎候事、何として人間が人間を、なんやかのへ落し可申候哉、箇樣の事、伴天連も畢竟他の國を取謀にて御座候通り、承り屆け、きりしたんをころび、我等法花、女房一向宗に被成候、就夫御奉行樣へ、書物を差上申候間、以來言上申事仕間敷候、其上心にもきりしたん宗旨の望、含申間敷候、此旨少も相違御座候へば、でうす伴天連ひいりよすひりつさんとを初奉り、さんだまりや、諸のあんじよへあとの御罰を蒙り、でうすのからだ絶はて、しゆうたすのごとく、たのもしを失ひ、後悔の一念もきざゝずして、結句人々の嘲りと罷成、終に頓死仕り、いんへるのへ苦患に責られニ加ふ事、御座ある間敷者也、仍かくうりかゑけれしやのしやうもん如件、

相兵衛かしや九介 女房

正保二年酉

進上 御奉行樣

か樣之しやうもん言をいれ、きりしたんをころび、御影をふむなど申事、昔より今に至る迄、何國にても、きりしたんの上にためしなき事にて候間、何をふまへにて、又言上申事成可申哉、其上眞之言上令申事、ばてれんに逢不申候ては不相成候、ひそかに我々言上候事、生得なき事にて候、以上、

南蠻ころび伴天連 中庵
日本ころび伴天連 了順
日本ころび伴天連 了伯

裏書 右之九介夫婦、一向宗ニ罷成候、明白實正也、仍如件

〔憲敎類典四ノ十六 切支丹〕貞享四丁卯年六月

覺

一前々切支丹宗門之由ニて、本人有之ニ於ては、何年以前何方ニて詮議有之て、何年以前、ころび候邪宗門之者ニて候へども、切支丹を訴人仕候ニより、其科被成御免、在所へ歸罷在候哉、其わけ委細書付可被申事、

一右ころび候前之切支丹之者有之、唯今までも預け被差置候哉、又は何ニても面々職を仕罷在候哉、其譯一人宛、別ニ委細書付可被申事、

一最前切支丹ニてころび不申以前之子は、男女共ニ、本人同前之儀ニ候間、本人之内江書入可被申候、但ころび候以後之子共は、男女共類族之内江書入可被申事、

一前々切支丹ころび候以後、檀那寺可有之候、何宗旨ニ成候て、常々寺へ參詣仕候哉、其寺ヘ附屆常體ニ仕候哉、數珠をも持、父母之忌日ニ、寺江も參、又は持佛などをもかまへ、香花をも備候哉、其趣檀那寺僉ニ遂詮議、又は下人等をも召仕候者有之候はゞ、其下々迄入念可被致穿鑿事、中〇略

右之趣、早速相改、帳面注之、切支丹奉行江可被差出候、帳之奧書等之儀は、從奉行中可相達之候、前前より切支丹宗門之者無之方江も爲心得、不殘相觸候間、可被得其意候、以上、

卯六月

〔吉利斯督記〕一右三人ノ伴天連共、筑後守所ニテ十日吉利支丹ノ法穿サクイタシ、十日過三人ノ伴天連、籠屋ニテ、筑後守家類ヲ遣シ、嗽問申付コンパニヤ壽庵、マルチイヨ市左衞門、コロバセ念佛ヲ申サセ候ヨシ、其後筑後守所江召寄、一兩年擬議候處ニ、二人トモニ病死仕候由、キベイトロハ、コロビ不申候、ツルシコロサレ候、是ハ其時分マデハ、不功者ニテ同宿二人、キベト一ツ穴

ニツルシ申候故、同宿ドモ勸、キペヲコロシ申候由、キペ相果候テヨリノチ、兩人ノ同宿ドモ、コアピ申候ニ付、ツルシ場ヨリアゲ、籠屋江遣シ、久敷存命ニテ罷候、其後フランシスコ孫右衞門、ベルナアルトウ市左衞門ト申南蠻伴天連二人モ、カミヨリ召トリマキリ候、此二人ハ、フラテニテ御座候、是ハ度々筑後守所ニテ、穿鑿イタシ候ヘドモ、是モ其砌未仕樣不功者ニテ、コロバセ不申、芝ニテ火アブリニ被仰付候由、

一午ノ年筑前ニテ、ヘイトロ、フランシスコ、アロンゾ、チヨセイフ、イヅレモ南蠻伴天連、入滿一人是ハ長崎近所茂木ト申所ノモノニテ御座候、異國ニ渡リ、入滿ニ罷成候、其外同宿五人唐人ニ筑後守代ニ捕、指上候ニ付テ、長崎江被遣、籠舍致仰付、翌年未ノ歳、十人ノ者長崎ヨリ被召寄、筑後守ニ御アヅケ、色々御穿鑿仕候由、歟問ノ上ニテ、兩度ニ四人ナガラ、コロビ念佛ヲ申、コロビ申候義、僞ニテ無之由手形仕候由、入滿同宿共ハ、伴天連ヨリ前ニ、一人二人ヅヽコロビ、日本ノ宗旨ニ罷成候由、筑後守屋敷ニ籠ヲ作リ、バテレン四人入置、度々召出シ、日本江伴天連渡候、南蠻幷呂宋ニテノ手段船、吉利支丹法ノ事、度々相尋、牧野佐渡守、久世大和守ナド、筑後守所江參、色々御尋ニテ致言上候由、其後アロンゾ立アガリ候ニ付而、上意ニテ女藏江御入候ヘバ、二十日程存命ニテ病死イタシ候、ゼジユント申、自害ニナリ申サンヤウニ、食ヲ少充イタシ、身ヨワリ相果候掟御座候由、其通ニイタシ相果申由、フランシ三人、女一人籠ニ入置候ヘバ、是ハ籠屋ニテ女ト心候而、兩人共ニ白狀イタシ候ニ付、籠中ノ者ニ見セ候テ、伴天連ノ詞言、珍敷候間、見候エノ由申付、夫婦盃ヲ取カハサセ、筑後守屋舖江召寄置候處ニ、致病死候由、ヘイトロ、チヨゼイフ、入滿同宿、宗門ノモノ二十人バカリ、小日向屋舖ニ御普請被仰付、筑後守ニ御預被成候、チヨセイフハ、三右衞門ト申ス、女房被下、于今存命ニテ罷在候、ヘトロハ八十餘ニテ、明曆三年五月朔日、病死仕候、南蠻伴天連コロビ念佛ヲ申、コロビ候義實正也ト判ヲイタシ、指上候、マルセイロト申伴天連、周防ノ山口ヘ船

ヲ付、其後豐後ヘ渡海、彼地ニテ大伴ヲ勸メ、吉利支丹ニイタシ候テヨリ、宗門ノ日本ニヒロマル事、數百年程ノ內、伴天連百五人、日本ヘ渡申候由、然ドモ南蠻伴天連ハ不及申、日本伴天連ニテモ、宗門善惡ヲタヾシ、宗論ヲイタシ、其吟問ノ上、一々念佛ヲ申サセ手形ニ判ヲサセ、コロバセ申サルコトハ無御座候由、筑後守始而右ノ通ニイタシ、同宿ニハ七人扶持、伴天連ニハ十人扶持ニ、銀一貫目充被下候、石垣ノ內ニ指置、切々御尋ニテ、吉利支丹法ノ樣子、南蠻ヨリ日本ヲ望候儀ナド、申候ヘバ、吟問可被仰付由申渡候由、

一子ノ年、榊原飛驒守、馬場三郎左衛門、長崎奉行ノ時分、兩人共ニ長崎江被遣、南蠻人長崎ニテ持候女房子、男女三百人、長崎湊ニテ船ニ乘セ、天川江被遣候、切支丹御政道被成候始ニテ候、三百人ノモノヲ流罪被仰付候者、有馬一揆ノ時分、長崎モ一所ニ一揆ヲ起可申ヲ加樣ノ御支配、御名譽成御事ト、下々迄取沙汰イタシ候、

〔耶蘇天誅記前條中〕耶蘇宗門制禁之大旨中略〇

元和寬永ノ年間ニヤ、長崎御奉行竹中采女注進申ケルハ、先年吉利支丹ノ宗門ニ有テ、南蠻國ヘ追放セラレ候處ノ日本人共、今度案內者トナリテ、義平土呂、壽庵、一官ト申ス三人ノ伴天連共ヲ召連レ、南蠻ヨリ渡リ候由ヲ言上ス、依テ井上筑後守ヲ長崎表ヘ差遣サレ、糺明アルノ處ニ、三人ノ伴天連ドモ、執モ邪宗ヲ故路偽、正法ニ歸シ、義平土呂ハ三右衛門、壽庵ハ吉兵衛、一官ハ清右衛門ト名ヲ改メ、日本ノ俗ト爲リタリ、追テ右ノ者ドモ、江戸ヘ召レ、飯田町ニ屋敷ヲ賜リ、扶持方十人分下サレ、其上婦女ヲモ召仕ベシトノ御免ヲ蒙リケル、彼者ドモ有リ難キ御憐愍ヲ感ジ奉リ、油斷ナク宗門ノ穿鑿シケルト也、

〔査祆餘錄〕寬文十二年壬子

此頃拾人扶持三右衛門、七人扶持ヅヽト意、壽庵、南甫、一官、閏六月十七日、遠江守ヘ出ス、

覺

一三右衛門女房従弟　深川舟大工　清兵衛 五十　一同人従弟　土井大炊頭小遣之者　源右衛門 五十五　一同人甥　清兵衛一所　三之丞　一同人甥　ゑさし町職人　庄九郎 三十

一足立權三郎、井上筑後守支配之節、卜意細工之弟子之由、　一壽庵聟　元よし原　紙屋甚兵衛　娘一所有之　一壽庵娘伯父甚右衛門河越ニ罷在候、北條支配之節參逢申候、當子四月廿六日參リ壽庵ニ逢申候、

一一官女房兄　宇都宮百姓　井野七右衛門　一同人女房妹聟　同所百姓　三郎　一同人姪聟　同所百姓　加兵衛

覺

一德右衛門加州金澤之者、右万治二年己亥、三右衛門召仕、翌子年暇取、又酉年三右衛門ニ奉公いたし、戌年壽庵召仕、亥子兩年卜意ニ奉公、

一市兵衛水戸之者、寛文四辰巳午三年ハ、三右衛門召仕、

一十三郎近江之者、寛文六年より亥迄卜意召仕、同十二子年高甫召仕、

延寶元年癸巳

一十二月九日朝六ッ時卜意病死、撿使御徒目付木村與右衛門、牛田甚五兵衛、御小人目付兩人共來ル、與力庄右衛門、傳左衛門、揔兵衛、源助立會、同心朝倉三郎右衛門、荒川久左衛門、蒲沼勘右衛門、福田八郎兵衛、一橋又兵衛、無量院ヘ火葬、戒名向岸浄韓禪定門、遠藤彦兵衛、木高十左衛門、卜意下人德右衛門道具改、踏繪申付下宿申付ル、

延寶二年甲寅

御作事奉行・水戸百軒長屋前
青木遠江守支配

相同　大目付
渡邊大隅守

一正月廿日より二月八日迄、岡本三右衛門儀、宗門之書物相認申候樣ニと、遠江守被申付候、依之鵜飼庄左衛門、加用傳右衛門、星野源助、御番引右之用擬り被申付候、

一二月十六日、岡本三右衛門書物仕候ニ付、加用傳右衛門、河原甚五兵衛被申付、兩人共御番引、三右衛門宅へ、廿八日より三月五日迄立合、

一六月十四日ヨリ七月廿四日迄、宗門之書物、岡本三右衛門、山屋敷於書院爲相認候ニ付、加用傳右衛門、河原甚五兵衛御番引立合、

一九月五日、壽庵儀牢舍被仰付候、我儘申候ニ付、當分之牢舍申渡候節立合、六右衛門、庄左衛門、傳右衛門、源助、甚五兵衛、

河原と龜井引込　月番　塚原六右衛門　加用傳右衛門

延寶三年乙卯　　　　　　　　　　　　青木
　　　　　　　　　　　　　　　　　渡邊

一二月廿一日、御用之儀有之、御頭遠江守方へ、南甫、一官召連、鵜飼庄左衛門、加用傳右衛門參ル、

一同廿二日、壽庵儀出牢被申付候、直ニ今日御頭遠江守方へ壽庵召連、鵜飼庄左衛門、星野源助參ル、廿三日ニも御頭へ壽庵召連、川瀨惣兵衛、河原甚五兵衛參ル、壽庵、一官、南甫三人共、度々御頭へ罷出候、

一三月五日、切支丹吉兵衛と申者、於御頭遠江守宅而度々御詮議有之、傳馬町牢屋ニ而モ度々拷問ニ逢、右之度々、與力鵜飼庄左衛門、加用傳右衛門、龜井孫兵衛、河原甚五兵衛、川瀨惣兵衛、塚原六右衛門、星野源助七人之內、替りく兩人宛來、

一五月廿三日、山屋敷御頭遠江守被參、岡本三右衛門へ金三兩、壽庵へ金貳兩、一官、南甫へ金壹兩被下候、

一十月十七日、岡本三右衛門書物之訴訟申上候義、能々遂僉議、三右衛門誤り候は、日本之宗旨ニ

可ㇾ罷成歟と議定仕らせ可ㇾ申之旨、加用傳右衛門、河原甚五兵衛ニ被ㇾ申付候、

林信濃守支配八月迄　田中孫十郎
十月より　戸田又兵衛

貞享二年乙丑

一七月廿五日申下刻、岡本三右衛門儀致ㇾ病死候、右之段御頭へ屆ル、爲ㇾ飼源五左衛門、幷成瀨次郞左衛門召連罷出候、卽刻御頭より用人高原瀾之丞江曲淵十郞左衛門參ル、右三右衛門死骸、同心三人宛附可ㇾ申候、

一岡本三右衛門所持之金子、ト 杻ニ而拾參兩三分、小判拾五兩、都合貳拾八兩三分有ㇾ之、其外諸具は仲間御頭用人共之封印致置候、御土藏へ廿八日ニ入置、

一同廿六日、山屋敷へ撿使ニ御徒目付大村與左衛門、村山覺太夫、幷御小人目付下山惣八郞、野村利兵衛、內田勘十郞、古川久左衛門、都合六人參ル、御頭用人仲間立合、左之通口書御徒目付へ渡ス、

口上之覺

切支丹屋舖ニ罷在候、伴天連岡本三右衛門儀、南蠻ぜいりやの者、四十三年以前未年、〇寬永二十年井上筑後守へ始而御預リ團屋敷ニ、當丑年迄、四拾年罷在候處、當月初より致ㇾ不食、相煩候ニ付、牢醫師石尾道的藥用申候へ共、段々氣色差重リ、昨廿五日晝七半時過相果申候、右三右衛門八拾四歲ニ罷成候、此外相替儀無ㇾ御座候、以上、

七月廿六日

林信濃守組
奧田治郞右衛門〇以下四人略

右撿使相濟、三右衛門死骸、小石川無量院へ葬、無量院より玄秀と申出家參ル、三右衛門死骸乘物ニ而遣ス、尤火葬ニ仕候、無量院より燒場迄、同心小屋頭鈴木七郞右衛門、市川半右衛門、平同心杉山七郞兵衛、竹中平右衛門、以上四人附參ル、三右衛門戒名入專淨眞信士、弔有金壹兩貳分、

火葬料金百疋差遣候、弔之具入用共三右衛門所持之金子ニ而相拂候、

一同七日、無量院へ、日本人之通、石塔建候趣にて、御頭より今朝被申付候、依之仲間相談之上、石塔申付候、右石塔之儀、壽庵、一官、尤三右衛門後家相願候、九月二日石塔建申候、〇中略

一右同日〈〇廿九日〉圓三人之者共、幷家來共、親類書相認差出候趣ニテ、御頭より被申付候、依之岡本三右衛門女房親之様子、一官女房之親之様子、幷長助はる親之様子共相認、翌晦日御頭へ差出ス、

一長助はる事、兩人共踏繪被申付、親類共御渡可被成候へ共、兩人共奴ニ而候間、御返し難被成候、追付御扶持方御願被申上可被下候由、御頭直ニ河原甚五兵衛へ被申渡候、

一八月二日、壽庵、一官願申候は、不苦候はゝ三右衛門墓所へ參詣仕度候、尤兩人ニ而金子壹分、三右衛門女房も金子壹分、長助はる鳥目三百銅も遣申度旨相願申候、右之趣御頭へ申立候處、勝手次第可仕旨、倂右之者共無量院へ參詣仕候節は、與力三人差添參候様可仕候、尤其前ニ御頭へも相屆候様にと被申渡候、

一同八日、無量院へ壽庵、一官幷兩人之妻長助はる參詣仕候、與力同心差添參候、別義無之、右之者共、墓所へ水向候由、

一同日岡本三右衛門後家へ、八人扶持被下候間、左様相心得可申候、長助はるをも女房ニ被下候間、随分奉公致候様ニ可申渡候、右後家相果候て、長助はる兩人共御暇可被下と存、後家を殺候事も難計候間、後家相果候共、御暇不被下候旨、兩人之者へ可申聞候、長助事、萬々一欠落等も可仕義不相知候間、圓當番之者共、随分油斷不仕候様にと被申付候、

一同廿五日、岡本三右衛門所持之金子、幷諸道具草木等迄、三右衛門後家へ被下候段、御頭用人江曲淵十郎右衛門參り申渡候、但金子之儀は、與力方江預り置、入用次第ニ可相渡旨被申付候、

〔關口臺町遷華寺山莊之碑〕此地〈〇小石川〉當寬永之間、爲切支丹奉行筑後守井上政重別邸、繫南蠻門、

類族

伴天連我國稱岡本三右衛門、故有牢獄焉、後納其地於官、稱山屋敷或直切支丹邸、寶永中、羅瑪國伴天連與安、及其徒長助夫妻、亦入此獄、皆長繫死、其它奉妖及雜犯亦瘐死、往々埋骨於此、有妓朝妻、罪當死、指獄邊櫻樹語獄吏曰、得及花死無恨、官憐之、待花發而刑、後呼其樹、爲朝妻櫻、今近隣或存其遺種云、既而邪教殄滅、獄徒而廢、文化癸酉十二月、爲地賜之爲讃岐守大江政時君別邸、君以爲犯法雖可罪、愚迷取死亦可傷、故建石、而囑余記其事、因錄顛末如此、

文化乙亥五月　間宮士信撰　吉田義書

○按ズルニ、此碑今蓮花寺ニアレドモ、始ハ碑文中ニアル所ノ小石川切支丹屋敷ニアリシモノナリ、

〔官中秘策三十〕邪宗門之事〇中略

一類族の生死、嫁娶、養子、改宗、剃髮等之儀、二季之屆之外追放も、近年不苦趣ニ而、是また屆にて相濟、本人同志、何事も其時之伺奉行之差圖にまかす、當座屆書出し、本人同然の者、男なれば、其子孫玄孫末孫まで類族になる、本人より都合六代也、七代目には平人となる、是を男系といふ、其外本人同然之忌掛候者、不殘類族也、本人は聟、舅は忌服無之といへども、末類族となる、

〔政談四〕吉利支丹類族ノ事

吉利支丹今ハ日本國中ニアルマジキコトナリ、今ニ類族ヲ吟味スルコト、詮モナキコトナリ、御族本ニ列スルトモガラニ、親類ノ詮議ナシ、大友宗麟、竹中筑後守子孫ナド、是君子ノ澤モ、小人ノ澤モ、五世ニシテハ絕ユルコトナレバ、最初殺シタル者ヨリ、五代立チタラバ、平人ニ同ジカルベシ、

〔享保集成絲綸錄二十一〕寬文十三丑年四月

覺〇中略

一耶蘇宗門にさゝれ親死候、其子御預之者、國所、其者之年、近き親類縁者可被書付事、〇中略

右條々、以此趣、與書注之、渡邊大隅守、青木遠江守所迄可被差越候、以上、

四月

〔憲教類典四ノ十六切支丹〕貞享四丁卯年六月

覺〇中略

一最前切支丹ニてころび不申以前之子は、男女共ニ、本人同前之儀ニ候間、本人之内江書入可被申候、但ころび候以後之子共は、男女共類族之内江書入可被申候、〇中略

一類族之者果候はゞ、死骸等迄吟味、別條於無之は、檀那寺ニて取置之、其趣を帳面ニ記、毎年七月十二月、兩度ニ切支丹奉行江差出、帳面除カセ可被申事、〇中略

一類族之者、忌掛り候親類、并舅吟味有之て、書付可被申候、此外は不及書付、最親族等迄、他國江差放遣候儀、堅可為無用候、但し参候はで不叶譯在之ニ於ては、切支丹子孫之わけ、参候所江可申届候、御領は御代官、私領は其地頭江可被相達候、何年過候共、其譯切支丹奉行江も申達、帳面をも書置候樣可仕事、〇下略

〔憲教類典四ノ十六切支丹〕元祿八乙亥年六月

切支丹類族一件

轉（男女）人

子（男）　孫（男）　曾孫（男）　玄孫（男）　耳孫迄入
子（男女）　孫（男）　曾孫（男）　玄孫（男）迄入
子（男）　孫（男）　曾孫（女）迄入　玄孫ハ不入
子（男）　孫（女）迄入　曾孫ハ不入
子（女）　孫（男）迄入　曾孫ハ不入

一父母不轉以前之子、幼少にて父母にはなれりとも、本人同前ニ立事は出生其まゝ、其父ニても、母ニても、功德の水といふ物をかけ、わが宗門になしかたむるによりて、本人同前に相立候由、申傳候事、

一父母不轉以前之子ハ、男女共ニ、本人同前也、孫より男段々續候時ハ、耳孫迄類族ニ可入、

一轉候以後之子、男段々續之時ハ、玄孫迄類族ニ可入、

一轉候以後之子男、孫も男ニて曾孫女之時は曾孫迄類族ニ可入、其玄孫は不入、

一轉候以後之子、男ニても、孫女之時は、孫迄類族ニ可入、曾孫は不入、

一轉候以後之子女ニて、孫男之時は、類族ニ入、孫も女之時は類族ニ不入、

一本人幷本人同前之者より忌掛り候親族、其外舅姑聟娘は、類族ニ不入、

一此方ニ本人有之、其類族他所ニ致住居候時、生死之儀、先より訴有之節、其趣其所より書付取置之、二季之屆けたるべし、生は無判、死は兩判ニて、切支丹奉行衆江可相達事、

但死失、此方より撿使遣候ニ不及、其所之御代官或は地頭より、撿使有之、其所之庄屋年寄幷旦那寺、加判之證文可取之、若先より立會撿使屆候はゞ、遣し可然事、

一本人他領ニ有之、其類族此方支配所之内ニ致居住候はゞ、生死共ニ本人有之所江、庄屋年寄兩方より可相斷事、

但死失は此方より撿使可遣之、先方より撿使ニは不及候得共、箇樣之わけ不案内之方は、後日やかましく候間、立會撿使可被遣哉ト申遣、勝手次第に致し可然事

一轉人幷類族有之所、支配所ニ請取候つゝ、先御代官或ハ私領より、類族帳面委細致吟味可請取候事、

但前々切支丹奉行衆江、右之帳面上り候共、此度新規支配ニ請取候趣、書狀相添、帳面切支丹奉

行衆江出之可然事、

一本人他領ニ有之、其類族此方支配之内ニ致居住候といへども、本人有之所より、切支丹奉行衆江、帳面被上候ニ付、此方よりは帳面差遣候ニ不及候由、大坂堺之御作法にて有之由ニ候へ共、御代官方は支配之内、他之類族居住いたし候旨、帳面ニ記、無判ニて切支丹奉行衆江被差出可然候事、

一切支丹之類族相改、初て帳面差出候節は、存命帳、死失帳共ニ両判ニて可差出事、

但他領ニ本人有之類族は帳面上げ候共、無判たるべく候、最死失帳ニは及間敷事、

定法

一本人并本人同前　死失　塩詰、當時書判ニて伺之、差圖之上取置證文、両判ニて出之、伺書と引替之、但出家ハ不及窺、塩詰ニ不仕、土葬火葬勝手次第取置セ、二季之屆之節、両判之證文可出之旨、元祿五年五月被仰出之候、

一類族　死失　両判之證文二季之屆、　一類族　變死　當時両判之證文但無判之以書付伺之、二季之屆之節、死失屆之内被書入両判たるべし、　一類族出生　無判之書付二季屆　一類族新縁　右同斷　是は縁組之事也

一類族住所替　右同斷　一類族養子　無判之書付二季屆　一類族名跡　右同斷　一類族歸居　當時無判之書付　一類族出家　二季無判、但他領江越候はゞ、前方伺之、一類族欠落　當時両判之屆　一同死罪　但前方不及伺、死罪以後、當時両判之屆ケ、　一同遁世　當時両判之屆　一同剃髪　二季無判、但本人并本人同前は、書判を以前方窺之、　一同法名　右同斷　一同名改　右同斷　一同離別　二季両判之屆、但類族不放は無判、　一同義絶　一不分明者病死

一本人幷本人同前之者、宗門替候歟、或は檀那寺替候儀雖仕、乍去無據儀於有之は、前方伺之可申付候、類族は前方不及窺可申付、最二季之屆たるべし、

一類族入湯、佛神詣、或は商賣辨用ニ付、他國他領江雖罷越、可罷歸時節、兼て於各語は不及屆、

一不依何事、御帳面ニ載候儀於相變は、可訴之、但本人同前は、前方伺之、類族は願之通申付候以後、二季之節可屆之、

右之通雖願候、難斷立儀ニ候はゞ、申聞敎候、以上、

〔京都御役所向大概覺書三〕切支丹改幷證文之事〇中略

一他國へ住居之類族、元町江立歸之儀無判、

存命之類族　貳百七十九人　内　本人同然　三人　他國罷候類族　四十一人

行衞不知　八人

右者正德五未八月改之

〔享保集成絲綸錄二十一〕享保三戌年十一月

覺

一類族之者、只今迄は、追放には不罷成候得共、追放申付候而も不苦候事、

一離別、又は養子之儀絶て親類を放候者は、二季に兩判之證文を以可相屆候、變死病死死罪欠落遁世等は、二季に無判之以書付可相屆候事、

右之趣、向後可被心得候、以上、

十一月

〔地方落穗集十三〕本人本人同然伺書上の事

一類族のもの剃髮いたし、法名願ひ候儀、是亦申付られ、二季に無判の書付を以て屆らるべし、

但し本人、并に本人同然の者は、前方に之を伺ひ、差圖の上申付られ、書判の證文差出さるべき事、

一同變死當時の斷りに候へども、無判の書付を以て、申聞られ候はゞ又二季病死斷り證文の内書付出され、尤兩判の事、

一他領住居の類族の元へ引取候儀、二重の屆に候間、前方伊豫守より、淺野式部大輔へ達し候例有之事、〇中略

切支丹類族病死屆の事

轉切支丹類族病死候覺

一何國何郡何村轉切支丹類族誰曾孫（此間除き置）誰悴當何月幾日何方にて病死致し、旦那寺何國何郡何村何宗何寺にて取置申候、

一何國何郡何村轉切支丹誰娘同國同郡妻、當何月幾日何方にて病死致し、右旦那寺何村何寺にて取置申候、

右之通、類族何人病死致し候間、御斷りの爲、此の如く御座候、以上、

年號月日　誰判

宛所

〔憲教類典四ノ十六切支丹〕元祿八乙亥年六月〇中略

鹽詰之者伺書文言

覺

拙者御代官所、攝州西成郡川崎村乞食、轉切支丹總次郎悴仁助、父不轉以前出生本人同前、當亥六月十三日、六十七歲ニて致病死候、依之即席撿使差遣死骸相改候所、別條無御座候ニ付、鹽詰ニ申

付置候、御差圖次第可申付候、以上、

元祿八乙亥六月十四日　何ノ何左衛門

前田安藝守殿

小幡三郎左衛門殿 名入違一通宛

右之通書狀相添、一通ツヽ遣之候、狀之文言ハ、覺書之心を以、認遣候、御返答ニ例之通取置セ候樣ニト申候ヘば、死骸取置セ、又覺書、○中略

鹽詰之者、庄屋、年寄、檀那寺より、可被證文之文言、

差上申一札之事

攝津國西成郡川崎村乞食在所々罷在候、轉切支丹擔次郎嫡男仁助、本人同前之者、當亥六十七歲ニて、今十三日辰刻病死仕候、右仁助儀、淨土宗竹林寺旦那ニ紛無御座候、依之御役人衆被遣、死骸御改被成候處、怪敷儀少も無之ニ付、鹽詰ニ被仰付、切支丹御奉行樣江被得御下知、御差圖有之迄は、竹林寺、幷庄屋、年寄江御預け被成、慥預り申所、實正ニ御座候、重て御下知御座候迄は、位牌石塔葬禮之作法不仕、死骸成程入念、晝夜番人附置、大切ニ可仕候、右仁助儀、生付之かたわにて、右之手くびより先無御座候、若死骸御尋之節は、無相違樣ニ急度差上可申候、爲後日仍如件、

元祿八乙亥年六月十三日　大坂道頓堀竹林寺　昌悅　印
川崎村庄屋　善左衛門　印
同村年寄　佐兵衛　印

御代官
何ノ何左衛門樣

同可引替手形之文言

差上申一札之事

攝津國西成郡川崎村乞食在所々罷在候、轉切支丹捻次郎嫡男仁助儀、當寺檀那ニて御座候、然所ニ右仁助儀、當六月十三日、六十七歳ニて病死仕候、早速御撿使被遣、死骸御改ニ相成候處、怪敷儀も無御座、本人同前之者ニて御座候ニ付、死骸鹽詰ニ被仰付、拙僧幷川崎村庄屋年寄ニ御預け置被成、切支丹御奉行樣江御伺被成候處、例之通取置候樣と御下知御座候旨被仰渡、則土葬ニ仕、當寺墓所ニ埋置申候、若取置樣淨土宗作法ニ違候儀仕置候ハヽ、御詮議之上、何分之越度ニも可被仰付候、爲其一札差上申候、以上、

元祿八乙亥年七月三日

淨土宗知恩院派天王寺一心寺末寺
大坂道頓堀竹林寺
昌悅

何ノ何左衞門樣

前書之通仁助死骸、竹林寺住持昌悅、幷拙者共立會、土葬ニ取置申候、若取置樣怪敷儀仕置候由、後日ニ御聞被成候ハヽ、僉議之上拙者共迄、何分之曲事ニも可被仰付候、爲後日奧印仕差上申候、以上、

攝津國西成郡川崎村庄屋
善右衞門
同村年寄
佐兵衞

一鹽詰致させ樣は、撿使遣し、其死骸ゆるりと入候程之瓶を調させ、其瓶ニ死骸を入、耳口へも鹽を込入させ、勿論瓶之口迄、一はいに四方よりすき間なき樣に、鹽を詰させ、厚さ一寸許之板蓋ニ其時之年號月日、幷其者之名年迄、委敷書付、蓋を繩ニてしめさせ、檀那寺、庄屋、年寄ニ封致させ、封の所、竹の皮ニて包、墓所之內深く穴をほらせ、それゑ沈め、蓋の上に大き成重き石を置、其上へ土をかけ、雨水底へ通不申候樣ニ、外之所よりも土を高く成程をかせ、四方ニ垣致させ、江戸より御下知相濟候迄は、一人ツヽ晝夜番致させ候事、

從江戸土葬ニ爲取置候樣ニと、御下知有之候へバ、其村之庄屋、年寄江其通リ申渡、死骸は右瓶へ入置候居なりに差置申事ニ候、

〔憲教類典四ノ十六切支丹〕元祿八乙亥年六月〇中略

二季屆之文言

轉切支丹類族出生覺

拙者御代官所攝津國西成郡川崎村乞食、轉切支丹孫七曾孫四郎兵衞娘、當亥四月出生、名は小まんと申候、居所宗旨檀寺、父同前ニて御座候、右之通類族一人致出生候間、爲御斷如此御座候、以上、

元祿八乙亥年七月十日　何ノ何左衞門無判

前田安藝守殿

小幡三郎左衞門殿名入違一通ヅヽ、

此外ニも出生有之候へば、村は違候ても、一書ニいたし、一紙ニ書載申候、

轉切支丹類族病死之覺

拙者御代官所攝津國西成郡川崎村乞食、轉切支丹小ちよ娘仁兵衞妻むめ、當亥六月十八日、四十七歳ニて病死、旦那寺大坂道頓堀淨土宗竹林寺ニて取置申候、右之通類族一人致病死候間、爲御斷如此御座候、以上、

元祿八乙亥年七月十日　御代官　何ノ何左衞門書判印

前田安藝守殿

小幡三郎左衞門殿名入違一通ヅヽ、

添書之文言

一筆啓上仕候、然ば拙者御代官所ニ罷在候轉切支丹類族、今月九日迄、生死相改、書付二通差上申

候、右書付前田安藝守小幡三郎左衛門殿江も、別紙二通差上申候、恐惶謹言、

七月十五日　何ノ何左衛門

前田安藝守殿　一通

小幡三郎左衛門殿　一通

右之斷書、京都御代官衆江も一通ツヽ、御名宛ニて差上申候、添狀は兩方之證文役與力迄、連狀にいたし、斷書も一所ニ封入遣し候條之文言如左、

一筆令啓上候、然ば拙者御代官所ニ罷在候轉切支丹類族、今月九日迄、生死相改、書付二通進之候、御請取可被下、其切支丹奉行衆江之書付は、此方より差越申候、恐惶謹言、

七月十五日　何ノ何左衛門

京都與力
證文役與力四人

右斷書、兩方江遣候故、二通ツヽ之内は四通と認之候、御郡代所江は、斷書不遣候、御代官方も有之候、

〔寶曆集成絲綸錄二十〕寶曆八寅年五月

御勘定奉行江

山本平八郎御代官所伊豆國峯村
治郎兵衛

右之者儀、先年妻離別致候節、忰市五郎共ニ、妻の兄谷津村佐兵衛方江引取候、然處右市五郎儀、前年呂宋國江漂流し、御制禁之國に留り、再歸國之存念無之由、致同船候者共、歸國之上申聞候、依之右治郎兵衛儀、切支丹類族之取計ニ可仕旨、平八郎江可被申渡候、委細之儀は、神尾備前守、織田肥後守江可被承合候、

〔天草征伐記一〕秀吉公之時切支丹を車ニ乘せ渡ス事

文祿ノ頃秀吉公之時、フラテンと云バテレンを數多渡せり、是は彼ノ國にての道心者成ルの由也、外科を專として、貧人乞食非人共を集めて缺唇や癩病、癰疽、毒瘡、腫物等、結緣に療治して、我門に引入れ、愚才乞丐人の宗門にならんと云者には飯を施し、中邊の世に過ぎわびたる者には、外科を授けて、渡世を心易させ、其報恩に己れが宗門に引入れ、若きものかふぎ者、小智小才覺ある者共には、伊達道具にて誑らかし、大名へは黄金珠數奇物を以て、それ〲にあいさつして、呪を深して宗門をすゝむ、大坂、堺、長崎、周防の山口、廣島、備前の岡山、姫路等、所々に寺を立、京は五條堀かは、一條油小路に大寺を建て、愚人、辨人、あふれ者共、嫌ひなく、集りたりと聞へける、ある時イルマン共、別而親しき旦那共と言合たる曲事のもれ聞へければ、秀吉公大きに怒り給ひ、内々邪法を弘め、人民を誑らかすのよし聞し召れ、幸ひ此度根源を切て日本を拂はるべきに極る所に、長崎より種々訖言いたしけるゆへに、拂はるゝ事を、免許あり、科人共計、一條の辻より車に乗せ、耳鼻をそぎ、廿五人内、デテレン六人、イルマン八人、同宿の宗門共なり、洛中を引渡され、直に播磨路を西海道筑紫迄、傳馬に乗せて、肥前の長崎迄引渡されけるに、始終デウスの奇特も有るかとて、天を見上げ、山を詠むれども、露程も奇特なければ、化轉なる顔色し、その上に、長崎にて磔に掛られけり、暫時は番衆も有けれども、程なく朽けるを、骨や髑髏共を盗取り、後ニは磔木を楊枝木程ブヽ、削りて、其徒共守に掛け、剩へ後は賣買に成て、價高直に成るなり、

(日本西教史下)第十一章(○中略)

千五百九十六年(慶長元年)十二月九日ノ夜、殿下大坂ノ奉行ニ命ジ、フランソワー社、及ビ耶蘇敎社、敎師ノ家ヲ監守セシム、是ハ日本ニ於テ有位ノ人ヲ監守スル方法ナリ、借テ又同時ニ、脚夫ヲ治部少輔(○石田三成)ヘ遣ハシ、京師ニ於テモ、同一ノ處置ヲ行ヒ、フランソワー社ノ敎會ヘ出入スル者ノ名簿ヲ作ラシム、此夜大坂ノ耶蘇敎社ノ敎師ノ家ニハ、ポールミキ(○三木)ト云フ無位敎

師一名、及ビジャンジャックト云フ二少年ト幷セテ三人在ルノミ、此二少年ハ、始テ來リ入社ヲ請フノ時ナリ、フランソワー、ペレー師、及ビペールル、モレイヲン師ハ、宣教ノ勤ヲ終レバ、常ニ大坂ニ歸レドモ、此日長崎ヘ發程スル教會長ヲ送ル爲メ、數日前ヨリ堺ニ往テ家ニ在ラズ、然ルニ途中ニ於テ、京大坂ノ教師等、囚ヘラレシ由ヲ聞キ、オルガンタン師ノ外、同宿ノ師父三名ルーイ、ポールアマクサヴハンサン等三名ト、共ニ死ニ就カントシ京師ニ赴ケリ、此時ヴハンサンハ奈良ノ市ニ在リシガ、事ノ起リシヲ聞キ、共ニ殉教ノ列ニ加ハラントシ馳セ歸レリ、○中略テフランソワー社、及耶蘇教社ノ諸師ハ、監護ヲ受ルヨリ、日夜法場ニ引出サル、ヲ待チ居ケルニ、其時數名ノ侯伯ハ、聖教信者ニアラザレドモ、高山ジュウドー○右近、小西オーギュスタン○行長、コンデラシモン○黑田孝高、ガ、耶蘇教師ヲ師父トシ尊ムヲ以テ、教徒ヲ救ハヾ、彼人々ノ喜悦ヲ得ベシトナシ、一日太閤殿下ガ、伏見ノ居館造營ノ工人ヲ巡視セラル、時ニ、其側ニ在テ氣色ヲ伺ヒ、徐カニ述ベテ曰ク耶蘇教師日本ニ來リショリ四十年、未ダ曾テ反ヲ謀リ、亂ヲ作セシコトアラズ、其教ユル所ハ、天下ノ和平ト臣民服從ノ道ナリ、其勤ムル所ハ、國ノ爭ヲ解キ、民ノ憂ヲ慰メ、人ノ窮ヲ救ヒ、上ヲ敬ヒ下ヲ懷ケ、病者ヲ訪問シテ、力ヲ盡シ救助スルノミ、決シテ人ヲ戕フ者ニ非ズ、天下ノ萬民ヲ慈惠スル者ナリト、殿下ハ、諸侯ノ言ヲ熟聽シ、之ヲ然リトナス、此玄以法印○前田入謁シ、諸師ヲ救ヒ併セテ己レノ二子ヲ全フセントシ、諸人ノ既ニ陳述セシ所、詐言ニ非ルヲ誓ヒ、且諸師ハ、九州ニ在ルモノモ、畿內ニ在ルモノモ、皆能ク速ニ殿下ノ示令ヲ遵奉シ、及ビ老病ノ故ヲ以テ在京ヲ許サレシ、オルガンタンハ、配流人ノ如ク謹愼シ、衣服ヲ變ヘ、再ビ市中ヲ徘徊セズナド、、種々ニ彌縫シケレバ、殿下ノ心ヲシテ、全ク和ラギ、布令ヲ改メ、フランソワー社ノ諸師ヲ、ヒリピンヘ逐ヒ歸シテ、全ク事ヲ終ラントシ思慮セシムルニ至レリ、然ルニ獨リフランソワー社ノ諸師ヲシテ、其熱心ヲ遂ゲシメ、○此社中皆被レ刑、耶蘇教社ヲ留メテ

後日ニ備ヘ、〇此社中皆被ㇾ害日本國ヲシテ、一時ニ教鐸靈牧ヲ失ハザラシメシハ、蓋シ天ノ致ス所ナリ、〇中略殉教人已ニ京坂堺ノ三府ヲ巡リシ後、太閤殿下ハ、之ヲ那古耶ヘ送リ、長崎ヘ遣ハス可キ旨ヲ傳ヘリ、惜チ海路ハ近クシテ容易ナレドモ、殿下之ヲ陸路ヨリ送リ、極マデ疲困セシメ、且通路地方ノ人民ヲ恐レシメ、天主教ニ歸スルヲ禁ゼシメント欲ス、千五百九十七年〇慶長二年一月九日、諸囚堺府ヲ發スルニ當リ、警固ノ士卒夥多附從シ、一人其前行ニ立チ、罪案ヲ大書シタル木札ヲ槍ニ結ビ之ヲ擔フ、其文概ネ前ニ同ジ、只異ナル所ハ、向後天主教ヲ奉ズル者ハ、死刑ニ處セントノ文ヲ增セシノミ、〇中略長崎ニ於テハ、天主教徒獨修院ニ到リ、將ニ磔刑ニ處セラレントスル事ヲ傳聞シ、之レヲ見ント府外ニ出ル者、陸續トシテ群ヲ爲ス、〇中略偖テ教徒廿六名、法場ニ至リシトキ、ハザブル氏衞卒ヲ丘ノ周圍ニ列シ、十字架ヨリ七八歩ヲ距テヽ警固シ、群衆ノ人ヲ遠ザケシメ、只ロドリゲー、バッシウ二師ヲ許シテ近接セシメ、諸囚ノ全ク死スルマデ、此所ニ在ラシメタリ、諸囚已ニ山上ニ到リ、十字架ヲ見ルヨリ、喜色面ニ溢レテ天ヲ拜シ其身ノ犧牲ト爲リタル殊恩ヲ謝ス、バッチスト師ハ、ザカリー〇イスレール國、古賢ノ名、ノ詠歌ヲ唱ヘ、マルタン師ハ、天ヲ仰テ深ク感ズル所アルガ如シ、其他ノ人々ハ詠歌ヲ唱ヘテ天主ノ德ヲ頌シ、衆皆欣然トシテ、恰モ盛宴ニ赴クガ如シ、童子ニ至ルマデ、怖怖ノ色ヲ顯ス者ナク、十字架ノ中ニ、短小ナルモノアリ是レ三童子ノ爲ニ設ケシモノナリ、彼ノルーイ兒ハ、丘上ニ到リシトキ、己レノ上ル可キ十字架ヲ問ヒ、之ヲ抱テ甚ダ喜色アリ、異教人ハ感歎シテ、斯ク畏ルベキ刑罰ヲ、幼稚ノ身トシテ樂ムハ、如何ナル故ゾト異シメリ、〇中略處刑終リシ時、奉教者ハ殉教者ノ遺骨遺品等ヲ得ント欲シ、棍棒ニテ打タルヽヲモ怕レズ、衞卒ヲ推排シ、十字架ノ下ニ往キ、地上ニ流レ、創口ヨリ滴ル血ヲ以テ、手巾ニ染メ、袂ニ受ケ、或ハ衣服ヲ切リ取レリ、九人ノ教師ハ、衣服ヲ切斷セラルヽコト甚ダシク、殆ンド裸體ト爲ルニ至ル、別ニ衣服ヲ被ラシムレバ、又切取

ルコト舊ノ如ク、勢止ム可キニ非レバ、教會長終ニ筵ヲ以テ之レヲ覆ハシム、

〔蘭使日本紀行十一〕ロームセ徒二十五人、恐ルベキ苛責ヲ忍ブノ後、長崎市外ニ誘導セラレ、身ヲ倒ニシ、高ク足ヲ掛ケ、頭ヲ低テ、徐々ニ死ニ就カシム、晝夜此ノ如ク苛責シタルニ、内二人アリ、町奉行ニ謁センコトヲ請フ、則チ苦責ニ耐ザルヲ以テ、日本教ニ變宗シ、ローム七教ヲ弃ンコトヲ求ム、依テ束縛ヲ脱シ、十字ヲ嘲リ、且ツ摩理及ビ基督ノ像ヲ蹈ム、而シテ他人ニ説テ曰ク、難澀ナル兄弟、今此苛責ニ罹フモ、汝輩若シ心ヲ轉ゼバ、亦寛解ヲ得ベシト、然ルニ他人曰ク、悲哀號哭、唯此ノ暴戻ナル世界ヲ離脱シ、昇天センコトヲ冀フノミ、既ニ是ニ至レバ、日本殘酷人ノ力達スル所ニアラズ、無限ノ歡樂ヲ得ベシト、

此輩倒懸セラルヽコト七日間ナリ、更ニキリスト徒發覺スル者七十四人アリ、皆斬首セラル、倒懸者術頑信シテ志ヲ轉ゼズ、曰ク我輩早ク天ニ昇テ相逢フベシト、七十四人中、婦人ノミナラズ、小兒及ビ乳兒アリ、皆斬首セラル、之ヲ梟首シ遺體ハ穴ニ埋ム、

〔五月雨抄上〕慶長十六年、肥後宇土八代の二郡に、其徒聚嘯すと雖、追々にしてしづまれり、其後餘黨まぼろしの術をなし、鏡を見せ、人をたぶらかす者あるよし聞えて、いたく吟味あり、其餘黨をとらへ俵にいれ、五十俵づヽ積上れば、下なるもの苦にたへず、改宗せんといふをば、是をころぶといひてゆるし、猶先非を悔ざるをば、燒殺し捨たまひぬ、其ころべる者をば、望の宗旨に歸らしめ、檀那の契約ありて、我檀那ぞと劵をとりて渡す、寺證狀のはじめなり、其比遠州富士郡すみおけといふ所に、此宗門起る、コウスモウ〇安右衛門が餘類なりといへり、程なく静りぬ、此時このころばざる輩京都大坂にて、火あぶり、さかばりつけ、生はりつけ、牛裂など數々あり、

〔駿府政事錄〕慶長十七年三月廿一日、今日岡本大八自獄中出之、府內渡之於阿部川原死罪、見人如堵、召板倉伊賀守、南蠻記利志旦之法、天下可停止之旨、被仰出、於京都、彼宗之寺院一々可破却云々、

是夷狄之邪法而亂佛法之正理故、（大八修理此宗、故今及此儀云々）長谷川佐兵衛賜御暇下向長崎云々、

〔原城紀事〕四十七年（○慶長）三月、晴信（○有馬）有罪下吏、晴信謫修天主教、至是事覺國除放晴信甲斐國、尋賜死、子直純固不奉天教、且爲神祖義孫壻、因別賜四万石、之有馬撿奉邪教者、岡本大八伏誅、（創業類集）

〔耶蘇天誅記前錄中〕耶蘇宗門制禁之大旨（○中略）

慶長十九甲寅年、山口但馬守重弘ヲ、吉利支丹宗門御詮議ノタメニ西國筋ヘ差下サル、但馬守先ヅ肥前長崎ヘ立越ヘ、彼地ニ於テ、邪宗門ノ輩悉ク改易アリ、次ニ同國高來郡ノ（有馬直純縣ヘ所替以後、高來郡公料ト成レル故カ、）ニ渡リ、口之津ト云フ村ニテ、穿鑿アリシ處ニ、一村ノ士民ドモ悉ク宗門改ノ判形堅ク致スマジキト申ス故、卽召捕テ譴責シケノバ、大形ハ本宗ニ立復リケレドモ、其張本人廿五人改宗セザルニ依テ、躬ノ飾ヲ拔キ、手ノ指ヲ切テ、稠シク責シカドモ、猶モ故路備ザル間、止コトヲ不得シテ、禁獄申付ケテ、其ヨリ有家村、堂崎村、布津村等、段々ニ吟味アル處ニ、右村々ニテ兎角宗門改メマジキト申ス奴原都合三十六人アリ、何レトモ召捕テ、有馬ノ城ノ在番鍋島ノ家臣多久長門、鍋島七右衛門兩人ヘ預ケ置カル、然ル處ニ、大坂御出陣ノ御觸レ有リケレバ、其餘ノ村々ノ穿鑿ハ、先ヅ其儘ニテ差置ル、重弘ハ長崎ヘ歸ラレケルト也、

慶長十九甲寅年九月十三日、駿河ノ國府中ニ於テ、原主水ト云者ヲ關東ヨリ搦メ來ル、此者吉利支丹宗門ノ類族ナルガ數年ノ間關東筋ニ隱レ居タルヲ搜リ出シ、召囚リテ、今日當地ヘ引來リシ也トカヤ、卽兩手ノ大指ヲ切リ、額ニ火印ヲ捺テ追放セラル、何方ニテモ、若此者ヲ扶助セシムル輩アルニ於テハ、曲事タルベキノ由、添札ヲ彼主水ガ脊中ニ負セテ、相放タレシト云、（○中略）

慶長十九甲寅年九月廿四日、攝津國高槻ノ城主高山右近友祥、兼テ吉利支丹宗旨ニ拘泥シ、親類緣者種々ニ異見ヲ加フレドモ、許容セズ、終ニ台命ニ戾リテ、今日南蠻國ノ内咬𠺕吧ヘ追放セラル、内藤飛驒守モ、彼宗門ヲ信ジ、上意ヲ背クノ間、同罪ニ處セラレ、亞媽港ヘ追ヒ放タル、又長崎近

逸ノ伴天連徒黨ノ輩百餘人、一同ニ長崎ノ湊ヨリ船ニ乘セ、今日亞媽港ヘ追放セラルトナリ、此旨同年十月十三日、長崎御奉行長谷川佐兵衛ヨリ飛脚ヲ以テ言上アルト云、

按ズルニ、一說ニ慶長十九甲寅年十一月四日、長谷川佐兵衛、長崎ヨリ大坂御陣所ヘ參上有リテ、此旨言上セラルト云フ、

〔日本西敎史〕下第十六章○中略

刑戮ノ災、日本ノ都府江戸ニ起リ、遂ニ散ジテ諸邦ニ及ベリ、千六百二十三年元和九年ノ末ヨリ、基督信者ノ捕縛、放逐、火刑、及ビ磔刑等、殘忍ノ處置到ル處アラザルナク、基督信者幷ニ敎師等ヲ潛匿セシムル者ヲ搜索セントシテ、將軍ノ派遣セシメタル刑卒ハ、諸邦ニ遍ネシ、斯クノ如ク殘忍至ラザルコトナシト雖モ、敎師等ハ尙ホ勉勵シテ、神佛信者數千人ヲ改宗セシメ、之レニ洗禮ヲ施シタリ、抑前將軍ハ基督敎師等ヲ以テ、西班牙國王ノ遣ル所ノ間者ナリト疑ヒ、日本ノ基督宗敎ヲ破滅セント、其暴威ヲ震ヒシコト、既ニ十二年間ニシテ、信者ノ平穩無事ナリシハ唯内裏ノ所領、テンス近畿ニ住スル者ノミ、此地ハ諸奉行モ、信者ヲ搜索セズ、曾テ其境ニ信者アルコトヲ知ラザルノ狀ヲ爲セリ、然ルニ前將軍ハ世子ヲシテ、確然日本ノ全權タラシメント欲シ、亦敎師等ヲ疑フノ心ヲ解散スル能ハズ、再ビ基督宗敎ヲ嚴禁スルノ制度ヲ布キ、而シテ、テンスノ奉行等ニ命ズルニ、將軍江戸ニ於テ爲セシ如クセンコトヲ以テセリ、此ニ將軍ノ殘酷ナル刑戮ヲ行ヒ、國内ノ大小侯伯ヲ處スルノ例ヲ見ルベシ、江戸ニ於テ殘酷ナル一大事ヲ見ントスル端緒ヲ開キタル者ハ、千六百十二年慶長十七年ニ當リ、政府十二人ノ基督信者ヲ放逐セシコト是ナリ、

〔東武實錄〕寬永五戊辰年五月、肥州長崎吉利支丹宗旨ノ徒、罪科ノ事ニツキ、水野河內守守信ニ御書付ヲ賜ル、

覺

一去年火あぶりに被仰付候伴天連、方々のりあるき候船の船頭、萬事肝煎候者、并宿仕候者之事、火あぶりに可申付候、右之かこ死罪たるべし、いづれも男子死罪、女子娘奴、家財闕所可被仕事、

一長崎町人庄兵衛と申す者、きりしたん曲事之由、猶申來者、家に火をかけ、手むかひ可仕之旨、たくみ申に付候而、被捕置由に候、死罪に可被申付候、男子同罪、女子奴、家財闕所可被仕事、

一伴天連の道具預り申においては、可致持參之由申觸候處ニ、山田宗右衛門と申者、伴天連の道具隱して燒捨申ニ付、捕置候由ニ候、死罪可被申付候、男子同罪、女子奴、家財闕所可被仕事、

一きりしたんころび申者之借家に、きりしたん宗旨之者置不申候故、野山ニこやをかけ有之由ニ候、松倉豐後守領分江可被追拂事、

一長崎町人あんたうによと申者、伴天連隱居候由、訴人有之ニ付、さがし申候處、伴天連は居不申、おこなひの道具有之間、捕置之由、留守居之ものかたより申越之由ニ候、其方長崎江被相越、能能穿鑿候て、樣子重て可被申上候事、

一當地に而相果候、後藤宗印家財之事、家は庄左衛門相殘、財寶は庄左衛門半三郎兩人に被下候事、

一きりしたん宗旨、ころび不申者には、諸役おもく被申付、いたみ候樣尤之事、

寛永五年五月日

右の書付糊目ノ裏ニ、酒井雅樂頭、土井大炊頭、酒井讃岐守、井上主計頭、永井信濃守等印判アリ、

〔原城紀事四〕五年〇寛永戊辰、長崎奉行、爲治至酷、點撿戸口、捕不改教者、放之山野、放人結草爲廬、又從焚之、鈴木長崎記

〔契利斯督記〕一日本江來、吉利支丹渡リ始メテヨリ、萬治年中ニマデ、南蠻伴天連百五人、日本伴天

連十九人、二口合テ百二十四人、　南蠻イルマン六人、日本入滿二十二人、都合二十八人、

一台德院様〇秀忠、徳川御代ヨリ、大猷院様〇家光、徳川御代ニ罷成候テモ、始ハ伴天連トラヘ候テモ、大形火アブリ被仰付候由、其後加々爪民部少輔、堀式部少輔、町奉行イタシ候時ヨリ、吉利支丹宗門ノモノハ、ツルシ候ヤウニト被仰付、長崎ニテモツルシ申候由、然共吉利支丹ノ法ノ穿鑿ハ無之、伴天連渡リ候ヘバ、或ハツルシ、又ハ斬罪ニ被仰付候、伴天連度々日本ヘ渡リ申候由、〇中略

筑後守、伴天連宗門ノ者共ニ、白狀サセ、書付指上サセ候條々、

一萬自由自在成、デウスニテ、ヒイアツノ一念ヲ以テ、廣大無邊ノ天地ヲ作リ、此上ニモ、天地ヲ造リ度思ヒ候ヘバ、イト易ク作リ、不審成儀限リナキ由、先目ノ前ニ有之事ニテ、吉利支丹邪法作リ事成儀ヲ、糺明スベシ、早百年ニ滿ベキガ、作者シヤヒエルヲ、初テ日本江渡シ、吉利支丹宗門ヲ廣メ、明曆四年マデ、伴天連百五人渡候處ニ、或ハ火罪、穴ツルシ、斬罪、近年ハ伴天連共ヲ殺サズシテ、名。譽。有。之。樣。ニ。木。馬。ニ。乘。數日呶問イタシ候得共、聊モ名譽ガマシキ事ナク、サセ・ル當手ノ伴天連共木馬ノ上ニテ念佛ヲ申、其後妻子ヲ持、日本江法ヲ廣メ候南蠻ニテノ手段、不殘書上累年申上書物限リナシ、アマサヘ、主ヲ殺シ、親ヲ殺シ候テモ、後世ノサハリ無之由、壽庵、マルサイノ市左衞門、チヨセフ三右衞門、手形イタシ、判形仕リ指上候、〇中略　又長崎ニテ、マルセイロヲ、穴ツルシノ刻、馬場三郎左衞門、與力同心申付、死罪場ニテツ・ルシ候所ニ、穴ノ内ニテ苦ミナキワメキ死候ヲ、色々ノ僞ヲ作リ、三郎右衞門與力同心、口コホリスクミ、マルセイロ、穴ヨリ引出シ、首ヲ討候時、刀折、長崎番所江クラヤミ入、雷地震イタシ候由、天川阿媽港ノ寺ニテ作リ立、吉利支丹ヒロマリ候國々江廻シ申候、壽庵、ヘイトロ、フランシユニ、ヲロンソチヨセイフ、此僞ヲヤコト、思、入滿同宿六人メシツレ、筑前ノ沖ニテ召捕、長崎江來リ籠舍、加樣ノタバカリニアヒ、日本ニ渡候四人ノ伴天連同宿共、第一ノタハケ者、異國ニテモ、人ニモスグレタルタハケ者故、如

此ニ候儀ハ、日本國御名譽、誰カ是ヲ論ゼンヤ、若是ヲ僞ト申候者、三右衛門ヲ始メ、入滿壽庵トナア白狀イタサセ可申候、右ノ條々、不審ノ通、念頭ニ書付、指上可申候、邪ナル儀申上候者、四人ノ者、急度申付ベク候、

四人ノ者ノ返事

右ノ通、御不審ノ段、承屆、乍恐御最ニ奉存候、一々御書付之通、相違無御座候、以上、

戊五月十七日　　伴天連　三右衛門

〔原城紀事二十〕常長謂政成曰、我世系汝之所知、德川公封內、西三河高力村岩堀之出也、備中守重長子新藏安長、二子新九郎重正、三世戰死、而河內守清長、土佐守正長、皆有軍功、至攝津守忠房、賜島原六萬石、特命察九州動靜、且諭島原是耶蘇巢窟、卿宜嚴天敎之禁、於是乎、忠房爲治、專尙慘刻、搜索敎徒、無有遺孽、近國侯伯苟視有似敎徒者、皆捕輸之島原、日十人二十人、不復問其然否、斬之于今村法場、或至一日百人、嗚呼其徒豈無妻孥、則怨望之所歸、非余家而誰也、而今而後、庶幾脩德作善、以祈家門之福乎、政成曰、積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃、多斬敎匪、雖云非不善、要之不免爲殘忍、今君言悔悟自咎、此是再興家之祥、臣等請謹體君之德意矣、（高力再興記）

〔蘭使日本紀行十一〕血刑ニハ、必シモ劊卒ヲ要セズ、貴人自ラ之ヲ行フコトアリ、凡ソ新ニ一刀ヲ購求スルコトアレバ、其利鈍ヲ試ムル爲ニ、小兒或ハ婦人或ハ男子犯罪ノ者ヲ斜斷スルナリ、此類屢之アリ、殊ニキリスト徒、或ハ僧徒、裁判所ニ於テ拷問スルトキ、或ハ足ヲ掛ケ、身ヲ倒シテ、井中ニ低レ、血ヲ搾ル爲ニ、足ヲ井上ノ索ニ繫ギ、索傍ニテ、一方ニハ火ヲ燒キ、一方ニハ吹流ヲ飄ス、此旗ハ夜ハ退ケ、晝ハ之ヲ出ス、而シテ罪者死スルカ、或ハ燒ルニ至ル、更ニキリスト徒ノ近鄰左右各三家共ニ死ニ處セラル、婦女小兒タリトモ敢テ許サズ、多クハ左肩ヨリ右臂ニ向テ斜劏スルナリ、

〔邪徒決獄〕

天滿龍田町播磨屋藤兵衛同居菊江事きぬ

其方儀、京住之節、女之情を外し、奇妙成儀を行ひ度と、初念之心得違ひより、通口口明神下之儀勵み、みつぎ〔○陰陽師豐田みつぎ〕に隨身いたし、最初は切支丹邪法とは不存候とも、秘法傳授可受と、不動心の修行とて、井水又は瀧にて浴水致し、夜中はもの幽成山々へ登、心をこらし、終に不動心に相成候比みつぎ切支丹修治法之軍記より傳授受候抔申聞嚴科に被行候共、白狀致間敷旨之誓を結び、神文之心持を以、軍記所持之天帝之畫像を拜し、指之血を畫像にそゝぎかけ、右を念じ候陀羅尼之唱樣、其餘病氣加持、金銀等集候修行ども不及申、未然之事も心中に浮み可相知との義迄も、みつぎ傳授受候後、修行いたし、さの〔○京屋新助母〕へ申勸、弟子にいたし、其節登山、浴水計を致置、いまだ傳法不致候得共、申合當表へ引越、さのと相隔借宅いたし、其方儀も明神下と號し、人集め致し、さの方へ參り、病氣加持、吉凶未然之儀、始終死亡新助を以顯越、其方影に成、邪法修治を以、加持判斷いたし、儲錢配當いたし、來候處、さの熱心厚く、不動心之修行相結び候を見屆、誓を致書物、みつぎより傳法を通じ、さのへ猶又傳授致候より、同人儀終に邪術道八重を先に遣ひ、無跡形儀を申、加持等爲勸、人之心を取失ひ、過分之金銀錢衣類差出候樣成行、右を掠取、師恩報として新助を以、其方へ相贈、猶又みつぎ配當致候、始終にては、兼々みつぎ申合、弟子に邪法を爲弘、掠取候金等は、先繰之次第、師匠へ相送候貢に爲致、工みに當り、其上當地へ引越候に付、藤藏幷嘉兵衛小兒之病氣加持致遣候手續を以、藤藏名前人に成候儀、承知之趣、當時借家僞之家號名前を差出候に付、藤藏他町におゐて、兩人別に相成候仕義致候段、不恐公儀仕方、女之身分大膽之至、不屆至極に付、大坂三鄕引廻之上、磔に掛る、

○按ズルニ、耶蘇敎徒處刑ノ事ハ、法律部下編磔、火罪、追放、拷訊等ノ各篇ヲ參看スベシ

〔五月雨抄上〕吾國耶蘇のさわぎとともに同一術なり、已に數萬の殺戮に至ると雖其國恬然として

あづからず、其たくみ知るべし、鎮西はこれにまどひ、中原は信長一旦の誤りにより禍を引事數十年、幸に太閤秀吉始に其奸を照し、神君其弊を除き、蒼生の耳目、再び蘇る事を得たり、此故に其國は更なり、もろこしより渡れる文も、わづかに其名もあれば墨ぬり燒捨になりぬ、然るに有德院殿○德川吉宗の御時、司天監より天文推步の爲に願出るに、唯名目ゆるされ、西洋の書もひもときはじめ、天文、地理、草木、鱗麝、この類總じて梓にちりばむる世となりぬ、神祖のあつくいましめ給ひしも、有廟の禁書をゆるべ給ひしも、一張一弛の道にして、ともに其澤を蒙る事に侍る、其上神祖も愚民のまどひし罪に落入事をなげきたまひ、南禪寺の以心崇傳長老に命せられ、正邪の別を文にあらはし、天下にしめし給ひ、禪人鈴木正三の破吉利支丹でうす問答のごときも、其後ゆるされて、木に上し行侍れば、五月雨の淋敷さ慰る筆の跡、誰見よとといむるにもあらざれば、衣魚にあたへんは、た何か苦しかるべき、若も見ん人のこりて、つゝしむ端ともならば、何か是にまさるべきと、おしまづきにさし置ぬ、

天明甲辰五月　　二子山人三浦すゝ武安貞

〔誠齋甲辰雜記十四〕禁書三十四種○中略

禁書査法二途アリ、教化一ツナリ、題目幷言及其事モノ一ツナリ、題目等ヲ出スモノハ塗抹シ、言涉教化モノハ燒毀シテ留ルコトナシ、享保二年、司天監ヨリ所請アルニヨリテ、題目ト言及其事ノミニテ、教化ニ涉ラザルモノハ、准許アリテ世ニ行フコトヲ得タリ、貞享元祿寶永ノ頃ハ、禁網嚴ニシテ、一槩ニ焚棄塗抹ヲ被ブレリト云、

〔泰平年表有德院〕享保五年、此年ゟ長崎舶來禁書の內、西洋人の著述たり共、邪法教化の書不記ものは、御構無之旨也長崎書記

〔政談四〕吉利支丹書籍ノ事

吉利支丹宗門ノ書籍ヲ見ル人ナキ故、其敎如何ナルコトヲ知ル人ナシ、儒道佛道神道マデモ、悪シク說キタラバ、吉利支丹ニ學バズナルベキモ計リガタシ、之ニ依リテ吉利支丹ノ書籍御藏ニ之有ルハ、儒者ナドニ見セ置キテ、邪宗ノ吟味サセタキコト也、

〔和漢寄文一〕唐商入津之節掛置候而爲讀候箇條之案〇中略

一天主敎詭謀之儀可爲樣々、自然敎をひろめ、害を可殘ため、ひそかに書籍幷道具之類隱し成事可有之、左候ハヾ、本人にも科罪、其法有之、其上船をも令滅却、貨物沒收たるべし、少も容捨有之間敷候、若少にても、右樣子を存、訴人に出においては、同惡同類たりといふとも、其輕重に依て褒美可申付候、

〔日本敎育史資料十九洋學〕安政六年七月九日、下總守殿御渡、

西洋書籍の儀に付ては、兼て被仰出も有之處、今般神奈川、長崎、箱館、開港の上は右場所において外國商人共より、直買致候書籍は運上役所江差出、改印受取候樣可致候、若心得違にて、改印無之、聊にても御制禁宗門の事に相涉り候書籍取扱候もの於有之は、嚴科可被處候、

右之通、向々江可被相觸候、

〔五月雨抄上〕耶蘇の亂禁綱つよくして、三十四種の禁書といふ有り、其外名目にても出たる書は入らず、其名目、

天主　耶蘇　西洋　歐羅巴　利瑪竇　利太西　利山人　陽瑪若　湯若望　遊藝字子六

景敎　尊學夷　西學

三十四種禁書目

天文書函　畸人十編　西學戸　辨學遺牘　幾何源本　天文略　代疑篇　三山論學記　唐景敎碑附　天主實義　天主實義續編　職方外記　同文算指　圜容較義　勾股義　萬物眞

源　滌平儀記　計門　十慰　交友論　七克　彌撒祭義　泰西水法　表度說　教要解略
聖記百言　二十五言　靈言蠡勺　況義　渾蓋通憲圖記　測量法義　簡平儀記　滌罪正記

此外にも禁に觸れて、焚塗にあふもの多し、禁書と異る事なし、貞享年中燒却の書目、

寰有詮　一部六本

貞享二年乙丑、拾五番船持來る、官命燒之、又記云、是は耶蘇宗門の書に紛無之に付、一艘向商賣不被仰付、御返被成候、

地緯　一部二本

貞享三年寅五月燒却、是は世界の圖に吉利支丹國を贊し、其上一兩所耶蘇宗門之事有之故燒却、但し教化の書にて無之故、書に判形差上候、

福建通志　一部六本

貞享三年寅六月燒却、是は圖の內天主有之、

有學集　是は貞享三年、奉行所江留る、

方程論　一部四本六卷

梅文鼎所著、序中餘論利西泰の號、及禁書の目を載、別記に元祿十四年、四十二番船持來るとす、

西堂全書集　一部二十六本

右詩集の內、外國竹枝詞に、歐羅巴の詩二首を載す、別記に寶永三年丙戌、五十五番船持來とす、

其外　天經或問後集　游子六著　帝京景物略　八本　通鑑明記全載　一部八本十六卷
定例成案　新例　一部十六本三十卷　本朝測例類編　一部四本十一卷　增定廣輿記　二十四卷蔡九霞先生增定　增補山海經廣注　仁和吳任臣注六本十八卷　檀雪齋集　十二本四十卷　性理大中　一部十二本二十八卷　譚友夏合集　六本二十三卷

三才發秘　碩學集　十本八卷、鄭元標著　西湖志　八本志八卷、田汝成輯、志餘十八卷、姚靖增補、　西湖志後集　禪眞逸志　名家詩觀　一部四套三十六卷康熙戊午、漢鄧漢儀選清詩、　蘇州府志　仁和縣志　丹徒縣志　璞山縣志　縉雲縣志　新鄉縣志　諸羅縣志　南成縣志　延年縣志　疑耀　明詩藁　一套六本

是等皆貞享元祿寶永の頃、焚棄塗抹の書なれば、學者翫べき物にあらず、其査法二途、名目、噂と敎化なり、禁綱嚴なりし世は、たとへば蘇州府志には、敎化なしといへども、淸世祖景皇帝の碑名、尊敬信仰の文句有、名家詩觀には、贈大西洋湯若望詩あり、方程論には、西學算法の題名、變徒の名、禁書の題號を載たる類僅に噂名目にもあづかれば塗抹もし、敎化にわたれば燒却しけり、然るに司天監より、西洋の學は、天文地理に深ければ、推步家有益の書は、見る事を得ん事を願ひしかば、享保二年、噂と名目とは免許あり、敎化の禁のみ舊記によれり、さる程に禁書目中にても、天文略、交友論、幾河源本、泰西水法、職方外記、同文算指、圜容較義、渾蓋通憲圖說、測量法義等免許あり、其外增定廣輿記、名家詩觀等も世に行ふべくなりぬ、長崎吟味方よりの書付の寫一通、左にのせ侍る、

　中上覺

帝京景物略　一部八本廿八卷

右之書籍之內、第四卷目、第五卷目、天主堂利瑪竇墳之義相記し御座候、天主堂のうち、耶蘇像の事、堂の建樣等、幷耶蘇生卒の義、書記御座候、利瑪竇墳の處には、始て蠻國より中國に來候義、其時分の天子利瑪竇を御用ひ被成候儀、幷死去葬禮の義、書付御座候旨、一部の主意は、もと北京の風景土地の勝槩などを記し置申候書籍故、兩卷之外に、耶蘇の儀無御座候、右兩篇之文體の內に、人に敎を施し、人を其道に勸め入候やうなる儀、辭面に曾て無御座候、併侍人拵附し御座候は、其學術德行の事を歎美仕御座候迄に相見え申候、其段は大意書被仰付候節、辭面一通書

付指上申候通に御座候以上、

元祿八年乙亥三月十九日

春德寺
岩永元當

片山元正

〔好書故事 七十四 書籍〕禁書

守重謹按ニ、今世ニ御禁書ト稱スルモノハ、耶蘇ノ敎書ヲ指スナリ、所謂禁書ナルモノ四十種、昌平學及ビ長崎書物目利ノモノ傳フル所ニシテ、未ダ歲月禁制ノ確證ヲ得ズ、姑ク此ニ附載ス、（唐山ニ所謂禁書ハ此ニ異ナリ、鄭樵ガ通志藝文略ニ、求書目錄、禁書目錄アリ、楊文公談苑ニ、予在二史局一閲二所レ降之禁書一、有二日本年代記一卷一トミエ、通雅ニ、條約所レ謂之禁書トミユ、秘書ト云フガ如キカ、唐山ニ所謂禁書數義アリ、鄭樵ガ秘書下云フガ如キカ、大明律ニ犯禁之物註ニ謂知二所レ禁兵器及禁書之類一ト、又居家必用ニ禁書則二天文圖讖之類一、又通雅ニ條約所レ謂之禁書トモアリ、）

禁書目錄

天主實義　利瑪竇撰　二卷　辨學遺牘　同上　一卷　畸人十編（同上、按ニ四庫全書總目ニ附西琴曲意一卷トアリ、）二卷　十友論　同上　一卷　二十五言　同上　一卷　七克　龐廸我撰　七卷　西學凡（艾儒略撰、按ニ四庫全書總目附錄唐大秦寺碑一篇トアリ、）一卷　聖像略記　一卷　唐景敎碑頌（按ニ前ノ大秦寺ノ碑ナリ、）一卷　絕徼同文記　二卷　三山論學記　一卷　敎要解略　二卷　泰西水法　二卷　十解解略　一卷

守重謹按ニ、嘗テ聞ク、神祖尾張義直卿ヘ、天學初函ヲ賜ハレリ、是等ノ禁書、ミナ收テ其中ニ在ト、又按ニ、舶來書史ノ中、語耶蘇ニ涉ルモノ少カラズ、雖然ソノ敎法ニ干係セザルモノハ禁之外ナルカ、（泰西水法ハ、農政全書ノ中ニモ收メタリ、其他續文獻通考、明史、二十二史劄記、職方外記、帝京景物略、神仙通鑑、桃西雜志、續耳譚、捨園、知新錄、炎徼紀聞、西河合集、寄園寄所寄、五雜俎、昭代叢書、堅瓠集、南滙縣志、廣東新語、虞德園集、說鈴、空明子、羊城賦註、海國聞見錄、西方要記、外國竹枝詞、八紘譯史、龍威秘書、日錄雜說、異端論辨、海國圖編、葯房偶記、西湖志、秋坪新語等、守重ガ見聞スル所、大略如レ右、）

長崎實錄ニ、貞享二年乙丑、小川町宿ノ唐船ヨリ、寶有詮ト云フ書物渡ル、被遂御吟味之處、書中ニ天主耶蘇教御禁制ノ文句有シニ付、書物ハ燒捨ラレ、一船ノ唐人、禁足ニテ積戻仰付ラル、

〔一話一言十四〕徂徠畸人跋

天主教、國禁至嚴矣、幽其人、俾不與外人見、鎖其書、俾海舶不貨、以故寰內莫知其教所云、何若已、噫安知其革面、包禍、或濇乎他教也、其書弗存、將何以覈之哉、亦有司之過也、尾藩津田大夫、偶獲畸人十篇、亦不能審其爲何書、廼就予問之、予讀之、始得識彼教之說、因嘆世肆邇談道、而不自覺墮者何限、遂俾寫一通、以爲燃犀照佐之具云、

享保丙午七月初九日　　物茂卿識

〔五月雨抄上〕もろこしの事は、武德大成記に、いにしへは此法なかりしに、明の隆慶萬曆の頃、泰西の利瑪竇といふ者來り、浙江府のうち、荒地のありけるに一宇をまうけ、學文をなし、終に彼國の言を漢語に譯し、天主實義、畸人十篇、交友論などいふ書を作り、人をすゝめ誑しける、年月を經て、其法を信ずるもの多くなりけるを聞て、龐廸我といふ者、其徒數十人をしたがへて、利瑪竇に從ひ、七克書などいふ書をつくり、愚なる民に金銀をさづけたぶらかしける故、いよいよ其法を信仰す、畢竟世々を經て、國を奪はんとの謀なりといへりとあり、

〔經籍問答〕問フ五雜俎ハ、唐本ト和刻トハ相違御座候ヤ、但シ唐本ノマヽ、翻刻仕候物ニ御座候ヤ、答テ曰、唐本ノマヽ、翻刻仕候物ニ候處、何ノ時ヨリカ、利瑪竇ノ所ト、日本ニ孟子ノナキト云フ、二ケ條、拔キ去候、其二ケ條ハ、何卷目ニ御座候ヤ、利瑪竇ノ所四ノ卷四十二丁目也、孟子ノ所ハ四ノ卷五十二丁目ナリ、尤利瑪竇ノ所、五雜俎ニ拔去候所ヲ、智積院運敞僧都、寂照堂谷響續集ニ出ス、五雜俎ニ忌候ヲ、谷響續集ニ出ス、如何ナル故ニヤ、日本ニ無事ヲ國家ノ忌諱ニカヽハリ候事ハ有マジキニ、是ヲ拔キタルハ如何、

解禁

（五雜組四地）又有天主國、更在佛國之西、其人通文理儒雅、與中國無別、有利瑪竇者、自其國來、經佛國而東、四年方至廣東界、其敎崇奉天主、亦猶儒之孔子釋之釋迦也、其書有天主實義、往々與儒敎相互發、而於佛老一切虛無苦空之說皆深詆之、是亦逃楊之類耳、利瑪竇常言、彼佛敎者、竊吾天主之敎、而加以輪廻報應之說、以惑世者也、吾敎一無所事、只是欲人爲善而已、善則登天堂、惡則墮地獄、永無懺度、永無輪廻、亦不須面壁苦行離人出家、日用所行莫非修善也、余〇謝肇淛甚喜其說、爲近於儒而勸世、較爲親切、不似釋氏動以恍惚支離之語愚駭庸俗也、其大主像、一女身形狀甚異、若所稱人首龍身、與人言恂々有禮、詞辯扣之不竭、異域中亦可謂有人也、已後竟卒於京師、其徒曰龐廸峨、

（嘉永明治年間錄六下）安政四年十二月十一日、於蕃書調所、日本事務官與亞國使節應接目次、

神奈川開港事務官決答之事　蹈繪廢絕同決答之事〇中略

此方、〇日本其國人其國にて、信仰致し候敎法を修し候儀は、差支無之、且定の場所に於て、右拜禮所を取建候儀も、是又子細無之候、　使節、土藏幷に拜禮所取立候儀は、地主へ熟談の上、相應の借賃出し、雙方申分無之地所に於て取極候はゞ、地所の方向に不拘、政府にて彼是御沙汰は有之間敷と奉存候、　此方、相當の地代差出、借受候はゞ、子細無之筋に候得共、一方へ寄せ不申候ては、不都合の事に有之候、　使節、支那其外何國にても、皆外國人と其國人と打交住居致し居候、　此方、方今當方の民人と雜居致し候ては、只不都合のみに無之、實に懸念の意味も不少候間、何れにも、一纒に無之候ては難叶候、此間雙方互に辯論を重ね、趣意申談候事、　使節、右の儀も猶追て御談可申上候、蹈繪の儀は如何相成居候哉、　此方、蹈繪の事は、被申立に不拘、親睦の廉に對し、既に相廢申候、　使節、御廢被成候との御樣子は、薄々承り候事も有之候得共、確と書面に揭候ては、曾て見及不申、彌御廢絕の儀に候はゞ、今般條約書に認被申度候、　此方、書面に載候ても聊差支無之候、〇中略　使節、難有奉存候、　此方當方に於て何事も漸を以て主といたし、急速には難參習風に候

得ば、夫是熟考の上、右の通申入候事に候、元來懇切の上の談判故、其國の儀も相察し、當方の折合も甚酌いたし、其許迄及談判候事故、於其方も、我國習風を深く相考、互に歩行合、兩全の談判いたし度事に候、使節、實に御沙汰之通に御座候、此方、左候はゞ、明日も午後面談可致候、

右之通御座候、以上、

巳十二月　井上信濃守

岩瀬肥後守

〔締盟各國條約彙纂〕日本國、西班牙國、修好通商及航海條約、明治元戊辰年九月廿八日（西暦千八百六十八年十一月十二日）於神奈川調印、明治三庚午年三月八（日、本書交換、○中略）

第四條

日本ニ居留する西班牙人、勝手に自國の宗旨を信仰し、其居留地へ、其宗旨ニ必要なる宮社を建る事勝手たるべし、

○按ズルニ、獨逸國及ビ葡萄牙國等ノ條約文モ、前ト同一ノ意ヲ記セリ、是レ從來同國人民ハ勿論、日本國内ニアリテハ、外國人ト雖モ、佛教外ノ宗教ヲ信ズルコトヲ禁ゼシガ故ナリ、

〔白石紳書二〕一佃又右衛門、蒲生氏郷來也、慶長の頃、吉利支丹御制禁の時も、大祖より佃をば御赦免ありしなり、氏郷死して後、福島左衛門大夫に仕ふ、左衛門大夫宗旨を替へよと有しに、佃申、只今の宗旨替候事、曾て不成候、某此宗旨を偏に難有存じつめてかへられぬにはあらず、一度家康公より御赦免ありし上に、今更刑戮にあふ事かなしきとて、替る事は本意にあらずと云切て、誅せられしと也、武田左京大夫信虎の家人に原美濃守といふ者、法花宗なるが、信虎念佛申せと有しに、我宗の作法にし、念佛は申さず候と、辭したり、ひらに申せとありしかば、美濃怒て、題目を唱ふれば成佛し、念佛申して地獄へ墮るとおもふ愚なる心にはあらず、主人の仰なりとて、我頼む

宗門にきらふ念佛申さん事、士の道にかけ候とて罷立しが、勘氣蒙りて、甲州を拂はれて小田原へ行しと也、

〔耶蘇天誅記前錄〕耶蘇宗門制禁之大旨〇中略

慶長ノ年間ナリトカヤ、肥前ノ國大村ノ城主大村丹後守純頼、兼テヨリ吉利支丹宗門ヲ信仰シケレバ、家中ノ諸士ハ云フニ不及、領分ノ土民百姓等ニ至ルマデ、悉ク彼勸ニ偃シケルガ、加藤主計頭清正、純頼ト莫逆ノ交リナリシカバ、只管ニ異見ヲ加ヘテ、終ニ佛宗ニ立復ラシメ、京都本國寺ノ旦那ト爲ラシム、此故ニ後來家名ヲ全ウセシトナリ、清正微セバ、純頼ガ家ノ廢亡危ヒカナ、誠ニ損者三友、益者三友、其友選バズンバ有ベカラズト、其比ノ風說ナリトカヤ云リ、〇中略

慶長十九甲寅年二月、有馬左衞門佐直純ヘ、公儀ヨリ仰下サレケルハ、其方領分高來郡ハ、昔ヨリ吉利支丹宗門ノ奴原多ク居住シ、制禁ノ今ニ至テモ、違犯ノ輩少カラズ、殊ニ長崎近邊ノコトナレバ、以來モ邪宗門ノ賊徒絕ルコト有ルマジク候、左衞門佐若輩ニテハ、仕置成リ難カルベク候ハンカ、仍テ日向ノ國縣ヘ所替仰付ケラレ候、左衞門佐御最負ニ思召上ラレ候間、右之通リニ候由、御懇ノ上意ナリ、卽同年七月十三日、有馬ヨリ縣ヘ得替入城セラルト也、

〔耶蘇天誅記前錄〕耶蘇宗門制禁之大旨〇中略

元和元年、大坂籠城諸士ノ內、明石掃部、五月七日、京橋口ヨリ船ニ乘リテ通レ出、兵庫ニ至リ其所ヨリ長崎表ヘ漕ギ渡リ、兼テヨリ耶蘇宗タルニ依テ、南蠻國ヘ渡リシトナリ、大野主馬治房モ同宗タルニ依リテ、妻子マデモ船ニ取乘セ、是モ京橋口ヲソト出船シ、明石ト均シク南蠻國ヘ押渡リシト云、秀頼ノ御座船ニ乘リテ渡リシト也、

〔制蠻錄 一〕大久保石見守子供御仕置之事

凡耶蘇宗門ハ、夷狄本朝ヲ亂スノ國敵ナレバ、根ヲ斷チ葉ヲ可枯ハ是也、迚、御制禁專ラニ被仰付

ケル折節、不思議ノ事ドモ出來セリ、其頭大久保相模守忠隣ニ權機アル者ナリトテ、小身ヨリ御取立テ有リテ、大久保石見守長安ト授領仕、祿三萬石ヲ給ハリ、諸國ノ御藏ヲ預リ、殊ニハ諸國ノ金山等ヲ支配被仰付ケリ、其時佐渡ノ金山、天下一番成リケレバ、上ニハ御秘藏ニテ、一年ニ兩度ヅヽ至ルニ、差圖ヲゾ仕タリケル、子左京長次ト申セシハ、拾三歳ヨリ、越後少將忠輝卿ノ御小姓ニ出テ、殊外ニ出頭シテ、忠輝卿ノ寵臣、華井主水ガ聟トナリ、村上周防守トモ相姻ナリ、如此ノ由由緒ヲ笠ニ著テ、奢リテ石見守佐渡ニ赴向時ハ、必ズ高田ニ寄テ御內意ナリ迚、家中ノ仕置迄相談仕ケルトナリ、角テ石見守、慶長十八年巳ノ四月、狂亂シテ死タルガ、末期ニハ妾ドモヲ集メテ、金銀衣服ヲ目錄ニシテ、一人ニ一通ヅヽ取ラセテ、死後可請取旨ヲ申渡ス、妾ドモ佛事スギニ件ノ目錄ノ如ク、金銀衣服ヲ渡シ被申べキノ旨、申入ケレドモ、嫡子藤十郎、父石見守死後、諸國金山勘定不足心元ナシト思ヒテ不渡、妾共駿府へ行テ內府公(家康公也)へ訴へ申ケレバ、上意ニハ、父(○大久保長安)ノ妾ドモノ儀、無遺言トモ、可有付也、況ヤ遺言アルコト、藤十郎違背ノ段難心得、早ク可渡ト被仰付、然レドモ藤十郎ガ下心可聞トテ、御尋有ケレバ、金山御勘定無心許段申上ケレバ、尤ト仰下サレ、手代ドモ被召寄、帳面御センギノ所ニ、帳面五雙倍ノ引負アリ、內府公聞シ召シ、大體引負ト云フモノハ、百ノ物九十一二ニ至リテ、五六ノ事ナリ、莫大ノ私慾ナル者也、先ヅ藤十郎ヲ閉門サセ、彼ガ家財金銀ヲ、テンケンシ、御預ケノ國ニ、土藏佐渡金山ニ有ル所ノ自分ノ金銀可取來ノ旨被仰、依テ皆々取リ寄セ、公覽ニ備ヘケレバ、上意ニハ、石見守ガ財寶チンキハ、予ガ寶藏ニモ無キ程ノ事也、誠ニ役人ハ、餘分ノ夥敷者哉、猶渠ガ納戸ニ珍財多カルベシ、妾ニ尋ネヨト被仰付、妾申ケルハ、常ニ秘藏ノ者ナリトテ、寢間ノ下ニ石櫃ノ二重入レタル、梨子地蒔繪ノ箱アリト申ケル故、撿使ヲ被遣、件ノ箱ヲ拔キテ御覽有レバ、南蠻國へ日本ノ寶物ヲ渡シタル目錄ト、日本ヲ攻メサセント申メ、密通ノ狀有リ、其上ニ日本ノ諸大名、且ハ御旗本諸士、一味連判ノ誓狀アリ、身ノ毛

モヨダツ程ノ事ナリケリ、又吉利支丹ヲ弘メタルノ由、書タル文體ノ狀、數百通有リケリ、內府公大ニ驚カセ給ヒ、同十八年〇慶長七月九日ニ、大久保藤十郞、同外記、同權之助、同十郞、兄弟四人ヲ始メ、越後佐渡播磨ニ居タル子ドモ、七人召取リ、皆々磔ニ被仰付、一類緣者、或ハ死罪流罪、或ハ追放セラレ治リケリ、其頃何トナク身上果タル大名諸共、件ノ連判ニ載タル衆ナリケルトカヤ、此後大久保相模守忠隣ヲ奉行ニ被仰付、上京イタサレケリ、

〔台德院殿御實紀附錄三〕當代に、天主教御搜索嚴重にして、揖斐半右衛門政軌に命せられ、西國にゆきて、その法試みよとの仰承りて、政軌彼地にある事七年、其法心得し者に就て聽かへりきて、その樣申上しに、三日が間、晝夜絕間なく聽せ玉ひければ、あまりの御事なり、少し御休息あらばよからむといふ者ありしに、公〇德川秀忠かれわが命により、七年が間、遠境に困苦せしを、よき程にして聞さすべきやとて、いさゝか御倦怠の樣おはしまさゞりしとぞ、

〔松平豆州言行錄〕大猷院樣御前へ、御老中のこらず召出され、仰出さるゝ趣は、切支丹宗門は、代々制禁いたすといへ共、今にいたり斷絕なければ、自今以後、杖を突すべしと仰出さるゝ、何れも兎角の御挨拶もなき所に、信綱公御尤なる上意の由、御請を仰上ければ、皆々退去ありて、今の上意何共合點參らざれども、伊豆殿御合點と相見えければ、何れも御前を罷立なりと仰せられければ、信綱公、私も御同前なれども、宗門轉ぬれば御たすけなさるゝなり、今より以後は、ころばさずして御成敗遂げらるれば、御法度相立べきかと思召るゝを、杖をつかすべしと被仰出るゝかと事、察由仰られければ、此義尤と、何れも御合點まし〳〵し由也、

〔白石紳書六〕一井上筑後入道の、安房守に申されしは、耶蘇の法は、もと邪法なりといへども、きく人の信ずべきの說あればこそ、此教に志たがふもの有、その心得すべしと、猷廟〇德川家光の仰ありしかば、志たしき息男等にも、此事の御法はきかせずといひしによりて、安房守も、此事において

は、息男等をも其座には置ずして、事を沙汰せしと也、又筑後入道がいひしは、執政の仰に、耶蘇の法は、西洋のをしへなり、其ために我國の人を、一人も罪に行はむ事は、我國の損といふべし、なるべきほどは我國の人の損せざらむやうに、其宗を改めば改さすべしと仰られしとぞ云々、

美〇新井君美按ずるに、杖つかせよと仰られし事は、其後天草などの事にこりさせ給ひし後の事なるべし、

〔文會雜記五〕平安ノ人宇都宮由的、日本人物志ヲ著シテ、其中ニ中川瀬兵衛殿ヲ、切支丹落ノ人也ト書タリ、依テ中川侯ノ有司、官ヘコトワリテ絶板ス、由的ハ恙ナシ、後由的吉川氏ニ仕官スト也、

〔文會雜記三上〕一中華ニテ、佛家ニ宗門ト云コトナシ、禪敎律ト成程三ツニ分レタレ共、禪ニテ念佛ヲ云、律ニテ禪學ヲモ兼タル也、宋ノ時代ヨリ、禪甚盛ニ行ハレ、他敎ハグヅ付タル者ノ様ニ成テ、大抵廢レタル様也、日本ニテ、宗門ヲ立ツルコトモ、二百年前ハナキコトナリ、切支丹宗門ノ制禁ヨリ事起リタルト覺ユ、長崎奉行文官ニテ、商ニ來ル唐人ニ、宗旨ヲ書出セヨト云ヲ、宗旨ナケレバ、何ニテモ信ズル佛ヲ書セヨト云付ラル丶ニヨリ、關帝ヤ觀音ナド書付テ出ストキク、ヲカシキ事也ト、老師ノ話也、

編修總裁　從二位文學博士男爵　細川潤次郎

編修長　正七位文學博士　佐藤誠實

編修副長兼校訂長　正六位文學博士　松本愛重

編修　從六位法學博士　廣池千九郎

編修兼校訂　加藤才次郎

編修兼校訂　山本信哉

編修兼校訂　村尾節三

編修　從六位　佐伯有義

編修兼校訂　三浦千畝

校訂　竹島寛

校合員　齋藤松太郎

校合員　平川清水

編修顧問　正三位文學博士　本居豐穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　從五位文學博士　井上賴圀

大正二年十月十八日印刷
大正二年十月二十日發行

神宮司廳

昭和十年十月一日印刷
昭和十年十月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社内
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所　東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一〇五四番／三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）